
或いはこんな織斑一夏。つまりは性格改変モノ

鱧ノ丈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或いはこんな織斑一夏。つまりは性格改変モノ

【Nコード】

N1665S

【作者名】

鱧ノ丈

【あらすじ】

ISの二次創作を書きたいという衝動の下、一夏の性格を変えて書いてみました。微妙に性格が（シリアスに）壊れている一夏をお楽しみ下さい。

5/25

今更ですが、本作は基本的に原作をなぞって進みます。所々の展開は手を加えたりはしますが、話の大筋はほとんど原作通りです。

プロローグ（前書き）

ネギまのやつが完結してないのに何をやってんでしょうね、自分は。しかもアニメは終わってるし……

あらすじに書いた通り、この作品は一夏改変モノ。原作より強めな一夏です。一夏というよりICHIIKAでしょうか。こんな一夏でも許せるという方のみどうぞ。

とは言え、このプロローグでは一夏は出ませんがww

プロローグ

織斑千冬にとって弟、一夏は掛け替えの無い存在である。

幼い頃から才女と呼ばれてきた。淡麗な容姿。文武共に秀でた能力。しかし、彼女の人生は決して楽なものでは無い。

幼い弟と自分を残して姿を消した両親。幸いにして、天才と呼ばれた幼なじみが、その家族が何かと手を貸してくれた。それでも彼女の人生には苦勞があった。

そんな彼女にとって何よりも心の救いだったのが弟の一夏だった。

私、織斑千冬にとって一夏はどんな存在か？

時折そう聞かれることがある。答えは決まっている。守るべき大事な家族だ。

人はそう答える私を時々苦笑気味に見る。何を考えているかはおおよそ予想がつくが、どうせろくなことじゃない。ただ何も言わせないだけだ。

自分で言うのもなんだが、私の弟はよくできた奴だ。

性格もやや荒い部分こそあるものの、基本的には真面目で気立てもそれなりに効く。

家族二人、食べていくために私は学生時代から働いて稼いでいるが、

無論私自身はそれを当然と思いこなしているが、そんな私のために食事を用意したり、家事を代わりにこなしてくれる。

学業も、決して抜きん出た頭脳を持つわけではない。むしろ平均よりも少しいというくらいだろう。しかし、勤勉である。

そして、私が一夏を語る上で決して欠かせないのはやはり剣である。

変わり者の幼なじみ。その実家が開いている剣道場。私と一夏はともに幼い頃から通っている。

過大評価をするつもりはないが、一夏には才覚があった。

それこそ当時小学生とは言え、後に全国大会で優勝を納める幼なじみの妹に勝つ程に。

鍛錬にも熱心で、暇があれば体を鍛えるその姿は好ましく、私自身少なからず喜びを持って見ていた。

しかし、その弟の姿に私は一抹の不安を覚えていた。それはかつて師であった幼なじみの父親、剣道界でもそれなりに名を知られている人物から言われた言葉に起因する。

「剣の才覚、武人としての才は千冬が上だ。だが、武人ではなく戦士としては一夏が才覚を持つ。仮にお前と一夏が戦うとしよう。試合ならばお前の勝ち揺るがない。だが、死合いならばどう転ぶか分からない」

その言葉は少なからず私に衝撃を与えた。

そして、私はその衝撃からくる不安が的中した瞬間を見た。

IS インフイニット・ストラトス

常識を超えた天才、変わり者である幼なじみ、篠ノ之東が開発した宇宙作業用パワードスーツ。

だが、ある事件をきっかけにその本来の目的は風化し、軍事転用されたそれは世界の有様を大きく変えた。

女性にしか扱えぬという制限から女尊男卑へと移り変わった世界。たった一機で従来平気を蹂躪し国家に大打撃を与えることが可能なISは国際組織の管理の下、半ばスポーツのためのものとして扱われISの登場により大きく揺れた世界は一応の安定を見せた。無論、その安定が薄氷の上を歩くごとく脆いものなのは有識者からすれば明白のことだが。

世界と共に私と一夏を取り巻く環境も変わった。

開発者の家族ということ、長年親交のあった篠ノ之家の人々は転居を繰り返すこととなり、かろうじて東の両親とは連絡が取れるものの、私達とは疎遠になった。

それと同時期に一夏は剣道をパタリと止めてしまった。

だが、剣自体をやめるつもりは無かつたらしく、東の父親のツテを頼りに各地の剣術家に師事をしたらしい。

らしい、という伝聞形を使ったのには理由がある。

当時、様々な事情故にISの搭乗者をしていた私は、ISの国際大会モンド・グロツソにおいて初代優勝者となり、各方面から注目を浴び多忙になっていた。そのため、家にもあまり帰れなくなり、一夏と接する時間も大きく減っていたからだ。

思えば、あの時もつと一夏と接してやっっていればあいつは、いや、いまさらか…

そして、あの事件が起きた。

一夏誘拐事件。

第二回モンド・グロツソ決勝当日、一夏が何者かにより誘拐されたのだ。

そして、優勝という名誉を投げ出し齎された情報を元に一夏の居る場所に向かった私はそこで見た。発露した一夏の危うさ、的中した兼ねてからの不安を。

その後、紆余曲折あつて私はIS学園の教員をするに至る。

そして、新年度を迎えようとするある日、世界を一つのニュースが駆け巡る。

世界初の男性IS操縦者

それは私の弟、一夏だった…

それを知った時、私の心を覆ったのは不安のみだった。

目の当たりにした一夏の狂気と呼べる危うさ。それがISという兵器により発露しないか。

だが、一介の教員に過ぎない今の私にはどうすることもできず、私はただ、生徒として学園に入学する弟の未来を心配しながら職務をこなすだけだった。

プロローグ（後書き）

何故か千冬の独白から始まりましたが、次回から本編開始です。基本的に原作の展開をなぞりますが、特にキャラとの接し方に関して、原作と若干異なる部分があるかもしれません。ご了承を。また、当作品を読まれた方、もしアリと思われましてら、遅筆な作者ですがお付き合いよろしくお願いします。

第一話（前書き）

感想意見、いつでも歓迎です。

うーん、上手く一夏の性格変えられてるかな

第一話

あれは確か70年代のことだったか。

日中の国交回復の証として中国より贈られたパンダ。

東京上野動物園でお披露目となったパンダは日本初のパンダの展示ということ、人々の関心を集め、連日多くの人々の視線を浴びつづけることになった。

何故いきなりこんなことを言うのか。

それは、俺こと織斑一夏が現在置かれている状況が、まさしく当時のパンダのソレと呼べるからだ。

国立ISS学園。

ISS搭乗者を養成するための育成機関。ISSが女性にしか使えないという特製上、この学園の生徒は基本的に全て女子である。

なのだが、なあ…

何の因果か、色々あって男でありながらISSの操縦が可能になってしまった俺は半ば強制的にこの学園に入らされた。

結果、俺は女子だらけの教室にただ一人の男子という特異極まる状況に置かれているのだ。

正直メンタルにきつい。

いや、実感してみても初めて分かった。女だらけの空間なんてろくなものじゃない。

中学時代の学友達、五反田弾とかその辺の連中は羨ましがってた。

あいつらに味わわせてやりたい。この状況を。

そうすればあいつらだって自分の迂闊さに気付くはず……！！

「……君、織斑一夏君っ！」

「あ、はい！」

呼びかけに思考から引き戻された俺は下げている頭を上げて前を見る。

眼前には教卓から身を乗り出すようにして俺に顔を近付けるクラス担任、山田真耶先生の姿があった。

「あの、何ですか？」

いきなり名前を呼ばれた理由がさっぱり分からない。故に、とりあえず聞いてみた。

「あ、あのですね。今自己紹介をされていて、名前順で今は織斑君の番なんですけど、自己紹介してくれるかな？だめかな？」

生来の性格なのか、はたまた男である自分に緊張しているのか、頼りない様子で言われた言葉に俺は納得した。

そういえば、今自己紹介中だったか。

思わず周囲の様子を確認する。いや、確認するまでもなく分かる。どいつもこいつも、クラスで唯一の男の俺に視線を思いつ切り向けていやがる！

ちらりと、目だけを横に移して隣の席の女子を見る。

そんなガツツリと俺を見ないでくれ！

今度は少し離れた席に座るかつての幼なじみに目を向けた。篝、何かフォローをって、目え逸らすなよ。

完全に孤立した。こうなってしまうてはしょうがない。意を決して、自己紹介をするでしょう。

「あゝ、織斑一夏です。よろしく願います。えゝと、趣味は体を鍛えること。だから体力には少し自信があります。後、特技ってわけじゃないけど、家事全般は一通りこなせます」

とりあえず無難な挨拶を試みる。クソツ、まだ視線はがちり口ツクされてやがる！

とりあえず続けてみるか。やっぱりIS関係がいいのか？

「とりあえず、世間一般では初めてISを使える男とかで色々言われているけど、基本的にド素人だし知識も全然だから、まあなんだ、色々迷惑かけるかもしれないけど、よろしく願います」

自分としては無難と思える挨拶を締めて着席する。

反応は思ったより悪くなさそうだ。とりあえず掴みは何とかなっ
か。

そのまま自己紹介はつつがなく終了した。

さて、これからどうなることやら。

ガラッ

「すまない、遅れた。ご苦勞だったな、山田君」

「あ、織斑先生。会議は終わっただんですか？」

唐突に教室の戸が開き、聞き慣れた声が聞こえた。

思わず声の方を見た俺はきつと、驚きに満ちた顔をしていたんだろ
うな。

なにせ、教室の入口には人類最強の我が姉、織斑千冬が居たのだか
ら。

「な、なあ、ち、千冬姉！！」

「ここでは織斑先生と呼べ」

俺の驚きの言葉をバツサリと切り捨てた千冬姉え、いや、織斑先生
はそのまま教卓の前に立つ。

なんとまあ、教室の空気が締まってやがる。さすがは我が姉。居る
だけで何と言う威圧感……！！

そんなしょうもないことを考えている俺を尻目に千冬姉は喋り始めた。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15才を16才までに鍛え抜く事だ。逆らってもいいが、私の言う事は聞けいな」

何と言う俺様発言。さながら某海兵隊軍曹のごとし。

いくらISという軍事的要兵器の搭乗者を養成する学校だからって、こんな軍隊じみた教育、いくらなんでも年頃の女子にはキツイはず…

「キヤーーーー！！」

「千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるとはなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

訂正。我がクラスの女子は皆たくましい。

いや、ミーハーなだけか。まあ無理ないよなあ…

IS操縦者からしてみれば千冬姉は頂点に立つ憧れの人物なんだし。

一部発言が宗教に危ないくらいのめり込んだ人みたいなこと言うてるけど、気にしない気にしない気にしたらまけだぜ、織斑一夏。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

呆れ気味に千冬姉は言う。いや千冬姉、多分どのクラスを受け持っても反応は同じだぜ、この様子を見ると。

「きゃあああつ！お姉様 もっと叱って！！罵って！！！」

「でも、時には優しくして！そしてつけあがらないように躡をしてく！」

ああでも、このクラスが特別というのはあなたがち間違いないかもしれないよ、千冬姉。

結構危ない発言が聞こえてる。

いくらなんでもそりゃ無いってくらいにさ。

それにしても千冬姉が教師だなんてな…

ちよっと聞いてみるか。

「千冬ね、お、織斑先生は一体何時から教師なんて？」

つい癖で言いかけた千冬姉という言葉が本人の一睨みで引っ込んで、何とか織斑先生という言葉を出せた。

「それは追い追い話してやる、織斑。今はホームルームを終わらせるぞ」

「あ、はい」

「え……？織斑君って、千冬様と知り合い……？」

「親戚とかなのかな？ 同じ名字だし」

誰かがポツリと呟いた。

あれ？知らないのか？

てつきり有名だと思ってたけど…

「もしかして姉弟だったりして？」

「それじゃあ世界で唯一男でISを扱えるっていうのもそれが関係して……？」

いやいや、そりゃないだろ。いくら千冬姉が世界最強のIS乗りだからって、基本的には普通の乗り手と変わらないんだし。

とりあえず何か言わなきゃならんが…

「いいなあ、変わって欲しいなあ」

「コラそこ、滅多なことを言うもんじゃない。」

千冬姉の弟というのも中々大変だぞ？最低条件、千冬姉に剣で多少は食いつくくらいじゃなきゃ。

ちなみに俺はできるぞ。時々試合の域超えて止められるけど。あれはあれで楽しいんだけどなあ…

「静かにしろ。ホームルームが終わらん」

パン、と手を叩き千冬姉が女子達を制した。

すげえや、一気に静かになった。

「朝のSHRはこれで終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半年で覚えてもらう。その後、実習だが基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか？いいなら返事をしろ！よくなくても返事をしろ！」

「「「はい！…！」「」」

おお、一糸乱れぬ返事。

いよいよもって軍隊じみてきたぞ。

さて、SHRも終わって授業まで少しの空き時間ができたわけだけど…

俺、本当にパンダ状態だ…

教室の外も人一杯だぜ、おい。

教室でも俺を見てヒソヒソ話してるし…あ、目え逸らされた。

「はあ、何とかならねえのかな…」

「ちよつといいか？」

思わず机に突っ伏した俺に声が掛けれた。一体誰だ？

顔を上げた俺の視界に入ったのは長い黒髪をポニーテールにした女子だった。

そして、俺は彼女を知っている。何故なら…

「篤……………」

声の主はかつて共に剣道を学んだ幼なじみなんだから…

第二話

S H Rの後、俺は筭と共に屋上にいる。

話があると言われ、俺は筭に連れられて屋上にやってきたのだ。

来たのだ。来たのだが、なあ…

「……………」

「……………」

気まずい。何せ六年ぶりだ。なんと声をかけりゃいいのか分からない。

どうも筭も同じ様子らしく、俺を連れ出す時に声をかけてからは黙ったままだ。

おかげで俺達二人は何とも言えない空気の中、ただ立ち尽くすだけになっている。

いや、この状況は良くない。何か話さなければならぬ。ならば俺から話してやるうじやないか。少しばかり言いたいこともある。

「まあ、あれだ。六年ぶりだな」

「あ、ああ」

「できれば旧交を温めたいところなんだけどさ、その前に一ついいか？」

「な、なんだ？」

そこで俺は一度言葉を切る。そして軽く一呼吸してから言った。

「さっきのSHR、目を合わせた瞬間に逸らすってどういうことだよ。ちよつとシヨックだったぜ。おかげであの時は完全に孤立状態だったしよ」

「あ、…うん…」

そのまま箸は俯いてしまった。

ヤバい、ちよつと言い方がまずかったか。でも言っちゃまったからどうにもならないし…

とりあえず別の話題に変えてみるか。

「まあそれは過ぎたことだからしょうがないよな。悪かったよ。で、どうしたんだ？何か話があるから呼んだんだろ？」

「あ、ああ…うん、その…」

おい、なんだこりゃ。何かモゴモゴしてばっかじゃないか。おかしいな。俺の記憶がイカれてないなら、箸はこんな奴じゃなかったはずだが…

しかし、このままじゃ埒が開かない。仕方ない。俺が会話をリードするしかないさそうだ。

「そういえば去年は凄かったじゃないか。剣道で全国優勝したんだろ?」

「な、何故それを知っている!？」

あ、食いついた。

この話題はビンゴらしい。

「何故も何も、新聞に載ってたからな。テレビでもやってたしさ」

「な、何故新聞やテレビなんか見たりする!？」

「いや、んな無茶な質問するなよ」

思わず突っ込んだ俺は悪くないと思う。

というか、新聞やテレビを見るなんて誰でもやるだろ。

「いやでも、嬉しかったぜ。幼なじみが晴れ舞台に立つ姿をみるのは。千冬姉も褒めてたよ。多分直接言ったりはしないだろうけどさ」

これは素直に思ったことだ。

剣自体は俺も昔から続けている。けど、剣道はもうやっていない。

別に挫折したとかじゃなくて、自分で考えた上での選択だけど、やっぱり今でも剣道に少なからず思うところはある。

だから、一緒に剣道をやっていた幼なじみが、そのまま剣道を続けて晴れ舞台に立ったというのは、俺には嬉しかったのだ。

「そ、そうか、嬉しかったか…」

そのまま箒はまた黙って俯いてしまった。

ただ、先程までと違って表情が少しばかり柔らかくなっているのを見ると、この話題は間違ってたんだと思う。

そして、休み時間の終了を告げる予鈴が鳴った。

「よし、時間だしとりあえず戻るか」

「あ、ああ」

俺の言葉と共に、箒は俺と共に教室に戻ろうとする。

だがその前に俺はもう一つ、やらなきゃならないことがある。

「ほら、その階段に隠れてる連中。戻った方がいいぜ」

そう。屋上上がるための階段。その陰に隠れて俺達二人の様子を伺っていた女子の集団に声をかけることだ。

俺の言葉に女子達が驚いた様子が伝わる。

生憎だったな。隠れてるつもりだったんだろうが、気配がバレバレなんだよ。千冬姉なら確実に気付くぞ。

俺だって、千冬姉ほどじゃないにしろ、それなりに鍛えてるんだ。そのくらいは分かるぞ。

そうして、女子の気配があちこちに散らばるのを感じながら、俺と
篤は教室へと戻った。

第二話（後書き）

この作品の一夏。

実は生身なら結構強いです。

第三話（前書き）

当作品の一夏は原作に比べると、少々真面目です。
具体的には入学前の参考書を捨てたりしないくらいには…

第三話

さて、筭と話し終えた俺は現在一時間目の授業を受けている。

科目はIS基礎理論。どんな内容かは言わずもがなだ。

少し話は逸れるが、IS学園の入学倍率は非常に高い。

それも当然の話。世界中から希望者が集まるのだ。その中で入学できるのはせいぜい300人前後。

結果として生じる万を超える倍率は、狭き門という言葉が生温く感じられる。

さて、そうした難関をくぐり抜け入学を果たした生徒が集まっているのだ。

当然ながら個々人の能力は高い。なにより意識が違う。

現に、今教室で山田先生の授業を受けている面々は非常に真剣な面構えをし、熱心に講義を聞いている。

そうした意欲溢れる生徒達の中、ただ一人の男である俺は今どのような状態か。

現在、(多分必死の形相で)ノートに内容を書き込んでいた。

率直に言おう。難しい。

確かに学園に入学する前、必読と書かれた参考書が届いたよ。

ああ、それを読むのに異論は無かったさ。

この学園に限った話ではないが、所謂進学校と呼ばれるような高校では入学前に高校で履修する内容を予習する必要があり、学校が始まると教師は予習してあることを前提に授業を進めたりする。

この学園もそのご多分に漏れず、参考書での予習を前提とした授業を展開していた。

だが、この学園が余所と異なる点。それは授業の内容がやたら高度なことだ。

ぶつちやけ参考書を読んだはいいものの、その内容をどれだけ理解しているかと言えば、せいぜいが基本的な単語とその意味くらいだ。専門的な計算とかは壊滅に等しい。

山田先生、そんな癒し系な笑顔で大変な授業をしないで下さい。俺が持ちません。

唯一の救いは、今授業でやっている部分がかろうじて俺の理解できる基礎部分ということか。

はあ、どうせこんな範囲あつという間に終わって、俺の理解できない範囲に行くんだろうなあ…

「では、ここまでで質問のある人はいますか？」

講義に一区切りついたらしい山田先生がそうクラスに聞いてくる。残念ながら今の俺に質問をしている余裕は無い。

先に言った通り、ノートを取るのに忙しいのだ。

「織斑君は何か質問はありますか？」

ナンダト？

「先生、何故そこで俺をピンポイントに指すのでしょうか？」

そう言いながら上げられた俺の顔を見た瞬間、山田先生が一瞬引いた。

いかん、面構えが少し悪くなつてたか。原因は必死にならざるを得ない授業だが…

「あの、そのですね、織斑君はほら、色々特殊なケースですから、そのう…」

少しおどおどしながら山田先生が言う。

なるほどな。男ゆえの特殊ケースな。まああまり気にすることじゃないな。せつかく名指しをしてくれたんだ。言いたいことを言おうじゃないか。

「あゝ、じゃあいいですか？」

「はい、何でも聞いて下さいね！」

「いや質問というかですね、要望なんです。一応今やつてるところは何か分かるんですよ。参考書も読んだし。ただ、参考書で分かったのが今のところ、基本的な部分くらいでして。このままじゃあ後々の授業についていけそうにないんですよ。だから後で時間のあ

る時に補講をやってほしいな、なんて思いまして」

「分かりました！任せて下さい！大丈夫です！絶対、織斑君が授業についていけるようにします！」

いや先生、承諾してくれたのはありがたいですけどね、何故そこまです顔を輝かせる？

そんなこんなで授業はつつがなく終わった。

教室の端で授業の様子を終始見ていた千冬姉の姿が目についたが、やっぱりノート取りに忙しかった俺はそこまで気にすることはなかった。

さて、授業が終わってやってくるは休み時間。

だいたいのが友人とおしゃべりに興じる中、俺は未だに机に向かっていた。

だって授業の予習復習が大変なんだから。

この学園、曲がりなりにも高校だから通常の高校過程の授業もするわけ。

そう、現状中々に忙しい。だからこそ、

「ちょっとよろしくて？」

こんな声が聞こえても、首を動かすことなく

「よろしくない」

と答えたりするのだ。

「ちょっとよろしくて!？」

再び同じ言葉が、今度は語気を強めて投げ掛けられた。

やかましい奴だ。人が忙しそうにしてるのが分からないのか。これは一言、物申す必要があるそうだ。

「だあ、何だ一体!？」

そう声を荒げながら振り向いた俺の目の前には腕を組みながら仁王立ちしている金髪の少女がいた。

横の縦ドリルが実に特徴的だ。

「まあ、何ですの?そのお返事!？私に話し掛けられるだけでも光荣なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら?」

そして開口一番にそうのたまった。

うん、厄介事の子感が凄くする。

こつというのは適当に流すに限る。

「悪いが俺は君が誰か知らないからな。相応の態度も何もないんだ」

「知らない!？このセシリア・オルコットを!？イギリスの代表候

補生であり入試主席であるこのわたくしを!？」

ああ、代表候補生さんでしたか。それはそれは。

代表候補生。字面通りの意味である。

にしても、代表候補生であることはまだいい。

だが、代表候補生なら入試首席なんて自慢にならんと思っけどなあ。

代表候補生なんてくらいだから、そこらの連中よかよっぽど知識、
実力ともにあるんだろうから。

むしろ当然と思われて、誇る必要なんか無いだろうに。

とは言え、これは思っても口には出さない。だって絶対またやかましくなるから。

だから俺のとるべき対応はただ一つ。適当なところで話を切り上げさせることだ。

「で、そのイギリス代表候補生のエリートさんが何のご用で？」

「そうエリートなのですわ！本来ならわたくしのような選ばれた人間とクラスを同じくするだけでも奇跡！幸運なのですよ！その現実をもう少し理解していただける？」

うん、とりあえずこっちが質問したんだからちゃんと答えろや。
それともあれか？今のが用件ってか？ますます面倒くさい。

「ああそうだな。幸運だよ。実にラッキーだよ」

「あなた、わたくしを馬鹿にしていますの？」

失敬な。ちゃんと御要望通りの答えを返したろうに。

そんなことを考える俺のことはお構いなしにオルコットは続けた。

「大体、さっきの授業は何ですか？あの程度の内容に苦勞するなんて、程度が低いにも程がありますわよ？」

「やかましい。こちとらついこの間ISに関わったばかりのド素人なんだ。お前のように経験長い奴と比較するな」

そい言うとおルコットはどこか勝ち誇ったような顔を浮かべてこう言った。

「あらそう。まあ、でも？わたくしは優秀ですから、貴方のような人間にも優しくしてあげますわよ？わからない事があれば……まあ、泣いて頼まれたら教えて差し上げても良くてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから！」

生憎お前に聞くくらいなら山田先生や千冬姉に聞かさ。

第一、入試と言えば…

「俺も倒したぞ、教官」

「はあ!？」

「いや、倒したというか、自滅？なんか馬鹿正直にまっすぐ突っ込んで来たから、軽くかわしてついでに足を引っ掛けたら面白い勢いで転がって壁にぶつかってそのまま」

だが、俺の言葉なんか聞いてないのか、オルコットは体をワナワナと震わせながら

「あ、ありえませんか…わたくしだけと聞いていましたのに…」
などと言っていた。

「あれじゃないか？女ではというオチ」

そう言うとオルコットは一気に表情を厳しくし、俺に何か言おうとした。

だが、その前に予鈴が鳴った。

「あ、後で来ますわ！！覚えておきなさい！！」

と言ってオルコットは自分の席に戻っていった。
それは負けたやつ捨て台詞だぜ。

にしても、厄介なことになった…

だが俺はこの後の授業で、更なる厄介を被ることになるのだった…

第三話（後書き）

次回は決闘宣言になりますが…

一夏が少しICHIIKAします。

え？何言ってるのか分からない。すみません。とりあえず次回をお待ち下さい。

第四話（前書き）

今回は当作品の一夏の性格改編のポイント、イカれている部分が出ます。

人により好みが分かれるかもしれませんが悪しからず・・・

第四話

side 一夏

さて、オルコットが散々喚き散らして見事に散った休み時間の後の授業。

教壇には山田先生ではなく、千冬姉こと我がクラスの担任織斑千冬先生が立っていた。

「さて、唐突になるが授業を始める前に一つ決めなければならぬことがある。再来週に行われるクラス対抗戦の代表者の決定だ」

本当に唐突だな。

これって結構重要なことだろ？千冬姉ならこういうことを決める時は事前に連絡の一つもしそうなのに。実に珍しい。

しかし何だ、この嫌な予感は……

クラスを見渡しながら千冬姉は続ける。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ああ、話だけでもめんどくさそうというのが伝わるぞ。クラス対抗戦というのには実に興味があるけどなあ……

ISでの本格的な戦闘。入学試験の教官との試合がアレだったからな。正直興味大なんだけど…
ここは我慢するか…

「はい、私は織斑君を推薦します！」

「待てコラア！！」

待てやクラスメイト！何を言っていやがる。思わず声を荒げたぞ、俺！

「私も織斑君がいいと思います！」

「なんとお！？」

ジーザス！！敵は複数か！！

「候補者は織斑一夏か…他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」
そう千冬姉が言うものの、誰ひとり発言をしようとしない。どいつもこいつも俺でいいと思ってやがる…！

クソッ、何か打開策は……！！

悩むこと数瞬、ふと背中に突き刺さる不満げな視線を感じ取った俺は閃いた。

視線の主はセシリア・オルコット。

先程の会話から彼女がやたらプライドが高いのは明白。そのプライドが俺がクラス代表になるとというのが許せないのだろう。

いいぜ、セシリア・オルコット。ならお前の望むようにしてやる…！！

「はい」

そこで俺は挙手をする。

視線の集まりが一気に濃密さを増すが、無視だ無視。

目線で俺に発言を促す千冬姉を確認すると、俺は席を立ち上がったと言った。

「ならば俺はセシリア・オルコットを推薦させてもらう」

クラスがざわめく。そこまで意外なことかね。

「一応推薦の理由を聞こうか」

「はい。まず第一に彼女の实力です。クラス代表の仕事の要は対抗戦。ならばイギリスの代表候補生である彼女ならば適任。また、その他各種職務においても、責任感が高そうな彼女ならば確実にこなしてくれると思います。以上の理由から彼女を推薦します」

きまった…！我ながら見事な弁舌だ。

これ以上ないくらいにまっとうな理由付け。

「成る程、道理だ。これで候補者は二人。ならばクラスの多数決で決めるとしようか」

よし、少しばかり軌道はまともになったな。だが、もう一押しして

おくか。

「その前に一言よろしいでしょうか？」

「何だ織斑」

「いえ、クラスのみんなに言いたいことがありましてね」

そうやって俺は後ろを向く。席が最前列である俺は後ろを向けばクラスのほぼ全てを見渡せる。

俺は一度咳ばらいをして言った。

「いいか、皆。これからクラス代表を決める投票をしてもらおうわけだが、皆には真剣に考えた上で決めて欲しい。少なくとも俺が男だからというだけで俺にするのは勘弁願いたい。実力、人格といった観点からどっちが代表に相応しいか、しっかり考えてくれ」

そうやって俺は席に座る。やることはやった。後はどうにでもなれ。

俺が言い終わると同時にクラスのあちこちから思案する声があがる。

「うーん、確かに冷静に考えるとセシリアさんがいいよね。代表候補で入試も主席なんだし」

「私も私も。やっぱりこういうのはちゃんとした人にやらせるのがいいよ」

「私はやっぱり織斑君がいいかなあ」

そうして話し声に一区切りついたところで、改めて千冬姉が多数決を取った。
そして出た結果は…

「み、見事に半分…だと…?」

何てこった。このままじゃギリ貧だぞ。何か打開策は…

「待って下さい!! 納得がいきませんわ!!」

おお、セシリア・オルコット。この状況を打破してくれるか!

「男がクラス代表!? ありえませんか!! 実力の無い男がクラス代表だなんて恥さらしもいい所ですわ!! 一年間、わたくしに屈辱を味わえとおっしゃるのですか!？」

…まあ、なんだ…

どうも彼女は男が代表になることが心底気に食わないらしい。
プライドが高いのもあるのだろうが、昨今の女尊男卑を体言してるみたいだな…

いや、んなことは心底どうでもいい。今重要なのはこの状況をどうにかすることだ。

「そこまで言うならお前がやればいいだろう。やる気があるならそれで十分だ。俺は辞退させてもらっぞ」

言ってやった。少々予想外の状況にはなったが、これでオルコットがクラス代表という雰囲気を持って行けるはずだ。

だが、そううまくはいかないようだった。

バシン！

「馬鹿を言つな。辞退など認めるわけがないだろう。推薦されたんだ。ならば最後まで引くな」

反応する間もなく振り下ろされた出席簿が俺の脳天に直撃すると同時に、千冬姉のありがたいお言葉が俺の耳に入ってきた。あの、凄く痛いんだけど……

「ぐ、おおお……じゃ、じゃあどうするんですか……？」

痛みを堪えながら俺は千冬姉に問い掛ける。

だが、千冬姉が答えるよりも先に予想外の言葉が別方向から飛んできた。

「決闘ですわー!!」

何？決闘？

「織斑一夏！わたくしはあなたにISでの決闘を申し込みます！そして、どちらがクラス代表に相応しいがはっきりさせます!!」

「その話乗った」

俺は即答していた。

そうだよ。こんなシンプルな方法に何故気がつかなかった。決闘。実にいい響きじゃないか。いかん、早くもワクワクしてきたぞ。

「話は纏まったな。では一週間後、織斑とオルコットの二人によるクラス代表決定戦を行う。二人とも、しっかり準備をするように」
そう千冬姉が言って話を締めようとする。だが俺はそれに待ったをかけた。

「あの、織斑先生。決闘はいいんですけど、ISはどうするんですか？できれば学園のを貸して欲しいんですけど……」

そう。決闘をしようにもISが無ければ話は始まらない。
いや、個人的には生身対ISというのも興味があつて、というかやってみたいけど、さすがにそれは無茶苦茶だろうと思つたから、とりあえず聞いてみたのだ。

個人的には入試の実戦試験で使つた打鉄という機体が中々良かったから、それを使いたいな〜と思つたのだが、千冬姉の返答は予想外のものだつた。

「それに関しては心配いらん。織斑には政府から専用機が用意される」

何ですと？専用機？

「うそ……一年のこの時期にもう専用機……？」

「いいなあ〜。私も欲しいなあ〜」

クラスのあちこちから驚きや羨ましがらる声上がるのも無理はない。

ISはその絶対数が限られている。故に各国が保有するISの数にも制限がある。そんな状況下で国から専用機を与えられるというのは、自分のために貴重なISを一機貸し出されるということ。

そのことの重大さは推して知るべし。

しかし専用機か。いいね。かなり楽しみだ。わざわざ用意してくれた政府にはお礼を言いたい。普段から弱腰外交だとかパフォーマンスの張りぼて政策だとか無能閣僚だとか言ってゴメンネ。

この件に関しては感謝するし、恩を覚えとくさ。三日くらい。

「もう話はないな？では授業を再開する」

そして千冬姉が話を締めて、クラス代表の話は一旦終わりになった。

s i d e o u t

再び休み時間となった。

セシリアは教室を出たが、一夏は相も変わらず席に座ったままだった。しかし、先程の休み時間とは違い、周りには数人のクラスメイトがいた。

ちなみに、筈も何か用があるのか教室には居ない。

「ねえねえ織斑君。本当にオルコットさんと戦うの？」

「いくら専用機があるからって相手は代表候補生だよ。いくらなんでも厳しいって。せめてハンデの一つくらい貰いなよ」

一夏に話し掛ける彼女らの言葉。そこには一夏ではセシリアには勝てないという考えがはっきりと表れていた。

とは言え、これは普通に考えれば至極当然のことである。

片やいずれは国家の代表にならんと、長年ISの修練を積み技量を高め、ついには候補生にまで至った者。

片や、男性という点を除けば、ISの起動時間もろくない素人。

どちらが勝つかと言われたら当然前者だ。

だが、そんな少女達の言葉を一夏はまるで意に介さない。

「ハンデなんかいらねえさ。曲がりなりにも決闘なんだ。手抜き無しで真剣にやらなきゃ駄目だろ。第一、ハンデなんかあってもつまらない。やるからにはとことんやりたいんだよ」

そういう一夏の顔には、まるで肉食獣のような野生味を感じさせる笑みが浮かんできた。

まさしく男を感じさせるような表情。そんな一夏に話し掛けたクラスメイトはわずかに息を呑んだ。

「でもでも、男が女より強いっていつのは昔の話だよ?」

話し掛けた少女が声の方向を見ると、別のクラスメイトがそう言った。それはISが発表され、世界に浸透した今となっては当たり前の考え。

男は女より弱い。

物心付く前からそうした風潮の中育った彼女らがそうした考えを持つのは当然と言える。

そして、それを聞いた一夏がどう反応するか気になった少女は一夏に視線を戻す。

いつの間にか一夏は、先程の言葉を言ったクラスメイトの方を見ていた。

そしてただ一言、こう言った。

「だから？」

一瞬、背筋が震えた。

それ程に一夏の言葉は冷たさを孕んでいた。

気が付けば一夏の表情からは先程の笑みは消え、能面のような無表情があり、その瞳にはただただ冷たさだけがあった。

怖い

そう感じた。

だが、そう感じている少女のことなどお構いなしに一夏は言葉を続けた。

「女が男より強い。成る程。確かにそうかもな。ただな、俺は前々からその言い方には語弊があると思っっているんだ」

語弊？

少女達の顔に疑問符が浮かぶ。

「正確にはな、『一部の女が男より強い』だと思っただよ。確かに男女全体で見れば女が強い。けどさあ、だからって女が全員強いわけじゃあねえよなあ？少なくとも専用機持ちのオルコットは除いてだ、何なら今から俺とお前らで殺し合いでもしてみるか？ISの無いお前らは所詮、少しばかりできるだけで、ただの女だ。悪いが、俺なら10分で全員を天国に送れるぜ？」

瞬間、話し掛けた少女だけでなく、一夏の言葉を聞いたクラスメイト全員の背筋が恐怖に凍った。

彼は本気だ。

そうはつきりと感じさせるだけの気迫を、一夏は放っていた。なにより、表情が違った。先程の無表情から一転、そこにはまるで狂気を表すかのような笑みが浮かんでいた。

「俺に言わせりゃ、世の女の大半は、ISに乗らない女は、そのIS操縦者の威光に頼っていい思いしてるだけで、男と違うことなんざ何もないんだよ。ISの乗り手は確かに優遇されて然るべきだろうさ。だが、そうでない女は乗れない男と何も変わんねえ。それは今のお前らも、乗り手候補でしかないお前らも同じなんだよ。まあとはいえ、所詮は俺の持論だからな。軽く流して結構」

誰も何も言い返せなかった。一夏の言葉も一理あるというのもある

が、何より一夏が放ちつづける殺気による恐怖が、彼女達の体を、心を縛っていた。

「あ、悪いな。ちょっとマジになりすぎた。まああれだ、頑張るか
らさ、試合の時は応援頼むぜ。ほら、もう次の授業始まるぞ？」

唐突に一夏は殺気を納め、先程までの快活な笑顔で話し掛けた。

その言葉に少女たちは体の硬直から解放され、各々の席に戻って
いく。一人の少女が去り際に一夏に問いかけた。

「ねえ織斑君。もしもさ、三時間で終わるっていう男女間の戦争が
起きたら、どうする？」

問いかける声には僅かながら震えがあった。何故そんなことを聞い
たのか、少女自身にも分からなかった。ただ、まるで流されるか
のように聞いてしまったのだ。その問いかけに対して一夏は

「そんな戦争なんざありえないありえない。んなことやっても互
いに不利益にしかならねえだろ。そんなありもしないことなんざ考え
やしないさ」

そう言つて、まるで安心させるかのように明るい笑みを浮かべた。

そうだよな、私馬鹿なこと聞いちゃったな。そう言つて、少女も笑
いながら席に戻った。

(しかし、戦争か・・・)

授業の準備をしながら一夏は考える。

(仮に起きたとしたら、俺はやっぱ男陣営だよなあ・・・となると、ほぼ全部のISを俺が相手するのか・・・面白え。俺以外のISを全滅させる。なかなか燃えそうだ。って、何を考えてやがる俺は)

我ながら他愛もないことを考えるなと思いつつも、一夏の思考は続く。

(待てよ、となるともしかしたら千冬姉とも戦う可能性があるのか。ISを使った千冬姉との死合いか・・・やべえ、一番面白そうだ・・・！いや待って待って落ち着け俺。あくまで絶対にありえない仮定の話だ、ウン)

少しずつ、己の思考が危険な香りを漂い始めていることに気付いた一夏は慌てて思考を冷静にしようと努める。

「まあまずは決闘のことを第一に考えなきゃだな・・・」

そう呟き、一夏は次の授業に考えを向けることにした。

第四話（後書き）

どうでしたか？今回の一夏は。

実は書いていて思うことが一つ。

こんな一夏で（恋愛フラグは）大丈夫か？と思うわけで・・・

第五話（前書き）

今回の話では色々出ます。

当作品の一夏の独自設定だったり、一夏が過去にやらかしたことの一端だったり。

極めつけはオリジナルキャラの登場フラグですね。どんなキャラかは本編をお読み頂ければ分かるかと。

一夏の設定に関してオリジナル色が強まってまいりましたが、願わくばお付き合い願いたい所存です。

あ、あと簡単なお知らせが。

セシリア戦の話が終わったら、この作品の一夏の設定を掲載しようと思います。その辺りまで進める頃には、ネタバレになりそうな内容にはなっていないと思うので。

第五話

side 一夏

さて、色々騒がしくはあったが、どうにか一日が終わった。

女だらけの環境、当初はどうなるかと思ったけど、人間の慣れって凄いな。一日でもう気にならなくなった。

ちよつど今も先に教室を出るクラスメイトに別れの挨拶をしたばかりさ。

数名のクラスメイトは俺と目を合わせると気まずい表情をするけど、はて？

ああ分かった。あいつら俺にハンデ云々聞いてきた連中だ。

つい勢いで色々言っちゃったけど、そこまでだったかね。軽く流せばいいのにさ。

何はともあれ、学園生活初日がつつがなく終えられて良かった。

少しばかり晴れやかな気分の俺は麗しき我が家へ帰ろうと荷物をまとめようとして、

「あ、織斑君！まだ教室に居たんですね。良かった。」

そう言いながら教室に入ってきた山田先生の姿に手の動きを止めた。

「あれ、山田先生。どうしたんですか？」

俺に用事があるのは明らか。とりあえず聞いてみることにした。

「あ、はい。あのですね、織斑君の寮の部屋が決まったので伝えに来ました」

そう言いながら部屋の鍵と思しきものと、数字が書かれた紙を俺に差し出した。

成る程、寮の部屋ということは紙の数字が部屋番号で鍵はその部屋の、というわけか。

って、ちょっと待てよ。

「あの、先生？俺って確か初めの一週間は自宅からの通学なんじゃ…？」

そう。俺は入学後一週間は自宅から通学をすることになっているはずである。

IS学園は基本的に全寮制だ。俺も必然的に寮で暮らすことになる。

しかし、学園初の男である俺を女子しか居ない寮にいきなり放り込むのも問題ということで、最初の一週間を俺は自宅通学を行い、その間に寮の準備を整える、ということになっていたはずだ。

そのことを言うと山田先生に言うと、先生は少し困った顔をして

「そのう、私個人としてもその方が良いと思ったんですけどね。…実は政府の方から通達が来ちゃって」

最後の方は俺にしか聞こえないくらいの小声だった。

オーライ。大体は理解したよ。

つまり政府のお偉方は俺という貴重な存在を極力外部の干渉から避けさせたいわけだ。

この学園、日本国内にあるけど基本的に治外法権だから他国の干渉とかほとんどできないしね。

あれだ。政府は俺が学外に居るときに厄介事に出くわすのを危惧してるわけだな。

具体的には他国からの勧誘とかさ。いや、それならまだ優しいか。最悪いつぞやみたく誘拐とかも有り得る。

心配性なことだ。俺は別に平気なのにさ。

勧誘にしたって適当にあしらうし、誘拐なんか考えるなら二年前の焼き直しにするだけだ。

とは言え、ここでごねてもどうしようもない。仕方ないから頷いたよ。

「まあ大体事情は理解しましたよ。分かりました」

「そうですか！良かった〜」

俺が了承すると山田先生は表情を一気に笑顔に変えた。実に華やかな笑顔だ。まるで心が癒されるようだ。

と、そこで俺はあることに気がついた。そう、非常に重要なことだ。確認はしとかなきゃならん。

「ところで先生、寮の部屋ってやっぱり俺一人ですよね？」

「相部屋に決まっているだろう、馬鹿者」

俺がそう聞いた瞬間、教室に入りながら千冬姉が答えた。

は？なん…だと…？相部屋？

ぶつちやけ千冬姉が来たことなんかどうでもよくなるくらい、その言葉は衝撃的だった。

だって相部屋だぜ？相部屋。この学園は俺以外全員女子。つまり寮生も全員女子。つまり！俺の部屋の同居人は女子！？

「いやいや千冬姉！それはマズイだろ！？」

そう言った俺に千冬姉は出席簿アタックと共に、織斑先生だという言葉を先に言い、そのまま続けた。

「無論、我々も良くないとは思っている。だが上が既に決めたのだ。どうにもならん」

「そ、そんな…」

「とは言え、いきなり見知らぬ女子と相部屋というのも厳しいだろう。だから、お前のルームメイトは篠ノ之箒だ。幼なじみだろう？それなら少しは気が楽になるはずだ」

「いや、確かにそうだけど…」

同居人について配慮してくれたのは素直にありがたい。
だが、それで助かったというわけじゃない。

いくら幼なじみとは言っても、篤とは実に六年ぶりだからなあ。

いい年したオッサンならまだしも、俺らのような学生からしてみたら六年という歳月はかなりの長さだ。それだけじゃない。

篤のやつ、六年の間にすっかり女らしくなっちゃが。具体的にどこがどうかは言わないけどさ。だからこつちも正直落ち着いてられない。

いや、別にやましい気持ちがあるとかじゃなくて、一男子としてある意味当然の心境というか…

「この寮生心得を読んでおけ。起床時間や食事時間、寮則が記載されている。寮には大浴場があるが、当然ながらお前は使用できない。部屋に備え付けのシャワーで我慢しろ。それと、寮の部屋にトイレはない。寮の各階廊下の両端にそれぞれあるが、全て女子トイレだからな。トイレは職員寮のを使え」

そう言いながら千冬姉はプリントを纏めた冊子を渡してきた。

そんな千冬姉を俺は少し恨みがましく見ながら思ったことを言った。

「それなら俺を職員寮にした方がいいんじゃない…」

「決定事項だ。諦める」

バツサリ切り捨てられたよ。

分かったらさっさと行けと言いながら千冬姉は山田先生を伴い教室を出た。

そして教室の入口で千冬姉は一度立ち止まり、俺の方を向いて言った。

「ああそうそう。お前の荷物は既に部屋に送ってある。携帯の充電器と着替えがあれば十分だろう」

ナンデスト？

「じゃ、じゃあもしかして俺の漫画とかその辺は……」

「そんなもの不要だろう」

「んな！？じゃ、じゃあ！俺の刀は！？」

漫画はまだいい。既に何度も読んだから気にならない。

だが刀は別だ。14歳の誕生日、あの人から貰った俺の刀は……！！

「あれがお前にとって大事なものということは理解している。だが、今回は私の判断で除外した。管理はしっかりしてあるから、外出可能になったら取りに行け」

ハハ…マジデスカ…

俺は渴いた笑いを漏らしながら教室を出る二人を見送ったよ。ハア

……

side out

side 千冬

私は一夏への用件を済ませた後、後輩教師の山田君と共に職員室へと向かっていた。

「あの、織斑先生？織斑君の刀ってどういうことですか？」

そう山田君に聞かれた私は特に隠す必要も無いと思い、話すことにした。

「そのままの意味だ。あいつの所持品である日本刀のことだ」

そう言いながら私は、数年前を思いだしながら山田君に語った。

「あれは私が第一回モンド・グロツソに出ていた辺りか。当時一夏はほとんど家に居なかった私の代わりに、ある人物の元に厄介になっ
ていてな。あいつの剣術の師なのだが、その人物から一夏が譲り
受けた代物だ」

思えば実に癖の強い男だった。あんな業物をポンと渡す辺りは特に
よくよく考えると、あの男に師事してから一夏はだいぶ変わったな。
実力も跳ね上がるように伸びた。まさか、弟に剣で食い下がられる
日が来ようとはな…

元々センスはあったが、奴の下に就いたら凄まじい勢いで力を付け

ていったからな。もしかしたら相性が良かったのか。だがあの業わざと相性が良いということは、やはり一夏は…
いや、考えてももはや仕方ないか。

まあ、一夏の世話をしてくれたことは純粹に感謝しているが…

「織斑君の師匠ですか。どんな人だったんですか？」

そう山田君に聞かれ、私はあの男のことを思い出しながら語った。

「そうだな。どこまでも身勝手な男だったよ。世の中のことなんか知ったことかという風でな。基本的に自分を鍛えて、その日の飯をどうにかすることしか考えていない人間だった。一夏を鍛えたのも知り合い、篠ノ之の父親の紹介があったからとは言え、面白そうだからという自分本位な理由らしかったからな」

篠ノ之の父親には一夏だけでなく私もよく世話になったが、よく考えると私以上にあの人が剣を振る一夏を理解していたのかもしれないな。

だからこそあの男を一夏に薦めたのかもしれないが…

「へえ、何だか最近じゃ珍しそうな人ですね」

山田君の言葉には意外だという思いが滲み出ていた。成る程、確かに男の肩身が狭い昨今じゃ珍しい男だ。だが、男の肩身が狭くない世の中であつたとしても珍しい人間であることは変わらないな。

「まあ変わり者であることは違いないがな。だが、剣の腕前は本物だった。一度手合わせをしたがな、互いに全力を出しても決着は着かず終いだつたよ」

「え…?」

その言葉は真耶にとっては信じられない言葉だった。

織斑千冬は世界最強と言われている。それは単にISの戦闘だけに留まらず、生身での実力も当て嵌まることだ。

事実、プロの多いこの学園の教師陣の中においても、千冬の実力はIS、生身共に抜きん出ている。

無論、生身の戦闘にISの実力は関係ない。

男女問わず、強い者は強い。しかし、それでも尚、千冬の実力が桁外れなのは事実だ。

その千冬と、彼女の得意分野たる剣で引き分ける。その実力たるや如何程か。

真耶の顔が戦慄に強張る。

その様子を見た千冬は彼女を安心させるように、フツと軽く笑うと言った。

「なに、そう気にするな。何しろ田舎に引きこもってるような男だ。別に何かをどここつする奴じゃないさ」

「そ、そうなんですか」

「ああ。さ、無駄話はこれくらいにして、仕事に戻るぞ」

そう言って千冬は職員室へ向かう歩の速さを上げる。少し遅れて真耶がその後を慌ててついていった。

side out

割り当てられた部屋に向かうため、寮の廊下を歩く一夏の足取りは軽くない。

付け加えると、顔も少し暗い。

「はあ…まさか刀までアウトとは…。あれが近くにあると、安眠に実に良いのになあ…」

ブツブツと呟きながら部屋に向かう一夏の姿は、端から見ると実に奇怪であったが、幸いにも寮の廊下には誰もおらず、一夏の暗い空気を背負った姿は誰にも見られてはいなかった。

「え〜と、1025、1025つと。ここか」

割り当てられた部屋、1025室の入口に着いた一夏は一度立ち止まり、僅かに思索する。

(さて、ルームメイトは筈なわけだが、どうやってこのことを説明するか。……うん、千冬姉の命令と云えばいいや。多分それで全て解決する)

そう入室後の行動をシミュレートし、意を決して部屋のドアノブに手を掛けた。

無用心なのか、それともまだ来ないルームメイトのためか、鍵の掛けられてないドアはあっさりと開き、その室内に一夏を招き入れた。

「筈〜？入るぞ〜？」

だが、部屋には誰も居なかった。否、居ないわけではない。部屋に響くシャワーの音がある事実を示している。即ち、既に人が居てシャワーを使っているということ。そして、シャワーを浴びている人物はルームメイトの篠ノ之箒に他ならない。

(これ、まずくない?)

シャワーを浴びている女の部屋に居る男。

どう考えてもマズイ。この状況を誰かに見つかりでもしたら、一夏の立場はすぐさま危険域に入る。女尊男卑とかそんなことは関係ない。それ以前の問題である。

(か、かくなる上は一度撤退を……!)

そう考え部屋を出ようとする一夏。だが、現実はいくも無情である。

「ん?私のルームメイトか?すまないが先にシャワーを頂いていてな。少し待ってくれ」

シャワー室がある方向から幼なじみの声がする。思わず一瞬足が止まる。それが決定打だった。

ガチャリ

「こんな格好で済まないな。私は篠ノ之箒。これからよろしくたの……」

シャワー室から出た箒とバッチリ目が合ってしまった。

そして、部屋の空気が固まった。

第五話（後書き）

まあぶっちゃけると前書きに書いたオリジナルキャラは、一夏の剣の師匠なわけですが。

このキャラが登場する予定は未定です。仮に出るとしても、時系列では夏休み。原作三巻終了後になるので、まあ一夏の設定の調味料（？）とでも思っ頂ければと思います。

ところで、少々読者皆様に質問ですが、ぶっちゃけ白式の設定改造はアリでしょうか？

いや、せっかく一夏をいじくったなら白式も弄りたいな〜と思いついて。

皆様のご意見を伺いたい次第です。

第六話（前書き）

今回は一夏の桃色ハプニング解決編。

先に謝りましょう。修羅場にならなくてごめんなさい。きちんと解決できる理性的な一夏にしちゃった作者でごめんなさい。

壊れ一夏を気に入っている方には、壊れ成分の無い話でごめんなさい。でも、基本的にこの作品の一夏は普段は常識人なんで、戦闘が絡まなきゃ壊れにならないんです。

第六話

side 一夏

今、俺はとんでもない状況にある。
簡単に言おう。

幼なじみの女の子がバスタオル一枚で俺の目の前に！！

俺もそうだが、篝も固まっている。多分状況の理解ができてないんだろうな。いや、俺もそうだけど…

互いに立ち尽くしたまま時間が過ぎる。とは言え、実際の時間にしたら数秒にも満たないだろう。ぶっちゃけ状況はギリギリだ。

だからこそ、先に思考が再起動を果たし、会話の先手を打つことができた俺は自分を誇っていいと思うんだ！！

「すまん！！悪気はなかったんだ！事情があるんだ！！決してやましい心なんかない！！一度出直す！！だから後ほど改めて釈明をする機会をくれ！！」

そう一気にまくし立てて、未だ固まったままの篝を背に俺は部屋のドアへと猛ダッシュ。部屋を出て寮の外へとまっしぐらに突っ走った。

とにかく一度、互いに落ち着く時間が必要だ。篝もそうだが、俺だって今は気が気じゃない。

寮の入口にまで走り抜けた俺は一度息をつく。やたら息が荒い。この程度で息が乱れるほどやわな鍛え方はしてないはずだが……！！
くそっ！！さっきの光景か！？

ふと脳裏に先程の篝の姿が浮かび上がる。

スラリとした背筋、バスタオルに包まれながらも、いや、包まれているからこそ存在感をはつきりとさせている二つの胸の膨らみ。同じくバスタオルで形作られた裾から伸びた、無駄な肉に覆われること無く、洗練された形を持つ足。どこまでも滑らかなうなじ。そして極めつけは、シャワーを浴びたばかり故に全体的にほんのりと上気した透明感溢れる肌。
何と言うか、凄く色気があって……

つて！！待てや俺！！何のために外に出た！！心を鎮めるためだろ
うが！！

ええい！！とにかく体を動かすか！！煩惱退散！！

そうして俺は夜の闇の中を駆け出した。

気が付けば走り出して既に40分程経っていた。
結果は、寮の建物の周囲を何周か走り、そのあと腕立てと腹筋を300ずつ。先ほどの光景を忘れるために必死で体を動かしたよ。
我ながら短時間で結構動いたな……。

何はともあれ、ひとまずの落ち着きは得た。いや、体力的にはまだまだいけるけどね。

多分篝も落ち着いているだろう。……多分……
とにかく、釈明をしなくてはならない。

「ある意味、今日一番の厄介だよなあ……」

そう呟きながら俺は寮の部屋へと戻った。

そして再び部屋の前。

何だろうな。心なしか、閉じられたドアから負の気配が滲み出ているよ。

一応、謝罪の言葉は考えたものの、これは少々退散したくなる……

だが、ここで進まなければどうにもならない。

俺は意を決してドアをノックした。

「あゝ、篝？今大丈夫か？」

「…入れ」

怒ってるよな。うん。返事で分かるよ。

だが俺はもはや引けない。ドアを開き部屋へと入る。

改めて確認すると、部屋にはベッドが二つ。そして学習のための机も二つ設置されていた。

そして篝はベッドの一つ。部屋の奥の側にあるベッドに浴衣姿で腰

掛けていた。

「……………」

篝の厳しい視線が俺を射抜く。どう見ても不機嫌です、はい。

俺はそのまま篝の近くに歩み寄った。

さあ、織斑一夏。ここから勝負だぞ！

「すまなかつた！！」

そう言つて俺は深く頭を下げる。頭を下げているので篝の顔は見えないが、纏う空気に変化はない。

俺は頭を下げたまま言葉を続けた。

「さっきのことは事故だ！事情がある！けど俺が悪いのも事実だ！だが！それでも！せめて事情の説明と釈明をする機会をくれ！！」

割と本気の必死さで訴える。いや、本気にならざるを得ないんだよ。そうでなきゃ、俺がヤバい。

「……………話してみる」

どうやらチャンスは与えられたようだ。

そして俺は話を始めた。

放課後の山田先生からの指示。当初の予定の変更。俺達ではどうにもできない、お偉方のやり取り等。

途中、何故自分に連絡が来なかったと篤が尋ねてきたが、そこは俺にも分からない。おそらくは連絡の不行き届きだろうと言った。

「おおよその事情は理解した」

話し終えてから少しして、篤はそう言った。

どうやら状況は解決に向かいそうだ。

「だが！」

唐突に語気を強めて篤は言ってきた。

「お前は私と同室で何とも思わなかったのか！？男女七三にして同衾せずと言っだろう！？」

ずいぶん難しい言い回しを知ってるな。

だがな、篤。俺だってそこまで馬鹿じゃないんだよ。ただなあ…

「あのな、俺だって最初は反対したよ！男女が同室なんて問題大有りだってことくらい、俺だって分かってるさ！でもな！どうしようもできなかつたんだよ！千冬姉の指示だぞ！？お前は千冬姉の厳命に逆らえるのか！？」

そう。俺にとって一番の問題は、篤との同室が千冬姉直々の指示ということ。さすがにこれには俺も逆らえない。

篤もそれに気が付いたのか、ウツと声を詰まらせると何も言わなくなった。

俺もそうだけど、篤も千冬姉には逆らえないんだよなあ…

いや、千冬姉に逆らえる人間なんて……少なくとも東さんと師匠以外は知らねえなあ…

「そういうことならば仕方ない。事情は把握したしお前の謝罪も受け取った。今回は不問にする」

そう箒は言った。どうやら許してくれたらしい。よくやった、俺！俺はたった今、一つの戦いに勝ったのだ！！

「ただ、一つ聞かせてくれ。私との同室はお前が望んだのか？」

と、いきなり箒がそう聞いてきた。

「いや、部屋のことに関しては一切合切千冬姉が決めたみただけど」

そう答えると箒は、そうか、と少し声のトーンを落とした。何か気に入らなかつたのか？

とりあえずフォローでも入れとくか。

けど、と前置きしてから俺は言った。

「正直言うと、同室が箒で良かったよ。名前も知らない誰かと一緒になるよりかはずっと良かった」

「ほ、本当か！？」

おいおい、随分と食いつくな。けどこれは本心だぞ。知らない誰かと一緒になるよりは、遥かに気が楽だ。

そう伝えると篤は、そうか：良かったか：と、眩きながら少し表情を和らげていた。

そのあとの時間は実に平和的に進んだ。

シャワーの使用時間を決めたり、着替える際の注意事項を確認したり。

始めは篤と言えど、女子と同室なんてどんなことになるのかと身構えたものだが、どうにかなったようであまりに安心した。

その後、時間も良い具合に遅くなったので二人とも就寝。

こうして、俺のIS学園での一日は終了したのだ。

だが、この時俺は何か和解した篤と、また一悶着起こすことになるうとは思っても寄らなかつたのだ。

side out

side 篤

明かりが消えて夜に包まれた部屋の中、私は布団に潜りながら先ほどまでのことを思い返していた。

シャワーを浴びている時にやってきた人の気配。ルームメイトかと思っただけで出てみたら、そこに居たのは一夏だった。

あの時の私は不覚にも思考を止めてしまっていた。あまりにも予想外の出来事に理解が働かなかつたのだ。

先に我に返つたらしい一夏が何事かを慌てた様子で言ってから部屋を飛び出していったが、思考の止まっていた私には何を言っていたのか分からなかった。おそらくは詫びの言葉だったのだろう。

しばらく頭が呆けた状態が続いていた。そのまま寝巻である浴衣に着替えると、私は部屋に二つあるベッドの一つに腰かけ、しばらく思考を整理していた。

そして、徐々に状況の把握ができてくると同時に、腹の底から静かに怒りが湧き上がってきた。

この感情、いかにしてやるべきか。そう考えていると、部屋のドアをノックする音と共に一夏の声が聞こえた。

部屋に入ってきた一夏の顔は真剣そのものだった。

かつて別れてから六年。その間に成長し、男らしさが出てきた一夏の真剣な表情に私は思わず見とれかけた。

だが、それとこれとは話が別だ。私は一夏に対し怒っている。それを自分の中で確かめるため、努めて冷静に振る舞っていた。

一夏の言葉は謝罪から始まった。そしてちゃんとした事情もあるから聞いてみたところ、なるほど確かに。

事情も理解した。先ほどの一件は事情とは関係ないが、一夏は誠意の謝罪をしている。だから、いや違う。謝罪への理解だけじゃない、私の心の中のナニカ、理屈ではどうしようもできない感情が一夏を許していた。

だが、許してからふと私は思い出した。即ち、一夏と同室であるということ。

冗談ではない！！

男女が同じ部屋だなんて大問題だ！いやそもそも！一夏と同じ部屋で寝るなど、こ、心の準備というものが……！！

思わず慌てながら抗議をしてしまったが、一夏が言うには千冬さん、織斑先生の指示らしい。それに逆らえるのかと聞かれた私は即座に無理だと思った。

多分このことが決定打になったのだろうな。私はもはや一夏を責める気にはならなかった。

ただ、一夏が私との同室を望んだわけではないとも分かったことが、どうしてだが私の心に小さな影を落とした。だからこそだろう。一夏の、私が同室で良かったという言葉が嬉しかった。

「ふふ……一夏め。そうか。私と同じ部屋で良かったか。……ふふ」

小さな声でそつと呟く。悪い気はしない。

ああ、今夜は良い気分です寝れそうだ。

side out

第六話（後書き）

最近好感触な感想をいただきホクホクです。感想をくださった皆様には拙作の一夏や、白式の改造を好意的に受け入れていただけているようで本当に嬉しいです。

・・・なんだか、自分のもう一つの作品、ネギまのやつよりも気に入って登録や感想の伸びが速い気が・・・
あれですかね？やっぱり時期的な需要というやつでしょうか？

第七話（前書き）

気分が乗ってるからか、自分でも驚くくらい書くペースが速いです。いつまで続くのか心配ですが・・・
今回も割と普通な一夏ですが、後半微妙に狂気入ります。・・・本
当に微妙ですが

第七話

午前五時二十分。

織斑一夏の朝は早い。

朝、ここ数年毎日きつかりの時間に一夏は起きると、最初に冷水で顔を洗い目を覚まさせる。例えどれだけ寒い朝でもこれは変わらない。

顔を洗い終えた一夏はそのままジャージに着替え、寮の外に朝のトレーニングへと繰り出す。

未だ早朝ということもあり、寮の廊下は静かそのものだ。人の気配は微塵も感じられなかった。

昨日は一日中周囲が騒がしかった一夏からすると、学園における静けさというのは、学園に来てまだ一日しか経ってはいないが新鮮に感じるものであり、少し晴れやかな気分させるものだった。

さて、少々話をずらす。

一夏はここ数年、具体的には筭と一度離れ離れになってから一年後から最近まで、朝早くに目覚めてトレーニングを行うという日々を送ってきた。

これは、引越した後もかろうじて連絡をとることのできた筭の父親の紹介で、とある古流剣術の継承者、一夏が師と仰ぐ人物に弟子入りしたことから身についた習慣である。

学校の長期休暇を利用して、師の下で住み込みで修業していた時は

当然、自宅においても千冬のお下がりである器具を使うことで、トレーニングのメニューに困ることはなかった。

ところが今回、IS学園に入学するにあたり、このトレーニングにある問題が出た。

つまりはメニューの変更である。

自宅から持ち込めたトレーニング器具が皆無な以上、できる鍛練は限られている。

おおよそ教育機関としては最高水準の設備を備えるこの学園には当然ながらトレーニングルーム等もあり、そこを使用すれば今までのような鍛練は可能だが、まさかこんな早朝には開いてはいるまい。

故に、一夏は寮の廊下を歩きながら、早朝トレーニングをどう変えるか考えていた。

(まあ、だいたいイメージはできているけど。とりあえず朝だし、軽くランニングと筋トレでいいよな)

そう自分の中で結論を出し、一夏はトレーニングを開始すべく寮の入口にたどり着いた。

始めはシンプルにランニングから始める。

コースは寮の建物を回るように走る。IS学園の寮は比較的大きく、建物を一回りすると大体距離は1キロと少しある。このことは前日のよる、煩惱退散を兼ねた走り確認している。

このコースを10周。10キロと少しを走ることにした。

一夏としては、一周5キロあるという学園のグラウンドを使用したのだが、寮からグラウンドまではやや距離があり、移動にあまり

時間をかけることは避けたいので、これについては断念した。

そして一夏は10キロのランニングを終了させた。

かけた時間は約40分と少し。ただし、後のトレーニングやその後過ごす一日を考慮して体力はそれなりに残してある。

このことを考えると一夏の体力はかなりのものであることが窺い知れるわけだが、これは一夏が師の下で剣を学んでいた時に培い、そして以降も休むことなく続けてきた鍛練の賜物である。

そして走り終えた一夏は寮の自室に戻り腕立てと腹筋を中心とした筋トレを行う。

この時、寝ている箒を起こさないようにあまり音を立てないように一夏は気をつけていた。

さて、一通りのトレーニングを終えると時計の針は6時を少し回ったところだった。

箒はまだ寝ているらしく、好都合と見た一夏はトレーニングで流した汗を洗うためにシャワーを浴びることにした。

シャワーを浴びながら一夏はトレーニングを振り返る。

「ふう、学園じゃ初めてのトレーニングだけど、結構良い感じにできたな。とりあえずは今日のメニューで続けるか」

流れるシャワーが心地好い。トレーニングでかいた汗を流すこの時間は何度経験しても良い気分にしてくれる。

そして何より

「ふっ、今日も良い感じに上腕二頭筋がキテるな」

鍛えた自分の体を確かめるのが楽しかった。

この一夏、若干筋肉信者が入っている。

ちなみに原因はそこまでたいしたことではない。まだ一夏が幼かったころ、幼心にたくましい体に憧れていた一夏は、剣術の修業を始めてから日に日に鍛えられていく自分の体に喜びを感じ、結果として今に至るといっただけである。

side 一夏

さて、シャワーを浴び終えて、そのままシャワールームで制服に着替えた俺は、まだ箒が寝ているなら起こしてやるうかと思った。

ちなみに、シャワールームはホテルのユニットバスのような形になっており、気をつければ着替えを濡らすことなく、室内での着替えが可能だ。

昨日の内に箒とは夕方のシャワーの使用時間等の取り決めをしており、そのついでにシャワーを浴びる時の着替えは全てシャワールームで行うとも決めたのだ。

理由は簡単。二度と昨日のようなハプニングを起こさないためである。

「いやあ、なかなかシャワーもいいな」

そう言いながらシャワールームを出ると、ちょうど箒が起きるところだった。

「あ、一夏か…。朝、早いんだな」

まあね。これでも習慣になってるから。

「いつものことさ。箒はいつもこのくらいに起きてるのか？」

時刻は6時半を少し回ったところ。

俺からすれば結構遅いが、世間一般の学生からすれば十分早い時間だ。

「一応な。だがお前がここまで早いとは思わなかった」

「そりゃそうさ。箒が知らないのも無理はないな。この習慣、箒が引越した後についたから」

そう答えると箒は、そうか、とだけ言ってベッドから出る。

「着替えるから向こうを向いている」

一応、プライバシーを考慮してか、二つのベッドの間にはスライド式の大きめの仕切りがある。

着替える時はこの仕切りを目隠し代わりにするのだが、どうも箒はそれでも気になるらしい。

「はいよ。分かったから早めに頼むぜ」

そうやって俺は箒とは反対方向を向く。

率直に言おう。

視界は問題ない。仕切りもあるし、そもそも反対方向を向いている。ただな、それでも気になるんだよ。着替える時のきぬ擦れの音が。いかん。昨夜の光景が……！！

「終わったぞ」

その言葉を引き金に脳裏に浮かび上がりかけたビジョンを一気に振り払う。助かった。

振り向くとそこには制服に着替えた箒が立っていた。

「どうした？呆けた顔をして」

いかん！顔に表れてたか！あの光景を思い出していたことを箒に悟られるわけにはいかん！

「い、いや何でもない。気にすんな」

「？おかしなやつだ。ほら、朝食に行くぞ」

「あ、ああ」

そう促され箒と共に朝食を取りに行った。

朝食は特に問題なく終わった。また、この時数名のクラスメイトと会話をして、少し親しくなった。

一番特徴的だったのは布仏さんだったな。どこぞの電気ネズミを彷彿とさせる着ぐるみパジャマは一度見たら忘れられんぞ。

そういえば、朝食の時に箒との関係を聞かれたな。単なる幼なじみと答えたけど、随分と反応してたな……

ああ後、その時に箒と同室であることと、俺の部屋の場所がクラス全員にばれちゃったな。

正直これから部屋の周りが騒がしくなるんじゃないかと危惧したけど、どうやらなんとかなりそうだ。

だって一年の寮長は千冬姉なんだぜ？さすがに千冬姉のお膝元で馬鹿騒ぎを起こそうなんて奴はいないらしい。居たら俺はそいつに最上級の敬意を払うな。

さて、朝食も終わり学園生活二日目が始まったわけだが、これが意外なことに凄く普通に終わった。

見物人の人数もだいぶ減ったし。

そして放課後になった今、俺は山田先生と二人、机を挟んで向き合っていた。

別段なんてことはない。朝のうちに頼んだ補講をやってもらっているだけだ。

ちなみに、その前に箒に剣道場に来れるか聞かれたが、補講があるので明日にしてもらった。

「はい。それじゃあ今日はここまでにしましょう」

そう言って山田先生がテキストを片付けはじめる。俺もそれに倣ってノートや教科書を鞆にしまう。

「いや、先生、本当に助かりましたよ。ありがとうございます」

勿論、俺は礼を言うのを忘れない。このくらい当然のことだ。

「いえいえ、大丈夫ですよ。生徒達に最大限のサポートをするのが私達教師ですから」

そうやって山田先生は実に晴れやかな笑顔を俺に向ける。教師の鑑だよ、この人。この人が副担任で本当に良かった。

「そもそも織斑君が基礎理論の計算を難しいと思った原因は、それ程大したことじゃないんです。必要な公式の知識が無かっただけで、それさえ覚えれば後はいくらでも伸びようがあるんです。決して織斑君が特別できないわけじゃないんですよ？」

さいですか。いやでもね、それとも思うわけです。

「でも先生、クラスの皆が分かっていることを俺だけが知らないって言うのは……」

そう言うと山田先生は少し困った笑顔を浮かべながら言った。

「うーん、それに関しては少し仕方ない部分もありますから。基本的にこの学園に入る生徒は受験勉強の段階でその辺の基礎知識を覚えちゃいますからね。織斑君は入学の決定が急でしたから。どうしても他のみんなとは差が出ちゃうんだと思います」

「左様で……」

思わず苦い顔をしたけど、そこはしょうがないと思う。

「あ、でも！まだ始まったばかりですから、頑張ればすぐにでも追いつけますよ！勿論、私や織斑先生も助けになりますからね！」

そう、最後にフォローをするように先生は言った。

それならそういうことにしよう。とりあえずは頑張って努力しろってことな。

「そういえば先生、予定より少し時間が早いですけど、ちょっといいですか？」

「はい！何でも聞いてくださいいね！」

少し時間に余裕があるので、俺は頼みたかったことを言うことにした。

「いや、お願いなんですけどね。来週の試合のために訓練機使って練習したいんですけど、ダメですか？」

俺がそう聞くと、先生は一気に申し訳なさそうな顔になった。

一体何事よ。

「そのう、ごめんなさい。訓練機は今予約がいっぱいで無理なんです」

先生の話をもとめるところだ。

当然ながら学園の保有する訓練用ISの数は限られている。そしてその数はISの世界全体における総数から見るとかなりの割合であるが、学園内で見た場合、生徒の数に比べるとどうしても足りない。

何せ一年から三年まで全員が使うのだから。

そして、新年度が始まったばかりでまだ一年のIS実習が無いこの時期は二年と三年に優先して訓練機の使用権が与えられるらしい。

至極納得のいく説明に俺はただ頷くしかなかった。

ちなみに、クラス代表、あるいは俺のような候補者ならば一年でも訓練機は使用可能なのだが、専用機という言葉がそれを許さなかった。

つまり専用機があるならそれで練習しやがれということらしい。ケチめ。

なお、先生の話によるとクラス対抗戦後、一年のIS実習が始まると一年も訓練機が使えるとか。多分その頃には俺は専用機があるので、実に意味がない話だ。

「しかし上級生ですか。やっぱり強いんですか？」

俺はふと沸き上がった疑問を先生にぶつけた。それと同時に、腹の奥に僅かな疼きを感じる。

「そうですねえ。やっぱり学年内での実力差はありますけど、基本的にみんな一年生よりは強いですよ。専用機持ちも三年に一人、二年に二人。二年の専用機持ちの片方はこの学園の生徒会長で、実質的な学園の最強ですから」

「へえ…最強、ですか…」

最強。その言葉を聞いた瞬間、腹の疼きがはつきりと自己主張し始める。

「そうですね。それはそれは……。機会があればヤツてみたいもんですねえ」

俺の言葉に先生は苦笑する。

「フフ、今の織斑君じゃ太刀打ちできませんよ？でもその心意気は大事ですよ。やっぱり織斑君も男の子なんですな〜」

太刀打ちできない？上等じゃないか。それなら尚更、俺にはやれるだけやる権利があるってことだろう？

気がついたら腹の疼きは暗い胸の高鳴りに変わってたよ。けど、別にいいよな？そうなるだけの価値が、この会話にあっただから……

そして、完全に補講がお開きとなったので、俺も山田先生もそのまま教室を後にした。

その後の寮では昨日のようなハプニングもなく、実に平和的に過ごすことができた。

だがしかし、その翌日。俺はまた一悶着起こすはめになる。

場所は剣道場。だが、この騒動はあつて然るべきだったのかもしれない。何故なら、その騒動は俺の今までに関わるものなのだから……

side out

第七話（後書き）

さて、突然ですが問題です。

今回の話の後半部。一夏のセリフにあった「やってみたい」「やれるだけやる」

これらの「ヤ」に当てはまる漢字は何でしょうか？正解者には・・・特に何もありませんが、暇つぶしにでもどうぞ・・・

次回、剣道場でICHIIKAになります。

第八話（前書き）

この作品の一夏は剣が強いです。まあ千冬に食い下がれると書いたあたりで理解した方がほとんどでしょうが。

とりあえずアレですね。筭には勝てます。いくら全国優勝者いえど、実戦でやれば一夏が上です。

そして今回はICHIKKAの回です。

後書きに簡単な質問があります。

第八話

side 一夏

学園生活三日目。

今日も元気だ朝飯が美味い。やっぱり朝はご飯と味噌汁だよな。しかも家の炊飯器を使うのと違って、ご飯は炊き立て。味噌汁も作り立て。

しかも作るのは如何にもベテランという空気を出しているおばちゃん。

これで美味くないわけがない。

ちなみに添え付けは焼き魚と納豆、海苔。実に美味い。

いや、朝食の話はさほど重要でもないか…

さて、今日もまた一日の授業が終わり、放課後がやってきた。

昨日の約束通り、俺は剣道場に行くため、箒と二人で歩いていた。俺は剣道場の場所を知らないため、箒に先導してもらっているわけだが、なんか箒のやつ、さっきから黙ったままだな。

「一夏」

唐突に箒が話し掛けてきた。だが、俺に背を向けたままである。

「なんだ？」

「…………いや、何でもない。行くぞ」

そう言うと筭は歩を早めてしまう。
まあそれに遅れるような無様を晒したりはしないのだが、おかしなやつだ。

さて、そうして俺達は剣道場に着いたわけだが、どうにも筭が事前に話を付けといたらしい。

剣道部の部長であるという先輩から、少しばかり話を聞いた。

「君が噂の男子生徒だね。私はこの剣道部の部長なんだけど、まあよろしく」

「はあ、こちらこそ」

差し出された手を握り、握手を交わす。まあ初対面の挨拶としては無難な類だな。

そして俺は軽く部長を観察する。

結論。なかなかできるぜ、この人。

ただ立っているだけでも姿勢にブレがないから、実に綺麗な立ち姿になっている。これだけでも結構な腕前というのが分かる。

とは言え、ある意味当然か。ここはIS学園。そのもつとも大きな教育目的は、いずれは世界の舞台で戦う戦士を育てること。

そして、そんな学園の中でも剣道部という、直接「武」に関わる部活の部長を務めているのだ。このくらいは当然かもしれない。

後、実に個人的な感想だが、俺を珍獣を見る目で見ず、一人の対等か人間として見てくれているのが凄くありがたい。

だってさ、よそのクラスのやつはどいつもこいつも俺を動物園のパ
ンダ扱いだし、多少は会話をしようになったクラスメイトだって、
まだ微妙に距離感を感じるんだもの。

こういう実に平凡な、だが至極真つ当な対応が実にありがたい。

「ふんふん、ふーん」

と、部長さんが何やら俺を見ながら一人で頷いていた。一体どうし
たよ。

「あの、何か？」

「ああいや、大したことじゃないのよ。ただ、見た感じ結構腕が立
ちそうだな〜って思ってたね」

どうやら相手を観察していたのは向こうも同じらしい。ただ、不思
議と嫌な気分にならないのは、その目的が真つ当だからか。あるいは
はこの人の人徳か。

とは言え、やはりこの部長は侮れない。自惚れるつもりはないが、
俺だって厳しい修業を耐えてきたんだ。剣にしたって体術にしたつ
てそれなりの自信はある。

何より、千冬姉に食い下がって勝負ができるというこれまでに、ま
あ俺と千冬姉、師匠の間でしかないけど、証明した厳然たる事実が
自信を確固たるものになっている。

あまり、というかほとんどひけらかしたことは無いが、この人は初
見で見抜いた。やっぱりただ者じゃあなさそうだ。

ただ、少し会話して思ったがこの人、本当にまともだ。もしかしたら仲良くなれるかもしれない。

「ところで部長さん。箒からはなんて話を？というか箒ってやっぱりここの部員なんですか？」

そう。あいにく今重要なのはそれだ。この人と友誼を深めるのは構わないけど、まずはそっちを何とかしなきゃならない。

「ああ、篠ノ之さんね。彼女はまだ正式な部員じゃないけど、所詮は書類の上の話。彼女も私達も彼女が剣道部の一員だと思ってるわ。中学の全国優勝者なんて、大歓迎だから。で、あなたについてだけ。詳しくは私も知らないのよ。ただ、あなたについて少し用があるから、道場をちょっと間借りしたいって」

なるほど。詳しくはこの人も知らんと。

となると当事者の箒に聞くのが手っ取り早いわけだが、箒は……

「なあ箒、何故お前は胴着を着て竹刀も用意して、試合準備バッチリなんだ？」

そう、いつの間にか箒は剣道着を着用していた。その手には竹刀が一降り。どう見ても試合する気満々だ。

「どうということはない。ただ試合までの間、お前に剣の稽古でもつけようと思っただけだ。あいにくISのことは私はあまり教えられないし、先生の方が適任だろうからな」

そうかい、稽古か。

ふと、昔を思い出した。

あれはまだ筭が引つ越す前。一緒に筭の親父さんに剣道を習ってた時だ。

あの頃は試合はだいたい俺が勝ってた。負けず嫌いだ。た。俺はしょっちゅう再戦を挑んで。俺も負けたくないから練習して。

今思えば、いいライバル関係だったな。

だが、筭の引つ越しをきっかけにその関係も終わった。

そうさ。単純に離れ離れになったからとかじゃないんだよ。あの時から、俺と筭の剣の道は別れたんだ、完全に。

そう。俺は俺自身でそのことにはつきりけじめをつけとく必要がある。

もしかしたら、六年ぶりの再開は、今この瞬間のためにあるのかもしれない。

「断る」

そう、キッパリと言った。

その場の空気が固まった。誰も何も言わない。言えない。

「気持ちありがたいよ、筭。凄く嬉しい」

これは偽りの無い本心だ。本当に嬉しいんだよ。でも、それとこれは話が違う。

「でもごめん。俺には不要だ」

そう言っつて俺は剣道場の出口に向かう。

その俺の背中に箒の声がかかる。

「ま、待て！不要とはどういうことだ！！」

ああ、そう思うのも当然か。ならばつきり言わなきゃならねえな。けど、こいつを言うのは箒には酷かもしれない。引越した後も剣道が続けた箒には。

「箒、俺はな。剣を捨てたつもりはない。……けど、剣道はもう止めたんだよ。お前の親父さんなら知ってるんだけどな」

俺の言葉に箒が息を呑むのが分かった。直後、さっきよりも大きな声で、そして僅かな悲痛の色を交えた声がかけられる。

「ふざけるな！！私は聞いてないぞ！！どういうことだ！答えろー夏！！」

聞いてないぞ、か。親父さん、箒に言っていないのか。どうしてかは知らないけど、正しかったかもな。知ってたら今この場に箒は居ないかもしれない。

それにどうしてか、か。理由は単純なんだけどな。言えば多分箒は怒る。けど、言わなきゃ状況は進まない。全く、手詰まりもいところだ。

となると仕方ない。この際だからはつきり言うか。

「分かった。理由を教えてやる。剣道を蔑ろにするつもりはないよ。寧ろ、昔の思い出だ。俺にとっては大事だよ。けどな、俺にとって剣道はもう学ぶ意味を感じられないんだ」

そう。これは事実。師匠から業を、俺が本当に得たいと思った剣を学んだ俺にとって、剣道はもはや過去の思い出でしかない。

「…るな…」

「ん？」

「ふざけるな！！構えろ一夏！！お前の弛んだ性根、私が鍛え直してやる！！」

……どうやら、事態は厄介な方向に進んでいるみたいだ。軽く周りを見ると、剣道部の部員達が心配そうにこちらを見ている。部長さんも複雑そうな表情だ。

まあそんなことはどうでもいい。問題は箒だ。弛んだ性根、か。別に弛んでるつもりはないし、寧ろ昔より締まってると言いたいが、完全にキレてる今の箒は聞きやしないだろう。なら手立ては一つしかない。

俺は近くに立てかけてあった竹刀を一降り手に取り、そのまま箒の前に立つ。

「着替えてこい。防具も無しにやる気か」

「あいにくその気だよ」

俺の言葉に今度は周りが息を呑む。そりゃそうだ。相手は中学の全国チャンピオン。そんな奴に防具も無しに挑むなんて、普通は考えない。

「馬鹿にしているのか？防具も着けないなど、ふざけて」

「お前こそ、何言ってるやがる」

箒の言葉を俺は遮る。

「俺もお前も剣士の端くれ。なら、剣を持って相對した時点でやることなんざ決まってる。防具？それがどうした。安全？戦いに安全もへったくれもねえよ」

そう。戦う以上、そこに絶対の安全などない。少なからず危険が付き纏う。

どう受け取るかは人次第だろうが、俺にとっては中途半端な予防線を張るくらいなら、始めから無い方がマシだ。

「どうなっても知らないぞ」

最終確認のように箒が告げる。答え？決まってる。

「来い。ああそうだ。来るなら試合じゃなくて、実践のつもりで来いよな」

そう告げた瞬間、箒の気迫が膨れ上がる。中々いい気迫だよ。

けど、あいにく負ける気はしない。それだけの物を俺だって積み上げてきた。実践なら尚更だ。

それにさ、箒の凄い気合いを受けてると、こっちの気分も高ぶってくるんだ。

脳天から爪先まで一瞬駆け巡る痺れにも似た高揚感。イイネ。ああ、イイ感じでテンションが乗ってきた。負ける気なんてこれっぽっち

もしねえや。

「いえやああああ!!」

裂帛の気合いと共に、竹刀を上段に構えた箒が向かって来る。
それを俺は……

side out

剣道部部长はこの場で唯一、その瞬間に起きた出来事を理解できた。

箒が気合いの掛け声と共に一夏に迫る。その踏み込みは、全国優勝者の名に恥じぬキレと速さを持っていた。

対する一夏は竹刀を構えてすら居なかった。

いや、部長のみがそうではないことに気づいた。

あれは見事なまでの自然体の構えだ。

そして、箒の竹刀の間合いが一夏に届いてからの流れは一瞬だった。

気がつけば、激しい音と共に箒が弾き飛ばされ、そこには竹刀を突き出す形で構えている一夏の姿があった。

他の部員がどれだけあの瞬間を見極めただろうか。部員は一人そう思った。

流れはこうだ。

間合いに一夏を捕らえた箒が竹刀を降る。だが、それを一夏はかわす。その姿に焦りはない。まるで、烈風を受け流す柳の如く、自然さのある回避行動だった。まるで始めから回避位置に居たと錯覚するほどに。

かわされたことを理解した箒はすぐに一夏の方に向き直った。だが、その時点で勝負はついていた。2m弱はあった両者の距離を如何なる歩法か、一瞬で詰めた一夏は強烈な突きを箒の胴に浴びせた。そして、箒が吹き飛ばされるといふ結果に至る。

「なんて……」

部長の口から知らず漏れるは紛れも無い畏怖の言葉。彼女は理解していた。一夏の一連の技。謎の歩法から締め突きまで、その全てが古流の技術。戦乱の世に当時の武人が磨き上げた殺しの業に他ならないことに。

だが、彼女が真に震えたのは、一夏の技に対してではない。古流の技は確かに珍しいが、今でも日本各地で継承をしているところはあ

る。彼女が本当に衝撃を受けたのは一夏自身。古くから伝わる殺法を齡十半ばで見事にものになっている技量。加減をしたとは言え、その技を躊躇無く人に向ける精神。

それらに言いようのない恐怖を感じた。

「しゅめん、箒」

未だ尻餅をつきながら倒れたままの箒に一夏は一言詫びる。その声色には紛れも無い謝罪の念があった。そして一夏は部長に向き直ると竹刀を差し出しながら言った。

「すみません、借り物なのに壊してしまいました」

そう言われて受けとった竹刀に目を向けると彼女の表情は更なる驚愕に彩られた。

確かに竹刀は壊れていた。竹刀の先端が使い物にならなくなっているその竹刀はまるで、竹刀の内側から弾け飛んだかのような壊れ方をしていた。

驚愕に固まる彼女を余所に、一夏は再び一礼すると道場の出口へ歩いていく。入口付近に固まっていた生徒らが黙って道を空ける。彼女達の表情は一樣に畏怖と驚愕により呆然としたものだった。

side 一夏

「やっちゃまった……」

道場を出て、寮に戻る道を歩いていた俺の胸中には後悔だけがあった。

「普通に一本取ればいいだけだったのに。何やってんだ全く。また熱くなっちゃまった」

歩きながら頭を抱える。そうしたくなるのも無理無い。だって幼なじみを思いつきりぶっ倒した挙げ句、借り物の部の備品まで壊す始

末。これが頭を抱えずにいられるか。

「しっかしヤベエな・・・筭とどんな顔して会ったらいいのやら・・・」

一番の問題がこれだ。だって筭とは寮で毎日顔を突き合わせるんだぜ？何せ同室だからな。正直気まずいことこの上ない。

「・・・とりあえず、トレーニングでもしながら考えるか」

まずは一度時間を置くことが大事だ。俺も今後の対応を考えなきゃならない。故に俺は学園内にあるトレーニングルームへと足を向けた。ああ、実に憂鬱だ。

side out

第八話（後書き）

さて、もうすぐセシリア戦です。早ければ次の話で、少なくとも次の次には書けます。そこで皆様に少々聞きたいことが。

白式の改造、感想にて皆様のGOサインをいただきまして、歓喜しながら作者は敢行を決定しました。一応改造案も一通りまとめましたが、改めて皆様のご意見を伺いたい次第です。

とりあえず、下に列挙する案から皆様が良いなと思うものを選んでください。

? NT-D的なのを行っちゃおうぜ？中の人的に

? ブレード型武装の追加どうよ？後付けじゃない標準装備でさ

? 何よりも重要なのは速さだ！！超機動行っちゃおうか

? ？？？までてんこもりでよくな？作者の中で有力候補だし。

以上4つです。上述した通り作者的には？ですが、作品としてのバランスとかを考えて、改造も少しは自重した方がいいという意見がありましたら、遠慮せずおっしゃってください。その場合、？？？のどれか一つ、或いは二つにします。

また、こんな装備どうよ？的なご意見もお待ちしておりますので、お気軽にどうぞ。その場合、その手の知識に乏しい作者のために、装備の解説もお願いしたい次第です。

第九話（前書き）

というわけで今回はセシリア戦前半となります。

感想にてご意見をくださいました読者の皆様、ご協力いただき本当にありがとうございます。おかげで作者の構想という名の妄想もだいぶ形になりました。

最終的には？案のブレード型武装の追加と？番の高機動の複合で決まりました。

作品としてのバランスを考えたのですが、最大の理由は？のNT-Dもどきは使いどころがあまり思いつかなかったからというWW？を期待してください。た方には大変申し訳ありませんが、それでも皆様が楽しめるような作品にできるよう鋭意努力しますので、どうかそれを以ってご容赦ください。

初のIS戦闘の描写ですが、上手く書けているか実に心配です。後、ルビ振りがうまくできているかも。

第九話

side 一夏

あの後、2時間ほどのトレーニングを終えた俺は寮に戻った。部屋には既に箒が戻ってきていた。どのような言葉を言われるのかと内心ビクついていたが、箒は普段と変わらない様子で俺に接してきた。

はっきり言ってマジ怖い。なんかいつも通りなのが余計に不安にさせてくれる。例えるならアレだよ。テレビのバラエティーとかで時々出るような「夫の浮気に気付いているけど素知らぬ振りをして普段通りに接する妻」、そんな感じの怖さを俺は感じていた。

もしかしたら単に俺がビビりすぎているのかもしれない。でもあんなことがあった後だからなあ。どうしても思考が悪い方向へ行っちゃう。試合ももうすぐだと言つのにこんなんで大丈夫なのだろうか、俺は。

そんな感じで不安を抱きながら俺は日々を過ごし、放課後には山田先生の補講を受けつつ、ついにオルコットとの決闘の日を迎えた。

決闘当日の放課後、後少しもすれば試合が始まるという中で俺は、試合に使われるアーリーナのピットで一人腕組みをしながら立っていた。

本来ならば呑気にそんなことをしていないで、さっさとISを着用すべきなのだろう。だが、今の俺はそんなことを気にしていられない重大な問題に直面していた。

「ISがまだ来ないってどういうことだよ・・・」

そう。俺のISが未だ届いていないのだ。確かに千冬姉から俺のISは準備に時間がかかると言われた。だがそれにしてもだ。これは時間がかりすぎではないだろうか。

「マジでどうすんだよ。これで延期とかはなしだぜオイ」

そんなことになったら実に困る。篝との一件で腹の内に不安を抱えたままとは言え、俺もこの決闘をそれなりに楽しみにしてきた。オルコットはどうだか知らんが、少なくとも俺以外のクラスメイト達も楽しみにしていただろう。

そこへ延期などとなったら彼女たちに良くない思いをさせてしまう。出会って日が浅いとはいえ、そこそこに親しく会話をするようになった者もいる。そんな彼女らを落胆させるのは少しばかり心苦しく感じる。ついでに言うとな俺のテンションにも大きく関わる。

「さてと、早く来てくれないかねえ・・・」

そう呟くと同時にピットの壁際にある扉が開き、慌てた様子の山田先生と対照的に冷静そのものな千冬姉、そしてどういわけだか篝がやってきた。

「織斑君、来ましたよ！織斑君の専用ISが！！」

そう先生が言うと同時にピットの中央部の床が開き、その中からISがせり上がってきた。

「こいつが・・・」

「そう！これが織斑君専用のIS、白式ひやくしきです！！」

白式、これが俺のIS・・・

静かに白式を見つめている俺に千冬姉の声かけられる。

「すぐに装着しろ。時間が無いからフォーマットとフィッティングは試合でやれ」

俺はその言葉に無言で従い、静かに白式に触れた。

瞬間、理解した。ああ、コレは俺のためにあるのだと。同時に思った。俺が駆るISはこれ以外には存在しないと。入試の実践試験の時、中々良いと感じた打鉄さえこれには遠く及ばない。専用機と汎用機だからかそういうんじゃない。もっと根底の部分で白式コレは他の機体とは違うのだと。

「背中を預けるように。そうだ、座る感じがいい。後はシステムが最適化する」

千冬姉の指示に従い、俺はISを装着する。搭乗者を受け入れるために開いていた装甲が閉まり自分の体に密着していく様子はまるで、ISと自分が融合していくかのような感覚を覚える。

その感覚に俺の体は興奮による痺れを感じた。とてつもなく強大で

ありながら、自分のために在るかのような存在と一つになる感覚。その感覚にどうしようもないくらい気持ちが高ぶる。ああ、コイツは最高にイイナ。

『Access System start』

感情を感じさせない機械音声が聞こえると同時に無数のモニターが目の前に現れ、そして消えていく。

「セシリアさんの機体はブルー・ティアーズ。遠距離射撃型のISです」

ほー、遠距離メインねえ。それはそれは。ところでさ

「先生、この白式のタイプは何ですか？」

「え？近接戦闘型のISと聞いてますけど・・・あ！」

うん、近接メインって聞いて思ったことに山田先生も気づいたみたいだ。

明らかに相性悪いよな、オルコットとは。

ぶつちやけISに限らず戦うもの同士の相性って凄く大事だぜ？

漫画とかによくあるけどさ、一見もの凄い力を持つてるやつに実は相性的に天敵って呼べる相手が存在して、そいつを相手にすると例え相手が格下でも負けるという。

ちなみに今回の場合、白式でオルコットのISに挑むのは素手で、或いはナイフ一本や剣一本で銃器で武装した相手に挑むようなもん。

まあ生身の場合、達人と呼べる人間ならそういう相性を無視できるだろうけど。俺？数人程度ならなんとかなるかも。まあ、ちよつと昔アレしてコレするようなことあったし………

ただ大人数は無理。そんなことするのは千冬姉みたいな常識はずれの人の仕事だよ。

ちと話がズレた。

今回の戦闘はIS。だから生身とは勝手が違う。多少は生身の応用を利かせられるかもしれないけど、今回は俺が圧倒的に不利だ。

「織斑」

そんなことを一人で考えている俺に千冬姉が声をかける。

「相性のこともあるとはいえ、オルコットは代表候補生。対するお前は、多少生身での戦闘に長けているとはいえ、所詮はISの素人だ。はつきり言って勝ち目は薄い。グダグダ悩まないで気楽にやれ。いっそ胸を借りるつもりで行くんだな」

そうお言葉を下さいましたよ、我が姉上は。

まあ実際そうだよな。勝ち目が薄い。そんなこと分かりきってる。なら、俺は俺らしくやるだけか。

「了解。それじゃ、行ってきます」

そう言って出撃の体勢に入る。

「一夏！」

今度は筭か。一体なんだ？

「その…だな、色々あったが…その…、無様は晒すな」

少し顔を背けながら言った。それは紛れも無い激励の言葉。その言葉が嬉しかった。

だから俺はただ一言に想いを込めて返した。

「まかせろ！！織斑一夏、白式！出る！」

そうしてピットの床に設置された発射カタパルトが作動し、白式を纏った俺はアリーナに、学園生活最初の戦場に飛び立った。

side out

アリーナの上に浮かびながら一夏とセシリアの両者は向かい合う。

「逃げずに来たこと、褒めて差し上げますわ」

先に口を開いたのはセシリアだった。

「最後のチャンスを差し上げます」

「チャンスだ？」

セシリアの言葉に一夏は訝しげな表情を浮かべる。

「そう。このまま戦えばわたくしが勝つのは自明の理。今から泣いて謝るといふのでしたら、許して差し上げないこともありませんわ」

余裕の表情で言い放つセシリアに、一夏は鼻で笑うと答えた。

「はっ、そういうのはチャンスとは言わねえな。チャンスの意味、広辞苑で調べ直してこい。まあな、確かに俺の勝率は低いよああそうさ。それは俺だって分かってる。だがな、あいにくその程度で引く程俺もやわじゃあない。第一、んなのつまんねえだろ」

せっかくだから、と前置きして一夏は続ける。

「俺の勝率は低い。だからって端から負けるつもりで行くのも嫌なんだ。だからさ、セシリア・オルコット。俺はお前に勝つために、やる気で行くぞ?」

最後の一言を、闘志を剥き出しにした獰猛な笑みと共に言った。

「いいでしょう、ならば」

セシリアもまた闘志を立ち上らせ

「やってごらんなさい!」

大型ライフル スターライト・mk? を召喚、照準を一夏に合わせ引き金を引いた。

一秒かかるかどうかで行われた早打ち。一瞬で行われた一連の動作は、まさしく代表候補生と呼ぶに相応しい技だった。

だが、一夏も負けてはいない。ライフルが召喚された時点で反応。照準を定められた時には既に白式に回避のイメージを送り、エネルギー弾の発射の時点で回避行動を始めていた。白式のモニターが警告メッセージを発していたが、それが表示されるよりも早い行動の開始だった。

だが…

『シールド被弾。シールドエネルギー減少』

「んなっ！クソツタレがあ！！」

一夏にとって完璧と思えた回避はしかし、バリアへの僅かな被弾という結果をもたらした。想定していなかったのか一夏が悪態をつく。だが、悪態をつきながらも一夏は動くのを止めようとしない。動きを止めればその瞬間にライフルで打ち抜かれることが分かっているからだ。

（速さは十分！後は狙いをつけさせねえ！！）

幸いにして一夏の白式は高い機動性を有していた。今の時点では一夏は知らないが、近接戦闘主体のISは一部の例外を除いて総じて機動性に優れている。一夏の白式もそのご多分に漏れなかったということだ。

実際に操作してみてその機動性を理解した一夏は縦横無尽、ただひたすらにアリーナを駆け巡る。だがそれでも、初撃以降も直撃こそ受けてはいないが、バリアをかすめることによるシールドエネルギーの減少は少しずつだが続いていた。

実際のところ、一夏が現在行っている機動はとても素人のソレと思えるものではなく、仮に観客であるクラスの女子の誰かが同じように射撃でダメージを与えようとした場合、一夏が被弾することは皆無である。

だが、それでもセシリアはかすめるといふ形だが一夏の機動に攻撃を当てている。先ほどの早撃ちと同じく、彼女がまさしく代表候補生であることを証明するかのような技量の高さだった。

「さあ、踊りなさい！このセシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲ワルツで！！」

「生憎ワルツなんて高尚なものに縁はなくてなあ！踊りなんてせいぜいが夏祭りの盆踊りくらいしか知らねえよ！！」

「ならばわたくしが教授してさしあげますわ！ただし、授業料は高くつきましたよ！！」

二人が戦闘を続けている中、アリーナ管制室には二つの人影があった。

モニターの前に座り、試合の記録や各種データを取っているのが一年一組副担任の山田真耶。そしてその後ろで腕を組みながら試合を大型モニターで見つめているのが一年一組担任、織斑千冬。

「すごいですねえ、織斑君。ISの機動が二回目とは思えません。それにこのデータ……。IS全体とのシンクロ率が高いわけじゃないのに、ハイパーセンサーと織斑君の反射のシンクロ率だけすごい。数値だけなら代表候補生の上位、下手したら国家代表クラスで

すよ」

驚きの声を漏らす真耶に対し、千冬は冷静に答えた。

「前にも話した通り、あいつは剣術の修業をやっていた。そのおかげか動体視力と反射速度だけはやたら速い。おそらくそれが功を奏したのだろう」

「それじゃあこの試合、もしかして織斑君が・・・」

「それはまだ分からないな。確かにあいつは生身の实力があるし、それをIS戦闘に活かせるのならば可能性はある。だが実際、一夏の生身の实力はその突き抜けた動体視力と反射によるところが大きい。あいつ自身の技の技量は私からすればまだまだ甘い。後々どうなるかは知らんが、少なくともこの試合の技量勝負ではオルコットに軍配が上がるな」

真耶が口にしたかけた希望を千冬はバツサリと切り捨てる。それに落胆した様子もなく、真耶は感心するような声を漏らしていた。千冬が言った通り、一夏を生身の戦闘で千冬に食い下される程の實力たらしめているのはその動体視力と反射速度だ。ちなみに、それ以外の単純な剣の技量も確かに高い。だが、千冬のような常識外れの領域の人間からするとまだまだ弱いレベルにある。剣道の全国優勝者を一撃で沈める技量を弱いと評するところから、織斑千冬という人間のけた外れぶりがかがえる。

だが、と口に出すことなく千冬は一人己の胸中で呟いていた。

(仮にあの事件の時の状態の一夏ならば、あるいは・・・。だが、そうなら止めに入る必要がでてくるな・・・)

かつて自分が人生で最も戦慄した瞬間のことを思い出しながら、千冬は試合の成り行きを見守った。

未だ回避機動を続けながら一夏は次の手を考えていた。

(このまま避け続けじゃどうにもならねえ！なんか武器は・・・！)
その一夏の思考を読み取ったのか、一夏の目前、シールドエネルギーの残量などのデータを表すモニターに使用可能武器のデータが表示される。

『展開可能装備 近接用ブレード(名称未設定)』

(一つしかねえのか！？だが刀とはな、上等だ！！)

瞬間、量子変換され白式に納められていた近接ブレードが一夏の右手に展開される。本来の刀のものとはだいぶ異なる形であったが、無いよりはマシと一夏は使用の続行を決めた。

真つ当に戦える武器を手にしたからか、一夏の胸中に昂りが起こる。

「遠距離射撃型のわたくしに、近距離格闘装備に挑もうだなんて笑止ですわ！」

セシリアの声が響くと同時に再び連続射撃が襲いかかる。

アリーナの観客席は盛り上がっていた。観客である一年一組の生徒

らは、セシリアが圧倒すると思われた勝負で一夏が予想以上の粘りを見せていることに驚いていた。だが、彼女らの胸中にあるセシリアの勝利という予想は揺らがない。誰もがセシリアが勝つと思っていた。だが、試合は着々と彼女らが予想だにしない方向へと向かいつつあった。

「このブルー・ティアーズを前にして初見でここまで耐えたのは貴方が初めてですわね。誉めて差し上げますわ」

「世辞はいらねえよ」

セシリアにとってその言葉は紛れもない本心だった。この男はよくやった。スターライトの連射を受けながらもここまで耐え抜いたことは素人としては及第点に値する。彼女自身予想していなかった展開だ。

しかし、それもここまでである。

「では、そろそろファイナーレと参りましょう！」

その言葉と同時に、彼女の肩の部分にあった非固定で存在したアーマーから四機のビットが飛び出し、アリーナの空を飛び交う。ブルー・ティアーズ。セシリアのISの名称の由来となった、思考制御型の遠隔射撃武装である。

四機のビットから次々とビームが放たれる。一撃の威力はスターライトよりもだいぶ劣るが、攻撃の数でそれを補っていた。

(この状態でライフルを撃たれたら・・・!!！)

一夏は半ば覚悟を決めていた。ビットによる攻撃こそなんとか回避しているものの、一夏動きは完全に制限されていた。セシリアの技量ならば今の自分を狙い撃ちすることはたやすいはず。あきらめるつもりはないが、ほとんど勝負は詰んでいると一夏は思った。だが……

(なんで撃ってこない?)

回避を続けながら一夏の中で疑問が湧いた。と、そこで再び状況が動く。先ほどまで一夏に連続攻撃を浴びせていたビットが全て引いたのだ。それと同時に放たれるライフル。回避が間に合わない判断した一夏は手にしたブレードでライフルのエネルギー弾を弾く。

セシリアが驚きに息を呑んだのが分かった。とはいえ、一夏自身できるとは思っていなかったが、先ほどの一撃で十分に可能と判断した。弾速には反応可能。攻撃の重さも実弾で無いゆえか想像以上に軽い。

「今度はこっちから行くぞ!!」

一瞬だが生まれた隙を一夏は見逃さなかった。白式の肩につけられたスラスターを吹かし一気にセシリアに距離を詰める。

「くっ! 甘く見てもらっては困りますわ!!」

一夏の攻撃が届く前にセシリアのESが距離を取る。それと同時に再びビットが放たれる。だがライフルを撃とうとする様子はない。

唐突に一夏の脳裏に閃きが走った。

(そういうことか！あの遠隔兵器、使ってる時はライフルを撃たない！おおかた制御に意識を使ってるんだろが……。そして、攻撃が来るのは俺の反応が一番遠い角度！)

まるでパズルのピースが一気に形を成すかのように一夏はブルー・ティアーズの特性を理解した。そして……

(たとえ死角でも、来るのが分かってりゃ見えたも同然!!)

自身の死角となっている角度に意識を向けた一夏は感じた。ビットの一機が自身に狙いを定めるのを。だが

「させるかぁ!!」

斬!!

先に狙いを定めていた一夏が斬りかかったことでビットは両断され、残骸が爆発四散した。

「そんな！わたくしのブルー・ティアーズが！」

「見きつたぞ、ブルー・ティアーズ!!」

もはや恐れるに足らず。活路を見出した一夏は一気にセシリアへと向かう。

「ここからは、俺の間合い……っ!!」

だがセシリアへと向かう最中、一夏は背に嫌な予感を感じ取っていた。

そしてそれは的中する。

「かかりましたわね？」

不敵に笑うセシリア。そして

「ブルー・ティアーズは六機ありましてよ!!!」

腰のパーツにつけられていた二つの円筒状パーツから一発ずつ、計二発のミサイルが放たれた。

一夏は一気に窮地に追い込まれる。だが、一夏の表情はさらに凄味を増したものになっていた。

「上等だコンチクショウ!!!」

直進する機動をずらし、ミサイルを叩き斬ろうとする一夏。だがここで、彼の予想だにしていなかったことが起きた。

(白式の反応がっ!?)

それは試合開始後初めて、そして最悪のタイミングで起こったこと。ISのフィッティングの未完による白式の反応のズレだった。一夏に二発のミサイルが迫る。

「ヤバッ……!!」

直撃。一夏と白式は爆発に包みこまれた。

「一夏!!!」

「織斑君!!」

ピットにて筭が、管制室で真耶がそれぞれ声を上げる。観客席のクラスメイト達も心配げな目で爆発地点を見ていた。だが、ただ一人、千冬のみが違った反応をしていた。その顔に浮かぶのは皮肉気な笑みだった。

「ふん、機体に救われたな。馬鹿者め」

「えっ?」

その言葉に真耶が千冬の方を向く。千冬は彼女に黙ってモニターを見るように促した。

煙が晴れる。そこには一夏と白式の姿があった。だが、白式はその姿を変えていた。

体に着いている各部装甲は全体的にスリムな形状となり、さながら中世の騎士の甲冑をISの装甲にしたような形になっていた。両腕並びに脚部の装甲にはブレード状の突起が付いている。

そして、特徴的なのが白式の背中にある二機の大型ウィングスラスタ。スラスタには大型の噴射口が一つと、補助と思われる小型の噴射口が一つ。計四つの噴射口。

白式ファーストシフトの一次移行が完了した瞬間であった。

「ファーストシフト!? あなた、いままで初期状態の機体で戦って・・・!」

セシリアが驚きの声を上げる。だが、一夏は何も答えない。俯き、両手をダラリと垂れ下げたままである。

その様子にセシリアのみならず、管制室の千冬と真耶、ピットの筈や観客席の生徒らが疑問の表情を浮かべる。

「・・・クツ、クク・・・」

わずかに漏れる笑い声はセシリアだけが聞き取れた。誰もが黙ったままの状況下、笑い声の主は一夏だとセシリアは理解した。そして・

「ククツ、アハツ！！アツハツハツハツハツハ！！ハハハハハハハハハハ！！」

唐突にアリーナ全体に響き渡る笑い声を一夏はあげた。まるで狂ったかのように。

誰もがそんな一夏を訝しげに見る中、管制室の千冬のみが余裕を失いかけている表情をしていた・・・

第九話（後書き）

今回はセシリア戦後半。壊れICHIIKAは次回で本格活躍になります。

かなりICHIIKAな内容になっちゃってますが、どうかお付き合ってください。
ではまた。

感想ご意見はいつでも受け付けておりますのでお気軽にどうぞ。

第十話（前書き）

というわけで覚醒ICHIKKA君の回です。

正直やりすぎてORIMURAなICHIKKAにしちやった感が凄くありますけど、それでもどうか楽しんで頂けたら幸いです。

本当にこんなICHIKKAにしちやって大丈夫かな・・・

第十話

side 一夏

相性が悪い相手に我ながらよく持っていると思う。

休む間もなく俺を打ち抜こうとしてくるエネルギー弾。

こちららISの操作に慣れてない素人なのにバカス力撃ちやがって。アレか？お前実はトリガーハッピーか何かか？あ？

そんな感じに内心で悪態をつきつつ俺はただ回避に徹していた。

何か武器はないかと探ってみれば一つだけ。なんとサービスの悪いことだと思っただね。

唯一の救いは武器が刀だったことだけだ。これでハリセンだったりしたら俺は勝負を投げてたよ。

刀を手に入れたはいいが、依然俺の不利に変わりはない。そもそも相性が悪い時点で有利も不利もないんだけどな。

なんか俺がしぶとくいるのに驚いたのか、オルコットが褒めてくれたよ。

ありがとーございますー。んな余裕しゃくしゃくの顔で言われても世辞にしか聞こえねえよ。

そんで一人で芝居がかったテンションのオルコットが今度はビュンビュン飛び回ってビームを撃ってくる板を飛ばしてきた。なんかブルー・ティアーズとか言っつて、オルコットのISの名前の由来らしい。

察するにオールレンジ攻撃。実に厄介だ。

仕方ないからこれも必死こいてかわしたよ。でも、正直この時点で終わったなーと思っただね。

だって必死で攻撃かわしてる状態の俺って隙だらけだから。こんな状態でライフル撃たれたら終わりだよ。

だが、予想してた攻撃は来なかった。来るにしても、わざわざビットを下げてくれる始末。

この辺で理解したな、ブルー・ティアーズ。ついでにオルコットの攻撃の癖を見切った。

するとどうだ。一気に活路が開けたよ。

ならばは決まってる。そこに突っ込むだけだ！

上手いことビットの一つを潰して、ビックリしてるオルコットに突っ込む。ところがだ。あのアマ、今度はミサイルなんぞ持ち出して来やがった。

けど、もう俺には突っ込む以外の選択肢は無かった。何もしないでいたってどうせやられる。なら、ちっとでも可能性のある方に走るだけ。

だから俺は気合いの声と共にミサイルをぶった切ろうとして、そこで躓いたんだ。

突然俺の指示と噛み合わなくなる白旗。

何故だ？ミサイルが迫る。強い集中のせいか、一秒がやたら長く感じる。そんな中、俺は二つのことを思い出していた。

一つは試合直前の千冬姉の言葉。

「フォーマットとフィッティングは試合でやれ」

もう一つは、試合までの間に受けた山田先生の補講だった。その時の先生はこう言っていた。

「専用機は確かに汎用機に比べて高性能です。ですが、始めから搭乗者が完璧に使いこなせるわけじゃありません。一般的に一次移行と呼ばれる搭乗者とIS間の最適化が行われて、初めてその性能を引き出すことができます。一次移行自体は比較的短時間で行われませんが、それまでは搭乗者とISがうまく馴染まず、行動にズレが生じたりします」

それらの言葉を思い出し、俺は心の内で盛大に舌打ちをした。

つまりこの白式はまだ俺に馴染んでない。だからズレたってわけか。

この時、俺の心を占めたのはただ一つの思いだった。

ムカツク

何が世界最強の兵器だ。こんな我が儘なものがよく最高だなんて言えたな。誰が使い手だろうと黙ってその性能を発揮するのが兵器の本分だろうに。刀を見てみる。使い手の技量にどこまでも素直だ。あれこれまさに武器だよ。

だが、そんな俺の内心など知らないと言ったようにミサイルは俺にぶつかり、爆発。衝撃が俺を襲い、視界を一瞬の閃光と後に続く煙

が覆った。

気が付くと俺の目の前は白に塗り尽くされていた。煙の白じゃない。まるで世界を白いペンキで塗り尽くしたような感じだ。

俺はそこにいた。俺の体はそこにはなかった。だが俺は確かにそこにいる。俺は理解していた。この空間こそが俺。俺こそがこの空間。

この世界は俺だ。そしてこの空間に、俺の中に、一つの白銀があった。

燦然とその存在感を示す白銀。それが何か、俺は自然と理解していた。これは白式だ。

そして、白銀が一際強く輝く。増した輝きは白を塗り尽くしていく。白式が俺と一つになっていく。

アア、リカイシタ

始めに動かした時、俺は白式を理解したと思った。けど、あんなのは序の口だ。俺は今、本当の意味で白式をリカイシタ。そして白式もまた、俺をリカイした。

やっと、俺達はリカイシアエタ！

胸に押し寄せるは圧倒的存在感！突き抜けるような歓喜！

俺はただ、新たな相棒を喜びを以って迎える！

ようこそ白式！！俺が織斑一夏だ！！言葉は要らない。俺達はリカ

イシアツタ。ならば後は決まってる。タタカオウ！！

無限に広がる白銀が一気に収束する。まるで宇宙の誕生、ビッグバンを逆再生しているみたいだ。極限まで凝縮された白銀が俺の体を満たす。

世界の光景が元に戻る。纏うのは真の意味で俺のISチカラになった白式。目の前には青を纏う敵。セシリア・オルコット

さあ、舞台は整った。コンディションも十分。準備はいいな、白式？ 答えは聞いてない。

だからさ、白式

アバレヨウゼ？

そして俺の心は、戦いで燃え盛り、白式によって白銀に染め上げられた炎に包まれた。

『First Shift Complete』

『武装変更。近接特化ブレードゆきひらにがた「雪片式型」。単一仕様能力ワンオフアビリティ「零落れいらく」
白夜びやくや「発動拒否』

side out

「アハハハハハハハハ！！アハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！」

狂ったように一夏は笑いつづける。その様子に誰も何も言わない言えない。ある者は訝しみ、ある者は呆れ、ある者は悪寒を感じる。

一夏と相対するセシリアが抱くは何か。それは何も無かった。まるで思考が白紙になった感覚。

一夏の姿は隙だらけそのもの。その気になればいとも容易く撃ち抜ける。だができない。することを忘れていた。

「ハハ……ハ……ハア………」

ひとしきり笑い終えた一夏が再び俯く。そして静かに顔を上げ、セシリアと顔を向き合わせた。

「つつっ!!」

再び一夏の顔を見たセシリアが感じたのはただ一つ。それは戦慄だった。

一夏が静かに腕を動かす。右手に持つ刀、雪片へと姿を変えたソレを、切っ先をセシリアに、刃を天に向け、刀身を顔の高さまで持ち上げる。

そして……

「ラアアアアアアア!!」

雄叫びと共に一夏がセシリアに向けて飛ぶ。その速さは先程までの比ではない。

「ブルー・ティアーズッ!!」

反射的にセシリアは己の武器に指示を下す。

主の命を受けた忠実な三機の青が一夏目掛けて飛翔。その体を撃ち抜かんとする。
しかし……

斬！！

目にも止まらぬ速さで振るわれた刃がビットの一つをすれ違い様に切り裂く。
放たれたエネルギー弾は全て回避されていた。その機動はともいSの起動が二回目の素人とは思えないものだった。

「まだっ！！」

擦れ違つたために一夏の後方に行った残り二機のビットにセシリアは支持を出す。

二機は一気に方向転換、一夏に急速接近し、至近距離からエネルギー弾を浴びせようとする。

「とコロがギツチョン！！」

一夏は声と共に体を捻るように回転させる。

斬！斬！

一夏に接近していた二機のビットがいつの間にか切断されていた。驚愕するセシリアを見た。

一夏のIS、その両足の装甲から一本ずつ伸びる1m程の長さのブレードを。

(隠し装備！？)

四機のビット、ブルー・ティアーズは失われた。残るはミサイルとライフルのみ。

「悪あがきも大概になさい!!」

言葉と共にミサイルを発射。今度は四発。

同時に後退しながらライフルを撃つ。並の操縦者ならば対処は不可能の攻撃。だが一夏の行動はセシリアの予想を大きく上回った。

「デラアアアアアア!!」

縦横無尽に飛び回りライフルをかわす。追尾してくるミサイルは刃で、或いは足のブレードで切り裂く。当たると思った攻撃は全て外れた。

コレハナンダ？

セシリアの思考が困惑に染まる。

彼女とて、始めから代表候補生だったわけではない。多くの訓練生と共に修練し、数多の模擬戦をこなし、勝利を収め今代表候補生として居る。

戦った仲間には様々な者がいた。その者達に共通するのは一つ。我こそが上り詰めんとする気迫、強さだった。それを砥石に、彼女は己を磨いてきた。

だが、目の前の相手は違う。気迫も十分。だが、感じるのは戦慄のみだった。

「貴方は！貴方は何のです！？」

思わず口から出た言葉は半ば悲鳴に近かった。

「オレハオレダアアア！！」

対する一夏は狂気を孕んだ眼光と共に答える。

そして、一夏の背中が爆発した。

スラスターから爆発的な加速が生み出される。一瞬で高速をたたき出すこの技をセシリアは知っていた。

「イゲニツジョン・ブースト
瞬時加速！？何故そのような高等技術を！！」

放出直前のエネルギーを一度圧縮、爆発的加速力に変える近接主体ISの高等技術の一つ、瞬時加速。

本来素人が扱えるような技ではないソレを見事にやってのけた一夏にセシリアは驚愕する。

そしてその驚愕は決定的な隙となった。

「テオラアアアアアア！！」

間合いにセシリアを捉えた一夏が刀を降る。

咄嗟にセシリアは手にしたライフルで防ぐ。あまり褒められた手段ではないが、大型故に頑丈さに優れたスターライトはこうした防御も多少は可能である。

「っああ！！」

だが、防いだ一撃は想像以上のダメージを彼女に与えた。ライフル

を持つ両手に襲い掛かる激しい衝撃。ライフルという楯など無いかのように、刀をライフルに打ち据えた衝撃が彼女の腕で暴れる。まるでライフルを突き抜けて衝撃が腕の中爆発したようだ。思わず手の力が抜ける。

それを見逃す程、目の前の敵は優しく無かった。

白式が刀を打ち付けた衝撃でわずかに後退するとそのまま一回転。踵落としの要領で脚部ブレードをライフルにたたき付けた。

「スターライトッ!？」

セシリアの手を離れ、ライフルが落ちる。思わず一夏から意識を逸らす。すぐに気付いて一夏に意識を向けるが、既に遅かった。

驚愕の表情を浮かべたままのセシリアの胸に、容赦の無い拳が叩き込まれた。

一夏の姿に戦慄を感じていたのはセシリアだけでは無かった。

観客席の少女達もまた、セシリア同様に言い知れぬ恐怖を一夏の姿から感じていた。

一体何が起きた？

代表候補生相手に善戦した。よくやったとは思うが、それもミサイルの直撃で終わったと思った。

だが、煙が晴れてみるとそこには姿を変えた白式の姿。

セシリアの驚きの声に彼女らは白式が一次移行をしたことを知る。勝負はこれから。そんな思いがよぎった。だが、このような展開を誰が予想したか。

狂ったように笑い出す一夏。直後、素人とは思えない高機動でセシリアに接近。あっという間にブルー・ティアーズを全て落とし、あまつさえライフルまでたたき落とし、短時間でセシリアから攻撃手段の悉くを奪った。

そして、攻撃手段を奪われたセシリアは今、ブレードを量子変換で格納し自由になった白式の両手から繰り出される殴打の連撃に晒されていた。

腹に、肩に、腕に、腰に、衝撃が走る。

自分が止むことのない殴打に晒されているのがセシリアには信じられなかった。

ブルー・ティアーズのシールドエネルギーが減っていく。

何とかしなければならぬ。武装はまだある。「近接格闘用装備インターセプター」。だが呼び出せない。未だ使い慣れていないソレを呼び出すには時間と、何より集中がいる。

止む気配を見せない殴打が集中を許さない。

パーツの一つが攻撃に耐え切れず弾け飛んだ。もはやブルー・ティアーズは半ば死に体に近い。

「オオアアアアアアアア！」

狂乱の咆哮と共に拳を繰り出す一夏の顔が見えた。

その目に恐怖した。映るのは狂気の業火。この男はもはやセシリア

を認識さえしていない。ただ潰す対象としか見ていない。

一際強い衝撃が腹を襲った。

ISのシールド、さらにその先にある絶対防御。二重に存在する守りはしかし、決して完璧ではない。

それは頑丈無比な鎧のようなもの。確かに攻撃による直接的な外傷は防げる。だが、その攻撃の衝撃までは時に防ぎきることができないことがある。

そして一夏の拳はその衝撃を通していた。セシリアは預かり知らぬことだが、一夏が放つ拳はただの殴打では無かった。

ISの浮遊などを制御する機能、「PIC」バクシフイナイシャルキャンセラーによる慣性の制御と体のひねりで行ったシフトウエイトによりISの重量を拳に乗せて攻撃力に変換、インパクトの瞬間に加えた技法によりその威力を大幅に増幅された拳。

古武術に言う「鎧通し」で放たれた拳は容赦の無い衝撃をセシリアに加えていた。

そして、状況は最終局面まで動く。

ふと殴打の雨が止んだ。セシリアふらつく意識で何事かを確かめようとした瞬間、その視界が何かに覆われた。

一夏の、白式の右手がセシリアの頭を掴んでいた。そして左手はセシリアの肩を押さえていた。

何を……！そう言おうとしたセシリアの耳に聞こえる爆発音。

再び発動した白式の瞬時加速。セシリアは視界を塞ぐ白式の指の間から空が遠退くのを見た。

瞬間、今日最大の悪寒が背筋を駆け抜ける。

一夏が何をしようとしているのか理解した瞬間、彼女は背中からア

リーナの地面にたたき付けられ、発動した絶対防御がシールドエネルギーを大幅に削る様を見た。

観客席は静まり返っていた。

地面に激突したブルー・ティアーズと白式が巻き起こした土煙が両者の姿を隠している。

そして土煙が晴れる。晴れた先にある光景を目にした瞬間、少女達は一様に息を呑んだ。

そこには、装甲の各所にひびの入ったブルー・ティアーズを、セシリアの首を絞めるように片手で持ち上げる白式の、一夏の姿があった。

首を絞められながら宙に足を浮かべるセシリアの表情は苦悶に満ちていた。

搭乗者が生命の危機に晒されているためか、ブルー・ティアーズのモニターが警告メッセージを表示し、アラームを鳴らす。

だが、それを気にする余裕はセシリアには無かった。

このままではマズイ！！

試合を見ていた観客席の生徒達がそう思った瞬間

「そこまでだ！織斑！」

場内に織斑千冬の声が響いた。

管制室の真耶の表情は強張っていた。

「織斑先生、これは…！」

モニターにはセシリアに乱打を浴びせる一夏の姿が移っている。同時に、一夏があげる咆哮も管制室内に響く。

「一夏…！！！」

弟の名前を呟く千冬の顔を見た真耶は驚愕した。

あの織斑千冬が冷静を欠いている！

それがどれ程のことか。少なからず織斑千冬という人間を知っている彼女はこの状況が信じられなかった。

「ああっ！…！」

再びモニターに目を戻した真耶は見た。セシリアの首を締め上げる一夏の姿を。

これ以上はセシリアの命に関わる。そう判断し、一夏を止めようとするも、あまりの状況に彼女の思考は乱れ、迅速な行動を起こせずにいた。

唐突にモニターのマイクに近づく影があった。それは千冬だった。彼女の表情は既に常のソレに戻っていた。そして

「そこまでだ！織斑！」

一夏に制止の指示を出した。

「これ以上の過剰攻撃は競技規定違反だ！すぐに止める！」

厳格な教師の声で続ける千冬。だが、彼女の胸にはある一つの出来

第十話（後書き）

次回、セシリア戦終了。並びにその後のことをちよこつとやります。
次の話を上げたら、その次に設定を上げようかと思っています。

次回もよろしくお願いします。

第十一話（前書き）

試合後のお話になります。

とりあえずご覧になってください。

第十一話

アリーナに千冬の声が響き渡る。

少なくとも、今アリーナに居る者は誰一人として聞いたことのない、感情が如実に表れている声だった。

「一夏……お前は……」

アリーナのピット、壁に添え付けられたモニターで試合を見ながら、箒は動けずにいた。

彼女の心は狂人とも修羅とも見える幼なじみの姿に縛り付けられていた。

あの日、一夏に一撃の下に惨敗を喫したあの日、箒の心を埋めたのは、怒りでもなければ悔しさでもない。ただの虚しさだった。

剣道を止めたという一夏の言葉が信じられなかった。幼かった日々、毎日のように勝負を挑んで互いに高めあった日々。

一夏がそうであったように、彼女もまたあの日々を大切にしていた。だから剣道を続けた。だからこそ、剣道を、あの日々の象徴を止めたという言葉が信じられなかった。悲しかった。腹立たしかった。

だから勝負を挑んだ。

だが結果は惨敗。試合とはとても呼べないやり方だったが、それが死合いならば紛れも無い敗北だった。

道場を去る幼なじみの背を見て、どうしようもなく虚しく思った。

そして理解した。彼は変わったのだと。
そして、試合までの日々を彼女は努めて普通に過ごすことにした。
怖かったのだ。変わってしまった彼をはっきりと見るのが。

そして試合直前、彼女は意を決して激励の言葉を送った。変わった
一夏に自分ができることはこれくらいしか無いと思ったから。

変わった幼なじみの姿を見たくないと思った。だが、彼女は否応な
しに見てしまった。

突如として豹変した一夏。素人とは思えない動きでセシリアを追い
詰め、執拗な乱打を浴びせる姿。

その姿に箒は一年前を思い出す。

中学の剣道全国大会の決勝戦。栄誉ある舞台を、ただ自分の中に溜
まった鬱屈とした感情をたたき付ける場にした醜い自分を。

剣道を大切にしているからこそ、箒はそんな自分を許せなかった。
そして、目の前のモニターの中、狂気で刃を振るう一夏の姿が過去
の自分と重なった。それがどうしようもなく悲しかった。辛かった。

だからこそ、千冬の言葉がアリーナに響き、一夏がセシリアの首を
締め上げるその手を離れたのを見て、心底安堵した。

side 一夏

今の俺の心境を一言で表すならば、燃え盛る炎だ。

腹の底から強い感情が沸き立ち、頭を灼熱の炎が焼いていく。
俺の思考は、ただ本能のままに眼前の敵を打ち倒すことだけに染ま
っていた。

「……………!!……………!!」

声が聞こえる。一体誰だ？そんな必死に叫ぶなよ。

「……………だ!……………か!!」

聞き覚えがある声。この声は……………千冬姉？何で？

「止めるんだ!!—夏あ!!—!!」

突然思考がクリアになる。

思考の内で燃え盛っていた炎は跡形も無く消え去り、灼熱の感情は
一気に冷めていく。

俺は一体……………？千冬姉？何でそんな辛そうな声を…

『警告 敵IS操縦者、生命危機領域寸前』

ふとモニターに浮かぶ文字が目に入る。

そこに表示されていた事柄に、俺は改めて前方を向く。
視線を向けた先には、俺の手に首を絞められているオルコットの姿
があった。

「ツツ!!」

反射的に手を離した。PICが働いていないのか、オルコットの体

が地面に落ちる。

見ればオルコットが立ち上がる気配はなく、地面に座り込んだまま俺を見上げている。

その表情には恐怖が映っていた。

そしてようやく理解した。つまり俺はまた……！！！！

そして危うくオルコットを殺しかけた！

それどころか、千冬姉にあんな声を出させるような思いをさせた！
また！千冬姉に！あんな思いをさせた！！

モニターにはオルコットのシールドエネルギーが雀の涙くらいしかないことが表示されている。

今、剣を振れば俺は勝てるだろう。

だが、そんな気は起きなかった。もはや戦意の欠片も無いオルコットを見た俺は、ここが引き際だと思った。

「山田先生」

俺はISの通信回線を開き、管制室の山田先生に通信を繋げた。

「織斑君……？」

よく聞くと俺の声に応答する山田先生の声も明るくない。

クソツタレ！俺はあの人にまで千冬姉みたいな思いをさせたのか！

観客席の方を見渡せば、ISのハイパーセンサーに拡大されたクラスメイト達の顔が映る。布仏さんや谷本さん、鷹月さんと言った親しくなった面々、それ以外のクラスメイト達も一様に不安そうな顔をしている。

なんてこったチクショウ！

つくづく自分に腹が立つ。何にせよ、もう引き際なのに変わりは無い。俺は通信先の山田先生に言った。

「すみませんが俺は降ろさせてもらいます。勝負はオルコットの勝ちで構いません」

お、織斑君！？と、俺を呼ぶ声があるが、もはや何も言う気がしない俺は黙って回線を閉じ、オルコットに背を向けてピットに向かった。

その数秒後、俺の棄権とオルコットの勝利を告げるアナウンスがアリーナに響いた。

ピットに戻った俺は待っていた千冬姉からまず最初に拳骨をもらった。けど、いまいち覇気の無い一発だったよ。

拳骨の後に千冬姉からは、搭乗者の生命に関わるような故意の過剰攻撃は競技規定違反になると注意を受けた。

だが、どうも声にも疲れを感じる。見れば千冬姉の顔はどこか辛そうで、一步後ろに立つ山田先生とさらに後ろに立つ幕の顔も浮かない。

ハハッ、本当にどうしようもないなあ、俺は。

千冬姉の注意を受け終わった俺はそのまま更衣室へ向かった。その際に山田先生から手渡されたIS所持に関するやたら分厚い規約リストを渡されて、ただでさえ浮かない俺の心にきつい追撃を貰ったよ。

筈は何も言っただけでなかった。けど、何かしら思うことはあるんだろ。うな。この間のことも含めて話さなきゃならないかもしれない。

そして更衣室に着いた俺は今、更衣室にある複数の長椅子の一つに寝そべっていた。

「ああ、だりい」

寝そべりながら渡された規定書をペラペラとめくりながらぼやく。何だよこの決まりの数。そりゃあISの重要性を考えりゃ分かんでもないけど、多すぎでね？とりあえず必要なことだけピンポイントで覚えとくか。ハア……

「うう、あ、疲れた」

そう簡単には疲れはしない体力は持っていると思ってるけど、今はマジで疲れてる。原因ははっきりしている。

「また暴れちまったんだなあ……」

千冬姉の様子を見れば分かるよ。

つまり俺は、また我を忘れて暴れ尽くしてオルコットの命を奪いかけた。二年前みたいに。いや、二年前の方が悪いか。あの時は……今でもはつきりと思いつける。戦うことが、剣を振るって死力を尽くすことが好きな俺、その俺自身が後々思い返して思わず身震いす

るくらいにどす黒い感情。あれは違う。あれは俺が求めた俺じゃない。

それを後先考えずにぶちまけた結果起きたあの状況。あの瞬間、千冬姉が来なかつたら俺の人間性はどうなっていたやら。少なくとも、今この場には居なかつたかもしれない。

しばらく寝そべったまま天井を見上げる。少しばかり疲労感が薄れ、思考共々いつもの状態に戻っていく。

「……クソッ！」

そして改めて状況を振り返った俺の腹の内に少しばかりの怒りが沸き起こる。

怒りの対象は二つの事柄。

一つは俺自身。

自分ですら嫌に思える感情をぶちまけて、また千冬姉にあんな顔をさせたのみならず、山田先生や箒、クラスのみんなにまで心配をかけた俺。

もう一つ。それはISによる戦闘そのもの。

確かにさっきの試合、俺は無様を晒したよ。いや、ボロ負けしたとかそういうのじゃなくて、もっと人間性とかそういう面で。

ただそれでもあの試合が、今まで経験してきた戦い、剣道の試合や同級生との取っ組み合い、師匠や千冬姉との割とマジが入ってる試合とはまた異なる楽しさがあつたのは事実なんだよ。

我を忘れるまでの瞬間はよく覚えている。そして我を忘れる直前、俺の全身を満たしたあの万能感と高揚感は曰く言い難い。それ程に楽

しかった。

だからこそだろうな。『命の安全が保障されている』ということに多少の憤りを感じる。

別にやたらめったらな殺生を支持するわけじゃない。そんなのはただのキチガイだ。

ただ、ISという強力無比な兵器を操つての戦いというのは、生身で真剣を手にした死合いを行うのに等しい。持論になるけど、俺はそこに命を賭ける価値があると思う。

命を賭けるからこそ、死合う人間はどこまでも研ぎ澄まされる。戦いの中で自分の心がとてつもなく高い領域へ昇るのを感じる。

これは俺の経験談だ。千冬姉や師匠と真剣で死合いをした時、どう足掻いても勝てない絶望的な勝負なのに俺は楽しかった。自分が研ぎ澄まされて、闘争という人間のプリミティブな本能を刺激されるのが心地好かった。

もしかしたらこんなことを感じるのは俺くらいかもしれない。でも、俺はそういう風を感じるからこそ、搭乗者の安全だけは保障されているというISの戦いに物足りなさに似た不満を感じずにはいられないんだ。

うん、俺一人がどうこう言ってもしょうがないことだとも分かっているけどね。

あ、ちなみに俺が絶対に勝てない死合いを千冬姉や師匠とやって何で今生きてるかと言うと、理由は簡単。

圧倒的すぎて生殺与奪を完全に握られてたから。その上で生かされました。もうね、笑うしかないよ。その点に関しては。

その後、着替えて荷物を纏め、更衣室を出た俺を千冬姉が待ち構えていた。

何事かと少し身構えたが、何やら白式、正確には白式の武器である雪片式型に搭載されてる特殊能力、「零落白夜」について話があるらしい。試合の際、俺は無意識で使わなかったみたいだけど、説明を聞いて俺はその無意識に感謝した。

使い方次第で文字通り必殺の一撃になるとか。あの時の俺に使わせたら危なさすぎるだろ。なんかデメリットもでかいらしいけど、それでもだよ。

しかし雪片か…

それってやっぱり千冬姉が現役で使ってたアレだよな。千冬姉を世界の頂点に導いた刀を受け継ぐ。本来なら喜ぶべきことなんだろう。

だが、どういうわけだかそのことは俺の心に一抹の影を落とした。

s i d e o u t

学生寮の一室。自身に充てられた部屋のシャワールームでセシリア・オルコットはシャワーを浴びていた。

熱い湯に晒されるその裸身は同年代の少女達の羨望を浴びて止まないだろう程に整っていた。

だが、その抜群のプロポーションにこの上ない程に合っているその美貌は今、先程の試合を思い出したことによる恐怖に彩られていた。

室内の液晶モニターに表示されているシャワーの温度は最高に近い

ものだった。普通ならば長くは浴びていられない高温のシャワーを
しかし、セシリアは浴びつつけていた。
そうでもしなければ体の震えが止まる気がしなかったからだ。

試合後のチェックによるとブルー・ティアーズの損傷率はレベルB。
これは再使用可能なレベルの損傷としてはギリギリの領域であり、
もし損傷がもう少し酷ければISを休ませるために数日は起動が不
可能な状態になっていた程だ。

ブルー・ティアーズは現在、修理のために学園の整備部門に預けら
れている。そのため、今の彼女は自身の特徴の一つである待機状態
のブルー・ティアーズ、青いイヤークラスを着けていなかった。

「織斑…一夏…」

呟くのはパートナーたるISを痛め付けた敵の名前。だが、呟くそ
の声に怒りや憎悪と言った激情は感じられない。
ただ静かに呟いていた。

（あのような男性が、いるのですね……）

彼女にとって男とは「情けないもの」という認識だった。

その認識のルーツは彼女の育った家庭環境にあった。

名家の跡取りとして生まれ、若いながらも幾つもの会社を経営、敏
腕を奮い成功を収めた母。そんな母に婿入りし、引け目からかいつ
もオドオドしていた父。そんな不安定な二人の関係はISの登場で
加速。

ますます卑屈になった父を母は鬱陶しそうにしていた。

二人の様子を身近で見っていた彼女は、男は情けないと思うようになった。

そして、二人は突然の事故で共に帰らぬ人になった。越境鉄道の横転事故。100人以上の死者を出した大惨事は、当初囁かれていた陰謀説を覆すに十分だった。

あまりにもあっけなく居なくなってしまった二人。残された両親の莫大な遺産。

それを求めて群がる手から遺産を守るために彼女は努力を重ね、I S操縦者となり、そして代表候補生にまで抜擢され今に至る。

彼女は今まで多大な努力を重ね、その努力に見合う自信と誇りを持つていた。

だからクラス代表決定の時、ただ男だからというだけで推挙された織斑一夏が許せなかった。

そして提案した決闘。衆目の前で素人に身の程を分からせようとした。

だが、結果は違った。

素人にしては粘ったと思ったら、突如の一次移行。直後の猛攻。

あっという間に自分は追い詰められた。

あの瞬間、ブルー・ティアーズごと地面に叩き付けられた瞬間のことを思い出す。

絶対防御の発動で一気に残量を減らすシールドエネルギー。かろうじて残った量はもはや相手の一撃で尽きる程度の量だった。

そして己が首に伸びる魔手。少しずつ首を締め上げられる感覚に彼女はただ恐怖した。

あの時、彼女はブルー・ティアーズの装甲もろとも戦意を碎かれて

いた。彼女はただ、恐怖が終わることを願っていた。それは紛れも無い彼女の敗北だった。

離される手、地に落ちる自分。立つ気力は無かった。心が負けた彼女はもはや抗う心が無かった。

自身を見下ろす目。何故か織斑一夏の目は呆然としたものだった。そのまま止めを刺さずに去り、場内アナウンスで告げられる相手の棄権と自身の勝利。

だが、彼女はその勝利を勝利とは思えなかった。

そして今、彼女が抱く思いは一つだった。

(悔しい…！)

既に恐れは消えた。彼女の心にあるのは悔しさのみ。震えを消すための熱いシャワーは、今は彼女の感情を強める役割をしていた。

(認めませんわ…！あのような終わり方、あれが勝利など…！)

認めるしかなかった。先の勝負、明らかに彼女の敗北だった。結果として与えられた勝利はただの偶然にすぎない。

(悔しい…！織斑一夏…！次は…！)

認めよう。織斑一夏は強い。

その瞬間、彼女の心の中でカチリと何かが切り替わる音が聞こえた気がした。

その時の彼女は、男が情けないとは思っていなかった。強い男もいる。そう思うほどに織斑一夏という男は強烈だった。

そしてようやく、彼女はシャワーの温度の高さに気付く。ぬるめに設定すると、シャワーの温度は低下。熱くなった体を程よく冷ましていく。

それと同時に彼女の思考も冷静に、本来の聡明さを取り戻していく。

また戦いたい。そしてその時に改めて

(勝利をわたくしのものに…！)

だが、先の試合の焼き直しにはしたくない。

互いに対当な相手として戦いたい。どうする。

(認めるべきですわね。わたくしの過ちを)

男だからと見くびっていた。それがあの結果を招いた要因の一つであることは明白。ならば伝えなければならぬ。考えを改めたことを。

そして再戦を申し込むのだ。一人の対当なIS操縦者として。

(もしかしたら、この出会いは僥倖だったかもしれないわね)

自分が対当と認められる同年代の存在。互いに高めあえる思わぬ好敵手の出現。

それはいずれは国を背負う代表にならんと、自らの向上を求める彼女にとっては何都合。

新たに一転した気持ちを胸にセシリアはシャワールームを出る。

数多の雫に濡れたその体の内、その心には、この程度の水気では消えることのない炎が、再戦を望む強い意志が燃え盛っていた。

第十一話（後書き）

セシリアをデレさせなかった！！期待していた方、サーセン！！
でも良いライバルから始まるフラグもアリだと作者は思ってる！！

一夏について

一夏は戦闘好きですが、決して壊れICHIIKAになった自分を快く思っているわけではありません。一応、常識人なので。
あれですよ、00でハレルヤの存在に悩むアレルヤな感じですよ。微妙に違うか？とりあえずそんな感じだと設定しています。

次の更新あたりで設定を載せようかと思っています。

設定（ネタバレ注意）（前書き）

というわけで一夏と白式の設定です。

数時間前に最新話を投稿したので、未読の方は先にそちらをどうぞ。

設定（ネタバレ注意）

織斑 一夏

本作の主人公。

本作では性格が原作とは異なっており、原作と比較すると原作よりもやや理知的になっている。

簡潔に言い表すと、原作の一夏から間抜けな部分を抜いて、そこに戦闘マニア分をプラスした感じ。

身体能力は同年代男子はおろか、大人と比べてもレベルが高い。特に体力と頑丈さが優れている。

幼少期より千冬の薦めで、剣道を箒の実家の道場で学んだ。

しかし、束がISを発表したことに関係する要人保護プログラムの関係で箒が引越した際、剣道を離れる。

しかし、一夏本人は剣を降ることが気に入っており、その様子を見た千冬がかろうじて連絡を取ることのできる箒の父親の助力を得て、一夏をとある古流剣術の師の下に弟子入りさせる。

この際、一夏は剣士でもなく武人でもなく、戦闘者としての才覚を開花させ、実力を上げる。

習った剣術は一通り修めており、試合ではなく実践形式なら千冬にも食い下がる程になっている。ただし、食い下がるだけで勝率さほぼ0に近い。

動体視力と反射速度に秀でており、それを利用したカウンターを好むが、普通に切り掛かる分にもけっこう強い。

ISでの戦闘に関しては、当初は慣れていなかったが、次第に慣れ

ることで生来持っていた戦闘センスがIS戦でも開花。近接の切り合いならば国家代表候補生の上位クラスの実力をつける。

ではここで改めて本作の一夏についてまとめます。

- ・原作より理知的
- ・戦闘マニア分プラス
- ・実戦的古流剣術を得意とする
- ・IS戦闘は近接ならばかなりのもの。素人じゃねえよコイツとみんな言う

ORIMURA ICHIKA

闇一夏？

極端に感情が高ぶった際や、極限状況に置かれた時に時々発動。つまりは壊れ一夏。破壊衝動の固まりみたいな状態。

この状態になると一夏の全ポテンシャルが上がるが、我を完全に忘れてる。元の状態に戻るには、気の済むまで暴れるか、千冬に抑えられるかのどちらか。

この状態から元に戻ると非常に体力を消費している。ぶっちゃけるとトランザムした後には機能ダウンするようなもの。

一夏本人はこの状態を嫌っている。これは過去のある出来事をきっかけに、千冬に辛い思いをさせたことと、一夏本人の戦いに対する考え方故。

一夏は戦いマニアだが、ある程度の信念のようなもの、互いに死力を尽くして楽しむことが重要という思いがあり、このため壊れ状態の理性を失った状態は嫌っている。

同時に、克服すべき精神面の課題とも捉えている。

過去の事件

本編で微妙に触れられる二年前の出来事。

以下ネタバレあり

第二回モンド・グロツソ決勝戦当日におきた一夏誘拐事件のこと。
突然誘拐。監禁される。

しかし、監禁場所にてICHIIKAが発動。
縄抜けなどを駆使して拘束から脱出。その場にいた犯人の黒服を殺害していく。

千冬が駆け付けた際、まさに最後の一人に止めを刺す瞬間であった。
その場で千冬が一夏を取り押さえる。この時、殺害を躊躇無く行った一夏の暴走に千冬は戦慄。

一夏の抱える危うさに気付く。
ちなみに一夏が行った殺人は千冬に情報提供をしたドイツ軍が揉み消している。

この事件の後、一夏は自身の内のICHIIKAに気付き、同時に千冬に辛い思いをさせたことを後悔する。

IS設定

白式びやくしき

原作通りに一夏の専用機になる。

ただし姿は原作と異なり、全体的にスリムな装甲になっている。両腕両脚、胸部を覆う装甲にウィングスラスタで構成される。

スラスタは翼型の大型が二つ。一つのスラスタに大型噴射口と小型噴射口を一つずつ備える。

タイプは典型的な近接高軌道型。原作白式より軌道性が高い。

武装

雪片式型

原作のまんまです。

脚部装甲ブレード

白式の基本装備。拡張領域を使用しない。装備それ自体が白式の一部として扱われているため。普段は脚部装甲の側面に格納されているが、使用時は長さ1m程の両刃ブレードが展開される。

イメージはアルケーガンダムの足のサーベル。

両腕装甲ブレード

両腕の装甲に付いているブレード状の突起。武装として十分な能力があるので、相手の近接武装に対する盾代わりに使われる。

設定は概ねこんな感じです。

疑問がある際は感想にてどうぞ。可能な限りお答え致します。

第十二話（前書き）

等のお話やセシリアとの会話です。

総合PVが10万を超えました。皆様、拙作をお読みくださって本当にありがとうございます！

第十二話

side 一夏

「一夏、話がある」

寮の自室に戻って早々、箒はそう切り出してきた。話の内容は想像が着く。大方、さっきの試合のことだろう。後はこの間の道場のことか。

部屋に戻るまでの間、クラスメイトの何人かと擦れ違ったが、みんな俺を心配そうな目で見るだけで話し掛けて来ることは無かった。

無理も無い。あんな姿を晒した直後なんだ。本来なら嫌悪を向けられても文句は言えない。

だから何も言わずにいてくれたのは正直ありがたかった。疲れてあまり会話をする気にならないのもあるが。

ああでも、布仏さんと谷本さんだけは声をかけてきたな。何を言われるかと思ったら、普通に俺の心配をしてくれたよ。

どうもやたら疲れた顔を俺はしていたらしいけど、二人の気遣いの言葉がとても嬉しかった。

そして今、俺は部屋のベッドに腰掛けながら箒と向き合っている。ぶっちゃけると今すぐにも寝たいのだが、そういうわけにもいかない。この間の道場の件も含めて、キツチリと話す必要がある。

「で、話ってなんだ？」

それなりに腹をくくったのと、後は疲れてあまり興奮する気にならないからか、箒に問い掛ける声は俺自身が意外に思っくらしい穏やかなものだった。

「そ、その…だな…」

上手く言葉を纏められないのか、それとも話すだろう話題が話題故に話しにくいのか、なかなか箒は言い出さない。

昔に比べると俺は随分変わったと思うけど、箒も結構変わったな。

昔はこんな風に話すのを躊躇ったりはしなかったのに。

そんなことを考えたら自然に頬が緩んだ。そして俺は言った。

「話はあれだろ？この間の道場のこと。そしてさっきの試合のこと」

そういうと、箒はハツとした表情で俺を見る。やっぱりか。だが驚きはしないさ。予想はしてたし、俺も話すつもりだった。

「まあ色々聞きたいだろうけど、まずは俺に話させてくれないか？質問はその後だ」

そう言うと箒は黙って頷いた。

そして俺はこの間の道場のことから話し始めた。

「この間の道場のことは悪かった。ただな、あの時はああやってでもはつきりさせとく必要があると思っただよ。俺が剣道を辞めたってことを」

そう言うと篤の顔が少し暗くなる。だが、俺はあえて話を続けることにした。

「そもそもな。俺が剣道を辞めた理由の一つは篤、お前なんだぜ？」

そう言うと篤は不安そうな顔をする。自分が何かしたのでは。そう思っているのだろう。だから俺は安心させるように少し笑みを浮かべながら言った。

「なんてことはない。お前が引越したからな。道場もなくなったし。他の道場に行っても、お前が居なきゃ張り合いがないからさ」

その言葉に篤は、えっ？と言った。

「そもそもだ。俺が剣道やってたのは剣が好きっていうのもあるけど、お前がやってたからっていうのが大きいんだぜ。お前っていうライバルが居たから俺は剣道を続けたんだ。そのライバルが引越した。しかも行き先が全然分らないから会うのも無理。そう考えたら、な。他の道場に行くにしても、どいつも又ルくてやる気が起きない。だから辞めたんだよ」

続けるぞ、と前置きしてから俺は言う。

「さて、剣道を辞めはしたけどな。基本的に剣が好きだった俺は何とかしたいと思ったんだ。そしたらさ。千冬姉がお前の親父さんに何とか渡りをつけてな。親父さんに、ある古流剣術の師範を紹介して貰ったんだ。お前が引越したのが小五だったから、小六の春くらいかな。で、俺はその人に弟子入り。夏休みとかの長い休みに住み込みで修業して、それ以外の時は通信教育みたいな感じだったな」

ふと、住み込み修業から帰った後のことを思い出す。家は凄いいことになっていた。基本その手の生活スキルがずぼらな千冬姉に一人暮らしをさせたんだ。当時、あまり家に帰って来なかったとは言え、なかなか凄いい有様になっていた。

「道場でお前を倒した時の突きがあったろ？あれは俺が習った技の一つだよ。なんかそういう実戦派な剣術が肌に合ってたみたいでさ。夢中になって修業してたら、一通り覚えちゃまった」

いやホント楽しかった。自分が強くなるのをはつきり感じたし、何より師匠との実戦形式の稽古が楽しすぎた。

飯よりそっちが楽しみだつて言ったら、師匠は本気で呆れた目を向けてきたよ。実際楽しかったんだぜ？

「ただ筭、それでもこの間はゴメン。やっぱり俺が大人気なかった。もっとしっかり説明すればと後悔したよ」

紛れも無い本心。もっと穏便に解決できたらどれだけ良かったか。いらん気苦労をしないで済んだのに。

「一夏。一つ聞かせて欲しい」

そう、筭が口を開いた。

「お前の事情は分かった。それに、お前が剣は捨てていないと聞けたのも良かった。だが！剣道はどうなんだ？あれだけ打ち込んでいた剣道は、お前の中ではどうなんだ？」

そう聞いてくる箒の目には必死の色がある。
そんな顔をするな。剣道が俺にとって何かだと？答えなんざ決まり
きってる。

「大事なものだよ。確かに今じゃ剣道はやっていないよ。でも、剣
道は、お前と一緒に剣道をやったあの時は、俺にとっては大事な
思い出だ。蔑ろになんてするわけがない」

そう言うつと箒の顔に僅かな安堵が浮かんだ。

そしてただ一言、そうかただけ呟いた。

その表情はとても穏やかそうだったよ。

どうやら道場の一件は終わったと見ていいらしい。だが、まだ話は
残っている。それは試合の時の俺の暴走。

大事なことだと分かっちゃいるけどなあ。あまり詳しくは話したく
ないんだよ。俺自身あの状態の俺は好きじゃないし。

けど、そうも言ってもらえない。話すと決めた以上、話さなきゃなら
ん。

だから俺は意を決して話した。

「箒、もう一つの話だ。試合の時の俺。話すぞ」

そう言うつと先程までの穏やかな表情は一変。箒の顔は真剣なものに
なる。

「話すつて言つても、さっきの剣道云々みたいに複雑な事情は絡ま
ない。あの試合の俺の暴走はな、単なる俺の欠点なんだよ」

「欠点？」

「そう。なんてことはない。お前が引越して、剣術を習いはじめてから分かったんだけどさ。どうも俺は頭に血が昇りすぎたり、興奮が高まりすぎたりすると我を忘れて暴れちまうらしい。そう滅多にはならないんだけどな。なったらかなりやらかす。今回の試合もそう。白式が一次移行した時に物凄い興奮してさ。後はあの様」

みっともないだろ？そう筈に言う。

「お前は、どう思うんだ。その、我を忘れる自分を」

そう筈が聞いてくる。

どう思うか、か。実に簡単な質問だ。答えは決まりきってる。

「嫌に決まってるだろ。周りに迷惑をかけるしな。俺自身、楽しむべき戦いで我を忘れて暴れるっていうのが気に食わない。何よりだ。昔それで千冬姉にちっと迷惑かけちまってな。それが一番堪えたな」

話は終わりだと言って俺は締め括る。

筈は何も言わない。黙ったままだ。本当にこいつも変わったな。昔はこんな風に黙りこくる奴じゃ無かった。

ふと、俺は筈と離れていた歳月を思い出す。

六年。

ああそうか。なんてことはない。俺も筈も、互いの記憶にある昔の姿から変わったんだ。

筈の中の六年前の俺がもう居ないように、俺の中の六年前の筈も居ない。

そのことが導く答えは一つ。俺達はもう昔のような付き合い方はできない。

「なあ筭」

だから俺は自然と言葉を発していた。

筭は俺を見る。

「俺、気付いたよ。俺達は変わったんだ。俺もお前も。だからきつと、どう足掻いても昔の関係には戻れない。俺達の間柄は一度終わったんだよ」

筭の顔が悲しげに歪む。

そんな顔をするなよ。別に悪いことじゃないんだ。

「だからさ、筭」

俺は一つの思いを胸に言った。

「今ここから、新しい間柄を築こうぜ。六年前の織斑一夏と篠ノ之筭じゃない、今の織斑一夏と篠ノ之筭の間柄を」

そう言っただけ俺は筭に手を差し出した。

その手を筭は疑問を浮かべて見る。

はっきり言わなきゃ分からねえか。なら言っただけやろつ。

「改めて、俺の友人になってくれないか？篠ノ之筭」

そう言っただけ俺は筭の顔を見る。

言われたことを筭が理解するのに少しの時間があった。

そして…

「ああ。よろしく頼む！」

これぞ篠ノ之箒と呼べる力強い笑顔と共に、箒は俺の手を固く握り返し、俺達は力強い握手を交わした。

side out

一夏と箒が新たな友誼を結んだ翌日の朝、一夏は教室へと歩を進めていた。あんな決闘があつた翌日でも授業はしっかりと行われるのだ。

トレーニングのために箒よりも早く起きる一夏だが、教室へ向かうのは箒よりも遅い。

箒は剣道部の朝練があるため一夏よりも早くに寮を出るのだ。

寮の食堂で朝食を取っていた時もそうだが、教室へ向かうために廊下を歩く今も、あちこちで女子が一夏を見ながらコソコソと話している。

(どうも昨日のが噂になつてゐるみたいだな)

ハア、と思わずため息をつく。

昨日の決闘、観戦していたのは一組の生徒のみだったが、さすがは女子と言つべきか。あつという間に噂が広まつたらしい。悪質な伝染病もビツクリの速さだ。

意外なことに昨日の試合を観戦していた一組の生徒の多くは朝食の時などに割と普通に話し掛けてきた。

この時一夏は知らなかったが、前日に寮で一夏に話し掛けてきた一夏の布仏本音と谷本癒子が気を使った結果である。

心身ともに参った様子の一夏を見た二人が一組の女子に、極力一夏と普通に接して余計な負担をかけないようにと伝えたのだ。

後日この事を知った一夏は二人の心遣いに深く感謝すると共に、申し訳なさから二人に平身低頭で謝り倒すのだが、それはまた別の話である。

そして教室の前までやってきた一夏は予想外の人物と出くわす。それは

「オルコット……」

「……」

真剣な眼差しで一夏を見つめるセシリア・オルコットだった。

二人の周囲に居た一組の生徒達に緊張が走る。

昨日の今日だ。何が起こるか分かったものではない。誰もが固唾を飲んで事態の推移を見守っていた。

「よう……」

「じぎげんよう……」

互いに声が固い。その固さに影響されたかのように二人の周囲は静まり返っている。

そして……

「すまなかった！」「申し訳ありませんでしたわ」

「……え？」

同時に頭を下げ、謝罪の言葉を言う。そして同時に頭を上げて疑問の声を漏らす。見事なまでのシンクロだった。見守っていた生徒達も頭の上に疑問符を浮かべている。

「え〜と、その〜…何故？」

先に再起動を果たしたのは一夏。セシリアに問い掛ける。

「いえ、その…あなたも何故」

セシリアも逆に問う。問い掛け合戦。このままでは堂々巡りになる。

そう判断した一夏は先に自分から話すことにした。

「あ〜それじゃ俺から言うよ。まあ…なんだ、その…昨日は本当にすまなかった。我を忘れてたっていうのもあるけど、それでもやりすぎた。本当にすまなかった！」

そう言って再び一夏は頭を下げた。

「顔を上げて下さい。わたくしもあなたに謝らなければなりません」

その言葉に顔を上げる一夏。だがその表情には疑問が浮かんでいた。

すなわち、何故彼女が謝るのだと。だが、セシリアは構わずに続けた。

「昨日の件に関してはわたくしにも非があります。あなたを完全に見くびっていた。あの結果は、いわばそのツケを払わされたようなものですわ。ですから、あなたを見くびったこと。その謝罪をさせて頂きます」

そうキツパリと言い放った。

言って、一夏を見つめる眼差しは真剣そのもの。

その瞳には彼女が本来持っているだろう聡明さの輝きが満ちていた。

その瞳を見た瞬間、一夏は理解した。

これこそがセシリア・オルコット。彼女の本来の姿なのだ。

(なら、これ以上の詫びは不要だな)

彼女の目は、彼女が一夏を認めていることを雄弁に語っていた。ならば、これ以上自分が詫びを入れることは彼女への失礼に他ならない。

「分かった。その謝罪を受け入れる。これで、おあいこかね」

「ええ。そうなりますわ」

これを以って両者の確執は潰えた。だが、セシリアにはまだ言うべきことがあった。それこそが本題である。

「織斑一夏。わたくしはあなたに言わねばならないことがあります」

その言葉に一夏は改めてセシリアの顔を見る。互いの顔を見る表情はとても真剣なものだ。

「昨日の決闘、あのような結末はわたくしは認めません。あのような形の勝利など、わたくしは望んではいなかった。あの試合は紛れも無くあなたが勝っていた」

その言葉に周囲がどよめく。あのセシリア・オルコットが敗北を認めたとに等しい言葉を言う。

数日だが彼女のクラスメイトとなり、彼女の気質をある程度理解した生徒達にはその言葉が信じられなかった。

「だが、俺もあの戦いに勝ったとは思っていない。勝てば官軍の潰し合いならまだしも、ああいった試合の場であのような勝ち方は俺も認めたくない」

「でしょうね」

だから、とセシリアは前置きして

「織斑一夏。わたくしはあなたを一人の対等なIS操縦者と認め、再戦を申し込めます！」

宣言した。

その時の一夏の表情は鳩が豆鉄砲を喰らったようなものだったと、生徒の一人は言った。

「再戦、か…。再戦ね…」

呟く一夏。だが、その表情はいつの間にか、以前教室で見せた笑みに変わっていた。

「望むところだ」

そして受諾した。

「だが、今すぐには無理だ」

俺はまだ素人だからな、と一夏は言う。

「セシリア・オルコット。再戦はしばらくお預けだ。俺は今しばらく、IS操縦者として自分を鍛えたい。だからさ、俺の友人になつてはくれないか？互いを高め合う好敵手ライバルとして」

そう言つて、筈にそうしたように、セシリアに手を差し出す。

その手をセシリアは迷うことなく握る。そして言った。

「喜んでお誘いを受けますわ。一夏さん」

輝くような笑顔で言った。

「こちらこそよろしく。セシリア」

そして一夏は、燃えるような笑みを浮かべて答えた。

ここに一つの友情、互いに切磋琢磨する好敵手達が生まれた。

「ふふん、ここがIS学園ねえ」

学園入口前。そこには一人の少女が居た。ツインテールにした髪の毛。肌の色からアジア人であることは明白だが、その僅かに釣り上がった目尻が、彼女が日本人ではなく中国人であるということを示している。

「ここに一夏が居るのね。ふふ、やっと日本に来れたと思ったたら、ここに居るなんて。探す手間が省けたわ！待ってなさいよ、一夏く！」

そう言って彼女は、中国代表候補生ファン・リンミン鳳鈴音は編入手続きのために学園の受付を目指した。

「…受付ってどこよ？」

少しばかり前途が危ぶまれる。

第十二話（後書き）

さて、今回の話を読んで、「一夏のやつ、どう考えても箒を口説いてるだろ」と思った方、挙手！！

ハッイノ

すみません、書いていて作者はそう思いました。

セシリアは落ちませんでした。ライバルになりました。そして鈴の登場が次回か？気長に待っていてください。

第十三話（前書き）

すみません、鈴の登場は次回に持ち越しになりました。

今回、白式の強化フラグを一つ立てました。

が、しかし！少々都合展開になっちゃったかなと思っております。ただ、作者の力量ではこれが精一杯です・・・

第十三話

side 一夏

「それでは、一組のクラス代表は織斑君に決定しました！」

なん…だと…？

セシリアと友好を深めた後、予鈴がなったので席に座って、山田先生による朝のSHRの時間となったわけだが、山田先生が開始早々そう仰りましたよ。

何この展開？

おかしくないか？昨日の試合は俺の負けという結果に終わったはずだが。

「あの、先生？何故に俺？試合はセシリアの勝ちだったはずですが…」

そう先生に聞くと、答えは意外な所から返ってきた。

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

何？セシリアさん何言ってるの？君、何やっちゃっててくれるの？一瞬カチンと来たが、ここは紳士的対応を心掛けるべきだ。

「え〜と、セシリア？辞退したって、どゆこと？」

「そのままの意味ですわ。昨日の試合は記録の上ではわたくしの勝

利ですが、廊下で言った通りわたくしはあれを勝利とは認めていません。故に、辞退したままですわ」

うん、そこは分かっている。セシリアが昨日の勝ちを認めたくないっていうのは重々承知しているさ。
でもね、問題はそこじゃあないんだよ。

「先生」

そこで改めて俺は教壇の山田先生に向き直る。そして言ったよ。

「どおしてセシリアの辞退が認められるんですか！この間千冬姉は辞退は認めないって言いましたよ！というか、そう来るなら俺も辞退を希望します！」

一気に言い放った次の瞬間

「できるわけないだろう馬鹿者。それと織斑先生だ。何度も言わせるなよ」

出席簿アタックとおぼしき強烈な衝撃が脳に響いた。痛みには耐えながら後ろを見ると、そこには我がクラスの担任、織斑千冬の姿が。また職員会議だったのか…

「な、何故俺だけ…」

「お前が辞退すると候補者が居なくなる。それに、既にクラス全体がお前を代表と認めている。無駄な抵抗は諦めて大人しく受け入れる」

そうバツサリと俺の反論を切り捨てた上で、逆らいのようなない厳命を下さったよ。

全く、ありがたすぎて涙が出て来る。

そして痛みに言葉無く悶える俺を捨て置いて、教壇に上がった千冬姉が手早くSHRを終わらせる。これにより俺は見事に反論の機会を潰され、クラス代表をすることになった。

うん、痛み以外のナニカで涙腺が緩んできたよ。

さて、少しばかり時間を飛ばす。

あの後俺は授業をこなし、今はクラス全員と共にISスーツに着替えた状態でグラウンドに整列していた。

そりゃね、問答無用でクラス代表にさせられたのは色々思うことあるけど、だからって授業を疎かにはできないわけで。

現在俺の視線はジャージ姿でクラス全員の前に立つ千冬姉に向けられている。それ以外は極力視界に入れないようにしていた。

何故かって？理由は簡単さ。

刺激が強いんだよ！！

ISスーツはぶつちやけ水着のような形状だ。無論、機能性は水着の比じゃないけど。

想像してみたい。水着のようなISスーツを着た沢山の女子高生。成る程。確かに華やかな光景だ。

だが、その中に男一人叩き込まれるというのはキツイ。もうね、あの意味男の性というか。とにかく色々大変なわけだ。

しかし、泣き言を言っても状況が変わるわけがない。変わるべきは俺なのだ。つまりはあれ。慣れなきゃならないということ。ハア・

「それではこれより、ISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット。試しに飛んでみる」

いきなりご指名がかかったよ。まあ理屈は分かる。こういう実技的授業はだいたい誰かが見本を最初にやる。

今回の場合、専用機持ちであり、他のクラスメイトよりも経験のある俺とセシリアが選ばれたというわけだ。

：セシリアは分かるけどさ、俺の経験なんざほとんど無いに等しいぜ？

とは言え、これは口に出さない。ついでに黙って前に出る。なんか言ったり拒否したところで、結果は見えてる。

千冬姉が今手に持っている竹刀で叩かれるのがオチだ。それは御免被りたい。

そしてクラスメイトの列から少し離れた位置に、俺とセシリアは並んで立った。

「では、ISを起動しろ」

千冬姉の指示が出る。

そして俺は白式を呼び出す。イメージは既に固まっている。人型に凝縮された白銀と一体になるイメージ。

次の瞬間には、俺の体は白式の輝くような白い装甲に覆われていた。

うん、中々上手くいった。

「遅い！もつと早くしろ。熟練の乗り手はコンマ五秒で展開するぞ！」

しかし千冬姉からは叱咤が飛ぶ。あの、俺まだ素人なんだけど…無茶言わないでくれ…

そして既に展開し終えていたセシリアと俺に千冬姉が飛ぶように指示をだす。

「レディーファーストだ。先に行きなよ」

「ではそうさせて頂きますわ」

俺が促すとセシリアは軽く笑ってその身を宙に舞い踊らせた。次は俺だな。

「さて。織斑一夏、白式、飛ぶぞ！」

その言葉と共に俺は白式と共に空に舞い上がる。そのまま千冬姉の指示に従い、少しの間セシリアと並行して空を飛んだ。

「……………」

「？？どうかなさいました？」

無言でいる俺にセシリアが声をかける。

「いや、意外に体が覚えてるもんだなと思ってさ」

そう。不思議なことに、俺はどういう風にすれば上手く飛べるかを分かっていった。それも頭ではなく体でだ。
もっとも、理由は予想がつく。

(やっぱり昨日のアレか…)

思い出されるのは昨日の試合。正確に言うと、俺の記憶に無い俺の暴走状態。

あの時、暴走状態にあった俺は素人とは思えない動きでセシリアを追い詰めたらしい。おそらくはその時に飛んだ感覚が残っているのだろう。

ふと、もしこの感覚が無かったらと思う。まあ予想はつく。酷いことになってたな。

実に皮肉な話だ。俺が嫌っている状態の記憶に助けられるとは。とは言え、助かるのは事実。
黙って享受するでしょう。

隣でセシリアが不思議そうな顔をしているが、まあ気にしないでおくか。

その後、千冬姉の指示に従って急降下、そして着地を無難にこなした俺とセシリアは生徒の列に戻り、他の生徒が訓練用ISで練習する様子を見ていた。

再び時は過ぎる。

一日が終わった夜。既に夕食も食べ終わり、後は消灯時間を待つ

みとなつてゐる今、俺は一人寮の屋上に佇んでいた。

ちなみに、どういうわけか今日の夕食では俺のクラス代表を祝う会と銘打たれたパーティーが行われた。

あまりにいきなりすぎて思わず引いてしまったが、まあクラスの皆が俺の代表就任を祝ってくれたのは悪い気はしなかった。

なんかね、これだけ祝ってくれるなら、代表を真面目に頑張ろうって気になったよ。

さて、屋上で佇んでいる俺。服装は下は学園の制服だが、上はISスーツのみである。本来は上下共に学園の制服でやってきたのだが、制服の上は現在屋上の入口近くに置いてある。

既に四月半ば。春真っ盛りとは言え、さすがにこの時間帯になると少々涼しい時期が続いている。

そんな中でISスーツのみの着用というのは少しばかり肌寒いのだが、長く鍛えていたおかげかあまり気にならない。

「白式」

そう静かに呼び掛ける。

瞬間、光の粒子が収束して白式の装甲が俺を包む。だが、現れた装甲は両腕のみ。問題ない。これからやることにはこれだけで十分だ。

「雪片」

今度はそう呟く。それと同時に俺の、白式の手に白式の唯一の武装「雪片式型」が握られる。白式の腕だけを展開した理由は簡単。こ

うしなきや持っていてられないからだ。

「……………」

俺は展開された雪片を静かに見つめる。見る。診る。看る。観る。視る。雪片の全てを理解しようと思続ける。

あの試合の後、白式の装備が雪片であると言われた時に感じた心の陰り。それが何なのかを理解するために、俺はここにいる。

「…まだ分からねえか…」

見ても理解できない。未だ陰りの原因は分からない。次はどうする。簡単だ。見て分からないなら使うまで。

「織斑一夏、舞いまーす」

小声かつ棒読みでそんなことを言いながら、俺は静かに雪片を振る。

一定の規則性を持ち、同時に演舞のように見えるそれは、いわゆる型稽古というやつだ。

剣道剣術問わず、おおよそ剣の流派には必ず存在していると言える型稽古。俺が習った流派にも当然ながら存在し、俺は師匠に弟子入りをした当初、体作りと同時にまず最初にこれを叩き込まれた。

余所の流派じゃどうか知らないが、俺が習った限りにおいてはこの型稽古は準備運動のような意味を持っていた。

剣術の基本的動作を詰め込んだ一連の型を行うことで、その時の調子確かめるのだ。

ちなみに、さすがにIS用武装で型通りの動きをそのまま行うのは

サイズの無理があるので、その辺は即興の応用でなんとかした。

静かに雪片を振り続ける。

そして、振りながら俺は僅かに存在する違和感を感じとった。だが、それが何なのか理解するには違和感が微弱すぎる。

だから俺は繰り返し同じ動作を続けた。

振り続けるにつれて、違和感が存在感を増していく。さながら少しずつ積もっていく塵のようだ。

そして、増していった違和感が突如、俺の頭の中で一つの閃きに変わった。

その閃きが走った瞬間、俺は雪片を振る手を止めていた。

「そういうことな……」

理解した。違和感が何なのかを。理解してみると、それは実に簡単なことだった。こういうのを、コロンブスの卵と言うのだろうか。けどこれは……

「何と言うか、千冬姉に申し訳ねえなあ……」

自嘲するような呟きが思わず漏れた。

違和感の正体、正確に言うと違和感が示した事実は実にシンプル。

雪片は俺の振るべき刀ではない。

達人は得物を選ばない、という言葉がある。

同義の言葉に「弘法筆を選ばず」という諺があるが、つまりはその道に秀でた人間は使う道具を選ばない、なんであれ使いこなしてみせるという意味だ。

別に間違ってるとは思わない。ただ、それでも俺は思っただ。使い手にもっとも相応しい道具は存在すると。

千冬姉を例に挙げる。

千冬姉は雪片一本でISの頂点に立ったわけだが、ぶっちゃけ雪片以外の武器でも同じことができると思う。だが、俺は断言できる。

千冬姉は雪片を振るうのが一番強いと。

故に、この雪片は千冬姉が振るうべき刀ではあるが、俺が振るう刀とは思えないのだ。

これは直感的に感じたことだが、俺には俺にもっとも合う刀が存在すると思う。そしてそれは雪片ではないのだ。

はっきり言って由々しき事態と呼べる。

思い返されるのは朝の出来事。セシリアとの再戦の約束。共に高みを目指すと約束した。そのために自分に合う武器を使うことは最低限の条件だろう。

だからこそ、俺は望む。俺だけの刀を。

そして思い付いた。それを何とかできる人物を。

展開していた白式と雪片を解除し、俺は制服のズボンに入っている携帯を取り出す。

少し操作し、アドレス帳にある一つの番号を見る。

世界の全人口60億の中でも、俺と千冬姉、そして篝の三人しか知らないであろう番号。この番号に電話をかければ全て解決する。

だがそれでいいのかと、俺が俺自身に言う。はっきり言ってこれは他力本願。更に言うと、このIS業界においては反則もいいところな行為。僅かに躊躇う。

知るか。俺は強くなると決めた。
そう念じ、自分自身を振り払う。

箒の顔が頭に浮かんだ。

箒は何て言うだろうか。少なくとも良い顔はしないだろう。箒はあ
の人があまり好きではないから。

だが、俺は箒の顔も思考から振り払う。

それだけ自身の刀への思いが強かった。我ながら身勝手だと思う。

今度は千冬姉の顔が浮かんだ。

電話を躊躇った。千冬姉は何を思って俺に雪片を託したのか。俺に
は分からない。けど、そこには何かしら俺への思いがあるはず。

俺がやるうとしているのは、その思いを切り捨てる行為だ。

思わず胸が苦しくなる。

ただ一人の家族、大事な姉の思いを振り払うことに、この上ない辛
さを感じる。

だが、それでも俺の中にある俺自身の刀を、俺を高めへ誘う存在へ
の思いが消えることは無かった。

二つの思いがせめぎあう。携帯を持つ手が自然に震えた。

ふと、師からの教えの一つが脳裏をよぎる。

『実力の向上を求め続けると、時には非情の選択を強いられること
がある。そこで自らのために非情を選ぶか、或いは情を選ぶかはお
前次第。だが、後悔する選択はするな』

成る程。これが師匠の言った非情の選択。
これはかなり堪えるな。

しばし迷う。迷いつづけ、俺は決心を固めた。

千冬姉の顔をも振り払う。非情と言いたければ言え。俺は決めた。

「悪い、千冬姉、筈」

自然と謝罪の言葉が漏れる。

俺は二人を振り払ってでも高みを目指す。

誓おう。この落とし前は、俺が高みへと至ることをつける。それが俺にできる詫びの入れ方だ。

そして俺は、いつの間にか震えの止まった手で、表示された番号に電話をかける。

思考は驚くくらい冷静だった。

何回かのコールの後、相手が電話に出た。

「お久しぶりです。俺ですよ」

「……………」？

「ええ、俺も、千冬姉も筈も元気でやってますよ。たまには貴方から連絡したどうです？」

「……………」！

「まあ確かに、千冬姉はともかく、筈は貴方があまり好きではない

ようですし。ああそつだ。こんな話をするために貴方に電話をしたわけじゃないんだ」

「……？……！……！」

「ええまあ、何と無く貴方ならもう分かってると思うんですがね。え？参つたな。本当に貴方にはいつも驚く。ガキの頃からそうでしたね。まあいいや。分かっているなら話は早い」

「……。……？……！」

「単刀直入に言いますよ。刀を、俺と白式のために一つ作って頂きたい。できないとは言わせませんよ。できますか。そいつはありがたい。は？白式も貴方が？いや、白式は日本の企業が作ったって聞いて……：嘘情報！？…もう何も言いませんよ。ええ、貴方ならやりかねない」

電話の相手は終始ハイテンションだ。少なくとも俺相手には昔からこうだった。

しかし白式まであの人が絡んではねえ…

「……？……！」

「は？要望はあるかですつて？」

成る程、要望か。正直言うと、あまり無いというのが本音だ。特に何も言わなくても、あの人なら俺が望む物を作り上げるだろう。だが、それでも言わせてもらつたらば

「なら、一つだけお願いします」

俺は全ての思いを込めて言った。

「最強の刀を望みます」
ツルギ

俺は依然屋上に佇んでいる。
既に電話は切れていた。

「やっちまったなあ……」

そう呟く。本当にやっちまった感が大有りだよ。

「とは言え、俺にも譲れないモンはある。やるしかなかったんだよなあ」

呟く声は今一気合いに欠けている。予想以上に疲れた。

「まあ後は待つのみ、か……」

そう呟いてから俺は、制服の上着を着て屋上を後にした。

第十三話（後書き）

本作の一夏は原作に比べてIS操縦に早く慣れていきます。作中でも書きましたが、狂化状態の感覚が残ってるので。

さて、一夏の電話の相手は誰なのか。まあバレバレだとは思いますがww

あえて相手のセリフを「・」で表したのは仕様です。

さて、これで一夏に新装備フラグを立てられた・・・

新装備はクラス対抗戦あたりでお披露目になるかもです。

しかし、今回の話の最後で一夏が「やっちまった」と言っています
が、作者の方がもっとやっちまった感がありますww

第十四話（前書き）

今回の話はいつもより若干分量多めです。

キリのいいところまで書いていたら少し長くなりました。

ちよつと今回、一夏にネタセリフを言わせましたが、まあ大丈夫かなと思つてます。

第十四話

一夏が己の刀を求めた日の翌日。
時は朝のSHR前、席に座る一夏を囲むように数人の生徒が居る。
二日前の試合を、暴走した一夏を目の当たりにした彼女らだが、そこは十代女子のたくましさか。もはや気にしていないという風で一夏と会話をしていた。

彼女らの話題は一つ。近く行われるクラス対抗戦である。

「織斑君、今度のクラス対抗戦頑張ってね！」

「おう！頑張ってくるぜ！」

クラスメイトの一人の激励に一夏は力強く答える。

「何せクラス対抗戦に優勝したら食堂のスイーツ半年フリーパスが貰えるからね！織斑君、責任重大だよ？」

「いや、それは初耳なんだけどな……」

別のクラスメイトの言葉に思わず一夏が苦笑いを浮かべる。

「でも織斑君ならクラス対抗戦もきつと勝てるよ！」

「へえ？その根拠は？」

自身たつぷりに言うクラスメイトに一夏がその根拠を問う。
聞かれた生徒は人差し指を立てながら言った。

「一年の専用機持ちは一組と四組にしか居ないからだよ。やっぱり専用機っていうのは大きなアドバンテージになるからね。織斑君と織斑君のISなら楽勝だよ」

その言葉には一夏の勝利を確信している思いがあった。だが、それに異議を唱える言葉が予想外の方向から飛んできた。

「その情報古いよ。二組も専用機持ちが代表になったの。そう簡単には優勝させないから！」

勝ち気さと自信に溢れた声。一組に居た生徒全員が声の方向を見る。

声の主は一組の入口に立っていた。

肩を露出するようにカスタムされた制服。ツインテールされた明るい色の髪。強気と自信の色を秘めた目尻の上がった目。

一組の誰もが知らない顔。彼女達の顔は「誰？」と言わんばかりになっていた。

だが、その一組においてただ一人、違い反応を示す者が居た。その人物は織斑一夏。彼の表情は驚きに彩られていた。まるで、久しく会わなかった旧知の友人とばったり出会ったかのように。

「鈴…？」

僅かな呟きが漏れる。そして

「お前、鈴か!？」

「そうよ！二組クラス代表、中国代表候補生凰鈴音！今日は宣戦布告に来たってわけ！！」

代表候補生！？二組代表！？と言った驚きの声上がる。

見れば一組の生徒達の顔には一様に緊張が浮かんでいる。

自分の自己紹介が予想以上の効果を発したことに、入口に立つ鈴の顔に笑みが浮かぶ。

だが、その中でただ一人余裕の態度を崩さない者が居る。一夏だった。

「なあにカツコつけてんだよ。似合わないぜ、鈴？」

そう悠然とした態度を崩さずに言う。

「なあ、何てこと言うのよー！！」

一夏の言葉が気に入らなかったのか、鈴が抗議の声を上げる。だが、その抗議は中断せざるを得なくなった。

バン！

教室に鋭く響く音。それはいつの間にか鈴の後ろに来ていた千冬が、鈴の頭頂部に出席簿アタックをかました音だった。

「んな！何すんの…よ…」

文句を言おうと後ろを向いた鈴は自身の背後に居た人物が誰か分かり、その表情を引き攣らせる。

「予鈴はなつたぞ。さつさと教室に戻れ。授業の邪魔だ」

千冬は至って冷静に言う。彼女も一応鈴とは面識があるのだが、そんなことは知らんと言う風だ。

「ち、千冬さん……」

引き攣った顔のまま、鈴が千冬の名を呟く。

「織斑先生だ。さつさと戻れ」

そう言つて千冬は教壇に向かう。

「いい、一夏！後で覚えときなさいよ！！」

そう言つて戻ろうとする鈴だったが、周りの生徒には予想外だったことに、一夏が鈴を呼び止めた。

「なあ鈴、さつき宣戦布告だつて言つたな？」

「い、言つただけど？」

呼び止められた鈴は肯定で返す。

「なら俺はその宣戦布告にこう返すよ」

そう言つてから、一夏はその表情を凄みのある笑みに変える。そして言つた。

「よろしい。ならば戦争だ」

「お前も馬鹿を言つな。鳳、さつさと戻れ」

だが、凄みと共に放たれた言葉は、千冬の出席簿攻撃により黙らされた。

千冬に促され鈴は二組の教室に戻る。

黙らされた一夏は痛みに悶えながら、朝のSHRを過ごすことになった。

千冬が来るまで、一夏と鈴が会話をしている間、二人の様子を真剣な瞳で見ている者がいた。

一人は篠ノ之箒。もう一人はセシリア・オルコット。

（一体誰なのだ、あの女は。一夏の知り合いか？私は知らないぞ！）

自分が知らない一夏と親しい女子の存在に心中穏やかではない箒。

（彼女は一体？一夏さんの知り合いのようですが…。しかし、中国の代表候補生とは。また一人強敵が現れましたわね）

中国代表候補生という実力者の突然の登場にIS搭乗者としての心を刺激されるセシリア。

このクラスで一夏と特に関わりが深いだろう二人の少女は、新たな存在の登場に各々の心を波打たせていた。

午前の授業が終了し、現在は昼休み。俺は昼食を取るために学園の食堂に居た。ちなみに箒とセシリア、さらにはのほほんさん（布仏さんのこと。みんなそう呼んでる）や谷本さんが着いてきた。そして、食堂についた俺は何故か待ち構えていた鈴までも加わってきた。

現在俺は食堂の列に並んで頼んだ料理を待っている。

「あゝつたく。まだ頭がズキズキしやがる」

列に並びながら俺はSHR前、千冬姉にぶつ叩かれた頭を撫でる。過去最大の威力だった。未だに痛みが引かない。

「あんたが馬鹿なこと言うからでしょ。何よ、『よろしい、ならば戦争だ』って」

列で俺の前に並んでいる鈴がそう言うってくる。返す言葉もない。だが、宣戦布告されたからにはああいう風に返すべきという考えが浮かんだのだ。

はて、何故そんなことを考えたのやら…
弾に借りた漫画だったか？

「いやゝ、俺にもさっぱりだな」

とりあえずそう返しとく。

「ふゝん」

そう言いながら鈴は出されたラーメンを受け取る。俺も出されたら

ンチ定食を受け取り、席に着く。

半円状のボックス席には俺と鈴が座っている。

何故か隣のボックスには篤やセシリア、のほほんさんに谷本さんとかが座っているが、こっち来ればいいのに。

そして篤よ。何故そこまでガン見する。

「にしてもニュース見て驚いたわよ。まさかあんたがIS動かしてここに来るなんて」

俺の隣に座る鈴がラーメンを啜りながら言う。

「驚いているのは俺もだ。未だに自分の置かれている状況が信じられない」

「というかさ、なんであんたはISを動かすことになっちゃったのよ?」

鈴がそう聞いてくる。

なんで、か。俺は高校入試の時を思い出す。

「本当に偶然としか言えない状況だったんだよ。受ける予定だった高校と学園の試験会場が一緒でさ。その時に行く部屋を間違えちまつて。んで、行った部屋にあったISに触ってみたらいきなり動いて、後はもう大騒ぎ。そして今に至るわけだ」

もうね、凄かった。

即日、政府の人間とか言う黒服に拉致られて病院で精密検査受けたり、マスコミが喚いてたり…

ただまあ、割と丁重な扱いをされたのは悪くなかった。というか、そうでなかったらキレてた。毎日家にはマスコミが押しかけるしさ。

一番いらついたのがそれだったよ。

「ほんともうねー、毎日雑誌だテレビだが煩くてねー。全員斬り飛ばそうかと思つたよ。ハハハハ」

あの時の不快感はかなりのものだった。本当に殺意が湧いた。もうね、思い出すだけで殺意で笑いが起きちゃうよ。

「そ、そうなんだ……」

ん？鈴よ、何故そこで引くような顔をする。コラ、隣のボックス席一同。君達もだ。そんな顔しない。

「それにしてもだ。それを言うなら鈴、お前も何時代表候補生なんぞになつたんだよ」

そう。鈴が中国に帰るため俺と別れたのが中二の終わり。ちょうど一年くらい前だ。それまでこいつはISとはまるで関わりが無かつたはずだ。

「ああそれね。別になんてことないわよ。向こうに帰ってからやることがなくなつてね。だからIS訓練生になつたの。それでいつの間にか代表候補生になつたわけ」

「ほう……」

事もなげに言う鈴だったが、それはかなり凄いことである。

代表候補生。言葉の意味は実に簡単に説明できるが、それが指し示す事実はなかなか重い。

何せいずれは国の威信を背負う代表となることを期待される存在だ。生半可なやつじゃなれない。

IS搭乗者を志望する人間は、早いやつは小学生あたりから勉強し、訓練生になるといふ。そして長い時間を訓練に費やすわけだが、それでも代表候補生になれる者は少ない。

だが鈴は、一年前にISを学び始めたばかりなのに既に代表候補生になっている。代表候補生には当然ながら、まあ国家代表クラスとまではいかずとも、平均からすれば高い水準の操縦技能と各種専門知識を要求される。

それをこいつは一年で身につけたのだ。こりゃ相当だぞ。何がこいつをそこまで突き動かしたのやら。正直その執念には恐れ入る。

「ちよつといいか、一夏」

唐突に箒が席を立って俺達の前に来る。何故かセシリアも一緒だ。

「箒。どうした」

「いや、彼女が何者なのか教えてもらいたくてな。ずいぶんと親しそうだったが」

「わたくしも少々気になりましたので」

成る程。至極当然の疑問だな。まあ隠すことでもないか。

「こいつは凰鈴音。俺の幼なじみだ」

「幼なじみだと？私は知らんぞ！」

はて？ 箒は知らない？……あ、そっか。よく考えりゃそつだ。

「そりゃ無理ないさ。だって鈴は箒が引越した後に俺達の学校に転校して来たんだから。ちょうど入れ替わりになる感じだったな」

そつ。箒が知らないのも無理のない話だ。

あれだ。箒がファースト幼なじみなら、鈴はセカンド幼なじみと言うところだ。

「そつだったのか。 凰鈴音だったか。 私は篠ノ之箒だ。 よろしく頼む」

「こちらこそよろしく。 あんたが箒なんだ。 一夏が時々話してたわよ」

軽く自己紹介をする二人。 ふむ、ファーストコンタクトに問題は無し、と。 まあ鈴は人当たり良いし、気難し屋の箒でもすぐに親しくなるだろうさ。

「ちよつとよろしくて？」

と、今まで箒の側に控えていたセシリアが鈴に声をかけた。

「凰鈴音さん、でしたか。 確か中国代表候補生と聞いていますが」

「そつだけど、 あんたは？」

「セシリア・オルコット。 イギリスの代表候補生で一夏さんの友人です。 同じ代表候補生同士、 互いを高め合いますしう？」

「へえ、あんたがイギリスの代表候補生ね…。いいわ。こちらこそよろしく、セシリア。ああそうだ。二人とも、あたしのことは鈴でいいわよ。私も二人を箒とセシリアって呼ぶから」

なんかセシリアとも上手くいっただらしい。正直少し警戒したんだぜ。セシリアは、まあ、あれだ。俺の時があるから、一悶着起こすかと思っただが、何もなくてよかった。

「あ、そうだ一夏。あんた一組の代表なんだって？何だったらあたしが訓練見てあげようか？」

「なあ！？」

唐突に鈴が言い出してきた。箒、何故そこでお前がうるたえる。

「これでも代表候補生だしさ。結構教えられるよ」

「ま、待て！何故お前が一夏の訓練に付き合っただい！」

「なんでって、あたしがそうしたいからだけど？」

「ふ、ふざけるな！一夏の訓練には私が付き添う！」

なんか知らんが、箒がやたら興奮している。訓練か…。確かに考えてはいるんだがなあ。とりあえず言うだけ言っとくか。

「あゝ、鈴？申し出はありがたいけど、ゴメン。遠慮しとくわ」

そう言うと鈴が固まる。そこまでか？そして箒。何故そこで顔を輝

かせる。

「な、なんでよ…?」

「いや、訓練の目処はもう立っててさ。だいたいは一人でできるやつだし。それに必要な部分は山田先生に見てもらおうと思って、もう諸々の申請しちまつたし…」

そうなのだ。俺がしたい訓練は二つある。一つはISの基本的空戦機動。一つはIS装備での技の練習。技の方は一人でもどうにかなる。だが、空戦機動の方は誰かに見てもらった方がいいと思って、山田先生に相談したら、先生が見てくれるとのこと。

ならちよūd良いと、アーリーナの使用申請のついでに頼んだのだ。ちなみにその申請をしたのが今朝。

そして昼休み前にセシリアが俺を訓練に誘ったのだが、そのことを言ったら割とあっさり引いてくれた。

やっぱり先生に見てもらうってのは一番だからな。

「そ、そう。なら仕方ないわね」

「それなら致し方ないか」

少し不満気味だったが、箒と鈴も理解して引いてくれたようだ。

「あ、そうだ箒。その訓練の関係で今日は少し遅くなるから、先に部屋に戻っててくれ」

俺は今しがた思い出したことを伝える。だが、その言葉にやたら反応するやつが居た。

「ちょ、ちょっと!?!どういうこと!?!部屋って!一夏、あんたもしかして等と!」

「同室だが、どうかしたか?」

そう言うと鈴はショックを受けたような顔をした。ふむ。

「言っとくけど、これは不可抗力なことだからな。学園の方がそう決めちゃったんだ。俺ら生徒にはどうにもできない」

変な誤解をされても困るので、きっちりと説明しておく。すると鈴は黙り込み、食べ終えたドンブリを持つと席を立った。

「おい、どうした?」

「ううん、なんでもない。あたし、先に戻ってるね」

そう言うと鈴は行ってしまった。
変なやつだ。

side out

時は過ぎて放課後。

アリーナにはISの自主訓練をする生徒の姿が複数見える。
そしてアリーナの一角には白式を装着した一夏と、一夏の副担任である山田真耶の姿があった。

「お疲れ様です、織斑君。基本的な機動は一通り終わりですよ」

「ありがとうございます、先生」

彼らは先程まで空戦機動の訓練を行っていた。

真耶が基本的な機動の種類とやり方を教え、一夏がそれを実践し見てもらうというシンプルな方法だ。

「それにしてもやっぱり織斑君にはセンスがありますね。どの動きもすぐにこなしちゃうんですから」

真耶が一夏を褒める。彼女が一夏に教えた基本的空戦機動、クロス・ゲ三次元リット・ターン躍動旋回やゼロリアクト・ターン無反動旋回などを、一夏はあっという間に吸収していた。とても素人とは思えないセンスに真耶は驚いていた。

「いやいや、なんとかかって感じですよ」

真耶の賛辞に一夏は照れるように答える。

「それじゃあ、私からはここまでですけど、織斑君はどうします?」

既に役目を終えた真耶がアリーナを出ようとするが、一夏に問う。

「そうですね。もうちょっと一人で練習してみますよ」

「分かりました。気をつけてくださいね。それと、夕食には遅れないように」

そう注意を残して、彼女はアリーナを立ち去る。

残った一夏は習った機動の反復を時間ギリギリまで続けた。

機動の練習を終え、寮で夕食を取り部屋に戻った一夏だったが、彼は今、新たな厄介事に直面していた。

部屋には三人の人影。一人は一夏。一人は険しい表情の箒。一人は余裕の表情の鈴。
向かい合う箒と鈴を見ながら、一夏は何故こうなったかを思い出していた。

side 一夏

訓練を終え、夕食も取り終えた俺は部屋に戻った。部屋には既に箒が居たが、なんのことはない。いつもと変わらずに過ごすだけだ。そこへ突然の来客。やってきたのは鈴だ。手にはポストンバッグ。とりあえず何事かを聞いた。そして鈴が話したことを要約するところだ。

一夏とは自分が同じ部屋に住むから、箒は自分と部屋が変われ。

いきなり何だと思ったよ。昔から行動が早いやつだったが、いくらなんでもこれは唐突すぎる。

そして箒がキレた。なんか鈴に物凄い勢いで食ってかかっているが、ちよつとまずくないか？何せ箒だからな。

その予感的中したよ。箒のやつ、竹刀を持ち出しやがった。見事な上段で竹刀を振り抜こうとする。ヤバい!!!
そう思うと咄嗟に手を出していた。

ガシッ！！

振り抜かれた竹刀は宙で止まっていた。理由は簡単。俺が竹刀を掴んで止めたからだよ。これでも目は良いと自負しているからな。見えるんだよ。

「箒、さすがに竹刀はやり過ぎだ」

そう静かに言って箒を制する。箒もそれで冷静になったのか、そのまま竹刀を納めた。

「一夏、なかなかやるわね」

そう鈴が呟く。見れば鈴は右手のIS装甲を部分展開していた。お前も十分すげえよ。あの一瞬で状況判断をして装甲を展開したんだから。さすがは代表候補生か。

ともあれ、二人に釘は刺しておく。

「二人とも、あまり騒ぐなよ。俺ら一年の寮長は千冬姉だぞ？問題起こしたら千冬姉の雷が落ちるぜ？」

そう言うと二人は強く首を縦に振った。さすがは千冬姉。名前だけで影響力大とは。

やれやれ、なんとかなった。

「まあ鈴、あれだ。部屋云々なら千冬姉に言ってくれ。さすがに俺も千冬姉のお膝元で好き勝手はできない」

「みたいね」

俺の言葉に鈴は苦笑気味に答える。分かってくれて何より。

「ねえ一夏、ちょっと話があるんだけど、いいかな？」

唐突に鈴がそう聞いてきた。俺の知る鈴にしては珍しいことに声が少し躊躇いがちだ。

外で話したいと言うので、俺は筭に確認を取ってから、鈴に続いて外へ向かった。

そして俺は今、寮の外で鈴と向き合っている。

既に時間も時間なので周囲には人の気配がまるで存在しない。

「それで、鈴。話って何だよ」

「あ、あのさ…一夏は覚えてる？昔の約束…」

約束？はて？

俺は記憶を掘り起こしていく。そしてある一つの場面に行き当たる。

あれは小学生の時だったか。夕日が差し込んでいる教室。確かあの頃、俺は暇さえあれば師匠から貰った剣術の教本（師匠お手製）を読んでいたな。

そつだ、放課後でも教本を呼んでる俺に鈴が何か言ったな。

「確か鈴が俺に酢豚を食わせてくれるとかだったけ？」

「そう！それ！」

顔を明るくしながら鈴が言う。

「確かアレだろ？鈴が腕上げたら俺に酢豚を奢ってくれとかだっけ？」

言った途端、鈴が固まった。この時俺は自分の迂闊さに気づかなかった。

背筋に悪寒が走った俺は素早く一步後ろに下がる。

ブウン！！

瞬間、先程までの俺が居た位置を何かが通りすぎる。それはISの装甲を展開した鈴の腕だった。

「最ツ低ツ！！女の子との約束を忘れるなんて！！男の風上にも置けない！！馬鹿ツ！！」

怒気を孕んだ声で鈴が怒鳴る。そのまま鈴は背を向けて去っていった。

「一体、何なんだよ……」

そう呟く俺は唐突にあの場面を鮮明に思い出した。いや、正確に言うとその時の鈴の言葉を。

『あ、あのさ。あたしの料理の腕が上がったら、毎日あたしの酢豚、食べてくれる』

そしてその言葉に引かれるように頭に浮かんだのは、ある言葉。

そして、クラス対抗戦の組み合わせが発表された。俺は発表された組み合わせに驚いたよ。だって組み合わせ表にはこうあったのだから。

『第一試合 織斑一夏 対 凰鈴音』

第十四話（後書き）

というわけで次回はvs鈴となります。

原作よりも一夏は白式に慣れているので、ちっとはマシに戦えると思います。

そろそろ予備校が始まりましてね。そうになると更新速度は少し遅くなりそうです。

第十五話（前書き）

V S 鈴です。

無人機介入までやります。

ちょっと一夏が強めですね。

第十五話

side 一夏

後しばらくすれば試合が始まるという中、俺はアリーナのピットでスタンバイをしていたのだが、ここで予想外のこと起きた。それは

「白式の新型武装ですか」

「はい。白式の開発元の倉持技研から今日届いたんです」

そう答えるのは山田先生。

本来彼女はアリーナの官制室にいるのだが、急遽白式の武装が届いたとのことで、俺への説明のためにここに居るのだ。

「しかし新型ねえ。確か白式の拡張領域パススロットは空気が無いはずですが」

そう言いながら俺は目の前に置かれた長方形の小型コンテナを見る。

「なんでも基本装備扱いになるから拡張領域は関係無いとか」

ISの装備は二種類ある。基本装備と後付装備イコライザ。基本装備では武装に心許ないというISのためにあるのが後付装備だ。

そしてこの後付装備をするにはISの拡張領域というものが必要になる。

通常のISなら二つくらいは最低でも付けられる後付装備なのだが、俺の白式はどういうわけか拡張領域の空気がないため、基本装備しか無い。

ちなみに白式の基本装備は雪片と両手足の装甲についてのブレードだ。

「どうします、織斑君？」

そう山田先生が聞いてくる。装備するかということだろう。

実を言うと、俺はコンテナの中身が何なのか知っている。確実に、俺がこの間あの人に頼んだ俺の刀だろう。あの人のことだから一日二日で仕上げるかと思っただが、予想外に時間が掛かったな。

さて、肝心なコイツを使うかどうかだが、今はこう言おう。

「いや、やめておきます。換装する時間も無いでしょう。装備の件はひとまず保留をお願いします」

本音を言うと思いたい。

だが、俺だってそこまで馬鹿じゃあない。ISの装備の換装に時間がかかるのは知っている。

とりあえずこの試合は雪片で挑もう。楽しみはその後だ。

「分かりました。それじゃあ織斑君、頑張ってくださいね！」

そう言って山田先生はピットを出る。官制室に行くのだろう。俺もそろそろ出番だ。

白式を機動して、ピットの射出カタパルトに乗る。

「一夏さん。相手の機体は中国製第三世代型IS『シムロン甲龍』。近距離戦闘型です。わたくしの時とは勝手が違いますよ」

ピットに箒と共に来たセシリアがアドバイスをくれる。わざわざどうも。でもな

「相手がどんなISだろうと関係ねえな。俺がすべきことは決まっている」

そう。俺と白式に出来ることはただ一つ。近付いて斬る。ただそれだけ。それだけすれば良いなら、相手のタイプは関係無い。

俺の言葉にセシリアはただ一言、頑張ってくださいとだけ言う。それだけ言っただけで貰えりゃ十分だ。

「一夏、負けるなよ」

今度は箒が言う。

「当たり前だ。俺も、クラスの期待背負っちゃまってるからな。負けるつもりはねえよ」

言っただけで、自然と顔に笑みが浮かぶ。クラスの期待、背負うとなかなか緊張するが、それが楽しく感じる。

さて、そろそろ行こう。鈴が待っている。あいつとは今複雑な状態だが、戦いの場ではそんなことは関係無い。ただ戦うだけだ。

「織斑一夏、白式、行くぞ！」

その言葉と共にカタパルトが起動。

俺はアリーナの空中に舞い上がり、既に来ていた鈴と対峙した。

side out

一夏と鈴、ISを展開した両者が対峙する。

一夏が纏う白式、鈴が纏う甲龍。二人のISは対照的な見た目と言える。

全身を白に染め上げ、流線的な優美さを持つフォルムの白式。特長的なのは、その非固定浮遊武装アンロックユニットとして存在する二つの高出力大型ウイングスラスタ。

対する甲龍は赤。そしてその装甲は各部に刺状の突起を持ち、実に攻撃的。特長的なのは、白式のスラスタ同様、非固定浮遊武装として両肩にある、刺付き装甲スパイクアーマー。

その二体のISが対峙する様子は、さながら流麗な騎士ナイトと荒くれ者の戦士ウォーリアが向かい合うようである。

「今謝るなら、少し痛め付けるレベルを下げてもいいよ」

唐突に鈴が言う。その表情はやや険しい。だが、対する一夏は口元を穏やかに緩ませながら言う。

「何を、とは聞かないよ。この間のことだろ？ありや完全に俺に非がある。謝りはするけど、手を抜いてもらおう謂れは無いな」

そう、いつもと何ら変わらぬ調子で言う。

「言っとくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドを突破する攻撃力があれば、死なない程度に痛め付けることはできるのよ」

依然、鈴の言葉は固い。それは代表候補生としての一夏への警告だった。

大人しくハンデを貰えという。

実に馬鹿げてると一夏は思った。

そして堪えずにその口からわずかに笑いが漏れた。

「クツ、クク…」

「むう、何がおかしいのよ!」

思わず強い口調で一夏に問う鈴。

「いやなに、そういう攻撃を俺はよく知ってるってだけだよ」

言うまでも無く、零落白夜のことだ。

そして、鈴の問いに答えた一夏の表情はいつの間にか変わっていた。どこか歪んだ笑い。観覧席に居る一組の生徒だけが気付いた。それは先立って一夏がセシリア戦で見せた狂気と同じ匂いを発していたことに。

そして一夏は笑いを納めた。

「あまり俺を見くびるなよ、鈴。加減なんざ考えるな。やるなら死なない程度じゃなくて、いつそ死なすつもりで来い」

一気にその表情に覇気を湛えながら言った。

「正気？」

「正気だ」

思わず問い掛ける鈴に一夏はキツパリと答える。
そんな一夏に鈴は思わず溜息を吐いた。

「はあ、あんたって昔からそうよね。荒事に自分から飛び込んで」

「そういう性分だな」

「なら、遠慮はしないわよ!!」

鈴は両手に青龍刀「双天牙月」を持ち、一夏に向けて突き進む。
二人の勝負は唐突な始まりを迎えた。

自分に向かってくる鈴を冷静に一夏は見つめる。手に握られた青龍刀はまるでバトンのように、その重厚な見た目からは想像できないほど軽やかに回転している。

(あれとまともにぶつかるのは流石にないな)

そう判断し、一夏を間合いに捉えた鈴が双天牙月を振りかぶった瞬間、一夏は白式の機動性を以って一気に鈴の上空へ移動。攻撃をかわす。

「へー、初撃をかわすなんて、やるじゃない」攻撃をかわされても、なんら動じることなく鈴は言う。

「この白式は機動性はなかなかだからな。今度は俺からだ！」

そう言つて一夏は雪片を構え、上空から鈴に切り掛かる。

その構えは抜刀のソレ。白式の持つ驚異的加速力で一気に間合いをつめた一夏は雪片を振るう。

だが、相手である鈴は代表候補生。そして近接型ISの使い手である彼女は一夏の抜刀に反応。

手にした双天牙月の一本で受け止める。だが

「ぐうっ！」

双天牙月を持つ手に襲い掛かる強烈な衝撃。雪片の刀身からは想像できない、まるで鉄塊をたたき付けたような重さがその一撃にはあった。鈴の顔に思わず苦悶が浮かぶ。

雪片を持つ一夏の顔が、してやったりと言わんばかりに口元を歪める。そのまま一夏は雪片を振り抜き、返す刀で振った雪片をもう一本の双天牙月にたたき付けた。

「なめんなあ！！！」

衝撃で体をのけ反らされながらも、双天牙月を横風ぎに振るい反撃。だがそれを、一夏は後方に下がることで回避。同時に鈴も後方に下がって距離を取る。

一夏とある程度の距離を離れた鈴。その表情は険しいままだったが、その険しさは先程までとは違うものだった。

「どうだ鈴、俺の攻撃の威力は？」

そう問い掛ける一夏の顔には不敵な笑みがあつた。

「なかなかやるじゃない。あたしが押し負けるなんて思わなかったわ。一体どんな手品を使ったのよ」

鈴もやや軽い口調で返すが、その表情に先程までの余裕は無い。それほどに、一夏の攻撃の威力は予想外だった。

「なんてことはないさ。ただの小手先の技だよ」

ただ一言、そう答える一夏。

小手先の技。それはあながち間違いではない。

一夏が学んだ剣術の技の一つには鎧通しの技がある。そう。セシリア戦で暴走した一夏が殴打に加えた技法だ。

元々一夏が習った鎧通しは「浸しん」という名前で、一夏が学んだ流派に伝わっていた。本来刀で行うその技を、セシリア戦では殴打で使った一夏だが、この試合では本来の刀での使用をしていた。

そして、一夏が試合までの間、練習していた技の一つがこれだ。

生身ではできる技も、ISで行うとなれば勝手が違う。故に一夏はこの技をISでも使用できるように練習をしたのだ。

結果、未だ完全な成功率には達してはいないが、ある程度ものにすることはできていた。

そしてその効果は絶大。ISの膂力により増幅された衝撃が装甲を貫いて操縦者の体に直接響く威力が、その有用性を物語っていた。

「何が小手先の技よ。素人の小手先の技で押されるなんて、代表候補生の立場が無いじゃない」

そう苦々しげに言う鈴だが、その表情には未だ強い戦闘の意思があった。

「なら見せて貰おうじえねえか。代表候補生の立場とやらをよお！」

「言われなくても!!」

一夏の挑発に鈴が答えると同時に、甲龍の両肩のパーツの装甲が開く。

警戒して一夏が雪片を正眼に構える。

瞬間、衝撃が一夏の左肩を襲った。

「ぬお!？」

そのまま一夏は吹き飛ばされ、地面にたたき付けられそうになるが、何とか空中で姿勢を制御。安定した着地に成功する。

「今のはジャブだから」

厳しい視線で甲龍を、鈴を睨みつける一夏に鈴がニヤリと笑いながら言った。

「今のは一体…!？」

官制室で真耶や千冬と共に居る篤が疑問の声を上げる。
答えたのはセシリアだった。

「『衝撃砲』ですわね。空間にエネルギーをかけて力場を発生させ、砲身と弾丸を形成、発射する装備。中国第三世代型の武装ですわ」

「な、それじゃあ!!」

「ええ、あの攻撃は『見えない』でしょうね。見えるとしてもせいぜいが肩の装甲の発射口くらい。それにあの形状からして、射角の制限も無いと見えます」

冷静に甲龍の武装を観察するセシリアの言葉に、箒は心配そうな顔をしてモニターに映る一夏の姿を見た。

「成る程、そいつが本命かい」

鈴を見上げる状態のまま一夏が言う。

「そう。この衝撃砲『龍咆』が、甲龍の真骨頂！一夏、この見えな
い弾丸をどうする?」

得意げに言う鈴に一夏は再び不敵な笑みで以って言う。

「ならこっちは白式の真骨頂、機動性で勝負してやるよ。言っとく
が、白式は速いぞ?」

返答は龍砲の一撃だった。だが、既に一夏は行動を始めていた。白式のスラスターを吹かし、高速でアリーナを飛び回る。鈴も白式を追いかけ龍砲を浴びせようとするが、白式は縦横無尽に飛び回り、その狙いの悉くを外させる。

「ごんのお！ちょこまかとお！！」

「悪いな！流石にそう何度も喰らってはやらねえよ！例え見えなくても、狙いを付けさせなきゃ、当たんなきゃどうってことはねえ！！」

だが、一夏もただ回避するだけではない。

白式と甲龍、同じ近接格闘型ではあるが、機動性やスピードに関しては白式の方が有利だった。

その差を利用し、白式は幾度か甲龍の死角を取り切り掛かっていた。だが、鈴も伊達に代表候補生であるわけではない。死角からの一夏の攻撃もしっかりと対応し、青龍刀で自身を切り裂こうとする雪片を防いでいた。

縦横無尽に飛び回り攻防を交わす二機のIS。観客である生徒達は、目の当たりにしている想像以上に高度な戦闘に大きく盛り上がった。いた。

side 一夏

俺はひたすらに白式を走らせ鈴の砲撃を回避する。見えないというのは酷く厄介だが、白式の機動性で狙いを付けさせないことで何とかしている。

いや、一応視認は可能なんだよ。ISのハイパーセンサーなら発射時の空間の歪みを感じできる。ただ、それで感知した時にはもう発射済みだったりするからな。結局回避に徹するしかないのだ。

同じ近接型ではあるが、やはり機動性では白式がだいぶ有利らしい。時々死角を取れる。うん、練習した甲斐があった。何せ白式の長所は機動性と零落白夜くらいだからな。特に機動性は練習せざるを得なかったんだよ。とは言え、鈴も流石は代表候補生か。俺の攻撃にもしっかり対応するし、衝撃砲 龍咆だったか もしっかりと当てようとしてくるし、事実俺に割と近い位置に何度も着弾している。

ああまったく。本当に鈴は強敵だよ。いや、ISの戦闘なんて未だ片手の指で数えるくらいしかしてないけどさ。

それでも強敵だ。厄介この上ない。実に大変だ。大変すぎて楽しさで笑っちゃうよ。

「でらあああああ!!」

再び攻撃のチャンスを得た俺は気合い一閃。雪片を振るう。

「なんのお!!」

だが振るった雪片は鈴の持つ青龍刀に防がれる。そのまま弾かれるように俺達は距離を取る。

「今度はあたしがいくわよ!!」

その言葉と共に鈴が両手に持った青龍刀を投擲する。オイオイ、いくら遠距離攻撃があるからって武器を投げるかよ!?

投擲された青龍刀はブーメランのように回転しながら二方向から俺に迫る。

それを俺を回避するわけだが、ちょ待てやコラ!! 砲口がこっち向いて!

考えるよりも早く雪片の刀身をかざして即席の盾にする。瞬間、衝

撃。

シールドエネルギーへのダメージは軽いが衝撃が強い。俺はそのまま後方へ押し込まれた。

味な真似をしやがる。だが鈴は武器を投げた。今なら丸腰……じゃなかったよ。

どうも自動で手元に戻るらしいな、あの青龍刀。

ますます以って厄介だ。けどそれが堪らなく面白くてゾクゾクしてくる！

「ああ楽しい。マジで楽しいわ、鈴。そうは思わねえか？」

「まああんたが予想以上に強いのは驚いたし、ちょっとは面白いと思うわよ」

俺の言葉に鈴が同意を示す。

そうだろうそうだろう。この緊張感、実に良い。けどなあ鈴、俺が楽しいのはそれだけじゃねえんだよ。

「それにしてもだ、鈴。この試合、なかなか面白い巡り合わせとは思わねえか？」

「何がよ」

「だってそうだろ。海の方こうに行っちゃまって、もう会えねえと思っただけなじみと劇的な再会。そして再会した二人は片やISの国家代表候補生。片や唯一の男のIS操縦者。その二人が今こうして激闘を繰り広げる。ああ、戦いそのものも楽しいけどさ、その戦いの背後にあるドラマ性っていうのも実に良い。最高に楽しいぜ!!」

そう。この戦いはただの戦いじゃない。その背後にはドラマチックなストーリーがある。これが中々どうして、戦いを盛り上げてくれる。

そう。言うなれば俺達の戦いのためにこの上ない程に華やかな舞台を用意するようなもの。ドラマチックなストーリーという舞台の上で繰り広げる激闘！ああ！なんて面白い！！

俺の言葉に共感したのか、鈴の顔に笑いが浮かぶ。そして、その笑いを獰猛なものにして鈴は言った。

「確かにそうかもね。けど、勝つのはあたしだから！！」

「そいつはどうかな！！」

そうやって俺はスラスターを吹かし、鈴に高速で真正面から突っ込む。

「あんだ正気！？」

そう鈴が言うのも当然。これでは龍砲の的にしてくれと言うようなもの。だが、んなこと知るか。俺はやるのみだ。

「いい度胸ね！なら、腹括りなさい！！」

鈴の言葉と共に、また龍砲の砲口が開く。俺に狙いを付けているのは明白。さあ、勝負だぜ、織斑一夏！！

戦いで興奮する気持ちを抑え、思考を冷静にする。ひたすらの集中。いかなる気配だろうと感じ取る！！

瞬間、感じ取る殺気。今だ！！

そう思うより早く、反射的に白式の軌道をズラす。すぐ脇を砲撃が通り抜けるのを感じる。成功だ！

鈴の顔に驚愕が浮かんでいる。まさかかわされるとは思わなかったのだろう。分かるぜその気持ち。俺だって思わなかった。

見えない攻撃を気配と殺気だけでかわすなんて芸当、普通はやらない。一応修業の一環でそういう気配を読む訓練もしたが、まさかここで役立つとはな！

だが、恐らくこの芸当、千冬姉ならやってのけるだろう。嬉しいなあ！俺はまた一步、千冬姉の領域に近付いたよ！！

俺はそのまま鈴に向かい、雪片を両手で振りかぶる。そしてガードのために鈴がかざす青龍刀に思いつ切りたたき付ける。

鈴の顔が苦痛に歪む。そうだろうよ！何せ「浸」を思いつ切りかけたからな！ダメージはさっきの比じゃねえ！！

俺はそのままの勢いで鈴の背後へ飛ぶ。

そしてすぐさま三次元躍動旋回で鈴に向き直る。

そして、切り札を一つ切る。

スラスターでチャージしたエネルギーを解放。瞬時加速を発動させる！

千冬姉に教わった対格上用奇襲技能だが、俺はセシリア戦で使ったらしい。覚えとらん。やってみたら体には感覚があったが。

遅れて振り向く鈴の顔があいつの焦りを如実に表していた。悪いな、鈴。これで詰みだ！！

『零落白夜 発動』

モニターに文字が現れると同時に、雪片の刀身が青白い光刃に変わる。

零落白夜。自分のシールドエネルギーを消費する代わりに相手のシールドエネルギーを切り裂きダメージを与える白式の、雪片の切り札!!

「切り捨て覚悟おおおおお!!!」

そんな時代劇みたいな台詞を叫びながら俺は鈴に急接近。鈴の対処は間に合わない。

俺は勝利を確信した!

瞬間、アリーナの遮断シールドを貫き降り注ぐ閃光。

俺と鈴の間に割って入った閃光はアリーナの地面に着弾すると同時に爆発。

その衝撃に俺と鈴の体は吹き飛ばされた。

s i d e o u t

第十五話（後書き）

今回一夏が使った技、「浸」はとらハヤリリカルでお馴染みの御神流の「徹」がモデルになってます。

一夏の剣術についてもいずれは触れたいですね。

一夏の剣術はISでの戦闘なんて当然ながら想定していないので、活かせるものは限られています。

今回のような小技や見切りの技術、他にも幾つかの体捌きくらいなのです。

しかし戦闘描写は難しいですな。どうにも表現が薄っぺらになってないか心配でなりません。

第十六話（前書き）

割と早く書き上がりました。

第十六話

突如アリーナの地面に突き刺さった閃光。

ただ一筋の光条だったが、その威力は強大。着弾と同時に起きた爆発の衝撃に一夏と鈴は吹き飛ばされたが、二人ともすぐに姿勢を制御して体勢を立て直し、爆発の起きた方向を見る。

二人の表情からは先程までの戦闘で浮かべていた興奮は消え、突然の事態への困惑が浮かんでいた。

同時刻、アリーナ管制室。

そこでは緊急事態を示す警報が鳴っていた。

「システム破損！何かのアリーナの遮断シールドを貫通しました！
！」

モニターの前に座る真耶が険しい声で状況報告をする。

彼女の目の前のデスクモニターには状況を示す複数のウィンドウが現れ、何よりも事態を如実に示す証拠として、モニターの中央部には「ALERT」の文字が浮かんでいた。

一瞬で状況を判断した千冬はすぐさまマイクを手に取り指示を発する。

「試合中止！織斑、嵐、直ちに待避しろ！！」

千冬からの指示が下った時点で一夏と鈴の二人は既に事態の緊急性

を把握していた。

アリーナ中に響く警報。物理シールドが作動し、安全確保を開始する観覧席。

明らかに尋常ならざる事態。一夏と鈴の顔には緊張が浮かんでいた。

「一夏！すぐに待避するのよー！」

ISの通信で鈴が一夏に待避を促す。だが

「いや、鈴。どうにもサクツとケツ捲ってトンスラって訳にはいかないらしいぜ」

そう苦い笑みを浮かべながら一夏は答える。そう言った原因は簡単。白式のモニターに表示された文字である。

『警告　アリーナ中央に熱源　所属不明ISと断定』

そして決定的な一文

『ロックされています』

「一夏、あんた……！」

鈴も一夏の状態に気付いたらしく、声を上げる。その声には焦りがあった。

「一夏！早く待避しなさい！早く……！」

焦った様子で急かす鈴だったが、対照的に一夏は落ち着いた様子だった。

「で、俺が待避したとしてだ。鈴はどうするつもりだ？」

問い掛ける声色は固い。

「決まってるでしょ！あたしが時間を稼ぐ！だからその隙に！！」

「却下だ。ダチを残しておめおめ逃げる程、俺は落ちぶれちゃいねえぞ」

「何言ってるのよ！！あんたは素人なのよ！？」

その言葉に一夏は状況を忘れて思わずカチンと来た。

「その素人にさっき追い詰められたのはどこのどいつだ！！」

その言葉に鈴がうるたえる。そして反論

「う、うるさいわね！さつさと逃げなさいよ！あたしだって最後までやる気なんかないわよ！！こんな非常事態、すぐに学園の先生が」

だが、鈴は最後まで言えなかった。

未だ上がりつつける黒煙の中から突如放たれる閃光。自身に迫る破壊の光に鈴はその思考が止まった。

「んの馬鹿がつー！！」

苛立たしげな声と共に鈴の視界が動く。白式を全開で飛ばした一夏が鈴の体を攻撃の射線からずらしたのだ。

「一夏……」

思わず一夏の名前を呟き、真剣味に溢れたその表情を見つめる。一夏を見つめる鈴の頬は薄紅色に染まっていた。

そして鈴は自分が一夏に抱えられていることに気付く。それもいわゆる「お姫様抱っこ」の姿勢でだ。

気付いた途端、鈴の顔が真っ赤に染まり、自分でもよく分からない言葉を喚き散らす。

「黙ってる！来るぞ！！」

その言葉に鈴は我に帰り、黒煙の方向を見る。

再び放たれる閃光。その光条の太さたるや、威力を想像させるには十分。

「クソ、セシリアのライフルよか威力は上だぞ」

そう一夏が毒づく。

そのまま一夏は黒煙から距離を取り、抱えていた鈴を離れた。

二人は並んで宙に浮かび、少しずつ晴れていく黒煙を見る。

そして見つけた。

燃え盛る地面と漂う黒煙の中に立つ人型。

それは紛れも無くISだった。だが、その姿は異形。通常のISならありえない全身装甲フルスキン、細身の体にはあまりにも不釣り合いな巨大な腕と、その腕の装甲に取り付けられた砲門。

その全身は白式と真逆の黒。

「何なのよ、コイツ……」

鈴の呟きに含まれる疑問に一夏は同意する。

一夏の知る既存のISとは異なる姿。あまりにも異様。

人は異形を恐れる。古来より鬼や悪魔といった存在が人々の恐怖の代名詞であったことが、何よりの証拠。それはある種、人間の本能的恐怖だろう。

そして、それは今の一夏と鈴も例外ではない。

厳しい剣術修業に堪え、かつては本物の修羅場を経験した一夏、IS国家代表候補生として軍に籍を置き、その年齢からは想像もつかない経験をしてきた鈴。両者共に生半可なことでは揺らがない胆力の持ち主だったが、今この時は異形のISに脅威を感じていた。

異形のIS - ゴーレムと仮称するとして - は装甲に覆われた頭部を一夏へと向ける。一夏は険しい視線をゴーレムへと向け、両者は睨み合うような形になる。

ゴーレムに動き出す気配はない。ただ立ち尽くすだけだ。その姿を訝しむ一夏と鈴だが、動かないのなら好都合。通信会話で対策を練る。

「どつする、一夏？」

「どつするもこうするも、まずは先生の指示や情報が欲しいところだけど…」

その言葉に丁度反応するかのように、二人のISに官制室の真耶から通信が入った。

「織斑君、凰さん！聞こえますか！？今すぐそこから脱出して下さい！すぐに学園の先生が制圧に行きます！！」

二人に脱出するよう指示をする真耶。その声には普段の彼女の姿からは信じられない緊張があり、事態の異常性を改めて二人に認識させた。

だが、その指示に一夏は異義を唱えた。

「先生。生徒の避難は？」

問い掛ける声は冷静。その声に真耶も少しばかり落ち着きを取り戻し、状況を伝える。

「それが、アリーナの全隔壁が降りてしまい。何故か電子ロックが解除できないんです。それで生徒達はまだ観覧席に」

「なら待避は却下ですよ。野郎、こっちがトンズラかましたら絶対追って来る。それでアリーナのシールドぶち抜くような攻撃されたら生徒が危ない。野郎は俺たちで引き受けます」

「そんな！織斑君！！」

真耶が必死の声音で呼び掛ける。だが、一夏が聞き入れる様子はない。

「織斑」

そこへ別の声。声の主は千冬だった。

「何か？織斑先生」

「現在三年の精鋭が電子ロックのクラッキングをしている。それが成されれば生徒の避難と援護が可能だ。やるならばそれまで持たせる」

一夏を止めるつもり無い千冬の言葉に、織斑先生！？と真耶が声を上げる。

「持たせるのは結構。ただ、俺は今結構頭に来てる」

だからさ、と一夏は繋ぎ

「野郎をこつちでぶちのめすのはアリ？」

そう確認を取った。

その言葉に千冬は僅かに黙り

「やれるならやれ。ただし、無事でいろ、一夏」

姉として言った。

「了解！！」

力強い一夏の返事と共に通信が切れる。真耶が一夏と鈴の名前を呼び掛ける中、千冬は静かに事態を見守っていた。

さて、千冬姉からのGOサインも出た。
いっちょやるか、と言いたいがその前に確認しなきゃならない。

「なあ、鈴。お前はどつするよ？俺は行くけど。下がりたいならそれでも良いぜ」

「馬鹿にすんじゃないわよ。あたしは中国代表候補生鳳鈴音。こんな所で引き下がりはしないわ！」

「そりゃ結構」

「そついうあんたは何でやる気なのよ」

「あ？決まってる。頭に来たからだ。野郎、せつかくの試合をぶち壊しにしゃがって。落し前はきつちり付けさせる！」

そつ言つて俺は雪片を構える。同時に鈴が青龍刀を構えた。

「なら、連携で落とすわよ。あたしが攪乱するから、あんたがぶちかましなさい」

「了解」

そして俺達は左右に別れて飛んだ。それと同時に野郎、ゴーレムが動き出す。

先程の一撃とは違う、低出力ながらも数の多いビーム弾を撃つてくる。それを俺と鈴はかわしながら、攻撃を加えようとする。

覚悟しとけ、クソ野郎。テメエが誰だかは知らねえが、こんなでかい騒ぎ起こしたんだ。千冬姉にはぶちのめすと言ったが、それじゃ

物足りない。

その息の根を止めてやる！！

どうやらやつはゴツイ見た目の割にはそこそこの機動性もあるらしい。

だが、その機動性は一般機程度のレベルでしかない。それだけならいくらでも叩けた。だが、奴のビーム弾幕と高出力ビームがそれを許さない。

特に高出力の方はヤバイ。何せアリーナのシールドを一撃でぶち抜いたのだ。

ISのシールドなんざ紙だろう。

鈴が龍咆の連射でゴーレムを攪乱する。

そして生まれた隙を狙って俺は切り掛かる。だが、やつはその巨大な腕を振り回し、俺の動きを阻害する。

ビームもヤバイが、あの腕に殴られるのもまずいだらうからな。

俺と鈴の急造の連携。正直練度では心許ないが、それでも二対一の状況は多少マシと呼べる。

鈴が龍咆でゴーレムを止めた隙に俺が背後から斬りかかる。だが、やつはその巨大な腕を振り回し、拳句ビームを連射するもんだから、距離を取らざるを得なくなつて。

クソツタレ！！このままじゃジリ貧だぞ！！

side out

一夏との通信が切れた後の管制室では少々の混乱があった。

冷静さを真耶に促した千冬だが、コーヒーに砂糖ではなく塩を入れたのがその代表である。

セシリアが千冬に出撃許可を求める。

だが、それは叶わない。千冬が示したモニターに表示されたアリーナ状況。全エリア遮断シールドレベル4。

更には敵ISの仕業とおぼしき全隔壁のロック。

これらの状況が、先に千冬が一夏に語った待避も援護もできない状況を生み出していた。

セシリアが政府への救援要請を進言するが、確実に間に合わない。業を煮やしたセシリアが出撃を再び求めたが、千冬の正論としか言えない指摘に諦めざるを得なかった。

この時セシリアは、友人の危機に何もできない自分の無力をひたすらに悔しがった。

だがもう一人、自分の無力に苛まされる者が居た。箒である。

彼女はセシリア以上の無力感を感じていた。専用機も、状況に対処する知識も無い自分。どこまでも無力。無力への呪詛が思考を埋めていく。

その時、箒は脳裏に一筋の閃きを感じた。そして彼女は何も言わず、何も考えずに官制室を出た。

アリーナでは未だに死闘が続いていた。

「クソ！中々隙を見せねえ！」

「ああもう！どうすればいいのよ！」

一夏と鈴、それぞれから出る悪態。二人にそうさせるだけの状況になっただけだ。

「おい鈴。挟撃を仕掛けるぞ。俺が奴を止める。その隙にぶっ放せ」
「オーケー。乗ったわ」

そして二人はまた動き出す。状況の打開策を見出せない状況。とにかく試せる手は試しつくすことにする。

一夏は高速で旋回。ゴーレムの背後を取り、切り掛かった。だが、ゴーレムは反応。その腕を振りかぶる。

「うらあああああ！！！！」

一夏はそのまま雪片を振るう。

一夏の雪片とゴーレムの片腕が衝突。刀と拳の一騎打ち。大きな衝撃音がアリーナに響く。この瞬間、ゴーレムは確かにその動きを止めた。

鈴へ放った攻撃と同じ、全力の「浸」をかけた一撃。雪片の刀身からは想像できない重みの乗った一撃は確かに効果を発した。

だが、一夏は違和感を感じた。

（こいつ、身じろぎ一つしない！？）

浸をこめた一撃は受けた相手の体に直接衝撃を通す。その威力は誰が受けたとしても無反応ではいられない程だ。事実、かつて一夏が

師と千冬の試合を見た際、師の放った浸はあの千冬をして苦悶の表情にさせた程。それほどの技を受けて無反応などということはない。えない。

（けど、チャンスだ！！）

相手の動きは止まっている。この好機を逃す手立ては無い。

「今だ！鈴！やれえ！！」

返答はゴーレムの背後に位置を取った鈴の龍咆だった。放たれた龍咆はゴーレムの背中に直撃。同時に一夏は上空に飛び、ゴーレムに巻き込まれないようにする。

そのままゴーレムは地面に墜落。クレーターのごとき穴と土煙を上げた。

確かな手応えに、一瞬二人の心に希望が芽生える。だが、それは土煙の中で立つゴーレムの姿に打ち砕かれた。

「何なのよ、アイツ。あれだけ喰らってピンピンしてるなんて。…一夏？」

「なあ、鈴。なんかあいつおかしくないか？」
唐突に一夏が投げかけた問い。鈴の顔に疑問符が浮かぶ。

（やつは俺の浸に全く動じなかった。手応えは確かにあった。痛覚が無い？薬物か何かか？）

一夏の頭に沸き上がる疑念。

その時一夏は、ふと敵の動きを思い出す。

(そういやあいつ、動きが変だ。何て言うか、人らしくないというか。そういやどこぞの会社で作った危険箇所作業用の人型ロボにそっくりな。もしかして)

思い付いた仮定。一夏は隣の鈴に言った。

「あいつ、動きが妙だ。まるで機械…」

「何言ってるの。ISは機械じゃない」

当然と言わんばかりに答える鈴だが、一夏の訝しげな表情は変わらない。

「違う。あいつの行動全般だ。こっちが行動するのに反応して動いて、しかも俺達が会話していると仕掛けてこない。なんかプログラムされたみたいじゃないか？それに、近接ISの操縦者なら分かるんじゃないねえの？奴の生身の部分の動きの不自然さ。俺には人が乗っているとは思えない」

言われて鈴は、相手の違和感に気付いた。だが、それでも頭を振る。

「でも、ISは人が乗らなきゃ動かない。無人機なんてありえない」

「仮にだぞ。無人機ならどうするよ」

そう言う一夏の声には、いつの間にか不適な笑みがあった。まるで打開策を思いついたような口ぶりだ。

「何よ。無人機なら勝てるの?」

「いいや。ただ単に、容赦無しでやれるから楽って話だ」

そう言つて一夏は手に持つ雪片を見る。

相手が無人機なら遠慮はいらない。必殺となる全力の零落白夜を当てられる。

確かに息の根を止めてやろうかと本気で思った。だが、そのことに若干ながらためらつたのも事実。

別に行うのはいい。だが、そうした後で待ち構えるであろう面倒を考えると、「やつぱり押しさえにしちゃおうか」という考えが浮かんだ。

だが、無人機相手なら可能だ。

「何するか知らないけど、当てられるの?」

先程までの攻防を思い出して鈴が問う。

「当てられるかどうかじゃない。当てるんだよ」

そう力強く答える一夏。その姿に鈴は軽く笑った。

「いいわ。あなたの賭けに乗ってあげる。援護は任せなさい」

「助かる」

そして二人は改めてゴーレム、無人機を睨む。そして動き出した。

再度攻防を始めた二人。だが、無人機の守りを中々抜けない。進まない状況に歯噛みをする中、一つの転機が訪れた。

「一夏あ！！！！」

突如響く声。思わず一夏は声の方向を振り向く。

「この程度の敵！男なら倒せずしてなんとする！！！」

視線の先、一夏の斜め後方アリーナピット。外部に剥き出しとなっているそこには、今の状況から見れば無防備としか言えない姿で、篠ノ之箒が立っていた。

第十六話（後書き）

次回、無人機戦決着。そして原作一巻の終わりとなりそうです。
次回あたり、白式の新装備が出るか…！？

第十七話（後書きに新装備説明有り）（前書き）

無人機戦決着と一夏新装備登場と一巻終了になります。

戦闘になるとどうしてもICHIKASAさせちゃいます。あまり派手にやりすぎて俺Tueeeeeeeeeにはしたくないですが、いや中々難しい。

しかし、24時間以内に二つも投稿できるとは思わなかった・・・

第十七話（後書きに新装備説明有り）

緊急事態により全体に赤い緊急照明が点いた廊下を等は走っていた。

自分はまだにも無力。戦う力も手助けとなる知識も無い。何かできないのか。今なお死闘にその身を踊らせる幼なじみのために。

彼女は走る。時折響く振動に足をもつれさせるが、それでも止まらない。止まるわけにはいかない。

走り続けて辿り着いた。アリーナのピット。高所に位置し、アリーナ全体を見渡せるその場所で彼女は見た。

アリーナのおちこちから上がる黒煙。それを引き起こした異形のIS。そして、試合の対戦相手と共に敵に立ち向かう白を纏った幼なじみを。

苦戦しているのは明白。ISという超兵器が死闘を繰り広げる戦場で自分に何ができる。そして彼女は思い至った。自分にできるただ一つのこと。

「一夏あ！！！」

自然と声が出ていた。

「この程度の敵！男なら倒せずしてなんとする！！」

彼に届かせるために張り上げた言葉は叱咤であり激励。

彼女にできたのはそれだけだった。たとえ共に戦えなくても、たと

え知識を貸し与えることができなくても、心の支えになることはできる。

それが彼女の選択だった。

息が切れた。ひたすら走り続け、その直後に大声を上げたのだ。脳が酸素を求め、彼が何か言っている。聞こえない。息が切れ、やや朦朧とした頭が正しく聞き取ってくれない。

突如視界が紫の光に染まった。それは敵が彼女に向けて放ったビームだった。生身で受ければ髪の毛一本残さずに消し飛ぶのは明らかだが、彼女の意識は間近に迫る死に反応できず呆然としていた。

光が散った。彼女と光の間に割って入った存在があった。それは白だった。手にした光刃がビームを弾く。そして彼女意識はようやく正常に引き戻された。

「一夏……」

幼なじみの名を呟く。そして彼女は見た。紫の光が消えた直後、異形が彼に接近し拳を振るのを。それを防いだ彼の刀が砕け、吹き飛ばされるのを。

何が起きた？一夏がやられた？敵に？何故？

疑問が頭を埋め尽くす。

私を守ったから？私のせい？

そして彼女は理解した。彼は、一夏は自分を庇いやられたのだと思わずその場にへたりこむ。

「あ、あ……」

背筋が凍る思いだった。

幼なじみは倒れては居なかった。しかし、武器を失った彼はただ敵の砲火を避けることしかできなくなっていた。

自分のせいだ。

彼女の心に絶望が立ち込める。なんて愚か。

だが、彼女に言葉をかける存在があった。

「箒イ!!!」

それは幼なじみの声だった。彼の言葉は続く。

それを聞いた彼女は立ち上がる。その目には強い光があった。

自分にはまだやれることがある。せめてもの償いにそれを全うする。

そして彼女が成したことは、確かにこの状況を打破したのだ。

side 一夏

「何やってんのよ、あの子!?!」

鈴が驚愕の声を上げる。俺だって同じ気持ちだ。箒、あのバカ何をやってる!!!

ここはISが支配する戦場。そんな中に生身で出るなんざ自殺行為もいところだぞ!!!

無人機が箒の方を向いた。その腕を向けてだ。

マズイ!!!生身であれを喰らえば!!!

「箒い！！」

そう叫ぶと体が勝手に動いた。箒を狙うビームの射線に割り込む。鈴が何か言っただけど、聞こえない。

『零落白夜 発動』

そして俺は零落白夜を発動させた。

ISのシールドを切り裂くこれは言わば究極の対エネルギー兵器。これでビームをなんとかする！！

そして放たれたビーム。紫の光が突き出した零落白夜の光刃とぶつかる。敵のビームは零落白夜に当たった側からその光を散らして消えていく。だが、衝撃が強い！

光が収まる。それと同時に零落白夜を解除。通常の雪片の刀身が現れた。

だが、俺は再び戦慄した。無人機が俺の目の前に迫り、腕を振りかぶっていた。咄嗟に雪片を盾にした。衝撃。

ビキッ

酷く嫌な音が聞こえた。そして

バキイイイン

雪片がその刀身を砕かれた。同時に拳が迫る。

体を捻り直撃は避ける。それと同時に脚部ブレードを展開。無人機に切り付けるが、当たりが悪いからか効果は薄い。

そして俺は無造作に振るわれた腕に弾かれた。幸いにしてダメージは少ない。俺はそのまま飛び、無人機の追撃を避けた。

「一夏、大丈夫!？」

「武器以外は何とかな」

鈴が心配してくるが、実際俺へのダメージは何とかなった。だが、雪片が失われたのは痛い。鈴の表情は硬い。俺だってヤバいと思う。

雪片が失われたということは切り札を失っただけでなく、俺の攻撃手段を失ったに等しい。武装という点ならまだ脚部ブレードがあるが、あれは威力が足りなさ過ぎる。

何か、何か武器は!!!

そして俺は気付いた。

ある。この状況を切り抜ける武器が。だが、取りに行けるのか？

そして俺はピットでへたりこんでる筈を見た。

一か八かだ!!!

「筈い!!!」

そして俺は言った。

「ピットにあるコンテナ！あれをカタパルトで打ち出せ！！頼む！！お前にしかできない！！！！」

俺の声に篤がピットの中へ走っていく。あのコンテナは小型で下に小型車輪があるから篤でも運べる。あの中にあるモノならば……！だが、その前にもう一つ。

「鈴！少しの間、奴を頼む！」

我ながら無茶を言つと思つ。だが、頼らざるを得ないのだ。

「いいわよ」

鈴はあっさりと承諾した。

「手があるんですよ。ならあたしはそれに賭けるわ。ただし、しくじるんじゃないわよ！」

……全く。つくづく俺は恵まれている。こんな戦友に恵まれた幸運を感謝したくなるね。

「任せろ」

いちいち礼は言わない。ただ俺は俺のやりことをこなす。それが一番の礼だ。

そして、ピットから一つの影が飛び出した。

「今だ……！」

言つと同時に俺は影に向かって飛ぶ。後ろで鈴が無人機に龍咆を浴びせている音が聞こえる。

影の正体は小型コンテナ。俺はコンテナに近付き脚部ブレードを再び展開。コンテナに向かってブレードを振るい、コンテナを強引に切り裂く。

切り裂かれたコンテナから何かが飛び出した。迷うことなく、俺はそれを掴んだ。

俺の手に握られているのは刀だった。そう。刀としか言い表せない。形状は学園の打鉄の装備である日本刀型ブレードとさほど変わらないが、これはそんな凡百の代物とは訳が違う。これは別格だ。

透き通るような青白ブルーホワイトさの刀身は反りが浅く、豪壮ながらも流麗。刃の部分の輝きが、その切れ味の凄さを連想させる。エネルギーの伝達経路とおぼしきラインが樋の部分にある。本来なら機械じみた無骨さがあってもいいそのラインは、何故か刀身にやたら映える。

それは美しい刀だった。それこそ、初見ではIS用武装とは思えない程に。同時に俺は、この刀を作っただろう女性を思い浮かべた。

あの人、刀匠でもやってけそうだよ。

思わず見とれ、そして体に電流が走るような感覚を感じた。

これこそが俺の求めた刀。そう、この刀は世界で唯一、俺のためだけにある。そう感じ、凄まじい歓喜が体の奥から沸き上がる。

『別装備認識 装備換装開始』

『雪片式型 装備登録解除』

『近接特化ブレード（名称未設定） リンク開始』

次々とモニターに現れる文字。徐々にこの刀が俺の、白式のものとなっていく。そして

『装備登録完了』

その文字が表情され、ついにこの刀は俺の物になった。すぐさま交戦を続ける鈴と無人機の下に向かう。

無人機は今まさに、鈴にその巨腕を叩き付けようとしていた。

「させるかあ！！」

その言葉と共に、俺は無人機の横合いから飛び込み、刀を振るう。

手応え

見れば鈴を殴ろうとしていた無人機の腕に深い切り傷があった。思わぬダメージを受けたからか、無人機が下がり俺達と距離を取る。あまりの切れ味。思わず驚いたよ。見れば刀身は淡く輝いている。気が付くとモニターの一角にある文字が浮かんでいた。

『特殊攻撃状態 零落刃発動』

れいらくしん

それと同時に状態の簡単な説明が出る。

なんとまあ、零落白夜を元にした新システムらしいが、零落白夜みたいにはバリア切断じゃなくて、物理攻撃力の大幅増加ときたか。零落白夜みたいにシールドエネルギーを使うが、使う量はかなり少ないみたいだし……

……あの人、とんでもないモノ作ったな……

「一夏！っ、それって……」

「ああ、白式の新装備だ」

鈴の言葉に簡潔に答える。そして視線を無人機に向ける。

「鈴、決めてくる」

それだけ言っつて、静かに刀を構える。だが、鈴が俺の腕を掴んだ。何事かと思ひ見ると、鈴のISから伸びたコードが白式に接続されていた。

「エネルギー少ないんじゃないの？持ってきたさい。ちゃんと決めるのよ」

そう、穏やかな顔で俺に言った。本当に、こいつは。　ありがたすぎて何も言えないな。ああ、負ける気がしない。

モニターに表示されたエネルギー残量が回復する。さすがに全回復というわけにはいかないが、最後の決め手には十分だ。

「行ってくるよ」

それだけ言っつて、俺は無人機に向かっていった。

無人機が俺を迎撃しようと、腕の砲門にエネルギーを溜める。さて、正念場だ！

そのまま無人機に向かう。そして光が無人機の腕に収束した瞬間、俺は最後の切り札を切った。

激しい音と共に視界が横にズレる。
瞬時加速、一瞬で高速をたたき出すその技を、俺は横の移動に使ったのだ。

放たれたビームは俺に当たらない。そしてその瞬間、決定的な隙が無人機に生まれた！

先程の瞬時加速は左右のスラスターの片方しか使わなかった。

そして、未だ加速を続けている状態でもう片方のスラスターで瞬時加速を発動！強引に無人機に突っ込む！

「ぐううううう！！」

Gが凄まじい！ISには搭乗者保護のためにGの緩和機能もあるが、それでも抑えきれない！！

だが！ここで引けない！俺は無理矢理スラスターを吹かして方向転換！一気に無人機へ突っ込む！！

「零落白夜、発動！！」

『零落白夜 発動』

その言葉と共に刀から凄まじいまでの光が溢れ、刀身をまばゆいばかりの輝きで包む。

無人機が近づく。後は刀の間合いに捉えて振れば終わり。

一瞬がやたら長く感じる。

ふと、無人機を見る。

本当に厄介な敵だった。だが、なんとというか俺らしい。俺はどうにもこの戦いを楽しんでた節があるみたいだ。

いや、認めてやる。楽しんでた。確かに危機感があったが、それも含めて楽しかった。

そう思うと、この無人機にも悪い気はしなくなる。

だがな。それでも俺はお前を許さない。お前は俺と鈴の戦いをぶち壊しにした。あれ程楽しかった戦いをだ。それを許すわけにはいかねえんだよなあ、これが！！

そうだよ！今のお前は邪魔なんだ！！だからさあ

「俺の戦いここから、出ていきやがれええええ！！！！」

そして俺は刀を振った。固いものを切り裂く手応え。そのまま俺はまっすぐ進んで停止。背後で何かが爆発する音を聞いた。

「終わりだ」

ああ、終わった。

アツツ、無茶したせいか体のあちこちが痛いや。

「一夏！」

鈴が向かってきた。白式にエネルギー分けたせいか、装甲の一部が無い。

「よお鈴。終わったぜ」

「分かってるわよ。あんた、無理しちゃって」

そう言う鈴の顔は少し浮かない。どうやら心配をかけちゃったらしい。

ふと、俺はこの間のことを思い出した。

「なあ鈴、この間のことなんだけどさ。その、悪かった」

「え？」

「あのあとさ、約束、ちゃんと思いついたんだ。そして、あの時お前が何を言いたいかも分かった。気付かなくてごめんな」

そう。あの時の俺はあまりにも馬鹿だった。間抜けにも程があった。

「だからゴメン」

俺は鈴に頭を下げる。

「一夏……」

鈴は何も言わない。俺を静かに見る。だが、俺にはまだ言わなきゃならないことがある。

あの時の約束、それに対する今の俺の答えを。

「鈴、あの時の返事、今改めて言わせてくれ。ごめん。今の俺にはお前の気持ちには答えられない」

「え……？」

鈴が固まる。分かってんだよ、お前の気持ちは！あんなこと言われて気付かないほど俺だって馬鹿じゃない。でもな

「今の俺は、正直自分のことで手一杯でさ。誰かの思いを受け入れるなんてできない。だから、今は答えを保留にさせてくれ！」

そう言つて再び頭を下げる。

これが俺の精一杯だ。後はどうなるか知らん！

「そっか……」

鈴の声はやたら静かだ。

やはり怒るか？そっだよな！だつてそれだけのことしてるわけだし！！

「あんたの気持ちは分かつたわよ」

え？あれ？意外に殊勝な言葉。

「あんたズルイよ。そんな風に言われたら、あたし何も言えないじゃん」

そう言つ鈴の顔を見ると、とても穏やかな表情をしていた。

「しょうがないわね。今回は許してあげるわ。ただし、覚悟しなさい。あんたが返事をよこす頃には、あんたがイエスしか言えないようにあたしがしてやるから！」

そう、いつもの勝ち気な笑顔で言った。

た、助かった……

その後、アリーナに駆け付けた先生達に事後処理を任せ、俺達はア

リーナの廊下を歩いてきた。共に着替えのために更衣室に向かうからだ。
ちなみに、箒は独断での危険行動をしたということ。今は千冬姉に絞られている。合掌。

「そついや鈴、親父さん達は元気か？」

ふと、何かと世話になった鈴の両親を思い出した俺はそのことを聞いてみる。よく色々奢ってもらったからな。あの借りはでかいのだ。

「ああ、うん…その…離婚しちゃったんだ、うちの親。あたしが中国に帰ったのもそれが原因でさ」

気まずそうに鈴は答えた。ヤバい、話題を間違えた。

「そつか…」

だが、俺にはこれしか言えない。つくづくこういう時に上手く言えない自分が情けない。

そして俺達は更衣室の前に差し掛かった。更衣室は二つあり、俺達は別々に使っていた。

「んじゃ、俺はここで」

「あ、一夏。ちょっと待って」

更衣室に入ろうとする俺を鈴が呼び止めた。何事よ。

「一夏。確かにあたしはあんたの言い分を理解したし、認めた。でも、あたしに嫌な思いをさせたことは別勘定よ。分かってる？」

ああ、理解したよ。その握られた手を見ればすぐに分かる。つまりはそういうことか。

「分かってるみたいね。なら、覚悟はいいわね？」

全く、そんな物騒なセリフを笑顔で言うなよ。怖いじゃないか。とは言え、今回は徹頭徹尾俺が悪い。甘んじて罰を受けようか。

そんな悟りに近い心境に至った俺は、顎への強烈な衝撃に思いつ切り吹っ飛ばされたのだ。ああ、拳を振りぬいた鈴の笑顔のなんと爽やかなこと。

side out

学園地下の機密エリア。限られた人間しか入れないそこに、千冬と真耶の二人はいた。

彼女らがここに居る理由。それは襲撃してきた機体の解析に他ならない。

「やはりこのISは無人機です。しかもコアはどの国家にも属さない未登録の物です」

ISコアはその絶対数が467と決まっている。現状、コアの開発が可能なのが開発者の篠ノ之束だけであり、彼女は467以上のコアを作っていないからだ。

「これは一体……」

真耶の呟きを聞きながら、千冬は静かに破壊された無人機の残骸を見ていた。その視線は険しく、かつて世界最強の座にあったことを示す戦士の目だった。

更衣室の一角、着替えをしながら一夏は殴られた顎をさすっていた。

「おゝ痛って〜。全く、実に効く一撃だった」

だが、呟く一夏の顔に不快感はない。気にしていたことに一応の精算をつけたからか、その表情はすっきりしたものだった。

ふと、一夏はいつかの夜のように白式の腕と、新たに手に入れた刀を展開する。

目の前の空間モニターに『近接特化ブレード 名称未設定』とある。

「こいつの名前、考えなきゃな」

一夏は刀を見続けながら考える。その青白い刀身を見つめ、零落白夜を発動した時を思い出す。

刀身を覆う眩い程の光。まるで燃え盛る炎のように光が刀身を包むその様を。

「『蒼炎』……」

頭の中に浮かび上がった名前を静かに呟く。

「そうだな、蒼炎。ああ、蒼炎だ！」

『名称設定確認 「蒼炎」 認識』

今この瞬間、一夏の新たな刀が真の意味での誕生を遂げた。そして今一度、蒼炎を見ると一夏は展開を解除。支度を済ませて更衣室を出ようとする。

「うっ・・・」

突如一夏の腹部に走った痛み。僅かに顔を歪めるが、すぐに痛みは引いたので一夏は気に留めることがなかった。

だが、それが後々大事に繋がることになるとは、一夏は気付かなかった。

第十七話（後書きに新装備説明有り）（後書き）

今回、一夏にはネタセリフを一つ言わせました。まあ、中の人つながりですし、ハイ。そういうことでご容赦を・・・

白式の新型装備について

「蒼炎」

形状は日本刀型。第二世代IS「打鉄」の基本装備である日本刀型ブレードに似ているが、こちらの方がやや反りが浅い。実際の日本刀と照らし合わせると関鍛冶の刀に近い形。そして性能はダンチの差。

通常時

透き通るような青白さを持つ美しい刀身。一般的な近接ブレードよりも切れ味、頑丈性共に上。

零落刃

加減した零落白夜。刀身の青白い色が青に変わる。エネルギー切断能力は無いが、純粋な物理切れ味を大きく上げている。また、零落白夜同様にこの時もシールドエネルギーを消費するが、零落白夜に比べると微々たるもの。

零落白夜

原作とあまり変わらないが、実体の刀身にエネルギーを通す形にしている。エネルギーで刀身を形成していた雪片にくらべるとエネルギー消費がかなり少なくなっている。ただし、標準状態で使用した場合。

リミッターを解除して、雪片の時と同じくらいのエネルギー消費で使用した場合、シールドどころか絶対防御すら斬り裂く、正真正銘必殺の一撃になる。

この機能は今のところ実際に使った一夏と開発者しか知らないが、無人機の残骸を見た千冬は薄々感づいている。

使用時はまばゆいほどの青白色の光が刀身の刃を覆う。

リミッター解除時は炎が燃え盛るように刀身全体をエネルギーが覆う。

無人機戦では一夏は無意識でリミッター解除を使用。

データとして内蔵されていたスペックは白式を展開した一夏のみが見れるが、そのあまりの性能にさしもの一夏も大いに引き、やりすぎないように気をつけようと考えた程。

一夏が「最強の刀を」なんて言っちゃったから、現状ブレード型装備としては本当に最強になっちゃったww

さて、一夏の新装備、いかがでしたか？

作者はこう思いました。「やっちゃまった・・・」

第十八話（二巻開始）（前書き）

というわけで原作二巻スタートです。

ちなみに、作者はついに予備校が始まりまして、更新ペースが落ちることが予測されます。ご了承ください。

第十八話（二巻開始）

彼の心は渴いていた。

彼の周囲の人間は皆、彼にとって素晴らしい人物だった。

凛々しく力強い、そして何よりも優しい姉。

かつて共にあり、一度は別れたが再会した二人の幼なじみ。

共に高みを目指す好敵手となった友。

彼女らに囲まれる彼は確かに、それを幸福としていた。

だが渴く。どうしようも無く渴く。

彼は求めていた。

誰にも明かさない自身の闇を、紅色に彩られた過去を打ち明けられる者を。それを受け入れる者を。

彼は求めていた。

己が物となった最強の一振り、それを純然たる殺意と共に振るうに足る者を。

彼の心はどうしようもなく渴いていた。

だからこそ、彼にとって彼女達二人との出会いは運命だったのかも
しれない……

色々あってうやむやになったクラス対抗戦の後、遂に俺達一年にも寮の外への外出許可が下りた。

ん？それでどうしたかだつて？愚問だな。

家に刀を取りに行ったに決まっている！！

全力ダツシユで駆けたい気持ちを抑え、久しぶりの我が家に着いた俺は、静かに玄関の鍵を開けて中へ入る。

そして自室へ向かい、その一角に静かに鎮座する愛刀を見つけた時、俺の心は感極まった。

「陽炎！！！」

陽炎かげろう。それが、俺が師より譲り受けた刀の名前だ。ちなみに命名は俺。ノリと勢いでつけた。

やっぱりね、自分で名前付けると愛着が凄く湧くんた。

とりあえず鞘に収まったままの陽炎を手取る。じっくり眺める。

イイネ。

次に鞘に頬擦りをする。ああ、鞘の滑らかな肌触りがタマラナイ。

フヒ。

そして静かに鯉口を切り、そのまま流れるように抜く。ああ、刀身が光を浴びたあの一瞬の煌めき。もうタマンネエ！

そのままじっくりたつぷりと刀身を眺め続ける。

きっとその時の俺の表情は凄く締まりのないものだったろうさ。

さて、愛刀と感動の再会を果たした俺は軽く家の掃除をする。

俺や千冬姉といった使用者が居ないせいかな、そこまで汚れちゃいな
い。あちらこちらに溜まった埃を掃っておしまい。割と早く済んだ。

そして俺は陽炎を竹刀袋でカモフラージュすると、それを背に家を出た。

そして現在、俺は中学時代からの友人、五反田^{ごたんだん}弾の家にお邪魔し、
弾とゲームに興じている。

「しつつかし、話を聞けば聞くほどお前が羨ましいな」

ゲームを操作しながら弾が俺に言う。

「そんな良いモンでもねえぞ。周りに女子しか居ないなんざ、メン
タルに厳しい」

「その状況が羨ましいんだよ。何せ俺を始めとした世の男にとって
は未知の世界だからな」

「なるほど。未知の空間へのチャレンジ精神は大いに結構。けどな、
チャレンジした代価は動物園の珍獣扱いだと言っておく」

「それでもだな」

全く、弾もなかなかしぶといな。まああれは体験しなきゃ分からない。
いつそ千冬姉に頼んで「一日男は自分一人の気まずいツアー」
でもコイツにやらせてみるか。
まあありえないけど。

「あ、わりい。俺の勝ち」

「んな！？」

気が付けばゲームにて俺が操作しているキャラが弾の操作するキャラに負けていた。

ちなみにこのゲーム、タイトルを「IS/VIS」という。ヴァーエスト・スカイタイトル
のまんま、ゲーム中でISを操作してバトルするというゲームだ。

開発元は日本の企業。こういうゲームはやはり世界的に見ても日本製が多い。

このゲーム、発売一ヶ月で100万本以上がバカ売れし、海外でも売れに売れたのだが、実は発売後に各国から苦情が来たのだ。

第二回モンド・グロツソのデータを採用しているらしいが、各国はこう言っただ。曰く「我が国の代表はこんな弱くない！」とのこと。

ニュースでも話題になったけどな、俺はこう思ったよ。アホくさ、と。

その後、慌てた開発元はそれぞれの国が最高性能かされた各国版を発売。これもバカ売れしたそう。内部の数値弄るだけの楽な作業だから、実にボロい稼ぎ方だと思った。

ただ、このゲームで開発元は物凄い黒字を叩きだし、その資金力を使って以降も様々なゲームを開発。豊富な資金のおかげでクオリティも高く、開発元はゲーム関連では一気に日本どころか世界でもトップクラスの会社になったそう。

世の中何があるか分からねえな。俺がIS学園に通うこともそうだけ。

ちなみに、このゲームに関してもう一つ面白い話がある。いや、俺

からすると複雑な気持ちになる話だけだな。

世界各国でそれぞれのバージョンが発売されたこのゲームだが、ただ一国の代表のデータは全世界共通で最高性能を持っているのだ。その国とは日本。即ち、当時の代表だった千冬姉のデータだった。どういうわけか、このことに関しては苦情は一切無かったらしい。

この話を聞いた時、俺はただ苦笑いを浮かべるしか無かったよ。ああ、しょうがない。ちなみに、今俺の隣に居る弾を始めとする千冬姉を知る俺の友人達も似たような反応だった。みんな口を揃えてこう言ったのだ。「千冬さんなら仕方ない」
同意はするけどな。

そして弾とのゲーム対戦を終えた俺は、そのまま弾の家が経営する定食屋で昼飯をご馳走になった。

その時に弾の妹である蘭にも久しぶりに会った。なにやら慌てた様子だったけど、急ぎの用事でもあったのかね？

そして昼飯を頂いた俺は弾の家からお暇し、学園に戻った。

ちなみに陽炎は竹刀袋に入れたままベッド下の収納スペースに仕舞った。

一応危険物だからな。あまり人目には着かせたくない。

そんなこんなで何気ない一日が再び過ぎ去ろうとしていたが、この日から俺の学園生活は再び変化を迎えた。

「部屋の移動？」

「はい！」

箒の疑問の声に山田先生が答える。先生の話はこうだ。ちょうど寮に空き部屋ができた。そこで、箒が部屋を移動するという話になったのだ。

さすがにいつまでも年頃の男女を同じ部屋で寝泊まりさせるわけにはいかないらしい。至極道理だな。

ん？なんか箒の顔が固い。何故だ？

「一夏！お前はどう思っただい！？いきなりこのようなことを言われて！」

いきなり聞くなよ。だがどう思うか、か。そうだな…

「まあいいんじゃないの？実際問題、年頃の男女が同室なんて評判悪そうだし。もしマスコミにでもすっぱ抜かれてみる。えらい騒ぎになるぞ」

思い出されるは俺がISを動かした直後。連日押しかけるマスコミという名のハイエナ。まあ連中も情報伝えるのが仕事なわけだが、押しかけられるこっちにしてみれば堪ったもんじゃない。

もしこの学園であの時と同じ状況になってみる。あの時は刀を持ち出しそうになったが、今なら白式を持ち出したくなるかもしれん。…いや、盛大な法律違反だからしないけどさ。

そもそもIS学園のセキュリティはとにかく硬い。その硬さたるや、機密軍事施設並だ。だからマスコミの押しかけの心配は無いのだが、やはり世間の評判ってのは大事さ。

一応その辺もつらつらと説いて、箒に部屋の移動をした方が良く、言っとく。

「先生！私は部屋を移動します！今すぐ！」

そう言つて箒は荷物を纏めて部屋を出ようとする。分かってくれたのか？随分いらついた顔だが、マスコミに詰め寄られる光景でも想像したのかね。理解してくれたなら結構だが。

そのまま箒は部屋を出た。とりあえずドアは静かに閉めような。俺は山田先生と顔を見合わせた。

「どうしたんでしょうか、篠ノ之さん」

「いや、俺にはさっぱり」

まあ、確かに一ヶ月近く同室が続いて互いに気心が知れてきた矢先に、今回の引越したもんな。やはり動揺してるのか？

「それじゃあ、私も戻りますね？」

そう言つて山田先生も部屋を出る。

これで部屋には俺一人が残ったわけだが、さてどうしよう。

「……ひとまず鍛えるか……」

とりあえずは腕立てから始めるか。

と思つたら、部屋のドアをノックする音。一体誰だよ。

「箒……」

やって来たのは箒だった。さっき出たばかりなのにどうしたよ。

「話がある」

「どうした」

「話か…」

「ここ最近、こいつとでかいトラブルは起こしてないから、話し合いが必要なことはないはずだし…」

「今度の学年別個人トーナメントのことだが」

「トーナメント？ああアレね。学年全員でやるトーナメント。俺の楽しみな行事の一つ。」

「こ、今度のトーナメント！私が優勝したら付き合ってもらおう！」

276

「そう言つと篤はそのまま走り去っていった。」

「付き合つ？付き合つて…何を？」

「ふむ…しかしトーナメント、優勝ときたか…」

「自然と口の端が上がる。優勝とは、また随分と大きく出たな、篤の奴。」

「面白い。実に面白い。また一人戦うのが楽しみな奴が出てきた。セシリアや鈴、誰かが言つてた四組の専用機持ちとやら。」

「今のところ、俺が戦つてみたいと思つているメンツだが、そこに篤も加えるでしょう。」

「しかし篤か。中々面白くなりそうだ。確かにあいつも俺と同様に素」

人だ。とはいえ、はつきり言っただ俺の方が多少はやれると思う。だが、あいつは曲がりなりにも剣道の全国優勝者。

専用機が無いアイツは学園の機体を使うのだから、そうならば使うのは打鉄だろう。ならあいつと相性は良いはず。もしかしたら良い組み合わせになるかもしれない。

なによりだ。箒のことだ。優勝すると言った以上、本気で優勝を狙いにくるだろう。それが一番楽しみだ。

何が何でも勝つと心に決めて向かってくる箒がどれだけなのか。それを考えると自然と笑いが込み上げる。

「いいなあ、箒。お前最高だよ。そうこなくっちゃ面白くねえ」

けどな、箒。優勝はできると思うなよ？その本気のお前を、俺が倒したいんだからさ。そして、倒させてもらっぜ？ふと、手首にある待機状態の白式が一瞬光った気がした。

もしかしたらただの光の反射なのかもしれない。だが、俺にはまるで白式もいずれ来る戦いを待ち望んでいるように思えた。

ああ、本当に今から楽しみだ。

side out

「私が優勝したら付き合ってもらっ！」

その箒の言葉を聞いていた者は一夏以外にも居た。

「聞いた？」

「聞いた聞いた」

「うふふのふ」

「これは物凄いことな予感だよ。ウフフフフ」

廊下の影に潜む三つの人影が放つ呟きは、誰にも聞かれることなく虚空へと消えていった。

夜が明けて朝が来る。

いつものように早朝トレーニングを終え、朝食を摂り、準備を整えた一夏は教室へと向かう。

「やっぱりハツキ社製のがいいよね」

「え？あれってデザインだけじゃない？」

「そのデザインが良いんだよ」

教室に入った一夏の耳に聞こえたのは数名のクラスメイトの会話。

(ISスーツの話が…)

会話から一夏はクラスメイトの話題が ISスーツのことだと分かる。

「ねえねえ織斑君。織斑君の ISスーツって特別製なんだよね？」

会話をしていた一人が一夏に話し掛ける。

「ん？ああ、そういえばそうだったな。なんか俺用に特別に用意されたんだよ。どこぞの研究室の特注でな。研究のためだと」

ちなみに一夏のISスーツはシャツとズボンの全身タイプである。

これはISスーツを用意した研究室側の配慮でもある。

スパッツ型などもあるが、基本的にISスーツのほとんどは女性用水着のようなデザインだ。それを男に着せるのは流石に忍びなかつたらしい。

「ISスーツはですね」

そんな言葉と共に一組副担任の真耶が、ISスーツの機能性について語りながら教室に入ってきて来る。

はつきり分かりやすく説明をするその姿はまさしく教師と呼べるもので、数人の生徒が彼女に賛辞を送る。ただし、その言葉は教師相手にはやや軽いものだが。

予鈴が鳴り、教室のあちこちに居た生徒が各々の席に座る。

「諸君、おはよう」

その言葉と共に担任である千冬が教師に入ってきて来る。

気付いた者は居ないが、彼女が着ているスーツは衣更えに合わせ、一夏が用意した夏用のものである。当然ながら一夏は気付いている。

「「「おはようございます！」「」」

一糸乱れぬ挨拶の声。

このクラスにおいて、彼女がどのような存在かを如実に示している。

「さて、今日からISの実習訓練に入る」

その言葉と共に、千冬が訓練の説明をする。

訓練機の使用と、当然ながら存在する危険の説明。その他、ISスーツに関する注意事項だ。

特にISスーツについては、クラス一同一語たりとも聞き漏らさぬと言わんばかりに聞いていた。

忘れると、学園の水着（旧スク）で訓練。それすら無い場合は下着男子が存在するクラス故に、その点への注意は密にする必要がある。

「では山田先生、SHRを」

「は、はい。それではSHRを始めますよ」

真耶の言葉でSHRが始まる。本来ならこれは担任である千冬の仕事なのだが、千冬が職員会議のためSHRに間に合わず、真耶が代理を勤めるということが頻繁にあった結果、いつの間にかSHRの進行は彼女が行うという空気になっていた。

「今日は皆さんにお知らせがあります。なんと、このクラスに新しいお友達が二人増えます。転校生です！」

その言葉にクラスがざわつく。

（転校生だ？ということとは、相応の実力者か）

一夏もまた同様。転校生という言葉に反応する。

ここは天下のIS学園。普通に入学することさえ困難なこの学園に転校できる。

そのことがどれ程のことかは推して知るべし。

無論、一夏もそのことは理解している。そして転校が可能な以上、ISの経験者、それも実力者であることは明白。

一夏の心はいつの間にか、まだ見ぬ転校との戦いに心を向けていた。知らず顔に笑みが浮かぶ。

だが、真耶に促され教室に入ってきた二人の人物を見て、その表情が固まった。

いや、一夏だけでは無い。いつの間にかクラスも静まり返っていた。

転校生の一人は小柄な少女だった。長く伸びた美しい銀髪に、人形のように整った容姿。しかしながらも放つ空気はどこまでも冷たい。まるで氷の彫像のごとき少女。

確かに彼女も目を引く姿だ。

だが、クラスの視線はもう一人に集中していた。

中でも一夏がもっとも強く、その姿を凝視していた。

真耶に促され、金髪を持つもう一人が口を開く。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。色々不慣れなこともあります。よろしくお願いします」

そう、彼は名乗ったのだ。

第十八話（二巻開始）（後書き）

シャルロット党の皆さん！ブラックラビッツ党の皆さん！お待たせしました！

ついにシャルとラウラの登場です！！

シャルロット党の作者も待ってました！ここまで話を進めるのを！！

さて、ちょっと頭に湧いた妄想なんですがね。

皆さん、ちよっぴり病み入ったシャルとかどうですか？

一夏に影響されて、家のことか吹っ切れると同時に、若干狂気を秘めちゃうシャルとか。

まあ作者の妄想ですので。ただ、感想とかで見たいって意見があったら、やるかもしれません。

ええ、決して、作者が狂気微妙に入ったり、ちよっとヤンデレなシャルも書きたいと思ったわけじゃないですよ。ええ。

さて、もう一つ。

ラウラに関して作者は一つの思いがあります。

ずばり、トーナメントの決戦を血戦にしよう。

まあそんな感じです。

皆様、今後も本作をよろしくお願いします。

あ、感想もどしどしどうぞ。作者のテンションが上がります。

誤字指摘などのご意見も遠慮無くどうぞ。

第十九話（前書き）

今回はそこまで特別な内容ではないかと…

第十九話

クラスが静けさに包まれている。

生徒の誰もが言葉を失っていた。それほどに、今の状況は驚嘆に値するものなのだ。

「お、男……？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方が居るといっているので本国より転入をしました」

誰かの呟きに彼、シャルル・デュノアは答える。

未だ続く沈黙。状況を飲み込めていないと思われるシャルルが軽く小首を傾げる。

そして…

「「「きゃあああああああああああ！！！！！」」」

教室の空気が爆発した。そう比喻できる程の大音量が響く。音源は明白。クラス中の生徒があげた黄色い悲鳴によるものだ。

「男！二人目の男！」

「しかもウチのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の美少年！！！」

クラスのあちこちから歓喜の声があがる。

突然の大騒ぎに教室の前に立つシャルルは驚いた表情をしている。

ちなみに、突然現れた男の存在に呆然としていた一夏は、席が最前列のため女子の黄色い悲鳴による大音量を直接受け、現在耳を抑えながら悶絶している。

「あゝ、静かにしろ。まだ終わつたらん」

流石に埒が開かないと見た千冬が生徒達に静粛を促す。

その言葉に、流石の彼女らもすぐに静かになる。それを見計らい、一夏も抑えていた耳から手を離れた。

しかしながら、依然として彼女達がシャルルに気を向けているのを一夏はヒシヒシと感じていた。

「えゝ、それじゃあ続けますね？」

少しばかり疲れた様子で真耶がもう一人の転校生に自己紹介を促す。

先程までシャルルに夢中であつた少女らも、この時ばかりはもう一人の転校生である銀髪の少女に意識を向けていた。

それは一夏も同様。

だが、その目は他の生徒とは違っていた。静かに見定めるかのよう
に静かな眼差し。

少女が放つ硬質の空気が自然と一夏の意識を張り詰めさせていた。

「……………」

だが、少女は無言。まるで語って聞かせることなど無いという風だ。だが、その印象はあながち間違いいではないだろう。その瞳はひどく冷めていた。クラスを見つめる眼差しはまるで道端の小石を見るかのように無感情。

透き通るような白さを持つ肌や輝くような銀髪も彼女の放つ空気により、美しさよりも冷たさを感じさせる。何よりも、彼女の右目を覆う物々しい眼帯が威圧感を大きくしていた。

「挨拶をしる、ラウラ」

「はい、教官」

千冬に促された少女、ラウラは千冬に敬礼で答える。非常に洗練された動きの敬礼は彼女が何者なのかを如実に示していた。そして、千冬を見る彼女の目には確かな感情の色があった。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

それきり、ラウラは再び黙ってしまう。

クラスの少女達も、どのように反応したら良いか分からないのか、何も言えない。

「え〜と、以上ですか？」

「以上だ」

恐る恐る尋ねる真耶にラウラは簡潔に答える。

ふと、ラウラの視線が一瞬教室を探る。そしてある一点で目を止め

ると、そこに向かい歩み寄る。

ヒュッ、ガッ

それは一瞬だった。

突然の音に教室中の視線が音の出所に集中する。

視線の先、教室最前列の座席の位置では、平手打ちを放とうと振られたラウラの手と、それを遮るように上げられた一夏の腕がぶつかり合っていた。

「中々に刺激的な挨拶じゃないか。え？転校生」

「認めない。貴様があの人の子であるなど、認めるものか！」

side 一夏

突如起きた大音量に盛大に頭を吹っ飛ばされた俺は、ようやく静かになった教室を見て、耳を塞ぐ手を離れた。酷い目にあった。

しかし、男か…

正直言うと俺だって驚いている。まあ、それを言葉にするチャンスはクラスのみんなが潰してくれたがな。

ああ、驚いているとも。だが、今はそのことは保留にしようか。

俺の視線の先にはもう一人の転校生が居る。確かにデュノアも気になるが、今はこちらが更に気になる。

何故かって？雰囲気が違うんだよ。

真冬の冷たさを思わせる空気を放ち、静かに立つその姿には一分の

際も無い。極めつけは千冬姉にしてみせた見事な敬礼だ。これではつきりした。このラウラとか言う女、堅気じゃない。モノホンの軍人だ。

さすがはIS学園と言ったところだ。まさか軍人まで入れるとはな間違ひなくコイツはデキルやつだ。全く、戦り甲斐のある相手が次々に出るとは。この学園の生活もまんざら悪くなさそうだ。

名前だけ名乗ってボーデヴィツヒは黙る。しかし、千冬姉を教官と呼ぶということはあいつはドイツの…？

そう考えているとボーデヴィツヒが近づいて来る。友好を深めようって空気じゃないな。目が語ってる。

反射的に腕を上げた。途端、何か当たる感覚。目を向ければ、そこには俺の腕に止められているボーデヴィツヒの手があった。おお怖い怖い。そんなきつく睨みやがって。

「中々に刺激的な挨拶じゃないか。え？転校生」

とりあえず軽くそう言ってみる。だが、少しばかり怒気を入れとくさて、どう反応するやら。

「認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか！」

動じるどころか、思いつ切り怒りをぶつけながら言ってきたよ。まあ、動じないところは予想していたが。

しかし、俺を千冬姉の弟とは認めない、か。まあ不肖の弟だとは自覚しているけど、それをわざわざ他人に言われる筋合いはねえよな。

どれ、からかい込みで返してみるか。

「あいにく戸籍でも血縁でも俺は千冬ね、織斑先生の弟だし、このクラスを始めに世間一般もそうだと認識している。お前が一人で喚いたところで、どうにもならないぜ？いっそ滑稽にすら見える」

そうせせら笑うように言っていると、ボーデヴィツヒは一気に表情を憤怒に染めた。凄い殺気だ。おいおい、そんなマジになるな。俺までその気になるだろうが。

「ふんっ！」

だが、ボーデヴィツヒはそのまま俺の元を立ち去り空いている席に座る。流石に状況を弁えたか。まあ俺としては今すぐでも構わないけど、さすがにみんなや千冬姉の手前だしなあ。

「では、SHRを終わる。一時間目は二組と合同でIS実習だ。遅れるな。それと、織斑はデュノアの面倒を見るように」

そう言つて千冬姉と山田先生が教室を出る。

千冬姉はともかく山田先生はこっちを心配そうに見ていたが、とりあえず軽い笑顔でごまかそう。

さて、IS実習となるとさっさと俺も動かなきゃならんわけだが、肝心のデュノア君は〜と。

「ええと、君が織斑一夏君？僕は」

「ちようどいい。話は後だ。来い」

悪いがチンタラしてる暇は無い。
俺はデュノアの腕を掴むとそそくさと教室から連れ出した。

「あ、あのう・・・」

「俺達男子は空いているアリーナ更衣室で着替える。実習の度に移動しなきゃならんから遅れないように気をつけろよ。分からないことがあったら聞いてくれ」

「あ、うん」

さて、会話する時間も惜しい。さっさと更衣室に行かなきゃならない。だというのだ。

「ああ！転校生発見！！」

「しかも織斑君と一緒に！！」

ええい！何故ここで出てくる、女子集団！！しかも先頭は俺のクラス代表就任パーティの時に来た新聞部の先輩！！捕まったら厄介だぞ！！

「先輩！！あんたがここで出てくるか！！つか授業はどうしたあ！？」

「そんなもの！スクープに比べたら意味が無いわ！！インタビューが先よ！！」

この人駄目だ！！学生として駄目だ！！ならしょうがない！切り札を切らせて貰うぞ！

「先輩！ここで下がらなきゃ授業を軽んじた先の発言！あれを織斑先生に報告しますよ！！」

「え？」

俺の言葉に先輩を筆頭とした集団の足が止まる。流石は千冬姉。名前だけでも効果絶大！そして今だ！！

「というわけでさらば！！行くぞデュノア！！」

そう言っただけで俺はデュノアの腕を引っつかみながら一気に走り去る。デュノアは状況が呑み込めていないみたいだが、理解するよりも走ることが先決だ！！

「ああ！織斑君！！待って！」

「誰が待つかあ！！」

そのまま俺たちは走り抜け、どうにか更衣室に辿り着いた。全く、実習前だったのに。面倒なことに体力使わせやがって。

「な、何だったの？」

「IS学園な残念な名物、と言いたいがな。簡単な理由だ。世界に二人しか居ない男なIS操縦者。珍しいんだらうよ」

「あ、そっか」

気付いて無かったのか？もしかやこいつ、天然か？

「そうだ。自己紹介がまだだったな。織斑一夏だ。一夏でいいぞ」「シャルル・デュノア。僕のことシャルルでいいよ。よろしく、一夏」

「ああ、よろしく」

そうやって俺達は簡潔に自己紹介を済ませる。

「っと！時間がないんだ。早く着替えるぞ」

そうやって俺は制服の上着を脱ぎ、上半身を晒す。うん、いい感じに今日も腹筋とかがキテるな。

「うひゃわぁ！」

「どうした、シャルル。いきなり変な声上げて」

「い、一夏…いきなり脱いで…」

「いやだって、脱がなきゃ着替えられないだろ？」

「う、うん…そうなんだけど…」

おかしなやつだ。別に男同士なんだから気にする必要なんざなからうに。

「そ、その…僕ね。今まで誰かと着替えたりとかしなかったから…」

「つまり慣れてないと?」

「うん……」

なるほど。あれかね。箱入りというやつなのかね。そういうのは女にあることだと思っていたが。

「まあいい。なら互いに後ろを向いて着替えるぞ」

そう言つて俺はシャルルに背を向ける。細かいことは後回しだ。早く着替えなきゃならん。授業に遅れでもしてみろ。千冬姉にどんな折檻かまされるか分かったもんじゃない。

「おい、シャルル。大丈夫…か…」

後ろを向いた俺は驚いたよ。だつてさ

「ん?どうしたの、一夏?早くしなきゃでしょ?」

既にシャルルは着替え終わっていたんだから。

「早あ!?!なんでそんなに早いんだよ!?!」

「え〜と、コツと慣れかな?」

さいですか。後でそのコツとやらを教えてください。

さて、着替え終わった俺達はなんとか授業に間に合った。

なお、黛先輩のことは千冬姉に報告していない。別に遅刻したわけ

でもないし、流石に酷な所業だからな。

「では、本日から格闘および射撃を含む実戦訓練を開始する」

「「「はい！！」「」」

千冬姉の言葉に生徒達が力強く答える。やはり千冬姉が教えるというのが大きいのだろう。声に気合いが入ってら。

「まずは戦闘を実演してもらおう。凰！オルコット！専用機持ちならすぐに始められるだろう。前に出ろ」

千冬姉から指示が飛ぶが、指名されたセシリアと鈴はあまり乗り気でなさそうだ。なら俺と変わってはくれないかね。戦闘ならこつちからお願いしたいんだがね。

だが、千冬姉が二人に何事かを囁くと二人は急にやる気を出した。何を言われたんだろううな。

「それで、お相手はどなたですか？わたくしは鈴さんと試合をするのも構いませんが」

セシリアと鈴の二人だが、いつの間にか友誼を深めていた。関係は俺とセシリアの関係と似たようなもので、よき友人にして好敵手とあったところだ。

同じ代表候補生ということで、何か通じ合うものがあるらしい。

「あたしもセシリアとはやってみたいわ。なんだかんだでセシリアとはまだ一度もやってないし」

鈴も乗り気だ。できれば俺とやって欲しいがな。この間は邪魔が入ったし。

「そう慌てるな。お前達の相手はちゃんと居る」

へえ。セシリアや鈴の相手ができる人物か。一体誰かね？

キィイン……

ん？なんだ、この音？

「あああー！ー！ど、どいて下さーい！ー！」

そんな声が聞こえたのでどきました。

軽くステップを踏んで5メートルくらい下がる。この程度の動きなら造作もない。

そして後ろに下がった瞬間、俺が先程まで居た場所に何かが墜落した。

明らかにでかい物が落ちた音と、大量の土煙が舞う。

俺もだが、他のみんなも何事？と言いたげに落下地点を見ている。

「あつ、失敗しちゃいました」

土煙が晴れた先には倒れた姿勢の山田先生の姿があった。

だが、その姿はいつもと違う。ISを纏ってるんだよ。ダークグリーンの装甲を持つ機体。学園の訓練機か？なんか盛大に墜落したけど、まあISを装備してるなら怪我の心配はないだろ。

ただ、その…

山田先生、その、あまり動かないで下さい。その、ISスーツ着てるのにやたら揺れてるんですよ。
思春期男子には目にきつい。

少々ハプニングが起きたが、なんとか場は収まった。そして千冬姉の説明によると山田先生がセシリアと鈴を同時に相手をするらしい。正直ね。最初は無茶だと思った。山田先生も昔は日本の代表候補生だったらしいけど、代表候補生って言うならセシリアと鈴もそう。結果は二人の勝ちだと思った。

だから今、空中で繰り広げられている戦いに、俺は目どころか心すら奪われていた。
信じられるか？あのセシリアと鈴が見事にやられてるんだぜ？

山田先生が使っている機体についてシャルルが説明をした。

デュノア社製第二世代型IS「ラファール・リヴァイブ」

最後発の第二世代型だが、安定した高さの性能は初期の第三世代にも比する名機。デュノア社をISシェア世界三位に押し上げた決め手。

そっか。シャルルの名字、なんか引つ掛かると思ったら、デュノアか。
世界的企業の社長令息。なるほど。シャルルのやつも中々にでかい肩書きがあるわけだ。

いや、今はそれよりも戦闘だ。

いやもうね。見事としか言えないよ。何と言うか、確かにセシリアも鈴も代表候補生だけあって、技量や実力はあるけどさ。

山田先生はその上を完全に行ってる。そもそも、第二世代型で第三世代二体を手玉にとるとか、どれだけだよ。

ふと俺は、仮に俺と先生が戦ったらと思った。

…ムリだな。相性が悪い。多分俺が挑んでも、今のセシリアと鈴みたいにいよいよに弄ばれるのがオチだ。根本的な技量に差がある。ぎる。

今もまた先生がセシリアの射撃を回避した。絶対あれ、セシリアの癖とか見切ってるよ。

鈴の龍砲も見事に回避してる。見えないのに何でかわせるんだよ。まさか射撃タイミングとか見切って、いるんだろうなあ…

あ、二人がごつつんこしやがった。

うわ、そこへグレネードとは。えげつないな。

そして二人は見事、先生に撃墜された。いやはや、先生お見事。今度俺と手合わせ願いたいです。

「これで、諸君も学園教員の実力が分かったはずだ。以後、敬意を持って接するように」

そんな千冬姉の言葉が聞こえる。

もしかして今の試合、山田先生の箔付けのためにやったのか？なんかありえそうだな。

まあ俺は元々山田先生には敬意を持ってるけどさ。補講とかで色々お世話になっただし。

「ではこれより実習を開始する。専用機持ちはグループリーダーをしる。他の者は出席番号順にそれぞれのグループに均等に別れる」

千冬姉の指示により、実習が始まる。

ひとまず俺が担当するのは一組の最初の方の番号のメンバーだった。何やら皆喜んでいたが、なんでかね？こういうのはむしろセシリアや鈴みたいな代表候補生のグループに入るのが良いだろうに。

ああでも、ボーデヴィツヒのグループはアウトだな。重い空気が見るだけで伝わってくる。

「んじゃ始めるぞ。番号順に、ISに乗っかって歩行。そしたら降りて交代だ。ああ、交代時にISをしゃがませるの忘れるな。ちやっっちゃか済ませようぜ」

そう言っただ俺はグループの女子達に指示を出す。何やら会話を誘ってきたが、今は断ることにした。いや、会話とかして友好を深めるのはやぶさかじゃないんだけどさ。それで遅れて千冬姉にグラウンド10周とか言われたら、どうしようもないし。

そのことを言っただ迅速な行動を求めたら、みんな素直に従ってくれた。ありがとう。理解が早くて助かる。

そしてなんだかんだで実習も終わったよ。いや、大した事故も無くて良かった。

「では、これにて今回の授業は終了だ。男子はISを片付けるよう

に」

そう言っつて千冬姉は去っていった。

とりあえず俺はシャルルに手伝いを頼もうとした。そしたらだ。クラスの皆に阻まれました。

曰く「デュノア君にそんなことさせられない！」だと。

扱いの差にちよつとショックを受けた。

しかしシャルルか…

何と言うか、少し妙なやつだ。あまり男らしく感じない。

声もこの年頃にしては随分高いし、骨格もあまりがっしりしてない。

まあ、そういう男子もいないわけじゃないがなあ。

そんなことを考えつつ、俺は一人でISを片付けていた。

物寂しさに少し胸が痛くなつたのは内緒だ。

side out

第十九話（後書き）

いやはや、予備校が始まったら急に時間がなくなりました。

さて、シャルの女バレは何時になるのか？

シャルは病むのか？

作者自身、気になるところではありませんが、どうか気長に続きをお待ち下さい。

第二十話（加筆修正有）（前書き）

予備校開始で一気に執筆時間が減りました。
何とか書き上げましたが、クオリティダウンとかしていないか心配
です。

第二十話（加筆修正有）

side 一夏

さて、午前の授業も終了。昼休みになったため、俺はシャルル、箒、セシリア、鈴と共に昼食を摂るべく屋上に居た。

ん？箒さんや。何故苦い表情をしている。

コラ、鈴と睨み合うな。シャルルとセシリアがポカンとしているじゃないか。

「え〜と、一夏？本当に僕が居ていいのかな？」

ふむ、シャルルよ。それは実につまらん質問だな。

「飯は大人数で食う方がいいに決まっている。それに、シャルルはまだ学園のことをあまり知らないだろ？ならば同じ男としてきつちり面倒を見なきゃならん。同室になったことだしな」

「ありがとう」

うん、良い顔だ。シャルルは器量が良いからな。笑う顔がよく合う。しかし、本当にシャルルは男と言うには柔らかすぎる顔立ちだな。

「こら箒、鈴。いつまでもやってるな。この昼食はささやかながら、俺達とシャルルの懇親でもあるんだ。ちなみに俺が今決めた。異論は無いな？」

未だにガンを飛ばし合ってる箒と鈴に注意をする。全くこいつらは。

しょうがねえなあ。

「あ、あの。頃合いですし、そろそろ食事を始めませんか？」

セシリアナイス。

「そうだな、さっさと食いはじめようか。昼休みも有限だ」

そう言って俺は食事の開始を促した。

「ねえ一夏。一夏のお昼は？」

シャルルがそう思うのもむべなるかな。俺の手元には何も無い。

ちなみにシャルルとセシリアは購買で買ったらしいサンドイッチを持参している。

「ああそれな。それはだな。おい鈴。言われた通り手ぶらだぞ。一体どうすんだ？」

理由は簡単。鈴を昼飯に誘ったところ、俺は何も持って来ないよう頼まれたのだ。やたら強い口調で言われたから、従うほか無かったわけだが。

「言われた通りにしたのね、ふふん。タイミングが良かったわ。今日はあたし、酢豚を作ったのよ！一夏。あんたに食べさせてあげるわ！」

そう言って鈴は得意げに酢豚の入った容器を俺の目の前に出した。これはこれは。実に僥倖だ。

「へえ。鈴の作った酢豚か。そいつは楽しみだ。どれ、早速頂くぞ」
そう言つて俺は鈴に渡された割り箸で酢豚を食べる。

「おお！美味しい！」

うん。美味しいとしか言えないな。

味のバランスが見事だ。しっかりした味付けだが濃すぎず、いくらでもイケる。

「一夏！」

「ん？どした、箸？」

鈴の酢豚を堪能している俺に箸が話し掛ける。
見れば箸も弁当箱とおぼしき物を差し出していた。

「これは？」

「今日は私も自作でな。せっかくだから分けてやる」

そう言いながら箸は弁当箱の蓋を開ける。

「おお、これは！」

そこには、まさに本格派と呼べる弁当があった。
これを俺に分けてくれると？こいつは嬉しい誤算だ。

「なら早速もらうぞ。いやはや楽しみだ」

そして俺は唐揚げを一つ貰う。そして口に頬張った俺は目を見開いた。

「こ、これは…！」

何と言う美味さ！衣はサクツとした心地好い食感。そして一度噛むと肉汁が溢れ、それがまた美味しい！

「これは美味しいな！かなり手間がかかっていると見た！」

思わず興奮しながら言う。いやだって、本当に美味しいんだもん。箸が作り方を解説するが、なるほど確かに。大した手間だ。これならこの美味さも頷ける。

「いやはや、今日の俺は幸運だな。こんな美味しい昼飯にありつけたんだから」

ああ。今日の昼飯は実に良いものだ。箸と鈴も、自分の料理が好評だったことに気を良くしたらしく、以降の食事は実に和気藹々と進んだよ。

さらにこの昼食でシャルルも箸、セシリア、鈴と打ち解けたらしく、俺の当初の目論みは見事に達成されたのだ。

やはり卓を囲んで食事をするというのは良いものだな。まあ、ここ屋上だから卓なんて無いけどさ。

side out

昼食を終えた一夏達四人は、まだ昼休みの時間があるということ
で食休みを兼ねた会話をしていた。

「それじゃ何？あのラウラとかって転校生、いきなり一夏に平手打
ちかましたわけ？」

朝のSHRでの出来事を篝やセシリアから聞いた鈴は驚いた様子で
一夏に尋ねる。

「未遂に終わったけどな。明らかに友好的じゃない雰囲気だった。
警戒してたら、後はあの通りというわけだ」

なんでもない、気にしていないと言わんばかりの様子で一夏はあっ
さり答える。

「何て言うか。あんたって昔から変わってるわね。自分に向けられ
た敵意をそんな簡単に流せるなんて」

やや呆れ気味に言う鈴に、一夏は肩をすくめながら答えた。

「あいにく命の危険を感じたわけでもないからなあ。まあ気になら
ないと言ったら嘘だけど、そこまでではないよ。しかし、あれを考
えるとセシリアの最初の頃なんかいつそ可愛く思えてくるな」

なあ？と一夏はセシリアに視線を向ける。

「そ、そのことは言わないで下さい。わたくしも反省しているので
すから」

話を向けられたセシリアは顔を赤くしながら言う。

あのクラス代表決定戦の後、セシリアは一夏に対して取った高圧的な態度を恥じており、その時のことは彼女の中では所謂「黒歴史」となっていた。

本人としては、その時の自分が酷く嫌な人間に見えて、その時の行動を深く恥じている。

だが、もう一人の当事者である一夏がまるで気にしていないのは一つの幸いであつたと言える。

「で、一夏。あんたアイツとどんな関係なのよ？」

「そつだ。それは私も詳しく知りたい」

鈴が一夏にラウラについて問いただし、箒もそれに続く。見れば二人の顔はやや険しい。

二人ともラウラの一夏に対する行動に多少なりとも憤りを感じているのだ。付け加えるなら、一夏が自分達の知らない女子と関係があるということ警戒しているということもあるが。

ちなみに、ラウラの行動についてセシリアとシャルルの二人がどう思っているかと言うと、セシリアはいきなり平手打ちをかまそうとする態度に少なからず不快感を覚え、シャルルは状況がよく分からなかったため、なんとも言えないと言った所である。

「俺もあいつとは初対面だ。だが、あの平手打ちなら心当たりはある」

「「「「？」「」」」」

一夏の言葉に四人が揃って疑問の表情を浮かべる。

一夏は無言で携帯端末　学園から生徒に支給される学業の補助ツール　を四人に見せた。

端末の画面にはラウラの簡易プロフィールが映っていた。

「これは？」

「さっき学園のデータベースにアクセスした。転校生で気にしている奴も多いからだろう。簡単なプロフィールが見れた。

映し出された画面にはラウラの顔写真と氏名年齢、出身国。他にも補足事項として簡単な略歴があった。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ、ドイツ出身。ドイツの代表候補生で、ドイツ軍IS部隊所属……。これがどうしたの？」

四人を代表して鈴が一夏に聞く。

「みんな、第二回モンド・グロツソの決勝戦を覚えてるか？千冬姉が不戦敗して、その後引退した試合だ」

一夏の言葉に全員が頷く。ISの国際大会、その優勝候補と各国から目され、名実共に世界最強の座にあった人物の不戦敗という結果と、その後の突然の第一線からの引退は世界中で大きな話題となったのだ。

「あの試合の日、千冬姉が棄権をしたのはある事件に巻き込まれたからだ。そしてその時にドイツ軍が千冬姉に協力してな。その借りを返すために千冬姉は一年間、ドイツ軍でISの教官をしていたんだ。全く、いきなりドイツに一年だからな。俺は驚いたよ」

語る一夏の顔は何故か苦々しい。だが、未だに理解しきれてきない鈴が一夏に話の続きを求め、篝やセシリア、シャルルもそれに続く。

「恐らくボーデヴィツヒはその時の千冬姉の教え子なんだろうな。

教官って呼んでたし。この学園の生徒を見れば分かるけどさ、ISの操縦者から千冬姉はとにかく尊敬されてるんだ。一度も会ったことの無いやつでもだ。そんな中、ボーデヴィツヒは一年も千冬姉から教導を受けた。尊敬ぶりが尋常じゃないんだろうよ」

「それがあんたへの平手打ちにどう繋がるのよ？」

未だ分からないと言いたげな鈴を一夏は軽く見る。

そして少しばかり考えてから、ため息を一つ吐いて言った。

「さあな。そこまでは知らん。何せ俺もあいつに一方的に敵視されていることしか知らないし。予想されることとしては千冬姉の弟という、一番近いポジションに居る俺への嫉妬だろうが、はてさてそれも正しいか分からないな」

これ以上は無いと言いたげに両手を挙げる一夏に四人も一応の納得を見せた。

ただ、それでも篝や鈴、セシリアはラウラの行動が気に入らないらしく、表情が固いままだったが。

そして昼休みも終わりが近付いた。

午後の授業もISの実習であり、準備に時間のかかる男子二人、一夏とシャルルは先に屋上を立ち去った。

「ねえ一夏」

「ん？どうしたよ？」

更衣室に向かう最中、シャルルが一夏に声をかける。

「一夏って放課後はよく訓練してるって本当？」

「ん？まあ、週四日ってところだけど？何せ未熟を痛感させられることばかりだからな。訓練はしなきゃならない」

そう言う一夏が思い出すのはセシリア戦や鈴戦、そしてあの無人機との戦いだ。

どの戦いも自身の未熟故に苦戦した。ましてやセシリアとは共に高みを目指すと誓った。ならば可能な限り訓練はしなければならぬ。

それ故、一夏は平日は三日、土日はアリーナを使える土曜にISの訓練をしていた。

「本音を言うとき、本当は毎日訓練したいんだよ。でも俺は基本的な知識で他の連中に遅れてるからな。それを何とかするために、平日の内の二日は放課後に山田先生から補講を受けているんだよ」

「へえ、一夏って勤勉なんだね」

「いやいやそれ程でも。必要に迫られてだから。まあISの訓練はもはや趣味みたいなもんだけどさ」

感心から来る驚きを露わにするシャルルに一夏は照れ臭そうに答える。

「ねえ一夏。その訓練なんだけどさ。僕も一緒にやっついていいかな？」

「いいぜ」

即答した。全く悩むそぶりを見せず答えた一夏にシャルルは思わず目を見開いた。

「そ、そんなに簡単に答えちゃっていいの」

「いいの。俺もシャルルのISには興味があるからな」

「じゃあ今度一緒に練習しようね！」

そう言っつてシャルルは輝くような笑顔を浮かべた。

side 一夏

さて、シャルルが転校してきてから早五日が過ぎた。本日は土曜日。天気は快晴。

週休二日が一般的な日本においてIS学園は土曜日も授業があるが、さすがに丸一日授業ということは無く、授業は半日で終了。

そして現在、俺とシャルルは学園のアリーナにいる。練習をするやつは俺達以外にも居て、今もアリーナのあちこちにISを装着した人影が見える。

「それにしても、一夏の白式って本当に変わってるね」

シャルルから射撃型武器についての簡単な講習を受けた俺は現在、白式のスペックをシャルルに見せていた。とは言え、詳細なデータ

を見せるわけじゃなくて、軽い模擬戦もどきをやったただけだ。そこまで大したものでは無かったが、ある程度お互いの実力は把握した。やはりIS学園に編入を許されるだけのことはあるな。シャルルの実力はかなりのものだった。タイプとしては山田先生のソレだな。完全な技巧派。正直俺では相性が悪いと思ったよ。

「普通なら空いているはずの拡張領域も全然無いし。こんな機体、見たことがないよ」

先ほどからシャルルは白式を興味深そうに見ている。やはり普通のISを知っているやつからすると、白式は相当の変わり種らしい。

「拡張領域が無いのは知っていたがな。それが何故だか分からんだよ、ウン」

「多分、単一仕様能力の方に容量を使っているんだと思うよ。白式ってまだ一次移行しかしていないでしょ？普通ならその状態で単一仕様能力が発現するのはありえないんだよ」

シャルルの言葉によると単一仕様能力は通常、二次移行後に発動するらしい。だが、二次移行をしても単一仕様能力が発現するとは限らず、現在世界に存在するISの中で単一仕様能力を持ったISはかなり少ないらしい。

まあ、前提条件となる二次移行したISの数自体も少ないから、あの意味当然か。

「それに白式の単一仕様能力の零落白夜だっけ？それって確か織斑先生、初代ブリュンヒルデの能力だよな？普通肉親だからって同じ

能力が発言するとは思わないんだけど。やっぱり不思議だな〜」

シャルルはしきりに不思議がっている。きつと見たこともない珍種を見つけたような気分なんだろうな。

しかし、零落白夜か…

元々は千冬姉が現役で使っていたIS「暮桜」の能力。それが俺の白式に受け継がれている。なんだけどなあ…

今の白式の零落白夜は多分、千冬姉が使っていたソレよりも凶悪だろう。今の白式の武装、蒼炎がそうしてしまった。

確かに零落白夜は強力無比の威力がある。だが、代償としてのとてつもなく悪いエネルギー効率が差し引きになって、なんとかバランスを保っていたと言える。

だが、俺があの人に頼んで手に入れた蒼炎が放つ零落白夜は違う。威力がそのまま、機能の追加をした上にエネルギー効率が跳ね上がったと来ている。はつきり言おう。

何と言うバランスブレイカー。

いや、元々は俺が要求したものとは言えなあ。まさかこれほどとは思わなかった。

あの無人機戦の後、こっそりスペックを確認してぶったまげたもん。

「特殊性もだけど、機体としてのスペックも変わってるよね。機動性特化型。近接型のISでもそれなりにバランスはとれてるけど、白式は機動性が抜きん出てる。防御用の装備が無いのもあるけど、何て言うのかな。ひたすら速さで攻めて必殺の零落白夜で斬るって感じだよな」

ほほう。シャルルの考察は中々に的確だな。

言われてみると、改めて自分がどういうタイプかを理解させられる。

「まあシャルルの言う通りだな。俺と白式の戦い方は簡単だ。近付いて斬る。ただそれだけ」

「なんか凄いシンプルだね。でもなんだか一夏らしいと思うよ」

そう言ってくれるとありがたいな。

正直自分でも、戦い方があまりにも安直すぎやしないかと思っただんだ。

「しかしあれだな。そう考えるとシャルルの戦い方は俺の真逆だな」シャルルのISは「ラファール・リヴァイブ カスタム？」というデュノア製ラファールの改良型だ。

その特筆すべき点は武装の多さ。基本装備を幾つか外して拡張領域を増大。20くらいの武器があるとか。

そしてそれを扱いきるシャルル自身の技量の高さ。「ラビット・スイッチ高速切替」と呼ばれるシャルルの得意技能は、この改良型ラファールの性能を完全に引き出している。

一瞬で武器を切り替えるんだぜ？

近接で斬り合っていたと思ったら、いきなり至近距離からショットガンをぶちかまされたりする。

多分起用さなら同じ代表候補生でも、セシリアや鈴より上だ。

機会があれば全力の試合をしてみたい。すごく楽しそうだ。

「ねえ、あれ…」

「ウソ？ドイツの第三世代？」

「まだ本国でもトライアル段階だって聞いたけど…」

ふと、アリーナの一角からそんな声が聞こえた。

気になった俺とシャルルが、会話をしていた女子の視線の先に目を向けると

「あれは……」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

そこには黒のISを纏ったボーデヴィツヒが居た。攻撃性と重厚さを感じさせるフォルムのISに、やつ自身の放つ雰囲気威圧感を感じさせる。

キラタイ

ふと、そんな言葉が脳裏をよぎった。

「おい」

俺達に気付いたらしいボーデヴィツヒが通信で呼び掛けて来る。

「貴様も専用機持ちらしいな。ならば話は早い。私と戦え」

ほほう。こいつは刺激的なお誘いだ。しかしこいつは何故いきなり戦闘を求めめるのかね？

「貴様さえ居なければ教官が大会二連覇という偉業を成し遂げたことは明白。教官の栄光を奪った貴様を私は許さない。私と戦え！」

ああなるほど。わざわざ喋ってくれてありがとう。おかげでお前が俺を敵視する理由が分かったよ。

そうかいそうかい。大会二連覇の邪魔をしたから、か。なるほど。納得できる理由だ。けどなあ

「クツクツ……クハハ」

「貴様！何がおかしい！！」

おや、思わず笑いが漏れたか。

「いやな、ボーデヴィツヒ。お前が本当に滑稽だと思ったただけだよ。ああクソ、マジ笑える」

あのアマ、自分の言ってることの矛盾に気付いてねえや。ハハ、そんだけ千冬姉に心酔してるってわけか。

ああ面白い。愉快すぎてますます斬りたくなってきたわ。

「貴様！！」

やべ、キレた。うわ、なんか肩のゴツい大砲向けて来やがった。ヤバイ！

ドン！！ガキン！！

だが、放たれた砲弾が俺に当たることは無かった。
一瞬で盾を呼び出したシャルルが大砲の射線に入って、俺を守ったのだ。

「すまん、助かったよ。シャルル」

「貴様、フランスの第二世代アンティークごときで私の前に立ち塞がるか」

「未だに量産の目処すら立ってない第三世代ルーキーより動けるだろうからね」

そのままシャルルとボーデヴィツヒが睨み合う。一触即発の雰囲気だ。これはまずいな。

ひとまず俺も、いつでも蒼炎を呼び出せるようにしておく。だが

「こら！その生徒！何をやっている！！」

どうやらアリーナ監督の先生に見咎められたらしい。
そのままボーデヴィツヒは去って行った。

「大丈夫、一夏？」

「まあな。助かったよ」

「とりあえず僕達も出よう。ちょっと騒ぎすぎたみたい」

見れば周囲の視線が俺達に集中している。
確かに。これでは落ち着いて話せそうにない。

そして、俺達はそのままアリーナを後にしたのだ。

「ねえ一夏。何でボーデヴィツヒさんが滑稽だって言ったの？」

更衣室で着替えながらシャルルが俺に聞いてくる。ちなみに、シャルルに配慮して俺達はロッカーを間に挟んで着替え、お互いが見えないようにしている。

「ああそれな。あいつ、俺が居なきゃ千冬姉が大会二連覇したって言っただろ？あの時に、あいつが俺を嫌う理由が分かってさ。どうにも千冬姉の輝かしい功績とやらに泥を塗った俺がお気に召さないらしい」

全く、あいつも千冬姉に一年教わったってわりには、あまり千冬姉のこと知らねえな。千冬姉がそんな名誉だなんだを気にする玉かったの。あれか。憧れすぎて、本質を見ようとしないってやつかね。

「で、何が滑稽かって？あいつ、千冬姉が大会二連覇しなかったからこそ、自分が千冬姉に教わって、千冬姉を尊敬しているってことに気付いてないってことだよ」

「あ、そっか……」

俺の言葉にシャルルは納得をしたようだ。

全く、実に矛盾したやつだよ。ボーデヴィツヒは。

まああいつがどんな奴かは関係無い。いずれあいつはまた俺に挑んでくるだろう。その時は全力で楽しませてもらうか。

しかし、千冬姉の教え子か。それを斬る。中々面白そうだな。思わ

ず頬がにやけるよ。

やれやれ。いつぞやかに千冬姉との殺し合いを妄想して興奮したことがあったけど、今度はその千冬姉の教え子を斬ることを妄想とはね。

中々どうして。俺という人間はおかしなものだ。

「一夏？どうしたの？僕は着替え終わったよ？」

「ああ、悪い。俺はまだだから先に戻っていてくれ」

「うん、分かったよ」

そう言つてシャルルが更衣室を出る音が聞こえた。

いかんいかん。変なこと考えてないで早く着替えねば。

しかし、ラウラ・ボーデヴィツヒ。俺に敵意を抱く千冬姉のかつての教え子。

クク、あの俺を憎みまくった顔、斬り捨てるとどんな風になるのかね。

泣くか？呆然とするか？俺を憎み続けるか？どんな顔になるか興味深い。

なあ、蒼炎。もしかしたらさ。あいつは俺とお前のために神様がくれた斬り試しの相手かもしれないぜ。とは言え、あいつもかなりの実力だろう。だからこそ、斬る価値がある。蒼炎を全力で振るう価値がある。

蒼炎、一緒に楽しみにしてようぜ？

さて、更衣室で一人妄想に耽った後、俺は部屋に戻るべく寮近くを歩いていた。

すっかり日も暮れて、カラスが「アホー」と鳴いている。うるせえよ。俺だって自分のアホさくらいは理解してらあ。

ふと、前方から声が聞こえる。見れば大小の人影が一つずつ。片方がやたら必死な様子でもう一人に何かを言っているようだ。

「答えて下さい、教官！なぜこのような所で教師を！！」

「何故も何もない。私にはやるべき仕事がある。それだけだ」

（あれは・・・千冬姉にボーデヴィツヒか？あんな饒舌なボーデヴィツヒは初めて見るぞ。どれ、少し様子でも見るか）

俺は近くの木の陰に身を隠し、様子をうかがう。無論、気配は極力殺しておく。千冬姉に通じるかは知らんけどな。

「このような極東の地でなんの役目があるというのですか！？お願いです、教官！我がドイツで再びご指導を！ここでは貴方の能力は半分も活かされません！！」

「ほっ?」

おい、ヤバくね？今絶対、千冬姉カチンってきたぞ。ボーデヴィツヒ、悪いことは言わないからその辺にしとけよ。だが、そんな俺の心配は通じなかったような。

「この学園の生徒はあなたが教えるに足りません！危機感に疎く、

ISをファッションか何かと勘違いしている！あのような者たちに教官が時間を割かれるなど！」

「その辺にしておけよ、小娘」

「っ！？」

あゝあ、千冬姉キレたよ。もう知らねっと。しかし流石は千冬姉。あのボーデヴィッツヒも一瞬で黙らせるか。

「しばらく会わないうちにずいぶんと偉くなったものだな。15歳でもう選ばれた人間気取りとは、恐れ入る」

「わ、私は・・・！クッ・・・！！」

千冬姉に気圧されたボーデヴィッツヒはそのまま走り去っていった。諦める。千冬姉には勝てねえよ。

「その男子生徒、何をやっている」

げ！バレてら。となると隠れてもしょうがない。おとなしく出ようか。

木の陰から姿を現した俺を千冬姉は見つめる。

「異常性癖は感心しないな。わざわざ気配を消してまで行うとは」

「俺がどんな性癖持っても関係ないでしょうに。それよりも先生、さっきのボーデヴィッツヒのは。やっぱりあの時の」

「過去のことだ、忘れる。さっさと行け。このままでは今度のトー

ナメント、初戦敗退に終わるぞ？」

おいおい、いくら千冬姉いえどもそれは心外だな。そう簡単に負けてやるつもりはないぞ？

「あいにくそんなつもりは毛頭ありませんよ。なんだったらいつぞやのセシリアとの試合の再現をと失礼。冗談ですよ」

まったく、こっちは冗談のつもりなのにそんなに睨まないでほしい。さすがにあんな真似はしないさ。多分・・・
我を忘れたりしなければ大丈夫なだけだな。まあそうそうそんなことにもならないか。

「それじゃ、俺はこれで」

そう言っただけで俺も立ち去ろうとする。ちょっと気まづくなったから早々に切り上げるのが吉だ。

そして俺は部屋に戻った。この度シャルルと同室になったわけだが、そのシャルルはと。

どうやらシャワーらしいな。音が聞こえる。

「そついやシャンプー切れてたな」

確かシャンプーはクローゼットの中に替えがとってあった。あつたあつた。早速渡さなきゃならんな。

「おいシャルル。これシャンプーの替え」

「い、一夏!？」

「へ?」

シャンプーの替えを持ってシャワールームの扉を開けた俺は、シャルルの驚いた声に固まった。

なんでかって? だってさ。シャワールームには居たのは、どう見ても女の子だったんだから。

あれ? こんな状況、前にも無かった?

第二十話（加筆修正有）（後書き）

さて、次回はシャルの女バレ。

もしかしたら、病みシャルができるかもしれません。

気長に次回をお待ち下さい。

第二十一話（前書き）

い。 前回の話に加筆をしました。よろしければ、先にそちらをご覧ください。

第二十一話

シャワールームの入口。そこで一夏は固まっていた。目の前には一糸纏わぬ姿のシャルル。だが、その姿は一夏の思考を停止させるには十分だった。

「シ、シャルル…だよな…？」

「い、一夏…？」

シャワールームのシャルルは、一夏の思考を止めた要因を持っていた。すなわち、その胸部に存在する二つの膨らみ。

「あ…あの…これ、シャンプーの替えな…」

「うん…ありがとう…」

シャルルにシャンプーの替えを手渡した一夏はそのままシャワールームを後にする。

その顔には困惑が広がっており、状況の把握不十分を如実に表していた。

ポスッ

そんな間抜けな音と共に一夏はベッドに座り込む。

(あれはシャルルだよな？顔も声もシャルルだ。シャルルは男だよな？でも胸が…)

そこまで考えて、一気に頭が沸騰する。あまりの事態に一夏の顔が赤くなる。

「ひとまずは落ち着こう。うん、そうだ。筋トレでもしようか。そうしよう」

まるで自分に言い聞かせるように呟いて一夏はベッドから立ち上がる。

そのまま部屋の一角で黙々と筋トレを開始した。

「い、一夏？」

シャワーを終えたシャルルが恐る恐ると言った様子で出てきた。そして見た。

部屋の一角、壁際で逆立ちをしながら腕立てをひたすら行っている一夏の姿を。

「い、一夏…？」

先程とは異なる声色でシャルルは一夏に声をかける。その声からは一つのメッセージがはっきりと伝わっていた。

「お前何やってんの？」と。

「あ、シャルル」

シャルルの声に気付いた一夏が腕立てを止める。そしてそのまま、クルリと体を回転させて逆立ちを止めた。音はほとんど立たない。まるで体操選手のように軽やかな動きにシャルルは思わず息を呑んだ。

「あー、うん…」

シャルルの姿を見た一夏は気まずそうに言葉を濁す。

シャルルの姿はこれまで共に過ごした数日とは大きく異なっていた。

寝巻代わりのジャージは変わらない。だが、それまでは一つ縛りにしていた長い金髪を解いていた。前々からシャルルは男というより女みたいな顔立ちだと一夏は思っていた。

だが、今のシャルルの姿を見て一夏は確信する。

（どこからどう見ても女の子です。それもかなりの美少女）

そして決定的な証拠。

その胸部にある二つの膨らみ。男なら、例え天地がひっくり返ろうと持つことがないソレは、シャルルの胸で圧倒的存在感を放っていた。

（おかしい。サイズなら箒の方が遥かに上なのに、なんだこの存在感はって、何を考えている俺！）

自分のどうしようもない思考に思わず内心でツッコミを入れる。そして改めてシャルルの姿を見る。シャルルは俯きながら立ち尽くしたままで、自分から行動を起こす気配は無い。

自分が状況を動かすよりほか無いと判断した一夏は、ひとまず事情の説明を聞くことにする。

「あゝ、シャルルや。ひとまずそこに座ってくれ」

そう言つて一夏はシャルルが使っているベッドを指差す。

シャルルがベッドの端に座つたのを確認し、一夏も自分のベッドの端に、シャルルと向かい合う形になるように座る。

「とりあえず確認だけどさ。やっぱシャルルって女の子…?」

その問い掛けから一夏は会話を切り出した。

「うん…」

「そつか…」

そして再び、互いに黙つてしまう。だが、事情の把握をしなければならぬ一夏は何とか頭の中で言葉を整理して発する。

「その、どうして男装なんか?別に俺の男だからって言う特例なんか利用しなくても、シャルルの実力なら編入はできるだろ?」

一夏の問いにシャルルはしばし黙りこくる。だが、その姿が何かの決意を固めるためのものに見えた一夏は黙つてシャルルが話すのを待った。

そして、意を決したのかシャルルが言った。

「父の、デュノア社からの命令なんだよ。男装して学園に入学。唯一の男という特異例の一夏のデータを取って来いって」

その言葉に一夏の目がわずかに見開かれる。そして、一度喋ったことにより覚悟を決めたのか、堰を切ったかのようにシャルルの口から言葉が出た。

「デユノアはね、今落ち目なんだよ。確かにラファールは悪くない機体だし、シエアも大きいよ。でもね、結局は第二世代なんだ。今各国では第三世代の最新鋭機の開発が進められている。セシリアさんのISやボーデヴィツヒさんのISがそうなんだ。でも、フランスは第三世代の開発に乗り遅れてね。それはデユノアもそう。このままじゃデユノアは遠からず業界の中で低迷する。だから社長である父は、せめて唯一の男の操縦者のデータが欲しいんだ。それで僕ってわけ」

そう言うシャルルの顔には疲れが浮かんでいた。だが、一夏にはどうしても気になることがあった。それはシャルルの最初の言葉。

「事情は分かったよ。でも、父の命令ってどういうことだ？父の頼みとかお願いとかじゃないのか、普通は？」

父親だというのに赤の他人を語るようなシャルルの言葉。それが一夏にはどうしようもなく気になった。

そして、その後のシャルルの言葉に一夏は一番の衝撃を受けた。

「僕はね、愛人の子なんだ。父の本妻の子じゃない。母が亡くなったから父の使いが迎えに来てね。僕に高いIS適性があるから来いって。それでデユノアの本邸に行ったんだ。本妻の人には出会い頭に叩かれたよ。『この泥棒猫の娘が！』って。そして肝心の父も、会ったのは二回くらい」

「そんな…」

思わず一夏は言葉を失った。そしてそのまま黙り込む。

「ねえ一夏？やっぱり軽蔑するかな？」

そう言うシャルルの言葉にはある種の悲壮感があった。いつそ罵ってくれた方が楽だと。そして一夏が口を開いた。

「確かに軽蔑ものだな。最悪の親父だよ」

吐き出された静かな怒りの言葉はしかし、シャルルには向けられていなかった。一夏が怒りを抱くのはただ一人。己の身勝手に娘を振り回すデュノア社長に他ならなかった。

「え？」

「まったくよお。俺だって自分がろくでなしくて自覚はあるが、流石に胸糞悪くなるぞ」

そう苛立たしげに一夏は言う。

「い、一夏、僕のことはいいの？」

「あ？シャルルは完全な被害者側だろうが。なんでお前を責めなきゃならないんだよ。俺はお前を責める気は1ミクロンたりとも無いぞ」

「一夏・・・でも、ダメだよ。もう僕はここには居られない。バレちゃったんだからもう」

「シャルル」

俯き、諦めたような力の無い笑みで学園を去ることを言おうとしたシャルルの言葉を一夏は遮る。

「シャルル。一つ聞かせろ。お前はどの学園に居たいのか？」

「え？」

「お前はどの学園に居たいのかって聞いているんだ。どうなんだ？」

「それは・・・居たいよ。でも僕は」

「なら居れば良いだろう」

一夏の居れば良いという言葉にシャルルが一夏の顔に目を向ける。
一夏は唐突に立ち上がると本棚へと足を向ける。そして本棚の前に立った一夏は一つの小冊子を手取る。それはIS学園の生徒手帳だった。

「IS学園特記事項。本学園に所属する生徒はありとあらゆる国家、組織、団体に帰属しない。またこれからの干渉を受けることもない。つまりだ。学園に居れば三年間はシャルルの身柄は保障されるってわけだな。その間に方法を考えればいい」

「一夏・・・」

「それにだ。万が一の状況になったとしてもだ。その時は俺が助けてやる。何せ俺は世界唯一の存在で、姉は世界最強だからな。それなりに力にはなれるさ。ん？こうして考えると、俺って何気に凄いな」

そう言っつて一夏は安心させるような笑みをシャルルに見せた。

「一夏・・・ありがとう」

そう一夏に感謝を告げるシャルルの顔は、一夏が思わず顔を赤らめるほどに綺麗なものだった。

コンコン

「一夏、居るか？夕食がまだなんだろう？よければ一緒にどうだ？」

突然のノックと聞こえてきた筈の声。思わず一夏とシャルルは顔を見合わせる。その表情は危機感に溢れていた。それも当然。このままでは部屋に来た筈にシャルルの性別がバレてしまう。

「シャルル、ひとまずベッドに潜れ。俺がなんとかする」

「う、うん・・・」

一夏はシャルルをベッドに入らせると、対応のためにドアに向かった。

「おう、筈。どしたの？」

「いや、夕食に誘いに来たのだが。シャルルはどうしたのだ？」

「いや、なんかシャルルは体調を崩しちまってさ。どうも外国生活の疲れが出たらしい」

一夏はベッドに入らせたシャルルが体調不良ということにして場を乗り切ることにした。どうやら箒は納得したらしく、シャルルを気遣う様子を見せた。

「大丈夫だ。少し疲れただけらしいから。寝てれば良くなる程度らしいぞ」

「そうか。なら良いのだが……。すまないな、シャルル。少々一夏を借りていくぞ」

部屋の入り口から箒がシャルルに話しかける。

「う、うん。大丈夫だよ。ごゆっくり」

「シャルル。夕飯は俺が貰ってくるからさ。少し待っていてくれ。じやあ箒、行こうか？」

そう言つて一夏は箒と共に食堂へ向かった。一人部屋に残ったシャルルは何とか危機を乗り越えたことに、安堵のため息を吐いた。

side 一夏

さて、箒と共に夕食を取った俺は現在、シャルルの夕食が乗ったトレイを持って部屋に向かっていた。

正直こういうことは大丈夫なのかと思つたが、事情を聞いた食堂の

おばちゃんは快く承諾してくれた。いや本当、ありがたい限りだよ。

「シャルル〜。戻ったぜ」

「あ、お帰りなさいー夏」

俺は部屋に入るとトレイを机の上に置いた。

「というわけで夕飯だ。食いたまえ。ああ、食器とかは俺がまた片付けるから。一応、体調不良で通しちまったからな。今日は部屋の外に出ない方が良いだろ」

「そうだね。ありがとう」

そう言っただけでシャルルは机の前に座り、食事を始める。メニューは普通の和食セット。

ん？あれ？待てよ？シャルルって箸は平気だったけ？

「んっ、くっ」

時既に遅しだった。シャルルはいびつな割れかたをした割り箸で悪戦苦闘していた。こりゃイカン。俺のミスだ。

「ゴメン、シャルル。すぐにスプーンとフォークを貰ってくる」

「待って！」

再び食堂に向かおうとした俺だが、シャルルの呼び掛けに止められた。

どうしたかと思ひ、シャルルの方を見ると、シャルルは少し俯きな

がら言った。

「あ、あのさ、一夏。さっき、僕が困ったら助けしてくれるって言ったよね？」

「あ、ああ」

確かに言った。だからスプーンとフォークを持って来ようと思ったんだけどさ。どうしたんだ？」

「そ、それじゃあさ。その、僕のご飯んだけど、その…」

何やら恥ずかしがるようにしていたシャルルは驚くべき言葉を言った。

「一夏が食べさせて？」

「ハ？タベサセル？オレガ？」

僅かに潤んだ瞳を上目遣いしながらシャルルは俺を見つめている。思わず顔に熱が集まるのを感じる。あ、あれ？おかしいな。シャルルが女だと分かってるからか？なんだ、この感覚は？

「えっと、食べさせる？俺が？シャルルに？」

「うん。ダメ…？」

その目は止めてください反則です。俺が悪いみたいじゃないか。いや、俺が悪いのか？持つてくるメニューを間違えたし。ならば、俺がしなきゃならないのか？

そんなこんなで思考の不規則回転が正常化した後、俺とシャルルは椅子に座りながら向かい合っていた。

理由は簡単。俺がシャルルに食事を食べさせるためだ。

「そ、それじゃあシャルル、いくぞ？」

「うん…」

最初はご飯。箸で一つまみして、それをシャルルの顔、正確にはその口に近付ける。

「んじゃ、その…あーん…」

「あーん」

そしてシャルルはご飯を口に入れた。味わっているのか、じっくり噛んでいる。

続けて俺は焼き魚や煮豆などをシャルルに食べさせていく。そして食べさせる度に「あーん」の言葉を言う。

なんだろうな。ものすごく妙な気分だ。胸がモヤモヤする。なんだこれは。

しかしあれだな。何だろうな、小動物に餌をあげてる気分になってくる。

うゝむ、実に不可思議な気分だ。

そして一通り食事を終えたシャルル、そして食べさせ終えた俺は現在、緑茶を啜りながらまつたりしている。

「ありがとう、一夏。おかげで助かったよ」

「いやいや、このくらいどうってこと」

あるな。口には出さないが、先程の行為は中々に厳しかった。いや、嫌だったとかそういうのじゃなくてだな。こう、妙な気分になってくるんだよ。

「ん？」

シャルルが俺の顔を覗き込んでくる。別になんでもないよー。

「ふう、やはり緑茶は良いな。気分が落ち着く」

緑茶を一啜り。この苦みがちょうど良い感じに精神を落ち着かせてくれる。できれば茶請けの菓子が欲しいところだが、この際贅沢は言わないでおこう。

「ねえ、一夏。一夏はさ、どうして僕の秘密を受け入れたの？普通なら軽蔑してもおかしくないのに」

またその話題か。シャルルも中々に後まで気にするタイプだな。

とは言え、どうしてか…

「もしかしたら、共感したからかもしれない」

「え？」

「俺にもさ、あるんだよ。人に言えない秘密ってやつがさ」

そう。誰にも話したことの無い秘密。それは俺の過去。俺と千冬姉しか知らない、赤色に染め上げられた俺の過去的一幕。篝や鈴にすら話したことの無い、俺の中の闇。

「一夏…?」

シャルルが不安そうな顔をしている。いかな。どうにもあの時のことを思い出すと、俺は顔に不快感が出るらしい。

俺の顔を見つめるシャルルの姿が目映る。ああ、シャルルになら話せるかもしれない。

ふと、俺の中で何かが切れる音が聞こえた。瞬間、強烈な衝動が沸き上がった。

話したい。もう溜め込むのは嫌だ。全部ぶちまけたい。

ああそうか。俺は誰かに話したかったんだな。知らず求めていたわけだ。俺があのことを話せる相手を。そしてそれはきっとシャルルなんだろう。

互いに人に明かせない秘密を抱える者同士。もしかしたらと、俺は思っていた。

「なあシャルル。シャルルはさ、俺の過去を知りたくないか？」

「え？」

「誰にも話したことの無い秘密。知っているのは俺と千冬姉だけの秘密。どうしようもなく、誰かに話したくなっていく俺の過去」

口が自然と動いている。だが、まだ駄目だ。シャルルの答えを聞いていない。それまではどれだけ話したくても話せない。

「いいよ」

なんだと？

「いいよ、一夏。話して。大丈夫だよ。どんな内容でも受け入れる。一夏は僕の秘密を受け入れてくれた。だから僕も一夏の秘密を受け入れるよ。その秘密が一夏を苦しめるなら、僕も一緒に背負う。僕も一夏の力になる。だから」

「シャルル…」

シャルルの目は真剣だ。その目が全てを語っている。

話そう。

決意した。もう後には引けない。引くつもりもない。話してやる。後はどうにでもなれ。

「あれは第二回モンド・グロツソ決勝戦、千冬姉が棄権負けした試合の日だったよ」

何を言うか意識せずとも、自然と言葉が紡がれる。

「前に話した、その日に千冬姉が巻き込まれた事件。それはな、俺が誘拐された事件なんだよ」

シャルルが息を呑むのが分かった。そりゃそうだよな。誘拐なんて、

尋常じゃない。

「どこのどいつが、何のためにやったかは不明だ。取っ捕まえた犯人に聞こうにも聞けない。俺がそうしちまったからな」

シャルルは黙って俺の話聞いてる。

そして、俺はその言葉を言った。

「話は簡単。俺はな、シャルル。その時に犯人を、人を殺したんだよ。この手で」

俺は遂に、俺の中に仕舞いつづけてきた言葉を、外に出したのだ。

第二十一話（後書き）

さて、次回あたりにもしかしたらシャルの病みが来るかもしれませ
ん。

それはそうと、どうにかまどか マギカの最終回を見れました。
何と言うか、虚淵にしてはソフトな終わり方だったな〜と思いまし
た。

しかし、アニメの最終回を見る度に感じる、この胸の空白感。
どうしても慣れないですね。

第二十二話（前書き）

一度上げたのですが、作者自身が改訂の余地有りと判断し、一旦取り下げました。

これが改訂版になります。

具体的にはシャルsideをほぼ完全改訂しました。

第二十二話

人を殺した。

その言葉はシャルルにとって衝撃的だった。

僅か数日ではあるが、同じ部屋で過ごすことでシャルルは一夏の人となりがある程度は把握していた。

比較的勤勉でクラスメイトとの交遊も良い。転校したばかりで何かと分からないことの多い自分の面倒を見てくれる。そんな好印象があっただけに、その言葉はシャルルの心に大きく響いた。

「一夏…」

よく見ると、一夏の顔には力の無い笑みがある。それは紛れも無く、シャルルが一夏に事情を話した時と同じ顔だった。

「いきなり車に連れ込まれてさ。クロロホルムだかなんかだった？
そういう薬物を嗅がされて意識が飛んで。気が付いたらどことも知れない倉庫みたいな場所だったよ」

シャルルの反応に気付く様子が無いまま一夏は喋り続ける。

まるで、溜め込まれた何かが自然と流れ出るかのように一夏は語りつづける。

「それでき、なんだろうな。椅子に縛られてて、状況を把握したんだよ。そしたら無性に腹が立ってきてさ。そのくせ、頭は冷えていくんだよ。それで、たまたま覚えてた縄抜けを使って、拘束を外し

た。それからだよ」

語る一夏の表情が変化しているのに、シャルルは気付いた。語る口調は依然穏やかだが、その表情は少しずつ鬼気迫るものになっていた。

笑いながらも釣り上がっていく目尻。同じように口の端も釣り上がり、歯が剥き出しになる。

一夏の表情はシャルルが見たことが無い、強い攻撃性を孕んだものになっていた。

「倉庫のあちこちに黒服のオッサンが居た。ただ、どいつも俺の方なんか見てなくてな。専ら外の警戒をしてたよ。だから俺は近くに居た一人に近付いてさ、その首をへし折ったんだよ！」

いつの間にか語気にも激しさが出ていた。

「それでもさ、連中は馬鹿なことに気がつかなくて。だから俺は殺した奴から銃を奪ったんだ。安全装置ヤフテキは外れてたからさ。別の奴に狙いつけて、頭を吹っ飛ばしてやった！そしたら連中、やっと気付いてさ。すげえ間抜け面してたよ！」

激しい口調はまるで楽しんでるかのような興奮があった。

だが、シャルルにはそれがそのままには見えなかった。狂気を孕んだ声の中に、酷く悲しげな痛ましさを感じた。

「慌て気付いたみたいだけどさ！もう遅いんだよ！一気に近付いて至近距離からバン！面白いくらいにぶっ倒れてった！そしたらさ、いつの間にか残り一人になってたよ！周りは血の海！最後の一人は完全にブルッてやがった！もう最高に愉快痛快さ！んでさ、そいつ

完全にビビってるから、何もできなかつたんだよ！だから俺はさ、殺した奴の一人から奪ったサバイバルナイフでそいつの手足の腱を切ったわけだ！そしたらそいつ泣きわめいてさ！もうクソ笑えた！」

ハア、ハア…と一夏は静かに息を吐いた。

シャルルは何も言わない。ただ静かに一夏の話を知っている。それが一番良いと分かっていた。

興奮が落ち着いたのか、一夏の顔から狂気が消え失せ、始めの穏やかなものに戻る。

「後は惨劇って呼べたよ。最後の一人をさ、ナイフで少しずつ斬っていったり、銃で手を打ち抜いたり。あの時の俺はさ、ただ腹のうちの興奮に流されて、暴れるだけだったよ。周りの血のせいで凄く鉄臭くてな。まあ、あの時の俺は返り血がベツトリ着いてたから、それもあるのかもしれないけど。それで一通り髑つてさ、止めを刺そうってところで試合を放り出した千冬姉が来て。そのまま千冬姉に止められたよ」

そこまで話した一夏は再び表情を変えた。その表情は酷く苦々しげな、自嘲の笑みだった。

「その時千冬姉に抱きしめられてさ。ようやく我に帰ったんだよ。それで千冬姉がすごい辛そうな顔しててさ。それが何より堪えた。馬鹿だよ、千冬姉は。俺なんか助けに来てあんな顔するくらいなら試合に出れば良かったのに」

そう言って一夏はシャルルに背を向けと俯く。その背が僅かに震えてるのを、シャルルは見た。

「千冬姉に辛い思いさせたのも、試合を投げ出させたのも嫌だった。でもさ、一番嫌だったのは俺自身なんだよ。俺さ、人を殺したのに、そのことを何とも思わなかったんだぜ？相手が犯罪者だから殺しても構わない。別にさ、犯人に同情はしないけど、自分がとんでもないくらいでなしに思えて。それなのに千冬姉は俺を心配してくれてさ。それが辛くて……」

声まで震えていた。

シャルルはそれまで、一夏を大きな存在と見ていた。一人だけの男という状況にあっても物怖じすること無く振る舞い、自らに向けられる敵意すら受け流す胆力。

学園で自分を引っ張るその背がとても大きく、強く感じたのをシャルルは鮮明に記憶していた。

だが、今の一夏は違った。家族への情けなさ、自分自身の情けなさ、自分のいびつさに震えるその姿はまるで恐怖に怯える小さな子供のようだった。

「一夏」

「シャルル…？」

気が付けばシャルルは、自然と一夏の背を抱きしめていた。優しく、あやすかのように。

シャルルは一夏の姿に失望をしなかった。震える一夏の姿にどうしようもない程の切なさを感じた。

一夏の苦悩は、シャルルには痛いほどに分かった。自身とて、人に打ち明けられない苦悩を抱えたのだから。

だが、一夏のソレはシャルルとは違う。その中身の重さも、抱える心の痛みも、抱えてきた時間も、何もかもがシャルルのより大きい。

どれだけの苦痛だったのか。それを思うと、シャルルの胸中には一夏を氣遣う思いだけがあった。

「辛かったよね。怖かったよね。でも大丈夫だよ、一夏。もう大丈夫。僕が力になるから。僕が一夏を受け入れるから」

「シャルル……」

「確かに一夏は悪いことをしちゃったかもしれない。でもね、僕は知ってるよ。一夏がそれを悩んでいることに。一夏が本当は優しいことに。一夏。一夏は僕を受け入れてくれた。だから、今度は僕が一夏を受け入れるよ」

そう、優しさだけを込めて言う。

一夏が静かにシャルルから離れ、顔をシャルルに向ける。そこには困惑があった。

「けど、俺はろくでなしだぞ？俺は確かに悩んだ。でも人を殺したことに後悔をしていない。それどころか、今でも人を斬りたいと思ったりするんだぞ？それでも」

「それでも、だよ」

「っ……！」

驚いた顔をする一夏にシャルルは優しく微笑んだ。

「僕は決めたよ。僕は一夏の味方である。例え世界中の誰も一夏を許さなくても、僕だけは一夏を許す。だから一夏、一人で抱えないで。一夏は僕の力になってくれるって言った。だから僕も一夏の力にならせて」

そう優しく告げるシャルルに一夏の顔が歪む。
そして一夏はそのまま俯いた。

「ありがとう、ごめんシャルル……」

そのまま一夏は片手でその顔を覆い、肩を震わせた。それはこの学園で初めて一夏が見せた弱さだった。

「大丈夫、大丈夫だよ」

シャルルは肩を震わせる一夏を柔らかく抱きしめた。

それから少しばかり時間が流れる。

シャルルは依然ベッドに腰かけているが、その表情は困惑していた。原因は一つである。

「大変、お見苦しいところをお見せしました。謹んで謝罪をさせて頂きます。つきましては関係各所と協議の上、今後の対策を……」
うんぬんかんぬんとシャルルに詫びの言葉を土下座しながらひたすら繰り返す一夏の姿だった。

「え、えくと、一夏・・・？」

「シャルル、本当にスマン。嫌な話を聞かせてしまった。本当にすまない」

なおも一夏の謝罪は止まらない。その表情には申し訳なさがありありと浮かんでいた。

「いや、一夏、謝らないで。僕は全然気にしていないから。ね？」

「本当か・・・？」

土下座の姿勢を保ったまま一夏は首を上げてシャルルの顔を見る。そのなんとも言えないおかしな姿の一夏にシャルルは思わずクスリと笑いをこぼした。

「本当だよ。言ったでしょ？僕は一夏を許すって。だから気にしないでいいよ」

「そ、そういうことなら・・・」

そう言って一夏は土下座姿勢を解除。再びシャルルと向かい合う形で自分のベッドに腰かけた。

「けどシャルル。その、本当にお前はいいのか？俺なんかの味方になって・・・」

「当然だよ。それに、一夏の味方は他にも居ると思うよ？織斑先生は家族だからなってくれるだろうし、篝やセシリア、鈴もきつとな

つてくれるよ」

「だが、さっきも言った通り俺は人でなしだ。そうになったらみんな俺から離れるかもしれないぞ?」

「だからその時は僕が一夏の味方で居続ける。例え世界が一夏の敵になっても、僕は一夏の味方だよ?」

笑顔で言うシャルルに一夏の顔に明るさが戻る。そして言った。

「シャルル、本当にありがとうな」

side シャルル

あの後、時間も遅くなったので僕と一夏はそのまま就寝となった。一夏の話は僕にとって衝撃的だった。でも、僕にとってはもっと驚くべきことだったのは一夏の見せた姿だった。

あんな風に震える姿の一夏を見たことがなかった。いつも前だけを見て生きているような姿の一夏が、自分の過去に打ち震える。

自分自身を恐ろしく思う。どれだけ辛かったのだろう。僕自身、性別を偽って入学することに負い目のようなものを感じていた。周りの人々を騙す行為。良い思いになるわけがない。

けど、それは周りの人々から向けられるだろう思いを考えての負い目だった。

そして、一夏と話して初めて気が付いた。僕自身がその負い目を無

意識の内に、自分の中で都合よく処理していたことを。うまく自分の感情を偽って、自分が辛い思いをしないようにしていたことを。

それに気付いた時、僕は酷く嫌な気分になった。

そして、一夏が抱えてきた思いを実感した。

自分自身を嫌に思うこと。なんて辛いのだろう。一夏はこんな思いを抱えていた。

そのことに気付いて、僕は衝撃を受けた。

やっぱり一夏は強かった。その心が。でも、それも絶対じゃない。さっきみたいに弱さを見せることもある。けど、一夏はそうするだろうか？

一夏は一夏で少しプライドの強いところがある。時折一夏が放つ、織斑先生に似た雰囲気がある。それを物語っている。

そんな一夏が他人の前でへこたれるようには思えない。たとえそれが家族である織斑先生の前でも。

だからこそ心配だった。そうやって自分の中に苦悩を抱え込んで、いつか取り返しの付かないことになるんじゃないかって。

僕は静かにベッドから出て、寝息を立てている一夏の顔を見る。

一夏は僕を受け入れてくれた。それは僕にとっては大きな救いだ。だから僕は、肩を震わせる一夏を見た時に決めた。

僕も一夏を受け入れると。それを一夏に言った。

一夏が壊れてしまうことの無いように、誰かが一夏の苦悩を受け止めるなければならない。

けどそのためには、一夏の過去を知る必要がある。筭達なら全て納

得して受け入れるかもしれない。けど、それは一夏が善しとしないだろう。

織斑先生は多分ない。一夏は織斑先生に頼ることを避けているみたいだから。

なら僕しか居ない。

一夏の苦悩を受け止めるのは、僕にしかできない。僕だけだ。

再び一夏の寝顔を見る。

もしかしたら、一夏は僕の知る以上の苦悩を抱えているかもしれない。なら、僕はそれを受け入れる。

そう。僕は一夏の味方になると決めた。それが、僕が一夏に報いる方法だから。だから

「安心して、一夏。僕は味方だよ？」

そう小さく言って、僕は一夏の頭を軽く撫でた。

ふと、ある人物が頭に浮かんだ。

ラウラ・ボーデヴィツヒ

一夏を目の敵にしている人物。二人の間の確執は知らない。けど、二人の確執に一夏の過去の事件が関わっているのは間違いない。

一夏の過去が、二つの方向から一夏を苦しめている。なら僕のすべきことは決まっている。

「一夏は僕が守る」

ボーデヴィツヒさんが何をしてくるかは分からない。けど、僕は一

夏を助けよう。

それは僕にしかできない。

安心して、一夏。僕は一夏の味方だから。

そして僕は再びベッドに潜り、意識が夢の中に溶けていった。

s i d e o u t

第二十二話（後書き）

というわけで、どうでしょうか？

まだシャルのデレはありませんよ？

ただし、シャルの中で一夏の内容は大きくなっています。
これを後々の病みに繋がられたらと思います。

第二十三話（前書き）

トーナメントに関わる噂話と、セシリアと鈴のコンビ対ラウラのお話です。

戦闘シーンは割とすんなり書けました。珍しい。

第二十三話

週が明けた月曜日。朝のSHRが始まるのを席で座りながら待っている篤は複雑な心境にあった。

（何故だ。なんなのだ、この状況は・・・）

原因はそこかしこで生徒達がしている噂に他ならなかった。

「ねえねえ聞いた？あの噂」

「知ってるよ」。アレでしょ？今度の学年別トーナメント」

「そうそう。優勝したら織斑君と付き合えるんだって」

「一年って専用機持ちが多いから諦めていたけど、私頑張っちゃおうかな」

周りから聞こえる言葉に篤は思わず頭を抱えた。

（何故だ！何故こうなるのだ！？）

確かに自分は一夏に言った。自分が優勝したら付き合ってもらおう。だが、何故このような噂が広がっている！

篤はただただ頭を抱えるのみであった。

そして一組の一角で会話をする最も人数の多いグループ、何かとク
ラスのメンバーを引っ張ることの多い谷本癒子を中心としたグルー
プの会話にはセシリアと、二組なのに何故か居る鈴が加わっていた。

「その話は本当!?!」

鈴が大声を上げる。

「優勝したら一夏と付き合える」

一夏に対し好意を抱く鈴にとって、決して聞き逃すわけにはいかな
い内容だった。

「でも、一夏さんはそのことを了承していますの?」

当然のように浮かんだ疑問をセシリアが言う。

彼女にとって一夏はあくまで良き友人であり、この件について彼女
は至って冷静であった。

「それがね、どうも織斑君はこのことはあまり知らないらしいのよ」
癒子がセシリアに説明をする。

「それは、噂が独り歩きしてしまっているだけなのでは……」

冷静にセシリアが状況を分析するが、興奮に取り込まれている少女
達の耳に届くことは無かった。

「おはよ〜」

そんな間延びした声と共に一夏が教室に入って来た。そのすぐ後ろにはシャルルが控えるように歩いている。

一夏は噂話に持ち切りとなっている教室の状態をすぐに察したらしく、近くにいた癒子のグループに近付いた。

「ん？何やら盛り上がってるみたいだけど、どうかしたのか？」

「僕達にも聞かせてくれない？」

そう言う一夏と、その後ろからひよっこりと顔を出しながら聞いてくるシャルルに、女子達は一様に固まった。

聞かれてはマズイ。そう判断した彼女らはあっという間にそれぞれの席に戻っていく。

頭の上に疑問符を浮かべた一夏は近くにいた鈴に聞こうとするが、彼女もまた取り付く間も無く二組へと戻ってしまった。ちなみにセシリアも既に自分の席に戻っている。

結果としてその場に取り残された一夏とシャルルは、互いに顔を見合わせながら首を傾げた。

「どうしたんだろうね？」

「なあ？？」

時は流れ休み時間。箒は一人屋上で物思いに耽っていた。

思い出されるは一夏への宣言。あの言葉を知っているのは自分と一夏しか居ないはず。ならば何故このような噂が広がるのか？

偶然か？箒とて立派な女子。学園に通う以前にも転校の繰り返しではあったが、学校に通い同年代の少女らと関わってきた。

その中で、このような注目を浴びる行事が近付いたりすると、それに関わる何かしらの噂が立ち上がるということも経験してきた。

だがそれにしても、偶然にしては出来過ぎだ。

何故？という思考が頭を巡り続ける。

(考えても仕方ない、か…)

思わずため息を吐いた。

そして箒は気持ちを切り替えることにする。

(そうだ。私が優勝すればいい。それでいいんだ)

そう、改めて優勝への意気込みを固め、彼女は空を見上げた。

更に時は流れて放課後。

一夏とシャルルは並んで廊下を歩いていた。放課後の訓練のため、アリーナへと向かうからである。

「さてと、今日のアリーナはどこだったけ？」

「ええと、確か……」

「第三アリーナだ」

「「うわ!?!」」

突如割って入った声に思わず驚く一夏とシャルル。声の主は箒だった。

「ほ、箒。なんでお前……」

「べ、別に構わないだろう。ほら一夏、さっさと行くぞ。聞けば今日の第三アリーナは使用人数が少ないそうさ。なら、簡単な模擬戦くらいはできるはずだ」

そう言っただけはアリーナへと足を向ける。その姿に一夏は頭をかきながら軽くため息を吐くと、その後をシャルルと共に続いた。

「んで、いきなりどうしたよ」

歩きながら一夏は箒に問い掛ける。

「別にどうしもしない。ただ、私もお前の訓練に付き合おうかと思っただけだ」

箒の声は固い。はあ、と間拔けな声を一夏は出す。だが、箒の声の固さの理由に気付いたシャルルは気付かれないように、クスリと笑いを零した。そしてシャルルは感じた。

一瞬、胸の内をよぎったチクリとした痛みを。だが、シャルルがそ

れを疑問に思うことは無かった。それ以上の事態が唐突に起きたからだ。

「第三アリーナで一年の代表候補生三人が模擬戦やってるって！」

「本当？見に行こう！」

そう言いながら三人の脇を駆け抜ける二人の生徒。その会話に三人は歩く足を止めて顔を見合わせる。

「一夏、これって……」

「ああ……」

シャルルの言葉に一夏は頷く。二人の考えは一致していた。一年の代表候補生三人。思い付くのはセシリア、鈴、そしてラウラ。ただならぬ事態を予感し、三人もまた急ぎ足で第三アリーナへと向かった。

時を少し遡る。

第三アリーナには二つの人影があった。セシリアと鈴である。共にISスーツを着用している二人の目的は一つ。模擬戦である。

話を持ち掛けたのは鈴だった。

学内で流れる噂に鈴は優勝への意欲を燃やしていた。そのため訓練は不可欠。故にセシリアとの模擬戦である。近接型の鈴は対近接型の訓練は十分に行ってきた。

そこで、相性的に不利である遠距離型のセシリアとの模擬戦を訓練

に望んだのだ。

セシリア自身も、代表候補生との模擬戦は良い訓練になるとのこと
で鈴の申し出を快諾した。

「お互い、準備はできたね」

「そのようですわね」

二人の会話に刺々しさは無い。仮にセシリアが一夏に好意を抱いて
いたのならば、二人の会話はもつとギスギスしたものになっていた
が、セシリアにとって一夏は良い友人にして好敵手であり、そのよ
うな感情の対象では無かった。

そのことは鈴も把握しており、結果として二人は純粹に訓練に打ち
込むことが可能になっていた。

ただ補足をするならば、鈴はセシリアに対しても僅かながら警戒心
を抱いている。今でこそ普通の友人だが、その感情がいつ変わるか
分かったものじゃない。

(できればそうなって欲しくはないけど)

鈴は考えを振り払う。

現状、セシリアは鈴にとっても良い友人だ。そんな人物と想い人の
奪い合いとは言え、争うということとはしたくない。

そして二人はISを装着する。互いに準備万端。

いざ尋常に勝負と意気込んだ瞬間、突然の横槍が入った。

ドガン!!

二人の横から突如、高速で飛来する物体。だが、曲がりなりにも代表候補生である二人はすぐさま回避運動をとる。

二人の間の地面に何かを着弾し、土煙を上げる。それが放たれた方向を見た二人は、その顔を苦いものにした。

「ラウラ…」

「ボーデヴィツヒ…」

そこには自身のIS「シュヴァルツェア・レーゲン」を装着しているラウラの姿があった。右肩にある大型レールガン（ライフル）の砲口から、発射直後のためか煙が上がっている。

「いきなりぶつ放すなんて、どういつつもり!？」

鈴が抗議の声をあげるが、ラウラは取り合っつもりが無いのか静かに呟く。

「中国の甲龍に、イギリスのブルー・ティアーズか。データで見たとときの方が強そうだな」

その言葉を鈴とセシリアは聞き逃さなかった。つまり二人は力チンと来たのだ。

「何？やるの？わざわざドイツくんだりからボコられに来るなんて、大したマゾっぶりね。それとも、ジャガ芋畑（ジャガイモ畑）じゃそういうのが流行っているのかしら？」

「あら、鈴さん。どうやらこちらの方は共通言語をお持ちで無いようです。あまり虐めては可哀相ですわ」

放たれる言葉にはかなりの毒が含まれている。普段の二人ならば、このような物言いは善しとしないのだが、そうさせない程にラウラの言葉は二人を刺激した。

だが、対するラウラも一切動じることは無い。

「ふん。このような連中が私と同じ第三世代の専用機持ちとはな。数が多いだけ、古いだけ取り柄の国は余程人材不足と見える」

そい嘲笑うかのように放たれた言葉に、いよいよ以って二人の顔つきが変わる。

「来るか？ならば二人がかりで来い。下らぬ男にかまける雌ごときに私は遅れを取らん」

「今なんて言った！？ええ！？あたしの耳にはどうぞ好きなだけブン殴って下さいって聞こえたけど！？」

「この場に居ない人物を侮辱するなど、同じ欧州連合の代表候補生として恥ずかしい限りですわ！それも侮辱の対象がわたくしの友人なら尚更！！」

二人の怒りの言葉にラウラは右手を持ち上げ、クイッククイックと動かして言った。

「かかってこい」

「言われなくても！！！！」

そして戦闘が始まった。

アリーナ居たのはISを展開している三人だけでは無かった。観覧席には他者の訓練の様子を見ようとしたり、単純に暇を持って余したりなどの様々な理由で来ている生徒の姿もあった。

彼女達は突然の代表候補生同士の模擬戦に驚いたが、すぐに気持ちを切り替えて、サプライズの見世物を見る気分で戦いを見ていた。彼女達は当初、セシリアと鈴のコンビの前にラウラが倒れる姿を予見した。

第三世代機持ちの代表候補生同士で二対一。字面だけを見れば、二人の方を有利と見るのは当然であった。故に彼女達は今、目の前のアリーナの状況に驚きを隠せずにいる。

「くらえ!!」

鈴が双天牙月を振るいラウラに切り掛かるが、ラウラは腕の装甲から展開したプラズマブレードで容易く捌く。

だが、それにより生まれた一瞬の膠着状態を見逃すこと無く、セシリアのブルー・ティアーズによる連続射撃がラウラを襲う。

「ふん」

軽く鼻で笑うとラウラは後退。

アリーナを縦横に移動して射撃をかわす。

「話にならないな。高稼働時のブルー・ティアーズならばもう少しマシだろうに」

「クッ！」

嘲るようなラウラの言葉にセシリアは齒噛みをする。

ブルー・ティアーズは第三代型としては実験機としての側面が強いため、鈴の甲龍やラウラのシュヴァルツェア・レーゲンのような安定性や実戦を重視した機体に比べると、全体的な性能で難がある。

だが、ブルー・ティアーズはそのビット兵器の稼働率次第では大いに化ける機体なのだ。

仮に理論最大値の稼働率でブルー・ティアーズを制御した場合、ビットから放たれるビームの攻撃力、操作性は格段に跳ね上がると言われている。

しかし、理論ではとなる。何故ならば、現在存在する代表候補生でブルー・ティアーズのシステムに最も高い適性のあるセシリアがまだその領域に至っていないからだ。

ラウラの指摘はセシリアにとって、文字通り痛い所を的確に突いていた。

「ならこいつはどっ！？」

鈴が龍咆を放つ。不可視という高い優位性を持った砲弾がラウラに迫る。

だが、その攻撃がラウラに届くことは無かった。

「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前では！

「！」

かざされるラウラの手。瞬間、龍咆の砲弾がその動きを止める。鈴はそのまま飛翔。上空から龍咆を浴びせ掛けるが、その悉くがラウラの力によって阻まれ、通じる攻撃は一発として無かった。

「クツ、こつも相性が悪いなんて！」

ラウラと自分のISの間にある相性という大きな壁に、鈴の表情が歪む。

シュヴァルツエア・レーゲンの両肩からワイヤーブレードが放たれた。

計六本のワイヤーは上空の鈴を捕まえんとあらゆる方向から襲い掛かる。

縦横無尽に空を飛びワイヤーを回避する鈴だったが、その片足にワイヤーの一本が絡み付き鈴を捕えた。

「この程度の仕上がりで第三世代とはな。笑わせる」

「ならばこれはどうです！」

ラウラの言葉にセシリアが追尾型ミサイルとブルー・ティアーズのビットの挟撃で畳み掛ける。
ミサイルを対処したラウラだったが、ビットにまでは手が回らず、やむなく停止結界でその動きを止める。

「動きが止まりましたわね！」

その瞬間を狙っていたセシリアがスターライトの狙いをラウラに定

める。

だが、対するラウラも右肩のレールガンの砲口をセシリアに向ける。同時に放たれる砲撃。放たれた二つの砲撃は激突し、爆発を起こす。それと同時に、ワイヤーに捕われた鈴がセシリアにぶつけられる。二人は地にたたき付けられ、苦悶の表情を浮かべていた。

余裕の表れか、ラウラが倒れる二人に近付く。瞬間、鈴は龍砲のチャージを開始する。

「この状況でウェイトのある空間圧兵器を使うとはな」

冷たく見下すような言葉と共にラウラはレールガンを鈴の龍砲に向ける。

発射はレールガンが早かった。二つある龍砲の内の一つが破壊される。瞬間、セシリアがミサイルを発射。

反応仕切れなかったラウラはその爆発を直接受けた。

「この至近距離でミサイルだなんて。無茶するわね、あんた」

立ち上がり後退した鈴が、同じ様にして隣に立ったセシリアに呆れたように言う。

「ですが、至近距離からのミサイルの直撃。これなら無傷では……」

そして煙が晴れる。その向こうに見えた影に、二人は改めて驚愕した。

そこには、装甲に多少の傷はあったものの、実質無傷に近いラウラが居た。

「終わりか？ならば今度はこちらの番だ」

その言葉と共に再び放たれるワイヤー。それがセシリアと鈴の首に巻き付き、二人は完全に動きを止められる。そして、一方的な蹂躪が始まった。

苦悶の表情を浮かべる二人を執拗にラウラは殴り、蹴る。

二人のISは装甲が壊れていき、シールドエネルギーもみるみる数を減らす。そして二人のISに表示された「搭乗者生命危機領域突入」の文字。

観客席の少女達はあまりの光景に血相を変えていた。このままでは二人の命が危ない。

彼女達、特に一組の生徒達の脳裏には、以前行われたセシリア対一夏の試合での様相が思い出されていた。だが、今回はあの時よりも酷い。

突然、セシリアと鈴への乱打が止んだ。同時に二人の拘束が解除される。

アリーナ観客席のシールドが破壊、いや、切断されていた。

突如、二人とラウラの間に閃いた物があった。

それは透き通るような青白色ブルーホワイトの刀だった。

そして、倒れる二人の前に立つ影。ラウラのシュヴァルツエア・レーゲンとは対照的な白。

影は手にした刀を振るい、あるいは突いてラウラに攻撃を仕掛ける。素早いながらも、無駄の無い鋭い斬撃にさすがのラウラも後退をする。その表情は心底忌ま忌ましそうだった。

「あんだ、どうして……」

鈴が影に声を掛ける。だが、影の主は依然ラウラの方を向いたままだった。

「よう、ボーデヴィッヒ。中々面白そうなこととしてんじゃねえか。俺も混ぜろよ」

そう、織斑一夏は口元を獰猛な笑みに歪めながら、しかし一切笑っていない眼差しでラウラに告げた。

第二十三話（後書き）

ヒロイン（候補）のピンチに颯爽登場の一夏。

あれ？拙作の一夏ってこんなヒーローっぽかったっけ？

病みシャルをどういつ感じで病ませようか試行錯誤中です。

構想はあるんですがね。話の中で無理無くそこまで持っていくのがなかなか厳しい。

第二十四話（前書き）

さて、ラウラ戦その一終了です。
現在より一夏はまともに動きますが、大筋は変わりませぬね。

第二十四話

side 一夏

俺達三人がアリーナの観客席に着いた時、俺は嫌な予感的中したのを実感した。

目の前のアリーナにはISを装着したセシリアと鈴、そしてボーデヴィッツヒの姿がある。

戦闘をしていたのは分かっていたが、実際に目の前にして俺は自分が苦い顔をしているのを感じた。

「まさかセシリアと鈴の二人掛かりでこれとはな……」

アリーナの三人の状態を見れば優劣は明白だ。

セシリアと鈴はISの装甲に少なくない損傷が見える。そのくせボーデヴィッツヒはさすがに無傷とはいかなかったみたいだが、二人に比べれば損傷は遥かに少なく、余裕の状態なのが分かる。

同じ第三世代を操る代表候補生二人を相手にこれとはな。さすがは千冬姉の弟子というべきか。想像以上の実力だ。

いや、それだけじゃないんだろう。データベースのプロフィールには軍のIS部隊所属とあった。

セシリアや鈴も向こうじゃ軍とも関わっていたんだろうが、おそらく練度が違う。

第三世代の新型を携えたハイレベルの使い手、か。ますます以って斬りたいな。

となるのだ。今の俺がすべきは後々のための情報収集だな。二人にや悪いが、今しばらく見物させてもらおうか。

「そんな！龍咆が効いてない!？」

篝の驚く声が聞こえる。そんな大声を出すな。

とは言え、俺も驚いてはいる。防衛装備を展開している様子は無いからバリアか何かだとは思うが、この違和感は何なんだ？

「A I Cだよ……」

A I C？聞き覚えの無い名称だが、あるいはそれがボーデヴィツヒのI Sの能力か？

俺はそのまま戦闘を見続ける。

ボーデヴィツヒの放ったワイヤーに捕われた鈴が振り回され、セシリアと激突させられる。

上手いな。厳然たる事実としてあいつは技量が高い。機体の性能も上手く引き出している。

「こいつはイイナ……」

知らず腕が震える。何故かははっきりしている。俺の腕が、ボーデヴィツヒあいつを斬りたがっている。

「なっ!?!いくらなんでもやり過ぎだ!！」

篝が非難の声を上げる。ワイヤーでセシリアと鈴を拘束したボーデヴィツヒは二人を痛め付けるかのように殴り蹴りを続けている。

ああ確かに。コイツはマズイな。

「ひどい！あれじゃシールドが持たないよ！」

シャルルの言う通りだな。あのままじゃ二人のシールドエネルギーは近いうちに尽きる。それでESが解除されようものなら、それこそ命に関わってくる。

ふと、二人を殴り続けるボーデヴィツヒの顔が愉悦に歪んだのを見た。それを見た瞬間、無性にいらついた。

「チツ。おいシャルル、バトンタッチに行くぞ」

「え？」

聞き返すな。察せよシャルル。

ああ、気に入くわねえ。あのアマ、俺の嫌いな俺にそっくりだ。こういうの、近親憎悪とか言うんだっけか。まあ、自分のこと棚に上げてキレるのも中々に自分勝手だがな。

それに、二人をいい加減助けなきゃならん。

「白式！！」

俺の言葉と共に白式が展開、装着される。そして、俺の手には蒼炎が握られている。

「一夏！」

「お前、何を！」

シャルルはどうやら察したらしいな。だが箒がまだ気づかないとは。とは言え、箒にかまけてる暇は無い。

『零落白夜 発動』

白式のモニターに表示された文字と共に、蒼炎の刃の部分を光が覆う。

零落白夜

ISのシールドを問答無用で切り裂く、究極の対エネルギー能力。その対象はアリーナ観客席のシールドも例外じゃない！

「はあっ！！」

一閃、切り裂かれるシールド。

そしてアリーナに入った俺はすぐさま瞬時加速を発動。

本来なら零落白夜と瞬時加速の併用はエネルギー効率に良くないのだが、蒼炎により零落白夜のエネルギー効率が向上した結果、二つの併用を可能にしていた。

…最近、具体的には蒼炎を手に入れてから白式自体のエネルギー効率も上がってる気がするけど、気のせいかな？

瞬時加速により高速に達した俺は鈴と、その鈴を殴りつけていたボーデヴィツヒの間に割り込ませるように蒼炎を振り下ろす。

気付かれたか。ボーデヴィツヒの奴は鈴の拘束を解き、軽く後退する。

だが、その程度で止まってやるほど俺は甘くは無い。

すぐさま姿勢を直し、連続でポーデヴィツヒに切り付ける。振るって狙うは首。突いて狙うは首、心臓、顔面。

最近白式での剣技にも慣れたおかげで、生身で剣を振る感覚にかなり近づいた。

「貴様！」

さすがのポーデヴィツヒも真っ向やりあうのは避けたいな。当然だ。極めれば千冬姉の領域に届く流派の剣。

未だ極みには至っていないが、幾百と積み重ねた年月に裏打ちされた技だ。相手にするのはキツイだろうよ！

「貴様、織斑一夏……！！」

つたくよお。んな親の敵見るような目で見やがって。

とは言え、いらついているのは俺もなんだ。おあいこだ。

「よお、ポーデヴィツヒ。中々面白そうなことしてんじゃねえか。俺も混ぜろよ」

明るく言ったつもりだけど、多分目が笑ってないだろうな……

side out

一夏とラウラ。真逆の色を持つISを装備した二人が向かい合う。互いに無言。動く気配が無い。一夏はラウラの持つ力の得体の知れなさに、ラウラは刀を構える一夏の姿の隙の無い姿に、それぞれ動

けずいた。

(さて、どうすっか…)

睨み合いを続けながら一夏は思案する。

(この場の目的は二人の安全確保だが、あいつがそれを許すとは思えない。間違いなく肩の大砲で撃ってくる)

その予想に一夏は内心で、ハツと鼻で笑う。

(あのアマも俺と同じで、殺ると決めたら実行する口か。上等、と言いたいけど今はマズイ)

仕方ない、と一夏は意を決した。

ドン!

突如アリーナに響く音。それは一夏がアリーナの地面を踏み付けた音だった。

一瞬、全員の注意が逸れた。瞬間

「何だと!？」

蒼炎を構えた一夏がラウラに接近していた。一瞬で接近したかのように見えた一夏の姿にラウラは目を見開く。

人は自然と体が刻むリズムに乗って行動している。一夏が行ったのは相手のリズム、その空白を突いて文字通りの不意打ちを当てるといふ古武術の技に他ならなかった。

とは言え、一夏はそれを完全に習得しているわけではない。先程のように音を立てて、意図的に相手のリズムを自分のタイミングに合わせたものだ。達人ならばそのようなことをしなくても、同様のことが可能である。具体的には千冬辺りなど。

「舐めるな!!」

だが、ラウラとてそのままやられる程ではない。

一夏に向け手をかざした瞬間、一夏の動きが止まった。蒼炎を振りおろそうとした一夏の顔が強張る。それを見てラウラの顔に余裕が戻った。

「ふん、小細工を弄そうとも無駄だ。所詮貴様もこの私とシュヴァルツエア・レーゲンの前では有象無象に過ぎない・・・!」

その言葉と共にラウラの肩のレールガンが砲口を一夏に向ける。至近距離から受ければただではすまない大口径の砲口を前にして、一夏は笑った。

「なあにカツコつけてんだオメエ？」

「何っ!？」

瞬間、あらぬ方向からラウラに衝撃が襲いかかった。

「一夏!離れて!」

ラファールを展開したシャルルが上空から降下しながらラウラにマ

シンガンを浴びせかける。

「ナイスだシャルル！」

不可視の拘束から解放された一夏がラウラから距離をとって倒れているセシリアと鈴の下へと向かう。ラウラが追撃をかけようとするが、シャルルの止まない射撃がそれを阻む。

「セシリア！鈴！掴むぞ！」

無事に二人の下に辿り着いた一夏が二人をそれぞれ脇に抱えてアリナ観客席、自身が破壊したシールドの方に向かう。

「逃がすか！！」

一時的にシャルルの攻撃から逃れたラウラがレールガンの砲口を一夏に向ける。発射。

だが、発射の瞬間に一夏は瞬時加速を発動。砲撃から逃れ、そのまま観客席に飛び込んだ。

「一夏！」

「箒！二人を頼む！」

セシリアと鈴を観客席の床に横たえた一夏は箒に二人のことを頼む。見れば事態を察したらしい他のクラスメイトたちが数人、一夏達の方へと向かってきていた。

「一夏、あんた・・・」

「グツ、無様をお見せしましたわ・・・」

「しゃべるな。後は頼むぞ、箒」

それだけ言つて二人を箒らに任せると、一夏は再びアリーナへと舞い戻つた。

一方、アリーナでのシャルルとラウラの戦いは少しずつラウラの優勢に傾いていた。

特殊技能「高速切替」

これによりシャルルは弾切れを起こした武器を即座に別の物に換装。絶え間ない射撃を浴びせていたが、射撃が一瞬だけ止んだ瞬間にラウラは移動。シャルルの攻撃の照準から外れる。

追撃をしようとするシャルルだったが、ラウラから放たれたワイヤーが縦横無尽にシャルルに襲いかかる。そして、その内の一本がシャルルの片腕に絡みつき、シャルルの動きを止めた。明らかな窮状にシャルルの顔が歪む。

「くう!!」

「面白い。世代差というものを教えてやるっ」

そう言つてラウラは腕の装甲から紫に輝くプラズマブレードを展開。シャルルに斬りかかった。

ガキン！

だが、その攻撃は阻まれる。

「貴様！！」

「二人を助けて俺、参上つてな！」

「一夏！」

シャルルとラウラの間に割り込み、プラズマブレードを蒼炎で防ぐ一夏の姿がラウラの目の前にあった。

ラウラは一度後退し、片腕だけだったブレードを両腕に展開。構える。

「いいだろう。第二世代型アンティークより先に貴様を倒そうか」

対する一夏は無言で蒼炎を構える。鞘に納めるかのように腰に刀身を添えたそれは居合の構え。そして、蒼炎を構える一夏の思考はある一つの決定を下していた。

零落白夜リミットリリース限定解除

絶対防御すら切り裂く一撃の使用を決めた。眼前の相手に加減は不要。全力の一撃で以て葬る。

（殺しはしない。だが、腕の一本も頂くぞ。ラウラ・ボーデヴィツヒ！）

蒼炎の刀身が眩い光に包まれる。それを合図としたかのようにラウ

ラが一夏に向かって駆ける。そしてラウラが間合いに入るのを一夏は待ち構えた。しかし、ラウラが一夏の間合いに入ることは無かった。

ラウラが止まっていた。いや、止められていた。

一夏には目の前の光景が信じられなかった。

ラウラを止めているのは一本のIS用ブレード。そしてそれを持っているのは、いつもと変わらぬスーツ姿の千冬だった。

生身でIS装備を振るい、その上でISの進攻を止める。あまりにも常識はずれな光景に一夏の顔は呆けたものになり、蒼炎を纏う零落白夜の光も消え去った。

「やれやれ。これだからガキの相手は疲れる」

口ではそう言いながらも、まるで疲労感の無い声で千冬は言う。

「模擬戦をやるのは結構。だが、アリーナのシールドを破壊される事態となれば教師として黙認しかねる。この決着は今度の学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそうおっしゃるなら」

そう言ってラウラはISを解除し、その場を立ち去る。

「お前達もいいな」

「あ、はい。僕もそれでいいです」

「了解……」

シャルルも呆けていたらしく、千冬の確認に慌てながら答える。対する一夏の返事の声にはどこか抑揚が欠けていた。呆けた表情はなりを潜め、ただの無表情がそこにはあった。

一夏はラウラの去った方を見ながら、知らず蒼炎を強く握り締めていた。ただ一人、それに気付いた千冬はそんな一夏の姿を厳しい目で見ていた。

だが、その視線はすぐに外されて彼女は一度アリーナ全体を見回した。

「では、これよりトーナメントまでの間の私闘の一切を禁じる！解散！」

そして千冬は手を叩き、状況の終了を告げた。

アリーナから去った一夏とシャルルは保健室に居た。

ラウラとの試合により負傷を負ったセシリアと鈴の見舞い、そしてそれを兼ねた情報収集である。二人は保健室のベッドでそれぞれ寝ていた。

「別に、助けなくても良かったのに」

ふて腐れた様子で鈴が一夏に言う。セシリアは何故かシーツを握り締めたまま俯いている。

「馬鹿かお前は」

一夏が鈴の頭をペシリと叩く。

「強がるな。どう見てもお前達の負けだった。あのままじゃ死んでたぞ」

バツサリと切り捨てるように言い放つ一夏に鈴は苦い顔を浮かべる。それは鈴自身も自らの敗北を認めていることに他ならなかった。

「悔しいですけど、技量という点では完全に向こうが上でしたわ。恐らくあのまま続けていてもわたくし達は勝てませんでしたわ」

セシリアが静かに言う。その言葉には悔しさが滲み出ていた。彼女の気質を知っている一夏は何も言わない。彼女の悔しさを一夏は重々承知していた。

そして頃合いと見た一夏は見舞いに来た本来の目的を話題に出す。

「さて、話してもらつぞ。あのA I Cとは何だよ？」

一夏の言葉には真剣な色があった。そこに込められた意図を理解したセシリアと鈴はA I Cについて一夏に説明をする。

A I C、アクティブ・イナーシャル・キャンセラーと呼ばれるドイツ第三世代兵器。

その力は対象の運動の停止。一夏の零落白夜が最高峰の対エネルギー攻撃兵装ならば、A I Cは最高峰の対物理防御兵装と言える。防御ではなく停止。そこに質量などの持つエネルギーは関係無い。それが実体を持つならば、問答無用で止めるのだから。

「成る程な。一対一には随分と反則的な装備だ」

ひとしきりの説明を聞いた一夏は苦い表情を浮かべる。
接近戦を主とする一夏には相性が悪い。

「それはあたしも同感だわ。まさかあそこまで相性が悪いだなんて
ヨーロッパのトライアルは技術力が高いわ。新パッケージにはエネ
ルギー兵装を頼まなきゃ、ドイツには永遠に勝てなくなるわ」

実体兵器に対して反則的な性能を持つAICに対しては鈴も苦い思
いをしている。

「確か、AICはエネルギーの力場を発生させて、そこに引つ掛か
った対象を停止させるんだったな」

顎に手を当てながら一夏は説明されたAICの原理を反復する。そ
の言葉に鈴が頷いた。

「ということだ。鈴の龍咆と原理としては似ているのか？」

「確かにそうなるわね。それがどうしたのよ？」

「いや、エネルギーの力場なら俺の零落白夜が通じるかなって思っ
てさ」

零落白夜はエネルギーを無効化する力。AICがエネルギーの力場
なら、零落白夜に触れた瞬間に無力化ができるはずである。

その言葉を鈴は肯定する。だが、その上で鈴は指摘をした。

「「「「これ!!」「」」」」

差し出された紙の一枚を一夏は取って見る。その横からシャルルが紙を覗き込んだ。

「え〜と、学年別トーナメントの試合形式変更のお知らせ? 今月の学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦を行うため、二人一組での参加を義務付ける。一夏、これって…」

「シャルル、組むぞ」

一夏の即決だった。その場が一瞬で静まり返る。

「一夏?」

「組むぞ、シャルル。いいな?」

「う、うん…」

「よし、話は決まりだ。悪いがみんな、俺はシャルルと組む」

あつという間に決まった話に生徒達はすぐに納得し保健室を去る。その行動の切替の早さに一夏は複雑な表情をする。

決して、去っていく女子達の

「織斑×デュノアキター!」

とか

「どっちが攻めなのかな？織斑君のワイルド攻めにデュノア君の健気受け！？ううん！デュノア君の健気攻めに織斑君のツンデレ受けもありね！」

とかいった会話が聞こえたからではない。恐らく。

「まあ、とにかく。俺はシャルルと組むから」

その言葉に鈴が抗議の声を上げ、一夏に自分と組むように迫るが、保健室に入ってきた真耶により制された。

セシリアと鈴のESはダメージレベルCを突破。この状態での起動は後々に重大な影響を残すため、二人はトーナメント参加を認められなかった。

そして鈴は別室で診察を受けるために保健室を出る。真耶もそれに従ったため、部屋に残されたのは一夏、シャルル、セシリアとなった。

「セシリア、どうしたの？」

先程からあまり喋らなかったセシリアを心配するようにシャルルが問い掛ける。

「あ。い、いいえ。何でもありませんわ」

そう笑顔で答えるセシリアだったが、その顔はどこかぎこちない。その様子を見逃すほど、今の一夏は気を抜いて居なかった。

「シャルル。先に部屋に戻っててくれるか？」

「え？」

「頼む」

一夏の真剣な眼差しにシャルルは素直に従う。部屋を出る瞬間、シャルルの胸にチクリとした痛みが走ったが、一夏に言われた通り先に部屋へと戻った。

そして、保健室には一夏とセシリアのみが残された。

「セシリア。どうした」

静かに一夏は問い掛ける。そして一夏は見た。セシリアの手が微かに震えていることに。

「……その、思い出していたのです。わたくしと一夏の試合。あの時、我を忘れていた一夏の攻撃に、わたくしは心から恐怖しました。あ、一夏さんを責めるつもりはないのですが、先程のラウラさんとの戦い、その時のことを思い出してしまい……」

そう言ってセシリアは手だけでなく、肩まで震わせる。彼女は今、かつての恐怖に苛まされていた。ふと、一夏がその手を握った。

「一夏さん……？」

「あの時はすまなかった。本当にすまなかった。マジすまなかった。本当にごめん」

先程までの真剣な表情から一転、申し訳なさそうな表情で一夏はセシリアに謝りたおす。だが、その手は以前握られたままである。

「あの時はすまなかつたと思ってる。だからだ。詫び代わりに今度のトーナメント、仮に俺とボーデヴィツヒが当たったら、俺が勝つ。それで以って詫びとさせてくれ」

その言葉にセシリアは息を呑んだ。一夏は暗に、自分が仇を討つと言ったのだ。そのことに、セシリアは申し訳なさを感じた。だが同時に、心に暖かいものが溢れるのも感じた。

「わたくしは、本当に良い友人を持ってました」

静かに呟く。いつの間にか震えは止まっていた。

「一夏さん。お願いしますわ」

そう、セシリアは一夏に言った。その表情は、一夏が今まで見たセシリアの表情の中で、最も柔らかいものだった。

第二十四話（後書き）

え、今回の話の最後。

一夏がセシリア口説いてると思った方、挙手！

ハイ！

前にもやりましたねww

いや、実際問題として今回はセシリアの好感度アップを狙いました。
それだけです。

…ちと一夏をイケメンにし過ぎた感がありますが…

第二十五話（前書き）

先だって感想にて非常に考えさせられるご意見を頂きました。

自分で作品を見直しまして、うまく一夏の性格を変えられているか、作品として成り立っているかなどを改めて考えさせられました。

しかし、作者は未だ未熟ですので、技量的限界がどうしてもありません。

ですが、それでも頑張って書き続けようと思いますので、皆様どうか今後もしも愛顧のほど、よろしくお願いいたします。

第二十五話

保健室から寮に戻り、夕食も終えた一夏は現在、自室でシャルルと共に茶を飲んでいた。

「ねえ一夏。本当にいいの」

「ん？何がだ？」

「トーナメントのパートナーが僕だよ」

唐突にシャルルから向けられた問い。

それはトーナメントの相手方に分かるといいものだった。

「いいに決まってるだろ」

そして、さも当然のように答える一夏。シャルルに向けるその表情は、安心させるかのような笑みを浮かべていた。

「仮に他の誰かと組んで、シャルルが女つてばれたらマズイだろ？」

「一夏…ありがとう…!!」

一夏の言葉にシャルルは胸が暖かくなるのを感じた。

「それにだ」

一夏は天井を見上げながら、どこか遠くを見るように続けて言った。

「俺もお前も互いの秘密を知っている。いわば共犯者みたいなもんだ。ここまで来ちまったからな。こうなったら俺も最後まで付き合っつてやるよ」

その言葉を聞いた瞬間、シャルルは自身の胸の内に押し寄せるナニカを感じた。

それは決して不快なものではない。むしろこの上ない程の喜びを感じるものだった。

一夏が自分の力になってくれる。それがシャルルには堪らなく嬉しかった。

「まあ理由は他にもあるけどな。戦略的見地というやつだ」

「それって？」

「簡単な話だ。お前と組むのが一番勝率が高い。代表候補生ってだけならセシリアや鈴も候補だが、多分シャルルと組んだ方が一番やりやすい。それに、セシリアと鈴がリタイアな以上、目下の脅威はポーデヴィツヒのみだ」

その言葉にシャルルは納得すると同時に感心もした。言われてみれば戦略的にも一夏とシャルルの組み合わせは良コンビと言える。

専用機を持たない一般生徒を軽んじるわけではないが、やはり専用機持ちであり代表候補生というのはアドバンテージが高い。

一夏にしてもそうだ。一年の一般生徒の中で白式と一夏の機動に付

いていける生徒は少数だろう。そして一夏自身のクロスレンジにおける技量。

修めていた古流剣術を応用したという一夏の近接戦の技量はシャルルの見立てでは代表候補生と比べても遜色無い。

特に一夏が「浸」と呼んでいた衝撃貫通の技は斬り合いにおいては脅威と言える。

「でも一夏。 箒はどうするの？」

ふと湧いた疑問。だが、一夏はまるで何とも無いように答える。

「箒な。 あいつには悪いが、もしも当たったらご退場願うでしょう。 言っちゃあなんだが、箒には負ける気がしない」

そう、ニヤリとした笑いを浮かべながら言う一夏の言葉にシャルルは同意していた。

確かに箒の近接戦の技量は一年の中では比較的高い。だが、それでも代表候補生や一夏に比べるとやや見劣りするし、彼女が使っただろう機体は学園の訓練機。

機体、使い手、両方の側面で彼女はシャルル達には及ばずにいた。

「まああれだ。 脅威と見るべきはただ一人。 ボーデヴィツヒだけだ。 頼りにしてるぜ、シャルル」

そう言う一夏の言葉にはシャルルに対する高い信頼が込められていた。

その言葉を聞いて、シャルルは再び胸の高鳴りを感じた。

「任せてよ、一夏。 大丈夫。 一夏は僕が守るから」

(そう。僕が一夏を守る。一夏の隣で戦う。筈やボーデヴィツヒさんには悪いけど、僕も、僕たちも負けるつもりはない)

そう、シャルルは心の内で強い決心を固めた。

「やてと」

そう言っで一夏は座っていた椅子から立ち上がり、部屋のドアへと向かう。

「??どうしたの、一夏?」

疑問に思ったシャルルが一夏に尋ねる。問い掛けに一夏は首を回し、頭だけをシャルルに向けた。

「ああちょうどいいや。シャルルも来い。ボーデヴィツヒの情報引っ張りに行くぞ」

「行くつてどこに?」

言いたいことは分かる。試合前に情報収集をするのは策としては基本。だが、こんな時間にどこですか。それがシャルルには分からなかった。

「どこかって?」

そして一夏は肩を竦めると、強い眼差しで言った。

「寮長室。千冬姉のところだ」

俺は今、寮長室の前に居る。寮に住んでいる生徒達からは暗に「鬼の住まう部屋」なぞと呼ばれてるが、まあ間違っちゃいない。

俺の隣にはシャルルが立っている。当然ながら男の格好でいるわけだが、その表情はどこか硬い。無理もない。俺だって緊張している。とは言え、ここで引き返すわけにもいかん。俺は意を決して部屋のドアをノックした。

「誰だ」

「織斑です。話があつて来ました」

「…入れ」

入室許可が下りた。クソッ、少しかりビビってきた。なまじ千冬姉の声だけが聞こえるもんだから、余計にどんな顔してるか気になる。

「失礼します」

だが、もはや後に引けない俺は部屋に入る。その後にシャルルが続く。こら、裾を掴むな。気持ちは分かるけどさあ。

寮長室とは言え、基本的には俺達の部屋とそう大差は無い。だが、各種設備がやはり良い。そして部屋の奥、小さな机とセットで置かれた椅子に千冬姉は座っていた。格好は実習や寮での指導で来ている白のジャージ。

本来ジャージを来ている人間はリラックスしているように見えるものだが、千冬姉に限ってはそんなことは無かった。

「座れ」

そう言っつて千冬姉は自分の対面にある椅子に座るように言っつ。

一人部屋になんで複数人数分の椅子があるんだか。あれか？寮則破っつたらこの部屋に連行されて……

止めよう。怖い考えなんか持つもんじゃない。

促された俺とシャルルは千冬姉の対面に座る。

「それで、何の用だ。一夏？まさか私が恋しくなっつたと言っつわけでもあるまい」

成る程。一夏と呼ぶということは、ここでは家族として接しるつ。なら少しは気が楽になるな。

「まさか。千冬姉には俺がそんな玉に見えるのかよ？」

「そうだな」

俺の返しに千冬姉は軽く笑っつて肯定する。俺の隣でシャルルが驚いたよつうな表情をしているが、千冬姉のこつう顔を知らないからか

ね。無理ないな。

厳格な教師としての千冬姉しか知らないシャルルからしてみれば、今の千冬姉の顔は珍事みたいなものだろう。

つと。こんなこと考えてる暇は無かったんだ。さっさと本題に入るか。

「で、千冬姉。俺がわざわざここまで来た用なんだけどな、簡単さ。ボーデヴィツヒのことだよ」

そう言った瞬間、千冬姉の目が僅かに細まった。まあ覚悟はしていたよ。だが、家族として会話している以上、引く気はないね。

「あいつの話だと？言っておくが、私は教師として誰かに特別肩入れするつもりはない。アレの情報を知りたければ」

「違うよ違う。俺はただ確認したいだけなんだ」

「確認、だと？」

何を？って言いたげな顔してるな、千冬姉。

「分かってるはずだ。ボーデヴィツヒが俺を目の敵にしている理由。あの事件が原因なんだろう？言っとくけど、終わったことだからって話さないのは無しな。今日ばかりは俺も引くつもりはない」

これだけはキツパリと言っておく。こんだけ言ったんだ。千冬姉とてだんまりを決め込むわけにはいかないだろうよ。

「はぁ・・・」

ため息を吐く千冬姉。どうやら観念してくれたらしいな。

「いいだろう、話を聞こうか。だが、そのことならば何故デュノアがここに居る？」

「俺が話したからだ。あの事件のことを洗いざらいな」

「・・・話したのか？」

ああ、さすがに驚くよな。俺だって我ながらよく話せたもんだと思うし。

「話した。だからシャルルが聞いても問題はない」

俺の言葉に千冬姉はそうか、とだけ呟くとしばらく黙りこくる。

「話してみる。聞いてやる」

オーケー。んじゃ、いっちょお話タイムといこうか。

「ボーデヴィツヒが俺を憎む理由、あいつ自身が言っていたけど、俺が千冬姉の大会二連覇の邪魔をしたから。これで間違いはないな？」

俺の確認に千冬姉は頷く。うん、まあこの辺はいいんだ。問題はこ
の先。

「それでだ、あいつは千冬姉をやたら尊敬しているみたいだけど、何でなんだ？一年教えていたからか？」

俺が一番聞きたいこと。それはボーデヴィツヒが千冬姉を尊敬する理由。一年指導を受けたから。なるほど、理由としては十分だよなでも、そいつは推測でしかない。だから当事者の千冬姉に効くのが一番手っ取り早いんだ。

「そつだな。あいつが私を慕うのは恐らくは私があいつを引き挙げたからだろう」

そう千冬姉は語り始めた。

「私がドイツで教官を始めた時だ。あいつは諸事情故に部隊の中でも実力の低い位置に居た。だが、私が教えたことであいつは部隊の頂点に上り詰めた。あの時、どん底にいたあいつにとって、私は希望の光だったのだろう」

成るほどね。それならあの尊敬のしようも頷ける話だ。言うなればボーデヴィツヒにとって千冬姉は文字通り神のごとき存在だと。ったく、どこの宗教だか。

「とはいえ、今更ながらに私はいつの教育を十分にしていられなかったと思っている。あいつは力に執着しすぎた。他にも大事なことを教えてやるべきだったのにな」

そう千冬姉は苦い笑みを浮かべながら自嘲気味に言った。・・・珍しいな、千冬姉がこんな表情をするなんて。少なからずボーデヴィツヒに思つところがあるらしい。

「千冬姉。ボーデヴィツヒはその事件のことは知っているのか？確かあの事件を処理したのはドイツ軍だろ？」

そう。俺が殺人を犯したあの誘拐事件。その処理の一切をドイツ軍が行ってくれた。今になって考えると、向こうは情報提供以外の借りも作っておきたかったんだろうな。

「いいや、ボーデヴィツヒはあの事件についてはほとんど知らん。知っているのはお前のために私が試合を投げたということだけだ」

思わずため息を吐きたくなった。ボーデヴィツヒあのアマめ、事態の一番肝心なところだけ知らないなんてな。なんて面倒くさいやつだ。しかし、大体の状況や事情は把握した。これ以上の会話は必要ないな。

「それだけ言ってくれりゃ十分だよ。俺たちは戻る。シャルル、お暇しようか」

「え、うん・・・」

そう言っただけで俺とシャルルは立ち上がり、千冬姉に軽く一礼して部屋を出ようとする。

「一夏、少し待て。デュノアは先に戻れ」

その言葉に俺たちは足を止める。とりあえずシャルルには目で先に戻るように伝える。

そして、部屋には俺と千冬姉のみとなった。

「一体どうしたのさ」

「お前の白式、その武装のことだ」

・・・ヤベ。もしかして感づかれてる？いや、千冬姉なら絶対感づいてる。

とは言え、それを顔に出すほど俺は間抜けじゃない。極力ポーカーフェイスを維持する。

…もう気づかれてるかもしれないけどさ。

「白式の新装備、蒼炎だったか？使い心地はどうだ？」

「いやまあ、結構気に入っているけど…」

「そうか…」

…気まずい。千冬姉が何を考えてるかまるで分からん。キレるならいつそキレてくれと思いたいくらいだ。

「まあ、お前がその武装を気に入っているなら構わん。零落白夜との相性もいいみたいだからな」

やべえ。多分千冬姉はほとんど気付いてるぞ…！

「だが、先達として一つ忠告だ。力に溺れるなよ。それだけだ。さつさと部屋に戻れ」

それだけ言っと、千冬姉は部屋の奥に引っ込んでしまった。助かった……

side out

自室に戻った一夏とシャルルは、時刻も遅いということでは就寝の準備をしていた。

「なあシャルル。ふと気になったんだが、シャルルの男の仕草ってやっぱり練習したのか？」

編入してからこれまで、誰にも男子と疑わせることの無かった程に板のついたシャルルの仕草。それが一夏には気になった。

「うん。ここに編入する前にね。性別がばれないようにって、徹底的に叩き込まれたんだ。そしたら自然とそう振る舞うようになった。やって」

「ほお……」

「あ、でも！一夏が気になるなら、二人っきりの時は女の子らしくするよくに頑張るけど……」

そう、視線を下に下ろしながらシャルルは言う。
だが一夏は軽く笑うと言った。

「無理するな。すっかり染み付いてんだろ？ならそのままでもいいじゃないか。それにシャルルらしくて俺はいいと思うぞ？」

「本当!？」

「嘘は言わねえよ」

「本当の本当!？」

「当然だ。それにシャルルは元々の器量が良いからな。そういうのも良いと俺は思うぜ?」

「そっかあ…フフ」

一夏の言葉にシャルルは笑みを浮かべる。そんなシャルルの様子に一夏もまた、その顔に笑みを浮かべるのであった。

side シャルル

部屋の照明も落として、僕達は寝る態勢に入っていた。

一夏は寝付きがいいほうなのか、ベッドに入ると割とすぐに寝入る。そして今、僕は一夏のベッドに腰掛けながら一夏の寝顔を眺めていた。

「ふふ…」

一夏の寝顔を眺めているだけで僕は自然と顔が綻ぶのを感じた。

「一夏に可愛いつて言われちゃった」

一夏って本当にズルイよねえ。一々僕の心をくすぐるんだもん。でも、悪い気はしないんだよね。

「ふふ…」

一夏の寝顔。なんだろうなあ。見てると不思議な気分。きっと一夏の寝顔を眺めるなんて、僕にしかできないよねえ。
なんだろうなあ。僕だけかあ。ふふふ、なんだか特別な気分になるなあ。

一夏の頭を静かに撫でながら僕は試合に向けて思いを馳せる。

一夏のパートナーは僕。そう、今度のトーナメントで一夏の味方になるのは僕だけなんだよ。

「一夏、勝とうね？」

そう言っただ僕は一夏の顔を見つめる。自然と顔を一夏に近づけていた。そして

「あっ…」

いつの間にか、僕は唇を一夏の額に当てていた。
唇を撫でる。僕の唇が一夏に触れちゃった…

「えへへ…」

でも、悪い気はしなかった。
きっとこんなことしちゃったのは僕だけなんだろうなあ。
なんだろうなあ。僕と一夏の間には色々な特別があると思う。そのことがなんだか嬉しい。

「それじゃ、僕も寝ようかな」

おやすみ、一夏。

side out

そして数日が過ぎる。

その日、学園は熱気に包まれていた。学年別タッグマッチトーナメントの開催日である。

「しっかし凄い人だな。テレビで見たことあるような人までいるわ」

アリーナ更衣室で着替えている一夏は、備え付けられているモニターに映し出される観客席の様子を見ながらぼやく。

観客席には各国政府機関や研究所の人間。

VIP席には文字通り各国のVIPが顔を揃えている。

「それは当然だよ。三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認、そして一年の有望株には早速チェックが入るからね」
その言葉に一夏はほう、と息をつく。

「成る程なあ。となるとだ。ここで俺が活躍したりすれば俺も注目株になると」

「一夏は元々注目されてるよ」

茶化すように言う一夏にシャルルが突っ込むように言う。

「一見リラックスしているように見える会話にはしかし、適度な緊張感が含まれている。」

二人は試合を前にベストと呼べる心理状態にあった。

「あ、対戦順が出るよ」

モニターを見ていたシャルルの言葉に一夏もモニターを見る。

そこには既に観客席は映っていないかった。

青を下地にした画面にトーナメント表が表示される。

「こいつは…」

「うそ…」

そして表示された試合順に二人は目を見開く。

一年生 一回戦 一試合目

織斑一夏 シャルル・デュノア vs ラウラ・ボーデヴィツヒ
篠ノ之箒

モニターにはそうあった。

「まさか最初からボーデヴィツヒさんと当たるなんてね。しかも箒まで一緒なんて」

シャルルが呟く。だが一夏は無言だ。

「一夏…?」

シャルルが一夏の顔を見る。モニターを見つめる一夏の顔には笑いが浮かんでいた。それは部屋でシャルルに見せるような穏やかなものではなかった。

一夏の笑みには獰猛さが、狂気が、闘争心があった。

「クツク…最高じゃねえかよ、え？」

そう呟く一夏の声には紛れも無い狂気があった。

「まさかポーデヴィツヒと初っ端から当たる上に箒まで一緒とはな。こいつぁ楽しみだ」

そう呟く一夏の姿を見てシャルルは決めた。

「一夏」

「ん？」

「僕は一夏の味方だからね。一夏が勝つために僕はなんでもするよ。だから、勝とう。一夏」

一夏の目を見据えるシャルル。その目には強い光が宿っていた。

「クツ…上等だ。行くぜ、シャルル」

そう言っで一夏は歯を剥き出しにした獰猛な笑みを浮かべたままアリーナへと向かう。そしてその後をシャルルが続く。

この場に気付く者は居なかった。一夏の後に続くシャルルの瞳。そ

の中には一夏と同じ、どこかズレた光が宿っていることに。

side 一夏

さて、俺は今アリーナピットへと向かっている。

いよいよ試合が始まるわけだが、まさか初戦からとはな。ボーデヴィツヒに箒とは。実に愉快的組み合わせだ。

ただ、言わせてもらおうなら箒とは別に戦いたかった。既にシャルルと手筈は決めた。箒には早々に倒れてもらう。その上で、用意した策、小細工でしかないような策だが、それを使ってボーデヴィツヒをボコす。

ああ箒、悪いな。本当はさ。お前とはじっくり斬り合いたかったんだぜ？だが状況がそれを許してくれない。実に口惜しい。

だから箒。お前とは次の機会でじっくり楽しもうじゃないか。

そしてボーデヴィツヒ。覚悟しとけ。確かにお前は強いよ。けど、俺達は負けるつもりはない。勝ちにいかせてもらう。

その上でだ。ただ倒すだけじゃつまらない。徹底的にやらせてもらうと決めた。

あの時の千冬姉との会話。

部屋を出る直前、千冬姉にこう言われた。

「今度の試合、仮にボーデヴィツヒと当たったら一夏、勝率が低くても勝ちにいけ。あいつには負けが必要だ」

そう言われちゃあねえ、勝つしかない。多分千冬姉はポーデヴィツヒの今後を見越して俺に言ったんだろうが、悪いな千冬姉。あの時もう決めたんだ。ポーデヴィツヒは勝てるなら潰す。千冬姉が言っていた、あいつの味わったどん底。そこにまた突き落とすとしてやる。

千冬姉が鍛えた存在。そいつを倒せば、俺はまた上へと登れる。そのために、俺はあいつを潰す。それがあいつの未来を閉ざしてもだ。むしろそのことに、俺はある種の興奮さえ感じていた。他者を踏み台にして蹴飛ばすというのは、中々に刺激的だ。

千冬姉。どうやら俺という人間は、意外に冷たいみたいだぞ？

皮算用じみた考えに身を震わせる。これは武者震いだ。イイ感じに気持ちが高ぶる。今日は気持ち良く剣を振れそうだ。

さあ、戦場はもうすぐだ。頼りになる相方シャルルもいる。存分に暴れ尽くそうじゃないか！！

side out

第二十五話（後書き）

次回、いよいよラウラ戦です。

篤さんには申し訳ない展開になりますがww

さて、上手く血戦にできるかな

第二十六話（前書き）

今までで最長と思います。

今回はラウラ戦前半。幕には悪いけど、早々に退場してもらっちゃいましたw

第二十六話

学園でも最大規模のアリーナ。満員となった観客席からの視線が集中する先、アリーナ中央部には四つの影があった。

白式を纏う織斑一夏とラファール・リヴァイブを纏うシャルル・デユノア。

相対するは学園訓練機の打鉄を纏う篠ノ之箒とシュヴァルツェア・レーゲンを纏うラウラ・ボーデヴィツヒ。

互いを見据える四人の眼差しは険しい。

「まさか、初戦から当たることになるうとはな」

「そいつは俺も同感だ。だが、こいつは僥倖。こちらら早くお前と戦りたくてウズウズしてたんだ」

依然険しい表情を崩さずに言うラウラに一夏は軽い笑いで答える。

「ほう。叩きのめされに来るのが楽しみなど、貴様には被虐趣味でもあるのか？」

嘲笑うようにラウラが言う。

「あいにくそこまで変態じゃあないな。俺は純粹に戦いたいだけさ。まあ変わった思考なのは否定せんがな」

そしてアリーナのカウントが始まる。

5

一夏は静かに蒼炎を構える。対するラウラも構えの姿勢に入る。

4

シャルルと箒も構えに入る。

3

一夏とラウラは睨み合い、言った。

2

「お前を」「貴様を」

1

「斬り捨てる!!」「叩きのめす!!」

0

試合開始のサイレンと共に一夏が白式を突撃させる。

蒼炎の刀身をこめかみの横まで持ち上げ、切っ先を前に、刃を上に向け、刺突の構えで突撃する。

間合いにラウラを捉えた一夏が蒼炎を突き出す。だが、それはラウラが一夏を間合いに捉えたということでもある。

「ふん」

発動するAIC。一夏はラウラの目前で宙に縫い付けられたかのようにその動きを止める。

「開始直後の突撃。実にわかりやすいな」

冷淡に言うラウラは動きの止まった一夏にレールガンの照準を合わせる。

だが、そんな状況でも一夏の表情に焦りは無かった。

「死角にや注意しとけよ、バカ女」

突如、一夏の背後からシャルルが飛び出し、至近距離からラウラにマシンガンを浴びせかける。

さすがにマズイと判断したのか、ラウラはAICを解除。一夏とシャルルから距離をとりマシンガンから逃れる。

しかしシャルルとてそのまま逃がす程甘くはない。マシンガンを小型のものに切り替え、移動の邪魔にならないようにした後、直ちにラウラを追撃。マシンガンを当てようとする。

だが、そこに割り込む存在があった。

打鉄を纏う筈。防御型ISである打鉄の実体シールドを展開しながらシャルルの射線に入りマシンガンを防ぐ。

小型故に威力の小さいマシンガンは全て筈の盾により阻まれる。

「私を忘れてもらっては困る」

打鉄の攻撃装備である日本刀型ブレードを正眼に構えながら箒は言う。

シャルルはすぐさま後退。代わるようにして一夏が箒に切り掛かる。数度の打ち合いの後、箒は一度下がる。そしてすぐさま飛び上がり、上段から一夏に切り掛かる。

振り下ろされる重みの乗った一撃はしかし、一夏の蒼炎により阻まれる。

蒼炎を構える一夏の表情の涼しさに思わず箒は齒噛みする。

突如、一夏の顔に軽い笑みが浮かんだ。それは好意的なものではない。まるで、自身の策が上手く言ったことを確信した策士のような笑みだった。

嫌な予感を感じた箒は自身の状況を理解した。動きが止まっている。思わず目の前の一夏、その背後に目を向ける。そこには二丁の大型銃を構えるシャルルの姿があった。

(しまった!!)

だが、既に遅かった。放たれる弾丸。

視界が急速に動いた。見れば自身の足にラウラのワイヤーが巻き付いている。

ラウラにより明後日の方向に飛ばされた箒はシャルルの攻撃を回避した。だが、その投げ方のあまりの乱暴さに箒は抗議の声をあげた。

「何をする！！」

だが、ラウラは答えない。そのまま箒を地面にたたき付けると、両腕のプラズマブレードを展開。向かってきた一夏と切り結ぶ。

一連の流れを観客席で見ていたセシリアと鈴は苦い顔をしていた。

「ラウラのやつ、箒を助けたわけじゃないみたいね」

「本当に邪魔だったから、という風ですわね」

二人は思わず箒に同情をしていた。

キンッ、キンッ、ガキンッ！

一夏とラウラは斬り合いを続ける。一撃の威力や切れ味では一夏の蒼炎の方が上である。だが、ラウラのブレードはプラズマで構成されているため重さがほとんどなく、また両手に展開しているため手数で優位にあった。

ラウラが片手のブレードで一夏を突こうとするが、一夏はそれを蒼炎の刀身で受け流しそのまま斬撃へと繋げる。だが、対するラウラももう片方のブレードで一夏の攻撃を防ぐ。

短時間の間に幾度も繰り返される剣戟に観客席は大きく湧いていた。だが、対照的に斬り合いを続ける二人の顔は固い。一夏はラウラのブレードの手数の多さを、ラウラは一夏の純粋な剣術の腕前を、互いに決定打を打ち込めない要因としていた。

「知っているぞ。貴様の攻撃手段はそのブレードのみ！その程度、なんの脅威でもない！」

ラウラの言葉に一夏は無言の剣戟を以て返答とした。

二人が激しい剣戟を繰り返す最中、アリーナでは別の動きがあった。

ラウラにより飛ばされた箒が復帰。ブレードを構えて一夏の下へ向かおうとする。だが

ズダダダダダダダ！

箒の行く手を遮るようにしてシャルルが姿を現し、マシンガンを箒に浴びせる。

高速切替によつて手にする武器を幾度も変えながらシャルルは箒に銃撃を浴びせる。箒も打鉄のシールドで防いでいるが、時折放たれる高威力の弾丸が少しずつ箒のシールドエネルギーを削る。

「クツ！邪魔をするな！！」

声をあげる箒だが、シャルルがそれに取り合うようすは見られない。眼に宿る何人も通さぬと言わんばかりの眼光がその意志の全てを物

語っていた。

「シャルルウ!!!」

突如響いた一夏の声。それに反応したシャルルがすぐさま移動。筈の前から姿を消す。好機と見た筈はそのまま一夏の方へ向かおうとして、驚愕に目を見開いた。

そこには瞬時加速を使い、高速で自らに近づく一夏の姿があった。

一夏とラウラの剣戟は僅かながらも一夏が押し始めていた。確かにラウラの技量は高い。同年代の操縦者と比べてもかなり高いレベルである。だが、こと剣技という点ならば純粹にソレを磨いてきた一夏の技量も高い位置にある。

そして、二人の剣戟はあくまで戦闘術の一環としての剣を扱うラウラとただ剣一本のみで以て相手を倒さんと鍛えてきた一夏では一夏に分があった。

ラウラも斬り合いでは倒しきれないと判断し、距離をおいてレールガンやワイヤーによる攻撃を行おうとするが、一夏の剣はそのための後退を許さなかった。

(不本意だがっ、剣の腕は認めざるを得んっ!!!)

内心でラウラは毒づいていた。

一夏は剣戟の最中、筈の進撃を防ぐシャルルの姿を目に捉えていた。そして、その後の行動は半ば本能的に行っていた。

少しばかり無理をして剣を振る腕を早める。突然の敵の動きの加速にラウラの動きが僅かに鈍る。その隙に一夏は思いつきり力を込めた一撃をラウラのブレードに叩きつける。

その一撃の重さに思わずラウラは後退する。瞬間、一夏は大声でシャルルの名を呼び、ラウラの前から移動をする。

すぐさま追おうとするラウラだったが、一夏と入れ替わるかのよう
に自分に接近していたシャルルの銃撃で阻まれる。

一夏とシャルルは一瞬の隙をついて互いの居場所を、相対する敵を変えていた。それは傍目には、少なくとも観客席にいた生徒や外部からの来賓達には見事な連携に見えていた。

(ナイスだシャルル!!!)

一夏は心の内でシャルルに礼を言う。

実のところ、二人が行ったのは連携ではない。一夏の言葉でその意図を一瞬で察したシャルルが一夏に合わせて動いただけにすぎない。だが、それが見事に決まったのだ。

本来なら、このようなことはありえない。ただ名前を呼んだだけで状況を把握して、次の行動を合わせるなど土台不可能である。

だが、シャルルはそれを為した。シャルル自身も気づいていないが、それ程に今のシャルルは冴えていた。

ガキイイイイイン!!!

一際大きな音と共に蒼炎が箒のブレードに叩き付けられる。その一撃の重さに箒は思わずたたらを踏んだ。だが辛うじて耐え抜き、一夏と鏝ぜり合いを行う。

「一夏あー!!」

「よお箒!!まさかあいつと組んでるなんて思わなかったぜ!!」肉食獣のごとき獐猛な笑いを浮かべながら一夏の攻撃に堪える箒。発せられる重圧に思わず押されそうになる。

「一夏、勝つ!!」

「はっ!やってみるお!!」

ブレードを上押し上げ鏝ぜり合いを解く。剣道でも使われる基本技術だ。鏝ぜり合いから離れた箒はすぐさまブレードを横尻ぎに振るう。だが一夏は後退することで回避。そして再び距離を詰め切り掛かってくる。

「悪いな箒!!今回は早めに沈んでもらうぞ!!」

「誰が!!」

一夏の言葉に強気で返す箒だが、二人の剣戟は明らかに一夏の優勢だった。斬り払い、あるいは突いて一夏は箒に連撃をしかける。それを箒は後ろに下がりながらなんとか捌いていた。

(なんて気迫！一夏がこれ程なんて！)

以前の剣道場で一夏の実力を知った。だがあの時は生身。それがI Sを装備しても変わらないことに箒は驚嘆する。

(一体、一夏はどれだけ修練を積んだのだ！)

専用機だから、センスがあるから、それだけでは済まされない技量の高さに箒は一夏に対し敬意に近い畏怖を感じる。

一夏の猛攻は止まらない。

その攻撃は全て首を、あるいは心臓を、急所を狙っている。受ければただでは済まない。

だが、いつまでも守りに徹するわけにはいかなかった。

箒はブレードを持つ手の感覚が麻痺しかけているのを感じた。

一撃受ける度に腕に走る衝撃。一夏が箒に語ることは無かったが、箒はそれが何かを理解していた。

古武術に言う「鎧通し」。一夏が「浸」と呼ぶソレを一夏同様に古武術を修めている箒もまた知っていた。

知っているが故に、受けつづけるのは得策ではないと判断する。

箒は一度大きく一夏と距離を取る。そして跳躍。上段から一夏にブレードを振り下ろす。

それが失敗だった。

箒の斬り下ろしを一夏は蒼炎で迎え撃つ。だが、真っ向から受け止めることはしなかった。

箒のブレードと一夏の蒼炎が触れ合った瞬間、一夏は蒼炎を握る力を僅かに緩める。

蒼炎は一夏の手を軸に刀身を下に下げていく。

結果、箒が振り下ろしたブレードはなんの手応えも得ないままアリのナの地面に叩き付けられた。

「なっ!？」

箒は驚愕するも、それは一瞬。すぐにブレードを一夏に向けて振るうとする。だが、ブレードは動かなかつた。

そして箒は見た。いつの間にか一夏の、白式の片足が箒のブレードを踏み付けて地面に押さえ付けていることに。

そして顔を強張らせる箒に一夏の、ブレードを踏む足を軸にしたもう片足の足による回し蹴りが放たれた。

蹴り飛ばさせる箒。ブレードも一夏の足から解放されたのか、しっかりと箒の手にあつた。

そして再び一夏の方に顔を向けた瞬間、その顔は一気に引き攣つた。

先程以上に自分に接近している一夏。攻撃体勢に入っているのは明らかだつた。

だが、回避も迎撃も間に合わない。

咄嗟に打鉄の实体シールドを展開。一夏の攻撃を防御しようとした瞬間、深い青の刀身がシールドを貫き、箒の胸部に強烈な突きを放つた。

蒼炎対物理形態「零落刃」

以前学園を襲撃した無人機の頑丈な装甲にすら深手を与える刀、世界で最もISに通じる人物が文字通り最強の刀として生み出したソレへ向ける盾として、防御専用として開発された装備ではない打鉄のシールドは脆弱に過ぎた。

発動する絶対防御。胸への強い衝撃に息を吐き出した箒は、自身の駆る打鉄のシールドエネルギーが尽きたのを見た。

「悪いな、箒。また今度やろうや」

それだけ言つて一夏はラウラと交戦するシャルルの援護へと向かう。その背に手を伸ばそうとした箒は打鉄が動かないことに気付く。シールドエネルギーの喪失。箒は自身の敗北を改めて思い知らされた。

一夏と箒が剣戟を繰り広げている最中、シャルルとラウラが行う戦いは一夏達の行うものとは対照的であった。

「貴様あ！」

行く手を遮るシャルルにラウラが怒りの表情を向ける。

だがシャルルはそれに動じることなく、冷静に射撃を続けていた。

ラファールのスラスターを吹かし移動を繰り返しながらシャルルは射撃を続ける。高速切替により瞬時に武器の換装が行われるので、手にした武装が弾切れを起こしてもすぐに別のものに変わる。

「貴様！^{アンティーク}第二世代の分際で……！」

ラウラが声を荒げる。だが、ラウラ自身はシャルルの射撃に攻めあぐねていた。

シャルルは常に移動をしているためレールガンは狙いを定められない。シャルルを無視して一夏に向かおうとするが、その都度シャルルが牽制の攻撃を放つ。

AICによりシャルルの射撃の大半を無効化できて被弾がほとんど無いとは言え、自身の行動を阻害されることへの不快感がラウラを苛立たせていた。

（馬鹿な！こいつ、この間と動きが違う！何があったというのだ！）

機体に世代差という大きな差がありながらも食らいつく。その原因がシャルルの技量の高さであることはラウラにも分かっていた。だからこそ、信じられなかった。

シャルルの行動、その精度が数日前に比べて大きく上がっていることは明白。だが、それはただか数日でどうこうなるものではない。それを為したシャルルにラウラは驚愕していた。

（だが、それがどうした！！私が勝利することは明白！私は勝たねばならんだ！！いいだろう、織斑一夏もろとも貴様を倒してやるう！！）

ラウラは一度大きくシャルルと距離を取る。そして肩の装甲からワイヤーを射出。あらゆる方向からワイヤーがシャルルに襲い掛かる。

「っ！」

シャルルは僅かに顔を歪めるとワイヤーの回避を始める。

ワイヤーにより編まれた檻の隙間をかい潜り、自身を切り裂かんと向かってくるワイヤーは実体シールドで防ぐ。並の操縦者ならあつという間に対処不能になるワイヤーの猛攻をシャルルは的確に捌く。

だが、それでもラウラにとっては十分。動きの鈍ったシャルルに向けて追加のワイヤーを放つ。

ラウラのシュヴァルツエア・レーゲンに搭載されているワイヤーは六本。先程シャルルに向けていたのは四本。残りの二本を放つ。そしてラウラは自分の策の成功を確信した。シャルルの腕に絡み付く二本のワイヤー。動きを止めるには十分過ぎた。

後は狙い撃つのみ。ラウラはレールガンの砲口をシャルルに向ける。

「っ!？」

明らかにまずい状況に強張るシャルルの顔を見てラウラの顔に愉悦の笑みが浮かぶ。

(終わりだ。そのままガラクタに成り果てる)

だが、レールガンがシャルルに当たることは無かった。

発射直前、シャルルの前に立つ影があった。白式を纏った一夏。一夏は零落刃を起動した蒼炎でシャルルを縛るワイヤーを切り裂く。拘束を解かれたシャルルと一夏はすぐさま離脱をした。

「織斑一夏か！」

ラウラは一夏の飛んできた方向に目を向ける。視線の先にはシール

ドエネルギーが尽き、機能停止した打鉄を纏う筈の姿があった。

腹立たしさにラウラは舌打ちをする。

(チツ！所詮は有象無象の役立たずか！！)

ラウラはすぐさま目標を一夏に変える。

ワイヤーは残り四本。その内二本をシャルルへの牽制に放ち、もう二本を一夏への攻撃に放った。

ラウラの心境を表しているかのようにワイヤーは荒れ狂う。

その激しさに一夏はラウラに近づけずにいた。

(クソが！ひとまずシャルルと合流だ！)

そう判断し一夏はシャルルの下へ向かう。

シャルルも一夏の合流の意図を悟り行動を起こす。

互いにワイヤーを回避しながら接近、合流。

「一夏」

呼び掛けるシャルルの声は固く、抑揚が少ない。だが、それが冷静な心理状態から来ていると察した一夏はただ指示をする。

「賭けに出るぞ。対ワイヤープランだ」

「分かった」

それだけ。

それだけを言って二人は行動を起こす。

「行くぞお!!」

一夏が駆ける。向かうは四本のワイヤーの真っ只中。

「馬鹿が！自ら攻撃に飛び込むとはな!!」

勝ち誇ったようなラウラの言葉と共にワイヤーが一夏に向かう。

（集中だ、集中しろ！俺！）

迫るワイヤーに一夏は全神経を傾ける。一夏は持ち前の動体視力と反射で以ってワイヤーを見続ける。

そしてワイヤーが至近距離へ迫る。そして

ガシィ！

一夏はワイヤーをつかみ取っていた。

「それがどうした！まだ残っているぞ！」

だが、ラウラの言う通りである。一夏が掴んだワイヤーは二本。そして、掴めていない残り二本のワイヤーが一夏の足に絡み付く。

「知るかよクソツタレがあ!!」

一夏は片手に持つ蒼炎の零落刃で掴んだワイヤーを切り裂く。

ワイヤーの先にはペンデュラム型のブレードを兼ねた分銅がある。

これが重りになってワイヤーの動きを制御しているため、それを失えばワイヤーの使い勝手はほぼ無くなる。

ラウラに残されたワイヤーは残り二本。一夏の足を縛るものだけだ。再びレールガンを一夏に放とうとするラウラ。だが、彼女は今の状況が二対一であることを失念していた。脇から襲い掛かる銃弾。自身に接近するシャルルにラウラは忌まじまじしいと言わんばかりの顔をする。

「貴様は邪魔だあ!!」

発動するAIC。かざされた手から発生する力場がシャルルの動きを止める。同時にラウラはワイヤーを操作。一夏を宙に振り回す。

「させるかよ!!」

だが一夏もまた行動を開始。ラウラから離れるように移動をする。張り詰められるワイヤー。それこそが一夏の狙いだった。ワイヤーを張ったまま一夏は体を反転。そして、最後の二本も切り裂いた。

「チィ!!」

シャルルをAICで止めたままラウラは一夏に視線を向ける。怒りに満ちたその目が、レールガンの照準を一夏に向けた。

「上等だコリア!!」

そう言うやいなや一夏はラウラに向かって突撃する。

「馬鹿め！ならば望み通りに打ち抜いてやろう！！」

その言葉と共にレールガンが一夏に放たれる。

音速を超える砲弾が一夏に迫る。白式との相対速度はさらに速く、もはやハイパーセンサーもまともに働かないほどの超音速となった。

そして遂に一夏と砲弾の距離がゼロになった。

だが、一夏が止まることは無かった。

閃く蒼炎。切り裂かれる砲弾。

音速を超える砲弾を切り裂くという超人技を行いながらも、一夏の表情に感嘆は無い。

だが、ラウラの表情は、アリーナに居た全ての観客は一夏の為したことに息を呑んだ。

「貴様！」

明らかに狼狽するラウラ。すぐにレールガンの次弾を装填しようとするがもはや間に合わない。

「せえああ！！」

一夏がラウラに達する。振り下ろされる蒼炎。そしてラウラのレールガンが切り裂かれ、爆発した。

「貴様！よくもお！！」

至近距離で一夏とラウラは睨み合う。

ラウラはAICを解除。一夏とシャルルから距離を取る。

並んで立つ一夏とシャルル。それを見据えるラウラ。
ラウラの顔には既に余裕が無かった。だが、依然その視線は険しい。
否、その険しさは増していた。

「どうするよ、ボーデヴィツヒ。レールガンにワイヤー。お前の武装の大体は失われたぞ」

「ふざけるな。私は負けん。貴様ごときに負けるものかあ!!」

ラウラは両腕のブレードを展開。一夏へ向かう。

「シャルル、しばらく手は出すな」

そう言つて一夏も蒼炎を構えながらラウラへ向かって駆ける。
激突する蒼炎とプラズマブレード。
再び一夏とラウラの剣戟が始まった。

ギンツ、キンツ、ガキン!

数度の打ち合いの後、再び後退するラウラ。追撃をかける一夏。
それをラウラはA I Cで止めようとする。だが、一夏がA I Cにか
かることは無かった。

突然の方向展開。瞬間的にスラスターを強く吹かし、一夏は移動の
方向を変えていた。

「貴様!私の停止決界を!」

「見せすぎなんだよ、阿呆が」

記録されていたセシリア、鈴、ラウラの試合の入念なチェック。そして一連の試合の流れで一夏はAICの性能を把握していた。

「お前のそいつは展開範囲が広くない！その上、お前が意識を集中させないと発動しない！そうだろうが！」

「くっ！」

一夏の言葉にラウラが僅かにうるたえる。

それは即ち、一夏の指摘が当たっていることを示していた。

「いいだろう！ならば貴様ごとき、停止決界など使わなくても叩きのめす！！」

「上等！！」

その言葉と共に激突。

再び激しい剣戟が始まった。

アリーナ管制室には千冬と真耶の姿があった。

行われている一夏、シャルルペア対ラウラ、箒ペアの試合。

その予想以上の試合内容に真耶はただただ感嘆するのみだった。

「凄いですねえ、織斑君。ボーデヴィツヒさんと渡り合っていますし、篠ノ之さんもあつという間に倒しちゃった」

「確かに少しは腕を上げたようだが、まだまだだな。今はただ動きが早いのとクロスレンジを人並み以上にこなせるくらいでしかない」
感心するような真耶の言葉を千冬は両断する。

相も変わらず身内には厳しい評価を下す千冬に真耶は少し困ったような笑いを浮かべた。

「それでもですよ。この短期間でポーデヴィツヒさんクラスと渡り合えるようになるのは」

「織斑はポーデヴィツヒに追い付いてなどいない。あくまでクロスレンジの斬り合いで多少優位に立てるというだけだ。生身なら知らんが、ISの戦闘なら同じクロスレンジでも徒手格闘ならポーデヴィツヒが若干優位だろう。その他の射撃技能や戦術、戦略眼などの各技能でもポーデヴィツヒは織斑より上だ。この試合、織斑が食いついているのは得意な斬り合いになんとか持ち込んでいるのと、ポーデヴィツヒが序盤は織斑を侮っていたからだ。仮にポーデヴィツヒが序盤から油断出し惜しみ無しで戦っていた織斑は既に負けていた」

「相変わらず厳しいですね」

そう笑いを浮かべながら言うと、真耶はモニターに目を向けて他の三人に目を向ける。

「それにしても篠ノ之さんは残念でしたね。彼女も一年の中では比較的良い方ですが」

「篠ノ之に関してはある意味必然だな。仮に当たったのがデュノア

でもやられていただろう。素の技量差もあるが、機体のタイプや性格といった相性がとことん悪い。織斑はその逆だな。機体のタイプも戦い方も似通っている。となると勝敗を決するのは純粋な技量。その点に関しては織斑が上のようだ」

後は機体性能の差もあるな、と千冬は言う。

「後はボーデヴィツヒさんとデュノア君ですね。流石はボーデヴィツヒさんと言うべきでしょうか。やはり実力が高い」

真耶はラウラの実力を評価している。だが、千冬の上は意外なものだった。

「いいや。さつきも言った通り、本来のボーデヴィツヒの実力はもっと上だ。見るべきはむしろデュノアにある」

その言葉に真耶は疑問を浮かべるが、千冬がこれ以上語る様子が見えないため、彼女は自身の仕事であるモニタリングに再び向き合った。

(デュノア、あいつはおそらく今、一つの境地に達したのだろう)

静かに胸の内で千冬は呟いた。

心技体の合致。戦う者の一つの到達点をシャルルは体感していた。シャルル自身はそのような自覚はないだろう。だが、強力な決意で以って戦いに臨んだ結果、シャルルはその境地に足をかけていた。

幾度も繰り返される剣戟。
蒼い刀と紫の光刃が激突する度に火花が散る。

アリーナを縦横無尽に駆け、時には宙を舞い、斬り合っては離れ再び斬り掛かるを繰り返す。

「そらどうしたあ！ご自慢のAICは使わねえのか！！」

「貴様ごときに使う必然など無い！！貴様など、これだけで倒すには十分だ！！」

だが、二本あったラウラのブレードは今は一本しか展開されていない。

剣戟の最中、一夏の放った一撃が左手のブレードの発生装置を破壊したのだ。

そしてラウラはブレードに回すエネルギーを全て残った右手に集約。その光刃を常より巨大なものにして一夏の蒼炎と激突を繰り返した。

「私は貴様を認めない！！教官のためにも！！」

「二言目には教官教官！！他に言う台詞は無いのかよ！！」

「そんなもの不要だ！！貴様が教官の荣誉に泥を塗った！！」

「ハッ！千冬姉に憧れる女は色々見たけどよお！テメエみたいなのは初めてだ！！」

「教官のために私は貴様を倒す！それが兵器たれと生まれた私の役目だ！！」

「バツカじゃねえの！！兵器の分際で憧れなんて感情持つてんじゃねえよ！！んなザマじゃ兵器としちゃ出来損ないもいとこだ！！」

「っ！！黙れえええ！！！！」

ラウラの攻撃の激しさが増す。だが、剣戟という点でラウラに一步勝る一夏はそれすらも対処をする。

観客席は繰り広げられる激闘に湧く。だが、その当事者達が繰り広げる舌戦に気付く者は居なかった。

「ハッ！！出来損ない言われてキレたか！？事実だろうが！」

「黙れ！貴様に何が分かる！」

「何も知るわきゃねえだろ！！！」

「消え失せる！！！！」

一際大きく振りかぶられたプラズマブレードが一夏を襲う。だが、一夏は蒼炎にブレードを走らせ、そのままラウラとの距離を詰める。

「貰ったあ！！！」

振り抜かれる蒼炎がラウラの右手、ブレードの根本を切り裂く。発生装置を破壊されたブレード、その光刃が霞のように掻き消える。

ラウラは遂に攻撃武装の一切を失った。

そのまま放たれる一夏の回し蹴り。ラウラの体が地面へと落ちる。

「テメエが味わったどん底にもう一辺叩き落としてやる！！そのまま朽ち果てるお！！」

蒼炎を上段に構えて一夏はラウラへと猛スピードで迫る。

「切り捨て御免っ！！！！」

間合いにラウラを捉えた一夏が蒼炎を振り下ろす。

A I Cの発動は無かった。その発動には使用者の集中が必要。だが、緊迫した状況と興奮状態から来る今のラウラの状態では、その集中が間に合わなかった。

だが、目の前に迫る刃を前にラウラは動こうとする。そして

ガキンッ

「なっ！？」

驚愕に目を見開く一夏。必殺の意志を以って振り下ろされた蒼炎は、その刀身をラウラの両手で挟み込まれていた。

真剣白刃取り

予想もしなかったラウラの対処に一夏の動きが止まる。それをラウラは見逃さなかった。

「うおおおおお！！」

刀身を挟み込んだままラウラは蹴りを放つ。狙いは一夏の腕。そして放たれた蹴りは一夏の腕に直撃。蒼炎が一夏の手から離れ、宙を舞う。

一瞬で視線を、憤怒に染まったソレを交差させる二人。

互いに武器は無い。この瞬間、二人の思考は全く同じ決定を下した。

振り抜かれる二人の拳が激突する。

徒手空拳による格闘。それが武器を失った二人が下した決断だった。

拳を、あるいは蹴りを放つ。

それをかわしてカウンターを決めようとする。だがそれすらもかわされる。

「貴様の存在は不要だ！貴様が教官を歪ませる！！」

「歪んでんのはむしろテメエじゃねえのか！！ああ！？」

「教官は完全なお方だ！！なのに！！貴様の存在が教官を揺らがせる！！そつだ！完全である教官にとって！貴様は！ただの害悪だ！！」

「何が完全だ！！人の家族をテメエの尺度で計ってんじゃねえぞボククラア！！」

「貴様のような凡百が教官の身内など！！教官の汚点でしかない！

「何故貴様などがあー!!」

その言葉に一夏は自分の中で何かがキレるのを感じた。

「好き勝手抜かすんじゃないぞー!!誰が身内なんて人間にや選べねえだろー!!千冬姉にふさわしくないだあー!!んなこと知ってらあー!!テメエに分かるかよー!!人外の領域にぶっ飛んだ身内を持つ苦勞が!!」

「貴様!!教官の身内であることを苦勞だと!!?栄誉だとは思わないのか!!愚図の分際でえ!!」

二人が交わす拳は激しさを増す。

捌ききれなかった拳が少しずつ二人のISを削る。

もはや完全な潰し合いとなった二人の戦いに、興奮の渦にあった観客も息を呑んでいた。

「そこまで千冬姉の家族つてのが羨ましいかよー!!だったら代わってやるよー!!」

その言葉に管制室の千冬が息を呑んだ。だが、一夏にはそれを知る由もない。

「この際だから言ってるよー!!俺はクソツタレだよー!!剣を振るのが好きで好きで堪らなくて!!それで強いやつを斬りたいって思う人で無しだ!!教えてやるよー!!俺が世界で一番斬りたいって思うのは!他でもねえ千冬姉なんだよー!!」

「貴様ごときが教官を斬るだど!!?妄言も大概にしるおー!!」

「妄言結構！！このくらいイカレなきゃあの領域には届かねえからなあ！！！」

「貴様は！身内でありながら教官を斬るといふのか！！！」

「だからだよ！！だからテメエに俺のポジションくれてやるって言っただけだ！！テメエは欲しいんだろ！？千冬姉の身内！千冬姉の特別って立場がよ！！！」

「貴様っ！！！」

「分かるか！？心から斬りたい相手が家族っていう気持ちだ！！千冬姉は俺の大事な家族だ！！それを斬りたいっていう衝動が！どれだけキツイか分かるか！！！」

叫ぶ一夏の声にはどこか悲痛の色がある。

ラウラが一夏の足を払う。地面に仰向けに倒れた一夏をラウラが殴ろうとするが、一夏は脚部ブレードを展開。下からラウラを突こうとし、ラウラはそれをかわす。

すぐさま起き上がった一夏が再びラウラに殴り掛かる。

「だったらいつそ！家族なんて繋がりが、無かった方がマシだよ！！こんなのが弟だって言うなら！こんなのが家族だって言うなら！千冬姉にいらねえ苦勞かけるだけだろうがあ！！！」

「なら私が悩まないようにしてやる！！貴様に引導を渡してやる！！！」

「少なくともテメエに殺られるつもりはねえよ！！千冬姉に斬られ

るなら歓迎だがなあ！！」

ラウラが一夏に殴り掛かる。

だが、一夏は姿勢を下げることで回避。そして最後の手を使う。

腕部装甲ブレード。

白式の両腕にあるブレード型の突起。前方にスライド展開させるとショートブレードになるその機構を一夏は使用。

自身の頭スレスレを通るラウラの拳を力づくで弾く。

拳の勢い、そのベクトルをずらされたことでラウラの体勢が崩れる。

それを最後のチャンスにした。

一夏の右手がラウラの頭を掴み、左手が肩を抑える。

発動する瞬時加速。ラウラを掴んだまま一夏は疾走する。

そして瞬時加速の加速が残ったまま一夏は再度瞬時加速を使用。

ダブル・イグニッションブースト
連続瞬時加速と呼ばれる瞬時加速の発展型を一夏はぶっつけで成功させた。

いや、そも連続瞬時加速自体は瞬時加速さえ使えば使用はできる。肝心なのはその速度を制御する技術なのだ。

だが、今の一夏が求めたのは圧倒的加速のみ。制御を度外視したソレならば、今の一夏でも十分可能である。

瞬時加速をさらに超える速さで一夏とラウラは疾駆する。一夏が何を狙うのか、ハイパーセンサーによる全包围視界でラウラは理解した。

一夏が向かうのはアリーナの壁。それが目前まで迫る。

「貴様ああああああ！！」

ラウラが叫ぶと同時に、鈍い衝突音が響く。

絶対防御が発動しラウラの頭部が潰れるのを回避するが、凄まじい衝撃がラウラの意識を揺らす。

(ぐっ…くっ…ああ…)

朦朧とする意識の中、ラウラは自分が宙に浮くのを感じた。

直後、その体に凄まじい衝撃がたたき付けられた。

ラウラを壁にたたき付けた一夏は、自身にも襲い掛かる衝撃を無理矢理こらえる。

そして、ラウラの頭を掴んだまま体を捻り、彼女を投げ飛ばした。

そして一夏は最後の一手を使う。

「シャルル！やれえ！！」

その言葉に反応し、今まで待機していたシャルルが動く。

いつ習得したのか、瞬時加速を使用。ラウラとの距離を一気に詰める。

シャルルの左手。そこにあったシールドがパージされる。

剥き出しになった左手の装甲には、一つの装備が隠されていた。

第二世代型最強の攻撃力を誇る装備。

シールドピアス
グレイ・スケール
盾殺しと呼ばれるパイルバンカー「灰色の鱗殻」

炸裂する爆薬。高速で射出された鉄杭が、シャルルと至近距離に近付いたラウラにたたき付けられた。

余りの威力に再び発動したシュヴァルツエア・レーゲンの絶対防御。ラウラのシールドエネルギーはあっという間に削れ、その残量をごく僅かにする。

そして防ぎきれなかった衝撃がラウラの体を吹き飛ばす。再びアリーナの壁にたたき付けられたラウラはそのまま倒れ込み、起き上がる気配が無かった。

「済まないシャルル。助かった」

シャルルの傍らに移動していた一夏がシャルルに礼を言う。その手には回収された蒼炎が握られている。

「ううん。このくらいはお安いご用だよ」

「しかしシャルルは凄いな。何も言っていないのに俺の望む通りに動いてくれるなんて」

「えへへ。言っただでしょ一夏。僕は一夏の味方なんだから。このくらいは突然だよ」

そう言っただけでシャルルは誇らしげな笑顔を浮かべる。

「それよりも一夏は大丈夫なの？結構傷ついてるけど…」

「ああな。まあ白式は結構やられたが、俺は平気さ」

白式はスラスター以外の装甲のほとんどに少ない損傷を負っている。

それを心配げに見つめるシャルルを安心させるように一夏は言った。

「ならいいけど…」

納得しながらも不安そうなシャルルの表情に一夏は微笑まじさを覚えていた。

「うあああああああ！！！！」

突然アリーナに響く悲鳴。それはラウラのものだった。何事かと思った一夏とシャルルが同時にラウラの方を向く。

そこには、うねるように変化を繰り返すシュヴァルツエア・レーゲンの装甲にその身を包まれていくラウラの姿があった。

第二十六話（後書き）

今回の戦闘について。

シャルルがあまりしゃべらなかつたのはかなりの集中状態にあつたからです。心技体の合致もこの時に一時的に起きて、各種行動の精度が上がっています。

つまりは頭の中で種が割れたあの状態みたいなものです。まあそんな極端に強くなるわけではありません。多分……

前から血戦にすると書いてましたが、実際書いてみると血戦というより舌戦になりました。ただ、それでも二人とも結構ボロボロになるまで殴り合ってます。

一夏の今回のセリフは戦闘により感情が高ぶつたために、ため込んでいた感情を爆発させたという感じです。この收拾もちゃんと付きますよ？

今回の戦闘。ちょっとICHIIKAさせちゃったかなと思ってます。

さて、このラウラ戦が終わった後、原作ではラウラがデレに入ります。というか和解ですね。

本作品も和解はさせるつもりですが、その後の一夏とラウラの関係はどうしようかと悩みました。原作みたいにデレさせるのもなんかアレだし……と思っていたら、良い具合にアイデアが浮かんだのです。

そして思いました。「こんな展開で大丈夫か？」と。

どのような関係にするかは作中で明かそうと思います。

ですが、「もしかしてこういう関係?」と思った方は感想にてどうぞ。当たると作者が焦りますww

なお、今回の一夏とラウラの舌戦についてですが、作者はガンダム
OOのBGM「MASURAO」を脳内再生しながら書いてました
ww

第二十七話（前書き）

ラウラ戦決着です。

やっぱりICHIEKASHIすぎないか心配です。
後、今回の話に限ってはSEKKYOにもなっていないかどうか。

第二十七話

side ラウラ

強くあれ。

私に求められたのはそれだけだった。

ただ最良の性能を持つ兵器として生み出された遺伝子強化体。そのことに私は疑問を持たなかった。

私は常に求められた成果を出してきた。私の性能は常に最高だった。

ISの登場。

それがきっかけだった。祖国ドイツも軍を中心にIS関連の開発を開始。

私はその開発の一つの被験体になった。

ヴォーダン・オージェ
越界の瞳

擬似ハイパーセンサーと呼ぶべき生体移植型ナノマシン。

理論上の不備はゼロ。だが、私は失敗した。移植されたナノマシンは暴走。

私の性能は格段に落ち、そのことを示す烙印のように私の左目は金色に変わった。

私は底に落ちた。

そんな私を救ったのがあの方、部隊のIS教官として招かれた織斑千冬であった。

あの人の教えを忠実に実行するだけで私は再び最高の座に立った。

あの人は私の理想だった。
世界の頂点に至る実力。常に威風堂々とした姿。その姿に私は心を奪われた。

あのようになりたかった。だから私は聞いた。
何故そこまで強いのかと。

あの人はこう答えた。ただ一言、弟が居ると。

そう答えた彼女の表情は柔らかかった。

違う！そんなのはあなたじゃない！

私の知るあなたはもっと強く凛々しい！あなたはそんな顔をする人ではない！

織斑一夏。教官の弟。認めない。認めるものか。あの人の特別だと？そのような存在、私は認めない！

倒す。教官を揺らがせる存在を。教官の栄光に傷を付けた存在を。私が倒す！！

力を望むか？ありとあらゆるを打ち倒す力を

寄越せ。私は勝つ。勝たねばならない。

教官に教わった、この国に伝わる八百万の思想^{日本}。その思想に則るならば、ただの兵器たる私にも魂があるのだろう。

ならば断言できる。

力が欲しい。この衝動は私の魂から沸き上がるものだ。

そうだ。私の魂はこう言っている。

もつと力を！！もつと！！絶対的な力を！！

そして私の意識は闇へと溶けた。

s i d e o u t

管制室。

千冬はその額に手を当てていた。目を閉じたその表情には疲れているとも、何かに堪えているとも見える。

（あの馬鹿。そんなことで悩むとはな）

彼女は一夏がラウラに向けて放った言葉を思い出していた。

（馬鹿者が。私は何だろうと、お前が何だろうと、私とお前が家族であることに変わりなどあるまいに。いや、私だけがそう思っているだけか）

一夏の言葉は千冬に少なからずの衝撃を与えていた。

普通の学園における厳格な態度からは想像しがたいが、彼女は紛れもなく一夏を家族として大事に思っている。故に、その繋がりを無い方が良いという言葉は、彼女にとっては大きな衝撃だった。

だが、そのことで一夏に恨み言を向けるつもりは千冬には毛頭無かった。

あるのはただ、そこまで言わせる程の弟の苦悩への心配。

二人の家族としての関係を歪ませた自分の肩書きに対する自嘲の思いだ。

(背負ったものを放り捨てるつもりは無いが、こうなるとどうしても煩わしく思えるな。全く、ままならないものだ)

今更自分ではどうにもできなくなった状況に、千冬はただ上を仰ぎ見る。目の前に広がる管制室の天井の無機質さがやたら目立つ。

「うああああああああああ!!」

突然管制室に響いた教え子の悲鳴に千冬は意識を外へ引き戻された。

「これは……織斑先生!!」

モニターの前に座る真耶が千冬の方を向く。

モニターに映る異変。自分の方を向く真耶の険しい表情。それらを見て千冬はすぐさま学園教師としての顔に戻り、冷静に指示を出した。

「レベルDの警報を発令。直ぐに教員部隊を向かわせろ」

既にその表情は学園教師としての固いものに戻っていた。

シャルルはラウラの身に起きた変化を信じられないと言っような目で見ていた。

シュヴァルツエア・レーゲンの装甲がまるで粘土のようにその形を崩していく。

脈動を繰り返しながら崩れた装甲は形を別のものに整えていき、ラウラの体を覆っていく。

唐突に脈動が止まった。瞬間、装甲は高速で変形。変貌したその姿を現した。

それは黒い人型だった。ラウラを核としたかのように装甲は彼女の体を包むように覆っている。

「あれは一体……」

シャルルの知識にはISがあのような変形を遂げるということは無い。

ISの自己進化機能の一つ、第二形態移行セカンドシフトならば確かに変形はする。だが、それも目の前で行われたようなISの基本構造すら丸ごと変化させるようなものではない。

眼前の存在を一言で言い表すならば剣士。

シュヴァルツエア・レーゲンの武装がオールレンジに対応したものであったのに対し、目の前のISの武装はブレード一本でしかなかった。

異質。そう呼ぶより他ない光景だった。

「一夏、一夏はあれを……」

どう思う?と聞こうとして一夏の方を見たシャルルは言葉を失った。

「一夏…?」

一夏は何も言わない。ただ黙ってラウラを、異形と化したシュヴァルツェア・レーゲンを睨みつけていた。

強張った頬の筋肉が、一夏が歯を強く噛み締めていることを示す。そして、一夏の目に浮かぶのはただ一つの感情。

殺意だった。

「ウオオオオオオオオオオ!!!」

憤怒しか感じられない雄叫びと共に一夏が、白式が疾駆する。

そして一夏は黒いISに向けて蒼炎を振る。対する黒いISも手にしたブレードで応戦する。

高速で振り抜かれた二つの刃が激突し、激しい音を響かせた。

side 一夏

ポーデヴィツヒのISに変化が起きた。

悲鳴を上げているポーデヴィツヒを包み込むようにISの装甲が形を変えていった。あれは一体何だ?

そして変型を終えたISの姿を見たとき、俺は自分の中のナニカが切れるのを感じた。

ブレードを構えたその姿。分かるやつがどれだけいるかは知らないが、あの姿を俺は知っている。あれは千冬姉だ。そして手にしたブレードは見間違えるはずが無い。何せ同型の物を俺も使っていた。そう、雪片だ。

だが、あれが千冬姉なわけが無い。あれは偽物だ。はっきりしている。

キニクワナイ

ポーデヴィツヒの奴に心底腹が立った。あいつはよく分からないモノで千冬姉の真似事をしている。それが酷く気に障る。

フザケルナヨ

俺はな、ポーデヴィツヒ。お前自身と戦っているつもりだ。だに、お前は千冬姉の紛い物に成り果てやがった。実にふざけている。いいぜ。そっちがその気ならこっちにも考えがある。

大人しくボコられる!!!

「ウオオオオオオオオオオ!!!」

俺はポーデヴィツヒに向かって斬り掛かり、やつが振った偽雪片と蒼炎をぶつけた。

s i d e o u t

「フザケタ真似してんじゃネエぞお!!!ポーデヴィツヒ!!!」

一夏の怒声が響く。

だがラウラが、いや、もはやラウラともシュヴァルツェア・レーゲンとも呼べない異形のISは何も答えない。

手にしたブレードで一夏を蒼炎ごと弾くと、一度ブレードを腰に据えて一気に斬り放った。

それは日本に古くより伝わる居合の技。

直撃すれば即死しかねない一撃だが、一夏は眼前で蒼炎を構えて何とか防ぐ。

しかし、その余りの威力に一夏の体は大きく弾き飛ばされてシャルルの隣、元居た位置に倒れこんだ。

「一夏!」

慌ててシャルルが一夏に近寄る。

一夏は気を失つてはいなかったが、先程の一撃に白式のシールドエネルギーを削られたのか、装甲の一部が消失していた。

現にシャルルが確認した白式のエネルギー残量はほとんど残っていない。

「グッ…シャルルか…」

痛みを堪えているのか一夏が立ち上がる。

その目には先程までの憤怒は無く冷静な色が戻っていた。

「あークツソ。頭は冷えたけど、キツイのもらっちまった」

そう言いながら一夏は調子を確認するかのように手首を回す。

「一夏!」

箒も一夏の側にやって来た。

彼女も事態の異常性を理解しているのか、その表情は険しい。

「一夏、あれは何だ」

言葉も少なく、箒は簡潔に要点を一夏に問う。

一夏は地面に座り込んだまま、苦い表情をしながら答えた。

「あれは千冬姉だよ」

「千冬さん？」

箒の顔に疑問符が浮かぶ。それはシャルルも一緒である。

「そう、千冬姉。そうとしか言えない。あれは千冬姉そのものだ。

武器も、技もな」

そう言いながら一夏は自分が弾き飛ばされた一撃を思い出す。あの馬鹿げたレベルで強い居合は紛れも無く千冬の得意技だった。

「どんな手品や魔法を使ったかは知らねえが、ポーデヴィツヒのやつめ。ISに何かして千冬姉の動きを真似してやがる」

そう言う一夏の表情は酷く忌ま忌ましげである。だが、すぐさまその表情は苦い笑いに変わった。

「まあそれが気に食わなくてよ。ボコそうとしたら逆にボコられた」

言いながら一夏は立ち上がるが、その足取りは少し覚束ないためシ

ヤルルが支えている。
そんな一夏を見ながら箒は言う。

「だいたいは把握したが、一夏。お前が出る必要は無いだろう。既に警報も発令された。直ぐに学園の先生達が事態の鎮圧に動く」

言うやいなや、異形のISを取り囲むように学園保有のISを装備した複数の教員がアリーナに現れる。

異形は自分から攻撃をしかけるつもりは無いのか、ただそこに立つたままであり、教員部隊との睨み合いが続いていた。

遠からず事態は鎮静化するだろう光景。だがそれを見てもなお、一夏は前に一歩踏み出した。

「俺がやる」

「一夏！」

「俺がやる。ホーデヴィッヒあの馬鹿に一発かまसानキや気が晴れない。少なくとも、千冬姉の劣化コピーなんて馬鹿な真似を許すつもりは無い」

「一夏…なんでそこまでして戦うんだ…」

一夏の引く意志の無い言葉に箒は自然と問いを発していた。
何故ボロボロになりながらも戦うのか、箒には分からなかった。
だが、一夏はただ一言、何でも無いように答えた。

「そこに戦いがあるから」

そんなどこぞの登山家みたいな答えに箒は言葉を失う。

そして、彼女は説得を諦めることにした。

「分かった、行ってこい。その代わりに、死ぬんじゃないぞ」

そう言う筈の顔にはしょうがないと言いたげな笑いがあった。彼女は理解していた。自分では一夏を止められないことを。

ならば、前に進む一夏への応援くらいはする心積もりだった。

一夏はシャルルから離れ、一歩踏み出す。そしておもむろに通信を開いた。

「と、いうわけなので織斑先生。ボーデヴィツヒのやつは俺がやります」

通信の向こうで真耶の驚く声が聞こえたが、一夏はそれを軽く無視する。必要なのは千冬の言葉だけだった。

「……やれるならやれ。…死ぬな」

最後に小さく、感情の籠った気遣いの言葉を添えて千冬は許可を出し、そのまま通信が切れた。

今一覇気に欠ける声に一夏はラウラに浴びせた舌鋒を思い返した。

（あーそついや、何か興奮して色々ぶちまけちまったなあ。まったく後でフォローしなきゃかねえ。本当、俺のことで一々悩んで、めんどくさい姉だよなあ。嬉しいけどさ）

思いながら一夏は蒼炎を構え、白式のモニターを確認する。エネルギー残量は僅か。これでどう手を打つかを考える。

「一夏」

その手段は意外なところから出て来た。ラファールからコードを伸ばすシャルル。

「一夏、僕のエネルギーを使って」

そう言いながらシャルルは一夏の腕を掴み、白式とラファールを繋ぐ。

流れ込むエネルギー。その光景に一夏は以前の無人機戦、その時の鈴の助力を思い出す。

(ほんと俺って仲間に恵まれてるよな)

エネルギーの伝達が終了した。白式のエネルギー残量は全快ではないが、一夏が望む以上のものになっていた。

「ありがとな、シャルル」

エネルギーを全て白式に回したため、ISが解除されたシャルルに一夏は礼を言う。

「言ったでしょ？僕は一夏の味方だって。一夏が必要なら僕はいくらでも一夏を助けるよ」

そう、どこまでもまつすくな瞳でシャルルは言いきる。その言葉に一夏は力強い頼もしさを感じる。蒼炎を握る手に力が入る。

見れば千冬が指示を出したのか、教員部隊も下がった位置にあり、

一夏と黒いISの間を阻むものは無かった。

「ふん・・・」

軽く鼻を鳴らし、蒼炎を構える。刀身を腰に据えた居合の構え。それは黒いIS、千冬を模した物が使うものと同じ構えだった。

「そいつを使うのはお前だけじゃねえ。所詮お前は紛い物。だから俺が教えてやるよ。俺が千冬姉から教わった千冬姉の剣を。本物の重みってやつをな」

蒼炎の刃に光が走る。零落白夜の発動である。そして白式のスラスターにも同様に光が収束。こちらは瞬時加速のチャージだ。

「行くぞ!!」

その言葉と共に一夏は白式を走らせる。それと同時に黒いISも迎撃のために再び居合の構えを取る。

両者の距離が縮まる。そして一夏はスラスターにため込んだ力を解放した。発動する瞬時加速により距離が急速に縮む。

そして両者は全く同時に刀を振るった。

眼前に迫る刃を一夏は脅威とは見ていなかった。重く、速く、鋭い斬撃。しかし

（意志も持たないでただ振るう剣なんざ、怖くもなんともねえよ！）

向かってくる刃はただそれだけ。ただ機械的に再現しただけの、意志も、決意も、覚悟も何も無い攻撃。

一夏は自然と姉と師の教えを思い出していた。

『いいか一夏。刀とは振るう物。断じて振るわれる物では無い』

『刀を振るならば、その一振り一振り全てに意志を乗せる。刀を振る人間の強い意志が何よりも刀を鍛える。どんな刀でも名刀に変える』

(そうさ！だからお前ごときには、絶対負けねえ！！)

すれ違いざまに蒼炎を切り上げ、敵の刀を上弾きあげる。そのまま敵の脇をすり抜けた一夏はすぐさま二度目の瞬時加速を発動。急制動と方向の急転換を強引に行う。

「ぐうううううううっ！！」

凄まじいGが一夏の体を襲う。体の中で何かが飛んだような感覚がしたが、気にすることはせずに再び黒いISへ急接近。

ブレードを弾かれた敵はその姿勢を崩していた。その懐へ飛び込み、一夏は急停止。再び襲いかかるGに耐えながら、一夏は停止により生じた慣性を勢いに変えて蒼炎を振りぬく。

黒いISがなおも抗おうと偽雪片を振り下ろすが、一夏は体をずらしてそれをかわす。

だが、その切っ先が僅かに一夏の顔に当たる。

一夏の顔が左のこめかみから頬にかけて切り傷が刻まれるが、それを気にすることなく蒼炎を振る。

「一閃二断」

千冬が得意とした二撃の決め技。それに一夏が足捌きによる死角を取るといふ独自の色を加えた技。

だが、それは紛れも無く千冬の技であった。

(これが本物の重みだ！)

そして、その刃が敵の胴を捉えた。

一夏の意識は浮かんでいた。

色があるのかどうかも分からない、認識することもおぼろげな空間。だが、その意識だけははっきりしていた。

別の意識を感じる。誰かに指摘されるでもなく、それがラウラのものだと一夏は自然と理解していた。

「どうしてお前は強いのだ？」

彼女の声が聞こえる。その声に激情は無く、どこまでも静かなものだった。

「なんで、かな・・・」

答える一夏の声も静か。自然と心が落ち着いていた。

「俺はそこまで強いと思っただことはないさ。文字通り最強と呼べる人間を二人も知ってる。それと比べると俺なんてな……」

自嘲するでもなく、自然と口に出る。ラウラの意識はその言葉を静かに聞いている。

「それでも、俺はお前には負けるつもりはないよ。負けられない」

「何故だ？」

「俺はな、戦いは誰のためでも無い、自分のためにするもんだと思ってる。仮に誰かのためだと言っても、それは『誰かのために戦いたい』っていう自分の願いのためだ。でもお前は、自分が無い。戦う理由を他人任せにしていた。そんな奴に負けられない、負けたくない」

「私が……」

「お前は千冬姉を戦う理由にしていた。お前が千冬姉を尊敬してんのは知っているけどさ、それでも戦う理由くらいは自分で決めるよ」

「私は…兵器だ。ただそうあれと生きてきた。そんな私が自分のためなど…どうやって理由を探せというのだ…」

声はか細い。それはラウラが見せた弱さだった。

「それは自分で考えな。けど、その前に千冬姉と腹割って話すこと

を薦めるぜ。千冬姉みたいなのでも結局は人間なんだって分かれば、自分だってただの人間だって気付くはずだぜ？」

「……………」

無言。人たること。それはラウラにとっては初めての思考。故に彼女はそれに戸惑う。

「一つ教えてくれ。お前は人として、何を理由に戦うのだ？」

「ん？俺か？俺はだな」

そして一夏は一度言葉を切り、力強く言った。

「戦い、己を高める。そしていつか、千冬姉や師匠の高みに上る。それで隣で同格の存在として胸を張るのさ。まあ、ちとぶっ飛んだ目標だけど、やり甲斐はありそうだな」

「そうか…」

そう呟くと、ラウラは声を和らげて言った。

「やはり、お前は強いな…。ああ、認めざるを得ない。私の…負けだ…」

「言質は取ったぜ？後で試合やり直せとか言うなよ？」

「ふっ、つくづく嫌味なやつだ。だが、そう振る舞えるお前が羨ましい。そうか…私は、お前に嫉妬していたのだな…」

その有様に、教官に特別に思われることに……

そして一夏は蒼炎を振り抜き、黒いISを切り裂いた。

中から倒れこんだラウラの体を支え、静かに地面に横たえる。

「ばーか。千冬姉はお前のこともちゃんと気にかけてたさ」

静かにそう呟いた。

凄絶を極めた二人の、同じ人物を敬愛するが故に互いを認められなかった二人の戦いが幕を閉じた。

試合後、一夏とシャルルはアリーナの更衣室に居た。

トーナメントはアクシデントにより中断。生徒は一度各教室に戻り待機、担任の指示を待つこととなった。

しかし、試合に出っていた一夏、シャルル、箒は教室に戻る前に着替えを行っていた。

ラウラはあの後、気を失ったので現在は保健室にて寝かされている。

「一夏、大丈夫？」

既に着替えを終えたシャルルが反対側のロッカーエリアに居る一夏に声をかける。

一夏は未だ着替えておらず、ISスーツのまま更衣室の長椅子に座り込んでいた。

「いや、結構体がグダグダになってる…」

答える一夏の声に力は無い。その背には重い疲労感が滲んでいた。

「その、一夏が望むなら着替えを手伝うけど……」

そう控え目に言うシャルルの頬は僅かに赤い。だが、見えない故に気付いていない一夏はそれを断る。

「いや、大丈夫だよ。シャルルは先に戻っていてくれ」

「本当？大丈夫？」

「ああ、大丈夫だからさ」

そう言つて一夏はシャルルに先に教室へ戻るよう促す。

未だ心配そうな表情に変わりはないシャルルだが、一夏の意向を尊重して先に更衣室を辞することにした。

シャルルが更衣室を出てからしばらくして、ようやく一夏は動き出した。

「あゝ、マジ体だりい。ちと無茶すぎたな」

あちこちがギシギシと言っているような体を確認しながら一夏はぼやく。
最後の一撃。連続で発動させた瞬時加速による急転換の負担が、想像以上に体に響いていた。

ノロノロと億劫そうに着替える一夏。何とか着替え終わり、更衣室を出る。

少しふらつく足で廊下を歩く。生徒は皆教室に戻ったので、廊下は静かそのものだ。

廊下を歩く一夏の顔色は良くない。そのまま歩き続ける一夏。そしてそれは唐突に起こった。

ガクン

「え？」

突然全身から力が抜ける。

まるで糸が切れた人形のように一夏は廊下に膝を付いた。

「あれ？おかしいぐっ！？」

不意に腹部を襲う痛み。

自らの意志とは無関係にナニカが腹から込み上げて来る。

「ぐっ！げほっ！！」

咳込む口を抑える手には赤色が付いていた。

それが何かを理解するより早く一夏の意識は遠退き、正常な思考ができなくなる。

「！！！！」

誰かの声が聞こえた。

だがそれが誰の声なのか、何を言っているのか。
分からぬまま一夏は意識を手放した。

第二十七話（後書き）

次回で二巻関係になると思います。

さて、一夏の身に起きた異変は一体！？

まあ、分かりやすいかもしれませんが。

和解話も上手くできたらと思っています。

もうすぐ三巻。

ついに白式のセカンドシフトだ！やりたかったアレやコレを考える
と頬が緩みます。

もしかしたら、またアンケート的なのをするかもしれないので、そ
の折にはよろしくお願いいたします。

第二十八話（原作二巻終了）（前書き）

というわけで原作二巻終了です。

前回ぶっ倒れた一夏ですが、すぐに復活しますww

そしてラウラは…フヒヒ…

第二十八話（原作二巻終了）

緊急事態によりトーナメントが中断されたため、生徒は全員各教室に戻っていた。

それは一年一組も例外ではなく、生徒は全員自分の席に座っている。

本来、常に口数の多い十代女子だ。あのような事態の後ともなれば教室に居ながらも、それを話題に会話が尽きることはないのだが、彼女たちは揃って静かに着席をしていた。原因は彼女たちが向ける視線の先の存在。

視線の先、教壇には担任である千冬と副担任の真耶が居る。

千冬という厳格な存在が彼女たちに余計な会話を許さなかった。そして千冬の視線は固い。

彼女は教壇のすぐ前、誰も座っていない席を見ていた。

教室には二人の人物が居なかった。一人はラウラ。彼女は事態の当事者であり、現在は保健室で休まされている。そしてもう一人は一夏。だが、一夏にはそのような特別な事情は無いため、怪訝に思った千冬は一夏と共に居たシャルルに聞いた。

「デュノア。織斑はどうした」

「あ、はい。後から行くと言っていました。凄く疲れてたみたいですよけど…」

千冬の鋭い視線を受けたからか、答えるシャルルの声は固い。

だが、それを千冬が気にすることは無く、仕方ないと言った様子で頭に手を当てる。

「全く、仕方のないやつだ。では、誰か織斑を」

「はい！私が呼んできます！」

誰かに一夏を呼びに行かせようとした千冬が言い終えるより先に手を挙げる人物が居た。

二つに縛った明るい色の髪が特徴の谷本癒子である。

余りにも素早い彼女の行動に千冬は僅かに眉を動かしたが、そのまま目で一夏を呼びにいくように伝える。それを受けた癒子は颯爽と教室を出る。

そんな彼女の背をクラスの生徒達は羨ましそうに見ていた。

しかし、そうでない視線を向ける者も居る。

一人は筈。彼女は出遅れた自分を恨みながら、険しい視線を向けていた。

もう一人はシャルル。常の穏やかな表情をしていたが、目から光が消え、その瞳には底知れない暗さを湛えていた。

そのようにして各々異なる考えを持つ生徒達はしかし、千冬の手前であるため騒ぐということはず、静かに一夏が教室に来るのを待っていた。

だがそうした空気は、しばらくして血相を変えながら教室に駆け込み千冬を呼ぶ癒子により一変した。

癒子はやや鼻歌まじりに廊下を歩いていった。

千冬が存在により誰もが黙りこくった空気というのが少々重く感じたのだ。

彼女自身は千冬を大いに尊敬している。しかし、それとこれとは別なのだ。

そんな彼女にとって一夏を呼ぶという仕事は渡りに船、一夏が関わりとあつて一石二鳥。すぐさま手を挙げて立候補したのだ。

「さーてと、織斑君はどこかな？」

そう言いながら癒子は教室から更衣室までの道のりを歩く。

そして、ある廊下で人影を見つける。

距離が離れているため顔までは分からないが、それは紛れも無く一夏の姿だった。

「あれ？」

そのまま一夏に駆け寄ろうとした癒子は違和感を感じた。それは一夏の歩き方だ。

普段の一夏の歩き方は千冬のように背筋がピツシリと伸びた綺麗な歩き方をしている。だが今、廊下の先を歩く一夏の足取りはややふらついているように見える。

唐突に一夏が廊下に膝を付いた。途端、離れている癒子にも聞こえる大きさを咳込むと、そのまま一夏は廊下に倒れこんだ。

「織斑君!？」

慌てて癒子が一夏に駆け寄る。

「織斑君！織斑君！」

呼び掛けるが一夏が答える様子は無い。気を失っているのは明らかだ。そして癒子は一夏の手の平と口周りに付いた赤色に気付く。それは紛れも無い血液だった。

癒子の顔が青ざめる。だが、彼女とて天下のIS学園に入学を許されるほどの才女。すぐさま自身のすべきことを把握し、行動を起す。

一夏の身を案じながらも、癒子は来た道を駆け足で引き返す。本来廊下を走ることは許されていないが、そのようなことを言っている事態では無かった。

そして一組にたどり着いた彼女は怪訝そうな表情の千冬に言う。

「先生！大変です！織斑君が！！」

その言葉に千冬の顔色は明らかに変化した。

side 一夏

「んあ？」

目が覚めた。そうとしか言えない。

「一応知ってる天井だ…」

そんなことをぼやきながら、俺は自分の状況を確認する。
服装は？学園の制服。ただし上は脱がされて、上半身はアンダーシ
ヤツだけ。ついでに言うと、手首の待機状態の白式が無い。

ここは？保健室。ついでに言うならそのベッド。俺寝てる。
何で？よく分からん。

そんなことを考えながら、俺は起き上がる。まだ体のあちこちが微
妙だ。痛みは既に無いが、違和感が凄くする。

「お、こいつは」

ふと、俺はベッド脇のミニデスクに置いてある手鏡を手取る。そ
して無意識の内に自分の顔を見た。

「うわ、こりやまた」

見た瞬間、思わず顔をしかめたよ。だって、俺の顔の左側にでかい
傷痕の筋が走ってるんだもん。

「あゝそっぴや、顔切られたんだっけ」

あのボーデヴィツヒとの試合、正確に言うと異常事態の終盤、俺は
敵のブレードに顔を斬られたのを思い出した。

あの時は気にしなかったけど、まさか痕が残るなんてな。まったく、
顔に傷痕とかこのスジ者ヤクザだよ。

……いやまあ、アリだけだよ。

「起きたのか」

突然横から声が聞こえた。この声は…

「千冬姉……」

俺の居るベッドから少し離れた位置、部屋の入口付近に我が姉上様が立っていた。

「…まあ、今は放課後だから呼び方は構わんか。具合はどうだ？」

俺の隣に歩み寄りながら千冬姉が聞いてくる。具合ねえ…

「まあ、こうして寝かされてる以上は良くないんだろうけど、俺の体感としてはポチポチかね。ちっと体に違和感があるけど」

「そうか。自分がどうしたか知っているか」

ふむ、それは分からないな。どうも記憶が曖昧だ。

「お前は廊下で倒れていたんだ。血を吐いてな。教室に戻るのが遅いお前を迎えに行った谷本が倒れるお前を見つけた」

なるほど吐血か…ってオイ、それ結構ヤバくね？
とりあえず谷本さんには感謝だな。

「診察の結果は強引な瞬時加速の使用により発生したG、それによる内臓の損傷だ。随分と無茶をしたようだな」

そうかい、なるほどな。思えばあの戦い、瞬時加速で方向転換した時にGが凄かったな。

ISが台頭する前に各国の軍事の主流だった戦闘機とかでは、加速のGによる内臓損傷がパイロットの気をつけるべきことだった。

話の上では聞いたことはあるが、まさか自分でそれを体験することになるとはねえ。

「幸いにして、そこまで損傷は酷くない。内服薬で十分回復は可能だ。少しの間安静にすればすぐに回復する」

「そいつを聞いて安心したよ」

ベッドに縛り付けなんざ性に合わないからな。

「千冬姉。白式は？」

「検査のためにこちらで預かっている」

「そう」

「……………」

「……………」

俺も千冬姉も無言。いかなな、どうにも空気が気まずい。やっぱり試合の時に俺が言っちゃったことが原因、だよなあ……

「一夏。あの試合、お前が言ったことはお前の本心か？」

やはりそうきたか。そうだよな。俺はそれだけのことを言った。我ながら勢いに流されて馬鹿なことを言ってしまったよ。

「まあ、確かにそう思ってるよ」

とはいえ、言っちゃまった以上もはや隠し通すことはできないだろう。良い機会だ。腹の内を全部ぶちまけるとしようか。

「俺はな、千冬姉。昔っから思ってたんだよ。俺は千冬姉の弟でいいのかってな」

何せ世界最強の称号を持ち、全世界の人間の憧れを一身に受けるような存在だ。対する俺は少しばかり喧嘩が強いだけの極々平凡な少年。不釣り合いにも程があるよな。

「けどさ、そうは思いつつもやっぱり千冬姉は俺の家族だし、俺だつて大事に思ってたんだよ。でも、それでも俺はね。千冬姉にどこか引け目があった」

「一夏・・・」

「けど、師匠に剣を習って少しずつそんな考えは消えた。剣を振るのが楽しくてさ。釣り合い云々なんざどうでもよくなつていった」

ああ、思えば師匠に本格的に剣を習い始めたあの頃。あの頃が一番充実してたよ。

「でもさ、やっぱり俺ってどっかおかしいんだよ。剣でどんどん強くなつてさ、千冬姉とそれなりにやれるようになったらさ、いつの間にか思ってたんだよ。千冬姉を斬りたいって」

俺の言葉に千冬姉が息を呑むのが分かる。そりゃそうだ。弟に斬りたいなんて言われて平然としてる人間なんざ居ないだろうよ、多分・

「ああそうさ。俺は本気で千冬姉を斬りたいって思った。その時にさ、煩わしく感じたんだよ。繋がりがさ。いつそ赤の他人だったらどれだけ楽かって思った」

そう。赤の他人だったら何も気にすることなんか無い。一切の情を挟まずに手加減無しでやれただろう。

「でも、それでも千冬姉のことを振りきれないんだよなあ。自分のことながらつくづく度し難いと思うよ」

最後の言葉はもはや独り言に近い。なんか話していたらどうでもよくなってきた。

「一夏」

ゴソッ！

「グ又オツ！？」

頭に響く強烈な衝撃。俺の脳天にいきなり千冬姉の拳骨が下った。

「つまらんことでグダグダ悩むな、馬鹿者」

「はっ。」

おいおい千冬姉、つまらんってどづいことだよ。こちとら真剣に悩んでるんだぜ？

「いいか一夏。お前がどう思おうがお前が私の弟であることに変わりはない。お前が何を思おうとも、私はお前の姉として振る舞うつもりだ。私を斬りたい？構わん。そのくらいの気概を持ってもらわねば姉として張り合いがない。第一、私はお前のような未熟者に斬られるつもりなど毛頭ないぞ」

「・・・」

言葉を失うとはこのことだろう。いやはや何というか、マジねえわこの人。うわあ、カツコよすぎだろう。千冬姉が男だったらどれだけイケメンになってたやら。

ああクソ、なんかもうどうでもよくなってきた。

「あゝあ、なんか悩んだ自分が馬鹿みてえじゃないか」

「ふん。お前の馬鹿は今に始まったことじゃないだろう？」

そう千冬姉は口元をニヤリと笑わせながら言った。

馬鹿とは酷いよな。

「つまらんことに気をかける暇があれば鍛えろ。鍛えつつければ余計なことなぞ考える暇はないだろう」

ハッ、全くごもつともなご意見だよ。

俺はそのままベッドにゴロリと横になる。それを見た千冬姉はそのまま立ち去ろうとする。

まあ、話は終わったよな。とは言え、最後にこれだけは言わなきゃならないだろうな。

「千冬姉。最後に確認するぞ」

「何だ」

俺に背を向けたまま千冬姉が立ち止まる。

「本当にいいんだな？俺はいつか、本当に千冬姉を斬りにかかるかもしれないぞ。ぶっちゃけ、縁を切るなら今のうちだぜ？」

ああそうさ。俺という人間は我ながらどうなるか分からないからな。もしかしたら本当に千冬姉を斬るかもしれない。そうなれば、確実に俺達の繋がりには邪魔になるだろう。

「下らんことを何度も言わせるなよ。お前は私の弟だ。お前が私にどうしようとしてそれが変わることはない」

「あっそう」

本当に敵わねえなあ。

「ではな。明日には授業にも出れるだろう。養生しろよ」

そう言っただけ千冬姉は部屋を出た。そして俺はまた、部屋に一人となった。

「まったく、本当に無茶苦茶な姉だよな」

いつか殺しちゃうかもしれない宣言するよつな奴を弟だっって言っんだからさ。でもよ、千冬姉。

「ありがとな」

悪い気はしないよ。

side out

「うっ…ここは？」

夕焼けに照らされた保健室。一夏が寝ている部屋とは別の一室。I Sスーツのままベッドに寝かされていたラウラは目を覚ました。彼女の左目を覆う眼帯は外されており、赤と金のオッドアイが露わになっている。

「起きたか」

かけられた言葉にラウラは目を向ける。そこには敬愛する師である千冬の姿があった。

一夏を見舞った後、千冬はラウラの見舞いにも訪れていた。

「教官…」

「無理をするな。状況は把握しているか？」

その言葉にラウラは記憶を辿るが、思い出せない。

「私は…何があったのですか？」

「一応、重要案件であり機密事項だが、仕方ないな」

ラウラの問いに、千冬は言外に口外無用と告げてから語った。

「VTシステムは知っているな？」

「はい」

千冬の問い掛けにラウラが答える。

ヴァルキリア
VTシステム。

ISの国際大会、モンド・グロッソにおける部門受賞者の動きを複製するシステム。ヴァルキリア

その各種危険性からIS条約によりあらゆる国家、機関、組織で研究はおろか開発、使用も禁止されているシステム。

ラウラの言葉に千冬は頷くと続けた。

「それがお前のISに搭載されていた。巧妙に隠されてな。学園がドイツ軍に問い合わせをしているが、近く委員会の査察が入るだろうな」

「そうですね…」

そのまま二人は無言になる。だが、再びラウラが口を開いた。

「教官。私はあなたになりたかった。どこまでも強いあなたに。ですが、それは叶わない話だったのですね。私はあなたにはなれない。^{V.Tシステム}あんなものでも、あなたを真似ただけの偽物にしかなれなかった。結局、私は私でしかないのですね」

「そうだ。人はどれだけ足掻こうと誰かになることはできない。どこまでも自分でしかいられない」

「教官も、そう思ったことがあるのですか？」

ラウラの問いに千冬は軽く溜息を吐くと、決まりが悪そうに言った。

「不本意な話だがな。あの愚弟は馬鹿故か妙に図太いところがあつてな。決めたらそのまま突き進むあの芯は、少しばかり私も羨んだ。とは言え、すぐに私では無理だと分かったがな。まあ、あれらしい^{一夏}と言えはそうなるな」

そう言つ千冬の声には紛れも無い家族を想う色があつた。その言葉にラウラは寂しげな笑みを浮かべながら言った。

「教官。私は彼に嫉妬をしていました。気付かされましたよ。結局私は、あなたに特別に思われるあの男が羨ましかったのだと。私もあなたに特別に思われたいと。教官」

一度言葉を切つてラウラは千冬の顔を見据える。ラウラの表情は一人になることを恐れる子供のようなものだった。

「私は、あなたにとって特別な存在になれるのですか？彼のように、あなたに気にかけて貰えるような存在に」

そのラウラの言葉に千冬はいつもと変わらない教師の声で答える。

「それはお前次第だ。お前が私をどう思うか、お前が私にどう思われるか、全てはお前自身の問題だ。お前はお前でしかないと分かったのだから？ならばそうしろ」

話は終わりだと言うように千冬はラウラの下を去る。

その背中を見送ったラウラはしばらく何かを考える。そして、思考に決着を付けたらしいラウラの表情は、どこか吹っ切れたような笑みが浮かんでいた。

千冬が去った後、一夏はベッドに寝そべりながら漠然と天井を見上げていた。

想像以上に体に疲労その他諸々が蓄積されていたらしく、一夏はまるで体を動かす気にならなかった。

保健医の先生も、別の用があるのか一夏の部屋にはほとんど来なかった。周りにある空のベッドがやけに物寂しく感じられた。

コンコン

唐突に響くノックの音。少しばかり退屈をしていた一夏は暇潰しになるだろうと、来客の入室を許可。そして部屋に入ってきたのは

「シャルル……」

トーナメントでの相手。シャルルの姿があった。シャルルはベッド脇の丸椅子に座ると一夏に話し掛けた。

「一夏、調子はどつ？」

「ん、まあボチボチだ。それ程酷くもないらしいし、明日からは普通に授業に出るよ。まあ、飯は当分消化の良いものにしなきゃならないけどな」

「そっか。よかった」

そう言つてシャルルは黙る。見ればその表情は何かを決めようとしているものだった。

一夏はとりあえず様子を見ることにした。そして

「あ、あのね、一夏。僕、一夏に話すことがあるんだ」

そう言つてシャルルは椅子から立ち上がると部屋の一角、一夏からは見えない場所に移動する。

不思議に思った一夏の耳に、ガサゴソとした音が聞こえる。そして、再びシャルルが姿を現した時、一夏はその目を見開いた。

「シャルル、お前…」

眼前のシャルルは女子の姿でそこに居た。縛っていた髪を下ろし、胸の膨らみが制服の上からでもはっきりと分かる。

「一夏、僕決めたよ。僕は学園に残ることにしたよ」

「そっか・・・」

そのことを一夏は静かに受け入れる。疲労故にあまり顔には出なかったが、シャルルの決断を一夏は嬉しく思っていた。数日の間にシャルルとはかなり親しくなったと一夏は思っている。そのシャルルと学園生活を送れるということは一夏にとって純粹に喜ばしいことだった。

そして、その後のシャルルの言葉に一夏は驚いた。

「僕はね、一夏が居るからここに居ようって決めただよ」

「え？」

不意にシャルルが一夏の手を取り、そつと自身の胸に抱き寄せた。

「しゃ、しゃるるさん？」

突然のことに一夏は思わず声が裏返る。左腕に伝わる柔らかな感覚に一夏は正常な思考ができなくなっていくのを感じた。

「それから僕はね、もう一つ決めただ。僕自身の在り方を」

「あ、ありがた・・・？」

未だドギマギした一夏の手を離すとシャルルは一夏に優しい笑みを浮かべて頷いた。そしてその後シャルルが取った行動に、今度こそ一夏は慌てた。

ギユ・・・

「しゃ、しゃしゃるるっ！？」

シャルルはベッドに横たわる一夏に抱きついていていた。耳元で聞こえるシャルルの吐息の音や、胸に当たるふくよかな感覚に一夏は精神はガチガチの緊張状態に陥った。

「僕のことね、これからシャルロットって呼んで・・・？」

「じゃ、じゃるろっど？」

「うん。僕の本当の名前。お母さんがつけてくれた僕の名前。二人きりの時に、そう呼んで？」

「・・・」

思わず一夏は緊張を忘れ、目を横にずらしてシャルル、いや、シャルロットを見ていた。

性別だけでなく名前すらも偽っていた彼女。自分が自分である一番の証明となる名前をも偽ること。それはどれだけのことか。彼女が抱えていたものを思い、一夏は知らず天を仰ぐ。目の前に広がるのは夕焼けの紅に照らされた天井だが、一夏は自然とその先の広大な空を瞳の奥に映していた。

ポンッ

「一夏？」

気がつけば一夏は自分に抱きついたままのシャルロットの背中に手を乗せていた。

「分かった。シャルロットな。了解した。これからはシャルロット
って呼ぶよ。呼ぶからさ」

一夏の言葉が少しずつ早くなっていくのが分かったシャルルは小首
を傾げた。

「そ、そろそろ離れないかな、シャルロット。その・・・当たって
るんだけど・・・」

気まずそうに言う一夏にシャルロットは自分の状態を理解する。だ
が、シャルロットは一夏から離れなかった。

「もう、一夏ったら。僕がしたいからしてるのに」

「い、いやでもな。その、男として色々気になったりするわけで・・・」

そんな一夏の言葉にシャルロットはクスリと笑いを零すと、悪戯っ
子のような笑みで言った。

「もう。一夏のえっち」

その言葉に一夏の心はガラスのごとく砕け散り、シャルロットに状
況の主導権を完全に握られたことをここに記す。

(えへへ、一夏。僕はね、決めただよ？一夏の傍に居るって。絶
対に離れるつもりはないからね?)

完全に固まった状態の一夏に抱きつきながらシャルロットは一夏に
触れられる幸せを噛みしめていた。

余談となるが、夕食時の寮の食堂では一組の生徒を中心としてうなだれている者が数多く居た。

『非常事態によりトーナメントは中止になりました。なお、生徒個人のデータ採取のために一回戦のみ全試合を』

そんなお知らせが聞こえてくる食堂のモニターを見ながら生徒達は嘆く。

「トーナメント・・・中止・・・」

「優勝・・・おじゃん・・・」

「付き合う・・・破談・・・」

「「「うわああああああん！！」「」」

彼女らは揃って一夏と付き合えるという話が立ち消えになったことを嘆く。そして食堂の一角、ここにもこの状況を嘆く者が一人。

（結局約束はご破算。そもそも私は一夏に負けた。ハハ・・・もうどうにでもなってしまう・・・）

今回の騒動のある意味発端となった筈は一人テーブルに突っ伏した。

そして一日が終わり、また新たな学園の一日が始まる。各種栄養剤やら何やらで強引に体力を回復させた一夏は何とか出席しかし、前日に起きた出来事の衝撃が強く、その視線はどこかふらついていた。

「え、今日はとってもビックリなお知らせがあります。転校生です・・・？」

教壇でSHRを行う真耶の顔は軽く引き攣っている。まるでこの状況が信じられないという風である。

そしてクラスの前に立った人物に一組の生徒全員が驚きの声を上げる。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めて宜しくお願ひします！」

「え」と、デュノア君はデュノアさん、でした？」

真耶は未だ混乱から立ち直っていなかった。

クラスのあちこちから驚きの声が聞こえる。そして視線が虚ろだった一夏もシャルロットの行動に驚いていた。

「そういえば織斑君、デュノア君、じゃなかった。デュノアさんと同室だったよね・・・？」

「う」

クラスの誰かが上げた言葉に一夏はあからさまに固まった。

「一夏! どういうことか説明してもらっぞ!」

「箒! ? い、いやこれにはだな深い事情があつてだなその」

明らかに怒った様子で一夏を問い詰める箒に一夏はたじろぎながらも釈明をしようとする。だが、その釈明が叶うことはなかった。

「 Bannon! 」

「一夏あ! ! あんたコレってどういうこと! ! ?」

荒々しく教室のドアを開けながら鈴までもがやってくる。箒同様、怒っているのは明らか。いや、箒以上とも見える。そしてその背には部分展開された龍咆が浮かんでいた。

「鈴! ? いや、これにはわけがあつてだな!」

「問答無用! ! 覚悟しなさい! !」

チャージが開始される龍咆。咄嗟に白式を展開して防御しようとする。そして龍咆が放たれた。だが、衝撃は無かった。

「あれ?」

疑問の声を上げる一夏の前に立つ影があった。

「お前、ボーデヴィット」

そこには展開したシュヴァルツェア・レーゲンのAICで龍咆を防いでいるラウラの姿があった。

「無事だな。それと私のことはラウラと呼べ」

「え？まあ構わんが。つかIS無事だったのか？」

「うむ。コアは無事だったからな。予備パーツで賄った」

「そうかい」

突然のラウラの介入に鈴は動きを止めていた。一組の生徒達も、あれほど嫌っていた一夏をかばうラウラの行動に疑問を隠せずいた。

「あゝ、ところでラウラよ。なんで俺を守ったわけ？」

当事者である一夏がクラス全員の疑問をラウラにぶつけた。そして一夏の方を向いたラウラはISを解除すると一夏に指を指して宣言するよつに言った。

「織斑一夏！わ、私は今日からお前の妹だ！お前は今日から私の兄様だ！」

そう言ってラウラは一夏に飛びつくようにして抱きついた。

「……………は？」「……………」

クラス全員の疑問の声が合わさる。それほどのラウラの行動が衝撃的だった。

「え〜と、ラウラよ。何故そうなる？」

抱きついてきたラウラを乱暴にならないように引き離しながら問いかける。その問いかけにラウラは頬を少し朱に染めながら言った。

「私は教官の特別になると決めた。だからそのために、教官の妹になると決めた。ならばお前は私の兄様だ」

「え〜」

信じられないと言った表情で一夏が言う。その表情には苦笑いが浮かんでいた。だが、唐突にその表情が固まる。何かを察したその顔には冷や汗が流れ、やや青くなっている。

「い、ち、か？」

「な、何かな？シャルロット」

恐る恐る一夏は察した気配の元、自身の背後を振り返る。そこにはとてもイイ笑顔を浮かべたシャルロットの姿があった。

「僕、驚いちやったなあ。一夏って僕の目の前で他の女の子と抱き合うんだあ。へえ」

「あ、あの〜、シャルロットさん」

ガチャリ

「ん？なあに？」

そう言うシャルロットの左手には部分展開されたISがあった。装甲から顔を覗かせるグレー・スケールの鋭い先端が鈍い輝きを放つ。

「その、左手の物騒なものは一体？」

嫌な予感に盛大に冷や汗を流しながらも一夏はシャルロットに問う。

「ん？決まってるでしょ。一夏に刻み込むんだよ。僕の全てをね。大丈夫だよ。白式は展開してるでしょ？なら死なないよ。心配しないで。一夏が僕のことを忘れないようにするから」

そう言っつて痛烈な一撃を放とうとするシャルロットを一撃はかわさうとしなかった。その顔には悟りの表情があった。

（フッ、終わった）

そんなことを思った瞬間、一夏は腹部を襲った一撃で悶絶し、そのまま教室の外まで吹っ飛ばされ、廊下の壁に激突した。

（ああ。また保健室は嫌だなあ）

吹っ飛ばされながら一夏はそんなことを考えていた。

一組でそのような騒動が繰り広げられている最中、SHRを真耶に任せた千冬は職員室の自分のデスクで考え事をしていた。

思い出されるのは前日の夜、学園地下の機密エリアでのことだ。
一夏とラウラ、二人を見舞った後千冬は真耶を伴い学園地下に行っていた。

『織斑君のISを調べて下さい。織斑君の内臓損傷は本来なら無いはずです』

そう言った保健医の言葉に従い、千冬は真耶と共に白式を調べたのだ。

「これは……」

白式の状態を見た真耶の顔が驚愕に彩られていた。

千冬も表情こそ変えなかったが、モニターに映し出された事柄を見る視線は厳しい。

「白式の安全保護機能が下がってる？そんな、安全リミッターが解除されているなんて」

真耶の声が震えている。彼女には信じられなかった。

安全リミッターの解除。それは学園に在籍する生徒の機体には本来ありえないことだ。

ISの機能の中で最たるものは搭乗者の安全保護である。

一部の試験に使われる場合を除き、ほとんどのISにはこの機能が付いている。

これはISが高機動状態などにある時、Gの負荷等が緩和装置の限界を超え、搭乗者の安全に影響を与えるレベルに達した時に、自動的に稼働を制限するシステムだ。

言うなれば人間の痛覚のようなものだ。

そのリミッターを解除する。それはISをどこまでも高稼働させられるということである。搭乗者の安全を無視して。

「思えば織斑君が最後に使った連続瞬時加速による鋭角転換。本来ならリミッターが働くような機動ですよ。かかるGが大きすぎる」

「織斑の内臓損傷もそれが原因か」

「恐らく。でも、リミッターの解除なんて何時…」

「考えられるのは一次移行の時だ。人の意思以外でISの設定変更されるのはその時しかない」

「でもなんで……」

そのまま二人は無言になる。だが、千冬は己の思考を巡らせていた。

(白式が一夏の潜在的な意識を読み取ったのか？アレは昔から無茶を平然とするやつだった)

弟の気質を思い出し、千冬は一つの仮説を立てる。

ISの自己進化、特に専用機のソレは搭乗者の意識を強く受ける。本人に自覚があるか否かは分からないが、千冬の見る限り一夏は自分が強くなるなら多少の無茶は平然としてきた。そんな一夏の無意識を読み取った白式が自らもまた無茶を可能にした。担い手の望む形になるために。

「設定の変更はできるか？」

千冬が真耶に尋ねる。だが真耶は頭を横に振った。

「いえ、できません。白式の方からロックがかけられてこちらからは、できるとしたら織斑君が設定の変更を望んで、白式のコアがそれを了承するくらいしか」

「そうか」

そう言う千冬の顔を真耶が見る。その顔には「どうするのか」という言葉が込められていた。

「一先ずこの件は保留だ。白式も織斑に返しておこう。リミッターの件はしばらく私が預かる」

そう言って千冬は白式の調査を終わりにした。

今、職員室で千冬はそのことを思い出している。

(全く、あの馬鹿者は。要らん手間をかけさせおって)

口には出さず胸の中で千冬は愚痴る。

(まあ、それをどうにかするのも私の仕事か)

自分自身で結論を出して千冬は教室へ向かうために席を立つ。立ち上がった千冬の顔は、常のIS学園教師の顔に戻っていた。

第二十八話（原作二巻終了）（後書き）

ラウラは妹になりました。姉もありだと思ったのですがね。何せ被っちゃうので。某魔砲少女に出てくるあのキャラと。

あと、シャルも上手く病みを見せられているかな〜と思っています。

なんとか原作二巻も終了しました。

皆さん、今後も本作をよろしく願います。

メインキャラ六人の紹介（前書き）

ー夏および、五人のヒロインについての簡単な紹介です。

メインキャラ六人の紹介

織斑 一夏

主人公。原作より少し頭の回転を良くしたら、作者も予想しなかったイケメンになった人。

基本的に常識人ではあるけど、その心中には強烈の戦闘欲がある。が、しかし。それでも普段は常識人。

個人が喧嘩をしているのを見れば止めに入るけど、大人数の大乱闘には乱入して暴れちゃうような性格。

実戦派古流剣術を修めているので生身ではかなり強い。そのため中学時代には少々ヤンチャをしていた。

ラウラ戦の後、顔の横に傷跡が残る。本人はまんざらでもなさそうだが、この作品の一夏が時折放つ千冬に近い威圧感と合わさることでやたら怖く見える。少なくともカタギの人間に見えないくらいには。

戦闘スタイルは典型的な近接型。斬り合いも人並み以上、というか剣術の応用で代表候補生クラスにも引けをとらなくなっている。原作よりもだいたい強化されている。

動体視力と反射が良いので、実は敵の攻撃をかわしてカウンターで一撃必殺という方が得意だったりするが、周囲の人間の射撃はオーレンジだったり、見えなかったり、ワイヤーで縛ってから撃ったりであまり活かされていない。

蒼炎により使い勝手の上がった零落白夜の凶悪ぶりがハンパない。千冬の剣技も居合などを多少は扱える。

篠ノ之 篤

一夏のファースト幼馴染。やっぱり紅椿が出るまでは目立たないか

らどうしても空気になりがち。

原作では一夏に剣の稽古をつけていたが、本作では一夏の方が剣の腕は思いっきり上なのでそんなことはしていない。

一夏が戦った場合、一夏の勝てる確率は（現在）100%。機体の性能差、技量、共に一夏が上である。ただし、紅椿登場以降はどうなるか分からない。

セシリア・オルコット

英国代表候補生。序盤は原作とほぼ変わらず。ただし試合後に試合内容を悔しがったため一夏に落ちなかつた。しかし同時に一夏を認める。

その後、一夏と和解。友人兼ライバルとなる。友人としての関係は比較的良好であり、またあくまで友人であるため箒や鈴との関係も原作よりだいぶ穏やかになっている。

しかしラウラとの一戦後、一夏への好感度が上がったため、現在は気になる異性になっている。明確な恋心はまだ無い。

一夏の勝つ確率は五割。完全に戦闘の土俵が違うので、いかに勝負を自分の土俵で行えるかが鍵となる。実弾兵装がほとんどないので一夏の白式には相性が悪いが、白式は近接と遠距離という点でブルー・ティアーズと相性が悪い。

上手く一夏をBTでフルボッコにするか、一夏に距離を詰められて蒼炎でフルボッコにされるかが勝敗の分かれ目。

凰鈴音

中国代表候補生で一夏のセカンド幼馴染。

ぶっちゃけ原作とあまり変わらない。強いて言うならば、一夏に好

意を抱いているということを一夏に分かってもらえているということ。それ以外は特筆することが無い。やはり二組だからか・・・！！

一夏の勝つ確率は五割＋。一夏と同じ近接主体のISだが、純粋な武器のかち合わせは衝撃貫通を使う一夏に分がある。衝撃砲をどう使うかがポイント。一発クリーンヒットを入れて、すかさず衝撃砲でフルボッコにすれば勝てる。

クロスレンジの斬り合いになると、一夏の衝撃貫通技に押し切られてできた隙を零落白夜で詰められる可能性大。

シャルロット・デュノア

作者がシャルロット党なので、今後優遇されることが予想されるキャラ。作者の脳に突然舞い降りた電波により病みが入りましたww作者の主観では原作でも優遇されていると思われる。具体的にどう病ませるとかは後々の話にて・・・

一夏はシャルが自分に好意を抱いていると薄々感づいている。一夏には病みが嫉妬に見えるらしい。

ちなみに、もしも一夏がシャルを選ばなかった場合、ラウラと百合に走るルートが作者の脳内に用意されている。

一夏の勝つ確率は20%。典型的なテクニシャンなので戦闘方法が限られる一夏を上手く手玉に取ることができる。難点は決定力不足とつつきを当てるには一夏の間合いに入る必要があるが、そうなる と零落白夜が怖い。その他高火力のグレネードなどは弾速が決して速くないのでかわされる可能性アリ。

高速切替を駆使して上手く動きを止めつつ、グレネードなどをぶち込むのがベスト。

しかし、被弾覚悟で一夏が特攻を仕掛けてくると怖い。

ラウラ・ボーデヴィツヒ

なんか原作同様に惚れさせるのが微妙と思った作者によって一夏の妹宣言をさせてしまったww
本当にどうしてこうなった。

当初は（子供体型の）姉もアリだと思ったが、銀髪眼帯ロリ体型井上麻里奈などの要因から姉にすると某魔砲少女の五番さんと被るため妹にした。新境地が拓けたと作者は思う（キリッ

シャルと同室になるが、シャルは結構ラウラを可愛がっている。このあたりは原作とほぼ変わらない。シャルは一夏の妹宣言をしたラウラに自分を「お義姉ちゃん」と呼ばせようと画策している。

一夏の勝つ確率は15%。やはり機体性能、技量ともにメインキャラの中では高いほうであるため、苦戦は必須。一夏の得意な斬り合いでこそそれなりに渡り合うので、一夏からすると勘弁してほしいと言いたい感じ。

一対一ではAICが反則すぎる。一夏は一応AICの対策も立ててはいるが、それでもその他ワイヤーなどがあるため厳しい。本職の軍人というのは伊達じゃない！

ちなみに、曲がりなりににも代表候補生である以上（筈は除く）ヒロインズは全員、生身の格闘もそれなりにこなせる。筈も古武術を修めているのでそれなりにできる。

とはいえ、生身ならば一夏にだいぶ分がある。なぜなら一夏が使うのは一応マジモノの殺し技なので……。刀を持たせると余計。止めたきや千冬姉か楯無会長を呼ぶべき。

メインキャラ六人の紹介（後書き）

以上！原作二巻までのメインキャラ紹介でした！！一夏が原作より強いんじゃないかって？サーセンww。仕様です。

一夏が修めている古流剣術について設定が見たい！！って方は感想でどうぞ。もしかしたら書いて上げるかもです。厨臭いかもしれませんがww

しかしこの作品の一夏、当初は壊れている性格にするつもりだったのに、先の展開考えてみたら、やたらカッコよくなってしまうた。こんな調子で大丈夫なのだろうか？

あ、キャラの設定についてご質問があったら感想で遠慮なくどうぞ。

第二十九話（三巻開始）（前書き）

G Wだから執筆時間が取れると思ったら、意外にそうでも無かったです。

第二十九話（三巻開始）

side 一夏

「ん…むう…朝か…」

窓から差し込む朝日が眩し、くはないな。

時計が示す時刻は午前5時少し前。未だ朝日の光は弱い。

「なんだ…？」

妙に違和感がある。何時もと変わらない朝だが、何かがおかしい。

モゾ……

「ん…？」

モゾ？なんかシーツが動いたぞ。

ニヨキ

「はい？」

シーツの端、俺の足の隣からいきなり別の足が生えてきた。
色白でほっそりとした足。なんぞコレ？

俺は静かにシーツをめくる。そして目に映った光景に言葉を失った。

「ううん……」

俺のベッドの中には別の人物が居た。伸びた足と同じ色白の肌。だが一番特徴的なのは輝くような銀髪。俺のベッドに潜り込んでいたのは

「ラ、ラウラ？」

そう、ラウラである。何故かラウラが俺のベッドに潜り込んでいた。しかも全裸で。そう、全裸で。え？全裸？

「iiiiiiiiiiii!?!」

思わず声を上げる。何故!?!ホワイ!?!ここ俺の部屋だよな!?!

「う、ううん。なんだ兄様、起きたのか。早いのだな」

俺の驚きの声に目を覚ましたラウラが寝ぼけ眼をこすりながら俺の方を向く。

ちよ、シーツがはだけてる。見えてるって!

「ラ、ラウラ。何故いる？」

俺の問いにラウラは軽く目をこすると、一気に目が覚めた顔で答える。さすがは軍人か。目覚めがいい。

「何故も何も、潜り込んだからに決まっているだろう」

「ゴメン、聞き方を間違えた。なんで潜り込んだ?ついでに言うと、

何故全裸なんだ。とりあえず隠せ」

そう言いながら俺はラウラにシーツをかけながら、近くを見回す。

あった。ラウラが脱ぎ捨てたらしい服が。それを拾ってラウラに押し付ける。

「潜り込んだのは、その、これが日本の文化だと学んだからだ」

「は？」

思わず手が止まる。はて、日本の文化にそんなのはあったか？

「私は教官や兄様の妹に相応しくなろうと思い、日本の文化を学ぶことにしたのだ」

フムフム。動機がアレだが、他国の文化を学ぼうとする姿勢は結構それで？

「だから私は知り合いの日本文化に詳しい者に聞いたのだ。まずは日本の兄妹の関係について聞いた」

うん、なんか嫌な予感がしてきた。

「すると、こう教えてくれた。『日本の兄妹は夫婦のような関係だと。代表的なのは、双子の兄妹が恋人の関係になる作品があること』だと。だから私は恋人らしい行動を、兄様？」

気が付けば俺は拳を握り締めながら震えていたよ。

一体どこのどいつだ。こいつにそんな間違ったこと吹き込んだのは。

というか作品言ったよな！？創作と現実をごっちゃにするなよ！あとその作品！確かその双子の兄妹って確か血が繋がってないって設定じゃなかったか！…なんで知ってんだろ、俺。

いや、今はそんなことは関係無い。とりあえずはラウラの間違った認識を解かねば。

「あゝ、ラウラ。あれだ。その教わったことは忘れる今すぐだ。それで日本の文化が知りたきゃ図書室の資料とかを自分で調べなさい。いいな？」

ちよつと語気を強めに言うとラウラは頷いた。その姿がどうにも不思議に見える。なんか、この間までの冷徹な軍人らしさが抜けてるのがどうにも不思議で。

「とりあえずラウラ。まずは服を着ろ」

そう言うとラウラは素直に服を着てくれた。無論、俺はラウラに背を向けてるぞ。当たり前じゃないか。

「よし。ちゃんと服を着たな」

「うむ。兄様の言う通りにしたぞ」

あゝ偉い偉い。よくできましたと。さて、後は簡単だ。

ガシッ

「兄様？」

俺はラウラを小脇に抱えると真っ直ぐ部屋のドアを目指す。見た目通りに軽いな。あと、俺に抱えられているラウラの姿はまるで子猫みたいだ。

俺はそのまま部屋から廊下に出るとラウラを離した。

「とりあえず部屋に戻れ。あと、今後人のベッドに潜り込まないよ
うに」

「な、何故だ兄様！」

「何故も何も、それが普通だからだ。千冬姉だって認めちゃくれな
いぞ」

抗議するラウラを俺は諭す。千冬姉の名前を出すだけでラウラはラウラは納得をしてくれた。渋々といった表情だが。

「分かった。部屋に戻る」

ああ是非そうしてくれ。

「だがその前に、兄様に頼みがある」

「なんだ？」

「その、兄は妹を褒める時に頭を撫でるといふ。私は兄様の言う通りにするから、その、私の頭を撫でてくれ……」

……まあ、突っ込み所はあるけどいいか。別に減るもんでもない。

頭撫でて忍び込まなくなるなら構わない。

「ほれ」

そう言っただけはラウラの頭を撫でる。ほう、中々に触り心地の良い髪じゃないか。これは撫でて悪くない気分だ。

「ん……」

見ればラウラも喉を鳴らして気持ちよさそうに……ってマテヤ俺何してる。ラウラを部屋に戻らせるつもりだったのに、何故ラウラの頭を撫でている。

「ほれ、もう終わりだ。早く自分の部屋に戻りな」

俺がそう言って手を離すとラウラは物足りないと言っような目で見えてくる。

「むう、できればもう少しして欲しいのだが……」

「そうは言っても無理だ。俺もこの後することがあるからな。また今度だ」

そう言っただけでラウラは渋々と頷いた。

「分かった。ならまた今度してもらおうぞ。約束だぞ」

そう言っただけでラウラは自分の部屋へと戻っていった。トテトテといった感じで。

……なんだかな。本当にこの間までとは別人だから対応に困る。

まあ、接しやすくなっただけ良しとしようか。

「さて、俺もトレーニング始めるかね」

今日は俺一人じゃないわけだし、早くしなきゃならん。

side out

日課となっている朝のトレーニング。常ならばランニングと筋トレがメインになるのだが、今朝のトレーニングは違っていた。

ランニングはいつもの半分程度で切り上げた一夏は、先日刀と共に家から持ってきた木刀を携えて、寮の裏手にある広場に来ていた。木刀を携えながら静かに瞑目して立つ一夏。その姿は誰かを待っているようだった。

そして一夏の目が開かれる。後ろを振り向いた一夏はやってきた人物に対して軽く頭を下げて挨拶をした。

「おはようございます、部長さん」

「おはよう、織斑君。剣道場以来ね」

やってきた人物は学園剣道部主将その人であった。防具こそ着けていないが胴着に身を包み、片手に一夏同様に木刀を持ちながら静かに立つその姿には凜々しさを伴う美しさがあった。

「それにしても意外だったよ。まさか君から手合わせを望まれるな

んで。それも実戦形式で」

この前日の放課後、一夏はシャルロットから受けた一撃の余韻が響き続ける腹部を気遣いながらも剣道場を訪問し、部長に早朝の手合わせを申し込んだ。そしてそれを快諾した彼女は今こうして一夏の前に立っている。

「ご迷惑でしたかね？」

「ううん、全然。私も君の実力には興味があつたし、むしろ僥倖と言つてもいいくらい。ただし不思議には思つけど」

「と言つと？」

「君が私を相手に選んだこと。君のことだから篠ノ之さん呼びつけると思つただけだな」

部長の言葉に一夏は納得した様子で頷く。そしてその表情に笑みを浮かべながら言った。

「未熟を晒すようで恥ずかしいんですけどね。箒が相手だと情や何やらで刀が鈍りそう。その点、完全に赤の他人の貴方なら遠慮なしで斬りにかかれそうです」

そう言つて一夏は静かに木刀を構える。木刀と腰に添えた居合の構え。相対する部長も正眼に木刀を構える。

早朝の静寂の中、二人の間に張りつめた空気が流れる。

「始める前に一ついいかな？」

「どござ」

部長の問いを一夏は受ける。

「篠ノ之さんを選ばない理由は分かったけど、どうして相手に私を選んだのかな？」

「決まっていますよ。あなたが一番デキそうだからです」

「そう。そう評価してくれるのは嬉しいな」

そう言つて部長は軽く微笑むと、その眼を細めて一夏を見据える。そのまま無言。両者は静かに睨みあい、そして

「はあっ！」

「せいっ！」

駆けだした一夏が一気に間合いを詰めて木刀を振りぬく。対する部長も一夏の居合を迎え撃つ形で木刀を振る。

衝突した二本の木刀が乾いた音を立てる。二人の試合が始まった。

カンツカンツカンカンツ！

木刀が打ち合わされる音が幾度も響く。

至近距離で切り結んだかと思えば、一度距離を取り素早い足捌きで動きながら一撃を加えようとする。

両者の動きは対照的である。

一夏が激しく動き容赦の無い攻撃を加えるのに対し、部長はあまり動かずに一夏の太刀を裁く。

二人の剣戟は拮抗していた。

一夏の激しい連撃を捌き続ける部長だが、決して余裕があるわけではない。一夏は部長の守りの固さに、部長は一夏の攻撃の鋭さに、それぞれ決め手を放てずに居た。

それは言わば切れ味鋭い名刀と、堅牢なる剛の盾の拮抗であった。

「やりますね、部長さん！これ程とは思わなかった！」

「君もだよ、織斑君！試合は見させてもらったけどね、見事な剣だ！」

剣戟を繰り広げる二人の顔には笑いが浮かんでいる。

何にも縛られない純粹な技の比べ合いに二人の剣士としての心が歓喜の声を上げている。

一夏の剣の技量は世辞抜きで高い。

修めている剣術の元々の完成度の高さ、持ち前のセンス、それらが織斑一夏という人間を姉である千冬、そして彼の師という極みへと至った者にも食い下がることを可能とする希代の名刀へ鍛え上げていた。

一夏自身、慢心をするつもりは無いが自身の實力について相應の自負を持っていた。

だからこそ、一夏は自分と互角に切り合える部長の存在を嬉しく思った。

彼女は専用機を持つわけではない。武道系部活の部長を勤める以上、彼女自身のISの實力もそれなりに高い部類だが、やはり専用機持

ちや代表候補生に比べると目立たない。

そんな人物の知られざる一面、実力を自分が知っている。そのこともまた一夏の喜びを大きくしていた。

二人の剣戟は打ち合わせる数を増していく。

五合、十合、二十合、五十合……

剣戟と共に木刀が打ち合わされる音が軽やかに響く。

単一の軽い音ながら、そのリズムミカルさがまるで一つの音楽のように聞こえる。

朝の静寂の中、木刀による剣戟のコンサートが開かれている。そして、聴衆にして演奏者である二人はただ楽しさと共に時間を忘れて打ち合っていた。

ピーー！！

突如鳴り響くアラームの音。

それは部長が用意したタイマーの音だった。彼女にはこの後、剣道部の朝練が控えている。故に長く時間を掛けるわけにはいかなかった。そしてそれは一夏も了承していた。

二人の剣を振る手が止まる。

「時間、ですね」

「そうだね。名残惜しいけど」

そう言って二人は距離を取る。もはや言葉は不要。これが最後の一手。この一手で雌雄を決する。

二人が木刀を構える。

一夏の構えは木刀をこめかみまで持ち上げ、切っ先を相手に、刃を天に向ける、今まで幾度も使った一夏が好む突撃の構え。対する部長は再び木刀を正眼に構える。

攻めの一夏、守りの部長。構えが両者の気質を物語っていた。構える二人が再び睨み合う。手合わせの開始直前の状況に戻る。だが、今の二人は手合わせの終わりに差し掛かるうとしていた。

一夏が動いた。古武術特有の歩方、一息で距離を詰める技法で以って部長に迫る。

その歩方、名は「逸足^{いっそく}」

名の示す通り、常人の域を逸した足運びだ。だが、その歩方を前にして部長は動じない。静かに一夏を迎え撃つ。

一夏の木刀が振り下ろされる。部長が手にする木刀で迎撃。だが、その迎え撃ちは先程までとは異なった。

一夏の木刀の軌道をずらすように部長は己の木刀を一夏の木刀に滑らせる。その勢いを利用し、彼女は一夏に接近。そのまま踏み込み一夏の後ろを取る。

そして晒された一夏の背に木刀を振り抜く。

その一部始終を一夏は持ち前の動体視力と反射　千冬や師といった化け物と呼べる人物を相手に食い下がるさせる一夏の強み　で以って鮮明に捉えていた。

そして一夏は一瞬の内に次の手を思案、実行していた。

ズダンッ！

一夏は踏み込んだ足を強く地面にたたき付ける。そして生じた反動を利用して宙返り。部長の背後からの一太刀をかわした。

「うそ！？」

さすがにこのようなかわれ方は予想していなかったのか、部長が驚きの声を上げる。

一夏は着地するとそのまましゃがみ込み、部長に対し足払いをかける。

倒れこそしなかったが、大きく体勢を崩された部長に隙が生まれる。それを見逃すことなく、一夏は素早く立ち上がると上段から木刀を振りかぶった。

だがそのまま敗北を喫する程、彼女も甘くはなかった。

崩され、しゃがんだ姿勢のまま片手を伸ばすと、木刀を握る一夏の手首を掴みその動きを止めた。

柳生新陰流「無刀取り」

一人の鬼才により編み出され、江戸幕府將軍家の御家剣術であった現在伝わる古流剣術では特に有名だろっ流派、柳生新陰流。その代表とも呼べる技を部長は使った。

そのことに一夏の目が驚きに見開かれるが、すぐに興奮の笑みに変わる。

一夏の動きを止めた部長がそのまま木刀を下から斬り上げる。だが

一夏はすぐさま掴まれた腕を捻り脱出。一度部長から離れる。

そして、部長が立ち上がり一夏の方を向いた直後、一夏が眼前に迫りその首筋に木刀を突き付けていた。

彼女には一夏がいきなり目の前に現れたように見えた。そしてそのからくりを理解した瞬間、彼女は己の敗北を認めた。

一夏は部長が体勢を立て直した瞬間、直感で感じ取るものがあつた。それは好機。この手合わせにおいて最大にして必勝の好機。それを感じた一夏は迷わず部長に切り掛かった。

一夏が感じた好機。それは部長が無意識に体感する律動の空白だった。一夏はそれを突くことで、反応不能の一手を彼女に決めた。

無拍子

人間の持つ律動の空白を突く古武術の最高峰。千冬や師といった達人級の人間が使う技法を、一夏は土壇場で成功させた。

未だ無意識の使用なれど、成功させたという事実は大きい。

この瞬間、一夏は階段をまた一段上った。

首筋に突き付けられる木刀を見て部長は薄く笑い、言った。

「参りました」

その言葉に一夏は木刀を話すと、大きく息を吐いた。

「はあ、なんとか勝った」

先程まで剣を振るっていた時の鋭い空気を解いた一夏の姿に部長は軽く笑う。

互いに吐く息は荒く、額には幾つもの汗の玉が浮かんでいる。

「いやあ、織斑君は強いね。負けちゃったよ」

「部長さんも凄かったですよ。まさか無刀取りをしてくるなんて新陰流やってるんですか？」

「ちよつとかじつたくらいかな。君みたいに本格的に流派を修めたりしているわけじゃないよ」

会話をしながら二人は片付けをする。

二人の交わす言葉の端々に、相手に対する敬意が含まれていた。

「それじゃあ、私は朝練があるから」

そう言って部長は剣道場に向かおうとする。そんな彼女の背中を一夏は呼び止めた。

「部長さん、これどうぞ。ささやかながらのお礼です」

そう言って一夏が手渡したのはスポーツドリンクのボトル。それを部長は笑顔で受け取った。

「ありがとね。恩に着るよ」

「いえいえ。それより、機会があればまた手合わせをお願いしてもいいですか？」

「勿論！私も君とやるのは楽しいからね。また今度、よろしく頼むよ」

そう言つて部長は剣道場へ颯爽と駆けていく。その背が見えなくなるまで見送つた一夏は、かいた汗をシャワーで流すために寮の自室へ戻つた。

寮へと戻る一夏の表情には満足のいく勝負をできたことへの爽快感が浮かんでいた。

そして時は流れて昼休み。一夏は昼食を摂るために食堂へと来ていた。そして定食セットを注文した一夏は食堂の一角のボックス席に座っていた。両隣にはシャルロットと鈴が居る。

ちなみに、シャルロットは昼休みになった時点で一夏の隣というポジションをガツチリと掴んでいた。教室からここまで、片時たりとも一夏の隣を離れることは無かつた。

教室を出た時点で鈴が合流。これにより一夏の両隣は二人により確保された。そして一夏の隣を取れなかつた筈は内心悔しがりながらもそれを表情に表わさず、努めて平静を保ちながら一夏達の近くに座っている。ラウラも同様である。

「ねえ一夏。なんかあつたの？気分よさそうな顔してるけど」

「んー？そうかー？」

定食を食べ終わり食後のお茶を飲んでいた一夏だが、鈴の指摘する通りその表情はどこかスッキリしたものだつた。

「多分アレだ。今朝のことだな」

「今朝のことって何、一夏？」

一夏の言葉にシャルロットが聞いてくる。その問いかけに一夏は楽しい一時を思い出すように語った。

「いやな、今朝とある人物と木刀でだけど割と本気の斬り合いをしてなあ。それがすごく楽しくってなあ。ああ、またやりてえ」

どこか恍惚とした表情で語る一夏に鈴を含めいつの間にか一夏の周囲に集まって話を聞いていた生徒達はやや引き気味の苦笑いを浮かべる。ただ一人シャルロットだけがそんな一夏をニコニコとした笑顔で見ている。

「あ、あなた、ホント昔からそういうこと好きよね。中学の時だってさあ」

「アレは言うな。確かにアレは楽しかったが、褒められた行動じゃない」

鈴が何かを言おうとしたのを遮って一夏が言う。そのまま一夏は立ち上がると空になった食器を片付けに行く。当然のようにシャルロットもそれに付き従う。

「ねえねえ鳳さん。アレってなあに？」

周りに居た生徒の一人が鈴に問いかける。問われた鈴は少し苦い顔をしながらも、どこか懐かしむように言った。

「いやね、一夏のやつ。中学の時に町の不良をボコボコにしたことがあるのよ」

「え？でもそのくらい織斑君なら普通にやりそうな気がするんだけど」

さして意外でも無いという風に生徒が言う。学園生活が始まって早二ヶ月以上も経っている。この頃になるとさすがに一夏の気質を知る生徒も多い。そしてこれまでの試合で見せた一夏の実力と気質から、そのくらいならやつてもおかしくないというのが生徒達の一夏に対する認識だった。

「いや確かにそうなんだけどさあ・・・」

鈴の表情はどこか苦い。そして放たれた一言は周囲の生徒達を驚かせるには十分だった。

「ボコした数が問題なのよ。一度に100人くらいの不良を木刀一本で制圧よ？あたしだって生身にはそこそこ自信はあるけどさ。さすがにアレは無いわ」

「「「「「え？」「」「」「」」」」」

「そうだな。我ながらアホやったと思うよ」

固まる生徒達の背後、いつのまにか戻ってきていた一夏が言う。そしてその隣にはシャルロットが（ry

「あれは中学二年の終わり近くだったかな。クラスのやつが町の不良に絡まれてさ。カツアゲとかで済んだらまだマシだったんだろう

が、なんか犯罪臭いことにも巻き込まれそうな雰囲気です」

一夏は生徒達をかき分けながら元の位置に座る。そのまま話を続ける。

「そいつさ、明らかに様子がおかしかったんだよ。もうクラスのやつ全員が気付くくらいでさ。何かに怯えてる感じ。で、その時の担任が何とか事情を聞き出してさ。それを盗み聞いた俺が原因の直接排除に動いたわけだ」

話を聞いている生徒達の顔が少し引き攣ったものになっていく。ちなみに鈴は額に手を当ててヤレヤレと言いたげな表情をしている。

「あの頃の俺はちょっと不安定でさ。真つ当な思考ってやつがちとできなかつたんだよなあ。千冬姉も居なかつたからさ、止める人が居なくて。警察とかに任せりゃ良かったのにな」

「そ、それで織斑君はどうしたの・・・？」

「え？ああそれね。改造木刀持ってカチコミだよ」

「改造木刀って・・・？」

できれば話さないでくれと言いたげな表情の生徒をまるで気にすることなく一夏は言った。

「中に鉄芯仕込んで表面を硬化樹脂の膜でコーティングした特別品。もう木刀じゃないね、うん」

それを聞いていよいよ以て彼女らの表情が変わった。そんな彼女た

ちを苦笑いと共に見ながら鈴が言った。

「でさ、あたしと同級生の五反田ってやつが殴りこみに行く途中の一夏にバツタリ会ったのよ。慌てて止めたわよ。一夏がなんか剣術やってるってのは聞いてたけど、さすがに無茶だって思ったもん。でも一夏に睨まれて何も言えなくなってるねえ。ホントこいつときたら」

最後の一言はジト目で一夏を見ながら鈴は言った。

そんな鈴の言葉に一夏はバツの悪そうな顔をしながら言った。

「いや、さすがにあの頃の俺はどうかしてたよ、ああ」

「それで、その後どうしたの？」

「ああ。その不良のたまり場だった町外れの廃工場に行ったださ。問答無用でボコした。最初は二十くらいしか居なかったけどさ。向こうが援軍呼んで。全部終わって気が付いたら、百近くぶっ倒れてた」

真顔で語る一夏に生徒達は完全に引いていた。それ程に一夏の行動は信じられないことなのだ。

いかにISを使えるといえど、平時の彼女達はどこにでも居る少女と変わらない。そんな彼女達からしてみれば、不良の群れに一人で殴り込みをかけるなど正気の沙汰ではなかった。

「ちなみにあたしはさっき言った五反田ってやつと物陰から一部始終を見たんだけどね。凄かったわよ。一夏のやつ、不良の攻撃とか全部かわしてさ。そのくせ自分の攻撃はキツチリ当てるの。しかも狙うのは全部首や鳩尾みたいな急所だから、全員一撃で沈んだし。全部終わって倒れた不良の群れの中に立ってる一夏の姿ってのが、

また迫力満点でねえ。もう織斑先生にも引けを取らなかつたわよ、あの時の一夏は」

「いやあ、それ程でも」

「褒めてないわよ、馬鹿！」

照れるように言う一夏に鈴が突っ込みを入れる。二人の間に和やかな空気が流れるが、周囲は未だ固まったままだ。

「それで、どうなったの？」

事の顛末を聞いてくる生徒に一夏が答えた。

「とりあえず不良は捨て置いてそのまま帰った。鈴達も一緒にな。それで適当な街中の公衆電話から警察に『不良が集まっているから何とかして下さい』って電話して、そのままバツクれたよ。ちなみに脅されてたクラスメイトは警察の尽力で何とか無事に済んだ。そして不良連中は病院送りの後、纏めて補導だ」

「ちなみに一部の生徒の間でそのことが噂になってね。明確な証拠が無かったから何も無かつたけど、しばらく一夏は校内でも有名だったわよ。ただ、その後すぐに学校が春休みに入ってあたしは中国に帰っちゃったから、よく知らないのよ。一夏。あの後どうしたの？」

「ん？鈴も知ってるだろうけどさ。アレって事件そのものは結構有名だったろ？新聞にも載ったし。だから俺は春休みの間、県外にトングラしたんだよ。師匠の所に修業行くついでにな」

「あんだ……」

鈴の顔が苦いもの変わる。一夏の行動はそれだけのものだった。

「いやあ。千冬姉も居なかったからな。とりあえず師匠のトコでほとぼり冷めるのを待ったよ。ちなみに師匠はそのことに関しては何も言わなかったな。俺には関係無いから、だって」

「オーケー。あんだとその師匠が同類だっつてのは分かったわ」

そう言つて鈴は話を切り上げようとするかのように席を立つ。その表情が「これ以上余計なことを聞きたくない」と語っていた。それは他の生徒達も同様らしく、苦笑いを浮かべながら各々退散していく。

残された一夏とシャルロットも昼休みの終わりが近いということに教室へ戻ることにした。

「ねえ一夏」

「ん？どうしたよ、シャルロット」

廊下を歩きながらシャルロットが一夏に声を掛ける。

「やっぱり一夏って凄いな。カツコイイと僕は思うよ？」

そう笑顔で言うシャルロットに一夏は苦笑しながら言った。

「一応鈴にも言ったけどさ。さすがに俺もやり過ぎたと思ってるんだぜ？警察まで動いたし。県外にトンスラしたのは正解だった」

それに、と前置きしてから一夏は付け加えた。

「あの時は本当にただ暴れただけだからな。俺はあまり好きじゃない。俺は戦いは好きだけどさ。戦うのとただ暴れるのは別だよ。うん。まだまだ俺も未熟ってわけだ。まあやり応えがあったのも、いい経験になったのも否定はしないけどな。困ったもんだよ。後から反省する癖に楽しいと感じて、またやりたくなっちまう。本当にめんどくさい話だよ」

「へ〜。でも大丈夫だよ。僕は一夏の味方だからね？」

「そうかい。そいつは頼もしいな」

「えへへ」

廊下を歩く二人は笑いながら会話をする。その姿は傍目には実に仲が良く見える光景だった。

「あ、そうだ一夏。ちょっと頼みがあるんだ」

「ん？どうした？」

「もうすぐ臨海学校でしょ？だから水着を買いに行くのに付き合っ
て欲しいんだ。いいかな？」

「ああ。そのくらいなら別にいいぜ。今度の休みがいいかな？」

「うん！二人っきりで行こうね！」

「はいはい」

申し出を快諾した一夏にシャルロットは輝くような笑顔を向けた。

第二十九話（三巻開始）（後書き）

今回から三巻の開始ですが、序盤を独自展開にしてみました。

原作ではほとんど出番の無い剣道部長、実は隠れた実力者というのが本作の設定です。

今後出番がどのくらいあるかは分かりませんが。

一夏は生身の实力は学園でも上位という設定です。部長さんも同等。ちなみに生身に関して学園内最強は千冬、次点に楯無会長が来ます。

そして一夏の中学時代の武勇伝。不良百人斬り。

前回更新のキャラ紹介で、一夏の部分の「中学時代はやんちゃ云々」はこのお話です。

時期的には誘拐事件後。千冬は既にドイツに居る状態です。作中に書いた通り、この時期の一夏は少々メンタルが危なっかしかったです。

何気に弾や鈴がこの時期の一夏には大きな支えになってました。

ところで、冒頭のラウラについて。

作者はあえて原作より少し年下な感じのラウラをイメージして書きました。具体的にはコミックアライブ最新号のES四コマのラウラでしょうか。「おはし」を「おはち」と言っちゃうアレ。

そしてラウラに色々吹き込んだのは、紛れも無いあの人ですww
妹ラウラ。書いていて自分の中で何かが大きく揺らぎました。

非常にどうでもいい余談ですが、先日ニコニコでゾイドの動画を見まして。凄く懐かしかったです。

作者はライガー系と荷電粒子砲搭載機が好きです。特にブレードライガーとジェノブレイカーが。

第三十話（前書き）

水着選びその一となります。
今回一夏が軽くキレますよ。

第三十話

臨海学校をもつすぐに控えた日曜日。一夏とシャルロットは臨海学校用の水着を購入すべく、近場のショッピングモールに来ていた。

海上の島に建設されたIS学園と本土を繋ぐモノレールが通る駅。その駅から直通という形でショッピングモールはあった。

各種専門店だけでなく、大型スーパーやレジャー施設も備えているこのモールは周囲一帯の娯楽を一手に担っており、休日の今日も多くの人で賑わっていた。

「いやはや。予想はしてたがな。相も変わらず大層な人だ」

モノレールから下りた一夏がぼやく。その隣に一夏に続くようにモノレールから下りたシャルロットが立つ。

休日の買い物だが二人の服装はいつもと同じ学園の制服である。ほぼ毎日を学園で過ごす二人にとって私服はほぼ無用の長物と化しており、こうした外出の際も制服を着用していた。

正確に言うとシャルロットは私服を持っているのだが、一夏が「制服でいいよな？」とシャルロットに尋ねた結果、即座に頷いていたのだ。後々にシャルロットはこの選択を後悔し、いつか一夏に自分の私服を意気込むことになったのだ。

「うわ。本当に凄い人だね」

一夏の言葉に同意するようにシャルロットが言う。
すると言っただけで何かを思い付いたのか、シャルロットが僅かに俯く。そんなシャルロットの様子に一夏が気付く。

「ん？どうしたよシャルロット」

「う、うん。あのさ、一夏。これだけ人が多いとはぐれちゃいそうだよな？」

「まあ、そうだな」

僅かに頬を赤らめながら言うシャルロットに一夏は周囲の様子を見ながら同意する。

「だからさ、一夏。そ、その……」

「？」

「手、繋いでもいいかな？」

おずおずとした様子でシャルロットが一夏に手を繋ぐことを求める。

「いいぞ。はぐれちゃ困るからな。ほら」

「うわー！」

あっさりと承諾した一夏は早速と言わんばかりにシャルロットの手を取る。そんな一夏のいきなりの行動にシャルロットは思わず慌てる。

「何を驚いてるんだよ。ほら、行くぞ」

そう言つて一夏はシャルロットの手を引いて歩き出す。それに従う形でシャルロットも歩き出す。

手を引かれるシャルロットは最初は驚いた顔をしたものの、すぐに頬を綻ばせて満面の笑みを浮かべながら一夏の隣を歩いた。当然、その手を固く握りながら。

傍目にはとても仲睦まじく見える一夏とシャルロット。そんな二人を物陰から伺う存在があつた。

「へえ…一夏、へえ…」

肩を露出させるようにカスタムされたIS学園制服とツインテール。光の消えた虚ろな目をしながら二人を見るのは鈴だつた。そしてそんな鈴を後ろから、同じように学園制服を着ているセシリアが困つたような表情を浮かべながら見ている。

「え〜と、鈴さん？」

「ねえセシリア。あの二人、どう見える？」

唐突に問われたセシリアは戸惑いながらも、思った通りに答える。その視線の先には人混みに入っていく一夏とシャルロットを捉えていた。

「そうですね。とても仲がよろしいように見えますわ。おそらく恋人同士と言つても差し支えは…鈴さん？」

恋人同士。その言葉を聞いた瞬間、鈴の放つ雰囲気が変わつた。湯

いた笑いは止まったが、その全身からだただならぬ空気を出している。その威圧感たるや、試合や模擬戦で相対した時以上！

鈴さん！？思わずセシリアは思考の内では鈴の名を呼ぶ。彼女は自分の言った言葉の鈴への影響力に気付いていなかった。

「そっかあ…恋人かあ…へえ…」

うわごとのように鈴は呟く。そして

「よし殺そう！今すぐ殺そう！」

いきなりISの腕部装甲を部分展開して物騒な台詞をのたまった。

「り、鈴さん！落ち着いて下さい！こんな所でダメですわー！！」

慌ててセシリアが鈴を止めようと後ろから羽交い締めにするが、抑え切れない。

ISも部分展開しかしていないため、今の鈴ならセシリアでも十分に抑えられるのだが、何故かできない。

セシリアを引きずりながら鈴はゆっくりと歩を進める。セシリアは鈴の放つ単純な膂力とは違う何かの力に慌てながらも、必死で鈴を抑えようとしていた。

「何をやっているのだ？」

唐突に二人の背後から二人に掛けられる声。聞き覚えのある声に鈴は足を止めると、声のした方を向く。やや息を切らせたセシリアも続けて振り向く。

二人が振り向いた先に居る人物。それはラウラだった。

「あ、あんた! どうしてここに!」

「兄様が行くと聞いたから見に来たのだ」

驚きながら言う鈴にラウラは普通に答える。ラウラを見るセシリアと鈴の視線は固い。だが、ラウラが二人にしたことを考えればそれも当然と言える。

しかし、警戒した視線を向けながらも、ラウラを見る二人の表情はやや戸惑いの色がある。

「あの、ラウラさん。その手に持っているものは?」

「おお。これはだな、綿菓子と言ってこの国の砂糖菓子らしいぞ」
ラウラが片手に持つ物。それは綿菓子だった。二人に見せ付けるように綿菓子を持つ手を突き出しながら、ラウラは得意げに言った。

「いや、綿菓子は知ってるからさ。なんで綿菓子なんて持ってるのよ?」

訝しげに鈴が尋ねる。だが、彼女の表情にも僅かに疑問の色がある。
「うむ。こここの入口近くで売っていてな。初めて見るものだったから、興味深く見ていたのだ。すると店の者が初めてならとサービスで一つくれたのだ。ここは日本良い国だな。とても美味しいぞ」

瞳の奥を少し輝かせながら語るラウラにセシリアと鈴は思わずため息をつく。

「む。なんだ、そのため息は」

「いやね、私らをボコボコにしてくれた時と今のあんたがまるで別人みたいだからね。驚いてんのよ」

どこか疲れたように言う鈴にラウラは何かを思い出したような表情をする。そして言った。

「うむ。あの時はすまなかつたな。許せ」

「あんたねえ…いや、いいわ」

「そうですね。なんだかわたくしも馬鹿らしく思えてきました」

ラウラのしたことは二人にとっては謝られたからと言ってそう簡単に許せるものではない。

だが、綿菓子を片手に真面目な顔をしているラウラを見ると、どうにも怒るのが二人には馬鹿みたいに思えてきた。

「うむ。話は終わったな。ならば私は行くぞ。兄様の様子をしっかりと見なければならぬ」

「あ、ちよつと待ちなさいよ!」

そのまま一夏達を追い掛けようとするラウラを鈴が制した。

「どうしたのだ?」

「いきなり追い掛けたら怪しがられるでしょ。まずは様子見よ。向こうの情報を知るの。だから私達と来なさい」

「むう、確かにそうだ。分かった。ではよろしく頼むぞ」

そうしてラウラも鈴とセシリアに加わって一夏の様子を伺うことにした。ちなみにセシリアがここに居るのは鈴に半ば強引に引っ張られた結果である。

「ところでラウラ。あんたなんで一夏を『兄様』なんて呼ぶのよ？」

「む？私が兄様だと思っているからだが？」

「はあ。もういいわ…」

「？おかしなやつだ」

side 一夏

シャルロットと共に歩きながら俺はモール内の店を見る。

この辺りは服飾店が主となっているエリアだが、実はこの辺はあまり来たことがない。

モール自体には中学時代に弾や鈴と共に何度も遊びに来たが、行く所が書店やゲーセンなど限られていたため、この辺りのエリアは割と目新しく感じる。

「なあ、シャルロット」

「ん？なあに一夏？」

俺は手を繋ぎながら隣を歩くシャルロットに声を掛ける。

「思うにだな。シャルロットという名前は少々長い。だからシャルロットあだ名みたいなので呼ぼうと思うのだが、どうよ」

「え？あだ名？」

「そう、あだ名。そうだな。シャル、なんてどうよ？」

「シャル？」

「気に入らなかったか？」

俺がそう聞くとシャルロットは少し俯きながら「シャル、シャル」と繰り返し呟いている。

そしていきなり顔を俺に向けると、瞳を輝かせながら言った。

「凄くいいよ！うん！一夏、今度から僕のことにはシャルって呼んで」

「あ、ああ。分かったよ、シャル」

俺がそう言うとシャルは物凄い笑顔を浮かべながら再び俺の隣を歩き出した。そんなに嬉しかったのか。まあ、喜んでくれてるならそれでいいか。

「ん？」

俺はふと目についた店を見る。そこは女性向けアクセサリーの店だ。アクセサリーと言ってもきらびやかなソレではなく、もっと落ち着いた雰囲気のお店だ。現に外から見える品揃えも落ち着いたデザインのものが多い。

「シャル、悪いけど先に行つてくれ」

「え？どうしたの？」

「いや、ちよつと別の買い物思い付いてな。俺は少し外れる」

「じゃあ、僕は先に行くよ？」

そう会話をして俺はシャルと一旦離れる。向かうは目の前のアクセサリー店。

店に入った俺は置かれている品を見定める。

もうすぐ七月七日。世間では七夕と呼ばれる日だが、俺にとっては別の意味がある。

「お、こいつは良いかもな」

俺は目についた品を見定める。デザインも上々。あいつによく合いそう。それにお値段も手頃。これにしよう。

「すみません、こちらの品なんですけど」

俺はそう言つて店員を呼んだ。

さて、無事に買い物を終えた俺はシャルの向かった水着売り場へと向かった。

女性向け水着の売り場は一カ所に固まっているのですぐに見つかる。

「あ、一夏〜」

水着売り場に近づくとシャルが手を振りながら俺に近づいてきた。

「あれ、どうしたんだよシャル」

「えへへ。一夏と一緒に水着を見たくて。待ってたんだ」

そうはにかみながらシャルは言った。そのためにわざわざ待っていたのかよ。いやはや、気を使わせちまったな。

「そいつは悪かったなあ、シャル。よし、なら早く選ばうか」

「うん！」

そして俺とシャルは水着売り場へと入った。

ふむ、日曜日という割には人はまばらだな。まあちよつど良いからよしとしようか。

「一夏、僕ちよつと水着を見てくるね」

そう言ってシャルが店の奥に入っていく。さて、なら俺は店の入口辺りでシャルを待とうか。さすがに女ものの水着売り場のど真ん中に突っ立っているほど俺は度胸は無いよ。

「ちょっとそこのあなた」

ん？なんだ？

「そこの男。あなたよ」

男。はて、俺しか居ないよなあ。とりあえず俺は声のした方を向く。そこには売り物であろう水着を手にした女性が立っていた。どうでもいいが見た目の年は二十代半ば。容姿は普通。本当に普通。どこまでも普通。

「何か？」

「この水着、片付けといてよ」

.....

ああ、そういうことか。ISが発表されてから早十年。ISの特性故に各国は女性優遇制度を導入。世の中は女性がやたら強くなった。その影響か、こういう男を平然とパシる女性も出てきたのだ。全く偉いのはISを使える女性であって女性全てが偉いわじゃないのにな。

とは言え、俺はこういうのはあまり相手にしない主義なのだ。

「断固断りましょう。そういうのは自分でやるもんですよ。社会人として当然のことでしょう」

「なに？あなた自分の立場が分かってないの？男なら黙って従いなさいよ」

うわあ、こいつは重症だよ。居るんだよねえ、こいつの。男は奴隷とでも思ってる奴。

実はこういうのに限って同性、即ち同じ女性から嫌われたりする。確かに女性優位は事実だが、何だかんだで男性の立場も認められては居る。一応な。

それに女性の側にしても良心の呵責というやつか、こいつ態度を取ることを好まない場合が多い。

だから今日の前の人みたいなのはあまりいい顔されないんだよな。

俺がそんなことを考えている間に女性、いや、このアマは警備員を呼び、嘘八百を並べ立ててる。大層な面の皮の厚さだな。

「すみません、お客様。少々よろしいでしょうか？」

そう言っただけ警備員が俺に声を掛ける。ちょっと周りを軽く見回すと、店内に居る数人の人達が心配そうにこちらを見ている。良識ある反応ありがたい。だがソレには及ばないんだな、これが。

「フッフッフ…」

警備員の手を軽く払いながら俺は笑いを零す。警備員とアマが怪訝そうな顔をする。

馬鹿め！自分が誰に喧嘩を売ったのか教えてくれるわ！

「ええい！控えい控えい！このIS学園学生証が目に入らぬかあ！」

そんな時代劇みたいな台詞と共に俺は携帯する学園学生証を出す。それを見た警備員の顔がヤベツと言いたげなものに変わる。気付い

たようだな。

理解していないとおぼしきアマに向けて俺は言ってやる。

「ここにおわす俺を誰だと思ってる！世界唯一の男性IS操縦者、織斑一夏だ！」

そう言うとアマの顔色が変わる。どうやら理解したらしいな。

「さ、て、と、お姉さん？世界唯一の存在である俺に有らぬ言い掛かりを付けるなんて、大した度胸だねえ？ああ、証人は今この場に居る人達だから。ついでに連れれのIS代表候補生にも証人になってもらおうかな。度胸は結構だけど、代償はデカイよ？見た所OLみたいだけど、多分明日辺りには会社の席が無くなってるんじゃないかなあ？ああ、警備員も巻き添えだからヨロシクウ」

ちなみに連れとはシャルのこと。

そして警備員とアマの顔色が派手に変わる。そりゃそうだ。下手したら警備員も職を失うわけだからな。警備員がアマに事情を確かめようとするが、アマは背を向けて場を去ろうとする。させねえよ馬鹿。

ガシッ

「どこ行くのかな？なあ？」

俺はトンスラしようとしたアマの肩を思いつ切り掴んで引き止める。なんか骨がミシミシ言う音が聞こえるけど、気のせいだろう。断じて、俺が70kgオーバーの握力で本気で掴んでいるからとかではない。

ちなみに千冬姉の握力は100kgオーバーです。握った林檎が弾けます。

俺はそのまま強引にアマを振り向かせると顔を近付けながら言う。

「なあお姉さん。喧嘩を売る相手は考えようや。な？言つとくけど、俺の身柄は政府に保障されてるレベルなんだぞ？俺は差別とかはあまりしない主義だけどさ、さすがにただの一般人でしかないあんたとは社会的価値に差があるわけよ。分かる？分かるなら頷いてくれると嬉しいなあ」

とりあえず声にドスを利かせながらちよつと脅し気味に言ってみる。あ、割と本気の殺気も込みだけど。本当はさ、白式の腕だけ展開して頭を弾け飛ばす寸前まで締め付けるつてもアリんだけど、それはさすがに問題だからね。なんて慈悲深いのだろうね、俺は。

俺の言葉にアマは引き攣った顔で頷く。ウンウン、理解が早くて助かるよ。あとその滑稽な無様な面見せてくれてアリガトウ。

俺は肩を握る手を離す。アマはそのまま逃げるように去っていった。ハハハ、ざまあみる。とりあえず中指立てるのは忘れない。

「あのお、お客様？」

「あ？」

警備員が何やら言いたそうだが、とりあえず一睨みで黙らせる。なんか顔の傷痕が効果を増してるらしい。使えるかもな、傷痕。

「いえ、なんでもないです。ハイ」

そう言つて警備員も去つていく。賢明だぜ。
そのまま俺は店内に戻る。店内に居た人達がこちらを見ているが、
軽く視線を向けると何事も無かつたかのように俺から視線を外した。
うん、皆さん懸命な判断どうもありがとう。ここでは何も起こらな
かつた。つまりはそういうことさ。

「さて、シャルはどこかな」

とりあえず俺一人だとまた絡まれそうだからな。対処は簡単だけど、
一々面倒だ。
連れがいればそういうこともないだろうよ。

故に俺はシャルを探すべく、店内を歩くことにしたのだ。

side out

「一夏一夏一夏一夏一夏一夏一夏あ……」

未だ光の消えた目をした鈴が一夏の名を呟きながらモール内を歩く。
その後ろをセシリアとラウラが続く。

「ふむ、セシリアよ。何故あいつは兄様の名前をブツブツ言ってい
るのだ？」

「いえ、そのお…、どうしてでしょうね？」

ラウラの問いにセシリアは苦笑いを浮かべながら答える。実際の所

セシリアは原因を理解していた。だが、それをわざわざ口に出すのは止めた方が良く、直感が告げたため、あえて言葉にしなかった。

「しかし、綿菓子とやらは美味かった。また食べてみたいものだ」

少し前に綿菓子を完食したラウラは綿菓子が付いていた割り箸を近くのごみ箱に捨て、その感想を言っていた。

甘味を素直に美味しいと言うその姿に先日までの氷のような雰囲気は無く、その姿をセシリアは未だ困惑気味に見ている。だが同時に年相応、同年代の少女達よりもやや幼く見える容姿が綿菓子を食べていたラウラの姿を微笑ましいものにしていった。

そしてセシリアはあることに気付いた。

「あ、ラウラさん。お待ちになって」

そう言ってラウラを止めるとセシリアは持ってきたバッグからウェットティッシュを出す。

「もう、口周りに綿菓子が付いていますよ」

そう言いながらラウラの口元をセシリアはウェットティッシュで拭く。

「む、すまん」

ティッシュの感触に少しくすぐったそうにしながらラウラはセシリアに礼を言う。

「もう。いいですか、ラウラさん。女性ならば常に身嗜みには気を

つけねばなりません。口周りを汚すなどというのはよろしくありませんよ」

「うむ、分かった」

審めるように言うセシリアにラウラはすぐに頷く。

そんなラウラの姿にセシリアは思わず軽い笑みを浮かべる。

(ラウラさん、一夏さんを兄様なんて呼んでらっしゃるけど、これでは本当に妹みたいですよわね)

そんなことを考えるセシリアをラウラが不思議そうに見る。

「む、どうしたのだ？」

「いいえ、なんでもありませんわ。さあ、行きましょう」

そう言ってセシリアは歩き出す。

その片手は自然とラウラの片手を握っていた。

第三十話（後書き）

さて、作者的には今回の話の見所は妹ラウラだと思っています。ええそうですとも。作者はシャルロット党ですけどね、妹ラウラを書いていると何かが大きく揺らぐ。

いや、ヒロインみんな可愛いと思いますけどね。サブも含めて出てくる女の子はみんな。

簡単な予告ですが、福音戦における白式のセカンドシフト。魔改造二回目をやっっちゃおうと思います。もしかしたらまたアンケート的なのをするかもしれないので、その折には皆様のご協力を頂きたい所存です。

やっぱ荷電粒子砲搭載のゾイドはカッコイイな…

第三十一話（前書き）

買い物回その2です。

今回はドイツに居るあの人が出ますよ。ラウラに色々吹き込んだ、
大体こいつのせいと呼べるあの人。

第三十一話

side 一夏

さて、少々ゴタついたがまあ気にする程でも無いだろう。さっきのクソアマ、決して蒼炎の錆にしたいとか思ったりはしていない。していないと思ったらしていない。

それよりも重要なのはシャルだ。早いとこ見つけなきゃなんのだから……

「あ、一夏!」

おお、なんとタイミングのいいことだ。

「一夏、ちょっと!」

「へ?」

いきなりシャルに手を掴まれたかと思うと、そのまま俺は引っ張られる。状況が呑み込めずシャルにただ引っ張られるだけの俺はそのまま店内の試着室に連れ込まれた。

「おいおい、いきなりどうしたよ?」

「その、選んだ水着が似合ってるか見てもらいたくて」

なるほど、そういう話か。だが、こればかりは言わせてもらおうか。

「だったら何で一緒に入る必要があるんだよ？」

そう。わざわざ試着室に一緒に入る意味なんて無い。

「シッ！少し静かにして！」

俺が何事かを尋ねようとしたらシャルは小声で俺を窘める。ふむ、本当にどうしたんだ？

「ああ〜もう〜、どうして居るの〜」

そんなことを小声で呟きながらシャルが試着室のカーテンを少し開けて外を伺う。

「どうした？」

「あ、だめ！」

シャルが止めようとするが、既に時遅し。俺はシャルの頭の上から覗き込む形で試着室の外を見ていた。そして見えた外には

「ああ〜つたく〜！一夏のやつ何処に居るのよ！？」

「先ほどから姿が見えませんが、恐らく気付かれたのではないですか？」

「私たちの気配に気づくとはな。さすがは兄様だ」

そんなことを言いながら店内を歩いている鈴にセシリア、そしてラ

ウラの姿が見えた。

「あいつら、なんで居るんだ？」

思わずシャルに尋ねてみる。

「そんなこと、僕に言われても分からないよ」

「だよなあ・・・」

そんな会話をシャルとしながら俺は外の三人の様子を伺う。察するに俺を探しているみたいだが、さてどうしようか。いっそのこと

「なあ、シャル。どうせだったらあいつらも」

一緒に買い物しようぜ、と言おうとした瞬間、背筋に物凄い寒気が走った。

「ねえ、一夏。僕言ったよね？今日は二人で買い物しようって？だから僕は一夏とだけ買い物今日はするつもりなんだよ？」

凄まじい気迫を出しながらそんなことを言うシャル。な、なんだこの威圧感。ちよ、怖いんですけど！というかシャル、目から光消えてない！？

「あ、あの・・・シャル？」

「一夏。今日は僕と一緒に、二人で買い物をするんだからね？」

「ハイ・・・」

そう言うしか無かった。

・・・何だろうな。シャルはやたら俺に固執することが多々ある。まあシャルとは秘密を共有したりトーナメントでタッグを組んだり、出会ってからの短い期間の内に割と親密な関係になったと言える。

聞いた話ではシャルはフランスに居た頃はあまり友人が居なかったらしい。それもこれも原因は件のクソ親父らしいが、とにかくそんなシャルにとって俺は初めての親しい間柄の人間なのだろう。俺にとってもシャルは初めて過去を打ち明けた他人であって、まあ俺にとっても貴重な存在と呼べる。

呼べるわけなのだがねえ。俺の勘繰りすぎだろうか。どうもシャルは最近、何かと俺の傍に居ようとする。別に嫌ではないが、やはり気になる。

・・・まさか俺に好意を持つてるだとか？鈴という前例もある。可能性はあるかもしれん。

だがそうなるど厄介だ。好意を持ってもらえることは素直に嬉しい。だが、仮にシャルが俺に好意を抱いているとする。となると俺は鈴とシャルの二人から好意を寄せられていることになるわけだが、これが大変だ。俺は二人の想いに答えを出さなきゃならん。

俺が二人のどちらかを選べば、確実にもう片方は傷つく。仮に二人とも選ばないとしたら、その時は二人とも傷付くだろう。俺としてはそれがどうにも心苦しく感じる。鈴もシャルも俺にとっては大事な存在だからなあ、傷つく姿なんざあまり見たくないというのが本音だ。

そういや、前に鈴にいつかの答えを出すと云つちまつたけど、まさかこんな状況になるとは。中々に大変なことになりそうだ。ある意味窮地かもしれんな。全く、戦いの場での窮地は歓迎なのによ。

カチャカチャ・・・

「ってちよつと待ったシャル！何してんの！？」

「え？いや、早く着替えて一夏に見てもらおうと思ってああ！」

気付いたか！シャルのやつ、俺の目の前で水着に着替えようとしてやがった！勘弁してくれ。さすがにそれはキツイ。

「お、俺は後ろ向いてるからな！」

「う、うん！」

そんな感じで俺はシャルに背を向ける。イカン、すぐ真後ろで聞こえる布の擦れる音が！ええい！！落ち着け俺！落ち着くんだ！煩惱退散！喝あ！！

「お、終わったよ・・・」

シャルの声が聞こえる。どうやら着替え終わったらしい。とはいえ、もしかしたらなんてことがあるかもしれないかもないかもなわけであつて。俺は恐る恐ると後ろを向いたわけなんだが

「ど、どうかな・・・？」

おお。なんとというか、見事な水着姿のシャルがそこに居た。

シャルはとにかくスタイルが良かった。何と云うのだろうか。とある部分が冴みたいな大きさをしているわけでもなく、腰の部分が凄く細いというわけでもない。

ただ、全体のバランスが凄く良いのだ。男の身ではどのように評価したらよいか分からないが、理想のスタイルとはシャルみたいなのを云うのだろう。

そして肝心の水着。ラファールと同じでシャルのイメージカラーとも呼べる黄色の水着。

何と云うタイプだったか、ビキニにスカートみたいな布を付けたやつ。

いや、とにかく似合っていた。不覚にも見とれたよ。

「一夏、どうかな…?」

おずおずと言った感じでシャルが聞いてくる。

「いや、凄く似合ってるよ。ああ、凄く良い」

俺はそう答えるのが精一杯だった。だって言葉が思いつかないのだからしょうがない。

「本当?良かったあ」

だが、シャルは俺の言葉に満足したのか嬉しそうな顔をする。その表情を見ると、俺も安心する。少なくとも俺の答えに満足したのだから。

「えへへ、一夏っ」

ギョ

ってちょっと待った！

「シャ、シャル！？何を！？」

何故かシャルがいきなり俺の胸にしがみついてきた。水着だから、その…胸がほぼダイレクトに当たって…
というか押し付けられて形を変えたシャルの胸が俺の目の前でやたら強調されて、イカン、なんかマズイ…！

「お客様？どうかなさいました？」

試着室の外から店員が誰かに話し掛けているらしい声が聞こえる。その声に反応した俺は偉いと思う。だってその直後に

「今のは…」

という凄く聞き覚えのある、具体的には生まれてこのかたずっと身近で聞いてきた声が聞こえたから。

俺は慌ててシャルを引き離した。その直後

シャー

「何をしているお前達」

試着室のカーテンが勢いよく開かれ、目の前に千冬姉が姿を現した。その隣には山田先生も居る。

「え？先生？」

シャルが驚いたような声を上げるが、俺は何も言わなかった。言えなかった。

さて、助かったと見るべきか、終わったと見るべきか。多分後者だな。

side out

一夏とシャルロットが千冬と真耶に見つかった後、シャルロットは着替えさせられ、現在二人は仲良く店の床に正座をさせられ真耶のお小言を受けていた。

「もう。いいですか二人とも。仲が良いのは結構ですが、節度ある行動をして下さい」

「その、すみません」

「俺も同じく。ただ俺の場合不可抗力というかいやすみません俺が悪いですよねそうですね」

やや落ち込んだ顔で謝るシャルロットと一夏。

ただし一夏は自己弁護を図ろうとしたものの、千冬の一睨みに平謝りをする形になった。

水着姿のシャルロットと二人で試着室に入っている現場を押さえられた一夏は千冬からの折檻を覚悟したが、千冬は真耶に二人を任せると何も言わなかった。

ただ、真耶からの説教を受ける二人を見ながら呆れるような表情をしていた。

そして、そんな四人を陰から見つめる姿があった。

「まさか織斑先生までいらしていたとは」

「これは迂闊には出れなさそうね」

セシリアと鈴である。ちなみにラウラは水着を見たいとのこと、現在は別行動中である。

二人は一夏とシャルロットを探す最中、千冬を発見。その後すぐに、一夏とシャルロットが説教を受ける現場を見つけたのだ。

先程まで気が立っていた鈴も千冬の姿を見て冷静に戻る。さすがに千冬の姿を見てもなお、暴れようとするほど彼女は愚かでは無かった。

そのまま一夏らの観察を続ける心算の鈴だが、その目論みは早くも崩れる。

「その二人、出てこい」

自分達に背を向けたまま千冬が言う。声を掛けられたことに驚きつつも、千冬ならば自分達に気付いても自然だと悟った二人は素直に一夏達の前に姿を現す。

「いやあ、あはは」

ごまかすような笑いを鈴とセシリアが浮かべる。

そんな二人を見て千冬は改めて呆れのため息を吐いた。

「んじゃあ、俺も自分の水着買いに行くから」

そう言って一夏が店を移動しようとする。

結局、一夏とシャルロットの買い物には千冬と真耶、鈴にセシリアも加わる形となり、もはや場が自分の入り込む空気にならなくなりつつあることを悟った一夏はさりげなく立ち去ろうとした。

既に水着を選び終えたシャルロットが一夏に付いていこうとしたものの、鈴に買い物に付き合おうという名目で無理矢理店に残らされることになった。

その様子を見ていた一夏は、さりげなくシャルロットの端末に謝罪といずれ埋め合わせをする旨をメールで送った。鈴に気付かれずにメールを読んだシャルロットはなんとか納得。その思考をいずれ来たる一夏とのお出かけに馳せていた。

「一夏、少し待て」

店を辞そうとした一夏を千冬が引き止める。千冬はいつもと変わらない黒のスーツ姿だったが、今は休日であるため二人は教師と生徒ではなく家族として接していた。

「どつしたよ、千冬姉」

「行く前に私の水着を選んでもらおうと思ってな」

そう言っただけ千冬は一夏に二つの水着を見せる。一つは黒のビキニ。もう一つは白のスポーツ水着である。

「黒」

二つを見比べた一夏は即答した。

「ほう、黒か。お前はこっちがいいと？」

「千冬姉に合いそうだからな。…まあ、男の気を引きそつなチヨイスだけど、千冬姉なら平気だろ」

そう評する一夏に千冬は面白げな顔をする。

「なんだ一夏。私が心配じゃないのか？」

からかうように言う千冬に一夏は鼻を鳴らしながら答える。

「千冬姉に心配なんか要らないさ。それに、妙な奴が寄り付くことものなら俺が潰す」

「なんだ。結局私が気になるのか？」

「うっせ。俺はただ千冬姉に見合う男以外は寄せないつもりなだけだよ。俺だって手間なんだからさ。千冬姉も早いところ自分で相手を見付けなよ」

そう一夏もからかうように言う。

「あいにくだが、世話の焼ける弟の心配が無くなれば私もすぐに相手を見付けられるのだぞ？」

「ならもう見付けられるじゃないか」

「自惚れるなよ。お前などまだまだ青二才だ」

会話を交わす二人の顔には挑発的な笑みが浮かぶ。だが、同時にその笑みには紛れも無い家族の情が含まれていた。

「まあいいや。俺は行くよ」

「ああ。選ぶならまともな物を選べよ。お前が妙な水着を着ようものなら、私の評判にも関わる」

そんな千冬の言葉に一夏は背を向けたまま、片手を上げて答える。そのまま一夏の姿はモールの奥へと消えていった。

「全く。仕様のないやつだ」

一夏の消えた方を見ながら千冬は呟く。だが、そんな彼女の表情には弟への親愛を見せる姉としての穏やかな色があった。

一夏が自分の水着を選びに行っている時、セシリアと鈴の二人と別れたラウラは一人で店内の一角に居た。

「ほお、これ程の種類があるのか…」

自身の周囲にズラリと並ぶ色とりどり、形様々な多くの水着に目を奪われる。

「ううむ……」

無数の水着を前にラウラは唸る。

幼い頃から英才軍事教育を受けて育ったラウラは水着選びなどとは無縁の人生を歩んでおり、そもそも軍事教育により培われた思考が水着の必要性を感じては居なかった。

彼女にとって水着とはあくまで泳ぐ時に着用する物という認識で、それ以外に頓着することは無かった。

だが自分以外の全員が水着を選ぶ以上、水着とは選ぶものだと言わねばならぬ。彼女なりに判断し今に至る。

そして今、数多の水着を前にラウラの思考は一つの答えを出していた。

「まるで分からないぞ…」

近くに居た別の客の会話から水着とは「褒めて欲しい人」に褒めて貰うために選ぶものだと言わねばならぬ。彼女が理解した。そしてラウラにとって褒めて欲しい人物は二人居る。

一人は千冬、もう一人は一夏だ。

(やはり千冬姉様には褒めて欲しい。兄様にもだ。どうすればいい)

あの決戦の後、不思議とラウラは一夏への憎悪が消えていた。ラウラ自身、一夏を激しく嫌っていたことを覚えているため、そのことが不思議でならなかった。だが、考えて早々に止めた。あるのはただ憎悪が消えて一夏を兄と慕い、千冬を尊敬すべき師として、自分の姉と呼ぶべき人物として今まで以上に慕うという結果のみ。

その結果があれば十分。培った合理的思考によりラウラは素直に一夏と千冬の姉弟を慕うことにしたのだ。

余談だが、一夏もまた試合以来ラウラへの敵意が消えていた。あれほど腹の底から沸き上がったラウラへの破壊衝動がパタリと止まったこと。それが一夏には不思議でならなかった。

一夏自身、そのことを悪くは思っていない。ラウラが一夏を慕う以上、敵意を感じないのは良いことであるからだ。

だが、同時に一夏はこの結末を惜しくも思っていた。

ようやく出会えた真正正銘の強敵との徹底した命のやり取りにまで至る戦いを期待しただけに、一夏の心には僅かながらも落胆があったのだ。

その落胆も既に過去のモノだが。

話を戻す。

数分の間、一人で考え続けたラウラは自分だけで選ぶのは不可能と判断する。

ならば他者に助言を請うのが常道だが、誰に頼むべきかラウラは考える。そして、ある人物を思い浮かべた。

そして懐から携帯端末を取り出すと、ある人物に連絡を取った。

同時刻ドイツ。現在お昼を回り午後もこれからという時刻である日本とは約8時間の時差があるドイツでは、早朝を迎え一日が始まるうとしていた。

場所はドイツ軍IS運用特殊部隊「シュヴァルツェ・ハーゼ」基地。「黒うさぎ部隊」の名で知られ、ドイツが保有する10機のISの内3機を有する事実上ドイツ最強の特殊部隊でも同様に、一日が始まるうとしていた。

早朝訓練のため軍服に身を包み、機材などの準備をする少女の姿があちこちに見える。

そして、基地の中央で少女らを監督するのは同様の軍服に身を包んだ女性だった。

クラリツサ・ハルフオーフ。階級は大尉。22歳という部隊最年長であり副隊長である彼女は隊長であるラウラの補佐を始めとして部隊の主な牽引役であり、部隊の少女達には頼れるお姉様として慕われている。

ピリリリリリリリリ！

軍服の内に仕舞われている彼女の携帯端末が着信を示す。

ラウラが日本に留学中で居ない今、事実上部隊を率いている彼女は上からの緊急連絡にも即座に対応出来るよう、常に端末はオンにしている。

そして着信を受けとったクラリツサは即座に端末を取り出し、コールに応じた。

『クラリツサ、私だ』

声の主はラウラだった。突然の部隊長の連絡に僅かに驚いた彼女だが、すぐに冷静に戻り応対をする。

「受諾。ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長、いかがなさいましたか？」

クラリツサが発したラウラの名に部隊の少女達が一斉に彼女の方を向く。

『その、織斑一夏のことなのだが』

広い基地内に端末からのラウラの声が響く。部隊の少女達はラウラの言葉を一字一句聞き漏らすまいと、耳を傾ける。

そして一夏の名を聞いたクラリツサはああ、と何かを思い出したような声と共に言った。

「織斑一夏と言いますと、織斑教官の弟で隊長が兄と慕う方ですね」

『そうだ。私の兄様だ』

そう言って一夏についての確認をしてからラウラは続ける。

『実は今度、臨海学校なるものに行くのだが、どのような水着を選んだら良いのか分からないのだ。そちらの指示を仰ぎたいのだが』

「了解しました。我等黒うさぎ部隊、常に隊長と共にあります。それで隊長。隊長の現在所有する装備は？」

『学校指定の水着が一着のみだが』

その言葉を聞いた瞬間、クラリツサの目が見開かれ、顔色が変わった。

「何を馬鹿なことを!!」

相手が上官ということも忘れて思わず怒鳴る。端末越しに怒声を聞いたラウラは思わず端末から耳を離した。

「確か、IS学園は旧型スクール水着でしたね。それも悪くはありません。しかし!それでは!」

語気を強め、そして一旦言葉を切るクラリツサ。ラウラも後に続く言葉を決して聞き漏らすまいと端末に耳を近付け、神経を集中させる。そして

「それでは色物の域を出ないっ!!」

空いた手を胸の前で強く握り締めながらクラリツサは力強く言った。

背後で一連のやり取りを聞いていた少女達がおゝ!と声を上げる。

「さすがは黒うさぎ部隊の副隊長!」

「伊達に日本の漫画やアニメを愛好しておられない!」

「素敵です!お姉様!でも男性を兄様と呼ぶ妹な隊長はもつと素敵
!!!」

背後で上がる声を見無視しながら、クラリツサはラウラとの会話を続

ける。

『その、ならどうすればいい。私は兄様や教官に褒めて欲しいのだ
』！』

その言葉にクラリッサは端末の向こうのラウラの真剣さを感じ取る。
だからこそ、彼女はありったけの自信と共に言った。

「ご安心下さい。我に秘策有りです」

ラウラとの通信を終えたクラリッサ。その表情は一仕事を終えたか
のような満足感があつた。

彼女は嬉しかった。あのラウラが、氷のごとき態度で部隊員達とも
折り合いの良くなかったラウラが！水着を選ぶという年頃の少女ら
しい行動を取るようになったことを。

先立つてのトーナメントの後、ラウラはクラリッサへと通信を入れ
ていた。

用件は一つ。織斑姉弟の妹になりたい。それを聞いた瞬間、彼女は
背筋に電撃が走るのを感じた。

そして驚きつつも、彼女はラウラに兄や姉と慕う者への呼び方や、
一夏に関しては日本における兄と妹の関係について彼女が学んだ範
囲で、彼女が日本の漫画やアニメから学んだ範囲で、ラウラに教え
ていた。

そして、一通りを教え終えたクラリッサはしばし呆然とした。その

後すぐ、彼女は部隊を緊急召集。ラウラの変化について自身が把握した限りを事細かに話した。

彼女の話した内容に部隊員はこの上なく驚いた。

あの氷のような隊長が妹だと!?

だが、驚愕も束の間。すぐさま部隊員達は妹として振る舞うラウラの姿を想像し、興奮の渦に陥った。

そしてあれよあれよという間に彼女達とラウラの関係性の問題は解決したのだ。

そして今、ドイツ最強の部隊の部隊員達である彼女は、妹キャラと化した隊長を愛でるといふ名の下、クラリツサを中心に固い結束で結ばれていた。

仮にその場に彼女達のかつて師である千冬が居たならば、呆れのため息と共に全員にげんこつを落としていただろう。

ドイツ最強黒うさぎ部隊。今日も絶賛稼動中である。何がどう稼動中かは言及しない。

そして日が流れ、IS学園一年生の臨海学校が始まる。

第三十一話（後書き）

さて、ついに臨海学校本番。

福音戦ももうすぐです。この作品の執筆当初からやりたかったネタがようやく使える。

ネタですが、話に違和感無く組み込んでいるかなと思いますが。

一夏がますますイケメンになりますわW W

本当にどうしてこうなった。

さて、白式の追加装備でも考えるか。紅椿とセットで出す。

ニコニコにあるIS戦闘シーンをゾイドのBGMにした動画が面白かったです。

本当にゾイドのアニメは面白かったなあ。初代とスラッシュゼロしか見てないけど…

第三十二話（前書き）

臨海学校開始です。

ついにあの人が登場します。

第三十二話

side 一夏

トンネルを抜けると、そこは綺麗な浜辺だった。

そんなどこぞの小説の一節みたいなことを思いながら俺はバスの外の景色を眺める。

IS学園一年一組一同、現在臨海学校の目的地へと向かうバスで移動中である。

「うわゝ、おりむゝ！見て見てゝ！海だよゝ！」

隣に座るのほほんさんがそう言うってくる。分かっている。言われなくても見えてるよゝっと。

「ほう、見事な眺めだな」

「わたくしのプライベートビーチほどではありませんが、中々よさそうな場所ですわね」

前の席に座る篤とセシリアがそれぞれ感想を言う。

セシリアや。君はプライベートビーチなんぞ持ってるのか。改めて金持ちということを思い知らされるな。普段は態度こそ上品だが、そういうセレブリティな面を見る機会が少ないからな。

「うわゝ！ねえラウラ！海だよ海！」

「見えてる！見えてるからシャルロット！私を膝に座らせるな！」

「ん〜ラウラ〜？シャルロットじゃなくてお義姉ちゃんって呼んでよ〜」

「な、何故そんなことをしなければならぬのだ！」

後ろの席でじやれてるのはシャルにラウラ。いや、じやれてると言うよりシャルが一方的にラウラをいじくってるというべきか。シャルがラウラを自分の膝に座らせてもみくちゃにしている。ほお擦りしたり頭を撫でまくったり。

正直、若干引かないこともない光景だが、まあ悪くはない関係だし良しとしようか。しかし、何故に「お姉ちゃん」なんだろうな。確かに最近のラウラは自称妹だけあって、それっぽい雰囲気を見せることがあるが。

つか、俺を兄と呼ぶのは勝手だが、千冬姉はどうすんだ？本当に姉様とでも呼ぶのか？度胸あるなあ…

まあとにかくそんなこんなで俺の周囲は中々に賑やかだ。ちなみに鈴は二組なので居ない。

朝、バスに乗り込む時の鈴が物凄い顔で俺らを見てたが…まあ、その、すまん。

君は良いやつだがね、君のクラスがいけないのだよ。

冗談はさておき、向こうに着いたら適当にフォローをしとくか。

「はあ。元気いいねえ、みんな」

窓の外に広がる海岸を見ながら俺はため息と共に言う。

「ん〜？おりむー疲れてるの？」

俺の顔を覗き込みながらのほほんさんが聞いてくる。

のほほんというあだ名の通り、常に緩やかな雰囲気を纏う彼女が癒し系というのは一組全員の総意だ。

いや、こいつが隣で良かった。バスの席を決める際、何故か俺の隣を巡って凄まじいバトルがクラスで勃発した。あわや大騒ぎにというところで千冬姉が止めなきやどうなっていたやら。そして俺の隣の隣はあみだくじで決めることになり、見事のほほんさんが当たったのだ。

くじをする時、どいつもこいつも目の色が凄かった。平静を保つてたのはセシリアとのほほんさん、ラウラだけだった。

全く。みんなにや悪いが、あんな獲物を狙う獣みたいな目をしたやつと隣になるならまだのほほんさんの方が良かった。癒し系万歳。

閑話休題。のほほんさんが疲れてるのかと聞いてきたわけだが。疲れなあ…

「まあちつとは疲れてるな。昨日少しはしゃいじまって」

「ほえ〜。おりむーも臨海学校楽しみだったの？」

「まあな」

とりあえず適当に笑って流す。実際は違うんだな、これが。

昨日、俺はとある大乱闘をやってきたのだ。発端は剣道部の部長さん。準備を終えていた俺は休日の午後を暇していたのだが、そんな俺に部長さんは声をかけたのだ。用件は武闘派部活の一部メンバー

が定期的にやっているという腕試し会へのお誘いだ。

聞けば学園の武闘派部活の一部メンバーは、大体はその部の部長やエース格なのだが、より実戦的修練を求めて定期的に交流会という名目でルール無用無差別バトルをやっているらしい。それに出ないかと部長さんは俺を誘ったのだ。

二つ返事で了承したよ。

具体的にはこんな感じ。

『（交流会を）やらないかい』

『うほっ、いいイベント』

『いいのかな？ホイホイ付いて来ちゃって。言っとくけどみんな、一年だって構わず手加減はしないよ？』

『いいんです。それに俺、そういうイベント好きですから』

そして会場に着き

『『いざ勝負っ！！！』』

こんな感じである。いや、凄かった。

生身での戦闘訓練に使われる学園の「特殊戦技訓練室」。その中でも最も広い第一訓練室で行われた心踊る戦い。一応安全に配慮して、武器は全て安全用の工夫がされた物だったけど、あのピリピリした空気は最高だった。

各々得物を、或いは拳を構えて空気を張り詰めさせる。そして鳴り響く開始のアラーム。鬨の声と共に駆け出していく戦士達。実に素晴らしかった。

俺も借りた模擬刀を片手に迷わず突っ込んだよ。後はひたすらに暴れる。もうね、楽しくて仕方なかった。まあ楽しかったんだけど、俺は途中でリタイアした。背後から迫ったボクシング部の生徒が放った顔面パンチにやけくそになってパンチで応戦したのだ。そしてから見事にクロスカウンターが決まって、両者相打ち。そのまま俺とボクシング部員はぶっ倒れてリタイアと相成ったのだ。

全部終わってから部長さんに起こされたのだが、いや口惜しい。もっと楽しみたかった。ありがたいことにそのことを言ったら、また誘ってくれるとのこと。次が楽しみで仕方ない。

まあそんなこんなで臨海学校前日を馬鹿騒ぎで過ごした俺は今、若干の疲れが体に残ってるのだ。まあそれもバスに座ってポケーツとしてる内にある程度回復したけど。

ちなみに件の腕試し会、「大乱闘スマッシュ・シスターズ」という名称が付いているそう。表向きはあくまで交流会だけど。男の俺が参加したらシスターズじゃなくなるけど、まあいいか。

「しかし、本当にみんな元気のいいことで」

学園、正確には学園直通の駅からバスで出発した直後からバスの中

では喧騒が止むことが無かった。ワイワイガヤガヤをBGMに俺はバスの中で時を過ごしたのだ。

「おりむー疲れてるなら無理しちゃダメだよ」

「ああありがとう。それと口元にチョコ付いてるぞ」

心配してくれるのほほんさんにお礼を言いつつ、俺は彼女の口元に付いているチョコを指摘する。バスが発車してから彼女は結構なお菓子を食べていた。

「全く。向こうに着いたら多少時間が空くからとは言え、昼飯があるんだぜ？そんなに菓子食って平気か？」

「おりむー。別腹って知ってる？」

「そうかい」

一応指摘はしたものの、彼女の言葉に俺は納得する。どうやら食欲は胃のキャパシティを軽く無視できるらしいな。

ちなみに別腹とは実際にあるそう。たとえ満腹まで食べても、本当に美味しそうなものを見た場合、胃が動いて隙間を作るらしい。どうでもいい豆知識だな。

「こらシャルロット！髪を弄るな！」

「えー。ラウラの髪って凄く綺麗なんだもん。ほらほら、僕に任せ
て」

「止めるー！うわ！髪を結うなど私は！兄様！シャルロットを止めて

くれ！」

後ろでは未だにシャルとラウラがじゃれてるらしい。ラウラが俺に助けを求めてくるが、悪いなラウラ。多分俺にシャルは止められない。何気に行動力凄いなだよ、シャル。俺を試着室に連れ込むくらいには。

とりあえず背後から聞こえるラウラの制止を求めると、周囲のクラスメイトのラウラが可愛いと言う声を聞きながら、俺は静かに合掌するのだ。南無。

しかし対照的に箒とセシリアは静かだ。まあ二人とも元々そういう性格だからな。こういった空間では多少は騒ぐのも構わないと思うが、俺としてはやはり二人のような態度が好ましい。

「もうすぐ目的地に着く。全員ちゃんと座れ」

そんな指示を千冬姉が出す。すげえや。あれだけ騒がしかったバスが一瞬で静まり返りやがった。さすがは千冬姉だな。後ろのシャルとラウラもちゃんと座ってるのが気配で分かる。ついでにラウラが安堵の息を吐いたのも分かった。ラウラ、よく頑張ったな。

さて、千冬姉の指示が下ってから数分後、目的地に着いた俺達はバスから下りてクラス毎に列になつてならんでいる。

目の前には一軒の旅館が立っている。大ききこそ馬鹿でかいというわけではないが、非常に整った旅館だというのが雰囲気で分かる。まあつまりは凄く良い旅館だということだ。

さすがはIS学園。良いところを選んでくれる。

「ここが我々が三日間お世話になる花月荘だ。全員、粗相のないように行動しろ」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

千冬姉の言葉に続いて並んだ生徒全員が旅館の前に立つ女将さんとおぼしき人に挨拶をする。もちろん俺もしたぜ？

「はい、こちらこそお願いします。今年の一年生もみんな元気ですね」

女将さんも俺達に笑顔で挨拶をする。ほう、仕事柄なのかもしれんが笑顔がよく似合う人だな。

「では各自荷物を持って部屋へ向かえ。その後は自由時間だ。各自端末に表示されている注意に留意した上で行動しろ。解散！」

千冬姉の指示が下り、みんながそろそろと旅館の中へ入っていく。そして従業員に案内されて各自の部屋へ向かった。

さて、確か俺の部屋は千冬姉が教えてくれる手筈なわけだが、千冬姉はと。ああ、女将さんと話してら。

「いつもお世話になります。今年は申し訳ありませんね。浴場のことでわざわざお手間を取らせてしまって」

「いえいえ。私どもも元気な生徒さんを見るのは楽しいですし、浴場のことも心配ありませんよ。お客様全員にくつろいでもらうのが私どもの仕事ですから」

そんな感じで千冬姉と女将さんが話してる。しかしこの女将さん、美人としか言えないな。年は三十代前半か。だが笑顔のせいかもっと若く見える。あとはアレだ。千冬姉とは美人のベクトルが違うな。

あの女将さんは母性ってやつに溢れてる。

…まあ、千冬姉には求めるだけ無駄な要素だな。

「あら？もしかしてこちらの彼が噂の？」

ふと、俺と目が合った女将さんがそう言う。どれ、千冬姉の手前だ。キツチリ挨拶しとくか。

「織斑一夏です。今回はよろしくお願いします」

可能な限りにまじめにした顔と声でそう挨拶する。少なくともこの人にはそう接するべきだと思ったからだ。

「まあ、これはわざわざご丁寧に。女将の清洲景子です。どうぞ」ゆるりとお過ごし下さい。織斑先生、とても立派な弟さんですね」

「いえ、至らぬ点ばかりの愚弟ですよ。では、我々もお邪魔させて頂きます。織斑、来い」

というわけで俺は千冬姉について行って旅館の中へと入ったのだ。

ああそつだ千冬姉。俺を愚弟と呼ぶのは構わないけどさ、その愚弟に家事の世話を任せてるのを忘れるなよ？

まあ口には出さないけど。出したところでもろくな目に会わないことが分かってるからな。

目の前を歩く千冬の背を眺めながら一夏は旅館の廊下を歩く。旅館は昔ながらの造りや外観をしているが、実際の建物にはかなりの最新設備が盛り込まれており、一夏が今歩いている廊下もエアコンによる空調が絶妙な加減で効いている。

その古いものの良さと新しいものの良さを見事に融合させた造りの旅館に、知らず一夏の心には期待が湧いていた。

「着いたぞ。ここがお前の部屋だ」

千冬が一つの部屋の前で立ち止まる。千冬に続いて立ち止まった一夏は、部屋の戸に貼られた紙に書かれた文字を見て目を丸くした。

「じじって…」

教員室。そう紙には書かれていた。事情を理解していないらしい一夏に千冬が説明をする。

「お前は私と同室だ。当初は一人部屋も考えたのだがな。それでは就寝時間を破って部屋に押しかける生徒が出てくるに違いないとのこと、私と同じ部屋になった」

「なるほどな…」

千冬の説明に一夏は頷く。仮に一夏を一人部屋にした場合、千冬の指摘した可能性は確実に現実になるだろう。ならばこの判断は妥当と呼べるものだ一夏は思った。

(さすがに千冬姉の居る部屋に押しかけるやつは居ないからなあ)

そんなことを思いつつ一夏は千冬と共に部屋に入る。
さすがは教員室と言うべきか。部屋は二人分にしては広く、トイレ
や洗面設備、室内風呂もよく整ったものだった。

「一応大浴場はあるが、お前一人のために片方を制限するわけには
いなくてな。時間制で決着をつけた。お前は女子の入浴時間の3
0分前あたりに使える。後は部屋の風呂を使え」

その言葉に一夏ははあ、と声を漏らしてから言った。

「わざわざそんな手間かけなくたって。別に俺は部屋の風呂オンリ
ーでも構わないんだぜ？いつもそうだし、そもそも風呂にはそこま
で頓着しないから」

「わざわざ遠方まで来たのだ。せっかくだから温泉も味わっていけ。
それに、これは向こうのご厚意だ。無下にはするなよ」

「成る程な。それならお気遣いに甘えるところか」

そう言つて一夏は荷物を置く。そこへ部屋の戸をノックする音が響
き、部屋に真耶が入って来た。

「織斑先生、打ち合わせの件なんですがつて織斑君!？」

「山田先生、彼が私と同室というのは事前に決まったことでしょう。
それと、打ち合わせの件は別室でやります。先に行つて下さい」

「あ、はい。分かりました」

そう言って真耶が立ち去る。部屋には再び一夏と千冬が残った。

「というわけだ。私はこれから仕事だ。お前は好きにしろ」

「りょうか〜い」

そう言って一夏は海へ行くための荷物を持って部屋を出ようとする。そしてその背を千冬は呼び止めた。

「言い忘れたが織斑。私はここに教師として来ている。分かっている」

「分かりました、織斑先生」

そう言って一夏もまた海へと向かった。

(しかし先生方も大変だねえ)

そんなことを考えながら一夏は旅館の廊下を歩く。

今回の臨海学校は別の名目として「非限定空間におけるISの稼働試験」も兼ねている。

そのため、専用機持ちには国から追加装備が送られ、二日目以降にそのテストをする。

学園の臨海学校に合わせて、近辺は外部の人間の出入りを規制しているため追加装備は揚陸艇で運ばれるのだが、この手続き等に教員達は初日を使う。そのため、生徒は初日は終日自由時間であり、食事以外は各々自由に過ごす。

「あ、おりむー」

歩く一夏にのほほんさんこと布仏本音が声をかけた。

「ん？どうしたよ？」

「んゝあのね。おりむーの部屋ってどこかなゝって思って。一覽にないんだもん。教えてくれたら遊びに行きたいなゝって」

そんな本音の言葉に一夏はああ、と納得の声を上げるとすぐさまその顔に苦笑を浮かべながら言った。

「遊びに来てくれるのは嬉しいけどな。そいつは無理だよ。なにせ俺は織斑先生と同室だからな」

「ありやりやゝ。それは無理だねゝ。残念無念」

「また今度ゝってな。まあ自由時間に適当に誘ってくれや。俺はこれから海に行くからさ。せつかくだから来いよ」

「うん。そうするゝ」

そう言って本音はトレードマークと言える余りすぎな袖をひらひらと降りながら一夏と別れた。

そのまま廊下を歩き続けていた一夏であったが、その歩みが唐突に

止まる。一夏の視線が動く。動いた視線は廊下に面している旅館の中庭、その一角に向けられる。

視線の先、そこには地面に埋まったウサギの耳があった。

「……………」

うさ耳を見つめる一夏の顔が苦いものになる。一夏は廊下から中庭に下りるとうさ耳に近付きじつくりと観察する。

『優しく抜いてね？』

丸みのある可愛らしい字体で書かれた文字。一夏の顔の苦々しさが増す。

「一夏さん？どうかありませんでしたの？」

背後から一夏に声が掛けられる。振り返った一夏は不思議そうな顔で自分を見るセシリア、その隣に立つ箒に気付いた。

「ああ、セシリアに箒か。いやな、これがさ……」

そう言っただけで一夏はうさ耳に視線を再び向ける。なんのことか分からないセシリアと箒は一夏同様に中庭に下りてうさ耳に近づく。そしてうさ耳を目にした瞬間、箒の顔色があからさまに変わった。それはまるでうさ耳を目にしたことを後悔するようなものだった。

「なあ箒。これってさ」

「知らない。私は何も知らないぞ。知らないと言ったら知らないの

だ

そう言うと筈は足早に二人の下を立ち去る。残された一夏とセシリアは顔を見合わせる。一夏の顔には苦々しさが、セシリアの顔には疑問の色がそれぞれ浮かんでいる。

「あの、一夏さん。これは一体？」

「いやあ、俺にはなんとも。心当たりはあるけどさ」

そう言う一夏の脳裏にはある人物が浮かび上がっていた。このような悪ふざけとしか言えないことをする人物を一夏は一人しか知らなかった。

「まああれだ。引き抜くからちょっと下がってる」

そう言うで一夏はセシリアを下がらせる。セシリアが下がったのを確認した一夏は軽いため息を吐くと、静かにうさ耳を見下ろし、全力で蹴り払った。

スポッ

蹴りの勢いに反して軽い音と共にうさ耳が抜ける。耳の下には何もなく、ただ地面から抜かれた耳が中庭に転がっていた。

「あの、一夏さん？」

「静かに」

声を掛けようとするセシリアを一夏は制し、周囲に注意を払う。そ

して一夏は上空から微かに聞こえる振動音に気付いた。

ドドドドドドドドドドドドドドドド

そして音が近づく。一夏は既に下がり、旅館の廊下に退避している。そして

ドカン！！

そんな大きな音と土煙を上げながら何かが中庭に落ちてきた。そして土煙が晴れた先にあったのは

「に、人参？」

落ちてきたのは巨大な人参だった。セシリアが訳が分からないと言いたげな声を上げる。一夏は苦笑いを浮かべながら無言で人参を見つめる。

パカッ

唐突に人参が真っ二つに割れる。直後

「やあやあいつくん！おっひさー！というか引っこ抜かないで蹴り飛ばすって酷くないかな？東さんへの愛が足りないよ？」

やたらハイテンションな声と共に一人の女性が人参の中から姿を現した。

豊富な体をフリルのついた服で覆い、その頭には機械製のうさ耳が付けられている。時折ヒョコヒョコと動く耳はやたらと目を引く。

「お久しぶりですね。相変わらずすごい出方をする」

どこかげんなりした様子で一夏が女性に挨拶をする。だが、そんな一夏の様子などお構い無しと言わんばかりに女性は続けた。

「ふふ〜ん。束さんはいつでも先に行くのだ！つまらない登場の仕方なんてさらさらする気はナッシング！！ま、ホントは前にミサイル型にしたらどこぞの国の偵察機に落とされそうになったから人参にしたんだけどね〜」

「そつすか」

答える一夏の声にはかなりの適当さが含まれている。一夏が会話を面倒臭がっているのは明らかだった。

「ぶー！つれないなあいつくんは。おっとそうだ！今の束さんは篝ちゃんに用があるんだった！というわけで篝ちゃんセンサー起動！むむっ！？反応あり！というわけでサラダバー！」

そのまま女性はやたらと素早い速さで走り去る。

その背を一夏は呆れた顔で、セシリアは未だに状況が飲み込めていない顔で見送る。

「あの、一夏さん。今の方は一体…？」

セシリアが一夏に尋ねる。尋ねられた一夏はややげんなりとした顔をしながら簡潔に答える。

「篠ノ之束って言えば分かるか？」

その言葉にセシリアはギョツとした表情を浮かべる。

「篠ノ之束って、あの篠ノ之束博士ですか！？I Sの開発者で各国が探しているという！」

「その篠ノ之束だよ。俺からすればはた迷惑な知り合いのお姉さんだけだな」

どこか疲れた表情で一夏は言う。一夏の脳裏には幼少期から記憶に残っている束のハチャメチャぶりが思い出されていた。

「あの方が…」

だがセシリアはそんな一夏の様子に気付くことなく、呆然とした表情で束の走り去った方向を見つめていた。

そして一夏は深くため息を吐くと空を仰いだ。

（なあってあの人が居るのかね。部外者立入禁止をモロに無視してるよなあ）

太陽の眩しさに目を細めながら一夏は考える。

（しかし、あの人が来るか。全く。この臨海学校、一騒ぎありそうだなあ）

束が関わって穏便にことが済んだことがないことを思い出しながら、一夏は臨海学校の先が思いやられるのを感じていた。

そして再び大きなため息を吐いた。

第三十二話（後書き）

束の口調が難しい。あのハイテンションを再現するのがなんとも。

実は作者は束は微妙に思っていたり。何と云うか、本能的に微妙なんですよ。

中の人ゆかりんは大好きですけどww
You & amp; meがお気に入りです。ライブで観客による一糸
乱れぬラップは凄かった。

第三十三話（前書き）

臨海学校初日前半となります。
紅椿は次の次で登場ですね。

…多分…

第三十三話

海岸に出るために一夏は更衣室で水着に着替えていた。

今回は学園がほぼ貸し切りになっているが、この辺り一帯の海岸もシーズン中は一般客の来訪があるため、当然ながら更衣室は男子用も存在している。

「はあ……」

一人更衣室で水着に着替える一夏は深くため息を吐く。その表情はやや呆れたような苦いものになっている。

「全く、どいつもこいつも。一人だけとは言え男子が居るんだから少しは慎みを持ってっただ」

ぶつくさとぼやく一夏は更衣室に向かう途中を思い出していた。

男子更衣室は女子更衣室よりも奥にあるため、一夏は必然的に女子更衣室の前を通ったのだが、その際に女子更衣室から聞こえた会話のため息を吐くしかなかったのだ。

具体的にどのような声が聞こえたかと言うと

「ちょっとミカったら。あんたまた胸が大きくなっただんじやないのく？」

「あつ、バカ！触らないでヒヤアン！ちょ！揉まないでよお！」

「うわー！ティナの水着ったらだいたーん！」

「そう？このくらい普通じゃない？」

「さっすがアメリカは違うわね」

このような感じである。無論、彼女達にも羞恥心が無いわけではない。一夏が、というよりも男子に聞かれていると知ればそのような会話はなりを潜めるだろう。一夏に聞かれているということを知らないが故の無防備である。

だがそんなことを知らず、女子の黄色い声を聞かされた一夏としてはたまったものではなかった。

聞こえた瞬間に一瞬足が止まりはしたものの、すぐに頭を振ると足早にその場を通り過ぎ男子更衣室へ向かったのだ。

「あゝ、なんか先が思いやられるよな。いつそのままここでフケるか」

水着に着替え終えたものの、先行きへの不安から一夏は思わずそんな言葉を漏らす。

だが、すぐに馬鹿らしいと考えを改めてビーチへと歩を進めた。

ビーチに一夏が出ると既に居た女子達の数人が一夏に気付いた。

「あ！織斑君よ！」

「うそ！？私、水着変じゃないかな！？」

「うわゝ、凄い筋肉。鍛えてるんだね」

「カッコイイな」

そんな声が聞こえる。聞こえた一夏は知らず頬が少し緩んでいた。

（そうか。筋肉がキテるか。そうだろうそうだろう。伊達に鍛えてるわけじゃあない）

一夏の体は一言で言えば見事なものだった。均整の取れた細身の体は余すところ無く鍛えられた筋肉で覆われている。

力強さと同時にしなやかさを感じさせるその体は女子達の視線を当たり前のように引き付けていた。

（フフン。やはり鍛えてよかった。毎日シャワーの時に調子を見ていた甲斐があったというもの！）

自然と一夏の心が高揚していた。鍛えてきたことに相応の自負を抱いている一夏は当然ながら自身の筋肉にも自信を持っていた。

余談となるが、中学時代に一夏の筋肉への自負を聞いた親友の五反田弾は一夏を表す単語の一つに「筋肉マニア」を追加している。

「織斑くん！後でビーチバレーしようよー！」

「おう！後でなー！」

別の方から掛けられた誘いに一夏は軽く手を挙げて答える。そしてある程度ビーチの中程まで進んだ一夏は改めて周囲を見回した。

「やっぱり場違い感があるよなあ」

先程までの高揚はすっかり消え去り、一夏は思わず苦笑いを浮かべていた。周りを見渡せば水着姿の女子しか居ない。そしてその全てが一般的に可愛いと呼べる容姿をしており、さらに海外出身の生徒ともなると大胆と呼べる水着を当たり前のように着用している。

そのような空間に男一人。あまりの場違い感に一夏は渴いた笑いを漏らした。

「どれ、まずは体操でもするか」

頭に浮かびそうな煩惱を鎮めるために一夏は準備運動となる柔軟体操を始める。

(しかしこいつら、本当にステータス高いよな。見た目も中身も)

体操をしながら周囲の女子を見やり一夏はそのようなことを考える。

(学園を卒業しても全員がIS操縦者になるわけじゃない。だが、なれずとも能力は確か…か)

気が付けば一夏はどこか冷めた視線で周囲を見ていた。

IS学園は表向きは学園であるが、その実態は完全な軍事養成施設である。そこを卒業するのだ。例えばIS操縦者でなくとも各種能力の高さは折り紙付きだろう。組織の諜報員としてはうってつけと呼べる。

(軍事的能力があつて尚且つ見た目も良い、か。ハニートラップ要員にはうってつけだな)

気が付けばそんなことを一夏は考えていた。

真夏の陽光に照らされて輝く海と、そこで戯れる見目麗しい少女達を目にしながら何故そのような物騒な考えが浮かぶのか。

一夏自身にも分からない。ただ無心で体操を続けながらも思考が勝手に働くだけだ。

(あるいは、それが俺に向けられる可能性も無きにしもあらずか)

少なくとも一夏は自分の異質性を理解していた。世界唯一のIS操縦者。データないし身柄を欲しがる組織や人物はゴマンという。シヤルロットの父親など良い例である。

(もしかしたらこいつらの誰かが俺を陥れるために動くかもしれない、か。なんとも嫌なものだ)

織斑一夏という人間はごく一般的な常識を持ち合わせているが、自分を害そうとする人間に容赦をしないくらいの冷酷さも持ち合わせている。

かつて誘拐犯を惨殺したように、自身に敵意を向けたラウラを本気で斬ろうとしたように。

一夏は将来自分を害する存在が仮に今の同級生であろうと容赦をかけることは無いだろう。必ずそうだと一夏自身が確信している。

だがそれでも、入学して数ヶ月でそれなりに親交の増えた級友が敵になるという考えは嫌なものである。そしてもっとも厄介なのが、それが一夏の下らない妄想では済まされず、現実に取りこみうることだということである。

(全く、世の中無情だよな。本当に)

いつの間にか体操も終えていた一夏は軽くため息をつきながらそんなことを考える。

そしてふと意識を現実へ引き戻した。

「考えてもしょうがないか」

真夏の陽光に照らされて活気に溢れた海岸で、あるかどうか不確定な未来のことを心配するのは野暮というもの。そもそも何が悲しくて快晴の空の下、思考を曇天に彩らねばならないのか。

一夏は勝手に沸き上がった考えに決着を付けることにした。

(ま、誰がどうなるうが敵なら斬るだけだわな)

そう自分の内で考えを締める。人に刃を向ける考えを容易く思い付く。常人からすれば異質なこの思考はしかし、一夏にとっては極々自然なことだった。

体操を終えた一夏は未だ海岸に立ったままだった。

目の前に広がる海を見つめながら考えごとをする一夏であったが、その視界が唐突にズレた。

「いーちかつ！」

明るい声と共に何かが自分の背に乗ってきた。それが人であることは明らか。そしてその人物は器用に一夏の体をよじ登り、一夏に肩車をしてもらう体勢になった。

一度たりとて後ろを向かなかった一夏だが、自分に飛び乗ってきたのが誰なのか、一夏は既に把握していた。

「鈴、変わんねえな。お前は」

「おゝ、結構な眺め」

一人を肩車しながらも涼しい顔の一夏はどこか苦笑気味に自分に飛び乗った人物の名を呼んだ。

名を呼ばれた人物、鈴はそんな一夏のことなどお構い無しに一夏の上に乗ったまま辺りを見回していた。

「いやゝ、一夏の肩の上も久しぶりねゝ。中学のプール以来だわ」

そんなことを鈴は言う。

その言葉に一夏は中学時代を思い出す。

(そついや鈴のやつ、プールとかだとしょっちゅう俺の肩に乗ったなあ)

思えばあれが鈴の俺に対するアプローチだったのかもしれない。一夏は思った。それと同時に鈴の意志に気付かなかった当時の自分を思い出して、一夏は軽い笑いを零す。

(とは言え、さすがにこの場でコレはマズいな)

別に鈴の行動が嫌というわけではないが、何かと自分絡みで騒ぐこ

との多い女子が数多く居る中、今の一夏と鈴はとにかく目立ってしようがない。また騒がれるのも厄介と判断した一夏は鈴を下ろすことにした。

「悪い、鈴。目立つから下ろすぞ」

「え？ひゃあ！」

言うやいなや一夏は肩に乗る鈴の腰を両手で掴むと軽々と自分の前方に放る。そしてすぐさま腕の位置を変えて目の前で宙に浮く鈴の背と膝裏に腕を沿える。

そして一夏は落ちる鈴を丁寧を受け止めるとそのままゆっくり砂浜に立たせた。

「い、いきなり何すんのよ！」

一夏のいきなりの行動に抗議の声を上げる鈴だが、その頬は僅かに赤く染まっていた。

そんな鈴の表情に一夏は苦笑しながらも言う。

「あのな、こんな場所であんな真似したら目立つたる？」

人差し指を立てながら一夏は鈴に顔を近付けて言う。いきなり眼前に一夏の顔が迫ったことで鈴は慌て、言われるがままに首を縦に振った。

よろしい、と満足げに一夏は頷くとそのまま海へ視線を向ける。それきり一夏は動こうとしない。それどころか、一夏の顔が徐々に苦いものに変わっていった。

「?どうしたのよ、一夏？」

慌て状態から回復した鈴が一夏に尋ねる。

いつの間にか鈴の隣にやってきていたセシリアもキョトンとした表情を浮かべている。

鈴に尋ねられた一夏が鈴の方を向く。セシリアが来ていたことに気付いた一夏は鈴とセシリアの顔を見ながら困ったような表情で言った。

「いや、海に来たはいいけどさ。何したらいいか分かんねえ」

その言葉に鈴とセシリアは固まった。

場所を手頃な木陰に移した一夏、鈴、セシリアの三人は会話をしていた。内容は当然、先の一夏の発言だった。

「一夏、あんた本当に海でやる遊び思い付かないわけ？」

信じられないと言いたげに問い掛ける鈴に一夏は苦い表情のまま頷いた。

「あの、一夏さん。もしかして一夏さんは海に来たことはないのですか？」

思い付いた可能性をセシリアは上げる。その言葉に一夏が答えるより先に鈴が言った。

「そういえば一夏。あたし、あんたが海に行つたつて話を聞いたことが無いわよ。夏休みだつて後半にあたしや弾と町のプールに行くくらいだつたわよね？」

その鈴の言葉に一夏は首を縦に振つて肯定の意を示した。

「そうなんだよ。思い返したらそうなんだ」

一夏が語るには、鈴が転校してきたのとほぼ同時期に一夏は剣の師に弟子入り。夏休みの大半は師の元で過ごしたとのこと。

帰ってくるのは基本的に盆過ぎ。その頃には海にはくらげが出るようになり、泳ぐには適さなくなる。結果、一夏は夏休みは海で泳ぐことはなく、泳ぐなら町の公営プールで、ということになるのだ。それを鈴が転校してから中学に入っても継続。

それを聞いて鈴は呆れたと言つようなため息を吐き、セシリアも目を丸くしていた。

「なるほどね。じゃあさ、あたしが来る前はどうだったのよ？」

ジト目で鈴が一夏に重ねて問い掛ける。その表情はこのあとに来るであろう一夏の答えがろくなものじゃないと思つている顔だった。

そして鈴の予想が正しいことを示すかのように、一夏は頭をかきながら言つた。

「いやあ、鈴が来る以前はだなあ、その、なんだ。毎日箒の実家の道場で竹刀振つてたわ。アハハ」

更に付け加えると、一夏も一応海に行つた記憶はあるのだが、それ

も記憶の曖昧な幼少期の話であるため、この場においてはなんの参考にもならない。

「ハア……」

一夏の返答に鈴のみならずセシリアまでもがため息を吐く。それほど一夏の返答は呆れるものだった。

「んで、あなたはどうするつもりよ？」

「ん、とりあえず適当にポケットとしてようかな」と

もはや鈴は何も言えなかった。こいつ駄目だ。鈴の脳裏にそんな言葉がよぎる。これは何とかしなければならぬ。だがどうすればいいのか。

一夏と鈴は揃って頭を捻った。そこで、何かを思い付いたらしいセシリアが手を叩きながら言った。

「それなら一夏さんに一つ、お願いしたいことがあるのですが」

その言葉に一夏と鈴はキョトンとした顔でセシリアを見た。

side 一夏

さて、セシリアが頼みがあるというわけで、再び海岸に出たわけだが。

「これは一体…」

俺の手に握られているのは一つのボトル。貼られているラベルからサンオイルということが分かる。

そして俺にこれを手渡したセシリアは今、ビーチの一角に刺されたパラソルの下で広げたシートの上で俯せになっている。

「つまりこれはアレか？セシリア。俺にオイルを塗ってくれと」

「ええ。ちょうど誰かにお願いしようと思っていました。それにこのようなことも海の楽しみの一つだと思いますので」

なるほど、それもアリか。誰かにサンオイルを塗ってやるというのも、まあ海らしいな。

もしかしたらいずれ千冬姉にしてやる機会があるかもしれない。その時のために経験しておくのも悪くは無いな。

「分かった。俺でよければやるよ」

「ではお願いしますわ」

そう言ってセシリアは俯いたまま水着の紐を外す。ちなみにセシリアの水着はなんだ。確かパレオとか言うんだっけか？ビキニタイプの水着に布を巻き付けたアレ。どこか落ち着いたデザインなのが俺的には良いと思う。色が青だというのもセシリアによく合っていていいな。

さて、ではオイルをと

「ってえ！！ちょっと待ちなさいよ！！」

「ど、どうしたよ、鈴?」

「どうした、じゃないわよ! あんた何をしようとしてんのよ!？」

「何をと言われても、セシリアにサンオイルを塗ってやろうと」

「それが問題だってんのよー!」

ガァー! って感じで鈴が怒鳴り散らす。いきなりどうしたんだか別にオイル塗るくらい大したことないだろうに。

「別にオイル塗るくらいいいだろ。減るモンでもねえしよ」

「そういう問題なんじゃないのよ!」

「一体なんだってんだよ。やれやれ仕様の無いやつだ。」

「じゃあなんだよ。アレか? お前もオイル塗って欲しいのか?」

「えっ? い、いや、その...」

鈴のやつ、いきなりどもりだしやがった。ふむ、もしかすると当たりか? やれやれ、仕方ないな全く。

「セシリア、いいか?」

「フツ、構いませんわ」

「一応セシリアに確認を取ったら苦笑混じりに了承してくれた。どうやらセシリアも気付いてるらしい。さて、セシリアが良いって言う

なら問題はないな。

「ほれ、鈴。ここに横になれ」

そう言つて俺はセシリアの隣のスペースを指差す。鈴は少し迷つたみたいだが、黙つてセシリアの横に俯せになつた。

「ったく。やつてもらいたいなら始めから言えばいいのによ」

「そついつ問題じゃないわよ。…ばか…」

口を尖らせる鈴だが、あまり怖くはないな。

さて、オイル塗りを始めるとしようか。

「んじゃあ始めるぞ。セシリア、なんか気をつけることはあるか？」

何せ初めてだからな。注意点をしっかり聞いておかなきゃならん。

「ええ。では、オイルは塗る前に手で温めて下さい。それ以外は特
にありませんわ」

「了解。それじゃあ始めますよ、お嬢様」

「ええ、お願いしますわ」

そして俺はオイル塗りを始めた。

とりあえず塗る際は千冬姉に時々やつたたマッサージの要領で手を動かしたわけだが、どうやらうまくいったらしい。セシリアのリラックスした表情を見れば分かる。

次いで鈴にもオイルを塗つた。鈴の場合、水着の形状の問題で背中

全部にオイルを濡れたわけじゃないが、まあ塗らない部分もごく一部だから問題は無かった。
そしてオイルを塗り終えた俺はそのままくつろぐ二人と一旦分かれ、ビーチを再び一人で歩いていた。

「さて、また一人になったわけだが、どうしようか」

相変わらずすることが思い付かない。我ながら問題だとは思うが、思い付かないものは思い付かないのだからしょうがない。仕方ない。とりあえず辺りをブラリと歩いて

「あ、一夏〜！」

よし、一人散歩はせずに済みそうだ。後ろから俺に声を掛けたのが誰かは分かっている。シャルだ。丁度いい。シャルならば俺の現状をどうにかしてくれるはず。

そんな期待を込めて俺は後ろを振り返り、固まった。

「え〜と、シャル？隣は？」

「いやあ、そのお」

エへへとシャルが笑う。いや、笑わないで説明しろよ。一体なんなんだよ、その隣の全身タオルぐるぐる巻きのタオル妖怪は。

いや待て。タオルの隙間から出ている銀髪。そして僅かに見える眼帯。もしや…！！

「ラウラ、か？」

俺の言葉にタオル妖怪、もといラウラが反応する。隣では一緒に選んだ水着を着たシャルが苦笑いを浮かべている。

「なあ、一体これはなんなんだよ？」

そう尋ねてしまうのも無理はないよな。そんな俺の疑問に答えたのはシャルだった。

「その、ね。ラウラが恥ずかしがっちゃって。僕はすごく可愛いと思うんだけどね。ほら、ラウラ。見せちゃいなよ」

そう言ってシャルがラウラをせつつく。だがラウラは中々タオルを外そうとしない。

「その、だな。私にも心の準備というものが…。兄様に見せるのだぞ」

「大丈夫だって。一夏は褒めてくれるよ。ほらほら」

「あつ、や、止めるー！」

もじもじとし続けるラウラのタオルをシャルが剥がしにかかる。シャルや、君はもう少し落ち着きなさい。

そして全てのタオルが外れ、水着姿のラウラが俺の目の前に現れた。

「ほう」

そう息を漏らしてしまうのもむべなるかな。いや、ラウラの水着も中々じゃないか。

色は紺色。形状はビキニタイプだが、少々布の面積が小さい。だが、不思議と邪なイメージは湧かない。ラウラの透き通るような白い肌と水着の紺色がいい感じにマッチしている。

「うう…に、兄様。おかしくないか？」

どこか不安げにラウラが尋ねてくる。おかしいだと？馬鹿を言うな。

「似合ってる。よく似合ってるぜ、ラウラ」

そう言っただけはラウラの頭を軽く撫でてやる。前にまたやってやると約束したからな。今がちょうどいいタイミングだ。

「そ、そうか。似合ってるか」

そう言っただけはラウラは嬉しそうに顔を綻ばせる。

「あ、そうだラウラ。せっかくだからアレ言ってみようよ？」

唐突にシャルがそんなことをラウラに言った。アレ？アレってなんぞや。

そして、言われたラウラはあからさまに動揺した。

「なっ、ア、アレを言うのか？その、本当にか？」

「本当だよ。ほら、ラウラ。言っちゃおうよ」

そうシャルがラウラを促す。シャルの顔に悪戯っ子のような笑みが

浮かんでいるのは気のせいだろうか？

「兄様…」

ラウラが俺を見てくる。身長差とラウラが首を上げないことから、ラウラは上目遣いで俺を見てくる。

「その、だな。シャルロットに教わったのだ。こう言えば兄様は喜ぶかもしれないと」

「ん？何をだ？」

そしてラウラは一度深呼吸をすると、上目遣いのまま言った。

「お、お兄ちゃん」

気が付いたら砂浜に尻餅を付いていた。何？お兄ちゃん？お兄ちゃんだと？ラウラが俺に？

「うっ！やっぱりラウラ可愛いー！」

「こ、こら！離せ！」

目の前ではシャルとラウラがじゃれている。いや、バスの時みたいにシャルがラウラを弄ってるだけか。

だが、俺はそんな状態じゃ無かった。ラウラの言葉が衝撃すぎた。

「フフ、一夏ったらへたりこんじゃうなんて。よっほど驚いたんだね」

いつの間にかラウラを離れたシャルが俺の顔を覗き込む。普段なら驚くところなんだが、今はそれどころじゃなかった。

「いや、驚いた。ああ。マジで」

立ち上がりながらそう言う。

そして俺はラウラの方に歩いた。

「ラウラ」

「兄様？」

俺を見つめるラウラに俺は言うべきと決めたことを言った。

「呼び方は今まで通りに兄様でいいよ。お兄ちゃんは刺激が強すぎる」

そう言う俺は多分苦笑を浮かべているのだろう。いや、ラウラのお兄ちゃん発言は凄く威力だった。あれは色々ヤバイ。

そして俺の言葉にラウラは素直に頷いた。

「おーい！織斑くん、デュノアさん、ボーデヴィツヒさん！ビーチバレーやるよー！」

別方向からそんな誘いが掛かる。俺はシャルとラウラと顔を見合わせる。誘ってくれた生徒の方へと歩を進めた。

「あ、一夏。待って」

唐突にシャルが俺を止める。どうしたかと思ったら、シャルは少し

顔を赤らめながら言った。

「その、ね。ラウラみたいに僕も頭を撫でてもらいたいんだけど、いいかな？」

なんだその程度。別に俺は一向に構わない。

「ほれ」

俺はシャルの頭に手を乗せ、ラウラにしたようにシャルの頭を撫でる。

頭を撫でられているシャルは嬉しそうに顔を綻ばせる。

「エへへ…」

そのまま少しの間、シャルの頭を撫でた俺はシャルと共にビーチバレーのグループに参加し、しばしビーチバレーを楽しんだのだ。

ビーチバレーにはいつの間にか日光浴を終えたセシリアや鈴、他にも谷本さんとかも加わりおおいに盛り上がった。

ところで、のほほんさんは海でも着ぐるみとは。なにかポリシーでもあるのだろうか？

そしてビーチバレーを一通り楽しんだ俺は今、休憩がてらに近くの木陰で座りながら海で遊ぶみんなを眺めていた。

ふむ。海で本格的に遊ぶんざほとんど初めてに近いが、中々悪くはないな。こんなことならもっと前から海を楽しめば良かった。まあ、修業に明け暮れたのを後悔するわけじゃないけどさ。

「ああ、悪くない」

自然とそう言葉にしていた。そして俺は視線を晴れ渡った空へと移した。

本当に、「どういづのもいいもんだよ。」

第三十三話（後書き）

さて、最近ようやく白式の第二形態の構想ができました。ネタバレになるのであまり詳しくはお伝えできませんが、軽くポイントをとると

- ・超機動

- ・射撃兵装追加

- ・盾装備

こんな感じですよ。え？ほとんど原作まんまだるですよ？大丈夫です。各種装備は原作とは全然違いますので。ただ、原作より高性能にはなっているかもしれないですが。ひとまずは続きをお待ち頂ければと思います。

何かご意見がありましたら、遠慮無くどうぞ。アイデアを出して頂けると、もしかしたら付け加えるかもしれません。

第三十四話（前書き）

や、やっと書けた…
時間が取れない…

第三十四話

side 一夏

ああ、潮のかほりがする。あーい空、ひろーい海、実に風情がある。

穏やかな潮風を受け、不思議と心落ち着く波の音と同級生らが戯れる声をBGMに俺は今、木陰で昼寝をしていた。

いや、別に寝入っているわけではないから、厳密には昼寝とは言えないな。ただ横になって潮風と波の音を楽しんでいるだけだ。

うーむ。本来なら海に入って適当に遊ぶべきなのだろうが、どうもその気が起きない。

ぶっちゃけ海に入ってもすることなんざ思い付かないし、なんか面倒だ。

そもそも、海に来たからって海に入らなきゃイカンという法律なんかない。楽しみ方は人それぞれ。つまり俺みたいにゴロンとしてるのも立派な海の楽しみ方なのだ。…多分な。

「いや、こーこういう寛ぎ方も悪くはないな」

よくよく思い出して見れば、入学してから今まで、毎日授業に特訓にと、我ながら結構気張ってきた。こーやって完全なリラックス状態になることはほとんど無かったな。

やることがないから、いつそのこと砂浜で走り込みでもしようかと思っただけ、予定変更。このまま休息タイムを楽しむとしようか。しっかり体を休ませとくか。

「何をしているお前は」

リラックスタイムな俺に掛けられる凜々しきお声。誰かなど一々確認せずとも分かる。

「織斑先生も来たんですか」

そう。我が姉上にして担任の千冬姉様である。

とりあえず視界に入っただけだったので、視界に収めようと起き上がって声のした方を向いたのだが、思わず言葉を失ったよ。

「わぁお…」

そんな声が出てしまうのも無理は無かった。海に居るわけだから千冬姉も水着、俺が選んだのを着用しているわけなのだが。

率直に言おう。パーフェクトだ。

いや、黒のビキニがとにかく千冬姉のスタイルに合すぎて。店で見た時にはただ似合いそうくらいにしか思わなかったが、いやはや、実際はそんなチャチなレベルじゃあ無かったよ。

「何を呆けている。間抜けに見えるぞ」

「つと、こりゃ失敬。しかし先生、仕事は？」

そう。考えてみれば千冬姉は仕事中的はずだ。だからこそ俺達は自由行動なわけだが。

「なに、少しばかり時間ができてな。一応、弟に選んで貰った水着もあるからな。来てみただけだ」

「それはそれは」

いや、まさかそのためにわざわざ海まで来るとはね。俺も選んだ甲斐があった。

ならば、ここは素直に水着について褒めるべきだな。

「いやはや、お見事な水着姿。まさしく女神のごとってやつですね。まあ先生の場合、戦女神の方が合いそうだけど」

そう言うと千冬姉はシニカルに微笑みながら言ってきた。

「ふむ。褒めてくれるのはありがたいが、戦女神ブリュンヒルデと呼ばれるのは好かないのを忘れたか？」

「あ、素で忘れてました」

そう言うと千冬姉はやれやれと言いたげにため息を吐く。

「お前というやつは。私を倒したいと思っているくせに私の肩書を忘れてたのか？」

いやあ、そうは言われてもねえ。ぶっちゃけ俺の中で千冬姉は最強ブリュンヒルデのIS操縦者というより、外じゃ完璧なくせに家じゃずばらな人というイメージが強くて。まあ強いってのは分かってるけど。というかそんなことは一々思い浮かべる以前の話だし。第一さ

「別に俺は倒したい相手の肩書はあまり気にしない主義で。強いってことだけ分かってりゃ十分。先生もそうでしょ？」

「違くないな。確かに、一騎打ちをするのに肩書だなんだは気にするだけ無用だ」

そう、俺の言葉に同意するように軽く微笑んだ千冬姉はそのまま俺の隣に腰掛け、再び口を開いた。

「で、お前はこんなところで何をしている？他の連中と騒がないのか？」

「いや生憎、あまり乗り気にならなくて。こうして潮風とか楽しみながら寝転ぶのも悪くはないですし。まあ一番の理由はすることが思い付かないってことですけど」

そう言うと、鈴やセシリアと同じように千冬姉までもがため息を吐いた。あんたまで同じ反応かよ。

「全く、お前というやつは。そういうえばお前、篠ノ之が引越す前も全然海に行かなかったな？篠ノ之が誘っても行かずに竹刀を振るばかり。奴に弟子入りしたらそれに拍車を掛けおつて」

「いやあ、まあ、剣の修練の方が楽しかったわけで」

そう言うと千冬姉は再びため息を吐いた。む、そこまで変なことか？一応そのことを聞いてみる。するとこう返してきた。

「まあ、一教師としても姉としても心中複雑と言ったところだな。鍛練に熱心なのは結構だが、少しは友人連中と遊んだらどうだとも言わせて貰おうか。別段、お前の歳ならば少しくらい遊んでも罰は当たるまい？」

へえ、千冬姉がそんなことを言うとはな。
とは言え、俺にとってはなあ

「いや、俺にとっては修業してるのが楽しいもので。そりゃ、弾とかと遊んでるのも悪くは無いけど、やっぱり修業が楽しいわけで」

「そうか。まあ、お前がそれでいいのならば構わんが、あまり生き急ぐなよ」

生き急ぐ、か。俺はそんな気さらさらないが。千冬姉にはそう見えるのかね。俺はただやりたいようにやってただけなんだけど。

「ご忠告、胸に留めますよ」

とりあえずこう答えとこうか。我ながら無難な答えだと思う。

「そうか」

それきり、千冬姉は何も言わなかった。

そして、昼食の時間になったので俺達生徒は食事会場へ移動。昼間から刺身という豪華な昼食を堪能した後、再び訪れた自由時間を各々思いのままに過ごした。

ちなみに俺は当初、限界まで砂浜走り込みにも挑戦しようかと考えたのだが、さすがにそれは海での過ごし方としてどうかと思ったので、無難にビーチバレーに再び参加させて貰った。

ビーチバレーには俺以外にも箒や鈴、シャルにラウラやセシリアなんかも参加して実に賑やかだったことをここに記す。

いやしかし、箒の水着姿も実に良かったな。千冬姉に負けず劣らずのスタイルで。しかし箒のやつ、なんか時々考え込むような表情を

していたが、一体どうしたのだろうか。いや、考えても詮無いことか。

そういえば、千冬姉はあの細身のどこにあれだけの力があるのだろう。やはり体の構造そのものからして違うのだろうか。となるとだ、いよいよ以って千冬姉を人外認定しなきゃならんわけだが、何とも複雑だ。

本人に聞きたいところだけど、聞いたら身の安全が無いからなあ。決めた。もう千冬姉は千冬姉という別種存在と見なそう。…いまさらか…

本当に複雑だよ。

s i d e o u t

時は過ぎ夕食の時刻となった。

宿側の方針により全員が浴衣を着用した生徒達は畳、或いはテーブル席で夕食である刺身を中心とした和食に舌鼓を打っていた。

日本のみならず、世界各国から集まった生徒の中には畳での正座に不慣れな者も多く、そうした生徒は部屋の一部に設けられたテーブル席で食事をする。

しかし、食事の内容は全員一緒である。これには海外の生徒達に日本の文化を慣れさせるという隠れた目的もあった。

そして畳の席の一角、すぐ後ろに部屋の出入口である襖が控えたその場所に一夏の姿はあった。その両隣にはシャルロットと箒の姿がある。

当初はセシリアやラウラも一夏の近くに座ることを希望したのだが、

畳での正座に不慣れであった二人は仕方なくテーブル席に座していた。そしてその二人は今、ラウラは西洋人にも関わらず生魚である刺身を平然と食べてその味に幾度となく目を輝かせ、セシリアは初めて目にした刺身を前に戸惑いの色を隠せずにいた。

そんなセシリアに彼女の両隣の生徒があれこれと世話を焼いている。

そして畳席の一夏、箒、シャルロットの三人はというと、ごく自然な様子で食事を進めていた。ちなみに鈴は別のクラスであるため、

一夏ら一組の生徒とは別の会場で食事をしていた。

そのことに鈴が心の内で血涙を流したことは一夏達には知る由も無かった。

「いやあ、この刺身美味しいな。わさびも本わさとききている」

刺身のメインを飾っているカワハギの刺身を食べながら一夏が唸る。最近では高級魚として扱われつつあるカワハギの刺身、肝までがついたその豪華な内容と、それに見合う見事な味に織斑家の台所を仕切る一夏の舌はただただ唸るばかりであった。

一夏の左隣りに座る箒も同様に食事の味に感服していた。

一夏の隣に座ることができたということまで心が高鳴っていた箒だが、それが鎮まるほどに料理の味は唸らされるものだった。

「刺身もそうだが、このご飯に味噌汁も素晴らしい。作るのに多大な手間をかけているのを味が証明している。本当に見事だ」

一夏と箒が揃って頷く。そして一夏の右隣りに座るシャルロットもまた、食事の味にただ感嘆を漏らすばかりだった。

西洋人であるシャルロットだが、寮の食堂では和食を頼むことも多いため今回の刺身などもなんら気にすることなく食べていた。また、

転校当初は使えなかった箸も練習の末に使えるようになっていた。ちなみに彼女の目下目標の一つは、覚えた箸使いで一夏に以前食事を食べさせて貰ったお返しをすることだ。

「ねえ一夏。本わさって何？」

聞き慣れない単語にシャルロットが一夏に問い掛ける。その問いに一夏は刺身の皿に小さく盛られたわさびの山を指して言う。

「本わさってというのは本わさびのことだ。そのまんま、ちゃんとしたわさび100%って意味だな」

「基本的に寮などで出される練りわさびはわさび大根などの代用品から成る物が多い。最近では一般で本わさを食べることはほとんどないからな。シャルロット、良い機会だから堪能するといい」

一夏の説明に箸が繋げる。二人の言葉を聞いたシャルロットはへえ、と言いながらわさびを全て箸で取ろうとした。

「って！シャルストップ！」

気付いた一夏が慌ててシャルロットを止める。キョトンとした表情のシャルロットに一夏は一度わさびから箸を離させてから言った。

「シャル。わさびはそのまま食うものじゃない。刺身にほんの少し付けて食べる香辛料だ。なお、わさびを付けるなら醤油も付けることを俺は推奨する」

「そつなの？」

「そうなのだ」

シャルロットの言葉に一夏は至極真面目な顔で頷く。二人の様子を見ていた篤も同様に頷く。

一夏の忠告を受けたシャルロットは言われた通りに刺身を食べる。ほんの一掴みのわさびを刺身に乘せてから醤油を付けて口に運ぶ。少しの間刺身を味わったシャルロットは軽く目を見開くと、納得したと言うように頷いた。

「確かに刺激が強いね。ほんのちよつとなのに凄いや。ありがとう、一夏、篤」

「いやいやなんの」

「大したことはしていない」

そうして三人は食事を再開する。シャルロットはわさびの新鮮な刺激、そして刺身と醤油とのマッチングを気に入ったらしく、にこやかな表情で刺身を食べていた。

そうして終始和やかな空気のまま、夕食は終了となった。ちなみに二組故に別室で食事をした鈴は一夏と同じ部屋で食事ができない悔しさと料理の味への感激という相反する二つの感情に揉まれながら食事をしたことをここに記す。

夕食後も基本的に生徒は就寝時間までが自由時間になっている。し

かし、既に辺りも暗くなっているため外に出ようとするものはおらず、生徒達は各々室内で就寝までの自由時間を過ごしていた。

「あゝあ、織斑君の部屋に行こうと思ったのにな。織斑先生までいっしょだなんて」

割り当てられた部屋で一組生徒の一人、鏡ナギがそう愚痴をもらす。同室となった本音からもたらされた情報により、一夏が千冬と同室であることを知った彼女は自由時間に一夏と遊べないことを嘆いていた。

これは彼女に限った話ではなく、同じく同室の谷本癒子やその他一組の生徒らも同様に一夏が千冬と同室であることを嘆いていた。

「はあ、折角色々遊べるものを持ってきたのに」

そう言いながらナギは部屋のテーブルの上に置かれたランプなどを見遣る。何も一夏と遊ぶためだけに持ってきたというわけではないが、やはり落胆はあった。

「ううゝ、おりむー無しなんてつまんないよ」

畳にゴロリと転がりながら本音もぼやく。そうして口ぐちにぼやく続ける三人をセシリアは苦笑いを浮かべながら見ていた。

「ま、まあ仕方ありませんわ。一夏さんと織斑先生はご家族ですし。こうなるのも順当な流れではないでしょうか？」

「全く。織斑君と遊べないっていうのにセシリアは落ち着いてるね」

「それは、その、なってしまったものはどうしようもありませんもの」

ジト目で見てくる癒子にセシリアは苦笑まじりに返す。

セシリアとて折角の学外行事なのだから、友人と楽しみたいという考えはある。だが、千冬が居るとなると話は別である。

ふと、何かを思い立ったらしい癒子がセシリアに言った。

「あ。そうだセシリア。セシリアが織斑君を呼んできてよ！」

「へ？」

突然の言葉にセシリアが困惑の表情を浮かべる。だが、それに構うことなく癒子は続けた。

「私たちが押しかけるのは駄目でもさ。向こうから来るのはアリだと思っただよね。だからセシリアが織斑君を呼んできてよ」

「そ、それでしたら谷本さんがご自分で呼びに行けば」

「セシリアがいいと思う人」

「「「はい！」」」

癒子、ナギ、本音の三人が揃って同調する。まるで初めから図っていたかのような息の合わせぶりにセシリアは軽いため息を吐いた。

「分かりましたわ。ではわたくしが呼んできます。ですが、あまり期待はしないで下さいね？」

「「「分かつてまゝす」「」」

そしてセシリアは部屋を出て千冬と一夏の部屋へ向かった。

「はあ、あの三人にも困ったものですわ」

廊下を歩きながらセシリアは呟く。彼女は理解していた。一夏の部屋割り、同室の三人のように一夏絡みでクラスメイト達が無用な騒動を引き起こさなため措置であるということ。

そのことに関して異論はなんら無い。だが、こうして一夏の方からクラスメイトの方へ向かうのでは本末転倒ではないだろうか。

(だというのに、断り切れないわたくしもわたくしですわね)

どこか自嘲気味に内心で呟く。恐らく一夏を呼んだところで色良い返事は返って来ないだろう。一夏が来たらクラスメイト達は大盛り上がりをするのは明白。そしてそうした騒ぎ立った空気を一夏があまり好まないことをセシリアは理解していた。

(とりあえずお誘いをかけるだけかけて、御暇をさせてもらいまし
よう)

誘った上で断られたなら癒子達も納得するはず。そう判断したセシリアは軽い気持ちで一夏の部屋へ向かう。

（ですが、折角出向くのですからそのまま帰るのもつまらないですわね）

歩きながらセシリアの思考は自然と別の路線へシフトしていた。先程までは一夏とクラスメイト達について。今は一夏と自分についてである。

（部屋へのお誘いが叶わなくとも、少々お時間を頂くことはできるかもしれませんがね。それなら、一夏さんと二人で語らうのも面白そうですわ）

入学した当初こそアレであったが、今やセシリアにとって一夏は学園で最も親交の深い友人の一人である。そんな友人とじっくり話し明かすというのも悪くはないと思った。

そう考えて、自然とセシリアの頬が緩み足取りも軽いものになる。

そして一夏の部屋の前にたどり着いたセシリアは珍妙な光景を目にした。

部屋の前に固まっている箒、鈴、シャルロット、ラウラ。四人は襖に耳を当てて部屋の様子を伺っている。心なしか四人とも顔が僅かに赤い。

「どうかなさいましたの？」

「シーッ！」

問い掛けるセシリアの言葉を鈴が制する。気になったセシリアは四人と同じように襖に耳を当てる。

部屋の中で行われている会話がセシリアの耳にも入ってくる。

『千冬姉、なんか固まってないか？久しぶりだから緊張でもしてんのか？』

『馬鹿なことを言っな。さっさとしろ』

『はいはい。んじゃ、久しぶりだから少し強めにやるぞ』

『んっ、く…。少し力を入れすぎではないか…？』

『そうか？いつも通りだけど、千冬姉が弱くなってんじゃねえの？』

『馬鹿を言っな…っっ』

(なな、なんですのこれはー！？)

セシリアは自分の顔に熱が集まるのを感じる。それ程に聞こえる会話が衝撃的だった。

(そ、そんな、一夏さんと織斑先生！そんなこと、ふしだらですわー！)

心臓がバクバクと早鐘を打つのが聞こえる。襖の向こうからは未だ千冬姉の声が聞こえる。どこか艶を含んだ声はセシリアの年頃の少女としての感性をやたらと刺激する。

精神的安定のためには襖から耳を離すべきなのだろうが、できない。逆に会話をもっと聞き取ろうと耳に意識を集中させてしまう。

他の四人も同様らしく、顔を赤らめながらもその意識は襖の向こうへ向けられている。

ふと、襖の向こうの会話が途切れた。五人の顔に疑問の表情が浮かぶ。そして

ガラッ

「きゃっ！」

「うわっ！」

「あっ！」

「何してんの？お前ら」

「全く、お前達は一体何をやっているのだ」

唐突に襖が開かれ、部屋に五人が倒れ込む。倒れた五人が視線を動かすと襖に手を掛けている一夏と千冬が目映る。そんな五人を一夏は不思議そうな顔で、千冬は呆れたような顔で見っていた。

「全く、お前達というやつは。用があるならば普通に入ればよかる」

部屋に通された五人は並んで千冬の前に座っている。五人から少し後ろに離れた位置には一夏が座っている。

「で？五人も揃って一体何の用だ？」

「いえ、そのお……」

五人が揃って気まずそうに目を逸らす。そんな五人の姿を千冬は面白そうな目で見ている。

「ふっ、大方一夏に会いにでも来たのだろう？言われんでもそのくらいは分かるぞ？」

千冬の言葉に凶星を突かれた五人は気まずそうな表情を浮かべる。そんな彼女らの様子に千冬の顔に浮かぶ笑みが深まる。

「あ、あの、先生。先生と一夏は何を？」

おずおずと言った様子でシャルロットが千冬に尋ねる。彼女を始めとした五人は襖越しに聞こえた会話の内容が気になっていた。

「ん？ただのマッサージだが？」

「……………え？……………」

五人の声が綺麗に揃う。蓋を開けてみれば事実はあまりに簡単。そのことに五人は各々妙な勘繰りをした自分に呆れた。

「どれ、折角だからお前達も一夏にマッサージでもしてもらうか？なかなかの腕前だぞ、こいつのマッサージは」

突然の千冬の提案に五人は互いに顔を見合わせる。そして口を揃えて言った。

「……………」
「……………」
「……………」

その言葉を聞いた千冬が一夏に目配せする。既に一夏は手を動かして臨戦体勢マッサージ準備に入っていた。

それからしばらくした後、部屋にはグッタリとしつつもどこかすっきりした表情の五人と、やり遂げた感のある顔をしている一夏、そしてそれを至極愉快そうに見る千冬の姿があった。

だが、彼女達は答えられない。一夏のマッサージが伴う痛みと、その効果による爽快感の二つに一杯一杯であった。

「どうだ？一夏のマッサージは。効くだろうか？」

「う、うう…」

言葉も無く呻くのは筈。

「ほ、本当ですわ…」

痛みを感じながらも効果を実感するセシリア。

「こりゃ効くわねえ…」

しみじみと呟く鈴。

「エへへ、一夏のマッサージィ…ウフフ、痛いけど気持ちいい…」

恍惚とした表情でトリップ状態に入っているシャルロット。

「……………」

何も言えない状態のラウラ。

五者五様の反応を千冬は面白そうに見ている。その隣で一夏は缶のスポーツドリンクを飲んでいる。

「ほら、しゃんとしろお前達。あまりだらけすぎるなよ」

千冬の言葉に脱力状態にあった五人はなんとか居住まいを正す。その姿を見た一夏は口を開いた。

「どれ、俺はちょっと席を外すよ」

「?どつかなさいましたの、一夏さん?」

尋ねてくるセシリアに一夏は千冬の方を見遣りながら言った。

「なに、たまにはみんなも千冬姉と話してみたらどうかと思っつてな。なら俺は居ない方がいいと思っつたんだよ。そうだろ、千冬姉?」

「そうだな。まあ賢明な判断だ」

一夏の言葉に千冬が同意する。そして一夏は軽く笑いながらセシリア達に言った。

「ガールズトークに男は邪魔だからな」

そして僅かに口元をシニカルに歪めて一言。

「まあ、ガールと呼ぶには一人敵しいのも居るけど」

余計な一言の代償は鉄拳による一撃だった。

「あゝクソ、痛えな」

千冬の鉄拳を脳天に受けた一夏は部屋を出ると廊下の一角にある休憩スペースで頭を摩りながらぼやいた。

自販機と幾つかのソファが置かれた休憩スペース。そこに置かれたソファの一つにドツカリと座り込むと、一夏は全身を脱力させてリラックス状態に入る。未だ痛みの残る頭頂部がやたらと気になる。

「あゝ、口が滑っちゃった。災いの元とはよく言ったもんだ」

自嘲気味に呟きながら一夏は天井を仰ぐ。生徒たちは各々部屋で自由時間を楽しんでいるのか、休憩スペースの周囲に人の姿は無い。明かりをもたらす照明の光の柔らかさが気分を落ち着かせる。そのまま一夏は疲れを癒すかのように目を閉じる。

どれだけ時間が経ったのか、唐突に一夏の目が開かれる。そして天

井に視線を向けたまま一夏は口を開いた。

「どうした。何か用か？」

「いえ、少々一夏さんが気になったものですから」

その言葉と共に休憩スペースに現れたのはセシリアだった。

休憩スペースに入ったセシリアは一夏の真向かいにあるソファの前まで行くと、静かにソファに腰を下ろす。名家出身の淑女らしい静かさと優雅さのある一連の所作は浴衣姿に合うなと一夏は何気なく思った。

「どうだったよ、俺のマッサージは？」

先に口火を切ったのは一夏だった。先程部屋で行ったマッサージの感想を求める。

「ええ、よく効きましたわ。体がとても軽くなって。痛くもありませんけど」

「そういうマッサージだからな」

軽く笑いながら答える一夏にセシリアも微笑を浮かべる。

「織斑先生にはいつもアレを？」

「まあな。ここ数年、都合の関係でほとんど家で一緒になるなんて無かったけど、一緒になった時はよくやったよ」

「では一夏さんは家ではほとんど一人でしたの？」

「ああ。何せ千冬姉はある時は日本の代表、ある時は世界最強、ある時はドイツ軍の教官と多忙だったからな。帰るのはほとんど月一だよ。そして俺は俺で時々泊まりがけの遠出をしたからな。電話でならともかく、直接家で会うなんざ年に数えるくらいしか無かった」

「そうでしたの」

セシリアの言葉のトーンが僅かに落ちる。突然に家族を失った彼女にとつて、家族が居るにも関わらずほとんど会えないということは少なからず思うところがあった。

「しかし、さっきの一撃は効いたな。全く千冬姉ときたら、何かあればすぐに鉄拳だ。ちつとは口頭注意とかする気は無いのかね」

そうばやく一夏にセシリアは思わずクスリと笑った。

「一夏さん。さすがにアレは頂けませんわよ？女性に年齢の話はタブーなのでから」

そうやんわりと諭すように言うセシリアに、一夏は軽く口を尖らせながら言う。

「事実だろうによ。全く、訳が分からんよ」

そう言う一夏にセシリアは再びおかしいような気分になる。一夏の言葉は額面通りに受け取ればデリカシーに欠けていると取れるものだったが、先程の一夏はまるで子供が拗ねているかのように見え、そんな一夏の珍しい顔がセシリアは面白かった。

「それにしても意外でしたわ。まさか織斑先生がそのような姿をお見せになるなんて」

先程まで部屋で行われていたガールズ（一人はもどき）トークを思い出し、セシリアは言う。

「あんな姿とはなんぞや？」

そう尋ねてくる一夏にセシリアは先程千冬が見せた姿を語る。自分達にジュースを与え、それを口止め料として缶ビールを飲む姿。一夏絡みで箒や鈴、シャルロットをからかう姿などを。

それを聞いた一夏は納得するように頷くと、面白がるような顔をしながらいった。

「言つとくがな、セシリア。家での千冬姉はだいたいあんな感じだぞ？まあ、みんな学園に居る時の鬼教官な千冬姉しか知らないからな。無理ないか」

「そうなんですの？」

驚いたと言わんばかりの顔のセシリアに一夏は浮かべた笑いを深める。

「そうなんだよ。学園じゃ完璧な姿見せてる千冬姉だけだな。家じやもうね。俺につまみを作らせて自分は適当な格好で缶ビール片手にゴロリ。そして家事全般が基本的にずぼらだから炊事洗濯も俺の仕事ときた。まあ、俺は千冬姉の稼いだ金で養って貰ったようなモンだからな。このくらいするのは当然だと思ってるけどさ」

「そ、そうなんですの？正直信じられませんか」

「だが事実なんだな、これが。事實は小説より奇なりつてな。まあ、千冬姉も結局は人間ってことさ。普段が完璧な軍事ロボットにしか見えないだけで」

「な、中々キツク言うのですね」

「そりゃあ、曲がりなりにも血のつながった家族だからな。このくらいは言えるさ」

苦笑いを浮かべるセシリアに一夏はニヤリとした笑いで返す。その笑みが自分たちをからかった千冬のソレとそっくりだということにセシリアは気付く。そしてセシリアは一夏と千冬が家族だということに改めて気付かされた。

「しかし、いつの間にか7月か。早いもんだ」

唐突に、笑みをひっこめた一夏がしみじみとした様子で呟く。その言葉にセシリアは同意する。

「そうですね。わたくしと一夏さんが出会ってからもう三カ月近くも経つのですか。本当に早いものですわ」

「最初は最悪だったよなあ、俺ら。いきなりの決闘騒ぎだし」

そう一夏が言うとセシリアは少し恥ずかしがるように言った。

「あれは、その、わたくしの態度に問題がありましたし、その・・・」

「いやいや、ぶつちやけあの時適当にあしらおうとしてた俺にも問題があつたな。メンドクサイ奴つて思ったし」

「そ、そうなんですか?」

「あれ?言つてなかつたか?」

「初耳ですわ」

「.....」

「.....」

「クッ」

「クスッ」

互いに意外だという顔を見合わせた後、揃つて笑いを零す。ひとしきり笑つた後、再び一夏が口を開いた。

「そういや、再戦の約束をしたのはいいけど、それつきりだったな。模擬戦とかやる機会はなかつたし、一番のチャンスだったトーナメントはアレだし」

「そういえばそうですね。でも、正直わたくしはまだ期に至っていないと思いますわ」

「そうなのか?」

「ええ。騒動のあれこれで自分の未熟を痛感させられることばかり。」

お恥ずかしい話です」

「それを言うなら俺だってそうさ。自分の未熟ばかりが目につく」

「そうはおっしゃっても、一夏さん。一夏さんは十分凄いなと思いませんわ」

「そうか？」

セシリアの言葉に一夏が意外だと言いたそうな顔をする。そんな一夏に対してセシリアは真剣な表情で頷き、語る。

「ええ。代表候補という立場から見ても一夏さんの実力の伸びの早さは凄まじいものですわ。こと近接戦闘ならば代表候補生相手にも引けを取らない。とてもISに関わって数カ月とは思えませんわ」

「そうなのか・・・あまり実感湧かないな」

セシリアの言葉に一夏はどこか無然とした表情をする。それを見たセシリアは、ふと気になっていたことを一夏に尋ねることにした。

「一夏さん。一夏さんの目標とは、一体なんですか？」

「え？」

「IS操縦者は皆、何かしらの目標を持っています。わたくしでしたら、いずれは英国の名を背負って世界の舞台で戦い、頂点に立つこと。一夏さんにはそういった目標がありますか？」

その言葉に一夏は顎に手を当てて考え込む。

「目標、目標な……。あるにはあるが、言ってもいいのか？」

「構いませんわ。むしろ聞きたいくらいですよ」

それなら、と前置きして一夏は一度居住まいを直すとセシリアの顔を真正面から見つめなおす。そこにある真剣身を帯びた一夏の表情に、セシリアは自分の顔が僅かに熱が集まるのを感じた。そして、一夏が口を開く。

「千冬姉をこの手で倒す」

そう、断言した。その言葉にセシリアは思わず息を呑む。それは紛れもない、ISの頂点への挑戦の宣言だった。そして言い放った一夏は一度頭を横に振る。そして再び開かれた口から出た言葉はセシリアにとってさらに衝撃的な内容だった。

「いや、ぶつちゃけモンド・グロツソ優勝とかはどうでもいい。そんなんでも、千冬姉に並ぶだけだ。俺が至りたいのはその先だよ。誰にも到達を許さない絶対の領域。挑むことすら馬鹿らしく思える頂点、究極。ああそうさ、セシリア。俺はな、千冬姉に勝ちたいっていうのもあるけど、それ以上に戦いの極みってやつに興味があるんだよ」

語る一夏の言葉にはいつのまにか熱が籠っていた。それと同時に顔つきも変わっていた。僅かに開いた口から覗く犬歯と、瞳の奥に見える狂気とも闘争心ともつかない光が一夏の顔を獣が浮かべるような笑みにしていた。

「一夏さん……」

それを見たセシリアは言葉を失った。一夏が発した言葉。尋常の者ならば夢物語の大言壮語とし取らず、一笑するだろう。だが、セシリアは笑おうとは思わなかった。なぜか、一夏が言うところには聞こえなかった。

(本当に、一夏さんはお強いですわ)

ISの腕などということではない。その心がだ。その強烈なまでの在り様にセシリアは知らず、自分も心が高ぶるのを感じた。

(ならば、わたくしもより一層励まねばなりませんわね)

ふと、セシリアは夢想した。いつか来る未来。世界の注目を一身に浴びながらISの頂点を賭けて戦う自分と一夏の姿を。とても胸の躍る光景だった。

「一夏さん。上り詰めましょう、高みへ。そして、上り詰めた時こそが、わたくし達の決着を付ける時ですわ」

一夏の言葉に負けないぐらいに、セシリアも力を込めて言う。その言葉に一夏の顔に浮かぶ笑みが凄惨さを増す。

「望むところだ、と言おうか。セシリア、お前は本当に最高だよ。そうでなくっちゃ面白くない」

そう言って、一夏は立ち上がる。

「さて、互いに改めて決意表明をしたところで、今夜はお開きにしようか。そろそろ時間も遅い」

その言葉にセシリアも時間に気付く。消灯時間まではまだだいぶあるが、室外に出ているには少々遅い。

「そうですね。では一夏さん、また明日」

「ああ、おやすみ」

そして二人は別々の方向へ、自分達の部屋へ向けて歩き出す。二人の顔にはそれぞれ、颯爽とした笑みがあつた。

部屋へ戻る最中、セシリアは一夏との会話を思い出していた。意図して思い出していたわけではない。自然と、脳裏に会話が浮かびあがっていた。

そして、一夏が自分に向けた真剣な表情を思い出した瞬間、セシリアは思わず足が止まった。顔に再び熱が上るのを感じる。なぜか、あの時の一夏の顔が頭から離れなかった。

（な、なんなんですよ、これは？）

ブンブンと頭を振って意識を切り替える。なんとか振り払うことができたが、その心臓はやたらと強く鼓動を刻んでいた。

（おかしい気分ですわ。どうして一夏さんのことでこんなに・・・）

再び歩きながらセシリアは思案する。だが、その表情は考えとは裏腹に穏やかなものだった。

（でも、悪い気分ではありませんわ）

胸に暖かくなる思いを抱きながらセシリアは部屋へと戻る。その足取りは軽いものであった。

そして部屋に戻ったセシリアは同室の癒子、ナギ、本音に部屋に戻るのが遅れた理由を問い詰められ、揉みくちやにされることになるのだが、そんな未来をセシリアは知る由も無かった。

ドンッ！

廊下の一角にある柱に握られた拳がたたき付けられる。拳の主はそのまま柱へともたれ掛かる。

「ハアツ…ハアツ…」

柱にもたれ掛かるのは一夏である。だが、吐き出される息は荒く、その表情は何かを堪えるかのように歯が食いしばられている。

「クソツタレエ…なんだよ…」

柱にもたれ掛かりながら一夏は腹を抑える。そうでもしなければ一夏は自分を抑え切れる自信が無かった。腹の奥が煮え繰り返るかのような強烈な衝動。

それは無性に暴れ尽くしたくなるような凶悪な感情。

部屋に戻る道すがら、一夏もまたセシリアと雌雄を決する未来を幻視した。直後に沸き上がった衝動。それを押さえ込もうと一夏は自

制心を総動員していた。

「ハハ…まさかこんなことになるなんてなあ…」

少しずつ引いてきた感情の波に一夏は柱から離れ、再び部屋へ向けて歩き出す。

「全く、時々来るけど、なんなんだろうね。このムカツキは」

呟く一夏は気付いてはいなかった。否、気付くことを無意識の内に辞めていた。

一夏の中に沸き上がる衝動、それが一夏の本能と呼べる殺意であることに。実の姉すらも斬りたがる程の強烈な殺意。

それは誰も知らない一夏の内面。一夏自身すら知らない一夏の一つの本質。

それが何をもたらすのか。それは誰にも分からない。

第三十四話（後書き）

今回は後半部分でセシリアにスポットを当てました。
ぶっちゃけると、好感度アップのためのイベントだったり。

千冬とヒロインズの会話はほとんど現在のままなので省かせて頂きました。

さて、最後の方で発露したICHIKA。これが後々どうなるか。
作者も予想がつかない状況ですが、お楽しみ下さい。

白式がセカンドシフトしたら、むしろICHIKAになることが多いかも。亡国さんも出てくるし…

ニコニコの「ギガンティックただいマンボウ」に心奪われましたww
出来が秀逸すぎる！

第三十五話（前書き）

紅椿登場の回です。

基本的に原作準拠にしてあるため、原作と被る点は多々あると思いますが、ご了承ください。いまさらかもしれませんが…

第三十五話

side 一夏

セシリアとの会話の後、なんとか気分を落ち着けた俺はそのまま部屋へと戻った。

既にみんな各々の部屋へ戻ったらしく、部屋には千冬姉のみが居た。時間も時間ということで俺達姉弟はそのまま就寝。そして朝を迎えた。

さて、臨海学校二日目。学園の臨海学校は今日からが本番と言える。

「非限定空間におけるISの稼働試験と各種装備の運用」という本来の目的を行動に移す日が来たというわけだ。まあもともと、そんなことを言っても未だ経験の浅い一年生からはデータ取りもへったくれもないので、どちらかというと一年に様々な装備を体験させるのがメインになるわけだが。

無論、専用機持ちはそれぞれお国からどっかりと送られた追加装備の運用試験を行う。まあ、専用機持ちつつつても俺にはほとんど縁は無いがな。

何せ追加装備なんぞとはほとんど無縁な俺の白式だ。拡張領域無し。射撃用のFCSも無し。ブレードの蒼炎一本で戦うからな。

ところで、FCSって射撃に本当に重要なんだな。シャルが転校し

てきた当初、シャルと一緒に訓練をした時にシャルの射撃兵装を使わせてもらったが、中々に大変だった。ISからの補助無しで完全にマニュアル操作の射撃だったわけだが、まあ実にやりづらかった。

話を戻すか。まあ、拡張領域が無くてモ機能強化、例えば白式の機動性を上げるためのブースターとかだったら有りらしいのだが、今のところそうだった話は聞いていない。

まあ、白式は表向きは日本の企業製だけど、実質東さんが作ったみたいだし。多分、ほっといてもあの人色々するだろうよ。

白式の表向きの開発元の倉持技研さんも頑張ってくれてるらしいけど、まあアレコレ言うのは止めよう。こちらら白式本体を始めとして、受け取る側なんだ。ちったあ気長に待とう。

さて、そんなわけで俺は他の専用機持ちに比べたら幾分楽なわけだ。セシリアや鈴とかは装備をくっつけて動かして、データを纏めると色々大変なわけだが、俺は文字通り非限定空間での機動試験をすればいい。つまりは広い空間で好き勝手に飛べということ。セシリア達には悪いが、少々楽をさせてもらうぞ。

「ではこれより、ISの稼動試験に入る。が、その前にだ。遅刻者、ISのコアネットワークについて説明してみる」

ISスーツに着替えズラリと整列した俺達の前に立つ千冬姉がそう言う。実に信じがたい話だが、ラウラが五分の遅刻をしたのだ。あのラウラがである。いや、驚いた。

さて、そのラウラはというと、千冬姉に指示された通りISのコアネットワークについての説明をする。

ブラックボックスの塊であるコアについて未だ分からないことが多

い現状だが、コア間でネットワークが築かれて情報のやり取りが行われているというらしい。IS間での遠距離通信なんかはその代表だな。元々は宇宙での使用が想定されてた代物だからな、ISはこのくらい機能は必須だろう。とは言え、ほとんどそれくらいしか分かっていないらしく、未だコアについては分からないことだらけだ。

ラウラの説明に千冬姉は感心するでもなく、ただ頷く。まあラウラは本格的な訓練を受けたプロなわけだし、このくらいは当然と思われているのだろうよ。

見ればラウラも千冬姉の反応に安心したのか、どこかホッとしたような表情をしている。さしものラウラも千冬姉の折檻を回避するというのは安心ものらしいな。

「よろしい。ではこれより班に分かれ、各班に振り分けられたISに順に搭乗。装備試験を行え。専用機持ちは別で各装備の機能テスト。迅速に行動しろ。解散！」

「……………はい！」「……………」

そして生徒が一齐に散らばっていく。そして予め決められた班に別れ、学園の訓練機である打鉄とラファールに乗って装備をあれこれ試していく。さて、俺は専用機グループに加わるとしようか。

会場になっているこの海岸、周囲は崖によってドームのように覆われており、入るにはヘリか水中トンネルしか方法は無い。正攻法のルートである水中トンネル周辺には頑丈な警備が敷かれているため、セキュリティは万全。そんな空間で俺達はISを動かす。

専用機持ちは各々装備を試すわけだが、俺はデータ取りのためにと

りあえず飛べとのこと。それくらいしかやることは無いらしい。とは言え、ただ飛ぶのではなく、どのくらいの速度が出せるのか、どのくらいの角度での方向転換が可能なのかなど、機動性の限界を調べるのだ。

限界への挑戦。うん、中々に良い響きだ。なんか始まる前に千冬姉に無茶はするなと言われたが、どうしたのやら。

「篠ノ之、お前はこちらだ」

移動しようとした俺のすぐ近くで千冬姉が箒を呼ぶ。他の生徒と一緒に学園の訓練機の準備をしていた箒は千冬姉の指示に従い、千冬姉の前に来る。はて、どうしたのやら。そして目の前に来た箒に千冬姉が言う。

「今日からお前には専用」

「ちーちゃ~~~~ん!!!」

突如響く大声。ってえ!!!この声はあ!?

そして俺は見た。見たぞ。声が聞こえた瞬間、千冬姉の顔がチツと言いたげな苛立たしげなものに変わったのを!!!

そして海岸の奥の方から何かが猛スピードでやってきた。すげえや、土煙上がってる。というか走って土煙とかこの漫画だよと。

そしてやってきた人物。ああ、言うまでもねえわな。やたらフリルの多い服に頭に引っ付けたうさぎの耳。東さんだよ。

「やあやあ!お久しぶりちーちゃん!さあハグハグしよう!愛を確かめ合　　ひぶっ!!!」

そんな言葉と共に東さんは千冬姉に飛び付こうとするが、そんな東さんの頭をわしづかみにして千冬姉は抑える。千冬姉もたいがいだよな。大の大人をアイアンクローで浮かばせるとか。

「……………東……………」

なんか疲れが滲み出てるような言葉と共に千冬姉が東さんの名前を呟く。だが、言葉とは裏腹に東さんの頭を掴む千冬姉の手には力がさらに込められているように見える。

「うるさい、少し黙れ」

「ぬー！ちーちゃんの愛が痛いんだぜー！ってちーちゃん！ちよ、ギブギブー！」

「たわけ。何が愛だ何が」

なんかこっちにもミシミシいつてんのが聞こえてんだけど、大丈夫か？まあ東さんだし、平気か。案の定東さんは千冬姉のアイアンクローから自力で脱出。そのまま砂浜に立つと、今度は箒の方を向いた。

「やあ箒ちゃん！おっひさ〜！」

「……………どうも」

相変わらずのハイテンションな東さんに対して箒の声は暗い。というか表情が暗い。それも単純にうざったいと思ってるのかそういうもんじゃない。苛立ち、憎しみ、親しみ、呆れ、様々な感情が入り

混じった複雑な表情をしている。

まあ、分からなくもないんだよな。思い返してみれば篤は昔から束さんが苦手だった。そこへISだからな。束さんの身内ってことで確か要人保護プログラムとかだったか？それで転居の繰り返し。最近知ったが、取り調べも何度も行われ篤としてはかなり参ってたらしい。

そんな諸々の原因である束さんに篤は良くない感情があるらしい。だが、あのツラを見てると身内としての感情もあるらしいな。親愛と嫌悪、か。あいつも難儀だよな。

「うーん、本当に久しぶりだねえ。こうやって会うの何年ぶりだろ？大きくなったねえ。特にそのお婆ーいが」

ガンツ

あ、束さんが篤に殴られた。鞘込めの刀で。・・・どっから出した？後、束さんの今の言葉には同意せざるを得ないな。うん、実は俺も入学当初、六年ぶりに再開した時にそのことは思ったさ。いや、本当に立派に育って。

「殴りますよ？」

「殴ってから言ってるよお・・・うう、妹の愛が痛い」

何この漫才？それと束さん。今のは愛でもなんでもないと思いますが。と、そこでおずおずと言った感じで山田先生が束さんに声をかけた。

「え、えっと、この合宿は関係者以外は立ち入り禁止で」

「ん？ISの関係者ならこの私が一番のはずだけど？」

「え、その、えっと……」

そのまま先生は黙りこんでしまふ。いや確かに束さんはISの超関係者だろうけど、この場合の関係者ってのは学園の関係者という意味なんだよな。

まあ、言ったところで無駄だろうよ。束さんがそんなこと気にする玉かっつての。俺だって昔に多少の付き合いはあつたからな。そんならいは分かっつてる。そもそも規則なんて言葉、束さんには欠片も意味を為さない。

ただ先生、もうちょっと強く出てもバチは当たらないと思いますよ？

「はあ、おい束。自己紹介だけでもしとけ。生徒達が困ってる」

突然のハプニングが起きたこちらに視線を向けて動きを止めている生徒達を見ながら千冬姉が束さんに言う。

「メンドイなー。私が天才の束さんだよ、はるー、終わり」

それだけ言っつて束さんは生徒から視線を外す。まさに眼中にあらずつて感じだな。いや、実際眼中に無いんだらうよ。後、俺個人としては『天才』というより『天災』の方がしっくり来るな。

そして生徒のみんなはというと、目の前のフリルを着た女性があのだ篠ノ之束だと知っつてざわつき始める。まあ、無理もない話だわな。目の前にいるのは確実に世界で最も名の知れた人物。世界の常識を畳の如くひっくり返した人物なんだからよ。

「それで、例のモノは？」

変わらず平淡な口調で箒が束さんに問い掛けた。例のモノ？察するに箒が束さんに何かを頼んだらしいが、何だ？箒も少しばかり声に期待の色が入ってるし。

「もつちろん！ちゃんんと用意したよ！てなわけで、カマーン！」

束さんがそんなことを言った直後、轟音と共に何かが海岸に落下、砂浜に突き刺さる。それは金属製のコンテナだった。そして、多分量子変換されたのだろう。コンテナの表面が掻き消えていき、中の物体がその姿を現した。

「なんだと？」

知らず俺は声を漏らしていた。開かれたコンテナの中には、一機の紅いISが鎮座していた。

それを見ながら束さんが、得意げに胸を張って言った。

「これぞ箒ちゃん専用IS！名を『あかしほき紅椿』！！現行のIS全てを上回るスペックを持つ最新鋭機なのだー！」

うん、束さんが居るって分かった時点で何か起きると予想したけどな。案の定だったよ。

それなりに培ってきた俺の勘がなんか感じてるのは、気のせいじゃないんだろうよ。

絶対穏やかに終わらない気がする、この臨海学校。

うゝむ、わざわざ海くんだけまで来て厄介事は御免被りたい。まあ、ちよつと一暴れとかならアリだけどさ？

いやその前にだ。今は目の前の箒専用ISとやらだ。

現行最強スペックねえ。いや、興味はあるけどさ、なんか色々めんどくさいことになる気がするぞ。

side out

目の前に現れたIS「紅椿」を筈は静かに見つめる。

その表情は先程までの感情が入り混じった複雑なものではなく、純粹にこれから自らの力となるISに引き込まれるかのようなものに変わっている。その目には明確な輝きがあった。

そんな筈の姿を満足げに見ながら束は口を開いた。

「うんうん。それじゃあ早速調整を始めちゃおうか！私がサポートしちゃうからね！すぐに終わるよ！」

「……………お願いします」

「ぶー。固いなあ、筈ちゃん。もっとリラックスしようよー」

「あいにくこれが普通なので」

そんな会話をしながらも二人は調整の準備をする。束が手にしたりモコンの操作で紅椿の装甲が開き、搭乗者を受け入れる状態になる。そして紅椿に乗り込んだ筈の体を装甲が固定する。

「んじゃあ、パッとやっちゃおうよー！」

その言葉と共に束の目の前に空間投影型のディスプレイとコンソール

ルが展開。そして束は現れたコンソールに猛スピードでデータを打ち込んでいく。それと同時にモニターには大量の文字が一瞬で現れては消えていく。

「篝ちゃんのデータは先に入れたからねー。後は最新のに変えるだけなんだよー」

そう言いながらも束の手が止まる様子は見えない。

(なんつー速さだ…)

目の前で光景に一夏は自分が唾然としているのを感じた。

そして一夏は、いつの間にか自分の近くに寄っている他の専用機メンバーも同様の表情をしているのに気付いた。

否、それ以外の一般生徒らも篝用に調整されていく紅椿を見ながら立ち尽くしている。だが、その表情は専用機持ちとは違い、少なからず不満げな色があった。

「篠ノ之さんだけ専用機を貰えるの？代表候補とかじゃないのに？」

「なんかズルイよね」

そう呟いたのは誰か。そんな声上がる。そして、その言葉への返答は意外な所から飛んできた。

「ん？歴史の勉強をしてないのかな？有史以来、人類が平等だったことなんて一度も無いよ？」

そう答えたのは他ならぬ束本人だった。そしてその言葉を聞いた生

徒の幾人かが気まずそうな表情をする。

(人類は平等じゃない、か。確かにそうだ)

束の言葉を聞いた一夏はその内容を思考の内で反芻する。

過去の歴史を振り返れば、人類は常に優位に立つ者とそうでない者に分かれてきた。

(そもそも、今の世の中なんかまさにそうじゃねえか)

一夏はIS登場以来の女尊男卑風潮を思い出す。学園という閉鎖された空間に居るが故に時々忘れかけるが、世間では圧倒的に女性が優位になっている。

そんなことを考えつつ、一夏は隣に妙な気配があるのを感じ取った。そしてその方に目を向けると、そこには目を輝かせて今にも束に話しかけに行きそうなセシリアの姿があった。

ガシッ

「え？一夏さん？」

突然肩を掴まれたセシリアが視線を動かすと、そこにはセシリアの肩に手を置きながら首を横に振る一夏の姿がある。そして一夏はもう片方の空いた手で指をチョイチョイと動かし、紅椿の調整を見ていた鈴、シャルロット、ラウラを自分の近くに寄せさせる。

「あの、一夏さん？どうかなさいましたの？」

「セシリア、さっき束さんに話しかけようとしたら？止めとけ。折角だから教えるところと思ってな」

「え？」

一夏の言葉にセシリアのみならず、呼ばれた三人も頭の上に疑問符を浮かべている。そんな四人の顔を軽く見回してから一夏は言った。

「基本的に東さんは俺と篤、千冬姉以外とはまともに話そうとしない。なんというのか、千冬姉曰く眼中に無いとかつて領域を軽く通り越してるとかって感じらしい。実際、俺が知る限りでもそんな感じだった。まあアレだ。話しかけてもツツケンドンにされるから止めとけてこと。オーケー？」

「そ、そうなんですか？」

「ああ。保障してやるよ」

篠ノ之束。彼女はその途方も無くレベルの高い頭脳と反比例するかのように人間性に難を持っている。一夏、篤、千冬の三人以外は例え実の両親であろうと人と認識はしない。その異常としか呼べない感覚は社会不適合者そのものであるというのは一夏、篤、千冬の共通の認識だった。

そのことを語った一夏の言葉に四人が頷く。一夏が浮かべる真剣そのものの表情から、四人は一夏の言葉が紛れもない真実であると理解した。

「さ〜て！調整終了！さっすが私！驚きの早さだね〜ブイブイ！」

そうした会話をしている内に紅椿の調整が終わったらしく、束が空間モニターを納めている。

「タイプとしては近接主体の万能型だからすぐに馴染むと思うよ。さらに支援装備も付けたからね。お姉ちゃんさっすが!」

「どうも…」

変わらず箒の声は平坦である。だが、それは束に対する苦手意識からだけではなく、遂に自身のモノになった紅椿への思いがあった。

「じゃあ早速試運転といこうか! 試しに飛んでみてよ。箒ちゃんの思い通りに動くはずだよ!」

「分かりました」

そして紅椿に接続されているケーブルが外される。そして箒は心を落ち着けるように一度を目を閉じる。そして目を開き、飛翔をイメージした。

瞬間、紅椿が猛スピードで空を駆けた。

一瞬にして最高速に達した紅椿は広大な空を縦横無尽、自由自在に駆ける。その機動の凄まじさに見つめる四人は息を呑んだ。

「うんうん、機動性はバツチリだね。じゃあ次は刀のテストをしようか! 右の刀が『あまじき雨月』、左のが『からわれ空裂』だよ」

そして束が二振りの刀についての説明をする。

雨月と空裂。どちらかも近接戦闘を主眼に置いた日本刀型ブレードであるが、同時に遠距離攻撃も可能としている。

雨月は刺突の動きに合わせ、レーザー攻撃を放ち、空裂は刀身を降

ることで帯状のエネルギー刃を放つ。

そして束は量子変換されていたのだろう、ミサイルポッドを召喚。多数のミサイルを同時に放つ。だが、それに臆すること無く箒は雨月と空裂を振るい、全てのミサイルを迎撃する。

その一連の流れは、紅椿の性能の高さを示すには十分なものだった。

「な、なんてスピードに攻撃よ…」

「信じられませんか。かなりの性能ですわよ」

鈴とセシリアがそれぞれ驚きに彩られた眩きを漏らす。

シャルロットは呆けたような表情を浮かべている。ラウラは紅椿を見定めるかのように静かな眼差しを紅椿に向けているが、やはり多少なりとも驚くような顔をしていた。

彼女らのみならず、各々の作業を続けながらも紅椿に目を向けていた生徒らも同様である。

だが、誰もが驚きの表情をする中、別の表情を浮かべる者も居た。

一人は千冬。何を思うのか、彼女の視線はひたすらに厳しいものだった。その視線を紅椿と束に交互に向ける。

もう一人は一夏。彼の顔に浮かぶ表情はただ一つ。笑顔である。だが、その笑みを見て良い気分になる人間は極小数しか居ないだろう。

一夏が浮かべる笑みはひたすらに歪んでいた。目にはギラつくような光が宿り、口元は獰猛に歪められている。その笑みは見る者が見れば、まるで獲物を見つけ、それを狩ることに喜びを見出だす獣のようだと形容したに違いないものだった。

そして、一夏は気づかなかった。千冬が紅椿と束に向けていた厳しい視線を一夏にも向けたのを。そして一夏の表情を見た瞬間、千冬の視線から厳しさが薄れ、その表情にわずかながらの憂いを帯びた陰が射したのを。

だがそれも一瞬、すぐさま視線を戻した千冬は再び厳しい眼差しで紅椿を見た。

「いける。この紅椿なら！」

地上に立つ面々の多様な思いに気付くことなく、空を駆ける筈は紅椿の性能に歓喜の声を上げていた。

第三十五話（後書き）

次回、白式改造第二弾を行いたいと思います。テーマはスピードです。それから福音戦前半でしょうか。

戦闘描写が入るので、もしかしたら更新に時間がかかるかもです。

そして、非常に手前勝手な話ですが…

感想、欲しいです…

いや、正直ここ二回の更新で感想ゼロというのが少々堪えまして。お暇があれば感想を頂きたいというのが作者の本音でして、はい。どうかお願いします。

第三十六話（後書きに装備解説）（前書き）

前回の更新の後、感想が一気に来ました。

皆さん、本当にありがとうございます。作者は本気で喜びました。今後もどうか本作をよろしく願います。

さて、福音戦前半。一夏撃墜までです。

第三十六話（後書きに装備解説）

side 一夏

突如として出現した専用IS《紅椿》

俺達専用機組みのみならず、その場に居た誰もが、その性能に目を奪われ各々異なる思いを抱いていた。

そして千冬姉にせっつかれた俺達は各自専用機の稼働試験を行うために海岸を移動していた。

各員、試験を行うエリアは別々になっているが途中までは一緒なので、箒を除く五人で砂浜を歩いている。ちなみにその箒は現在、一通りの試運転を終えて千冬姉と話している。大方、専用機に関する留意事項とかそんな話だろうよ。

「いやしかし、紅椿もそうだがな。俺はフィッティングの早さに驚いた。俺なんか三十分近く掛かったのに、その十分の一とか」

歩きながら俺が言うと、答えたのはセシリアだった。思えば白式の一次移行を見たのはこの中じゃセシリアだけだ。

「そういえばそうでしたわね。でもそれは仕方ないことだと思えますわ。一夏さんの場合、状況がわたくし達とは異なりますもの」

「そうなのか？」

俺が聞くとセシリアは頷いてから続ける。

「確か一夏さんは試合の直前に白式を受領したのでしょう？データを入力する時間が無い以上、一次移行のための操縦者のデータ入力はIS側が一貫して行ったはずです。だから時間がかかったのですわ」

さらにセシリアが続けて言うには、あくまでもセシリアの場合であるらしいが、専用機を受領が決まった時点で専用機には調整が施されるらしい。故に搭乗者本人がISを受領した時には、既にあらかたのデータは入力済みらしい。後は先程の筈みたく、データを最新のものに更新するだけだ。

気になって他の三人、鈴にシャル、ラウラに聞いてみると、三人も大体そんな感じだったらしい。

「尤も、実際はその後にも細かい微調整などがありましたから、もつと時間はかかりましたわ。ですが、単純な一次移行という点ではあまり時間がかかりませんでしたね」

とのこと。そしてそれを鑑みてもやはり束さんのやったことは異常らしい。

データ入力にしてもセシリア達の場合は複数人が協力して入力をし、尚且つ束さんより時間がかかるらしい。

それを一人でやってのけるのだから、やっぱり束さんはぶっ飛んでる。いまさらだけどな。

「ねえ一夏。一夏と篠ノ之博士って、どういう関係なの？」

そうシャルが聞いてくる。

…おかしいな。シャルが浮かべてる笑顔から妙にプレッシャーを感じるのは何故だ？いや、気のせいだな気のせい。うん。

で、なに？俺と束さんの関係？

「そうだな。頭のネジが飛んだ発明家とその被害者。ちなみに千冬姉と篤は束さんへの制裁役」

そう答えると四人の顔が「は？」と言いたげなものに変わる。

「悪いがあまり思い出したくないこともある。とにかく束さんに振り回された。それだけだ」

きつと今の俺の顔は苦いものになってるだろう。ああ、昔は本当に大変だった。まだISが発表される前、束さんがただの変わり者の女の子だったあの頃。

当時、未だ小学校に上がっているかどうかの俺だが、束さんから受けた被害の数々は忘れない。

なんだよ、全自動着替え装置とか。確かに着替えはできたけどさ、なんでそれで俺に女物の服を着せる！？

なんだよ、剣道練習マシンとか！？あれただのフルボッコマシンじゃねえか！千冬姉が止めなきゃ死んでたぞ！？

あの時の千冬姉は凄かったな。あらゆる方向から打ち込まれる竹刀を全部捌いて、一撃でマシンを沈黙させやがった。

ああ、考えてみりゃそうだ。あの二人はベクトルこそ違うが、あの頃からぶっ飛んでたなあ。そうだよな。アレに比べたら俺なんて実に普通じゃないか。そうだそうだ。俺なんてちよっと暴れたい衝動があるだけじゃん。まだマシだ。

「八八八八八八八…」

気が付けばそんな笑いが口から漏れていた。一緒に歩く四人が何か気遣わしげな目で俺を見ていたみたいだが、俺はそんなことには全く気がつかなかったのだ。

さて、途中で俺達は別れて各々の試験を行う領域に向かう運びとなった。

そして自分の持ち場に着いたわけなのだが…

「…誰も居ないだど？」

そう。何故か誰も居ないのだ。おかしい。いくら追加装備が無いからとは言え、データ取りをする以上、監督の教師が一人くらいは居てもいいはずなんだが。

さて、どうした…も…の…か…

「……………」

そして俺は見た。俺が動くエリアにある一つの岩。そのてっぺんからひょっこりと覗くうさぎの耳を。

「東さん、出てきて下さい。つか出てこいコラ」

「あり？バレちった？というかいつくんちよっち言い方怖くないかな？？」

「気のせいですよ気のせい」

岩陰から東さんが出て来る。ああ、笑いながら舌をチロツと出しやがって、この人は。照れてるつもりか？悪いがその顔には騙されねえぞ。

「で、何の用ですか？手短に頼みますよ」

「んもう。いつくんつたらツレないな。うう、東さん寂しいよ」

ヨヨヨと言いたげに体をくねらせる東さん。率直に言おう、鬱陶しい。とりあえずアレだ。早々に用件を終わらせよう。この人のペー
スに合わせるとうるくな目に合わない。

「で、用件は？さつさと本題を頼みます」

「お、そうだった。実はねえ、いつくんにもプレゼントがあるんだよ」

なに？俺にだと？

「あの、まさか妙な物じゃないですよね？」

思い出されるのは幼少期の思い出の数々。思わず嫌な想像をしてしまっても無理は無いだろうよ。

「え？？私がいつくんに妙な物なんてあげるわけないじゃん。フフン、きつといつくん驚くよ。というわけで、オープン！」

妙な物をくれたことが無いだと？どの口でのたまいやがる。

そんな束さんの言葉と共に、海岸に一つのコンテナが出現する。大きさは紅椿が入ったのと同じくらい。光学迷彩でもかけてたみたいだな。そして先程同様にコンテナが量子変換されて、その中身が姿を現す。

そこには白い翼があった。

「これぞ束さん特製、白式専用高機動パッケージ『白嵐』ちやくらん！！紅椿と並行して作った束さんのイチ押しなのだ！！」

その言葉に俺はただ静かに現れた翼、白嵐を見る。成る程、確かに追加装備だな。パーツの数が少ない。機動性向上のための追加のウイングスラスターに、あれは腰周りに付ける装甲か？その装甲にもスラスターみたいなのが付いている。

ウイングスラスターの方は、そうだな。紅椿に付いてるスラスターに似ている。白式に元々付いているスラスターはどちらかと言えばブースターみたいなもんだが、これは本当に翼みたいだ。

そして腰の部分に付けるだろうスラスターは、なんだろうな。片端が丸みを帯びていて、もう片端は尖ってる。そして尖ってる部分が前面に来ている。

「へへん！どうかないつくん！驚いた〜？」

まあ驚きましたよ。色々な意味で。

「エヘツ、ちーちゃんには内緒だよ？」

いやそんな束さん。「お母さんには内緒だよ」って言って小遣いく

れる親戚みたいなノリで言われてもね。というかさ。

「東さん、後ろ後ろ」

「ほえ？」

俺の言葉に後ろを向いた瞬間、東さんは明らかに固まったよ。だつてさ

「ほう、中々愉快なことをしているじゃないか、東」

^{千冬姉}キング般若が降臨なされてました。まあね、端から分かってたよ。

千冬姉に内緒とか無理だつて。というか千冬姉に云々以前に装備を内緒にするとか問題だろう。

さて。その千冬姉だが、俺はてっきりまた東さんにアイアンクロウをかますのかと思ったけど、違った。なんか軽いため息を吐いただけで、東さんには何もしなかった。

「全く、一々相手をするのが馬鹿らしく思えてくる。おい東。どうせ白式にその装備（白嵐）を付けるのだろう？ならさっさとしろ。ついでに私が監督でデータ取りをする」

「オツケ〜。さあいつくん。白式を展開しちゃって。パーツで終わらせるからね〜」

そんな感じで白式への追加装備の取り付けが唐突に始まった。まあ、千冬姉が何も言わん以上、問題は無いのだろう。本音を言つと俺も新装備が少し気になっている。だから早く動かしてみたいのだ。

そして白式を展開すると、東さんは白式にコードを幾つか繋ぎ、白嵐を近付ける。

「さ〜て、始めるよ〜。さて、まずは白式のコンディションチェックね〜。取り付けはその後〜。どれどれ、およ？中々面白いフラグメントマップだねえ。やっぱりいっくんが男の子だからかな？」

そう言いながら東さんは空間モニターに表示された白式のデータをチェックしていく。見た感じ、膨大な量のデータが表示されてるはずだが、それを東さんは全て把握しているのだろう。やっぱりこの人の頭脳だけは別格だな。

「東さん。一ついいですかね？」

「ん〜？なに〜？」

俺は時折思っていた疑問をぶつけることにした。

「なんで男の俺がISを動かせるんでしょうね。それがどうしても分からないんですよ」

そう。疑問とは実にシンプル。何故男の俺がISを使えるのか？別に他意は無い。ただ純粹にそれが気になっただけだ。或いは、開発者の東さんなら分かるかもしれない。

「ん〜、実は東さんにもよく分かんないんだよね〜。ナノ単位で分解すれば分かるかもしれないけど、する？」

「断固辞退します」

……正直意外だと言うのが本音だ。まさか東さんにも分からないことがあるとは。

「まあいっくんがISを動かさせたのは東さんにも予想外だったのだよ。でもでも、動かせるなら動かせるで東さんはいっくんを最大限サポートするからね！」

「はあ、どうも……」

この時、俺は僅かばかりの落胆を感じていた。俺という事例が生まれたのだ。男にもISを動かせる可能性があるのかもしれない。そして東さんならその可能性を現実にできるかもしれないと。

正直、一人の男として今の世の中には思う所がある。いや、IS操縦者を優遇するのは一向に構わない。むしろ当然だと言える。だが、俺が何より気に食わないのは、それ以外の資格を持たない奴（非IS操縦者）までもがデカイ顔をしているということだ。

無論、全てが全てというわけではない。けど、この間の買い物の時みたいなこともある。あればかりはとにかく気に入らない。もはやあれは理不尽という他ないレベルだろう。ふと、師匠の言葉を思い出す。

『理不尽には理不尽が跳ね返る』

あれで国立大学を出ているというインテリでもある師匠の言葉。確かに自分の力を律するための言葉の一つだったか。俺は人生の先達の教えとして割と真面目に受け止めたが、フム。

ならばいっそ、俺がその理不尽を叩きつぶす理不尽にでもなっぺるろうか。

だが、その末路は何か。分かりきっている。それ以上の理不尽に潰されるだけだろう。

上等だ。抗いようのない絶対的力に挑んで果てるもまた一興。

ああそうか。理解した。気に入らない云々は結局建前だ。つまりとこ俺が本当にやりたいのは

「織斑、作業に集中しろ」

「あ、はい」

イカンイカン、また妙なことを考えていた。なんか学園に入学してからこういうの多いな。まずい、もしやこれが噂に聞く中二病とやらか？

弾曰く「見ていてかなり痛々しい」とのことだが、さすがにそれは嫌だな。

「さ、て、と。チェック終了。んじゃあ次は白嵐の取り付けを」

ピリリリリリリリリ！

突然鳴り響く甲高い音。それは携帯端末の着信音だった。こいつは…

「私だ。どうした」

ああ、やっぱり千冬姉か。どうしたのかね？

ん？なんか千冬姉の顔色が変わってくぞ。こりゃ何かあったと見るべきか。

そして端末での電話を終えた千冬姉は険しさを増した表情で俺達の方を向くと、表情同様に厳しい声音で言った。

「織斑、稼働試験は中止だ。ついて来い」

中止だと？何事かを尋ねようとしたが、それより先に束さんが口を開いた。

「えー！？これからのにーっ！ちーちゃんイケずー！！」

「うるさい黙れ束。織斑、さっさと来い」

束さんの言葉を千冬姉はバツサリと切り捨てる。千冬姉の言葉に束さんはやたら大仰なりアクションで砂浜に崩れ落ちるが、千冬姉はまるで気にしていない。

ふむ、束さんの相手を一々する暇が無いと言わんばかりのこの態度。こりゃマジかな。

仕方ない。これは従う以外はなさそうだ。

「分かりました」

そい簡潔に答えて俺は白式を解除すると、千冬姉の後に続いて元来た道に戻った。

束さん？放置でいいだろ。あの人なら放っておいても心配は無い。

最初に集合した位置に戻った俺は、装備試験をしていた生徒が揃って集まっているのを見た。予想してた、というか当たり前のことだが、セシリア達専用機組も揃っている。

先程までとの違いと言えば、専用機組の中に筭が混じってるくらいだが、まあどうでもいい。

「あ、一夏」

最初に俺に気付いたらしいシャルが話し掛けてくる。俺と話す時はいつも明るい顔をしているシャルだが、今は状況が状況だからか、少しばかり表情が固い。

「シャル、何があった」

こういう時は無駄な会話はしない。手短かに状況確認のみをする。まあ基本だな。シャルもその辺りは弁えているらしく、俺に説明をする。

「それが、僕達にも分からないんだ。装備の取り付けをしようとしたら、急に中止と集合で。他のみんなも全然知らないみたいだし……」

不安そうな表情のシャルを見て、俺は千冬姉の方に視線を移した。千冬姉は山田先生と何やら手話で話している。あれは確か軍用の手話か何かだったはずだ。昔、千冬姉が暇潰しにそういうのがあると簡単な例と一緒に教えてくれた。

家じゃIS関係の話を滅多にしない千冬姉が、珍しく教えてくれたことだからな。よく覚えてる。

しかしだ。この状況下でそれって、まずくないか？わざわざ手話で会話をするということは、生徒には聞かれたくない内容だろうし。

そして俺は再び視線を動かし、今度はラウラを見る。現役軍人のラウラなら状況を把握しているはずだ。そして俺と目が合ったラウラはまっすぐに俺の目を見つめ返し、強く頷いた。

見ればラウラの近くにいるセシリアに鈴、さらには目の前のシャルも頷いている。

どうやら俺の予想を理解して、かつビンゴらしいな。間違いなく何かあった。

とは言え、今は俺達には何もできない。黙って先生の指示を待とうか。

「……専用機持ちはどうなっている？」

「一人欠席していますが、後は全員居ます。機体準備も大丈夫だそうです」

千冬姉と山田先生の会話が聞こえる。わざわざ専用機持ちなんて言葉が出るあたり、俺達に関わりがあると見た。

そして、一通り会話を終えた千冬姉が俺達生徒の方を向き、指示を出した。

「これよりIS学園は非常事態行動に移る！装備試験は中断！生徒は各自部屋で待機だ！」

その言葉にあちこちから疑問の声が上がるが、それを千冬姉の一睨みと一喝が抑える。

そして先生の指示に従って生徒達は旅館へと戻っていく。

「専用機持ちは私に着いてこい。話がある」

ほら来た。予想はしてたけどな。やっぱりかという感じだ。

とは言え、どうにも状況は良くないらしい。千冬姉の音がそれを如実に伝えている。

やれやれ、面倒なことになった。

side out

他の生徒とは別に旅館へ戻った一夏ら専用機持ちは現在、学園の制服に着替え、旅館の一室へと集まっていた。

学園の各種機材を持ち込み、中央に大型のデスクモニター、正面に壁掛け型モニター、部屋の両サイドに複数のパソコンを設置された大部屋はさながら発令室の様相を呈していた。

「では、現状の説明をする」

千冬の言葉と共にデスクモニターが発光し、複数のディスプレイが投影される。

そこには多数の文字列と、一機のISとおぼしき映像が映っている。

「2時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第3世代型の軍用IS『シルハリオ・ゴスヘル銀の福音』、以後福音と呼称するが、制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

その言葉に集まった面々の顔が一様に強張る。

軍用IS

その言葉が意味するは則ち、戦争が起きたときに、敵を殲滅するための存在であるということ。

当該ISが持つであろうポテンシャルの高さ、その暴走という異常事態の大きさと、もたらされるだろう被害を予想してか、集まった面々の顔から緊張は消えない。

「50分後、ここから170キロ先の空域を通過することが、衛星の追跡でわかった。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

その言葉で集まった面々、即ち専用機持ちは何故自分達が集められたかを理解する。そして、その後の千冬の言葉が理解を現実にする。

「教員は学園の訓練機を使用して空域および海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう。が、これは任意での参加とする。お前たちは軍人でない、拒否権がある。また、いくら専用機持ちだからといって素人がどこまで通用するかはわからない。命を落とす危険がある、すこしでも迷いがあるならば拒否しろ、迷いがある奴はいない方がいい」

そう言うってから千冬は静かに集まった六人の顔を見回す。そして、一夏に視線を向けた時点で動きを止め、口を開いた。

「織斑、お前はどうか。お前も過去に色々あったが、お前が素人であることに変わりはない。辞退を申し出ても誰も咎めはしない」

それは無意識の内に出た彼女の弟への気遣いだった。千冬自身がそれを自覚しているかは定かではない。だが、彼女の弟は決して、そこまでヤワでは無かった。

「織斑先生、そいつは愚問というやつですよ」

軽く鼻を鳴らしながら言う一夏に千冬は軽く眉を潜める。だが、そんな千冬に構うことなく一夏は続けて言った。

「ここにいる全員、ツラを見れば分かります。こいつらは意志も覚悟もある。伊達に代表候補をしているわけじゃないということだ。それを今更問う必要なか無いでしょうに」

「成る程な。ならばお前はどつだ」

「俺ですか？」

千冬言葉に一夏は一度言葉を切り、そして再び口を開いた。

「織斑先生。いや、今は敢えて千冬姉と言わせて貰う。千冬姉、あまり俺を見くびるな」

静かに、しかし確かな気迫を持ってその言葉は放たれた。

その声の重さに、デスクを挟んで一夏の向かいに座り一夏の横顔を見ていた鈴が、そして千冬の隣に居るが故に一夏を真正面から見ることになった真耶が、その身を強張らせた。

だが、そんな一夏の言葉を受けて千冬が動じることは無かった。そして彼女は再び口を開く。

「ふん。普段ならば青二才が粋がるなと言つところだがな。よろしい。お前達の意志は理解した」

その言葉、実質的に全員の決意を認めた千冬の言葉と共に、作戦会議が始まった。

「ではこれより作戦会議を始める。質問のある者は居るか？」

その言葉に真つ先に反応し挙手をしたのはセシリアだった。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

その言葉は予想していたのか、千冬はすぐさまに答えを返す。

「分かった。ただし、これは二カ国間の最重要軍人機密だ。当然ながらお前達には情報の秘匿義務が発生し、情報が漏洩した場合お前達には査問委員会による裁判と、最低二年の監視が付く。それを理解した上で閲覧しろ」

その言葉と同時にデスクモニターに投影される画面が切り替わり、銀の福音とその各種スペックデータが表示される。

すぐさま幕を除く五人がデータを読みはじめる。だがその直後、データを読んだ一夏の顔が盛大にしかめられた。

「一夏、どうかした？」

一夏の表情に気付いた鈴が尋ねてくる。彼女の表情も固い。否、彼女だけではない。モニターに移されたデータを見る全員の顔が固い。理由は単純明白。提示された福音のスペックの高さ故だ。

尋ねた鈴も、一夏の表情はデータが原因だと考えた。だが、一夏の口から出たのは予想外の言葉だった。

「あゝ、いや、その、なんだ？ 言っているのか？ その、英語分かるん」

その言葉に部屋に居た全員が思わず崩れ落ちた。千冬に至っては鉄拳を食らわせる気力も削がれたのか、呆れたように頭に手を当てている。

「一夏、あんたね……」

思わずジト目で視線を向ける鈴に一夏は苦い表情のまま口を開く。

「仕方ないだろうよ。こちらら知識面は素人に毛が生えた程度なんだから。お前ら代表候補と一緒にすんな」

「まあ、考えてみればそうね」

冷静に見れば当然と言える一夏の言葉に一同は納得する。

「とうかだ、鈴。なんでお前は分かるんだよ。確か中学の時、英語の点数は普通じゃなかったか？ なんで普通に読めるんだよ。コツでもあるのか？ あるなら教えるよ」

疑問でしょうがないといった調子で一夏が鈴に尋ねる。問われた鈴は少し思いつくような素振りをしてから答えた。

「うん、慣れ？」

「オーケー。もう聞かん」

鈴の答えに一夏はぶっきらぼうに返す。心なしか、その横顔はどこか拗ねているように見えた。

「ま、まああれよ。一夏もそのうち慣れるって。あたしがそうなんだし」

「だと良いけどよ」

「でもどうするの？一夏がデータを読めないんじゃない」

そうシャルロットが言う。

そして別の声。声の主はラウラだった。

「ならば打開策だ。私達で福音のデータを読み取る。その中から必要な情報を兄様に伝える。それで問題は無いはずだ」

ラウラの提案は一同を納得させるには十分だった。そして再びデータの読み取りが始まった。

米国・イスラエル共同開発軍用第三世代型IS『銀の福音』

そのスペックの最たる特徴は、新開発にして新採用であるというウイングスラスターに他ならない。

精密かつ高速での機動を可能にするこのスラスターだが、同時にもう一つ、福音の主武装という側面も持っている。

「シルバー・ベル
銀の鐘」

スラスターに付けられた三十六門の発射口から放たれるエネルギー弾。それが放つは強力なエネルギー弾の弾幕であることは明らかである。

スラスターによる高い機動性と銀の鐘による圧倒的制圧能力。まさに軍用の新型ISと呼ぶに相応しい性能である。

「何て言うかさ、作ったやつは馬鹿じゃねえの？着弾と同時に炸裂するエネルギー弾幕とか。絶対に開発者は頭のネジが飛んだ爆発狂いだぞ」

苦々しげに言う一夏に他の専用機持ち五人も同様に苦い顔をする。乱暴極まりない一夏の言葉だが、そう言いたくなるのも分からなくない性能の高さ。厄介な相手であるというのは全員の共通認識だった。

「やっぱり一夏の言う通り、一番の問題はこの三十六門砲だよ。多分ショットガンの連射とかより凄いだろうね。ラファールの火力には自信があるつもりだけど、多分これはそれ以上かも」

「厄介なのは機動性もよ。データ見る限りじゃあたしの甲龍じゃ追いつけないわ」

それぞれシャルロットと鈴の言葉。専用機持ちの代表候補二名をして不安を漏らさせる福音のスペックの高さである。

「だが、データだけでは格闘能力が未知数だ。主武装こそ遠距離型だが、仮にも軍用だ。近接戦闘も可能と見て可笑しくはないだろう。姉様、偵察は行えないのですか？」

ラウラが千冬に尋ねる。尋ねられた千冬は再び頭に手を当てながら答える。

「無理だ。福音は現在も超音速飛行中だ。偵察に向かっても、成果を上げられる機体は無い。というかボーデヴィツヒ、姉様とはなんだ？」

「は。先立ってのトーナメントの後、私なりに考えて出した答えです。私は兄様のように教官に特別に思われたかった。そのためどうすべきか考え、教官の妹になることを決めました」

「私はお前を妹と認めた覚えは無いが」

「構いません。認めさせます」

ハッキリと言い放ったラウラに千冬はもはや呆れたのか、それ以上とやかく言うのを止め、学内では先生と呼ぶように注意すると、それきり何も言わなかった。

「ですが、こうなると手段は限られますわ」

一連の会話から状況を整理したセシリアが口を開く。その言葉に全員が頷く。どうやら共通の考えを持っていらしい。

「目的は速やかな事態の収拾。そして被害を最小限に抑えること」

ラウラが言う。

「必要なのは福音に追いつける機動。そしてなにより」

シャルロットが言う。そして繋げるように鈴が口を開く。

「福音を一撃で沈める攻撃力」

その言葉と共に視線が一夏に集まる。向けられた視線に動じることなく、一夏は冷静そのものの声音で言う。

「ならば必要なのは零落白夜か。まあ順当だよな。異論は無い」

一夏の白式、その切り札たる零落白夜による一撃必殺での事態の鎮静化。それが専用機持ちで出した結論である。

「けど、問題もあるぞ」

そう言ったのはその一夏本人である。

「知つての通り、零落白夜はエネルギーをだいぶ食う。今の蒼炎は雪片に比べたらだいぶマシなエネルギー効率になっているが、それでもだ。俺としては、移動でのエネルギー消費を極力抑えたい」

「ならばわたくしが一夏さんのサポートをします。わたくしのブルイ・ティアーズの強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』なら超高速機動ができますわ。目標空域への移動も短時間で可能です。それを以ってわたくしが一夏さんを送り届けます」

「よし、んじゃ頼むわセシリア」

福音への接近プランは纏まった。だが、本職の軍人であるラウラはプランの不十分を感じたのか、再び意見をする。

「待て。兄様やセシリアを信用していないわけではないが、万が一に二人が抜かれた場合も視野に入れるべきだ。私は二人によるアプローチの後詰めに残る四人の配置を提案する」

「そうだね。あまりあつて欲しくない事態だけど」

「あたしも問題は無いわ。箒、あんたはどう？」

話を振られた箒は少し考えると、やや疑問があるように言った。

「私も後詰め配置には異論は無いが、アプローチの人員は二人だけで足りるのか？私の紅椿ならば二人に追い付けると思うのだが」

その言葉は紅椿の性能に自信があるが故の言葉だった。そして、その言葉にただ一人、生徒の作戦立案を見守っていた千冬が眉を動かしたが、気付く者は居なかった。

そして箒の言葉に答えたのはラウラだった。

「紅椿の性能はこの場の全員が知っている。だからこそだ。作戦の要はあくまで兄様の零落白夜にある。我々後詰めはそのための時間稼ぎが主となると言っても過言ではない。そして確実に福音を抑えるなら紅椿の性能は必要だと判断した」

さすがは本職の軍人であるからか、ラウラの言葉に淀みは一切無く、説得力に溢れていた。

その言葉に納得したのか、箒は頷いて了解の意を示す。その表情は、頼りにされることへの嬉しさか、僅かに明るさがあった。

そして一通りの区切りが付いたのを確認した千冬が再び口を開いた。

「話は纏まったな。確認するぞ。オルコット、音速域での訓練時間はどのくらいだ」

「約20時間ですわ」

「なら問題は無いか」

そして千冬は一度言葉を切り、六人の顔を見回す。六人の顔には一様に固い決意と覚悟が秘められていた。

「では本作戦は織斑とオルコットの両名でのアプローチ、並びに残る四人での後詰めを主軸に」

「その作戦、ちよ〜と待った〜!!」

千冬言葉を遮って突如響いた声。その声が聞こえた瞬間、千冬と一夏の二人は全く同時に舌打ちを漏らした。一夏に至っては、表情が一瞬憤怒の形相に染まったが、一瞬であつたため気付く者は居なかった。

声のした方向は上。全員が部屋の天井を見上げると、そこには天井の板を一枚外し、空いた穴から束がその姿を見せていた。

「山田先生、部外者をつまみだせ」

冷静な声で千冬が真耶に指示を出す。だが、その声は平静こそ保っていたものの、明確な苛立ちが込められていた。

「は、はい。あの、篠ノ之博士、まずは降りてきて下さい」

「とっつ！へぶっ！」

そして束が回転しながら部屋に着地をしようとする。だが、失敗して顔面から床に落ちた。セシリア達が心配そうに見つめるが、千冬と篤は心配の欠片もなさそうな表情で見ている。一夏に至っては視線を向けてすらおらず、片手で頭を押さえていた。

「ちーちゃんちーちゃん！そんなまどろっこしいことする必要はないんだよ！もつと良い作戦が私の頭にナウプリンティング！」

「出ていけ死ね朽ち果てろ」

辛辣を飛び越え、もはや暴言としか言えない言葉を束に向ける千冬。彼女が怒っているのはもはや誰の目にも明らかだった。

「フフン、ここは紅椿が活躍すれば万事オツケーなんだよ！」

その言葉に千冬は僅かに表情を変える。それは疑問。何を根拠に以て束がそのようなことを言うのか。静かに千冬は束に続きを促した。

「紅椿には展開装甲が装備されてるからね。チヨチヨイと調整すればスピードはバッチグー！てなわけで、スペックデータオープン！！」

その言葉と共にモニターに別のウィンドウが現れ、そこには紅椿のデータらしきものが表示されている。

「束さんの解説タイム！展開装甲とは！！スーパー天才の束さんが作った第四世代型IS装備なのだ！」

瞬間、室内に衝撃が走り、全員の表情が凍りついた。

（第四、世代だと？）

一夏は先ほどまでの無然とした表情を驚愕に彩り束に視線を向けている。そして一夏の目が束と合った瞬間、一夏は束の目が得意げな色に変わるのを見た。まるで悪戯に成功したのを見届けた子供のよう。

「第四世代型ISは装備の換装無しで全領域・全面展開運用能力を獲得したISなんだよ。つまり、ややこしいパッケージとかそんなのは不要なのだ！」

「最初は白式の雪片式型に搭載してたんだけどね。今じゃぶつ壊れちゃってるけど。でもでも、集めたデータは役立ったんだよ。割と上手くいったから今度は紅椿の全身のアーマーに展開装甲を採用したんだね！」

誰も何も言わない。束だけが一人だけ高いテンションで喋り続けている。

「待て、束さん。雪片式型につつたな？てことは白式は・・・」

恐る恐ると言った様子で一夏が束に問いかける。一夏の問いに束は満面の笑顔と共に答えた。

「いつくんの予想でザツツライト！白式も紅椿と同じで第四世代ってことだね！まあ、開発途中でほっばり出されたのを束さんが引き取った機体だもん。このくらいは当然だよ！」

その言葉に一夏は表情を変えて言葉を失った。その表情は異質な十二力を見るかのようなものだった。そんな一夏の様子を一切気にせず束は続ける。

「ちなみに、白式の追加装備の白嵐にも展開装甲を使用しています！白嵐は機動性の上昇を重視した装備でね。本来万能型にできる展開装甲を特化型にしてるから、特化能力だけなら万能型を超えるね、うん！そして開発コンセプトは、紅椿はIS本体への展開装甲の使用！白式は装備への展開装甲の使用になっているのだ！」

束の言葉、そのあまりの無茶苦茶ぶりに一夏はデスクに頭を突っ伏す。そしてそれ以外の面々は言葉を失ったままである。特に代表候補生の四人は啞然とした表情をしている。

しかし、これも無理なからぬ話であると言える。この場ではセシリアのイギリス、鈴の中国、ラウラのドイツを代表として各国ではようやく第三世代型装備の開発、試験運用が行われている。シャルロットのフランスのように第三世代型の開発が遅れている国すらある状態だ。

そんな中での第四世代型の登場。それが意味するところは即ち、各国が威信と誇りを賭け、膨大な予算に人員、時間を割いて行われている第三世代装備の開発が無意味であると、よりによってISの開発者から直接言われたようなものなのだから。

「あり？どつたのみんな？シーンと黙っちゃって。お通夜？誰か死んじゃった？」

しかし、やはり誰も何も言わない。

「東、言ったはずだぞ。やり過ぎるなと」

「イヒヒ、ごめんちーちゃん。つつい熱中しちゃってね」

口ではそうは言うものの、東が悪びれる様子はまるで無かった。いや、自分と弟、そして実の妹以外はまともに認識しないこの幼馴染ならこういふものだろうと、千冬は内心で結論付ける。

「いや、でもあれだよ。海で暴走って言うと、『白騎士事件』を思い出すね」

そう東が言った瞬間、千冬の顔色が焦るものになった。

白騎士事件。ISを世に広めた世界規模の重大事件である。

突如として、日本を射程に納めるミサイル保有国の軍事コンピュータが何者かによりハッキング。総数にして1012発ものミサイルが日本に向けて放たれるという悪夢のような出来事が発生。

そして、それを全世界に激震を走らせるのと共に解決したのが、現在確認されているIS一号機『白騎士』。

宙に佇む白騎士は当時試作実験段階にあった荷電粒子砲を虚空より召喚。ミサイルの半数を撃墜すると、続けざまに圧倒的運動能力で以って残るミサイルを全て切り伏せたのだ。

その余りの性能に条約を無視した日本周辺各国はすぐさま軍を派遣しかし、その悉くが白騎士により無力化されたのだ。

この事件によりISはその存在を世界に知らしめ、今日に至る。

「いや、あの時は凄かったね。でも、白騎士って一体誰なんだ

ろうな。東さんの予想ではバスト88センチの

言葉は続かなかった。東が喋っている途中で、千冬がその頭をありつた力の力と共にわしづかみにすることで無理矢理彼女を黙らせたのだ。

(白騎士事件、なあ……)

馬鹿らしいと一夏は思う。

事件当時、未だ十を数えない年齢であった頃の一夏ならともかく、今の一夏は事件の裏をある程度察していた。

(白騎士は千冬姉。ハッキングは東さんの仕業だろうな。軍事コンピュータへのハッキングにミサイルの撃墜。どっちも二人にしかできない)

根拠はそれだけ。根拠と呼ぶには余りにも単純な、しかし二人がそれだけの能力を持っていると知っているが故の推測だった。

今も尚、白騎士とは誰なのかと議論が為されることがあるが、それを一夏は冷めた目で見ている。余りにも馬鹿らしく見えて仕方ないのだ。

とは言え、それは千冬と東。二人の持つ能力を、未だ世界の大半が知らない二人の能力の高みを人並み以上に知るが故にできる考えなのだが、一夏自身はそのことには気付いてはいなかった。

「チツ、余計な時間を取った。話を戻すぞ。オルコット。その高機動パッケージは量子変換^{インスタール}してあるのか？それならば織斑、篠ノ之、オルコットの三人を先遣に出すが」

「いえ、その、まだです…」

千冬の問いにセシリアは気まずそうに答える。それを聞いた千冬は僅かに考えると、わしづかみにしたままである束の頭を離れた。

「束。紅椿の調整にはどのくらいかかる」

「ううゝ、痛いゝ。ん？ざっと7分くらいかな？白嵐の取り付けもするならプラス10分くらいだよ」

「分かった。時間がないからな。では作戦を伝える。織斑、篠ノ之の両名で福音に攻撃を仕掛ける。残りは別命あるまで待機。作戦開始は30分後だ。意見はあるか」

改めて作戦をまとめた千冬が意見を求める。挙手したのは一夏だった。

「どうした織斑」

「先生。その白嵐ですけどね。取り付けは要りません。まだ一度も使ってないですからね。慣れてないのにぶつつけはちょっと……」

ある意味もつともな一夏の言葉。その言葉に真っ先に反応したのは束だった。

「えー！？そんなのつまないじゃん。いっくんツレないこと言わないですよー！」

「うるさい。黙っている束。織斑、いいのか？」

束の言葉を無理矢理抑え、千冬が一夏に確認を取る。一夏は黙って頷いた。

「よろしい。では作戦会議を終える。各自準備を怠るな。解散！」

その言葉と共に全員が立ち上がり、部屋を辞す。束と篤は紅椿の調整のために別の場所に二人で移動をする。

「どうした、織斑。早く準備をしろ」

部屋を出ようとしな一夏に千冬が声を掛ける。だが一夏は軽く手招きをし、千冬を自分のすぐ近くに引き寄せた。

「どうした」

「いいんですか。素人所見だけど、戦力はあつた方がいい。俺と篤以外のメンツもぶつける最初の作戦が良いと思うのですがね」

小声で一夏は千冬に言う。その声音には僅かながら苛立ちが含まれている。それは全員の協力で立ち上げ、成そうとした作戦を邪魔されたことへの憤りか。

それを理解した千冬は、その元凶に呆れつつも、一夏を諭すように言った。

「私として思う所はある。だが、時間が無いのも事実だ。準備に割く時間は極力削りたい。それに、アレが何をするか分からんからな」

つまるところ、全ては束に引っ掻き回されているのが現状と言える。そのことを再確認し、一夏と千冬は揃ってため息を吐いた。

「分かりましたよ。なら俺は最善を尽くします。クソツタレ、楽しむってのは無理だなこりゃ」

最後の方が小声だった一言はどこかやけっぱちだった。千冬に背を向けと自身も準備に取り掛かるうとする一夏だったが、その背に千冬が声を掛け引き止める。

「織斑。篠ノ之は専用機を持ったことに気を大きくしている節がある。作戦時には気をつける」

「……ま、善処します」

「せいぜい気張れ。男を見せてみる」

聞きようによつては激励にも聞こえる千冬の言葉。仮に激励ならばかなり珍しいことなのだが、一夏はその言葉に軽く肩を竦めるとそのまま部屋を出ていった。

部屋を出た一夏は廊下で待っていたらしい箒を除く四人と鉢合わせた。どうやら四人は一夏を待っていたらしい。

「よお、どうした」

「いや、ちよつとね……」

一夏の言葉に答えたのはシャルロットだが、その表情は複雑な色をしている。見ればシャルロット以外の三人も同様である。

先程の束の第四世代発言が未だに尾を引いているらしい。

「わたくし達は篠ノ之博士のことを全然知らないのですが、先程の言葉はやはり衝撃でした……」

浮かない声で言うセシリア。

例えその完成度が鈴やラウラのISより劣るとは言え、自身のISに誇りを持って来た彼女にとっては先程の束の言葉は大きくショックを受けたのだ。

そんなセシリアの心中を察した一夏は何か言葉をかけようとするが、いい言葉が思い付かない。仕方なしに一夏は、少し困ったような軽い笑いを浮かべて言った。

「まあ束さんだからなあ。俺らにはあの人の行動をどうこうするなんてできないよ。台風か何かだと思ってどっかに行くのを待つしかないな」

篠ノ之束をどうにかすることは不可能。その事実を知らされた四人と、その事実を改めて思い知らされた一夏は揃ってうなだれた。

「そつえば兄様。白嵐とは何なのだ？」

ふと思いついたと言う風にラウラが一夏に尋ねる。その問いにああ、と思いついたらしい一夏は言った。

「白式の高機動用追加装備だと。なんか紅椿と並行して作ってたみたいだぜ。まあ、くれるって言うならありがたく貰っただけさ。ただ今は使わないだけだ？」

「え？何で？」

シャルロットが疑問の声を上げる。

「いやな、高機動パッケージなんかをぶつつけ本番で使う奴とかいるか？普通よ。しかも東さん曰く紅椿と同じ展開装甲を機動性重視で使用していると来た。となるとだ、もしかしたらソレを使えばスピードだけなら紅椿以上になるかもしれない。そんなの、練習無しでいきなり実戦で使うとか、危険性が高い」

一夏の言葉に四人は納得する。あくまで実際に白嵐を使っていない一夏の言葉はあくまで推測であったが、その推測は的を射ていた。事実、単純な速度という点では白嵐を装備した白式は紅椿を凌駕している。

そして、それを練習無しで実戦使用することへの一夏の危惧もまた正しかった。音速域への突入を可能とする白嵐の実戦使用。それは例えるなら、普通乗用車にしか乗ったことしかない人間を、いきなりF1のレースに出すようなものだからだ。

「ああそうだセシリア。確か超高速下での稼働経験あるんだろ？なんかアドバースとか無いかな？」

思い出したかのようにセシリアに尋ねる一夏。その問いにセシリアはすぐさま答えを返した。

「それでしたら、やはり高感度ハイパーセンサーでしょうか。それを付ければ音速域での機動にも十分対応が可能ですわ」

そしてセシリアは高感度ハイパーセンサーについて説明をする。端的に言うならば世界がスローモーションに見えるという効果。その

説明に一夏は師が教えてくれた「極限集中状態における時間感覚の延長」のようなものだど解釈をした。

そしてセシリアの言葉に続く形で鈴が一夏の瞬時加速の使用への注意を言う。

「一夏。瞬時加速はあまりやんない方がいいわよ。あれってエネルギーを結構使うから。使うならタイミングを選びなさいよ」

「分かった」

そして一夏は軽く息を吐く。そして四人は一夏の纏う空気が変わるのを感じた。

「一夏さん……?」

「準備をしてくる」

それだけ言っで一夏は四人の下から立ち去る。

以前学園にやって来たばかりのラウラが纏っていたような鋭利な空気が。それを纏う一夏の背を四人はただ見つめるだけだった。

そして作戦開始時刻となった。

確認されている福音の位置からの直線距離が最短である海岸に、白式を展開した一夏と調整を施された紅椿を展開した筈が立っている。

待機となった残る四人の専用機持ちは千冬ら教員がモニタリングを

行つ大部屋で作戦の様子を見ている。

「じゃあ、始めようか」

「ああ。やるぞ、一夏！」

一夏の言葉を合図に行動が始まる。それに応える箒の声は紅椿の性能から来る自信故か、明るい。

『では作戦会議通りに行え。篠ノ之は織斑を作戦領域まで運び、そのまま福音に接敵。織斑は零落白夜で福音を攻撃しろ。万が一、フアーストアプローチに失敗した場合は現場判断で行動しろ。ただし、状況が切迫した場合は速やかに撤退。身の安全は怠るな』

「はい！」

「委細承知」

千冬の指示に箒は明るく、一夏は淡々と答える。

「織斑先生。私はできる限りで一夏の援護にまわるといふことよろしいでしょうか」

箒が千冬に確認を取る。その言葉に一夏が僅かに眉を動かすが、箒は気付いていない。

僅かな間の後、千冬の言葉が返ってくる。

『できるならな。ただし、今回の作戦は織斑が要だ。行動の主導権は織斑に任せる』

「あ、はい」

千冬の言葉に箒は肩透かしを食らったような表情を浮かべるが、千冬は気にすることなく今度は一夏へ話し掛けた。

『ということだ、織斑。任せろぞ。　　篠ノ之には気をつける』

最後の言葉のみプライベート・チャンネルで言われた言葉に一夏は頷く。

『では、行動開始!』

その言葉と共に通信が切れ、二人は動き出した。

紅椿の背におぶられる形で白式が紅椿に密着する。

「頼むぞ箒」

「任せろ。お前はちゃんと私が送り届けてやる。大船に乗ったつもりでいろ」

(大船は大船でも、タイタニックじゃなきゃいいけどな)

そう思っても口には出さず、一夏は黙って紅椿に身を預ける。そして紅椿が飛翔体勢に入った。

「行くぞ!」

箒の言葉と共に紅椿が白式を抱えているとは思えない速さで飛翔。猛スピードで空を駆けた。

超高速機動の紅椿の背で、一夏は高感度ハイパーセンサーを機動していた。高速道路を走る車の窓から見るように流れていた景色が、くさま鮮明な形を作る。

紅椿はその驚異的スピードで海上を飛んでいた。

数10kmある福音との距離もみるみる内に縮んでいく。遠くない内にやってくる実践に心の調子を整えつつ、一夏は改めて紅椿の性能に驚いていた。

(やっぱり大したスピードだ)

そして同時に、白嵐は今以上のスピードを可能にするだろうことを思い出す。

白嵐と蒼炎。束が手ずから作り出した高性能装備。

まさしく最高のスピードと最強の剣を手に入れた白式を、自らのことを考え、一夏は心が高ぶるのを感じた。だが、今が作戦行動中であることを思い出し、すぐに落ち着けた。

(そういえば、これだけの高出力。エネルギー消費はどうなんだ?)

ふと沸き上がった疑問。だが、その考えは直後の篤の言葉に遮られた。

「衛星との暫時リンクを確認！一夏、もうすぐだ！」

その言葉に一夏は意識を眼前に集中させ、蒼炎を展開した。

紅椿の背に身を預けたまま一夏は蒼炎を構え、深めの呼吸を幾度か

する。

そして、作戦会議の時に確認した福音の姿をその視界に納めた瞬間、一夏は一際大きく息を吸い、自らの内で練り上げる気と変えた。

「行くぞ！」

短い筈の言葉と共に紅椿が更に加速。一気に福音との距離を詰めていく。一夏が構える蒼炎は既に、零落白夜の青白い光をその刃に走らせていた。

そして白式はスラスタに瞬時加速のエネルギーをチャージしている。

「今だ一夏！行け！」

その言葉に一夏は無言で紅椿の背から飛び出す。直後に発動させる瞬時加速。紅椿の加速を加えた上で発動した瞬時加速は爆発的な加速で一夏を、白式を福音に近付ける。

そして、福音を蒼炎の間合いに捉えたのと一夏の内の気が高まったのは同時だった。

掛け声と共に奇襲をするのは下策。無言の内に裂帛の気合いを込めて一夏は福音に切り掛かった。

side 一夏

銀の福音、覚悟！！

そして俺は福音に切り掛かった。気合いは十分。必中を俺は確信した。だが、現実はその甘くなかったらしい。

ブーン！

直前で福音が俺に気付いた。直後、福音はその身をずらすことで蒼炎の一刀をかわしやがった。

それでも俺は剣士の端くれ。自分が振った剣の軌跡くらいは把握している。そして俺は見た。俺の一撃をかわした福音。そのかわし方の異様な精度を。

刃との距離は数センチあるかどうか。文字通り紙一重の精密回避を行なった福音に、俺は顔が強張るのを感じた。

『敵性IS確認。迎撃移行。銀の鐘、稼動開始』

福音のものらしきその電子音声が届いた瞬間、俺は全力で福音から距離を取り、同時に箒に呼び掛けた。

「離れる箒！！」

俺の言葉に箒も福音から距離を取る。俺の攻撃が外れたのは分かっているらしい。

『Lα………』

歌を口ずさむような電子音声。

福音がウイングスラスターを大きく広げていた。なるほど、あれがさっきの精密回避をやったってことかコノヤロウ。

そして福音の翼が開ききった直後、その翼から銀の羽が舞い散った。

「ゲツ!?!」

俺はすぐさま回避行動を取る。間違いない。あれが福音の主武装という三十六門砲に違いない。事実、白式のハイパーセンサーの全包围視界で、俺に当たらなかつた羽が海に落ちると同時に爆発するのを確認した。

感じとしては射撃というよりも、小型ミサイルをばらまく感じだろうか。あれだけの攻撃を撃ちながらも、発射の反動による硬直や、弾の再装填などをする様子は見えない。エネルギー弾というのも要因の一つか。

何が言いたいかと言うとだ。福音はさっきから引つ切り無しに面制圧の爆撃をかましてくれてるということだ。

「一夏!無事か!」

箒が通信をかけてくる。どうやら福音は箒も攻撃対象に加えているらしい。まあ当然か。

「すまん!しくじった!」

「気に病むな!次に決めればいい!」

失敗を責めないのはありがたいが、正直箒の言葉は難しい。対峙してはつきり分かった。福音はかなりの強敵だ。

スラスタによる精密な機動と主砲による爆撃を同時に行う。そしてスペックカタログにあった通り、福音の主砲はほぼ全包围に対応

している。

「ああクソ！軍用新型ISの性能ってのは！」

腹が立つくらい高いな！

福音の攻撃をかわしながら、俺は現状にマズイものを感じる。戦闘開始から僅か数分。状況は福音に主導権を握られかけている。

箒が雨月と空裂の遠距離攻撃を幾度か仕掛けるが、その悉くを回避される。俺は攻撃を当てるには福音を間合いに捉えなきゃならない。だが、福音の張る弾幕が中々それをさせてくれない。

被弾覚悟で突っ込めば或いはと思うが、この状況で無茶な博打は打てない。

自分一人の問題で解決する戦いなら無茶も楽しみながらできるんだけどな。今は一緒に戦う箒や、待機している皆の安全諸々を預かってる身だ。勝手はできない。

ああもう！じれったい！

side out

三機のISによる攻防が続く。

箒が紅椿の持ち前である高速機動で福音を翻弄し、生まれた隙に一夏が切り掛かる。

だが、一夏の斬撃はかわされ、或いは弾かれる。その時に生じる隙を紅椿が突こうとするが、スラスターからの弾幕がそれを阻む。

攻防共に高い水準でバランスを取っている福音の能力に、一夏と箒は膠着状態を維持せざるを得なかった。

「舐めるなよクソがあ！」

怒号と共に一夏が再び福音に切り掛かる。その余りの剣幕は人が動かしている状態の福音ならば、僅かにたじろがせることも可能だったかもしれないが、操縦者の意識が失われ、IS自体が操作をしている福音には、効果が無かった。

ガキイイイイイン！

一際甲高い音と共に蒼炎と福音の腕部装甲が激突する。

銀の鐘に攻撃手段のほとんどを任せている福音は近接戦闘用の武装を装備していない。

だが、ガントレットを兼ねている腕部装甲を用いれば、近接ブレードを受け止めることはできる。

福音の腕に蒼炎を噛み付かせながら一夏は歯噛みする。

零落白夜、せめて零落刃を発動して今の状況に持ち込めれば福音に決定打を与えられる。だが、その発動には僅かだがタイムラグを必要とする。

その隙に福音が一夏と距離を取るとは十分に有り得る。そうならば再び福音に接近するのに骨を折ることになる。

（本当に厄介だ……！けど、やり甲斐もあるなあ！）

強敵の存在に自然と心が沸き立つのを感じた。

（見境無くするのはダメだけど、こんくらいならバチは当たらねえだろ！）

「おおおおおおおおおー！ー」

腹の底を震わせるような声で一夏は体に喝を入れる。そのまま蒼炎を押し込み福音を弾き飛ばす。その衝撃で福音の腕部装甲の一部が砕けた。

『K i a a a a a a a a a a a a a a a a ! ! !』

悲鳴のような電子音声が響く。弾かれた福音はその動きを確かに止めていた。そしてそこに一夏は勝機を見出だした。

「覚悟おお!!！」

再び発動する零落白夜。

確認した残存エネルギーも多くは無い。一夏はこの一撃で勝敗を決しようとして、福音に突撃をかける。だが、そんな一夏を一つのイレギユラーが襲った。

『戦闘領域に未確認船有。船籍不明』

「え?」

思わず一夏の意識が福音から逸れた。だがすぐさま意識を福音に戻し、一夏は福音に切り掛かる。しかし、一夏が意識を逸らした一瞬の内に体勢を立て直した福音はこれを回避。

数少ない勝機を逃したことに、一夏の顔色が変わる。

そしてその思考は未確認船のことを考えていた。

(どうして船が!先生達が封鎖したはずじゃねえのか!?衛星リンクに情報は無い。密漁船かよ畜生!!!)

余りにも悪いタイミングで現れた密漁船に思わず内心で悪態を付く。だが一夏はすぐに対応を考える。

千冬から現場判断を預かった身。すべきことはしなければならぬ。いつそのこと見殺しにでもしてやろうかと、半ば私怨込みの考えが浮かぶが、すぐに却下する。そんな真似はできない。できない理由がある。

そして一夏は決心し、箒に呼び掛けた。

「箒！撤退だ！」

「何だと！？」

一夏の言葉に箒が信じられないという顔をする。だが、動きを止めるような真似はしない。福音の攻撃をかわしつつ、一夏と箒は会話を続ける。

一夏は箒に、福音より高い位置を維持するように指示をしてから続ける。

密漁船の存在、膠着状態の長期化による機体の疲弊、このままでは福音を落とせないことを。

「一度下がって体勢を立て直す！次は全員で福音をフルボッコにするぞ！」

「だが！」

「このままじゃ船が巻き込まれる！福音を引き付けて船から離して

一気に離脱だ！」

「犯罪者を庇うのか!?!」

ごねる筈に一夏は思わず苛立つ。

犯罪者を庇う。そこまで一夏はお人よしでは無い。ただ一つの理由故である。

「俺だって犯罪者、それも赤の他人に情けかける義理なんざねえよ！けど見殺しにしたらしたで俺が千冬姉に殺されらあ！」

つまりはそういうことだった。

あの千冬のことだ。如何に犯罪者言えど、見殺しを認めるはずがない。

仮にそんな真似をしでかせば、一夏が千冬にとつもない折檻を受けるのは確実。一重にそれを避けるための判断だった。

「いいから離脱だ！お互い消耗してるだろ！」

「まだまだ！まだ私も紅椿も戦える！私の心は折れてないぞ！」

そう言って、一夏が止めるよりも先に筈が福音に向かっていった。

(あの馬鹿、浮かれやがって！んな精神論がまかり通るのは生身のガチンコだけだ！ああもう、千冬姉の言う通りだ！)

そして一夏もまた筈の後を追ひ、白式を走らせた。

「ハアツ!!」

福音の攻撃を高速機動でかわしながら箒は福音に近づいていく。その心は目の前の敵の妥当にのみ注がれていた。

ガンツ！ガキンツ！

雨月と空裂を福音の腕にたたき付ける。一瞬、紅椿と福音の間に膠着状態が生まれるが、箒は再び紅椿のスラスターを稼働させ、福音に二刀を押し込む。

「てやあああああああつ!!」

咆哮と共に箒は雨月と空裂を振り抜き、一夏がしたように福音を弾き飛ばした。

「食らえ!!」

そして箒は雨月と空裂を構える。

篠ノ之流剣術 『いっとういっせん一刀一扇』

演舞のごとき剣戟の技。これを持って雨月と空裂のレーザーとエネルギー刃を福音に浴びせ、雌雄を決そうとした。だが

ピーッ

無機質に響くアラーム音。確認した筈はその表情を愕然とさせた。紅椿のエネルギーが底を尽きかけていた。度重なる高速機動と幾度も放ったエネルギー性攻撃。それらは凄まじい速さで紅椿のシールドエネルギーを減らし、完全にゼロとまではいかずとも、もはや満足な戦闘を行えない量、少なくとも雨月と空裂のエネルギー攻撃は使用不能となる量しかエネルギーは残っていなかった。

「そんなっ…！こんな時につ」

思わずその場で留まる筈。それを見逃す程、福音は甘くは無かった。

『La』

仮に感情が込められているならば、それは明るいものだろう電子音声と共に福音の翼が力強く、張るように開かれ、その表明が発射直前の砲門により銀色に輝く。

「しまっ…！」

放たれる銀の弾幕。思考が白く染まった。

ドンッ

体に衝撃が走った。だが、ダメージは無い。そして筈は見た。自分の体が弾幕の射線から外れるのを。先程まで自分が居た場所、即ち弾幕の射線にある一夏の姿を。

恐らくは筈を蹴り飛ばしたのだろう。一夏の足は振り抜かれた姿勢になっている。

「ったく、世話の焼ける幼なじみだよ、お前は。姉妹揃って姉は姉

に、妹は弟にか。ほんとにしょうがねえなあ」

そんな声が聞こえた。見れば一夏の顔はどこか苦笑しているようだった。まるで幼子に手を焼かされるかのように。

一夏っ…！

そう筈が声を発しようとするが、それよりも先に一夏に達した銀の弾幕が一夏の間近で爆発し、一夏と白式は目が眩むような閃光と熱波に包まれた。

「一夏あーーーーっ！！！」

第三十六話（後書きに装備解説）（後書き）

え、第ファンの方。なんと申しますか、その、スミマセンでした。いやまあ、ホントにスミマセン。

さて、今回登場した白嵐について。

展開装甲を使用した高機動パッケージ。形状は二つのウイングスラストと、腰部アーマー。そして腰部アーマーについている二つのサイドバインダー。スラストの形は紅椿のスラストに近い。

本来万能の運用が可能な展開装甲を機動性に絞っているため、装着によりもたらされる機動性は紅椿すら上回ることが可能なほど。

同時にその驚異的スピードに対応するために、展開装甲の一部をG緩和などにも適用している。要はパラメータの数値をスピードと安全に振りまくったとお考えください。ぶっちゃけラウラ戦とかでやった鋭角方向転換をノーリスクでできるくらい。

最大出力で稼働させると文字通りばかげたスピードを出せるが、エネルギーも結構使うので、やりすぎには注意が必要。

サイドバインダーにはブースターと射撃兵装が搭載されている。射撃兵装はセシリアのBTと同じエネルギー弾を発射。バルカンモード、通常射撃モード、チャージショットモードの三つの形態がある。

バルカンは文字通り。エネルギー弾のバルカン。ただし威力はかなり低いため、まず戦闘での決定打になることはない。目くらましや足止めがせいぜい。

通常射撃は普通のビームガン。こちらも威力は低めであり、一発の威力はブルー・ティアーズのビット射撃一発に届くかどうか。これも足止めとかがせいぜいで決定打にはならない。

チャージショットモード。

通常射撃モードを出力アップさせたモード。発射口の先端部が開き、エネルギーを一度貯めてから発射。ギリギリ決定打に成りうる。通常射撃モードよりも射程に長じている。

射撃用に白嵐にはFCSが搭載されているが、当たるかはやはり一夏次第。そして今の一夏の射撃技能は……
まあズブの素人よりはまだマシレベル……

サイドバインダーの形状はブレイヴのアレをイメージして下さいww

以上。非常に大雑把ですが、説明としました。作中での使用には今しばらくお待ちを。

え？白嵐の性能がやたら高くないかって？
そりゃあ、束が作った代物ですから。というか、第二形態移行はもつと性能アップさせる予定ですし……

ご質問は感想にてお気軽にどうぞ。

…第二形態、雪羅以外にイイ名前無いかな？

第三十七話（前書き）

総合PVが100万を突破しました。

皆様、日頃から本作をご愛顧頂きありがとうございます！

第三十七話

夕焼けに彩られた砂浜で箒は一人座り込んでいた。

ISスーツの上に学園の制服を着込み、砂浜で足を組む。座禅のようにも見えるその姿勢で箒は瞑目していた。

目を閉じ座るその姿は一見とても落ち着いているように見えるがその実、彼女の心は激情が吹き荒れていた。目を閉じている箒の呼吸は深く、僅かな荒さを含んでいた。今の彼女はただ、自らの内の激情を押さえ込むのに精一杯だった。

(私は……!!)

その後、一夏が福音に撃墜された後のことだ。

ズダダダダダダダダッ！！

「一夏あああああ!!」

爆発が連鎖する。幾つもの爆発による衝撃と熱波が一夏の全身を包み、蹂躪していく。

その様を箒はただ見ているしかできなかった。そして張本人たる福音は箒と一夏の上空に佇み、一夏が焼かれるのを無機質に見下ろす。

爆発が収まり、煙が晴れる。そしてその向こうに一夏の姿が現れた。

「一夏……」

晴れた煙の中から現れた一夏は福音に視線を向けていた。

両手はダラリと垂れ下がり、ISのPICが働いていなければその体は崩れ落ちていただろう。

もはや力を感じられない姿。だが、その目は未だ力を持っていた。

いや、目だけではなかった。一夏は嗤っていた。幾度か見た狂気を孕んだ笑い。それを見た瞬間、筈は一瞬背筋が冷たくなるのを感じた。

血走った目、獰猛に歪められた口元。それは墜ちかけの人間が浮かべる表情ではなかった。

ハ……ハ……

そんな音が聞こえた。それは声、微かな笑い声だった。

声の主は一夏。笑いによつてか、その体は僅かに震えている。

「オモシレエ……」

それだけを残して、一夏の体は海へと落ちていった。操縦者の意識が失われたからか、白式が解除される。

「一夏っ！」

慌てて箒は一夏を受け止めた。完全に意識を失った一夏の表情に先程までの狂気は無く、静かに眠る顔があった。

敵の完全な無力化を判断したのか、福音が二人に背を向ける。そのまま福音は高速で飛行。瞬く間に索敵不能範囲への離脱をされた。

「くっ！」

その時のことを思い出し、砂浜に座る箒の顔が悔しげに歪む。福音が去った後の記憶は曖昧だった。

いつの間にか出立地点の海岸に戻っていた箒は待機していた学園のスタッフに一夏を預け、そしていつの間にか旅館の一室で寝かされている一夏の側で座っていた。

弟が撃墜されてもなお、毅然とした姿を崩すこと無く指示を下す冬の姿や、一夏の姿を見て目に涙を浮かべながら自分に平手打ちを食らわせたシャルロット。作戦開始前と変わらず、冷静な表情を崩さないラウラや、心配そうに一夏と箒を見つめるセシリアに鈴。これらの記憶すら、箒には曖昧だった。

そしていつの間にか一夏の眠る部屋を出た箒は砂浜にたどり着き、今こうして座禅を組み何とかして心を鎮めようとしている。

（私は馬鹿だ……！また……！）

冷静になった箒を襲ったのは自責の念だった。

一夏が撃墜された原因は紛れも無く自分だ。確かに福音の想像以上の能力もあつたが、それでもた。自惚れていた。高性能の機体を受け取り、増長した結果がこれだ。状況を把握し、撤退を決めた一夏の言葉を無視して、根拠の無い自信だけで敵に向かって行つた結果、晒した無様。

そんな自分に筈はひたすらに怒りを感じていた。

彼女にとって力とは律する物だ。幼い頃から学んだ実家での剣道。師であつた実父から常に言われた。

だが、それでも彼女は時々自らを律せられないことがある。

幼い頃、まだ一夏と共に道場で稽古をしていた時。時折、子供特有のつまらない原因からの言い合いの最中、竹刀を抜いたことが幾度もあつた。

そして彼女が最も苦い記憶の一つとする、昨年の剣道全国大会の決勝戦。ただ内に溜まつた鬱屈をたたき付けるだけだつたあの試合は、思い返すだけで嫌になる。

そして今また、彼女は自らを律することができず、その代償を支払わされた。

「っ………！」

思わず歯を食いしばる。

今だけでなく、過去の未熟を思い出したからか、それまで保たれた冷静と憤怒の均衡が崩れかけ、腹の内を怒りが暴れ回る。

「……………」

無言のまま箒は立ち上がる。どうにも抑え切れなくなった怒りを少しは発散しても問題は無いだろうと判断した彼女は、紅椿の二刀の内一振りだけを展開し、ありったけの怒りを込めた一太刀を虚空に振ろうとした。

だがそれは、予想外の形で中断された。

「なんだ。こんなところに居たんだ」

背後から声を掛けられた。

「鈴……」

首だけで振り向いた箒は自身の少し離れた後ろに立つ鈴の姿を見た。

そして鈴を一瞥すると、すぐに目の前に向き直る。

「済まないが今しばらく一人にさせてくれ」

静かに言った言葉には自身でも分かる、紛れもない苛立ちが込められていた。自身への苛立ちのはずなのに、それを他人へ向ける言葉に込めるとは何事か。再び箒は自身への苛立ちの高まりを感じる。

「ふうん。へこんでるかと思ったら、そうでもないみたいね」

「だからどうしたのだ」

醜い態度だとは理解している。だがそれでも、箒は一刻も早く鈴にこの場を立ち去って貰いたかった。だが、そんな箒に構うこと無く鈴は続ける。

「一応、改めて言っとくけど。一夏がやられた原因の一つはあんだ
なんだからね」

その言葉に箒は己の内では何か切れるのをはつきりと感じた。

「今更言われなくても分かってる！そうだ！私のミスで一夏はやら
れた！分かってる！笑いたければ笑え！」

激昂する箒を前にしてしかし、鈴は依然として平静を崩さない。そ
して箒が言い終えるのを見計らって再び口を開いた。

「別に笑いやしないわよ」

「え？」

その言葉に箒は意外そうな顔をする。

「ぶつちやけあんたは素人じゃん。機体は高性能だけど、今はそれ
は関係無いわ。素人なんてね、基本的にへマをやらかすもんよ。あ
たしだって最初の頃は色々ポ力をやったし」

そこで鈴は一度言葉を切る。僅かに間を置いて再び語る。

「でもね、いつまでもへマしたってままじゃダメなのよ。何かしら
で挽回しなきゃいけないの」

「何が言いたい」

鈴の言葉の真意を計りかねて箒は続きを促す。
そして鈴は遂に本題を言った。

「率直に言っわ。あんた、汚名返上をする気ある？福音をボコしに行く気はある？」

「どつという意味だ！説明しろ！」

気がつけば箒は鈴に駆け寄り、その肩を掴んでいた。それを鈴は少し鬱陶しそくに離すと、箒の目を真っ直ぐに見据えて言った。

「その様子ならやる気はあるみたいね。今ラウラが福音の場所を探ってる。すぐに準備して。絶対に先生にはばれないように」

その言葉に箒は黙って頷いた。

それから約10分。準備を終えた箒はISスーツ姿で海岸に立っていた。すぐ側には同じくISスーツに身を包んだセシリア、鈴、ラウラの姿がある。彼女らは既に追加パッケージの装備を終え、戦闘準備を完了していた。

「……シャルロットはどうした？」

三人に少し遅れてやってきた箒はシャルロットの姿が見えないのを訝しむ。その言葉に問われた三人は僅かに苦い顔を見ると、すぐ近くの岩、正確にはその向こうに視線を向けた。

気になった箒が岩の反対を覗き込む。その直後、箒は固まった。

ガシャツ、ガシャツ

「フフ…フフフ…アハツ…」

目に暗い光を宿しながら、不気味な笑いと共に装備の点検を行っているシャルロットの姿がそこにあった。

シャルロットの周囲にはラファールに格納されている各種銃器が置かれている。

そしてその大半は、大口径ショットガンや大型グレネードであった。

シャルロットのカスタムラファールに搭載されている装備の多さは筈も知っている。恐らく今砂浜に置かれている武器はその一部ではない。実際にはその数倍もの数の武器をシャルロットは所持しているはずだ。

仮に、その全てが目の前にあるような高火力武装だった場合、その総火力は一機のISに向けるものとしては明らかオーバーキルだろう。

尋常でない様子のシャルロットの姿も相まって、筈は背筋に寒いものを感じた。

「さっきからあんな調子ですの」

いつの間にか筈の隣に居たセシリアが言う。その表情は変わらず苦いままだ。最初は疑問に思った筈も今では納得していた。

確かにこのような光景を見れば無理もない、と。

目の前のシャルロットの様子は明らかに異質だった。

「な〜んていうか、アレよね。一夏がやられたのにキレて、しかもキレかたのベクトルがぶつ飛んだって感じ？」

さらに続けて鈴が言う。

彼女はシャルロットが一夏に好意を抱いているのを理解していた。故に、一夏の撃墜に対する怒りというのも理解はしている。はずなのだが、やはり目の前のシャルロットの様子は異質に見えた。

そして福音の居場所を特定したラウラが三人を呼ぶ。呼ばれた三人は武装の準備をしているシャルロットにも声を掛けた。

「あ〜、シャルロットさん？」

「ん？なあに？」

恐る恐るといった様子でセシリアがシャルロットを呼ぶ。呼ばれたシャルロットは表情を一変させ、輝くような笑顔で振り向いた。

「あの、福音の居場所が分かったそうですが…」

「分かった。すぐ行くよ」

そう言ってシャルロットはごく自然な様子で武装を量子変換して片付け、セシリア達に合流した。

そして四人が集まったのを確認したラウラが口を開いた。

「福音はここから30キロ沖合の海上に居る。センサーからの索敵はステルスを掛けているらしいが、光学迷彩はしていないらしい。」

衛星から直接確認できた」

「さすがはドイツ軍特殊部隊ね」

ラウラはドイツ軍特殊部隊長という肩書に付随する権限を用いて福音の居場所を探り当てた。そのことに鈴が素直に感嘆の声を漏らす。

「我々の目的はただ一つ。福音の撃破だ」

ラウラの言葉に四人が力強く頷いた。

「行こう。一夏の敵討ちだ」

強い意思を込めて箒が言う。本来なら戦いに赴くのに強い鼓舞となる言葉だが、それは鈴の予想外の言葉で台なしになった。

「あたしさ、思うんだけど。ぶっちゃけ敵討ちって違うと思うのよね」

その言葉にセシリアとラウラは疑問を、箒とシャルロットは僅かな不満を浮かべる。

苦笑いのような顔をしながら鈴は続ける。

「だって一夏よ。あの一夏よ。黙って敵討ちをして貰うってガラじやあないと思うのよね」

「「「「あ〜」「」「」

鈴の言葉に四人は揃って納得したという表情をする。

「言われればそうですね。むしろ一夏さんならあつという間に回復なさって、自分から福音に挑みそうですね」

「そうですね。セシリア分かってるじゃん。んでさ、あたし達に文句言うのよ。なんで俺を誘わなかったんだーって。寝てたからって言うと、じゃあなんで起こさなかったんだーって」

セシリアもまた一夏の行動を想像し、鈴がさらに付け加える。

一夏の気質からあまりにも容易に想像できる光景に四人はうんうんと深く頷く。

「ふむ、ならいつそ兄様が来るまで我々は持たせるか。私達で福音を消耗させて兄様に止めを譲るか？兄様より先に福音を倒しては私達は兄様に怒られるかもしれん」

少しからかうような口調でラウラが言う。ラウラらしからぬ茶化したような言葉に四人は軽く笑う。

「なら僕達は一夏に怒られちゃうね」

そう、ポツリとシャルロットが言う。そのままシャルロットは続ける。

「だってさ。僕は福音をギッタギタにするつもりなんだもん。そのための準備もしたし」

静かに発せられた言葉に聞いた四人が思わず固まってシャルロットを見る。

「ね、ねえシャルロット。あんた何するつもり？」

「何って。決まってるよ。福音は一夏を傷付けた。だから僕が百倍返しにする」

そしてシャルロットはラファールの左腕の装甲を部分展開する。そこには一つの武装が装備されていた。

「そ、それは…！」

ラウラの顔が引き攣ったものになる。なぜならこの中でラウラのみがその装備による攻撃を受けたことがあるからだ。

そう。『グレー・スケール灰色の鱗殻』である。

「そ。でもこれ、改良型なんだよね」

天使のような笑顔でシャルロットは言う。だが、そのグレー・スケールは以前ラウラが受けたものとは異なっていた。全体的にパーツが肥大化。要である鉄杭もまた、その太さが以前のものより一回りも二回りも増しており、見た目の凶悪さを増していた。

「まだ試作の改良型だから名前は無いけどね。攻撃力は大幅にアップしてるよ」

とは言え、攻撃力の上昇を引き換えに炸薬の装填数は約半数に減っている。

しかし、全弾命中させた際の攻撃力は改良型の方が上回っている。

「これを全部たたき付ければそれで済むよね」

思わず見とれるような輝く笑顔。だが、そんな笑顔から出てくるあまりにも物騒な言葉に、思わず四人は内心で福音を気遣っていた。

(シャルロット、これは相当だな)

(シャルロットさん、よほど怒っていらっしやるようですね)

(気持ちは理解できるけどさあ、さすがにヤバくない？なんか福音に同情しなくなっただわ)

(うむ、このくらいの気概ならば問題は無いだろう。しかし、シャルロットを見ていると感じる寒気はなんだ?)

順に篝、セシリア、鈴、ラウラであった。

笑顔を浮かべ続けるシャルロット。しかし、その思考の内で繰り広げられている展開を想像して、四人はなんとも言えない気分になる。

「ええい！傾注！」
アハトウング

少し大きめの声を出してラウラが全員の注意を集める。

振り向いた四人の顔を一度見回すと、軽く咳ばらい。そして表情を固いものに戻して口を開く。

「総員、準備はいいな？これより、福音の撃墜作戦に移るぞ」

そう言ってラウラはシュヴァルツェア・レーゲンを展開する。他の四人も各々の愛機を展開。戦闘体勢に入る。

「出撃！」

そのラウラの言葉と共に全員が一斉に飛翔。福音へ向けて飛び立った。

作戦指揮室。

作戦会議が行われたその部屋では、大型モニターで福音の監視が続けられていた。

一夏が撃墜された後も学園の教師陣は衛星監視で福音を追跡。福音の離脱より約1時間後にはその居場所を割り出し、現在に至る。

このことを教師陣、正確には作戦の指揮官である千冬は専用機持ちには伝えていなかった。

待機を命じた以上、伝える必要が無いからだ。

ラウラがわざわざ自分の部隊を動かして福音の位置を探ったのもこれが理由だ。そして教師陣は数時間前から指揮室に籠り、福音の監視を続けているため、専用機持ち達の行動に気付いていなかった。

「現状、福音に動きはありません」

「そうか」

メインモニターの前に座る真耶が千冬に報告する。その報告に千冬

は至極冷静に答える。

「あの、織斑先生」

「なんだ」

「織斑君のことは…」

「今は非常時だ。監視に集中しろ」

真耶の言葉に千冬は淡々と答える。その言葉に真耶は痛ましそうな表情をすると、モニターに向き直った。撃墜直後の一夏の姿は彼女も見えていた。

ISの絶対防御でも防ぎきれなかった爆発。一夏の肌、得に装甲やスーツから露出している部分には爆発の衝撃による傷と、熱波による火傷の赤みが刻まれていた。

「あいつは」

「え？」

ふと発せされた千冬の言葉に真耶が振り向く。千冬は無言でモニターを見るように真耶に促すと続けた。

「あれはそう簡単にくたばる玉じゃない。誰かにくたばらされるよりも、誰かをくたばらせるような輩だ。あれしきで早々大事になるものか」

独り言のように吐き出された言葉。それは断定するような言葉であったが、真耶にはそうあって欲しいという希望に聞こえた。

結局のところ、千冬もまた一夏の心配をしていた。だが、その姿を誰かの前で見せられないのだ。今の千冬は作戦指揮官。それが許されない立場にある。

真耶は千冬とは比較的長い付き合いにある。彼女がかつて日本代表候補にあつた時、直属の先輩として代表の地位に千冬があり、その頃から真耶は何かと千冬の世話になっている。

そんな彼女は千冬の心の内をそれなりに計り知ることのできる数少ない人物であり、彼女は千冬がいかに一夏を大切に思っているか理解していた。

（先輩、辛くないはずが無いですよね）

どれだけ気掛かりでも、それを表に出してはいけない。

千冬の心中、その辛さを考え、真耶の表情は更に重くなった。

その直後のことだった。

突如、福音の体で爆発が起きた。

「何事ですか!？」

「砲撃です!監視範囲に砲撃手は見られません!」

「衛星カメラの範囲を広げて下さい!」

真耶の言葉に別の教師がコンソールを操作。

大画面のメインモニターに別のウィンドウが現れ、推測砲撃地点周囲の映像を映し出す。

「そんな…！」

「あの馬鹿どもが…！」

真耶が驚愕を、千冬が苛立ちを、それぞれの顔に浮かべる。

映し出された砲撃地点。そこには主武装である大型レールガンを構えたラウラとシュヴァルツェア・レーゲンの姿があった。

「別ポイントにIS確認！一年の専用機です！」

更に別の教師の言葉で複数のウィンドウが表情される。

そこにはラウラから離れた地点で待機している専用機とその操縦者の姿があった。

「福音、行動開始します！」

真耶がそう言った時には、既に福音は行動を開始していた。

「初弾命中！続けて砲撃を行う！」

シュヴァルツェア・レーゲンのレールガンを構えたラウラの言葉と共に再び超音速の砲弾が続けざまに放たれた。

砲戦用パッケージ『パンツァー・カノーニア』

長距離の射程と高威力を兼ね備えた大型砲門「ブリッツ」を両肩に装備。さらに遠距離からの砲撃・狙撃対策として二枚の物理シールドを左右正面に展開する装備。

この内ブリッツを用いてラウラは、福音から約五キロ離れた位置から福音に長距離狙撃を行った。

そして再びブリッツから砲弾が連続で放たれる。しかし、ラウラに接近する福音は銀の鐘で砲弾の悉くを撃ち落とす。それでいながら福音はその速度をまるで落とさない。

「距離3000、2000、クツ！」

砲撃を続けながらラウラは歯噛みをする。パンツァー・カノーニアを装備したレーゲンは高い砲撃能力と防御力を備えているが、代わりに機動性を落としていた。

それを補うためのシールドだが、超近接距離からの攻撃、懐に入らればそのシールドも意味を為さない。

そしてラウラまでの距離を500m以内に縮めた福音はスラストを一気に稼働させ、さらなるスピードでラウラに迫った。その手はラウラを捕らえようと伸ばされている。

しかし、福音がラウラに届くことは無かった。

突如として飛来した青い光条が福音に直撃。その体を弾き飛ばした。

「すまんセシリア！」

「お気になさらず!!」

攻撃の主はセシリア。超高速で文字通りの強襲を掛けた彼女は精密射撃を福音に加えていた。

ブルー・ティアーズ強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナ
ー』

本来攻撃用である六機のビットの射撃機能を封印した上でスラストーとして使用。これによりブルー・ティアーズはこの場に存在するISの中でもトップクラスのスピードを叩きだしている。

そしてビットの封印により低下した攻撃能力を補うため、スターライトよりもさらに大型化したレーザーライフル「スターダスト・シユーター」を装備。さらに高機動への対応、および高機動下での精密射撃を可能にするためバイザー型超高感度ハイパーセンサー「ブリリアント・クリアランス」を装備している。

セシリアの高速機動に翻弄された福音は広範囲に銀の鐘を発射。セシリアはそれを高機動により回避するが、機動性の低下しているラウラは弾丸の直撃コースに居た。

しかし、その弾丸はラウラの眼前で弾かれる。ラウラの目の前にはラファール・リヴァイヴ・カスタムEEを纏うシャルロットの姿があった。

ラファール・リヴァイヴ・カスタムEE防御パッケージ『ガーデン・カーテン』

物理、エネルギー、両方のシールドを二枚ずつ装備した防御型装備。計四枚のシールドに銀の鐘は全て防がれていた。

「その程度じゃ、このガーデンカーテンは落とせないよー!」

その言葉と共にシャルロットは大型ショットガンを両手に展開。弾丸を雨霰と福音に浴びせる。

自身の銀の鐘に匹敵、或いは上回りかねない実弾による弾幕を前に、福音はたまらず後退をする。追撃にセシリアがレーザーを打ち込むが、福音は後退しながら上下左右に体を動かすことでレーザーをかわす。

そしてシャルロットの弾幕とセシリアのレーザーをかわした福音がなんとか三機と距離をとった直後、赤熱する塊が高速で福音に直撃。福音のシールドエネルギーを大きく削り、その体を押し飛ばす。

「ビンゴ！今のは効いたんじゃないの〜！」

福音が視線を向けた先。そこには衝撃砲を発射した甲龍を纏う鈴が、得意げな表情で居た。

鈴の甲龍の最大の特徴である両肩の衝撃砲。そこには常とは異なるパーツが付けられていた。

機能増幅パッケージ 『崩山』
『ほうざん』

本来二門である衝撃砲の砲門を四門に増設。さらにその威力を飛躍的に高める装備。

その機能の増幅の代価として、衝撃砲の不可視というメリットが失われたが、直撃した際のダメージの大きさはそれを差し引いてもなお十分と呼べるものだった。

そして鈴の隣に、鈴が福音を衝撃砲の射程圏内に納めるため、甲龍を運んだ筈と紅椿が立つ。

紅椿はその機体性質上、追加装備を持たない。しかし、強いて言う

ならば、使い手の心が強くなっていた。

「また会ったな、福音。今度は昼のようにはいかんぞ」

静かに、しかし強い意志を込めて箒は福音に宣戦布告をする。

そして福音は五機のISに囲まれ、搭乗者たる五人の少女達の必倒の意志が込められた視線を受けていた。

「さて、役者は揃ったな」

静かにラウラが言う。

「一夏さんを、わたくしの友人を傷付けた報い、受けて頂きますわ
！」

セシリアが透き通るような色の瞳の奥に闘志を燃やしながら言う。

「暴走つていうあなたの事情には少しは同情するけどさ。正直一夏
のことで結構ムカついているからボコすわ」

軽い調子で、しかし敵意を隠すことなく鈴が言う。

「一夏の敵、絶対に許さない…！遺言は遺した？神様にお祈りはし
た？震えながら僕に倒される心の準備はOK？」

静かに、その瞳に暗い炎を宿しながらシャルロットは言う。その言
葉には敵意以上の強烈な感情が込められていた。

「お前のおかげで私は自分の未熟に気付いた。すぐに直すのは時間
が要りそうだが、気付かせてくれたことには礼を言う」

静かに箒が語る。

「だが、一夏を落としたことは別だ。悪いが敵を討たせてもらおう。雪辱を果たさせてもらおうぞ」

そう言っつて箒は右手に持つ兩月の切っ先を福音に向ける。

『敵I S五機確認。戦力分析開始。迎撃行動開始』

無機質な電子音声と共に福音は銀の鐘を発射する。

福音を取り囲む五機は、予測済みだったのか難無く回避。目標に当たらなかつた弾丸が海に落ちて爆発。

それを開戦の狼煙として、少女達の戦いが始まった。

第三十七話（後書き）

さて、一夏復活も近いわけですが…

セカンドシフトという名の魔改造をどうしてやるのかな、と。

速さと盾と射撃は決定。原作もそうだった。

…原作よりもマシなエネルギー効率を加えましょうか。
あの性能でそれなりの燃費というのはかなりのものだ。

…後、やっぱりNT-D的なのが入れなくなりました。
こつ、機体と操縦者のシンクロ率を大幅に上げる的な。でも下手したら機体に意識を呑まれそうになって感じの。

特に復活後の一夏は精神面も少し変わる、というか吹っ切れる感じになる予定なので。

話の展開的に、そういうメンタルが関わるシステムとは合いそうな気がするのです。

ご意見がありましたら感想にとどうぞ。というか下さい。

やはり読者の皆様のお考えを知りたいものでして。

お願いいたします。

第三十八話（前書き）

一夏復帰から福音セカンドシフトまで。

前半、一夏の心理世界の描写が中一臭くないか心配です… W W

第三十八話

side 一夏

静かだ。

とにかく静かだ。俺の周囲はどこまでも澄んでいた。

雲一つない空。澄み渡った海。自然の中の楽園とはまさにこの場を指すのだからよ。

「ふう」

ギシリ

軽く一息ついて俺は座っているロッキングチェアに深く背を預ける。ロッキングチェアが僅かに軋む音を上げるが、この場においてはその音も風情を感じさせる。

俺の目の前には一つのスクリーンがある。本来ならこんな空間に不似合いな人工物だが、不思議と違和感を感じない。

そしてスクリーンには幾つもの場面が流れていた。

幼なじみの少女と共に小さな体で竹刀を一心に振る俺。

剣術の師に技を見せて貰い、反復して実践しようとする俺。

師に挑み、何度もかわされ或いは吹っ飛ばされ、疲弊してボロボロになるうとも、幾度となく挑みかかる俺。

姉と師の戦いを見て、その鮮烈な光景に心奪われる俺。

倒れ伏す黒服の男達を無表情で見下し、返り血に体のあちこちを紅く染め上げている俺。

木刀片手に大勢の不良を相手に大立ち回りを繰り広げる俺。

白式を纏い、狂気の形相でセシリアを殴打する俺。

鈴と歓喜を以って、無人機に怒りを以って、ラウラに必倒の意を以って、白式と共に戦う俺。

移っているのは俺だ。俺の戦いだ。

どうよ？

そんな問い掛けが聞こえた気がした。

「どうも、なあ。戦ってばっかじゃねえか、俺」

目の前の映像を見て俺は、改めてこれまでの人生を振り返る。剣を振ってる記憶ばっかだ。

「まあ、少なくとも超マイナーな生き方だな」

ついついそうばやいてしまう。

けど、悪くないとは思ってるんだろ？

「…まあ、な」

ああ、認めざるを得ない。そんな生き方を俺は気に入っているんだよ。気に入っている。それ自体は別になんともない。なんだけども「周りに被害がなあ…」

具体的には人的被害。

特に黒服の件や不良の件は特に。別に連中に同情はしない。むしろざまあみろだ。だが

「黒服の時は千冬姉に、それ以降も誰かしらに心配かけたからなあ」

それがネツクなんだよ。

黒服の時は千冬姉に。不良の時は鈴や弾に。学園での戦いも誰かしらに心配をかけた。それが少しばかり心苦しい。

バカバカしい。小せえことで悩みやがって

それは聞き捨てならんな。小さいとはなんだ、小さいとは。

「俺なりに真面目に悩んでいるんだがな」

それが要らないってんだ

声は続く。

てめえは頂点を目指すんだろつが。誰かに迷惑かけるなんざ当たり前前だ。本気で頂点目指すなら、それを軽く無視するくらいになれ

俺は黙って声を聞き続ける。そうしろという直感があった。

振り切れ。それだけだ。振り切って好きにしろ

振り切れ、か。

そういえば、蒼炎の製作を束さんに頼んだ時、俺は千冬姉とかを振り切ったつけ。あの時と同じ、か。

何を気にする必要がある。お前が振り切ったからって、お前の周りの連中がお前を見放すわけじゃねえ。信じてやれや

「あ…」

その言葉が聞こえた瞬間、俺は胸にストンと落ちるものを感じた。信じる、か。みんなのことを信じる、か。

何故だろう。さっきまでの悩みが幻だったみたいに消えていた。体が軽い。

「そつ…か…。そうだな」

つまるところ、俺が一人でグダグダ悩んだだけ。実に瑣末な事柄だったわけだ。

「アホくさ…」

そう呟くのも仕方ないだろう。けど、少しすっきりした。

振り切るとか心配だの信頼だの、そんな理屈はどうでもよかった。

なんだろうな。気にするのが馬鹿らしく思えてきた。そうさ。何を迷う必要がある。俺が求めるのはなんだ？充足を感じる戦いだ。頂点の座だ。ただそれを目指せばいいだけ。

周りの連中がどうした。別に気にしようがしまいがどうでもいい。気にかけてたところでただの寄り道。俺の目指す道が変わることはない。

「そうだな。グダグダ気にするのはもう止めだ」

俺はロッキングチェアから立ち上がる。この上ないほどに気分がいい。

なんてことはない。要は好きなようにすればいいだけの話。それで何が起きようが、その時はその時だ。

俺は一步を踏み出し、スクリーンの前に立つ。

「別に昔を悪いとは思ってない」

確かに思うところ多々ある過去だが、悪いことばかりではなかった。

「けど、いい加減引きずるのは止めだ。吹っ切れさせてもらっぞ」

その言葉と共に俺はスクリーンを力一杯殴りつける。スクリーンはガラスのような甲高い音と共に粉々に碎ける。

細かな破片がゆっくりと宙を舞う中を俺は歩く。

破片の一つ一つに過去の映像が映っているが、気にすることなく歩き続ける。

それでいい

声の気配が遠退くのを感じた。けど、それすら気にならない。俺は歩き続ける。

いつの間にか景色が変わっていた。
夕焼けに彩られた海岸。そして、その波打際に一人の騎士と少女が立っている。

俺は黙って騎士と少女の脇を通り過ぎる。何故か足は海には浸からず、海の上に立っている。

俺は騎士と少女の脇から一步踏み込んだところで足を止めた。

「ついて来い」

自然と言葉が出る。何を言おうか、考えるまでも無かった。自然と俺の口から言葉が紡がれる。

「俺を導くか？俺と共に歩むか？どっちも却下だ。俺は俺のやりた
いようにやる。黙って俺について来て、俺の望み通りに在り続ける」

そう。なんであるかと関係ない。俺はやりたいようにやる。なぜならば

「俺の人生だ」

誰の思惑も干渉はさせない。俺は俺の意志で道を決める。もしかしたら俺のやることと、誰かの思惑が重なるかもしれない。けどそれはただの偶然だ。

俺はただ頂点を目指す。途中で寄り道をして、それも俺の選択だ。気にはしない。

けど、一つ断言できる。もしも誰かが俺を阻むというのなら。もし

も誰かが俺を害そうというなら。俺はそいつを

「切り捨てる」

かつてのように我を忘れてではなく、俺自身の意思で。そしてそれを後悔することもないだろう。

俺は歩みを止めない。

景色が急速に崩れていき、一点に凝縮されるのを感じる。その一点に向けて俺は歩く。

そして、景色の凝縮が完了すると同時に俺はその一点に達し、目を覚ました。

side out

目を覚ました一夏はかけられた布団を剥がし、ゆつくりと上半身を起す。

既に夜となっており、明かりの付けられていない部屋は暗い。

そのまま一夏はゆつくりと辺りの気配を探る。部屋の中は当然だが、襖を隔てた部屋の外にも人の気配はまるで感じられない。

訝しさを感じた一夏は腕にある待機状態の白式に専用機への通信を命じる。だが通じない。

白式は全て専用機が旅館の敷地内に存在しないことを一夏に告げた。

「…ったく。あいつら…」

僅かに舌打ちをする。

一夏は直感的に理解していた。専用機持ちが全員、福音との戦闘に赴いていることに。同時に一夏は勘の冴えを感じたが、今は気にしないでおくことにする。

「…行くか」

そう呟いて布団から立ち上がる。

極力音を立てないように、気付かれないように気配を殺しながら一夏は旅館の廊下を歩く。

非常事態による部屋での待機が続いているのか、廊下に人の気配は無かった。

足音を立てないようにすり足で廊下を歩き続ける。気配の消し方にも問題は無い。仮に誰かに見つかるとすれば、トイレなどで部屋の外に出た時に運悪く鉢合わせする時くらいだろう。

だが、旅館の出口が近づくにつれてその心配も薄らぐ。

(この分なら誰にも見つからないか)

僅かに緊張が和らぐ。その時だった。

「織斑君…?」

背後から声を掛けられた。

一瞬動揺するも、すぐに心を鎮めて後ろを振り向く。恐らくクラスメイトの誰か。努めて笑顔を浮かべる。

そして振り向いた一夏の視線の先に居たのは、一組のクラスメイトの鷹月静寐しずめだった。

静寂が部屋を出たのはたまたまだった。

確かに自室待機を言い渡されたが、流石にトイレに行く時などはその限りではない。

そして彼女もまた、用を足すために部屋を出て、そして戻る最中だった。

その途中で見た。

旅館の外へ向かうISスーツ姿の一夏を。

彼女を始めとした専用機を持たない生徒は非常事態の内容を知らされて居ないが、一夏が負傷したという情報が駆け巡ったことで幾人かの生徒は事態の内容を予想していた。

流石に全容を想像するということは無かったが、非常事態、専用機持ちの召集、負傷といったワードから何かしらの戦闘行為があったことを察した。静寂もまたそんな生徒の一人だった。

「体は大丈夫なの、織斑君」

「まあな。割となんともないよ」

一夏は事実を言った。なんともない。それは一夏にとっては決してごまかしではなかった。本当になんともないのだ。言うてから、改めて一夏はそのことに気付く。

(そついやなんで平気なんだ？割と手酷くやられたはずなのに)

撃墜の瞬間は一夏自身も覚えている。あの瞬間、一夏は絶対防御を貫いて襲いかかる熱波を、焼かれる肌を確かに感じていた。だといふのに今はなんともない。決して軽くないはずの火傷が数時間で消えていた。

「本当に平気なの？」

静寂がなおも心配そうに尋ねてくるが、一夏は軽い笑いを浮かべるとそのまま歩き去ろうとする。心配はありがたいが、彼女に構ってられないというのが今の一夏の本音だった。だが、そんな一夏の正面に静寂が回り込む。両手を広げ「通せんぼ」の姿勢で一夏の前に立つ。

「駄目」

「え？何が？ちょっと外の空気を吸いたいただけなんですけど」

「嘘」

「・・・」

一夏の目が僅かに細まる。

「どづいづことだ？」

問いかける声は穏やか。しかし、細められたその目には僅かに冷たい光が宿っている。

「織斑君、また戦いに行くんでしょ？私だって馬鹿じゃないよ。何も知らされなくても、何が起きてるのか予想するくらいはできるん

だよ。だから行かせられない」

その言葉を言った瞬間、一夏の纏う空気が明らかに変わったのを静寂は感じた。一瞬、その場にへたりこみそうになるが、なんとかこらえる。

(織斑君・・・?)

静寂がその時感じたのは恐怖だった。学園に入学して知り合ってから数カ月。彼女は一夏が時々、実姉である千冬に似た威圧感を出すのを理解していた。

だが、今の一夏が放つ空気は今までとは明らかに違っていた。まるで喉元に刃物を突きつけられるような冷たさ。怖いと感じるのは変わらないが、その質が違っている。

千冬が出す威圧感が、巨大な山を前にしているものと例えるならば、今の一夏は底なしの湖を前にするような底知れなさを発していた。それはもはや殺気と呼んでも差し支えないものだった。

「どうしても駄目か？」

再び一夏が問いかけてくる。恐怖を感じながらも、静寂は首を縦に振る。はっきり言えば怖い。だが、彼女とて易々と引きさがるつもりは無かった。

「何で？」

「心配だからだよ」

震える声で静寂は言う。僅かだが、一夏の剣呑な気配が薄れた気がした。そのまま静寂は続ける。

「友達が危ないところに行こうとしてるんだよ。止めないわけないよ」

「・・・」

その言葉に一夏の殺気が消える。

「ありがとな」

「え？」

恐怖からいつの間にか一夏の顔を視線から外していた静寂は再び一夏の顔を見た。目の前の一夏は最初と同じ、穏やかな笑みを浮かべている。

「ありがとな、心配してくれて」

その言葉に静寂は安堵の息を吐く。彼女は一夏が自分の言い分を理解してくれたと思っていた。だが、それは正しくなかった。

「でも悪いな。俺は振り切るって決めた」

「え？」

その後の言葉を静寂は言えなかった。いつの間にか目の前から一夏の姿が消えたと思ったら、唐突に意識が遠のいた。そのまま静寂は意識を手放した。

「本当に悪いな」

先ほどとは打って変わって冷静な声で一夏は謝罪の言葉を口にする。一夏は静寂の不意を突いて彼女の背後を取ると、そのまま腕で首を絞めることで彼女の意識を刈り取っていた。

意識が失われたのを確認すると、一夏は背を廊下の壁に預けるようにしてそつと静寂の体を座らせる。

そのまま一夏は静寂に背を向け、外へ向けて歩き出した。

旅館から出た一夏は昼間に飛び立った海岸にたどり着くと、一度立ち止まり空を見上げた。

「白式」

一言。主の命を受けた白式が装甲を展開し、その姿を現す。

「ん？」

僅かに感じる違和感。原因はすぐに気付いた。

白式の装備が増えていた。追加された二枚のスラスタ。射撃装備とブースターを兼ねた腰部のサイドバインダー。

白式機能追加パッケージ『白嵐』

機動性の飛躍的上昇と射撃装備の追加を主目的としたソレが白式に搭載されていた。

白嵐を見た一夏は一瞬苦い顔をするが、すぐにため息を吐く。誰の仕業か。一々考えるまでもなく、一夏は理解していた。

「まったく、束さんめ…」

篠ノ之束。彼女をおいて他に居ない。恐らくは専用機持ちが旅館を離れ、一夏が目覚めるまでの間に白式に装備させたのだろう。

さほど時間があったわけでは無いだろうが、束ならば短時間で装備させることは可能と一夏は断定。変わらない彼女の調子に一夏は再度ため息を吐く。

「全く。ぶつつけで新装備は不安だって言ったのに」

口ではそう言うものの、実際一夏の口調はそこまで嫌そうなものでは無かった。

確かに多少の不安があるのは事実だが、福音に再戦を挑むに当たって機能強化が為されたことを心強く思ってもいた。

しばし白式を見ていた一夏だが、唐突に口の端が吊り上がり、その顔に笑いが浮かぶ。

「面白いじゃないか」

追加装備を試運転無しで実践運用。まさに無茶としか言えないが、悪い気はしなかった。むしろ楽しみとさえ思っていた。

「無理は苦しいもの。されど無茶は楽しむもの、か」

以前どこかで、或いは何かで知った言葉を知らず一夏は呟く。浮かべる笑みには紛れも無い戦意が湛えられていた。

「さて、じゃあ、行くうか」

そして一夏は白式と共に夜空を掛けた。

「…ずね！静寐！」

「ん…、癒子…？」

自身の名を呼ぶ声に静寐は目を覚ました。目の前には心配そうに自分を見つめるクラスメイトの癒子と本音が居た。

「どうしたのよ静寐。こんな所で寝ちゃって。先生に叱られるわよ」

「私…」

目覚めたばかりで未だはつきりしない意識で静寐は記憶を手繰る。そして何故自分がこんな所に居るのかを思い出した瞬間、彼女は血相を変えて癒子に問い掛けた。嫌な予感が頭の中で警鐘を鳴らしている。

「癒子！織斑君は！？」

「え、織斑君？いや、見てないけど？どうしたの？」

その言葉に静寐は予感が的中したのを理解する。すぐさま彼女は癒子と本音に事情を説明。静寐の言葉に二人の顔色も変わった。

「ねえ、これヤバくない…？」

「おりむー、大丈夫かな…」

三人は沈痛な面持ちで俯く。そして癒子が顔を上げて、意を決した様子で言った。

「織斑先生に言うよ」

その言葉に静寐と本音の顔色が再び変わる。仮にそれをすれば自室待機を破ったとして彼女達も罰される可能性がある。だが、癒子は意見を変えなかった。

「私達の友達のピンチだよ。それに織斑先生は織斑君の…」

その先の言葉は言わなくとも理解できた。

静寐は本音と顔を見合わせる。そして癒子の顔を正面から見据え、と強く頷いた。

指揮室は緊迫感に包まれていた。独断で出現し福音と交戦を開始し

た五人の専用機持ち達。

真耶が通信で幾度も呼び掛けるが、応答はまるで無かった。

「通信はまだ回復しないんですか!?!」

別の教師に向けた真耶の言葉を千冬が無駄だと切り捨てる。

「恐らく連中で通信を切っている」

「そんな…」

千冬という言葉に真耶が悲痛な顔色でモニターに向き直る。

IS学園教師としての責務だけではない。彼女は純粋な教え子への心配から戦闘を行う五人を止めようとしていた。

ガラッ!

「先生!」

唐突に部屋の襖が開かれ癒子、静寂、本音の三人が姿を現す。それを千冬は叱咤する。

「入るな! 作戦行動中だ!」

「わかってます! でも!」

「織斑君が…!」

その言葉に千冬が目が僅かに見開かれた。

「間違いないです。織斑君は旅館にはいません」

教師の一人の言葉に千冬は唇を噛み締めた。

三人から事情を聞いた千冬は待機指示を破ったことを不問にする代わりに部屋へ戻るよう指示。そのまま教師の一人に一夏の搜索を指示した。

結果は先の言葉通りである。

（あの馬鹿者が…！）

眼前のモニターに映る戦闘を見ながら千冬は思考する。

戦闘は苦戦状態だった。専用機持ちが僅かに福音を押してはいるものの、状況は芳しくない。

一夏は確実に戦線へ参加すると千冬は理解していた。そういう弟だと理解していた。

だが、今どうこう言ってもどうにもならない。千冬は厳格な態度を崩さないままモニターを見据え続けた。

戦闘は膠着状態にあった。僅かに専用機持ちが押してはいるが、そ

れもさしたるダメージとはなっていない。

セシリア、シャルロット、ラウラが中心となって射撃を福音に浴びせるが、福音は持ち前の高速精密機動でそれを回避する。箒と鈴が近接戦闘を仕掛けようとすると、銀の鐘による弾幕に阻まれる。

そも、福音は広域殲滅と同時に一対多を想定して開発されたIS。現在のような状況はむしろ福音の本領と呼べる。

確実に福音に勝つならば、福音以上のスペックの機体で一気に畳み掛けるという手がある。そして今この場に存在する機体で、紅椿が唯一福音を上回るスペックを持っていた。

しかし、使い手たる箒の技量が未熟故に福音に有効的とはならなかった。

「くっ、厄介ねえ！」

衝撃砲も双天牙月もかわされた鈴が悪態をつく。それはこの場の全員の総意だった。

「このお！落ちろおおお！！」

普段からは想像もできない程に激した様子のシャルロットがマシンガンとショットガンを同時に浴びせる。だが、福音は素早く回避。

「諦めるな！兄様に無様は見せられんぞ！」

「確かに！そうですね！」

ラウラが檄を飛ばしセシリアが答える。

「はああああ！！」

二刀で筈が福音に切り掛かるが、それは福音のガントレットに阻まれる。

「セシリア！」

福音と絡み合う筈がセシリアに声をかける。福音の動きが止まっているこの一瞬、狙うには絶好の機会だった。

セシリアはすぐにライフルを構え、発射。しかし、放たれたレーザーを福音は宙返りで回避。その勢いで筈と距離を取った福音は急上昇。上空から銀の鐘による弾丸を豪雨のように降らす。

「うあああああああ！！」

「きゃああああああ！！」

堪らず悲鳴を上げる。だが、少女達の目から闘志は消えず、計九の目が福音を強く睨む。

（一夏っ…！）

（一夏さん…！）

（一夏…！）

（一夏、お願い…！）

（兄様っ…！）

その時、五人は同時に一夏を思い浮かべた。だが、それは弱気から助けを求める行為では無かった。

彼女達は信じていた。一夏の復帰を。一夏が再び戦うのを。

早く来い。そして嬉々として剣を振るえ。それでこそ織斑一夏だろ
う。

そんな思いがあった。

戦いは続く。未だ一夏は現れない。それでも彼女達は諦めない。一夏を信じている。しかし、例え一夏が来ずとも自分達で全力で福音を落とす。そんな思いがあった。

だが、一つの危機が訪れた。

攻撃の際を突いた福音が急加速。一気にラウラにつかみ掛かったのだ。

「ラウラ！」

「構うな！」

シャルロットがラウラを助けようとする。だが、できない。位置取りが悪かった。

シャルロットの位置では福音を狙うと、福音より先にラウラに攻撃が当たるのだ。

他の三人の遠距離装備は威力が大きく、ラウラまで巻き込みかねない。ラウラ自身、それを理解していた。だからこそ構うと言った。

福音の翼が輝く。もうじき銀の鐘の掃射が至近距離でたたき付けら

れる。ラウラは覚悟を決めていた。自分はこちらまでだと。

（だが福音、貴様は私の仲間が落とす！）

そう胸のうちで言っただけでラウラは腹を括った。

唯一心残りだったのは、一夏の敵を討てなかったことだった。

（すまない、兄様）

そして福音の翼の輝きが最高潮に達し、その瞬間、飛来した二つの白い光弾に福音は弾き飛ばされた。

「なっ!？」

ラウラの顔が驚愕に染まる。そして光弾の飛来してきた方向に目を向け、その顔に力強い笑みが浮かんだ。

それは他の四人も同様だった。全員の顔に笑みがあった。

「来たのか…!」

感慨を含むように箒が言う。

「来てくれた!来たんだ!」

押さえきれない歓喜と共にシャルロットが声を上げる。

「まったく、遅いのよ!」

言葉は文句だが、隠しきれない喜びを以って鈴が言う。

「待ちかねましたわよ！一夏さん！」

最高の戦友（とも）の復帰に最大限の闘志を剥き出しにセシリアが戦友の名前を呼ぶ。

織斑一夏、白式・白嵐と共に福音撃墜戦線に参加。

「会いたかったぜ、福音」

白嵐のサイドバインダー前面に付けられたビームガン。存在する三つのモードの内、威力と射程に優れたチャージモードから通常モードに切り替えながら一夏は高速で福音に迫る。

同時に一夏は白嵐を超高速の巡航形態から機動制御に優れた通常飛行形態に変型。

そして一夏はチャージした瞬時加速を発動。一気に福音に迫る。そして展開した蒼炎を福音にたたき付けた。

『kyeeeeeeeeeee!!』

浸を込めた一撃。防ぎこそすれ、その重さに福音が苦悶の悲鳴を漏らした。

「始めようか。全力の戦いを！」

福音に蒼炎を押し付けたまま一夏は獰猛な表情で言う。

蒼炎を振った腕、衰えの見えない覇気。一夏は完全な復活を果たした。

福音と密着したまま一夏はサイドバインダーを展開。至近距離からビームガンを浴びせる。

エネルギー効率への配慮から低威力に設定されたソレは、本来なら大したダメージを与えることはできない武装だが、至近距離から連続で撃ち込めば多少相手を削ることができる。

さらに一夏は蒼炎を右手だけで持つと左腕装甲のブレードを展開。刺突の形で幾度も福音を切り付ける。

『一時待避。敵戦力再分析。対処手段再構築』

「っ！？こいつ！」

福音が自分から離れようとしているのを察した一夏は、させまいとより強く蒼炎を押し込むが、これを福音は一度身を引くことで受け流す。

込めた力のベクトルを散らされた一夏は軽く姿勢を崩すも、すぐに立て直し福音に向き直る。

だが福音は瞬時加速を発動。両手足に一つずつ、計四つのブースターの同時着火による圧倒的加速で一気に戦闘宙域を離脱した。

「くそっ！」

福音の去った方向を見て苛立たしげに舌打ちをする一夏の側に五人が寄ってきた。

「一夏さん！」

「兄様、無事だったか」

「セシリア、ラウラ。まあな」

二人の呼びかけに一夏は簡潔に答える。

「一夏あー！」

「ようシャルってちよっ！」

「ちよっとシャルロット！あんた何やってんのよー！」

一夏の側に寄ってきたシャルロットが飛び付くようにして一夏に抱き着く。シャルロットのいきなりの行動を一夏は半ば不可抗力的に受け止め、鈴が抗議の声を上げる。

「あたしと代わりなさいよー！」

「待て鈴コラ！」

思わず一夏は鈴にツッコミを入れる。それと同時に丁寧にシャルロットを引きはがす。一夏の復帰にシャルロットは心底幸福そうな表情を浮かべている。

「一夏…！」

どこか気まずそうな様子で篝も寄って来る。昼間の一件での負い目からか、一夏とまっすぐ顔を合わせられていなかった。

「篝か」

言っで一夏は篝の顔を見つめる。そして軽く頷くと少し面白そうな表情をしながら言った。

「へえ。ちつとはマシな面構えになったじゃねえか」

「え？」

篤が聞き返そうとするも、既に一夏は篤から視線を外し、全員を見回していた。

「福音、叩きに行くぞ」

聞き返す者は居なかった。ただの一言で全員が理解していた。

話は後だ。何よりも先に目的を果たす。

そして六人は福音の一時撤退により出来た僅かな時間で作戦を構築。一夏を戦闘として福音へ向けて飛翔した。

先の戦闘宙域から更に10キロ程離れた海域、周囲に岩礁や岩ばかりの無人島が幾つも点在するそこに福音は居た。何かを感じ取ったかのように福音が首を動かす。その視線の先には編隊を成して向かって来る六機の敵の姿があった。

「やっば気付いたか！行動開始！」

一夏の言葉に合わせて各機が動く。先頭の一夏と篤はまっすぐ進み、残る四人はそれぞれ散開する。

『銀の鐘、最大稼働』

電子音声と共に福音が再び弾幕を打ち出す。その目標は一夏と筈。だが、その二人の前に割り込む存在があった。

「ここは僕達に任せて！行くよ、ラウラ！」

「了解した！」

シャルロットとラウラが弾幕の前に立ち塞がる。二人の顔には自信が溢れていた。

「行くよ！！」

瞬間、シャルロットのラファールから凄まじい数の弾丸が放たれた。

放たれた弾丸は福音のものを上回りかねない弾幕となって銀の鐘を打ち落とす。

大口径ショットガン四丁の連続発射。

両手に一丁ずつ持った大口径ショットガンを発射。直ちに高速切替で別の二丁に換装。この繰り返しで発射後の硬直を無視して連続射撃を可能としていた。

「私も居るぞ！」

ラウラの言葉と共にシュヴァルツェア・レーゲンから六本のワイヤーブレードが射出。六本のワイヤーはラウラの意を受けて縦横無尽に宙を飛び、壁を編み上げていく。

圧倒的弾幕とその間を縫うように編まれた壁に福音の攻撃はその尽くを打ち落とされた。

そして弾幕の晴れた先に一夏と箒が飛び込む。

無傷で自分に迫る二機のISに福音は後退を決定。距離を取ろうとする。

「させると思ってたの！」

「お覚悟を！」

上から聞こえた声に福音が首を上げる。そこには自身に狙いを付けた発射直前の衝撃砲とライフルを構えた鈴とセシリアの姿があった。

「こいつを」

「受けなさい！」

最大出力で放たれた衝撃砲とレーザーが福音に襲い掛かる。

かろうじて直撃は避けたが、その余波に体を吹き飛ばされる。なんとか姿勢を立て直した福音は前方を見て、一夏と箒の姿が無いことに気付く。

直後、福音の下から赤いレーザーと光刃が襲い掛かる。

僅かに掠りながらも回避した福音は下を向き視線の先、攻撃を放った箒を討とうと翼を広げる。

「かかったな？」

篝の顔が不敵な笑みを浮かべた。

その篝の顔を見た瞬間、福音は反射的に背後を向いた。

その直後、最大出力の瞬時加速により上空から一瞬で福音に接近した一夏が振るった蒼炎により、福音はその片翼を切り裂かれ、咄嗟の防御でかざした左腕に刃がたたき付けられた。

奥義『鎚刃』ついは

一夏が修める剣術の奥義が一。

浸をより発展させたその技は、何より一撃の重さに重きを置いていた。

体捌きにより最小限ながらも最大限の力を溜め込む腰の捻りの後、渾身の力で刃を浸と共に敵にたたき付ける。

その一撃の重さは敵の鎧を容易く砕き、防げてもその身を貫く衝撃に決定的な隙となる硬直を生み出させる技。

瞬時加速による急加速を更に福音の間近で急停止させた慣性を勢いへと変換し、ISの人の域を超えた膂力で放たれた鎚刃の一撃は、それを受けた福音の左腕の装甲を大きく砕き、衝撃で福音の動きを確かに止めた。

「今だあつ！」

すぐさま福音から離れながら一夏が声を張り上げる。

「任せて！」

「今度はぶちかますわ！」

「狙い撃たせて頂きますわ！」

「覚悟しろ福音！」

一夏以外の全員が各々の遠距離兵装を構え、福音に狙いを付ける。

「撃てえ！！！」

そして筈の号令のもと、複数の火器が一斉に火を噴く。ラウラのブリッツによる超音速のレールガンが、セシリアの高出力レーザーが、鈴の赤く燃え上がる衝撃砲が、シャルロットの大口徑グレネードが、そして筈の雨月と空裂のエネルギー刃が、一挙に福音へと殺到する。

そして複数の砲火がまとめて福音へと着弾。轟音と共に福音は爆発に呑み込まれた。

『kiaaaaaaa!!!!』

絶叫とも取れる電子音声が響き渡る。そして爆発が収まり、次に煙が晴れた。

『kye……kye……aaa……aa……』

福音はなおも倒れずにいた。五人の視線が険しくなる。だが片翼をもがれ、オーバーキルとしか言えない砲火に呑み込まれた福音は既に満身創痍の様相を呈していた。

ガシャリ

福音は自らの背後で上がった音を感知した。そして振り向いた目の

前に、大口径のショットガンを眼前に付きつける一夏の姿があった。それはシャルロットの武装の一つだった。追撃開始前、シャルロットは一夏に武装の一つであるショットガンを一丁、使用許可をした上で貸していた。

一夏自身も、もしかしたら何かの役に立つかもしれないと判断し、そのショットガンを受け取っていた。

突き付けられたショットガンに福音がうるたえるのを一夏は見た。それを見て一夏は何も言わない。感慨に浸るのはまだ先だ。

引き金に指をかける。ふと、以前親友と一緒に遊んだアクションゲームの決め台詞を思い出す。そして自然と、その言葉が口を突いて出た。

「大当たりだ
Jack Pot」

ズガン！ズガン！ズガン！

引き金を三度引く。ゼロ距離からのショットガンという強力な一撃を計三回、頭部に撃ち込まれた福音は遂に崩れ落ち、その身を海へと落とした。

「ふう……」

一応の決着を付けたことに、一夏は軽く息を吐く。そしてその顔に笑みが広がる。

「俺の、俺達の勝ちだ」

戦いへの、勝利への充足感を込めて宣言した。

五人が一夏の元に寄って来る。それを一夏は笑って迎えた。

「よう。やったぜ」

その言葉に五人の顔にも笑みが浮かぶ。

そのまま一夏はシャルロットに近寄り、ショットガンを礼と共に返却した。

「さて、後はやっこさんの回収だな」

そう言っで一夏は海に近付き、一度五人から離れた。わざわざ誰かを連れていくまでもないという判断からだった。

ピーッ

『警告。攻撃反応あり』

突如、白式が警報を発した。

「一夏っ！..!」

ドンッ

そして一夏が警報を確認するよりも早く、一夏は箒に体を突き飛ばされていた。まるで、昼間の流れを立場を変えたかのように。

「箒...?」

一夏の目に映る箒は安堵の表情を浮かべていた。

直後、海面を貫いた銀の奔流が箒の体を飲み込み、その体を近くの岩礁へと吹き飛ばした。

「なっ…!？」

「何事だっ!？」

一夏が驚愕の表情を浮かべると同時に、指揮室にも緊張が走った。専用機持ちの独断先行、一夏の乱入など想定外の事態があったものの、福音を撃墜したことには部屋の一同が安堵していた。モニターも福音の沈黙を確認。その矢先の、箒への攻撃だった。

「これは…!海中に高エネルギー反応有り!!そんな…!福音!？」

一人の教師の報告に指揮室が固まる。それは千冬も例外ではなく、彼女もまた厳格な表情を消して、焦りの浮かんだ顔でモニターを見ている。

そしてその口から信じられないという風に言葉が紡がれた。

「馬鹿な…、再起動…だと…?」

撃墜された箒を除く現場の五人も、知る由は無かったが、千冬同様に驚愕の表情を浮かべていた。箒が撃たれたことへの怒り、心配もあるが、それ以上に眼下の海で起きていくことへの緊迫が強かった。

ちょうど福音が落下したポイント。そこから蒸発した海水が水蒸気の柱を作っていた。

海の中に球形のエネルギーの膜があり、その中にうづくまるような姿勢の福音の姿があった。それはまるで、繭の中で羽化を待つ幼生のような姿だった。

球が上昇する。中の福音がその四肢を伸ばす。

そして、その背から銀色に輝く光の翼が生えた。

幻想的でありながらしかし、見る者に圧倒的プレッシャーを与える光景を前に、五人は言葉を失う。そして、ラウラが静かに呟いた。

「オカシ第二形態移行……………」

戦いはまだ終わってはいなかった。

第三十八話（後書き）

さて、いかがでしたか。

今回、自らの内面で一夏は過去にふっ切りをつけました。

これが今後どう影響するかというと、単に容赦が無くなります。

模擬戦や試合ならまだしも、実戦で敵に対しては……本気で取りに行きます。何をかは、あえて伏せませんが。

具体的には某秋さんがスタボロになる予定だったり。

他には、我を忘れてキレるのではなく、冷静を保ったままキレることが多くなるかと。

この辺りはまた別の時に詳しく書けたらなと思っています。

で、肝心の福音戦。

どうでしたか？作者としては結構気合いの入った感じなのですが、皆さんのご感想、お待ちしています。

後、白式の第二形態の名前、何か案がありましたら遠慮せずにごうぞ。

ではまた次回。

第三十九話（前書き）

白式セカンドシフトと福音戦決着です。

第三十九話

海面が大きく波打つ。突如として海中で発生した高エネルギー体により、その周囲の海水が一気に蒸発。空いた隙間を埋めるように流れ込む海水がさらに蒸発。

その連鎖により高エネルギー体、第二形態移行を行っている福音周辺には水蒸気を伴う上昇気流が発生し、それに伴い生まれた風が海面を揺らしていた。

！

歌い上げるような声が響く。背中から生える光の翼を伸ばす福音から発せられるその声はまるで、天使があげる産声のごときものだった。

そして光の膜が掻き消え、第二形態移行を完了した福音が戦場に舞い降りた。

「マズイツ！総員散開っ！！！」

危機感を露わにしたラウラの言葉にその場の全員が弾けるように飛び、福音から距離を取る。

「箒さんはっ！」

「今は駄目だ！先に奴をなんとかするぞ！！！」

箒を気遣うセシリアの言葉にラウラが答える。箒を心配する思いは

この場の全員が抱くものだったが、眼前の福音の存在がそれを許さなかった。

第二形態移行

戦闘経験を積んだISがコアの自己進化機能により更に能力を上げる現象。

一夏の白式という異例を除き、全てのISはこの第二形態移行後に単一仕様能力を発現させることから、これを果たしたISは例えそれが第二世代型であっても非常に高い能力を有する。

そして目の前の福音は第三世代型。さらに軍用という点からその基本能力はかなり高い。それは先ほどまでの戦闘から明らかだった。それほどのISが果たす第二形態移行。ラウラのみならず、倒れた筈を除く五人全員が今の福音の脅威性を感じ取っていた。

『La
』

再び歌うような電子音声。直後、福音の翼から凄まじい数の弾丸が放たれた。主武装『銀の鐘』。しかし、放たれる弾丸の数は先ほどまでの比では無かった。

「な、なんなのよこの数!!」

「やはり性能が強化されているか!!」

弾丸の余りの数に鈴が瞠目し、ラウラが苛立たしげな声を上げる。戦闘中である五機の専用機の中でも機動性が劣る状態にある二人の機体は弾幕をかわしきることができず、いくばくかその身に弾丸を受けていた。

幸いにして強固な物理シールドを備えているラウラは大きなダメージとはならなかったが、鈴の機体はそうは行かず僅かに装甲が削られ動きを止めてしまう。

そしてその隙を福音は見逃さなかった。翼の一部が福音の頭上で円を形作る。そして円の中心にエネルギーが集中し、銀の砲撃となつて鈴に襲いかかった。それは箒を撃ち落とした一撃と同種のものだった。

「きゃあっ!!」

砲撃の直撃により甲龍が弾かれる。見た目に大きな損傷は無いが、代償はシールドエネルギーの大幅な喪失と、機能低下による戦線離脱だった。

(ちっ!! 一気に二機かよ!!)

鈴が落とされたのを見た一夏は胸の内では悪態をつく。先ほどなんとか確認した筈同様、目立った損傷が見受けられないのは幸いだったが、どちらの機体もしばらくは戦線に出られないのは明らかだった。

そして福音の猛攻はなおも続いた。

セシリアのレーザー、シャルロットのショットガンとマシンガン、ラウラのレールガン。三方向からそれぞれ異なる射撃が打ち込まれるが、福音はさらに精度の上がった飛行で回避。

しかし射撃により制限された機動を突くようにして一夏が斬りかかるが、それを福音は翼の一部を自身と一夏の間盾のように割り込ませて防いだ。

「なんだとっ!?!」

予想だにしていなかった福音の防御に一夏の顔が驚きに彩られる。そしてすぐに厄介だと言わんばかりにその顔が歪んだ。

(まさか翼を盾にするとはな。エネルギー体だから浸は通らない。零落白夜にしても使ったところでわざわざ受けちゃくれねえ!)

盾にされた翼から放たれた弾丸をかるうじて捌きながら一夏は後退する。強化された福音の性能と自身の手札との相性の悪さに思わず歯噛みをしていた。

そして福音は新たな標的に狙いを定め、その翼の矛先を向けた。

「くっ、先程よりも速いつ…!」

移動をしながらレーザーを福音に撃ち込むセシリア。だが、福音が自分に狙いを定めたと判断した彼女は速やかに攻撃を中断。スラスタを吹かし福音から距離を取ろうとする。

そして一度福音に背を向けたセシリアは確認のために首を動かし福音を見た直後、驚愕に目を見開いた。

高機動パッケージを装備した自身の愛機との距離をあつという間に詰めていく福音の姿があった。

その翼は福音の真後ろに張り詰めるように伸ばされており、そこから光のもやのようなものが吹き出していた。

(まさか、翼からエネルギーを放出して推力に…!?)

飛行用ユニットからエネルギーを放出して推力にするというのはISとしてはありふれたものだが、福音のソレは規模が違う。

自身の大きさを上回るサイズの翼全体からの推力の放出。もはや強引な力技としか呼べない手法で福音は驚異的なスピードを出していた。

ドンッ！

再度発動した福音の瞬時加速。さらなる加速により福音はセシリアに急接近。セシリアが策を講じるより早く、セシリアの正面に回り込んだ。

「まだっ！」

ライフルを構える。至近距離での使用には適さないが、この距離ならば狙うまでも無く当てることは可能。至近距離からの高出力レーザーで福音にダメージを与えようとする。

だが、行動は僅かに福音が早かった。

福音は一度翼を大きく広げる。エネルギー供給量の一時的増加により、文字通り翼はそのサイズを巨大化。そしてセシリアの体を包み込んだ。

「ああああああああっ！！」

翼が作り上げた結界に捕われた瞬間、セシリアの全身に衝撃が走った。

セシリアへの接近時に福音が使用した翼からのエネルギー噴射、それを攻撃へと利用したのだ。

360度全包围から襲い掛かる衝撃は翼に密閉された空間を乱れ飛

び、セシリアの全身に容赦の無い攻撃を加える。

そして翼が解かれる。全身を襲う衝撃から解放されたセシリアは痛みに視界が霞みながらも、一連の流れから取った福音の行動データを全員のISに転送。そして鈴同様、海面近くまで機体を落とし、そのまま動かなくなつた。

「おのれっ！よくも私の仲間をつ！！！」

もはや怒りを隠そうともしないラウラがブリッツの連射を福音に向ける。

初弾の一発だけ直撃を受けるが、シールドにより福音本体へのダメージはさほど大きくはならない。そして二発目移行をかわしながら福音はラウラへと向かう。

「ラウラ！」

「行かせねえ！」

福音の動きに気づいたシャルロットと一夏が行動を起こす。

シャルロットは両手にショットガンを展開。ラウラに弾が当たらないよう配慮した上で福音に狙いを付けて撃っていく。

一夏もまた、サイドバイダーのビームガンを牽制として撃ちつつ福音に接近する。

だが、ショットガンは銀の鐘により迎撃され、一夏の突撃は再び振るわれた翼により阻まれる。

そして二人の攻撃を捌きながらも福音はラウラへの接近を止めず、その距離を詰めた。

「まだだっ！」

放たれるワイヤー。六本同時に放たれたソレをしかし、福音は無造作に振るった翼で難無く打ち落とす。

そして振るわれた翼が福音の真後ろに、まるで引き絞るかのように折り畳まれた次の瞬間、翼による刺突が幾度となくラウラに撃ち込まれた。

「ぐうっ……！」

物理シールドで何とか耐えるラウラだったが、翼による刺突は止むことはない。さらに刺突がシールドに当たるたびに接触点でエネルギーの爆発が起き、ラウラの体力とシールドエネルギーを削っていく。

そして耐え切れずにラウラが僅かに姿勢を崩した瞬間、福音は一際強烈な刺突を一点に集中して放つ。

「うあああああっ……！」

刺突と爆発、両方の衝撃によりラウラの体は高速で弾き飛ばされ、近くの岩礁にたたき付けられそのまま倒れ伏した。

「一夏っ！」

「分かってる！」

シャルロットの呼びかけに一夏が答え、二人は反対方向に散開して福音から距離を取る。

「一気に四機落としゃがった！クソッ！ますます化け物じみてやが

る！」

「それよりもセシリアからのデータ！あの翼、かなり汎用性が高いよ！」

福音から距離を取りながら通信で会話をする。

セシリアが落下直前に送ったデータ。そこに記された事柄は単純。

福音の翼は走攻守全てにおいて高い能力での運用が可能ということ。

想像を超える福音の力に一夏とシャルロットは険しい顔を崩さずにした。

「…僕が行く」

「は？」

不意にシャルロットが言った言葉に一夏は疑問を浮かべる。そして後に続くシャルロットの言葉に一夏は顔色を変えた。

「一か八か僕が仕掛けるよ。その後に一夏、お願い」

固い意志が込められた言葉。だがそれを一夏は怒鳴り声で返す。

「ふざけるな！やられる気がよシャル！！」

それは行動の無謀さへの怒りだけでは無かった。シャルロットがやられるかもしれないことへの心配だった。

「大丈夫。だって一夏が居るもん」

通信の向こうでシャルロットはとても穏やかな声を出していた。

「一夏。前に行ったでしょ？僕はね、一夏のためなら何でもする。福音に突っ込むくらいへっっちゃらだよ」

「シャル……！」

一夏は歯を食いしばりながらシャルロットの名を呟く。一夏は理解していた。今の一夏とシャルロットは似た者同士だということ。やると決めたら制止したところで無駄なことを。

「じゃ、一夏。後はよろしくー！」

それだけを言っただけでシャルロットは通信を切断。福音に向かって機体を走らせた。

瞬時加速による特攻。福音が迎撃に弾丸を撃ち出すが、ラファールの四枚のシールドがそれを阻む。

「おおおおおおおー！」

雄叫びと共にシャルロットは福音との距離を詰める。その最中、ラファールの左腕の装甲がパージされ、中の改良版グレー・スケールが姿を現した。

福音は弾丸の発射を中断。近接戦闘でシャルロットを迎え撃とうと翼を引き絞る。

そして二機が激突した。

「シャル……」

激突の瞬間に走った閃光に僅かに目が眩んだ一夏が見たのは、セシリア同様に翼からの衝撃波に身を貫かれ、力無く真下の岩礁に落ちていくシャルロットの姿だった。

ドンツツツ！！

爆発音。

白嵐を高速機動形態に変えた一夏が瞬時加速を使用した音だった。

一夏の接近に気付いた福音は弾丸を発射。しかし一夏は四機のスラストー全てにエネルギーをチャージ。そして再度瞬時加速を発動した。

ドンツ！ドンツ！ドンツ！ドンツ！

四つのスラストーの瞬時加速を別々に発動。それは個別連続瞬時加速^{リスト}。連続瞬時加速を超える瞬時加速の発展技能だった。この技を使い、白嵐により強化されたG緩和機能により反動がほとんど無くなつた鋭角転換で福音への距離を詰める。

福音が翼を再び盾にするが、構うことなく一夏は蒼炎の刃をたたき付ける。そのまま福音は翼を切り裂かれた。

直前に発動させていた零落白夜が福音の翼を切り裂いたのだ。

そのまま一夏は福音の脇をすり抜けると制動をかけると同時に向きを変え福音に向き直る。再度瞬時加速を発動し、福音に突撃をかけたようにした直後、一夏の全身を衝撃が襲った。

いつの間にか福音はもがれた翼を復元させていた。そしてそのまま翼を大きく広げ、光のようなものを一夏に浴びせていた。それはセシリアやシャルロットが受けた衝撃波だった。

そして復元はそのまま一夏に接近。衝撃波を浴びせながら翼の一部を一夏にたたき付ける。だがそれを一夏は蒼炎で受け止める。

「つつつつつ！！」

怒りが声にならない音となって一夏の口から漏れる。

何故福音の翼が元に戻っているのか。実際はエネルギー体だけに、必要なエネルギーを改めて送り再構成しただけなのだが、今の一夏はそんなことに興味は無かった。

今の一夏はただ眼前の敵を落とすことだけに意識が集中していた。

銀の福音

「お前は、落とす…！」

吐き出された言葉は意外にも冷静の色を帯びていた。

一夏自身、怒りを抱きながらも冷静を保つ自分を自覚していた。怒りに前が見えなくなるといふことはない。ただ必倒の意識があり、その意識に思考が研ぎ澄まされるのを感じた。

(このまま…！)

福音と密着している今、多少無理をしても零落白夜を発動させ、一気に勝負をつけることを決意。そして福音に隙を作らせるために弾き飛ばそうと腕に力を込めた瞬間、更に強烈な衝撃が一夏を襲った。

福音の翼から放たれる光が量と勢いを増していた。蒼炎と絡み合う翼の勢いも相まって押し飛ばされそうになるが、一夏は白式のスラストターを吹かしてその場に留まる。

(グウツ！エネルギーが…！)

白式が示すシールドエネルギー残量。個別連続瞬時加速と零落白夜の使用、そして今もなお加え続けられる攻撃によりその残量がその数を少ないものにし、今もその数を減らしている。

このままの状態が続けば遠からず白式はエネルギー切れを起こして行動不能になるのは明らかだった。

(ここまでののかよっ…！)

らしくない。そうは分かっているても、暗い考えが一夏の脳裏をよぎった。直後、青い閃光が福音に当たった。

「なっ!?!」

それに驚いたのは一夏だった。すぐさまハイパーセンサーで首を動かすことなく閃光の発生源を探る。否、誰がやったのか一夏には分かった。そして一夏は見つけた。海面に僅かに突き出た岩の上、そこで膝をつきながらライフルを構えるセシリアの姿を。

「一夏さん」

通信でセシリアの声が聞こえる。

「まだ終わっていませんわよ。貴方にはわたくし達が」

だが、その言葉は続かなかった。一夏に攻撃を加えながら福音が弾丸を数発発射。セシリアめがけて飛来し、着弾。爆発の後、セシリアは岩の上に力無く倒れていた。

「セシリアア！！」

言葉と共に一夏は再び福音を見据えた。蒼炎を握る手に力が籠る。

(ふざけるなよ……)

脳裏に先ほどのセシリアの顔が浮かぶ。見えたわけではない。しかし、想像に容易かった。きつと笑っていたのだろう。

セシリアだけでは無かった。箒の、鈴の、シャルロットの、ラウラの顔が浮かぶ。仮にここで自分が倒れたら彼女達はどうなる？福音に今度こそ討ち取られるのか？

(ふざけるなよ……！)

五人だけでは無かった。クラスメイト達の顔、親友の顔、教師達の顔が脳裏に浮かぶ。自分が抜かれたらどうなる？福音は彼らに、彼女らに危害を加えるのではないか？

ふと、先ほどまで自分が受けていた爆撃に蹂躪され、倒れ伏す顔見知りの姿を幻視した。とてつもなく気に入らなかった。

気に入らない。

(ああ、そうだ。気に入らないんだ)

思い至れば実に簡単な話だ。一夏は気に入らないだけなのだ。知り合いが眼前のどこの馬の骨とも知れない輩に痛めつけられるのが。別段、大層な大義や、正義論や善悪を語るつもりは無い。本当に気に入らないだけなのである。

(そうだな。簡単な話だ。気に食わないからボコす。それでいい)
もはや一夏の頭から任務のことなどは掻き消えていた。ただ気に入らないから目の前の福音を倒すことしか頭に無かった。

(ああそうさ。んなふざけた真似を)

「 させるかあああああ!!!!!! 」

『 Second Shift , Ready 』

白式が光に包まれた。

夜空を染め上げんばかりの白が白式から放たれ、そして大きく包みこんでいく。光が放つ力により、福音はその身を白式から、一夏から強引に引きはがされた。

白く輝く白式の装甲が形を変えていく。

四機あるウイングスラスターとサイドバインダーはより肥大化し、見る者に圧倒的スピードを彷彿とさせる形になる。

両手足の装甲も、一夏の体にフィットするかのようなスリムさは無くなり、スラスターどうように肥大化。しかし、その形に鈍重さは感じられず、しなやかな力強さを印象付けている。

特徴的なのは、左腕の装甲に取りつけられた実体盾である。

そして装甲は両手足にだけでなく、一夏の胸部から肩にかけても装

着される。これにより装甲により覆われていない個所はほぼ大腿部と上腕部のみとなり、第二形態移行を果たした白式は他のISに比べ、より武人然とした空気を纏うこととなった。

『Second Shift Complete・白式・ゆきみかずち雪御雷
機動』

モニターに映し出される文字を一夏は静かに見つめ、確認ボタンを押す。

そして白式を包む光が一気に解け、海面を白の奔流が覆った。

貴方の望む力を

澄んだ女性の声が聞こえた気がした。

一夏は軽く目を閉じると、一気に見開き、高速で福音へと突貫した。

白式の第二形態移行は旅館の教師陣も確認していた。

モニターを見る教師の目は一様に、白式の光に心を奪われたような呆然としたものだった。

「白式の第二形態、雪御雷…」

真耶が静かに白式の新たな名を呟く。彼女もまた、白式の変貌に目を奪われていた。

そんな中、千冬のみが変わることの無い冷静な視線をモニターに向けている。

（それがお前の求めた力か。一夏）

姉弟故に働いた勳、とでも言うべきか。千冬は白式の第二形態移行が単純なISの自己進化では無いと思っていた。

恐らくは弟が力を求め、ISがそれに応えた。きっと、一夏と白式の関係は多くのIS操縦者が考えるパートナーではなく、主と主の敵を忠実に斬り伏せる剣のような、主従の関係なのだろうと千冬は思った。

そして千冬はそうだと確信していた。今なお揺らがぬ最強の称号を持つIS操縦者としての直感が告げていた。アレはそう白式いうものだと。

そして千冬は静かに弟の戦いを見つめる。

第二形態移行を果たした白式。特筆すべきは機動性だった。高機動形態を使用していないにも関わらず、福音を翻弄する速さ。そして機動の制御性の高さ。どちらも現行のISとしては破格のものだった。

一夏は360度あらゆる方向から福音に切り掛かる。福音は翼で一夏の攻撃を捌くが、見る者が見れば捌くだけが限界というのが明らかだった。

福音も反撃として弾丸を放つが、それを一夏は軽々とかわす。業を煮やしたらしい福音が一夏から大きく距離を取る。そして頭上

包むように翼を丸める。

一夏が訝しむ顔をするより早くその翼が勢いよく解かれる。それと同時に弾丸が大量に放たれる。だが、弾丸は一夏に向かわずに福音の周囲を漂う。そして一斉に一夏へと向かってきた。

「その程度！」

一夏は余裕と共に回避。そして再び福音に切り掛かるうとして、ハイパーセンサーで見た。かわした弾丸が海へ落ちずに方向を変え、再び一夏に向かって来るのを。

「なっ!?!」

驚愕に染まる一夏の顔。慌てて再度回避。しかし弾丸は尚も一夏を狙ってくる。

「ホーミング追尾型かよ！」

回避を続けながら一夏は声を荒げる。弾丸は速度を一切落とすことなく一夏を狙い続ける。

救いはホーミング弾の制御のためか、福音が更なる攻撃をしてこないことだろうか。

「ええい!かくなる上は!」

その言葉と共にスラスターが高稼動を開始する。

白式・雪御雷高機動形態『ひやくせん白閃』

そのスピードは正真正銘音速を超え、現行IS最速。機動性重視の調整を施された紅椿をも上回る速さで一夏は空を駆けた。

一気に距離を離れた一夏を弾丸が追いかける。一直線の弾道、それこそが一夏の狙いだっただ。

ある程度の距離を離れた所で一夏は白閃を解除。同時にスラストを反転。噴射口を前面に移動。急制動、瞬時加速のチャージを同時に行う。

更にサイドバインダーの砲門も開いた。

射撃兵装搭載型サイドバインダー「迦楼羅」かるら

インド神話の神鳥の名を関した装備。

その砲門が大きく開き、白いエネルギーが集束していく。そして弾丸が一夏に迫った瞬間、一夏は強化された瞬時加速を発動。弾丸の上を飛ぶように回避。同時にチャージした迦楼羅を発射。白の砲撃が弾丸を飲み込む。そのまま一夏は姿勢を動かすことで弾丸の全てを砲撃で焼き払った。

そして砲撃を終えた一夏は再び福音に切り掛かった。

一夏の戦いを見ていたのは旅館の教師だけでは無かった。

「ぐっ…」

たたき付けられた岩礁の上で箒は体を起こした。
その視線は交戦を続ける一夏と福音に向けられている。

「一夏…」

「箒、あんた無事だったんだ」

いつの間にか箒の近くに来ていた鈴が箒に話し掛けた。
鈴に気付いた箒が周囲を見回すと、それぞれ異なる方向からやってくるセシリア、シャルロット、ラウラの姿を見つけた。
そして一夏を除く五人が集った。

「どうやら皆さん、無事のようにすわね」

「命だけは、だけど」

セシリアの言葉にシャルロットが皮肉めいた言葉を言う。

「機体は無事というわけではない。損傷はともかく、シールドエネ
ルギーの残量が心許ない」

そう言うラウラの言葉には悔しげな感情が滲んでいた。
五人は揃って上を見上げる。その視線の先では今も一夏と福音の激
闘が繰り広げられている。
幾度も交差する二機のES。弾丸をかわした一夏が福音に接近し、
福音は翼を振るい迎撃をする。その翼を一夏は両手足四つの剣で捌
き、福音に切り付ける。

「白式も第二形態移行をしたらしいな」

ラウラが冷静に分析する。

篠ノ之束が手掛けた第四世代相当のIS、その第二形態移行。もたらされる性能の高さと、僅か数ヶ月で代表候補にも引けを取らなくなった一夏の技量を鑑みれば、福音と渡り合う現状は理解できる。

「結局、私は守られるだけなのか…」

悔しさを隠そうとせずに筭は言う。

「それは違うよ」

そう言ったのはシャルロットだった。

「そんなことない。僕達にも、一夏の助けになれることはある」

その言葉に明確な根拠は無かった。シャルロット自身も根拠など最初から無い。ただ、一夏の助けになりたい一心で出た言葉だった。しかし、強い意志で以って発せられたその言葉は、残る四人の心を奮い立たせるという、言った当人も予想しなかった効果を発した。

「そうですね。まだわたくし達は一夏さんの力になれる」

「このままじゃ、美味しいとこ全部一夏に持ってかれちゃうわ。…なんか癪ね」

「よし、決めたぞ。私は兄様を助けて、その後に頭を撫でてもらうのだ」

セシリア、鈴、ラウラが各々心を奮い立たせる。その姿にシャルロットは満足そうな顔をして、筭に顔を向けた。

「箒はどうする?」

「私は……」

呟く言葉には不安があった。

「私はなれるのか? 一夏の力に。守られてばかりの私が」

「それは箒次第だよ」

不安な顔のままの箒を諭すようにシャルロットが言う。

「なれるかどうかじゃない。なるうと思えばなれるものだよ。というか箒、空気読んでよ。ここはなるって言う場面だよ」

その言葉に箒は面食らったような呆けた顔をして、そして笑った。

「そうだな。その通りだよ。私は一夏の力になる。なると決めた」

そして箒の顔にも闘志が宿り、満足そうにシャルロットは頷いた。

立ち上がり箒は一步を踏み出す。

「行こう。一夏を助けに」

直後、紅椿がその総身を金色の光に包んだ。

「これは……」

驚く表情を浮かべる箒の目に、紅椿のモニターが移る。シールドエネルギーの残量を示す数値。その値が急激に回復し、一気にシールドエネルギーを全快させる。そしてモニターの中央には一つの単語が映し出されている。

『絢爛舞踏』

紅椿の単一仕様能力の発現だった。

「これが、紅椿の単一仕様能力……」

ワンオフ・アビリティ

呟く箒は静かに輝く紅椿を見つめる。そして後ろの四人の方を向き、その手を差し出した。

「みんな」

その言葉に四人は黙って差し出された紅椿の手の上に自らの手を乗せる。そして紅椿と各々の機体が接触すると同時に、全員の機体のシールドエネルギーが回復をした。

「行くぞ！」

箒の言葉と共に、一夏を助けるため、福音に一矢報いるため、五人が飛翔した。

「おおおおおおお！！！」

雄叫びと共に一夏は剣を振る。

六枚に別れた福音の翼は自身に密着する一夏に容赦の無い攻撃を加える。

打撃、薙ぎ払い、刺突、様々な攻撃が一夏に襲い掛かり、一夏はその尽くを捌く。

蒼炎を振る。盾で翼を防ぎ、そのまま盾から発するプラズマブレードで切り付ける。時に体を回転させ、脚部装甲のブレードも織り交ぜた斬撃の乱舞を放つ。

生半可な操縦者が相対すれば為す術も無く打ち倒される連撃のぶつかり合いは、周囲に響く轟音と接触の度に迸る閃光が激しさを物語っていた。

「一夏っ！！！」

突如、一夏の耳に箒の声が聞こえた。

直後、福音にレーザー、衝撃砲、レールガンの三種の砲撃が三方向から襲い掛かる。

直撃は危険と判断した福音は一夏から離れ、回避と防御を同時に行いつつ距離を取る。そこへ紅椿の雨月と空裂のレーザーと光刃が襲い掛かる。

二振りの刀を振るいながら箒が一夏の下に近付く。

「待たせたな、一夏。援護に来たぞ！」

「箒……」

静かに幼なじみの名を呟くが、すぐさま一夏は表情を引き締め、福

音に向き直る。

福音にはセシリア、鈴、シャルロット、ラウラの四人が同時に別方向から砲撃を行っている。

砲撃の合間のタイムラグを互いに補い合いながら止むことない砲撃を加えつづけることで福音の動きを抑えている。

しかし、福音もただ一方的に撃たれるばかりでは無かった。飛行をしながら高速で体を回転させる。大きく振り回された翼から大量の弾丸が放たれ、掃射攻撃を行う。

だが、既に福音の攻撃をほとんど理解していた全員は各々回避、あるいは防衛行動を取りダメージを最小限に留める。

そして弾幕が晴れた先、六人の視線の先に福音の姿は無かった。

「どっ！？」

「っ！上だっ！！」

シャルロットの言葉に答えたラウラ。そして全員が一斉に上を見上げる。既に夜も明けかけた薄闇の空。そこには燦然と輝く翼を今以上に大きく広げる福音の姿があった。そして翼の輝きもまた、これまで以上の強烈な輝きをたたえている。

そして、一際強い光が波導の如く翼から放たれた。

「な、なんだコレは！」

「そんな！機能の低下なんて！」

「ちよっ！どうなってんのよ！」

その声に一夏が視線を動かすと、自身の愛機が起こした突然の不調に困惑する筈、セシリア、鈴が居た。そして別の場所に居るシャルロットとラウラは冷静を保ちながら、しかし緊迫した表情をしている。

「ラウラ。これって…」

「ああ。恐らくはEMP攻撃だ。まさかこんなものまで出してくるとは！」

苛立たしげに言うラウラの言葉に全員の顔色が変わった。

EMP。一般に電磁パルスと呼ばれるそれは本来、高高度核爆発や雷などによって発生するものであるが、福音は翼に内包した膨大なエネルギーを変換して放射。限定空間に強力な電磁波を流した。

これにより各ISは機能をダウン。ダメージ自体は大したものでは無いが、戦闘中という状況を考えれば致命的損傷だった。

福音の更なる追撃を予想して全員の顔が強張る。しかし、福音は六人を見下ろすだけで攻撃をして来なかった。

疑問に思った少女ら五人は福音がある一点に視線を向けているのに気付いた。そしてその視線の先には、心底愉快で堪らないといったげな表情をした一夏が居た。

「まったく。福音め、わざわざ手の込んだ真似をしゃがる」

その言葉に五人が怪訝な視線を向ける。それに気付いた一夏は福音を見つめたまま言った。

「あいつ、どうやら俺とのサシをご所望らしい。ご丁寧に、白式だけがEMPを食らってない」

そして福音が一夏に軽く視線を向けながら、六人に背を向けて飛翔する。それはまるで、一夏について来いと言っていているようだった。

「やれやれ。面倒なことになった」

口ではそう言いながらも、面白いと言う表情を変えずに一夏は吹き、箒の方を向く。

「というわけだ、箒。ちょっと福音とケリ付けてくる」

そう言つて一夏は福音を追おうとする。その背に箒は反射的に声を掛けた。

「待て！」

動きを止め、自分に向き直る一夏に箒は近寄る。そして一夏の、白式の手を握った。

(紅椿、お願いだ。もう一度頼む)

そう、心で強く願う。直後、再び絢爛舞踏が発動し、紅椿を金色に染め上げる。

そして紅椿に触れている白式のシールドエネルギーが完全に回復した。

「こいつは……」

未だ絢爛舞踏を知らない一夏は驚きの表情を浮かべて箒の顔を見た。そして箒は一夏の目をまっすぐに見据えて言う。

「行ってこい。勝つんだぞ」

その言葉を言われた一夏は僅かに間を置いてから、軽い笑みを浮かべて頷く。そして再び箒に背を向けて、福音を追った。

先の戦闘宙域から更に数キロ離れた海上。既に日本国領海を出たその空に福音は佇む。辺りにはあるのは丘のような小さな山と幾許かの木々が生えるだけの無人島が一つ。

文字通り何も無いその場所で福音は宿敵を待つ。

そう、宿敵である。自身同様第二形態移行を果たした機体。コアネットワークが切断されているため、自分の宿敵が如何なる機体なのかは知ることが無かったが、ただその認識があれば十分だった。そして、雌雄を決する時が来た。

視線の先、約150m程の距離に、一夏と白式は居た。

「さ、て、と。やっとケリだ。全く、こんな長丁場は初めてだ」

そう呟いてから一夏は白式に語りかける。

「行くぞ、白式。お前の可能性、その全てを出せ。俺はその全てを完全に操って、福音に勝ってやろう」

その時一夏は、ナニカが自分の言葉に応えたような感覚を得た。直後、白式のモニターに文字列が表示される。

『戦闘経験クリア』

『搭乗者とのリンク最適値を認識』

『Full Synchron-Drive System Operation』

そして白式が新たな力を解放する。

全身の装甲の各所が割れるように開く。装甲の開いた跡、白式の全身に走るラインが翡翠色の輝きを放つ。

同時に一夏の頭部に装着されたヘッドギアもまた変形を開始する。

ヘッドギアからプレートが展開。一夏の顔を覆う。そして側頭部のアンテナがスライドし、額でV字型の角のような形を取る。

最後に、一夏の顔を覆うプレートマスクの目の部分に装甲同様に翡翠の光が宿る。

白式・雪御雷高レベル同調形態「白経津」^{しろつぎ}の発動であった。

(こいつは……!!)

一夏は白式の新たな力に心が震えるのを感じた。白式を纏う体がか

つてないほどに軽い。今まで白式との間に感じた一体感、それがま
やかに感じる程の感覚だった。

白式と自分が完全に溶け合っているのがはっきりと分かる。今なら
ば、どんな動きも、生身の体で振るう剣技も自在に使えるという確
信がある。

そして一夏は再び福音を真正面に見据える。

「待たせたな、福音。さあ、ケリを付けようか」

相手にとって不足は無い。新たな力を手にした自分と白式の初陣相
手に、これ程相応しい存在も無いだろう。故に

「福音。ボコすとかなんとか色々言ったが、ありや無しだ。真つ向
から倒す。だからお前も真つ向から来い」

その言葉と共に蒼炎を抜刀の形で構える。そして最後の一言を紡ぐ。

「かかって来い。歓迎してやるさ。盛大にな！」

二機が動いたのは同時だった。互いに瞬時加速を発動しての超高速
接近。そして福音の翼と一夏の蒼炎が激突した。

ドガガガガッ！！ガキンガキッ！ギギギギギギッ！！

白式と福音が激突を繰り返す。超高速で接近して互いに刀と翼をぶ
つけあっては離れ、再びぶつかりあう。高い機動性を有する二機の

ISが全力で行う高機動格闘戦。それは見る者の心を奪うであろう程に鮮烈な光景だった。

「らあああああ！！」

咆哮と共に一夏が蒼炎を切り上げて福音に振るう。逆手に持った蒼炎は福音の翼に上から阻まれるが一夏は口元を笑いに歪める。白式の右腕の装甲、第二形態移行前から装備されていたショートブレードが伸びる。しかし、福音には届かない。

だがその直後、ブレードを芯とするかのように白い光が進る。ブレードの根元を噴射口としたプラズマブレードである。手加減抜きの最大出力で展開されたプラズマブレードはもはやブレードという枠を超えた大きさの熱線となって福音に迫り、その翼を貫いた。

「kyeeeeeeeeee！！！」

怒るような電子音声と共に福音が一夏を強引に振り払う。貫かれた翼をすぐさま修復。上空に飛翔しようとする。

ガッ！！

「！！？？」

「させるかよ！！！」

しかし、上昇しようとした福音は一夏の左腕にその片足を掴まれて動きを阻まれる。掴んだ左腕を一夏は大きく下に振り下ろし、福音の体を投げ飛ばす。

ドオンッ！！

重く響くような爆発音。一夏が再度発動した瞬時加速の爆発。そして、二つの噴射口を持つスラスタ四機と二機の噴射口を持つサイロバインダー迦楼羅、計十機の噴射口の同時着火により、一夏は時速1350kmオーバーという音をも抜き去る速さで福音に呐喊。左腕の実体盾、先端から内蔵式プラズマブレードを展開したソレを福音の体に叩きつけた。

ドオオオオン!!!

轟音と共に一夏と福音の体が海面スレスレの位置を駆け、無人島へと接近する。超音速により発生した衝撃波によって海面が大きく波打った。

そして一夏は左腕を振りぬく。音速を超える速さで吹き飛ばされた福音は海岸を一瞬で超え、木々をなぎ倒しながら島の内部へ飛ばされていく。

しかし、なぎ倒した木々により減速をされた福音は姿勢を立て直しつつ、翼から推力を噴射。ブレーキをかけ、停止した時点で翼を大きく振るい、自身がなぎ倒した木を一夏に飛ばす。

「その程度!!!」

迦楼羅の全面からチャージしたビームガンを発射。チャージ時間が短いため、福音の弾幕をなぎ払った程の大出力は出せないが、飛んでくる木を払う分には十分の火力が放たれた。

そして焼き払われた木々の向こうから福音が一夏に迫り。再び福音と一夏が激突する。

激突地点は海岸。二機の激突の衝撃で海岸の砂が大きく巻き上がった。

た。

「ツツツ！！」

『kiaaaaaaaaaa!!!』

そして二機は一度離れ、島の中で再び激突の繰り返しを行う。一度ぶつかり合うたびに地面がえぐれ、砂が吹き飛ぶ。木々がなぎ倒され、かわされた翼の刺突が、蒼炎或いはプラズマブレードの一閃が、岩を砕き、切り裂く。

福音と白式の激突は僅か数分の間だったが、その数分で島は爆撃を受けたかのような惨状と化していた。

『kyeeeeeeeeeeee!!!』

耳をつんざくような電子音声と共に福音が弾丸を無差別に乱射する。その全てを一夏は回避するが、回避行動によって福音との距離は離れざるを得なくなった。

そして一夏の目には円を形作る福音の翼、その中央に収束するエネルギーを捉えた。

「迦楼羅！！」

一夏の言葉に答えて迦楼羅がその砲口を開く。二門の砲口から発せられた白い光が一夏の腹の前で球形に収束する。

そして二つの砲撃が同時に放たれ、丁度一夏と福音の中間点で激突。拮抗し、辺りに衝撃波を撒き散らす。

一夏は地に足を付けた状態で砲撃を行ったが、砲撃の高熱により地面の一部が赤熱して溶けた。

そして全く同時に砲撃を行い、全く同時に砲撃を終えた二機は未だ衝撃が収まらぬ中、互いに向けて疾駆する。

一夏が蒼炎を振る。対する福音は再び翼を繰り出した。そして

ガキンツ！！

「なっ……！！」

一夏の表情が驚愕に染まる。福音は二枚の翼を交差させることにより、蒼炎の刀身を絡め取っていた。

ブオンツ！！

重い風切り音と共に一夏の体が高速で投げ飛ばされる。飛ばされた先は森。このままでは木々に体が激突するのは明らかだった。シールドがある故に一夏が怪我を負うことは無い。しかし、シールドエネルギーは僅かなりとも消耗する。

それを嫌った一夏は蒼炎、盾、両脚、全てのブレードを展開。森の中を体を捻らせながら飛ぶ。一夏が飛ばされるのをなぞるように木々が斬り飛ばされる。しかし、一夏への損傷はゼロであった。

ある程度の減速を確認した一夏はスラスターで姿勢を制御。再び福音へと呐喊した。

ガツキイイインツッ!!!

ひと際大きな音と共に一夏と福音は再度激突をする。刀を絡め取られるという愚を一夏は二度も犯すつもりは無かった。

両手足四つの剣を駆使して止むことの無い斬撃を繰り出す。突きの直後に斬り払い。すぐさま放たれる袈裟斬り。そしてその勢いを利用した踵落としからの脚部ブレードの斬撃。

かつてない程の白式の操作性を感じている一夏は持てる全ての剣戟を放つ。

そして、唐突に始まった戦いは唐突に終わりを迎えることとなった。互いに砂浜に足をつけながら組み合う福音と白式。しかし、格闘戦で長じた技量を持ち、白式の新システムによりその技量を十全に発揮できるようになった一夏にこの場では分があった。

組み合いのさなか、一夏は僅かに力のベクトルをずらす。それに巻き込まれた福音が体勢を崩した直後、一夏は砂浜を力強く踏み込み、全力のアッパーカットを福音の顎に叩き込んだ。

しかし、福音はのけぞりながらも翼を振るい、拳を振りぬいた一夏を大きく吹き飛ばした。

すぐさま体勢を立て直した一夏が立ち上がる。両者の距離は約100m。ISの、この二機の機動性ならば一瞬で詰める距離である。しかし、二機は離れたまま睨みあう。

互いに理解していた。いまこそが決着の時だと。

一夏が蒼炎を構える。速さに長ずる抜刀の構え。瞬時加速のチャ―

ジを開始し、同時に零落白夜の起動準備もする。
対する福音もまた構える。翼の一部を腕に巻きつけ、即席のエネルギーブレードとする。そして一夏同様に翼に力を収束し、瞬時加速を準備する。

音が消える。辺りを静けさが包んだ。

『零落白夜 発動』

白式のモニターに表示された言葉と共に、蒼炎の刀身が純白の光に包まれた。

一体何を合図としたのだろうか。同時に二機のISは瞬時加速を発動。一瞬で交差し、また一瞬の後には互いの立ち位置を逆転させていた。

そして、零落白夜の直撃によりシールドエネルギーを一気に0にされた福音がその装甲を消し、ISスーツを纏う中の搭乗者、豊かな金髪に絶妙と言えるボディラインを持った女性が砂浜に倒れこんだ。福音の完全停止を確認した一夏は蒼炎を砂浜に突き立て、膝をつく。白式の装甲から翡翠の光が消え、開いていた装甲が閉じる。同時にフルフェイス・メットのように一夏の顔を覆っていたプレートも格納され、額のアンテナも側頭部に戻る。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

膝をつく一夏の息は荒い。白式を動かして以来初めての、膨大な疲労感が全身を襲っていた。

しかし、一夏の口は笑いの形を取っていた。

「俺の…勝ちだ…！」

その言葉に全ての感慨が込められていた。

白式のモニターが接近してくる五機のIS、箒達の存在を知らせる。

一夏は白式を解除すると、手近の辛うじて形を留めている岩に背を預け、砂浜に座り込んだ。

（帰りは誰かに運んでもらうか）

そう想いつつ、一夏は夜が明けて朝日に照らされる空を見上げた。

雲一つ無い快晴の空はまるで、最高の戦いをした一夏の満足感を表すかのように、爽やかに澄み渡っていた。

第三十九話（後書き）

まず最初に。

白式のセカンドシフトに関して、名前の案を下さった皆様。本当にありがとうございます。

どれも素晴らしい名前で、どれを採用しようか悩みました。もう盛大に。

そして選び、時に勝手ながら作者なりにアレンジを加え、決めた結果が今回登場した名前となります。

改めまして、皆様。本当にありがとうございます。

さて、遂に福音戦決着です。

次回の話で原作三巻が終わると想います。ですがその前に、機体解説を次の更新でしようと思えます。ご了承をお願いします。

…疲れた…

A C f aが面白そうだからやってみたいけど、3も箱も無いや…

今回も若干ネタがありますが、話の展開にむしろ効果的と作者は判断してますので、反省も後悔もありません（マテ

機体説明その2（前書き）

白式第二形態の説明となります。
正直やっつけ仕事感が…

機体説明その2

白式・雪御雷

ゆきみかずち

白式が第二形態移行を果たした姿。全体的に装甲が増えており、また既存の装甲もサイズが大きくなっている。移行前より重厚さが出ている。しかし、機動性や格闘性能は移行前よりはるかに上である。

実は移行の際に追加装備であった白嵐を白式の一部として取りこんであり、本来の第二形態移行より高性能化している。

特に機動性は凄まじく、紅椿すら差し置き確実に現行最高性能の機動性を持つ。

特徴は非固定浮遊武装である四機の大型ウイングスラスター。全てのスラスターに高出力大型ブースターと中型ブースターを一機ずつ、計八機のブースターを備えており、脅威的加速を可能としている。後述するサイドバインダーに搭載されているブースターも合わせて全てのブースターを使用して発動する瞬時加速は文字通り音速を軽く超える。

しかし真に恐ろしいのは、スラスターの全てがフレキシブルに可動することであり、これにより加速中の方向転換を容易とし、超高速旋回も可能であるということ。ぶっちゃけクイック・ブーストみたいなもの。ぶっちゃけた。

ただし、最大限に使用するには相応の習熟が必要であり、今の一夏では加速がせいぜい。超高速旋回は難しい。可能になったら格闘戦

において圧倒的アドバンテージを得られる。

ちなみに、スラスターの一部は白嵐の展開装甲を受け継いでおり、そこに搭載されている制御システムにより高難度技能である個別連続瞬時加速を可能としている。というか展開装甲の性能を全て制御に回している。

高機動形態「白閃」びやくせん

スラスターの展開装甲の制御機構の一部を機動に回すことで圧倒的加速を継続して発動できる。分かりやすく言うならばオーバード・ブースト。またもやぶっちゃけた。

とにかく速い。紅椿が全力で飛んでも余裕で追い抜ける。具体的速度は想定していない。誰か良い感じの目安とか比較とかをしてくれないだろうか（マテ
キャノンボールファストでこれを使えば、操作のへまをしない限り
確実に勝てる。

真面目に解説。

使用時は四機のスラスターの内、上段の二機が半ば固定された状態になる。可動を制限し、加速に重点を置くためである。そして下段の二機が機動の制御を行う。
使用時は逸れなりにエネルギーを消費するので、相手から何とかして距離を取りたい時に使う。実はあまり実戦では使う機会に恵まれない。

ただし、下がった制御システムを技量でカバーできるようになれば
実戦でも効果を十分に発揮できる。

射撃兵装搭載型サイドバインダー「迦楼羅^{かるら}」

射撃兵装とブースターを兼ね備えたサイドバインダー。ぶっちゃけると劇場版ガンダム00のブレイヴについていたアレ。それで全て伝わると思う（キリッ）

射撃はマシンガン、通常、チャージショット、チャージバーストの四つの形態。

牽制や弾幕の迎撃にしかならないマシンガン。同じく牽制の通常。通常よりマシな威力で真つ当な攻撃手段と呼べるチャージショット。威力はとても大きいエネルギー消費がでかいチャージバーストと覚えて頂きたい。

実体盾「名称無し」

左腕の装甲に付けられた菱形の盾。性質としてはユニコーンとシンジユの盾の両方。

原作の雪羅同様、零落白夜の盾を装備しているが、盾本体の一部にエネルギーを通す形にしているので、エネルギー効率に配慮がなされている。

盾の側面からはプラズマブレードが展開される。

また、盾内部には別のプラズマブレードの発生機が格納されており、いざという時に使用ができる。ちなみに同様のプラズマブレード発生機は迦楼羅にも一つずつ格納されている。

プラズマブレードはガンダムのビームサーベルをイメージして頂きたい。ただしプラズマの色は白。

高レベル同調形態「白経津」^{しんけいしん}

一夏と白式のシンクロ率が跳ね上がるシステム。

発動時には装甲の一部が割れ、割れ目に翡翠色のラインが通る。同時に一夏の顔もフルフェイスマスクに覆われる。

シンクロ率に関する各数値が跳ね上がり、適性レベルS相当の数値を出す。

ほとんど生身の感覚での操作が可能となる。非常に精密かつ素早い生身の動きができるので、一夏の技をIS戦闘に活かすためにあるようなシステムとなっている。

おおよそ大型の人型兵器というものは、膂力は凄まじいが一瞬の動きの鋭さでは人に見劣りする。アニメでの描写を見る限り、ISも人に比べると動きがやや鋭さに欠けると判断。そしてこのシステムを使用すると、ISを装着しながら生身の動きの鋭さを再現できるイメージするならば、ガンダムで九頭龍閃が撃てるようになるという言葉を感じてある。

モデルはユニコーンガンダム。NT-Dシステム。

ただし、相手の兵装に干渉するという機能はない。さすがにチートすぎると判断。

セシリアのビットへの干渉も考えたが、それは即ち第三世代兵装のイメージインターフェースへの干渉となり、AICなどへの干渉も可能になる可能性が出て来る。

さすがにこれはやり過ぎとの判断を作者は下した。

実はシンクロ率の上昇はIS側から半ば無理矢理行っているので、一夏には結構な負担がかかる。しかし使い続け一夏がシステムに慣れると、無理矢理の度合いが小さくなるので、負担も軽減される。

以上、機体説明でした。

ぶつちやけると、近接主体の機体としては現行最高峰の機体となっています。

しかし、あくまで機体はです。中の一夏はまだまだです。

…何回「ぶつちやけ」という言葉を使ったやら。

ご質問がありましたら感想でどうぞ。

実は自分でも十分に説明しきれた感じがしなくて。

お気づきになられた点がありましたら遠慮無くどうぞ。

そして、名前案を下さった皆様。改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございます。

機体説明その2（後書き）

どうにも上手く説明ができないと思います。

一応、伝えたいことは何とか伝えられたと思っておりますが、やはり難しい。

下手くそ極まりない説明ですが、ご理解頂ければ幸いです。
質問は感想にてどうぞ。ご意見も承っております。

第四十話（三巻終了）（前書き）

というわけで、三巻終了です。ついにここまで来れた…！

第四十話（三巻終了）

「任務完了ご苦労、と言いたいところだが、お前達は重大な命令違反を犯した。分かっているな？」

早朝を迎えた旅館。その入口前で腕を組んだ千冬の厳格な声が響く。彼女の前には神妙な表情を浮かべる無断出撃組の六人が並んで立っていた。

福音沈黙の後、一夏と福音のパイロットが待つ海岸に機体が回復した五人が合流。動けない一夏と福音のパイロットの兩名を回収した。

福音のパイロットは鈴が、一夏はシャルロットが運んだ。

余談だが鈴が福音のパイロットを運ぶ際、抱えたパイロットと自分の体の一部を見比べて非常に複雑そうな顔をしたのだが、あくまで割愛する。

そして旅館近くの海岸に着いた六人は、待機していた学園の教師に福音のパイロットを預け、旅館に直行。そして仁王立ちで待ち構えていた千冬と、その隣で心配そうな表情を浮かべている真耶と遭遇した。

旅館までの道中、六人はある程度の覚悟はしていたが、いざこうして千冬を前にした瞬間、その表情にどこか諦めが浮かんだ。

「さて、お前達の処遇だが」

千冬のその言葉に六人の表情に緊張が走る。いかなる処分が下るのか。その内容を想像し、腹を括る。

「本来なら厳罰に処すところなのだがな。そもそも最初の織斑の撃墜に関してはこちらのミスもある。また、福音撃墜の功績及び、使用した専用機の実戦データ収集の功績から処分は軽くなる。今ここで行っている説教と、学園に戻ってからの厳重注意で済まされるだろう」

その言葉に六人は一様に安堵の表情を浮かべる。やらかしたことがことだけに、相応の処分を覚悟していた六人にとって、説教と厳重注意だけというのはかなりの恩情に感じていた。

「ひとまずはだ。全員よく無事で戻った。ご苦労だった」

不意に千冬が発した一言。それは紛れも無い労いの言葉だった。その言葉を聞いた瞬間、六人は一瞬呆けた顔をし、すぐに笑顔を浮かべた。

そして話は終わりだと言う風に口を閉ざした千冬の後を引き継いで真耶が口を開く。

「え〜と、それじゃあ皆さんはこのあと別室で診察を受けて下さい。一応、激しい戦闘の後なのでって織斑君？」

真耶の言葉の途中で一夏が背を向けて立ち去ろうとする。突然の一夏の行動に真耶が戸惑い気味に声を掛けるが、一夏は淡々と応える。

「いや、女子の診察に俺が同席するわけにはいかないでしょう。部

屋に居ますから、俺の番になったら呼んで下さい」

それだけ言って一夏はさっさと旅館の中に入っていく。千冬を除き、残された面々はポカンとした表情をするが、先に我に帰った真耶の指示で別の教師に連れられて診察用に用意された部屋へと歩いていった。

最後に残った千冬と真耶も、五人にやや遅れる形で旅館の中に入った。

「なんだか雰囲気が変わった感じがしますね、織斑君」

真耶が隣を歩く千冬に話し掛ける。

歩き去った一夏。その背からつい数時間前までは感じられなかった雰囲気を感じとった真耶が千冬に言う。真耶が見た一夏の背。その背が今までより少し大きく見えたことに、彼女は一瞬見とれたのだが、わざわざそのことまでは言わない。

「そうか。まあ、あれなりに何かに思い至ったのだろう」

答える千冬 of 言葉はいつも通りの冷静さを保っている。

淡泊な千冬の反応に内心で気まずい気分になった真耶は別の話題を持ち出すことにした。

「それにしても凄かったですね、織斑君。最終的には一人で福音を倒したし、その戦闘も凄かったです。今の織斑君、代表候補並の実力はあるんじゃないですか？」

一夏を褒めるように真耶は努めて明るい声で言う。そして千冬は僅かに考える姿を取り、再び口を開いた。

「だが、所詮はその程度だ。確かに白式の性能には目を見張るものがあるが、あいつはまだそれを活かし切れていない。あいつの戦いも、代表候補までには通じるだろうが、代表には無理だな。そもそも、代表候補にしても私の知る限りボーデヴィツヒなら一夏には対応できる」

「いや、でも。それでもあれだけの機体を最初からあそこまで動かせるのは凄いですよ。やっぱり織斑君は凄いですって！」

「まあ、そうだな」

真耶の言葉に千冬は変わらず淡々と答える。そこで真耶は初めて気が付いた。千冬の意識が若干、ここに在らずの状態になっているのを。

それに気付いた真耶は、少し不思議に思いながらも、それ以上言葉を発することは無かった。

そしてその千冬はと言うと、思考の内で一夏のこと考えを巡らせていた。

(私とて、今回のことには驚いているさ)

そして思い出されるは白式の第二形態移行と、その後の戦闘。

そして最後の一騎打ちで一夏が見せた超高速機動格闘戦。

(つくづく馬鹿げた速さだ。おまけにあの愚弟はそれを使ってのけた)

白式が見せた運動性能。それは確実に現行のIS、あの紅椿すらも上回っていると千冬は確信していた。

それほどの機体、扱うには相応の技量が必要であることは想像に難くない。そして一夏は、千冬の目には未だ未熟と移れども、確かにあの機体を操った。

未恐ろしい。思わず弟にそんな思いを抱いたことを千冬は否定しない。

一夏と福音が見せた格闘戦。暴力の奔流としか言えない翼の乱舞と、それに対応してみせる剣戟。

ヒットアンドウェイが主体のISの格闘戦で、超接近状態からあれだけの激闘。恐らくは世界でも、あのモンド・グロッソでもそうは無い。

そしてそれだけの戦いを繰り広げた一夏本人は、性別を抜きにして未だ経験数ヶ月。僅か数ヶ月である戦い。生身の實力の高さを考慮してもなお異質。

(いや、だからこそか?)

思い出されるは白式が発動した謎のシステム。搭乗者とのシンクウ率を劇的に上げたあのシステムは、指揮室に居た教師全てを驚かせた。無論、千冬も面に出すことは無かったが、同様に驚きを抱いた。

(全く。私の理解を超えかけているぞ)

決して、絶対に表には出さないが、千冬は一夏の才覚を認めている。だがそれを加味してもなお、一夏の福音との戦いは異常なのだ。そしてその要因となるのは

(白式、か……)

僅か数ヶ月の稼働で、そして千冬以外に気付く者は居なかったが、追加装備を取り込んでの第二形態移行。そして発現させた謎のシテムに、最後の純白の零落白夜。余りにも謎が多すぎた。

(となると、アレに直接問い質すしかないか)

千冬の脳裏に浮かぶ一人の人物。白式の、ISの生みの親である幼なじみ。

今度はなにがなんでもはぐらかしは許さないと決意を新たに、千冬は廊下を歩き続ける。

唐突に千冬の脳裏に一つのイメージが走る。それは、自身の手の届かないところへと、自分を置いて去る弟。そのイメージに千冬は馬鹿馬鹿しいと思いつつ、感じた恐怖を否定しようとはしなかった。何故そんなものを感じたのか。千冬は自問自答する。

(そうか。あいつの背中か)

思い返されるのは歩き去る一夏の背。

脳裏に映し出した弟の背中と自分の間にある見えないナニカを千冬は感じた。

それを男の独り立ちと取れば良い。しかし千冬が感じたのは冷たさを孕んだ隔絶だった。

僅か数時間の間に一夏に何があったのか。千冬にそれを知る術は無い。

ただ弟の見せた姿に考えを巡らせるばかりだった。

さて、みんなと別れた俺は現在、部屋にて寝そべっている。
とは言え、完璧に横になっっているわけではない。正確には部屋の一角に畳んだ布団を積んで、それに背を預けて足を伸ばしながら畳に座り込んでいるというべきだろう。
畳の感触と背中に伝わる布団の柔らかさが中々良い組み合わせなのだ。

そして今の俺は浴衣着用。つつても、面倒だからISスーツの上に浴衣着てるだけだな。

そんな俺は今、布団に身を預けながら目の前に空間モニターを投影している。投射元は腕の白式。

福音との戦闘が終了した今、改めて白式のスペックを確認しているのだ。そして一通りのスペックを確認したわけなのだが……

「すげえなオイ……」

そんな呟きが漏れるのも無理は無いと思う。

基本速度などに代表される機動性や機体の各種出力、瞬時加速に必要なチャージ時間など、様々な面で大幅な向上が見受けられる。

当然ながら、上がった以上エネルギー消費も増えるわけなのだが、これまた凄い。

単純な消費の数値は増えているのに、出力に対する消費の割合は驚くほど少ない。第二形態移行前より少し増えたくらいで、ほとんど変わっていないくらいだ。

率直に言おう。すごく驚いた。だが、これで終われば良かったのだが、世の中そう甘くは無いらしい。

今のはあくまで基本の状態なのだ。これに各種装備や機能を加えると、まあ中々どうして。結構なエネルギー消費になる。

白閃や白経津はまだ良い。確かに少々エネルギーを食うが、まだ平気だ。蒼炎は変わらない。

問題はだ。迦楼羅なのだ。白式が遂に手に入れた射撃装備。これが中々にエネルギーを食う。

マシンガンや通常射撃はそこまで消費しない。しかし、威力がとにかく低い。そしてチャージ系は威力は高いが消費がでかい。なんとも微妙な配分になっている。さて、どうしようか……

「いつそ、射撃は基本的に使わない方針でいくか？」

普段はブースターのついたサイドバインダーという扱いで、いざという時に射撃を使う。やはりこれか。そもそも、剣はともかく射撃にはあまり自信が無い。

そうだな。この路線で行こう。……でも少しは射撃の練習もするか。

他には、と。ふん、瞬時加速に結構使うな。ブースター10機同時着火はやはり消費大、と。

これはまあいいだろう。そこまで使う機会があるとは思わない。

「帰ったら練習しなきゃかね」

結局はそこに落ち着くのだろう。使って、練習して慣れるしかない。

こうして文字と数字だけを見てアレコレ考えるより、直接体で感覚を掴む方が手っ取り早い。その方が俺の性にも合っている。うん、そうしよう。

思考にひとしきりの決着を付けた俺はモニターを消し、そのまま寝転んだ。

しばらくしたらシャルが俺の診察の番だと呼びに着たので、俺は別室で医務担当の先生に診察を受けたのだが、先生は俺を診察して首を捻っていた。

福音との最初の戦闘で負った火傷が綺麗さっぱり消えていたのだ。俺もそのことを改めて確認して、先生と一緒に首を傾げたよ。何故だろうな？

さて、時間は飛ぶ。

あれやこれやと後始末みたいなことをしていたらいつの間にか日も暮れ、夕食となっていた。

献立は変わらず豪華な刺身を中心としたメニュー。うん、料理の美味さが体に染み渡るようだ。食事のありがたみを再認識した気がする。

食事中、まわりのみんなが俺達専用機グループに何があつたか聞いてきたが、誰も何も答えない。一言、聞いたなら監視付きの機密だと言っておいた。

さすがこれを聞いて尚も食い下がるやつは居なかったな。

そして夕食後、俺は片手にある物を持って海岸を訪れていた。目的は筈に話があるから。探してたらのほほんさんが教えてくれた。

「あそこか」

海岸の一角にある岩場。そこに座る人影を見付けた。シルエツトで分かる。あれは箒だ。俺は気配を消しながら箒に近付く。ちょっとした悪戯みたいなものだ。そして岩場に座りながら空を見上げている箒に声を掛けた。

「箒」

「い、一夏っ!?!」

おうおう。随分と驚いてくれた。少し勝った気分になった。

「ど、どうしたのだ?」

「いやなに、ちょっと箒に話があつてな」

そう言いながら俺は軽いステップを踏んで岩場を登り、箒の隣に立つ。

今気付いたのだが、箒は水着だった。それもビキニ。いや、中々のお姿で。

「ほれ」

とりあえず俺は手に持った、丁寧に包装された長方形の箱を箒に手渡す。それは以前、シャルと水着を買いに行った時に買ったもの。

「これは……」

「プレゼントだ。今日、誕生日だろ?」

既に時刻は夜だが、今日の日付は七月七日。世間一般では七夕と呼ばれる日だが、俺にとっては箒の誕生日という意味もある。

「覚えていたのか…？」

「まあな」

箒の問い掛けに俺は簡潔に答える。これでも幼馴染だ。それに七夕と一緒にというのが印象的だったからな。俺がそう言つと箒は僅かに顔を綻ばせた。

「開けてもいいか？」

箒の言葉に俺は頷く。頷かない理由がない。

箒は箱の包装を丁寧に解いていく。そして出てきた箱を開けた。

「これは、リボンか？」

「そ。箒に似合つと思つてな」

俺が選んだ箒へのプレゼント。それは髪を結うためのリボンだった。髪留めとかも考えたのだがな。箒にはリボンが似合つと思つたわけだ。

リボンは無地で白一色なわけだが、使っている素材がいいのか安っぽい印象は無い。そして箒がその長い髪を俺がやったリボンで結つたわけだが

「似合つてるじゃないか」

それが素直な感想。元々箒は容姿が整っているし、その容姿にして

も煌びやかな服や装飾が合うというタイプではない。むしろ落ち着いた雰囲気、服や飾りが似合う容姿なのだが、どうやらリボンは当たり前だな。本当に似合っている。

「ほ、本当か…?」

やや顔を赤らめながら箒がそう聞いてくる。頷く以外に他は無いな。

「一夏、その…ありがとう。凄く嬉しい」

俺に礼を言う箒。確かな感謝の念が込められているのが分かる。ふむ、どうやら喜んでもらえたらいいな。買った甲斐があったというものだ。

「……………」

唐突に箒は黙り込んだ。見れば僅かに表情に陰が差している。

「どうした?」

「その、だな。一夏、怪我は平気なのか?」

「ああそれ。なんか治ってた」

「なんだと?」

俺の言葉に箒は信じられないという顔をする。俺は気を失って起きたら治ってたからよくは分からんが、撃墜された後に手当をしてくれて、俺の診察もした医務の先生曰く『絶対にあり得ない回復速度』だとか。

俺にも分からないのが現状だ。

「まあ、治ってるしいいんじゃないの？」

「それはそうだが……」

俺はこれっぽっちも気にしてはいないんだがなあ。何故か篤の表情は浮かない。一体どうしたと言うのだろうか。

「一夏…すまなかった…」

篤の口から出たのは謝罪の言葉だった。その言葉に一夏は眉をしかめた。

「何がだよ」

「昼間のことだ。私のせいでお前は……」

ああ、成る程な。昼間のアレ。んゝまあ、確かに。あれに関しては篤のミスもあるのだがなあ。

「別にそれはもういいだろ。こうして無事に事は終わったんだしよ。少なくとも俺は気にしない」

これは事実だ。命が助かったならそれでいい。第一、あの時は篤のことを危惧しときながら、結局あなる状況にさせちまった俺のへマもある。最初から零落白夜を決めれば良かったのにな。

「だが一夏。お前が気にしなくても私が！」

「あゝはいはい。少し落ち着け」

声を大にする筈を軽く制する。さて、このままじゃあ筈はひたすら自分の責任云々を言い続けるだろう。何とかしなきゃならんわけだが。どうするか。

……あ、いいこと思い付いた。我ながら名案だぞ。

「んじゃあ筈。一つペナルティをくれてやる。それで今回の一件はチャラだ」

俺の言葉に筈はすぐに頷いた。

そこまで素直に反応されるとなんか微妙だな。まあいい。さっさと言ってしまうおう。

「ペナルティは簡単だ。強くなれ」

「え？」

俺の言葉に筈は呆けた顔をする。ふむ、意外と言いたげだな。だが俺はいたって真面目だぞ？

「お前は自分の未熟を悔いてるんだろ？なら挽回するには強くなるのが一番だ」

そう言っつて俺は筈に背を向ける。そろそろ時間も遅い。いつまでも外に出てるわけにもいかない。戻り時だ。

「強くなつてさ。全員の度肝を抜かしてみろよ」

「一夏……」

「じゃあな。先に戻るぞ。あまり遅くなるなよ」

それだけ言って俺は箒の下から立ち去る。そも、プレゼントを渡すのが目的だったんだ。それを果たした以上、長居をする理由は無いわけだ。

side out

歩き去る一夏の背を箒は見つめる。

「強く…なれ…」

一夏の言葉が箒自身の口から漏れる。
しばらく同じ言葉を繰り返した。そして箒の顔に笑みが戻った。

「望むところだぞ、一夏。私は強くなる。なって、お前を驚かせてみせるぞ」

一夏への宣言とも、自身の決意とも取れる箒の言葉はさざ波の音が響く夜の空に溶け、言った箒自身以外の耳に入ることは無かった。

（さて、ハツパをかけたわけだが、箒はどうするのか？）

旅館へ戻る道すがら、一夏は箒のことを考えていた。その口元は隠しきれない愉悦に歪んでいる。

（できるなら強くなれよ。強くなれ。そして）

口元の歪みが一際大きくなる。

（俺に倒される）

一夏が目指すは頂点の座。そしてその座を与えられるのはただ一人のみ。友として接するのはいい。しかし、来るべき時が来たら、一夏は頂点へ至るために容赦無く打ち倒す。その決意を固めていた。

本音を言えば、一夏はそのことを少しばかり寂しく思っている。しかし、だからと言って一夏にはもはや立ち止まる気は無い。

そも、実姉すら切り伏せると決めた時点で、それ以外の誰であろうと切り伏せる覚悟をしたようなものなのだから。

（けど、やるなら思いつ切りだよなあ。でなきゃあ、楽しくない）

打ち倒すにしても、詰まらない戦いはしたくない。だからこそ一夏は箒にハツパを掛けた。

箒が最新鋭機の力を十分に発揮できるように、全力で戦い、打ち倒し、充足感を得るために、そのための箒への激励だった。

イメージするのは最新鋭IS同士の死闘。そして死闘を征し、打倒した紅椿の前に立つ自分と白式。それは一夏の心を震わせるような光景だった。

「ま、せいぜい頑張ってくれや、箒」

海岸から旅館へと続く道、その間に立つ木々の合間に一夏の姿は消えていった。

旅館から離れた、一夏と箒が言葉を交わした海岸とはまた別のエリア。30mはあろうかという高さの断崖絶壁に設けられた落下防止用の柵。そこに腰かける人影があった。

「ふんふん。紅椿の稼働率は絢爛舞踏を含めて42%か。まあ、初めてならこんなもんかな？」

フリルのあしらわれた服と頭に付けられたつさぎの耳。IS開発者の篠ノ之束であった。

「結局、お前の想定内だということか？束」

一人呟く束の背後から掛けられる声。誰なのか、振り向くまでも無く分かる。篠ノ之束という人物がまともに認識する三人の一人、世界で唯一の彼女の理解者。すなわち、千冬である。

「やつほ、ちーちゃん」

束も挨拶代わりに言葉を千冬にかける。彼女の背後、常と変わらない黒のスーツを着用し、まるで夜の闇を背負うかのような姿の千冬は

静かに幼馴染の背中を見つめる。

束は振り向かない。千冬はそれを見咎めない。わざわざお互いの顔を見なくとも、相手がどんな顔をしているのか、互いに理解していた。

「つくづく出来過ぎているとは思わないか？今回の事件は。なあ、束？」

友人に話しかけるような気楽な声で千冬は束に語りかける。だが、その言葉には僅かな鋭さが秘められている。

「お前の言うとおりだ。海上での暴走事件。実に」

「白騎士事件にそっくりじゃねえか？」

そんな言葉を呟いて一夏は歩みを止めた。その顔からは先ほどまでの笑みは消え、何かに思い至ったような表情をしている。

「そつだ。やたら似てる。束さんの言う通りだ」

眩きながら一夏は白騎士事件と今回の福音事件、両方を思い返す。そして気付く。いくつかの点で似ていることに。

原因不明の暴走、公にされる既存の域を超えた兵器、そこへ集まる注目。

「ミサイルは福音、ISは紅椿……」

眩く一夏の顔から表情が消えていった。

そして一夏は一つの推測を立てた。

「一つ、推測しようか」

そう前置きしてから千冬は語りだす。

「どこかの天才が大事な妹のために最新鋭のISを用意する。天才は妹を目立たせたい。そこへどこぞのISの暴走事件だ。鎮圧のために投入される新型機。そこで天才の妹は華々しくデビューするというわけだ。…最新鋭のISと共にな」

「へ〜。それはそれは。とんだ天才が居たもんだね〜」

「ああ、全くだ。かつて十二カ国の軍事コンピューターを同時ハッキングしたというバカげた天才がな」

千冬と束。二人の会話は互いに全ての事情を理解した者同士の会話であった。だが、二人は気付かなかった。同時刻、憶測でありながら真相を理解した者が居ることを。

ドゴンッ……！

一夏の拳がすぐ側にあつた木の幹に叩きつけられる。
古武術を修め、剣術だけでなく体術にも秀でた能力を持つ一夏の
撃は細身であつた木を大きく揺らす。

「ふざけんじゃねえぞ、あの人は……！」

一夏の顔は今や一つの感情に染まっていた。即ち、怒りである。

「結局俺たちはあの人の手で踊らされてたつてわけかよ。おかげで俺は死にかけるわ、いくらなんでも限度があるぞ」

実際の所、一夏は実戦においての死というものについてはそこまで嫌悪を抱いていない。一夏自身の元々の気質と、師からの教えにより戦いにおいて死は身近なものという認識を持っていた。

しかし、一夏にとってそれとこれとは話が別なのだ。

「なんで俺があの人と思惑に振り回されて死にかけなきゃならん……！」

つまるところ一夏が怒りを抱いたのは、誰かの手の上で踊らされたということなのだ。

「今回はかりはさすがに看過できねえぞ。次会ったら問い詰めてぶん殴つてやる。ガキの頃の分も込みで借りを全部ノシつけて叩き返してやる」

やや鼻息を荒げながら一夏は拳を木から離れた。一夏の拳が叩きつけられた一点に走る放射状のひび割れ。それが一夏の怒りを示していた。

「だがな、紅椿や福音のことは今はいい。生憎だが私は別のことでお前に話がある」

千冬が話題を変える。直後、千冬の纏う空気が一気に硬質化した。

「白式のことだ」

「ん〜？白式がどつたの、ちーちゃん？」

なおも飄々とした態度を崩さずに東は言う。そんな彼女の姿に千冬は僅かに目を細めた。

「悪いが、こればかりはたとえ話無しでいかせてもらうぞ。コアが行った搭乗者の自己再生機能、そして白式の『しろしき』という別の読み方。東、白式のコアは白騎士のものだな？コアナンバー001。お前が心血を注いで作り上げたIS-1号機」

「そつだよ」

千冬の言葉に秘められた鋭さとは対照的な軽い調子で、東は千冬という言葉をあっさりと肯定した。

「白騎士はコア以外は解体されてIS研究のベースになったけどね〜。巡り巡って白騎士のコアは東さんの下にカムバック。白式に搭載されたのだ〜」

「そして零落白夜もか？」

「それは東さんは知らないんだな、これが」

「なんだと？」

知らない。まさか東からそのような言葉を、ISに関わることで聞くことになるうとは千冬は予想していなかった。

「白騎士のコアは東さんが完璧パーペキに初期化したはずなんだけどね。どうしてだろ？ちーちゃん」

「知るか。私に聞くな」

「これは私の推測だけどね。零落白夜は元々はちーちゃんのIS『暮桜』の単一仕様能力ワシオラ・アビリティ。そして、もしも白騎士、白式のコアと暮桜のコアが情報のやりとりをしていたら？もしかしたらおんなじ能力を発現するかもだよね」

千冬は黙って東の言葉を聞いている。そして、僅かに間を置いてから再び口を開く。

「だが、仮にそうだとしてもだ。最後に一夏が使った零落白夜。あれの説明はどうなる。お前まさか、あの刀蒼炎に雪片の力を」

雪片。それは白式が以前に使っていた雪片式型とは別物。織斑千冬ブリュンヒルデが振るった初代雪片のことである。そして零落白夜は

「暮桜と雪片、両方が揃って発動する、シールドや絶対防御すら無

意味にする一瞬でのISのエネルギー完全喪失能力。あれを搭載させたのか」

千冬の語る零落白夜。その真の力は千冬と束しか知らない事実。

初代ブリュンヒルデの切り札である零落白夜。その名前と脳裏自体は広く知られているが、その本質、如何なるISをも一撃の下に全てのシールドエネルギーを喪失させ無力化する『IS殺し』としての側面はこの二人しか知らなかった。

「成る程。紅椿の単一仕様能力、確か絢爛舞踏だったか。あれは確かに強力だ。故に互いに抑止させるための白式の零落白夜という構図ならば理解できる。今まではな。だが、あれが発動した以上

」

「ちーちゃん」

千冬のを束が遮る。千冬の前では常にふざけた姿をしている彼女の声、そこに込められた真剣さに千冬はそのまま言葉を切った。

「確かに白式の蒼炎を作ったのは私だよ。いつくに頼まれたからでも、アレは束さんにも想定外なんだよね」

その言葉を千冬は静かに聞いている。

「正直、いつくんがISを起動できたこととか、白式の想像以上の進化とか、束さんも全部分かってるわけじゃないんだ」

でも、だからこそ、と束は言う。

「いつくんは、白式は面白いんだ。東さんを明日に期待させるんだねえちーちゃん。ちーちゃんは今の世界は楽しい？」

「……まあ、そこそこにはな」

いきなり投げ掛けられた問いに千冬は静かに答える。

「私はね、ちーちゃん。今よりも明日が楽しむんだ。いつくんがそうさせてくれた。ちーちゃん、私はね。進化っていうのは、既存のものを壊しちゃうことに本質があると思うんだ。そしていつくんと白式はISに対して、そうできるかもしれない。ウフフ、どんな風になるのか楽しみだよ」

そう語る東の声は優しい。まるで親が子を語るように。そして篠ノ之束という人間がそんなことを言うのがどれだけ異質か、千冬は理解している。

しかし、同時に千冬は悟った。目の前の幼なじみは自分が知り尽くした今ではなく、自分の想像を上回るかもしれない未来に思いを馳せていることに。そしてその要となるのが、弟であることを。

悟ったからこそ千冬は言う。幼なじみとしての忠告を。

「言うておくがな、束。進化の要だとかそんな殊勝なものでは無いぞ、あいつは。何せ私に対して宣戦布告をするような奴だ。あんな物をくれてやって、穏やかに済むわけがない」

「それも含めて、私は楽しみなんだよ」

風が吹いた。

いつの間にか束の姿は消えていた。一体どこに去ったのか、千冬には皆目検討が付かないが、今の彼女にとってそのようなことはどうでもよかった。

（全く、厄介なものだ）

思い出されるのは一夏と福音の決着。モニターに映る青白色ではなく純白の零落白夜。そして一撃で全てのシールドエネルギーを、まるで始めから無かったかのように喪失させた福音。知っているが故に危惧する。

弟がある種究極とも呼べる力を知らぬ内に手にしたことを。

「全く、厄介な話だ」

その言葉は来たる状況の変化に向けてか、或いは純粹に強すぎる力を手にしてしまった弟への心配か。

本人ですら曖昧なまま、眩きは夜空へと溶けていった。

ガタコンッ

自販機がペットボトルを吐き出す。

取り出し口に手を伸ばし、一夏は買ったスポーツドリンクを手に取った。

臨海学校最終日。この日は片付けがメインとなり、午前中には旅館からバスで学園に戻ることになる。ちなみに昼食は高速道路のSAで取ることになっている。

午前中からの労働を終え、バスに乗り込むことになったのだが、若干の喉の渇きを感じた一夏はバスに乗る前に近くの自販機に飲み物を買いに来ていた。出発時間までは多少あるので、そこまで焦る必要は無かった。

「あゝ、暑い……」

照り付ける日差しにぼやきながら一夏はバスへ向かう。早く冷房の効いたバスに乗ってゆったりしたいというのが今の一夏の心境であった。

そしてバスに近付いた一夏は、バスの入口前で話し込んでいる二人の人影を見付ける。

一人は分かる。実姉である千冬だ。そして千冬と話している人物。そちらには見覚えが無かった。豊かな金髪にカジユアルスーツ。骨折をしているのだろうか、左腕は布で吊されている。

「遅いぞ、織斑」

バスに近付いた一夏に千冬が声を掛けた。

「すみません。ちょっと飲み物を買ってましてね。そちらの女性は？」

軽く謝ると一夏は千冬に話し相手の女性が尋ねる。そして千冬が答

えるよりも早く、女性が一夏の方を向いて口を開いた。

「あなたが織斑一夏君ね。私はナターシャ・ファイルス。銀の福音のパイロットよ」

その言葉に一夏はああ、と納得をする。

「あなたがそうでしたか。織斑一夏です。お加減の程はどうですか？」

挨拶と共に一夏はナターシャに具合を尋ねる。暴走状態にあったとは言え、福音に彼女が乗っていたのは事実。それゆえの気遣いだっ

た。そして一夏の問いにナターシャは軽く笑いながら答えた。

「お蔭さまで無事よ。ただ、どうしてか左腕の骨にひびが入ってたんだけど。こっちに来た軍の担当者が目を丸くしてたわ。『ISを装着してるのにどうしてこうなるんだ』って」

その言葉を聞いた瞬間、僅かに一夏が固まる。

思い出すのは福音戦的一幕。福音の左腕にたたき付けられた「鎚刃」という重量級奥義。明らかに自分のせいである怪我を目の前に一夏は少々気まずい気分になる。

「あなたにはお礼を言うわ。あの子を止めてくれてありがとう」

後頭部に冷や汗を浮かべる一夏にナターシャは頭を下げる。不謹慎だと分かりつつも、それを好機と見た一夏は話題の転換を図った。

「いや、そんなお礼は。それより、福音はその後どうなりました？」

一夏の言葉にナターシャは頭を上げると、どこか物憂げな眼差しで言った。

「本当は機密なんだけどね。福音は暴走を起こしたことでコアの凍結が決まったわ。期限は無期限」

その言葉に一夏もまた、僅かに眉をひそめた。二人の間に僅かに重い空気が漂う。

「でも、あなた達は気にしないで。むしろあなた達は恩人だから」
慌てたように表情を明るくしながらナターシャは言う。

「それでね。私としてはあなたにちょっとお礼をしたいな。なんて思うんだけど、どうかな？」

軽くウインクをしながら言うナターシャに一夏は静かな視線を向ける。そして口を開いた。

「なら一つだけ。もしも、福音がの凍結が解除されたら、俺と戦って下さい。暴走なんかじゃない、全力の死合いを。命懸けの果たし合いを」

そう、口元を愉悦に歪めながら言った。

それを見た瞬間、ナターシャは背筋が凍るのを感じた。

目の前の少年が放つ気配、その異質さにナターシャの軍人としての勘が警鐘を鳴らすのを感じた。

国家代表を努める親友との模擬戦で感じる威圧感とも違う、底の知れない不気味さを感じる。

「それじゃ、俺はこれで」

そう言つて一夏は軽く頭を下げるとバスに乗り込んだ。

「凄い弟さんですね」

呟くようにナターシャは千冬に話し掛ける。

「なに、手の掛かるだけの愚弟だ。それより、お前はこれからどうする。査問委員会くらいはあるのだろう?」

「ええ。でも、私は止まるつもりはありません。あの子から世界を、空を奪つた元凶を私は許さない。必ず見つけだして、報いを受けさせます」

そう、瞳の奥に強い意志の光を宿しながらナターシャは言った。

「あまり無茶はするなよ」

「それは忠告ですか?ブリュンヒルデ」

「なに、ただのお節介さ」

それきり。ナターシャは千冬に頭を下げるとその場を立ち去る。近くで待機している米軍の人間と共に本国に戻るのだろう。

それを少しの間見送った千冬は、バスの出発時間がすぐであることを確認して、自身もまたバスに乗り込んだ。

バスの中、自身の席の脇の通路に立ちながら一夏は何とも言えない表情をしていた。

席に座る前に視界に入ったラウラ。そのどこか絶望した表情。そして対照的に明るい表情のシャルロット。

（あゝ、そっぴや行きのバスでなんか騒いでたな）

一夏は行きのバスでノリノリのシャルロットと、シャルロットに弄られていたラウラを思い出す。

今ラウラの表情が浮かないのも、それを思い出したからだろう。このままでは帰りも行きと同じ展開になるのは明白だった。

だからこそ一夏は、できる限りの気遣いをした。

「なあ、ラウラ。席、変わるか？」

その言葉を聞いた瞬間、ラウラは一気に表情を明るくした。

「ほ、本当か！兄様！」

「あ、ああ」

行きで隣だった本音に確認を取りながら一夏は言う。本音は快く承諾した。

「ありがとう、兄様！」

そう言いながら本音の隣に座るラウラを見て一夏は、パタパタと動く犬のような耳と尻尾がラウラに付いているのを幻視した。

(馬鹿馬鹿しい)

そう思いながら一夏はラウラに代わってシャルロットの隣に座る。

「と、いうわけだ。シャル、いいよな？」

「うん！..！」

一夏の言葉にシャルロットが満面の笑みで答える。

そしてシャルロットが一夏の腕にしがみついて来た。

「エへへへ、一夏」

心底幸せだと言いたげな表情のシャルロット。そんな彼女を軽く見ると、一夏は窓の外に視線を向けた。

バスの出発を告げる千冬の声がバスに響く。

動き出した車窓からの景色に一夏は視線を向け続けた。

第四十話（三巻終了）（後書き）

零落白夜：やっちまった感がありますぜ。

原作では白式と紅椿は互いに抑止し合う関係の機体ですが、当作品の白式は違うという。

全てのISに対し脅威となりうる、言うなれば真・零落白夜装備です。

実はかつての千冬も使うというのがミソ。

まあ、この真・零落白夜。発動は多分絢爛舞踏以上に条件がシビアになりそうですが。具体的には作者が展開的に使うべきと判断した時（マテ

いやあ、やっところここまでぎぎつけられました。

これも一重に読者の皆さんのご愛顧のお蔭であります。本当にありがとうございます。

さて、次は四巻の夏休み編ですが、オリジナル話がメインになると思います。一夏の師匠も出る予定です。後、話数もそんなに多くはないかも。

活動報告でネギまの更新をするかもしれないと書きましたが、やっぱりこっちの方が書けそうな気が…

ネギまはもっとチマチマと書くことにします（マテ

それでは皆さん、今後も本作をよろしくお願い申しあげます。
感想ご意見はいつでも受付中です。

第四十一話（前書き）

夏休み編ですが、少々オリジナル話を。

一夏の修行夏休み編をお送りしたいと思います。

とはいえ、今回一夏の出番は0ですが。その代わりヒロインズに少々はっちャけてもらいましたww

第四十一話

怒涛とも呼べた臨海学校から半月と少し経った八月初頭。

IS学園は全国の各学校より一足遅れる形で夏休みに入る。

これには授業カリキュラムなど諸々の様々な事情が重なるのだが、ここでは割愛をする。

約一ヶ月の夏休みの間、生徒は思い思いに過ごす。

全寮制である学園には日本のみならず世界各国から生徒が集まるが、大半の生徒は実家への帰省をする。

特に国外出身者となるとそれが顕著であり、寮に残る生徒は極少ないと言える。

鳳鈴音。中国代表候補生である彼女はそんな少数派の一人だった。ちなみに、彼女以外の一年名物である専用機持ち、箒、シャルロット、ラウラもまた寮に残る組である。セシリアは今は寮に居るが今日明日の内に一度本国へ帰国をするらしい。

(帰ってもそんな大したことないしね)

そんなことを考えながら鈴は夏休み初日、早朝の廊下を歩く。

帰省組の生徒は終業式だった前日の内に各々帰路に着いたため、寮はいつもに比べて人が少ない。

(実家に戻っても両親は居ない。というかうちは離婚。軍で面倒な訓練もヤダ。そもそも、一夏に会いに学園に来たのに、何で帰らなきゃならないのよ)

つまりはそれが理由の全てであった。一夏に会うために学園にやつ

てきた彼女からしてみれば、わざわざ彼と離れる帰省など実に馬鹿げた話なのだ。

そんな彼女は夏休みの初日を一夏と過ごそうと、寮の一夏の部屋へ向かっていた。

早朝から出向くのは他の誰か、具体的には篝やシャルロットより先に一夏と約束を取り付けるためである。

（さあ）一夏。待ってなさいよ。あたしが会いに行っちゃうからね

やったるぞー！という気合いを込めて腕を突き上げながら鈴は一夏の向かう。

そして廊下を曲がり、一夏の部屋のドアが目に入った直後、一夏の部屋のドアが勢いよく開かれ、中から血相を変えたシャルロットとラウラが出て来た。

そして二人は鈴を見つけると走らずに、しかし猛スピードで歩きながら鈴に向かってきた。

廊下を走ってはいけないという規則を守るのは立派だが、血相を変えながら足を素早く動かして向かってくる様は正直不気味だと鈴は思った。

「鈴！一夏知らない！？」

力強く鈴の肩を掴みながらシャルロットが聞いてくる。あまりの勢いに思考が空白になった鈴は黙って首を横に振る。

「そんなあ！ラウラ、どうしよう！」

「落ち着けシャルロット！私に任せる！福音の時みたいに私が軍の衛星で兄様を見付ける！」

「さすがラウラ！後、僕のことはお義姉ちゃんって呼んで！」

「断る！」

目の前で繰り広げられる漫才としか思えない光景に、鈴は逆に思考が冷静になるのを感じた。

ラウラ、それって職権濫用でしょ。ていうか福音は機密なんだから迂闊に喋るんじゃないわよ。後シャルロット。お義姉ちゃんってどういうことよ。

「っ！かあんた達、なんで一夏の部屋から出て来たのよ。」

色々言いたいことが思い付くが、とりあえず鈴は事情を聞くことにした。

今もなお騒ぐ二人の頭をひっぱたいて事情の説明を求めた。

「とりあえず落ち着きなさいよ。事情を説明して頂戴。一夏の部屋に居た理由も含めてしっかりと！」

最後の部分だけをやたら強調しながら、しかしできるだけ落ち着きを保ちながら鈴は言った。そしてシャルロットが語りだした。

「あ、あのね。夏休みでしょ？だから一夏もいつもよりゆっくり休んでるかな？って思ってたね。それでね。一夏のベッドでラウラと一緒に添い寝しようと思ったんだけど……一夏が居ないの……」

その言葉に鈴は納得したようにウンウンと頷く。そして口を開く。

「オーケー。とりあえず一言言わせてもらおうわ。添い寝って何よ添い寝ってえ!!何羨ましいことしようとしてんのよ!」

激昂する鈴。彼女の言動も第三者が聞けば眉をひそめるような内容だが、この場にそれを咎める者はいなかった。そして鈴の言葉にシャルロットとラウラはなんてことないと言わんばかりに返す。

「だって僕がそうしたいんだもん」

「私と兄様は兄妹だぞ。添い寝くらい当然だろう」

「だー!なんなのよー!!それならあたしだって幼馴染よ!!あたしも行くわ!!」

もはや我を忘れたとしか言えない様子で一夏の部屋に突撃しようとする鈴。その体をシャルロットが抑える。

「だから一夏は居ないんだってば〜!」

「そんなこと知るかー!!」

強引にシャルロットを振り払った鈴は一夏の部屋に入る。そして見た。やたらと整頓された部屋。空き部屋としか見えない一夏の部屋を。

「な、なによコレ……」

昂った感情が一気に冷めていくのを鈴は感じた。そして後ろを振り向くとシャルロットとラウラが不安げな表情をしていた。

「ごうじちゃいられないわ!」

何かを決心したかのように言うと、鈴は部屋を出る。そしてその場を素早く去った。補足すると、寮則は守っているため走ってはいい。あくまで早歩きである。限界の速さに挑んだ早歩きではあるが。

そして一つの部屋の前に辿り着くと、鈴はその扉を勢いよく開けた。

バンツ!!

「セシリア!居る!?!」

「り、鈴さん!?!なんですの、急に!」

部屋ではセシリアがドレッサーの前に座り髪を整えているところだった。既に制服に着替えてはいたが、髪の手入れの最中だったらしい。鈴の突然の、少々手荒い来訪に彼女は眼をパチクリとさせていた。

ルームメイトは帰省中なのか、部屋にはセシリア一人しか居ない。そして鈴は部屋にずかずかと入ると、セシリアの腕を掴み引っ張ろうとする。

「緊急事態よ!あんたも来て!」

「あの!待って下さいな!わたくし髪の手入れがまだ!」

「んなもん後よ後！一夏の行方の方が重要だわ！いいから来なさい！」

一夏の行方ってなんですよー！という言葉が無視して鈴はセシリアを引っ張る。

激昂した鈴さんに振り回されるのはいつぞやの買い物以来ですわーと半ば諦めながらセシリアは仕方なく鈴に着いていくことにした。

そして鈴とセシリアが一夏の部屋の前に着いた時、そこにはシャルロットとラウラに加えて箒も居た。

「鈴！一夏が居ないとはどういうことだ！」

箒もまた興奮した様子で鈴を問い詰める。

「そんなのあたしが聞きたいわよ！あんたこそ何か知らないの！」

「全然だ！」

「威張って言うな！」

突然始まった箒と鈴の漫才染みた会話に鈴に腕を掴まれたままのセシリアは何がなんだか分からないと言った表情を浮かべる。

そしてラウラに事情を聞いた。

「では、一夏さんが唐突に部屋から消えたと？荷物なども一緒に？」

「うむ、そうなのだ」

事情の説明を受けたセシリアは状況の要点を確認する。説明の際に添い寝云々など、思わず耳を疑うような内容もあったが、一応そこをスルーできるくらいには今の彼女は冷静だった。

「でも、今は夏休みですわ。一夏さんもご実家にお帰りになられたりしてもおかしくはないと思いますけど」

「私達に何も言わずにか？」

セシリアが推測を述べるが、箒の言葉にそれもそうかと思ひ直す。わざわざ帰省の旨を誰かに言う必要性があるとは思わないが、あれで意外に律儀なところのある一夏だ。比較的親しくしている自分達に告げていてもおかしくはない。

「はっ！ もしや兄様は何か危険に巻き込まれたのではないか？ 世界で唯一の男性IS操縦者だ。良からぬ輩に狙われてもおかしくはない」

そう言うラウラに四人はその可能性もありだと思えるが、すぐに否定する。

学園のセキュリティの高さを考えればそれは難しい。そして一夏自身、そう安々とさらわれるような人間ではない。逆に誘拐犯を返り討ちで半殺しにしかねないと考えた。

実際のところ仮にそうなった場合、一夏は半殺しで済ますつもりは毛頭なく、単独犯なら四分の三殺し、複数犯なら一人を半殺し、残りは殲滅くらいの心積もりでいるのだが、そんなことはこの五人が

知る由は無かった。

「なにより織斑先生が居る。あの人が居れば脅威など、脅威ではなからう」

篝の言葉に四人が頷く。千冬が存在。それこそが最大の理由。細かな理屈など無い。彼女が居るという事実。それだけで、学園での安全は半ば保障されているに近いというのが、五人の共通見解だった。

「じゃあ、なんで一夏は居ないのよ…」

鈴の言葉に全員が黙り込む。鈴に巻き込まれた形のセシリアも、いつの間にか輪に自然と加わっているが、この場においてそれは実に瑣末事なので誰も指摘はしない。

「後は…単に誰かに会いに行ったとかでしょうか。それが遠出で泊まり込みとかなら、早朝からの外出や、無くなった荷物にも説明がつかますが…」

「会って、誰よ？」

セシリアが再び述べた推測に鈴が突っ込む。僅かに思案して、セシリアは答えた。

「例えば、わたくし達も知らない女性とか」

後にセシリアは「地雷を踏むという言葉の意味を理解しましたわ」と、この時のことを述懐する。

セシリアがそう言った直後、確かに空気が固まった。

「フフ…アハ。へえ、そうなんだ一夏。僕に内緒で他の女の子と会うんだ」

顔を俯かせながら、不気味な笑いと共にシャルロットが呟く。そのただならぬ姿に、原因となる言葉を発したセシリアは思わず引いた。

「へえ、一夏つたら。僕がいるのに、他の女の子と会うんだ。うん、連れ戻して教えなきゃ。一夏は僕のものなんだって」

そう呟きながらシャルロットは四人に背を向けて歩き去ろうとする。

だが、その肩に伸ばされた手がシャルロットを止める。手の主は鈴。彼女は振り向き光の消えた目をしたシャルロットを見据えながら言った。

「誰が誰のものですって？」

その声には明らかにドスが効いていた。そして、鈴は再びキレた。

「ぶざけんじゃないわよ！一体いつ一夏があんたのものになったのよ！」

「一夏と会った時からそう決まってるんだよ！一夏は僕と一心同体なの！そう決まってるの！僕が決めたの！好きとか愛を超えて宿命になってるの！」

負けじと言い返すシャルロットだが、それは鈴をますます興奮させるだけだった。

「それならあたしは一夏の幼なじみよ！あなたよりも早く、一夏はあたしのなんだから！」

そう言う鈴の言葉に別方向からの反論が起こった。

「待て！それなら私の方が先だぞ！一夏と知り合ったのは私が一番最初だ！その時から一夏は私のだ！」

幕である。鈴とシャルロットの言い合いをどうしようかと考えていた彼女だったが、鈴の言葉に思わず口を出していた。後は勢い任せである。三人でひたすらに言い争う。

「まあ待て、お前達」

そう冷静な声でラウラが三人を制する。

「言い争っても仕方ないだろう。兄様が誰のものかなど、実に不毛な言い争いだ」

落ち着き払ったラウラの言葉に、流石に熱くなりすぎたと三人は口を閉じる。

それを見たラウラは満足そうに頷いてから言った。

「そも、兄妹は運命共同体だ。ならば、兄様はこの世に生を受けた時点で妹の私のものであり、私は兄様のものである。実に簡単な話じゃないか」

そう余裕たっぷりにラウラが言う。直後、再び三人が怒涛のように口を開いた。

「待てラウラ！看過できん言葉だぞ！」

「ふざけたこと抜かすんじゃないわよ！んなの認めないわ！」

「ラウラ！僕は一夏の妹ラウラのお義姉ちゃんだよね！なら間接的に一夏は僕のものにもなるよね！」

「シャルロット！あんたそれどどういう意味よ！」

「返答次第では覚悟しろ！」

「ええい！三人とも静まれ！兄様は私のものだ！そうなのだと云ったらそうなのだ！」

ラウラを加えて四人で言い争いを始める始末。一連の流れを見ていたセシリアは思わず頭に手を当てた。

（皆さん、そんな言い争いを…）

流石に呆れてしまうセシリアだったが、ふと、一夏が誰かのものとなるイメージを想像してしまう。してしまった。

（一夏さんが誰かのもの、ですか。それはつまり一夏さんに独占される、或いは一夏さんを独占すること。なんでしょう。少々不愉快ですわね）

言い争う四人を見ながらそう思う。

（きつと皆さんも同じ思いなのでしょうね。ならば、ここはわたく

しがしつかりと場を収めなければ)

そう義務感と共に決意したセシリアは四人に向けて言う。

「皆さん。先程から聞いていれば、少々みつともないですわ。少し落ち着いて下さいな」

「止めないでセシリア。これは聖戦よ！」
ジハード

四人を代表して鈴が答える。まともに取り合うつもりの無い姿に軽いため息を吐くと、セシリアはそのまま言葉を続けた。

「ですから！わたくしが解決法を提示しますわ！」

少々声を大にして言う。その言葉に四人は一度言い争いを止め、セシリアの方を向いた。

そして四人の顔を見回すと、セシリアは再び口を開く。

「いいですか。今回の論争の要は皆さんの一夏さんとの関係です。宿命、幼なじみ、妹。関係としては少々特殊です。だから話が拗れるのですわ」

「なるほど。言われれば」

「確かにそうだね」

セシリアの言葉にラウラとシャルロットが同調する。

「ですから、わたくしが折衷案を提案します」

折衷案。その言葉に四人の視線がセシリアに集まる。そしてセシリアが得意げに口を開いた。

「ここは間を取り、一夏さんは友人という最もシンプルな関係であるわたくしのものということに」

「くくくく却下!!!」「くくく」

言い終える前にセシリアの言葉は否決された。

そして遂に言い争いはセシリアを加えた五人全員で行われ、泥沼の様相を呈してきた。

「何故ですの！わたくしはただ友人を不毛な争いから離したいだけですのに！」

「その思考が不毛にしか見えんだ!!!」

セシリアの抗議を箒が抗議で返す。
更に畳み掛けるように鈴が言う。

「ていうかなんで一夏があんたのものになるのよ!!!折衷案でも何でもないじゃない!あんた一夏に気でもあんの!?!」

「え?」

鈴の言葉にセシリアがキョトンとした顔をする。それを見た四人も同様にえ?という顔になる。

「いえ、その、わたくしにとって一夏さんはあくまで友人であり。決してそのような感情は。確かに最近の一夏さんの凛々しい姿は良

いものと思いますが、そんなことは決して……決して……うう……」
慌てるように言うセシリア。そしてそのまま黙り込んでしまった。
その顔は若干赤い。

それを見た篤、鈴、シャルロットは言い知れぬ危機感を抱いた。

（まさかセシリア、無自覚というのか？）

（はつきりと理解しちやいないみたいだけど、これは厄介だわ）

（先手必勝だね。何が何でも一夏を僕のものにしなきゃ！）

各々心中でセシリアへの警戒をあらわにする。

ちなみに、ラウラはセシリアの態度の意味するところがよく分かっていないのか、突然セシリアが黙り込んだことに純粹に不思議そうな顔をしている。

この辺り、彼女の同年代の面々に比べ、やや欠けている情緒が幸いしたと言える。

「とにかくだ！一夏は私のものだ！」

「寝言は寝て言えつてのよ！あたしが一番に決まってるわ！」

「ねえ、篤に鈴。臨海学校の時の改良型グレー・スケールのテストに付き合ってくれない？大丈夫だよ。生身で受けたらどうなるかっていう簡単な内容だからさ」

「私を無視するな！兄様は私の兄様なのだ！他の誰にもやらんのだ
……！」

「そんな…一夏さんはあくまで友人で…。いえでも、そんな…：あ
う…。」

五者五様の言い争い。一夏の部屋の前の一角は夏休み初日の早朝で
あるにも関わらず、カオスの様相を呈している。

ちなみに、誰もそれを咎める寮生は居なかった。さすがに騒ぎを聞
き付けて何事かと見にくる者はいるのだが、言い争いの面々と話の
内容から「な〜んだ、織斑君絡みのいつものか〜」と納得してその
まま戻ってしまう。

そして、この状況に終止符を打つ存在が現れた。

「朝っぱらから何を騒いでいる！！貴様ら！！」

スパパパパーン！！

怒声と共に寮の廊下に響き渡る五人分の出席簿アタックの音。IS
学園一年一組では名物となっている千冬の怒声と出席簿アタックが
騒ぐ五人に下された。

千冬の出現に先ほどまでの大騒ぎを嘘のように止める五人。しかし、
彼女らを見る千冬の厳格な視線が和らぐことはなく、千冬は五人を
廊下の端に並ばせると事情を説明するように言った。

「なるほど。織斑が居ないというところから騒ぎ始め、それがいつ
のまにか織斑は誰のものか、か。とりあえず織斑のことに關しては

説明をするが、その前にだ」

静かに要約した事情を反復する。普段となんら変わらぬその姿が逆に五人を緊張させている。そして千冬は五人を睥睨して言った。

「馬鹿か貴様ら。そんなことで騒ぎを起こすような輩にアレはくれてやらんぞ」

「……………」

千冬 of 言葉に押し黙る五人。その姿に軽くため息を吐くと、やや呆れたように千冬は言った。

「欲しければ自分を磨いて、自力でものにしろ。女を磨け、小娘が」

容赦の欠片も見当たらない千冬 of 言葉に五人の空気はますます重くなる。だが、そんな彼女らの様子など知ったことかと言う風に千冬は言葉を続けた。

「さて、織斑のことだったな」

瞬間、俯いていた五人が一斉に顔を上げて千冬を凝視する。その姿に千冬は再びため息を吐いたが、一々指摘するのも億劫になったのか言葉を続けることにした。

「あいつは今は外出中だ。既に気付いているかも知れんが泊りがけで、そうだな。最低でも一週間は帰らないだろうな」

その言葉にセシリアを除く四人の顔色が変わる。千冬 of 言葉が意味するところ。それは最低でも一週間は一夏と会えないということだ

からだ。

「あの、連れ戻すというのは」

「無理だな。あいつが了解するとは思わん。ああ、無理になどということは考えるなよ。ISでも持ち出さなければそんなことは叶わんし、学園が認めん。私もできるとは思わん」

千冬の言葉に五人が揃って眉をひそめる。IS云々はまだ置いておく。しかし、千冬でも無理というのはどうということなのか。それが彼女らの疑問だった。

「先生。先生でも無理というのは一体？」

篝の問いに千冬はやや苦い顔をしながら答えた。

「なんてことない。織斑が会いに行ったやつというのは私でも敵わない、それだけのことだ。まあ、生身での話ではあるがな」

その言葉に五人の顔色が驚愕に染まる。生身とはいえ敵わない。織斑千冬本人にそう言わせることがどれだけ異常なことか。彼女らはよく知っている。

「先生。その一夏が会いに行っている人物とは一体誰なんですか？」

恐る恐るといった様子でシャルロットが千冬に問う。その問いに千冬は常と変らぬ冷静さを保ちながら、その名を言った。

「海堂宗一郎。古流剣術真瞳流古式刀術師範にして継承者。私が知る限り世界最強、私以上の剣豪にして一夏の師。常識に喧嘩を売っ

て圧勝している化け物だ」

そう、戦慄の表情を浮かべる五人を面白がるように千冬は言った。

第四十一話（後書き）

今回の話では鈴に大いにはっちゃけてもらったと思います。

とりあえず一夏絡みで大騒ぎするヒロイン書くのは面白かったです。

セシリアも着々と高感度を高めて……

さて、次回は一夏の修行になります。とはいえ、メインとなるのは修行よりも修行による一夏の変化とか魔改造とかになります（マテ

師匠の名前や剣術の名前は完全オリジナルです。今回の話書きながら考えて、五分くらいで決まりましたww

何分原作にない話なので上手く書けるか不安はありますが、次回もよろしく願います。

第四十二話（前書き）

一夏修業編そのに

修業直前的一幕です。そして一夏の師匠も登場です。

第四十二話

side 一夏

さて、学園を早朝に出て電車を乗り継ぐこと約三時間と少し。地方のローカル線を使って、俺は山に囲まれた一つの町を訪れていた。駅を出て目的の山に向かう俺の手には一つのキャリーケース。そして肩には中身の入った竹刀袋が二つ。泊まりがけ修業のための荷物一式だ。

町は小さいことと、10歳の頃から何度も通っているだけあって道に迷うことは無い。ここ数年、通い続ける間に顔見知りになった町民の皆様と道中幾度かあったので、その都度軽く挨拶。

ちなみに町民の皆様は大体が高齢者。若年層はあまり居ない。昨今問題の田舎の急速な少子高齢化を体言していると言える。とは言え、高齢者である町民の皆様は日頃の農作業とかで鍛えられているのか、割と元気な人が多い。これは素直に喜ぶべきだろう。

まあ、そんなこんなでのんびりと歩き続けた俺は目的地、一角に師匠が居を構える山の入口にたどり着いた。師匠の家までは一応車も通れる道が一本通っている。師匠は町でもまあ色々あって慕われているから、町の人が訪ねやすいようにという配慮からだ。

その道を使えば楽勝なのだが、俺はそんな真似はしない。道から少し外れた場所、俺が修業登山ルートと呼ぶルートの入口から山に入る。

この道、まあとにかく人に優しく無い。獣道に少しばかり人の通る道の色が着いている程度だ。着けたの俺だけど…

わざわざこんな道を通る理由は一つ。これもまた修業だからだ。道の悪さから足腰やバランスが鍛えられる。後、修業には関係ないけど、人の手の入っていない自然の中を歩くというのも中々良いものだ。これも理由の一つと言えるかな。

さて、この山についてだが。管理人は師匠である。正確には所有権は町だか市だかにあるらしいのだが、何をどうしたか師匠が管理を請け負っている。

そして師匠は山の自然を守るため極力山に手を出さない。まあその理由も修業関係が大半を占めるが。

そういうわけだから山には色々自然が豊富だ。

綺麗な湧き水や、各種食用に適するキノコや山菜。一部には溪流もあるから魚も捕れる。

そして……

「ブフォ、ブフォ」

俺の目の前で（多分俺にガンを飛ばしながら）鼻を鳴らしている野生の猪とか。

「……………」

さて、どうリアクションをしようか。というか猪居たんだ。それも野生で。

道の中でも一通り足場の整っているエリアに出た直後だから驚いたよ。

いや、狐やタヌキくらいならねえ。居てもおかしくはないけど。猪とは聞いていないぞ、師匠。

「ブフオツ、ブフオツ」

猪の鼻息が荒くなっていく。うん、どう考えても俺に狙いを定めてるよ。さて、普通なら丁重に避けて通るのがセオリーなのだろうが、それはなんか嫌だ。負けた気がする。

かといって相手をするのもなあ……。これが普通の猪なら余裕なんだが、その、なんだ。目の前の猪は明らかにサイズがでかいんだよ。それもかなり。

正直今すぐにも師匠を始め地元猟友会とか関係各所に、どうしてこんなのが居るんだと小一時間程問い詰めたい気分だ。普通ならとつくに駆除されてるようなもんじゃないのか？

「でも、しゃあないよなあ……」

そう呟きながら俺は荷物を端によける。そして担いでいる二つの竹刀袋の片方を肩から降ろし、中から一本の木刀を取り出す。

これぞかつて町の不良100人フルボッコで俺の相手として活躍した改造木刀。残念ながら名前はまだ無い。とはいえ、非常に気に入っている一品だ。

師匠がわざわざ特注で作ってくれたというのものもあるが、何よりその使い勝手の良さだ。中に鉄芯があるから重さは刀のソレとほとんど変わらない。だから素振りに実に適している。

さすがにね、本物振り回してたら問題だからさ。例え実際は硬化樹脂で頑丈性アップさせた凶器に成りうる鈍器とはいえ、あくまで見た目は木刀でしかないから人目についても問題はない。知っているのは鈴と弾くらいだろう。

さて、そんな愛用木刀を俺は正眼に構えて猪を見据える。猪はその場を足を蹴って、走るための勢いづけと来ている。もはや激突は避けられない。なら、迎え撃つだけだ。

「ブフオツ!!」

そして猪が突っ込んでくる。うん、結構速い。これで直撃食らったら骨折は軽いな。そんなことはあり得ないけど。

猪が迫る。俺はそれを静かに待ち構える。心は可能な限り鎮める。必要なのはタイミングと精度。どっちも決して疎かにはできない。

「フツ……」

軽く息を吐いて心身共に気を充実させる。そして猪が丁度良い距離まで迫ったところで俺も動く。僅かに体をずらして猪とぶつからないようにし、力強く一步を踏み込む。そして木刀を振りぬく。

交差は一瞬。俺は確かな手ごたえと共に背後で重いものが地面を滑る音を聞いた。

「成功、か……」

後ろに目をやればそこには倒れ伏す猪の姿。別に死んではいない。現に今も僅かに痙攣をしている。

俺がやったことは至極単純。浸をかけた一撃で猪の頭部をぶつたたき、脳震盪を起こさせただけ。いや、実際殺しちまってもいいのかわからなかったんだよ。なんか勝手にやったらやったでマズイ気がするし、死体を放置つてのもねえ。

「まあいつか」

とりあえず邪魔は居なくなつた。後は師匠の家まで一直線だ。そんなこんなで俺は改めて荷物を持ち直し、山を登つたのだった。

side out

一夏が猪を退けて山を更に登ること約30分。森を抜けたそこは大きく開けていた。

広い庭と少々小さな家。そして家に寄り添うように建つ、家よりも遥かに大きな道場。この地こそが一夏の目的地であつた。

「こんちわー」

そんな軽い挨拶と共に一夏は家に入る。玄関には鍵がかかつておらず、一見すると不用心とも取れるが、立地を考えれば泥棒などの心配はほとんどなく、そもこの家の住人からしてみればそんな用心など不要の代物である。

一夏は玄関で立ち止まる。人が出てくる気配は無い。いや、家の中のどこからも人の気配は感じられなかつた。

「……………」

誰も居ない家の中を一夏は静かに見つめる。その視線は険しく細められている。一夏はキャリーケースを脇に置くと、木刀の入った竹刀袋を静かに置き、もう一つの竹刀袋の口を開く。

中から現れたのは黒塗りの鞘に収められた一振りの日本刀。一夏が

師より譲り受けた愛刀「陽炎」である。一夏は鯉口を切ると、玄關から一度出て再び立ち止まる。そしてそのまま周囲に注意を張り巡らせた。

「ッ！」

気付いた時には体が動いていた。一夏は体を90度横に反転。同時に陽炎の柄に手を掛けて、その刀身を僅かにむき出しにする。

ガキンツ！

鳴り響く金属音。むき出しにされた陽炎の刀身が一振りの日本刀とぶつかり合っていた。しかし、一夏の視線は日本刀ではなく、その持ち主に向けられていた。

刀を持つ隆々とした腕。その腕に負けず劣らず、鍛え抜かれた筋肉に包まれた総身。筋骨隆々とした長身によりその手に握られた刀はおろか、同年代の男子の中でも良い体格をした一夏の体すら小さく見える。

一夏は刀を握る人物の顔を見据える。互いの顔に笑いが、獰猛な笑いが浮かんでいる。硬質さを感じさせる漆黒の長髪。精悍な顔立ちと、鷹のごとく鋭い瞳。

「久しぶりだな、弟子」

「お元気そうでありより、師匠」

刀を打ち合わせたまま挨拶をかわす。一夏と打ち合う人物、彼こそが一夏の師。千冬をして化け物と言わしめる規格外。海堂宗一郎で

あつた。

「いきなり随分な挨拶ですね」

やや皮肉混じりに一夏が言う。しかしその言葉を宗一郎は鼻で笑う。

「ハツ、お前なら受け止めると思ったからだ」

「それはそれは。俺も随分と買われたモンですね」

「馬鹿言え。俺の弟子ならこんくらい当然だろう」

言いながら宗一郎は刀を陽炎から離し、刀を持つ手とは別の手に握られている白鞘にその刀身を収める。それと同時に一夏もまた陽炎を鞘に収めた。

「まあ上がれ。修業も良いが、その前に積もる話くらいしてもバチは当たらねえだろう」

そう言つて宗一郎は一夏に家へ上がるように促す。その言葉に一夏は素直に頷き、改めて家へと入る。

靴を脱いで上がる一夏の姿はまるで自分の家に入るような気軽さがあり、一夏にとってこの家がどのような存在かを如実に表していた。

コトリと音を立てて机の上に冷えた麦茶の入ったグラスが二つ置かれる。

邸宅の居間、和室であるその部屋で一夏は座布団に座りながら机を挟んで宗一郎と向き合っていた。

武道における師弟。そんな関係の二人が向き合うのだから、二人の間に緊張した空気があるのだらうと想定されるが、実際にはそのようないことは無く、二人の間には実に和んだ自然な空気があった。

一夏のプライベートに比較的詳しい五反田弾や鈴が見れば、まるで千冬と接しているみたいだと今の一夏を評するだらう。

事実、一夏にとって宗一郎は師であると同時に家族、兄のような存在だった。実姉の千冬が多忙故に接する時間が少ない中、ある程度纏まった期間で一夏は宗一郎に面倒を見て貰っていたのだ。自然とそうした感情を抱いてもおかしくはないだらう。

そしてそれは宗一郎も同様だった。紆余曲折あって実家と距離を置き、自身の異質さを理解するが故にこのような田舎でひっそりと一人で暮らす彼にとって、一夏は自身の技を学んでくれるだけでなく、純粹に自身を慕ってくれる。やはり彼にとっても一夏は弟子であると同時に弟のような存在だった。

余談ではあるが、宗一郎と千冬が初めて試合を行ったきっかけは、二人のこの仲の良さにある。

一夏のことへのお礼を兼ねた挨拶で千冬が初めて宗一郎に会った時、下手をすれば自分以上に一夏に懐かれているように見える宗一郎に千冬は思わず手合わせを申し込んだのだ。

要するにブラコンの嫉妬であった。

先に口を開いたのは宗一郎だった。

「しかしお前もけつたいなトコに行くことになったなあ。IS学園だったか。聞けば女の園らしいが、実に羨ましい話じゃないか」

からかうような言葉に一夏は苦笑いで返す。

「みんなそう言いますよ。でもそんな良いモンでもないですよ。始めの内は動物園の珍獣扱いでしたし」

「そうか。まあ、んなことはどうでもいいんだよ」

「どうでもいいんですか」

マイペースというより身勝手と取れる宗一郎の言葉に一夏は冷静に返す。確かに宗一郎も中々に身勝手に振る舞う節があるが、それよりも遥かに質の悪い存在を知っているだけに、一夏はこの程度で動じることは無い。

「俺が気になるのはな、やはり向こうでの経験だ。聞けばIS学園じゃ、生徒同士で戦うらしいな。その辺はどうだ？」

「まあ、それなりに面白くはありますね」

宗一郎の問い掛けに一夏は思い出すように答える。

「ISを動かすのも中々悪くはないですし、結構な使い手もいますから。やり応えもあって」

「その顔の傷もか？」

遮るように放たれた宗一郎の言葉に一夏は口を閉ざす。師が何を指しているのか、一夏は理解している。ラウラとの戦い、正確には偽千冬と戦った時の傷だ。

いつの間にか師の視線が鋭さを帯びているのに一夏は気付いた。

「一応、どうしてか言ってみる」

「ある奴とISで試合をした時にですね、そいつのISが現役の時の千冬姉のデータを丸パクリしてきたんですよ。結果は勝ちましたが、その時に」

「ほう、千冬にか」

「千冬姉のデータです。あんな紛い物、千冬姉とはとても呼べない。確かに速さも重さも、動きの全てが千冬姉のものでしたけど、ちっとも怖くは無かった」

「そうか」

弟子の言葉に宗一郎は頷く。

しかし、だからといって視線を和らげはしない。それが武に関わる以上、彼はあくまで厳格な師として弟子に接する。

「だが、その怖くないという剣を相手に怪我を負ったのもまた事実。確かに戦いである以上負傷は当たり前だが、それでもその怪我がお前の未熟の表れだということは分かっているな？」

一夏は静かに頷く。それを見て更に宗一郎は続けた。

「それに一夏。お前、一度死にかけたな？」

その言葉に一夏の目が見開かれる。その顔には語ってもいないことを看破されたことへの驚きが確かにあった。

「俺はお前の師だぞ。弟子のことくらい、大抵は見抜ける」

その言葉に一夏は絶句し、そして敵わないと言いたげな表情を浮かべた。

「いやまあ、機密掛かってるんでほとんど話せないんですけどね。ちと想像以上の強敵とぶつかって」

一夏の言葉を宗一郎は静かに聞いている。そして視線を僅かに下に向け、何かを考えるような姿になる。

そんな師を一夏は黙って見つめる。

「一夏」

再び宗一郎が口を開く。

「お前、少し又ルくなってないか？」

「え？」

「俺もISについては少々知識がある。つつても、ネットとかで調べられるくらいのことだがな。確かISでの戦闘は、基本的に命の安全は保証されているとかだったか」

「ええ、まあ」

一夏の返答に宗一郎は得心いったと言つような表情をする。そして視線を上げて、再び一夏の目を見据えながら言った。

「それだ。そのセオリーがお前を鈍らせている」

そう言つと宗一郎は立ち上がる。そして一夏にも立つように促す。

「いいか一夏。俺はお前を今まで鍛えてきた。そして、俺からすればまだまだ未熟極まりないが、それでも相応の腕に鍛え上げた俺は思っている。だがな、それを発揮できるかはお前次第だ」

師の言葉を一夏は真剣な表情で聞き続ける。

「一夏。前に教えたな。剣は使い手の心次第だと。その通りだ。そして一夏。このままだと、お前の剣は錆び付くぞ」

その言葉に一夏の眉が僅かに動く。腕が錆び付く。それは一夏にとつて看過できる言葉では無かった。

「このご時世だ。別段、常日頃から剣気を纏えとは言わん。ISの試合とやらでも、わざわざ相手を叩きのめせとも言わん。だが、それでも刀を握る時は心を研ぎ澄ませる。己を一振りの刃に変える」

宗一郎は一度言葉を切る。そして、視線だけでなく全身から鋭い気を発しながら一夏に行った。

「修業の開始だ」

その言葉に一夏は黙って頷いた。

「一夏。今だから言おう。お前は確かに才能がある。真瞳流の技の大半も使えるようになった。だが剣士として、武人としては未だ未熟。だから今回の修業、俺はお前を本物の武人へと鍛える。今までより更に上の領域へ押し上げる」

宗一郎は一夏に背を向けて、居間の戸を一つ開ける。その先には細い廊下があった。

この廊下こそ、道場への一本道。

そして一夏に背を向けたまま、宗一郎は言った。

「心しておけ、一夏。今回の修業、お前には地獄を見てもらう」

聞く者を萎縮させるような鋭さを帯びた宣言。その言葉に一夏はただ表情を変えずに頷く。そして言った。

「望むところです」

「すぐに稽古を始める。準備をしろ」

そして二人はそれぞれ動き出した。

二人が去った居間の机、その上に残された二つのグラス。その中の氷が溶け、音を立ててグラスの中を転がった。

第四十二話（後書き）

さて、とりあえず今回の話について。

前半で出て来た猪はぶっちやけアレです。ブルファンゴをイメージして下さい。さすがにドスではありませんがww

そして一夏の師である海堂宗一郎。

千冬以上の剣豪という化け物ですが、多分その実力の全容が作中で出る可能性は少ないです。出る展開がそもそも……

ちなみにこの宗一郎氏。数分で考えた名前ですが、一応元はあります。

宗一郎という名前は自分のネギま小説の主人公の名前を弄って。海堂という名字はとあるラノベに登場する警察庁長官の名字が丁度合う感じだったので。まあ、多分問題は無いかと。なんのラノベか分かる方は居るのでしょうか？

そして宗一郎氏をどんな風にイメージするかと言つとですね。

- ・最強の剣豪
- ・黒髪長髪に筋骨隆々の体
- ・人里離れてひっそりと暮らしている
- ・イメージC Vは池田秀一さん

どんなイメージか、というか誰をモデルにしているのか。多分これで分かるかと。分かった方は感想にてどうぞ。

多分C Vで一発だろうな…

さて、この修業編が終わると一夏はICHIIKAぶりに益々拍車がかかるのですが、正直反応が怖かったり…

第四十三話（前書き）

剣士ICHIIKA覚醒の回です。

第四十三話

海堂宗一郎の邸宅は山の中腹、木々の生えていない開けた土地にある。

そしてその広さは、いわゆる核家族と呼ばれる世帯が新築で家を建てるとして、数軒は建てられる程の余裕がある。
そんな土地に宗一郎は一人で居を構えている。

しかし、土地の広さの割には庭はそれ程広くは無く、一部は畑に使われている。

そして、一夏と宗一郎が会話をした、彼個人の家もまたさほど広くは無い。

では、残る土地は何に使われているのか。その用途こそが今、一夏と宗一郎が稽古を行っている道場に他ならなかった。

道場と聞いて誰もが思い浮かべるような佇まいをしている宗一郎の道場だが、その実態は並の道場を逸脱したものになっている。

各種建材は通常より頑丈さに優れた物が使用され、宗一郎自身が手を加えたことによる修業のための仕掛けも幾つか設けられている。

そして、土地の大部分を使用したその広さ。

これらを以って、二人の修業場は成り立っている。

そして今、道場の中からは引っ切り無しに金属の打ち合う音が響いている。

カンツ！カキンツカンツ！ガキンツ！

一夏の手握られた刀が宗一郎目掛けて振るわれる。

微塵の容赦も無い剣閃は鋭くも精密、そして重さを以って宗一郎に襲い掛かる。

武器の扱いに秀でた鍛えられた軍人でも長く受けることは敵わない剣撃をしかし、宗一郎は涼しい顔で手にした刀で捌く。

そして捌く内に見つけた一夏の剣閃の粗を的確に突き、その攻撃を途絶えさせ、体勢を崩した一夏を一降りの一撃で以って後方へ弾き飛ばす。

弾き飛ばれた一夏は止まることは無く、再び宗一郎へ向けて斬り掛かる。

二人が手にする刀は稽古ということでは真剣ではない。

長時間の打ち合いへの耐久も考慮した、特殊チタン合金を用いた特別製である。

しかし二人の技量を以ってすれば、刃が無いだけで後は名工の逸品にも劣らぬ完成度を持つこの模擬刀は、十分凶器になりうる。

そんな得物を用いて行う二人の稽古は、既に始まってから後少して丸一日を数えようとしていた。

丸一日近く、二人は道場で延々と打ち合いを続けていた。

「ッ！ッ！」

口から声にならない荒い息を吐きながら一夏は刀を振るい続ける。稽古を開始してから今まで、極僅かの休憩以外はひたすら、師に向かって全力の打ち込みを続けていた。

大の大人でも10分も持たない、特別に訓練を受けた軍人のような人種ですら耐えられない程の長い時間での打ち込み。

宗一郎が何よりも一夏に徹底させた体作り。

真瞳流の古来の修練法と最新のスポーツ医学、そして宗一郎独自の修練理論を織り交ぜた特別の訓練を続けた一夏は、既に基礎体力等の点では常人の域を超えるレベルになっていた。

(まあ、ここまで鍛えられるというのは俺も予想外だったが)

一夏の攻撃を裁きながら宗一郎は胸のうちで呟く。

僅か五年の修業でこれ程の体力の向上、更には自身の流派の技の大半を会得したこと。

どれを取っても異常な才覚。

やはりあの織斑千冬と血を分けた肉親なだけはあると、自身のそれ以上の異質さを棚上げしながら宗一郎は一夏を評する。

ドタッ

再び、もはや何度めになるか分からない程の回数、後方に飛ばされた一夏が遂に膝を付いた。

吐く息は荒く、その全身から滝のような汗が流れている。

誰もが「これまで」と思う姿。しかし、一夏が倒れることは無かった。

刀を支えにしてゆっくりと立ち上がる。そして足にしかと力を充実させ、再び刀を構える。

そんな弟子の姿を宗一郎は静かに見つめ、迎え撃つ姿勢を取る。

稽古開始時、宗一郎はただ一つの指示を一夏に下した。

ひたすら打ち込み続ける。

時間の指定も何も無い、ただ延々と続く打ち込みの指示。それだけを宗一郎は指示し、そして一夏は忠実に実行した。

あまりにも大雑把すぎるとしか言えない内容、誰もが眉をひそめるような指示を一夏は黙って行う。

それは一夏の師に対する信頼の証だった。

何て言うことは無い。ただ師の指示に従うだけで、一夏は確かに強くなった。そんな師の言葉、どこに疑う余地があるのか。

故に一夏は止まらない。例え肉体が限界の悲鳴を上げようと、鉄の意志で以って黙らせ、ひたすらに師への打ち込みを続ける。

しかし、肉体の限界は確かに一夏を苛んでいた。脳裏で響き続ける全身の悲鳴。

うっとおしさしか感じないソレをひたすらに振り払い続けながら、

一夏は刀を振り続ける。

いつの間にか、思考から余計な考えが排除され、ひたすらに打ち込むことしか考えなくなっていたが、それに気付く思考すら今の一夏には無かった。

そして、研ぎ澄まされていく一夏の思考の変化を、宗一郎は振るわれる刀から感じ取っていた。

一夏の剣から確実に粗が削ぎ落とされている。

剣閃の一振り一降りに鋼の煌めきが見え、同時に古流の殺人剣たる真瞳流の刃の鋭さが一気に表れていく。

そんな弟子の変化に、稽古開始から厳格な表情を変えなかった宗一郎の口元に、僅かな笑みが浮かんだ。

高まっていくナニカをはつきりと感じられる。一夏が振るう刀の一

振り一振りを捌く度に、宗一郎は一夏の内凝縮されていく力を感じ取った。

そして、再び宗一郎は一夏を弾き飛ばした。

今度は一夏は膝を着かなかった。足は道場の床をしかと踏み締め、正眼に構えられた刀と一夏の総身からは、静謐ながらも進めるような剣気が溢れていた。

静かに師を見つめる一夏の目には一切の邪念が感じられず、純粹な闘争の意志が静かに漂っている。

「そつだ、それだ…」

深い感慨を込めた言葉を宗一郎は呟く。

丸一日打ち合い、ようやく自身の望む姿になった弟子に、宗一郎は深く力強い笑みを浮かべる。

「お前は今、限界を超えた。そして同時に、お前はまた一步を踏み締めた」

聞こえていないと知りつつも宗一郎は言葉を紡ぐ。

どうしとも言葉が口について出てくる。それは、師として弟子の更なる成長を喜ぶが故だった。

「では、これからが本番だ」

その言葉と共に、今まで一夏の剣を受けるだけだった宗一郎が自ら動いた。

一瞬で一夏の視界から宗一郎の姿が消える。

真瞳流歩法「逸足^{いっそく}」と、無拍子の同時使用。どちらも対人において高い効果を発揮する技を同時に、極め上げた人間が使えばどうなる

か。

結果は相手への感知を一切許さない超高速移動となる。

宗一郎は一瞬で一夏の左斜め後方へ移動。手にした刀を一夏に振ろうとする。

しかし、その一太刀に一夏は確かに対応した。

そんなことは織り込みずみと言わんばかりに宗一郎は移動を繰り返す。幾度と無く一夏の死角を取るが、その全てに一夏は反応した。

自身の動きに確実に対処する一夏に宗一郎の笑みは益々深まる。そして幾度かの攻防の後、宗一郎は再び一夏から距離を取った。

「そうだそうだ。良い感じになってきたじゃあないか」

そう呟く宗一郎ははっきりと視えていた。一夏の周囲に張り巡らされた領域。その内に入れば、たとえ直接見ることがなくともその存在を感知する、いわば勘の結界。

中国武術に言う「先に開展を求め、後に緊湊に至る」という基礎の習得からその精度の向上を示した教えにおいて、緊湊に至った者が身につける一つの境地。名を「制空圏」

「そうだ。そいつを身につけて武人としちゃ一人前だ」

これこそが宗一郎の求めた今回の修業の目的の一つ。まさかそれがこんなにも早く成されようとは、彼自身も予想しなかったこと。

それを悪く思うことは決してない。あるのは、自身の予想以上に成長を見せる弟子を嬉しく思う気持ちのみ。

「それを体に染み込ませろ。理屈だなんだはその後だ。お前にはそ

れが合っている」

それは教えを与え始めた時から変わらない二人の修業方針。徹底的な体への覚えこませ。宗一郎が手本を実践し、一夏がその模倣によって技を身につける。

普通ならば無茶苦茶としか言えない修業方法。しかしそれを可能とするのが宗一郎の師としての技量であり、一夏の剣才であった。

「そこまで行ければ後は面白いくらいに伸びるぞ、一夏。来い！」

その言葉を認識したのか、一夏が動く。無拍子による踏み込み。以前剣道部主将との立ち合いで無意識に使用したそれを再び使用。

宗一郎とて、今の一夏の無拍子が無意識ということは理解している。だが同時に確信もしていた。一夏が無拍子を完全に習得したことを。

齢十五にしてこの技量。その才覚に宗一郎は一夏を迎え撃ちながら思わず苦笑をする。

知り合いである、天才と呼ばれる一夏と同年代である一人の少女を思い出し、若年層の才覚に自身の実力を棚上げしながら軽く嫉妬に近い思いを抱く。

だが、今はそのようなことは瑣末事でしかない。

今すべきことはただ一つ。急速な成長を見せる弟子を更に伸ばすこと。気持ちを切り替え、宗一郎は一夏を迎え撃つべく刀を構えた。

再度放たれる一夏の剣撃。

その太刀筋は精密にして鋭利、何よりも早い。丸一日刀を振り続けた疲労を感じさせない動き。

その剣撃を宗一郎は満足げな表情で受けつつける。弟子の剣の一撃一撃が、その成長を物語っている。

例えそれが、純然たる殺人剣であっても、弟子の成長とは師にとっての確かな喜びだった。

それから幾度打ち合ったか。

一夏が宗一郎と距離を離れた。

僅かに腰を捻り、刀を持つ手を下げる。それを見た宗一郎は目を細める。

その構えは見知った構え。真瞳流奥義の一つ、「鎚刃」の構え。一夏が銀の福音との戦いで使用した、一撃の重さに重きをおいた重量級奥義の構え。

宗一郎は悟る。一夏の体に遂に正真正銘の限界が訪れたことを。そしてそのことを悟った弟子が、最後の攻撃を奥義で以って放とうとすること。

是非も無し。弟子の全力の攻撃。それを宗一郎は師として真つ向から受け止める。

そして一夏が動き出した。宗一郎がそうしたように、無拍子と逸足の同時使用での高速接近。生半可な相手なら反応すらままならない動きを宗一郎は容易く見切る。

そして一夏が刀を振るう。

渾身の力が込められた一撃が宗一郎に振るわれる。その太刀の軌跡を完全に見切りつつ、真つ向から迎え撃とうとした宗一郎はあることに気付く。同時に一步、後退をしていた。

空振りとなる一夏の鎚刃。しかし、そこで一夏は止まらなかった。振り抜いた刃をそのまま腰に据えると、刀を振った勢いで更に一步の踏み込み。同時に居合の容量で刀を再度宗一郎に向けて振り抜く。

速さに重きをおいた奥義「旋拔」つむじなげ

一夏の総身に凝縮された力が超高速の抜刀となって宗一郎に再び襲い掛かる。しかし、弟子の剣にやられる程、彼は甘い存在ではない。冷静そのもので抜刀を受け流す。しかし、宗一郎の内心は一つの期待に彩られていた。

抜刀をかわされた一夏はそのまま刀を持つ右腕を弓を引くように引き絞る。

再度踏み込むと共に、今度は高速の突きを放つ。

射程に重きをおいた奥義「死翔」ししやう

まさに飛ぶかの如く放たれた突きは宗一郎の心臓目掛けて突き進む。しかし、その一突きを宗一郎は体を捻ることでもあつさりとかわす。

しかし、かわされた一夏は止まらない。宗一郎に向き直る体の捻りを利用して、再度斬り掛かる。今度は一撃に終わらず、突きや袈裟斬り、逆袈裟も交える。

手数に重きが置かれた奥義「桜乱」おうらん

連続で襲い掛かる斬撃。その全てを宗一郎は刀で捌く。そのまま一夏は前進する。攻撃を捌かれた勢いを利用して、刀の切っ先を下に向けながら踏み込み。そして一夏の腕が動く。しかし、斬撃は来ない。直後、宗一郎の脇を目掛けて横尻よこしりぎの一閃が振るわれる。

相手の攪乱に重きをおいた奥義「朧月おぼろつき」

腕の動きを体の動きから独立、踏み込みなどの動作とタイミングをずらす形で変則的な一撃を叩き込む技。虚を突く一撃に大抵の相手は為す術無く斬られるが、またも宗一郎は回避。

四連続で放たれた奥義。ここまで来れば一夏が何をしようとしているのか、宗一郎は理解していた。理解して、その顔に笑みを浮かべていた。

精密さに重きをおいた奥義「死棘しきく」

突きが主体となる技だが、時に斬撃として放たれる技は寸分の狙い違わずに相手の急所に一撃を当てる。

しかし、この技の真価は狙うポイント。技を放つ一瞬で相手が防御不能のポイントに狙いを定めることが要。その狙いを定めることこそが、この技をものにするための必須要素。

そして一夏が狙ったのわ宗一郎の胸部。肋骨の隙間から正確に心臓を切り裂く一閃を放つ。

しかし、それは宗一郎が敢えて作った隙。予想通りのポイントへの攻撃を宗一郎は涼しい顔でかわす。

一閃をかわされた一夏はそのまま刀を振り上げる。そして、刀を持つ右腕に渾身の力を集約、一気に振り下ろす。

刀で斬る際の要点。刃の当て方、当てるポイント、刃の走らせ方、これらを徹底的に磨いた一撃。

何よりも一撃の殺傷性の高さ、言うなれば刀の本質に重きをおいた奥義「無命」むみょう」

その一撃の前に命はただ消え去るのみ。

一夏が連続で放った技、真瞳流七奥義の最後にして最強の一撃。その一撃を、宗一郎は全力で回避をした。

否、正確には宗一郎が回避を試みたのは無命では無かった。

一撃が振り抜かれた直後、宗一郎の背後にあった壁が爆散、建材を道場の床に飛び散らせていた。

煙のように舞う塵が晴れた先には、壁に向かって突きを放った姿勢のまま固まる一夏の姿があった。

その頭は垂れ、完全に気を失っているのが分かる。

ドサッ

そのまま一夏が道場の床に倒れ込む。宗一郎は一夏の体を小脇に抱えると、道場の隅にある畳まで運び、その上に一夏を寝かせる。

そしてすぐ脇にある壁に埋め込む形で設置された冷蔵庫から、冷やした濡らしタオルを数枚取り出すと、一夏の額や首筋に当てていく。

「……………」

意識を失った弟子の顔を宗一郎は静かに見つめる。

その顔に先ほどまでの笑みは無く、師としての厳格さがそこにあった。

「よもや、な。まさかここまでやるか」

そう言いながら宗一郎は一夏が突きで破壊した壁を見つめる。壁のすぐ下には抜け落ちた刀が転がっている。

真瞳流裏奥義「七刃一殺」しちじんいつさつ

真瞳流七奥義、鎚刃、旋抜、死翔、桜乱、朧月、死棘、無命。これら七つの奥義を連続して放つ七刃、そして連続攻撃の過程で体内で溜め込んだ力を真正銘必殺の一撃として放つ一殺。

予め練り上げた力を以って放つ故に予備動作は無く、また一瞬で全エネルギーを解放するため、超高速での圧倒的威力を放つことが可能となる。

しかし、この一殺に限っては伝授などが効かない。何故なら、一殺とは自らで編み出す技だからである。

溜め込んだ力をどのように開放するのか。その方法は人によりけりである。

事実、一夏は突きという形で放ったが、宗一郎の場合は本人の認識すら超える超神速の一閃である。

伝授できない故に自ら編み出すしかない。だからこそ、習得は困難。それを一夏は初めて放った七刃と共に成功させた。

宗一郎ですらできなかったことをやってのけた一夏に、その才覚に改めて険しい視線をする。

（あるいは、こいつと真瞳流がそれだけ相性が良いということか…

…)

そうならば、元々の才覚を考慮した上での習得の早さにも頷ける。しかし、だからといって宗一郎は明るい表情をすることはない。殺人剣たる流派と相性が良い。それは即ち、一夏の本質がそういうものだということを示すからだ。

「とは言え、全てはコイツ次第ということか」

本質がなんであれ、一夏がどのように在るか、それを決めるのは一夏自身だ。師である自分は技を教えることはできても、在り方までを決めることはできない。

ならば仕方ない、と宗一郎は思考を切り上げる。どうにもならないことを考えとも非効率。ならば、次はどのように弟子を鍛えるか考えた方が余程建設的である。

「しかし、技は一通り教えたからなあ…」

ついそんなばやきが出る。

やたらと才覚のある弟子は真綿が水を吸うように技を習得していった。七刃一殺まで会得した以上、教える技はもはや流派には無い。後は免許皆伝をくれてやつてもいいと思えるレベルまで技量を磨かせるだけだ。

そのことに異論は無い。しかし

「それだけつてのもつまらんな…」

欲が出たというべきか。もう少しアレコレを教えてやりたいという思いが宗一郎にはあった。

それもどうせなら剣以外を。武人としての弟子のプラスになるものを、何か無いかと宗一郎は考えを巡らせる。ふと、一つの技を思い浮かべた。が、すぐに却下する。強大だが危険すぎる。ならば何か無いか。数分の思案の後、一つの考えに行き着く。

「無手の技でも教えるか」

この海堂宗一郎という人物、剣のみならず素手の武術にも心得がある。

いや、そうした人物は結構多い。手近な例を挙げれば、一夏の幼なじみである篠ノ之箒も実家に伝わる剣術以外に素手での古武術を修めている。

宗一郎の場合、剣だけでなく素手の武術も桁外れのレベルで修めているというだけなのだ。

「刀だけだと状況に制限つくからな。しかし、何を教える」

そう呟きながら宗一郎は自身の使える格闘技を思い浮かべる。その中から、一夏に合いそうなものを選ぶ。そして決めた。

「よし、方針第二弾決定。ならば早速準備と行こうか」

そして宗一郎は一夏を寝かせたまま道場から出て母屋へと向かう。母屋にある彼の書斎。そこにある格闘術の教本を取り出すために。そのついでに食事の支度も始めることにした。

時刻は早朝だが、おそらく一夏は夕食時まで起きることは無い。それを踏まえた上で行動の計画を立てる。

師の考えを知ることが無いまま、一夏は道場で昏々と眠り続けた。

第四十三話（後書き）

というわけで、剣士ICHIIKA覚醒回でした。

元々素地は高いレベルでできていたので、きつかけさえあれば一気に伸びる状態だったと。

少々マニアックな例えをしますと、FFTでジョブポイントを貯めに貯め込んで、一気にスキルを習得させるといった感じですね。ええ、わけわからない例えですね。

ちなみに作者は算術とシドがチートだと思います。

なんだろう、この先の一夏絡みの戦闘がISなのに別の作品のノリになりそうな気がします。具体的には某史上最強ナンチャラの……

さて、折角ですので宗一郎氏の紹介をしたいと思います。

海堂 宗一郎

30歳

古流剣術真瞳流古式刀術後継者兼師範

身長：192cm 体重：76kg

イメージCV：池田秀一

全身が鋼のような筋肉に覆われているため、身長も相まって非常に大柄に見える。

髪の毛は漆黒の長髪。しかしキャラキャラした印象は無く、むしろ硬質な雰囲気を持っている。

千冬ですら敵わない剣豪。正確には一夏が弟子入りをした五年前の時点では同格だったが、千冬は一線を退いてしまったため、そのことが原因で現在は宗一郎が上である。

本編ではそこまで大きな意味を持たない設定だが、父親が警察庁警備局のお偉いさんであるため、いわゆる暗部等にも通じている。

(警察庁警備局とは、日本における諜報組織といえる公安警察や警備警察の元締めといえる組織)
暗部に通じている。ココ重要。ある人物との接点が……

今回一夏が習得した技に関して。

制空圈って某史上最強で出ている技ですけど、調べてみるとリアルでも意外に使われている言葉なのです。ビックリ。

そしてもう一つの七刃一殺。元ネタはありますが、あえて伏せさせて頂きます。分かった方は感想にてどうぞ。

いやあ、技は考えていて楽しかったです。作者の厨二脳がフル稼働しちゃいましたww

次回の後書きあたりで技の簡単な解説、というかネタを書こうかと思えます。

魔改造万歳

第四十四話（前書き）

一夏修業編、終了です。

第四十四話

一夏が力尽き倒れてから約半日、夕食時を少し回ったところで一夏は目を覚ました。

「ん……あ……」

額や首筋などに当てられていたタオルをどかして、一夏は上半身を起こす。

そしてしばしボウツとした後、自身の状況を確認する。

（えっと……確か師匠に打ち込みまくって、それで……それで……イカン、記憶が曖昧だ）

全身が限界を訴え始めたあたりまでは覚えている。

しかし、その後の記憶が一夏にはほとんど無かった。思い出そうとしても思い出せない。

ただ一つ、何かを突き破ったような感覚が体に残っているのは覚えていた。

脇に置かれている訓練刀を手に取り、静かに立ち上がる。そして、体に残る感覚がなんなのかを確かめようとする。

だができない。刀を振ろうとしても、凄まじいまでの疲労がそれを許さなかった。

ふと、道場に近づく気配を感じた。誰のものかは言うまでも無く分かる。師である宗一郎のものだ。

そしてその気配を感じて一夏は驚く。気配のした方向は道場の外、庭の方からであったが、その距離が大きい。今までの倍以上の距離

からの気配を一夏は感じ取っていた。

そのことを疑問に思うより早く、宗一郎の気配が動く。数秒もしない内に道場まで近付き、道場と外を隔てる戸を開く。

「目が覚めたか」

「師匠……」

月明かりを背に道場の入口に立つ宗一郎に一夏は視線を向ける。その目は疑問があると言わんばかりだった。

そしてそんな一夏の心境を目を見る前から察していた宗一郎は、一夏より先に言葉を発する。

「刀は今を振るな。疲労が溜まっているだろう。丁度夕飯の時間だ。さっさと来い。説明はその時にしてやる」

それだけ言って宗一郎は母屋へと向かう。残された一夏はしばしその場に立ち尽くすと、言われた通りに刀を置いて、道場から母屋へと向かった。

母屋にあるダイニングキッチン。食事場所ともなっているそこには、一つのテーブルと、二人分の椅子が向かい合うように置かれている。必然的に椅子に座る一夏と宗一郎は向かい合う形になり、二人に挟まれるようにテーブル中央には鍋が置かれ、その中では様々な具の入った粥が、湯気と食欲をそそる匂いを立てている。

ちなみに宗一郎の邸宅は山中にありながらも、オール電化の地デジ

対応であり、意外と快適な造りになっている。

食卓に着いた一夏は目の前で湯気を上げる粥に、僅かに目を輝かせる。

夕食に呼ばれた後、疲労と共に凄まじい空腹に襲われた一夏にとって、目の前の粥は何よりのご馳走に見えた。

「一応、消化も考えて粥にしてみたがな。とりあえず食べ」

そう言いながら宗一郎は鍋に入ったお玉で、自分の丼に粥を盛りつける。それに倣って一夏も宗一郎の後に粥を盛りつける。

そして挨拶と共に粥を食べはじめる。一口粥を口に入れた瞬間、一夏はすぐに次の一口を口に入れる。

そうして盛りつけた分を一気に平らげると、そのまま二杯目を盛りつけ、食べはじめる。

対する宗一郎も、静かに淡々と食事を進めるが、その早さは盛大にがつつく一夏に劣らぬものであり、鍋にあった粥はあっという間にその量を減らし、ものの10分もしない内に空となった。

「さて、とりあえず師匠からの評価タイムと行こうか」

粥を平らげた二人は鍋や食器を簡単に片付けると、食後の緑茶と共にテーブルで向かい合う。

食休みでもあるため、二人とも姿勢こそ楽な状態であるが、放つ気配は僅かに固い。

「一夏、とりあえずどの辺まで覚えている？」

「体が限界訴え始めた辺りまでですね。後はほとんど」

「そうか」

弟子の答えに宗一郎は腕を組む。そして眼光を鋭くしながら口を開く。

「ひとまずはだ。及第点はくれてやれるレベルにはなった」

そして宗一郎は語る。途中から一夏が無意識で打ち込んだこと。そして一夏が使った制空圏や七刃一殺について話す。制空圏もそうだが、真瞳流の最後の奥義と呼べる七刃一殺を使ったことには、一夏も目を見開いて驚く。

「制空圏は良しとしよう。一度使えるようになれば、慣れと共に精度は上がる。だがな、七刃一殺は別だ。確かに初めてで成功させたことは評価に値するが、未だ甘い。まあ、それは自覚しているか」

一夏は黙って頷く。技を使うのと極めるのは話が違う。確かに一夏は流派の技を全て使えるようになったが、目の前の極めた存在と比べれば、己の技の未熟さは嫌でも理解させられる。

「そして一夏。これは重要な話だ。武人としてのお前の今後に関わる」

瞳に宿す真剣な色を強めながら言う師に、一夏は僅かに身を固くする。

「一夏。お前は武人としては『静』の側だ」

武術家には二つのタイプがある。

一つは『動』

己の心を高ぶらせることで、高い能力を発揮するタイプ。それは時に格上にも打ち勝つことを可能とする。難点は、いわゆるテンションやモチベーションで発揮する実力に波が出ること。

もう一つは『静』

己の心を鎮めることで、常に安定した実力を発揮すること。利点はおおよそ格下相手に敗北が有り得ないことだが、難点は逆に格上には勝ちにくいこと。

どちらが優れているかは決められない。ただ一つ言えるのは、大半の武人はこの二つのタイプのどちらかということだ。

「正直言うとな、俺も今まではお前は動のタイプだと思っていた。

何故かは分かるな？」

「アレですよね。キレた時の」

師の問いに一夏は僅かに苦い顔をしながら答える。

何が原因かは言うまでもない。我を忘れて暴れる、あの状態のことだ。

そして宗一郎は一夏の答えに頷いてから言葉を続ける。

「確かにあの状態のお前の攻撃は強力だ。だが、今回の打ち合いの途中、無意識状態になり心が鎮められたお前の攻撃は、それ以上に鋭かった。こうなれば、もはやお前が静のタイプと言うより他はあ
るまい」

宗一郎の言葉に頷く一夏だったが、その顔には未だ疑問の色が残っていた。当然のようにそれに気付いた宗一郎は、一夏に疑問を尋ねるように促す。

「でも師匠、それなら俺のあの状態はどう説明するんですか？」

その尤もな問いに、宗一郎は顎に手を当ててしばらく考え込む。そして再び口を開いた。

「おおよそ静のタイプの人間は、本当にキレた時は逆に冷静になるという。お前のあの状態は、その前段階じゃないだろうか」

「は？」

「ふむ、そうだな。一夏、ガスバーナーをイメージしてみる。あれはどんな風に炎が変化する」

いきなり投げ掛けられたガスバーナーの問いに一夏は僅かに面食らうが、師に尋ねられた以上、真面目に答えることにする。

ガスバーナーの炎の変化。学校での理科の授業で使った際を思い出しながら一夏は言う。

「あーっと、確か最初は不完全燃焼の、オレンジ色のでかい低温の炎で、その後に安定した青い高温の炎……ああ、そういうことですか」

師の言葉の意味を理解した一夏は、納得したという表情になり、それを見た宗一郎は深く頷く。

「理解したか。あくまで推測に過ぎんがな。お前が我を忘れたあの

状態は言わば不完全燃焼。その先こそが、お前の正しくあるべき姿だ。事実、今回の打ち合いでのお前の剣筋、今まで以上に鋭いものだった」

「……………」

一夏は黙って師の言葉を聴き続ける。

「そしてだ、今回お前は制空圏を、そして七刃一殺を会得した。よって、今から新たな修業方針を告げる」

その言葉に一夏は自然と背筋が伸びる。

宗一郎が語る新たな修業は、大きく三つに分けられる。

一つは今まで通りの剣の修練。とは言え、技そのものは一通り会得したため、その技量をより磨くことに重点が置かれる。

一つは思考制御。静の気で安定した実力を常時発揮できるよう、常に心を鎮めるよう心がける。また、これにより制空圏の更なる強化と、いわゆる勘などの肉体的修練に留まらない技能の習得と、練磨を目的とする。

最後の一つは無手術の訓練。

剣士いえど、無手の技を疎かにして良いという道理は無く、また万が一、刀を使えない状況に置かれた場合を想定して、無手の格闘術の修練をする。

この三つを同時並行で、残る期間の修業とするというのが、宗一郎の方針だった。

「はい師匠。質問があります」

「なんだ」

説明を受けた一夏が拳手と共に尋ねた。

「刀と思考制御はいいです。無手ですよ、問題は。勿論、師匠の言う必要性は理解できますし、俺も異論はありません。ですけど、他の訓練と並行しながら一週間そこらで、どうにかなるものなんですか？」

一夏の疑問も尤もと言える。

無手の格闘術にも、連綿と築いてきた歴史があり、同時にその分だけ奥深さを持っている。

流石に極めるとまでは宗一郎も言わなかったが、だからといって一週間程度の修業でどうこうなるものとは、一夏には思えなかった。

しかし、そんな一夏に宗一郎は至極なんとも無い風に答える。

「どうにかなるか否かではない。どうにかさせる」

「…その根拠は？」

「俺が教えるからだ」

さも当然と言わんばかりに堂々と言い放つ師の姿に、一夏は思わずため息を吐く。

その言動の無茶苦茶ぶり、絵空事としか思えないそんなことを、現実にはかねない師の常識外れぶり、両方のため息を吐く。

そして一夏は諦める。師が本気である以上、もはや自分が何を言っ

ても無駄。ならば黙って師の教えを受け、実力の向上に努める他ない。

「お願いします」

そして一夏は頭を下げた。

side 一夏

さて、そんなこんなで早くも一週間が過ぎてしまった。

いや全く、人生で最も密度の濃い一週間だったと言えるな。

師匠の無茶苦茶極まる三種同時並行修業。忙しいったらありゃない。

ただ、やはり無手の修業の比重が若干大きかった気がする。

剣は今まで通りやれば良いし、精神修養はほぼ常時みたいなもの。だからこそか。

師匠からは二つの格闘技を学んだ。攻撃用に一つを主体として、一般的なサポートとしてもう片方の体の運用術をと言った感じだ。師匠曰く、土台になる体は十分に出来ているとのこと。故に、基礎や技を短期間でみっちり叩き込まれた。

その甲斐あってか、俺も教わった技を使っくらはできるようになった。

あくまで使えるだけ。ここ重要。

仕方ないので、師匠から教本渡されて、後は帰ってから自分で磨け
とのこと。

正直無茶だと思ったけど、やるしかない。

とりあえず、学園での修業に新鮮味が出るから良しとすべきなの
かな。

さて、修業も日程のほとんどを終え、明日には帰るといっ日の午後、
俺は母屋の居間で師匠から指示を受けた。

「は？猪狩り？」

「そつだ」

師匠の話によると、最近どこからか現れた大型の猪が色々やっちゃ
つてくれてるらしい。

で、師匠にその駆除の依頼が来たわけだ。そして師匠はそれを俺に
やらせるつもりらしい。

というか猪ってあれだよな。ここに来る途中で出くわしたアイツだ
よな。

「まああれだ。ちょっとした実戦訓練だな」

そう頷きながら言う師匠に俺も何と無く理解する。

まあ、アリじゃないのか？

「とりあえずだ。サクツと片付けて来い。そしたら夕飯は猪鍋だ」

そんな言葉と共に俺は陽炎片手に送り出された。とりあえず時間が無いから正規の道で一氣に山の麓に下りる。そして師匠の家に繋がる道の入口で待機していた町会の人と合流。そこで山の地図と、連絡用のトランシーバーを渡された。

「とりあえず、後はそのトランシーバーの指示で頼むよ。悪いね、一夏君」

そう言いながら、顔見知りの町会のおっちゃんが立ち去る。さてどうしたものかと思うと、トランシーバーに連絡が入った。

『織斑一夏さんですね？』

多分猟友会だか市だか、とにかく関係者なんだろう、若い男の声だ。とりあえず俺は答える。

「そうですけど」

『依頼の説明です。依頼主は町会、及び市です。目的は海堂氏が管理する山に出没する猪の駆除。本来は海堂氏に依頼する予定でしたが、氏の希望であなたに依頼します。とは言え、こちらとしては仕事をこなしてくれればそれでよろしいのですが。猪の推定出没エリアは地図に記載済みです。そちらを確認して下さい。猪は大型のことですが、所詮は野生の獣。猪突猛進しか能が無いでしょうから、あなたにとっては大した問題では無いでしょう。ですが、猪が出没する辺りは木々が多く、足場も不安定だそうです。あまり無理をしない方がよろしいのでは？町会、並びに市との関係を良くする好機です。そちらにとっても、悪い話では無いと思いませんか？』

………言いたいことだけ言って切りやがった。

というか、言葉が少々嫌味臭くてやたら腹が立つのだが、どうなってる。しかも好機ってオイ。別にそんな打算は無いのだがな。

いや、落ち着け俺。心を鎮める。ずっと修業したじゃないか。

「すう…はあ…」

軽く深呼吸を一回。うし、落ち着いた。

それと同時に、全体的な感覚が鋭敏になるのを感じる。そして、俺は自身の間合いに球状の気が張り巡らされるのを認識した。

制空圏。範囲内に入った敵性存在を感知、自動的に反射行動を取るいわゆる奥義の一つ。

まあ、本来は近接での多人数戦向きな技なのだが、どうもこれを使うと、より広い範囲の気配察知も鋭敏になるから、まあ有用性は高い。

「…行くか」

そして俺は山の中に足を踏み入れた。

side out

地図を見ながら一夏は山の中を進んでいく。猪が出現しやすいポイントには印が打たれており、一夏が目指すのは打たれた複数の印を繋いだ円の中心になるポイントである。

より深く山の中へ入るにつれ、足場がどんどん悪くなつて行くが、一夏の足が止まることはない。

一切のスピードを落とさずに悠然と進む。そして歩く一夏の視線は地図にのみ向けられており、足元を見ることはまるで無かった。

目的とするポイントには行動を開始してから1時間と経たずに着いた。

一夏は地図を仕舞うと、竹刀袋から陽炎を取り出す。刀身は鞘に納めたまま。しかし何時でも抜けるように、全身から余計な力を抜き、適度な緊張を保つ。

そのまま一夏は周囲を歩き回る。丁度、猪が出ると言われているポイントをなぞるように、散歩をするかのような軽い足取りで歩き続ける。

「……………」

唐突に一夏が足を止める。

そしてその場に立つたまま、一夏は周囲に注意を張り巡らす。

居る。ただその事実だけを一夏は感じ取っていた。

背後から向けられる敵意の籠った視線を、一切動じることなく受け止める。一夏は陽炎の鞘を持つ左手を上げ、丁度胸の前に柄が来るようにする。

そして空いた右手で柄を掴むと、静かに鞘から刀身を引き抜く。そのまま右手首のスナップだけで陽炎を軽やかに回転させると、再び自然体に戻る。

刀を抜き、自らの間合いを広げた一夏は同時に、制空圏の知覚範囲の拡大も認識する。

草を踏み抜く音がする。しかし、一夏は振り向かない。振り向くまでもなく、認識していた。

そして僅かに体を横にずらすと、手首を回転させ陽炎の柄を逆手に持ち替えながら右腕を上上げる。そして、切っ先を地面に向けた陽炎を一気に突き下ろした。

硬い物を貫く手応えと、くぐもった猪の鳴き声。

背後から一夏に突進してきた猪は、陽炎により頭部を一撃の下に貫かれ、僅かな断末魔を遺して一瞬の内に絶命していた。

ゆっくりと一夏は右腕を引き上げる。猪の頭部から陽炎の刀身が引き抜かれ、支えを失った猪の骸が地面に倒れ伏す。

頭部を貫かれたことによる一瞬での絶命。流れ出る血も殆ど無く、いつそ鮮やかとも呼べる手並みであった。

猪に視線を向ける。それは一夏が修業初日に出くわした猪であった。また出くわす機会があるかと思っていたが、実際にあってみれば余りに呆気ない幕切れ。

これも世の無情さかと、一夏は懐から取り出した和紙で刀身の血と脂を丹念に拭いながら思う。

そして、柄にも無く爺臭い考えに思わず苦笑を浮かべた。

足で適当に掘った穴に使用済和紙を埋めながら、一夏はトランシーバーで連絡を入れる。

木の繊維を剥いて作った天然素材百パーセントの和紙は、地面に埋めても自然へと還る。

トランシーバーの向こうで、相変わらず嫌味な口調の男性から人員

を寄越す旨を伝えられると一夏は近くの木に背を預け、そのまま空を見上げながら人員の到着を待った。

それからしばらくの後、やってきた地元の猟友会の人間に猪の後始末を頼んだ一夏はそのまま山から出て、再び宗一郎の家へと向かった。

猟友会の面々は、猪の事切れ方と、それを為した一夏の手並みに驚愕を露わにしたが、それを一夏が気にすることは一切無かったん。

宗一郎の家にたどり着いた一夏は、家の戸に一枚の貼紙があることに気付く。

宗一郎が町の集会場に出向いている旨、そこで仕留めた猪の肉を使って猪鍋の食事がある旨が書かれていた。

それを読んだ一夏は荷物を整理すると、自身もまた町の集会場に向けて歩を進めた。

「よう、遅かったな」

集会場に着いた一夏に、先に来ていた宗一郎が声をかけた。

「で、どうだったよ？」

「いやまあ、結構楽にやれましたよ」

首尾を聞く宗一郎。その問い掛けに答えた一夏の言葉に宗一郎は満足げに頷く。

「そうかそうか。とりあえず今日の夕飯は確保決定だからな。そりゃ良かった」

「あ、満足するトコってそこですか」

「当たり前だ。猪一匹、楽に狩れんでどうする」

「いや確かにそうですけどね」

本当に調子を崩すこと無く我が道を行く師に一夏は呆れまじりの苦笑いを浮かべる。

そして何時も通りということとは、次に何を言い出してもおかしくないということであり、先手を打って一夏は次の指示を仰ぐ。

「それで、次はどうすれば？」

「ん？そうだな。俺はちよいと町会連中と用があるから残るが、お前は好きにしていーぞ。確か鍋は7時くらいから始まるから、それまで適当にやってる。一週間以上、ほとんどぶっ通しだったからな。少し体を休めても構わん」

「分かりました。そんじゃ」

そう言つて一夏は宗一郎に一礼してその場を立ち去る。
向かうのは宗一郎の家。とりあえず言われた通りに、冷たいドリンクでも飲みながらゆっくり体を休めようと一夏は思っていた。

そして再び時は流れる。

予定された時刻に再度集会場を訪れた一夏は、既に準備を終えていた宗一郎や、地元猟友会の面々と共に猪鍋を堪能。

そのまま食事は酒宴に変わり、宗一郎を含めた酒を片手に持つ大人の喧騒の中で、終始一夏も笑い続けた。なお、その時の一夏の片手にはノンアルコールビールの缶が握られていたことをここに記す。

そして酒宴を終えた一夏と宗一郎は、片付けを手伝つと帰宅。そのまま就寝となり、一夏が帰る日がやってきた。

早朝、一夏と宗一郎の二人は道場の中央で向かい合つて座っていた。一夏の傍らには纏められた荷物が置かれている。その量は来る時より幾分か多いものとなっていた。

宗一郎が念のためにと一夏に持たせた暗器一式によるものであった。

「行くか」

「はい」

二人の言葉は固い。武門の師弟としての厳かな空気が二人を包む。早朝の静けさと相まって、その空気は夏だというのにどこか冷たさを孕んでいる。

「一夏、今回の修業でお前は段階を一つ超えた。今までのお前はただ真瞳流を使う者であったが、今は違う。今や真の意味での真瞳流の剣士、武人だ」

それは単に技術の高さ云々の安直な話ではない。無論、それも重要な要素ではあるが、それだけではない。言うなれば、心の在り方の問題であった。

「そして真瞳流の武人であること。それ即ち、お前という存在は一つの凶器ということだ。分かるな？」

「はい」

所謂スポーツ武術、世間一般の空手や柔道ですら、それを使う者とそうでない者では実力に大きな開きがある。

そして一夏が修める真瞳流はそうしたスポーツ要素とは無縁、徹底した古流の殺人剣術である。それを師からある程度認められるレベルで修めるということは、その者は一般人など容易く手にかける力を持つことに他ならない。

「俺は今まで、あまり武の心構えなどについてはお前に言わなかった。何故ならば、心構えとは自ら見極め、心に据えるものだ俺は思っているからだ」

師の言葉を一夏は硬い表情を崩さずに聞き続ける。

「だが、今一度問おう。一夏、お前は真瞳流の、いや、一人の武人として何を心に据える」

一切の甘さを排除した鋭い眼光で宗一郎が問い掛ける。それは師としての弟子への責務だった。力を持った弟子。その力に責任が伴う以上、それを師は自覚させねばならない。

そして一夏は静かに語り出す。

「俺は今まで、助けられてばかりでした」

一夏の脳裏に浮かぶのは数々の自身の危急。そうした時、一夏は常に助けられた。そして、一番強く思い浮かぶのは実姉の姿。

「嬉しくないわけじゃない。むしろ凄く嬉しかった。助けてくれる人の存在が、凄く幸福だった」

それは紛れも無い事実。数々の助けに一夏は、危急から身を、その心を助けられた。

「けど、同時にそうである自分が嫌だった」

助けられる度に実感する自分の未熟。強くなると豪語しながらこの様。それが一夏にとっては許容できなかつた。

そして一夏は力強く師の目を見据えて言った。

「助けられてばかりは嫌だ。そんなものが必要の無いくらいの強さを俺は求めます。千冬姉を、貴方をも超えるくらい……」

目の前の師の実力は一夏はよく理解している。千冬すら超える化け物としか呼べない実力。それを超えるなど、大言壮語も甚だしい。しかし、言わずにはいられなかつた。

そのくらい言わなければ、自分の望む領域には辿り着けないと理解していた。

そんな弟子の言葉を宗一郎はただ静かに受け止める。

笑いもしない。叱りもしない。呆れもしない。できるわけがない。固い意志を目に宿す目の前の弟子はもはやただの小僧ではなく、一人の男となっていた。

その言葉を真摯に受け止めないわけが無かった。

「助けられるばかりじゃない、逆に俺が助けとなる力を。俺の存在そのものが、勝利の要因となる力を望みます」

「殺人剣たる真瞳流で人を活かす道を行くか…」

その師の言葉に一夏は首を横に振る。

「守りたい何かに、誰かに危機が迫る。それを助けるのに俺は危機から守るのではない、危機を切り捨てる。それが俺の選択です」

「…そうか」

厳かに頷く宗一郎。

彼は弟子の意志を、その全てを察していた。何をかなぐり捨てても強さを求めると同時に、自分にとって大切な存在を守りたいという矛盾。

守るために、害為す存在を切り捨てる矛盾。

矛盾を孕んだ複雑な在り方。しかし、その在り方を咎めはしない。ただ強さを求めるだけは人を捨てた修羅。しかし内包する矛盾は、

その心を人に保つ。
人足ること。それを確認できただけで満足であった。

「強さを望むのは武人の性だ。だが、その思いを忘れるなよ」

頷く一夏に宗一郎は僅かに表情を和らげるが、すぐに引き締め直す。

「しかし一夏。同時に覚えておけ。如何に情から刀を取ろうと、殺人剣たる真瞳流、その真価は非情の下で発揮される。一度刀を振ると決めたのならば、迷うな。心を鋼とし、氷結の内に沈めて振るえ。迷いは刀を鈍らせるぞ」

「はい」

強く頷く一夏。元よりそうしていくつもりであった。

守りたい物、或いは者。それらは全力で守る。しかし、もしもそれらに刃を向ける時があれば、一切の情や情けを排除して切り捨てる心積もりだった。

「これで最後だ」

不意に師の言った一言に、一夏は再び心身共に引き締める。

「問おう。一夏、何を求める」

「揺るぎなき力を」

「一夏、どこに求める」

「ただ、己が身と心このみ」

「一夏、どこを目指す」

「貴方の至った極み、その更なる先を。武の極み、その深奥を」

三度発せられた問いに、一夏は淀みの無い声でまっすぐに答える。

それを受けた宗一郎は深く頷くと、自身の背後に置いてあった物を目の前に移した。

それは一つの酒瓶と、二つの杯だった。

無言で宗一郎は瓶の栓を開け、杯に酒を注ぐ。

そして二つの内一つを一夏の前に置いた。

「飲め」

「は？」

思わず問い返す一夏。しかし、宗一郎は構うことなく続ける。

「何、少しくらい飲んだところで害にはなりはしない。いいから飲め」

そう言つて、片手に持った杯を一夏の前に掲げる。

唐突な出来事に困惑しながらも、一夏もまた杯を手取る。

そして宗一郎は一夏の杯に自身の杯を軽く合わせると、一息で中身を飲み干した。

僅かに逡巡する一夏だが、師の勧めを無下にするわけにもいかないため、師に倣い自身も一息で杯を飲み干した。

「……美味い……」

自然と、そんな言葉が漏れる。

「酒の美味さが分かるのは男の証だ」

見れば、宗一郎はその表情を僅かに緩めていた。その穏やかな表情はまるで、弟子の成長に素直な喜びを表しているかのようにだった。

「一夏。お前ももう、立派な男だと言うことだ。そのことに胸を張れ」

そして再び表情を引き締め、最後の言葉を言う。

「これで今回の修業は終わりだ。行け」

簡潔に告げられた修業終了の言葉。僅かな間、一夏はその言葉を脳裏で反芻する。

そしてその意味を理解し、居住まいを正した。

「ありがとうございます」

一夏は深く頭を下げながら、謝辞の言葉を言う。

そして頭を上げるとそのまま立ち上がり、荷物を持つと軽く一礼。そのまま道場から立ち去った。

一夏が去ってから約1時間。宗一郎は母屋の廊下に居た。目の前には電話が置かれ、受話器を取った宗一郎はある番号に電話をかけた。

『はい』

「俺だ。久しぶりだな、千冬」

『ああ、お前か』

電話の相手は弟子の実姉、宗一郎が世界で唯一自身と渡り合える相手と認める女傑、織斑千冬だった。

「今回の修業は終わった。さっき一夏も帰って行った」

『そうか。いつもアイツが世話になるな』

宗一郎からの簡単な報告と、千冬の礼で始まる会話。

余計な雑談は一切無く、簡潔に要点を話すのが二人の電話での会話だった。

「千冬、今回は少々今までと違ってな。悪いがいつもより真面目な話になるぞ」

『…どうした』

電話越しの真剣な声に、千冬もまた声に緊張を含ませる。

「一夏のやつを本物の真瞳流の剣士に仕立てた。とりあえず、制空圏と七刃一殺は会得したな」

『なんだと?』

「それともう一つ、アレを教えた」

そう言つて宗一郎は一つの技の名を言つ。瞬間、

『どついつつもりだお前!アレを一夏に教えただと!?!』

あからさまに声を荒立てる千冬。そこには単なる怒りだけでなく、驚きも含まれていた。

『宗一郎!お前は一夏を』

「やかましい黙れ」

『っ……!』

気が立つた千冬を宗一郎はただ一言で制する。千冬が落ち着いたので電話越しに確認すると、宗一郎は再び口を開く。

「確かに一夏にアレを教える危険性は俺も理解している。だが、俺は必要だと判断した」

『だが』

「無人IS、VTシステム、そして銀の福音」

『ッ!?何故それを!』

食い下がろうとする千冬を遮り宗一郎が口にした単語。その内容に千冬は驚愕する。

「言っておくが、一夏が話したわけではない。俺には俺のツテがあるというだけだ。それに、俺が気にしているのは事件そのものじゃない」

『どつという意味だ？』

「言わずとも分かるだろう。どれも一夏が中心に居る。それだけだ」

『そのことと、一夏にアレを教えたことがどう繋がる』

千冬の言葉に宗一郎は軽く息を吐く。それは彼女の察しの悪さにどこか呆れている風だった。

「さっき言った三つの事件。どれもソツチの業界じゃ重大事件だ。そんな事件が半年もしない内に三回。それだけならただの異常で済ませられる。だが、その全てにおいて一夏が関わっている。そうすれば、何を連想する？」

『一夏を中心に事件が起きていると？』

「世界唯一という、ある意味俺やお前以上の異端だ。そうなくてもおかしくはあるまい。それにこいつは俺の勘だが、一夏はこれからも厄介に巻き込まれる。今まで以上のな」

『……お前がアレを教えたのは、その脅威から一夏が自身を守れるようにするため、か？』

「他に何がある」

そして二人の間に無言が流れる。そして僅かな後、再び宗一郎が口を開く。

「千冬。お前、一夏を守ってやるうとでも考えてるだろう？止めるとは言わんが、程々にしとけ」

『何？』

聞き返す千冬の声には僅かな険が含まれている。しかし、宗一郎はまるで気にしない。

「あいつも一端の男だということだ。守られるばかりに嫌気がさして、自分で自分の道を行こうとしている。お前がすべきはな、千冬。あいつを守ることよりも支えることだ。自らの道を、艱難辛苦を己が力で以って押し伏せようとするあいつを。その心が堕ちないようにな」

『……………そうか』

悩むような千冬の声に、宗一郎は面白げに顔を笑わせながら言った。

「まあ、上手くやれよ。世界最強のブラコン娘が」

『なっ！？おい貴様どうい』

千冬が抗議の声を言い終えるよりも先に宗一郎は電話を切る。

「全く、無自覚というのは本当に性質タチが悪い。いい加減自覚すればいいものを。ま、しろと言われてできるものでもないがな」

ぼやくような呟き。千冬が一夏絡みで少しからかうだけでやたらと反応するのは宗一郎も知っている。知った上での言葉だが、正直も少し素直になればいいというのが宗一郎の本音だった。

「さて、後はもう一件と……」

そう言いながら再び受話器を取る宗一郎。そして先ほどとは別の番号に電話をかける。数度のコールの後、相手が電話にでた。

「俺だ、久しぶりだな。　ん？俺か？まあ元気でやっとなるよ。そっちはどうだ？……ふむ、そちらも変わらず、か？妹との関係もか？ええい、一々騒ぐな喧しい。もう少しお前から歩み寄ったらどうだ？あ？向こうが微妙？知るか」

電話相手と話す宗一郎の口調は先ほどの千冬との会話に比べてやや軽い。

「ああそうだ。お前に連絡した要件だがな。うちの弟子のことだ。どうせお前だつてとくに目を付けているのだろう？……やはりかまあ、そうだろうと思った。だから少しばかり注文を付けようと思つてな」

弟子。即ち一夏のこと。電話の相手に対して宗一郎は弟子に関わる頼みごとをする。

「あいつを少しばかり鍛えてやれ。ん？もとよりそのつもりだが、ならいいが、そうだな。俺はあいつに無手も少々仕込んだのだが、

まだあいつのは未熟だな。それを磨いてやってくれ。ん？剣はいいのかだと？ほう、俺を相手にそんなセリフを言えるとは、度胸がついたな、小娘が」

宗一郎の言葉に小娘と呼ばれた電話の相手は慌てた様子を見せる。電話越しのそれを確認すると、宗一郎はさも面白そうに笑う。

「ハツハツハ、余計なことを言うからだ、馬鹿め。まあいい、頼むぞ。ああ、それと。俺の弟子を甘く見るなよ。油断すればお前ですら斬られるぞ」

そう言っただけ電話を切る。そして一息。これ以上、今の彼に師として弟子にできることは無かった。そのことに僅かに胸の内の陰りが走る。

「やれやれ、どうやら俺も想像以上にあいつに思い入れができちまつたらしいな」

そう呟く宗一郎の言葉は、彼以外に聞く者は誰一人として居なかった。

オマケ

学園への道中、道を歩きながら一夏は思い出したように鞆から携帯

電話を取りだす。

休業期間の間、電源を切ったままだったため、誰か着信を入れたかもしれないと思いながら画面を見る。

瞬間、一夏は固まった。

『着信件数 600件』

携帯電話の液晶画面にはそう表示されていた。

背筋に冷たいものが走るのを一夏ははつきりと感じた。

「……………」

無言で、僅かに手を震わせながら履歴を確認する。ズラリと並ぶ着信履歴。そしてその大半の送り主は、

『シャルロット・デュノア』

そうあった。

「ハ…ハハ…」

確認すればほぼ15分に一回のペース。時折ラウラや鈴の名前も見つけるが、履歴はシャルロットの名前で埋まっていた。

テーテー、テーテテッテ、テーテーテーテーテー

一夏が生まれるよりもずっと昔に公開された映画。地球に落ちてくる石ころを押し返す作品のテーマソングが流れる。一夏の携帯電話の着信音だ。そしてその電話の主は

『シャルロット・デュノア』

出なければならぬ。そんな確信が一夏にはあった。

「はい」

『一夏あゝ、やっと出た』

電話越しのシャルロットの声は安堵に満ちていた。一夏が電話に出たことが相当に嬉しい様子である。

「あ、ああ、悪かったな。休業の間ずっと携帯の電源切ってたんだよ」

『ふん、そうなんだ』

「そうなんだよ、ハハハハ……」

『アハハハ。ねえ一夏。もう帰って来るよね？』

「え？ああうん。今途中だけど……」

『なら早く帰ってきてね。じゃないと僕……』

そのまま電話は切れた。無言で一夏は携帯電話をしまう。今度はズボンのポケットにである。そして一夏の顔には大量の冷や汗が流れていた。

「ヤベエな……下手したら死ぬかも、マジで……」

自分の身を守るため、なるべく早く帰ることを一夏は決意した。

第四十四話（後書き）

なんだかんだで四回に渡りましたが、一夏修行。もっと短い予定だったのに。

さて、前回の後書きに書いたとおり、奥義について簡単な解説を。

鎚刃

浸の発展形と呼べる技。全身運動で渾身の力をたたきつけるので、破壊力は非常に大きい。並大抵の防御なら問答無用でぶち抜く。

旋抜

高速の抜刀。とは言ったものの、別に鞘はあまり必要なかったりする。出の速さや鋭さは高いが、一撃は軽い。

死翔

射程と突破力を持った突き。踏み込みを同時に行うため、相手が「ここなら届くまい」と思う距離から当てることが可能。

桜乱

ぶつちやけるとただの連続斬り。しかし、軌跡が不規則なためパターンを読んでの対処はできず、いつか斬られるという技。

朧月

フェイント技。一瞬が勝敗を決める斬り合いにおいては非常に有効。

死棘

ケインチでの孤墨抜きみたいな技。相手の防御が働いていないポイントを見極めて、正確に攻撃を加える。

無命

必殺の斬撃。当たると死ぬww

失敬。刃の当て方や当てるポイントなどの正確に守った上で渾身の
一太刀を浴びせる技。殺傷性が非常に高い。

曲がりなりに殺人剣な流派であるため、奥義はどれも一撃必殺を
旨としている。

七刃一殺

七つの奥義を連続で繰り出し、最後に使用者が各々に編み出した一
殺を繰り出す技。

多分直撃して死なないやつは居ない。

IS戦で使う場合、ただのブレードでも一気に戦闘不能に持ち込め
ることが可能な技。

これを零落白夜で放とうものなら……

ちなみに、一夏の一殺は渾身の力を込めた超高速の突き。

言うなればタイムラグ0のとっつきみたいなもの。更にぶつちやけ
ると、牙突零式。

宗一郎の一殺は、宗一郎自身すら認識が困難な速さの一閃。いつの
間に刀を振っていたという感じ。

さて、宗一郎が千冬の後に電話で話した人物、分かりますか？分か
りますよねww

宗一郎氏も、実は暗部に通じているため、何かと情報を知っている
という設定です。知った上で、ほとんど動かないという人ですが。

え？猪討伐の依頼説明が、どこその企業みたい？
はて、何のことやら？

ちなみに、この依頼説明が若い女性だった場合、出て来る猪は内容と違います。具体的には下位ブルファンゴがG級ドスになるくらい。

第四十五話（前書き）

魔改造 ICHIKA が登場の回です。少々やり過ぎたかとも、個人的にはアリかなと…

第四十五話

その日、学園に複数あるアリーナの一つではある模擬戦闘が行われていた。

一年対二年の試合。機体のデータ収集の一環で行われた模擬戦である。

わざわざデータを取るための模擬戦。そんなものが行われる機体は、専用機を除いて他には無い。そして専用機の試合というだけあり、アリーナの観客席には専用機持ちの生徒のクラスメイトを始めとした観客の生徒の姿が見える。

常ならば歓声が響くはずの観客席。しかし、この時に限っては静まり返っていた。いや、初めこそ歓声が上がっていたものの、それが徐々に消えていったのだ。

「ぐっ、うう……こんな……」

倒れ伏す二年の女生徒。彼女が身に纏う機体は学園訓練機の一つであるラファール。しかし、そのラファールは既に満身創痍だった。シールドエネルギーの残量は残り少なく、機体の各所が損傷、一部の装甲は砕けている。

しかし、本当の意味で傷が深いと言えるのは機体よりも搭乗者の方であった。絶対防御が存在しながらも、それを無視するかのようになり自身に襲いかかった衝撃に、彼女の体は既に限界であった。

そして更に驚くべきは、彼女の損傷の大半は武器を用いずに、すな

わちIS装備とはいえ格闘のみで負わされたということである。

「なんなのよ…貴方…」

苦悶に顔を歪めながら、彼女は自分の前に立つ人物を見る。

シールドエネルギーこそ多少目減りはしたものの、機体そのものはほとんど無傷。一切の疲労を見せず、眼光鋭く彼女を見下ろす。その眼には嘲りも畏怖も、一切の感情が無く、ただ眼前の相手への必倒の意志だけがあった。

纏うは純白の機体。四つの大型ウイングスラスタが、その圧倒的機動性を想像させる。そしてそのISの操縦者は男性だった。

「貴方…本当に素人…？」

信じられないといった顔つきのまま、彼女は目の前の少年、織斑一夏に言った。

「知るか。ただ今ここにあるのは実力という結果だけだ」

そう答える一夏の声は冷たく鋭い。それはまるで彼の実姉、織斑千冬フルデのようであった。

師匠の元から学園へ帰る道すがら、俺は気が気ではなかった。原因は一つ。シャルのあの電話だ。いや、別にシャルに文句を言つつもりはさらさら無い。まあいきなり居なくなつた俺にも問題があるわけだし。でもだ。それでももしかした。やっぱりあの電話が怖い。

これで学園に戻つてシャルと会つた時、俺がどうなるかまるで分かん。お祈りでもしようか？誰に？神様にか？……アテにできねえな。それならいっそ空のサムライと戦車破壊王に祈つた方がまだ生き残れそうだ。

そして学園に着いた俺なわけだが、偶然かそれとも意図的なのか、誰にも会わなかつた。強いて言えば受付の係の人くらいだな。戻つた手続きで寄つたんだよ。

そして自分の部屋に入ると

「あ、一夏お帰り〜」

そんな何時も通りの明るい様子でシャルが俺に声を掛けてきた。なぜかラウラも一緒だ。

「た、ただいま」

あれ？なんか普通だぞ？いや、普通が一番なんだけどさ。

「もう、一週間以上もどこに行つてたの？僕、凄く心配したんだからね？」

「あ、ああな。ちよいと田舎に剣の修行にな。結構強くなったぜ」

「へえ、そうなんだ。あ、荷物持つよ」

「あ、ありがとう」

そうやってシャルは荷物の一部を部屋の隅に置く手伝いをしてくれる。さすがに中身の整理までは頼まない。いくつか物騒なブツもあるし。

「ただいま、ラウラ」

そして俺は部屋の一角に立ちながら俺を見つめるラウラに声をかける。するとラウラは言葉を返すよりも先に、俺に近寄ってきた。

「兄様……」

かなり近くに寄ったためか、身長差のせいでラウラは俺を見上げる形になる。気のせいか、ラウラの口元は固く結ばれている気がする。

「寂しかったのだぞ……」

寂しかった。その言葉は紛れも無いラウラの本心なんだろうな。

あまり余計な探りを入れられたくないから何も言わずに出たけど、やはりミスだったか。

「あ、悪かった、悪かったな」

「本当に大変だったのだぞ!? シャルロットは様子がおかしくなるし! シャルロットに私はあれこれと弄られるし! 本当に大変だった

のだからな！」

あゝ、なんか理解できた。

思い出されるのは臨界学校のバス。シャルロットに色々とされていたラウラの姿。

あの状況が一週間以上に渡って続いていたってことか。それは…まあ…大変だったろうな。
なんか悪いことした気がしてきた。

「ああ、悪かった。悪かったな」

「ん…」

俺が謝るとラウラは黙って頭を出して来る。成る程、撫でろってか。

「ほれ」

俺が頭を撫でてやるとラウラは気分が良さそうに目をつむる。何と
言いか、やっぱり猫か何かに見える。

「ところでシャル、他の三人はどうした？」

俺はラウラの頭を撫でながら、後ろのシャルの方に首を向ける。三
人とは言いつまでもない。篝、セシリア、鈴のことだ。

「ん〜とね。セシリアは帰省で、篝は部活の一日練習、鈴は暇つぶ
しに出掛けるって」

「ほっ」

そうだったか。それなら出くわさなかったのにも頷けるという話だ。

「ねえ一夏。一夏は今日これからどうする？」

そうシャルが聞いてくる。

「ん？とりあえず荷物を片付けて、休みがてら夏休みの計画でも立てようと思ってるけど」

「そうなんだ」

言いながらシャルは水を注いだコップを俺に渡してくる。「こりゃありがたい。丁度飲み物が欲しかったんだ。」

「ありがとな」

そう言ってから俺は水を飲む。ん、美味い。

ん、水を飲んで疲労が出たか？ちと眠くなってきた。

「あー、ん、悪いシャル。俺少し休むわ」

俺はラウラの頭を撫でるのを中断し、ベッドに向かう。何故だ？やたら眠いぞ。待て、流石におかしい

「お休み、一夏。ゆっくり休んでね」

そう言つて凄くイイ笑顔を浮かべるシャルが目映る。ふと、シャルから手渡されたコップの水を思い出す。

「ちよ、シャルまさか…」

盛りやがった、という言葉は眠気によつて出なかつたよ。

なんかシャルがどんどん過激になつてるな、なんて思いながら、俺はベッドに倒れ込んで意識を手放した。

…訂正、シャルはやっぱり色々凄くことになつてた。

side out

「はっ！今何時だ!？」

唐突に目を覚ますと、一夏は着けたままだった腕時計で時刻を確認する。午後四時前。意識が飛んだのがお昼前後であつたため、約四時間一夏は寝ていたことになる。

「まさかシャルに一服盛られるとは……。予想外だつた」

何とも言えない顔をしながら一夏は呟く。そしてある疑問が浮かぶ。自分に睡眠薬を盛つたとして、シャルロットはどうしたのか？
そしてその答えはすぐに見つかった。

ベッドの上の一夏の両隣。そこには気持ちよさそうに寝息を立てているシャルロットとラウラの姿があった。

元々非常にレベルの高い器量を持つ二人が揃って寝息を立てている様というのはこの上なく絵になると一夏は思う。しかし、一夏は大きくため息を吐いた。

「まったく、この二人ときたら」

俺絡みのことになると思分行動的だよな、と思いつつ一夏は二人を起こすことにする。

「ほら二人とも、起きろ」

「ん……一夏あ……」

「むう…起きたのか、兄様…」

眼をこすりながらシャルロットとラウラが起きる。一夏としては二人に小言の一つもくれてやりたい気分であったが、二人の姿を見ていると、そのことがやたらと馬鹿馬鹿しく感じられてきた。

「全く、何やってんだ二人とも」

「え〜と、そのお……」

「一週間以上離れていたのだぞ、兄様。このくらいは当然だろう」
思わず額を手で押さえる一夏。正直、軽く流した方がいいんじゃないかと判断をした。

「とりあえずアレだ。誰かに見つかる前に部屋に戻れ。特に千冬姉にでも見つかつてみる。大変なことになるぞ。……主に俺が」

最後の一言は苦い表情と共に吐き出された。この状況が千冬に見つかった場合、もっとも大きな被害を受けるのが一夏であるということとは、一夏自身が理解していた。

「むう、姉様に見つかるのは確かにマズいな」

「え、僕は一夏と一緒に居たいのに」

「ラウラ、連れてけ」

「ヤー！」

心を鬼にして一夏はラウラに指示を下す。千冬にばれた場合を想像したラウラは直ぐさま一夏に従い、シャルロットの腕を引っ張って部屋から立ち去る。

ラウラに引きずられながらシャルロットは一夏の名を呼び続けたが、それを一夏は手を振りながら見送った。

「まあ、やっぱり俺にも責任はあったわなあ」

二人の姿が見えなくなってから一夏は呟く。

シャルロットやラウラの言うことは事実なのだろう。一夏が居ない間、二人を寂しがらせたのだろう。

二人だけではない。おそらくは箒やセシリア、鈴にも何かしらの思いを抱かせたのだろう。

「後で何かしらのフォローをしなきゃならんのかねえ」

ぼやきながら一夏は頭の後ろをかく。そして軽く腕を回して呟いた。

「少し、体を動かしてくるか…」

それから約15分後、一夏の姿は学園の一角にあるトレーニングルームにあった。

各種ウエイトトレーニングを始め、一流と呼んで差し支えない設備の整ったこのトレーニングルーム。その設備の一つであるサンドバッグの前に一夏は居る。

服装はトレーニングウェア代わりのスポーツ用の半ズボンとTシャツ。

薄手の服装であるため、一夏の鍛えられた体つきがよく分かる服装だった。

そして一夏は今、サンドバッグに向けて連続で容赦の無い打撃を浴びせていた。

フットワークで立ち位置を変えながら、連続で裏拳や肘打ち、膝を中心として打撃を加える。

時折、広い室内全体に音を響かせる重い踏み込みと共に、強力な一打を打ち込む。

その激しい様に、室内に居る少数名の生徒は皆一夏の動きに目を奪

われていた。しかし、それを一切気にすることなく一夏は打ち込みを続ける。

いつの間にか、サンドバッグの表面は擦り切れて無数の傷を作っていた。

「あ！見つけましたよ織斑君！」

一夏に掛けられる声。聞き覚えのある声の主は一夏の副担任の真耶だった。

「どうかしましたか、先生？」

「はい、実はって織斑君危ない！」

振り向いた一夏に真耶が慌てる。一夏の背後、打ち込みにより揺らされたサンドバッグが一夏に向かって振り下ろされようとしていた。

しかし一夏は動じない。振り向くことなく、サンドバッグに向かって手を差し出すと、片手でソレを止めた。

その光景に、場に居る全員が息を呑んだ。数10キロはあるサンドバッグを片手一つであっさりと止める。

それまでサンドバッグを大きく揺らしていたことも含め、一夏が行ったことのとてつもなさに言葉を失っていた。

「それで先生、どうしました？」

周囲の様子などまるで気にならない風な一夏に尋ねられて真耶は我に返る。そして一夏に一枚のプリントを差し出した。

「白式のデータ取り？」

「はい。白式の開発元の倉持技研の技術者が今度学園に来るので、その時に行うんです」

「でも先生、データ取りなら臨海学校でやりましたよね？」

「それとはまた別物なんです。臨海学校はあくまで武装のデータが中心ですが、今回は機体全体です。それにほら、臨海学校は……色々ありましたし」

最後だけ小声の言葉に一夏は納得したように頷く。

「それと一つ重要なものがあるんです。データ取りの最後に実戦データ収集の模擬戦闘を行うんですけど、織斑君は相手はどうします？一応こちらで選ぶというのもありですけど、織斑君が誰か戦いたい相手とか居ればその人にもできますけど」

「自分で選びます」

即答だった。真耶も一夏の答えは予想していたのか、特に驚いた様子もなく了承する。

「分かりました。それじゃあ織斑君。データ取りは三日後ですから、それまでに相手を見つけて下さいね？」

そう言って真耶は立ち去る。

一夏もまた、夕食も近い時刻から頃合いと見てトレーニングを終了させる。

そして寮に戻る道すがら、一夏はある生徒に出くわした。

「織斑君、やつほ」

抑揚の低い声で一夏に話し掛けて来たのは二年の生徒だった。くせつ毛が特徴の黒髪。少し眠たげに見える目はしかし、冷静沈着な色を宿している。

「斎藤先輩。どうも」

斎藤 初音。それが彼女の名前だった。知り合うきっかけは夏休み前の腕試し会。剣道部部长が連れてきた、剣道部メンバーの一人が彼女だった。

その実力は部内でも一、二を争う程。腕試し会で見せた左利きでの剣技は見事の一言に尽きるといなのが一夏の感想だった。

特に一夏が興味を持ったのは、彼女が得意とする抜刀と平突き。どちらも左利きから繰り出される故に相手にズレを感じさせ、同時に攻撃の精度と威力も十分。聞けば溝口派一刀流に心得があるとのことだが、抜刀と平突きは彼女自身のセンスからだろうと、一夏は思っている。

そして今の一夏は彼女を認めると同時に一つの確信を抱いていた。即ち、負ける気はしない。

「えーと、どうかしました？」

そんな考えは僅かも表に出さずに一夏は初音に尋ねる。

初音は黙って、手に持ったプリント束の内の一枚を一夏に渡した。

それは再び開かれる腕試し会の案内だった。

「来る？」

「是非とも」

一瞬で決まった取り決めであった。

「予定とかはプリントを見て。…楽しみにしてる」

「俺ですよ。最後まで立ってたら仕合うとしましょう」

頷き合う二人。二人の顔には僅かな笑みが浮かんでいる。しかし、それは男女の仲を表すようなものではなく、好敵手を得た武人のソレだった。

そのまま別れようとする二人。しかしそれは阻まれる結果になった。

「おい、初音！。何してんのー」

初音を呼ぶ声。二人は揃って声のした方を向く。視線の先、廊下の向こうから初音に手を振りながら歩いてくる一人の生徒の姿があった。

「誰です？」

「高山ありさ。クラスメイト」

一夏の問いに初音は簡潔に答える。そんな会話をしている内に生徒、高山ありさは二人の元にたどり着く。

「見つけたよ初音。早く戻る。もうすぐ夕ごはんだよ」

「うん」

そう言ってありさは一夏に視線を向ける。

「あれ、あなた…ああ、あの男子か。千冬様の弟とか言う」

その言葉に一夏の眉が僅かに動いた。

「失礼ですが先輩、俺は織斑一夏。千冬姉の弟なんていう肩書みたいな名前じゃありませんよ」

「そうは言うけどさ、千冬様に比べたら貴方なんて大したことないでしょ。それに何かパツとしなさそうだし」

それはまさしく侮りなのだろう。

男は女より弱い。ISの登場にゆり広まった風潮から来る認識。彼女もまた、その観点から一夏を見ている。それが分かったからこそ、一夏は皮肉を込めて言う。

「千冬姉からしたら貴女も有象無象の一つですがね」

「なんですって?」

あからさまに反応したありすに一夏ははっきりとものを言うことにした。

「俺を侮らないで欲しいものですね。ISが動かせる時点で男も女

もあるものか」

「言ってくれるじゃない。なら、それは証明できるのかしら？」

「手っ取り早く勝負と行きましょう。三日後に俺は機体のデータ取りがある。その最後の模擬戦闘、相手に貴女を選ぶことにする。最初は五人の誰かにしようかと思っただが、予定変更だ」

「面白いじゃない。いいわ。先輩として一年生に手本を見せてあげる」

「ほざけ。ああ、医療保険の加入はしっかり確認しとけ。容赦無しで潰す。斎藤先輩、俺はこれで失礼」

もはや敬語もかなぐり捨てて一夏は宣戦する。そして初音に一礼をすると、その場から歩き去る。

残された二人。初音はありすに視線を向けて一言言った。

「阿呆」

「ちよっ、なんでよ!？」

疑問の声を挙げるありすに初音は淡々と言う。

「織斑君は強い。舐めて掛かれば、潰されるじゃ済まない」

そう言って初音はありすに先んじて歩き出す。思い出すのは夏休み前の腕試し会。

部長、初音、もう一人の剣道部員、そして一夏の四人の剣術組。そ

の四人の中で、一番多くの相手を倒したのが一夏だった。振るわれる模擬刀。安全性に配慮された品のため、それを振る一夏の太刀筋、一つ一つが必殺のソレに容赦は無かった。初音自身、自分の実力に相応の自負があったが、思わず目を奪われた程だ。

(それに織斑君、前よりずっと強くなった)

それは剣士としての直感だった。そして初音は確信している。ありすでは一夏には勝てない。ありすは二年の中でも比較的優秀な生徒だ。しかし、こと戦いというならば確実に一夏が上。それが初音の判断である。

(どつやったら、あそこまで強くなるんだろ?)

ふと沸き上がる疑問。或いは良い師に恵まれたのか。機会があったら話を聞いてみたいと思う初音だった。

そして日は流れ、三日後となった。

その日、一夏は朝から大忙しだったと言える。前日から学園に来ていた倉持技研の技術者と会いスケジュールの確認。そして確認が終わり次第白式のデータ取りの開始。世界唯一の男性IS操縦者の専用機、篠ノ之束の手がけた機体、僅か数ヶ月の稼働での第二形態移行等々、技術者としては注目すべき要因が多分に含まれている機体であるため、データ取りは多岐にわたる内容を細かく行う。

そうして怒涛のように時間が過ぎ去った後、最後のデータ取りとなる模擬戦闘が間近に迫った。

校内でも何かと注目の的となる一夏が行う模擬戦というだけあり、使用されるアリーナの観客席には多数の生徒の姿が見える。一年一組の一夏の級友たち。箒、シャルロット、ラウラの三人。ちなみに鈴と一夏にわずかに遅れる形で学園に戻ったセシリアは現在外出中である。

他にも一夏の対戦相手、二年高山ありさのクラスメイトの姿もある。その中には初音の姿もあり、さらにその両隣には剣道部部长ならびに一夏らと共に腕試し会に参加した剣道部エースの一人、二年沖田おきた司つかさの姿もある。

「しかし解せんな。なぜ兄様は模擬戦にあのような相手を選んだのだ？ 私たちでも良いだろうに」

「斎藤先輩の話では、先輩のクラスメイトと一悶着あったらしい。それで試合をする流れになったとか」

ラウラの疑問に剣道部経由で伝え聞いた情報を箒が伝える。

「でも一夏なら大丈夫だよ。上級生相手でも負けたりはしないよね」

シャルロットの言葉に箒とラウラが頷く。確かに上級生は操縦者として一日の長があるかもしれない。しかし、一夏とて僅か数ヶ月で四人の代表候補が認める実力を付け、さらに機体は第二形態移行をした最新型。生半可な相手に負けることはないというのが三人の認識だった。

「相手の機体は訓練用のラファールらしい。シャルロットとの模擬

戦の経験が活きるだろうな」

ラウラが頷きながら言い、シャルロットは笑顔を浮かべる。夏休みまでの間、一夏は二度の模擬戦を行った。相手は鈴とシャルロット。結果として一夏は両方で勝利したが、戦闘スタイルが似通っている鈴にはある程度安定した勝利を収めたのに対し、シャルロット相手にはかなりの辛勝と言えた。

「確かに。シャルロットのラファールの操縦技術は学園でも屈指だ。機体性能を十二分に引き出せている」

篤が同意するように頷く。しかし、ここで自分たちがいくら下馬評を出そうが意味がない。結局は戦う本人次第でしかないため、三人は会話を止める。

「ねえ、ちょっと提案なんだけど」

「ん？なんだ？」

シャルロットからの提案。それに篤とラウラが耳を傾ける。

「あのね、今管制室に織斑先生と山田先生が居るでしょ？三人で管制室で試合を見ない？そうすれば、織斑先生の解説とか聞けると思うけど…」

「成る程、悪くはないな。兄様の戦い方は意外と独特な部分がある。特に剣がそうだ。姉様の解説を聞くのも良いな」

シャルロットの提案にラウラが同意する。

古流剣術を応用した一夏の近接戦闘は、従来のISでの斬り合いの

手法と比べると独特であり、同時に高い能力を有する。

それだけの技を、最高峰の実力者の解説を受けながら見るというのは、操縦者として必ずプラスになるはず。断る道理など筈とラウラには無かった。

「ならば早速行くとするか。試合まで時間はあまり無い」

そう言うって立ち上がる筈に従いシャルロットとラウラも立ち上がる。そして三人はアリーナ管制室へと足を向けた。そして観客席の別のエリアでは剣道部三人が会話をしていた。

「いや、織斑君の試合を見るのは個人別トーナメント以来だわ。誘ってくれてありがとね、初音」

「いえ、別に」

礼を言う部長に初音は簡素に答える。そして反対側に座る司も口を開く。

「うんさて、織斑君はどういう試合をするんだろうね。楽しみだよ」

「それでスタイルを見極めて、自分が倒してつて寸法？」

「大当たり。いや、織斑君の悔しがる顔も見てみたいからね」

「」のドス」

「違うね。私は自分の嗜好に素直なだけだよ」

「その嗜好がドS」

聞き直るような司に初音は呆れたように言う。

「まあまあ二人とも。司の嗜好は放っておいて、初音。実際あなたの見立てじゃどうなの？」

「試合のことですか？織斑君かと。ありすも優秀だけど、織斑君は気迫が違います。その、明らかに前より強くなっています」

「へえ」

初音の言葉に部長は面白そうな顔をして、一夏が待機しているだろうピットに目を遣る。

「それで？剣道部二大エースの一角、部長の私より強くなってる小生意気な平突きの斎藤初音ちゃんは、織斑君の実力をどう見てる？」

「試合でしたらまだ勝つ見込みはありません。死合いでは……」

「ふむ……」

顎に手を当てながら部長はアリーナに目を向け、そのまま黙り込む。それに倣い初音と司もアリーナに目を向ける。

そして、試合が始まる。

ピット内、そこでは既に白式を展開した一夏が出撃準備に入っていた。
そのすぐ側にはデータ取りの主導をしている倉持技研の技術者の女性が居る。

「それじゃあ俺は出ますが、試合に関して何か留意点はありますか？」

そう問い掛ける一夏に技術担当は首を横に振る。

「いえ、特にはありません。お好きなように戦って下さい。強いて要望を言わせて頂けるなら、データ収集のために可能な限り長く試合を続けて頂ければ」

「委細承知」

そう答えて一夏は白式の足をカタパルトに乗せる。

「織斑一夏、白式、出る！」

そして一夏はアリーナへと飛び出した。

「始まりますね、試合」

アリーナ管制室。そのモニターの前に座る真耶が背後で立つ千冬に声を掛ける。

「そつだな。ところでだ。お前達は何故ここに居る？」

そう言つて千冬は自身の背後、箒、シャルロット、ラウラの三人に視線を向ける。

「その、試合の解説を織斑先生にして頂ければと思い……」

「一夏の戦い方つて、特に剣が変わつてるから、先生に解説してもらえば僕達のプラスになるかと思つて」

答えた箒とシャルロットの言葉に千冬は少し意外そうな顔をしたが、特に何を言つ風でもなく三人がピットに居ることへの許可を出す。

自分から学ぶ意志を示す生徒を咎める必要は無いという、教師としての判断からだつた。

そしてモニターに向かい合う一夏とありすの姿が移る。

ありますが使用する機体は学園訓練機のラファール。ダークグリーンの機体色が白式と対照的と言える。

「高山ありすさん。二年三組所属の生徒ですね。使用機体がラファールということから、戦闘タイプは射撃型。成績は座学、実技共に優秀な生徒ですね」

モニターに映る対戦相手のプロフィールを真耶が解説する。

「ところで、何故織斑は高山を相手に選んだ」

千冬という言葉に箒が答える。

「剣道部の斎藤先輩の話では、一夏と斎藤先輩が話している時に高山さんが現れて、一夏と一悶着起こしたとか」

その言葉に千冬は困ったと言いたげに頭に手を当てる。

「全く、あの馬鹿者が…」

「もうすぐ始まります」

真耶の言葉に千冬はすぐさま表情を引き締める。それに続き、観戦の三人も真剣な表情でモニターに目を向ける。

そしてカウントが尽き、試合が始まる。

先手を打ったのはありすだった。弾速、射程に長じたアサルトライフルを展開するとすぐさま照準を定め、発砲。代表候補ではないものの、学年の中でも比較的優秀である彼女の技量は基本に忠実。そしてそれが高い精度で為されている。凡そ、ISと関わって数力月の一年に対応できるようなものではなかった。

それがただの学生であればの話であるが。

ドンッ！

短く響く爆発音。白式の四機のスラスタの内、一機を強く吹かした一夏は真横に移動。ありすの射撃をかわす。

「……………」

かわされこそしたが、ありすは動じない。すぐさま狙いを定めなおし、発砲をする。

冷静なまま射撃を行う彼女の姿は、教師たちに認められる彼女の實力を確かに示していた。

だが、今回ばかりは相手が悪かったと言える。相手は織斑一夏。僅か数ヶ月で実力者揃いの一年代表候補勢にも引けを取らぬ實力を身につけた、まさに織斑千冬ブリコンヒルデの実弟と呼べる才覚を見せた人物。

そして、これは一夏当人しか与り知らぬことであるが、修業により自らの武人としての在り様を一段階上った今、一夏はIS操縦者としてではなく戦闘者として今まで以上に研ぎ澄まされた存在となっていた。

「…くっ！」

ありすの顔が苛立ちにより僅かに歪む。当たらない。どれだけ撃つても、一夏と白式はその射撃の悉くをかわしていた。

一夏の機動はそこまで複雑なものでは無かった。特に旋回をするでもなく、ありすと一定の距離を保つかのように、縦横無尽の直線移動を繰り返すだけ。

しかし、速いのだ。短距離ではあるが、その機動はキレがありすぎた。上に行ったかと思えば、自身の斜め後ろを取るかのように移動している。振り返ろうとすれば、さらに別の方向へ移動される。

ありすもまた、武器をアサルトライフルではなく、片手で一丁ずつ、両手にショットガンをかまえて一夏を撃ち抜こうとするが、一向にあたる気配は無かった。

そのことが彼女を少しずつ苛立たせる。何より腹立たしいのは、自身をこれだけ翻弄しながら、一夏が一度たりとて攻撃をしてこないことだ。

「ふざけないで！！遊んでるの！！？」

思わず怒声を上げる。その声に一夏が動きを止めることはなく、依然回避行動を続ける。そして、移動を繰り返しながら一夏が通信でありすに声を掛けてきた。

「別にふざけてはいないし、遊んでいるつもりもない。俺は戦いには何時も真剣だ。そして今も、真剣に試しをしている」

「なんですって？」

思わず攻撃の手を止めるありす。その姿に一夏もまた動きを止めてありすを見据える。その位置取りは丁度、一夏がありすを見下ろすような形だった。

「俺はさっきまで前々から考えた機動の試しをしていた。名付けるなら、そうだな。『ショート・イグニッション短距離瞬時加速』とでも呼ぼうか」

それは白式の第二形態移行によって進化したスラスターだからこそできた技だと一夏は語りながら思う。

圧倒的加速を誇る瞬時加速。幾度もの使用によって、既に一夏の十番となっているその技だが、その使い勝手をさらに良くできない

かとも考えていた。

そして編み出したのがこの、短距離瞬時加速だ。仕組み自体はそこまで複雑なものではない。瞬時加速に必要なエネルギーのチャージを少なくした上で一気に解放。通常の瞬時加速ほどの距離移動は不可能だが、射撃の回避に必要な距離を瞬時加速並のスピードで行える。

何より優れているのは、エネルギー消費がそこまで酷くは無いという点である。

管制室で一夏の言葉を聞いていた千冬を除く四人は、感心するような表情をしている。

「凄いですね、織斑君……」

真耶のその言葉が残る三人の思いを表していた。

「だが、欠点もあるな」

そう言った千冬に四人が視線を向ける。その表情は真剣そのものであり、千冬の解説を一言一句聞き漏らすまいという意志があった。

「あの短距離瞬時加速とやら。使える機体が限られる。そうだな、最低でも連続瞬時加速が可能な機体でなければ無理だ」

「それはどういう?」

篤が疑問の声を上げる。

「織斑はあの機動を連続で使用して回避行動を取った。その際、奴は四機のスラスターを別々に運用した。これは個別連続瞬時加速と同様の手法だ。だから使える機体が限られると言ったのだ」

「では教官。兄様は連続瞬時加速を使っている?」

ラウラの言葉に千冬は首を横に振る。

「使えているかどうかは半々と言ったところだ。先の臨海学校での戦闘。あの時にも織斑は個別連続瞬時加速を使っていた。しかし、それは白式のスラスター部の展開装甲による制御機能あってだ。奴自身の独力ではまだ無理だろう。当然だな。国家代表でも使いこなせる奴はそうは居ないのだから」

「ですが兄様は先程から何度もあの機動を使っていますが」

「それは機能のリソースの割り振りの問題だろうな。本来の瞬時加速より出力の全体値を下げた分、制御の方にリソースを回しているのだろう」

ひとしきり千冬が説明を終える。聞いていた四人は四人とも真剣な表情で頷く。

さすがは織斑千冬。見事なまでの解説であったというのが四人の考えだった。

「そういえば一夏、ずっと相手と同じ距離を保ってますね」

「ああ、それか。恐らくはあの距離が一夏の制空圏なのだろう」

制空圏。聞き慣れない単語に四人が頭の上に疑問符を浮かべる。

「制空圏とは文字通り、空を制する圏域だ。ある一定のレベルに達した武術家は、自身の間合いにある種の結界を作る。結界というのは概念的な言葉だが、そうだな。分かりやすく例えるなら、使用者を中心に球形の自動迎撃レーザーを張るようなものだ。自身の間合いに入る敵性存在に反射的に対応を取る。無論、死角からの不意打ちや、多人数相手の乱戦にも対応ができる。まあ、一種の奥義だな」

「待って下さい、先生。だとしてもおかしいです。仮に一夏の、その制空圏の範囲がああ距離だとしても、いくらなんでも広すぎます」

四人の中で最も武術に通じる篤が疑問の声を上げる。

両者の距離は約50mと保たれている。仮に一夏がそれだけの距離、制空圏を広げているならば、それはそれだけの距離を間合いに納めていることになる。篤の疑問も至極当然と言えた。

「それは単純な話だ。織斑は制空圏を応用して使っているに過ぎない」

その言葉に篤が訝しげな表情をする。千冬は確かに制空圏を奥義と言った。だとすれば、それはそう簡単に応用が効くようなものではないはずである。

そんな筈の様子を察したのか、千冬は解説を続ける。

「織斑に制空圏を教えたのはあいつの師、世界で最も武の深奥を極めた男だ。応用の一つや二つ、容易く可能にするし、それを弟子に教えることもまた可能だろう」

千冬の言葉を四人は静かに聞いている。奇しくもここに居る四人は、千冬がその実力を認める怪物、海棠宗一郎の存在を知る者達だった。

「では、先生は一夏がどのように応用を効かせていると思うのですか？」

「恐らくは制空圏の相手の動きを察知する程度まで落として、範囲を広げたのだろう。そこにハイパーセンサーの視覚補助を組み込み、体感と視覚の双方で高山の射撃タイミングを見切っているのだろうな」

筈は納得したように頷くが、武術というものにそこまで明るくない残る三人は、何とも言えない表情をしている。しかし、彼女達もある一つのことには理解していた。即ち、一夏の実力がそれだけ高いということである。

「そら、試合に集中しろ。…そろそろ動くぞ」

おもむろに一夏が口を開いた。

「礼を言わせてもらおう、先輩。コイツは中々に使えそうだ」

そう言いながら一夏は白式を地に下ろす。そしてありすと真っ向正面から向き合う形になる。

「そして、これからが本番だ。今度は俺も攻撃に移らせてもらおう。言っておくが、一切の手抜きは無い」

そう言つて一夏は目を僅かに細める。その目と視線が合った途端、ありすは背筋に冷たいものが走るのを感じた。

「悪いが練習がてら、未だ未熟な技を使わせてもらおう。そして未熟故に手加減が効かなくてな。頼むから先輩、無事でいろよ」

その言葉にありすは背筋に寒気だけでなく、緊張が走るのを感じる。

「行くぞ、白式。過激にクールに決めよう」

『F S - D O P E R A T I O N 』

一夏の言葉に呼応するかのように、白式のモニターに文字が表示される。そして、白式と一夏の同調率が跳ね上がる。

割れるように開いていく白式の装甲。できた筋に翡翠色のエネルギー

ーラインが走る。

そして、一夏の顔がヘッドギアから展開されたプレートに覆われ、その額にV字の角とも取れるアンテナが生まれる。

白式高レベル同調形態『白経津』が発動した。

突然の白式の変貌に観客席がざわめく。ありすも戸惑うような表情を浮かべる。

しかし、一夏がそれを気にする様子はまるで無かった。

そして一夏は右手を、今まで何も持っていなかった右手を振りかぶる。

そして腰を落とし、振りかぶった右手で地面を大きくえぐり抜いた。

ドゴオオオオン！！

重く響くような音と共に、えぐられた地面から大量の砂埃が巻き上がる。あつという間に広がった砂埃は対峙する二人の視界を遮った。

「小細工を…！」

忌ま忌ましげにありすが呟く。しかし、視界が塞がれていることが厄介なのは事実。

ISの基本戦術の一つ、視界の優先的確保に従い、彼女はラファールを上昇。砂埃の膜から脱出しようとする。両手には展開したアサルトライフル。相手も同じ行動を取ると判断した彼女は、視界の確保と同時に手にするライフルで相手を撃ち抜くつもりだった。

そしてありすが砂埃の膜から脱出し視界を確保しようとした直後、更に上空から彼女に急降下してきた一夏の肘打ちが彼女の左肩に叩き付けられた。

「ツツツツツ!?」

シールドを貫通して響く衝撃、その痛みに声にならない悲鳴が出る。そのままありすは機体ごと地面に叩きつけられた。

「うつ……ぐツ……」

肩を押さえながら何とか立ち上がる。しかし、打たれた左肩に力が入らない。見れば左肩は赤く腫れあがっており、脱臼を起こしているのは明らかだった。

「余所見している暇があるのか?」

一夏の声が耳に入る。ハツと気がついて前方を向いたが、既に遅かった。白式を走らせありすに接近していた一夏は勢いを利用して跳躍。ありすの胸に飛び膝蹴りを叩きこんだ。

「まだまだ行くぞ」

着地した一夏は間髪入れずに次の攻撃に移る。胸部を貫くように放たれた肘打ち、体を半回転させてからの下からの肘による打ち上げ。さらに連続で膝蹴りが何度も打ち込まれる。

格闘において特に高い攻撃力を発揮する肘と膝による連続攻撃に、ありすは為す術無く打ちのめされる。

IS戦闘のセオリーから外れるような戦法に、ただ当惑しながら攻撃を受け続けるのみだった。

一夏の容赦の無い猛攻に観客席は言葉を失っていた。幾多の殴打に晒されて減少していくラファールのシールドエネルギー。さらに、その装甲も次々と破損個所を増やしていく。

その光景に、試合を観戦していた生徒の内、一夏と同じ一組の生徒は一つの光景を思い出していた。それは入学当初の一夏とセシリアの試合。そしてラウラ対鈴、セシリア。またあの時と同じようになるのではないか？そんな危惧が彼女たちの内にあった。

そして同様の危惧をする者は管制室にも居た。

「織斑先生、これは…」

真耶が緊張した顔で千冬の方を向く。しかし、千冬は冷静な表情を崩さずに言った。

「問題は無い。今回は前回とは違う」

「しかし……」

「それに、私に言わせれば織斑の手際の方が目に付く」

「それはどういつ？」

「技の繋げ方ですね、教官」

千冬が答えるより先にラウラが答える。いつの間にか彼女は眼帯を外しており、その下の金色に輝く瞳「越界の瞳」ヴォーダン・オーシェが発動をしていた。

「そうだ、ボーデヴィツヒ。あの馬鹿、慣れていないにしても全く……」

二人の会話に筈、シャルロット、真耶が分からないと言いたげな表情をする。

「あの、先生。技の繋ぎとは一体？一夏が使っているのは何なのですか？」

「あれはムエタイだ」

筈の疑問にラウラが答える。英才軍事教育を受けたラウラは各国の武術についても、多少の知識は持っていた。

「ムエタイというと、確かタイの国技でしたよね？足技では屈指の戦闘力があるという」

「そうだ。肘と膝を中心とした格闘。だが、織斑のは普通のムエタイでは無いな」

千冬が補足を加える。

「織斑が使うのは恐らくはムエボラン、古式ムエタイだろう」

古式ムエタイ。日本で言うならば古流剣術のような位置づけ。それは即ちスポーツ格闘技ではなく、純粹に相手を壊すための戦闘術で

あることに他ならない。

「一体一夏は何時の間になんか……」

「先日までの修業の折に習得したのだろう。しかし、まだ使い慣れていないらしいな。だから技の繋げ方が甘い。それを補うために連続で打ち込み続けているのだ」

千冬の言葉に四人が再びモニターに目を向ける。試合は終盤に差し掛かっていた。

一夏の片足がありすの片足を踏みつける。一夏はありすの動きを止めると同時に飛び上がり、膝と肘でありすの頭部を挟み撃ちにする。幾多の打撃に晒されたありすは身体、機体共に限界が近づいていた。

「終わりだ」

底冷えするような声。それはもはや処刑宣言のようにも聞こえる言葉だった。

一夏が足払いをかけ、同時にありすの肩を掴み捻ることによってその体を仰向けになるように倒す。そしてすぐさま一夏は跳躍。体を横に捻り、白式のスラスターを強く吹かした。

ドゴンッ！！

重い音と共に、強烈な膝蹴りがありすの胸部に叩きこまれる。貫通したあまりの衝撃に、ありすの背と接する地面に罅が走った。

アリーナに沈黙が広がる。苦悶のうめき声を漏らすあります。それを一夏は冷静に見下ろす。

「ここまでだ。もう限界だろう」

そう言つて一夏は背を向ける。それは一夏なりの気遣いだった。自身の放った攻撃が相手にどれだけのダメージを与えるのか、一夏自身は理解していた。理解した上で、相手の限界を見抜き試合を終えようとしたのだ。

「待ち…なさい…」

しかし、結果は一夏の予想外となった。背を向ける一夏にありますが声を掛ける。振り向いた一夏の視線の先、彼女は右手で左肩を押さえ、苦悶の表情を浮かべながらも立ち上がっていた。

「まだ…終わつて…ない…わよ」

「正気か？」

「わたし…にも、意地が…あるのよ。認めるわ。貴方は…強い。私じゃ勝てない。で…も…、安々と…負けられ…ないのよ…！」

まっすぐと一夏を見据えるあります。それを一夏は真っ向から受け止める。そしてため息を一つ吐いた。

「参つたな…。これじゃ俺が悪者みたいじゃないか…」

困つたように呟く一夏。しかし、その視線は僅かも和らぐことは無

く、逆に鋭さを増していた。

「いいさ。そういうのは嫌いじゃない。だから…本気で叩きつぶしてやる」

そこからはあつという間だった。発動する瞬時加速。一瞬で距離を詰めた一夏は両脚を開き、ありすの体を足で挟み込みながら関節を極める。

さらにそのまま上半身を捻り、体勢を安定させると同時に、ありすの骨格に強い負荷をかける。そして、足からありすの体を解放し宙に浮かばせながら自身は地面をしかと踏み締め、地面に罅が入る程の踏み込みと同時に、手刀による突きを繰り出した。

一連の攻撃の後、ありすは地面に倒れこむ。ラファールはシールドエネルギーの全てを喪失し、アナウンスが一夏の勝利を告げた。

「終わったか」

管制室で千冬が咳く。モニターの向こうでは、気を失ったありすが担架で医務室に運ばれ、それを見届けた一夏がピットに戻る。

それを見た千冬は踵を返して管制室の出口に向かう。

「織斑先生、どこへ？」

「すまないが山田先生、後は任せる。私はアリーナの更衣室に向かう。少々、あの馬鹿に話がある」

そう言つて千冬はさつさと管制室から出る。

あの馬鹿、即ち一夏のことだろうと察した篤、シャルロット、ラウラの三人は顔を見合わせるも真耶に一礼をしてから千冬の後を追う形で管制室から出た。

「あの、織斑先生。一夏に話とは。あの試合の内容ですか？確かに少々やり過ぎとは思いますが」

「いや、違う」

追いついた篤の言葉を千冬は否定する。

「確かにお前達には少々刺激のある内容かもしれないが、そもそもI Sは強力無比な兵器だ。あの程度、あつてもおかしくはない。私があいつにある話と言うのは、あいつが使った技のことだ」

「それはムエタイのことですか？その、私はムエタイはそこまで詳しくないので、どこが未熟かは分かりませんが、修行期間が短いなら未熟なのも仕方ないかと」

「それも違う。私が問題とするのは最後の技だ。全く、教師の前であのような技を使おうとは、大した馬鹿さ加減だ」

後半は半ば愚痴のような言葉だった。そのまま千冬は歩を早める。後を追う三人は置いていかれないように歩く速さを上げた。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

試合後、白式を解除しピットから更衣室に戻った一夏は更衣室の長椅子に座り込むと、荒い息を吐いた。

額や首筋を主に大量の汗が浮かんでおり、一夏の身に溜まっている疲労の大きさを物語っている。

「結構疲れが来たな……。まあ、福音の時より少し軽いか」

そう言いながら一夏は座ったまま手や足を動かし、体の具合を見る。そんな一夏に背後から声が掛けられた。

「察するに関節あたりに負担でも掛かったか」

「ちふ、織斑先生……」

声を掛けたのは千冬であった。その背後には箒、シャルロット、ラウラの姿もある。

「どうかしましたか」

「なに、少々先程の試合について話があっただけ」

千冬の言葉は固い。その口調に一夏は試合内容を思い出し、後々になつて思い返せば少しやり過ぎたか又一夏は思った。

「え〜と、やっぱりやり過ぎましたかね？」

「高山は医務室に直行。左肩の脱臼と各所の打ち身。まあ随分とボロボロにしたものだと思うが、曲がりなりにも兵器を運用した試

合だ。こうした事態は珍しくない」

「なら一体何用で？」

「お前の使う技だ。古式ムエタイに、踏み込みには中国拳法の震脚を使ったな？全く、一週間そこらで二つも武術を仕込むとは。つくづく出鱈目だな、あの男は」

「それには同意しますよ」

宗一郎を出鱈目と評する千冬に一夏は頷く。そんな一夏を千冬は鋭い眼光で見た。

「だが、まあ随分と未熟だな。今のお前の疲労、技の粗が原因だろう。精進しろ」

「それはもう、言われずとも」

「で、織斑。最後のあの技。あれは何だ？」

瞬間、更衣室の空気が僅かに固まったのを千冬の背後の三人は感じとった。

「何だ、とは？」

「私の目をごまかせると思うな。あの技、確実に相手を壊す殺人拳だろう。それもかなり惨たらしい壊し方をするタイプのな」

その言葉に三人は息を呑み、一夏は千冬に向ける視線に僅かに険を含ませる。

「仕組みも説明しようか。最初の脚での挟み込み。あれで相手の関節を極めて動きを封じる。そして体を捻り、自身の体勢を整えると同時に、関節技の応用で相手の骨を折る。それも一本どころではなくまとめて。最後に相手の体を放し、骨折で動けない相手に手刀を加える。ISで使用するならともかく、生身で使うなら中国拳法で言う硬功夫で手刀の威力を上げ、頸動脈などの急所を切り裂く。また随分と物騒な技だ。そしてあの技はお前の自作だな？少なくとも、私を知る流派には無い」

その言葉に一夏は千冬に向ける視線を更に険しくする。それを千冬は涼しい顔で受ける。
僅かな沈黙。そして一夏が再び口を開く。

「だとすれば、どうなんです？使用を禁じたりしますか？」

その声はもはや敵意を含んでいるのではと思う程に鋭い声音だった。一夏が千冬にそのような口調で話すのを見たことが無い三人は、再び息を呑む。

そして当の千冬はと言うと、僅かに眉を動かしたものの、さして動じることもなく、冷静に答えた。

「あいにく、一個人の戦い方に口喧しく物を言えるほど偉くなったつもりはない。しかし、教師として言わせてもらうなら、少しは加減をしろということと、使うならきっちり技をマスターしろということだ。はつきり言って、未熟な技を見る方が私は気に食わん。精進しろ」

それだけ言って千冬は更衣室から立ち去る。その背を一夏は強く睨むように見ていたが、やがてため息を一つ吐くと、どこかバツの悪

そんな表情で椅子に寝転んだ。

その傍らに三人が歩み寄る。一夏は寝転んだまま、視線を向ける。

「よし」

「一夏、あの…」

筈が躊躇うように話し出そうとするが、一夏がそれを片手で制する。

「一夏…？」

「まあ、見ての通りだ。あれが今の俺だ。一切の情を排した武の担い手。真瞳流の武人たる俺だ」

やれやれと言いたげに一夏は首を振る。その表情はどこか困ったようなものだった。

「僕は、カツコイイと思ったよ？」

「シャル？」

「流石は兄様だ。武人の姿勢とは見事なものだ。私も良いものだと思ったぞ」

「ラウラ…」

シャルロットとラウラは一夏に苦言を呈することは無かった。寧ろ褒めるような言葉に一夏が意外そうな顔をする。

「正直、その反応は意外だったな…」

「でも、一夏がカッコよかったのは事実だもん」

「やはりIS操縦者たる者、強くあることが一番だからな」

「そっかい…」

「わ、私もっ！」

箒が僅かに声を詰まらせながら言う。

「私も、お前が強いというのは好ましく思っぞ…」

「へえ…」

言いながら体力が一通り回復した一夏は立ち上がる。

「まあ、そう言ってくれるならありがたいよ。あゝ、とりあえず着替えるから、ちと出ててくれないか？」

その言葉に三人は頷いて更衣室から出る。

そして一夏は着替え終わると更衣室から出たところで再び千冬に遭遇。

外出先で騒動を起こした鈴とセシリアを迎えに行くように言われた一夏は苦笑を浮かべながら二人の迎えに向くことにした。

第四十五話（後書き）

今回登場した三人の新キャラについて。

斎藤初音と沖田司。

剣道部のトップエース。どちらも実戦派の剣術に長けている。

一応モデルは存在。というか、名前で分かるはず。そして具体的に何の誰がモデルか。

初音は居合と平突きを使い手。司はDs。

高山ありさ

ぶつちやけると魔改造ICHIKHAのためのかませ。

しかし彼女が優秀なのは事実。少なくとも一年生では専用機持ちしか勝てない。

不幸だったのは、一夏がシャルという学園トップクラスのラファール使いを知っていること。

ちよつとだけ話に出た鈴とシャルとの模擬戦。

鈴には割と安定して勝利。全体的に一夏が優位。衝撃砲を一夏がぶった斬ったことに驚いた鈴が固まった隙に零落白夜。

シャルはかなりギリギリ判定の勝利。互いにチマチマ削り合ったところで一夏が特攻。一夏の零落白夜とシャルのつつきが同時にヒット。一夏のシールドエネルギーが僅かに残ったため、一夏の勝利判定になった。

一夏が最後に使った技。実はモデルあり。ただしかなり古い。
コロコロ、アンディ・フグ、ラスボス

これらのキーワードで分かったら凄い。

以上、簡単な解説でした。

各元ネタが分かった方は、感想にてどうぞ。

… やっぱり一夏がICHIKASすぎる気がする…

第四十六話（前書き）

え、何故だかこの回で夏休み編は終わりと…

第四十六話

「変わらないな、ここは……」

目の前の木造家屋を前に箒は感慨深く呟く。その日、箒は学園の外へと出て、ある場所へと来ていた。

その場所の名は「篠ノ之神社」

箒、そして束の生家である。しかし、そこを箒が訪れるのは実に数年ぶりのことであった。束が切欠となり、政府から護衛と監視を受ける身になったため転居と転校を繰り返すことになった彼女は、数年前に離れて以来この家に足を踏み入れることが無かった。

「道場も昔のままだったな……」

そう呟きながら箒は家に来る前に立ち寄った同じ敷地内の道場を思い出す。かつては箒の父の指導の下、千冬、一夏、箒の三人しか学ぶ者の居ない道場だったが、篠ノ之一家が居なくなつた後、退職した警察官が厚意で町の子供たちを相手に剣道教室を開いたらしく、道場には箒達が使っていた頃よりも人の使つた色が残っている。

静かに箒は家の中に入る。何年も離れていたとはいえ、家の構造は体が覚えていた。自然と、体が動き出す。

何もかもが変わらない生家に、箒は懐かしさが胸に広がるのを感じた。

「箒ちゃん」

背後から箒を呼びとめる声。穏やかなその声に振り向いた箒は、声を掛けた人物が誰なのかを既に理解していた。

「雪子おばさん」

箒の叔母にあたる彼女は既に四十を数える齡ながら、実年齢よりも遙かに若く見える女性だった。それは常に浮かべる人を穏やかな気持ちにさせるような笑顔も関わっているのだからと箒は思っている。

「すみません、忙しいのに。懐かしくてつい……」

「いいのよ。久しぶりの実家なんだから」

謝ろうとする箒を雪子はやんわりと宥める。そも、箒が今日生家を訪れたのは、単なる帰郷などでは無かったからである。

「お祭りは夕方から。箒ちゃんの神楽舞もそれからだから、もう少しゆっくりしてもいいわよ」

祭での神楽舞。それが箒がここに居る理由である。この日、篠ノ之神社では毎年恒例の夏祭りが開かれる。そこで行われる神楽舞で、箒は舞を披露することになっているのだ。

「では、お言葉に甘えさせてもらいます」

「ええ。それじゃ、ゆっくりね」

そう言って、箒は軽く一礼してから雪子と別れる。それからしばらく生家の中を見て回り、神楽舞のための準備を始めることにした。

一方その頃、一夏は学園の職員室に居た。夕方前を目安に外出をするつもりであったためその準備を行っていたのだが、寮の館内放送で呼び出されたのだ。

そして職員室を訪れた一夏は待っていた千冬と、その脇に置かれた大荷物に目を向けた。

「で、何用ですか？」

夏休み中とはいえ一応は学園内にいるわけだから、一夏は生徒として千冬に話しかける。

「なに、お前に荷物が届いていてな。送り主は……宗一郎だ」

その言葉にすぐさま一夏は荷物の中身を確認する。師からの贈り物それがなんなのか、無性に気になって仕方が無かった。そして荷物の梱包を丁寧にはどく一夏の目は、まるでクリスマスプレゼントが届いた子供のような輝きを放っていた。

そんな弟の姿に、千冬は面白くなさそうに僅かに眉をひそめたが、それに気付くものは誰も居なかった。

そして梱包を解き終え荷物の中身を確認した瞬間、一夏と千冬は同

時に同じ顔、自分の目を疑うような顔になった。

「こいつは……」

荷物の中身、それは有体に言えば金属の塊だった。一つは巨大な金属の輪。もう一つは、否、もう一つと言えるかどうかは定かではないが、それほど大きくない金属のかたまりにバンドのようなものをついたもの。

さらに、やたら高級そうな桐でできた細長い箱もある。

「これは一体……」

「手紙があるぞ。みてみる」

呟く一夏に千冬が指摘をする。言われた通り、一夏は添えつけられた手紙を読むことにした。

『さて、我が弟子一夏よ。お前がこれを読んでいる時、俺は町会の連中と利き酒という名目で飲み比べをやっているだろう』

「知らねえよ！！なんだよ飲み比べって！！あんた真昼間から何やってる！！」

手紙の一行目に書かれていた内容に一夏は思わず怒鳴る。何事かと視線を向けてくる他の教員たちに一夏は慌てて頭を下げる。そして千冬は何も言わない。彼女もまた頭に手をやって苦い顔をしていた。先が思いやられると思いつつも、一夏は手紙を読み進めることにした。

『さて、お前に送った荷物の話といこう。まあ端的に言えば、お前

用の修業道具だ。でかいやつは特製の金剛輪。後はいわゆる鉄下駄というやつだ。どちらも鉄より比重の重い鉛をベースに、表面を耐久性向上のため鉄で覆った二重構造になっているのだが、まあそんなことはいい。必要なのは見た目以上の重さだということだ」

その文面に一夏は納得したという表情をする。

『俺がこれらをお前に送った理由だが、それは一つしかない。お前を武人としてより高次に引き上げるためだ。一人前の真瞳流の武人になった以上、生半可な実力で終わることは許さん。ひとまずは俺が送った道具で基礎身体能力を高めろ。道具を使用した修業内容は同封した別の紙に記載してある』

『それと、桐の箱についてだが。これはまあ、師から弟子への激励の品だと思え。最近入手したのだが、俺には無用の品でな。お前なら気に入るだろう。では、次の修業で会う時を楽しみにしている』

そこで手紙は終わった。金属の塊については理解した一夏だが、肝心の箱の中身までは詳しくは書かれていなかったため、分ならず終いとなった。

故に、直接中身を確認することにした。

見るからに漂う高級感に、箱を持つ手の動きが慎重になる。室内の他の教員も、遠目に眺めるように一夏と千冬に視線を向ける。

そして静かに箱を開けた一夏は眼を見開いた。そこには鞘込めの日本刀が一振りあった。緩衝材として刀を覆っている紫紺の布が、その高貴な雰囲気を一層強くしていた。

「全く、あの男は。またこんなものをホイと」

呆れるように呟く千冬の言葉は一夏の耳には入っていないかった。魅入られたかのように刀を見つめ、手に取る。そして静かに刀身を鞘から引き出す。

突然現れた抜き身の日本刀に室内がざわめく。しかし一切気にせずに一夏は刀身を眺める。そしてあることに気付いた。徐々に一夏の顔が強張るのを千冬は見逃さなかった。

どうした　そう言おうとして、千冬は一夏が何を見ているのかに気付いた。それは刀身の刃文。そして千冬は一夏の顔が強張った理由に気付き、自身もまた同様に顔をひくつかせた。

「あいつ、こんなものを……」

その刀の刃文は所謂『三本杉』と呼ばれるものだった。そしてその刃文を持つ刀、名を『関の孫六兼元』ましろくかねもと

間違はなく、重要文化財に指定されておかしくない大業物である。

「ど、どうしよコレ……」

困り切ったような顔をしながら一夏が千冬の方を向く。自分が手にしている物がとてつもない価値を持つ物だと理解したからか、やや及び腰になっている。

尤も、単純な金銭的価値などの面から言えば一夏が今腕に着けている白式の方がはるかに大きいのだが、そのことに一夏はまるで気付いていなかった。

「貸せ」

そう言いながら千冬が一夏の手から兼元を取り上げる。

「とりあえずこいつは学園の貴重品保管庫で預かっておく。それで構わんだろっ」

「あ、ええ……」

「ではさっさと荷物を持って戻れ。いい加減邪魔だ」

そう千冬に追い立てられて、一夏は鉄下駄を履き金剛輪を背負いながら職員室を出る。一夏は何気なくそれを行い、千冬もそれを何時も通りに見送ったが、職員室の他の教員はそんな一夏を信じられないように見ていた。

「あ、あの。織斑先生」

「なにか？」

「今、織斑君、あれを全部持って行きましたよね？」

一人の教師が千冬に話かけた。明らかに数10キロはありそうな金属の塊を抱えながら平然と歩いていった一夏。それが彼女には信じられなかった。

「そうですが、それがなにか？」

「いえ、いいです……」

千冬の対応に教師は引きさがることにした。この瞬間、職員室内の千冬を除く一同は悟った。即ち、織斑姉弟は姉どころか弟すら常人

を逸脱し始めた。

「ふう……」

自室に着いた一夏は深く息を吐きながら金剛輪を下ろす。それと同じ時に鉄下駄を脱ぐ。部屋までの道中、すれ違った生徒が信じられないと言いたげな顔をしていたが、その理由を一夏が察することは無かった。

「全く、師匠もなかなかの無理難題を吹っ掛けてくる」

手にする道具を用いた修業内容が書かれた紙を見ながら一夏は呟く。剣、無手に続いてさらに筋力トレーニング。中身を詰めに詰め込んだ修練メニューになるのは確実だった。

「まあ、密度が濃いつてのは悪くないかな……」

様々な内容のメニューをこなすということは修業の内容に常に変化があること。これが飽き防止に繋がると見た一夏は、メニューの追加を好意的に捉えていた。

「さて、準備するか」

荷物を手早く整理した一夏は部屋のクローゼットから外出用の私服を取りだす。着替え終えた一夏は部屋を出て、目的地に向かうため学園から出た。

神楽舞の準備、その最初の段階である楔みそぎを行うため、箒は実家の浴室に居た。

本来このような神前での儀式の前の楔は井戸などの冷水を用いて行うのだが、篠ノ之神社の神楽舞はそうした決まりごとに関しては若干緩い部分がある。楔が入浴で済むというのもその内の一つである。余りに規律が厳しいとその伝統は廃れがちになる。そのような意味を持つ先人の工夫により、伝統を長続きさせるために敢えて規律を緩くしたらしい。

木張りの床と壁の浴室。その一角にある同じく木張りの湯船に浸かりながら箒は静かに自分の首筋を撫でる。

数日前、白式のデータ取りを兼ねた模擬戦から少し経った後のことである。箒は一夏に対して実戦形式の試合を申し込んでいた。模擬戦で見せた一夏の戦いぶり。その鮮烈さに逸る気持ちを抑えきれなかったのだ。

一夏は二つ返事です承。その翌日に剣道場で立ち合うという手筈になった。そして当日、剣道部の部員が見守る中で二人は試合を行った。

この時、箒は二振り、大小一本ずつの木刀を携えていた。それは自身が修める剣術「篠ノ之流」を使うという意志の表れに他ならなかった。

対する一夏は木刀一振りのみ。しかし箒は二刀流の自身が有利とは決して思わなかった。

静かに木刀を構える一夏の姿。そこから一部の間も見出すことができなかつた。どこから打ち込もうと対処される。そう確信すると共に、それが千冬の話していた制空圏だと理解する。

どうしたものか。

攻めあぐねながら考えていると、一夏の方から動き出した。

そう思った時には既に一夏は箒に接近していた。

無拍子

人間が動きの中で無意識に取っている律動の空白を突く武術の奥義。先だつての修行の折、一夏はその会得を成し遂げていた。

とは言え、それも未だ完璧とは言えず、師である宗一郎や千冬から比べれば遥かに未熟だが、それでも使えないのに比べれば遥かにマシというレベルではあつた。

箒が一夏に反応できたのは一夏に集中を向けていたのと、この一夏の技の足りなさが原因だろう。しかし、一夏に僅かに遅れる形となつた箒は慌てて左手の木刀で一夏の攻撃を捌こうとした。

二刀流である篠ノ之流はいわゆる小太刀二刀術に形としては近く、片手の一振りで相手の攻撃を捌きつつもう一振りで攻撃を加える。

その基本に習い、箒は一夏の初手を捌こうとした。

そして、勝負は一瞬の内に付いた。

弾き飛ばされる左手の木刀。切り上げる形で振られた一夏の木刀は、

いつの間にか箒の首筋に添えられていた。

「勝負あり、だな？」

ニヤリ、と口元を笑わせながら一夏は言った。

そのまま木刀を箒から離すと、踵を返して道場から立ち去る。

それから数秒の後、静まり返っていた道場が一気に喧騒に包まれた。

「強かったな、一夏……」

首筋を撫でながら箒は呟く。

受け流しの動きを取る木刀を弾き飛ばす。力技もここに極まれりと言うべきか。

守りを強引に貫いた一夏の太刀筋は、とにかく激烈だった。

そして首筋に添えられた木刀。箒は理解していた。仮にあれが本当の死合이었다ら、あの瞬間、確かに箒の首は宙を舞っていたと。

木刀から首筋にヒシヒシと伝わった鋭利な殺気が、それを理解させた。

あれからだいぶ日数が経ったが、未だにその時のことを思い出すと首筋が疼く。まるで、一夏の太刀が見えない傷痕を残したかのようだった。

しかし、不思議と悪い気分はしない。鮮烈な一手を受けたことによ

る衝撃が、彼女の中の武を学ぶ者としての心を刺激し、ある種の高揚感へと変えていた。
ましてやそれを為したのが、かつて共に剣を学んだ幼なじみ。それがさらに刺激を強める。

（あれならばきつと、斬られても後悔は無いだろうな…）

いつの間にか高揚が恍惚に変化をしていたが、それに箒が気付くことは無かった。

それから少しの後、時間が迫りつつあることに気付いた箒は慌てて浴室から出て、神楽舞のための準備を始めた。

雪子の手伝いの下、舞のための衣装に着替えた箒は神楽舞の本番を迎え、演舞のための台の上で舞を披露した。

片手に御神刀を、もう片方の手に扇を持つての舞。幼少期は体格と筋力ゆえに扇しか持てなかった箒だが、今では両方を軽々と操ることが可能になり、観客の前で完璧と呼べる舞を披露した。

箒の舞は観客全員の盛大な拍手を以て称賛された。その拍手の音に箒は胸の内で安堵をする。それゆえに気付かなかった。拍手をする観客。その中に一夏の姿があったことを。

神楽舞の後、舞のための衣装から巫女服に着替えた箒は神社の一角にある販売所でお守りの販売の手伝いを行っていた。

先程まで舞を披露していた本人が売り子をしているためか、客足は上々と呼べるものであり、売っている箒もそれなりに良い気分になった。

そしてある程度客足が落ち着いたところで、箒は予想外の人物と対面することになる。

「よう箒」

「い、一夏!？」

突然目の前に現れた幼なじみの姿に箒は慌てふためく。

夏らしい薄手のシャツとズボンを着ている一夏は至極何気ない様子で箒に声を掛けた。

「な、なんで居る!？」

「いや、祭があるのは知ってたからな。来てみたらお前が舞をやっているじゃないか。驚いた」

「み、見たのか？」

「最初から最後までバツチリな。見事なモンだったじゃねえか」

「そ、そうか…」

自身の舞を一夏に見られていたことへの驚き、気恥ずかしさ、褒められたことへの嬉しさやら何やらで箒は顔を赤らめながら俯く。

そんな箒に背後から声が掛けられる。

「あら、箒ちゃんつたら。男の子の友達が来てるじゃない」

「ゆ、雪子おばさん!」

「ウフフ、篝ちゃんも隅に置けないわねえ。こんなに良い男の子がいるだなんて。さっ、ここはもういいから。身支度をして、一緒に回ってらっしゃいな」

そう言いながら雪子は、一夏にしばらく待っていてもらおうと頼むと、半ば勢い任せに篝を売り場から立ち退かせ、祭を回る準備をさせた。

それから約30分、一夏は篝が出てくるのを待ち続けた。

別段、一夏としては待つことに異論は無い。一夏からしてみれば30分待つ程度はさしたることもなく、待っている間は近くの木に背を預け、腕組みをしながら目を閉じつつ立ち続けていた。

目立たぬように自身の気配を消していた一夏は周囲の人間の認識から完全に自身を外しつつ、自分は制空圏の訓練をしていた。

師から習った制空圏の応用の一つ。反射的対応を切る代わりに知覚範囲を広げる。半径50m内の人間の動きを逐一、一夏は体感で感じ取っていた。

同時に一夏は思う。師であれば知覚範囲はゆうに100mを超えること、自身がまだまだであることを。

暇潰しと修練を兼ねた体感人間観察の最中、一夏はよく知る気配が近づくのを感じた。それは篝のものだった。

すぐさま一夏は気配の遮断を解除。篝に向けて歩を進めた。

「篝」

「い、一夏」

現れた一夏の姿に箒は僅かに体を固くする。どこか緊張しているようだと思いながら、一夏は箒の姿をまじまじと見る。

「浴衣、似合ってるじゃないか」

箒は浴衣姿だった。白を基調とし、所々に淡い朱色の花模様が飾られている浴衣。華美に過ぎず落ち着きながらも、女性らしい華を感じさせる浴衣に一夏は感心したように頷く。

「ああ、よく似合ってる」

「あ、あまりじろじろ見ないでくれ…」

一夏の言葉に箒は顔を赤くしながら呟く。その姿に一夏は軽い笑みを浮かべる。

「ほれ、行くぞ」

なんの変哲もないシンプルな言葉。アレコレ言うよりも今の箒には簡潔な言葉の方がよく伝わると判断しての言葉だった。

「あ、ああ…」

先に行く一夏の後に続く形で箒は歩き出した。

「へえ、やっぱり色々店があるな」

歩きながら一夏は夜店を見回す。祭というものとは久しく縁の無かったことを思い出した一夏は、神社の広い境内に立ち並ぶ数々の夜店を面白そうに見ていた。

祭ゆえに境内は大勢の人で混んでいたが、一夏が誰かとぶつかることは一切なかった。

あちこちに視線を向けながらも、一夏は他の通行人をよける。そのあまりの自然な動きは、自然すぎる故に誰にも気付かれることがなかった。

「おい箒、見るよ。スーパーボールだぜ」

「あ、ああ、そうだな」

子供のように目の色を明るいものにしながら、一夏はスーパーボール掬いの屋台を指差す。話し掛けられた箒は、一夏が隣に居るという緊張からか、やや言葉に詰まっていた。

「スーパーボールか。俺は修行に使ったな」

「そ、そうなのか？」

意外と言える一夏の言葉に、箒は少しだけ調子を取り戻して一夏を見る。

一夏は腕を組み、頭を頷くように動かしながら言った。

「制空圏の修行の一貫でな。大量のスーパーボールをランダムに投

げて、それに対応するつてのをやった。師匠ときたら本気で投げからさ。当たると冗談抜きで痛いんだよ」

一夏の言葉を箒は真剣に聞く。スーパーボールと言えば、子供の玩具というのが一般の認識だが、使い方では有用な修行に使える。一剣道家として、箒は一夏の修行の話は真剣に聞くようにしていた。そして、話ついでに箒は前々から気になっていたことを聞くことにした。

「一夏。お前の師という人だが、千冬さん以上の使い手というのは本当なのか」

「ああ」

あっさりと肯定した一夏に箒は改めて驚きを感じる。

「言つとくがな、師匠の出鱈目ぶりは半端じゃないぞ。剣だけじゃない。各種格闘術にも無茶苦茶長けてるし、頭脳面でも上位の国立大学を卒業しているからな。まさに世界最高スペックの男だよ」

「それ程の人物とどうやって知り合えたのだ？」

そう尋ねた瞬間、一夏は心底意外だと言う顔つきになった。

「いや、箒の親父さん経由だけど…」

「なんだと!？」

自らの父親が関わっていると聞いて、流石に驚きが大きかったらしい。箒の声のボリュームが上がっていた。

一夏は手で声のポリウムを落とすように指示しながら続けた。

「お前が引越してから少ししてからだっけな。千冬姉が親父さんに連絡取ってさ。俺の師匠になってくれる人が居ないかって。それで紹介されたのが始まり」

「そうだったのか。私は全然知らなかったぞ」

そう納得するように呟く筈を見て一夏は、何と無く筈の父親が筈に伝えなかった理由を察した。

一夏、そして宗一郎が使う真瞳流は紛れも無い殺人剣術。刀に例えるなら、斬る以外の要素を一切排した純粹な人斬り包丁のようなものである。

そうした存在を伝えたくはなかったのだろうと一夏は察した。

察して、一夏もまた敢えて筈に言うことはしない。わざわざ殺人剣術を学んでいるということを出聴する必要は無いからだ。

「ほら、次見るぞ」

素早く話題を切り上げて次の店を見ようとする一夏。

そして再び歩き出した直後、一夏は意外な人物と会うことになった。

「一夏さん…?」

聞き覚えのある声。声の方向に目を向けると、そこには中学生くらいの女子数人のグループがある。そして、グループの中央にいる少女は一夏がよく知る人物だった。

「ん？蘭か」

五反田蘭。一夏の親友である五反田弾の実妹である彼女もまた、この祭へと来ていた。

「き、奇遇ですね！こんな所でお会いするなんて思ってませんでした！」

一夏に秘めた思いを抱く蘭は、その一夏本人を前にしたからか、声がやや上ずり気味になっている。しかし、それを気にすることなく、一夏は穏やかな表情で言葉を返す。

「いや確かに奇遇だな。知り合いに全然会わないから、誰か居ないものかと思ってたけど、蘭と会うとはな。一緒に居るのは学校の友達か？」

「あ、はい。学校の生徒会のメンバーで」

「会長の忠実な部下なのでありますっ！」

「今日は秋の文化祭の参考になると思って来たんでーす！」

「私この人知ってますよ！世界最初の男のIS操縦者ですよね！？」

「へへ。会長って大物狙いなんだ〜！」

やたらとテンションの高い取り巻きの割り込みに蘭は顔を赤くしながら俯く。それを一夏は苦笑しながら見ていた。

「まあ随分と元気がいい仲間じゃないか、蘭」

「え、ええ。すみません、なんかお見苦しいところを…」

「いいさ、気にするな」

和やかに会話をする一夏と蘭。それを篝は少し面白くなさそうに、蘭の取り巻きは興味津津に見ている。

「あ、じゃあ私たちはお暇しますね〜！」

「会長！ファイトツ！！」

「なっ！ちょっとあなた達！！」

「キヤー！会長が怒ったー！」

変わらず高いテンションのまま素早く立ち去っていく少女たち。取り残された蘭に一夏が声を掛ける。

「あゝ、蘭。一緒に見て回るか？」

「え？でも一夏さん、一緒の人が…」

「大丈夫だ。篝なら問題ないはずだ。な？篝。構わないだろ？」

「勝手にしろ」

一夏の言葉に素っ気なく答える篝。僅かに首をかしげた一夏だが、すぐに気にするのを止める。

「それで、一夏。その者は誰だ？私は知らんのだが」

箒の言葉に一夏は思い出したかのように手をポンと打つ。

「そついや紹介してなかったな。五反田蘭。俺の中学の時のダチに五反田弾ってやつがいるんだけど、そいつの妹だ。蘭、こいつが篠ノ之箒。俺の幼馴染だ」

「あ、五反田蘭です。えつと、よろしくお願いします」

「む。ん、ああ。よろしく頼む」

挨拶を交わす二人を見て一夏は頷く。そして再び口を開いた。

「じゃあ、行こうか」

そして蘭を加えた三人で一夏達は再び祭り会場を回り始めた。食べ物関係の屋台を回りながら林檎飴を買い、射的で一夏が店の親父と盛大な値切り交渉を行うも一銭もまけられず、腹いせとばかりに一番高価な品を撃ち落として店主を涙目にしたりなど、祭を満喫していた。

そして、一通り祭を見た三人はこれから行われる花火を見るために境内内の開けた場所に来ていた。蘭は飲み物を買ってくるのとことので一時的に席を外し、この場には一夏と箒の二人しか居なかった。

「ハッハッハ、ザマアみる。あの親父め」

射的の最高価商品、箱に入った金券を見事に撃ち落とした一夏は金

券を入れた財布を撫でながら満足そうな笑いを浮かべている。射的屋での一幕。静かにコルクの弾を詰めた玩具のライフルを構えた一夏は、息を潜めて狙いを定めた。

そして引き金を引く。放たれたコルク弾は一夏が狙った金券入りの箱に当たり、ただの一発で倒した。

物が物だけに、店主もそう簡単に倒されないようにしていたのだろうが、たった一発で倒されたことに信じられないと言いたげに口を開き、そして悔し泣きをしながら景品を一夏に渡した。

その時の一夏の表情はいつそ嫌味にすら思えるような笑みであった。

「まさか私も一発で落とすとは思わなかったぞ。一体どうやったのだ？」

「狙った」

「いや、それは分かるのだが……」

「獲物を見てたらさ、何となく見えるんだよ。急所というか、確実に決められるポイントってというのが」

何気ない一夏の言葉に箒は言葉を失う。本人は何気なくやったつもりなのだろうが、それは驚嘆に値する技能である。

そしてこれは箒は当然として、当人である一夏すらも知らないことであるが、一夏が行った急所を狙う技能は彼自身の修行の賜物である。

真瞳流の奥義、死棘と無命。これらは相手のクリティカルポイント

を見極めて、そこに正確な攻撃を加えることが本質である。それらを会得していく過程で、一夏は自然とその技能を習得していた。

「ま、細かいことはいいじゃないか。こうして景品ゲットしたんだし」

「う、うむ、確かにそうなのだが……」

軽い口調の一夏に箒もまた、これ以上言う気を無くす。それから数分の間、二人は無言のまま立ち尽くす。

「しかし、蘭のやつ少し遅くないか？」

一夏がそう言った直後、噂をすればなんとやらと言っべきか、一夏の携帯電話が着信メロディを、宗一郎にやたら声の似ている人物が小惑星を地球に落とそうとするアニメ映画のメインテーマを鳴らす。

「もしもし、蘭か？何？……そうか、分かった。気を付けてな。弾に宜しく言っといってくれ。ああ、じゃあな」

「どうした？」

電話を切った一夏に箒が何事かを問う。

「いやな、蘭は先に帰るって。弾に、あいつの兄貴に捕まって帰る羽目になったと」

その言葉に箒は思考が止まる。それはつまり、一夏と二人きりになるということ。突然訪れた状況に、箒は自分の心臓が早鐘を打つのはつきりと感じた。

「い、一夏…」

そして箒は意を決した。夏祭り、自分の浴衣姿、花火、二人きり。状況は揃い過ぎている。これ以上のチャンスは存在しない。長年胸中に秘め続けた想いを今、一夏に伝える。

「一夏！」

「ん？どうした？」

「わ、私は！お前のことが」

好きだ。そう言おうとした瞬間、夜空に花火が上がり、その音が箒の言葉をかき消した。

「どうした？」

聞こえていなかったのだろう一夏が聞き返す。その姿に箒は何故だか決意が薄らいでいくのを感じた。

「いや、なんでもない…」

「そうか。おつ、見るよ箒。花火がすげえぞ！」

そう言っで一夏は花火を見ながら顔を綻ばせる。笑顔を浮かべる一夏の横顔を見ながら、箒はそつと一夏の手を握る。

「箒？」

「こ、これくらいはいいだろう…」

折角の機会。手をつなぐくらいはしてもバチは当たらない。せめてこれくらいはしたいというのが篤の想いだった。

そんな篤に一夏は柔らかい表情を浮かべながら快諾する。

「いいさ。それよりほら、花火見ろよ。見事なモンだぜ」

「ああ、見事だな」

そうして二人は夜空に咲く花火を見続ける。炎の大輪に彩られた夜空の下、二人の16歳の夏が過ぎて行った。

それから夏休みの終わりまで一夏達は騒がしくも有意義な夏休みを過ごした。

ある時はいつもの六人が一夏の家に集合し、料理で一騒動を起したりした。

ある時は一夏が腕試し会で前回以上の大立ち回りを見せ、見物に来ていた篤を始めとしたいつもの面々の度肝を抜いたりした。ちなみに、この回は最終的に一夏と剣道部エースの一人である沖田司の一

騎打ちになり、終いには互いに剣を手放して素手での取っ組み合いになり、結果として両者相討ちになったりした。

ある時は学園の一角で巨大な金属の塊を振り回している一夏の姿を見た生徒の一人が我が目を疑ったりした。

騒がしくも穏やかな日常。しかし、それも決して長続きはしない。

一夏の師、宗一郎が予期したように、一夏と彼の周囲は新たな動きを見せようとしていた。

「以上が織斑一夏君の報告になります」

空調により夏の暑さを感じさせない室内に響く言葉。

部屋の最奥、陽光を室内に注ぐ窓を背にする室内でもひと際威厳を持つ机に座る人物は、差し出されたレポートを受け取ると面白そうな表情を浮かべる。

「ふうん、なるほどなるほど。中々面白そうね。さすがはあの人の弟子といったところかな？」

「どうしますか？そろそろ動きを？」

尋ねられた言葉に彼女は大仰に頷く。

「ええ。状況も動き始めた。そろそろこちらでも行動を始めるわ」

そう語る姿はさながら王者の如し。そして主の命を受けた従者は一礼と共に行動を起こすために部屋を辞す。

一人部屋に残った女王は手にした扇子を広げて口元に薄い笑みを浮かべる。

「さあ、織斑一夏君。あなたには悪いけど、少し派手なお祭りに強制参加してもらおうわ」

一人呟かれたその言葉を聞く者は誰一人として居なかった。

「あくでも、あの人の弟子だからね。下手打ったら私が無事じゃ済まないかも……」

呟きと共に自分に喝を入れる。その姿に先ほどまでの威厳はまるで無かった。

第四十六話（後書き）

おかしいですね。本来ならもう少しやるはずだったのに。これだけで夏休み編が終わってしまいました。

一応理由という名の言いわけをさせて頂くとですね…

- ・ぶつちやけ原作とそんなに変わらない。
- ・日常パートって書くのが意外に大変だった。
- ・早く会長を出したい。
- ・最近買ったAC3Pがやたら面白い。

特に最後の二つが大きいです（マテ

いや、ACシリーズをやってみたかったのでPSPで初心者向けと言われる3Pを買ったのですが、これが中々。

最初は中量二脚のバランス重視だったのに、いつのまにかガチタンになってました。ちなみに武装はEN主体。

何分ヘタレイヴンなものでして、KARASAWAと月光、肩にプラズマ砲とレーザーでゴリ押しですww

早く3か箱を入手してfaやVをやってみたいです。多分大学受かんなきや無理ですが。

とりあえず、次回から原作五巻に入ります。今後も本作をよろしく願います。

…一夏の携帯の着メロ、分かりますかね？バレバレですよ？

第四十七話（前書き）

原作五巻開始です。あの人がチヨビっと出ます。

第四十七話

学生生活の華と呼ぶべき夏休みも終了したIS学園。

既に授業が再開してから幾日かが過ぎたその日、学園アリーナの二つでは一年一組及び二組による、合同のIS実習が行われていた。

この時期になると一年生の実習内容も本格的なものになり、訓練機を使用した生徒同士の模擬戦や、各種技能の修練が行われる。

そして今、アリーナでは生徒同士の模擬戦が行われている。

一組クラス代表織斑一夏対二組クラス代表凰鈴音。

実習に先立ち、他の生徒よりも経験のあるクラス代表であり専用機持ちの二人による模擬戦が、千冬の指示の下で行われた。

剣戟の音がアリーナに鳴り響く。一夏が振るう蒼炎が鈴の双天牙月と切り結ぶ。

鈴のISである甲龍は衝撃砲という中・遠距離用の装備を持つものの、基本的には近接戦闘主体を想定して作られた機体である。

その搭乗者である鈴は当然ながら近接戦闘の訓練を受けており、その技量は代表候補ということもあり同学年の中では上位にある。

しかし今、一夏と剣戟を交わす彼女は明らかに押されている。

理由は単純。一夏の技量が完全に鈴を上回っているからに他ならない。元々生身で非常に高い戦闘能力を有していた一夏は、入学してから今までの数ヶ月の間で積んだ修練により、その技量の大半をIS戦闘に反映させ、今やその技量は近接戦に限れば並の代表候補で

は太刀打ちできない程になっていた。

「くうっ！舐めんなあっ！」

柄を連結させ両刃の薙刀へと形を変えた双天牙月を蒼炎と競り合わせながら鈴が怒鳴る。

片刃を蒼炎と噛み合わせたまま鈴は柄の連結を解除。自由になった双天牙月の一降りを横風ぎに一夏に向けて振るう。

「無駄だ」

感情の起伏を感じさせない平坦な声、眼差しで一夏は静かに言う。

同時に一夏は上半身をのけ反らせ、横からの一撃を交わす。

回避を認識すると同時に一夏は体全体を捻る。展開する脚部装甲ブレード。その一撃が鈴に襲い掛かるが間一髪、鈴は後退して紙一重で回避する。

これにより二人の間には距離が開いた。

「ああもう！今のはイケると思ったのに！」

横風ぎの一撃が回避されたことを、悔しそうに鈴は言う。

その言葉に一夏は淡々と、天気の話をするかのような調子で言う。

「言っておくがな、鈴。俺と斬り合いをしている限り、お前は俺の制空圏に居るんだぞ。お前の動きは全部筒抜けだと思え」

「それよそれ！何よそのセーキューケンって！動きが全部分かるなん

て反則じゃない！インチキよインチキ！」

「いや、これでも修行の賜物なんだけどなあ……」

ガーツといった様子で抗議の声を上げる鈴に、一夏は少し困ったように答える。

ちなみにこの時、二人の会話を聞いていた他の生徒達が鈴に同調するように頷いていたことを、二人は知らない。

「まあ、鈴も年単位で修行してみろよ。そしたらできるかもしれないぜ」

そう言いながら一夏は腰部装甲のサイドバインダー「迦楼羅」^{カール}から取り出したスティックを空いた左手に持つ。直後、スティックの先端から純白のプラズマブレードが伸びる。

「こんな風にな」

その言葉と共に一夏は蒼炎とプラズマブレードを一閃させる。何かを斬ったような音が鳴る。直後、一夏の背後にあるアリーナのシールドで小規模な爆発が四つ起きる。

「やっぱ反則よ、それ……」

苦々しさを凝縮させたような表情で鈴が呟く。

甲龍の両肩の衝撃砲、その砲門が両方とも開いていた。無言の不意打ちとして放った不可視の砲弾。二発同時に放たれたソレは、制空圏で感知した一夏の二刀の一閃により切り裂かれ、一夏に当たることなく背後のアリーナの遮断シールドにぶつかるに終わった。

「んじゃ、今度はこっちの番だ」

その言葉と共に白式のスラスタが一気に稼働する。先立っての模擬戦で使用を始めた短距離瞬時加速を発動。移動距離こそ通常の瞬時加速より短いものの、連続しての素早い鋭角機動が鈴を揺さぶる。

衝撃砲で攻撃をしようにも、一夏の動きが素早く狙いを定めることができない。

しかし牽制として、鈴は衝撃砲を幾度か放つが全て当たらず終いとなる。

対する一夏も短距離瞬時加速で移動をしながら迦楼羅で射撃を行うが、一夏自身の射撃技術の低さ故に一発も当たることはなく、牽制或いは目くらましの域を出ずにある。

互いに牽制の射撃を撃ち合うが、それも長くは続かない。勝負というものは得てして当人達すら予想できないほどあっさり決まることがあり、この勝負もまた同様の事例と呼べた。

「後ろ貰ったぞ」

短距離瞬時加速により一夏が鈴の背後を取る。

ハイパーセンサーの全包围視界でそれを確認した鈴は、一夏に背を向けたまま衝撃砲を発射しようとする。射角制限の無い衝撃砲は砲台となる両肩のユニットを回転させ、砲門を一夏に向ける。

砲門を一夏に向ける。その僅かな時間が致命打になった。砲門が一夏に向いた直後、衝撃砲のユニットに何か突き刺さる。それは一夏のプラズマブレードだった。蒼炎を一時的に格納した一夏は、空いた右手で右側の迦楼羅からもう一本のプラズマブレードを取り出

し、両手に持つ形になったソレを投擲。

結果、二本のブレードは甲龍の衝撃砲ユニットに突き刺さり、ユニットは爆発。甲龍は衝撃砲を使用不可能になった。

「嘘っ!?!」

鈴が驚愕の声を上げるが、それに一夏が取り合うことは無かった。

一夏は短距離ではない、通常の瞬時加速を使用。スラスタールと迦楼羅を合わせた計10の噴射口を爆発させる、音速を優に超える圧倒的加速で一瞬で鈴に接近。

再展開し、零落白夜を発動させた蒼炎で甲龍を切り裂いた。

発動する絶対防御が甲龍のシールドエネルギーを喪失させる。

勝負は一夏の勝利で幕を閉じた。

side 一夏

模擬戦が終了した後、千冬姉の模擬戦についての解説を受け、午前
の実習は終了した。

そして昼休みの今、俺を含めたいつもの面子は食堂で昼食を取っ
ている。

「ねえラウラ。それって美味しい?」

シャルがラウラに食事の感想を尋ねている。ラウラが食べているのはシュニッツェルという、ドイツ風のカツレツみたいなものだ。ちなみにシャルが食べているのは普通のミートパスタ。そして俺はうどん。昼も実習があるからな。あまり重過ぎず、なおかつ体力を持たせるなら炭水化物が丁度いい。うどんはうってつけというわけだ。

「うむ、美味しいぞ。まさか日本でこれだけ美味しいシュニッツェルを食べられるとは思わなかった」

ラウラの言葉に偽りは無いのだろう。次々に衣で覆われた肉を平らげていく様子が、ラウラの満足を示している。

「お待たせ」

そんな言葉と共にトレイに料理を乗せた鈴、箒、セシリアがやって来る。これで面子は揃ったな。

ちなみに三人が選んだメニューはと言うと、鈴はラーメン、箒は和食セット、セシリアはサンドイッチ。言っちゃあアレだが、あまり変わらないメニューだ。まあ、当人達がそれで良いなら良いのだろう。

「済まないな。待たせてしまった」

「いやいや、先に頂かせて貰ってるよ」

箒の言葉に俺が答える。

さて、いつもの六人が揃ったわけなので、本格的にランチタイムの始まりだ。

とは言ってみたものの、実際ランチタイムなどと言ってもそんな大したもんじゃない。普通に料理を食べるだけさ。それで食い終わったら後に、まあ今日の場合はそれぞれが好みの菓子について話したな。

予想通りというか、やっぱり皆はそれぞれ自国の菓子が好みのような。そりゃそうだ。ガキの頃から食ってれば自然と愛着も湧くというもの。

俺だって煎餅や羊羹は好きさ。

他にも、じゃあ外国の菓子じゃ何が好きかという話になったが、セシリアは中々に高カロリーな物が好みらしい。ジャム入りの揚げパンとか、聞くだけで凄そうだな。

さて、料理話も一段落。食休みも兼ねて俺達は先ほどの模擬戦の感想を話すことにした。

「まあなんにしてもアレよ。一夏の制空圏だっけ？あれが反則すぎるのよ」

鈴の言葉に他の四人が頷く。まあ、その表情はどこか苦笑いをするような感じだが、そこまでか？

「当たり前じゃない。こっちがどんな風に攻撃しようとしても、それが全部バレてるなんて、反則以外どう言えばいいのよ」

「そうは言うけどな、鈴。俺だって年単位の修業してやっと使えるようになったんだぞ。使ったっていいじゃねえか。俺の努力の結晶

「なんだから」

「そこよ。どんだけ反則的な技でも、本人の努力の賜物だなんて言われちゃ、反論のしようがないのよ」

「まあ、確かになあ……」

「兄様、その制空圏というのはやはり使える者は少ないのか？」

「そうラウラが聞いてくる。ふむ、使用者か……」

「まあ、厳密にどの流派の技と違って形で伝わっているわけじゃないから、ちゃんとした制空圏としての形で使える人間は少ないだろうな」

「師匠の受け売りだけだな。俺が知る限り使えるのは俺と師匠、それに千冬姉も使えるだろう。後、筈の親父さんも知ってるくらいはありうるだろうな。」

「ただ、師匠いわく相応に戦闘技術を修めた人間なら、それに近いことはできるらしいな。ラウラだって、後ろから近づかれたとしても気付くくらいはできるだろう？あれの精度を徹底的に上げたのが制空圏だな。後、当人に自覚は無いけど自然と使えているって人もそれなりにはいるらしいな。まあ、そういうのは所謂格闘技の世界チャンピオンだったり、道場の師範とからしいけど」

「なるほど。やはり古来からの武というのは奥が深いな。私も学んでみるべきかもしれん」

「したり顔で頷くラウラに俺は思わず頬が綻ぶ。ラウラのこういう姿

勢、俺は結構気に入ってるんだよな。

「ですが、先ほどの一夏さんの話を聞いていますと、その制空圏を
使える一夏さんは、その格闘技の世界チャンピオンなどの方々と同
じ領域に居るといふ風に聞こえるのですが」

ふと疑問に思ったという風にセシリアが聞いてくる。なるほど、世
界チャンピオンねえ…

「まあ、素手にもそこそこ自身はあるけどさ、さすがに本職のチャ
ンピオンとかには勝てないな。ただ、刀があればこっちのモンだけ
どな」

「そ、そうなんですの」

おや、セシリア。何故そこで引くような笑いを浮かべる。そもそも
俺が習ってるのは古流剣術。ぶっちゃければ人殺しのための技術だ
ぞ？想定する戦いのレベルだって、当然ながらスポーツの枠には収
まらないさ。

「やっぱり一夏は凄いな。僕はカツコイイと思うな」

ああ、手放しに褒めてくれるのはお前だけだよ、シャル。他の皆は
どうしても若干引いちゃったりしちまう。まあいい。そろそろこの
話も終わりにしよう。午後の授業も近い。

「ああそつだ。みんな散々言ってくれてるけどさ」

それでもだ。最後にこの一言だけは言わなきゃなんか気が済まない。

「みんな、自分がISの専用機持ちだつてこと忘れんなよ？それに比べたら、俺の技の一つや二つなんざ、大したことないだろうが」

その言葉で締め括って、俺は食堂を後にする。

ISなんてものに比べればな、生身の俺個人の力なんぞ、大したものじゃない。何だろうな、ちと寂しい気分になってきた。

さて、感傷に浸っているわけにもいかない。

時間が差し迫っているのは事実。現在俺が居るのはアリーナの更衣室。午後も実習があるから、俺は着替えなければならぬ。

しかし、さっき鈴は俺の制空圏を反則だと言ったが、俺のなんてまだ可愛いもんだと思うがなあ。俺以上に反則的な使い方をする師匠や千冬姉はどうなるって話だ。

「やはり時代は省エネか…」

着替えつつそんなことを呟く。何故かだと？着替えつつも目の前に展開している白式の稼動データさ。

さっきの模擬戦のデータも合わせて、今までの稼動データを纏めたものが表示されている。入学して早数ヶ月。山田先生の懇切丁寧な補講のおかげで、それなりにISの理論的な部分も分かるようになった。

おかげでこうしてデータを見て、その内容をだいたい理解できて、どこをどうすればいいかも分かる。まあ、問題点と求める改善結果が分かっても、そこに至る手法は分からないことばかりだけど。

やはりこの辺は専門的な知識がある人に見てもらわなきゃか…

しかし、白式の燃費にも困ったものである。俺を含めたいつもの六人の専用機を見比べる場合、白式は燃費がかなり悪い。はつきり言うて下から二番目だ。

ちなみに一番悪燃費なのは箒の紅椿。ただ、紅椿の場合は絢爛舞踏という、どう考えても制空圏なんか比べ物にならないくらい反則じみた能力があるから、あまりこの評価は当てにできない。

だから使い手たる俺はいかに白式を低燃費で動かすかが問題になる。その点から考えると短距離瞬時加速は我ながら中々良くできた技だと思う。

エネルギー消費があまり酷くなく、それでいて白式の高い機動能力という特性を活かしている。

いつそ誰かとコンビを組んで戦うというのもアリか。となると誰を相方を選ぶ。やはりまず思いつくのはシャルにセシリアか。

シャルの突き抜けた器用さの頼もしさは、この間のトーナメントで身を以て理解した。セシリアとは機体の特性的な観点だな。

次点に来るのはラウラと鈴。あいつらも頼もしいのは間違いないけど、ギリギリの差か。

箒？あまり言いたくは無んだけど、絢爛舞踏が無けりゃぶつちやけ紅椿は話にならん。あいつが一日も早く絢爛舞踏を使うこなせるようになるのを祈るばかりである。

「……………」

さて、そんなことを考えている内に着替えを終えたわけだが、俺は動かない。

何か居る。いや、この場合は誰かと言うべきか。制空圏の応用技、反射的対応のカットの代わりに知覚範囲の拡大で周囲を探る。

間違いない。誰か居る。感知型制空圏は既に更衣室を完全に取り込んでいる。確実に誰か居る。だが、気配が希薄だ。

それはつまり、俺の制空圏の中にいながらにして、気配を隠すことができるということ。

一体何者だよ。自惚れるつもりはないが、これでも生身限定なら学園でも良いトコ行ってる自信はあるんだが…

「シッ!!」

動いた!

俺は振り向き、蒼炎を展開して背後に向けて突きを放つ。容赦は不要。本気の一突きを打ち込む。

「うわっ!いきなり危ないな。もうっ、イキナリな男の子は嫌われるぞ?」

振り向いた俺の目の前には一人の生徒が居た。制服のリボンの色から学年が二年であるということが分かる。そして片手には何故か扇子。

ぶっっちゃけ胡散臭い。というか誰だコイツ?

まあいい。正直言つと気になる。さっきまでの、いつそ見事と言える気配の消し方や、不意打ちで放った突きをかわしたこと。色々聞きたくはあるが、今は保留だ。

「あれ？ねえちょっとどこ行くのー！？無視！？私のこと無視！？」

俺は黙ってアリーナへ向かう。後ろで何か喚いているけど、聞こえないっいたら聞こえないーい。

結果、何とか授業には間に合いました。しかし、さっきの人は一体誰だったのかね？

s i d e o u t

第四十七話（後書き）

さて、初っ端からICHIKA全開になりました。
現在、六人の中での勝率ランクは以下のようになっています。

ラウラ 一夏、シャル>鈴≡セシリア>篤

ラウラと一夏、シャルの間はかなり近いものになっています。AI
C、タイマンでのその反則ぶりが全てです。

次回からあの人が本格登場です。

最近、オリジナル展開もアリかと思いはじめました。
それでちょっと構想を練ってはみたものの、あまりの内容に思わず
自分で笑ってしまいました。
だって…

- ・ご都合主義満載
- ・強力ICHIKA無双
- ・そもそもエンディングで一夏に救いが無い。某虚淵みたいに。

某輝美みたいに世界に革命を仕掛ける一夏とか誰得だと、自分で考
えていて思いました。
ええ、戯言と思って流して下さい。

第四十八話（前書き）

思ったより早く書けました。

やはり書きたいと思っていたところだからでしょうか。進む進む。

第四十八話

「はあ……」

放課後、寮の自室でセシリアは一人、深いため息を吐く。理由は今日行われた実習だった。

午後の実習においてセシリアは、一夏と空中機動の訓練を兼ねた簡単な手合わせを行った。

模擬戦とも呼べない、本当に軽い手合わせ。セシリアがブルー・テイアーズで射撃を行い、それを一夏が回避する。

時折、一夏がセシリアに接近。蒼炎をセシリアに振るうという、言うなればウォーミングアップに近いもの。

その手合わせにおいて、一夏がどう思ったかはセシリアは知る由も無い。しかしセシリアは自身は、晴れやかとは言い難い気持ちになっていた。

今の自分では一夏に勝てない。それが、手合わせを通してセシリアが実感したことである。

零落白夜を始めとし、対エネルギー兵器用のシールドなど、白式のエネルギー兵器に対する凶悪なまでの優位性。そして、水を吸う真綿の如く力を付けた一夏の力量。これらが合わさった織斑一夏と白式というコンビは、今のセシリアにとって最も強大な存在と呼べた。

「はあ……」

再び深いため息を吐く。今、彼女の目の前には一つの空間モニター

が展開されている。そこに表示されているのはブルー・ティアーズの稼働データ。

37%という稼働数値が、ますますセシリアの心を沈ませる。

思い出すのは一夏が使用する制空圏という技術。一夏は敢えて精度を落とすことで、広範囲に渡って物の動きを体感で知覚していると言っていた。

それと同時に、ブルー・ティアーズのようなエネルギー兵器による攻撃は、存在の希薄さや弾速の速さから知覚しにくいという一夏の言葉を思い出す。

だからといって、そのことにセシリアは安堵をしなかった。

彼女は理解している。一夏はブルー・ティアーズの射撃ではなく、本体そのものの動きを知覚して自身の攻撃を回避していることを。

「このままでは……」

いつまでも一夏には勝てない。その確信があった。

少し前、本国の整備担当者に実弾装備の支給を申し出たが、それもまともに取り合ってもらえることなく却下された。

実弾装備が無い以上、セシリアはB-T兵器のみで一夏に、その技量に挑まなければならない。

「全てはわたくしの未熟、ですわね……」

一夏に恨み言を言うつもりは毛頭無い。二人の初めての試合の後の約束通り、一夏は実力を付けた。問題があるとすれば、それはセシリア自身だとセシリアは理解している。

確かに、入学当初に比べれば彼女も実力を上げたという自覚はある。

ブルー・ティアーズの操作技術も、春に比べれば上がっているという自覚はある。

しかし、モニターに表示される稼働率を見れば、どうしても気分を落とさずには入られない。

高稼働時のブルー・ティアーズは理論上、発射したビームを偏向させることも可能とされている。しかし、存在する代表候補の中で最大のBT適正值を持つセシリアが未だそれを成し遂げていないため、机上の空論を出ずにいる。

(それさえできれば、一夏さんに勝つこともできますのに…)

変幻自在に屈折するエネルギー弾ならば、さしもの一夏とて対応を難しくに違いない。

そうすれば、自身と一夏の間にある差も少しは埋まるというもの。そんな思いがあった。

「このままでは…いけませんわね…」

そう言いながらセシリアは一夏のことを思い浮かべる。

始めはそこそこできる素人だったのに、いつの間にか周囲に認められる実力を着け、自身の先を歩いている。

学園での最初の友人だからというのもある。彼と並び立てないこと。それがセシリアは嫌だった。

互いに約束をした通り一夏は実力を付けているのに、自分がこのよ
うな調子では不実にあたる。

膝の上に置いた手を握り締める。一夏と並び立てないこと。それを考えると胸が詰まるような気持ちになる。

自分を置いて行かないで欲しい。自分を隣に立たせて欲しい。そんな思いが沸き上がる。

コンコン

不意に響くノックの音。返事をした後に部屋に入ってきたのはシャルロットだった。

「セシリア、いる？」

「ええ。どうかなさいましたの？」

「うん。よかったら夕ごはん、一緒に食べないかなって思って」

「それは…あの、一夏さんは…」

セシリアが見るに、いや、誰が見たとしてもシャルロットが一夏に好意を抱いているのは明らかである。そして、シャルロットは一夏と行動を共にすることが多いのをセシリアは知っていた。

それが今のセシリアには少しだけ都合が悪かった。

今、セシリアは一夏と顔を合わせる気分にはなれなかった。自分自身への不甲斐なさ、それが原因だ。

セシリアの様子を察したのだろう、シャルロットは穏やかな表情で言った。

「一夏は一緒じゃないよ。先に食べちゃったみたい。なんだかやることがあるんだって。酷いよね、僕に何も言わないなんて」

少しだけむくれるようなその言葉に、セシリアは何故だか気分が軽くなるのを感じる。

生来の優しさ故か、シャルロットは自然と相手を気遣い、気持ちを落ち着かせることに長けていた。

「少々待って下さいな。準備をしますわ」

そう言ってセシリアは立ち上がる。その顔に先程までの陰は無く、いつものセシリアの明るさが戻っていた。

（なんだか、シャルロットさんが羨ましいですわね）

ふとそんなことを思う。常に一夏の側に居ようとし続けるその姿勢。前向きと呼ぶべきか、その姿を思い浮かべる、セシリアは少しだけシャルロットを羨ましく思う。

（わたくしも、もう少し行動に移すべきでしょうか）

一夏の近くに居る。それを思い浮かべ、不思議と良い気分になる。或いは、一夏の姿から操縦者として何かを学び取れるかもしれない。そんな思いもあった。

様々な思いが交錯しつつ、今日という日もまた過ぎていく…

明くる日。この日、SHRと一時間目の半分を使った全校集会のために、学園の全生徒は講堂に集まっていた。

整列をする生徒の中、一夏も腕組みをしながら列に並び立っている。

(学園祭に関するお知らせ、ねえ…)

集会の内容は事前に通達されていた。近く行われるIS学園の学園祭。

通常ならば配布されるプリントなどで要項が知らされるのだが、今年は例年とは違った方式を取り入れるらしく、その説明のために集会が開かれたとのことである。

(まあ、内容は正直どうでもいいけど…)

心の中で一夏は呟く。今回の集会、一夏が気にしているのはただ一つであった。

生徒会長。

今回の集会では生徒会長が内容の説明を行う。

その存在に一夏は興味を持った。入学して間もなく、真耶から聞いた「生徒会長は学園最強」という言葉。それを思い出し、一夏は生徒会長とは何者なのかを見るために、集会に参加したつもりであった。

(そういや、結局昨日のアレは誰だったんだ?)

ふと、前日にアリーナの更衣室で会った生徒を思い出す。

自分にギリギリまで接近を気付かせない実力者。気にならないと言えは嘘になる。

(授業近かったし、八つ当たり気味にシカトしちゃったけど、名前くらい聞いとけば良かったな…)

二回に渡り参加した腕試し会でも見たことの無い顔。未だ自分の知らない学園の隠れた実力者を思い出し、一夏は軽い後悔を抱く。

(後で調べてみようか…)

そう考えたところで、講堂の前方に立つ生徒会の役員らしい生徒が、集会の開始を告げる。

その声に一夏は思考を一度中断し、眼前の壇上に意識を向ける。

「それでは、生徒会長からのお話です」

マイクにより講堂に響く声。いかにも事務職が得意と感じさせる落ち着き払った声は、生徒会役員に相応しいなどと一夏は思った。

そして壇上の袖から一人の生徒、学園最強と呼ばれる生徒会長が姿を現す。

その姿を目に焼き付けんと壇上を凝視した一夏は、現れた生徒の姿を見て驚愕に目を見開いた。

「やあ。一年生諸君は初見になるかな?私の名前は更識楯無^{さらしきたてなし}。この

学園の生徒会長、即ちは君達の長。よろしく」

自信に溢れた堂々たる姿で挨拶の口上を述べる生徒会長。

それは、前日にアリーナ更衣室で一夏の前に姿を現した謎の生徒だった。

「あれが、生徒会長だと…？」

周囲に聞こえない程に小さな声で一夏は呟く。

はつきり言つて、今の一夏の心中は驚きで占められていた。自分に対し、実に印象的な接近を図った人物がまさかの生徒会長、学園最強と呼ばれている存在だとは思ってもよらなかった。

(いや、だがこれで得心いったな…)

そして理解をすると同時に納得をする。自分が気付くのが困難な程に気配を消せる実力者。何者かと思つたが、学園最強の生徒会長と言われれば納得はできる。

何を以て最強と為すのか。ここがIS学園である以上、当然ながらISの実力は学園の頂点にあるだろう。だが、ISに依らない生身の戦いでも武闘派の多いこの学園だ。そんな武闘派の集まりをして最強と納得させている以上、ISだけでなく生身での実力もまた、学園最強と目されていると一夏は見る。

それならば、あの隠行の手際にも納得が行くというもの。

したり顔をすする一夏の視線の先、生徒会長更識楯無が自分に視線を向けるのを一夏は理解した。交錯する二人の視線。一夏は挑戦的な視線を、楯無は悠然と受け止める視線を、ニヤリと口の端を歪めた笑みと共に一瞬交わす。

そして壇上の楯無が口を開く。

「さて、長い話はみんな好きじゃないでしょう。話の要点を端的に説明しましょう」

講堂の各所に設置されたスピーカーから、音量を増幅させられた楯無の声が響き渡る。しかし、楯無の手にマイクが握られている様子は無い。おそらくは制服の衿元あたりにピンマイクを付けているのだろうと、一夏は見立てる。

「今回、学園祭での各部活動展示の投票において、新しい試みを行いたいと思うわ」

悠然とした、言うなれば王者の風格というべきか。余裕と自信を持った態度で楯無は言葉を続ける。

「初めてとなる一年生も分かるように簡単に説明すると、毎年IS学園の学園祭では各部活動ごとに展示を行い、生徒及び来場者からの人気投票を行うわ。そして一位の部活動には助成金が出るというのが例年の習わしなのだけれども、今年は少々商品の趣向を変えてみました」

そこで楯無は一度言葉を切る。僅かに溜めをおいて、生徒全員の意識が自分に集中したことを確認すると、力強い声で宣言をした。

「題して、『部活対抗織斑一夏争奪戦』!!!」

「「「「「ええええええええええ!!!?」「」「」「」

楯無の言葉に、生徒達の驚愕が大音量の声となって講堂に響く。一気にざわめき始める生徒達を手の動きで制すると、説明のために楯無は言葉を続ける。

「静かに。続けるわ。内容は至って単純。今年の学園祭の部活動展示で一番の投票数を獲得した部活は、織斑一夏君を部員として獲得できます!!!」

その言葉に再び講堂内のボルテージは最高潮になった。

「うっしやー!!!気合入ってきたわ!!!」

「今年の展示は気合入れるわよ!!!」

「狙うは一位のみ!!!二位以下はビリと同じだわ!!!」

「何が何でも織斑君を我が部に入れてみせるわ!!!」

講堂のあちこちから気合を入れる声が聞こえる。それ以外にも、突然告げられたイベントに楽しみを隠しきれない声や、周囲の友人と早速この展開について話し込む声が聞こえる。

講堂に集まったほぼ全ての生徒が、何かしらの会話をしていた。そう、ほぼ全てが。

ただ一角、無言に包まれているエリアがあった。一年一組の列、その中央よりやや前方。楯無が告げた企画の当事者、織斑一夏を中心に据えたエリアだ。

一夏は何も言わずに俯いている。気付いた者は少数でしかなかったが、その拳は固く握りしめられ、小刻みに震えている。

そして一夏の周囲の生徒はどこか怯えるような表情で黙りこんでいる。原因はただ一つ。一夏が発する凶悪なまでの怒気である。

それまでざわめいていた生徒達も、一夏とその周囲の様子に気がついたのか、伺うような視線を向けていく。

「フ、フフ…フ…」

震えるように一夏の口から洩れる笑い声。それを聞いた一夏の周囲の生徒はビクリと背筋を震わせる。

一夏は俯いていた顔を上げて前を見据える。そして自分を見つめる前方の生徒達に、手を動かすことで位置をズラすように指示する。瞬間、さながらモーゼが湖を割ったかのごとく、生徒達が列の中に空白を作る。その空白は一夏と壇上の楯無を一直線に結ぶようになっていた。

「ふっ
」

一夏が一步を踏み出す。そして

「ざけんなぁゴルアアッ！！」

怒号と共に一夏が全速力で楯無めがけて駆けだす。真瞳流歩法逸足

を使用して初速から最高速で駆けだした一夏の姿は、周囲の生徒にはまるでその場から消えたように見えた。

一夏と楯無、両者の距離は約25m弱。その距離を数秒たらずで詰めた一夏は一度跳躍をする。そして片足を壇の縁に掛けると、その足に力を込めて再度跳躍。目前の楯無の身長を超える高さまで飛び上がる。そして

「デエストロオーイ!!!」

そんな物騒な怒号と共に楯無めがけて踵落としを放った。しかし、或いは織り込み済みであったのだろうか、楯無はクスリと軽い笑みを口元に浮かべると、軽やかなバックステップで一夏の攻撃を回避する。

「ふふ、そんなに気に入ってもらえたのかな？」

余りにも白々しいその言葉に、一夏から発せられる怒気が一段と濃くなる。

「そう、見えるなら、今すぐ眼科行け!!!」

怒りに震えるあまり、一夏の言葉は途切れ途切れになって発せられる。それを見て楯無はますます笑みを深めた。

「あああら、怒ったかな？フフン、いいわ。私はIS学園生徒会長更識楯無。君がそう来ると言うのであれば、私はそれを真っ向から受けて立ちましょー」

そう言っつて楯無は一夏を迎え撃つ姿勢を取る。突然の事態を茫然と

見ていた生徒達は、どのような状況下を理解し、再び湧きあがる。

学園最強の称号を持つ生徒会長と、既に一部の武道系部活の間では猛者として名の知れ渡っている一夏の突然の手合わせ。イベントに続くイベントに、生徒達のテンションは急上昇をする。

「あの、会長……」

壇上袖に立っていた生徒会の生徒が楯無に声を掛ける。眼鏡の奥のその瞳には、予定外の事態への困惑がありありと浮かんでいる。そんな彼女に楯無は安心させるように微笑みかける。

「大丈夫よ、うつほ虚ちゃん。まあ見ていなさい」

虚と呼ばれた生徒はなおも心配そうな視線を楯無、そして臨戦態勢の一夏の双方に向けるが、両者の雰囲気口を閉ざすより他ない状態になった。

「さあ、お手並み拝見といきましょう。織斑一夏君？」

その言葉に一夏が楯無へと向ける怒気を殺気へと変換した。それと同時に昂っていた一夏の気が静けさを取り戻し、同時に鋭さを増すのを楯無は肌で感じ取る。

(これは、思った以上かもね)

内心で楯無は冷や汗を流す。さすがはあの人物の愛弟子と言つべきか。いつそ見事と呼べる自己の気の制御だと思つ。

これがIS戦であれば、楯無は自らの勝利を疑わなかつただらう。油断慢心をするつもりもないが、同時にそれだけの自負を持っている。

しかし、今は生身での勝負。目の前の少年の本領が剣ということは知っているが、だからと言って無手の状態を軽んじることはできない。

(どうしよ。ちょっと楽しくなってきたわ)

誇張でも自惚れでもなく、厳然たる事実として楯無は学園に在籍する生徒全てに、IS戦であろうとなかろうと完全な勝利を収める自負がある。

知る者はごく少数でしかないが、自由国籍権を持ち、大国の一つであるロシアの国家代表を務め、そして長きにわたり国の暗部を担ってきた一族の当主という肩書は伊達ではない。

そんな自分に生身での格闘に限る話とはいえ、比肩しうる存在。その登場に、自然と楯無の心は高揚を感じていた。

一夏と楯無の視線が交差する。一夏の表情は険しく、楯無の表情は対照的に笑顔を浮かべている。しかし、二人が互いに向ける視線は共通して鋭いものになっている。

「……………」

いつの間にか講堂内は静まり返っていた。あれほど騒いでいた生徒達も固唾を呑んで二人の一挙一動を見守る。

二人がゆっくりと構えを取る。沈黙。そして同時に動きだした。

二人は互いの距離を一瞬で詰める。そして同時に拳を突き出し、交

差ししようとする瞬間

ガシッ

「いい加減にせんか、馬鹿者どもが」

突き出された二人の拳は、一瞬のうちに割り込んだ手により掴まれ、その動きを阻まれていた。

同時に投げかけられる呆れたような声。その声に楯無も一夏も臨戦思考から我に返る。そして声の主が誰かを理解し、固まる。

「このような場で喧嘩騒ぎを起こそうとは、私の目の前で大した度胸だな、貴様ら」

「お、織斑先生……」

楯無が気まずそうな声で自分と一夏を止めた存在、千冬の名を呟く。学園最強の彼女ではあるが、その彼女ですら千冬には逆らえないのが現実であった。

「……」

そして一夏は無言。正気に戻ったその表情が何を語るか。一言で言い表すならばこうだろう。即ち、「ヤベエ」

「ふん」

鼻を鳴らして千冬は楯無の腕だけを話す。そして一夏の方を向く。

「え〜と、その…」

「さて、織斑。まあ貴様の怒りも分からんでもない。ないが、さすがに看過はできんな」

その言葉と共に千冬は空いた手で一夏の頭を鷲掴みにする。

「　　ツツツ!!?」

掛けられたアイアンクローに一夏は声に鳴らない呻き声を上げる。目の前で繰り広げられる惨劇に楯無を含め生徒一同、背筋が凍りつく思いを抱く。

「さて、更識」

一夏にアイアンクローを掛けたまま千冬は楯無に向き直る。未だ苦悶の呻きを上げる一夏を見て、或いは自分もこうなるのではないかと楯無は戦慄を抱く。

「まあ、織斑が先に暴れ出したのが始まりだが、今回の騒動の原因の一端は貴様にもある。確かに学園は今回の企画を認めた。だが、当事者である織斑に通達を怠った結果がコレだ。今回はここまでにしてやるが、次にこのようなことがあつたら、平等に折檻をくれてやる。いいな」

圧倒的気迫と共に放たれた言葉に楯無は黙って首を縦に、弁舌を振るっていた時の悠然とした態度から掛け離れた、焦った様子でブンと力強く振る。

「ブン」

そして千冬は一夏の頭を掴んでいた手を離す。頭部の圧迫から解放された一夏はそのまま崩れ落ちる。その体は小刻みに震えており、千冬によって刻まれたダメージの大きさを示していた。

そのまま千冬は集会を終えるように指示すると、壇上を下りる。壇上を下りた千冬は一組の列に近付くと、手近にいたシャルロットとラウラに一夏を運ぶように指示すると、教職員の並ぶ列に戻って行った。

「そ、それではこれで全校集会を終了します。教職員から講堂を出て下さい」

その言葉で集会は終了する。教職員を始めとして、講堂の出口に近い生徒から順に出ていく。

出ていく生徒達はざわついてこそいたが、そこに先程までの興奮はなく、目まぐるしく動いた事態に困惑している様子が見受けられる。

こうして、全校集会はどこか締まりの無いまま終わりとなった。

そして壇上に倒れた一夏はシャルロットとラウラに肩を担がれる形で教室に戻り、丁度教室に入ったところで意識を覚醒。

以後数時間に渡り、頭を締め付けるような頭痛に悩まされることになった。

第四十八話（後書き）

とりあえず今回はここまでです。

あんな発表をされて黙って流されるほど、ウチのICHIKAは甘くはありませんでした。

千冬の武力介入に鎮圧されましたが。

今回はクラスの出し物決めと、楯無との本格手合わせをやりたいと思います。

…多分…

とある方の感想を読み、ヒロインの内面描写が足りないと思ったので、もしかしたら番外編的な扱いで、ヒロインズの一夏への思いを描いた短編を書くかもしれません。

いや、作品の足りない部分を指摘して下さい、大変ありがたい感想でした。

それでは、また次回にお会い致しましょう。

第四十九話（前書き）

やっと書けた…

予備校の夏期講習や模試が大変で…

センター形式の模試を一日でやるとか、体力気力が持ちません。

今回の話、反応がちょっと怖いと思いつつも、上げました。

第四十九話

放課後の一年一組、常ならば終業と同時に教室を出て、部活なりＩＳの自主練習なりをする面々により人数の少ない教室ではあるが、この日に関しては違っていた。

生徒は全員教室に残り、そして教室の前方、教壇の上には一夏が立っている。隣にはシャルロットが立ち、二人の背後の黒板にはいくつかの文字が書かれている。

この日は放課後を一部利用して特別のＬＨＲを行い、来たる学園祭へのクラスの出し物決めを行っていた。

クラス代表である一夏はこうした状況で、クラスを取り纏める委員長としての役割も持っていたため、教室の前に立っている。

そして隣に立つシャルロットは一夏一人に仕事をさせられないと、自分から補佐を申し出たため、今の状態にある。

補足すると、シャルロットが申し出た際に箒とラウラも名乗りを上げたが、教室に居ない千冬に変わりクラスの監督をしている真耶の、「デユノアさん一人で十分ですよ」という言葉にあえなく断念。一夏の補佐を拝命したシャルロットは嬉々として一夏のサポートに努めた。

教室の大半の生徒の顔には一様に笑顔が浮かんでいる。ただし、箒とラウラは少しむくれ気味だ。教壇に立つ一夏も、朝の千冬によるアイアンクローの残留ダメージから回復し、笑顔を浮かべている。

一見すれば、一大イベントである学園祭の出し物決めということ、全員の心が楽しみを感じていると見えるこの光景。

しかしよく観察するとその光景、正確には笑顔から放たれる違和感を感じることは確かである。

「さ、て、と」

笑顔を浮かべたまま一夏が口火を切る。何故か言葉はゆっくりだ。そして一夏が口を開いた瞬間、席に座ったままの生徒達の背筋が僅かに固まる。

「今度の学園祭、うちのクラスの出し物決めに当たって、みんなに案を出してもらったわけだが」

笑顔と共に語る一夏の声は明るい。しかし、その声には何故か威圧感が含まれていた。

よく見ると、一夏は笑顔を浮かべながらも、そのこめかみに青筋を立てている。

クラスの面々の笑顔もどこかぎこちない。微妙に強張った笑顔はまるで、ばれた悪戯をごまかす子供のようなものだった。

教室の隅に立つ真耶も、どこか困ったような乾いた笑みを浮かべている。

一夏は背後の黒板に向き直る。そして

「何コレ。ふざけてるのか？」

笑顔を一気に冷たい無表情に変え、冷えた声色で言う。

黒板に書かれた内容、それは一夏の指示で幾人かの生徒が提示した出し物の内容だったが、その内容が問題だった。

『織斑一夏とポツキーゲーム』

『織斑一夏とツイスターゲーム』

『織斑一夏とツーショット。君達、IS学園で俺と握手!』

一夏を出汁にする気満々の内容。一夏の機嫌が悪くなるのも無理の無い話というものである。

一夏は再度クラスの方を向くと、無表情でただ一言を言う。

「却下だ」

その言葉と共に、黒板の文字を一気に消し去った。直後、教室のあちこちから不満の声が上がる。

「えー!?なんでー!?!」

「議長!異議あり!」

「せつかくの織斑君なんだから、目玉にしなきゃ意味ないじゃん!」

「織斑君はクラスの共有財産なんだから!有効活用しなきゃ!」

口々に不満の声を上げるクラスメイトに一夏は軽いため息を吐く。そして軽く俯くと、そのまま片手で教卓を力強く叩いた。教室中に響き渡る大きな音に、喧騒が一気に静まり返る。

「全く、お前らときたら…」

腹の底から響くような一夏の声に、一組の面々は揃って「しまった」と言いたげな表情に変わる。

そんな彼女らの様子などお構い無しに一夏は続ける。

「さつきから黙って聞いてりゃ、好き勝手抜かしやがって。それにさつきの言葉。俺の耳には、『是非織斑君とブレオンでガチの模擬戦をやりたいです』って聞こえたんだけど、そこんところうなんだ？ん？田島さん、リアーデさん、それに葉山さん？あ？」

名前を呼ばれた生徒が慌てて首を横に振る。

一夏がこれまで行ってきた模擬戦などを通じ、今や一夏は近接戦闘において一年最強、学園屈指と目されており、代表候補クラスでなければ一夏に近接戦を挑むのは愚行とまで言われる程になっている。

そんな人物相手にブレードオンリーでガチンコ勝負など、どんな苛烈で容赦の無い攻撃が浴びせられるか分かったものではない。試合となると一切の手加減をせずに、相手を倒しにかかる一夏の性格を一組の面々は熟知しており、更には先立って行われたとある模擬戦で、二年生をボコボコにした挙げ句、医務室送りにしたという事実も広まっている。

名前を呼ばれた三人、一組でも率先して一夏を出汁にしようとする提案や発言をした彼女らは、一夏の苛烈な剣技の前に自身が打ちのめされる光景を想像し、背筋を震わせる。

そして名前を呼ばれた三人を見遣りながら、他の面々は自分が迂闊な発言をしないよう気をつけることにする。

普段こそ比較的穏和だが、時折、特に最近になって千冬のような威圧を放つことが顕著になった一夏は、千冬に次いで一組の生徒の大半から怒らせてはいけな存在として見られていた。

『やっぱり織斑先生と織斑君って、姉弟なんだね』

誰が言ったか、その言葉は彼女らの心情を的確に表すと共に、今の一夏に対するクラスの大半の評価になっていた。

そしてクラスが落ち着いていたのを確認した一夏は、怒気を収めるとため息を再び一つ。

どこか疲れたような様子でポツポツと語り出した。

「別にさ、俺だってクラスの出し物に参加することに異論はないよ。俺の珍しさとか、それを利用した集客性とかも理解はしてるし、必要だって言うなら協力もするさ。けどよ、アレはさすがにねえだろ。俺一人じゃねえか。流石に無理だろ。頼むから真面目に考えてくれ。もうこちとら朝のアレで、学園祭に軽くダウン入りそうなんだし」

もはや愚痴のごとくブツブツと一夏の口から紡がれる言葉に、一同の表情が苦笑いに変わる。朝の一件は当然ながら彼女達も一部始終を見ており、目の前でため息と共に愚痴を吐き出す一夏の姿に、少し同情を禁じ得なかったりする。

「あーオホンツ、それでだ。他に案のある奴、居ない？」

気を取り直すように一度咳ばらいをした一夏が再度クラスに問う。しかし、拳手をして発案をする者は中々出てこず、一夏は何度目に

なるか分からないため息を吐いた。

「お前ら…俺を出汁にする以外の案を、本当に持っていないのかよ…」

そう呟く一夏の声には、もはや呆れを通り越し悲壮感すら漂っている。

一応、クラス的面々も何か案は無いかと思案しては居るのだが、これと言えるものが思い付かずに居た。

このまま議題は難航するかと思われた矢先、予想だになかった人物から提案がなされた。

「兄様、喫茶店はどうだろうか？」

そう言ったのはラウラだった。

俯いていた顔を上げ、ラウラの方を向いた一夏を確認してラウラは続ける。

「その、知り合いに聞いたのだが、この国では『こすぶれ喫茶』というものがあるらしいな。だから、それはどうだろうか？衣装は、私いやシャルロットにツテがある」

ラウラの言葉に、「そうなの？」と一夏はシャルロットに確認を取る。

シャルロットは何故かラウラを見遣りながら笑顔を浮かべて頷いた。

「喫茶店、ねえ…。まあ、アリじゃないか？みんなはどう思う？」

問い掛ける一夏に教室のあちこちから賛同の声が上がる。

喫茶店。学園祭の定番と呼ぶべき出し物であり、さしたる目新しさなどこそ持たないが、安定した需要から確かな収益を見込める。

クラス全体が喫茶店に賛同の空気に変わるのを見ながら、一夏は思考の内で『喫茶店を経営するに当たっての計画』を構想する。

（衣装はラウラとシャルに任せて、肝心の飲食物も…なんとかかなかな）

「よし、静粛に。じゃあ、うちのクラスは喫茶店でいいな？」

一夏の言葉に全員が揃って頷く。

「じゃあ、少し早いかもしれないが、概要だけでも簡単にまとめるぞ。衣装はラウラとシャルに任せる。本番の際、接客と厨房、そしてフリーはローテーション。全員が均等に役が変わる。いいな？」

「え〜と、私的には織斑君には接客でちょっと頑張ってもらいたいな〜って」

「さて、アリーナの使用許可はと…」

「すみません何でもないです」

口が滑ったのは一夏の座る席の真後ろの生徒、鏡ナギだった。

一夏の視線と言葉ですぐに彼女は前言を撤回。それを確認すると、一夏は言葉を続ける。

「肝心の飲食物だが、まあそこまで気を張る必要もないだろうな。

今じゃ少しネットで調べればすぐに色々出てくる。よし、決まりだ」

そう言つて一夏は両手をパンと鳴らすと、議題の締め括りを告げる。

同時にクラス長としてLHRの終了を宣言。これで一組は正式に放課となったため、生徒達は席を立ち各々の行動に移る。

「つたく、結構時間を食つちまつたな」

教室の壁に掛けられた時計を見ながら一夏がぼやく。

予想外に長く掛かったLHRにより、通常の終業時刻よりも1時間遅い放課になった。

「ねえ一夏。この後どうする？」

シャルロットが一夏に近寄り、今後の予定を尋ねてくる。

「ん？とりあえず千冬姉に出し物が決まつたつて報告して、後は適当かな」

「えっと、それじゃあさ。晩御飯、一緒に食べない？」

「いいぞ」

特に断る理由も無いため快諾した一夏に、シャルロットは笑顔を浮かべる。

それから一夏は教室を出る。それを見送ったシャルロットは小さくガッツポーズを浮かべた。

なおこの時、二人のやり取りを見ていたほど篤は、出遅れた自分をひたすらに悔しがっていた。

教室を出た一夏はまっすぐに職員室へ向かった。

そして現在一夏は、職員室の割り当てられたデスクに座る千冬の前に立ち、クラスで決めた出し物の報告をしていた。

「と言うわけで、一組の出し物は喫茶店になりました。まあ、個人的には無難なチョイスですね」

「そうか。だが、ただの喫茶店ではないのだろうか？」

一夏の報告に千冬は探るような返しを入れるが、当の一夏は涼しい態度で答える。

「ええ。いわゆるコスプレ喫茶ってやつですよ」

その言葉に千冬は、やはりかと言いたげに額に手を当てる。

「別にいいと思いますけどね。少なくとも、俺を出汁にする気満々の企画よりかは」

「まあ、節度さえ守れば学園こちらは何も言わんがな。で、発案は誰だ？ 大方、田島やリアーデ辺りの騒ぎたい連中だろう」

千冬の言葉に一夏は首を横に振る。

「いやそれがですね。ラウラでした」

「なに？ ポーデヴィツヒがか？」

「はい」

一夏の言葉に千冬は呆けたような顔をする。そして突然、大口を開けて高らかに笑い出した。

「ハツハツハツハツ！ ポーデヴィツヒが喫茶店を提案だと？ こいつは驚いた！」

普段の厳格さからは想像もできない様子で大笑いをする千冬と、その前に立つ一夏に部屋中の視線が集中するが、二人はまるで気にする様子を見せない。

「まあ、意外というのは俺も同感ですけど。そこまですかね？」

一夏の問いに千冬は何とか笑いを抑えると、目の端に浮かんだ笑い涙を指で払いながら答える。

「当たり前だ。私は昔のアイツを知っているからな。いや、昔のアイツからは想像もできん。そうか。アイツも学園に来て変わってきたというわけだ」

千冬の言葉に一夏も口の端を吊り上げて、同意する。

「まあ、俺は昔のラウラを知らないですがね。最初はあれだけ固かったやつに、まさか兄と呼ばれるとは思いませんでしたよ」

「結構じゃないか、ん？せいぜい兄らしく振る舞え」

そこで二人は一度言葉を切る。話が脱線してしまったため、軽い咳ばらいと共に元の話題に戻る。

「さて、出し物のことは了解した。このプリントに計画や必要物資、予算などを書いて提出しろ。一週間前には出せ」

その言葉と共に千冬は一夏に一枚のプリントを渡す。枠線で区分けがなされているそのプリントの各所に、出し物の内容や計画、必要な物資や予算を書き込むのだ。

受け取ったプリントを手に掲げる鞆に仕舞うと、一夏は千冬に一礼をしてから職員室を辞そうとする。

「ああそうだ、織斑」

「はい？」

何かを思い出したような千冬の呼びかけに、一夏は再び千冬の方を向く。

「いやなに、その学園祭だな。基本的に一般客の来場は不可だが、生徒一人一枚配られるチケットがあれば、一般客でも来場はでき

る。誰を招待するのか、よく考えておけ」

「了解」

そして改めて話を終わらせた一夏は、今度こそ職員室を出る。

一度荷物を置いて、夕食時にシャルロットと合流するまで自主トレをしようかと考えながら寮へ向かおうとした足は、職員室を出た直後に止まることになった。

「やあ」

片手を上げながら、気楽な様子で一夏に挨拶をする生徒。それは朝の騒乱の元凶、IS学園生徒会長更識楯無だった。

その顔を認識した瞬間、一夏の顔が一気に不機嫌に歪む。

朝の騒乱、その一連の状況の元凶である彼女は、一夏にとっては怨敵のような存在だった。

誰か個人に対しこれ程の怒りを抱いたのは何時以来だろうと、一夏自身驚くほどであった。

楯無を睨みつけたまま一夏は、静かに肘から下だけを動かせるようにする。不意打ちで一撃ぶちかまさなければ気が済まないという心境だった。

「おっとストップ。流石にここじゃマズイよ？」

しかし、楯無は一夏の攻撃準備を察知し、事前に止める。

忌まましげに一夏は舌打ちをすると、動かそうとした右腕を納め、怒りをあらわにした声で楯無に話し掛けた。

「よく俺の前にそのツラを出せたもんだな？」

「あら、やっぱり怒ってる？」

朝の集会同様の白々しさを感じる物言いに、一夏は怒りを通り越し呆れすら感じた。

「あれで怒らない奴がいたら、そいつは余程の馬鹿だな」

「それは困ったわね。どうしたら許してくれるかしら？」

「なら一発、その横っ面に飛び膝蹴りを叩き込ませろ」

「それは流石にお断りするわ。そんなことされたら、か弱い私は死んでしまうもの」

飄々、あるいはのらりくらりとした楯無の物言いに、一夏は言いよ
うの無い苛立ちを感じる。

どうにも流れを掴みにくい。それが一夏が会話をしながら思ったこ
とだ。

「あんたは一辺死んでくれた方が、俺の精神的安定にいいが。…ま
あいい。用はなんだ」

このまま会話を続けても無益と判断した一夏は、早々に用件を聞き、
手短かに会話を終了させることを選択した。

「そうそう。君にちょっと用があってね。朝のお詫びも兼ねて、生
徒会室でお茶に招待しようと思うのよ。どうかな？って、無視しな
いで行かないでくれるかなー？」

楯無を無視して脇をすり抜けようとする一夏の肩を掴む。苦笑いを浮かべている楯無に一夏は半眼で胡散臭そうな視線を向ける。

「お断りで」

「いやいや、そんなツレないこと言わないでよ。ね？」

「あんだ、逆ナンの趣味でもあるのか？」

「いや、違うって…って、そうじゃなくてね。お話があるの！とっても大事なお話があるの！だから、ね？お願い！」

両手を合わせて頼んでくる楯無に、一夏は片手で後頭部をかくとため息を吐く。

「つまらない話なら帰るから」

「それなら大丈夫。君にとっても有益な話だからね」

一夏の了承に楯無は一気に調子を戻す。

軽いウインクを浮かべた表情から、不敵な気配を感じ取った一夏は、やはり無視するべきだったかと自分の選択を少し後悔した。

「時に一夏君？」

「あ？」

生徒会室へ行く道中、後ろを歩く一夏に楯無が話し掛ける。

「え〜とね、一応おねーさんの方が先輩だからね、その〜」

「敬語は却下だ」

「まだ言っていないんだけどな〜」

「払う敬意を抱く気にならねえんだよ。敬意を払って欲しけりゃ、相応の振る舞いをしやがれ」

取り付く間も無い一夏の言葉に楯無は軽くうなだれる。

確かにちよつとふざけ過ぎたかな〜と思いましたが、まさかここまでつっけんどんな態度を取られるとは予想をしていなかった。

しかも自分に向けられる一言一言に妙な威圧が込められている。脅威と感ずるほどでもないが、少しばかりやりにくさを感じるのが本音だった。

（織斑先生そっくりって噂は聞いてたけど、本当にそうね）

軽い態度の振る舞いをしながらも、楯無は思考の片隅で冷静な自身を働かせる。

一夏絡みの行動は前々から計画を練っていたが、どうやら少し腰を

据えて実行に移さなければいけないらしい。

（あの人の言う通り、下手したら私が食べられちゃうわね）

心の中で楯無は己を引き締める。その矢先、楯無は一つの気配を感じる。離れた所から向かってくる、それは殺気。

後ろに意識を向けると、自身同様に殺気を感じ取ったらしい一夏が眉を顰めている。

そして

「覚悟おおおおお！！！」

そんな雄叫びと共に、前方から竹刀を持った生徒が楯無めがけて突撃をしてきた。

「な、なんぞコレ…?」

戸惑う様子を見せる一夏に、楯無は余裕の表情と共に語りかける。

「一夏君、悪いけどちょっと時間もらうよ?」

そう言うと楯無は手にした扇子をクルクルと回しながら、突撃をしてくる剣道少女に歩み寄る。

「ほっ、と」

竹刀の間合いに捉えた剣道少女が楯無に渾身の一撃を振りおろす。

楯無は手にした扇子で竹刀を軽やかに受け流すと、そのまま相手の顎に掌底を打ち込む。

顎への一撃で脳を揺らされた生徒はそのまま、竹刀を手放して倒れこんだ。

「ふむ、まさかこつも早く動くなんてねえ」

「で、これは一体何だ？」

一人納得した様子で頷いている楯無に、一夏が無然とした様子で問いかける。楯無は一夏に向き直ると、至極なんともないと言った様子で話す。

「生徒会長は学園最強。この不文律は知ってるかな？」

質問に質問で返されたことに、一夏の眉根に刻まれた皺が深まるが、文句をつけても仕方ないと判断したのか一夏は黙って頷く。一夏の答えに楯無は満足そうな表情で続ける。

「実はこれに付随する感じで他にもルールがあつてね。最強である生徒会長には何時でも挑戦可能。そして勝った者は新しい生徒会長になれる。こついうこと」

「ほお…」

「さて、悪いけどちょっと待ってくれる？なんだか第二派が来るみたいだから」

その直後、二人のすぐそばにある窓、開かれたソレから幾本もの矢が飛び込んでくる。学園に入学してから数カ月。初めて見る突拍子もない光景に若干苦笑いを浮かべている一夏は飛んでくる矢を軽々

と回避をしながら窓の外を見る。窓の外、直線距離で20m程先に弓道着を纏った生徒が数人、弓を構えて矢を放っている。

「フン！」

とりあえず一夏は窓を閉めることにした。セキュリティの一環で学園の窓ガラスは全て防弾仕様になっている。これにより、弓道部による矢の斉射は阻まれることになった。

しかし、状況がこれで終わりということにならなかった。矢の攻撃が止み、廊下の安全が確保されたからか、廊下の前方と後方の双方から幾人もの生徒が突撃をかけてくる。

竹刀を持つ者、槍を持つ者、バールのような物を持つ者、さらには無手で挑もうとする者など様々である。

「おい、こりゃ一体どうなってやがる…！」

苛立たしげに言う一夏に楯無は困ったように言う。

「多分アレだね。今朝の企画だよ。部活展示の勝率が低いと見た武道系の部活が刺客を送り込んだってところかな。企画者の私を会長の座から引きずり降ろして企画を白紙。さらに会長権限で君を自分の部活に入れようって魂胆」

「つまりあなたが原因じゃねえか!？」

「あらそう?君もその一端だと思うけどな」

「嘘つけ!あなたがあんなアホな企画したからだろうが!!」

怒鳴る一夏とそれを受け流す楯無。そうこうしている内に襲撃者は二人への、正確には楯無への距離を縮めていく。それを見た一夏は舌打ちをしながら楯無に言う。

「とにかくだ。この状況を何とかしろ。俺も手伝う」

「あら意外。別に見ててもいいんだよ？」

「イラついてんだよ。ちつとはウサ晴らしをさせる」

「なら、ちょっとお願いしちゃうかな」

そして二人は背中合わせに立つ。楯無は前方の集団、一夏は後方の集団とそれぞれ向き合う。そして、学園の一角で僅か数分足らずの乱戦が始まった。

「やっぱり刀有りの方がいいよな……」

ぼやくように呟く一夏は足元に目を向ける。そこには一夏が相手取った生徒達が苦悶の呻きを上げながら倒れ伏している。呻いている様子から、気を失っている者は少ない。

逆に楯無が倒した生徒は一樣に気を失っており、彼女の周囲は実に静かだ。

「やっぱり、いまいち下手だよな。無駄に意識を残させちまうあたり」

「いや、私としては君のえげつなさの方が目に付いたけどね。肘打ちに膝、更には貫き手。そして狙うは大抵鳩尾。思わず同情しちゃうわ」

腕や足を動かしながら調子を確かめるように首を傾げる一夏に、楯無は苦笑いを浮かべる。

(でも、本当に大したものよね…)

内心で楯無は呟く。乱闘の最中、一夏は一撃たりとも攻撃を受けることはなかった。どの攻撃も全て正確に対処し、着実に相手を沈めていった。

(彼の制空圏も完全に見えた。いやホント、大したものだわ。素手でもあれだけなんて。得物を持たせたらどうなるのかしら)

一夏の実力の全容は楯無も知らない。IS戦であれば確実に勝てる自信があるが、それと生身では話が別だ。

(とりあえずは、なんとかしてコチラの流れに乗ってもらわなきゃね。少し、気合いを入れていかせてもらおうよ)

「さ、一夏君。もう襲撃者も居ないし、生徒会室に行きましょう？」

そう言って楯無は先を歩く。一夏も黙ってその後に続く。そして二人は生徒会室に辿り着いた。

「いや、まさかのほんさんが生徒会に入ってたなんて知らなかったよ」

「そう言えばおりむーには言ってなかったもんね」

そう言っで一夏と本音は生徒会室にある机に座りながら紅茶を飲む。二人の前には切り分けられたケーキが、意匠の凝らされた皿と共に置かれている。

生徒会室に入った一夏がまず最初に目にしたのは、机の一つでダレた状態になっている本音と、それを窺っている一人の生徒、朝の集会で司会を務めていた生徒の姿だった。

「フフ、あだ名で呼び合うなんて、仲がいいのね」

笑顔でそう言いながら一夏のカップに二杯目の紅茶を注ぐのは、先

ほど本音を窺っていた生徒だった。名を布仏のほとけ 虚うつほ。三学年に在籍する生徒会の会計担当である。

「それにしても、姉妹揃ってどうして生徒会に？」

「それはですね、私達姉妹の家、すなわち布仏家は代々会長の御実家である更識家に仕えているのです」

「生徒会長は最強でなければならぬ。でも他の役員に関しては制限がないからね。昔から私に仕えてくれた二人を役員に選んだのよ」

「へ」

虚の言葉に楯無が付け加える。それを一夏は紅茶を飲みながら聞く。

「で、会長さんよ。わざわざ俺を呼びたてた要件とはなんだ？」

先ほどまでの談笑で浮かべていた穏やかな表情を一気に消し、冷めた視線を一夏は楯無に送る。

「もう、そんなに怖い顔をしないで頂戴な。ちゃんと話すから」

そう言って楯無は一夏の向かい側に座る。

一夏の顔を真正面から見据える楯無の顔に浮かぶのは笑顔。しかし一夏の鍛えられた第六感は、その笑顔から嫌な気配をはっきりと感じ取っていた。

「一夏君。私があなたの専属コーチになるわ」

「は？」

楯無の口から出てきた予想外の言葉に、一夏表情が呆けたものになる。

それから数秒、一夏は固まる。そして、言われた言葉の内容を理解した一夏はただ一言を言った。

「要らん」

「いきなり断るなんて、おねーさんちよつと傷付いちゃうんだけどな」

「知るか。勝手に傷付いてる」

そう言って一夏は席を立つ。そのまま部屋を出ようとする一夏を、慌てて楯無は引き止める。

「待った待った。せめて理由くらいは聞いて行ってよ。ね？」

肩を掴まれた一夏は胡散臭そうな視線を楯無に向けるが、理由を聞くくらいは良いだろうと判断して、再び席に着いた。

「フフ、ありがとう。素直な子はおねーさんは好きよ？」

「御託はいい。早く話せ」

楯無のからかいをバツサリと切り捨てて一夏は話を促す。

そのことに特に気を悪くした風もなく、楯無も席に着き話し始めた。

「さて、ちょっと真面目に行きましょう。一夏君。聞けばあなたは毎日放課後にアリーナでISの自主練をしているらしいわね？そこに一年の専用機持ちもよく加わって。とても結構だわ」

楯無の言葉は事実である。特に部活に所属していない一夏は、放課後は毎日ISの自主練を行っている。時折、部活に折り合いをつけた他の専用機持ち達が加わっている。

ちなみに、一番参加比率が多いのは箒とシャルロットの両名である。シャルロットが所属する料理部は比較的緩い同好会に近い部活であるため、特に問題は無い。しかし、箒は一夏の訓練の参加のために半ば幽霊部員となっているのが実情だった。

そしてこのことを一夏は知らない。訓練時は訓練に集中しているため、そこまで気を回していなかった。

更に一夏はアリーナの使用時間が過ぎた後は、一人で生身での修練も行っている。

これらのことにより、一夏の学園生活において、暇な時間はほとんど修練に当てられているのが現状だ。そして、修練に集中し過ぎたせいで、座学の方で危機感を感じ出し、また真耶に補講をしてもらおうかと考えているのはここだけの話である。

閑話休題

楯無は一夏の修練を結構なことだと評し、その上で言った。

「でもね、足りないのよ。確かに今の訓練でも君は強くなる。でも、それでは遅い。はつきり言ってまだまだ弱いよね」

瞬間、生徒会室の空気の温度が下がったような錯覚を、二人の傍らで話を聞いていた虚は感じた。ちなみに、彼女の実妹である本音は机に突っ伏し、夢の世界へ旅だっているため、今の状況を理解していない。

「中々、愉快的な台詞だな」

静かに言う一夏。しかし、その言葉には紛れも無い怒気が込められていた。それも激昂するような怒りでは無い。抜き身の刃のような鋭利さと冷たさを孕んだ怒りだった。

常人ならば背筋を凍り付かせ、恐れおののくだろう一夏の怒気を前に、楯無は余裕の表情を崩さない。

「事実よ。確かに君はそこそこにはデキるわ。でも、私からしてみればまだ足りないのよ。必要な、実力の向上が。だから私がコーチをしようというわけ」

「学園最強なんて言われてるアンタからしてみりゃ、全員弱いだろうが。成る程、弱いから鍛える。実に道理だよな。なら、俺一人の専属じゃなくて、学園の生徒全員を平等に鍛えてみるよ。それなら必然的に俺を鍛えることになるだろうよ」

「それができるならそうしたいけどね。できないからこそ、君を鍛えようってわけ」

一夏は座ったまま目を閉じる。考え込むような姿で数秒。そして目を開けた一夏は黙って席を立つ。

「やっぱり却下」

「どうしてかしら？私がこう言うのもなんだけど、私の直接指導を受けることは、君にとってプラスになるはずよ？」

「だろうな。俺もあんたの実力は認めるよ。学園最強も、伊達じゃないだろう。確かに、あんたの指導を受けるのは俺にとってはプラスだ」

けどな、と前置きをしてから一夏は続けた。

「信用がならねえんだよ」

信用。それこそが一夏が楯無の申し出を断った理由だ。

朝の騒動もあり、一夏は楯無に良い思いを抱いていないというのが現実だ。私怨と言えばそれまでだが、それこそが一夏にとっては大きな理由だった。

「師弟とは互いに信頼し合うもの。俺はそう考えてる。だから、あんたを信用できない俺はあんたの指導を受けられない。例えゆっくりでも、結果的に強くなるなら、自分で信頼できる選択をするさ」

（これは…ちよつと参っちやっただな〜）

一夏の言葉に内心で楯無は困り果てる。

正直、一夏の言葉が予想外だったのだ。一夏のこれまでを調べた楯無が予想した一夏の人物像は、どこまでも強さに貪欲な人物というものだった。故に、早く強くなれるなら自身の申し出をすんなり受け入れるかと思った。しかし、実際はこれだ。

実際楯無の見立て通り、一夏が強さに貪欲というのは間違いではない。

一夏とて、より早く強くなる選択があるなら、それを迷わず選ぶだろう。しかし、今の一夏にはそれ以上に楯無への不信が強かった。例えその大半が私怨込みでもだ。

どうしたものかと楯無は悩む。状況の打破への糸口は一つ。一夏の楯無への不信を解くこと。

どうする。思考をフル回転させる。恐らく一夏の楯無への不信の原因は朝の一軒だろう。千冬に指摘された通り、一夏を怒らせたことは楯無のミスだ。

生徒会長として、学園祭のイベント性を高めるための企画だったが、僅かに詰めを誤った。それが今の状況を引き起こした。

(仕方ないわね)

楯無は腹を括る。一夏には自分の指導を受けてもらい、早急に強くなってもらわねばならない。そうしてもらわねばならない理由がある。

だからこそ、楯無は自分にできることを全てすることにした。

「お願い。私を信用して」

そう言って楯無は頭を下げた。虚は驚くような表情を浮かべている。一夏もまた、予想もしていなかった楯無の行動に目を見開いた。

それからしばらく、無言の状態が続いた。

「これさ、俺が悪者な雰囲気じゃないか？」

そんな一夏の言葉に楯無は頭を上げて一夏を見る。その表情からは、先程までの怜悯な色は無かった。

「まさか頭を下げてるなんて思わなかった。ウン」

一人頷く一夏。そして言った。

「まあ、なんだ。頭を下げるくらいだから、その、本気なのは理解した。いいよ、ご教授賜ってやる」

挑戦的な言葉だったが、紛れも無い了承の言葉に楯無は安堵する。しかし、一夏の言葉は続く。

「一つ確認したい。あんたは俺のISのコーチをするんだよな？」

「ええ。そしてオマケとして、生身の格闘戦のコーチもしてあげるわ。お得でしょ？」

その言葉に一夏は再び視線を険しくする。

「ISに関してはいい。けど格闘戦のは、できるのか？」

探るような一夏の言葉に楯無は悠然と返す。

「勿論。私はIS学園生徒会長更識楯無。ならば、そのように振る舞うだけ」

その言葉に一夏は鼻を強く鳴らした。

「なら、見せて貰いたい」

「何をかしら？」

「無論、あんたが俺の格闘戦のコーチたるか否かをさ」

挑むような一夏の視線。それを楯無は真っ向から受け止めた。

それから数分の後、一夏と楯無の姿は学園の一角にある道場であった。

校舎に近いこの道場は、学園に複数ある道場施設の一つであり、主に柔道や空手などの部活により使用される。ちょうど今日は空いていたため、二人の手合わせはこの道場で行われることになった。

道場には一夏と楯無の二人しか居ない。虚は別件での生徒会の仕事があるため、席を外した。本音は寝ぼけ眼を擦りながら寮へと戻った。

向かい合う二人は平素の学園制服。最初は胴着での手合わせを楯無が提案したが、一夏の不要の言葉により制服のままで行われることになった。

「さて、勝敗の決め方だけだ」

「そんなの、どっちかがダウンするまででいいだろ。元より、武つてのはそういうモンだ」

「そうね」

余計な決め事は不要。ただ、どちらかが倒れるまで二人は戦うことにする。

既に二人が放つ気配は鋭く、まさに一触即発の状態だった。

そして二人は構える。一夏の構えは首をすくめ、両手を頭と同じくらしいの高さまで上げるタン・ガード・ムエイ、ムエイの基本の構え。楯無は両腕を前方に出した「前羽の構え」と呼ばれる、空手において高い防御力を持つ構え。

互いに構えたまま、相手を見据える。両者とも相手が展開する制空圏を認識し、それを如何にして侵し突き崩すかを思索する。迂闊に飛び込めば迎撃され、反撃を受けるのは必至。故に、擦り足で少しずつ動きながら、距離を少しずつ縮める。

そして、状況は突然に動き出しす。

先手を打ったのは一夏だった。

逸足による高速移動で楯無に接近。一気に距離を詰めると同時にテイクアウト、ムエイの跳び膝蹴りを放つ。

対する楯無は突き出した腕を使い、一夏の攻撃を流すように回避し、そのまま一夏と距離を置く。

かわされた一夏の膝蹴りはそのまま楯無の背後にあった道場の壁にぶつかる。

道場内に鈍い音が大きく響く。

常人ならばこれで膝を傷めるだろう。しかし、鍛えられた一夏の体に損傷は無く、当の一夏も涼しい顔。そして膝を叩き込まれた部分の壁には輝が入っていた。

「チツ」

着地し、体勢を整えた一夏は小さく舌打ちをする。

分が悪い。制空圏の読み合いから始まった一連の流れで、一夏は自身の不利を悟った。

やはり学園最強は伊達では無かった。楯無と一夏、格闘戦においては楯無が優勢と言えた。

或いは刀、せめて改造木刀があればと思うが、どちらも迂闊に他人に触れさせたくない危険物故に、寮の自室に置かれている。

無い物ねだりをしても仕方ない。不利は重々承知だが、一夏は無手での仕合の続行を決めた。

改めて一夏が腹を決めたのを見たか、今度は楯無が動き出した。

無拍子での接近から放たれる掌底。連続で放たれたソレを、一夏は両腕で捌くと同時に、楯無の胸に貫き手を打ち込もうとする。そして今度は楯無が一夏の攻撃を捌き、反撃に転じる。

道場内を移動し続けながら、二人の攻防は徐々に苛烈さを増していった。

「一夏、どこ」

どこか情けなさを感じる声でそんなことを言いながら、校舎の廊下を歩く人物が居た。シャルロットである。

そしてシャルロットの隣ではラウラが歩き、更にその後ろには箒、セシリア、鈴の姿がある。

一年名物「織斑一夏と愉快的仲間達」の愉快的仲間達である五人が一同に歩いているのには理由がある。

一組の出し物を決めた後、一夏とシャルロットが交わした「夕食を一緒に摂る」という約束。それを聞き付けた箒と鈴が割り込みを掛けたのだ。

シャルロットは当初二人に抗議をしたものの、たまたま通り掛かったセシリアとラウラを鈴が呼び、シャルロットにいつもの六人で食べることを提案。

流石にそれ以上ゴネることはできないと判断したシャルロットは渋々ながら了承。そして肝心な一夏を探すべく、廊下を歩いていたのだ。

「織斑先生は、一夏さんはとっくに職員室を出たとおっしゃいましたし、どこにいらっしやるのでしょうか？」

「寮はどうだろうか。一夏は寮の部屋で自主練をしているらしい。流石にもうアリーナには居ないだろうからな」

セシリアの言葉に箒が答える。校舎に居ないなら寮。妥当と呼べる考えに六人は足を寮へと向ける。

その途中、校舎の近くにできている人だかりを見つけた。人だかりは校舎脇にある、彼女らも授業でよく使う道場の周囲にできている。何事かと思った六人は、とりあえず人だかりの外縁部に歩み寄った。

「どうしたの？」

六人の先頭に居たシャルロットがすぐ近くに居た一年の生徒に尋ねる。

「あ、デユノアさん。それがね、なんだか道場から変な音が響いてるのよ。誰かが最初に気付いて、いつの間にか人が集まったみたい」

「中に入って確かめたりしなかったの？」

「それが、誰も入ろうとしないのよ。その、ちょっと怖くて……」

その言葉に六人は視線を道場に向ける。確かに、道場の壁から強く叩くような音が聞こえる。察するに、何かが内側から叩きつけられているといったところか。

「…一夏…！」

「?どうしたのよ、シャルロット。いきなり一夏の名前を言って」

不意にシャルロットの口からこぼれた一夏の名前に鈴が反応する。

「一夏の声がする……」

「は？」

「一夏の声がするんだ……」

シャルロットの言葉に五人は視線を再度道場へ向け、そして耳を澄ます。確かに、壁に何かを叩きつける以外の音も僅かに聞こえる。なるほど、確かによく聞けばそれは人の声に聞こえないこともない。しかし、それが一夏の声と分かるかと言われれば、首を傾げざるを得なかった。

「僕には分かる。一夏があそこに居る……！」

そうやってシャルロットが前に進む。道場の中に入ろうと、人ごみをかき分ける。

押しのけられた生徒はシャルロットに迷惑そうな視線を向けるが、彼女の据わりきった目に思わず身を引く。

そしてシャルロットがあと少しで人ごみを通り抜けようとした直後、開いている道場の入り口から一つの人影が文字通り飛んできた。それは

「一夏っ!？」

シャルロットが驚きの声を上げる。投げ飛ばされたかのように飛んできた一夏は空中で体勢を整えると着地。すぐさま道場の入口へ視

線を向ける。

その眼差しは鋭く、意識も集中しているのかシャルロットの声に気付いた様子は無い。

「一夏…？」

不安そうな声でシャルロットが呟いた直後、まるで風のごとく掛ける人影が一夏に疾駆する。

「会長!？」

誰かが驚きの声を上げたのが聞こえた。しかし、道場から飛び出した楯無も一夏同様、意識を集中させている故か声に気付いた様子はない。

事態をまるで把握できていない観衆を置き去りにした状態で、二人は激しい攻防を再開した。

圧倒的不利。それが一夏が自己判断した今の状態だった。

一夏が仕様する無手の武術は古式ムエタイに一部の中国拳法。修業期間の短さゆえに未だ未熟な技量であることは百も承知だが、曲がりなりにも師の地獄のような特訓により身に付けた実力は、生半可な相手に負けることはないと思っている。

しかし眼前の存在、楯無は桁違いであった。さすがに実姉千冬や師

には及ばないものの、十分化け物と呼ぶに相応しい技量。はつきり言って、勝ち目がほとんど見えないというのが本音だった。

そして何よりも一夏が驚嘆したのは技量の高さでは無かった。使う技の多様さだった。

空手に柔術、一夏同様のムエタイや中国拳法、さらにはマーシャルアーツやソバットなど、もはや無節操としか呼べないほどに多様な武術を楯無は駆使していた。

そしてその全てを楯無は高いレベルで収めている。カードに例えるならば、手札の枚数、その質、カード捌き、全てにおいて一夏を上回っているということ。

静を基軸とする武術家として、努めて心の平静を保とうとするが、徐々に押される焦りが一夏の心を乱しかけていた。

「シッ！」

中国拳法の硬気功で威力を高めた貫き手を連続で放ち、時折ムエタイの膝蹴りや肘打ちも混ぜるが、その悉くが楯無の腕に捌かれる。貫き手を放った右手を楯無が左腕で流すように捌く。腕を回転させるように受け流すそれは中国拳法の化勁。

腕ごと体を持って行かれそうになるのをなんとかこらえるが、その直後に空いた左手からの掌底が一夏の胸部目掛けて襲いかかる。

攻防の過程で楯無の掌底がどれくらい威力かを一夏は把握していた。把握した結果は、一撃喰らえばアウト。

故に、多少無理をしても一夏は回避を試みる。

上半身を仰け反らせ、ブリッジのような姿勢になる。そのまま一夏

は片足を楯無の顎目掛けて蹴りあげ、更にもう片方の足は蹴りあげの勢いを利用し回転。胴目掛けて膝を打ち込もうとする。

それを楯無は後方への跳躍でかわす。そして二人は再び距離を取った。

(おっかないわね、ホント)

一夏の攻撃の悉くを捌いた楯無だが、彼女の内心は余裕とは言えなかった。

自分と一夏の間にある技量差は明白だった。少なくとも、このまま続けたとして楯無の勝利は揺らがない。しかし、決して侮れないというのが一夏への評価だった。

一夏が使う古式ムエタイと中国拳法については彼女自信も心得がある。そして彼女が見た限り、話に聞いた通り修業期間が短い故が一夏の技はまだまだ甘いと言える。

言えるのだが、驚愕すべきことに攻防を重ねるうちに一夏の技から粗が取れていったのだ。

「百の修練より一の実戦」という言葉があるように、実力を高めるには実戦で経験を積ませるのが一番である。

そして、今の一夏はそれを地で行っていると言えた。技を交わし合う中で自らの技の粗を取り、より最適化。その鋭さを増させる。

(実戦派の天才、というものかしら……)

あの織斑千冬フリユンヒルデの弟だ。素養は高いだろう。あの男、かつて楯無も指導を受けたことのある海堂宗一郎の愛弟子だ。積んできた修練量も多いだろう。

それらを実戦の中で開花させていく。そのことに楯無は知らず心の内で苦笑いを浮かべた。

(そろそろ決めなきゃ、マズイかな?)

この手合わせの本質は、一夏に楯無を認めさせることだ。そのためには、完全な勝利こそが必要不可欠。

少々大人げないかもしれない。しかし、彼女は意を決する。一切の出し惜しみ無しで全力で一夏を倒すことに決めた。

対する一夏もまた、決着の付け時と見ていた。

一連の攻防、捌ききれなかったダメージが蓄積し、そろそろ限界が近いことを感じ取っていた。

単に動くこと自体はまだまだ可能だが、その動きは精彩を大きく欠いたものになることは必然。そうなったら、どれだけ足掻いても勝利は無い。

故に、今この瞬間に持てる全てを出してぶつかると。分の悪い賭けではないが、他に手はない。

(しかし、どうする...)

互いに呼吸と姿勢を整え、体内に気力を充実させながら一夏は思案する。

今まで使ったムエタイと中国拳法は完全に封殺されている。恐らくは自身の技は全て見切られているだろう。

どうする。

ふと、脳裏に閃きが走ったのを感じた。そして、その閃きに従うことにした一夏は、深く息を吐いて心を更に鎮める。

どこまでも深く、冷たく、冷徹に心の波を消す。自らの心の湖面を氷結の内に閉じ込め、一切の思考を排除。

排除排除排除排除排除排除排除排除排除排除排除

何もかもを思考から消し去り、ただ相手を倒す意志のみに思考を染める。

同時に、一夏は習ったムエタイと中国拳法を一度分解。自らの内に曖昧な状態で漂わせる。

余計な理論は不要。ただ自らの反射に従って、楯無も知らない織斑一夏独自の流れて仕掛ける。

ほとんど我流に等しいやり方だが、それしか方法は無い。

互いに行動方針を決定した直後、両者は決着のために動きだした。

接近と同時に放たれた楯無の双掌打を、一夏は回避すると同時にその腕を掴む。

そしてほとんど力ずくで楯無の体を大きく持ち上げると共に、その体を一気に頭から落とす。同時に一夏は片足を蹴り上げて、落下する楯無の頭部に蹴りを叩き込もうとする。

受ければただでは済まない蹴りを、楯無は腕を突き出し掴むことで防ぐ。同時に腕を軸にカポエラの要領で大きく回し蹴りを放つ。

一夏も蹴り足を掴まれたことには動じず、冷静に上半身を反らして対処。直後、一夏の足を弾くように腕の力で跳躍した楯無に突撃。着地をした楯無の迎撃を、直前で大きく身を屈めることでかわす。それと共に、一夏は両手で地面を掴み、全身を小さく畳む。その足は楯無に向けられており、直後、全身のバネを利用した下段からの両足蹴りが槍の刺突の如く放たれる。

僅かに身を反らして回避する楯無だが、掠った前髪の先が散る。そのまま一夏は立ち上がり、追撃をかけようとした。が、できなかつた。

ズンツ

重く響くような音。

楯無の両手が一夏の腹部に添えられていた。

何が起きたか、理解したのは一夏と楯無の二人だけだつた。

楯無は両手を一夏の腹部に密着させると同時に、その状態のまま攻撃を放つていた。

それは楯無の絶招。言うなれば必殺技である。

名を「共浸双掌撃」

双掌を密着させ、寸勁による攻撃を同時に叩き込む。

浸透勁として放たれた攻撃は、相手の体内で波のように干涉しあい共鳴。増幅させた衝撃を相手の全身に届かせる。

楯無自身、そう安々とは使用しない大技だつた。

楯無の絶招を受けた一夏は一步、後ずさる。
そして、そのまま地面に倒れ込んだ。

「俺の、負けだ」

ただ一言発されたその言葉によって、二人の手合わせは決着がついた。

二人の周囲では、突然目の前で繰り広げられた生身の激戦に、言葉を失い立ち尽くす生徒達の姿があった。

第四十九話（後書き）

こんな話ですが、一応ISの二次創作なんです。
ノリが某史上最強みたいだと言うのは否定しません。だってそのつもりで（ry

こんな話ですが、読者の皆様にお楽しみ頂ければ幸いです。

さて、次回の更新についてですが、とりあえず以前言及した各ヒロインの内面話をやろうかと。

それぞれのヒロインの一夏への思いを書こうと思います。

オマケに近い短編なので、文字数はさほど多くないと思われませんが、ご了承ください。

以下ざれ言。

ネタが二つ思いつきました。

一つは、一夏が千冬と一緒にドイツに行く話。そこで原作より早くIS云々が発覚。

アレコレして日本の代表候補になってる話。

ポイントは、この時点でラウラが一夏の妹になり、一夏はラウラに対しシスコン全開ということ。

ハガレンのヒューズさんみたい、いや更に酷い。もはやKYで済まないレベルのシスコン振りを発揮する。

目下最大のシスコンライバルは楯無。箒、セシリア、鈴は苦勞人。シャルは同志。

もう一つ。

自分が鼻屑にしている、とあるSS作家様が某所でISとケンイチのクロスを執筆されています。

それに触発されまして、一夏が緒方の弟子でYOMIのメンバーという話。

幼少期に緒方に出会い、武術に惹かれる一夏。誘拐事件の際、助けてくれた緒方と再開。

そのまま弟子入り。千冬はうまくごまかした。

そして、他のYOMIメンバーと親交を深める内に、彼らの武術を無節操に取り込んでいくという。

正直、誰得感の強いネタ、ざれ言ですので、軽く流して下さい。

ではまた、次回にお会いしましょう。それでは。

番外編 1 (前書き)

というわけで、予告した通りにヒロインの心情(?)です。

今回は尊とシャルの両名です。

番外編 1

side 篇

私と一夏が出会ったのは幼少期のことだ。
私が小学生になったばかりの頃だったか。姉さんがISを発表し、
白騎士事件が起こるよりも前のことだ。

当時、姉さんの唯一の友人と言えた千冬さんは、私の実家の道場で
私の父を師として剣を学んでいた。

私が剣を習いはじめた時には既に千冬さんは父も認めるほどの実力
を付けていて、私にとっては先輩であり尊敬すべき先達だった。

そしてある時、唐突にあいつは、一夏はやって来たのだ。

千冬さんに弟だと紹介され、一夏は私達と共に剣を学び始めた。
ただ、その頃の私と一夏は特別親しかったわけでは無かった。

当時の私にとって、剣を学んでいた道場は、私と父と千冬さんの三
人で完結した空間であり、そこに突然加わった存在に幼心に良い思
いを抱かなかつたのだ。

毎日定刻に来て、父や千冬さんに指導をしてもらいながら剣を振り
続ける毎日。

お互いにほとんど会話は無く、ただ無心に修練を続けるだけだった。

そんな私と一夏に訪れた一つの転機。

それは父の提案による私と一夏の初めての手合わせだった。

父曰く、一夏がメキメキと実力を付けたので、一度手合わせをする
と良い。良い勝負ができるだろうと。

二人の初めての試合だからだろう。あの時のことはよく覚えている。

あの時、私は少し不機嫌だった。

当時、既に町の大会などに出場していた私は、既に同年代の他の者
よりも高い実力があつた。

それは子供心に一つのプライドとなっており、自分より遅く剣を習
い始めた人間が、自分と良い勝負ができるという父の言葉を許容し
なかつた。

後は、父が他人を褒める姿を見るのが気に入らなかつたのだろうな。

話が逸れたか。

そして私と一夏は試合をした。結果、私は負けた。

充実させた気合いと共に放つた一撃はあっさり流され、逆に一本を
貰つた。

いっそ鮮やかと呼べる手並みだった。

その直後のことはよく覚えていない。

悔しさで思考がグチャグチャになっていたのだろう。ただ、悔しさ
だけはよく覚えている。

それから私はとにかく鍛えた。実力を上げ、一夏と再戦し勝つため
に。

そして再戦を申し込んだ私は、再び負けた。

それ以降も何度も試合をしたが、私は一夏に勝てなかつた。

その度に私の中には悔しさが積もっていった。

だが、ある時を境にその悔しさは消えた。

私達がまだ幼いのもあったからか、稽古は日が暮れるよりも少し先に終わる。

私は父の言い付けに従い、すぐに上がるのだが、一夏は常に私より遅く行動をしていた。

それを私は行動が遅い奴だと内心で馬鹿にしていたのだが、実際は違った。

一夏は稽古が終わった後も一人で修練を続けていたのだ。

辺りが薄い闇に染まっていく中、黙々と剣を降り続ける一夏。

経緯を尋ねた私に父が語るには、一夏は箒との試合以来、毎日日が暮れて夜になるまで一人で修練を続けていたらしい。

あまり遅くなるのも良くないと父が説得し、千冬さんも一夏を叱つたが、一夏が止める気配は一向に無く、やむなく父は一夏の自主練を認めたらしい。

何故そこまでするのか。更に尋ねた私に父は言った。

私が居るからだ。私が一夏と再戦をし、勝つことを望んで修練に励んでいるからだ。

相手が勝つために一生懸命やっている。なら、自分だって一生懸命やらなければいけない。そう、一夏は父に話したらしい。

その話を聞いた瞬間、私は強い衝撃を心に受けた。

そう。きつとあの瞬間が、私が一夏に好意を抱くきっかけになったのだらう。

それから知つての通りだ。

私と一夏は幼なじみとして、共に行動することが多く、私はなんと

かして想いを告げたかったが、生来の不器用さ故に中々できなかった。

そして、姉さんによるISの発表。世界の流れと同時に私の生活も大きく変わった。

失踪した姉さんの身内ということで、政府の要人保護プログラムの対象になった私は転居と転校を繰り返した。

その間に幾度となく行われた聴取。

知らず私の心には鬱屈とした感情が溜まり、中学の剣道全国大会での醜態。

そしてIS学園に入学し、一夏と再開した。

甲高い音と共に私の手から木刀が弾かれる。

手から木刀が離れるのを認識した直後、私の首筋に突き付けられる殺気。

一夏が手にしている木刀で、私の持つ二振りの木刀の片方を弾いた後、返す刀で私の首筋にその刃を添えていた。

「はいそこまで。織斑君の勝ち」

剣道部の先輩である、沖田先輩の声が道場に響く。

今日は部活が無いため剣道場が空いており、私は一夏と二度目の実戦形式での立ち会いを行った。

道場に二人で来た際、私達より早く道場に来ていた沖田先輩と偶然

会い、審判をして貰ったのだ。

「やはり強いな、一夏」

私の言葉に一夏は軽い笑みで返した。

「言っちゃアレだけどき。ぶっちゃけ篠ノ之さんじゃあ、織斑君には勝てないよ？私の見立てじゃあ」

沖田先輩が意地の悪さを感じさせる声でそう言ってくる。

正直、少し腹が立つ。こういうことを臆面も無く言ってくるからだ。それでいて先輩の実力は部内でも一、二を争うほどだから質が悪い。

『沖田司という人間はサディストだ』

誰が言ったか、実にその通りだと思う。

「じゃあ箒。先に上がるぜ？」

「あ、ああ。分かった」

一夏が私に声を掛け、沖田先輩に一礼をしてから道場を出る。

知らず私は、一夏の背中を見詰めていた。

よく鍛えられているのが分かる大きな背。だが、私にはそれ以外のナニカによって、実際以上に大きく見えていた。

それと同時に、その背中がどうしても遠く見える。

一夏、教えてくれ。

私はお前に追い付けるのか？

私にとって遠い、お前のその背に。

当然ながら答えは返って来ない。

私はそのまま一夏の姿が見えなくなるまで、その背を見続けていた。

side out

side シャルロット

僕、シャルロット・デュノアの人生は一度、色を失った。

生まれてから僕は母と二人、フランスの片田舎で過ごしてきた。都市の華やかさとは無縁、それでいてとても心穏やかに過ごせる小さな町だった。

幼い頃、僕は母に尋ねたことがある。

何故自分には父親が居ないのかと？

別に父親が居ないことにマイナスな感情があつたわけじゃない。ただ、純粹に疑問に思った。

そんな僕の問いに母は少し寂しそうな顔で、お父さんには会えないのだと言った。

それだけで僕は納得した。さっきも言ったように、僕は母と二人きりでの生活に満足していたから。

ISの登場。

世界の情勢を一変させるような出来事があっても、僕の生活は何も変わらなかった。

ただ穏やかな町の中で母と二人、穏やかな毎日を過ごしていた。

けど、そんな日常は脆くも崩れてしまった。

病に倒れた母。何故か毎月家に振り込まれていた生活費。

おそらくは会えない父からのものだろうと当たりを付けていたそれは、結構な額に達していた。

それを使つて僕は必死に母を看病した。

けど、母は結局亡くなってしまった。

母の病は重いもので、振り込まれていたお金では治しきれないものだった。

親交のあった近所の人達の助力で母の埋葬を終えた僕は、それから数日の間、力が抜けたまま過ごした。

母を失ったこと。そのショックが大きかった。

そんな時だった。父の使いが僕の元を訪れたのだ。

やって来た黒服の男性は言った。

父がIS開発で世界的なシェアを誇るデュノアの社長ということ。

母が父の妾であり、僕は父の唯一の子であること。

僕に高いISの適性があること。

デュノア社のIS開発のテストパイロットとして協力する代わりに、生活の面倒を見てもらえること。

母を失い、文字通り生活の当てを失った僕は、話を受ける以外の選

択肢を持たなかった。

そして同時に、僕はこの時密かに期待をしていた。父が僕を娘として扱ってくれることを。居なくなってしまった母の代わりにしてくれることを。

けど、現実には冷たかった。

父と直接会えたのは、たったの二回きり。

一度目は父の本宅で面会をする時。この時、僕は父の本妻という人に罵倒と共に頬を叩かれた。

それから僕は連日、父に向かうよう指示されたデュノアの開発室で、受けた指示を実行するだけの毎日を送った。

父は僕に会おうともしない。

ただ同じような毎日の日常に、僕はいつの間にか世界を灰色に見るようになっていた。

父の指示の一環でフランスの代表候補生にもなった。

本来なら榮譽と思うそれすら、僕にはなんの感慨も湧かせなかった。

そして、その時は訪れた。

とある春、世界を揺るがす一大ニュースが生まれた。

世界初の男性IS操縦者の登場。

そのニュースが出回った直後、僕は父と二度目の面会を果たした。父は家族としての言葉を掛けることなく、ただ僕に指示を出した。

性別を男性と偽りIS学園に編入。世界唯一の男性IS操縦者のデータの奪取。

僕に断る権利など無く、その日から僕は男としての行動を徹底的に叩き込まれた。

父が指示を出した理由は明白だ。

第三世代型の開発で、欧州他国に遅れをとっているフランス。

そのフランスでIS開発の筆頭を担っているデュノアは、政府からの風当たりが強まっていた。

このままでは、遠からずデュノアは業界で立ち行きできなくなる。その打開策だった。

世界唯一の男性操縦者のデータ。その希少性は僕にも分かる。

そして、それを上手く入手できたら。それを開発に活かせたら。齎される利益は莫大だ。

仮に、男性でのIS起動のメカニズムを解明できようものなら、それは第三世代型など比べものにならない開発だ。

そんな会社の、父の思惑に動かされて僕は日本のIS学園に行った。

そこで僕は出会った。そう、一夏に。

今ならばつきりと言える。

僕にとって一夏との出会いは、大きな運命だったと。

転入の初日、僕は想定通りに一夏と接触をできた。

同じ男だからということ、先生は一夏に僕の面倒を見るように言った。

何よりもまず、僕は一夏との友好を深めることにした。

親しくなれば、接している時に隙ができる。そうなればデータも容易く取れる。

そう教わったから。

だから僕は一夏と親しくなるうとして、一夏の人柄を知った。

そして、その在り様に驚いた。

一夏は強かった。男性の肩身が狭い今の世の中で、女性ばかりの空間に居ながらも、自分を揺らがせることの無い立ち居振る舞い。

そんな強さと同時に、転校生の僕に何かと世話を焼いてくれる気遣い。

そんな一夏を見て、僕は自分のしていることへの罪悪感を感じた。

そして、その時が来た。

本当に些細なきっかけからの、僕の正体の露見。

一夏に僕が女だと知られた時、僕の心は一つの諦めを悟った。

全ての事情を話し、素直に国に戻る。

その覚悟を決めた。

それは、僕自身の罪悪感へのけじめのつもりだった。

そして僕は一夏に全ての事情を話した。

けど、一夏は僕をまるで責めなかった。それどころか、僕に指示を出した父への怒りを露わにした。

そして一夏は僕に言った。ここに居ると。

同時にこうも言った。何かあれば助けてくれると。

嬉しかった。一夏の言葉は、母が亡くなって以来、初めて掛けられた優しい言葉だった。

この時、僕は灰色だった心が色付くのを感じた。

そして、そのあとに一夏が話してくれた秘密。

誰にも話したことの無い、一夏の壮絶で重い過去。

自分の秘密を話し、背を小さく丸めて震える一夏を見て、僕は言いよりの無い感情になった。

言葉では言い表せない、複雑な思い。

あれ程強く見えた一夏が見せた弱さへの驚き。

重い過去があるのに、毅然と振る舞う強さへの憧憬。

震える背を見て感じた、言い表せない気持ち。

全てが入り混じった複雑な感情だった。

気が付けば僕は一夏の背を抱きしめていた。

それは、僕を肯定してくれた一夏への、その時僕ができる精一杯だった。

軽蔑されるべき僕を肯定してくれた一夏。なら、僕だって一夏を肯定しなきゃならない。

そんな思いがあった。

それから僕と一夏は、互いの秘密を共有しながら数日を過ごした。

そして、気が付けばその数日の内で、僕の中で一夏が存在がとても大きなものになっていた。

宣言します。

僕は、シャルロット・デュノアは、織斑一夏が好きです。

僕に居場所をくれた一夏。灰色だった僕の世界に、色をくれた一夏。一夏は僕にとって全てと言える人になってました。

昔、母が話してくれたことを思い出す。

好きという想いは、どうしようもないくらい凄いものだ。

その通りだった。自覚をしてから、僕は一夏への想いが止まらなかつた。

一夏の隣に居たい。一夏に僕を見てほしい。ずっとずっと、一夏と一緒に居たい。

そう思った。

そして、トーナメントが終わってから僕は決意をした。

シャルルではなく、シャルロットに戻ることを。

シャルロットという一人の女の子として、一夏の隣に居ることを。

この決断は決して軽くない。

もしかしたら僕の今後、外部の干渉から守られる学園での三年間の後に、何かしらの影響を及ぼすかもしれない。

けど、知ったことじゃない。

僕の一夏への気持ちは、僕にとってそれだけの価値が、人生を賭ける価値がある。

ううん、違う。今の僕には、一夏が全てと言えるんだ。

一夏、僕は一夏が大好きです。

「やはり夏だからか。人が多いな」

僕の隣を歩く一夏がそう言う。夏休みの内の一日を使って、僕と一夏は水着選びに着たショツピングモールに遊びに来ていた。

あの日、みんなの乱入でお流れになってしまったことの埋め合わせだつて、一夏が誘ってくれた。

一夏の服は、黒を基調とした半ズボンにTシャツ。シンプルなデザインのは、一夏にとても似合っている。

そして僕は逆に白いワンピース。一夏が似合ってるって褒めてくれたのが嬉しかった。

「ねえ、一夏」

「ん？」

「あのね。腕、組んでいいかな？」

せつかくの二人きり。ちよつとくらい甘えてもいいよね？
そんな思いで僕は一夏をお願いしてみる。

「ああ。いいぞ」

そして一夏は、とても優しい顔で許してくれた。

僕は一夏の腕に自分の腕を絡ませる。

鍛えられた一夏の腕は逞しくて、すごく安心ができる。

ああ、一夏の隣に居て、腕を組める。

そのことがとても幸せだ。一夏と一緒に居る。ただそれだけで、僕

は幸福な思いになる。

一夏。大好きな一夏。お願い。僕をずっと一夏の隣に居させて。僕をずっと見ていて。

代わりに、何があっても一夏は僕の隣に居てもいいから。

たとえ、みんなが一夏のことを嫌いになっちゃっても、僕だけは一夏を好きでいるから。

一夏は僕の全部。だから、一夏も僕を一夏の全部にしていよ？

一夏。ずっと一緒に居てね。僕をずっと見てね？

僕だけの一夏。僕の大好きな一夏。ずっと一緒に居るんだからね？

s i d e o u t

番外編1（後書き）

さて、とある方の感想でのご指摘で執筆を思い立ったヒロインの心情描写。

いかがでしたか？

今回は第とシャルだけですが、また少し本編を進めてから、残る三人プラス一夏でお送りしたいと思います。

予定としては「セシリア&鈴」と「ラウラ&一夏」です。

ちなみに分割にした理由は、一度に二人分が丁度良い長さになると判断したからです。

とは言え、この丁度良い長さとはあくまで作者の判断。

読者の皆様には、「長いよボケ」とか、「文字数が足りないようだな。尻を貸s（以下略）」とか思う方もいらっしゃるかもしれませんが。

そうした方は、申し訳ありませんがご容赦のほどをお願いします。

さて、シャルの方は上手く病みを表せているか。

それがとにかく心配です。いやはや、病み描写って難しいです。

別サイトでの他人様のネタですので、この場で話題に出すのは大変恐縮なのですが、「赤目シャル」というのがありまして。

それを見た瞬間、作者はビビッと来ました。

「これこそ自分の求めた病みだ！」と。
いや、本当に病み描写は難しい。

次回は本編の更新です。

それでは皆様、また次回にお会いを。

突発的嘘予告（作者の悪乗り）（前書き）

前にあとがきで書いたネタを、ちょっとやってみました。

深夜に異様なテンションで書きはじめたから、色々とナンダコレ状態…

突発的嘘予告（作者の悪乗り）

某月ロシア。

ロシア軍の基地の一つであるその地では今、一つの惨劇が繰り広げられていた。

「こちらボリス。ポイント 制圧」

迷彩服に鍛え抜かれた体を包む、ボリスと名乗った少年が無線機で仲間へと連絡を入れる。

連絡を受けた彼の仲間が、次々と応答を返す。

基地を制圧しつつ、とある人物を追い詰めて始末する今回のミッション。首尾は順調と言えた。

「調子は良いみたいだな」

ボリスの背後、この場には不釣り合いと呼べる出で立ちの少年が言葉をかける。

黒のズボンにシャツ。シャツには細く白いストライプが縦に入っている。その上に、ズボン同様に黒のベストを着ている少年。

「しかし油断はできん。僅かな油断が窮地を招く。我が師の言葉だ」
ウチーチエリ

先程の通信とは異なり、ボリスは日本語で少年に返す。それは彼の相手への配慮だった。

ボリスの隣に立った少年、彼は日本人であった。

「確かに。じゃ、さっさとやるか。聞けばこの基地にはISが一機あるらしい。出張されると厄介だ」

「同感だ。速やかにミッションを遂行する」

その言葉を皮切りに二人は基地の廊下を駆け出す。

オリンピック陸上種目の世界記録を優に超える速さで駆ける二人。その行く手を阻むように、銃器で武装した基地の兵が現れる。

「邪魔だつ！！」

それは一瞬のことだった。

疾駆の勢いを利用し、二人は兵達に突撃。反撃を許すことなく、無手で一気に無力化する。

「他愛がない」

気絶した兵を捨て置いて二人は突き進む。

日本人の少年の、相手への侮蔑の声が静かに大気へと溶ける。

「ひっ!?!」

中肉中背の中年男性の恐れおののく悲鳴が短く響く。

基地の一角。目的の男性、始末対象を発見した二人は、一気に彼を追い詰めていた。

「ロマノコフ議員。恨みは無いが、ミッション故にあなたを殺害させて頂く」

「まあ、一瞬で始末するからさ。痛みは気にしないでいいよ」

いたって事務的に殺害を宣告するボリスに、もう片方は天気の話で

もするかのような気楽さで語りかける。

そして二人が議員に一步近付こうとした瞬間、二人は同時に背後に跳躍。

直後、銃声と共に二人が居た場所に弾痕が穿たれた。

「む…」

「来たか」

銃声の方向に視線を向ける二人。その表情は厳しい。直後、議員の前に一つの影が踊り出た。

「ご無事ですか、議員。救援に参りました」

「おお！すまない！」

議員の顔に安堵が広がる。彼にとって、その救援はまさに神が与えたもった慈悲の如しだった。

やってきたのは一人の女性。歳は20に行くかどうか。そして彼女はその身に装甲を纏っていた。

IS インフイニット・ストラトス

女性にしか扱えない、現行最強を謳われるパワードスーツ型機動兵器。

この登場により、世界は女尊男卑の世の中へと移るなど、多大な変化をもたらしたが、議員の始末を目的にする二人には、そのようなことはどうでもよかった。

二人の表情は険しい。それは懸念していた最大障害の登場への危機感からだった。

「ロシア代表候補生、イリーナ・グスタフです。大人しく投降しなさい」

ISの操縦者、イリーナは極めて事務的な声で降伏勧告をする。

それはIS登場以後、世間の風潮として広まった「男は女より弱い」という考えからではなく、純粋な互いの戦力差からの勧告だった。

余計な感情を交えず、冷静に彼我の戦力差を分析する姿勢に、イリーナが優秀な操縦者であることを見抜いた二人は、知らず齒を強く噛み締めた。

「すまないが、我が弟子とその同志の邪魔はしないでくれたまえ」

突如響いた成人男性の声。

その声に場の四人が反応した時、ボリスと日本人少年の間に一人の男が立っていた。

それが誰かを認識した瞬間、二人は同時に彼に対し一礼をする。

「あなたは」

何者とイリーナが問おうとした瞬間、全ては決っていた。

一瞬、人間の限界を容易く超える速さで接近した男性は、一瞬でイリーナの首をへし折っていた。

ISの絶対防御を無意味にする非情の一撃。その一撃の下、一瞬で命を絶たれたイリーナの体は倒れ伏し、装備していたISが掻き消える。

「ぐぎゃっ！」

響く断末魔。男とボリスが声の方向に目を向けると、いつの間にか議員に接近した日本人少年が、その胸部を抜き手で貫いていた。心臓を貫かれた議員は、やはり絶命。

少年の右腕は、対象の血によって朱に染まっていた。

「ふむ。君が仕留めたか」

男の言葉に、少年は振り向くと深々と頭を下げた。

「すみません、ガイダル先生。より迅速な任務の遂行のため、俺が手を下しました。本来ならボリスがすべき仕事だとは分かっていますが、助っ人の身で出過ぎた真似をしました」

その言葉には偽らざる謝罪の感情があった。同時に、少年が男闇の一影九拳の一人、ロシア最強のコマンドサンボ使いアレクサンドル・ガイダルへ向ける尊敬の念も感じられた。

少年の謝罪にアレクサンドルは笑って答える。

「構わんよ。速やかな殲滅。それを実行したのだ。文句は無い。優先されるべきは任務の遂行。それは私もボリスも弁えている」

「はい。ありがとうございます」

お礼を言う少年にアレクサンドルは頷くと、二人に言葉をかける。

「では帰還だ。この任務により、我が祖国での我等の権益は拡大す

るだろう。ご苦労だった」

任務を達成した愛弟子と、その仲間へ労いの言葉をかけてアレクサンドルは歩き出す。その後を続く形で、二人は歩き出した。

「任務の様子は見させて貰った。二人とも、腕を順調に上げているな。ボリス。今後も精進せよ」

「はっ、我が師」

師の言葉にボリスが敬礼と共に答える。

「君もだ、一夏。君の成長、私も見ていて好ましい。拳聖殿も鼻が高いだろう」

「ありがとうございます」

日本人の少年、織斑一夏も礼を述べる。

織斑一夏15歳。

闇の一影九拳の一人、「拳聖」緒方一神斎の一番弟子。「流」の称号を持つボリスと同じYOMIの幹部。これが彼の日常的一幕だった。

それから数ヶ月、彼の日常は激変する。

「よもやYOMIの幹部が世界初の男のIS操縦者とは」

「それも一なる継承者の第二候補。処遇はいかに？」

衛星通信で会話をする人物達。それは闇の武術界、その最強の領域に位置する者達。

「良い機会だ。織斑一夏には政府の要望通り、件の地へと向かわせる。久遠の落日、それに向けて世界に闇の真髄を広めさせる」

最強を謳われる者の、その頂点に立つ男の鶴の一声。

「IS学園ねえ。まあ、腕は落とすんじゃないぞ」

「案ずるな、翔。元よりそんなつもりは無い」

自らの属する組織のリーダー、親友と交わす言葉。

「一夏、良い機会だ。我等の拳、それを存分に振るい給え」

「はい、緒方先生」

師との言葉。

そして少年は向かう。

各国の思惑渦巻く箱庭。名ばかりの戦い、つまらない遊戯の場へと。

「織斑一夏です。よろしく」

「諸君、私が織斑千冬だ！」

数ヶ月ぶりの姉との再開。

何の感慨も沸かない。あるのは、自らの拳の實力、その証明のみ。

「何故だ一夏！なぜ剣道を止めた！」

「見つけたからさ。俺が本当に求めた武の世界を」

再会する幼なじみ。しかし、彼にとって、すでに彼女は大きな存在ではなかった。

剣道の中学生チャンピオン。なんの榮譽も感じない称号だった。

「決闘ですわ！！」

英国からの少女。彼女の宣言に一夏は笑う。

実に好都合。決意する。その決闘を、自らの宣戦の場とする。

「な、何者ですの！？あなたは一体！」

戦慄する少女の声。

放たれる青の弾丸は一切当たらず、彼の拳が少女に襲い掛かる。

「白式。我が拳の最強、その証明の時だ」

一次移行。圧倒的機能の向上を果たした一夏の愛機は、主の求めるまま、その力を発揮する。

「人越拳ねじり抜き手！」

「ガンラバー・ラームマースン・クワン・カン《爆ぜる斧を打ち振るう雷神》！！」

「デイエゴテイカクロスギロチン！」

尊敬する達人たち。その技の模倣を放ち、一夏は敵を傷付ける。既に肩を外された少女、セシリアは為す術無く打ち伏される。

「四！三！二！一！秘技、数え抜き手！！」

止めに放つは師直伝の奥義。

無敵を謳われる一人の老達人の百八の奥義の一つだった。

止めの一突きが、シールドを削り掻き消す。

完全に守りを破ってなお勢いを止めない刺突は、セシリアの肩を貫いた。

「つまらん」

興が削がれた一夏はセシリアを手放す。

医務室へと運ばれるセシリアには目もくれず、彼はISのオープンチャンネルで宣言をする。

「聞け！現時刻を以て俺は、俺以外のIS466機に宣戦を布告する！全てのIS操縦者よ！貴様らの戦いはただのままごとだ！命を賭けぬスポーツ紛いなど、戦いと呼べん！俺と、俺の拳が本当の戦いを見せてやる！命を賭ける、真の戦いを！全てのIS、その担い手！俺の拳がその命脈を絶つ！心しろ！ここにいるのはお前たちの、敵だ！お前たちを葬り去る存在だ！」

そして彼は、宣戦の最後を一人の人物への言葉で締めくくる。

「聞け、^{ブリュンヒルデ}織斑千冬！確かに俺とあなたは血を分けた姉弟！だが、真の武術の前に家族の情など不要！俺は、あなたをこの手で葬る！」

実姉への決別を込めた宣戦布告。

そして、学園に集う少女たちは理解する。

自分たちが注目を向けた存在は、想像を遥かに超えた脅威であることとを。

「我が名を記憶に刻め！我こそは拳聖が一番弟子、織斑一夏！流の称号を持つ、お前たちをの敵だ！」

そして少年は、世界に対し挑戦を仕掛けた。

「一夏、お前に何が…」

変わり果てた幼なじみ。その姿に少女は戸惑う。

「人越拳に拳聖…まさか…」

学園の長たる少女は、自らの背に流れる冷たい汗を感じた。

「……………」

言葉を無くすブリュンヒルデ。自らの弟、長らく会わなかった弟の変わりように、言葉を失った。

あらゆる方向からの視線を受けながら、一夏は自らの拳を眼前で強く握る。

この瞬間、後に「IS操縦者の天敵」と呼ばれる男が誕生した。

或いはこんな織斑一夏 if story

史上最凶の弟子ICHIK A

いつかやるかもしれない。多分…おそらく…もしかしたら…

一影九拳の一人、「拳聖」緒方一神斎の一番弟子。
流の称号を持つYOMIの幹部。

原作ケンイチの朝宮は一夏に僅かに遅れる形で緒方の弟子となっているが、二人に面識はあまり無い。

緒方との初対面は一夏が筭と別れたばかりの頃。

剣道を学ばなくなりどうしようかと、途方に暮れていた時に出会い、
武術を学ぶことを進められる。

この時はまだ普通のスポーツ格闘技を学ぶ。

二度目は中学時代の誘拐事件の時。

千冬より先に緒方に助けられる。その際、もし自分の元で学びたい
なら訪ねると良いと言い、緒方は一度立ち去る。

千冬は緒方が去ってしばらくしてから駆け付ける。

千冬は一夏を助けた人物、すなわち緒方に関しては一切知らない。

以後、一夏は緒方の弟子となる。この際、闇の施設で修業をすること
になったため、中学は転校。故に鈴とは原作より早く別れること
となる。

弾とは以後もちよくちよく連絡を取っている。無論、闇に関しては
一切喋らない。

緒方が一影九拳の使い走りみたいなことをしている影響か、一夏も
YOMIの中での使い走りみたいなことをしている。

比較的社交性のある性格ゆえに、他のYOMIメンバーとは良好な

関係を築いている。

特にリーダーの翔とは、気が合うためよくつるむ。

武術家としては、見る力が優れている。

緒方から技を習ってはいるものの、当の緒方が普段は山にこもっている寂しい人なため、他のYOMIの修業に、いつの間にか勝手にちやっかり混じったりしている。

そして、堂々と九拳の技を見てパクるといふ真似をしでかしている。無論、パクったところで技の完成度は九拳に遠く及ばないが、その類い稀なセンスは九拳の全員を感心させている。

このことにより、翔と同様に多種多様な武術を学んでいることになり、本人が預かり知らないとこで、翔に次ぐ一なる継承者の第二候補と一影九拳にみなされている。

九拳の面々とも良好な関係を築いており、自分のところに学びに来いと誘われたりもしている。

九拳の中でも特に、本郷、アーガード、ガイダル、ディエゴを強く尊敬している。

実力はYOMIの中でも上位にいる。

IS操縦者の中で、達人級はほとんど居ない。

表側、すなわち世界大会に出るような面々の中で達人級は千冬のみ。他の国家代表も、武術家としては弟子の中位（よく鍛えられた軍人）クラス。

ごく少数のみ、妙手に届くかというレベル。

逆に裏側には達人級の操縦者が、数名居たりする。

一夏のISは白式は変わらず。

ただし、仕様はまるで違う。高機動格闘型。武装は持たず、殴る蹴るだけで戦う。

アメリカのファンング・クエイクに似た感じ。

腕と足の装甲が武装そのものと言え、砲弾を弾いたりも可能。

必殺技は零落白夜パンチ（キック）

ちなみに時系列はIS学園入学で、ケンイチ原作開始の一年前だったりする。

設定はこんな感じ。

全く、深夜の異様なテンションに任せて書いてみたら、変なのがで
きちゃった。

反省はしている。けど、後悔は…して…いない？

突発的嘘予告（作者の悪乗り）（後書き）

本当にね。 どうしてこんな書いたか、自分でもさっぱりで。

このネタ、いつぞやのあとがきにも書きましたが、作者が懇意にさせて頂いている、あるSS作者様の作品に触発されて書きました。

さて、このネタが続くかどうか。

多分ないかも…

第五十話（前書き）

ヒロインズへの楯無との試合の理由の説明です。

ほとんどそれだけです。作中の時間経過は短いです。

最後の方、ちょっと作者が悪乗りしましたw w

第五十話

side 一夏

生徒会長との手合わせの後、俺は寮の談話エリアに居た。

クソ、まだ腹にダメージが残ってやがる。

最後の一撃、あれがかなり響いた。まさか浸透勁を増幅させるなどとは思ってもしなかった。

俺の正面には会長が座っている。そして俺と会長の周りに箒達五人が座っている。

いきなりガチの手合わせを見せちまったからな。そのことと、会長のコーチの件について説明をしなきゃならん。

「一夏、大丈夫？」

シャルが心配そうな顔で聞いてくる。

いや、この気遣いが本当にありがたいよ。

「まあ、なんとかな。ただ、夕飯のメニューは少し考えなきゃならないけど」

「そっか…」

そう言っつてシャルは会長に視線を向けた。どこか不機嫌に見える視線に、会長は少しだけ浮かべている笑みに、苦味が混じった。

知ったことじゃない。自業自得だ。確かに俺はこの人から指導を受けることは了承した。

けど、それとこれとは話が別だ。もつと困り果てちまえ。

「ねえ、一夏。一体なにをされたのよ？会長の手が腹に当たったと思っただら、いきなり倒れこんで」

鈴がそう聞いてくる。

何をされた、か。まあそう思うのも当然か。手を当てただけどぶっ倒れるなんて、普通はない。

しかしどうする。説明するのは構わないが、口で言っても上手く伝えられるか分らん。

やっぱ実地の方がいいか。

「鈴、立て。んで手を出せ」

「え？」

「俺が何をされたか、説明してやるよ。だから、ほら」

そう言っただけは立ちながら、鈴にも立つように促す。

そして言われた通りに鈴は俺に向けて手を伸ばす。その手の平は俺に向けられている。

「一夏？」

俺は鈴の手の平に拳を合わせる。鈴同様に腕を伸ばした形だ。

俺と鈴以外の五人は、俺の一挙手一投足を見守っている。

さて、できるかね。曲がりなりにも奥義に位置する技だ。

師匠から仕組みもやり方も習った。実際、夏休みの修業で練習して、

少しはできた。無論、修練は怠らなかつたから、ちつとはマシになつてるだらうよ。

軽く息を吐く。

必要な動きをイメージ。それを体で再現させる。

必要な力を体内で練る。全身そのものを伝達経路として力を拳に送る。

そして、シフトウェイトと共に一気に開放！

「ふっ」

「きゃっ！」

短い呼吸と共に俺は技を放つ。

同時に、俺の拳と密着させていた鈴の腕が弾かれ、その勢いで体のけ反つた。

ふむ、なんとか体勢を立て直したか。伊達に代表候補をやつてるわけでは無いみたいだ。

「な、何をやつたのよ…？」

どうやら鈴は分からないらしい。

はて、確かこの技は中国拳法にもあつたはずだけど。習つてないのか？

「寸勁だ」

「そうか。それだったか。私は聞き覚えがあるぞ」

俺の言葉に箒が納得の声をあげる。箒は知ってたか。

けど、他の四人は知らないらしいな。表情がそう言ってる。

どれ、軽く説明でもして

「説明は私がするわ」

「人が話そうとしてんのに、割り込みかけるの止めてくれないですかねえ？」

このアマ、実にふざけてやがる。

人が話そうとしてるのに、割り込みするなんざ酷い話だ。

最後まで説明させるよ……

「一夏君は実践を見せてくれたからね。理論の説明は私に任せてもらえるかな？」

「もう勝手にやってくれ……」

ああ、諦めよう。というかさ、なんとなく分かったぞ。

この生徒会長という人間は、一筋縄ではいかない難敵だ。特にこのような場合、下手に真っ向からぶつかると、適当に流す方が吉だ。

「フフ、二人の初めての共同作業ね？」

「そういう紛らわしい言い方止めてくれないですかねえ!？」

ちよつとあんた何言っちゃっててくれんのか!？」

知らない人が聞いたら間違いなく誤解招くぞ!？」

シャル！お願いだから睨まないでくれ！

鈴！目が据わってるぞ！箒も！

セシリア！苦笑いを浮かべてないで助ける！

ラウラ！…首傾げてるってことは分かってないな。うん、お前はいいよ。

「さ、説明するわ」

そして俺のことは華麗にスルーかい。

もしもーし。お願いだから会長さんよお。シャル達の視線をなんとかしてくれないかねえ。

「あの、な。シャルもみんなも。落ち着いてくれ。あの会長は他人でふざけるのが大好きな腐れ外道なだけだから。な？ふざけてるだけなんだよ」

「あややだー夏君。外道なんて酷いわ」

「あんたは黙ってる！」

「うう、そんなつつけんどんにされると、お姉さん心が痛むわ」

「痛む心があんのかよ。知るかボケ」

クソ、この人を相手していると本当に疲れる。

「とにかくだ、会長。さつさと説明をするならしてくれ」

もう俺は知らん。勝手にしちまえ。

会長もいい加減説明を始めた方がいいと思ったのかね。なんとかみ

んなを宥めて説明を始めた。

side out

「では、生徒会長更識楯無より君達に寸勁の解説をします」

その言葉で楯無が解説を始める。既に説明を受ける必要の無い一夏以外の五人は、真剣な眼差しで楯無の言葉に耳を傾ける。

「まず始めに、寸勁というのは発勁法の一つなのよ。発勁というのは、勁という気の力を発すると書くけど、この場合は体内で発生させた運動量がある一点から出力するという解釈でいいわ」

楯無の言葉を理解しているのか、五人は各々頷くなどで納得を示している。

「発勁法とはいわば、力を最大限効率よく放つ技法ということ。そして寸勁は、その発勁法の最たるものと言えるわ。ではここで篠ノ之箒ちゃんに質問！」

「は？私ですか？いやそれより、どうして私の名前を」

いきなり楯無に名指しをされた箒は、自己紹介をしていないのに名前を言われたことに戸惑う。

そんな箒を見て、楯無は得意げに鼻を鳴らしながら言う。

「なぜなら私は、IS学園の生徒会長だからよ。いや、実際は単純な話。専用機持ちの子くらいは把握しておかなきゃだから」

最後の方は少し茶目つ気を混ぜながら言う楯無。

どこかリラックスした雰囲気放つ楯無に、いつの間にか五人は楯無を自然と受け入れていた。本人達は気づかないまま。そして、その様子を一夏は厳しい目線で見ている。

「で、肝心の質問。篝ちゃん。パンチというものは、どういうものか分かる？」

「え、それは単に殴るだけじゃ…」

「ゴメン、聞き方を変えましょう。正しいパンチの仕方って、分かる？」

「それは、しっかりと腰を入れて、肩の捻りなども利用して…」

「そう。拳による攻撃は、単純に腕を振る動きではないの」

篝の言葉に楯無は満足げに頷きながらパンチの本質を説く。

代表候補として最低限の修養の一つとして、生身での格闘戦も度合いに差はあれど、学んでいる代表候補四人も納得するように頷く。

拳法家の拳とは、先に楯無が言ったように、ただの腕の動きだけで行われるものではない。

地面を踏む足の力、腰の回転、肩の捻りなど、全身の動きを連動させて全ての力を相乗。

増幅させた全身の力を、拳という一点から相手に叩き込むものだ。

「つまり適切な動きをして、ちゃんとした力を放てるのなら、腕の運動が与える影響は微々たるものなの。寸勁というのはまさに、こ

の全身運動の要訣を踏まえて、超至近距離から相手に打撃を加える技。実質、拳はノーモーションで構わなくなるわ」

そして楯無は寸勁の説明を締め括る。

話を聞いていた五人は、深く感心したように頷いていた。

そこで五人の背後から一夏が声をかける。

「とうにかさ、俺は鈴が知らないのが驚きだったよ。一寸勁は中国拳法の技だぞ？」

心底不思議だといったげな一夏の言葉。一夏にとって、中国で代表候補を勤め、曲がりなりにも軍で訓練を受けた経験のある鈴が知らないというのは、驚きに値することだった。

日本の空手や柔術、タイのムエタイ。フランスのソバットやインドネシアのシラットなど、世界には多種多様な武術が存在する。

その中において、中国に存在する中国武術とえば、武術の一大ブランドと言っても過言ではない。

一般的には少林拳や健康法として注目を浴びる太極拳。実戦派の有名所に八極拳などが上げられるが、実際の中国武術は門派の数が数百に上るといふ。

その膨大な門派の大半において、発勁法は様々な種類があれど伝えられている。

八卦掌の螺旋勁、太極拳の纏絲勁^{てんしけい}、八極拳の十字勁、例をあげれば切りが無いほどだ。

一夏からしてみれば、それだけの有益な素材を軍が取り入れないわ

けは無いと思っており、その軍で訓練を受けた鈴も当然ながら使えるか否かは別として、知識として知っているくらいはあると思ったのだ。

だが、一夏の予想とは裏腹に鈴は少々決まりの悪そうな表情で答えた。

「いやね。確かにあたしも軍で格闘の訓練は受けたけどさ。そこまで深く突き詰めるようなことはしていないのよ」

鈴は代表候補とはいえ、その期間は一年にも満たない。故に、そうした訓練を受けた期間も決して長いとは言えない。

鈴いわく、ベテランの軍人にはそうした武術の使い手も居るらしいが、現状鈴はそうした技は習っておらず、いわゆるサブミッションの訓練や、IS戦闘前提の訓練を受けた程度だと言う。

鈴の言葉に一夏は、他の代表候補三人に視線を送る。

一夏の視線にセシリア、シャルロット、ラウラは鈴に同意するかのように首を縦に振った。

「なんか、つまらないな……」

不意に一夏の口から漏れた言葉。

自分が習ってきた武に誇りを持つと同時に、一夏にとって武術は楽しいものであった。

自分と親しい者がそれを知らない。そのことに一夏は一抹の寂しさを感じた。

「まあ、仕方ないかもね。代表候補が何よりも鍛えるべきはISの操縦技術。だから、そうした武術はどうしても後回しにされがちに

なってしまうわ」

一夏を慰めるように楯無が言う。しかし、彼女もまた多様な武術を修めた武芸者としての心を持つゆえか、その声には僅かに一夏と同様の感情が混じっていた。

そして楯無は少し表情を引き締めると、セシリア達に向き直って言った。

「でも、私としては武術を学ぶことはIS操縦者として、必ずプラスになると思うわ。ISは人体の延長、人機一体と言っても良いわ。一夏君や篝ちゃんが良い例。武術をしっかりと修めて、それをIS操縦に活かしているから、経験が浅くても高い実力をつけられたのよ」

その言葉に三人は真剣な表情で頷く。

一夏という実例を目の当たりにしている以上、楯無のその言葉は三人にとって深い意味を持っていた。

「ところで、何故兄様と生徒会長は、あのような手合わせをしていたのだ？」

「「あ」「

ラウラの言葉に、一夏と楯無は同時に声をあげる。両者とも、話の本題を忘れかけていたのは明らかだった。

「あゝ、それならウラ。その」

言葉を濁す一夏にラウラが不思議そうに首を傾げる。

「そのことだけどね。今度から私が一夏君のコーチをすることになったから。よろしくね」

瞬間、その場の空気が確かに固まった。

「一夏! どういうことだ!」

怒り声と共に筭が一夏に詰め寄る。

それを一夏はバツが悪そうな表情で制しながら言った。

「そのままだよ。その会長殿が俺のISと格闘のコーチになる。さっきの手合わせもその関係だ」

「軽く手合わせをして、一夏君に私のコーチを認めてもらうつもりだったんだけどね。一夏君、予想以上に強かったから、お姉さんつい本気出しちゃった」

詰め寄る筭を押し返しながら一夏は頷く。その表情は心底苦々しいと言わんばかりだった。

「俺だって、この会長は今一信用がならないさ。けど、ああも実力差を見せ付けられちゃ、認めるしかあるまいよ」

それは事実上、一夏の楯無に対する敗北宣言と言えた。

一夏の予想だにしなかった言葉に、五人は閉口する。

「あの、会長。今まで僕達は一夏と一緒に訓練してたんですけど、会長がコーチをするって言うなら僕達はどうすれば」

不安そうなシャルロットに、楯無は安心させるように笑顔で語りかける。

「それなら安心していいわよ。君達にも訓練に参加して欲しいのよね。一夏君に見せるお手本になって欲しいの」

その言葉にシャルロットが表情を輝かせる。

それを満足そうに見ると、楯無はパンツと手を打って言った。

「じゃ、お話はここまで。そろそろ夕御飯にしましょうっ?」

気が付けば夕食の時間が迫っていた。

遅れるわけにはいかないと、各々立ち上がり食堂に向かう。楯無もまた、椅子から立ち上がるのだが、立ち上がったところで動きを止める。

そして、自分に険しい眼差しを送る一夏を見た。

「どうしたの、一夏君?ご飯に遅れちゃうわよ?」

「やっぱり解せない。どうしてあんたは俺を鍛えようと思った」

一夏の言葉に楯無はしばし無言になる。その表情からは、先程までの飄々とした様子が薄れ、僅かに真剣な色が混じっている。

「秘密、じゃダメかな?」

「できるなら話して欲しいのだけど…」

「女の子の秘密を根掘り葉掘り調べるのはマナー違反よ?秘密っていうのはね、それを持つ女を美しく飾り立てるものなの」

「フン」

楯無の言葉に気を削がれたのか、バカバカしいと言いたげに鼻を鳴らして一夏は歩き出す。

「けど、話して一夏君が私を信用してくれるって言うなら、一つだけ教えてあげる」

背後から掛けられた言葉に一夏は足を止める。振り向くことはしない。

話してみる。背がそう語っていた。

「頼まれたから。あなたの師匠せんせいに。宗一郎さんに」

「どういうことだ！なんであんたが師匠を　！」

楯無の言葉に一夏は一気に振り向き、楯無に詰め寄る。

声を大にする一夏の唇に人差し指を当て、楯無は一夏に静かにするように指示する。

ミステリアスと言える微笑を浮かべる楯無。それを至近距離から見た一夏は、その目に一瞬引き込まれそうになるが、すぐに気を取り直して楯無に続きを促す。

「私の実家は、少し大きな家なの。分かるかしら？」

楯無の言葉に一夏は頷く。

ここで言う「大きな」とは、いわゆる資産家などの、家の持つ力を

示す。そして、布仏姉妹という専属の使用人を雇っている点などから、そのことを察することは十分に可能だ。

「あまり詳しくは話せないけど、家の関係で私は宗一郎さんに武術の手ほどきを受けたの」

「つまり、俺にとって貴女は同門の姉弟子と？」

尋ねる一夏の言葉は先程までの険が抜け、然るべき礼節を感じるものだった。

一夏が尋ねた通りなら、不本意なのは未だ変わらないが、楯無は一夏の姉弟子にあたる故に一夏は礼を以って接する必要があると考えた。

しかし、楯無は一夏の言葉に首を横に振る。

「いいえ。私はあの人の弟子じゃない。弟子なら、宗一郎さんは君に私のことを話している。でも、君は私を知らない。それが何よりの証拠」

そう言う楯無の表情には、僅かに寂寥の色があった。

「だから、宗一郎さんの弟子は世界でただ一人、一夏君だけなの」

一夏は静かに楯無の言葉を聞く。世界最高の武人のただ一人の弟子。その事実を改めて他人の言葉で聞かせられた一夏は、ただ何も言わずに楯無の言葉を聞き続ける。

「それでね、頼まれたのよ。君を鍛えて欲しいって。うん、あの人は誰よりも君を気にかけている。だから、他にも理由はあるけど、

私を君を鍛えようと思ったの」

「左様で……」

そのまま二人は無言になる。

そして、夕食の時間が差し迫っていることを思い出した一夏は、そのまま楯無に背を向けて歩き出す。

「あゝ、まあ、その、なんだ」

「ん？」

「師匠が頼んだって言うなら、うん、しょうがない。貴女を信用する。よろしく、更識先輩」

気恥ずかしさを感じる早口で一夏は言う。

その言葉に楯無は笑顔を浮かべる。

聞き間違いでなければ、確かに一夏は楯無を名前で言った。それは未だ完全ではなけれども、一夏が楯無を信用しだした証だった。

「か、勘違いをしないで欲しい！俺はただ師匠の顔を立てただけだ
」！」

そうまくし立てると一夏は早足で歩き去ろうとする。

その姿に楯無は、悪戯を思い付いたようなクスリとした微笑を浮かべると、一夏に声を掛けた。

「一夏君！」

「なんですっ！」

「できれば私のことは『楯無』って名前で呼んで欲しいな」

その言葉に一夏は首だけ動かして楯無の方を向く。

そして、いわゆるジト目で楯無を見ながら一言だけ言った。

「却下で！」

そのまま一夏は歩き去っていく。

それを見送った楯無は微笑みながら、自身も夕食のために食堂へと足を向けた。

夕食をいつもの五人と取った一夏は寮の自室へと向かっていた。

夕食前的一幕、色々なことがあったと思いつ返すが、一つ納得したことが一夏にはあった。

(どつりで強いわけだ)

それは楯無の実力。

最強を名乗るつもりなど微塵も無いが、一夏は自身の実力になれなりの自負を持っている。

無論、世の中には自分が知らないだろう優れた使い手がまだまだ居ることも理解している。

だが、こと同年代ならば自分に、ましてやスポーツではなく実戦形式で比する者はそう居ないだろうと思っていた。

そこへ現れた楯無。自身を完敗せしめた人物。

敗北という事実と思うところは多々あるものの、それはそれとして既に自分の内で割り切りをつけた。

気になったのは、その実力の源。

そして理解をさせられた。師の、宗一郎の手ほどきを受けたのならば致し方なし。

そう判断した上で、一夏は翌日からの楯無による訓練に思いを馳せる。

(上等だ)

思惑通り、実力を上げてやろうと思った。

そして、楯無を上回る実力をつけた暁には再戦を挑み、楯無に完膚なきまでの敗北を与える。

それを考えれば、溜まっていた諸々の鬱憤が晴れたような気がした。

(いいだろう、覚悟しておけ更識楯無。俺はあんたを踏み台にさせてもらおう)

コーチをしてくれることに関しては純粹に恩を抱く。だが、だからと言って敗北の雪辱をそのままにするつもりは、一夏には毛頭なかった。

いつそ冷徹と呼べる思考をしながら一夏は寮の廊下を歩く。その表情は十人に聞いたら十人が「悪党だ」と答えるような、柄の悪い笑いを浮かべていた。

そして自室に着いた一夏は部屋のドアを開けて

「お帰りなさい。ご飯にします？お風呂にします？それとも、わた・し？」

いわゆる『裸エプロン^{男のロケ}』の格好で一夏を出迎える楯無に遭遇した。

「……………」

バタンツ

一夏は無言でドアを閉める。そのままドアの隣にある部屋番号と名前を確認する。

「1025室 織斑一夏。うん、俺の部屋だ」

一度ゴシゴシと目をこすり、再度確認。やはり一夏の部屋だった。そして再びドアを開け部屋に入る。

「お帰りなさい。ご飯にします？お風呂にします？それとも、わた・し？」

やはり楯無が『裸エプロン^{漢のロケ}』の姿で居た。『裸エプロン^{世の男子の憧れ}』である。

やや前傾の姿勢は、楯無が持つ女性特有の一部の膨らみが強調される姿勢だった。

「……………」

「一夏く〜ん？」

一夏は無言で楯無の脇をすり抜けると、自分のベッドの脇に向かう。楯無が呼びかけるが、一夏は反応しない。

ベッド脇に辿り着いた一夏はそのまましゃがみ込むと、ベッド下の収納スペースを開く。

その中には金属の輝きが大量に光っていた。夏休みの修業の折、宗一郎から持たされた暗器などだ。

そして、小刀や手甲などに混じって、ひと際丁寧な保管のされ方をしているものがある。一夏の愛刀『陽炎』である。

陽炎を手を取った一夏は収納スペースをしまうと、立ちあがって楯無に向き直る。

「あり？一夏く〜ん？」

『裸エプロン』のまま楯無が苦い笑いを浮かべる。その額には僅かに冷や汗が流れている。

彼女は気付いた。一夏の額に青筋が浮かんでいるのを。

「会長、さっき言ったな？『飯か風呂か自分か』って」

夕食前に見せた礼節を含んだ言葉ではなく、初対面の時のような口調で言う一夏。その声は引き攣った笑いを含んでいた。

「答えは四つ目の選択肢だ」

一夏は陽炎の鞘を持つ左手を眼前まで掲げ、右手で柄をつかむ。そのままゆっくり両手を引き離し、刀身を露わにする。鞘をベッドの上に静かに置くと一夏は両手で柄を持ち、正眼に陽炎を構える。

「覚悟おおお!!!」

そのまま怒声と共に楯無に斬りかかった。

「チョツ！一夏君それはシャレにならないって!!!」

「やかましい!!!少しは敬意を払ってやろうと思ったのに!!!あんたは俺の気持ちを裏切ったんだ!!!」

「でもほら!こういう格好、一夏君も好きでしょ!?!」

「本音を言えば大いにアリ!!!でもTPOわきまえるバーカバーカ!!!」

ドツタンバツタンと大きな音を立てながら二人は室内を駆けまわる。一夏が陽炎で切りかかれれば、楯無は猫のような軽い身のこなしでそれをかわす。

「というか水着着用かよ!?!それは邪道だろう!!!」

「ゴメンね〜!さすがにお姉さんも羞恥心はあるのよ!」

「水着も十分アウトだろう!?!」

「パンツじゃないから」

「そこから先は言わせねえ！！」

互いに一般レベルを大きく超えた運動能力を駆使して、駆け回るには少々手狭な室内を、自在に動き回る。さらに驚嘆すべきは、これだけ激しく動きまわりながら、室内の備品に一切の損傷がないことだろう。

盛大なまでの技術の無駄遣いだった。

この後、騒ぎを聞きつけた幕がやってきて事態はさらに混迷を極めるのだが、それはここでは割愛することとする。

第五十話（後書き）

今回、少々武術の講釈みたいなのがありますが、頑張っ
てウィキペとか使って調べましたww

調べて思ったのですが、武術って面白そうだと。

自分、小中サッカーの高校弓道だったのですが、小学校あたりで空
手とかでもやれば良かったかな？なんて思ったりします。

一夏はヒロインズを落としますが、楯無は逆に一夏を落とせると作
者は思う今日この頃です。

第五十一話（前書き）

今回は、まあ少々ネタが過分に含まれております。

一夏が暴れて色々やっちゃってくれているし、たまには「こいつのも
アリかな」と思って書きました。

反応が怖いなあ…

第五十一話

夕食が終わってからしばらくの後、箒は口元に微笑みを浮かべながら寮の廊下を歩いていた。

向かう先は一夏の部屋。その手には弁当箱がある。

「フフッ」

このあとの一夏とのやり取りを想像して箒は小さく笑う。

弁当箱には箒の手製、彼女の母直伝のいなり寿司が収められている。

共に剣道を学んでいた頃、家計のために千冬が働きに出て一夏が家に一人の時は、箒の家で食事を共にすることもあった。

そして当時の一夏が特に好んだのが、箒の母手作りのいなり寿司。

出汁の利いたしつかりとした味の油揚げに、対照的に酢が利いたシヤリ。この二つがおいしい塩梅に組み合わせり、まさに絶品と言える味に仕上がっていた。

(一夏、夕食をあまり食べていなかったからな。きつと腹を空かしているに違いない。そこに私からの差し入れ。一夏は喜ぶに違いない！)

両手が塞がっているため、箒は心の内でガッツポーズを取る。

箒の予想は間違っていない。楯無との手合わせの際、最後の楯無の一撃で一夏が腹部に受けたダメージは、一夏の夕食に影響を与えて

いた。

そのため一夏は夕食の量を減らし、その影響による空腹が一夏を襲っていた。

襲っていたのである。何故過去形か。

それは筈が一夏の部屋の前にたどり着いた時に、部屋から聞こえてきた物音が理由を示していた。

「ん？」

部屋の前にたどり着いた筈の耳に入ってきたのは、一夏の怒声と女子生徒の声、そして人が室内を跳ね回るような重い音だった。

「な、なんだ…？」

訝しげな表情で筈は耳を澄ます。

『デデデデストロオーイ！』

『無駄無駄無駄無駄無駄よ！』

『あなたにはここで果てて貰う！理由はお分かりだなあ！？』

『なんのことがしらあ！』

『所詮は獣か！人語を解しはしないか！』

『ふっ！当たらなければどうということはないわ！』

『消えるイレギュラー!!』

「い、一体何事なのだ？」

訝しげな表情から、困惑の表情に変わる篤。

一夏の部屋から聞こえる女性の声。普段ならばすぐにでも部屋に飛び込んでいただろう。少なくとも、想い人である幼なじみの部屋から女性の声が聞こえて、平静を保てることはない。

しかし、実際に部屋から聞こえる怒声や物音による困惑が、逆に篤の平静を保っていた。

「は、入るぞ一夏！」

少し緊張しながらも、篤は意を決して一夏の部屋に入ることにする。

そして弁当箱を片手に持ち、一気にドアを開け放った。

そして、部屋に入った篤の目に映ったのは

「ハア、ハア、すばしっこい…！」

「フウ、フウ、流石にそれで斬られたら、おねーさんも死んじゃうもの」

息を荒げる刀を構えた一夏と、裸男の眼福エプロン姿の楯無だった。

「これは…」

どう反応したらいいのだろうか？

それが箒の率直な気持ちだった。

異性を公序良俗に反するような格好で部屋に入れている一夏を叱るか、それとも刀を構えて今にも生徒会長に斬りかかりそうな一夏を止めるべきか。

有り体に言ってカオスとしか言えない状況に、箒は困惑していた。

「い、一夏？」

とりあえず状況を聞くだけ聞いてみよう。

そう思った箒は一夏に声を掛ける。

「箒か、丁度良い。手を貸せ」

「は？」

箒の言葉に反応した一夏は、楯無を睨みつけたまま箒に言葉を掛ける。

「この会長を始末する。手を貸せ」

「いや待て一夏。いきなりどうした。待て待て、始末とはなんだ。早まるな」

いきなりな一夏の言葉に箒は困惑する。

察するに、一夏が楯無に対し何らかの怒りを抱いているのは分かったが、それにしても一夏の言葉は物騒だった。

とりあえず箒は一夏に落ち着くように言う。

箒の言葉に楯無も同意するように頷きながら言った。

「そうよ箒ちゃん！箒ちゃんも言っただけよ！」

「どやかましいわ！あんたは黙れ！」

楯無の言葉に一夏は激昂する。

「もう我慢ならん！朝もそうだし！散々人をおちよくりやがって！もう斬る！ぶった斬ってやる！それで俺が新しい生徒会長だ！俺の都合の良いようにルール変更だ！」

「いや、流石にそれは無理だろう」

激昂しながらまくし立てる一夏の背後で、箒は思わずツッコミを入れる。

しかし、一夏のボルテージが止まる気配はまるで無かった。

「そつだ！生徒会長に、俺はなる！！！」

「いやだから、少し落ち着け一夏」

「フフン。下剋上とは面白いわ、一夏君」

「会長も煽らないで下さい！」

怒る一夏と挑発する楯無。両者に対しつい突っ込む箒。

もはや箒は扇情的な姿の異性を部屋に入れている一夏への怒りを感じていなかった。

あまりに突っ込み所のある状況や言動に、逆に冷静になっただけだ
が。

「そつだ。俺こそが、学園を導く、IS操縦者だ!!」

怒りの余りか、支離滅裂になった言葉と共に一夏は楯無に斬りかか
ろうとする。

それを箒は背後から慌てて羽交い締めにして抑えようとする。ちな
みに弁当箱は部屋の隅の安全圏に退避済みである。

「離せ箒！そいつ殺せない！」

「殺してはダメだろう！いつの間にお前はそんなに物騒になった！
？」

「ついさっき！」

「唐突過ぎるぞ!？」

ヤイノヤイノと漫才みたいなやり取りをする二人。それを楯無は頬
を掻きつつ、苦笑いと共に見ていた。

ちなみに、箒の物騒云々の発言に対する一夏の返答。それを学園生
の中で幼少期以降の一夏について比較的詳しい鈴が聞いたら、この
ように突っ込みだろう。

「いや、あんた結構前から物騒だったじゃない」と。

そして、箒を交えて三人で一騒ぎした後、一夏が落ち着いたため状
況は一旦収拾。

箒に対し一夏が状況の説明を行うことになった。ちなみに楯無はき

ちんと学園の制服を着直した。

「いや、このいなり寿司美味しいな。懐かしい味だ」

目の前に置かれた弁当箱から取ったいなり寿司を頬張りながら、一夏が朗らかな調子で言う。

「喜んでくれるのは嬉しいが、一体何事だったのだ？」

未だ事情を知らない筈は不思議そうな顔で一夏に問い掛ける。

「いやー別にー？会長がふざけてただけだから、ちと灸をくれてやろうと思っただけだぞー？」

「ちゃんと私の目を見て答える」

筈から目を逸らしながら棒読み気味に答える一夏に、筈が突っ込む。

「まあまあ筈ちゃん。細かいことは気にしちゃダメよ。せつかく美味しいいなり寿司があるんだから、これを楽しみましょう？」

楯無もいなり寿司を食べながら一夏に同意するように頷く。
先程まで真剣で追い掛けられていたとは思えないほど軽い口調に、
筈は調子を狂わされる。

「いや会長」

「楯無って呼んでちょうだい」

「……楯無先輩も、そんな調子でいいのですか？」

「いいのよ。後輩の溜まった衝動を処理してあげるのも、先輩の役目だから」

「言い方ってモノを考えてくれねえか、会長さんよお」

苦々しい顔で睨みつける一夏に、楯無はウインクをしながら返す。

「あら、楯無って呼んでくれていいのよ？」

「嫌だ」

そして一夏は深くため息を吐く。

「それで、なんで会長は俺の部屋に居たの？」

このままでは話が拗れそうになると判断した一夏は、強制的に話題を変更することにする。

一夏の言葉に、楯無は思い出したように手をポンと叩いて言った。

「そうそう。私、今日から一夏君の部屋に住むから。よろしくね？」

「」「は？」

一夏と箒が揃って疑問の声を上げる。
そして一夏は慌てて部屋を見回す。楯無を追い掛けていた時には気づかなかつたが、よく見回してみれば室内には見覚えの無い物が幾つかある。おそらくは楯無の私物だろう。

「どついうことだ一夏！」

「知らねえよ！俺が聞きたいわ！」

憤った箒が一夏を問い詰める。しかし、一夏も一切知らなかつたために、箒同様に憤る。

「まあまあ二人とも、落ち着いて頂戴。説明はするから」

楯無の言葉に、二人は説明をするならばと一先ず落ち着きを取り戻す。

もっとも、元凶である楯無に宥められたことで、一夏は「どの口が落ち着けと言う」と言わんばかりに渋々とした様子だったが。

二人が落ち着いたのを見計らい、楯無は口を開いた。

「さて、どうして私が一夏君の部屋に住むと言うと、これから私が一夏君のコーチをするからよ。より効率の良い学習のために、二人の間での相互理解は必要不可欠。これもその一環というわけ」

「そ、それだけですか！？」

「それだけなんてことでは無いわ。とても重要なことだと思っけど」

楯無の説明に納得できないのか、箒が声を荒げる。しかし、楯無はそれを涼しい顔で受け流す。

「おっしゃる理屈は分かります！しかし、そんな、二人が同室でな
ど認められません！」

「そつだそつだ。箒、もっと言ってやれー」

箒の抗議を一夏は支持する。しかし、依然楯無が余裕の態度を変え
る様子はまるで無かった。

「そつは言っても、もう申請は通っているのよね〜」

「な、なら！私もこの部屋に住みます！」

「へ？」

あまりに唐突な箒の言葉に一夏が呆けた顔になる。そんな一夏を完
全においてけぼりにしながら、箒はまくし立てる。

「そつだ！年頃の男女が同室など、風紀に反します！私が監督者と
して、間違いが起きないように」

「安心しろ箒。お前の想像する間違いなんざ、絶対に無いから」

呆れた様子で一夏は箒に突っ込みを入れる。しかし、一夏の言葉に
納得できないのか、箒はなおも不満そうな表情をしている。

「そもそも、ここ二人部屋だし。三人は無理」

「だが一夏！そんな、若い男女が二人など！だから私も」

「男一人に女二人の方がよっぽど問題だろ。だいたい、男女二人を言うのなら、最初の頃の俺と箒もそうじゃねえか」

「そ、それは…」

一夏の至極真つ当な指摘に箒は言葉に詰まる。

言葉を詰まらせながら、箒は何か反論できることは無いかと思考を巡らせる。そして再度口を開く。

「そもそも一夏！お前は良いのか！？お前も問題というのは分かっているのだろうか！？」

これまた至極真つ当な箒の反論。

それに対し一夏は軽く息を吐くと、箒の肩にポンと手を乗せて言った。

「箒、俺はな。たった一日だけど、悟ったよ」

「悟った？」

問い返す箒に一夏は頷く。その表情は、どこか諦めたようなものだった。

「この会長はかなりの食わせ者だ。朝の一件、あのふざけた企画も、しっかり学園側に認めさせた辺り、根回しの技術は確か。多分、この部屋のこと根回しは済んでるだろうよ」

そう言つて一夏は半眼で楯無を睨む。

一夏の視線に合わせる形で箒も楯無に目を向ける。

二人の視線を受けた楯無は、ニツコリとした笑顔で頷く。それが全てを物語っていた。

「察しが早くて助かるわ、一夏君。ご明察」

その言葉に一夏はガツクリと頭を落とす。何故かその背から悲壮感が漂つのを、箒は見たような気がした。

「そうそう、言い忘れてたわ。箒ちゃん、あなたにも話があるの？」

「な、なんですか？」

楯無の言葉に箒は僅かに身構える。一夏があれだけしてやられた楯無に話を振られたのだ。身構えるのも無理はないというものである。

「あのね、一夏君と一緒に君にも私がコーチをしてあげるわ」

「え？」

予想外の楯無の言葉に箒は呆ける。一夏も楯無の言葉が意外だったのか、僅かに目を見開いて楯無に目を向けていた。

「使えていないんでしょ？絢爛舞踏」

「それはっ」

箒が言葉を詰まらせる。紅椿の単一仕様能力「絢爛舞踏」。紅椿を

最高性能のISたらしめる要の能力。消滅の零落白夜に対を為す、エネルギーの完全回復能力。

臨海学校の福音戦で発動したソレだが、その時の戦い以降、一度として箒は絢爛舞踏を発動できずにいた。紅椿のデータベース上には確かに絢爛舞踏が登録されているため、何故発動できないのか。それが箒には分からずにいた。

箒が険しい視線を一夏に向ける。言葉にせずとも、「話したのか？」と問い詰めるのを、目が物語っていた。箒の視線に一夏は首を横に振って答える。

「単一仕様能力はね、搭乗者とISの意識が同調して初めて使えるの。箒ちゃんが絢爛舞踏を使った時の気持ち、それを意識すれば、きつとまた使えるようになるわ。私はそのお手伝いをしたいの。もちろん、基本的な操縦技術の指導もしてあげるわ」

「それは……」

箒は言葉を詰まらせて俯く。技術指導をしてくれるのは素直にありがたいと思うが、絢爛舞踏のこととなると話は別である。

福音戦での思い、絢爛舞踏を発動させた時の気持ちは今でもよく覚えていいる。しかし、その内容を思い出して、箒は気恥かしさに顔を赤らめた。

思わず箒は横に居る一夏の顔を見る。

「どっした？」

「な、なんでもない……。その、私はこれで……」

そう言つて箒はそのまま部屋を立ち去る。その顔は未だ赤いままであつたが、ちよつと陰になつていたため、一夏が箒の顔の赤みに気付くことはなかつた。

「ふむ…」

一夏は箒が部屋を出ていくのを見送ると、再び楯無に向き直る。その顔はやや不審を拭えないものだった。

「で、本気で俺の部屋に住むつもりで？」

「もちろん 何せ私と君はこれから一つの師弟に」

シャリン

「あら？」

「一応、あなたの指導は受けるけどさ、あまり調子の乗るのは勘弁して欲しいな」

一夏が手に持っていた陽炎、その刀身が一瞬で抜き放たれ、刃が楯無の首筋に添えられていた。

「俺の師は海堂宗一郎ただ一人。あなたはコーチではあつても、俺の師ではない」

断言する一夏。その口調は固く、一切の悪ふざけを許さないものだった。少しでも油断しようものなら、即座に凶刃が振るわれる。一夏の放つ殺気がそのことを雄弁に物語っていた。

「なら、そういつことにしときましょ」

ゆっくりと、人差し指の先を刀身の側面に当てて刃を遠ざけながら楯無が言う。努めて平静を保っていたが、その背には明らかかな冷や汗が流れていた。

一夏は陽炎の刀身を楯無から離すと、鞘に納める。そのまま楯無に背を向けるとドアに向かって歩いていく。

「あれ？どこ行くのー？」

「屋上で少し素振りしてきます」

一夏の素っ気ない返事に楯無は苦笑を浮かべる。

(いやはや、思った以上にやりにくいな)

そんなことを考えつつ、楯無は部屋を出る一夏の背を見送る。

「できれば後で、おねーさんにマッサージして頂戴？」

「時間があればー」

そのまま一夏は部屋を出る。閉じられたドアを見て、楯無はヤレヤレと言いたげに肩をすくめた。

「さて、さつさと屋上に」

「一夏」

部屋を出た直後、一夏に掛けられる声。声の主はシャルロットだった。その後ろにはラウラも居る。

「ん？シャルにラウラか。どうした？」

楯無と話していた時とは違い、明るい様子で一夏はシャルロットに話しかける。シャルロットは笑顔を浮かべたまま口を開いた。

「あのね、さつき箒に会ったんだけど、箒のお手製の料理を食べたんだって？」

「ん？ああ。いなり寿司っていう寿司をな。そうか、二人も誘えば良かったな」

「ううん、それは大丈夫だよ。僕も今度箒に頼むから」

「そうか、そりゃ悪かったな」

朗らかな様子で会話をする二人。なぜかラウラが黙ったままだったのが一夏には気になったが、ひとまずはシャルロットとの会話を優先することにした。

「でね、今度僕も一夏に料理を作っであげたいな〜って思っただ」

その言葉に一夏は笑顔を浮かべる。

「そりや楽しみだ。本場フランスの味、是非味わってみたい」

一夏の快諾にシャルロットは満足そうに頷く。

「でね、それとは別で一夏に少し話があるんだ」

「そうなのか？」

「うん。あのね　生徒会長と同室って、どういふことかな？」

瞬間、空気が凍りついたのを一夏は感じ取った。

「え、いや、それは、その〜」

頬が引き攣るのを一夏は感じた。見れば、いつの間にかシャルロットの目が据わったものになっていた。

思わず一夏は眼を反らしながら口ごもる。

「ねえ、一夏。どうして目を反らすのかな？ちゃんと説明して？」

目が据わっているのに、朗らかな様子を崩さずに尋ねてくるシャルロット。そこでラウラが初めて口を開いた。

「すまない、兄様。私は何とか抑えようと思ったのだが……」

どこか悔しそうなラウラの言葉に、一夏はラウラの努力を知った。

ヤバイ。一夏の思考が一気に警報を発する。デフコンはレベル1。対応を誤れば、冗談抜きで危ないと判断した。

背中に流れる冷や汗を感じながらも、一夏はシャルロットに説明をする。

楯無がコーチにかこつけて押しかけて来たこと。こちらがどうこうする前に根回しを済まされたこと。完全な不可抗力であり、自分に一切の非が無いこと。

とりあえず、全責任を楯無に押しつけてやろうと思いつながら一夏は弁明を試みる。シャルロットが怒っているのは明白。そして一夏がすべきは、その怒りを宥めるか、矛先をずらすかのどちらか。

何故か無意識のうちに、一夏はシャルロットの怒りの矛先を楯無に向ける方に選択をしていた。どうやら、朝からの一連の諸々の恨みは、相当に根が深かったらしい。

そして一夏の必死の弁明に、シャルロットは納得したように頷く。

「へへ、そうなんだ」

「そう！そうなんだよ！俺は悪くない。悪くないんだ！」

自身の潔白を必死で訴える一夏。その姿からは試合などで見せる覇気は微塵も感じられなく、どこか哀愁漂う情けなさがあった。

「そっか、分かったよ。一夏は悪くないんだね」

「わ、分かってくれて嬉しいぜ、シャル。じゃ、俺は修業があるからこれで。文句は部屋に居る会長に」

そそくさと場を離れようとする一夏。彼の脳内警報は、留まり続けることに対して、最大級の警告を引っ切り無しに鳴らしていた。

「一夏、待って」

しかし無情なるかな。

歩き去ろうとした一夏は、シャルロットに肩を掴まれることにより、動きを止めることとなった。

肩を掴まれた瞬間、一夏は背に凄まじい悪寒が走るのを感じた。

「ど、どうした？」

「一夏は悪くないんだよね。僕は分かってるよ？一夏のことを信じてるから。でもね、やっぱり僕は心配なんだ」

「な、何を…？」

「うん。一夏が会長さんと変なことになったりしたら、僕…」

シャルロットの言葉に、一夏は必死に首を横に振る。

シャルロットが抱いた疑念を解こうと必死なのが、よく伝わる姿だった。

そんな一夏の姿を見たラウラは何もできない自分を悔やみ、心の内で一夏に詫びる。そして、できる限り一夏の助けになろうと、決意を新たにした。

「本当？一夏は変なことしない？」

「しないしない！するわけない！」

これは一夏の本心である。

確かに、年頃の男女が同室などと聞けば、シャルロットでなくとも

誰もそうした想像をする。

一夏とて、そうした思考の道理は理解していた。だが、一夏は断言できる。あの楯無相手に限って、そのようなことは絶対に無いと。

「そっか。良かった」

一夏の言葉に、シャルロットは一気に表情を笑顔に戻す。

どうにかシャルロットの疑いを解けたことに、一夏は内心で胸を撫で下ろす。

「じゃ、行くっか」

「へ？」

しかし、その後のシャルロットの予想外の言葉に、思わず一夏は呆ける。

「行ってくて、どこに？」

「僕の部屋。ちゃんと一夏に約束させなきゃね あ、ラウラは悪いけど、しばらく待ってて貰える？ ちよつと一夏と二人になりたいんだ」

その言葉にラウラは素直に頷く。シャルロットの放つ異様な気迫が、自然とラウラを頷かせていた。

しかし、未だ一夏は理解が及ばずにいた。

「いや、シャル？ 俺は修業が…」

「一夏？」

「はい」

「行くよ？」

「はい…」

観念した一夏はそのままシャルロットに手を引かれていく。ドナドナがBGMに聞こえそうな一夏の背を、ラウラは自身の無力への悔しさを噛み殺した敬礼と共に見送った。

ちなみに、一連のやり取りを部屋のドア越しに聞いていた楯無も、一夏のために合掌をしていた。

同時に彼女は、少し一夏を気遣おうとも思った。

「ねえ、一夏。ちゃんとオハナシしようね？」

手を引かれながらシャルロットに言われたそんな言葉。

それを聞いた一夏は、何故か上空から自作ISで巨大ビームをぶっ放す束の姿を幻視したという。

それからしばらくの後、シャルロットに解放され、なんとか自身の修業もこなし自室に戻った一夏は、酷くやつれていたという。そんな一夏を見た楯無は、すぐに一夏に休むよう勧め、それに従った一夏は自分のベッドに倒れ込み、そのまま意識を落とした。

意識を失う直前、自身を気遣った楯無に一夏は、初めて感謝の念を抱いた。

第五十一話（後書き）

というわけで、今回の話はいかがでしたか？

原作では楯無の同室に篤がキレましたが、ここでは一夏がキレて、篤がストップパー兼ツツコミになりました。

とは言え、一夏も刀を抜いて本気の殺気をぶつけこそすれ、その場で斬るということはありません。

流石に問題だということは理解しているので、あくまで脅しに留めています。

「やるならごく自然に」という感じでしょうかww

そして、シャルの病み描写。

相変わらず上手く書けたか不安です。

病み描写は実に難しいものです。

そして、今回の話に含めたネタ。

前書きにも書きましたが、少々過分になったと思いますが、作者としてはギリギリ大丈夫と判断したりしています。

「このネタはコレだろ」と気付いた方、是非感想にてどうぞ。作者が喜びます。

次回以降は一夏と楯無の練習風景を含め、少し日常描写をやりたいと思います。

夏も終わり、浪人の受験も忙しくなる中で、結構大変な日常描写。ますます更新が遅くなると思いますが、どうかご容赦のほどを。

それでは、また次回の更新にて。

第五十二話（前書き）

一夏と楯無の訓練その1です。
原作でもあった射撃訓練となります。

第五十二話

一夏と楯無の訓練風景その1「IS編」

その日の放課後、一夏は楯無と共に学園第三アリーナを訪れていた。さらに訓練の随伴として、いつもの専用機持ち五人組も居る。

学園には複数の訓練用ISアリーナがある。単なる訓練スペース確保のためであるが、アリーナによっては意図する使用目的が異なるものがある。

例えば、クラス対抗戦や学年別トーナメントで使用されたアリーナは、学園内でも最大規模の広さを持ち、より本格的なIS同士の戦闘に適している。

また、別のアリーナは学園内でも別格の高さを誇るタワーと繋がっており、こちらのアリーナはISの高速機動訓練に適している。

そして今、一夏達が使用している第三アリーナは、比較的射撃訓練に適している訓練場となっている。

「と、言うわけで、楯無おねーさんによる一夏君のIS訓練を始めます」

やたらと高いテンションで訓練開始を宣言する楯無。そのテンションの高さに、楯無の要請で集められた五人はポカンとし、一夏は憚然とした表情をしている。

「で、何をやるので?」

楯無のテンションに付き合う必要は無いと言わんばかりに、一夏が

楯無に訓練内容の確認をする。

一応、最低限の敬意は含めようとした努力の見える、ツツケンドンな物言いに楯無は苦笑いを浮かべながら頬を掻く。

「一夏く〜ん？もうちょつとりラックスしない？」

「生憎、修練で気を緩めたことは一度たりともないもので。というか抜けなかったもので」

そう言つて一夏は僅かに顔を苦いものに歪める。

楯無に答えながら、一夏は自信の剣術修業を思いだしていた。

有り体に言うならとにかく厳しい。

師の課す訓練は、単に剣術を学ぶだけではない。徹底した体作り、限界を超えることが至極当たり前の基礎トレーニングのひたすらの繰り返し。

強力な剣術を振るに耐えうる体を作ること。弟子入りしてからの最初の一年はそれに徹した。無論、既に本格的に剣技を学んでいる今も、そうした基礎トレーニングは怠ってはいないが。

一切の妥協無く行われる修業。その苛烈さたるや、ついていける者など極少数だろう。

少なくとも、今この場に居る七人では、自身と楯無とラウラくらいのものでらうと言うのが一夏の見立てだった。

そして、宗一郎の手ほどきを受けたことのある楯無は、一夏の言葉に納得したのか、乾いた笑いを浮かべていた。

「アハハ、なら始めよっか？」

その言葉に頷く一夏。

そして楯無はセシリアとシャルロットに目を向けた。

「じゃ、早速で悪いけど、二人にちよつとやってもらいたいことがあるの。シューター・フローと円状機動制御^{サークル・ロンド}、一夏君へのお手本にやっつて貰えるかしら？」

そう楯無に言われた二人は、意外そうな表情を浮かべた。

「え？それですか？でもそれって、射撃主体の基本機動ですよね？」^{ガンナー}

「やれとおっしゃるのでしたらやりますが、近接主体の一夏さんには……」

二人の言う通り、楯無の提示した機動は射撃戦闘を主体的に行う者の機動である。

そして一夏の戦闘形態が刀による近接格闘であるのは周知の事実。知らないよりはマシと言えるが、手本として見せたところで大きく役立つとは思えなかったのだ。

二人の疑問に楯無が答えようとするが、それより早くラウラが答えを言った。

「それは白式の第二形態移行で、射撃兵装が追加されたからだな？」

「ラウラちゃん正解」

ラウラの的を射た発言に、楯無は笑顔でラウラを褒める。
しかし当のラウラは、このくらいは当然だと言わんばかりに鼻を鳴らすだけだった。

白式の射撃兵装。

言うまでもなく、腰部装甲に取り付けられているサイドバインダー

「迦楼羅」のことだ。

「模擬戦のデータを見たけど、一夏君の射撃技術ははつきり言ってまだまだ甘い。だから、せっかくの射撃兵装を有効に活用して貰うために、一夏君には射撃戦闘のイロハを学んで貰うわ。その第一段階が、基本機動なの」

分かった？という言葉と共に楯無は一夏を見る。

素直に頷く一夏だったが、その表情はどこか惘然としている。
そして今度は一夏が口を開いた。

「一応、理解はしましたがね。正直、俺が射撃兵装を使っつてのは、俺自身あまり想像できなんだ」

「あら、そうなの？」

意外だという表情をする楯無に一夏は頷いてから返す。

「そも、俺と白式のバトルスタンスは至ってシンプル。『近付いて斬る』、これに尽きる。最強の剣を与えられているのだから、これで十分だと思いますがね」

その言葉に楯無を除く五人は、どこか納得するように頷く。
先の言葉通り、今までの一夏の戦い方はただそれだけだった。

形態移行前の白式がそれしかできない機体だったというのもあるが、何よりその戦い方が一夏には最も合っているというのが、五人の共通の見解だった。

事実、形態移行後も一夏は迦楼羅の射撃機能は数えるほどしか使用していない。

せっかく追加された射撃兵装なのだから、使った方が何かと得だと思いは持っていたが、剣だけで戦い抜いている一夏を見ると、それでもいいかという考えを五人は抱いていた。

そして一夏自身、確固とした理由を以って迦楼羅の射撃機能を使用せずにいた。

第一に、本気で迦楼羅を使うとエネルギーの消費が大きいこと。

第二に、そもそも一夏自身が射撃技術の下手ぶりを分かっていること。

この二点の理由で、一夏は迦楼羅の射撃をあまり使用しなかったのだ。

そして一夏はこのことを楯無に言う。

しかしその程度で引き下がるほど、更識楯無という人間は甘くは無かった。

「えいつ」

パシッ

「何を一体」

唐突に愛用の扇子を取り出した楯無は、閉じたままのソレで一夏の

頭を叩こうとする。

しかし、扇子は途中で一夏に掴まれて動きを止めた。

「君の言うことにも一理はあるわ。でも、これはとても必要なことよ？」

諭すように言う楯無に一夏は不敵な視線を向けた。

「なら、どう必要なかを言って頂きたいですね」

すると楯無は、まるでその言葉を待っていたと言わんばかりに、一夏以上に不敵さを秘めた笑みを浮かべる。

その顔を見た一夏は、知らぬ間に自分が地雷を踏んだのではと、僅かに危惧した。

「何に必要かって言うとな、実に簡単な話。勝てるわよ、もっと」

瞬間、一夏がピクリとあからさまな反応をしたのを五人は見逃さなかった。

「確か今の一夏君の戦績は、別に一番じゃなかったわよね？もし私の訓練を受ければ、一番になれるかもしれないわよ？」

「…っ…っ…」

無言で俯いたまま一夏は体を小刻みに震わせる。時折ピクリと大きめに動いているのが、一夏の心情の揺れを表しているかのようだった。「強くなれる」「一番」これらのワードが一夏の心を大きく刺激していた。

少ししてから体の震えを止めた一夏は無言で五人の方を向く。

「どう思うよ？」

簡潔に問いを発する一夏。その言葉に五人は一斉に表情を微妙なものに変えた。

「いや、どうと言われても私には…」

答えに困るといった表情の筈。

「一夏さんの望むようになさればいいと思いますわ」

至極無難な笑顔で、これまた至極無難な返事をするセシリア。

「あたしとしては、これ以上あんたが凶悪になるのは勘弁願いたいんだけどね」

苦笑いを浮かべる鈴。

「僕はもつと強くなった一夏を見たいな。僕はいくらでも手伝うからね？僕が、手伝うからね？」

一夏の実力向上を肯定しつつも、何故かプレッシャーをかけるシャルロット。

「強くなってこそその兄様だ。私も張り合いが持てるぞ」

一夏が強くなることを我が事のように嬉しそうに語りつつ、よりハイレベルな戦いを一夏とできることへの闘志を燃やすラウラ。

五人の反応を見た一夏は軽く頷く。

「なるほどなるほど…」

そして一夏は楯無に向き直ると、再び口を開いた。

「し、仕方ないな。会長がそんなに俺を鍛えたいっていうなら、鍛えてもらおうじゃないか。か、勘違いしないで頂きたいな。あくまで俺が強くなるためであって、会長の顔を立るとかそんなのは全然無いのだからな。無いっいたら無い」

何故か顔を反らしながら言う一夏。その頬はさらなる実力を付けた自分を想像してか、微妙に笑いの形を取っている。

それを見た楯無は、計画通りと言わんばかりに一夏同様、自身の頬に笑いを浮かべた。

「じゃ、改めて始めましょう。セシリアちゃん、シャルロットちゃん。お願いね？」

そして長い前振り置いて、ようやく一夏の射撃技能向上の訓練が始まった。

「それじゃあセシリア、準備はいい？」

「ええ。いつでもどうぞ」

アリーナ上空。そこでは各々の愛機を展開したシャルロットとセシリアが、獲物を構えた状態で佇んでいた。

シャルロットがセシリアにタイミングの確認をし、彼女の号令で二人は動き始めた。

「じゃあ、行くよ！」

そして二人はゆっくりと動き始める。

一見、通常戦闘時に見られる不規則な動きのようではあるが、実際は両者とも円を描くように動いている。

そして二人の動きは徐々に加速。速度がのってきたところで、二人は互いの獲物を撃ち始めた。

射撃を主体とするだけあり、二人の狙いは至極正確である。しかし、その正確な狙いを二人は巧みに回避する。

狙いの正確さと、回避の確実さ。まさに代表候補の名に恥じぬ見事な技量だった。

「やるね！セシリア！」

「シャルロットさんも！見事なお手並みですわ！」

撃ち合いを続けながら二人は互いに相手を称賛する。

楯無から停止の指示は出ていない。ならばと言わんばかりに、二人は更に動きを加速させていった。

「見事な、ものだな…」

シャルロットとセシリアの動きを見ながら籌が呟く。

現行最高峰の性能を持つ専用機を持っていてこそすれ、彼女自身の技量は未だ高いものとは言えない。

確かに、同年の一般生徒と比べれば彼女の技量も高いものと呼べるが、それでも他の専用機持ちに比べれば、まだ未熟な部分が目につく。

そんな彼女はシャルロットとセシリアが見せる、まさに手本と呼ぶべき動きに純粹に感嘆の言葉を漏らした。

ラウラと鈴も無言で二人の動きを見ている。

代表候補の二人もセシリアとシャルロットが行っている機動は基本的技能として修めている。

しかし、だからと言って見なくてもいいという道理は無く、ガンナ―として、より機動を習熟させているセシリアとシャルロットの動きをしかと記憶に刻もうと、真剣な表情で見っていた。

そして…

「……………」

一夏もまた、鈴やラウラ同様に無言で二人の機動を見ていた。

その目はわずかに見開かれ、動きを見取るどころか、その全てを飲み込もうとするような眼光だった。

「一夏？」

不意に箒が一夏の名を呟く。

彼女の目は、一夏の手の動きに向けられていた。

両手の親指と人差し指で長方形の窓を作り、その窓から覗く形で一夏は動きを見ていた。

「話し掛けるな。視界を少し絞ってる」

簡潔に答える一夏。その対応の素っ気なさは、一夏の集中の高さを示していた。

ほとんど瞬きをすることなく、一夏は見開いた目で二人の機動を見続ける。

一夏の真剣な姿勢に感化されたのか、箒もまた上空に視線を戻し、二人の機動を再度見始めた。

そんな四人の姿を見て微笑みながら楯無は口を開く。

「今、あの二人がやっているのは射撃戦の基礎よ。これは近接戦にも言えるけど、要は動きを利用した駆け引きなの。うまく自分を相手の狙いから外して、逆に相手を自分の狙いに収める。あの円状の機動はその骨子となるものなの」

自身もまた上空に目を向けながら楯無は解説をする。

「特にシャルロットちゃんの動きはまさにお手本になるものだわ。あれはね、機体をマニュアル制御しつつ照準を定めているの。異なる作業の同時並行での制御。機体を完全に物にしていなければ、できない芸当よ」

鈴とラウラは当然知っているとばかりに頷き、箒は再び感嘆の息を漏らす。そして一夏は上空に視線を向けたまま、ただ二人の動きを見続けている。

一見、楯無の言葉が聞こえていないように見える一夏だが、実際は楯無の言葉もしっかりと聞いていた。

楯無もそのことは分かっていたが、何の反応もないことをつまらなく思い、悪戯を思いついた子供のような表情をすると一夏に近づくと

そして、自身の顔を一夏の耳に近付け息を吹きかけようとして

ブンッ

振るわれた一夏の拳を回避するために後方に下がった。

「いったいあなたは何がやりたい」

邪魔をするなど言いたげに、顔を歪ませた一夏に楯無はごまかし笑いをしながら頬を搔く。

「一夏！余所見しないで！」

シャルロットの叱咤が飛ぶ。一夏が楯無に気を取られているのが気に入らないのか、その頬は僅かに膨らんでいる。

「悪い悪い」

そう言いながら一夏は再度シャルロットに視線を向け、表情を緊迫させた。

「シャルロットさん！」

「シャル！避ける！！」

「え？」

一夏に呼びかけたことで集中が逸れたシャルロットは僅かに動きを鈍らせていた。

そんな彼女に、直前に放たれたセシリアのエネルギー弾が向かってきた。

セシリアと一夏の緊迫した声が響く。箒、鈴、ラウラも顔を強張らせている。そして

「きゃあっ！！」

直撃するエネルギー弾。シールドによりダメージこそ無いものの、シャルロットの体が機体ごと吹き飛ばされる。

そのまま地面に激突するかと思っただが、直前に救援が向けられていた。

「シャルロット！」

ラウラの声が響く。駆け出しながらラウラはシュヴァルツエア・レーゲンを展開。シャルロットの落下地点に先回りをする、AICを発動してシャルロットを受け止めていた。

「あ、ありがとう。ラウラ」

シャルロットがラウラに礼を言う。見ていた五人も、大事に至らな

かったことを確認して胸をなで下ろす。

「ナイスだぞ、ラウラ」

一夏の称賛の言葉にラウラは胸を張りながら言った。

「当然だ。そして、この国ではこのような時にこう言つらしいな」

その言葉にラウラ以外の六人が首を傾げる。そしてラウラは軽く息を吸うと、高らかに言った。

「獲ったぞー!!!」

「……………」

沈黙が広がる。特にラウラの言った言葉の意味を理解している一夏、箒、楯無は何とも言えない表情をしている。

「な、なんだ!?!この国ではこのように言つのだとクラリッサから聞いたぞ!?!」

沈黙に気付いたラウラが慌てながら言う。そんなラウラに一夏は近づいて言った。

「ラウラ。とりあえずそれ、使い方違うから」

とりあえず、もしそのクラリッサという人物に会つたらラウラに教えることに関して一言物申そうと思った一夏だった。

さて、一騒動ありはしたものの、セシリアとシャルロットが見事な

模範演技を見せたところで、今度は一夏が実践をする番になった。

「さて、今回一夏君にやって貰うのは一撃必倒型の動きよ。一夏君の射撃兵装には四つのタイプがあるけど、その中の最大火力のものを使ってもらおうわ」

楯無の言葉に一夏が頷く。

迦楼羅最大火力形態。エネルギーをチャージしてからの砲撃である。

「一夏君には、さっき二人にやってもらった動きをしてもらおうけど、はっきり言ってそれだけでは射撃戦はできないわ。なぜなら、射撃戦にはそれ以外にもエイミングや偏差射撃の技能も必要とされるから。流石にこれは今の一夏君には求められないわ」

黙って頷く一夏。できないと自覚していることを改めて面と向かって言われるのは少々癢に触ったが、事実は事実として受け入れた。

「さて。そこで問題が出るわ。これから一夏君にやってもらう射撃は言うなれば一点突破型のスナイパーキャノンと呼べるわ。それを使うのに照準技術が足りないのは致命的。なら、これを補うためにどうすればいいかと言っと」

「近距離から直接叩き込む」

楯無の言葉に割り込む形で言うラウラ。
まさしく正解のその言葉に楯無は笑みを浮かべる。

「そういうこと。じゃ、早速やってみようか？」

そして一夏は白式を展開。同時に迦楼羅の砲身へのエネルギーチャージを開始する。

迦楼羅最大火力形態はエネルギー未チャージの状態で撃とうとする
と、チャージのために発射までのタイムラグが生じる。

しかし、事前にエネルギーをチャージをしておけば、ラグ無しでの
発射が可能だった。

そして一夏は動き出す。

目標はアリーナに出現した的。楯無の指示に従い動きつつ、砲撃を
的に向けて叩き込む。

(これはっ…)

指定された円状機動をしながら、一夏は眉を潜める。

より正確性の高い操縦を要求されるこの機動は、ISのPICも殆
どマニュアルでの制御となる。

機体そのものとPIC、両方の同時制御の想像以上の難度に、一夏
は口元を固く結んだ。

先に見たセシリアとシャルロットの動き。目に若干の疲れを感じる
程に観察し、脳に刻み込んだソレを元に動きのイメージは立てたも
の、早々上手くいくようなものでは無かった。

(こなっ…くそっ…)

口に出さず心の内で悪態をつきながら一夏は機体制御に集中をする。「静」の武術家として修業を積む一夏にとって意識の集中は手慣れたもの。意識の大半を機体制御に集中させ動かす内に、一夏は徐々に機動が安定するのを感じた。

（伊達に「静」のタイプってわけじゃないみたいね。大した集中だわ）

一夏の動きを見ていた楯無は、一夏が見せる集中の深さと確実に安定を見せる動きに内心で感心する。

（けど、まだまだこれからよ）

確かにセンスは良い。大したものと言える。だが、彼女のコーチングはこの程度では無かった。一夏がどうにか機動に慣れたところで、更に次の指示を出す。

「そこで瞬時加速！敵の弾幕を突破と同時に至近距離から砲撃！」

（さあ一夏君。君の手腕、見せてもらおう）

（チィ！このタイミングか！）

楯無の指示に一夏は内心毒づく。

しかし、同時に納得もする。苦勞した状態から抜け出したところで更に追い撃ちをかけるような指示。

なるほど、緊張を保つには丁度良い。

(なら、やってやろうじゃないか！)

そして一夏は瞬時加速を発動させる。

幾度となく行い、短距離瞬時加速などの応用技も編み出した一夏の十八番。

普段とは違う機体制御を行いながら故に勝手の違いを感じたが、それでも瞬時加速を発動する。

緩やかな円機動から、一気に直線の高速移動へ移行。

一夏は的へ向けて白式を一気に走らせる。

そして的に接近した一夏は迦楼羅の砲門を開く。

同時にP I Cを機体の制止に集中させる。迦楼羅の最大火力形態はその威力に相応しい反動が機体に掛かる。然るべき制動ができなければ、砲撃を発射した瞬間に機体が後ろに飛ばされるのは確実だった。

クンッ

P I Cで機体を急制動させたことによるGが体に掛かる。

瞬時加速を強引に停止させるのだから、その大きさはそれなりのものだ。

しかし、第二形態移行前ならいざ知らず、形態移行により各種機能

の大幅な向上を果たした白式は、掛かるGの負担を大きく中和する。余剰分のGが僅かに体に掛かるが、鍛えられた一夏の体からしてみれば、無いに等しい軽さだった。

そして迦楼羅の砲門に白い光が収束し放たれようとした瞬間、それは起きた。

カクッ

（しまった！姿勢がっ）

一瞬、意識が逸れたことによるPICのバランス崩壊。

実際は僅かに姿勢を崩しただけだったが、この状況下でそれは最悪の事態だった。

砲撃の発射はもうすぐだ。PICの立て直しも間に合わない。このままでは、砲撃の際の反動で後方に飛ばされるのは確実だった。

（ならっ！）

このまま無様を晒すのは一夏のプライドが許さなかった。故に、一夏は徹底的に足掻くことにした。

（あちゃー、これは無理かな？）

一夏の体勢が崩れたのを楯無も、他の五人も見ていた。
一夏が予想したように、彼女らも砲撃の反動で後方に飛ばされる一夏を想像した。

それゆえか、楯無以外の五人は表情を心配そうなものに変えている。

(まあ、初めてだから仕方ないかな)

別段、失敗を咎めるつもりは毛頭ない。

及第点とまでは行かずとも、初めてであれだけできれば上々と思ったくらいだ。

失敗したなら、次はできるように練習させれば良い。

そう思った楯無は、至極冷静な様子で成り行きを見守った。

「だああらっしやあああ!!」

故に、一夏の野生味に溢れる掛け声がアリーナに響いた瞬間、楯無は思わず目を剥いた。

「えっ?」

ズドドンッ!

重い音と共に一夏が足を地面にたたき付ける。

一夏の強靭な脚力をISで増幅し、一点にたたき付けた踏み込みは白式の足をアリーナの地面に沈み込ませ、機体を大地に固定させた。

そして放たれる白銀の光条。

「どおおっすりゃああああ!!」

いまいち一夏に似合わない暑苦し雄叫びと共に一夏は砲撃を放つ。
地面に固定された足を基軸に、PICで機体を制御。

放たれた砲撃は真つ直ぐに的へ向かい、的を一呑みにすると同時に蒸発させる。

そして的ごときで止まらない砲撃はそのまま直進し、アリーナのシールドに激突。大きな爆発を引き起こした。

「ふんっ」

力づくで機体制御を強引にやってのけた一夏が鼻を鳴らす。

「っ」……………「っ」

そして、一夏のやったことの無茶苦茶ぶりに見ていた六人の間に沈黙が広がる。

箒、セシリアは啞然とした表情を、鈴は頬を引き攣らせた苦笑いを、シャルロットは喜ぶような笑みを、ラウラは感心するかのような表情を、各々浮かべている。

そして楯無は

(なんてまあ、無茶苦茶な…)

箒の啞然とした表情と鈴の苦笑い、それらを足して2で割ったような、何とも言えない表情をしていた。

間に合わないPICの代わりに、地面に足を固定しての力づくの制動。

おそらく勢いでやったのだらうと楯無は予想するが、それにしても

色々と無茶苦茶と言えた。

そして、どうだ見たかと言わんばかりの表情で一夏が楯無を見る。

(いやあ、これはねえ…)

結果から言えば、まあ上手くいったと言えるだろう。
言えるのだが、如何せんやり方がアレすぎる。

この一連の機動の目的はより正確な機体制御。その観点から見れば、
先の流れは最後に体勢が崩れたのがマイナスだった。

(まあ、面白いものを見せてくれたし、できればOKしたいんだけど
ね〜)

それでは一夏のためにならない。
故に、楯無は心を鬼にして評価を告げた。

「残念、もう一回よ」

その言葉にガツクリと肩を落とす一夏を見て、楯無は苦笑を浮かべた。

第五十二話（後書き）

楯無の喋り方が意外に難しい。

さすが楯無。上手く掴ませては貰えない。

ラウラにアレを言わせたのは、ちょっとしたご愛嬌と思って下さい。

そろそろヒロイン話第二弾を書かなきゃと思うこの頃。

しかし、意外に掘り下げが難しいです。

原作を読んでも、思ったより登場人物の過去についての描写が少ないのですよね。

頑張って脳内補完をしなければならなそうです。

脳みそは妄想のためにある。

…最近、ちょっと詰まってきたりと感じたりします。

特にオリジナル展開とか。書きたいと思っても中々上手くシナリオが作れない。

こういう時、リアルで相談をできる仲間とかあればいいのですが、現状自分はマジで「僕は友達が少ない」状態。

なんとか頑張って書き続けたいです。

ちょっと愚痴っちゃいましたが、作者は今後も頑張ります。それではまた次回に。

感想・ご意見、24時間いつでも受付中です。

第五十三話（前書き）

今回は一夏と楯無の格闘訓練です。

ええ、どっかの史上最強のノリだと言っるのは否定しません。
しても仕方ないです。なぜかこうなっちゃってしまっ…

第五十三話

IS学園には様々な訓練施設がある。

IS操縦者の育成を掲げている以上、IS関連の訓練設備が多いのは至極当然の道理だが、実はそれと同じくらいの充実さで生身での訓練設備もあるのだ。

そも、IS操縦者だからとは言え生身を疎かにしていいという道理は無く、寧ろIS操縦者だからこそ生身を重視すべきという意見もあるくらいだ。

名実共に世界最強の操縦者の称号を持つ教師や、僅か数ヶ月の経験しか無いのに上級生を保健室送りするようなその実弟を見れば、生徒教師はその道理に頷くというもの。

事実として、生徒の中でも代表候補を勤め、他の生徒より経験の深い者などは生身での戦闘技術も優れた物を持っている。

例えばドイツ代表候補生のラウラ・ボーデヴィツヒ。

本国では特殊部隊の隊長を勤め、幼少期から英才的な軍事教育を受けてきた彼女は、その小柄な体格に反して非常に高い格闘能力がある。

他にもイギリス代表候補生のセシリア・オルコット。

常日頃の優雅そのものな振る舞いから、そうしたものは縁遠いと思われるが、実際は彼女も他の生徒より優れた格闘能力がある。

ISとは基本的に各国家が管理を行っている。

一部は研究開発などの為に企業が所有することもあるが、今は置いておく。

国家が管理するISの操縦者になること、それすなわち軍属となることと同義であり、その筆頭となる国家代表や代表候補は最低限の必須技能として、徒手空拳などでの戦闘技能も学ぶのだ。

そして、未来のIS操縦者を育成するIS学園においてもISの操縦訓練の他に、そうした生身での格闘訓練に力を入れている。

これには単なる必須技能だからというだけでなく、至極教育上真つ当な理由も存在する。

「健全な精神は健全な肉体に宿る」

つまりはそういうことだ。

とは言え、たった一機だけでも戦略的に大きな影響を与えるIS。その操縦者には当然ながら、相応の人格も必要とされることを考えると、学園の理念にも合致していると言える。

ただ、学園の生徒においてその健全な肉体代表が扇情的な格好で異性の部屋に入り込む者だったり、それにブチ切れて真剣を持ち出して古流の殺人剣術を振る者だったりする辺り、本当に効果があるのかと疑わしくもあるが、気にしないでおく方が良いだろう。

話を戻す。

改めて言うが、学園の訓練設備は様々である。

部活として存在する空手や柔道、剣道や弓道などの道場を始め、射撃訓練場や各種携行型兵器の運用訓練施設もある。

そして、話はそんな数ある施設の内の一つ。
学園体育館二階、学内に複数ある道場の一角で繰り広げられる。

天下のIS学園の設備だけあり、体育館の一角に設けられたものでありながらも、その道場はとにかく広い。
多数の生徒が大きく動いたとしても十分な余裕がある。

時刻は放課後。

この時間帯になると部活動や自己鍛練を目的とした生徒が修練に励む姿が普段は目に着く。

しかし、今日は人の数が少ない。
使用者の大半を占めている部活動の生徒は別の道場を使用しているため、今日は自主練習の生徒の姿がチラホラと見えるのみである。

そこで胴着を来て組み手の練習をする二人の生徒の姿がある。
二学年に所属する二人は寮のルームメイト同士であり、いわゆる親友の間柄という関係だ。

共に空手部に所属する二人だが、今日は空手部が諸事情により休みなためこうして道場で二人、自主練習に精を出していた。

「ねえ」

「ん、なに？」

二人の片方が相方に話し掛ける。

「あたし達もさ、こつやつて練習やつて強くなったって思うよね？」

「そうねえ。さすがにISじゃ専用機持ちとか代表候補には勝てないけど、コレなら結構行けるかな」

「だよな？でもさ」

そう言つて彼女は視線を道場の一角に向ける。相方もそれに倣う。

「さすがにアレ相手は無理よね？」

視線の先、ここでは学園最強の称号の持ち主、生徒会長更識楯無と学園唯一の男子生徒、織斑一夏が壮絶な組み手をしていた。

幾度となく繰り出される一夏の貫手を楯無は全て捌く。

一夏の貫手には一切の容赦が無い。一夏が修めている技法の一つに中国拳法の硬気功がある。体の一部に気血を送り、頑強さを上げることで拳の威力を上げるものだ。

一夏の使用するソレは、真に達人と呼べる者が使うのに比べればまだまだ未熟と言える。しかし、人体に直撃させれば少なくないダメージを与えるのは確実だった。

肩、胸部、腹部、時には顔面など、様々な部位を一夏は貫こうとする。攻撃箇所に通すること、人体の正中線上にあるということがある。

理由は単純。正中線にはいわゆる急所が多いからだ。

しかし、楯無も負けてはいない。迫る貫手を引き付けて払い、お返しと言わんばかりに掌打を放つ。

実のところ、一夏の貫手の軌道を楯無はハッキリと見ていた。その気になれば、貫手が離れている内に払い捌くこともできる。しかし、楯無は敢えてそれをせず、ギリギリまで貫手を引き付けてから捌いていた。

これには理由がある。

単純に言えばテコの原理なのだが、自身に迫る拳と言うものはより至近距離になるほど軽い力で払えるのだ。

この距離の見極めがいわゆる「見切り」というものだ。

その論理に従い、楯無は一夏との攻防においての力のロスを抑えていた。

対する一夏も負けてはいない。

楯無の掌打は一夏の関節部を重点的に狙っていた。

仮に一撃もらったとする。それ自体は決定打にはなりえない。しかし、どうしても動きが大きく障害されるのは確実である。

後は簡単だ。最初の手合わせ、その決着の二の舞だ。

同じ負け方というのは一夏の意地が許さなかった。故に、一夏もまた攻防の中で楯無の掌打を全て捌いていた。

一夏の繰り出した貫手をかわした楯無は僅かに下がると、槍の一突きのごとき鋭さを持つソバットの蹴り抜きを放つ。

僅かに横に体を動かすことで回避した一夏は、楯無の蹴り足を取ると、そのまま回転肘打ちを楯無の首めがけて放つ。

それは古式ムエタイのヒアン・ムアン・パンディン（地を転がる金塊）。蹴りの勢いをも利用して放たれた肘打ち。狙われた首に直撃すればまずもってただではすまない。

それだけの技を何の躊躇も無く放つ一夏も大概だが、受ける側の楯無もまた豪気と言えた。

「せいっ！」

気合いの一声と共に楯無は左腕で一夏の肘を防ぐ。僅かにギシリと軋む音が楯無の腕から響いたが、楯無は一夏の攻撃を完全に受け切る。

防がれたことを理解した一夏はすぐに攻撃姿勢を解除。楯無に反撃されないように僅かに後ろに下がる。

「まさか今のを腕一本で防ぐとはな……」

一夏の表情が僅かに歪む。必殺を期して放った一撃、それが片腕で防がれたことは少なからず一夏に驚きを与えていた。

「これでも鍛えているからね。それに、そうそうやられるつもりもないの」

「そうかい」

再度一夏は突進。連続で楯無に肘打ち、膝蹴り、ローキックを放つ。しかし、その悉くは楯無に防がれる。そして

「取った！」

「チイツー！！」

連続攻撃の中に混ぜた貫手。楯無はそれを真下に払うと同時に、その手首を掴んでいた。

一夏の顔に僅かに焦りが生まれる。楯無が武術に非常に長けているということ既に一夏は身を以て理解している。

そして手首を掴まれたこの状況下。この状態が続けば、恐らくは合気が何かで投げられるだろう。そうなればチェックメイトである。

「させん!！」

一夏は腕を掴まれたまま体を半回転、側面を楯無の正面に向ける。そのまま床、正確には道場の畳を強く踏み込むと、肩から楯無に突進。

「きゃっ!！」

独特の歩法で以て初速から最高速を出した一夏の全体重を乗せた体当たり。さしもの楯無も後方に大きく飛ばされる。

それは中国拳法の「靠撃」。「はいげき」、あるいは「こつげき」と読む突進技である。

対多人数にも有効な技だが、それを対象を一人に絞って放つのだ。その威力は推して知るべし。

あえて後ろに大きく動くことによって突進の威力を流した楯無は一夏の顔を見る。一夏もまた楯無の顔を見る。

互いの視線が交差する。知らず、二人の口の端が吊りあがった。

ちなみに、立ち合いを始めた当初は少しずつにじり寄りながら睨み合っていた二人だが、ある瞬間から互いに爆ぜるように動き出し、

猛烈な攻撃の応酬を繰り返していた。

武術とは突き詰めるとさながら詰め将棋のようになるという。僅か一瞬が勝敗を決する高みの領域。

これが例えば一夏の師である宗一郎と千冬の手合わせとなれば、戦いは更に激しいものになっていたかもしれない。

しかし、その二人の領域に未だ及ばない一夏と楯無は、最初こそ読み合いをしていたが、その均衡も崩れ去り、今では互いに互いを打ち倒さんと必倒の意志を込めた拳を打ち合うに至っていた。

ちなみに、宗一郎や千冬に遠く及ばないとは言ったものの、それは比較対象が規格外なだけであり、極々一般的な感性の持ち主、例えば今二人の手合わせを見ている道場内の生徒達からしてみれば、二人の実力も十分に突き抜けていると言えた。

「フフツ、前より腕を上げたね！」

額に汗を滲ませながら楯無が言う。

その口元には笑いが浮かんでおり、瞳の奥には強い闘志が宿っている。

対する一夏は無言で貫手を、両手で放つ。

体重の乗った重い一撃は流石に捌くのが容易く無かったのか、楯無は両手で以って一夏の貫手を防ぐと同時に一度後方に下がり距離を取る。

「別段、驚くことじゃないさ」

一夏が口を開く。

静かに語り出したその表情は楯無と対照的に平静を保つことに勤めているものであり、冷静そのものと呼べるものだった。

「弟子つてのは常に進化するもんさ。そうでなきゃならない。でなきゃ師匠に顔向けができない」

その言葉に楯無はクスリと、顔に浮かべる笑みを穏やかなものに変えた。

一夏の言葉、そこに込められた師への思いを楯無は察した。それはどこまでも強い敬慕の念。優れた人物を真摯に尊敬する姿勢は、楯無としては見ていて気分の良いものだった。

察すると同時に、自身を弟子としてくれなかつた人物の弟子となることのできた一夏に、僅かに嫉妬の念を抱く。

そしてすぐさま、それらを思考の内から振り払う。

「なら、その成長を見せてくれるかな？」

挑発するように言う楯無。

決して長いとは言えない付き合いだが、楯無はそれなりに一夏の氣質を理解していた。

そして、先程みたいに挑発的な物言いをすれば、一夏がより本気になるということも理解している。

楯無の言葉に一夏は冷静な表情に、微笑を浮かべた。

楯無の挑発の意図は一夏も理解していた。こと、楯無相手には一夏は出来るだけ注意を払って接するようにしていた。

それだけ一夏にとって、楯無は油断も隙も無い相手だと言うことに

なるが、今この時においては楯無の言葉の意図を察するということに役立つていた。

楯無は一夏の手の内を見ようとしている。

だからと言ってハイそうですかと自身の手を見せるつもりは一夏には毛頭無かった。

だが、ふと思いついた。今まで散々楯無には振り回された。なら、今度はこちらが驚かせようと。

そして浮かんだ微笑だった。

(あら?)

一夏が構えを解いた。

一夏がムエタイを徒手空拳の主とするのは楯無も知っている。

そして、今まで一夏が使っていたのはやはりムエタイの構えだったが、それを一夏は解いたのだ。

何をするのか、そう思った瞬間に一夏は動いた。

片手を上に向け、もう片方の腕を下に向ける。

威圧殲滅を旨とする「天地の構え」だ。

(これって...)

それを見た楯無は不信に思う。

一夏が使うのはムエタイに中国拳法。だが、今の一夏の構えは空手のソレだった。

楯無が不審に思ったのを察したのか、一夏は口元をニヤリと歪めると言った。

「行くぞ？」

瞬間、一夏の体が楯無に急接近する。無拍子による高速接近。一夏の手並みにいつのまにか各々の自主練習の手を止めて二人の手合わせを見ていた生徒達からどよめきが上がる。しかし、一夏がそれを気に留めることは無かった。

「破あつ！！」

気合いの一声と共に鋭い拳の一突きを繰り出す。突き出しながら拳を180度回転させるそれは空手の正拳突き。

それを楯無は片足を軸に体を半回転させることかわす。しかし、一夏はすぐさま追撃を敢行。自身もまた片足をしかと踏み込み、それを軸として体を大きく回転させ回し蹴りを放つ。

「ふっ！」

軽い呼気と共に楯無は回し蹴りも回避。一夏の連続攻撃を正確にかわした楯無だが、その表情は僅かに固いものになっている。

(いまの正拳突きに回し蹴りはどっちも空手の技。それに…どこか覚えがある…)

一夏が使ったのはまぎれもなく空手の技。今までムエタイと中国拳法しか使わなかった一夏が空手を使ったのには驚いたが、すぐにそれはそれとして冷静に受け止める。

しかし、楯無は一夏の空手の中に見え隠れするナニカが気になって

いた。

「どうした、動きが鈍ったぞ？」

「いやね、いきなりだったからおねーさん、ちょっと驚いちゃった」

逆に挑発してくるような言葉に楯無は普段通りの調子で返す。それに一夏は鼻を鳴らすと、再び呐喊してくる。

「せあっ！ー！」

連続で繰り出される一夏の拳と蹴り。直線的な鋭さを感じさせるそれは、どう見ても空手の動き。

先ほど同様、一夏の攻撃を捌きながら楯無は思案する。一夏の動きには見覚えがある。見て、鮮明に覚えがあると理解できる匂い。

(っ！！これって！！)

脳裏に閃きが走るのを楯無は感じた。それと同時に楯無は一夏の貫手を両手で受け止めた。

両手を交差させて敵の攻撃を防御する十字受け。防御に力を込めているため、強力な攻撃を防ぐこともできる空手の防御技である。

「そっか。そういうことなんだ」

理解したと言わんばかりに楯無は呟く。それを聞いた一夏は口元を歪ませながら言った。

「その分だと気付いたみたいだな」

防がれた貫手を引きもどし、楯無と距離を取りながら一夏が言う。

「ええ。君が使っている空手の技。それ、私のだよな？」

「ご名答。やっぱり気付かれたか」

「ちょっと時間が掛っちゃったけどね。覚えがある動きだな〜って思ったけど、私自身の動きなんだから。覚えがあつて当然だわ」

むしろ自分の動きなのに即座に気付けなかった自身を自嘲するように言う楯無。

「でも、どうして君がその動きをできるのかな？私は教えた覚えはないけど」

ふと湧きあがった疑問を一夏にぶつける楯無。対する一夏の答えは実に簡素なものだった。

「見て、覚えて、真似した」

「え？」

思わず聞き返す楯無。それを見た一夏は静かに語る。

「俺が師匠から剣技を習った時、どついう風に習ったか知ってるか？」

逆に問い返される楯無。当然ながら一夏の修業内容など知らない楯無は首を横に振って答える。

「師匠が手本を見せて、俺がそれを真似する。一応、術理の解説もしてくれたけど、基本的には見たものの真似だった」

その言葉を聞いて、楯無は嫌な予感を感じ取った。そして、その後の一夏の言葉で予感が的中するのを感じた。

「あんたの空手もそうさ。前の手合わせの時に見たのを、今ここで再現したに過ぎない」

思わず絶句する楯無。一夏の技の覚え方、そのあまりの無茶苦茶ぶりに声が出なかった。それを見た一夏は、いわゆる「ドヤ顔」で楯無に言った。

「まあ、師匠の動きに比べればあんたの動きは見えやすいからね。存外、うまくいったよ」

そのままハッハッハと笑う一夏。絶句して啞然とした楯無の表情は、次第に苦笑いにならなっていった。

「なんというか、師弟揃って無茶苦茶だわ……」

「いやいや、褒めるなよ」

「別に褒めてないけどね」

軽口を叩きあう二人。そこで一夏はふと、表情に僅かの影を射した。

「まあ、一度見ればほとんど、二度見れば盤石と言えればすごく力ツコイイと思うけどね。さすがに俺もそこまでは無理だ。現に、今の技も結構一杯一杯だった」

どこか自嘲するような一夏の言葉。だが、すぐに表情を引き締める
と一夏は再び構えを変えた。それは手合わせの最初にも使っていた
ムエタイの構え。

「そして、ここからは全部ありでやらせてもらおう。ムエタイ、中国
拳法、空手。さすがにあんたの手の数には及ばんが、まあ使えるだ
け使わせてもらおうぞ」

そして、と一夏は前置きをしてから言った。

「あんたの使う技。とくと見させてもらおう。そして、その悉くを俺
は模倣してやる。なに、武術の伝承なんて上手い人間の真似をする
ことから始まるんだ。それなら、あんたの俺の格闘戦のコーチとい
う目的にも合ってるだろ？」

不敵な笑みと共に放たれた一夏の言葉に、楯無もまた笑みを浮かべ
る。

「いいわ。なら、お望み通り私の技を見せてあげましょう。準備は
いいかしら？」

「語るに及ばず」

そのまま二人は黙る。静かに睨みあう二人。いつの間にか道場には
沈黙が広がっていた。道場内の誰もが、一夏と楯無の手合わせの行
方を見守っていた。

「せいっ!?!」

「はっ！！」

そして掛け声と共に同時に接近。再び攻防を開始した。そして

「あゝチクシヨウ。結局また負けた」

畳の上に倒れこみながら一夏が懨然とした顔でぼやく。そして寝ころんだまま楯無に視線を向ける。

「とうかさ、何が技を見せるだよ。前とほとんど変わってないじやねえか。せつかく新しい技が見れると思ったのに、詐欺だ詐欺」

「あら？ちゃんと見せたでしょ？最後のとどめ」

不思議そうに答える楯無の言葉に一夏は眉をひそめる。

「あれって…柔術じゃないのか？打撃もあつたけど、古流の柔術には当て身技もあると聞いている」

一夏と楯無の今回の手合わせ。決め手になつたのは楯無が再度一夏の腕を取つた時だ。

楯無は一夏の腕を取ると同時に回転。背負い投げの予備動作に入つた。

そのまま投げられると確信した一夏は受け身の体勢を取ろうとしたが、直後楯無の後方への肘打ちが一夏の横っ面ぶ直撃。想定外の一撃に怯んだ瞬間、一夏は楯無により組み伏せられていた。これにより、二人の試合は決着が着いた。

そしてそれを柔術と予想した一夏に、楯無は笑顔を向ける。

「だと思っでしょ？実は違うのよね」

「？」

分からないと言いたげな一夏に、楯無は人差し指を立てながら言った。

「あれはね、サンボなのよ」

その言葉に一夏はああ、と納得するような声を上げてから言った。

「サンボか。あれか、サボテンみたいな敵キャラでてっぺんの頭を攻撃しないと倒せないアレ」

「それはサンボ違いよ」

この時、一夏と楯無の脳内に赤い帽子のつなぎと髭のアイツが浮かんだ。

「じゃあ、世界じゃそれを愛と呼ぶ」

「呼んだりはないわ。というか一夏君、わざとやってるでしょ？」

「バレたか。うん、ちとふざけた。テヘペロ」

無然とした表情のまま悪ふざけを認め、あまつさえチロリと舌まで出した一夏。

それを見た楯無は一瞬、初めて一夏に対してイラツとした感情を抱いた。

「え〜と、それで一夏くん。サンボって何か知ってるかしら？」

とりあえず一瞬湧いた苛立ちを何とか抑え、笑顔のまま楯無は一夏に問いかける。

すると一夏は起き上がると、唐突に置いた荷物の方へ歩いてく。そして鞆から携帯電話を取り出し、何かの操作をすると再び楯無の下に歩み寄り、言った。

「『サンボ（露：

）はソビエト連邦で開発された格闘

技、またはソビエト連邦において徒手格闘技、徒手武術をあらわす。

狭義では、日本で一般に知られているスポーツ・格闘技である。スポーツサンボのことをさし、この意で使われることが最も多い。

このスポーツサンボはソビエト連邦で開発された格闘技である。

ソビエト連邦の軍隊で採用されていた徒手軍隊格闘術をコマンドサンボ（露：
）と言う。日本でコマ

ンドサンボと呼ばれるサンボは正確には英語でコンバットサンボ、ロシア語でバエヴォエサンボと言う』

どうだ？間違っていないだろうか？」

「うん、思いつきり調べたよね。テキストそのまんまで」

悪びれる様子も無く、堂々と胸を張って調べたテキストそのままの内容を口にする一夏に、楯無は思わず突っ込みを入れる。

「まあ、うん。一応その通りよ。私が最後に使ったのはロシアの格闘技のサンボ。これは帝政ロシア時代に原型が確立されたのだけど、この時の各国の武術を参考に取り入れているの。その中に日本の柔術、他にもレスリングとかがあってね。だから組技も結構あるの」

講釈をする楯無に一夏は感心したように頷く。見れば、周囲に居た他の生徒達も頷いている。

「ま、おねーさんにも意地があるからね。当分、勝ち譲らないわよ?」

ウインクと共に放たれた楯無の言葉を一夏は鼻で笑った。

「ハッ、譲らなくて結構。力づくで奪い取らせてもらっただけだ」

一夏の言葉に楯無は満足そうに頷く。

「うんうん、その意気その意気。そういう男の子、おねーさんは好きよ?」

「知るか」

そして一夏は楯無を見て、僅かに顔をしかめた。

「それよりも会長」

「ん?なあに?」

「いや、少しは慎みを持ったらどうかと思って」

そう言つて一夏は明後日の方向を向きながら、楯無を指差す。指の向く先は楯無の胸部。先程までの手合わせにより胴着がはだけ、楯無は胸元が大きく開くような格好になっていた。胴着の衿からは僅かに下着とおぼしき布が見えている。

一夏の指摘に楯無は悪戯つ子のような笑みを浮かべる。

「あら、気になるの？もう、一夏くんも男の子ね」

からかうような楯無の言葉に、一夏は苛立たしげに舌打ちをしてから言つ。

「人としてのモラルの問題だつての。だいたい、んなモン見慣れる」

瞬間、周囲が一気にざわついた。

「うそ、見慣れてるって…」

「もしかして織斑くんって…結構やり手？」

「凄いこと聞いちゃった…」

周囲の生徒のざわめき。それを聞いて一夏はしまったと言つように再び舌打ちする。

「違う違う。別にそんなんじゃない。単に家で千冬姉、織斑先生の服とかの洗濯をしているからって意味。断じて！そんな怪しい意味じゃない。ないったらない！」

誤解が広まらない内に一夏は訂正をする。

幸いにして、未だ半信半疑の状態で正しい情報を与えたからか、周囲の生徒はそれに納得する。

不本意極まりない噂が流れることを未然に防いだことに、一夏は胸を撫で下ろす。

そこで、楯無が一夏に尋ねた。

「ねえ一夏くん。さつき洗濯って言ってたけど、織斑先生ってそういうことしないの？」

それは何気ない問い。しかし、それに対する一夏の答えを聞こうと、周囲の生徒は一夏に注目する。

何せ憧れの織斑千冬の、家族からのプライベート情報。それは彼女達にとって非常に大きな意味を持っていた。

そして一夏は少し困った風に答える。

「しないも何も、できないが正しい。千冬姉、IS操縦は完璧だけど、家事炊事洗濯は壊滅的だから。前に電子レンジの前で立ち往生してたのを見た時には、思わず言葉を無くしたよ。まさか電子レンジまでなんて、って」

その言葉に周囲が一気にどよめく。

憧れの存在の余りに意外な一面。それを知った衝撃は大きかった。

「だから、家のことは一切合切俺がやってる。ああそうさ。家事に関して、俺は千冬姉に一言の文句も許さないつもりだよ」

ウンウンと力強く頷きながら語る一夏。

その姿からは、家の家事を担うことへの自負が感じられた。

「じゃあ、家じゃあ一夏くんも結構大変なのかな？」

そう尋ねた楯無に一夏は、顎に手をやって少し考えると、僅かに表情を穏やかなものにして言った。

「まあ、俺は千冬姉の稼いだ金で養われたから、家事くらいはやるうと思っただのもある。なんというか、最低限の義理ってやつか」

だからと言って武人としては情は挟まないと補足しながら一夏は言う。

その言葉に楯無も、純粹に穏やかな微笑みを浮かべた。

「そっか」

頷く一夏。しかし、直後に一夏は僅かに顔をしかめて言った。

「まあ、だからと言ってまるで家事ができないのもアレだとは思っけど。まさかいい年した大人がいつまでも年の離れた弟に家のことで苦労をかけるなんて、さすがに無いだろう」

「そうだな。私も常々お前には苦労をかけると思っている」

「そう思っなら、少しは家事を覚えて　　え？」

突如会話に入ってきた声。

余りに聞き慣れたその声に一夏は固まる。見れば隣の楯無も固まっ

ており、周囲の生徒は一夏と楯無の背後に、恐れおののくような視線を向けていた。

「ま、まさか…」

錆び付いた歯車のように一夏と楯無は首をゆっくりと、背後に向けて回す。

そして、その視界に入ってきたのは

「中々、愉快的話をしているじゃないか。織斑、更識」

「ち、ちふ　織斑先生…」

「い、居たんですか…」

そこには話の本人、一夏曰く家事が壊滅的な千冬の姿があった。

言葉こそ穏やかだが、視線はまるで穏やかではない千冬。

その双眸は正確に一夏と楯無を射抜いていた。

「家族の話に華を咲かせるのは結構。だが、話す内容に少しは気を使うべきだと、私は思うがな」

「あ、いや、その…」

「え〜と…」

言葉に詰まる一夏と楯無。

どう弁明をしようかと考えていた二人だが、唐突に脳裏に走った直感、察知した危険に従い一気に駆け出していた。

二人が駆けた直後、二人が居た場所に千冬の手が伸びた。アイアンクローをかけるべく伸ばされた手は、しかし虚しく宙をかいた。

「ほっ…」

感心したように呟く千冬。

振り返れば、脱兎のごとき速さで道場から出ていく一夏と楯無の姿。しっかりと自分の荷物を回収していた。

「ふむ」

踵を返して二人を追おうとする千冬。

しかし、踏み出そうとした一步は直前で止まる。

そして周囲の生徒達を静かに睥睨する。千冬の視線を受けた生徒達は僅かに肩を震わせた。

「諸君」

千冬言葉に全員が一様に固まる。

「諸君は何も聞いていない。分かったな？」

「……………はい！」「……………」

千冬言葉に一斉に返事をする。

それを頷いて確認すると、千冬は頷いて道場を後にした。

「クソッ！まさか千冬姉に聞かれるなんて！」

「まずいわまずいわ！どうしましょう！」

千冬から逃れるため、全力で駆ける一夏と楯無。その表情は明らかな恐怖に染まっていた。

「あんたのせいだぞ！？あんたが話振るから！」

「でも話したの一夏くんでしょ！」

「そりゃそうだ！」

ひたすら走る二人。

「でもどうするの！どこに行くの！」

「部屋だ！部屋に逃げてほとぼり冷めるの待つ！」

「オツケー！」

申し合わせて二人は寮の部屋を目指す。

他には一切目をくれず、ひたすらに目標を目指す。走りながらも幾度か後ろを確認する。千冬が追い付く様子は無い。このまま逃げ切れるかと、二人の思考に僅かに光が射す。

そして、二人の眼前に寮の部屋が現れる。

「到着!!」

「急げ!!」

ドタドタと慌てて部屋に駆け込む。
後に入った一夏は扉を荒々しく閉じると、鍵をしっかりとかける。

「ハア、ハア、ハア…」

「に、逃げきった…千冬姉から…」

未だ鍵をしかと掴んだままの一夏。

その表情は千冬から逃げ切ったことへの達成感があった。

「会長、覗き穴から外見てくれ…」

「わ、分かったわ…」

一夏に言われた通り楯無はドアの覗き穴から外を見る。
誰かが来る様子は無かった。

「大丈夫、誰も居ないわ」

「そうか…」

そして一夏は息を大きく吐く。

「助かった…」

その言葉には万感の思いが籠っていた。

一夏の言葉に同意するように楯無も頷きながら言う。

「まさか織斑先生から逃げ切るなんてね。私もビックリだわ…」

そして二人は渴いた笑いを上げる。

「会長、ひとまずはだ。この幸運を噛み締めて、茶を一杯どうよ？」

「良いわね。祝杯といきましょう」

そして楯無は座り込む一夏に手を伸ばす。

それを一夏は笑顔で掴み、立ち上がる。

共に絶体絶命の危機を乗り越えた二人。その二人の間には、一つの絆が生まれていた。

そして二人は部屋の奥に行く。ベッド前のデスク。そこに置かれたお茶セットの準備をするためだ。

「やあ、二人ともお帰り」

だが、祝杯を上げようとした二人に待っていたのは絶望^{千冬}だった。

「お、織斑…先生…」

楯無が引き攣った声で呟く。

一夏は言葉を失い呆然としている。

千冬は座っていた椅子から立ち上がると、二人に歩みよりながら口

を開く。

「中々の逃げ足だったが、逃げた先が分かりやすすぎるな。よくやったが、ここまでだ」

「そ、そんな…」

楯無が悲壮感に満ちた声で呟く。
一夏は完全に放心状態に陥っていた。

そして

「ぐおおおつおおおおつ!!?!」

「痛い痛い痛い痛い!!」

今度こそ避けられないアイアンクローが二人にかけられ、二人は苦悶の声を上げた。

「これに懲りたら、今後人のプライベートについて話す時は注意をすることだな」

そう言つて千冬は手を離す。

床に崩れ落ちる二人を尻目に、千冬は呆れるようなため息を吐きながら部屋を出た。

「これは…キツイわね…」

「これが、俺らの末路と言っか…」

残された二人のか細い声が、静かに室内に溶けていった。

第五十三話（後書き）

今回、少々一夏がボケにまわり、楯無がツツコミになりました。たまにはこういうのもアリかと思えます。

ところで格闘技と言えば、先日「マツハ!!!」というムエタイ映画を見たのですが、いや凄い。とにかくアクションが大迫力でした。

個人的にはかなり気に入った映画でしたね。

これ、活動報告とかで書くようなことな気がします。

そろそろヒロイン話を書かなきゃと思いつつ、中々書けないのですが、頑張ります。それでは皆さん、また次回に。

第五十四話（前書き）

最近、少しスランプを感じ始めてます。

単に時間が取れないだけかもしれないかもしれませんが。

今回は少しギャグを入れた日常話。

原作でもあった、楯無の手作りお弁当の話です。

早く学園祭話をやりたいですが、もう少しこんなのが続くかもしれない
ません。

それと今回、最後の方で少々やっちゃいました。

第五十四話

学園祭が迫りつつあるIS学園。

生徒は皆、来たる一大イベントへと心馳せているが、そんなもの知ったことかと言わんばかりに授業は行われる。

無論、学園祭が近い今は一日の内に一限か二限は学園祭準備に充てられるが、それでも授業はある。

さて、このIS学園。

確かに未来のIS操縦者を養成する専門機関ではあるが、同時に一般的な高等学校としての側面も持っている。

故に、学園の授業には数学や外国語を始めとした各一般科目もカリキュラムに含まれている。

時は昼休みを目前にした四限。国語の授業である。

一つのクラスに日本を始め、イギリス、ドイツ、フランス、アメリカなど各国からの学生を抱える学園だが、さすがにこのような授業は各言語圏に依存するため、同じ言語圏の生徒を集めて行われている。

それゆえ、現在国語の授業が行われている一夏の居る一組には、日本人の生徒のみが集まっていた。

「え、それじゃあ今日はここまで、です」

間もなく授業の終了と同時に昼休みの開始を知らせるチャイムが鳴るうとする中、実に丁度良いと呼べるタイミングで授業を終えた山田真耶が言う。

後はチャイムが鳴り、教室を出るだけだ。

それだけなのだが、何故か真耶の表情には、やや苦い物が含まれていた。

そして、その原因は彼女の目の前にあった。

「あの…織斑君？大丈夫ですか？」

「はい…平気です…」

心配そうな声で一夏に声を掛ける彼女だったが、一夏は平気だと答える。

しかし、彼女だけでなく一夏の周囲の生徒は皆こころ思っていた。

いや、平気そうじゃないと。

有り体に言つと、今の一夏は表情が半分死んでいた。

目はしっかりと開かれているが、そこに宿る光はどこか虚ろ。

そしてそれも相俟つて、今の一夏はどこか萎れて見えていた。

授業の終了を知らせるチャイムが鳴り響いた。

「あ、じゃ、じゃあ私はこれで。その…織斑君、無理はしないで下さいね？」

最後まで一夏を気遣いながら真耶が教室を出る。それを一夏は軽く頭を下げた一礼と共に見送る。そして真耶が教室を出てから少しした後

ゴガンツ！

派手な音と共に一夏が頭を机の上に落とし、そのまま突っ伏した。

突然の音に教室中の生徒が肩を震わせる。

そして一夏の方を向くと、突っ伏したまま微動だにしない一夏に心配そうな視線を向ける。

常日頃の一夏がまず見せることの無いだろう弱り切った姿に、特に元々一組に在籍している生徒は一際心配そうにしている。

「だ、大丈夫？」

一夏の真後ろに座る生徒、同じ一組の相川清香が一夏に声を掛けた。

「……」

「えっ？」

小さな声で何かを呟いた一夏だが、聞き取れなかった清香は聞き返す。

そして一夏は、か細いながらもはっきりと周囲に聞こえる声で言った。

「は、腹…減った…」

ずっこけた。全員がずっこけた。

余りに弱り切った一夏の姿。心配して聞いてみれば、返って来たのは空腹を訴える言葉。

空腹の辛さは彼女らも理解しているとは言え、それでも思わずずっ

こけてしまった。

「え〜と、朝ごはんとかは？」

「寝坊して食いつぱくれた…」

再度問い掛ける清香に一夏は答える。

この日、実に珍しいことに一夏は寝坊というものをしていた。

同室の楯無は一夏より先に起きたからだろうか、何故か部屋にはおらず、慌てて一夏は準備を始めた。

正確に言うと、一夏が起きた時間は決して寝坊と言える時間ではなく、朝食を摂る時間は十分にある時間だった。

ではなぜ一夏が朝食を食べられなかったか。それは日課の朝トレである。

寝坊をしながらも、通常通りのトレーニングを強行した結果、一夏は朝食を食べることができずにいた。

トレーニングを削つても朝食を食べればいいではないかという話だが、一夏にとっては朝食<トレーニングの図式が成り立っているため、このような結果となった。

無論、一夏とて一端の武術家。さらには織斑家の台所を仕切る身。

一食の大事さというものは重々承知しているが、やはり彼の中ではトレーニングの方がウェイトを占めていた。

そんな感じで朝食を抜き、せめての慰みにと出かけ前に部屋に据え置きしてある冷蔵庫の中に置いてある、おやつ用に購買で買ったトポを数本食べたものの長くは持たず、二限目あたりから空きつ腹がアラートを鳴り響かせていた。

「じゃ、じゃあさ、食堂行こう？ね？お昼ごはん食べなきゃ」

空腹から回復するには食事を取るのが一番である。

清香が一夏を昼食に誘おうとするが、一夏に動き出す気配は無い。

「それがさあ…動く体力が湧かないや…どうしよ…」

もはや悲壮感を含んだ声でそのようなことをのたまう一夏。

聞いていた周囲の面々は、「体力測定でラウラと一緒に周りをごぼう抜きしてた奴が何言ってるやがる」と言わんばかりに苦笑いを浮かべる。

清香もまたどうしたものかと頭を掻きながら苦笑いを浮かべていた。

そして、この膠着状況を打破する存在が、唐突に教室にやってきた。

「お邪魔するわ。一夏くん、居るかしら？」

生徒会長更識楯無その人であった。手に何か包みを持っている彼女は、至極自然な様子で教室に入ると、一夏の姿を探した。

(た、ただでさえキツイのに…)

唐突の楯無の来訪。それを一夏は好意的に受け入れる気がしなかった。

未だ数日の付き合いだが、一夏は幾度となく彼女に振り回されている。一夏なりに反撃を試みてはいるものの、目立った効果は上げられていない。

空腹で疲弊した状態で、また楯無に振り回されるのではと思った一夏は、突っ伏したまま思わず深いため息を吐いた。

「あ、居た居た。どうしたのかな？元気がないぞ、オトコノコ？」

「やつかまし〜。腹が減って動けないんだ〜い」

一夏を見つけた楯無が何時も通りの飄々とした調子で話しかけながら近づいてくる。

普段ならこれに僅かに陰を含んだ対応を取るのだが、生憎空腹による影響をダイレクトに受けている一夏は今、ただ力なく答えるしかできずにいた。

「あ〜、お腹空いちやってるんだ〜」

フ〜ンと、顔は見えないが楯無が笑いを浮かべているのを理解した一夏は僅かに不機嫌そうに眉を顰めて首を動かす。そして楯無の方を向いた。

「一体なんの用で？」

問われた楯無は得意げに持っていた包みを一夏の目の前に差し出す。

「コレ、な〜んだ？」

突然目の前に現れた物体に、一夏は分からないと言いたげな目をする。そんな一夏を見た楯無は笑顔で言った。

「楯無おねーさんの手作りお弁当よ。一緒に食べましょう？」

「何をしてる。さつさと食べましょう」

一瞬で起き上がった一夏が自分の机を叩きながら言った。ちなみに

ちやつかり言葉づかいも敬語になっている。

弁当と聞いた瞬間からの一瞬での変わり身に再度一同がずっこけた。さて、一騒動あったものの、これにてようやく真つ当な昼休みが始まったと言える。

教室に居た生徒達も大半が食事を取るために食堂へ向かう。残るは一夏と楯無を始めとした、弁当組のごく少数である。

「さあ、さあ、さあ！折角の弁当だ！さっさと食べよう！」

包みを解かれた、何段にも重なっている重箱の前に一夏のテンションはハイになっていた。

「いや、会長。俺、初めてあなたが良い人に見えましたよ」

救世主と呼ぶべき重箱の弁当を前にしたからか、一夏はそれはもう爽やかな笑顔と共に言う。

笑顔だけなら良かったのだが、そのセリフに楯無は苦笑いを浮かべながら言った。

「え〜と、初めてってことは、今までどんな風に見てたのかな？」

重ねた重箱を一段一段、机の上に置きながら尋ねる。

「え？人が困ってる所見て笑ってる愉快犯」

依然笑顔を浮かべたまま言う一夏。あまりに爽やかな笑顔で堂々と言うものだから、楯無も思わず笑顔で「そーなんだー」と流してしまった。

「おうおうおう、これはこれは」

目の前に広がった料理を前に一夏が興奮を抑えきれない様子で言う。重箱には五目御飯や、煮物、焼き魚など数多くの料理が並んでいた。特に目を引くのは、透き通るような透明さが眩しく輝く身をさらしている伊勢海老だろう。

基本的に庶民故に滅多にお目にかかれない高級食材に、一夏の目の輝きが更に強くなる。

「さあ、一夏くん。食べましょう?」

そう言っただけで楯無は取りだした箸でほぐした焼き魚の身を摘まむと

「ハイ、アーン」

と言って一夏に差し出した。更識楯無の十八番、悪戯心の発動であった。

しかしここで楯無にとって予想外だったのは、空腹状態の一夏の行動の速さだった。

「ん?ふおうふあふいまふいふあ?(どうかしました?)」

凄まじい速さで口の中に放り込んだ料理を食べながら一夏が言う。見れば、一夏の目の前の重箱には既に目に見える形で空白が生まれていた。

「いや、その」

「んっぐっ。速く食べなきゃ俺が食っちゃいますよ?」

箸を差し出したまま固まる楯無に料理を飲みこんだ一夏は何気ない様子で言うと、再び重箱に向き直った。

(こ、これは予想外だわ!?)

楯無は思わず内心で戦慄していた。

(ま、まさかこの私の『手作りお弁当でアーン 君の心をアンロックでハートキャッチ しちゃうぞ 大作戦』をこんな形で打ち破るなんて!

いえ、それだけじゃないわ。私が用意した割りばし、私が気付かないうちに取りだして、割って、そして料理を食べている!それも凄い速さで!これが、宗一郎さんの一番弟子の実力!!

一夏くん、恐ろしい子!!)

驚愕に心を震わせる楯無だが、仮に宗一郎が楯無の心の声を聞いたらこう言うだろう。

「いや、あれは単に食い意地が張ってるだけだ」と。

一夏は依然猛烈な勢いで料理を食べている。それも凄まじい速さで顎を動かし、喉に詰まらせないようにしっかりと噛み砕くと同時に、味もちゃんと味わった上である。

そんな一夏の姿に楯無も我に返る。そしてマズイと思う。このままでは自分の分が無くなる。

今の一夏を形容するならば、文字通り食の魔人である。手を止めるということはありません。

「待つて待つて!私も食べるわ!」

そして楯無も本格的に食べ始めた。

「フイー、食った食った」

余は満足じゃとでも言うように一夏は深い息を吐きながら言う。
あの後、一夏の猛烈な勢いに自身の分が無くなることへの危機を感じ取った楯無が食べ始めたからしばらくの後、教室内の他の生徒に
も少し分けたりなどをして、見事重箱の中身は綺麗に平らげられた。
ようやくありつけた真っ当な食事に、一夏も至極満足そうな表情で
ある。

「フフ、満足そうで何よりだね。でもね、実はもう一品あるのよ？」

「ナンデスト？」

もう一品。その言葉に一夏が反応する。既にその眼は捕食者のソレ
になっていた。

慌てない慌てないと一夏を抑えながら楯無は、別の小さな保温容器
を取り出した。

「今日の料理、少し味が淡泊なのが良かったでしょ？だからちよつ
とだけ、ガツンとしたのを作ってみたの」

言いながら楯無は容器のふたを開ける。その中身を見た瞬間、一夏
の顔が僅かに固まった。

「う、これは…」

容器の中身は麻婆豆腐だった。容器自体小さいため、半人前あるかどうかだろう。だが、少ないながらもその麻婆豆腐は言い知れぬ存在感を放っていた。

「な、なんか…やたら赤くないっすか？」

思わず身を引きながら一夏が言う。

その麻婆豆腐は赤かった。赤い、赤いのだ。とにかく赤い。有体に言って、すごく辛そうに見える赤さだった。

「いや、ちよっと辛味に気合い入れたらこうなっちゃって。これだけしか作ってないのが幸いなくらいだわ」

言いながら楯無はレンゲを一夏に差し出す。受け取った一夏は、後頭部に冷や汗を流しながらも麻婆豆腐を一掬い。そして、口に運んだ。

「……………」

一掬いの麻婆豆腐を口に入れた一夏は無言でそれを飲みこむ。

「ど、どうかな？」

一言も発しない一夏に、楯無も少々心配になったのか、問いかける。一夏は無言で席を立つと、教室の角に行き膝をつく。そして口を抑えながらフルフルと体を震わせた。

「が、ぐあらああい…！」

呻き声のような一夏の言葉。訳すると「辛い」である。まともな声も出なくなるほどの辛さ。さしもの一夏も耐えきれずに、膝をついたまま体をふるわせ続ける。

しばらくして、体の震えが収まった一夏は立ち上がると席に戻る。

「や、やっぱり辛かったかな？」

さすがに自分でも辛すぎるだろうというのが分かっているのか、一夏を気遣うような口調で楯無が尋ねてくる。

投げかけられた問いに、一夏は不思議そうに首をひねりながら答えた。

「いや、確かに無茶苦茶辛いですけど、いや後から旨味が来て。まあ、美味いかまずいかなら、美味しいですかねえ」

ただ辛いだけでなく、予想に反しての美味も兼ね備えていた麻婆豆腐に、一夏は依然不思議そうな調子で感想を述べる。悪くない一夏の評価に楯無が安堵するような表情をする。

「しかし、認めるのは癪だけど、大したもんだ。文武両道に、料理まで得意と来てやがる。ああ、天才っていうのは会長のような人間を指すんでしょうね」

そこで一夏は感心するように、同時に僅かながらの皮肉をこめて楯無に言う。そんな一夏の言葉に楯無はカラカラと笑いながら言った。

「別に私は天才なんかじゃないわ。ただ努力家だけの凡人よ」

その言葉は一夏からしてみれば謙遜にすぎるものだった。過ぎた謙遜は時に嫌味とも聞こえる。しかし、不思議と楯無の言葉からはそのようなものは感じなかった。

（それがこの人の一種の能力みたいなもんかなあ。まあ、努力は事実かもしれないけどさ）

そう思うと同時に、一夏は楯無の努力という言葉肯定する。

しかし、一夏は楯無の言葉を鵜呑みにはしていない。少なくとも凡人はまず無いだろうと思う。

元々持っていた高い素養、その上に努力を重ねている。言葉には出さず、心の内で一夏はそう結論付けた。

「で、どうする一夏君？麻婆豆腐、もつと食べる？」

「貰いましょう。意外に食えるモンだ」

楯無の言葉に頷いた一夏は、再びレンゲを手にとると残りを食べようとすする。だが、その手は予想外の事態によって止まることになった。

「へえ、一夏ったら、会長の手作りお弁当を食べてるんだ」

そんな声が聞こえた瞬間、一夏はあからさまに固まった。そして背後を振り返る。

「食堂に居なかったから探してみたら、ここに居たんだ」

「よ、よお、シャル…」

そこにはとてもとてもイイ笑顔を浮かべたシャルロットの姿があった。
浮かべているのは笑顔だが、その全身からは形容しがたいプレッシャーが放たれている。
思わず背に冷や汗が流れるのを一夏は感じた。

「ねえ一夏？」

「はい！」

思わず直立不動の姿勢で返事をする一夏。
なぜこのような対応をしたのか、自分でもよく分からなかった一夏は内心で首を傾げた。

「今度、僕もお弁当を作ってくるから、その時は僕と一緒に食べようね？」

「へ？あ、ああうん。それはいいけど…」

肯定する一夏の返事に、シャルロットは浮かべていた笑顔をさらに輝くものに変え、同時に放っていたプレッシャーをひっこめる。

「良かった！約束だよ、一夏？」

そう言ってシャルロットは一夏の机に置かれた麻婆豆腐に目を向ける。

「あの、会長。僕もコレ、食べてみていいですか？中華って、あまり食べたことが無くて」

「え？ええ、もちろんいいわよ」

予想外のシャルロットの言葉に目を丸くする楯無だが、すぐに快諾をする。

「じゃ、頂きます」

そう行儀よく言ってからシャルロットも、一夏が使ったレンゲで麻婆豆腐を食べた。

それに気付いた楯無が笑顔でからかうように言った。

「あら、シャルロットちゃんったら大胆ね」

「ふえ？……ふえええええええ！？」

麻婆豆腐を食べてから気付いたシャルロットは、一夏といわゆる「間接キス」をしてしまったことに思いつき慌てる。

「い、一夏！その、僕、そんなつもりじゃ！ふええええええええ！！」

一夏の方を見ながらパニック状態に陥るシャルロット。そんな彼女を一夏は苦笑いを浮かべながら制する。

「落ち着け落ち着け。俺は気にしてないからさ。それより、それ辛くないか？」

シャルロットのやってしまったことに関しては、一夏も少なからず思うところはあったが、こつこつのは軽く流して気にしないで置くのが吉と判断し、話題転換も兼ねて麻婆豆腐の辛さについて尋ねる。

一夏の問いかけに、なんとか落ち着きを取り戻したシャルロットは答える。

「ふえ？え」と、その、確かに辛いけど、僕は大丈夫だよ？」

「なん…だと…？」

自身ですら一度は悶絶した辛さをなんともないと言うシャルロット。思わず一夏は戦慄してしまった。

「あ、あの、会長。これ、美味しいからこのまま僕が食べちゃってもいいですか？」

「え、ええ。いいわよ」

楯無もシャルロットの反応に驚いたのか、ややたじろぐように答える。

そのまま美味しそうな表情で麻婆豆腐を食べるシャルロット。その姿を一夏と楯無は依然信じられないという表情で見っていた。

昼食も終わりを迎え、楯無は手際よく荷物を片付けると自身の教室へと戻って行った。

そして今、一夏とシャルロットは職員室に向かって廊下を歩いていた。

午後の授業は学園祭のクラスでの準備に充てられるため、職員室に居る担任の千冬からクラスに配るプリントを受け取りに向かっているのだ。

本来は一夏一人で事足りる作業なのだが、シャルロットが強く希望したため、一夏はシャルロットを連れ添って職員室へ向かっていた。

「しかしシャル。あの麻婆豆腐、本当に辛くなかったのか？」

後ろを歩くシャルロットに一夏が尋ねる。二人が歩く廊下には、他の人影は見えない。

「うん。確かに辛かったけど、僕は平気だったよ？」

その言葉に一夏は思わず苦笑を浮かべた。

「そりゃ凄いな。俺なんか最初、思わず悶えちまったのに」

「ん〜、一夏は辛かったの？」

「まあな。正直言うと、今でも少し口に辛いのが残ってる」

「ならば、一夏。今度、僕は一夏に甘いお菓子を作ってあげるよ」

そう言いながらシャルロットは、僅かに顔を赤らめて下を向く。しかし、前を歩いているがために気付かない一夏は、それを笑って快諾する。

「そりゃいいな。楽しみだ」

「……………」

一夏の後に続きながらシャルロットは俯く。その表情は何故かはつきりと赤くなっていた。

「ね、ねえ一夏。その…辛い…少しだけならなんとか…甘くできるよ?」

おずおずとした様子で言うシャルロット。何故かその声は緊張気味にやや上ずっている。

「それは」

どういうこと?と尋ねようと振り向いた瞬間、一夏の目の前にはシャルロットの顔が広がっていた。目は固く閉じられ、顔全体が朱に染まっていた。

「んっ!?!」

驚く一夏だったが、声が出ない。口が柔らかいナニカによって塞がれていた。

ゆっくりとシャルロットの顔が離れる。俯いた顔を真っ赤にし、緊張するかのように荒く息を吐いていた。そして顔を上げ、一夏の顔をまっすぐと見据えたシャルロットは、満面の笑顔を浮かべた。

「えへへ、これで僕が一步リード、だね?」

そう言うとシャルロットは早歩きで先に行く。

「い、今のは……」

突然の事態に一夏の思考が停止する。真っ白になった思考のまま、一夏はゆっくりと指を自身の口に、唇に持って行った。そしてゆっくりとなぞる。

そのまま目を白黒させながら回れ右をすると、一夏もまた職員室へ向けて茫然とした表情のまま歩き出し、先に行ったシャルロットの後を追った。

「まあ、甘かった……」

茫然としたまま呟かれた言葉は誰の耳にも届くことはなく、宙に掻き消えた。

第五十四話（後書き）

とりあえず今回の話、一応ギャグのつもりで書いたのですが、全て最後が持つて行ったと作者は思います。

なにぶん作者はシャルロット党。

ええ、やってしまったというのは否定しません。

反応が怖いや…

第五十五話（前書き）

学園祭準備の話です。

原作だとあまり準備について触れられてなかったので、少々独自で書いた部分が多めです。

第五十五話

「む…むむむ…」

IS学園一年一組六時間目。

この時間の授業は学園全体で来る学園祭への準備に充てられており、一組を始めとし、学園内では準備のために生徒達が慌ただしく、同時に楽しみに満ちた笑顔で動き回っていた。

それはこの一組も例外ではなく、教室に居る生徒は全員笑顔で準備をしている。

その中でただ一人、篠ノ之箒のみが難しい顔で唸り声も漏らしていた。

その手には一冊の冊子が握られている。

「ねえ箒。まだ決まらないの？」

横から箒と同室の鷹月静寂が箒に声を掛ける。

「ま、待ってくれ。これは…その…どうにも決め難い…！」

ウンウンと唸りながら箒は冊子を凝視する。

その冊子には、カラー写真で何種類かの女性向けのウェイトレス服が載っており、各写真の横には小さく「正」の字によるカウントが記されている。

「そ、そもそもだな。このようなヒラヒラとした服は、その、破廉恥ではないか？」

困り果てたように篤は静寂に言う。どこか懇願の色が含まれる言葉には、篤の静寂の同意を得たいという思いがあった。しかし、そんな彼女の願いむなく、静寂は軽くため息を吐きながら言った。

「そうは言ってもね。こっちからお願いして、向こうが厚意で貸してくれるっていうんだから、ちゃんと決めなきゃ失礼でしょ？」

「それはそうだが…」

未だ決め切れずにいる篤を見て、静寂は軽く肩をすくめた。

篤が見ている冊子、それは今度の学園祭で一組が行う喫茶店の接客服。そのアンケートだった。

一組が行う喫茶店。その要となるのは接客係の衣装なのだが、その準備はシャルロットとラウラの二人が主導で行うこととなった。

偶然にも、二人には衣装を用意できるツテがあったのだ。

夏休み、シャルロットとラウラは二人で外出をしていた。行き先は臨海学校の水着選びでも行ったショッピングモール。

昼に軽食を取るつもりで二人はあるモール内の喫茶店に寄った。

店名は「カフェ @クルーズ」

その店に寄った二人は、二人の端正な容姿に目を付けた店長の強い希望によって、短時間の間だがアルバイトをすることになった。

バイト中に一騒動あったりしたもの、バイトは無事終了。

このことにより、二人と店の間に奇妙な縁ができていた。

このツテを使ったのだ。

シャルロットが店側に電話で依頼。

突然の申し出にも関わらず、快く希望を受け入れてくれた店の店長は、一つの冊子を一組に送った。

それが簿が睨めっこをしていた衣装のリストである。

喫茶店の店長は快く衣装の貸出を受け入れてくれたものの、その個人の意思とは別に店としての都合も存在する。

学園祭当日も店は通常営業しており、学園に衣装を貸したことで店の経営に支障が出てはまずい。

よって、事前に貸出を希望する衣装をクラスアンケートで決め、それを店側に報告することで双方に折り合いをつけることになったのだ。

学園祭という祭の雰囲気も手伝い、クラスの生徒は次々と自分の希望する衣装にチェックを入れた。

そして現在、最後の一人である簿が難しい顔で冊子と睨めっこをしている運びに相成ったわけである。

なお、唯一の男子である一夏は、基本的に接客担当だけであり、衣装も執事服ということが確定している。

これを、「まあクラスのためだし……」と了承した一夏であった。

ちなみに、この決定の際に一部の生徒は「いつそ織斑君もウェイトレス服で！」とやたら鼻息荒く力説していたが、「頼むからそれだ

けは止めてくれ！！俺の尊厳が壊滅する！！」と必死の懇願をした一夏により、提案は却下となった。

話を戻す。

最後の一人である篤。彼女とて、自分が早く決めなければならないというのは重々承知しているのだが、何せ目の前の冊子に移るは生まれてこの方、まるで縁が無かったような服。

どちらかと言えば、やや内向的な性格である彼女は、自分が衣装を着る姿を想像して、具体的には衣装を着た姿を想い人である一夏に見られることを想像して恥じらうような気持ちになっていた。

「うう…これは…」

なおも決めかねている篤。はっきり言ってしまうえば、既にアンケートの結果は出たも同然であり、篤一人の票は殆ど大局には影響しない。

しかし、それでもちゃんと票を入れねばならないのは、一種の決まり事というもの故だった。

流石に時間を掛けすぎだと判断した静寐は、篤にハツパを掛けることにした。

「ほら、いつまでも悩まない。大丈夫よ。篤は素材が良いんだから。何を着ても似合うって」

言いながら静寐は冊子の中の写真を一枚、指差す。それは現状尤も多くの票を集めている衣装だった。

「こ、これをか…?」

「大丈夫大丈夫。織斑君だって似合っつて言ってくれるよ」

ルームメイトとして共に居ることが多い故に、静寂は箒が一夏に抱いている想いを察知していた。

そして、箒の決断を促す決定打として、一夏が褒めてくれるだろうと言った。

「そ、それなら…」

意を決したように力強く鉛筆を握ると、箒はゆっくりと静寂が指した写真の横に線を一本、書き加えた。

「はい、お疲れ様」

パン、と手を叩きながら静寂が言う。

深く息を吐きながら箒は椅子の背もたれに深く体を預ける。

箒の手から離れ、机の上に置かれた冊子を静寂が手に取った。

「じゃあ、これは私がデユノアさんに渡しておくから」

「ああ。済まないが頼む」

言いながら席を立とうとする静寂だが、そこで彼女は箒の表情に未だ残る陰に気付いた。

「どうかしたの?」

「いや、その…」

問われた篤は躊躇うように僅かに目を逸らす。
そして、そのまま不安そうな声音で言った。

「その、不安なんだ。私は、そこまで人付き合いが得意な方じゃない。今こうして静寂と話せているのも、それなりの付き合いになっているからだ。だが、喫茶店などという慣れない場所で、初対面の相手にちゃんと応対ができるのか不安でな……」

その言葉を静寂は真面目な表情で聞く。
なるほど、本人が苦手と言うならば事実として篤は人付き合いを苦手としているのだろう。
ならばそれは接客を行う上では見過ごせない内容だ。

篤の料理の腕の高さも知っている静寂は、いつそ篤は厨房専門のシフトにすればいいかとも考えたが、すぐにそれは無理だと判断する。

一組の喫茶店経営は、クラス代表の一夏を中心として、複数の担当に分かれて準備をする。
シャルロットやラウラは衣装担当であり、セシリアは他の生徒数人と共に、教室の飾り付けや使用する食器の案を担当している。

他にも予算の調整係や、必要物資の調達係も居る。
そうした係の中には、シフト決めと調整を行う係も存在している。
そのシフト係に頼めば、あるいは篤のシフトに関しても何とかなるかもしれないが、できない理由があった。

計画の初期段階において、一夏は担当時間の差はあれども、クラス全員が厨房と接客を行うようにすると提案。

その提案を、その時教室に居た千冬と真耶の教師二名も了承。全員が接客と厨房を、というのは実質的な決まりとなっていた。あの厳格な千冬のことだ。箒のみ特例などということは認めないだろうし、むしろ苦手だからこそ挑戦しろと言っだろう。

完全な手詰まりな状態だった。

(うーん、どうしょ)

胸の中で呟きながら静寐は頬を掻く。

なまじ人のメンタルのデリケートな部分に関わることなだけに、迂闊な言葉は言えない。

「えっと、上手く言えないけど」

とりあえずは無難な励ましを言おうとする静寐。

そこで、思わぬ介入が現れた。

「おっ、箒に鷹月さん。アンケート、書けたんだ」

クラス代表、一夏の登場だった。

「い、一夏!」

突然ひょっこりと現れた一夏の姿に箒はうろたえる。

(あ、ちょうどいいかも)

そして静寐は一夏の登場を僥倖と思った。

思い立ったが吉日。すぐに実行に移すことにした。

「織斑君、ちょっといい？」

「ん？どうした？」

静寂は一夏の手を軽く引くと箒から少し離れ、同時に箒に背を向けつつ小声で言った。

「あのね、箒が喫茶店の接客に不安そうなの。だから織斑君もちょっと励ましを入れてくれない」

「ああ、そういうこと」

納得するように頷くと同時に、一夏は任せると言わんばかりに片手でサムズアップをする。

そして箒に近付くと一夏は言った。

「話は聞いたぜ。接客に不安があるみたいだな。なに、そう大したもんじゃないだろうよ。リラックスして、注文聞いて品を運ぶだけの簡単な仕事だぜ？夏祭りの時、売り子の仕事してたる？あれができたんだから大丈夫さ」

箒の不安を和らげるように明るいう調子で言う一夏。

一夏に励まされたからか、箒の表情も幾分か緊張が消えたものになったが、未だ完全に不安が消えたものではなかった。

「た、確かにそうかもしれないが…。だが、やはり不安が残るのだ。その、夏祭りの時と今回は勝手が違う。どのようにすればいいのかが分からなくて」

「笑えばいいんじゃないの？」

「え？」

唐突な一夏の言葉に篤は僅かに目を見開いて一夏の顔を見る。

一夏は至極ななんとかなさそうな表情で言った。

「だからさ、とりあえず笑顔浮かべればいいんだよ。そうすれば、自然に緊張もほぐれるだろうし、客受けだって悪くないはずだぞ？」

「い、言われればそうだな」

「だろ？それに、もし何かあっても、笑ってれば意外にごまかせるかもな。こっ、てへぺろッ』って感じで」

「て、てへぺろ？」

目をぱちくりさせながら聞き返す篤に一夏は真面目な顔で頷きながら言った。

「うん、てへぺろ。なんか篤に合う気がするんだ」

「そ、そうなのか？」

「そうなのだ」

そして一夏は立ち上がると、篤と静寂に背を向けながら言った。

「じゃ、俺は他のグループ見てくるよ。篤、期待してるぜ？」

そう言いつつ、ヒラヒラと手を振りながら一夏はその場を後にした。

「期待、している、か…」

「箒？」

一夏に言われた「期待」という言葉を静かに呟く箒。既にその眼からは不安の色はなくなり、成功への意気込みを感じさせる強い意志の光が宿っていた。

「そうだな。一夏に期待されたのだ。そうとも、私はやるぞ。やらねば女がすたる」

既に静寐は視界に入っていないかのように、繰り返し自らを鼓舞している箒。

その姿を見た静寐は内心で安堵していた。

（うーん、これでいいのかな？箒も立ち直ってるみたいだし。やっぱり織斑君が決め手か）

「よし。ならば一夏が言った『てへぺろ』とやらをまずは練習だ！」

「え！？」

不意に箒が放った一言に思わず静寐は驚いた顔で箒を見る。

「む、どうした静寐」

「いや、そのお…」

なんと言つべきだろうか。静寂は自分が言葉に詰まるのを理解した。一夏が言った「てへぺろ」。確かに聞こえは愛想の良い笑顔を浮かべるような言葉に聞こえる。

だが、静寂はなぜかそれを素直に箒に薦める気は起きなかった。うまく言葉に言い表せないが、どうにも良くない予感がするのだ。

「あ、あのね箒。さすがに『てへぺろ』はあざといかな〜って思うよ？普通にスマイルを作る練習でいいんじゃないかな？」

「そうか？一夏は似合いそうだと薦めてくれたが」

「大丈夫大丈夫！箒は元々器量がいいんだから！そんなことしなくても、普通に笑えば織斑君も可愛いって言ってくれるよ！」

「そ、そういうことなら…」

何とか「てへぺろ」を諦めた箒を見て、静寂は何故か胸をなで下ろしている自分が居ることに気付いたという。

「ええ、こちらの飾りはこのデザインで。それに机はこのような形で」

教室のまた別の一角。そこではセシリアを中心とした数人の生徒が机の上に置かれた紙を見ながら、あれやこれやと話をしていた。

彼女達は本番での教室の飾り付け担当のグループである。

今回の喫茶店、使用するカップなどはセシリアが手配することになっている。

ここで一つの課題点が浮上した。つまりは使用する食器と教室の飾り付けの調和である。

使用する食器も、実質的には店を彩る飾りの一つと考えれば、教室全体の飾り付けにも配慮がなされるのは当然の流れである。

まさかティーカップを使用するのに、部屋の飾り付けは和風テイストというのはさすがにあり得ない。

よって、食器の手配を行ったセシリアが中心となって、食器と違和感無く調和する部屋の飾り付けを考案することになったのだ。

「うわー、セシリア凄いわね〜。こつも見事なデザインになるなんて」

グループの集まる一角、セシリアの机の上に置かれたスケッチを見て生徒の一人が感嘆の声を漏らす。

セシリアの机に置かれた一枚の紙。そこにはさながら貴族の邸宅の一室のように飾り付けられた教室のスケッチが描かれていた。

「いえ、それほどのものでもありませんわ。ただ教室の周りに飾り布を掛けただけです」

偽りの無い100%の称賛にセシリアは恥ずかしそうに答える。

「謙遜謙遜。凄いシンプルなのに、これだけ良いデザインにできるんだから、セシリアは自慢しちゃうべきだよ！」

その称賛に、セシリアは顔を僅かに赤らめてる。

口でこそ大したことはないと言ったものの、やはり自分の為したことに對して賛辞を受けるのは嬉しかった。

「うーん、それにしても予想外に早くデザインが決まったわね。」

これであたし達の仕事はほとんど終わりでしょ？」

そう言ってきた別の生徒にセシリアは頷きながら言った。

「そうなりますわね。ですが、だからと言ってわたくし達が何もしなくて良いと言う理由にはなりませんわ。デザインこそ決まりましたが、今度は実際に飾りつけるための準備もあります。まだまだ気は抜けませんわよ。」

「そりゃもちろん！頑張ろう、セシリア！」

力強くガッツポーズを浮かべながら、学園祭準備への意気込みを示すクラスメートに、セシリアは笑顔を浮かべる。

「おー、こっちも良い感じに進んでるな。」

「あら、一夏さん。」

「よっ、セシリア。クラス代表として、店内インテリア担当部門の様子見に来たぜ。」

片手を上げながらセシリア達に歩み寄る一夏。
そのまま机に近付くと、置かれたスケッチを見て感嘆の息を漏らした。

「いやはや、こりゃ良いデザインだ。さすがだよ」

「いえ、そのようなことは」

素直に賛辞の言葉を言う一夏に、セシリアは気恥ずかしそうに頬を薄紅に染める。

「とりあえずデザインはこれで決まりで、後はブツの調達だけかな？」

手に持ったスケッチを見ながら、一夏はクラス代表としての極めて事務的な質問をする。

尋ねられたセシリアも、すぐに表情を真面目なものに戻して応対をした。

「そうですね。大まかな案としてはそれでよろしいのですが、まだ決定というわけではありませんわ。例えば飾り付けの布なども、学園にあるもので間に合わせられるのでしたら、それに合わせて若干の変更はするでしょうね。そのスケッチも、あくまで大まかなイメージであって、細かい部分は状況次第で変えると言ったところですわ」

「成る程な……」

セシリアの説明にしたり顔で頷く一夏。

彼女の言う通り、当初に決めた案で完全実行をするというのは中々

難しく、どこかで妥協をしたり手を加えたりする必要もあるだろう。その点から考えれば、現状のセシリアの計画は至極真つ当なものと言えた。

「じゃあ、これを元にして状況次第で手を加えるのが、これからって感じか？」

「ええ。このあとは班の皆さんと一緒に、学園の方で使えそうな物がないかを探す予定ですね。聞けば演劇部の方で舞台用として、そうした飾り布を幾つか持っているとのことですので。まずはそこから」と

「成る程成る程。いや、文句のつけようが無いな。セシリアに任せたのは正解だったよ」

セシリアが述べた計画がおおいに期待できるものだったため、一夏は満足そうな表情で頷き、セシリアを称賛する。

賛辞を受けたセシリアも満更ではないのか、少しばかり得意げな表情になっていた。

「そう言えば、さつきレシピ担当の班で聞いたんだけどさ、なんか紅茶の淹れ方も教えてあげたんだった？」

「ええ。チエルシーに正しい淹れ方をまとめたものをテキストデータで送って頂いて」

チエルシー・ブランケット。オルコット家においてセシリア専属のメイドを努めている女性である。

夏休み、一夏はセシリアより一足早く学園に戻り、その結果として本国より戻ってきたセシリアを迎える形になったのだが、その際に一夏はチエルシーと面識を作っていた。

一夏達よりも数歳上なだけの彼女だが、落ち着きのある身のこなしは実際の年齢以上に大人びて見えたというのが一夏の感想であった。

「チエルシーさんか。やっぱり本職だけあって、さぞや見事な手並みなんだろうな」

「ええ。チエルシーの淹れる紅茶の味は見事の一言に尽きますわ。よろしければ今度一夏さんもいかがです？」

「それはいいな。機会があればぜひ」

そして一夏は手に持ったスケッチを机の上に置く。そろそろ次の班の様子を見に行かなければならない。

「じゃあ、俺はこれで。何かあったら言ってくれ」

「ええ」

そして、筈たちの時同様、片手をヒラヒラと振りながら一夏は立ち去った。

それを見送ったセシリアは、スケッチに向き直ると班の仲間と再度打ち合わせを開始。より完成度を高めるための調整に移った。

さて、一方その頃。衣装担当であるシャルロットとラウラの属する班は、少々整然を欠いた状態になっていた。

「なぐんて言うかさ、私達って意外に手が空くよね」

「衣装の手配ってほとんどデュノアさんとボーデヴィツヒさんがやってくれたからね」

班員の生徒二人が会話をする。彼女らの言葉は実際問題としての射ており、一組の喫茶店衣装に関しては殆どシャルロットとラウラの二人によってどうにかなっているのが現実だった。

「私達、どうすればいいと思う？」

「うん、とりあえずはさ。そろそろ戻ってくるアンケートを受け取ることかな？なんだか肝心の二人は今は動けなさそうだし」

そう言つて二人は別方向に視線を向ける。

そこには椅子に座るシャルロットの姿があった。ただし、何故か膝にラウラを乗せており、その表情は心ここにあらずと言った様子だ。

「シャルロットよ。そろそろ、離して欲しいのだが…」

「えへへ、一夏あ〜」

「何故そこで兄様の名前が出てくる。というより、聞いているのか？それと頭を撫でるのもそろそろ止めてくれ」

シャルロットの膝に乗せられたラウラは、胴をシャルロットが回した腕によってガッチリとホールドされており、動くに動けない状態であった。

そしてシャルロットはシャルロットで、ラウラをホールドしながらも、器用にラウラの頭に手を伸ばし、ひたすら撫で続けていた。

これだけ見れば、シャルロットがラウラを可愛がっているというだけの実に微笑ましい光景だが、何分シャルロットのどこかが抜けたような緩んだ笑顔と、繰り返し呟かれる一夏の名前が印象を奇妙なものにしていた。

「デュノアさん、どうしたんだろ？」

「さあ？ただ、なんだか今のデュノアさんに接するのは注意が必要な気がするわ」

「ボーデヴィツヒさんには悪いけど、しばらくはこのままかな？」

「それでいいんじゃない？その内普通に帰ると思うよ？多分……」

会話をする二人はひとまずシャルロットに関しては現状維持という名の放置という方向で話をまとめる。

「で、何でデュノアさんはあんなってるの？」

「さあ？」

首を傾げる二人。シャルロットの変貌、その原因は昼休みにあった。即ち、職員室へ繋がる誰も居ない廊下での一夏とシャルロットのア

レである。

そう。例のアレである。

知る者は一夏とシャルロットしか居ない。恐らくは、ずっとそのままの方がいいのだろう。

誰かに知られようものならば、とてつもない騒ぎになるのは明白である。

ちなみに一夏はこの件に関して当初こそ驚き茫然自失としたものの、すぐ後に自分の仕事が控えていることから、無理矢理意識を修正。

シャルロットには少々気の毒な話となるが、極力思い出さないように努めている。

別段、記憶に残さないといいわけではない。ただ、一夏自身も少しでもその時のことが思い浮かぶと、やや意識してしまう気があった。

物心着いた時から剣と共に歩んだ、剣キチと読んで差し支えない一夏の人生。

その手の事象に関しては経験が真つさらな彼にとって、昼休みの出来事は少々刺激が強かったのだ。

一方、シャルロットとは言えば、一夏とは実に対照的であり、件の出来事を思い出して幸せ気分トリップしていた。それが先程の一連の様子である。

哀れなるは、トリップ状態のシャルロットに捕まり、殆ど玩具状態のラウラである。

合掌。

「まあ、なにせよアレよね」

「アレ？」

「無事に準備を終えて、本番を万全の状態のできるのが一番よ」

「それもそうね」

そうやって二人は会話を締め括る。

二人から少し離れた所では、依然恍惚トリップ状態のシャルロットがラウラを膝に乗せて撫で回している。

為すがままにされるラウラの表情はどこか諦めの色が浮かんでいた。再び合掌である。

所は少々離れる。

場所は一年二組。そう、中国代表候補にして一夏のセカンド幼なじみ、凰鈴音の教室である。

この二組、一組と、ひいては一夏と結構な距離がある。

いや、実際の距離は大したものではなく、せいぜい数メートル程度だ。

だが、特に中学以上となると隣のクラスというものは、単純な距離で推し量ることのできない精神的な距離が結構あるものである。

一夏とクラスを隔てて離された鈴。
そんな彼女は二組のクラス代表ということもあり、二組の出し物の
まとめを行っている。

この手の行事においてクラスのみまとめ役は何かと多忙であり、それ
は鈴も、そして一組クラス代表の一夏も例外でなかった。

自らの仕事によりクラスのためにアレコレと動き回る。

これにより一組と二組の距離感は更に離れ、さらにお互いの立場が
鈴と一組の距離を更に離している。

そんな感じで現在、鈴は一夏と色々な意味でとにかく引き離された
状態にあった。

決して彼女が悪いわけではない。

彼女は良い人間だが、彼女のクラスがいけなかったのだ。

「なんか、世界の悪意ってやつを感じるわ」

「ど、どうかしたの？」

二組六時間目。出し物準備の一環でプリントの記入を行っていた鈴
が、シャーペンを紙面に走らせる手を止めて言った。

突然の鈴の言葉に、隣の席で同様に書き物をしていた二組の生徒が
不思議そうな表情をする。

「ああ、別にたいしたことじゃないわ」

そうやって鈴は再び作業に戻る。

だが、その表情には軽い苛立ちが含まれていた。

「なんで、あたしだけこんななのよ…」

誰にも聞こえない程の小さな呟きには、自身の境遇に対する悲嘆が込められていた。

彼女にとっては残酷だが、これが現実である。

「やっぱり、世界の悪意を感じるわ」

その呟きは、誰に聞かれることもなく、薄く虚空へと溶けていった。

第五十五話（後書き）

え、セカン党の皆さんごめんなさい。

いや、作者は決して鈴が嫌いというわけではありません。

むしろヒロインは皆、程度の差はあれども好きです。

ただ、まあ、その、やはり二組という唯一にして少し哀れな設定がですね。

「ユー、やつちやいなヨ」って感じで書けと言われてるみたいで、いや、本当にすみません。

今回の話、一夏よりもむしろヒロインを中心に書いたつもりですが、上手くできていればよいのですが。

一応、ヒロインの中でも箒と鈴に焦点を当てたつもりです。箒がメインで、鈴がオチ担当。

今回はいよいよ学園祭の開始です。

ヒロイン番外編、並行して少しずつ書いてはいるのですが、予想外に難航しています。

これに関しては、申し訳ありませんが今しばらくお待ち下さい。

学園祭以降、即ちテロリストの存在が明白になったあたりから、戦闘時のみガチの修羅モードに入る一夏って、アリですかね？

具体的には、初期の暴走モード並の暴れっぷりを明確な自分で行う感じで。

モットーは、「見敵殲滅」という風で。

ちょっと考えていたりします。

番外編2（前書き）

アイデアと書く気力が湧いたので、一気に書き上げてみました。

で、すみません。

今度の番外編はセシリアと鈴にすると言いましたが、今回はセシリアのみになっています。

ご了承下さい。

番外編 2

side セシリア

わたくし、セシリア・オルコットにとってIS学園への入学には様々な意味合いを持っています。

— IS操縦者としての勉強のため。
英国代表候補生としての留学のため。
英国製第三世代型兵器「ブルー・ティアーズ」搭載機の、専属搭乗者としてのデータ取りのため。

どれもがわたくしにとっては大きな意味合いを持つ事柄。
ですが、今あえて一つ、学園に入学した意義を語るのであれば、そう。彼と出会い、わたくしの価値観というものを変えられたことでしょう。

そう、織斑一夏という一人の男性、学園でのわたくしの最初の友人との。

わたくしが生まれたオルコット家は元々英国でも有数の貴族の家柄です。

現在の当主であるわたくし以前の先々代、すなわちわたくしの祖母の時代から国内の事業で多くの利益を上げ、家を大きくしてきま

した。

ですが、今のオルコット家の形の大部分を作ったのは他ならぬ先代、わたくしの母でしょう。

わたくしも話に聞いた程度ですので詳しくは知りませんが、祖父母の間には中々子宝が恵まれず、わたくしの母が唯一の子供だそうです。

母が生まれた当時、ようやく授かった子供に祖父母は、喜ぶと同時に僅かながらの落胆もあつたそうです。

それも無理なからぬ話でしょう。

当時はISなど存在せず、未だ男性が社会的に優位だった時代。ましてや貴族社会ともなればそれが顕著。

一族の跡取りには是非男子をとと思うのも致し方ないこと。

ですが、母は強かった。

オルコット家の跡取りとして生まれたこと。それによって背負うことになった責務を真つ当するために常に自らを高めることを止めない人でした。

その意思の強さと手腕が確かだったことは、わたくしが当主になった時のオルコット家の力が示しています。

そう、わたくしにとって母は誇りであり、憧れでした。

そして母を慕うが故に、その母に媚びへつらうようだった父に、わたくしは良い感情を抱きませんでした。

父は婿養子であり、名家であるオルコット家に婿入りしたことへの

引け目からか、常に母に対しどこかオドオドしていたようでした。

そしてISの登場による社会情勢の急変。

女性優位によりますます父は弱くなりました。

情けない。わたくしが父に抱いた思いです。

確かに社会が女性優位になったからとは言え、立派な男性は少なからずいました。

現に、わたくしは母と共に列席した社交会などでそうした方を見ました。

だからこそ、余計に父への憤りが高まりました。なぜそこまで卑屈になるのかと。

そして、それに拍車をかけるかのようでしたが、やはりわたくしに近づく歳の近い男性もまた、父と同様にどこか卑屈さを持った方でした。

確か日本にある、何かを嫌悪することで、それに関わるものも同様に嫌悪するという意味の諺。何と言つ言葉でしたか。とにかく、わたくしはいつの間にか、極一部を除き男性は情けないものと思うようになっていました。

そして、わたくしの人生を激変させる出来事。

両親が乗った越境鉄道の横転事故。

死者数が百人を超える大事故により、わたくしの両親は帰らぬ人になりました。

その日に限り両親が共に居た理由、事故の陰謀疑惑やそれに対する否定など、色々な事柄がありました。が、何よりもまずわたくしが優先すべきは、遺された遺産を守ることでした。

相続者であるわたくしがまだ子供であることを狙って、両親の莫大な遺産を掠め取るうとする大人達。

そんな人達から遺産を守るため専属の従者である、幼なじみにして姉のような存在のチエルシーのサポートの下、わたくしは勉学に励みました。

その活動の一環で受けたIS適性検査で、高い数値を出したわたくしに、政府は国籍保護のための様々な好条件を提示。

それが遺産を守るのに有効と判断したわたくしは、政府のIS訓練生になりました。

多数の訓練生^{ライバル}。その中でわたくしは実力を示し、国家代表候補生となり、最新の第三世代型兵器の試験運用者にも抜擢。

そのデータ取りのために、日本のIS学園に留学することが殆ど決まりました。

そして留学まで後一月ほどという時に、世界中に流れたニュース。

そう、世界初の男性IS操縦者、すなわち一夏さんの登場です。

正直に申し上げまして、わたくしは当初、ニュースで聞いただけの一夏さんに良い感情を抱きませんでした。

幼少期の経験から定着した男性へのイメージ。そして女性のみが駆ることのできるISの世界に現れた男性という存在。

いえ、もちろん今は一夏さんに対してそのような感情はありませんが、とにかく当時のわたくしは彼に対し好印象を持ってませんでした。

そして学園に入学し、わたくしは彼と出会いました。

これは彼とわたくしの共通認識なのですが、出会い方は最悪と言ってもおかしくはないでしょう。

その…少々わたくしも居丈高になっていた部分もありましたし。ですが、臨海学校の折に一夏さんも、当初わたくしに好印象を持たなかったと言っていましたので、これに関してはお相子ということでしょう。

その後、紆余曲折ありわたくしと彼はISによる決闘をすることになったのですが

あら？なんでしょう。

今、決闘の内容は一々話さなくていいと、天の啓示を受けた気が…

そうですね。結論から言えばわたくしの敗北でした。

単純な試合そのものは、彼が棄権したことでわたくしの勝ちということでしたが、わたくしはあのような結果を認めるつもりは断じてありません。

ええ。こればかりは今でも譲れないことです。

与えられただけの勝利に如何ほどの意味がありました。自分の実力で勝ち得た勝利以外は、意味を為しません。今までもそうでしたから。

あの時わたくしは完全に敗北を喫しました。

ですがそれは単なるシールドエネルギーの削り合いというものではありません。

そう、あの時のわたくしは心が負けたのです。

浴びせられる殴打の衝撃。

首を締め上げていく手の圧迫感。

何より、あの時の一夏さんの修羅とも呼ぶべき目。

それらを前に、わたくしは完全に心が屈していました。

そう、わたくしは負けたのです。

その後は少し茫然としていたので、少々記憶が曖昧です。

自室でシャワーを浴びていたあたりから記憶は鮮明に残っています。試合後、落ち着きを取り戻したわたくしの心に湧きあがったのは悔しさでした。

わたくしは英国代表候補生、第三世代型兵装の試験運用者。そのことに対して誇りを持っています。

同期の仲間との競争を勝ち抜いて得た肩書き。それらに、なにより一人のIS操縦者であることにわたくしは誇りがあります。

その誇りが許さなかったのです。敗北という、事実を。

その時、わたくしは一夏さんへの侮りの一切を捨てていました。

そう、わたくしはあの時に彼との再戦を、その果ての勝利を望みました。

だからわたくしは彼をただの素人と見ることを止めました。

確かに経験はわたくしに比べれば遥かに浅いでしょう。ですが彼はわたくしを追い詰める実力を持っていた。

ならば、一人の対等のIS操縦者として見るべき。それが再戦へのスタートラインだと思いました。

同時に、わたくしは自らの認識を変えることにしました。

男性であっても気骨のある方は居るということを理解しました。いえ、本来なら分かっていたはずなのです。かつて社交界で見た、貴族社会でも名の知れた殿方を見ていたから。

ええ、どうやらわたくしは知らず知らずのうちに慢心をしていたようです。それこそがなによりの敗因。

だから決めました。彼を対等の操縦者と認め、再戦を申し込むことを。

その翌日、わたくしと彼は互いに謝罪。そして再戦を誓い合い、友人になったのですわ。

そう、互いに競い合う良き強敵ともとして。

「はあ……」

放課後のES用アリーナ。そこで愛機「ブルー・ティアーズ」を着しているわたくしは、思わずため息を吐いてしまいました。

行っている射撃訓練。その結果に思わず気落ちしてしまいました。

「このような姿、人にはあまり見せたくはないですわね」

アリーナには他の生徒も居ますが、皆さん各々の訓練に集中していらっやいます。

そして、一夏さんは生徒会長との訓練。他の専用機持ちの皆さんは各々の部活動です。

『稼働率 39%』

モニターに表示されるBT兵器の稼働率。前回より僅かに上がりましたが、未だ不十分な数字。はつきり言って、満足には程遠いですわ。

「ひとまず、今日は終わりにしましょう」

アリーナの使用時刻の終了も近づいています。寮には門限もありますから、あまり遅くなつてはいけません。

更衣室で着替えを終え、廊下に出るわたくし。そこでわたくしは意外な人物に会いました。

「お、セシリア。お前も練習か？」

そう、一夏さんです。

「ええ。少々思うところがありました。一夏さんは生徒会長と？」

そうわたくしが言うと、一夏さんは僅かに苦い顔をしました。

「まあな。つたく、実に面倒な人間だよ、あの会長は」

会長の話をするとき、一夏さんはあまり良い顔をしません。

恐らくは先日の集会の件が絡んでいるのでしょうが。ちなみにわたくしの所属するテニス部も、今回の企画での一夏さんの獲得に意欲

を燃やしています。

もしかしたら、一夏さんと共にテニスを。そう、例えばダブルスなどどわたくしと一夏さんがペアに

コホンツ、ひとまず置いておきましょう。

「わたくしが思うに、やはり学園最強と呼ばれる方の指導を受けるというのは有効だと思いますが？」

「そうなんだよ。ひつつつじょくくくく腹立たしいことに、あのドグさ 生徒会長は指導能力がぴかーと来た。悔しいことに、確かに自分が上手くなっているのを感じちゃうんだよなくく」

そう、腕組みをしながら苦い顔のまま頷く一夏さんを見て、わたくしは思わずクスリと笑ってしまいました。ですが、すぐに浮かない気分になるのを感じましたわ。

「どうした？」

わたくしの表情が変わったことに気付いたのか、一夏さんがそう尋ねてきます。

わたくしも意外だったのですが、一夏さんは人の感情の動きの機微を察しやすい方のようです。

「いえ、その…」

正直に言えば、あまり話そうという気にならないのですわ。

いえ、決して一夏さんのことが気に入らないからということではありません。ただ、これは

「話してみるよ。意外に、気が楽になるかもしれないぜ?」

そう、一夏さんは微笑を浮かべながらおっしゃいました。

「あ
」

今、わたくし一瞬、一夏さんに見とれ　　いえいえ!そんな、わたくしはあくまで一夏さんの友人で!決してそのような...

ん、こほんっ。そうですわね。一夏さんの言う通り、少々話してみましようか。

「歩きながらで、よろしいでしょうか?」

そう言うと、一夏さんは頷きました。

そこからわたくしは寮まで歩きながら、話をしました。

いえ、そこまで深いところまで話したわけではありません。ただ、BT兵器の操作に行き詰まりを感じているということを少々お話しただけです。

「なるほど。ブルー・ティアーズの操作か...」

わたくしの話に真剣な顔をする一夏さん。

その表情は真摯さがあり、その、見ていて不思議な気分にな　　やだ、わたくし。また変な考えを。

「今のでも十分凄いなと思うけど、まだまだなのか?」

「ええ。その、お恥ずかしながら、未だ稼働率が高いとは言えず…」
「そっか…」

そのまま少しの間、わたくし達は無言で歩きます。
ただ、一夏さんのおっしゃった通り、話したら少し気分が軽くなっ
た気がします。

やはり、少々自分の中で溜め込みすぎていたのでしょうか。
思えば本国に居た頃は、時折チエルシーに相談相手になって貰った
りしていましたし。

「しかし」

そこで一夏さんが再び口を開きました。

「それって言い換えれば、まだ伸びしろがあるってことだろ？ハハ
ッ、ただでさえ厄介なアレが今以上におっかなくなるのか。ちと怖
いな」

そう、笑いながら一夏さんは言いました。

伸びしろ。確かに、言われてみればその通りです。
でも

「それでしたら、一夏さんもそうだと思いますわ。一夏さんも、ど
んどんと力をつけているじゃないですか」

「そっか。いや、そっかもしれいんだけどさ」

ですがわたくしの言葉に、一夏さんは少し困ったような、苦笑を浮

かべました。

「なにせ俺の目標は千冬姉だからなあ。伸びても伸びてもまだ足りない。そんな思いでいっばいだ」

「それは致し方ありませんわ。なにせ織斑先生ですもの」

「違うない」

そう言つて、わたくしと一夏さんは揃つて笑みを浮かべます。

「ですが、やはり一夏さんは凄いなと思えますわ。特にあの剣技。代表候補生として見ても、あの剣技とまともに打ち合える相手は、そうは居ないと思えますわ」

「お褒めに与り光栄、と言いたいけど、これはまあ一応、生身の方でも頑張つたしな。うん」

「それも含めてですわ」

聞けば一夏さんは幼少期より剣を嗜んでいるとのこと。

それが実を結んだかのような、IS戦闘における実力の向上ぶり。

そう、今この瞬間、わたくしは彼と自分を知らない内に比較していました。

だから

「確かに俺はガキの頃から努力したよ。でも、セシリアの努力も十分凄いなと思う」

「え　？」

その言葉に思わず一夏さんの顔を見つめてしまいました。視線のすぐ先、真剣な表情の一夏さんは言います。

「俺の剣、流派は何百年つて歴史を持つてる。その過程で技を錬磨して、より効率的な習得法を築き上げてきた。言うなれば、俺が強くなれたのも、その土台があったからこそだ。ぶっちゃけ、武術の伝承つてのは先人の真似に近いからな。そりゃ、自分自身で高めるのもあるけど」

廊下の前方に向き直りながら一夏さんは語りつづけます。

「土台が、俺以前の積み重ねがあるのを俺は理解している。だから、俺はセシリアの努力に敬意を払うよ。セシリアのBT兵器、実質セシリアが最初の使い手なんだろ？先人の例も何も無い。それでありながら、セシリアはそれを磨き上げて、確かな力にしようとしている。それは下地も何も無い、ゼロから一つの技術体系を確立させるようなもんだ。その努力を凄いと思わないわけがない」

そして一夏さんは立ち止まると、再びわたくしの方を向き直りました。

「だからセシリア。それだけ凄いことをやってるお前が、ライバルで本当に良かったと思う」

そう、とても真剣な表情で言ったのですわ。

「　　っ！！！」

な、なんでしょう？なんだか顔のあたりが熱くなっている感じがしますわ。

「あ、あの！わたくし、用を思い出しましたので、お先に失礼しますわ！」

「ん？ああ」

一夏さんが返事をすると同時にわたくしは早足でその場を立ち去りました。

その、はしたないし一夏さんに失礼とも分かってはいるのですが、そうしないといけない気がして。

「どうしたのでしょうか、わたくし……」

寮の部屋に戻り、わたくしはドアに背を預けて胸に手を当てます。何故か、鼓動がはつきりと打っているのが分かります。

本当に、わたくしはどうしたのでしょうか。

「はあ……はあ……ふう……」

しばらくして気分が落ち着くと、思考も冷静になるのを感じました。そしてわたくしは先程の一夏さんの言葉を思い出します。

「わたくしは……」

先程の動悸、その理由は分かりませんでした。ですが、一つだけ理解していることがあります。

わたくしがもつと強くならなければならないということ。

確かに、わたくしの努力は未だはつきりと実を結んだとは言いがたいでしょう。

でも、そんなわたくしを一夏さんは凄いと行ってくれた。

好敵手たる彼がそう言ったのです。応えなければ、わたくしの矜持に関わりません。

思い出すのは、二人が友人となった時と、臨海学校の夜に二人で話した時の約束。

互いに強くなつて、本当の決着をつける。

そう、一夏さんはその約束を忠実に守つて強くなつた。

いえ、あの一夏さんですから、わたくしとの約束が無くても強くなつたかもしれません。それでもです。

一夏さんが強くなつた以上、わたくしもそれに応えなければならぬ。

それが出来ないというのは、不義理にも程があるというもの。

「ええ、見ていて下さいまし」

知らず、言葉が出ます。

「必ず、わたくしも強くなつてみせますわ」

そう、あなたよりもですわ、一夏さん。

ですから、楽しみに待っていて下さいね？

もはや、わたくしの心に焦りはありません。
あるのはただ一つ、純粋な実力の向上への意識のみ。

そう、セシリア・オルコットの名に賭けて。
わたくしは強くなります。

そしてわたくしは、ゆっくりと胸に当てた手を強く握りしめました。

s i d e o u t

番外編2（後書き）

ぶっちゃけオルコット家の先々代とかは妄想補完です。
そのあたり、ご了承頂けると幸いです。

どうも…一夏がイケメソになってる気が…
単にヒロイン視点だからという理由にするのもアレですし。ううむ…

それっぽい描写はありましたが、今はまだセシリアは一夏に恋心を
持つてはいません。
いや、潜在的に気になってはいるけど、自覚していないといった感
じでしょうか。

ライバル意識は変わらずですけど。
なんだかこの方がしっくり来る気がして。

さて、ヒロイン三人を書いてみたので、ここでその三人の一夏に対
する思いを簡潔に書こうと思います。

箒：恋慕、憧憬、一つの目標

シャル：恋慕、依存、自身の全てと言える

セシリア：（無自覚な淡い）恋慕、友人、好敵手

こんな感じです。

今回は本編の更新になると思います。

残りの二人、鈴とラウラはしばらくお待ち下さい。

それでは、また次回にお会いしましょう。

第五十六話（前書き）

え、学園祭話前に一つ、別の話を入れました。

展開的にはアレですね。原作七巻の白式の整備の話。

そして、あのキャラもちよこつと登場です。

第五十六話

学園祭も徐々に近づき、校内全体にそわそわした空気が漂うある日、一夏はプリントと睨めっこをしながら廊下を歩いていた。

この頃になると、ほぼ連日学園祭準備の時間が時間割に組み込まれ、それに比例してクラス代表である一夏の仕事も増えていった。

事前にクラスでの役割分担を明確にしたおかげで、あれやこれやとてんでこ舞いという事態は回避できたが、それでも一夏には生徒と教師の間の連絡を行ったり来たり行うという仕事が多かった。

この時、一夏はクラス代表と言っても結局はただの中間管理職ではないということを理解した。

「え〜と、予算案を千冬姉に提出してっつと。そしたら物資担当の連中見なきゃか」

手にしたプリントを見ながら廊下を歩く一夏。

空いたもう片方の手は後頭部を掻いており、一夏の忙しさで振り回される様を表していた。

「はあ…、まさかこんな仕事があるとはなあ…。せつかく仕事を全員に振り分けて、俺の分を削りきれれると思ったのに…」

聞く者が居ないからか、些か不謹慎な台詞を呟く一夏。

しかし、彼が手にするプリントに向ける視線は真剣そのものであり、何だかんだで真面目に仕事をこなしていることが伺える。

そして、集中しているが故に気付かなかった。
廊下の曲がり角、曲がろうとした先から不意に現れた人影に。

ドンッ

「きゃっ！」

「ぬおっ！」

ぶつかった二人が声を上げる。

僅かに後ろに傾く一夏だが、すぐに体勢を立て直して、前方を見る。

一夏のすぐ目の前、ぶつかった生徒が後ろに倒れようとしていた。

「危ねえ！」

ぶつかった生徒は両腕にプリントの束を抱えており、このままでは
床に背中から盛大に倒れることは想像に難くなかった。

持ち前の強靱な脚力で以って強く床を踏み込むと、一気に目の前の
生徒の背後に回り込む。

そしてその肩に手をやり、丁寧に体が倒れないように受け止めた。

「ふう……大丈夫か？」

相手の無事を確認して軽く息を吐くと、一夏は言葉をかける。

「あ……その……」

受け止められた生徒が微かな言葉で一夏に顔を向ける。

「大丈夫か？悪かったな」

「あ……」

まじまじと一夏の顔を見つめる生徒。

同時に一夏もまた、その生徒の顔を見ることになるのだが、あることに気付いた。

（見覚え…ある？）

その生徒の顔立ちに一夏は見覚えがあった。

だがおかしい。目の前の彼女とは確実に一夏は初対面である。

初対面でありながら見覚えがある。その不思議に一夏は首を傾げた。

「あ……！」

未だ一夏と接触状態の生徒が、何かに気付いたような顔をする。

そして、弾かれるように一夏の腕から離れた。

「あ、大丈夫か？」

「……………！」

唐突に自分から勢いよく離れた生徒に一夏は再度声をかける。

しかし、眼前の生徒は眼鏡の奥の瞳に険しい光を宿しながら一夏を見詰める。

そしてその視線は険しくも、どこか怯えるような、内向的な色があった。

「あなたが……！」

静かに呟かれる言葉。だが、ほとんど単語一語でしかないために、目の前の彼女が何を言いたいのが一夏には分からなかった。

「えっと、お前は……」

誰なのかを尋ねようとする一夏。しかしそれよりも早く、素早く踵を返して生徒は歩き去る。

残された一夏はしばし不思議そうな顔で立ちすくすが、自身の仕事を思い出し、首を傾げながらも職員室へと再度歩き出した。

だが、彼の思考は先程の生徒のことに向けられていた。

（あいつは…誰だ？間違いなく初対面、だけど覚えがある）

或いは学園に来る前に知り合ったが、それを一夏が忘れているか。だが、その考えをすぐに一夏は否定する。そこまで学が良いと言っわけでは無いが、知り合った人間くらいはさすがに覚えている。

ならば別の可能性。知り合いに似ているということ。

これならば十分に有り得る。

（だが…誰だ？）

相手が女性である以上、似ている元となるのは女性だろう。

そして見てすぐに見覚えがあると感じた以上、比較的記憶に残っている人物ということだ。

(で……結局誰だ?)

筋道立てて考えてはみたものの、やはり思い付かず이었다。依然頭を捻る一夏。しかし、思い出せない。

何と無くコレという感覚はあるのだが、いま一つ決め手に欠けてい
ると言うか。

何かきっかけがあれば思い出せるが、そうでなければいつまでも思
い出せない。

そんなもどかしさがあった。

(思い出せないなら、しょうがないよな)

すっぱりと割り切って、思い出せないならそれはそれで仕方ないと
する。

それだけではなく、一夏にはもう一つ気になっていることがあった。

(あいつの俺への目。あれは敵意があった)

それは幾度と無く感じてきた一つの感情。

すなわち、敵意と言う名の自分への悪感情を、先程の生徒の視線か
ら感じ取っていた。

(けど、あれは少し違うな)

学園に来てから一夏は幾度か敵意というものをその身に浴びた。

例えば、出会ったばかりの頃のセシリアの、単に気に食わないとい

う敵意。

例えば、出会ったばかりの頃のラウラの憎悪のような敵意。

例えば、夏休みに叩きのめした高山ありすの、見下すような敵意。

だが、先程のソレは今までのどれとも違う。

ならば何なのかを考え、一つの単語に一夏は思い至った。

(そうだ、ありや嫉妬だ)

嫉妬から来る敵意。久しく感じてはいなかったが、その感情にも一夏は覚えがあった。

思い出すは中学時代。

既に師との修業も本格的な物になっており、それまでに徹底された基礎訓練により、現在もそうだが、一夏の身体能力は同年代の者と比べてずば抜けたものだった。

それゆえ、中学では校内の体育祭などで文字通り大活躍をしたのだが、部活に所属していなかった一夏に負けたことで、一部の運動系部活の生徒が嫉妬を向けたことがあったのだ。

もつとも、当の一夏はそれを軽く流しており、絡まれたとてただのスポーツ学生では一夏には敵わなかったため、特に気にすることがなかった。

それゆえに、やや記憶が薄いと言えた。

(でも、なぜだ?)

歩きながら一夏は思案する。

嫉妬を向けられたことは分かった。だが、その理由が分からない。

(例えば俺が千冬姉の弟だから、とか……)

学園のほとんどの生徒の憧れの対象である千冬の弟、家族であるということへの嫉妬。

あながち間違いでもないかもしれない。

そついうのもあると、一夏は理解している。

尤も、一夏に言わせれば織斑千冬という人間を姉に持つということにも、結構な苦労があるわけで、それを知らずにただ憧れるというのは実に馬鹿な話だが。

可能性としては有力。しかし、所詮は可能性でしか無い。

あるいは別の理由かもしれない。
だが、では他にどんな理由があるかと考えて、一夏が思い付くことはなかった。

そのまましばらく考え、一夏は頭を横に振って考えるのを止める。
これ以上考えるのは無駄だと判断。気にならないと言えば嘘になるが、一旦先程の出来事を忘れて仕事に戻ることにした。

そして放課後。

今日も今日とて楯無による個人訓練がある一夏は、他の生徒に先んじて教室を出る。

そしてアリーナに向かう途中の廊下、一夏は何時も通りに楯無と遭遇した。

「あ、一夏くん。ちょうど良かったわ。今日は別の場所に　　って、どうかしたの？」

出会い頭に一夏に声を掛ける楯無。だが、その言葉は途中で途切れる。

その理由は、楯無に会った瞬間、一夏が何かを見定めるような視線で楯無の顔を見つめだしたからだ。

「おーい、一夏くん？」

疑問を浮かべた顔で、再度楯無が一夏に声を掛ける。だが、一夏は言葉を返さずにジッと楯無の顔を見詰める。

何時もと違う一夏の反応に、さすがに楯無もおかしいと思い始めた。

「い、一夏く」思い出した！あんだだ！「へ？」

楯無の言葉を遮るように、大声と共に手をパンと鳴らす一夏。驚く楯無だが、そんな彼女のことはお構いなしで一夏は口を開く。

「そつだそつだ。なんか見覚えあると思ったら、この顔だ。見てか

「らやっと思い出した！」

「み、見覚え？」

一人納得するようにウンウンと頷きながら言う一夏。
だが、事態を飲み込めていない楯無は不思議そうな顔をする。
そこで、一夏は楯無の顔を再び見据えると、尋ねるように言った。

「なあ会長。あんた、学園に姉妹とか居たりする？」

「っ！それは」

余りに唐突な一夏の問い。

その内容に楯無は言葉に詰まった。

そして、一夏は楯無の狼狽を鋭敏に捉えていた。

一夏の口元が、意地悪くニヤリと歪んだ。

「察するに、あんたとしてはあまり突かれない話題だな、これは？」

「……うん。そう、だね」

一夏の言葉に楯無はやや躊躇うように答える。

その視線は僅かに伏せられ、表情には若干の陰が射している。

(ふむ……)

その楯無の姿に、一夏は意地悪げな表情を引っ込めると、興味深そうな顔で楯無を見る。

見たことの無い楯無の表情、どこか自信に欠けるその表情に一夏は

若干の驚きを感じていた。

同時に察する。

どうにも自分は面倒な話題を楯無に吹っ掛けたらしいことを。

「まあ立ち話もなんだし、移動すんでしょう？ならそうしよう」

「え、あ。ええ、そうね」

そうして二人は並んで廊下を歩く。

「で、今日は別の場所とのことだけど、一体どこに？」

歩きながら尋ねる一夏。

隣を歩く楯無は、先程までの表情を引っ込めて、いつもと変わらない表情で話し出す。

「ちょっとね。君も専用機持ちなら覚えておいた方が良いと思って、今日は学園のIS整備室へ行くわ」

「は？なんでそんなところに？」

学園にISの整備を行う整備室があるのは、一夏とて承知している。

例えば、中止に終わった個人トーナメントの際、専用機持ちを除く一般生徒は学園の訓練機を交代で使うが、個人個人で異なる装備の換装や、試合で使われたISのメンテナンスに使われるのが整備室だ。

だがこの整備室、一夏は今まで無縁だったりする。

装備の換装の必要無し、試合後などの損傷にしても、ISの自己修復機能で賄える。

それゆえの必然だった。

「別に深い意味は無いわ。ただ、専用機持ちとして自分のISのメンテナンスくらいはできるようになった方が良くからね。ちよつとそのあたりもレクチャーしようと思って」

「へえ……」

そうして会話をする内に二人は、整備室のある学園作業棟にたどり着く。

「事前に整備室の使用準備はやっておいたから。さあ、行きましよう?」

そうやって作業棟に入る楯無。その後続く一夏。

先程までと同じように並んで歩く二人。

棟内には、作業をしている別の生徒が居るのか、機械を動かすような物音が聞こえる。

学園に来て数ヶ月だが、あまり経験の無い環境に一夏の視線は興味深そうなものになる。

歩きながら周りを見回す一夏だが、不意にその足が止まる。

理由は明白。隣を歩く楯無が立ち止まったからだ。

訝しんだ一夏は隣の楯無を見て、彼女が正面を見据えていることに気付く。

何事かと思いい同様に正面を向いた一夏の視界に入ったのは、職員室に向かう途中、一夏とぶつかった楯無似の生徒だった。

「お前は……」

静かに一夏が呟く。

先程の敵意の視線を思い出し、声はやや慎重気味だ。

だが、目の前の生徒は一夏を見ていなかった。

「……………」

彼女の視線が向かう先、それは楯無だった。

「あ……………」

そして視線を受けた楯無もまた、何も言わずに立ちすくす。

その表情はまるで、近付きたいのにそれができない、どこか怯えるようなものだった。

「姉さん……」

(え、『姉さん』?)

不意に発せられたワードに、一夏は驚いて楯無の方を再度見る。

「あ、あのね!」

楯無が声を掛けようとする。

だが、楯無を姉さんと呼んだ彼女は、一度軽く頭を下げると足早にその場を立ち去っていった。

楯無は生徒が、妹が走り去った方を見遣る。

その眼差しには一つの感情が浮かんでいた。
それは寂しさ。

「……………」

後方に視線を向ける楯無を、静かに一番は見る。
その表情には、どこか真剣な色があった。

「会長、彼女は」

「さあ、行きましょう!」

声を掛ける一夏。だが、楯無は一気に表情を元に戻すと、一夏に先を促し、歩きはじめた。

「待った。あいつ、会長を姉さんって「一夏くん」…なにか」

問いただそうとする一夏。だが、その言葉は途中で楯無に遮られる。

「うん、そう。あの娘の名前は更識簪^{かんざし}。一年四組の生徒で、私の妹
よ」

その言葉に、一夏は自身の内の疑問が氷解するのを感じた。
似ているのも無理はない。なぜなら姉妹なのだから。

「なんだか、やけに固く見えただけ……………」

そして一夏は楯無と簪のやり取りの感想を呟く。
どこか憂いを、寂寥を含んだ力の無い笑みを浮かべながら、楯無は

答える。

「ちょっとね。でも、これは私とあの子の問題だから」

「…そうか」

そして一夏は口を閉ざす。

正直に言えば気になるが、これ以上の追求は効果が無く、同時に無
粋と判断した。

そして二人は再び歩き始める。

それから少しの後、二人は目的とする整備室の扉の前にたどり着い
た。

「じゃあ、入るわよ」

そう言うってから楯無は扉のすぐ脇の壁にある開閉スイッチを押す。
すると重厚な鋼鉄製の扉が滑らかな動きで開き、整備室への入り口
を開いた。

「さあ、入って」

その言葉に従い、一夏は中へと足を踏み入れる。そして思わず、ほ
うと息を吐いた。

「これは中々……」

室内を見回しながら一夏は感心するような声を漏らす。室内の至るところに置かれた機材。機械系の整備室でありながら、整理が行き届いており汚さを感じない室内。感嘆の息を一夏が漏らすのも無理ないというもの。

そして二人がやってきた整備室には先客がいた。

「お、たつちゃんに織斑君！待ってたよ」

「既に準備は終わっています、会長。すぐにも作業に移れますよ」

「おりむーやつほ」

二年新聞部所属の黛薫子、生徒会役員の布仏姉妹だった。

「お待たせ。ごめんね、待たせちゃって」

楯無が軽く片手を上げながら三人に近寄る。だが、一夏はこの三人が居ることをまるで予想だにしていなかったため、驚きに目を見開いていた。

「え〜と、のほほんさん。なんで居るの？」

とりあえずクラスメイトである本音に尋ねる一夏。その問いに本音は何時も通りの、あだ名通りの「のほほん」とした様子で答える。

「あのね〜楯無お嬢様、じゃなかった〜。会長さんに呼ばれたの〜」

「本音、それでは織斑君にちゃんと伝わらないでしょう。代わりに

私が説明するわ。織斑君、整備科って知っているかしら？」

あまり的を射ているというわけではない返答をした本音を窺めつつ、虚が説明を引き継ぐ。

そして一夏に投げかけられた整備科の情報の有無。それに一夏は首を傾げながら答えた。

「あゝ、そういうのがあっては知ってますけど、詳しくは」

「なら丁度いい機会だから説明をするわね。整備科は二年生になったら専用のクラスがクラス設けられるの。そこに在籍する生徒は基本的にISの整備技能を学ぶのだけれど、その他にもより実践的な訓練として生徒のISの整備も行つたよ」

「ここに居る虚ちゃんと薫子ちゃんはそれぞれ三年と二年の整備科のEースなの。で、今日は手伝いのために来てもらったのよ」

虚の説明を引き継いで楯無が言う。その言葉に一夏はますます深く頷きながら言った。

「なるほど、凡そ事情は理解しました。いやしかし、薫先輩がエースってというのは驚きましたね」

最後の部分を口元をニヤリと曲げながら言う一夏。その言葉に薫子も同様にニヤリとした表情で反応した。

「おや、織斑君。驚いたっていうのは意外だね。一体私のことをどんな風に思っていたのかな？」

「聞きたいですか？」

「うん、どうしようかな」

「フフフフフ……」

そのまま互いを怪しげな笑みを浮かべたまま見る二人。そんな二人に虚は苦笑いを浮かべ、楯無もまた軽く苦笑いを浮かべると手をパ
ンとはたく。

「はいはい二人とも。腹の探り合いはしない。手早く作業を始めま
しょう?」

「はい」

「じゃあ織斑君、ISをあっちの台の上に置いてもらえるかしら?」

「分かりました」

虚の指示通りに動き始める一夏。それを皮切りとして一夏へのIS
整備レクチャーが始まった。

「とりあえず今回は簡単なメンテナンスにしましょう。一夏くんの
白式は装備の換装とかもほとんどないから、基本的にこれだけでき
れば十分事足りるはずよ」

「へい会長、質問」

「何かな、一夏くん？」

開始早々に質問をする一夏。しかし、それに楯無は何時も通りの笑顔で応える。

「ISのメンテナンスってというのは具体的にどんなもので？」

「あゝ、そういうことね。さて、どう説明しようかしら」

顎に手を当てて考え込む楯無。その後ろでは本音、虚、薫子の三人がモニターに目を向けつつ、コンソールの入力をしていた。

「ISの基本的な機能の一つにコアの自己進化があるでしょう？その要になるのが、戦闘データの蓄積なんだけど、蓄積したデータに合わせて機体の機能の調整をするのがメンテナンスの主と思っているわ」

「あゝ、それってパソコンのデフラグみたいなもので？」

デフラグとはパソコンに備えられている機能の一つで、HD内部のデータを整理することによりデータの柔軟な管理や、作業を行う際のパソコンのスピードを上げるものである。

「そうね、おおむねその認識で合ってるわ。例えば一夏くんの白式みたいな高機動近接戦闘型の場合なら、蓄積された戦闘データを元にしてスラスターの出力や、エネルギーバイパスの配分の調整をするのがあるわ。これをすれば、より効率的なエネルギーの使用が

できるのだけれど、とりあえずは実際にやってみましょう?」

そう言つて楯無は一夏も調整に加わるように指示をする。とは言え、完全に素人の一夏に何かができるわけというわけではなく、三人が行う作業を見ながら手順などを見て覚えるくらいであった。

「しかし、のほほんさんがここまでできるつてのは、ちょっと意外だったな」

「えへへ、凄いでしょ」

目の前でコンソールをテキパキと入力する本音の姿に一夏は瞠目していた。

常日頃の姿からは想像できない、彼女の意外とも取れる一面に、少なからず一夏は驚きを隠せずにいる。

「やっぱりのほほんさんも二年になったら整備科に?」

そう尋ねる一夏に本音は軽く首を傾けながら答える。

「ん、今はまだ分かんないかな」

「そつか。でものほほんさんなら整備科で活躍できると思うけどな」

目の前で本音が繰り広げる見事な手際に、偽りの無い感想を言う一夏。その言葉に本音も笑顔を浮かべた。

「えへへ、ありがと〜おりむー」

そして互いに笑顔を向ける。その様子を一步離れた所から楯無が面

白くなさそうな表情で見ていた。

「どうかしましたか、会長？」

そんな楯無の様子に気付いた虚は声を掛ける。

既に作業は殆ど終わっており、話すだけの余裕もできていた。

「虚ちゃん。いやね、本音ちゃんとはあんなに仲良さそうに話すのに、私にはそうじゃないのがね。」

軽く頬を膨らませながら言う楯無に、虚は苦笑いを浮かべながら答える。

「それは…その、会長の行動に原因があるような気がしますが…。例えば学園祭の企画の時など…」

その言葉に楯無は僅かにうろたえる。学園祭における件の企画、「織斑一夏争奪戦」

一夏が激怒し、千冬の武力介入によって騒ぎを制裁された一連の騒動である。

その時の千冬の指摘により、その件に関しては楯無も若干の負い目を感じていた。

「いや…まあね。あれはちょっと私も失敗しちゃったかな…って」

「少なくとも、ファーストコンタクトとしてはあまり宜しくは無かったかと。影響が大きかったみたいですね」

そうきっぱりと言う虚に、楯無は諸手を上げる。

「ああもう、私のバカバカもう一つおまけにバカ。可愛く言ってアンポンタン。うっ、どうすれば私も本音ちゃんみたいに一夏くんに接してもらえるのかしら」

「難しいと思いますよ？彼、意外に頑固そうですし。彼に打ちつけて欲しいなら、誠心誠意の態度で臨むよりほかないかと」

遠慮も何も無くただ事実を伝える言葉。幼馴染にして親友、もっとも信頼のおける従者の言葉に、楯無は苦笑を浮かべる。

「前途は多難、か…。それにしても、虚ちゃんも結構きっぱり言うよね」

「それがお嬢様のためになるのですたら」

敢えて「会長」ではなくお嬢様と呼ぶ。それは更識楯無の従者、布仏虚として答えたからに他ならない。

そして二人は一夏の方を見る。後は殆ど後片付けのみとなった作業。僅かながら一夏にも手が出せる段階ゆえに、一夏も作業を手伝いながら薫子と本音の三人で整備についてアレコレと話していた。

「これは……素晴らしいな……」

整備を終えた白式、そのスペックデータを見ながら一夏が眩く。その表情には、隠しきれない興奮による笑みが浮かんでいた。

「スラスター部のエネルギー効率が15%もアップ、射撃兵装のFCS補正最適化に、やっぱりエネルギー効率アップだと？ 八八、こりゃ凄い……惹かれるな……」

「随分嬉しそうだね、織斑君」

「白式の最大の問題点はエネルギー系統ですからね。それが良くなったというのは、やはり嬉しいのでしょう」

データを見ながら怪しげな笑みを浮かべる一夏を見ながら、薫子と虚がしみじみと言う。

「おりむーおりむー」

「ん？ どうした、のほほんさん？」

データを見続ける一夏。その背に本音が声を掛けた。

「あのねー、おりむーもちちゃんと自分でISの面倒を見なきゃだめだよー？ ISは人が手を掛けて育つんだよー？ それは篠ノ之博士お手製のISだって同じなんだからねー？」

「あ、うん」

「ちゃーんとしなきゃメツ、なんだよー？」

「わ、分かった」

そのやり取りを楯無、虚、薫子の三人が意外そうな表情で見る。特に虚は驚いたように目を丸くしていた。

本音が一夏に言った言葉。その至極まっとうな内容に三人は、そして言われた一夏も驚きを隠せずに居た。

「虚ちゃん虚ちゃん」

「あ、はい。なんででしょうか、会長」

未だ驚いたままの虚に、楯無が横から声を掛ける。

「本音ちゃんも、結構やるよね？」

そう、いつも通りの茶目つけのある表情で言った。

「ええ、あの子もちゃんと自分のすべきことをしているみたいですよ」

そして、虚は楯無に穏やかな表情でそう答えた。

「では会長、私たちはお先に」

「ええ。施錠とかは私がやっておくから」

作業を終えた五人。本音と薫子は先に整備室を後にし、残る三人で戻ろうという話になったが、別の用があるということで楯無は今しばらく整備室に残ることになった。

結果、一夏と虚の二人が整備室から去り、楯無が一人で整備室に残ることになった。

「今日はありがとうございました、虚先輩」

「これでも整備科なので。お役に立てたなら良かったわ」

廊下を並んで歩く一夏と虚の二人。

白式のメンテナンスに付き合ってくれたことに対し、一夏は素直に礼を述べる。

「でも本音が言ったことも事実よ。ISはあなた自身が世話を焼く必要があるの」

「そりゃもう。…できるかわかりませんが、技能的な意味で」

ややバツが悪そうに言う一夏。そんな彼を見て、虚は微笑を浮かべて言った。

「フフ、その時は私や薫子に声を掛ければいいわ。手伝うことはできるから」

「その時はお願いしますよ」

そのまま無言になる二人。

しばらく無言で歩いていた二人だが、不意に一夏が口を開いた。

「虚先輩、聞きたいことがあるんですけど」

「なにかしら？」

「更識簪、会長の妹です」

「っ!？」

一夏が発した問い。それを聞いた瞬間、虚の態度が強張るものになったのを、一夏ははつきりと感じた。

「どうして、あなたが彼女の^替のことを…?」

慎重な様子で問い掛ける虚。

その様子に一夏は、やはりただならぬ事情があると察した。

「いや、実は午後の学園祭準備の時に廊下でぶつかっちゃいましたね。その時は誰かに似てるな〜くらいに思ってたんですけど、後で会長に似てるのに気付いて。気になって聞いたら妹だって。それに、整備室に行く途中にまたばったり会ったんですけど、どうも会長も彼女も態度がおかしくて」

「そうだったの…」

「まあ、何やら事情がありそうでしたし、無理には言わないですけど、やっぱり少し気になりましたね」

その言葉に虚は少しの間、口を閉じる。

「ごめんなさいね。私の口からは詳しくは話せないわ」

そして紡がれた言葉。予想していた答えだったからか、一夏は特にそれ以上問いただそうとはしなかった。

「でも……」

しかし、一夏の予想に反して虚は言葉の続きを発する。

「そうね。確かにあなたの言う通り、会長と簪お嬢様の今の関係は固いものだわ。でも、昔はそうでは無かった」

虚は語る。

彼女は妹の本音と共に、更識家に使える布仏の人間として、幼少期より更識姉妹と親交があった。

それゆえに、楯無と簪の関係を最も身近で見えてきた。

「あまり詳しくは話せないけど、更識家はいわゆる代々続く名家という家で、会長はその次期頭首として期待されていたの。そしてその期待に恥じないだけの能力を、会長は見せていった」

その言葉に一夏は頷く。

文武両道であり、料理など各種技能に秀でた能力。

確かに、名家の跡取りとしては相応しいものだろうと一夏は思う。

「ただ、会長が頭角を現していくにつれて、簪お嬢様は会長を避けるようになってしまい…」

「避けるようになって、じゃあ昔はそうじゃ無かったと？」

「ええ。昔の二人はとても仲が良かった。いえ、今でも会長は簪お嬢様をととても大事に思っているし、簪お嬢様と接したいと思っているのだけど…」

「肝心の簪さんがつてやつですか」

「ええ…」

頷き合う一夏と虚。そのまま再び無言が続くが、そこで一夏が再び口を開いた。

「正直、俺は詳しい事情は全然知りませんがね。ただ、簪さんが会長を避ける理由は何と無く分かりますよ」

「それは…？」

「何と無く虚先輩も分かっているんじゃないですか？有能すぎる姉に引け目を感じる妹。どこかで見た構図だ」

一夏の言葉に同意するように虚が頷く。
篠ノ之姉妹という存在を知っていた一夏は、更識姉妹の間の問題を直感的に悟っていた。

そして、虚の反応がそれが正しいことを物語っている。

「私としては、お二人には昔のように戻ってほしい。でも、こればかりは私にも、簪お嬢様専属の本音にもどうにもできないこと。正直、歯痒い思い…」

「血の繋がった肉親同士の問題はだいたいそんなもんですよ。簪と束さんがそうだった」

従者でありながら、主人の抱える重要な問題に、自身の無力さを悔しがる虚。

そんな彼女をフォローするつもりか、一夏が簪と束の関係を話す。

「ISが発表される前から簪は束さんを苦手にしてた。まあ、束さんは昔からぶっ飛んでましたからね。無理もない。ただ、さすがに俺も千冬姉もそれを問題だってガキながらに思っ、特に簪が束さんに打ち解けられるように色々やりましたよ。でも、無理だった。肉親同士の問題は当人達でなきゃ解決できませんよ」

「そうね…。それでも、私は会長の従者として何とかしたいわ」

「その思いだけでも、十分助力になると思いますがね」

「だと良いけど…」

そのまま再び無言になる二人。

いつの間にか二人の間にはどこか重い空気が流れていた。

そして寮へと繋がる廊下の突き当たりで二人は分かれることになる。一夏は寮へ、虚は生徒会室へそれぞれ向かうためだ。

「じゃあ、俺はこれで」

「ええ、それじゃあ」

そう挨拶をしてから二人は別々の方向に歩き出す。

寮へ向かう一夏。その足が不意に止まった。

「そついや、簪さんが俺に向けたあの目。なんでだ？聞きそびれた」

そつ、顎に手を当てながら呟いた。

ところは変わり整備室。

そこでは一人残った楯無が、真剣な面持ちで目の前のモニターを見ている。

目の前のモニターに広がるのは白式の詳細スペック。メンテナンスではあまり見ない、確実に機密レベルの情報である。

なぜそのような情報を彼女が見ているのか。そこにこそ、彼女が白式の整備に虚を呼んだ理由だ。

話は簡単。整備の最中に白式の詳細スペックデータを取っておくよ

うに楯無が虚に指示したからに他ならない。
そして、彼女の忠実な従者は完璧に主の命に答えた。

「……………」

無言でデータを見る楯無。

その視線はある項目に集中していた。

「白式の各種リミッターの完全解除、これは一体…。それに、絶対
防御の効果も他のISより低い…」

それはかつての個人トーナメントの後、吐血をした一夏の白式を調
べた真耶と千冬が見たものと同種のもだった。

IS、特に競技用のソレは何より機体や搭乗者の安全を考慮して、
機体の出力等々に限界が定められていることがあるが、一夏の白式
にはそれが無かった。

個人トーナメント後に発覚した搭乗者保護のためのリミッター。
それだけでなく、各種武装の出力制限も解除がされていた。
何より楯無はそこに注目した。

武装の出力に制限が無い。零落白夜や迦楼羅の砲撃のようなエネルギー
ギア攻撃を主体にする白式のそれは、決して軽視できることではな
い。

出力に制限が無いということは、一撃で相手を倒せるオーバーキル
が可能ということ。競技に使用されることで、あえて伏せがちにさ
れる相手の命を奪う兵器としての側面を、全面的に押し出している
ことだ。

同時にこれは、機体や搭乗者への反動も無視している。

例えば迦楼羅の最大出力砲撃。これのエネルギーチャージを、エネルギーが持つ限り無制限に行うことができ、結果として相手のISを一撃で、それこそ搭乗者ごと葬るような攻撃も可能となる。

同時に、機体と搭乗者に莫大な反動がある可能性もまたある。

否、確実にそうだと言える。その根拠となるのは、モニターに映し出されてるもう一つのデータ。

現在の白式の高機動時にかかる搭乗者への負荷の数値だ。

そのデータの中でも際立っているのは短距離瞬時加速の際にかかる負荷。

それを見るに、はっきり言ってバカにならないというのが楯無の本音だった。

「いや、無理もないのかしら…」

そう呟く。一見、高速での非常に機敏な機動を可能にしている短距離瞬時加速は有用な技能に見える。

だが、それは瞬時加速で幾度も体を振り回されていることに他ならない。

瞬時加速自体、学園内でもほとんど使い手が居ないためあまり知られていないが、実は瞬時加速はそれなりの負荷を搭乗者に掛ける。

単発ならまだしも、連続で立て続けに発動すればかなりの負担となる。

そして短距離瞬時加速はそれが顕著である。はっきり言って、いつ負担が搭乗者に牙をむいてもおかしくはない。

だが、一夏にはその兆候がない。

それを、一夏の鍛え上げられた身体が強引に負荷をねじ伏せているからだ。楯無は解釈する。

「まるで、捨て身の殲滅みたいね……」

自然と口を突いて出た言葉。言うてから、あまりにピッタリな表現であることに気づき、楯無は頭を振る。

（多分、一夏くんは気付いていない。いないからこそ、出力も抑えられている。いえ、零落白夜の項目に最大出力時の絶対防御切断能力と、使用履歴がある。使用したのは多分無人機。なら、これに関しては気付いていて、他は気付いていないかも）

自身の脳裏で考えをまとめつつ、楯無は懐からUSBメモリを取り出し、端末に差し込む。

そして閲覧していきデータを記録する。

（間違いないわ。今の白式は、現行のISの中で最も「殺傷力」が高い。そしてその担い手は一夏くん）

考えをまとめながら、楯無は不意にある思考がよぎるのを感じた。感じたと同時に背筋が一瞬震え、すぐに頭を横に振って思考を掻き消す。

モニターがデータの吸い出しをコピーを完了したことを示す。それを確認すると楯無は、閲覧していたデータを丁寧に削除。一切の痕跡も残さないようにした。

(これは、あまり余所には見せられないわね)

手の中に握られた白式のデータに思いを馳せる。
彼女自身に、このデータをどうこうするつもりは無い。ただ、手元に置けるようにしただけ。

実質的な死蔵に近いが、いっそその方が良いと思った。

作業を終えた楯無は、軽く後片付けをすると整備室を出る。

その目には、常日頃の学園で見せるものとは違う、伶俐な光が宿っていた。

「ふう…」

整備室を出た楯無は軽く一息つく。

既にその表情は、学園の誰もが知っている生徒会長更識楯無のものになっていた。

そして、その表情に不意に陰が射す。

「簪ちゃん…」

呟くのは愛する実妹の名前。

いつの間にか自分から遠ざかってしまった、妹の名前。

一夏と整備室に向かう途中、ぼったり出くわした時を思い出す。
その時に向けられた視線を思い出す。

「一歩どころか何歩も引いたような、自身との距離を感じさせる目を。」

「……………」

しばらくの間、俯きながら目を閉じる。

そして、顔を上げて目を開くと、ゆっくりと歩き出した。

そこには、先程までの憂いを一切感じさせない学園全体が慣れ親しんだ、自信に溢れる表情を浮かべた楯無の姿があった。

第五十六話（後書き）

なにぶん、原作と違った構成にしたもんでして。出来が心配です。

そして一足早い登場になった簪嬢。

これが後々の展開に変化を加えられたらな〜と思っています。できればですが。できるように、がんばれ、オレ！

そして、次回こそ学園祭話です。

一夏の親友、弾にもすっかりフラグを立てさせます。ご安心をWW

では皆さん、また次回にお会いしましょう。

第五十七話（前書き）

最近感想が減り気味だぜo r t

何とか、読者の皆様が思わず感想を書きたくなるような話を！と思いつつ書いた今回のお話です。

さて、学園祭開始です。

今回、結構ネタを含んでみたりしました。

第五十七話

「遂にこの日が来たか…」

飾り布により装飾が施され、一目で匠の技による作りであると分かる調度の整った椅子と机の数々。

それらに彩られた一年一組の教室で、執事服に身を包み、教室の一段高い教壇に立つ一夏がしみじみと呟く。

彼の周囲には、接客のためのウェイトレス服や、調理のためのエプロンに身を包んだクラスメイトが立っている。

時はIS学園学園祭当日。

既に来客の入場も始まり、喫茶店の開店も目前に迫る中、一夏はクラスの大半を集めて、喫茶店成功のための決起集会を行っていた。

ちなみに、数名の生徒は喫茶店の開店を待つ客の整理のため、教室の外でてんてこ舞いになっている。

世界唯一の男性IS操縦者、学園唯一の目玉を一目見ようと、一組の喫茶店前には大勢の客が、開店前から訪れていた。

その数は、入口の窓からこっそりと状況を見た一夏が思わず目を剥いたほどだった。

「織斑君、後5分と少しで開店だよ」

「で、あるか」

接客担当グループのリーダー、谷本癒子が一夏に開店間近を知らせ、それに一夏が頷く。

学園祭という特別な時の異様な雰囲気にも彼もまた呑まれたか、頷く仕種一つにしても、返答の言葉と共にやたら大仰で芝居がかったものになっていた。

静かに一夏は面々を見渡す。

皆、一様に真剣な面持ちでいた。

「遂に来たぞ。準備には色々あった。シフト方針の変更。人員をそれぞれ専門担当に振り分ける方針への急な変更。シフト決めのみんなには迷惑をかけた」

そう言つて一夏はクラスメイトの集まりの一角を見る。

一夏の視線を受けた生徒は、自分の為した仕事への自負を誇るような、自信のある表情で頷く。

「飾りのセッティング担当、みんなも良くやった。見事な飾り付けだ。特にセシリア、本当にありがとう」

そして今度は教室の飾り付け担当、セシリアを筆頭とした一団に視線を向ける。

視線を受けた面々は、やはり力強く頷く。

「そして衣装担当。シャル、ラウラ、本当に見事だったよ」

シャルロットとラウラを中心にした衣装担当の班とも、同様のやり取りを行う。

「みんな、準備に全力を尽くしてくれた。今、外で客の整理をやっている連中も合わせて、みんなの助力のおかげだ」

鷹揚に頷きながら一夏は語る。その脇から癒子がそろそろ、と声を掛ける。

その言葉に頷くと、一夏は自分の横に垂れている糸を力強く引いた。するとそのすぐ真上、常ならば授業でプロジェクター映像などを使う時に使用する、収納式スクリーンがある場所から、一枚の垂れ幕が降りてきた。垂れ幕には優雅な文体で「一年一組 コスプレ喫茶」と書かれている。

そして一夏は改めてクラスメイト達に向き直ると、朗々とした声で語り出した。

クラス代表としての、最後の気合い入れの言葉を。

「一組諸君、クラス代表の織斑一夏だ。

学園祭出し物、コスプレ喫茶を開始！接客担当、調理担当、客の流入担当、シフト全員で連携して全力で客をもてなす！

無論、俺も接客に全力を尽くそう。俺のネームバリュー、打算的と言われようとも全力で使ってやる！

皆、事前のマニュアル通りに慌てず動いてくれ。そうすれば、仕事も幾分か楽になるだろう」

開店待ちの客の数から、忙しさに見舞われることは確實。

だが、そこから来る不安を和らげるつもりなのか、一夏は落ち着いての対処を心掛けるように言う。

そして一度言葉を切ると、一夏は軽く息を吸う。そして、締めとなる最後の一言を、自信を湛えた不敵な笑みで言った。

「クラス出し物屈指の勢力、一組喫茶店のお披露目だ。諸君、派手に行くこう」

胸の前で握りこぶしを作り、やたら熱っぽい煽動をするような口調で一夏が言葉を締めくくる。

そして、一年一組コスプレ喫茶が開店を迎えた。

「いやあ、見事な演説だったね、織斑君」

各員が持ち場に就くのを見回す一夏に、癒子が声を掛ける。接客担当グループのリーダーである彼女も、必然的に接客を行うことになっており、そのためのウェイトレス服を着用していた。

ちなみに、一夏以外の一組の目玉とも言える四人の専用機持ちも、全員が接客担当になっている。

癒子の言葉に一夏は口の端をニヤリと吊りあげながら答えた。

「実は三日前くらいから考えてたりしたんだよ」

「あ、そうだったの？」

「そうなのだ」

そう言つて一夏もまた動き出す。その後に癒子が続く。開店最初の客を、接客担当全員で迎えるためだ。

「一夏、早く早く」

「兄様は中央だぞ」

既に列に並んでいるシャルロットとラウラが一夏を急かす。その声に頷くと、一夏は再び癒子の方を向いて口を開いた。

「所で谷本さん。聞きたいことがあるんだけど」

「ん？何？」

「うん。なぜシャルの頭に犬耳が、ラウラの頭にウサ耳がついてんの？」

そう。一夏が何よりも気になったのはそのこと。何故かシャルロットとラウラの頭に着けられている犬耳とウサ耳だった。

いや、どうやってついているのかは一夏にも分かる。

ウェイトレス服、ぶつちやけて表現をするならばメイド服なのだが、そのセットの一つであるヘッドレス。そこに耳をつけただけであるということ。

原理は分かっている。だが、何故この二人だけが着けているのかが一夏には分からなかった。

一夏の言葉に癒子は頭の後ろを搔きつつ、笑いながら答えた。

「いやあね、許可貰って演劇部の小物から衣装に使えそうなものがないか探したんだけど、その時に見つけてね。特に二人に合いそうだから、ついね?」

テヘツと言つような様子で答える彼女に、一夏は思わずため息を吐いた。

「まったく、なにをやってんだか…」

「あれ?織斑君気に入らなかった?」

「見りゃ分かるだろ。けしからん。実にけしからん」

「うん、気に入ったんだね。ボーデヴィツヒさんとデュノアさんの頭、撫でまくってるもんね」

表情と口は真面目そうにけしからんと言つ一夏だが、ひたすらにシャルロットとラウラの頭を撫でている手が全てを物語っていた。

想い人に撫でられているシャルロットは幸せそうに、兄と呼ぶ人物に撫でられているラウラはくすぐったそうでありながら、どこか気持よさそうに、それぞれ表情を変えていた。

そしてそんな三人を周囲の面々は苦笑気味に見ている。否、ただ一人箒のみが面白くなさそうな表情をしていた。

「はっ!?!……んっ、ゴホンッ!よし、並ぼうか。さあ並ぼう」

我に返った一夏がハツとした表情になってから、慌てるように指示を出す。

先ほど同様に、周囲の面々はやはり苦笑のまま整列をした。

全員が並んだことを確認した一夏は、列の中央に立って真剣な面持ちに表情を変える。

「いいか、皆。本番だ。気合い入れていくぞ。油断せず行こう」

その言葉に全員が頷く。

「最初のお客様、入ります!」

教室の外から整理係の生徒の声が響く。そして教室のドアが開き、一組最初の客が教室に入ってきた。

「来たぜ、IS学園……」

学園正門、その前で一人の少年が胸の内に沸き上がる興奮を隠しきれない様子で呟く。

明るい色の長髪にバンダナの彼の名は五反田弾。一夏の中学時代の親友であり、一夏と鈴の共通の友人である。

「憧れの女の園、IS学園。この時をどれだけ待ったか……」

しみじみと呟く彼の手に握られているのは一枚のチケット。

それは、学園の生徒が一般客を一名学園祭に招待することができる招待チケットだった。

ことは一週間と少し前の休日に遡る。

その日、弾は中学時代に一夏と共につるんでいた友人の一人、御手洗数馬を自宅に招いていた。

同じ高校に進学した彼は弾と共にバンドの同好会の活動を行っており、その日は弾の家で楽器の調整などを行っていた。

一通りが終わり、暇ができたのだが、その時に二人はIS学園に進学した一夏について会話。

そして噂をすればなんとやらか、弾の携帯に一夏からの着信が入ったのだ。

電話の内容は近く行われるIS学園の学園祭の招待チケットが欲しいか否か。

この誘いに弾は渡りに船とばかりに即座に承諾。そして晴れてIS学園の学園祭への招待チケットを入手したのだ。

(感謝するぜー一夏。お前がダチで良かった…!!)

心の中でガッツポーズを取りながら弾は親友への感謝の念を送る。そして弾は軽く周囲を見回す。

IS学園という場所の特性上、周囲は女子が多く、男性は少ない。居るにしても、明らかにどこその企業やら機関やらの人間が招待を受けて来ましたという風で、有り体に言って生徒と同年代の男性とは殆ど弾のみという状況だった。

そして、IS学園に入学する生徒というのは初等教育の過程からISについて学ぶ者が多いのだが、そうした教育を行う学校は必然的に女子校に限られる。

つまり、IS学園の生徒とは男性との関わりが比較的少ない者が多く、そんな彼女達にとって見慣れない同年代の異性である弾は興味の対象だった。

「ねえねえ、あそこの男子、どこの人かな」

「結構イケてるよね」

「ちょっと声かけてみよっか？」

離れたところから聞こえるそんなやり取り。

その言葉に弾はある種の感動にすら近い感情を抱いた。

(くうううっ！注目されてる！俺、女子に注目されてる！)

女尊男卑だなんだと言われている時世だが、十代思春期男子の思考というものは昔も今もそうそう変わらない。

ようは異性にモテたい。その一言に尽きるのであった。

そして、そんな十代思春期男子の思考を例に漏れず行っている弾にとって、今の状況は願ったり叶ったりであった。

女子に注目を浴びる。そのことへの感動を噛み締めながら、弾はもう少しこの状況を楽しむとすることにした。弾に注目を向ける会話は未だ続いていた。

「ねえねえ、織斑君とどっちがいいかな？」

「ん、私は織斑君派かな」

(ん？一夏のことか)

聞いてから弾はある意味順当だと納得する。

彼女らにとって最も身近な男子とは、紛れも無く一夏のことだ。比較されるのも仕方ないだろう。

「でも、私は織斑君はちょっと…って感じかな」

「え、なんで」

「うん。悪い人じゃないっていうのは分かっただけだね。そのお、ちょっと怖くて」

「あゝ、なんか分かるかも。前にISの模擬戦で二年生をボコボコにしたっていうらしいし、聞いた話じゃ武道系部活相手に大乱闘もやったとか」

(んなあつ!?)

その言葉を聞いた瞬間、弾は思わずっこけそうになった。だが、すんでのところでも堪えることに成功した。

(あ、あいつはここでもか…!!)

思わず頭痛がしそうになるのを弾は感じた。

五反田弾という人間は、良くも悪くも織斑一夏という人間を良く知っている数少ない人間だ。

ここで言う良く知っているとはすなわち、一夏の武に関する側面である。

中学時代、一夏が優れた身体能力を持っていることは多くの者が知っていたが、その一般から隔絶した実力について知っているのは、弾と鈴くらいのものである。

その実力を知るきっかけ、それは以前鈴が学食で話した、一夏が大量の不良をたたきのめした出来事である。

鈴と共に見た光景。その時の衝撃は今でも良く覚えている。

そして、そうした出来事を踏まえた上で、彼は一夏の親友を続けていた。

そうした一面も、また一夏であると納得しているからだ。

だが、しかし

(分かつちやいる。いるけど、IS学園に入学しても、あいつは変わんねえのか)

話を聞くに、IS学園でも変わらず大立ち回りを繰り広げているらしい親友に、弾は思わず苦笑いを浮かべずには居られなかった。

(いやまあ、あいつらしいっちゃらしいか)

しかし、すぐに気を取り直す。

このあたり、彼が一夏の親友を続けれている、人間性の賜物と呼ばれた。

そして気を取り直した弾はゆっくりと歩を進める。

向かうは目の前の正門。夢にまで見た、未知なる世界への第一歩を今、彼は踏み出した。

「すみません、チケットを見せていただけますか？」

正門に差し掛かったところで、弾は入口に居る生徒の一人に呼びとめられる。

弾は知る由もなかったが、彼を呼びとめたのは生徒会会計の布仏虚だった。

「あ、はい」

言われた通りに一夏から貰ったチケットを手渡す弾。だが、その視線は虚の顔にくぎ付けになっていた。

有体に言くと、みとれていたのである。

「はい、どうもありがとうございます。これは　織斑君のチケットですね。ご友人ですか？」

「あ、はい。まあ」

返されたチケットを受け取りながら虚に答える弾。だが、彼は虚が浮かべた微笑に完全に見入っていた。

「あいつ、一夏ってやっぱり有名なんですか？」

何とか会話を試みようとして、先ほど名前が拳がった一夏を話題に出してみる弾。それに虚は微笑を変わず浮かべたまま答えた。

「ええ。学園でも屈指の有名人ですから。本当に、色々」と

最後だけやや苦笑気味に言う虚。その理由は先ほどの女子生徒達が話していた一夏の暴れっぷりの有名故なのだが、そのことに気付くほど今の弾には余裕が無かった。

「そうなんですか？」

答えつつも弾は内心で焦っていた。どうにかして会話を繋げられないか。次の言葉を必死で考える。

「あ、あの、……良い天気ですね」

そして出てきた言葉がこれである。女子との出会いを期待し、気合を入れられてIS学園まで来たもののこの現状。

自身の情けなさに弾は心の内で泣きたくなっていた。

「ええ、そうね」

そしてそんな弾に律儀に言葉を返してくれる虚に、弾はますます自身の情けなさを痛感していた。

「客足は上々、か」

教室の一角、客が各々紅茶やケーキなどを楽しんでいるエリアから直接目に見えないエリアに一夏は居た。

教室にある二つの入り口の内、片方と直結しているこのエリアは、いわゆる「関係者以外立ち入り禁止」の詰め所の役割を担っていた。

仕切りとなっている飾り布の隙間から教室全体を見ながら一夏は二ヤリと口元を笑わせながら言う。

飾り布の隙間から見える教室、匠の技の作と一目で分かる、意匠の凝らされた机と椅子は、全て客で埋まっていた。

「しかし、少々設定価格が高いような気がしたが　　鏡さん、かなり売れ行きはいいな」

そう言つて一夏はすぐ後ろに居るメニュー価格担当、経理担当班の鏡ナギへと視線を向ける。

一夏のニヤリとした視線に対し、ナギもまたニヤリとした視線を返しながら言った。

「フフン、どうよコレ。私の予想に狂いは無かったわ」

「へえ、予想？」

「そう」

聞き返す一夏に、ナギは人差し指を立てながら言う。

「考えてもみなよ。ここに来るのは基本的に企業とか各機関からのお客様、スーツがよく似合う大人ってわけ。そして、基本的にそういう人達はコレをいっばい持つてるわけよ」

そう言つてナギは親指と人差し指で丸を作る。

それを見た一夏は顔に浮かべた笑みを深めて言った。

「ああ、つまりはアレか。札が服着てやってくる」と

もはや盛大にぶつちやけたとしか言いようの無い一夏の言葉だが、ナギもまた笑みを深めながら、一夏の言葉に同意するように言った。

「イツツ、イグザクトリイ！それだけじゃないわ。それ以外の一般のお客様もまたしかり。なにせ一般客は招待でしか入れないからね。だから、ここに來れた一般客の人達は、物珍しさについつい財布の紐が緩みがちになる。完璧だわ」

「して、そこから導き出される結果は？」

そう問い掛ける一夏。ナギは一際笑みを深くしながら言った。

「ズバリ、売上トップも夢じゃない！」

「それは素晴らしいな。クク、鏡屋。御主もワルよのう？」

「いえいえ、クラス代表様ほどでは」

「フッフッフッフッフッフ」

時代劇によくあるような、暴れん坊な將軍様や、水戸の副將軍様にお裁きを食らいそうなやり取りをする二人。

と、そこで一夏は一気に表情を真顔に戻すと、執事服のネクタイを締め直す。

「さて、このまま御代官ごっこも楽しそうだけど、俺は仕事に戻るよ」

「あれ、そんなの？」

「ああ。つっても、そんなに長くはやらないよ。俺の交代も近いし、招待したダチと会う約束もあるからな。後少し、何組か相手をする

だけさ」

そう言つて一夏はナギに手をヒラヒラと振りながら接客に戻つていった。

「あ、織斑君！今お客さん入つたからお願い！女の人！」

「あいよ〜」

詰め所から出て早々に一夏に声かけられる。
言われた通り、一夏は新たに入つてきた客に対し、店のスタイルに則つた挨拶をする。

「お帰りなさいませ、お嬢…さ…ま…」

挨拶をする一夏。だが、やって来た客の顔を見た瞬間、語尾が途切れ途切れになる。

なぜならば、やって来た客というのは

「やつほ〜一夏くん。楯無おねーさんが来てあげたわよ」

片手を上げながら笑顔を浮かべる楯無だったからである。
この時、一夏は楯無の登場に対しポーカークフェースを維持できた自分を内心で褒めていた。

「こちらへどうぞ」

努めて冷静な声で一夏は楯無を席に案内する。
そして椅子を引き、楯無を席に座らせる。

「メニューをどうぞ」

そう言つて一夏はメニューを楯無の前で開く。
これにより一夏の顔が楯無の顔に近付いた瞬間、一夏は小声で楯無に言った。

「なんで来てんだアンタは」

その言葉に楯無は視線だけを一夏に向けると、やはり小声で言った。

「そりゃあもちろん、執事姿の君を見るためよ」

その言葉に一夏は思わず頬を引き攣らせる。

だが、そんな一夏の様子などお構い無しに、楯無は注文を言う。

「ねえ執事さん。この、『執事ご奉仕セット』って言うのをお願いできるかしら？」

「んなっ!?!」

楯無の注文に、一夏の顔の引き攣りが強まる。

楯無が選んだメニュー。それは一夏にとって、最も選ばれたくないメニューだった。

だが、いかに相手が気に入らない生徒会長いえども、客は客。相応の対応をしなければならぬ。

よって一夏は、内心逃げ出したくなるのを堪え、泣く泣く『執事ご奉仕セット』を厨房にオーダーした。

「お待たせしました」

楯無の目の前に執事ご奉仕セットが置かれる。

一見すれば、ただの紅茶とケーキのセットでしかないソレ。だが、その真価は別のところに存在していた。

「さて、執事くん？ご奉仕っていうのは、どんなのかな？」

紅茶とケーキを前に一夏に尋ねる楯無。その表情には、全てを知っているかのような余裕があった。

（どうせ確信犯だよな。話しても、仕方ないか）

言葉にするだけ無駄と悟った一夏は、「失礼します」と断りを入ると空いている椅子を引き、自身も楯無の隣に座る。

執事ご奉仕セット。

それは、出されたケーキを執事が食べさせてくれるというものだった。

た。

隣に座った一夏を楯無は笑顔で見る。

そんな楯無の姿に、一夏は胃が重くなるのを感じた。

だが、仕事は仕事。意を決して、フォークを手に取った。

「あ、たっちゃんに織斑君。ちょうど良かったわ」

そして背後から唐突に聞こえた声に、一夏はとてつもなく嫌な予感を感じとった。

「あら、薫子ちゃん。どうしたの？」

楯無が声の主の名を呼ぶ。

そこには、報道部所属の二年、黛薫子がいた。

「いやね、報道部の仕事で写真を撮ってるんだけど、たまたまたっちゃんと執事服の織斑君が見えてね。というわけで、二人のツーショットを撮らせてもらっわ」

了承を撮る間もなくカメラを構える薫子。

一夏は黙ってフォークを置くと、さっさと写真を撮ってもらい、薫子に退散願おうと考える。

だが、そこで楯無が爆弾を投下した。

「あ、ちょうどいいわ。これから一夏くんが私にケーキを食べさせてくれるの。その写真なんてどうかしら？」

「うおおおい!?!」

思わず声を大にする一夏。だが、薫子は良いことを聞いたと言わんばかりの表情になる。

「それは絵になりそうな光景ね。よし、じゃあその写真でいこう！
ハイ、織斑君よろしく！」

「な……な……な……」

自身の意見を完全無視で進められる話に、一夏の顔が一気に引き攣る。だが、楯無と薫子が退く様子は微塵も感じられなかった。

「さあ、一夏くん。お願い」

「ぐっ……」

言葉に詰まり、押し黙る一夏。

しばらく俯く彼だったが、不意にその顔を上げた。

「上等だ。やってやる」

「そう来なくっちゃ！」

一夏の言葉に薫子が指を鳴らす。それを見た一夏は軽く鼻を鳴らすと、真剣な表情で楯無に向き直る。

「行くぞ、会長」

「ええ、ドンと来なさい」

そして一夏は再びフォークを手に取る。

ケーキの一部をフォークの側面で切り取ると、その切り取った一切れをフォークに刺し、ゆっくりと楯無に近付けた。

そして

「お嬢さま、あーん」

「あーん」

「ベストショット頂きー！」

ケーキを楯無に食べさせる一夏。食べる楯無。写真を撮る薫子。それは一瞬の出来事だった。

ケーキを楯無に食べさせる一夏。その表情はどこか吹っ切れたか、あるいはやけっぱちになったかのどちらかは定かではないが、それはそれはイイ笑顔をしていた。

「いやー、良い写真を撮らせてもらったわー。じゃ、私は次の所に行くから」

「ええ、どうぞ行って下さい」

納得のいく写真を撮れたからか、満足そうな表情で教室を出る薫子。それを一夏は二度と来ないでくれと思いつつも見送る。そして、再度楯無に向き直った。

「さて、会長」

「何かしら？」

一夏は軽く深呼吸をする。そして意を決したかのように、真剣な面持ちで言った。

「仕事だから仕方ない。こうなったらご奉仕、最後までやらせてもらうぞ…！」

何故か凄みを利かせながら言う一夏。
だが、それを楯無は満面の笑みで受け入れた。

数分後、執事ご奉仕セットを堪能した楯無が教室を出て行った。
担当した執事としてそれを見送った一夏だったが、その目の端が僅かに湿っていることに気付く者は誰も居なかった。

(チ、チクシヨウメ…)

楯無を見送る一夏は、それだけを思うのに精一杯だった。

「あゝ、参った…」

楯無が去ってからしばらくの後、シフトの交代となった一夏は一度

接客から離れた。

そして与えられた自由時間を満喫しようと、教室の外に居た。

「とりあえず弾と合流するかな……」

篝やシャルロットら専用機持ちの面々とも、一人ずつ交代で学園祭を見て回るといふ約束を交わしてはいるものの、一夏にとってはまず弾に会うのが優先だった。

せっかく招待した親友。まさか招待しただけで会わないというわけにもいかない。

それに、初めての場所ゆえに勝手が分からない部分もあるだろうと予測し、ならばなおさら直接会って手助けをする必要があると考えた。

「…行くか」

そう一言呟き、一夏は歩き始める。

だが歩きはじめた直後、一夏の背に掛けられる声があった。

「すみません、織斑一夏さんでしょうか？」

聞き慣れない女性の声。

一夏が振り向くと、そこには女性用のビジネススーツに身を包んだ女性が居た。

おそらくはどこぞの企業や研究所からの招待客だろうと当たりを付けると同時に、一夏は何と無くだがこの後の展開が読めていた。

「そうですが、失礼ですがあなたは？」

そう尋ね返す一夏に、女性は軽く一礼をすると、名刺を差し出しながら言った。

「失礼しました。私、こういうものです」

「なにになに？」『IS装備開発 SALOT社 渉外担当 巻紙礼子』
ああ、IS装備の会社の方ですか」

目の前の女性が何者か分かると同時に、一夏は自身の予測が正しいことを認識した。

そして、そのあとの巻紙女史の言葉は一夏の予想通りのものだった。

「はい。実は織斑さんに是非我が社の装備を使用して頂きたいと思
いまして」

（ああ、やっぱりそういう話か）

実は一夏、この手合いは夏休み中に何度も相手にしたりしている。
つまりは、世界唯一の男性IS操縦者に自社開発の装備を使用して
もらうことで、宣伝に利用しようというわけだ。
白式の開発元の倉持技研が未だ白式の追加装備を開発できていない
ことが、それに拍車をかけていた。

だが

（無駄だとは思っけどな）

口には出さず、胸の内です。

今まで一夏は、この手の話は全て断っていた。

一夏自身あまり乗り気では無いというのもあるし、何より白式が一

切の装備を受け付けないという問題があった。

どうにも白式は相当に頑固な機体らしく、追加装備の一切を受け付けない。

せいぜいが、白式の真の開発者、ISの産みの親たる篠ノ之束自作の『白嵐』くらいだった。

これらのことから、一夏は半ば確信に近いある考えを持っていた。すなわち、白式の追加装備など、束以外には製作不可能と。

それが、幼少期の経験から束には思うところ色々あれど、その能力の高さだけは認めている一夏の出した結論だった。

そしてそれゆえに、一夏は目の前の女性を上手くあしらう方向で決定した。

「申し出はありがたいのですが、そのようなお話は学園を通して頂かなければならないんですよ。ですから、まずは学園の方へお願いします」

十中八九断られるだろうけど、と最後は心の内で呟きながら言う。だが、巻紙女史はその程度で諦める人間では無かったらしい。

「そこをなんとか！ぜひ！」

「いえ、すみません。規則なものでして」

そう言うってから一夏は、人を待たせているのでと、一礼してから素早く立ち去る。

あまり褒められた行動では無いと分かっていたが、このような手合いは長々と相手にしないほうが良いと判断した。

そして、10メートルほど歩いてから一夏は、一度後ろを見た。廊下は人で溢れており、僅か10メートルの距離でも進むのに手間取るものだったが、一夏はスイスイと人をかわして素早く進んでいた。

視線の先、先程まで一夏が話していた場所。あるいは諦めたのか、そこに巻紙女史の姿は無かった。

それを確認すると、一夏は再び前方に視線を向けて、弾と合流すべく歩き出した。

だがその視線は、眼光は、まるでISを纏っている時のように、あるいは真剣を構えている時のように、鋭い光を帯びていた。

オ・マ・ケ

弾と合流すべく歩いていた一夏。

その途中、彼はある人物に出くわした。

それは

「あ、おりむーだ〜」

片手にタコ焼きの入ったパックを持っている本音だった。

「おー、のほほんさん。のほほんさんも休憩か？」

「うん。だからね〜、食べ歩きしてたの〜」

「へえ、そうなんだ」

相對している者を自然とリラックスさせるような本音の雰囲気。それを前に、自然と一夏も口調と表情が穏やかなものになる。

と、そこで一夏はあることに気付いた。

「あれ、のほほんさん。そのタコ焼き、変わってるな」

一夏が気付いたのはタコ焼き。正確にはその色。具体的に言って、そのタコ焼きはやや緑がかっていた。青海苔の色とは明らかに違っていた。

一夏の問いに、本音は変わらない調子で答える。

「うん、そ〜なんだ〜。なんかね〜、オリジナルの商品で、『ヘルシーベシタブルたこ焼き』って言うんだって〜。あのね〜、生地のトロトロが緑なんだよ〜?」

「へえ、そりゃ珍しいな」

どんなものか。名前を聞いて一夏は何と無く想像ができた。
おそらくは、ミキサーなどで細かく砕いた青野菜を生地に混ぜたの
だろう。

中々面白そうだと一夏は思った。

「じゃあ、私は行くね〜」

そう言って本音は、トレードマークの余り袖をヒラヒラさせながら
歩き去る。

それを一夏は、同様に手をヒラヒラさせながら見送る。

笑顔で本音を見送った一夏だが、不意にその表情が固いものになっ
た。

「緑色のたこやき、か……」

ふと、それを想像してみる。

半球の窪みから取り出される球体。

いくつもあるそれから出てくる、緑色の物体。

「なんとというか……面妖な……」

何故か知らないが、そう呟いてしまっ一夏だった。

第五十七話（後書き）

文化祭と違って、結構テンションが変なノリになったりしますよね。一夏もまたしかりです。特に冒頭とかの台詞がやたらアレなのは、そのせいです。

え？10年くらい前の唐沢寿明主演の大河で反町隆史が演じた信長？
なんのことやら。

え？どこぞの輝美？
知りません（キリッ

え？青春な学園の中等部テニヌ部（誤字にあらず）の部長？
関係はアリマセンヨ？

…さて、原作でも登場した巻紙女史。正体はアイツですが、今はまだ関係ないので置いといて。
企業の名前を変えてみました。

「SALOT」
絶対に逆から読んではいけません。

そして最後のタコ焼き。

ええ、スミちゃんや社長に変態呼ばわりされたり、メイさんに「何

これ「なんて言われたりするの、モデルなんてことはありません。絶対ありません（キリッ）」

少々作者のノリがおかしい方向に作用した今回の話ですが、お楽しみ頂けたなら幸いです。

では、また次回にて。

ところで、今回の犬耳シャルと、ウサ耳ラウラ。個人的には凄くイイと思いますが、どうでしょう？

第五十八話（前書き）

少々短いですが、キリがいいので更新します。

基本的に弾との会話オンリーです。

ううむ、なんとも微妙な出来です…

気が付いたら総合PV200万突破でした。

皆様、日頃から本作をご愛顧頂きありがとうございます。

第五十八話

弾との待ち合わせ時刻が近づき、親友を迎えるために正門に向かった一夏は、丁度ほとんど同じタイミングで正門から学内に入ってきた弾と会うことができた。

「よお、弾。来るのを待ってたぜ」

「おう親友、来てやったぞ」

軽い挨拶と共に互いの手のひらをパンと打ちならす。

学園に入学してから一夏が弾と直接会うことができたのは、結局シヤルロットとラウラが転入してくる前の一回だけであり、久方ぶりの親友との再会に一夏は素直に喜びを感じていた。

「で、弾よ。憧れのIS学園にやってきた感想はどうだ？」

前々から一夏のことを羨ましがっていた弾に、一夏は開口一番そのことを問う。

「いや、周りが可愛い女子だらけというのは実に素晴らしいな、ウン」

至って真面目な顔で頷く弾。その姿に、学園での実情の一切を知らないが故に純粋に羨ましがれる親友を、一夏は苦笑しながら見ていた。

「なら、ここで立ち話もなんだな。その素晴らしい場所を見るために、さっそく歩こうじゃないか」

「そいつは魅力的な提案だ。のったぜ」

そして二人は学園祭を見て回るために歩き出した。

「で、だ。一夏、いきなりこんなことを言うのもなんなんだけどさ」

「ん？どした？」

歩き始めてすぐに口を開いた弾。何か言いたげなその口調に、一夏は隣を歩く弾に顔を向けた。

「お前、ここに入学しても派手にやってるらしいな。結構有名らしいけど」

思い出すのは先ほどの女子の会話。そのことを言うと、一夏は僅かに表情が固まった。

「あゝ、いや。まあ、うん。それなりにはな。ハハ…」

ごまかすように言う一夏。だが、さらに弾は言葉を続ける。

「しかも上級生をISでボコボコにしたとかって。マジ？」

「ああ、そりゃマジだ。夏休みなんだけどな、向こうから喧嘩吹っ掛けてきたから、ちゃんと買ってやったってわけだよ」

「いやお前、そこは買つなよ」

思わずジト目になる弾に、一夏は笑いながら答える。

「いやあ、物言いについてカチンツて来ちゃってさ。ついついボコボコに。ハハハハ」

そういう親友の、まるで変わらない姿に弾は思わずため息を吐きたくなった。

「で、ボコボコってどうやったんだよ？あれか？お得意の刀か？」

一夏が剣術を学んでいるということは弾も知っていた。そしてISでの戦闘術の中には剣を使った近接格闘もあるということを知っていたため、おおかたその辺だろうと当たりをつけていたが、一夏の返答は予想外のものだった。

「いや、あん時は殴る蹴るでボコした」

「……マジ？」

「マジもマジ。大マジだよ」

信じられないという顔つきになる弾だが、一夏の至極真面目な顔が嘘ではないことを物語っている。

「でもよ、確かISの戦闘ってシールドエネルギーの削り合いだろ？殴る蹴るだけでできるのかよ？」

IS登場以前の既存の火器の大半を無力化するISのシールドの頑丈さは世界的な常識と言える。

そして現状、ISのシールドにダメージを与えることができるのはIS用の各種火器、近接格闘用兵装、或いは旧来の兵器でも火力に優れた大型の戦車砲などがあるのだが、ISの持つ機動性からくる命中率の関係から、実質的に同じISが装備するIS用武装のみがシールドを削る手段と言われている。

そして弾の疑問に、一夏は至極なんとも無い風に答えた。

「ん〜？できるぜ、殴る蹴るだけでも。実際、俺以外にもそうやってダメージを喰らわせるやつは居たし」

そう言いながら一夏は、以前のラウラ対セシリア、鈴の戦いを思い出す。

「それに弾。まさか俺がただ単に殴る蹴るだけだと思っか？」

「……オーケー。少しばかり嫌な予感がしなくもないけど、聞いてやる」

僅かに口の端を吊りあげながら言う一夏に、弾は何やらよろしくない予感を感じつつも続きを促す。

「いいか、弾。こいつは自分でIS動かして実感したんだけどな。ISのシールドも完璧じゃあない。兵装次第じゃ貫くこともできるし、その先にある絶対防御も、実は言うほど完全な代物じゃないんだ」

自身がそのシールドを、さらには絶対防御すら貫ける最凶クラスの攻撃力を持っていることは伏せたまま一夏は語る。

「ISのシールドってな。言っちゃえばとかく頑丈な鎧みたいなもんなんだよ。そしてその鎧は、攻撃による損傷は防げて、衝撃までは完全に防げない。確かにそれなりには中和するけど、衝撃だけ徹すつてことは可能だ。そして俺はそれができる」

「……」

やっぱり聞かなきゃ良かったかなと若干思いつつも、弾は一夏の言葉の続きを聞く。

「そしてだ。俺は件の模擬戦で相手の搭乗者に衝撃が伝わるように攻撃を当てた。するとだ、どうなるか分かるか？」

「まさかアレか？ISより先に搭乗者がダウンするとか……」

弾の言葉に一夏は満面の笑みを浮かべる。

それは、弾の予想が正解であることを如実に物語っていた。

「っーかよ。ぶっちゃけソレって方法としてはかなりめんどくさくないか？」

弾はIS戦闘の知識に関しては殆ど素人でしかない。

確かに以前一夏とプレイしたISのゲームなどで、多少のセオリーに関しての知識は持っているが、それも実際に本物を動かしている人間からすれば、ド素人の領分を出ない。

だが、そんな弾の予想に対し、一夏は至って真面目な表情で返した。

「まあぶっちゃけ効率は微妙だな。確かにIS同士の徒手空拳も効果はあるけど、それが如実に出るのはそういうコンセプトで設計されたISくらいだ。少なくとも、俺のISは斬った方が早い」

「ならなんでそんな回りくどい真似したんだよ」

不思議そうに聞いてくる弾に、一夏はごく自然な態度で答えた。

「いや、単に徹底的にボコしたかったから」

「…あー、そうかい」

本当に、IS学園に入学しても何一つ変わる様子の無い親友。その姿に、慣れ親しんだ姿にどこか安心すると同時に、こいつこのままで本当に大丈夫かとも思う弾であった。

「でもな、弾。殴る蹴るくらいならまだ可愛いもんなんだよ」

「は？なんでだよ」

一夏の言葉に聞き返す弾。一夏は正面に向き直って口を開く。その表情には、先程までとは違う真剣味を帯びた色があった。

「ISを装着していても、関節は当たり前に動く。それでだ、組み技でも使って首をへし折ったらどうなる？シールド削るまでもなく、相手を潰せるぞ」

その言葉に弾は思わず言葉を失う。

そして一夏は再度弾に向き直ると、自身の顔の左側を指差す。そこにはうつすらと走る縦筋が刻まれていた。

「それ、どうしたよ？」

明らかに傷跡とおぼしきライン。前に会った時には無かったそれを見て、弾は先程の一夏の言葉も相俟って慎重な声色になっていた。

「なんてことない。ちよつと戦闘で傷付けられただけだ」

なんてことないように言う一夏。

だが、弾はその言葉が言外に発している意味をなんとなくだが察していた。

すなわち、IS操縦者であるということは、時に身の危険に見舞われることもあるということだ。

「俺、やっぱり普通の高校で良かったかもしれねえ」

彼とて一人の人間。何よりもまず、自分の命が惜しい。

女子の園という空間への憧れこそ、未だ残っているが、さすがに命と秤にかけることはできない。

故に、自然とそう言っていた。

「それがいいさ。俺も、お前や数馬なんかと同じ高校行って、一緒に馬鹿をやりたかったよ」

そう、どこか物憂げに言う一夏。

二人の間の空気がわずかに重くなるが、それを善しとしない弾はな

んとかして空気を明るくしようとした。

「けどよ一夏。お前が俺達と一緒に高校になったらなっただ、それはそれで俺達が大変になると思うぜ」

「は？なんでさ」

唐突な弾の言葉に、一夏は不思議そうな表情をする。

「いやだって、高校に上がったたら上がったでお前。本格的に不良をボコしてトツプ張ったりしそっだし」

その言葉に一夏の表情が呆気に取られたようなものになる。

それから少しの間、考え込む。

弾の仮定を予想しているのだが、自身でもおおいに有り得ると思える仮定に、一夏は気まずそうな苦笑いを浮かべた。

「そっだな。ありそっだよ」

「だろ？そっになったら俺達が大変だ。具体的にはお前へのフォロ―とか」

「違うないや」

そして二人は互いの顔を見合わせて笑いを吹き出す。

すでに先程までの重苦しい空気は払拭され、親友同士が他愛のない会話を交わす、穏やかな空気がそこにはあった。

「で、どうする弾。どっか見たい所とかあるか？」

「いや、お前に任せるわ。はっきり言って、俺はここのこと全然分かんねえし」

「じゃあ、校舎の中の展示でも適当に見るか」

「あいよ」

そして二人は校舎の中に入り、各教室で行われている展示を見て回った。

一しきり校舎内の展示を見た後、特になにかをする当ても無かった二人は、暇を潰すかのようにブラブラと廊下を歩いていった。

弾としては、あのIS学園の学園祭なのだから、普通の学校では見られない、アツと驚くような展示があるかと期待していたのだが、実際の展示は喫茶店やお化け屋敷などごくごくありふれたものであり、それ以外にもIS関連ではあるものの、一種の研究発表など、普通の学園祭とさほど変わらない展示内容に意外そうな表情をしていた。

「まあ、IS学園って言っても普通の高校の側面もあるしな。そう余所と変わりはしないよ」

意外だと言う弾の言葉に一夏が答える。

そも、一般来場を規制しているのもあくまでセキュリティのためであり、中の生徒達の活動とはそこまで余所と掛け離れたものではな

い。

強いて他の高校との相違点を挙げるならば、一夏を除いた生徒全員が国際色豊かな女子で構成されていることだろうか。

「ほぐ。まあ、俺としては色んな可愛い女の子が拝めるっただけでも十分だけどな」

そうニヤリとしながら言う弾に、一夏もまた軽く笑う。

「あ、織斑君だ!!」

「しかも執事服!これは写メものだわ!!」

ふと、廊下を歩く一夏の姿を見た生徒がそのような声を上げる。携帯のカメラ機能で一夏の写真を撮る彼女らに軽く手を振る一夏だが、そのまま歩いていく。

「やっぱ、お前人気者じゃないか」

一夏の隣で一連のやり取りを見ていた弾がそのように言う。だが、その言葉に一夏は軽く鼻を鳴らすと、どこか自嘲気味の笑みを浮かべた。

「人気、人気ねえ……」

首だけを後方、先ほどの生徒の居る方向に向けると、すぐに戻して一夏は言った。

「さて、その人気は本当に俺に対するものなのか、どうにも疑わし

いな」

「あん？そりゃどついう意味さ？」

分からないと言いたげな表情の弾に、一夏は表情を自嘲気味のまま変えることなく語る。

「さっきの二人組、全然面識は無いんだけどさ。それでも向こうは俺を知っている。けど、それは本当に『織斑一夏』という個人なのかなって思っで。」

ただ唯一の男性操縦者だから、あの織斑千冬ブリュンヒルデの弟だから。それだけで見てやいないかと思っでな」

「なるほどな……」

言われてから弾も納得する。一夏のそれは、一種のアイドルのソレに近いだろう。メディアなどに露出される表面的なことに目を奪われる。そのことに。

「いやでも、仕方ないんじゃないか？立場が立場なんだし」

「そうなんだよな。こいつはもうどうしようもなく。いや、ぶっちゃけ一番俺が嫌なのはな？まあ同じクラスのみんなどは、結構なつきあいになってるから、割と普通にやれるんだけど、それ以外じゃ未だに珍獣というか、珍しいもの扱いが多いのが……」

ヨヨヨよ目元を押さえる振りをする一夏。あまりにもわざとらしいその仕種だが、一夏の言葉から感じる割と本気で悩んでいる雰囲気、弾は何も言えずに苦笑いを浮かべるしかできなかった。

「まあアレだ、一夏。そのうちいいことあるって！な！」

親友を元気づけるように背中をバンバンと叩きながら弾は言う。

「いやまあ、俺としてはいいことってのは強くなって勝つことだからさ。俺個人がやるかどうかの問題だから、そのうちも何も無いんだけど」

「本当にお前は変わんねえなあ！？」

一夏から返された言葉に思わずツッコミを入れてしまう弾。そんな弾に一夏はごまかすようにハハハと笑う。

不意に二人の間に音楽が流れた。音の出所は一夏のズボンのポケット。音源は一夏の携帯電話だった。

「わりい。ちと電話だ」

そう弾に断わりを入れてから一夏は携帯電話に出た。電話の相手はクラス喫茶接客担当班の谷本癒子だった。

「どうした、谷本さん？」

「織斑君！メーデーメーデー！すぐに戻って！お客さんが織斑君はどこだーってクレームが！」

「なに？客が騒いで一大事だと？よし分かった。すぐに騒動鎮圧のために俺が武力介入を」

「しなくていいからね！？とにかくお願い！シフトが無いってのは

分かってるけど、戻ってきて!」

「了解。すぐに行くよ」

そう言っただけで電話を切った一夏は、軽いため息を吐くと弾に向き直った。その表情は「ヤレヤレ」と言いたいようなものになっていた。

「仕事か？」

「ああ。どうにも俺のご指名が一杯らしい」

「人気者は辛いねえ」

「そんなんじゃないよ。せいぜい動物園のパンダ、物珍しい見世物程度さ」

そう一夏は皮肉気に口元を歪ませながら言った。そんな親友に、弾もまたニヤリとした笑いで返す。

「いいじゃねえか。それでも、まだ好意的な態度だけマシだろ？」

「違うない」

そして一夏は弾に背を向ける。

「じゃあ、悪いけど俺は行くよ」

「おお。俺も少しは慣れたからな。後は一人で見て回れるぜ」

「そいつは良かった。ああそつだ。一年二組じゃ鈴がいるはず」

だからさ。久しぶりに会ったらどうだ？」

「オーケー。覚えとくわ」

そして自身のクラスの救援に向かうべく駆けだす。廊下には多くの人が居たが、一夏はその隙間を縫って一気に駆けていった。

その背を見送った弾はしばらく立ちすくしていたが、やがて彼もまた動き出した。

「さて、俺もまた見物と行くか」

とりあえずは外の屋台を見て回ろうと思った彼であった。

第五十八話（後書き）

今回は軽くヒロインズとの学園祭巡りを、本当に軽く書いたら、シンデレラをやるうと思えます。

原作ではシンデレラの猛攻に押されっぱなしの一夏でしたが、この作品の一夏は……

最近ふと思ったこと。

電磁抜刀ってカッコよくな？

いやこう、ドカーンッて感じがなんとも…

零落白夜も中々なロマン技だとは思いますが、やっぱりロマンって言ったら見た目の派手さだろうと。

いや、本当に大したことじゃないのですがねww

第五十九話（前書き）

やっぱりキリが良かったので、予定より早く投稿します。
今回はヒロインとの学園祭巡りと、シンデレラ冒頭までです。

第五十九話

一夏が弾と別れた後、自らのクラスに戻った一夏は再度てんでこ舞いの接客に追われることになった。

やはり世界唯一の男性IS操縦者というのはかなりの広告効果があるらしく、一夏が接客に復帰したという情報が伝播するやいなや、一気に客足が増加する運びになった。

裏方で経理担当の鏡ナギが電卓片手にほくほく顔を浮かべながら売上を計算していたが、一夏からしてみれば少々首を捻る状況だった。

そも、世界唯一の男性IS操縦者と謳ったところで、その実態は少々変わった技能を習得しているとは言え、そこらの男子高校生となら変わることはない。

別段、ハリウッド映画に引つ張り風になるような容姿を持ち合わせているわけでもなし、平凡な顔を見たところで何が面白いのか。接客をしつつそう思った一夏だった。

さて、そんな一夏であったが、元々シフトが入っていない時間に無理矢理シフトを入れたため、今度の業務時間は比較的少なく済んだ。

客の方も接客をしている一夏を見れたことである程度満足したのが、予想以上にすんなりと一夏のシフト外れは進んだ。

そして当初の予定通りに一夏は約束をしていた、専用機持ち五人と個別で回ることになった。

そして一夏は彼女らとどのように回ったのか。その一部をここに軽く記す。

鳳鈴音との場合。

「そおい!!」

ズバンツツ!!

小気味よい音を立てて放たれたボールが、離れた位置に設置されたネットに突き刺さる。

「おゝ、綺麗に入ったわね」

感心したように鈴が言う。

場所は体育館、ラクロス部開催のボール入れ。内容は簡単であり、ラクロスで使用するクロス（ようは棒）でボールを投げ、離れた位置のネットに入れるというものだ。

鈴がラクロス部だからという理由で来た一夏と鈴の二人だが、予想以上に一夏がハマっていた。

「フウハハハ！スパアーキーリングー！」

やたらハイテンションでクロスを振るう一夏。
再び放たれたボールは、やはり勢いよくネットに突き刺さった。

「本当に楽しそうねえ〜」

子供みたいにはしゃぐ一夏を見て、鈴はぼやくように言う。

「おう鈴！これ楽しいなあ！」

振り向きながら鈴に言う一夏。

その目は出し物を本当に楽しんでいるのか、やたらと輝いている。

「本当に、楽しそうねえ〜」

再びそう呟く鈴だった。

その視線の先には、やたらハイテンションで剛速球をネットに叩き込み続ける一夏の姿があった。

セシリア・オルコットとの場合。

場所は音楽室。

セシリアと回っていた。彼女が所属するテニス部は屋台を出し物にしていたため、代わりに彼女が得意とする音楽関係の、吹奏楽部の出し物に来ていた。

「はい、いかがでしたか、一夏さん？」

展示の一つ、客が自由に吹けるトランペットを吹いたセシリアが一夏に感想を求める。

そのすぐ脇で吹奏楽部の生徒が使用されたマウスピースを洗浄消毒したものに交換している。

「いや、上手いな」としか言えないよ」

ウンウンと首を縦に振りながら一夏が素直な感想を言う。

「しかし、流石は貴族のお嬢様ってところか。やっぱり楽器の演奏も嗜みの一つってやつなのか？」

「ええ。他にもバイオリンにピアノも。一番演奏することが多いのはバイオリンですね。夏休みに本国に戻った際にも、簡単な演奏会を行いましたわ」

「ほ、そりゃすごい」

素直に感嘆の意を述べる一夏。

大舞台に立って、衆目に何かを披露するなどという経験の無い一夏は、演奏会という舞台の経験を持つセシリアに素直に感心していた。

「いやしかし、俺は音楽はさっぱりでなあ……」

照れるように後頭部を掻きながら言う一夏に、セシリアは笑顔を浮かべて言った。

「音楽の演奏はとても楽しいものですわ。もしその気があるのですら、是非挑戦してみることをお勧めしますわ」

「確かに面白そうだな。ただ、今の俺は自分の修練で手一杯だからなあ。その挑戦もいつになることやら……」

「やれやれと言いたげに肩を竦める一夏。」

その姿に苦笑をこぼすセシリアであった。

ラウラ・ボーデヴィヒとの場合。

「ああ、落ち着く……」

「兄様もそうか。私もだ。この茶道という文化は素晴らしい」

ラウラと回るようになった一夏は、ラウラの所属する茶道部に来ていた。

こここの出し物はまさに茶道部というべきで、部の生徒がやってきた客に茶を立て、菓子を振る舞ってくれるのだ。

ちなみに、今回ES学園茶道部が開いているのは「大寄せ」と呼ばれるもので、多数の客を相手に行う茶会の形式である。

「茶事」と呼ばれる形式の茶会が予め正体した少数の客を相手に、昼食に懐石を振る舞ってから行われるものと違い、懐石や茶器の拝見などを省くなどして流れを簡略化し、客としてはもっとも気軽な催しとなっている。

そして出された菓子を生徒の指示に従って先に食べた一夏とラウラ

は、その後に出された抹茶を堪能した。
無論、飲む前と後の椀を三回回すという作法はきっちり守った上だ。

「茶の味も見事だったな、兄様……」

「ああ。甘味の強い菓子の上に苦い抹茶。抹茶の味が引き立って、実に素晴らしい……」

そして、ふうと息をつく二人。その姿は完全に自然体でリラックスしていた。無論、場が場なので姿勢を崩すと言う真似はしてはいないが。

「ああ、実に落ち着く……」

騒がしい状況の続く中、不意に訪れた静かな一時に、心底癒される一夏であった。

シャルロット・デュノアの場合。

「えへへ、一夏あ〜」

（はは、なんとなく予想してたけどね〜、この展開）

織斑一夏。現在調理実習室での料理部の出し物の「お食事処」にシャルロットと共に顔を出し、絶賛シャルロットに腕組みをされている最中であった。

「仲良いね、お二人さん」

注文した肉じゃがを運んでくれた上級生が言う。その言葉にシャルロットはますます笑顔を深める。

「いやまあ、まあ確かに仲良くさせては貰ってますがね」

そして一夏はやや苦笑気味に返す。そのまま上級生は笑顔で「ゆっくり」と言うと別のテーブルに向かっていく。

「さて、じゃあ俺達も頂い シャル、何してるの？」

「はい、あーん」

早速目の前の肉じゃがを食べようとする一夏。

だが、一夏の前に置かれていたはずの割り箸はいつの間にかシャルロットの手にあり、そしてその割り箸はじゃがいもを摘んだ状態で一夏に差し出されていた。

「ねえ、一夏。一緒の部屋に居た時のこと覚えてる？」

「え？ああうん。で？」

「ほら、あの時に一夏、僕にご飯食べさせてくれたでしょ？だから、そのお返しをしたいな〜って」

「あ〜成る程……。いやでもな……」

シャルロットの行動の理由を把握した一夏。だが、一夏はやや躊躇うように言葉を濁すと、目だけを動かして周囲を探った。

シャルロットの一夏への「あーん」に、周囲の客がそれとなく意識を向けていたのだ。
当人達は気付かれていないつもりのようなのだが、一夏感覚にはバレバレであった。

そしてその見られているという感覚が、一夏を躊躇わせていた。

「なあ、シャル。さすがにこの衆目一杯なところで、あーんは恥ずかしいと思うんだけど……」

「僕は気にしないよ?」

「いや、俺が気にするんだよ……」

やや困ったように言う一夏。

その言葉にシャルロットはわずかに黙る。その姿に、少し悪い気分になった一夏はシャルロットに声を掛けようとするが、それよりも早くシャルロットが口を開いた。

「ねえ、一夏。ダメ?」

「うっ!」

少しか細くなった声、やや上目遣いになっている潤んだ瞳。
それを目の当たりにした瞬間、一夏は自分の中の何かが盛大に揺らぐのを感じた。

「いや…その…」

思わず言葉に詰まり、ごまかすように周囲の反応を感覚で探る。結論。どうにも良い雰囲気では無かった。

オーデイエンスの発する気配が、「もげる」だとか「爆発しろ」だとか、「ちよつとそこ代われ」だとか、「行けよ行つちまえよ！もつと熱くなれよおー！」だとか、今一良く分からない負の色に染まっていた。

「一夏……」

「ぬ……ぐっ……」

シャルロットの声に、一夏は言葉を詰まらせると、静かに目を閉じる。

そして一度深呼吸。この場を切り抜けるには、シャルロットの望む通りの行動を取るほかない。

一夏は敢行を決意した。

何より、このままではシャルロットの気を害したままになる。

それは、一夏自身も望まないことだった。

「分かったよ」

努めて優しい声で了承する一夏。その返答に、シャルロットの顔が輝いた。

周囲の視線が強まったのが何ともむず痒いが、致し方なしと我慢することにした。

「えへへっ じゃあ一夏、はい、あーん」

「んむ」

改めて差し出されたじゃがいも。それを一夏は高速で頬張る。

「えへへ、美味しい？」

「ん〜、んむんむ」

味の染み込んだじゃがいもを味わいながら一夏はシャルロットの問い掛けに首肯で返す。

「えへへ、良かった〜」

一夏の返答が気に入ったのか、シャルロットはますます笑顔を輝かせる。

その一方で、一夏は今自身が頬張っているじゃがいもの味に目を丸くしていた。

（これは…！味もばっちり、煮込み具合もばっちり。なのに、崩れている様子が無いだど！？…そうか、圧力鍋か！確かに圧力鍋を使えば可能だが、まさか学校の備品に圧力鍋があるなんてな…）

そんなことを考えつつ、改めてIS学園の充実さに驚嘆する一夏であった。

とは言え、驚嘆するポイントが圧力鍋の有無というあたりが何とも所帯じみているが。

「はい、一夏」

「え？」

気がついたらシャルロットが再び箸を、今度は肉を挟みながら一夏に差し出していた。

「あーん」

「……いや、あの、後は自分で食べられるよ」

シャルロットの行動の意図を把握した一夏は、丁重に断りを入れようとす。

何故か。周囲からの視線が更に強まり、殺気すら混じり始めたのもあるが、何より気恥ずかしさを感じていたからだ。

シャルロットの容姿が同年代の中でも高い部類に入るのは一夏も理解している。

そんな女子からの「あーん」。一夏とて一端の男子高校生。

本音を言えば悪い気はしないのだが、如何せん衆人監視という状況がまずかった。

だが、シャルロットはそのことを一切気にしていない風だった。

「……………」

またも不安そうな色に変わるシャルロットの表情。

無言で表情を変える様が、やたらと表情の変化を強調していた。

「え、えつと……………」

ますます強まっていく周囲の視線、目の前のシャルロットの不安そうな表情、それらに一夏は八方塞がりを感じていた。

(ど、どつすりゃいいんだ…！)

予想外の窮地。その攻略の難易度たるや、まだ第二形態移行をした福音の方がマシだと思う一夏だった。

結果として、一夏は出された肉じゃがを全てシャルロットに食べさせてもらうことになったとき。

調理実習室を出て廊下を歩く一夏は、隣で腕を組みながら満足そうな表情のシャルロットを見て、なぜかシャルロットのペースに乗せられている自分に首を捻った。

篠ノ之箒との場合。

「うーん、篠ノ之さんはこれから幽霊部員と出てるわ〜」

「うっ…」

「箒、お前な…」

場所は剣道場。剣道部が行っている占いにやってきた一夏と箒は、

一夏が時々お世話になっている剣道部部長にアレコレを占ってもらっていた。

簡単なタロット占いを行った部長は、出てきた結果をややジト目で箒を見ながら言った。

「そついや箒、今更だけどお前、よく俺の練習に来てるけど、部活の方は大丈夫だったのか？」

「やだな〜織斑君。大丈夫だったらこんな結果出てないって」

怪訝そうな顔で箒に問いかける一夏だが、箒よりも先に部長の方が答えた。その言葉に一夏はこめかみを指で押さえながらため息を吐く。その姿はどこか千冬に似ていた。

「すみません、部長さん。箒のやつがご迷惑をおかけしまして」

「いやいや、織斑君が気にすることじゃあないよ」

ホントニスミマセン、イヤイヤキニシナイデとまるで社会人のような会話の応酬をする二人。一夏の隣に座る箒は気まずさを感じたのか、やや表情が引き攣り気味になっている。

「まあアレだ、箒。今後は部活にもちゃんと出るよ。悪いけど、俺の方でもチェックさせてもらうぞ」

部長との会話に一区切りつけた一夏は真面目な顔で箒に向き直ると、そう釘を刺した。

箒自身、自分に非があるというのは分かっているのか、神妙な顔で頷いた。

「さて、篠ノさんがひと段落したところで、次は織斑君の番だね」
「はい？」

予想外の言葉に一夏が素つ頓狂な顔をする。

「いやだって、折角来たんだからやっていきなっつて」

「いや、俺占いとかはあんまり……」

「というわけで織斑君も占わせてもらっつよ」

「俺の話聞いてください」

断わろうとする一夏を完全に置き去りにしながら部長は占いを始める。

伏せた状態のカードを机の上に並べ、そして並べ替えてからその内
の一枚を取る。

「ん？これは……」

「あの、なんかマズイ結果だっつたりしました？」

やや不安そうに尋ねる一夏。占いとかは気にしないと云ったばかり
ではあるが、意外に結果を気にしていた。

「あ〜えつとね。なんというか、君には今後も何かと苦労がつきま
とうみただよ？」

「あ、そんなもんですか」

思っていたよりも軽い答えに一夏は意外そうな表情をする。

「あれ？結構なんともなさそうだね？」

「そりゃあ、苦労につきまとわれるなんて今更ですからねえ」

IS適正が発覚してからのドタバタ、学園に入学してからのアレコレ、具体的には決闘騒ぎだったり無人機だったり福音だったり楯無だったり…

一夏にとっては本当に今更な話であった。

「まああくまで占いだからね。あまり重く受け止める必要もないよ。ただ、行動を決める指針の一つくらいに思えばいいと思うよ」

「占いやってる本人がそんなに結果を軽く言っていていいんですかね」

「小さいことは気にしない気にしない」

至って軽い調子で言う部長に一夏も力が抜けたような表情をする。だが、そこでふと部長は何かを思い立ったかのように僅かに表情を引き締めると、真面目な声音で一夏に、そして箒に言った。

「いやでも織斑君、それに篠ノ之さんもだね。確かに君たち二人は少し気をつけた方がいいかもしれない」

「それはどういうことですか？」

怪訝そうな表情で尋ねる筈に、部長はやはり真面目な様子で答える。

「こうして普通に話してるといついつい忘れそうになるけど、君たち二人は立場が少し特殊だからね」

彼女が何を言いたいのか、この時点で一夏も筈も察しがついていた。片や世界唯一の男性IS操縦者。片やIS開発者篠ノ之束の実妹。そして両名ともフリーな立場でありながら、束が直々に手がけた最新鋭のISを保有。

これほど特殊な立場の人間はそうそう居るものではない。

「それは、まあ承知はしていますよ」

一夏が部長同様に真面目な表情で答える。筈もまた、やはり真面目そのものな表情で頷く。

「さて、少し空気が重くなっちゃったけど、占いはこれでおしまい。ま、二人でお祭りを楽しみなさいな」

重くなった空気を払拭するかのように、明るい調子で言う部長。

彼女の意図を察したのか、一夏と筈もまた表情を柔らかいものに変えて、剣道場を後にした。

以上が一夏と専用機持ちの面々が過ごした祭の一幕である。

そして現在、一夏は困惑の最中であつた。

「こ、これは一体なんぞや？」

場所は第四アリーナ。普段ならばIS訓練のために広大なグラウンドが広がるそこには、木材で作られたセットがあちこちに立ち並び、まるで建物の中にいるような錯覚をさせている。

ことは剣道場から戻る途中、箒と別れた一夏は再び仕事に戻ろうとしたのだが、その途中で楯無に捕まったのだ。

ついて来て欲しいという楯無に仕事があるからと断ろうとする一夏だったが、既に楯無はクラスの方に話をつけていたと言う。

慌てて電話で確認を取り、事実ということを確認した一夏は、渋々ながらも楯無について行き、第四アリーナの更衣室へと連れ込まれたのだ。

「悪いけど、早速これに着替えて頂戴」

そう言つて楯無は、ビニール袋に折り畳まれて入っている服を一夏に手渡す。

「いや待つた会長。いきなり何事よ」

状況が飲み込めず混乱する一夏。

そんな一夏に楯無はやや早口で説明する。

「これから生徒会の出し物の演劇があるんだけどね、それに出て欲しいの」

「いやいやいや。いきなり過ぎるだろうそれ。いきなり劇に出るなんて言われても、俺は何も知らないし」

劇に出るといふのは簡単なことではない。

少なくとも、シナリオすら全然知らないままに出演するといふのは論外と言えるだろう。

だが、そんな一夏の指摘にも楯無は何とも無いように答える。

「それは大丈夫よ。必要なのは君が出てくれることだけ。劇の進行は私がナレーションで大体をやっちゃうから、君は君の思うように動いて頂戴」

「むう……」

手渡された衣装を見つめながら一夏は唸る。

「これ、断るって選択肢はないの？」

だが、楯無はやや申し訳なさそうに言う。

「いきなりっていうのは私も悪いと思っっているわ。ただ、今はどうしても君の助力が必要な。だからお願い！」

そう言っつて楯無は頭を下げる。

その姿に一夏は軽く舌打ちをする。

以前、一夏が楯無の指導を受けるのを承諾した時と同じ状況だった。

紛れも無く楯無は誠意を以って一夏に頼んで来ている。

である以上、一夏はそれを無下に断ることはできなかった。

深くため息を吐いて一夏は軽く目を閉じる。
そして言った。

「了解。その話、受けよう」

一夏の承諾の返答に楯無が顔を輝かせる。

「一夏君！」

「着替えるから、早く行った行った」

シツシツと手を払いながら一夏が言う。

楯無は一夏に再度礼を言うと、自身の仕事のために更衣室から出て行った。

「やれやれ……」

頭を振りながら一夏はぼやく。

そして手渡されたビニールを一気に引き裂き、中の衣装を取り出す。

「こいつは……」

着替えた一夏は怪訝な表情をする。

シンプルではあるがやや飾りの凝らされた衣装。そして何よりも特徴的なのは純白のマントと金色の冠。

それらを纏った一夏の姿はまるで、お伽話に出て来る王子様のようにであった。

着替えた一夏はアリーナへと出る。

そして話は戻る。

アリーナへと出た一夏は、数多のセットに飾られ、様変わりしたアリーナの姿に目を白黒させる。

そして一夏がアリーナの中央付近、観客席から一夏がよく見える位置に立った瞬間、観客席に座る観衆の歓声が響いた。

状況がさっぱり飲み込めていない一夏。

（確か会長は、進行は会長が進めるって言った。ってことは、そろそろ始まってもいい　来たか）

アリーナのアナウンスが起動する音、スピーカーが点いたことを示す小さな音が聞こえた。

『客席の皆さん、お待たせしました！ただいまより生徒会主催の劇、シンデレラを始めます！！』

アナウンスでアリーナに響く楯無の声が開催を告げる。

そこで一夏は、劇の演目がシンデレラであることを知る。

しかし

（いや待て、シンデレラだよな？んでもって、俺は多分王子様。じやあ、シンデレラは誰よ？）

疑問に思つ一夏。だが、考えても栓なきことと判断し、成り行きに
ことを任せることにした。

そして、再度楯無の声が響いた。

『昔昔、それは遙か昔。』

豊かな自然に包まれたある国に、それはそれは見事な姫が存在しま
した』

(ウンウン、よくあるナレーションだ)

『しかし、その姫はただの姫ではありませんでした。』

世は鬭争が鬭争を呼ぶ大乱の時代。一国の象徴たる姫は、深窓の令
嬢としての在り方を求められなかったのです』

「へ？」

あまりに唐突なセオリーが
無視のナレーションに、思わず一夏は
目を丸くする。

『そう。数多の戦乱、敵をはねのける一騎当千の存在。』

国家大安の担い手、王国崩壊の抑止の輪より舞い降りし、天秤の、
秩序の守り手。

それこそが、王国最強の英傑達、
灰被り姫シンデレラ！！

今宵、隣国の王子の冠に隠されし軍事機密を狙い、武勇の姫達によ
る戦が始まる！！

手にした者に無限の栄光を授ける冠を求め集う姫の戦、『王冠戦争』
の始まりです！！』

「待てええええええええええい！！！！」

あまりにぶっ飛んだ内容のシナリオに、一夏は全力で突っ込んでいた。

同時に一夏は悟る。

また、会長の策に嵌まったと。

そして、規格外なシンデレラが幕を開けた。

第五十九話（後書き）

とりあえずシャルロットとの場面で、「一夏もげる」と思った方は拳手。

ハニーノ

ヒロインとの話は本当に簡潔に書いてみました。

どうも自分は、変にグダグダと書いているような気が最近しまして。なら、どれだけ簡潔かつ内容が伝わるように書けるかと、少し挑戦してみた次第です。

あくまでチャレンジ的に書いたものなので、御見苦しい点が多々あると思いますが、どうかご容赦下さい。

感想にて意見を頂けると、大変ありがたいです。

さて、シンデレラ話。

どうも本番が長くなりそうなので、ここで区切ることにしました。

アニメなら、ちょうどここでアイキャッチが入る感じですね。

楯無のナレーション。どっかで見たような響きのワードがあるのは気のせいです。

決して、Fate/Zeroのアニメを見ながら書いたことなんかは関係ありません（キリッ

次回、次々回とバトルが続くと思います。

今回は生身の格闘戦。その次はIS戦です。

それでは皆様、
また次回に。

第六十話（前書き）

予想外に長くなりそうなので、シンデレラ話は一回に分けることにしました。

ザ・強力ICHIIKAファイバーです。

第六十話

楯無により急遽、演劇に参加させられた一夏。

題目はシンデレラ。ありふれた内容に疑問を持ちながらも安堵する一夏だったが、その実態はある意味予想通りというか、一夏の想像を遥かに超えるものだった。

「観客参加型シンデレラバトルロワイヤル、『王冠戦争』！！」

参加するシンデレラは希望者なら誰でも可能！見事、王子様の王冠を手に入れたシンデレラには、豪華な賞品を用意しているわ！！
ルール無用！王冠を手に入れるために、己が死力を尽くして舞いなさい！戦う乙女達よ！！」

「な…な…なん…だと…？」

参加者を鼓舞するかのように高らかに言う楯無に、一夏は自分の頬が引き攣るのを感じた。

「おいこら会ちよ」

抗議の声を上げようとする一夏だが、急に押し黙ると何かを警戒するような顔で周囲を見回した。

『おーっと！王子様が臨戦態勢に入った！！そう！既にステージには王冠を求めるシンデレラが登っているのだ！！』

楯無のナレーションが聞こえるが、一夏はそれを無視する。鍛え上げた感覚を駆使し、周囲の気配を探る。そして

「来たな、プレッシャー!!」

そう言うと共に背後を振り返る。その視線の先には、シンデレラを模したのだらう純白のドレスを纏った鈴が、一夏に向けて突進してきていた。

ご丁寧にも、強化ガラスの靴着用である。

「たあっ!!」

掛け声と共に飛び上がった鈴が一夏に向けて踵落としを喰らわせようとする。

だが、一夏は軽くため息を吐くと右手で振り落とされる鈴の左足の足首を掴み、全身を捻って一気に投げ飛ばした。

「なんの!!」

投げられた鈴も鈴で、空中で体を捻ると姿勢を安定させて、難なく着地に成功する。

「へえ、中々やるじゃないか。まるで猫みたいだな」

口の端を吊りあげながら言う一夏に、鈴は不満そうな声を上げる。

「悪かったわね、猫で。でもそれを言うなら、あたしを片手で投げ飛ばしたあんたはなんなのよ?ゴリラ?」

「クッ、そいつは面白い例えだ。そう言いたいけどな、誰がストーリーだよ」

「言っていないわよ！！なんでゴリラがストーカーになるのよ！」

負けじと言い返した鈴に一夏はますます笑みを深めた。

「しかしなんだ。さすがにドレスで踵落としはマズイだろ？中が見えちまうぜ？いくらスパッツ履いてるからって、慎みくらいは持てよな」

「なに？見たの？結構あんたもスケベなところがあるのね？」

「ハハッ。野郎は誰だって少しはスケベ心を持ってるもんさ。ついでに言うなら、こいつは生物としては実に自然なことだぜ？」

鈴の言葉を笑って返す一夏。その言葉に鈴は軽く笑うと、すぐさま腰につけた中国の投げナイフ、飛刀を一夏に向けて二本投げつける。

「おいおい、それは危ないな？」

口ではそう言いつつも、一夏はすぐ目の前にあつたセットのテーブルを蹴りあげて、即席の盾にする。結果、飛刀はあえなくテーブルに突き刺さるに終わった。

「こりゃさすがに危ないだろ。鈴、俺を殺す気か？」

「生憎、そうでもしなきゃあんた相手にやり合えそうにないのよ。特にこいつ生身なら尚更ね！」

「そっかい」

それだけ言つて一夏は表情を引き締める。直後、鈴が一夏に向けて再度向かつてくる。

それを迎え撃とうとする一夏だが、鈴と同時に自身に別方向から向かつてくる気配を察知した。

「はあああああ!!」

裂帛の気合と共に、鈴同様シンデレラの衣装に身を包んだ箒が、愛用の日本刀を振りかぶりながら一夏に向かつてきていた。

(つたく、どいつもこいつも。俺を殺す気がつての)

そこまでして王冠が欲しいかと思いつつ、一夏は呆れるように再度ため息を吐く。

そして一気に眼光を鋭く変え、二人を見据える。

両手を自身の周囲に球を描くように動かす。制空圏の発動であった。

「はああああ!!」

そして鈴と箒の二人が同時に一夏に達する。だが

「せいっ!!」

一夏もまた動く。一步横にずれることで箒の一太刀をかわすと同時に、上半身を仰け反らせることで王冠を掴むように突き出された鈴の腕をかわす。

そして一夏は、一気に体を捻って体勢を立て直すと同時に、左足で振りおろされて刃を僅かにステージの床に沈めた箒の刀の峰を踏み

つける。

さらに右手を伸ばすと、空を切った鈴の右腕を掴み、なるべく手酷くならないように、しかし痛みで動きを阻害する程度に擦じり上げた。

そのついでとばかりに左手は手刀を作り、刀を振り下ろした姿勢のまま固まる筈の首筋に添えられる。

僅か一瞬の交差で二人の行動を完全に止めた一夏。その手並みに、観客席からどよめきと歓声が上がった。

「このっ　痛たっ」

「くっ！」

動きを封じられた鈴と筈は悔しそうな顔をする。目的とする王冠は目の前。だが、それを被る一夏に動きを止められている今、目の前の王冠はとても離れた場所に存在するものだった。

『おーっと！まさかの王子様の反撃にシンデレラ、為す術もなく動きを止められた！』

この王子様、とても強い！！』

楯無がナレーションでプロレス実況の如く叫ぶ。

それを聞いた一夏は口元をニヤリと歪めて、二人に言った。

「さて、なんで王冠なんざ狙ってんだ？というか、なんでお前らシンデレラんなのに出てんだよ？」

動きを封じたまま尋ねる一夏に、鈴と筈はバツの悪そうな顔をして

言葉に詰まる。

「いやあ、ね？」

「その…なんだ…」

言い淀む二人。なぜなら、二人が参加した理由はそう安々と一夏に話せることではないからだ。

一夏には知らされていない、王冠奪取による景品。

それは「一夏と同室になれる権利」。

現在一夏と同室なのは生徒会長である楯無だが、王冠の奪取に成功した者には楯無と変わり一夏と同室になる権利を得る。

同居人の変更は通常、非常に煩雑な手続きを踏む必要があるが、今回に関しては楯無が生徒会長の権限で可能としていた。

そして、一夏と同室にやらんと欲する箒と鈴は、楯無に誘われてシンドレラへの参加を決意した。

「ん？」

だが、鈴と箒の答えを聞く前に一夏があることに気付く。

それは、自身に向けてゆっくりと近付いていく赤い光点だった。

（まさか…）

嫌な予感を感じ取り、一夏は背筋に冷たいものが流れるのを感じた。

「ちいつー!!」

一夏は吐き捨てるように毒づくと、鈴と箒を突き放して同時に自身もその場を離れる。

直後銃声が鳴り響き、一夏が居た場所の後方に弾痕が穿たれた。

それは、ちょうど一夏の頭から王冠を弾き飛ばすような軌跡だった。

「セシリアか!!」

銃弾が放たれた方向に一夏は目を向ける。

視線の先には、やはりシンデレラの衣装に身を纏ったセシリアがライフルを構えていた。

「くっ、外してしまいましたわ!」

悔しげに言うと、セシリアはすぐさまライフルの構えを解いて駆け出す。

一度ばれた狙撃場所からはすぐに立ち去る。狙撃の基本である。

このシンデレラ、現状では箒、鈴、セシリアの参加が判明しているが、実際はこの三人に加えてシャルロットにラウラも参加している。

全員、楯無に誘われて参加したのだ。

当初、ただ参加してほしいと頼まれた時点では、セシリアはそこま
で乗り気では無かった。

だが景品の内容を聞いて、参加するのも悪くないと思ったのだ。

なぜ急にそんな心変わりをしたのか。それはセシリア自身も分から
なかった。

そしてその心変わりの根源に彼女が気付くのは、今はまだ先の話で
ある。

セシリアはステージを駆けながら次の狙撃ポイントを探す。

彼女の作戦は狙撃によって王冠を狙い撃ち、一夏から離れたそれを
走って奪取するというもの。

そのため、選ぶポイントは一夏から離れ過ぎないという条件が付き、
本来なら数多くあるはずのポイントを大きく減らされていた。

「どこか…良い場所は…」

そして、ある物が目に入った。

それはセットの設置作業で使われたとおぼしき梯子。

広大なアリーナの全てを使用したセットは、ひたすら手が込んでい
るの一言に尽き、シンデレラの舞台のメインと呼べるパーティー会
場を模したセット以外にも、木製のプレハブのような簡単な建物の
セットもあった。

建物のセットの屋根に続く梯子をセシリアは見る。

高さはそれ程高くはない。上から飛び降りてもなら問題は無い。

意を決してセシリアは梯子を上る。

高所という絶好の狙撃ポイントの確保。これにより、一夏を待伏せ
ることをセシリアは決めた。

一方の一夏。狙撃を外したセシリアが場を離れたことを確認すると、距離の開いた箒と鈴を見遣った。

その表情に捕らえた相手を解放したことへの焦りなどは微塵も無く、また無力化すればいいだけと言わんばかりの余裕を顔に湛えていた。

「あゝもう、その余裕しゃくしゃくな表情が腹立つわ」

「言つな鈴。一夏相手なのだから、このくらいはある意味必然だ」

苦々しげに呟く鈴を箒が諫める。その言葉に鈴はわずかにバツが悪そうな顔になる。

「あゝ、ところでさ。なんでお前らこんなに王冠欲しがるわけ？というか、なんで出てんの？」

先ほどから思っていた疑問をぶつける一夏。その言葉に箒と鈴は顔を見合わせる。そして箒が言った。

「参加したのは生徒会長に誘われたからだ」

「へえ、箒がこういうのに誘われたからって出るの珍しいな？てことは、やっぱり王冠狙いか。あの会長のことだ。大かた、景品でも賭けてんだろ。ったく、俺を出汁にしゃがって…」

そう言いながら一夏はナレーションの楯無が居るだろう放送装置の

ある管制室に目を向ける。そしてすぐに視線を戻すと言った。

「で、まだやるか？」

「当たり前じゃない！」

「無論だ」

即答する二人に、何がそこまで二人を駆り立てるのか疑問に思いながらも、一夏は構えを取る。

『おお！一度動きを封じられてもなお！挑むことを止めようとしな
いシンデレラに、王子様！真っ向から受けて立つつもりだ！！とい
うか王子様ー？相手は女の子だから、ちゃんと加減しなきゃ駄目よ
？』

ナレーションでそう言う楯無。その言葉を小馬鹿にするように一夏は鼻を鳴らすと、やや声を張り上げて、具体的には全体に聞こえるように言う。

「やかましいぞ会長！あんた、始まる前に『好きにしてい』って
言ったよな？俺は俺の思う通りにやらせてもらう。余計な口出しは
無用だ！」

それに、と前置きをしてから一夏は続ける。

「向こうは本気で来てるんだ。俺も真面目にやってやんなきゃいか
んだろうさ。ついでに言えば、ちゃんと加減もしてやるつもりだぜ
？」

加減抜きでやったら死人が出かねないからということには言わずに一夏は言う。

そのまま一夏は表情を引き締めると、箒と鈴の顔を交互に見遣った。

「…行くぞ」

低く、腹の底から響かせるような声音で告げる一夏に、箒と鈴の二人は一気に緊張を高めた。

瞬間、一夏は一気に行動を起こした。

無拍子を使用し、一気に箒に接近する。夏休みの剣道場での手合わせの時以上に練度の上がった無拍子に、箒は反応が遅れる。

そして箒は一夏が懐に侵入するのを許す。刀を振るうにも、距離が近すぎて逆に振るえない。そも、無理をして振るうとすれば一夏に、箒自身にすら怪我を負わせる可能性があった。

ならば無手の格闘術、剣道と並行して父より学んだ古武術をと思いが、今度は刀を両手で持っているがゆえに使えない。

詰まる所、完全に為す術が無かった。

そして一夏が手を動かす。箒は思わず歯を食いしばる。何が来る。

拳か？それとも投げ技か？或いは寝技か？寝技を思い受かべて、状況が状況にも関わらず箒は思わず赤面をする。

観衆の面前でくんずほぐれつ。箒の乙女心が敏感に反応するのも無理はない。

そんな乙女の思考に染まった箒の頭に、唐突に強い衝撃が走った。頭蓋を貫通して頭全体に響き渡るような衝撃に、箒は目の前が激しく揺れるのを感じる。

手にした刀も思わず手放す。

揺れる視界の向こう。自身に接近した一夏が手を自身の額に近付けているのを見た。

一夏がやったことは至極単純。デコピンである。だが、一夏の力に加え、衝撃貫通技の「浸」も込みで放たれたソレは、通常のデコピンを遥かに超える威力を持っていた。

「~~~~~っつっ!!」

額を押さえて言葉なく呻く筈。そして、いつのまにか自分が刀を手放していることに気付いた。

目じりに僅かに涙を浮かべた目で、なんとなく嫌な予感を感じながらも目の前を見る。そこには、自分が手放した刀を右手に持った一夏の姿があった。

「あ……」

思わず呆ける筈。一夏は空いた左手を筈の肩にポンと乗せると言った。

「ゲームオーバーだ」

真顔でそう言う一夏。刀を奪われた以上、今の筈に一夏を相手取るだけの手段は無かった。

自身の完全敗北を悟った筈は力なくうなだれた。

背を向け、鈴の方へと向かっていく一夏の背を見ながら筈は思った。

(トーナメントも、剣道の試合も、私は負けてばかりだなあ……)

それを思い、再度筈はうなだれた。

一方、刀を持った一夏が次の標的と狙いを定めた鈴は、必死の形相で一夏から逃げていた。

「コラ待て鈴！！何故逃げる！？」

「当り前じゃない！！んな物騒なモン持ったあんた相手に逃げない方がおかしいわよ！！」

鈴が一夏から逃げる理由はただ一つ。刀を持ちながら追いかけてくる一夏の姿にビビっていたからだ。

五反田弾と共に、一夏の持つ武を知っている数少ない人間の一人である彼女は、特に中学時代の一夏の不良相手の無双を思い出していた。

「いやでも鈴！」

「何よ！！！」

「距離はどんどん縮んでるぞー！！！」

「ぎゃー！！こっち来んなー！！！」

元々一夏の足は鈴に比べてずっと速い。さらに、今の鈴はドレスにガラスの靴と走りにくい格好。距離が縮まるのも無理は無い話だった。

『王子様ー。さすがに私もソレはどうかと思うわー』

「そつよそつよ……さつさと手放しなさいよ……！」

「……駄目？」

「『駄目……！』」

鈴と楯無。双方の反対を受けた一夏は渋々と言った様子で立ち止まる。ちなみに、一連の流れを観客は笑いながら見ていた。

どうにも一夏と鈴の追いかっこが世界的に知られているアニメーション、具体的にはヒヨコと猫のアレだったり、或いはネズミと猫、もしくは双子のリスと猫のアレに見えているらしい。

「やれやれ」

そう言つて一夏は刀をすぐ脇にあるセットの木材に突き刺す。

「これでいいだろ？」

そう言つて一夏は鈴に確認を取る。鈴も一夏が刀を手放したことに満足そうな顔をした。

「よしよし。ちゃんと丸腰になったわね？じゃあ……王冠よこせー
——！！」

そして一気に八重歯をむき出しにすると、一気に一夏に向かっていった。

だが、一夏も一夏でまるで動じることは無かった。なぜなら

「そんなこと！予測済みだコラ……！」

そういうことだった。

「とおおおおりゃああああ！！！」

雄叫びを上げながら一夏に突進してくる鈴。それを迎え撃つかのよう
に一夏もまた、鈴に向けて疾駆する。

互いが互いに向かつて駆けることによりあっという間に詰まる二人
の距離。

そして、二人の影が交差した。

「ふっ、俺の勝ちだ」

勝ち誇るように言う一夏。その頭には王冠が変わらず鎮座していた。
そして鈴は

「む、無念〜っ」

そんなことを言いながら額を押さえていた。箒をダウンさせた一夏
の必殺デコピンがクリーンヒットしていた。

凰鈴音、リタイア。

『強い！この王子様とても強い！
あつという間に二人のシンデレラを無力化してしまった！』

観客の興奮を促すために熱の入ったナレーションを続ける楯無だが、一夏はなんともないように鼻を鳴らすとすぐに周囲を伺う。

先程から姿の見えないセシリア。狙撃主体である以上、距離をとっているのは確實。

故に、一夏は警戒を最大限にする。そこで一夏は、ふとある考えが浮かんだ。

(そついや、他に参加してるのはいるのか?)

不意に沸き上がった疑問。

現状参加が分かっているのは箒、鈴、セシリア。
そして箒は楯無に誘われたと言った。ならば

(まさか三人だけってことは、ないよなあ…)

狙撃に注意しながら移動しつつ一夏は思案する。

あのお祭り好きの楯無が、たかが三人の参加で満足するはずがない。

確実に他の人物にも声を掛けている。その確信が一夏にはあった。
そして彼女は誰に声を掛けるのか。仮に自分が楯無として一夏は考
える。

あくまで主役は一夏と言える。ならば、その主役と関係性が深く、
かつ話題性のある人物ならば劇を盛り上げることができる。

それならば出て来るのは

(専用機持ち、か)

口の端を吊り上げて一夏は確信する。
間違いなく、楯無は専用機持ち全員に声を掛けている。それが意味するところは

(ここでセシリアを封じても、まだシャルにラウラがいるか)

シャルロットとラウラの参戦。

直感的に一夏はそれを確信していた。

そして一夏はすぐさま行動を開始。セシリアを探しつつも、シャルロットとラウラの気配を同時に探る。

だが、二人の気配は今のところ感じられなかった。

おそらくは、一夏の気配探知の範囲外から様子を探っているのだろう。

一夏を兄様と呼んでいる普段の姿からは中々想像しがたいが、ラウラは祖国では特殊部隊の隊長。

この程度の芸当はお手の物だろう。

シャルロットが同等のことができるかは分からない。

だが、彼女も代表候補である以上、そうした技術に多少なりとも通じてはいるだろうし、仮にラウラと行動を共にしていれば、彼女のサポートを受けてやはりラウラ同様の芸当を可能としているだろう。

(厄介だな…)

知らず一夏は齒噛みする。

箒と鈴の対処は楽だった。良く言えばまっすぐで実直。悪く言えば

結構単純な二人は、すぐに真つ向勝負に持ち込み、制圧ができた。

セシリアの狙撃は厄介ではあるが、懐に入ればこちらのもの。セツトという障害物が多いこのステージなら、開けた場所よりも接近がしやすい。

勝算は十分にある。

だが、シャルロットとラウラは違う。

ラウラは戦というものを完全に理解している。さすがはエリート軍人というべきか。

シャルロットも、ラウラと行動を共にしていれば、持ち前の器用さでラウラに合わせることは十分可能だろう。

間違いなく、二人は脅威と判断できると一夏は思った。

「面白い…」

口元がニヤリと歪む。

確かに厄介。だが、やり甲斐は十分にある。

一夏は自身が学んできた業に、鍛えてきた己が体に自負がある。それをを用い、正面から打ち伏せる。

もはや劇の進行だの楯無の思惑だのは、一夏の思考の埒外にあった。

ただ、自らの思うがままに行動するのみ。

狙撃対策にセツトの壁を背にしていた一夏は、すぐに脇に刺さっている筈の刀に目を遣った。

鈴を相手にするに当たり、一度は手放した幼なじみの刀。

セツトの木材に刺さるソレの柄を一夏は握り、一気に引き抜いた。

光を浴びて銀とも鉄色ともつかない輝きを発する刀身。
それを一夏は静かに見つめる。

「悪いな筈。しばらく借りるぞ」

筈と鈴は、一夏に敗北宣言を受けたからか、一度その場を離れたらしい。

もしかしたらまた襲ってくるかもしれないが、その時はまた振り返りにするだけである。

だが今はそれよりも先に

「待つてるよ、セシリア」

厄介な狙撃手セシリアをどうにかするのが先決である。

刀を握る手に力が入る。不思議と、全身に力が行き渡るような感覚がした。

「うし、行くか」

一言、自分に喝を入れる。

そして一夏は、ステージの上を一気に駆け出した。

「すう…はあ…」

梯子を使って上ったセットの上、ライフルを伏せて構えながらセシリアは深呼吸をする。

現在のポジジョンを取ってから未だ数分だが、セシリアはさながら明鏡止水と言つべき心持ちで一夏が現れるのを待っていた。

焦りは感じない。狙撃の基本は何よりもまず忍耐であるし、先程の楯無のナレーションから筈と鈴は王冠の奪取に失敗したと判断。

そして、一夏はほとんど感じているが、シャルロットとラウラの参戦をセシリアは知っており、未だ二人に目立った動きは見られない。

チャンスは十分にあった。

「……」

無言で一夏の姿を待ちつつ、セシリアは思考の中でシミュレーションを繰り返す。

狙撃を行うタイミング、弾き飛ばした王冠の軌道、そして奪取までの最短ルートの想定。

セシリアも代表候補の最低限の嗜みとして、軍での格闘訓練の経験がある。

だが、格闘戦ではまず間違いなく一夏には及ばない。ならば、自分の得意分野である射撃で勝負をかける。

静かな闘志を胸に秘めながらセシリアは一夏を待ち続けた。そして

「来ましたわ」

遂に一夏をその視界に捉えた。

セツトの影から出て来た一夏。

その手にはおそろく筭から奪取したのだろう日本刀が握られている。

刀を持ちながら悠然と歩くその姿に一瞬胸が高鳴るのを感じたが、すぐに振り払う。

彼我の距離は約200m。

射程圏内には十分入っているが、その後の王冠の奪取を考えるとまだ距離は遠い。

最低でも後50m、できれば100mくらいは近付いて欲しいと思った。

セシリアに気付いていないのか、一夏はそのまま歩き続ける。彼女にとって好都合なことに、一夏が歩く方向はちょうどセシリアに近づく方向だった。

(もう少し…もう少し…)

心の内で呟く。一步、また一步、一夏が歩を進めるたびに自身の心が引き絞られていくのをセシリアは感じた。さながら、手にするライフルの引き金のようにゆっくりと。

そして、ついに一夏がセシリアの想定する射程圏内に入った。

(今…!)

一気に気を引き締め、覗いた照準の十字線を交点を王冠の中央に合わせる。そしてさらに一夏の接近を待つ。

ちなみに、彼女が使用しているライフルは学園にある実銃の射撃訓練に使用されるものの一つで、初心者のために使用する弾丸の火薬の量を減らし、反動を抑えたものである。

さらに、今回セシリアが使用している弾丸は弾頭がゴム製であり、万が一人体に当たっても致命傷は避ける形になっている。もっとも、さすがに目に当たったりすれば失明は余裕だが。

一夏の頭の上の王冠に狙いを定めるセシリア。だが、唐突に一夏の足が止まった。

(…?)

不思議に思いながら様子を伺うセシリア。そして、照準の向こうの一夏がゆっくりと上を向いた。

目が合った。

思わず背筋が強張るのをセシリアは感じた。見つかったかと思うが、すぐに首を振る。

彼女が選んだポジションは狙撃場所としては優れている。高所故に下から全貌が見えることはなく、さらに開かれたアリーナ天井からの逆光により、今の一夏の位置からセシリアを発見することは困難であった。

だが、スコープの向こうの一夏はセシリアと視線を交わしていた。

「……」

やや背筋を固めながらもセシリアは事の成り行きを見守る。不意に、

スコープの向こうの一夏の顔に穏やかな笑顔が浮かんだ。

常ならば決して悪いものではないソレだが、何故かこの時は嫌な予感がした。

そして一夏の口がゆっくりと動く。スコープから見える一夏の口の動きは四つの文字から成る言葉を紡いでいた。

ミツケタ

パアンツ！！

反射的にセシリアは発砲をしていた。そこで撃たなければマズイという予感があつた。

だが、発砲の瞬間に一夏は一気にしゃがみ込んだ。これによりセシリアの放った弾丸は虚空を切るに終わった。

だが、初弾をかわされたからと言ってそのまま固まるつもりは彼女には無かった。すぐさましゃがんだ一夏の王冠に向けて狙いを定めなおす。

その間は一秒あるか否か。まさに射撃型ISを駆る国家代表候補の技量の為せる技だった。

だが、しゃがんでそのまま留まるほど一夏も阿呆では無かった。しゃがんだ際に足にため込んだ力を一気に爆発させる。

押しこまれたバネが飛び出すような勢いで一気にステージ上を疾駆する。

鍛えられた一夏の健脚が凄まじい速さでセシリアの居るポイントへと向かっていく。

一気に自分に向かってくる一夏。そんな彼に向って狙いを定めるセシリアだが、彼女の意図を理解しているのか一夏はジグザグに走ることで狙いを付けさせずにいた。

「クッ、」のままでは…」

思わず齒噛みするセシリア。不意に、一夏の姿がセットの影に消えた。

「あら…?」

そのまま姿を現さない一夏にセシリアは首を傾げる。まさか接近を諦めた?否、あの一夏が狙った相手を放置するだろうか?

「つつ!」

瞬間、セシリアは再度悪寒に、先ほど一夏に感づかれた時以上の悪寒に襲われた。慌てて立ちあがり自身の後方、セットへ上ってきた梯子へと駆けよる。

そしてセットの淵から下を見下ろすとそこには、恐らくは回り込んできたのであろう一夏がセシリアの立つセットのすぐ近くまで来ていた。

慌ててライフルを構えなおそうとするセシリア。だが、動揺からかその動きが僅かに鈍る。

それが決定的だった。

セットとの距離を詰めた一夏は跳躍。セシリアが上るのに使った梯子に足を掛けると、そのまま手を使わずに梯子を一気に駆けのぼる。そして上りきった一夏はセットに足を掛けると渾身の力を込めて跳躍。セシリアの頭上を超え、彼女の背後に立った。

すぐさま振り向くセシリア。だが、振り向いた直後、彼女の腕に衝

撃が走った。

振り抜かれた一夏の腕が彼女の腕からライフルをもぎ取っていた。主の手を離れたライフルは宙を舞い、乾いた音を空しく立ててステージの上を転がった。

「よ、セシリア」

刀をすぐ脇に突き刺し、片手を上げながら一夏はにこやかに言う。

「い、ごきげんよう、一夏さん」

セシリアも僅かに表情を引き攣らせているが、やはり笑顔で一夏に返す。

「いやあ、セシリアも出てたなんて驚いたよ。てことはやっぱりあれかな？ シャルやラウラも出てるのか？」

「え、ええ。いつもの五人は全員出ていますわ」

「そっか」

やはり笑顔を浮かべたまま語る一夏。セシリアもなんとか笑顔を保ったまま一夏の相手をする。

傍から見れば、今の二人は仲良く会話を楽しむ親しい友人同士に見えた。いや、事実親しい友人同士だが。

「しかしセシリア。その衣装、中々似合ってるぞ。うん、セシリアにはよく合ってる」

「ほ、本当ですか？」

一夏の言葉に思わず聞き返すセシリア。その頬は、僅かに赤く染まっていた。

「ああ、似合ってる」

肯定で返す一夏に、セシリアは思わず胸が高鳴るのを感じた。

「さて、んじゃあそろそろ本題入るか」

「え？」

不意に一夏の声のトーンが変わった。具体的には少し低くなっていた。

そして、一夏の空いた右手がゆっくりと動く。曲げられた中指が、セシリアの額に近づく。

「え〜と、一夏さん？」

半ば覚悟はしていたが、それでもセシリアは尋ねた。

「悪いな、セシリア。俺もあまりこういう手法は取りたくないんだけどさ、まあなんだ。はじめみたいなもんだから。ゴメン」

心底申し訳なさそうな声で言う一夏。その声に、セシリアはほとんど悟ったように覚悟を決めていた。不思議と、気分は穏やかだった。

「御免!！」

力を加えられながらも親指によって抑えられていた中指が勢いよく

放たれる。

スコーンと、小気味良い音と共に一夏の中指がセシリアの額に直撃した。

「あつっ！」

そんなやや可愛い声と共にセシリアは額を押さえた。

セシリア・オルコット、リタイア。

箒、鈴と続いてセシリアの無力化にも成功した一夏。

立っていたセットの上から飛び降り、軽やかに着地を成功させると、彼は再びステージの開けた場所へと近づいていく。

セシリアの言葉で確認が取れたが、予測通りシャルロットにラウラもこのシンデレラに参戦していた。

ならばすることは一つ。先の三人同様、二人も無力化するだけである。

そして目的の場所に辿り着いた一夏。そこは観客席も良く見える場所、言いかえれば観客席からも一夏の姿がよく見える場所だった。再び見える場所に現れた一夏に、観客からの歓声上がる。

「ハハ、どうも」

とりあえず無難に手を振って応えておく。そしてすぐさま表情を引き締めると、シャルロットとラウラの気配を探った。反応はすぐにあった。

感じる気配は一つ。ラウラのものである。気配の元はステージ袖。なんとラウラは、恐らくは不意打ちを仕掛けてくるだろうと言う一夏の予想に反して、正面から堂々と一夏の前に姿を現した。

「意外だな。まさか真っ向から来るなんて」

現れたラウラに一夏はそう声を掛ける。対するラウラも、不敵な笑みに表情を変えて言った。

「なにぶん、兄様相手では不意打ちも効くか分からないのでな。この際だから真正面から行かせて貰うことにした」

「そうかい」

ラウラの言葉を好都合と一夏は思う。

仮に不意打ちをされたとして、一夏には対処する術があるが、それでも不意打ちへの対処より真正面からの対処の方が容易いのは事実。ならば是非も無し。ラウラと王冠を巡って真っ向からぶつかるのみである。

そこで、一夏はあることに気付いた。

「そういえばラウラ。シャルはどうした？」

「あ、いや、その…」

「ん？」

姿の見えないシャルロット。そのことを疑問に思った一夏はラウラに問う。

するとラウラはやや答えるのを戸惑つかのような素振りを見せた。そのことに、一夏は不思議そうな顔をする。

「その、兄様。王冠を奪った時の景品を知っているか？」

「え？いや知らないけど…」

「それはだな」

『ラウラちゃん、ネタバレはできれば控えて貰える？』

景品の内容を説明しようとするラウラを楯無が諫める。だが、それを一夏は良しとしなかった。

「ラウラ、話してくれ」

真面目な顔で頼む一夏。ラウラはしばらく考えこみ、やがて口を開いた。

「その、だな。王冠を取ると、兄様と同じ寮の部屋になれるのだ」

「なに？」

ラウラの言葉に一夏の表情が変わる。

景品の内容、大方楯無が首謀者だろうと当たりをつける。そのことのために息を吐くと同時に、それまでに王冠を奪いに来る理由にも納

得がいった。

(そついや鈴は俺を好いてくれてたしな。後はシャルか。ラウラもなんか俺に懐いてるし)

よくよく考えれば厄介なことを抱え込んでいると思う。

恋愛経験などゼロな一夏からしてみれば、自分に好意を抱いてくれる少女への適切な対応など、理解の埒外にある。

はつきり言つて、下手な戦闘行動よりも難易度が高いと思つてさえいる。

(じゃあ、箒とセシリアはなんでだろ？会長にでも巻き込まれたか？)

そう思いつつ、一夏はラウラに視線を戻した。

「話は分かったよ、ラウラ。で、それがシャルにどう繋がるんだ？」

「その、だな。兄様、後ろ……」

「え？ つ！！？」

ラウラが後ろを指差した瞬間、一夏は凄まじいまでの恐怖が背中を走るのを感じた。

おそるおそる、ゆっくりと後ろを振り返る。

そこには

「い〜ち〜か〜」

完全に光の消えた目で、それでありながらとてもイイ笑顔を見せたシャルロットの姿があった。

両者の距離は約5m。制空圏とはまた別に、近づかれた絶対に分かる距離というものを一夏は持っていたが、その範囲を完全に侵す距離だった。

「ヒイイイイイ!!」

思わず悲鳴を上げる一夏。慌ててシャルロットとの距離を取った。

「すまない、兄様。私は落ち着くようにシャルロットに言ったのだが、無理だった」

悔しそうに言うラウラの言葉は、一夏にはほとんど聞こえてはいなかった。

目の前で色々と凄いプレッシャーを放っているシャルロットに意識を集中していた。

「ねえ、一夏。あのね、お願いがあるんだ」

「な、なんだ？」

王冠をくれという内容だろうか。

いつそそれでも良いかとも思ってしまう。必然的にシャルロットと同室になるだろうが、まあそれは問題が無い。

今は色々凄いことになっているが、普段のシャルロットは気立ての効く心優しい少女なのだ。

「王冠はね、別にいいんだ」

「え？」

その言葉に一夏は意外そうな顔をする。

そしてシャルロットは次の言葉を紡いだ。

「僕が欲しいのはね、一夏の全部なんだから」

その言葉に一夏は思わず後ろのラウラの方を振り向く。

兄と呼ぶ人物の視線を受けたラウラは、どうにもできないと言つように首を振った。

そして一夏は思った。

(俺、どうすりゃいいんだろ?)

その問いに答えを齎す者は居なかった。

第六十話（後書き）

この作品の一夏がただ逃げ回るわけがありません。

当然ながら、反撃に移ります。勿論、最低限の加減はしますが。それこそがデコピンですww

箒、鈴、セシリアはあつという間に無力化されました。

ちなみにセシリアを追い詰めた時の梯子ダッシュ。某最強の目な大總統閣下がアニメでやったアレをイメージして下さい。

そして最後に登場したラウラと、病み全開のシャル。

この二人に関しては次回。実は、そこまで凄いことにはならなかったり…

ちょっとコメディックに行こうかと思えます。二人に関しては。

今回は多分、生身のガチバトルがあります。

対ISはさらに次ですね。どうか気長にお待ち下さい。

では、また次回。

今期はアニメが豊富ですね。

Fateにはがない。他にも色々。大変だ、浪人生なのに……

第六十一話（前書き）

え、何故か書きたいこと書いてたら、想像以上に長くなってしまったので、またまた分割…

結局シンデレラは三話に渡ってお送りすることとなりました。

今回、次回とガチンコ格闘戦の二本立てです。その次こそは、IS
戦に…！！

第六十一話

シンデレラにおいて、自身が身につける王冠の奪取を図った三人を難無く退けた一夏。

そんな彼は現在、次の行動を決めあぐねていた。

(さてと……マジどうしょ)

心の中でぼやく。

今、一夏は二人の少女に進路を挟まれていた。

前方にはシャルロット。後方にはラウラだった。

いや、別段この二人だからと言って、特別何かがあるわけではない。

普通ならば、片方を強行突破すればいいだけの話なのだ。

そう。普通ならばである。

一夏が動けない理由。それは一重に目の前で凄まじいオーラを放つシャルロットに他ならない。

一夏の持つ胆力は同年代のソレと比べて遥かに強い。

長期休暇を利用しての、師の下での修業。その厳しさと、何より修業の最後に必ず行われる、本気の気迫を放つ師との手合わせが一夏の胆力を鍛え上げていた。

師の本気の殺気を受ける恐怖に比べたら、世の大抵のことは大したことじゃないと一夏自身思っているくらいだ。

その胆力への自負は一夏の自惚れなどではなく、師や千冬も認める
厳然たる事実として存在する。

だからこそ、そんな自分を思わず震わせる程の気迫を放つシャルロ
ットに、一夏は言い知れぬ緊張を抱いていた。

「で、一夏。どうする?」

そう、にこやかな顔でシャルロットが聞いてくる。だが、目が笑っ
ていなかった。

「いや、え〜と…」

言葉に詰まりつつ、一夏は後ろのラウラの方を向く。

何か行動を起こすまでもなくただ立っているラウラは、一夏の判断
に任せるという意味を態度で示していた。

「え〜と、シャルは王冠が欲しいんだよな?」

「うん できれば一夏ごと」

「それは聞かないことにするよ」

シャルロットに王冠を求める意思を確認してから、今度はラウラの
方に向く一夏。

一応、双方の意思というものを確認した方が良いと判断した結果だ
った。

「で、ラウラも王冠が欲しいと」

「うむ。だが、その…まあ、私としてはできれば事は穏便に済みたい」

チラリとシャルロットに視線を向けて言うラウラ。
同意するように一夏も頷く。

この場において最も注意が必要なのがシャルロットであることは、一夏とラウラの共通認識だった。

(どうする、俺。正直、筈たちみたいな対応はまずいような気がする。いつそ王冠くれてやるか?)

そんな考えまで浮かぶ始末だった。
だが、そこで一夏はあることに気付いた。

(いや待てよ?それって結構な名案じゃないか?)

王冠を渡せばそこで劇は終了となる。

楯無としては、もう少し盛り上げて欲しいと思うかもしれないが、わざわざそんな考えに付き合う義理は無い。

そして王冠を渡せば、自動的に渡した相手が楯無に変わるルームメイト。シャルロットもラウラも、楯無に比べれば同室の相手としては申し分ない。

王冠を渡す。メリットだらけだった。

(うん、そうしょ)

正直、これ以上楯無の思惑に付き合うのも馬鹿馬鹿しい。

さっさと王冠を渡して、劇を終了させることにした。

なら、どちらに渡すか。少し考えて、一夏はラウラに声をかけた。

「ラウラ。あのさ、俺が王冠をシャルに渡すってのはどうだ？」

その言葉にシャルロットが表情を輝かせた。

「む、それが兄様の選択か？」

対するラウラは一夏の決定にやや不満そうにする。

むくれるように僅かに膨らませた頬が、見ている微笑ましいと思う一夏だった。

「いや、本当はさ、ラウラでも良かったんだよ。ただ、この場合はシャルに譲った方が良い気がして……」

「言われてみれば、確かに……」

シャルロットの様子をバツチリ見ていたラウラは、一夏の意見も間違っていないと判断する。

確かに一夏が自分を選ばなかったのは不満が残るが、シャルロットの様子を鑑みれば、その方が穏便にことは済むかもしれない。そうラウラは判断した。

「なら兄様。時々私も部屋に行かせて貰うぞ。独り寝は寂しいのだ」

独り寝なんて誰に教わったんだよと、苦笑いを浮かべつつ思いながら一夏は、軽くラウラに手を振ってシャルロットに王冠を渡すために歩みよる。

「シャル、持っていてきな」

そう言つて一夏は王冠を頭から外す。

外しながら一夏は、面倒からの解放に内心で安堵の息を吐いた。

だが、現実は無情だった。

王冠を外そうとした直後、楯無のナレーションが再度響いた。

『フッフ、王子様？ 一体何時から、王冠が外せると錯覚していたのかな？』

「なん…だと…？」

楯無の言葉に一夏は思わず固まる。だが、既に王冠は外されていた。

その直後

バチリッ！！

「ギヤアツ！！？」

突如全身を走つた、痛みと熱を伴う痺れに、一夏は慌てて王冠を付け直す。

僅かに服から上がる煙。電流が流れたのは明らかだった。

「ま、まさか……」

脳裏に浮かんだろくでもない予想。

それを肯定するかのように、楯無のナレーションが流れた。

『王子様の王冠は国の宝！それを失った王子様には、自責の念からの電撃が流れるのです！』

ああ、なんて国想いな王子様でしょうか！その気高い信念を、讃えずにはいられません！』

いけしゃあしゃあと感情的な弁を振るう楯無。

そんな彼女の言葉に触発されてか、観客席からは拍手喝采が沸き上がった。

だが、未だ納得できていないのか、あるいは希望が絶たれたことへの失望故か、一夏はこめかみをひくつかせながら言った。

「じゃ、じゃあ、王冠を放棄すれば万事オツケーという俺の策は…

…」

『錯覚よ』

楯無の無情な宣告に一夏はガクリと膝を着く。
だが、そのままでは隙だらけになってしまったため、すぐに立ち上がる。

「ねえ一夏。どうするの？」

再度シャルロットが聞いてくる。

その声音は今までと違い、どこか一夏を気遣うようだった。

「兄様。こういう時は三枚のカードから選択肢を選ぶのが良いぞ」

「続きはWebでってか。というかソレ、一歩間違ったらお先真っ

暗だろっ」

ラウラの提案に一夏は首を振る。

そしてしばし考え込む。

時間にすれば十秒にも満たない程の短い時間。だが、その間に一夏は自身の取るべき行動を熟考する。

そしてため息を一つ吐くと、やや固い声音で言った。

「来い。受けて立つよ」

その言葉にシャルロットとラウラが体に僅かながらの緊張を走らせる。一夏が発した言葉の意図は明確。それは交戦の意志に他ならぬ。

「なにせもう篤に鈴、セシリアを沈めちまったからな。二人だけ別扱ってのもアレだ。仕方ない。本当に仕方ない」

そうやや嘆くように言う一夏だが、既に手にした刀を正眼に構え、戦闘準備を取っていた。

「一夏…」

「兄様…」

シャルロットとラウラは眩き、一夏を挟んで互いに視線を交わす。そして頷いた。

「分かった。じゃあ、何がなんでも一夏から王冠を貰うよ」

「軍で培った格闘術、兄様の武術と是非競わせてもらおうか」

そう言つて二人も構える。その姿に、一夏は軽い笑みをこぼすと言つた。

「さて、じゃあどつちから来る？シャルか？ラウラか？それとも、二人で来るか」

「私が行こう。シャルロット、すまないが先にやらせてもらつぞ」

「うん、いいよ。僕はじっくり待つてるから」

そしてラウラが一步踏み出す。逆にシャルロットは数歩下がり、待機状態に入る。ラウラは腰から二本のコンバットナイフを取りだすと、それを両手に持つ。

「……」

「……」

一夏とラウラ、二人は互いを見据えながらゆっくりと動く。二人の間に流れる緊張が伝播したのか、いつの間にかアリーナ全体が静まり返っていた。

そして　　始まりは唐突だった。

「行くぞ！」

その声と共にラウラが駆けだし、一夏が迎撃態勢に入った。

少々話がずれる。今、ラウラはシンデレラの衣装に身を包んでいる。当然ながら強化ガラスの靴、ハイヒールのソレを履いている。

このハイヒールという代物、とにかく走るのには向いていない。それも無理のない話である。接地面はつま先と踵部分だけであり、普通の靴に比べれば遥かに安定性に欠ける。

さらに今のラウラが着用しているドレスという衣装が、走りにくさに拍車をかけている。

もつとも、これらは先立って一夏に追いかけられていた鈴もそうだったため、何もラウラだけという話ではない。

そしてもう一つ、重要なことがある。

それは、ガラス故に滑りやすいということだ。

今、一夏ら三人が立っているのはアリーナに設置されたステージの上だが、このステージは木製でありワックスがかけられている。

履いているのが底がゴムのスニーカーなどならいざ知らず、ガラスの靴では摩擦係数の低さゆえにそれはもう滑りやすい。

何が言いたいかというのだ。どれほど注意を払おうとも、不慮の事故と言う形で足を滑らせる事態が起りうるということだ。

当然ながらラウラもそのことには十分注意をしている。だが、不慮の事故とは予期していても起こるうるが故に不慮なのだ。

意気込んで駆けだした直後、ソレは起きた。

ガッ

そんな音が立った。直後、走っていたラウラの体が宙に投げ出される。そのまま倒れこんでいく流れが、やたらとスローに見えたとは一夏の談である。

「あ
」

そんな声を漏らしたのは誰だったか。ラウラ自身、何が起きたかよく理解していない表情だった。

そして、盛大な音を立ててラウラはステージに倒れこんだ。

効果音を付随するならば、「ズルツ、ビターンツ！」といった感じだろうか。いつそ見事と呼べるくらいのコけ方だった。

「……「……」

アリーナ中が沈黙に包まれる。正直な話、どう反応していいのかわからないというのが、この場に集った人間の本音だった。

先ほどまで陽気にナレーションをしていた楯無ですら、言葉を無くしている。

「え〜と、ラウラ？」

さすがに気になったのか、一夏が倒れているラウラに近寄る。そしてしゃがみこむと、再度ラウラの名を呼ぶ。

「兄様……」

ゆっくりと起き上がるラウラ。だが、その声は、体は、震えていた。

「兄様あ……」

見ればラウラは鼻の頭のあたりが赤くなっており、若干涙目状態だった。

転んでしまったことへの悔しさゆえか、口元はこらえるようにキュッと引き締められている。

有体に言って、幼子が涙を堪えているような雰囲気がこのラウラにはあった。

「うっ！」

そしてそんなラウラを間近で見た一夏は思わずうつろたえる。なぜか？

(や、やべえ。今かなりグツと来たぞオイ。あ、いやでも。ウン、これはラウラには悪いけど可愛いよな)

そういうことだった。一切包み隠さず表現するならば、今のラウラはそれはそれは保護欲を掻き立てる存在だった。

「折角、兄様に私の活躍を見てもらおうと思ったのに…！」

(そんな涙目上目遣いで殊勝なセリフは勘弁してください！色々ヤバイ！！)

なおも小動物オーラを全開にしているラウラ。そんな彼女に一夏は内心で一杯一杯だった。

だが、この時一夏は完全に失念していた。そうそう女子になびくこととの無い一夏ですら思わず心奪われるような状態のラウラを見て、平静でいられるはずのないもう一人の人物を。

「キヤアー—————！！ラウラ可愛い—————！！！」

そんな超ハイテンションな声と共に猛スピードでラウラに駆け寄る存在があった。それは、ラウラのお義姉ちゃんねえを自称するシャルロットだった。

「シャ、シャルロット!?何を わぶっ!」

突然ハイテンションで近づいてきたシャルロットに戸惑うラウラ。彼女が何か言うよりも早く、彼女のその小柄な体はシャルロットによって抱きしめられていた。

「ああもう!ラウラったら可愛すぎるよお!!」

そんな言葉と共にシャルロットはラウラに頬ずりをする。その余りのハイテンションぶりはラウラの抵抗を一切許さず、ラウラはシャルロットによって為すがまま、ようはもみくちやにされていた。そして、突然のシャルロットの豹変ぶりに一夏もまた言葉を失い、ポカンと口を開けたまま固まっていた。

(いや、待てよ?これってチャンスじゃないか?)

突然のシャルロットの豹変には驚いたが、よくよく考えれば一つ的好機ではないかと判断する。そして、思い立ったが吉日とばかりに一夏はすぐさま行動を起こした。

「あゝ、シャル?」

「なに、一夏?」

一夏に呼びかけられて振り向くシャルロット。その表情に先ほどま

での得体のしれないオーラは無く、輝くような笑顔があった。そのあまりの変わり身ぶりに、内心複雑な気持ちになりつつも一夏は言った。

「いやな？ラウラさっき、派手に転んだろ？どこかすりむいてるかもしれないから、悪いけどシャル。ラウラの手当てを頼んでいいかな？」

その頼みは一夏の作戦だった。どうということはない。ラウラの手当てを出汁に、シャルロットとラウラの二人を体良く退場させるのが目的である。

無論、何も全てが打算というわけではない。ラウラのが心配なのは事実だし、ラウラが言ったように穩便に事が済むのであればそれに越したことは無いのだ。

そして、一夏の作戦は見事に成功した。

「うん！任せて！！」

「いや待てシャルロット！私は別に」

「さあラウラ！僕がちゃんとして手当してあげるからね！」

「いやだから私の話を　！！」

快諾するシャルロットをラウラが止めようとする。だが、ラウラの抗議空しくシャルロットはラウラを抱き上げると猛スピードでステージから去って行った。

それを一夏は手を振りながら笑顔で見送った。

あまりに予想外な展開に観客席は静まり返っている。管制室でナレーションをしている楯無も何も言えなかった。

そして一夏は

「……………計画通り！」

そう、まさに悪役としか言えない顔で言ったのだった。

ステージに一人たたずむ一夏。専用機持ち五人を完全に退けることにした一夏は、顔を俯かせて小さく体を震わせている。

怒っているのか、嘆いているのか、否。彼の表情には歡喜が浮かんでいた。

「クツ、ククツ……………」

喉の奥から小さく漏れる笑い声。あまりに小さなソレは、発している一夏以外には聞こえない。そして

「ハーーーーハツハツハ！！どうだ会長！あんたが送り込んだ五人は完ツ全にっ！！退けてやったぞ！！どうだ！ざまあみる！！」

高笑いと共に楯無への勝利宣言を突きつける一夏。心底してやった

りと言いたげなその笑いの様子は、どう見ても王子様というより悪の大魔王だった。

『それはどうかしら、王子様？』

「なに？」

だが、対する楯無の言葉に焦りは無い。むしろ、未だ余裕さえ感じられた。

『王子様、忘れていないかしら？この劇は、観客参加型ということ』

「どついつ意味だ？」

訝しげに言う一夏に、楯無は余裕を含んだ声音で告げた。

『そのままの意味よ。希望者は誰でも参加可能。それは即ち、シンデレラはまだまだ居るということよ！』

そう楯無が言った瞬間、一夏は大量の人が自分に向かってくる気配を感じた。

慌てて気配の方向を向いた一夏の視界に入ったのは、自身に向かってくる多数の女生徒の姿だった。ちなみに、さすがに人数分の用意は不可能だったのか、全員制服のままである。

「な、なんだと…！？」

思わず目を見開く一夏。そんな彼に再び楯無の言葉が投げかけられ

る。

『学園祭の出し物投票において生徒会に投票をすることで、生徒なら誰でもこのシンデレラに参加が可能となるわ。さあ、王子様。この大勢のシンデレラ、如何にして対応をするのかしら？』

高みの見物をさせてもらおうと言外に言うような楯無の言葉に一夏は舌打ちをする。

どうすべきか。思案する時間はあまりない。シンデレラ軍団との距離は確実に縮んでいる。駆ける足音が大量に重なることでもはや地響きに聞こえるソレをBGMに、一夏は高速で思考を回す。

「王子様発見！！」

「王冠！王冠を狙うのよ！！」

「ついでだから王子様も頂いていくわ！！」

「出会え出会え！！者共！！いまこそが立ち上がる時ぞ！！」

『さあ、この最強のヒロイン達を相手に、王子様はいかに動くのか！シンデレラも佳境に差し掛かってきました！！』

鬨の声を上げて向かってくるシンデレラ軍団の足音に混じって、楯無のナレーションが聞こえる。シンデレラ軍団の士気は最高潮。中には木刀や練習用の槍などの得物を持った者も居る始末だった。

「……………ふう……………」

そう、一夏が小さく漏らしたため息に気付く者は居なかった。

一夏は「やれやれ」と言いたげに刀を持たない左手で後頭部をわしやわしやと搔くと、静かにシンデレラ軍団を見据えた。

そして

ズドンッ！！
「喝あつつつ！！！！！」

右足を上げると、震脚で以てステージの床を踏み抜く。同時に気合いをこめた一喝を出せうる限りの大音声で放つ。

ステージの床に罅を走らせる程の震脚、そして一夏の一喝。この二つから成る爆発さながらの音が、シンデレラ軍団の足を止めた。

「あゝあ、つたく。つくづく面倒なことをしてくれるよ、あのバ會長は」

独り言のようにぼやく一夏は一步。ゆっくりと歩を進める。一夏の行動に気圧され、足を止めた生徒達は、一夏が一步動いたことにより、わずかにうるたえるような素振りを見せた。

「そしてあんたらもだ。あの会長の悪ふざけに便乗しやがって。おかげで俺のストレスがマツハだ」

一步一步、歩を進めて距離を近づけていく一夏。そして彼女らと一夏の距離が約5mになった所で一夏は立ち止まる。

「けどな、実は何が一番気に食わないかって言うことだな。この場で俺を差し置いてあんたらが最強呼ばわりされたことだ」

そう、心底気に入らないと言うような視線と共に一夏は目の前の集

団を見据える。

無言で一夏は手にした刀を床に突き立てる。そのまま横に引き、床に一筋の境界線のようなラインを刻んだ。

「王冠が欲しければ力づく。そして、我こそはって思っただけがこのラインを越えてこい」

自らが引いた境界線から離れながら一夏が告げる。再び双方の距離が開いた所で、一夏は刀を再度セットに突き刺した。

「けど、一步でもこのラインを越えたら最後。俺は本気で叩きつぶす。俺と本気で戦い合う覚悟で王冠を欲しがるやつだけが、来い」

言いながら一夏は衣装のマントをはぎ取る。シンデレラ達はその場から動かない。状況を完全に自分の流れに持って行った一夏に呑まれていたのだ。

「さあ、どうする？来るのか？それとも、尻尾巻いて逃げるか？」

そう、挑発するように不敵な笑みを浮かべながら言う一夏。そして、一人の生徒が動いた。

「貰ったあああああ！！！」

手に練習用の槍を携えた少女は、全速力で一夏に向かって呐喊する。手にした槍を突き出し、まっすぐと一夏へと向かっていく。

「甘い……！」

自身へと迫る槍の穂先、怪我をさせないように安全対策が施されたソレではあるが、乗せられた勢いで以て人体に当たれば少なくとも痛みを伴うソレを前に一夏は一步を踏み込んだ。

相手は右手に槍を持っているため、必然的に槍は一夏から見てやや左よりの場所から突き出されたが、一夏は槍の外側に右足を持っていくようにして踏み込む。

同時に左手をすれ違いざまに槍に添え、相手の一突きをいなした。

これにより、一夏は相手の吶喊を回避すると共に、その背後を取る形になった。

「しまった!？」

かわされた生徒がうるたえる。止められたのではなく、殆ど勢いをそのままに受け流されたため、行き場を失った力が散ったことで体勢が崩れた。

崩れた体勢のまま、彼女は首を後ろに向ける。そして、自身を見下ろす一夏と目が合った。

「残念」

平坦な声で告げる一夏に、彼女は自身の敗北を悟る。油断していた本当に、一夏は容赦をするつもりがないということをし、この時彼女はようやく理解した。

そして、振り抜かれた一夏の右手の手刀が、彼女の意識を一瞬で刈り取った。

「……………」

境界線の向こうの生徒達が言葉を失う。

一人先走った生徒、その攻撃を難なくいなし、さらには意識を一瞬で奪った一夏。

一切の容赦が無く、同時にいつそ見事な手並みで相手の意識を刈り取る一夏の姿に、彼女達も一夏の本気を悟る。

悟ると同時に、一步後ずさる。

武道系部活のエースが集う腕試し会を発端に、一夏が高い格闘戦の実力を持っていることは、実は一夏の想像以上に学園に広まっている。

或いは、こと生身の白兵戦ならば最強の生徒会長に比するのではと言われる一夏の技。それを向けられることを想像して、お祭り気分に参加をしていた生徒達は慄く。

それは決して責められるようなことではない。

事実、この行事がただのお祭りであることは確かなのだ。何が問題だったかと言うと、一夏の行動があまりに奔放過ぎたことだろう。

一夏が楯無の計画の被害者であることは決して否定できない。だが、今一夏の前に立つ少女らも、ある意味でまた被害者と言えた。

だが、今ステージに立つ者達にとって、自らが被害者かあるいは加害者かなどは関係が無いだろう。

ただ、少女らは王冠を求めて一夏に挑むか、それとも大人しく退くか。そして一夏は王冠を死守できるか否か。それだけである。

「……」

無言で一夏が一步を踏む。それに合わせて集団が一步下がる。それを見た一夏は、軽く鼻を鳴らしながら言った。

「どうした、来ないのか？俺は逃げも隠れもしないぜ」

だが、少女らは互いの顔を見合わせる。

王冠を求めて一夏に挑むならば、必然的にラインを越えることになる。

そうしたらどうなるか。先程の槍の少女の二の舞だろう。

IS学園はその特性上、実際の軍隊程ではなくとも、通常の学校に比べれば格闘術に力を入れている。

故に、ここに集った生徒は他の一般的な学生に比べれば多少は腕があるのだが、それも目の前の少年の前では無意味だろう。

挑めば敗北は必定。それを悟ったが故に、一步を踏み出させずにいた。

だが、何事にも例外というものは付き物である。

確かに、ステージ上の少女の大半は一夏相手に臆した。だが、ごく少数についてはその限りではなかった。

少女の集団の中から一人、また一人と前に進み出る者がいた。前進を決めた少女らは、躊躇なく一夏の引いたラインを越え、その身を一夏の前に晒した。その数は丁度七人。

「ああ、こりゃイイ」

自身への挑戦を決めた者達を、一夏は笑顔で迎えた。
その面々は一夏も見覚えがある者、武道系部活の実力者達だった。

「ま、そうだよな。あんた方のような人達しか来ないよな、普通」

一人納得するように頷く一夏。

そんな一夏に少女の一人、おそらくは七人のリーダー格が声をかけた。

「もしかして、こうなるのを予想してた？」

その言葉に、一夏は僅かに間を置いて答える。

「まあ、一応。来ないなら来ないで帰るだけだったけど。この展開もちよっとは考えた」

「ということとは、あのラインを越えられるかどうかは、一種のテストってことかな？」

「そういう取り方もアリかな。さすがに、一々全員を相手にしてられない。なら、相手が務まる奴だけの方が良い。結果は七人。少し少ないか」

その言葉に一夏と会話をしていた少女の目が細まる。

「へえ。結構な自信だね。七人って言っても、みんな結構なやり手だよ？」

「ハッ。相手が何人だろうと知ったことか。目の前の相手全部倒せ

ば勝ち。戦いってのはシンプルだ」

そう言って一夏は構えを取る。

同時に、相對する七人も各々で構える。

「実を言つとね。私達は王冠とか景品に興味はないのよ」

リーダーの少女のその言葉に一夏は意外そうな顔をする。

「君の腕前は私達みたいな連中の間じゃ有名だからね。だから、そんな君に勝つて名を上げたい。そういうこと」

「なら来い。やれるもんならやってみるよ」

その一夏の言葉が開戦の合図だった。

リーダーの少女は残る六人に対し、声を張り上げた。

「突撃！！構うことはないわ！一斉にかかって一気に仕留める！！」

そして七人が一斉に一夏に襲い掛かった。

散開してから多方向から襲い掛かる七人を一夏は迎え撃つ。

制空圏を張り深く深呼吸。敵の一挙手一投足に気を配り、確実に仕留めることに専念する。

始めに二人が襲い掛かって来た。

一夏を挟み撃つように二方向から同時に襲い掛かる。

そして、一夏と二人の距離が互いの間合いに入った直後、一夏は動き出す。

一夏目掛けて同時に正拳突きと回し蹴りが放たれる。

回し蹴りをスウェーバツクでかわすと、一夏は正拳突きを放った腕の手首を掴み、力づくで自分の側に引き込む。

急に引つ張られたことに正拳突きの少女は僅かに体勢を崩した。その隙を突いて一夏は裏拳を少女の顎に刈り取るような素早さで当てる。

顎から響いた衝撃が脳にまで伝播したことにより、脳震盪を起こした少女はその場に倒れる。

それを目視もせずに一夏はもう一人に狙いを定める。

回し蹴りをかわされた少女は、その勢いを利用して、軸足にしていたもう片方の足で一夏に蹴りを見舞う。

一夏は僅かに半歩だけ少女に近付く。同時に自身に蹴りが迫る右側面に、握り拳を作った右手を突き出し、さらに反対側の左足を真横に斜めに突き出すことにより、右手に掛かる衝撃に対するつかい棒になるようにした。

振り抜かれた二撃目の回し蹴りはそのまま突き進み、結果として一夏の右拳と少女の脛すねが激突する形になった。

この時、完全に衝撃を受け止めた一夏は微動だにすることがなく、結果として少女は自らの蹴りの勢いをそのまま跳ね返した拳を脛に受け、走った激痛に苦悶の表情を浮かべる。

致命的な隙。更に一步、一夏は踏み込むと、その鳩尾に鋭い肘の一突きを放つ。

そうして、二人目も撃沈の運びとなった。

一気に二人を落とした一夏は、そのまま残る五人も返り討ちにしようとするが、二人をあつという間に落とされたことへの警戒からか、残りの五人は突撃を中斷。一夏を囲むように立っていた。

「さすがにやるわね…」

リーダーの少女が苦々しげに呟く。

だが、言葉とは裏腹にその口角は鬪志故か笑いの形をとって吊り上がっている。

そうしている間にも、少しずつ五人は一夏の包囲を狭めていく。対する一夏も構えたまま、いつ襲い掛かられても良い体勢を取る。

「今よ!!」

一夏を囲む輪がある程度の大きさまで縮んだところで再び発せられる号令。

動き出す五人だが、今度は一夏も攻勢に出ていた。

無拍子で右側から迫る少女に接近。僅かに屈むと同時に、刈り払うような床スレスレの回し蹴りを放ち、対象の足を払う。

結果として払えたのは片足だったが、それだけでも姿勢を崩すには十分。

僅かに動きが鈍ったところで、その鳩尾に掌打を食らわせる。

一撃をクリーンヒットさせられた少女は吹っ飛び、そのまま呻いてダウンする。

更に一夏は背後から迫って、自身の服の襟首を取ろうとした腕を上半身をずらしてかわす。

同時に突き出された腕を肩越しに掴むと、腕の主の少女を一本背負いの要領で一気に投げ飛ばす。

投げ飛ばされた少女は背中から床にたたき付けられ、その衝撃に肺の中の空気を吐き出す。

全身に走る衝撃と痛みがこれ以上の行動の不可能を告げ、気を失いこそしなかったものの、自身の敗北を悟る。

「たあっ！！」

気合いの掛け声と共に、一夏の背後に跳躍からの踵落としが襲い掛かる。

「んっ！？」

その一撃を見て一夏の顔が僅かに強張る。

一本背負いから迎撃の体勢の移行は可能。だが、調整した制空圏の再展開は不可能と判断。

否、制空圏自体は張れるが、勢いを付けた眼前の一撃は受けるにリスクが高いと判断する。

（ならっ！！）

一夏は体勢を直すと同時に右手を引き、更にその右手を目一杯擦る。

脳裏に楯無との格闘訓練で習った技をイメージ。それを体に出力する。

そして踵落としが間合いに入ると同時に一夏は右手での一突きを放つ。

丁度相手の足の内側面に入り、腕と足が接するようにする。

そして右手と足が接したと同時に、一夏は抜った腕のバネを一気に解放。

回転の勢いで相手の足を払い流すと同時に、そのまま相手の腹部に痛烈な一撃を見舞った。

落下の勢いを逆手に取られた拳を腹に受けた少女は、そのまま床に倒れると呻いた。

戦闘続行不可能は見るに明らかだった。

「ふう……」

五人の内、四人を更に倒した一夏は残心を取ると深く息を吐いて呼吸を整える。

そして後ろを振り向き最後の一人、四人目が迎撃された時点で引いたりダーの生徒の方を向く。

「最後はあんただ。覚悟はいいな？」

その言葉には目の前の相手を逃がす意思は無かった。

一度境界を越えた以上退却は許さず、例え逃げようとしても追撃をかける。

そう、言外に告げていた。

「やれやれ、仕方ないわね」

その生徒は苦笑いを浮かべると、仕切直すかのように構える。元より、彼女は撤退をするつもりなど無かった。

「そついや、名前をまだ聞いてなかったな」

ふと一夏が漏らした言葉。

その言葉に生徒もああ、と頷く。

「確かにそつね。なら、名乗らせてもらつわ。」

中国拳法同好会部長、二年中国代表候補生、張青蘭ちやうせいらんよ」

「ありや、先輩だったか」

青蘭の名乗りに一夏は相手が上級生であることを理解し、対応を変えた方が良いかと思う。

だが、そんな一夏の考えを悟ったのか、青蘭は手をヒラヒラ振りながら言う。

「ああ、別に接し方とか適当でいいわよ。あまり気にしないし」

「それはどうも。けど、中国の代表候補生ってことは…」

「生憎、一年の嵐とはあまり面識が無いわ。あの子が代表候補生になつてる時には、私はもう学園グッヂに居たから」

「左様で。あ、質問。もしかして専用機とか…」

代表候補生ならば専用機を持っているのではないか？

そう思った一夏は青蘭に尋ねるが、青蘭は手の振りをさらに大きくして言った。

「専用機？そんな物ないない。代表候補生って言っても全員が専用機持ちってわけじゃあないのよ。実際、私と同じ二年には専用機持ちじゃないイギリスの代表候補生が居るから」

「またまた左様で…」

「ま、今は関係無い話ね。始めましょ」

その言葉に一夏が反応した時には既に青蘭は動いていた。

一步の踏み込みを助走として跳躍。体を大きく捻り、鞭のように唸る腕を一夏目掛けてたたき付けてきた。

「しっ！」

だが、一夏は後方に跳ぶことでそれを回避。

対象を失った青蘭の腕は宙を切り、ステージに大きくたたき付けられ、場内に爆ぜるような音を響かせる。

地面と密着状態にある青蘭の姿に隙を見出した一夏はすぐさま反撃に出るが、青蘭は全身のバネで軽やかに立ち上がると、一夏の追撃から後退することかわす。

「ちっ」

忌々しそうに舌打ちをする一夏。そんな彼に青蘭はさらに連続での攻撃を仕掛ける。

手刀、あるいは裏拳や掌打を連続で放つ青蘭。鞭のように腕をしな

らせ、そして唸らせながら一夏に迫るが、その悉くを一夏は回避している。

だが、全身の運動を駆使して流れるように繰り出される連続攻撃に回避こそ確実にすれど、攻めあぐねているのも事実。

（あゝ、せめて木刀がありやあなあゝ）

相手の攻撃をいなしながら一夏は内心でぼやく。刀さえあれば今の状況を余裕で打破できる自身がある。

すぐ近くに筭の刀があり、取りに行くことは十分可能だが、さすがに真剣を使うわけにはいかない。確実に死なせてしまう。

（ていうか俺、肝心なところで得物に恵まれないことが多くね？生身の時）

運にでも嫌われているのではないかと思いつつ、一夏は相手の攻撃の流れを見続ける。

現状、手合わせの流れは相手が握っている。どうにかしてこの流れを壊さねばならない。

そして思いついたのが、高威力を誇る古式ムエタイで強引に流れを断ち切ること。

（よし、やるか）

決断し、一夏は一度青蘭から距離を取る。一夏が間合いから離れたことで、青蘭は一度攻撃の手を止めるが、警戒は怠らない。

「行くぞ」

僅かに身を屈めて足に力をため込む。そして一気に駆けだす。数メ

「トル程の差をコンマ以下で詰めた一夏は、突撃の勢いを利用して振りかぶった肘を青蘭めがけて叩き落とす。

「うぐうっ!!」

一夏が放った技は古式ムエタイの一手。スポーツ化される以前、実戦志向だった時代の技故にその威力は大きく、青蘭はガードのために咄嗟に出した左腕を大きく弾かれる。だが、そのまま討たれる程彼女は甘くはなかった。

左腕の痛みに耐えつつ、一夏に向けて一步を踏み込む。震脚で力強く床を踏むと同時に、青蘭は右拳で強烈な一突きを一夏に向けて放つ。

「ぬおっ!?!」

今度は一夏がうろたえる。だが、咄嗟に両腕を全面で交差させることにより、青蘭の拳を受け切る。

震脚により威力を増幅された拳は、さながら金属バットで殴りつけたかのような重さで以って一夏に襲い掛かる。

襲い掛かる衝撃を一夏は後方に下がることで散らした。

「今の……さては八極拳か?いわゆる崩拳ってやつ」

探るように言う一夏に青蘭は首肯で返す。

「いかにも。私の父親が結構な使い手でね。子供の頃から兄貴と一緒に習ってたの。」

結構重宝してるのよ?ISの格闘戦にも意外と応用が利いて」

「ああ、そりゃ同感。俺も古流剣術と無手の武術を少々かじって
てな。かなり役立つてる」

「へえ、あなたも。なんだか気が合いそうね、私達」

茶化すように言う青蘭に、一夏は軽い笑みを浮かべて言う。

「全くもって同感。……続きを始めよう。語るのはその後だ」

そう言つて一夏はムエタイの構えを取る。

一夏が宗一郎より学んだ古式ムエタイは、まさに殺傷技の宝庫と呼
べるもので、そうそう人に向けるものではない。

だが、それを敢えて使うことを一夏は決めた。

青蘭が語ることは無かったが、一夏は青蘭が使うのが八極拳だけ
はないことを見抜いていた。

序盤の腕を鞭のように振るう連続攻撃。超近距離を主体とする八極
拳とは明らかに異なるソレ。

おそらくは八極拳と共に学ぶことの多い劈掛掌ひきかてだろう。

近距離主体の八極拳と遠距離主体の劈掛掌は相性が良く、共に学ぶ
組み合わせとしては王道的だと、修業の合間の小話で話してくれた
師の言葉を思い出す。

そして、先程の攻防で一度連続攻撃を許すと厄介になることを理解
だからこそ、大技による一撃必殺での短期決戦を一夏は狙うこと
にした。

二人の間に緊張が走る。

そして

「はあっ！」

「せいっ！」

同時に駆け出した二人はその距離を一気に縮める。そして互いに間合いを詰めたところで攻撃体勢に入る。

青蘭は震脚で床を鳴らすと同時に縦拳を放つ。

金剛八式『衝捶』

八極拳の基本にあたる金剛八式の一手。

基本の一撃ながら、積み重ねてきた練磨によって磨き上げられたその一撃は、当たれば大ダメージは必至である。

だが、一夏は青蘭の拳に合わせるように左腕を突き出す。そして、あるうことかその腕を掴み取った。

(何をっ!?)

拳を振りながら青蘭は疑問に思う。

重さと速さ、両方を兼ね備えた一撃は掴んだ程度で止まることは無い。

一夏の意図を図りかねる青蘭だが、一夏にとっては止まらないことが重要なのだ。

腕を掴むと同時に、一夏は左腕を外側面に引く。

さらに並行して両足で跳躍し、青蘭の拳の勢いと跳躍の勢い、両方を乗せた右拳を放つ。

古式ムエタイが一手、ルーシー・ハーン（仙者飛撃）

相手の攻撃を利用した、捨て身のカウンター技である。

青蘭の目が驚愕に見開かれる。

まさか自分の攻撃を利用して、捨て身のカウンターを仕掛けるとは想定していなかった。

一歩間違えれば自分に大ダメージが与えられかねない荒業。

それを為した一夏に、青蘭は驚愕すると同時に、その度胸にある種の感心をする。

そして、勢いのついた一夏の拳が青蘭の鳩尾に突き刺さった。

「とっつ」

飛び掛かるように殴ったため、一夏の体は宙に投げ出されるような形になるが、それを一夏は腕を駆使して姿勢を直すことで、無理なく着地。

そして立ち上がると、自身の後方で腹を押さえて膝をついている青蘭に視線を向けた。

「やっぱり、大したものよ、貴方」

「そりゃどうも。…またやるっ」

「ぶぶっ…ぐっ…」

一夏の言葉に青蘭は軽い笑みを浮かべると、一度呻いてそのまま倒れ込んだ。

「ふう…」

七人全てを倒した一夏は軽く息を吐く。

そして、未だ境界線の向こうで足を止めている集団に目を向ける。

一夏の視線を受けた瞬間、集団が一步後ずさる。

もはや自分に向かって来る意思が皆無なのは見て明らかだった。

「ったく。手間を取らせやがって」

吐き捨てるように言うと、一夏は集団に背を向ける。

楯無のナレーションが先程から聞こえないが、既に事は決した。

王冠の防衛を達した一夏の完全勝利である。

それを悟ったからこそ、一夏はもはやこの場に用は無かった。

求められた役割は十分に果たした。なら、もう帰っても文句は無いだろう。

セツトに突き刺したままの刀を回収するために、刀の方へ向かう。

気が付いてみれば、観客席も完全に静まり返っていた。

観客は今の光景をどう見るだろうか。

アクション映画のワンシーンのごとくと思い、興奮するか。それならば、まあまだ良い。

だが、一夏にとってもやや不本意なことに、今は女尊男卑のご時世。いかに相応の使い手同士の立ち合いとは言え、男性が女性に手を上げるとは何事と言う輩も居るだろう。確実に。

だとしたら、実に馬鹿馬鹿しいと思う。

一夏が打ち倒した彼女らは、自らの意思で一夏に挑んだ。そこには、一夏に討たれることも納得する意思がある。

その上で勝負を挑んできた。だからこそ、一夏も本気で迎え撃った。

そこには当人達しか共有しえない、ある種の共通意思がある。端的に言えば、武人の気質ゆえだろうか。

そこに何も知らない、ただの観客風情の言葉に干渉されることを、一夏は認めるつもりは無い。

例え何を言われようとも、一夏自身の矜持故に、勇敢に挑んできた彼女達の意味を無下にしないために、一夏はつまらない論評を喚く識者気取りの言葉に耳を貸すつもりは無かった。

ふと、あることを思い付いた一夏は足を止める。

このまま立ち去るのは構わないが、さすがにそれでは観客への配慮が足りない。

楯無に全て任せてしまうのもアリだが、少しは自分も芝居らしく振る舞う必要があるのではないか。

そう考え、一夏は即興で考えた台詞を張り上げる。

「シンデレラは全員王冠の奪取は為らなかつた！

俺の役目はここで終了！それではご一同、これにて失敬！」

少し臭い台詞だとは思いつつ、それでも舞台の上の台詞にはこのくらいが丁度良いと判断する。

（さ〜と、すたこらズラからせても〜らおつと）

そして再度刀へと歩み寄った一夏は、いつの間にか刀の近くに置かれていた木刀に気づいた。

（あれ？こんなところに木刀なんてあつたっけ？）

疑問に思いながらも一夏は木刀を手取る。

何の変哲も無い普通の木刀。それをしばらく眺め、とりあえず一緒に回収しようと決める。

そして木刀を手に持ち、刀が刺さっているセットに近づいた瞬間、一夏の総身を殺気が舐め上げた。

「つつ！！？」

本能的にセットから距離を取った一夏。

直後、一夏が近づいたセットが反対側からの衝撃により爆散。木片をあたりに散らした。

『おおーつとおー！勝者の余裕と共に舞台を去ろつとする王子様！

だが、そんな王子様にさらなる刺客が襲い掛かったあ！！」

ナレーションの楯無の声が響く。

終わるかと思われた舞台の予期せぬ展開に観客席が湧くが、一夏はただ眼前のみに意識を向けていた。

セツトの爆散と共に舞った木屑の煙が晴れる。

その先には、手にした木刀を突き出す形で立つ人影があった。

くせつ毛のある黒髪、纏う制服のリボンの色が二年生であることを示している。

そして何よりも一夏の目を引いたのは、木刀を突き出す腕が左腕ということだ。

「クツ、クハツ」

不意の攻撃。その主が誰かを理解して一夏は口の端が釣り上がる。自然と笑いも漏れていた。

否、最初の突きの時点で気付いて然るべきだったろう。

木刀の突きで木材のセツトを容易く砕く。そんな芸当ができる人物は、一夏には一人しか心当たりが無かった。

「まさか、あなたまで出るとは思いませんでしたよ。斎藤先輩」

そう、隠しきれない興奮を面に出しながら一夏は襲撃者の、二年剣道部エース、斎藤初音の名を呼んだ。

第六十一話（後書き）

さて、またもやオリジナルのキャラを出しましたが、実際今回の話のためだけみたいなのが、物語にはそこまで関わりはありません。

というかぶっちゃけですね、格闘戦云々は今回の話では重要ではなかったり。

今回の話で作者が読者の皆さまに問いたいこと。それは

涙目になってるラウラに萌えるか否かです!!

いや、想像してみてください。

走って、転んで、ちょっと顔を赤くして涙目上目遣い妹キャラならウラを。

作者なんか自分で書いていてニヤニヤしました。

そしてシャルは涙目ラウラにお持ち帰りモードを発動。

一夏の口八丁に載せられてラウラ共々退場になりました。

前回の後書きで、シャルとラウラはコメディチックにいくと書きましたが、うまくできてるかな…？

あ、涙目ラウラに萌えた方は挙手をお願いします。

さて、以前あとがきで亡国との遭遇後に「修羅ICHIIKA」なんてアリじゃないかと書きましたが、よくよく考えると、ガチ修羅にしたら色々大変になることが分かりました。

具体的には作者の技量的な問題で。

でも、敵の出現による主人公の変化を加えたい。
そう思っていたら、ある案が浮かびました。ズバリ、白式をまた弄
ってやるう案です。割と真面目に考えてたり…

今回はオリキャラである斎藤先輩とのガチンコ木刀バトル。
IS二次じゃないようなノリになりますが、どうかお付き合いくだ
さい。

ではまた次回。

今回は結構速く更新できるかもです。

今の遊戯王のアニメに一夏と同じ内山さんが演じているキャラが出
てますが、先日たまたま見たら、「こっちの低めの声の方がIC
H I K Aには合ってるね？」なんて思っちゃいました。

第六十二話（前書き）

シンデレラ終了です。

いや、もうシンデレラなんて影も形も残ってない気がしますけど…

斎藤先輩とのガチ木刀バトル。

一応言いますと、これはISの二次創作です。

これはISの二次創作です。

大事なことなので二回（ry

元々今回と前回は一つの話を分割したもので、前回の投稿の時点で今回の分は結構できてました。

こんなに早く更新したのは久しぶりです。

第六十二話

観客席の大観衆、そしてステージに上がるも一夏に挑めずにいた多くの生徒の視線の集中する先、一夏と斎藤初音は向き合つた。

「来ちゃつた…」

「いや、来ちゃつたじゃないですね。あゝ、先輩もアレですか。俺を倒したいってやつですか？」

一夏の問いに初音は突きの姿勢を解き、左手で木刀を持ち一夏に歩み寄りながら言つた。

「それも…ある…」

相も変わらない抑揚に欠ける声で言つ初音だが、一夏は初音の言葉のある部分が気になつた。

「『それも』？まさか、先輩まで王冠の景品の同室を狙つてるとか言いませんよね？」

まさかと思いつつも一夏は尋ねる。そして初音が答える。

「同じ部屋でも…良い。毎日、剣の練習…付き合ってもらつ」

その言葉に一夏は意外そうな顔をする。初音が同室を狙つことも、その理由も、どちらもが意外だった。だが、存外に悪い気分はしなかつた。

「そいつはそいつは…、中々楽しそうですね。ああ、少なくとも会長と同じ部屋よかつとマシだわ」

そして一夏は木刀を左手に持ち、居合の構えを取る。

「ところで先輩。もしかしてこの木刀、先輩が？」

「うん」

小さく頷く初音。一夏が構えたのを見て、彼女もまた木刀を構える。柄を握る左手をこめかみまで持ち上げその刀身を横に倒し、内側に来た峰に右手を添える。

僅かに膝を曲げ、走り出す姿勢になる。突きを狙う構えというのは一目で見て取れた。

「そう言えば、先輩と本気の手合わせってのは初めてでしたね」

「うん」

「じゃあ、やりましょうか」

そのまま無言で互いを睨みあう。一夏の眼光は、さながら実姉千冬のごとき鋭さを帯びていた。否、千冬本人が見たら「宗一郎に似ている」と、苦々しげに言っただろう。

対する初音もまた、普段のどこか眠たげな印象を持たせる目に鋭さを宿し、一夏をまつすぐに見据えていた。

そして二人が同時に駆けだす。先ほどの無手同士とは異なり、得物を持つ分だけ各々の間合いは広く、両者の距離が5メートル程になった時点で攻撃を開始していた。

両者とも踏み出した片足、一夏は右足、初音は左足で力強く床を踏み込むと共に、駆けていた速さにさらに加速を加えて接近する。同時に一夏は左手に持っていた木刀の柄を右手で持ち、居合の要領で鋭く振り抜く。初音はただまっすぐ、しかし全体重を乗せた乾坤一擲の突きを放つ。

ガキイン！！

凡そ木刀から発せられたとは思えぬほどに激しさを孕んだ激突音が響く。

木刀同士がぶつかった瞬間、二人の表情は全く同時に強張っていた。

初音の突きを抜刀で弾こうとした一夏だったが、その一突きの、木刀の細い身からは想像できないほどの重さに驚愕していた。まっすぐに進む物体というものは横から加えられる力に弱く、いかに速い突きいえども側面から攻撃を受ければ反らされざるを得ない。そう確信していたからこそ、自身の抜刀の一撃を受けて尚、突き進もうとする初音の突きに驚きと、戦慄を禁じえなかった。

対する初音もまた、一夏の抜刀の威力に驚愕していた。

一夏が確信していたことは事実であり、彼女自身もいかに自慢の一突きいえど真横からの攻撃には弱いということとは理解していた。

理解していたからこそ、その対策としてただまっすぐに突くのではなく、外側から中央へと決りこむように打ち込んだのだが、その一撃を一夏の抜刀は弾こうとした。

互いにすれ違いざまの一撃。真横に攻撃を放つ一夏と真正面に攻撃を放つ初音とでは、攻撃への体重の乗せ具合に差が出る。

本来よりも僅かに軽くなっていた一夏の抜刀。十全な重さを伴わな

い一撃でありながら自身の一突きを崩したその一撃に、初音は内心で感嘆していた。
僅か刹那の間の木刀同士の激突の合間に、二人は相手の実力に改めて緊張を高める。

「ぬあっ！！」

「んっっ！！」

一夏はそのまま全力で木刀を振り抜き、初音は全力で木刀を押し通す。

一瞬で交差した二人はそのまま前進。両者の距離が8メートルほどになるまで離れる。

「むう……」

一夏が僅かに唸る。そして険しい目で右上腕部を見る。

完全に弾き切れなかった初音の刺突が掠めたことにより、着ていた衣装が僅かに裂けていた。

体に傷こそついていないものの、服に傷を付けられたという事実は決して看過できない。

対する初音は、来ている制服のどこにも損傷が見られない。

それが意味する所はすなわち、先の一瞬の競り合いにおいては初音が一夏を上回ったに他ならない。

「こりゃ参ったな……」

困ったように言いながら一夏は後ろを向いて、再度初音と向き合う。

「腕には自信があるつもりだけど、少し慢心が出たかな」

慢心。ただ二文字の漢字で表される簡単な言葉。

だが、その言葉が持つ意味は決して軽いものではない。

武において、何よりもまず優先されるのは心である。

心、技、体の基本においても心が最初に来ている時点で窺い知ることができ、中国武術においては「一胆、二力、三功夫」と言い、何よりも勇気という心が重要という、明確な教えがある。

いかに優れた体、技を持っていようと、心に綻びがあれば動きに影響するのは明らか。

故に、武において慢心とは何よりも戒められるべきものだ。

「ああクソ。師匠も口すっぱくして言ってたな。まだまだ俺も未熟なところだ」

慢心故に傷を付けられた己を自嘲するように呟く一夏。

だが、彼を責めるのも酷というもの。どれだけ熟達した人間であろうと、慢心とは常に側に潜んでいる。

思春期の多感な一夏の心は、慢心が付け込む獲物としては恰好の的だろう。

「すう…はあ…」

木刀を正眼に構え深呼吸をする一夏。

慢心があったのは事実。否定はしない。

だが、それを捨て去ってこそ成長。幸いにも相手の初音は一夏の出方を窺っているのか、自分から動く様子は無い。ならば、この状態を有効に活用してコンディションをベストに持ち込む。

深呼吸と共に心を鎮める。

丁寧に制空圏を展開し、万全の準備をする。

そして、初音を厳しい視線で見据える。

一度でも自分に手傷を負わせた以上、一切の容赦はかけない。

眼前の上級生を、全力で以って討ち果たすべき相手と見做し、心を冷たく凍てつかせる。

加減は不要。初手から全力の連続攻撃で、迅速かつ確実な打倒を目指す。

再度左手に木刀を持つ。そして右手で柄を持ち、再び抜刀の構えを取る。

一夏が構えたのを見て初音もまた構える。やはり突きを狙う構え。それは決して、先程突きで一夏を圧したからではない。

己が突きに絶大なる自信を持つが故だった。

少しずつ、少しずつ一夏は初音ににじり寄る。

「直接受けるのは初めてですけど、やはり凄い突きですね」

近づきながらも一夏は初音に声をかける。

自然と口をついて出た言葉には、先程の技に対する純粋な称賛の念があった。

「これだけ。でも…これだけで十分」

対する初音も律儀に答える。

心なしか、その声音は常に比べて僅かに高揚があるような気がした。

「勝負なんて一瞬。なら…一瞬で、一撃で、絶対に仕留める技があればいい」

或いは自身の剣の信念を語るからか、語る初音はやや饒舌になっている。

そして、初音の言葉に一夏は鷹揚に頷く。

「確かに。それは一つの真理ですね」

百の中に究極の一を持つのであれば、それ以外の九九などほとんど不要になるだろう。

ただその一つで全ては事足りるのだから。

だが、口で言うのは容易いが、それは並大抵のことではない。ただ一つを絶対まで昇華させる。それはもはや一つの境地に近いだろう。

一夏自身、真瞳流の七の奥義、その先にある必殺の一を会得しているが、果たして初音のソレと比べて絶対に勝てるかと問われれば、即答はできないというのが本音だった。

或いは、目の前の人物はこと突き詰めるという点においては自分の先を行っているかもしれない。

そう思うことにより、一夏は知らず鎮めた筈の心が波立つのを感じた。

先を行かれたことへの嫉妬？否、高みを超えられることへの高揚だ。

「やっぱり、先輩は凄いですよ…」

これ程の人物が専用機持ちでもなく、代表候補ですらない無名であることに一夏は僅かに憤りを感じるが、すぐに振り払う。

余計な思考だった。剣士同士の仕合に、IS云々など実に瑣末なことでだった。

「先輩、勝たせてもらいますよ」

改めて宣言する。宣言して

「破あああああつっつっ!!」

動いた。

無拍子と歩法を組み合わせた、気配の希薄な高速移動で一気に接敵。

再度抜刀の要領で振り抜く。

「くっ！」

体を後ろに反らすことでなんとか回避する初音。

だが、かわした直後に文字通り返すように振られた木刀が初音に襲い掛かる。

抜刀とは実はそこまで大きく腕を振るものではない。

例えば、真正面を見据えて視界の端に腕を伸ばす。

すると扇型になるように腕が伸ばされるが、丁度この伸ばした腕が抜刀で伸ばす腕のリミットだと言う。

あまりに広げすぎると巨大な隙が生まれるからだ。

故に、居合はリミットまで伸ばしたら、そこから先は手首のスナップを利かせて刀を振るう。

だが、先程の一夏は腕をリミットに到達するより早く反転かわされたと同時に、追撃へと転じていた。

ヒュンッ、ヒュンッ、ヒュンッ！

風を切る音を鋭く鳴らしながら、幾度も鋭い一太刀が初音に襲い掛かる。

得意とされる突きを出す間を与えずに、連続攻撃で畳み掛ける寸法だった。

「とつりゃっ！！」

「っ！」

まさしく縦横無尽。袈裟斬りが振るわれたと思えば、次の瞬間には真横の一閃が唸る。

さしもの初音も完全な回避は不可能と判断したのか、突きの構えを解除して自身の木刀で一夏の攻撃を受け流すようにして防御を試みる。

「えいつ！」

攻防の最中、振るわれたある一太刀に対して初音はアクションを起

こす。

受け流している一撃が自身の木刀と接触している間に、木刀の峰に空いていた右手を沿え、一気に押し込む。

僅かに体勢が崩れる一夏だが、構わずに強引に攻撃を続行しようとする。

だが、確実に生じたタイムラグを初音は見逃さず、素早く移動することは一夏の視界から外れる。

「甘いっ！」

かわされた上段からの一撃。だが、先程までと同じように次の一撃へと、初音が移動した自分の左側に横薙ぎの一撃を見舞う。

しかし

「はっ！」

一夏の側面に回り込んだ初音はそのまま大きく腰を落とし、さらに上体をのけ反らせて攻撃を回避。
そのまま屈め、のけ反らせることで半身へと溜め込んだ力を下方からの一突きという形で放った。

「おっと」

しかし、同じ攻撃に二度もやられるほど一夏も甘くはなかった。回避された一撃だが、そのまま腕を振り抜くことで遠心力を発生させ、その勢いで体を反らして初音の一突きを回避する。

だが、すぐ目の前を通る大気をも切り裂くような一突きを見て、一

夏は背筋にうすら寒いものを感じることを禁じ得なかった。

一夏はそのまま1メートルほど下がると、再度初音への攻撃を開始する。だが、今度は初音も攻勢に出ていた。

相も変わらず突きを主眼においた構えだが、木刀を持つ左腕の肘は軽く曲げられており、さながらフェンシングの構えを取るかのようだった。

その構えから初音は突きを放つ。

一撃の威力は決して高くはないものの、素早く連続で繰り出される突きは確実に一夏の連続攻撃に対処していた。

(ちいっ！このままじゃ埒が明かねえ！！)

対処される攻撃に一夏は内心で毒づく。

自身の攻撃に対処する手腕は見事。確かな称賛の念を抱く。

だが、だからといって攻撃が通らないことに不満を感じないかと言えば答えは否だ。

(ならっ！！)

木刀を握る手に力を込め、一際力を込めた一撃を放つ。

決して重くはない、どちらかと言えば速さを重視した攻撃の応酬の最中に不意に放たれた重みのある一撃により、初音の木刀の動きが僅かに鈍る。

その隙に一夏は大きく後退。同時に、木刀の柄を両手で握り、その切っ先を後方へと向ける。

奥義の一手、「鎚刃」による重量級の一撃で強引に防御をぶち抜い

てダメージを与える。
それが一夏の判断だった。

結局は力技な自分に苦笑を浮かべつつも、一夏は一気に初音へと突撃する。

「でやつ!!」

掛け声と共に突進。初音に接近した一夏は踏み込んだ足でブレーキをかけると共に、慣性で生じた勢いを全体重を乗せた一振りに加え、強力無比の一撃へと繋げる。

「くううつ!!」

さすがに受けるのはマズイと判断した初音は半ば転げるようにして回避。

一夏の振るった木刀はそのまま初音の背後にあったセットに叩き付けられ、セットを大きく砕く。

「ちっ」

舌打ちしながら一夏は、一部が大きく欠損したセットを蹴り飛ばす。

僅かな支えだけで立っていたセットの残りは、一夏の蹴りによって倒れ、一夏と初音、両者の行動可能域を広げた。

「……………」

「……………」

二人は無言で互いを見据える。
そして、再度攻防を開始した。

管制室で事の成り行きを見守っていた楯無は、突発的に起きた一夏と初音の勝負に困ったように頭を掻きつつ、観客の意識を上手く劇の演出の一環という認識へと誘導するため、ナレーションを続けていた。

声の調子こそ変えてはいなかったが、彼女の表情はやや引き攣るような苦笑いになっていた。

「あちゃー。一夏くんに初音ちゃんも、派手にやってるわねー」

ナレーションではない、独り言で楯無はぼやく。
モニターに映し出されるアリーナの様子は今、ある種の惨状となっていた。

先程まで一カ所に留まっていたの攻防をしていた二人だが、今度はアリーナ中を駆け回りながらの攻防を展開。
その過程で、アリーナ中のセットを壊しまくっていた。

ある時は三角飛びでセットの上に入った一夏を引き落とすため、初音がセットの支えを突きで壊しセットを倒壊させ、またある時は、かわされた一夏の攻撃がセットを壊し、しかもそれがやはりセット

の支えだったためにまたもセツトが倒れ、挙げ句にセツトの倒壊に巻き込まれないために、二人が同時に攻撃をセツトに加えて、更に派手に壊したり。

こいつら狙ってやってんじゃねえの？と、見る者に思わせる流れであった。

「お嬢様」

モニター前のデスクに座る楯無の背後。

暗がりから生徒会書記、彼女の腹心の部下である虚が声をかける。

「ああ、虚ちゃん。あの二人、派手にやってるけど、反応はどう？」

「セツトの制作を担当した生徒達は問題ありません。

その…』創造の後にあるのは崩壊！そう！真の芸術とは創造から崩壊までの流れにあるのよ！在る物が崩れ無に帰すその瞬間こそ、芸術の真価があるわ！！』と鼻息を荒くしながら言っていたので問題はないかと」

「あ、そうなの」

虚の言葉に楯無は渴いた笑いを浮かべる。

どうにもこの学園にはまだまだ変わり者が多かったらしい。

自分の知らない学園の新たな一面を見つけ、楯無はなんとも言えない気分になった。

「で、他には？」

「はい。織斑君が勝負を挑んだ生徒を倒したことについて、一部から『女性に男性が手を挙げるのは何事』という旨の意見が来ましたが、全てこちらで対処済みです」

「パーフェクトだわ」

「私見ですが、彼に挑んだ七人、そして今挑んでいる斎藤さんは、それを承知の上で挑んでいると判断しましたので」

「ええ、多分、いえ、確実にそうでしょうね」

ステージ上で戦っている者達は一夏を始めとして、皆学園でも生粋の武闘派である。

おそらくは、その者たちで共有しているある種の理解があるのだろうと楯無は思う。彼女自身、そうした心境には理解を示せる。

「それにしても、やっぱりそういう意見は出るのね」

「そのような時勢ですから致し方ないかと」

あくまで平静で以て答える虚に、楯無は椅子の背もたれに深く身を預けながら言う。

「女性優位、か。女の身としては悪くない。けど、道理や筋つてものがあるでしょうに」

まるで皮肉るような冷やかな感情を、ほんの少しだけ声音に乗せて楯無は言う。

或いは行き過ぎとも言えるのではないかという女性優遇。そのことに楯無は自身がIS操縦者だからこそ、決して安易に許容をするつ

もりはなかった。

以前、入学当初の一夏がクラスメイトが語ったこと。IS操縦者は優遇されて然るべき。そのことについては楯無も異論は無い。

自身を持ち上げるといつつもりは無いが、国家に所属するIS操縦者というのは須らく、弛まぬ鍛錬によって自己を高め、国防の礎を担っている。

そのことに対し、優遇がほどこされるのは然るべきだろう。

だが、そうでない者たち。ISとは何のかわりも無く生きる者までに過剰な優遇を施すのはどうか？

IS操縦者は言うなれば自身を国家に委ねることを対価に優遇を得ている。だが、なんの対価も支払わない者までが同じ優遇を受ける。そんなこと、支払っている身からすれば頭を捻りたくなる事実だ。

「ふう……」

しかし、そのことを思いはすれども口には出さない。出した所で、余計な波風を立てるだけだ。彼女の立場上、それは好ましくない。後ろに控える虚は何も言わずに立っている。ただ、無言で立ち続け、自身が居るということで主の背に無言の支えを与える。それが彼女の従者としての振る舞いだった。

「さて、虚ちゃん。動きはどうなっているのかしら？」

そして更に別の問いを虚に投げかける楯無。その表情は、声音は、常の飄々とした姿からかけ離れた鋭さがあった。

「現状、目立ったことは。ですが、織斑君がここに居る以上、接近の可能性は十分にあります」

肝心な部分をぼかしながらの会話。だが、二人は会話の内容を完全に把握していた。

「なら、私も準備をしておかなきゃかしらね。虚ちゃん。もしもの時は、コレ劇の收拾はお願いね」

「分かりました」

「はあっ…はあっ…！」

あちこちに崩れ落ちたセットの残骸が散乱するステージの上、木刀を握る手の力は一切緩めないまま、初音は荒く息を吐く。

視線の先、約10メートル離れた位置に立つ一夏も、息を荒げてこそいないが、肩は上下にはつきりと見て取れる程動いており、彼もまた相応に疲労が溜まっていることが分かる。

だが、初音が表情に明確に疲労を表しているのに対し、一夏は決して涼しい顔とまではいかずとも、若干の余裕が残っている。

基本的な体力の差もあるが、このまま持久戦に持ち込んだ場合、一夏に有利であることが見て取れる状況だった。

(しかし、つくづくおっかないな)

心の中で一夏は呟く。

はつきり言つて、生半可な使い手だったら一夏には攻撃を当てられない。なぜなら、常に制空圏を展開している一夏は、大抵の攻撃には対処可能だからだ。

だが、それでも初音は幾度か一夏に木刀を掠らせている。

何故か。それは制空圏の弱点を、一夏自身は誰にも語っていないソレを、初音が突いているに他ならない。

如何に凄まじい反応を可能とする制空圏いえど、その後の対処は使い手の技量に左右される。

使い手たる一夏の対処能力を超えるような攻撃が来た場合、それは一夏の制空圏を突き抜くことが可能になるのだ。

或いは眼前一杯に展開される弾幕。或いは途方も無い威力を誇る一撃。

そうした攻撃だ。

初音の放つ乾坤一擲の一突き、それは一夏の制空圏を完全に破るとまではいかずとも、ほんの少しだけその身に掠らせることができている。

(本当に、恐ろしい威力だ)

最初こそ自分を高揚させた攻撃だが、このような状況になるとさすがに苦い感情が混じってくる。

なんと平静を保とうと首を振ると、改めて一夏は初音を見据える。

先程まで肩で息をしていた上級生は、呼吸を整えることができたのか、全体的に落ち着いた雰囲気を取り戻していた。

だが、あくまで呼吸を整えただけであり、蓄積した疲労がその身を苛んでいるのは、はっきりと見て取れた。

（そろそろ決めるか…）

静かに決意する。

相手の疲労はそろそろピークに達するだろう。対して自分にはまだまだ余裕がある。

このまま続ければ、遠からず相手は自滅する。それは確かだ。

それに関しては自分の体力に、そこまで鍛えてくれた師に感謝したい。

だが、そのような終わり方を良しとできない思いがあった。

勝利は自分が直接討つことで。そうしたかった。

（使うか…）

真瞳流裏奥義「七刃一殺」

夏休みの修業の折に会得した奥義の使用を決める。

殺法たる流派の最強クラスの奥義。まずもって、このような試合で人に向ける技ではない。

師からも言われている。

だが、使わなければ確実な勝利は無いと思った。

初手の鎚刃の構えを一夏は取る。

そして、目の前の相手に向けて惜しめない贅辞の念を抱く。

安全性はそれなりに保証されているIS戦闘ですら、未だ使ったことの無い奥義。

それを引き出させたことを純粹に讃える。

それと同時に、自身の心が冷たく凍てつくのを一夏は感じた。

そうしてこそ、この技は真価をはつきするのだから。

そして一夏は駆け出した。

(キツい……)

疲労が引つ切り無しに警鐘を鳴らしている意識で、初音は思う。

幾度と無く放った乾坤一擲の突き。威力に絶対の自信を持っているからこそ、初音は突きのみで戦っていた。

別段、突きしか能が無いわけではない。やろうと思えば真つ当な斬

り合いもできる。

だが、それでは一夏には届かないような感覚があった。だから、必殺の突きだけで挑んだ。

その結果が今の状態である。

（体力：一杯：使っちゃった…）

常に全力の攻撃を放てば疲労は必至。

さらに、その大半はかわされることで、疲労に拍車をかけていた。

脳に行く酸素が足りていないのか、僅かに視界が霞む。

ぼやける景色の一点、一夏が構えを取るのを見た。

それはこの試合の最中に一度見た技。名は知らないが、とてつもない破壊力を持った一撃だった。

あの時は受ければマズイと思ったからかわした。

だが、今度もかわせる保証はなかった。

（なんだか…違う…）

構えこそ一緒だが、どうにも纏う空気が違う。

何と無くだが、先の一撃以上のナニカが襲い掛かる予感があった。

（これ…ダメかな…？）

おそらく、次の一夏の攻撃で決着はつく。

既に疲労困憊な自分に対し、一夏には未だ余裕を感じられる。

そして相手は確実に決めにかかる。

おそらくは負けるだろう。

だが…

（このままは…嫌…）

確実に負ける。そのことは受け入れざるを得ない。だが、ただ負けるのは彼女の感情が許さなかった。

せめて一矢報いる。その意思があった。

一夏が駆けてくる。すぐに自分との距離は無くなり、木刀が振るわれる。

視界が霞みながらも、初音は一夏に意識を集中させた。

瞬間、彼女はセカイが広がるのを感じ、同時に自分に迫る一夏の表情が強張るのを見た。

（ば、馬鹿なっ！？）

必倒の意思で以って初音に接近した一夏は、己が目を疑った。自分が迫った瞬間、初音が制空圏を展開するのを見た。

そして、接近した自分の制空圏と初音の制空圏が重なった。

(ええい!!)

それでも止まらずに一夏は木刀を振るう。

確かに制空圏を展開したことは驚嘆に値いする。だが、追い込まれるなどの極限状態で段階を一つ上ることは、決して珍しくない。

一夏自身がそうだったからだ。

だから、初音が制空圏を発動させたことも、驚きはすれどすぐに受け入れる。

受け入れて、貫くことを決意する。

七刃一殺の技は全てが必殺級。

会得したばかりの制空圏を貫くことは容易い。

「いただく!!」

その言葉と共に鎚刃が初音に迫る。

そして、初音は手にした木刀で鎚刃の一撃を流した。

(なあっ!?)

否、完全に流してはいない。

現に、一夏の鎚刃を受けた木刀を持つ初音の左腕は、捌ききれなかった衝撃によって弾かれています。

だが、それでも一夏は驚愕をせずにはいられなかった。

二の太刀、居合技の旋抜しむじぬを放つ。

だが、やはり衝撃に腕を踊らせながらも初音は対処した。

（な、何が…！）

思わず震えそうになる心で一夏は思う。

そして初音の目が、どこか焦点の合っていないような目が見えた。

まるで、何にも視線の集中をさせていないかのように

（そうか！『観の目』か…！）

日本人なら誰もが知る大剣豪、宮本武蔵。

その彼が晩年に書いた「五輪書ごりんのしょ」という、武芸書がある。

その一節に、「観の目強く、見の目弱く」という言葉がある。師から心得の一つとして教わったその内容を、一夏は思い出す。見の目とは、視線を集中させること。

観の目とはまさに客観。全体を俯瞰するように見ることだ。

聡い者ならば、どちらが武に有効かはすぐに分かるだろう。

観の目、全体を俯瞰することができれば、視界から得られる情報は増え、相手の攻撃の対処はさらにやりやすくなる。

今の初音は、その観の目をも発動していた。それが、発動したてで拙い制空圏の補助になっていた。

奇しくも、疲労によってぼやけた視界が助けとなっていたのだ。

だが

(それが、どうしたっ!!)

驚愕の連続だが、それでも一夏は木刀を振る。全力で、目の前の相手の足掻きを押し伏せる。

それは彼の剣士としての、敬愛する師の弟子であることの誇りと意地だった。

「雄おおおおお雄おつつつ!!!」

腹の底からの雄叫びと共に、残る六太刀を放つ。

一太刀受けることに初音の体が大きく振り回される。だが、彼女もまた意地故か一夏に食らいつく。

そして戦いは終局を迎える。

七の太刀「無命」

斬撃の要訣を突き詰めた、シンプルにして強力無比な一撃を下からの斬り上げとして放つ。

その一撃に、初音の左腕は大きく上に弾かれ、一夏は七太刀の間に体内で練り上げた力を解放する、最強の一殺を放とうとする。

ほぼノーモーション、ノーチャージから放たれる一撃を一夏は放ち、アリーナに打撃音が二つ響いた。

「ぐふっ……」

「ぐっ……！」

一夏と初音、固く閉じられた二人の口から同時に呻き声が漏れた。初音は放たれた一夏の左拳の鳩尾への直撃により、一夏は土壇場で初音が振りおろした一太刀を防いだ自身の木刀の峰が左肩に当たったことにより。

両者とも、自らの攻撃を受けた部位に走る痛みを顔をしかめる。そしてそのまま、組み合ったまま二人は動きを止めた。

「……」

場内に沈黙が走る。ほんの数秒前まで行われていた激しい剣戟。その決着の行方を、誰もが固唾を飲んで見守っていた。

だが、二人が動く気配は無い。

「相、討ち……？」

ステージに立っていた、境界線の外側に居る生徒の一人が呟く。その言葉が聞こえたのか、一夏が口を開いた。

「いや……」

未だ痛みが尾を引いているのか、声にはどこかざらついたような色が残っていた。

「俺の…勝ちだ！」

その言葉とともに、初音の体がゆっくりと崩れ落ちた。

「ぐうつ…！」

倒れこみこそしなかったものの、初音は膝を床に付き、鳩尾を手で押さえながら苦しげな呻きを上げた。

「私の…負け…」

自身の敗北を、一夏の勝利を認めるかのように初音は言う。その言葉に一夏は頷くと、自身も膝を屈ませた。

「立てますか？」

右手を差し出しながら言う一夏。初音は軽く頷くとその手を取り、二人同時に立ちあがる。

「いや、本当に先輩には驚かされました」

右手で左肩の調子確かめるようにいじりながら一夏は言う。

その表情に戦っている最中の鬼気迫る色は無く、穏やかな色だけがあった。

「制空圏に観の目。まさかこの土壇場で会得するとは、恐れ入りました」

「なに…？それ…？」

聞きなれない単語に初音は首を傾げる。その言葉に一夏は呆けたような顔を見ると、すぐに苦笑を浮かべた。

「いや、最後の最後、先輩も感じたんじゃないんですか？いつもと違う、鋭敏な感覚を。それですよ」

「あれが…?」

思い出すように言う初音に、一夏は頷いてから言った。

「ちよつと今は無理ですけど、後で時間のある時に話しますよ。すみませんが、俺はそろそろ失礼します。勝負がついた以上、長居はできない」

言って、一夏は視線を境界の外の生徒の集団に向ける。彼女たちの雰囲気。それがあからさまに変わっていた。まるで獲物に狙いを定め、今にも飛びかかりそうな獣。形容するならこうだろう。

「くそつたれ。俺が弱つたとみて一気に攻勢に出る気だな？ええい、腹立たい」

苦々しげに言いながら一夏は出口へと向けて歩き出す。それを見た生徒の一人が声を張り上げた。

「今がチャンスよ!!!今なら王冠を取れるわ!!!」

その声を合図に一気に生徒たちが駆けだす。それを見た一夏は舌打ちをすると左肩を押さえながらも駆けだした。

「逃がすな!!!」

「チャンスよチャンス!!」

「王冠王冠王冠王冠王冠王冠!!!」

先ほどの一夏にも比する程に鬼気迫る様子で迫ってくる生徒。その姿に先ほどの戦いで疲弊した一夏は割と本気になって逃走を図る。去り際に放置してしまった木刀や箒の刀が気になったが、身の安全には変えられなかった。

(すまんっ、箒)

内心で箒に詫びながら駆ける一夏。背後から地響きの如き大量の足音。その大音響に一夏は危機感を募らせた。

ズバンッ!!!!!!

突如、アリーナに鋭い音が響きわたった。思わず足を止める一同。そして、音のした方を見た。

丁度一夏と生徒の集団の間、手にした木刀を鋭く床に叩きつけた初音の姿があった。

そして初音はゆっくりと集団の方を向くと、木刀の切っ先を集団に向けた。

「行って」

背を向けたまま一夏に言う初音。それだけで、一夏は彼女の言いたいことを理解した。

「いや、先輩!!」

「私が、食い止める。…行って」

個々の戦力は決して高くないとはいえ、勢いと物量に物を言わせた集団に疲弊した状態で挑もうとする初音。

止めようとする一夏だが、初音は引こうとはしなかった。

「……いいんですか？」

僅かに押し黙ってから確認する一夏。初音は首だけを一夏の方に向けると、力強く頷いた。

「すみません」

姿勢を正して一礼する一夏。頷いた初音の目は武人のソレだった。ならば止めるだけ無駄。野暮というもの。そう判断した一夏は、感謝の念と共に初音に後を任せることにする。

走り去ろうとする一夏。その背に、再度初音が声を掛けた。

「織斑君」

止まってから初音を見る一夏。静かに、しかし自信を持って、彼女は言った。

「足止めするのは…いい。でも、全部倒しても…構わないよね？」

「先輩それ死亡フラグー!!!めっちゃ死亡フラグですから!!!」

思わず全力でツツコミを入れていた一夏。言わずにはいれなかったのだ。だが、初音はなんのことか分かっていないのか、首を傾げると言った。

「？大丈夫。君の凄さに…比べたら…あのくらいなら、もう何も…怖くない」

「むっちゃトレンドな死亡フラグ来たー！ー！ー！」

思わず天を仰ぎながら絶叫する一夏。やっぱり言わずにはいれなかったのだ。

正直このままこの場に残していいのか、本気で心配になってきた一夏だった。

「大丈夫。負けるつもり…ない。これが終わったら、私」

「トレンドの次は王道来たよ！！」

言いきる前にすでにツツコミを放つ一夏。だが、それに構うことなく初音は続ける。

「おやつ…：チュツ チヤップス舐めるから…」

「しかもスケールが凄く微妙だー！ー！」

四度目の絶叫。そろそろ疲れてきた一夏だった。正直凄く心配ではあったが、顔をひくつかせつつも改めて初音に問いかけた。

「あの、本当に大丈夫ですか？」

「うん。刀…私が篠ノ之さんに返しとく」

「あ、それは助かります」

そして改めて一夏は振り返る。

「すみません、お願いします」

それだけを言うと、一夏は出口へ向かって全力で駆けだした。

ちなみに、初音は見事に足止めに成功。そのままステージから撤退し、おやつのチュッパチャツ スを堪能したと言う。

「先輩、大丈夫かなあ…」

アリーナ更衣室に戻った一夏は衣装を脱ぎながらぼやく。

初音の一撃を防ぎきれなかったことによる肩へのダメージを確認する。

僅かに赤みが指していたが、決して酷い怪我ではない。

骨に響く以前に肩の筋肉がある程度防いでいてくれたらしい。

このままにしてもさして問題は無いと判断する。

「さて、後はどうとでもなるだろ。俺はさっさと戻るとするか」

そして制服を着た一夏は、未だ頭の上に乗ったままの王冠に気付いた。

「これは…先に会長のとこ行ってどうにかするか…」

そうして一夏は改めて歩きだそうとして、ある人物に遭遇した。

「あら、織斑さん？」

大人の女性の声。聞き覚えのあるその声の主は、一夏に商談を求めてきた巻紙礼子だった。

予想外の人物との遭遇に一夏は目を丸くする。

「あなたは、巻紙さんでしたか。いったいどうしたのですか？こんな場所です」

そう尋ねる一夏に、巻紙女史はやや困った風に答える。

「いえ、それがですね。私はこの学園に来るのは初めてなのですが、どうにも迷ってしまったようです」

その言葉に一夏はああ、と頷くと言った。

「それは大変でしたね。いや、でもこの学園は広いですからね。初見なら仕方ない」

そう言つて一夏は巻紙女史に近付く。

「良かったら案内しますけど、どうですか？」

その言葉に巻紙女史は渡りに船と言つような表情になった。

「ああ、それは助かります。では、よろしいでしょうか？」

「ええ、構いませんよ」

快諾して一夏は歩く。その後ろに付く形で巻紙女史が歩く。

「そつだ、織斑さん。少々よろしいでしょうか？」

「どうかしました？」

更衣室の出口に向かいながら巻紙女史が尋ねる。

「いえ、実は織斑さんに大事なお話が「あ、すみませんいいですか？」はい、どうしました？」

言葉を途中で遮つて話し掛ける一夏だが、巻紙女史はいたつて普通に対応をする。

「実はですね。俺もちょっと話がありました。いや、これが結構重要な話なんですけどね」

まるで天気のことでも話すように語る一夏。

そんな気楽さのまま、一夏は次の言葉を発した。

「ちょっと達磨になっちゃくれないですかね」

その言葉と同時に一夏は後ろを振り向きつつ、部分展開した白式の腕部装甲で、共に展開した蒼炎を振るった。

第六十二話（後書き）

斎藤先輩、ちょっと強くしすぎたかなあ…
いやでも、この方が緊張感でるし…

さて、斎藤先輩について少々。
まず確実にヒロインにはなりません。ならないのです。
どこまで行こうと、剣の競い相手。それだけです。

ちなみに実力に関しては、総合的には一夏が上、でも一部が一夏を上回っている。そんな感じですよ。

基本的にあまり喋らないキャラなのですが、書いていて「これ簪とキャラ被ってね？」なんて思ったり。
ちなみに作者は斎藤先輩について、日本人らしい容姿にしたギアスのアーニヤをイメージしていたりします。

どうも自分はガチの後にギャグを入れるのが好きみたいです。
具体的には死亡フラグのくだりとか。
この時の一夏は銀魂ばりのノリでツッコミを入れてました。
ぱっつあんならぬ、いっつあんという感じで。
まあ所詮はギャグなので、軽く流して頂ければと思います。

さて、次回はIS戦。

ついに亡国ウンタラの本格参戦です。

なのですが、今回の話の最後だけ見ると、むしろ一夏が悪役に見える不思議……

第六十三話（前書き）

V S オータム前半戦。

いやあ、模試の後はすっかりした気持ちで書けます。

数学がケアレスミスいっぱいだけど…

物理がやたら難しかったけど…

第六十三話

蒼の旋風が吹き荒れる。

蒼炎、最強の盾すら容易く切り裂く蒼白の炎剣を由来とする銘を持つ、篠ノ之束謹製の現行最強クラスの攻撃力を持つIS用ブレード。

おおよそ人の身には似つかわしくない長大な刀身は、唯一無二の担い手たる織斑一夏の両腕に纏われた白の剛腕によって軽やかに振られる。

ロツカールームに立ち並ぶ木製のロツカー。その内の蒼炎の斬撃に巻き込まれた物が破碎音と共に斬り碎かれ、粉々になった木片が舞い散る。

その様子を一夏は冷めた目で見詰めていた。だがそれも一瞬。すぐさま部分展開から完全展開に変えると、一夏は前方に跳躍し再度切り掛かる。振るった刃の手応え。余りに軽いソレに、一夏は目的の不達成を認識していた。

「クソがあっ!!」

荒々しい声と共に木屑の煙の向こうから細い機械腕が伸び、蒼炎の一撃を防ぐ。攻撃を防がれたことを理解した一夏は、視界不良による深追いの危険性からすぐさま後退。

そして相手、巻紙礼子から距離を取ると、静かに見据えた。

「へえ。さすがに対応はしてくるか」

自身の一太刀を防がれても、何ら焦る様子は無いままに一夏は言う。

そして煙が晴れ、その先にISを纏って忌ま忌ましげに一夏を睨みつける巻紙礼子が姿を現した。

「クソガキが！テメエ、いつ気付きゃがった！」

自身の思い通りに事が運ばなかったからか、巻紙は苛立ちをあからさまにしながら一夏に問う。

対する一夏は極めて涼しい顔のまま言う。

「生憎、初対面の時から疑ってたよ。

俺が場を離れてすぐに、あんたは居なくなった。あれだけの人混みの中でだ。そうそうできることじゃあない。疑うには十分だ。

後はついさつきだな。殺気がただ漏れた。これでも無音殺法にも心サイレント・キリング得があつてな。すぐに気付いた」

「この…ガキイ！！」

余裕の表情で告げる一夏に巻紙が再び声を荒げる。

だが、冷静に宣告する一方で、一夏は内心で苦い物を感じていた。

（まずいな。こりゃ少し厳しいか）

会話の内で一夏は自身の体を精査する。

先程の初音との一戦。その時の消耗が思う以上に響いていた。

悠然と殺気の感知を告げた一夏だが、決して眼前の相手を過小評価はしていなかった。完全に不意を打った斬撃をかわし、間髪無く振るった追撃の一太刀をISの展開で防いだ技量。

どこの人間かは知らないが、このような場に単独で襲撃をしかけ、襲い掛かるうとするだけの實力を持ち合わせていることは確か。操縦者としては確実にやり手。そう敵を評価して、万全の状態では無い己が身に一夏は、舌打ちをしたい思いだった。

同時に一夏は敵のISを観察する。

黄色と黒をメインにしたマーブル模様。毒々しさを感じさせるカラーリングのISの、特に目を引くのは背中から生えるようにある八本の装甲脚。

これまでに見たどのISとも異なるデザインに、一夏は頭の中で対処法を構築する。

「とりあえずはだ、大人しく捕まれ」

その言葉と共に斬り掛かる。

対処法など、考えたとしても結局はある一つの事柄に集約される。

『近付いて斬る』

ただそれだけ。いかな小細工を弄そうとも、真っ向から打ち破るだけだった。

「はっ！ナメんじゃねえぞガキイ！この『亡国機業』ファントム・タスクのオータム様

に勝てるわきゃねえんだよ!!」

そう言つて巻紙、オータムと名乗つた女はISの装甲脚で一夏の攻撃を迎え撃つた。

「破あつっ!!」

裂帛の気合いと共に、一夏の両腕から蒼刀と白刃が振るわれる。右手に握られた蒼炎、左手に握られたプラズマブレード。この二刀による流れるような連続攻撃が振るわれる。

片方が振るわれたと思つたと同時に、振るわれた一刀の届かない隙間を縫つようにもう一振りが振るわれる。

一夏の最も得意とするクロスレンジでの近接斬撃の連続攻撃。学内屈指の剣豪などと呼ばれるに相応しい攻撃だが、敵であるオータムの技量も高いものであり、八本の装甲脚を自在に駆使して一夏の攻撃を捌き、時には反撃を加えようとする。

(なんとというか、また面妖な…)

オータムに加える攻撃の手を緩めないまま、一夏は内心でぼやく。オータムのISの八本の装甲脚は、そのどれもが複雑精緻な動きをしている。

おそらくは装甲脚の一本一本が独立したP.I.Cを備えているのだろ
うが、一夏からしてみればとにかく奇怪極まりない仕様であった。

「くたばれ!!」

先端を展開し、ニードルを晒した装甲脚が二本、一夏に向けて襲い
掛かる。

一夏から見て左側からえぐりこむように一本、上から一本である。

「ふん」

軽く鼻を鳴らすと、一夏は迎撃を行う。

オータムが気付いているかは知らないが、一夏は既に制空圏にオー
タムを納めていた。

武器使いの制空圏は相応の広さを持っている。クロスレンジで戦闘
をする以上、相手の身が制空圏に納まるのは自然な流れだ。

左からの攻撃は一步だけ下がることで、上からの攻撃からはプラス
マブレードで流して。

だが、一夏が二本を受け流す間に、オータムは別の装甲脚で一夏に
狙いを付けていた。

やはり展開された先端から覗く銃口。さらにそれとは別にオータム
の右手に展開されたアサルトライフルと、左手に展開されたカター
ルが一夏に襲い掛かるうとする。

制空圏によつて、わざわざ視線を向けるまでもなく感知した一夏は、
左足で強く床を踏み込み跳躍。

同時に装甲脚とライフルから銃弾が発射されるが、一夏には当たら
ずにその背後のロッカーを傷付けるに終わる。

跳躍した一夏は右足の脚部ブレードを展開すると、そのまま前面に回転することで縦の回転斬りを放つ。

後退することでかわすオータムだが、すぐさま一夏は迦楼羅の砲門を開くと、ビームマシンガンを放ちその動きを縫い止める。その隙に再度切り掛かった。

「こんのっ！ナメた真似しやがってええええ！！」

「はっ！結構な手練れみたいだけど、斬り合いは俺に分があるみてえだなあ！！」

この狭い空間じゃ、その蛸足も上手く使えねえだろ！！」

「蛸じゃねえ蜘蛛だ！このダボ八ゼが！
意気がってんじゃねえ！！」

徹底してクロスレンジを維持しようとする一夏にオータムは吐き捨てるように吠える。

だが一夏の言うことは事実であり、オータムのISは非常に限定された空間であるロッカールームにおいて、その特徴的な八本脚を十全に振るえずにいた。

対する一夏も、本来ならば彼のISも閉所は不得手の機体ではあるが、その技量で以ってカバーをしていた。

「ガキが！オータム様とこのアラクネをなめんじゃねえぞ！！」

「舐めちゃいねえよ蜘蛛女！んでえ！目的はなんだ！！」

オータムが自身に害意を持っているのは確か。だが、その目的が見えない一夏は試しに問うてみる。

正直、答えが返るとは期待していなかったが、オータムは戦闘の興奮によつと饒舌になつているのか、あつさりと答えた。

「目的い！？そりゃテメエのISだ！！」

素人のガキにや過ぎた玩具だからなあ！ウチの組織が有効に活用してやるつて寸法だあ！！」

その言葉に一夏は思わずキレそうになるが、静の者としての心得からすぐさま怒りを鎮める。

だが、怒りを抑える代わりに挑発するように吠えた。

「はっ！代金払えば考えてやつてもいいぜ！」

「おう幾らだ！言ってみやがれガキ！！」

「前払いでテメエの首だ！ついでにテメエの親類縁者知り合い全員の首も貰おうか！」

まとめて六条河原に晒してやらあ！！」

「舐めてんじゃねえぞガキ！！」

オータムに負けず劣らずの悪意を含めて言う一夏。

怒りは抑えた。だが、沸き上がる殺意は抑えるつもりは無かった。

振るう二刀でオータムのIS、アラクネの攻撃を捌く一夏。

近距離故にアサルトライフルは使えず、両腕にカタールを展開し、更にアラクネの装甲脚も含めて幾度となく斬り付けるが、制空圏を展開した一夏はその悉くを回避、あるいは捌いている。

「素人のガキがつ！アラクネ相手によく持つなあ！！」

「テメエこそ！んな下手くそな剣術ブレイドアーティストでよく俺の剣についてくる！」

「剣術だあ！？んなモン意味あるわきゃねえだろ！！」

その言葉に二刀を振る一夏の眉が僅かに動く。

そして、先程までとは一転して静かに、そして嘲笑うかのような薄笑いを浮かべて小さく言った。

「井の中の蛙め……」

戦いの最中、一夏はある時の師を思い出す。

テレビで放映されていたISの試合。奇しくもブレードを用いる近接格闘型同士の戦いだったソレを見て、師は一夏にISの剣技についての酷評をボロクソに言っていた。

曰く、ISの性能ありきの動き。

技スキルとしてなら十分だが、到底術アートとは呼べないもの。

剣術の何たるかを理解していない愚者同士。

当時、ISの知識など欠片も無かった一夏からしても、あんまりと呼べる酷評だった。

ただ印象的だったのは、唯一千冬のみが真に剣術を振るっていると師が評したこと。

そして時は流れて今、ISを自らが駆り、時に戦うようになってようやく、一夏はその時の師の言葉を理解した。

別段、師のようにボロクソに酷評をするつもりは無い。だが、学園の生徒の武器術を見て、確かに自身の剣との違いを理解した。

成る程、確かにただの技スキルとして見るならば良い。

だが、それはあくまで技止まりでしか無かった。

ISがただの道具でしかないと同様、その技すらも道具。そんな扱いが見て取れた。

あのラウラですら、あくまで技としてブレードを振るうくらいなのだから。

それを見て一夏は、誰にも言うこと無く己が心の内で確信した。

ISの操縦技術は誰かに後塵を拝そう。緻密な戦略眼、戦略の構築、それらもまた然り。

だが、こと剣術ならば誰にも負けない。自らの領域の内ですら刃を交えたが最後。確実に仕留めると。

オータムもまたそうだった。

確かに技術は高い。いや、総合的に見れば自分よりも上の可能性がある。

少なくとも一対一で戦った場合、一般生徒では勝ち目が薄い。代表候補クラスでもなければ対応はできないだろう。

だが、それでも、振るわれる攻撃には僅かながらに粗があるのを、

一夏は確かに見て取っていた。

ならばそこを目掛けて、体力の持つ内に一気に押し切る。

初音との戦いで消耗した今では、それがベストだと判断した。

「はっ！素人の分際でやるじゃねえか！！」

伊達に第二回モンド・グロツソの時に手下をぶち殺したただけはありやがる!!」

「なに…?」

不意に放たれたオータムの言葉。

決して聞き逃せないその内容に、一夏の攻撃の手が僅かに緩んだ。

「オラッ!」

「ちっ!」

力任せに二本のカタールと装甲脚をまとめてぶつけてくるオータム。

さすがに体勢が崩れそうになる一夏だが、すぐさま後退することで致命的な隙を作るのを防いだ。

僅かに距離が開いた両者は睨み合う。

その周囲には破壊され、散らばったロッカーの残骸がある。

「今の言葉、どういう意味だ…」

オータムを睨みつけながら唸るように言う一夏。

そんな彼にオータムは悪意を前面に押し出したような邪悪な笑いを浮かべながら答えた。

「あん?知らなかったのか?

あの時にテメエを誘拐したのは、ウチの組織なんだよ!ハハッ!感動の再会ってなあっ!!」

下卑た笑いを高らかに上げながらオータムは言う。

それは同時に彼女の策略であつた。敢えて誘拐の犯人が自分たちであるということ、相手の激昂を誘い、興奮状態に入つて冷静さを無くしたところ、とつておきを使つて白旗を奪取する。

一見、否、誰が見ても粗暴としか言えないオータムだが、同時に彼女は優秀なエージェントでもあつた。

（さあ、とつととキレてかかつてこいよ、ガキ。その時が、テメエとISSのお別れだあ！！）

そう遠くないうちにやってくるだろう目的の成功を想像して、オータムは腹の奥がうずくような興奮を覚える。

だが、それを表に出して相手に悟られては本末転倒なので、なんとかしてそれを抑え込む。

「……」

一夏は動かない。ただ、無言で二刀を構えたままオータムを睨みつけ、微動だにしない。

（あん？）

反応がない一夏の姿に訝しむオータム。その姿を見て、自身の思い通りにならない状況にいら立ちが湧きあがる。

「おいっ！！ガ　「そうかそうか。お前らだつたか」あ？」

怒鳴りつけようとした声を遮って一夏が口を開く。激昂すると予想したが、実際は意外に落ち着いた声音にオータムは訝しげな顔をし

た。

「へえそうかい。あん時のゴミ共はてめえらの手のモンだったか。そっかい」

クツクツと小さな笑いを漏らしながら一夏は口の端を吊り上げた。

「残念だったな。まさか俺がキレて突撃かますと思ったか？だとしたら、そいつは間違いだ。お前が思う以上に、俺は冷静な方だぜ？」

そう言つて一夏は嘲笑うような視線をオータムに向ける。

意外に冷静。一夏の言はあながち間違いでは無かった。

そも、件の誘拐事件にしてもその当時の時点で一夏が犯人を殺害しているため、一夏としてはそれが一つの憂さ晴らしになっていて、そこまで怒りが湧いていなかった。

そして何よりも、一夏の心にしかと刻まれている師の教えがあった。

『真に怒りを感じる時こそ、明鏡止水の心を持って。

戦いにおいて常に敵は二人。眼前の相手と己自身だ。

そして、己が心の際こそが、真に打破すべき敵と思え』

師を心の底から尊敬している一夏にとって、その教えは自身の中で非常に高いウエイトを占めている。

無論、時に意見することもあるが、それもまた師弟の関係というのが一夏と宗一郎、両者共通の認識である。

「……」

オータムを睨みつけたまま、一夏は左手のプラズマブレードを格納。

蒼炎の柄を両手で持ち、二刀流から一刀流へと変える。

「んだあ？わざわざ得物を減らすなんざ、馬鹿じゃねえのか？」

一夏の行動を見たオータムが、呆れと嘲笑を込めて言う。
だが、一夏は特に表情を変えず、涼しい顔のまま言う。

「間抜けな認識だ。」

得物の数が実力に直結するなんてのは、素人以下の考えだ阿呆。
それでも俺は一刀の方が得意でね。もう容赦無しだ」

言って、一夏は全力の殺気をオータムにぶつけると共に、あくまで
思考の冷静を保ったまま、心の内を殺意で満たす。

「最初は捕まえようと思った。」

けど、あの時の連中の仲間って言うなら話は別だ。
激昂はしないけど、怒ってるのは事実だから」

だから

「お前の命、狩らせてもらっぞ」

本来ならこの場合は捕縛がベストだろう。

だが、例え手法として最悪手であっても、例え如何なる誇りを受け
ようとも、一夏は眼前の相手を斬ることを決めた。

事後処理だのなんだのという面倒は、専門家に任せれば良い。どう
せ学園にはその手の人材もある。

何よりも、かつての借りを大量の利子とセットで叩き返す。

それだけが一夏の思考を占めていた。

小難しいことなど、始末してから考えればいいのだ。

「けっ！やってみやがれガ」

ダダンッッ！！

吠えるオータムが言い切るより早く一夏は動いた。

ショート・イグニッション
短距離瞬時加速を二連続で発動。

一度大きく横に動いてから、二度目のブーストで一気に接敵。蒼炎で一気に切り掛かった。

「この短距離瞬時加速なら、こんな閉所でも十分使えるな！」

「ナメんなガキっ！！」

アラクネの装甲脚で斬撃を防ぐと、オータムは別の装甲脚を一夏に向ける。

だが、それが届くよりも早く一夏は再度ブーストを発動。後退して装甲脚の攻撃をかわす。

（このまま振り切るっ！）

再度連続で短距離瞬時加速を発動。

縦横無尽にロツカールームの中を飛び回る。

時に天井やロツカーを蹴り付けることで、急激な方向転換をする。ここで、一夏と白式はアクロバットのごとき三次元機動を行い、オータムを揺さ振っていた。

「このっ！ちよこまかとおっ！！」

捉えきれないことに苛立ちをあらわにするオータム。

だが、そんなことはお構いなしに一夏は揺さ振りをかけつつける。

ISのハイパーセンサーによる全方位視界は、確かに広範囲の視野を確保する。

だが、通常160度程度しか無い視界に慣れきっている人の感覚では、どうしても拡張された視界を認識しきれない。

無論、IS側からの補助も当然のようにかかつてはいるが、どうしても意識の穴というのは生じる。

それは全ての操縦者について言えることで、これをどうにかしようとするならば、それは最早システムではカバーできない、当人の勘などのレベルの話になる。

そして、ブーストを駆使して複雑な機動を繰り返す一夏は、先立つて楯無との訓練において習得した、マニュアルでのPIC操作も併用することで、オータムの意識の隙を突くように移動していた。

蒼炎とアラクネの装甲脚が幾度となくぶつかり合う。

仮に、同じ状況下で一夏と戦っているのが一般生徒だったら、とうに勝負は一夏の勝ちに終わっているだろう。

だが、オータムはしぶとく一夏の攻撃に反応し、対応をしてくる。人格面は下品極まりないが、腕は確かであることを改めて認識した一夏は思わず歯噛みをした。

実の所、一夏にも時間はあまり残されていなかったのだ。

先程の初音との戦いで蓄積された疲労。オータムとの交戦開始直後

はあまり気にならなかったが、それが今、徐々に一夏の体を苦しめていた。

だが、それ以上の問題があった。

体の疲労ぐらはいくらでも堪えられる。

だが、徐々に減っていくエネルギーはどうにもできない。

短距離瞬時加速は通常の瞬時加速に比べて、極めて良好なエネルギー消費効率になっている。

だが、消費することに変わりはない。

さらにオータムは攻防の最中に幾度か一夏に攻撃を掠らせている。

それもまたエネルギーを削っている。

確実に仕留めるための切り札、零落白夜の限定解除のためのエネルギーも残さねばならない一夏としては、戦いを長引かせるわけにはいかなかった。

(ならばっ!!！)

勝負に打って出ることを決めた。

既にロツカールーム内のあるところには、二人の攻防の巻き添えで壊されたロツカーが散らばっている。

その中でも特に大きい一つに近付くと、一夏はそれを全力でオータム目掛けて蹴り飛ばす。

それと同時に再度短距離瞬時加速を前方に発動した。

「うざって なっ!!！」

吐き捨てるような言葉と共に、飛んで来る残骸を破壊したオータムは思わずうるたえる。

残骸によって視界が遮られた一瞬、その一瞬の内に一夏が接近し、蒼炎を構えていた。

「終わりだ」

冷徹な声で処刑宣告をする一夏。

そして左手に持った蒼炎を零落白夜の発動と共に振るおうとした直後、左肩に走った激痛によって動きを止められた。

（なあっ！？）

激痛に顔を歪める一夏。

そしてすぐに原因に思い当たった。

初音との試合の最後の一手。

自身が攻撃を放つ直前に初音は木刀を振り下ろしていた。

すぐさま一夏は自身の木刀で防御。

結果、一撃は左拳で放たれ、初音の一撃は直撃こそ免れたものの、防いだ自身の木刀の峰が左肩に当たる形になった。

その時のダメージが今、最悪のタイミングで一夏を妨害したのだ。

鈍る動き。それは今この場においては致命的な隙だった。

「ハツハアツ！！隙有りだぜガキイ！！」

勝ち誇るようなオータムの声。

直感的に嫌な物を感じ取った一夏はすぐさま後退するが、直後、オータムの手から一夏目掛けて球体が投げられた。

投げられた球体は空中で大きく展開。ワイヤーで編み上げられたネットとなって、一夏の左半身を背後のロッカーに縛り付けた。

「んなっ!?!くぬっ!くぬっ!」

直ぐさま引きはがそうとする一夏だが、その気配はなかった。

「ったく、ちょこまかすばしっこいガキだなオイ。けど、とうとう蜘蛛の糸に捕まっちゃまったな」

そう言いながらオータムは長方形の箱のような装置を、睨みつける一夏に見せ付けるように取り出した。

「さ、て、と。お仕事タイムだ。お涙頂戴、感動のお別れタイムだぜ、ガキイ」

「なにを…!」

目の前の装置が何なのか、分からない一夏は訝しげな顔をする。だが、同時にその表情は緊張故に強張っていた。

オータムの手から装置が離れた。簡単な自律行動が可能なのか、装置は側面から四本の足を伸ばすと、一夏目掛けて飛んでくる。

そして伸びた足で一夏の体に絡みついた直後、一夏の全身に衝撃が走った。

「ぐあああああ!?!」

まるでかさぶたを強引に剥がすような痛みが全身に走る。さしもの一夏もたまらずに苦しむ声を上げる。同時に、喪失感も広がる。

痛みは一瞬で消えた。顔をしかめながらも一夏は何が起きたかを認める。

攻撃にしてはあまりに粗末。では何か。そこで一夏は、全身に走る違和感に気付いた。いつのまにか視線の高さが下がっていた。手のひらに直接触れる床の冷たさに、一夏は慌てて自らの体を確かめる。

「ば、馬鹿な…」

知らず、震える声が口から出る。つい先ほどまで纏っていた白式。それが影も形もなく消えていた。

「お探しの物はコチラで〜すかあ〜？」

嘲るようなオータムの声に一夏は真正面を改めて見据える。視線の先、オータムの右手には光り輝く菱形のクリスタルがあった。それは白式のコア。第二形態移行を果たしたソレは、通常のコアよりも強い輝きを燦然と放っていた。

「貴様っ！！」

一夏が声を荒げる。既にその身はネットから解放されているため、すぐさま立ち上がる。

「おいおい、立ってどうするってんだあ〜？ISもねえただのガキの癖によお」

「ハッ、決まってるんだろ。取り返すだけさ」

その言葉にオータムがキョトンという顔をする。直後、強く吹き出すと大声で一気に笑いだした。

「ブツハツハツハツハ！！取り返すだあ！？寝言は寝て言えや！
！できるわきゃねえだろ！！人様笑わせるならお笑い芸人にでもな
つてろ！！」

「あいにく、俺は本気さ。ついでに、テメエの命も狩らせてもらお
うか」

その言葉にオータムはますます笑いを強めた。

「ヒャーヒツヒツヒー！！おいガキ！！もう喋んなマジで！！笑
いで腹が抜れそうだ！！」

依然大笑いを続けるオータム。さすがに一夏も癪に障ってきたのか、
そのこめかみはピクピクと動いていた。

「馬鹿だなお前。所詮は蜘蛛。虫けら風情は碌な知能が無いと見え
る」

言い返したつもりなのか、あからさまに挑発するような物言いの一
夏。オータムもさすがに聞き逃せなかったのか、笑いを引っこめると
冷めた目で一夏を見た。

「テメエ、本気かよ？」

「ISが無い？だからどうした。俺はこうして五体満足で立ってる。
なら、やりようはいくらでもあるだろ。」

殴りつければ良い。腕が無いなら蹴りつければ良い。腕も足も無い
なら頭突きだ。首が飛んだら、首だけになっても噛みついてやる。
死んだら、化けて出て呪い殺してやる。

あんたも分かっているはずだろ。人の命なんざ存外脆い。数グラムの鉛玉が脳天に突っ込んだだけで、首の骨一本折れただけで。

0・1グラムそこそこのシアン化カリウムが体に入っただけで、人は死ぬ。あっさりな。人一人殺す方法なんざ、いくらでもある」

「中々、度胸があるじゃねえか」

先ほどまでの嘲笑うような態度とは違い、興味深いものを見るような目で一夏を見ながらオータムは呟く。

「けどよお、そこまで言うってことは覚悟はできてんだろおな？」

そして、再度邪悪な笑いを顔に張り付け、口の端を吊り上げながら問うてくるオータムに、一夏もまた口の端を吊り上げて答える。その顔はオータムに負けず劣らずの悪人面になっていた。

「無論。殺して、今も殺そうとしてんだ。なら、殺されもするさ」

「イイ覚悟だ。じゃあ…死にやがれ!!」

そう言うと同時にオータムが一夏に向かってくる。ISの速度、並みの者ならば認識は困難なソレを、一夏の高い動体視力と反射能力は確かに見て取った。

自身を貫こうと襲いかかる装甲脚。迫る死を目前に、一夏の思考は本人も驚くほどに冷静だった。

(落ち着け。師匠の教えを思い出せ…)

自らに言い聞かせ、一夏は宗一郎の言葉を反芻する。

『いいか、一夏。割とマジで危ない時はな、相手の目を見てやれば良い。』

目は口ほどに物を言うと言っただろう？まさにその通りなんだよ。目を見ればな、相手の考えなんざ結構読めるものだ。

そして忘れるな。その技法は、まさしくお前に適したものだ』

(そつだ。俺は海堂宗一郎の弟子、織斑一夏！今が俺の、我が師の弟子としての真価の見せどころ！！！！)

目を見開き、一夏は迫るオータムの目を真正面から見据える。

茶色の瞳、その奥の瞳孔、さらに深奥。網膜を抜け、視神経をも通り越し、脳髄を流れる思考、その流れを、敵の全てを見抜く！！

(これはっ！)

瞬間、一夏は我が目を疑った。

視えたのだ。迫る装甲脚の攻撃、その軌道が。

まるで、自らの思考のように手にとって認識ができた。

「うおおおおおおおおお！！！！！！」

気がつくとも雄叫びと共に一夏も駆けていた。

「ハッ！テメエから死にに来やがったか！！」

オータムが吠えるが、一夏の思考は余計な雑音としてその声を認識しなかった。

ただ、視える攻撃の軌道の全てに意識を集中させる。

そして、一夏と装甲脚の距離がゼロになった。

「んなあつ!？」

オータムの驚愕する声が響く。必殺を期して放った装甲脚の刺突が、全て回避されていた。

まるですり抜けるように一夏の体は攻撃の合間を縫っていく。

その姿にオータムは言い知れぬ焦りを感じた。

(な、なんだってんだこのガキ!?)

オータムの焦りを余所に一夏は自身に向けて放たれた攻撃の一つを見る。

自らのすぐ左脇を抜けようとする装甲脚。それに狙いを定め、一夏は自身の左腕を伸ばす。

掴んだ。高速で動く金属を掴んだことで一夏の左手の皮が削られるが、それを一夏が取り合うことは無かった。

跳躍。敵の攻撃の勢いを利用して、高速でオータム目掛けた突き進む。

そして飛翔の最中、一夏は己が身と空いた右拳を全力で捻り、右拳を回転する弾丸のごとくオータムに突き立てる。

「クリヨールシー・ハーン（螺旋仙者飛撃）!!!!」

それは古式ムエタイの一手。ステージ上での戦いで、一夏が帳青蘭に放った一撃の発展形だった。

そして、完全に隙をついて放った捨て身のカウンター攻撃は、鈍い音を立ててオータムの横っ面に突き刺さった。

ISのシールドは、その使用を想定される威力よりも遥かに低い拳

に発動をしなかった。

「ガッ!?こ、の、ガアキイイイイ!!!」

まさか本当に攻撃を受けるとは思っていなかったオータムは表情を憤怒で彩ると、自身のすぐそばに未だ居る一夏を見る。

一夏は跳躍の勢いを利用してオータムから白式を掠め取るうとしていたが、すぐに手を引っこめる。

そして手が虚空を撫でるに終わった一夏の腹に、オータムはアラクネの装甲脚を棍のように叩きつける。

オータムの一撃に一夏は、肺の中の空気を一気に吐き出すと同時に、後方に勢いよくふっ飛ばされ、背中からロッカーに叩きつけられると、そのまま床に座り込んだ。

「ぐっ、くう…」

腹を押さえながら座り込む一夏に、オータムは殴られた箇所を押さえながらゆっくりと近づく。

その顔には、心底憎いという怒りと、明確な殺意があった。

「このガキがあ!!舐めてくれやがってえ!!よくも、よくもこのオータム様の顔に傷を付けてくれやがったなああ!!?」

完全に激昂した様子のおータム。その背後では装甲脚が再び一夏に狙いを定めていた。

(あゝ、ヤベ)

オータムがあまりにも怒っているためか、対照的に一夏の心は冷静

なままだった。

(これ死んだかな)

起死回生を狙った呐喊も失敗。こうしてダメージを受け、相手は殺る気満々。

はつきり言っつて、万事休すだと思った。

オータムの背後の装甲脚が、弓を引き絞るかのように曲げられる。遠からず、その八本のニードルが一斉に自分を貫くだろう。そうなれば、あっという間にデッドエンドだ。

(これが俺の末路、か…)

冷めた思考で己が死を覚悟する一夏。不思議と、恐怖はなかった。

そして、装甲脚が動き出した。

(つつ!!?!?これは!!!)

同時に、一夏はある気配を感じ取った。気配を感じると同時に、一夏は飛び上がるように立ち上がった。まだ終わりではない。そう判断した。

ズガアアン!!

一夏が飛び上がったって横に転がると同時に、直前まで一夏が居た場所を装甲脚が貫く。だが、八本の凶刃は一夏ではなく、木製のロツカ―を貫くに終わった。

「ほわっ、たあっ」

転げた状態から立ち上がる一夏。
そして再びオータムに視線を向ける。

「テメエ、まだやる気が。もう同じ手は喰らわねえぞ」

心底忌ま忌ましそうに一夏を睨みつけながらオータムが言う。
だが一夏は首を横に振ると、顔に微笑を浮かべながら言った。

「いや、やらない。その必要が無くなった」

「アン？」

先程までISを取り替えそうと躍起になっていた姿から一転した一夏に、オータムも分からないといったげな顔になる。

「なあ、あなたの目的ってさ、白式を奪うことだろ？」

「つてことはだ。俺を始末することは二の次ってわけだよなあ？」

「あ？それがどうした？今更見逃せってか？」

「違う違う、そうじゃなくて。」

「いやな、ただあなたはどうしようもないへマを踏んだっただけだよ」

「なんだと？」

さすがに眉を潜めて尋ねてくるオータムに、一夏は口の端を吊り上げると言った。

「あんたはな。白式を取った時点で全力でトンスラこくべきだったんだよ。」

だのに、俺の挑発に乗りやがって無駄に時間取って。タイムアップだ。あんたは仕事人としちゃ二流だよ。もう、あんたに逃げることはできない」

「はあ？何言ってるやがる。」

「テメエに何かできるってのか？」

「いいや？」

何時俺がやるって言ったよ。

別に、俺以外のIS操縦者でもいいだろ？」

そう一夏が言うと同時にオータムの顔が強張った。

瞬間、オータムに真横からガトリングによって放たれた無数の弾丸が襲い掛かった。

「んなあつ！？」

突然の攻撃に削られたシールドエネルギーを見て、オータムは目を剥く。

そして再度一夏が口を開いた。

「つたく。来るのが遅い！」

半ば苛立ちのこもったその言葉は、オータムに向けられたものではなかった。

「あらあら、ごめんなさいね。これでも急いで来たのだけど」

一夏とも、オータムとも異なる声がロツカールームの空気を揺らした。

そして、ISの脚部が歩行をする時の、特有の機会音を鳴らしながら、一つの影がゆっくりと現れる。

「でもよく言うでしょう？ヒーローは遅れてやって来るものだって」

「危うく手遅れになるとこだったけどな。いいから、後よろしく」

「フフツ、任せなさい」

そして新たな人影、乱入者がその姿を現す。

身に纏うのはIS。だが、その姿は通常のISとは異なった趣き。

金属の装甲は少なく、代わりに薄い水のようなベールが各部をドレスのように覆う。

一夏も、そしてオータムも知らない。

そのISの名は霧纏ミステリアス・レイディの淑女。

ロシア製第三世代型のIS。

そして、その専属搭乗者の名は更識楯無。

IS学園の切り札、最強の生徒会長が参戦した。

第六十三話（後書き）

次回、会長も交えてバトルバトル。

いやあ、一夏のセリフがオータムに負けず劣らず悪ですな。書いた本人が言うのもなんですが。

今回はバトルですので、ネタはごく薄めにしました。それっぽいセリフを言わせたただけなので、分かる方は少ないかもです。

さて、次回は一夏が盛大にICHIIKAです。

白式もBYAKUSHIIKIになるかと。いや、そこまでの魔改造にはなりませんけどでして。

え、次回もまたよろしくお願いします。

あとがきって、上げてから書きたいことが浮かび上がりますよね？
携帯だと編集が中々…

第六十四話（前書き）

え、まず始めに謝罪を。

ICHIIKAフィーバーは次回に持ち越しです。

今回は楯無がメインとなっています。ご了承下さい。

最近めつきり冷え込みましたね。

皆さん、体調には気をつけて下さい。

第六十四話

時は僅かに遡る。

一夏がステージから去り、残された初音が一夏の王冠を狙う生徒の集団相手に、IS学園無双を繰り広げている最中、管制室の楯無は常日頃の学園生活では滅多に見せることの無い、冷やかな視線でモニターを見詰めていた。

「お嬢様」

背後から虚が声をかける。

用件が何なのか、言われるまでもなく楯無は理解していた。

「来たのね？」

「はい。人払いは済ませてあります。おそらく、すぐにも戦闘が起ころかと」

「そう。なら、いよいよ私の本当の出番ということね」

言いながら楯無は椅子から立ち上がる。

ただ椅子から立つ。それだけのありふれた動作なのに、楯無は見る者を思わず緊張させるような気を放っていた。

「すぐにも行動を？」

だが、彼女に長年仕えてきた虚は一切動じる様子を見せずに、楯無に尋ねた。

「いいえ。少し様子を見るわ。」

向こうがどう出るのか、見ておく必要があるもの」

「……よろしいのですか？」

管制室の出口に向かって歩く楯無の背に、虚が僅かに間を置いてから尋ねた。その言葉には、本来なら主に向けるべきではないだろう僅かな険が含まれている。

額面通りに解釈すれば楯無は、事前に想定し、そして実際に起きている案件への介入を遅らせ、想定した敵の出方を窺うつもりである。

それは言い換えれば、今現在その案件の当事者になっている少年、学園でもトップクラスの重要人物を囿にすることということ。

はっきり言って、褒められた手段とは言えない。

万が一のことがあるうものなら、事態は彼女達にとって好ましくない方向に転がる。

学園の一生徒として学園全体を案じ、目の前の人物の従者として主を案じ、当事者になっている少年を知る私人として案じ、虚は主に問うた。

「大丈夫。問題はないわ」

だが、虚の心配を余所に楯無は悠然とした態度を保ったまま答える。

「虚ちゃん。私が誰なのか、言ってみて頂戴」

そう言つて、楯無は僅かに首を後ろに向け、肩越しに虚と視線を合わせた。

瞬間、虚は確かに自分の体が強張るのを感じた。

そうさせるだけの気迫を、楯無の視線が放っていた。

「……、日本国対暗部組織『更識』現頭首であり、IS学園最強の生徒会長の、更識楯無お嬢様です」

「よくできました。」

そう、私は更識楯無。故に、私は私として当たり前前に振る舞うだけ」

放たれる気迫に喉が詰まりそうになりながらも答えた虚に、楯無は一気に気迫を引っ込め、満面の笑みと共に言うと言つて再び歩き出す。

泰然自若。

微塵の揺らぎも感じさせない威風を放つその背を見て、虚は自身の危惧が杞憂でしかないことを悟った。

そして彼女は心の内で主へ詫びの言葉を述べると、その背に向けて深々と頭を下げて言った。

「御武運を、お嬢様。……出過ぎた言葉かもしれませんが、彼へのアフターフォローはお忘れなきよう」

「そうね。いざとなつたら、土下座でもなんでもするわ。」

……後のことはお願いね」

「かしこまりました」

見送る従者に楯無は主として命を下す。
その命を従者は忠実に受け取った。

(そもそも、宗一郎さんが武人として、私がIS操縦者として鍛えた彼だもの。

そう安々とやられることはないわ)

そう心の内で呟きながら楯無は悠然と廊下を歩く。

だが、その眼光はさながら猛禽のごとき鋭さを帯びていた。

(覚悟なさい、亡国機業。この学園で、皆が楽しむ為の学園祭で狼藉を働いた罪、きつちり贖ってもらおう)

廊下を歩きながら楯無は静かに闘志を高め、凝縮していく。

(虚ちゃんは武運をって言ってくれた。でも、そうね。今から私が行くのは戦いじゃない。そう、これは)

「お仕置きよ」

そして時は戻る。

まるでそこだけ台風が吹き荒れたかのようにあちこちが破壊されたロッカールーム。

今、そこには三人の人間が居た。

一人は織斑一夏。ISを奪われ、ISを纏った相手に絶体絶命の状況下にあつた彼は今、その表情に余裕を取り戻していた。

一人は更識楯無。専用機『ミステリアス・レイディ霧纏の淑女』を纏い、悠然と佇むその姿には余裕すら感じられる。

そして亡国機業のオータム。

先程まで絶対的優位に立っていた彼女は、突然の乱入者に対して警戒する視線を向けていた。

「てめえ、何者だ？」

先程までの興奮を収め、慎重さを感じさせる声音で楯無に問い掛けるオータム。

突然の乱入者。その存在にオータムは明確な警戒心を抱いていた。

一夏
ターゲットが一人になるだろうポイントとタイミングを見計らっていた彼女は、このロッカールームをポイントと絞り、事前の準備を行っていた。

周囲に人が居ないことを確認し、さらにロッカールームのロックは全て閉じた。

だが、目の前の少女は乱入をしてきた。

さらに、明らかな鉄火場を目の当たりにしながらも、その態度には微塵の揺らぎも見られず、明らかに場慣れしていることを感じさせる。

学園に潜入するにあたり、彼女は学園の要注意人物を全てチェックしていた。

ブリュンヒルデ
織斑千冬を筆頭に、専用機を持つ各国の代表候補生。

リストのチェックに漏れはなかった。だが、目の前の少女は自分が知らない人物。

引き出した学園のデータに載っていない。はつきり言って異常である。

目の前の少女が纏うISは明らかな専用機。それもおそらくは第三世代型。学園のデータに載っていないということはありえない。

データを消去したか？ならばますますありえない。

だが、仮にできているとすれば、それはまさしく諜報的な技術によるもの。

或いは自分と同じような世界を生きる人間かとあたりをつけて、オータムは学園への潜入以降最大限の警戒を払う。

「もう一度聞く。何者だ。」

いや、どうやってここに入ってきた？」

問い掛けるオータム。

問われた楯無はと言うと、その顔に微笑を浮かべながら答える。

「何者だ、と聞かれたらこう答えましょう。」

IS学園生徒会長、更識楯無。

そしてどうやって入ったかと言えば、素直に入口からよ。ロツクをかけたみたいだけど、学園の長たるこの私には無意味ね」

悠々と答える楯無にオータムは小さく舌打ちをする。

そしてすぐさま行動を起こした。

「まあいい。

見られたからにや…死にやがれ！」

そう吠えてオータムはアラクネの装甲脚を、全て楯無に向けて突き出す。

頭部、頸部、胸部に一本ずつ。そして残る五本を無差別に。

いかにISのシールドがあろうとも、まともに受ければ軽くない損傷を受けるだろう刺突を前に、楯無は依然余裕の表情を保ったまま佇む。

そして、その全身をアラクネの装甲脚が貫いた。

あまりに呆気ない結末。そのことにオータムは僅かに呆けるが、すぐに笑いに変わる。

「はっ！大したことねえじゃねえか！

ガキが粹がるからこうなっ　なに？」

だが、オータムの笑いは途中で途切れる。

貫かれた楯無の体。だが、そこから一滴の血も流れないこと、その違和感にオータムは気付いた。

「フフツ」

全身を貫かれたままの楯無が薄く微笑む。

それは断じて、敵の攻撃に重傷を負った人間の浮かべる笑みではなかった。

むしろ、強者の余裕すら見て取ることができる。

一瞬、楯無の体に波が走ったように見える。

直後、楯無の体から色という色が失われていき、そこには装甲脚に貫かれた青い人型が残るのみとなった。

「…っ！そうか、水かぁ！！」

奇っ怪なからくりの正体を見破ったオータムが吠える。

「いかにも。この水を操る力こそ私のIS、『霧纏の淑女』の能力」

その声はオータムの背後から聞こえた。

すぐさま振り向くと同時に、四本の装甲脚を薙ぎ払うように振るう。

だが振るわれた装甲脚は、振り向いた先に悠然と立つ楯無の手に握られた大型ランスによってあっさりと受け止められた。

四本の装甲脚を同時に受け止める。その事実にはオータムは強く齒噛みする。

ISの膂力は基本的に機体のパワーアシストと搭乗者本人の膂力が関係することで決まるが、実の所、機体間でのパワーアシストの度合いというものはそこまで大きな開きがあるものではない。

では、何が決め手になるのか。

それは搭乗者本人の膂力に他ならない。装甲脚四本をランス一本で軽々と受け止める。それは楯無が、一見すると同年代の少女と変わらない細腕の中に、それだけの力を秘めている証だった。

ランスを持つ楯無の元に、人型を解いた水が戻る。

直感的に下がるべきと判断したオータムは、後退すると同時に装甲脚全てを射撃モードに変更。

離れた位置から楯無を撃ち抜くことに決めた。

「ガキがつ！これでも喰らいやがれ！」

その言葉と共に計八門の銃口から一斉に弾丸が放たれる。だが、それが楯無に届くことはなかった。

「行きなさい」

ただ静かに、そして優雅に腕を振ると同時に楯無は命じた。

それだけで、主の命を受けた忠実な水は動く。

楯無の全面に水で構成されたヴェールを展開。オータムの放った射撃を全て無効化していた。

「へえ……」

やや離れた所で楯無とオータムの攻防を見ていた一夏は、興味深そうな表情で楯無のミスティアス・レイディを見ていた。

学園に入学してから半年近く、ISも色々と見てきたが、楯無のISは特に変わった外見をしていた。

まず装甲。

当然のように腕部と脚部の装甲はあるが、それ以外の装甲は殆ど無いと言ってもいい。

高機動格闘戦闘をコンセプトにしている白式も、装甲は打鉄やラフアール、ラウラのレーゲンなどに比べれば少ない方だが、その白式よりも少ないように見える。

腰部にあるスカート状の装甲も、普通なら足の長さ並にあってもおかしくはないが、せいぜい大腿部までくらいしかない。

あるいはほとんど生身に見えないことも無いデザイン。

他の機体と比べれば一見酷く脆弱そうに見えるが、楯無の機体は他の機体と大きく異なる特徴がある。

それは、まるでヴェールのように楯無の体の各部を覆う、波打つ水である。

それが自由自在に動いて主の鎧に、時に盾となる。

そして今、楯無は手にしたランスに高速回転させた水を纏わせて、強力な矛へと変えている。

そして何よりも印象的なパーツ。

それは非固定浮遊武装のように楯無のすぐ側に浮かぶ、二つの透き通るような青さを持つクリスタルだった。

一夏はその名を知らないが、それこそがアクアクリスタル。水を生み出す楯無のISの要である。

まるで澄んだ泉をそのままクリスタルにしたかのように、アクアクリスタルは波打つような波紋を浮かべている。それがクリスタルを通った光によって影として室内に映し出され、そこが今戦場となっているにも関わらず、どこか幻想的な雰囲気を抱かせていた。

「会長！！」

だが、一夏は楯無に声をかける。

最初こそ余裕で戦闘を開始した楯無。だが、今の彼女はどこか押されて見えた。

楯無の武装が手にするランスだけと判断したオータムは、近距離の格闘戦において数で押す戦法に切り替えていた。

両手にはカタール。八本の装甲脚は半分を格闘形態、半分を射撃形態にする。

そして、まさしく怒涛と呼ぶべき連続攻撃を開始した。

猛烈な勢いで繰り出される斬撃、刺突、射撃。生半可な者であればあっという間に飲まれるだろう攻撃の波を、楯無はランスと水のヴェールを駆使して巧に捌く。

だが、それも完全では無かった。

制空圏まで展開しての楯無の捌きであるが、合わせて十に及ぶ個人

が同時に放つ攻撃としては常識の埒外にある数の攻撃に、楯無の制空圏は僅かに押し込まれ、少しずつではあるが飛散する水という形で楯無の守りを削っていた。

状況はジリ貧。

このままでは守りを削り切られてしまつたろう状況に、一夏も声を上げずには居られなかった。

「会長！！」

僅かに荒さが含まれた呼びかけ。

このままでは遠からず守りは失われる。そのことの指摘を含めて、一夏は声をかけた。

だが、楯無の返答は一夏の予想外のものだった。

「大丈夫よ、一夏君。私は大丈夫。まあ、見ていなさいな。

そして君は祈って。自分の為すべきことを。その成就を」

「なに？」

戦闘中にも関わらず余裕を失わない言葉。

あまつさえ一夏にほかすような指示を出した楯無に、一夏の眉がひそめられる。

だが、しばらくするとひそめられた眉が元に戻った。

「了解」

それだけ。

どこか納得したように言うと、一夏はそれきり何も言わなかった。

「てめえ！そいつはただの水じゃねえな！」

攻防の最中にオータムが吠える。

操縦者の意思に従うかのように変幻自在に動き、さらに突き抜こうとしても不可思議な重さでそれを阻む水。明らかに普通の物ではないことが分かる。

「あら、気付いた？」

この水にはね、ナノマシンが含まれているの。それがISのエネルギーを伝達することで動いたり、守ったりしてるのよ」

「ケツ！そうかよ！」

けどよお！その水も随分削れちまったなあ！」

明かされてみれば特にどうというものでも無い仕掛け。オータムは更に攻撃を続ける。

だが、攻撃を続けながらもオータムは思案していた。

突如現れたIS学園の生徒会長。

どうにも掴めないというのがオータムの印象だった。

いや、掴めないのはこの状況もそうだ。

ロックを解除して現れたことはもうどうでもいい。

だが、曲がりなりにも学園の生徒会長を名乗る人間が現れたのだ。だというのに、交戦を開始してから状況に目立った変化は無い。

本来ならば増援の一つや二つ、来ていてもおかしくはない。

だが、そうした存在が来る気配は一切無い。

そして、増援も無く押されている状況にも関わらず、余裕の表情を崩さない目の前の相手。

痩せ我慢でもなんでもなく、本当に余裕だと言うその表情がどうにも解せない。

IS学園は海上の人口島という立地上、限られた敷地を有効利用するために地下も施設に利用されている。

このロッカールームもそうした地下の設備の一つだが、地下という性質上ゆえか、どうにも蒸し暑さを感じる。

それがオータムを苛立たせると同時に、思考の冷静さを奪っていた。

「クソツタレがあー!!」

沸き上がる苛立ちを振るうカタルの重さという形で楯無にたたき付けるオータム。

度重なる猛攻、一層激しさと重さを増したソレに楯無の体勢が徐々に崩れていく。

そして、遂にオータムの一撃が楯無の体を大きく弾き飛ばした。

「オラアツ!!!」

同時にワイヤーネットを射出するオータム。

一夏の体を捕らたネットが広がり、今度は楯無の体を拘束することに成功する。

「あーらら。

これは困ったわねえ」

だが、捕らえられてもなお余裕を崩さない楯無。そんな楯無にオータムは鼻で笑いながら言った。

「ケケツ！強がりもそこまでだ！

丁度いい。てめえをここで殺して、そのISも頂こうとするか。
剥離剤リムバールはそのガキに使っちゃまったからなあ！」

言って、オータムは装甲脚の一本を射撃形態で楯無に向ける。

狙うは頭部。

当たれば致死は免れない。

「ねえ、不快指数って知ってる？」

「あ？」

唐突にそう言った楯無。

意味が分からないという表情をするオータムだが、構うことなく楯無は続ける。

「知つての通り不快指数つていうのは、その場に居る人間がどれだけ不快感を感じるかを示す数値なの。」

そしてそれを決める大きな要因の一つは湿度なんだけど、ねえ。」

この部屋、随分と蒸し暑いとは思わない？」

「何を言つて　　っ！！」

何か気付いたのか、唐突に顔を強張らせるオータム。それを見て楯無は満面の笑みを浮かべた。

そも、いかに地下言えども空調はしっかりと効いている。特に換気などは当たり前である。

そんな室内で、急速に湿度が上がることはおかしいのだ。

そしてその原因は明白。

一連の攻防で飛散した、ナノマシン入りのミスティアス・レイディの水に他ならない。

言わば、今のオータムはミスティアス・レイディの水に全身を包まれているに等しい状況なのだ。

「どうやら、獲物を捕らえたと思つた蜘蛛は、哀れなことに散布された殺虫剤の中に突っ込んだみたいだな」

声のした方を振り向くオータム。

視線の先には、心底愉快で仕方ないという表情の一夏が、口の端をニヤリと歪めながらオータムを笑っていた。

そして、それは致命的な隙だった。

よ！」

爆発。

全方位から迫る衝撃と熱波に、アラクネはそのシールドを、オータムは己が身を削られる。

その口から上がった叫びは爆発にかき消され、一夏と楯無の耳に届くことは無かった。

爆発によって生じた水蒸気の煙が晴れる。その先には、装甲の各所が破損し、自身も傷つき荒い息を吐くオータムの姿があった。

そんな彼女に、楯無は酷薄とも取れる声音で言った。

「沈みなさい、私の水によって。あなたには　水底が似合いよ？」

「こ、の、ガキがああ………！！！」

だが、なおもオータムは抗おうとする。大技の使用により戦闘の要たる水は現在気化しているため、当分楯無に戦う力はなかった。

だが、依然楯無の表情に焦りは無い。なぜならば、次の手は既に準備が為されているからだ。

「さあ、バトンタッチよ。行けるわね、一夏君？」

「ああ、問題無い」

楯無の言葉に一夏は静かに答える。そしてゆっくりと、一夏は右手を自らの前に突き出した。

「てめえ……なにを……！」

息を荒く吐きながらも、オータムは警戒を解かないまま一夏を睨む。直後、その手に握られていた白式のコアが強く輝いた。

「来い」

静かに一夏は告げる。相手は己が剣たる白式。

それは祈りでも、頼みでも、呼びかけでもない。

一切の拒絶を許さない、断固たる命令だった。

かつて、ISの授業において一夏の副担任である真耶は言った。『

ISとはパートナーだ』。

多くの搭乗者が、専用機の担い手が、その認識の下にISを動かしている。

だが、何事にも例外が存在する。一夏はまさしくソレであった。

一夏にとってISとは、白式とはどこまで行っても道具である。ただ、自らに無言で従い敵を切る助けである。

パートナーたること。それはいわばISと対等の関係であり、同時に自身とISが確固とした別の存在であるということに他ならない。

それを一夏は認めるつもりは無かった。

対等等など認めない。常に、主の一夏と仕える剣たる白式、一夏が上となる関係こそが一夏の望む白式との繋がりである。

そして、一夏は上に立つ存在として下部たる白式を、その全てを自らと一体とすることを目的の一つにしている。

なぜならば、己と剣を一つにすることこそが、武器使いの目指す領域の一つだからだ。

だから一夏は白式を呼んだ。命令として。

例えその身から離れていようと、主の呼びかけに対してすぐさま馳

せ参じること。それが一夏が白式に与えた命令だった。

一夏には確信があった。白式が自らの下に戻ることを。なぜならば、一夏は白式の主であり、白式は一夏の臣下だからだ。

「来い、白式いいいいいいいい！！！！！！！！」

コアが輝く。

主の命を受けた白式はその身を量子へと変換。主である一夏の下へと集い、その真の姿を形作る。

一夏の全身に纏われていく白の装甲。

遠隔での起動を果たした白式が、完全な姿で一夏の下に戻った。

「な…なあ…、ISの…遠隔起動だとお！？」

有り得ないものを見るような目でオータムが驚愕を露わにする。その視線の先、一夏の全身に纏われた装甲が一斉に開いていった。

(これは…！)

楯無はそれがなんなのか知っている。

以前閲覧した白式のデータにあった白式の形態の一つ、『白経津』。常識外れなレベルの機体とのシンクロを可能とする代わりに、使用後は搭乗者にかなりの身体的負荷のかかる切り札の一つ。

それを早々に発動することから、楯無は一夏の本気を悟った。

だが、一夏は動き出さなかった。
それどころか、白経津が発動する時に生じる装甲の割れ目を走る翡翠色の燐光すら無かった。

（一夏君…？）

既に拘束は解除されていたが、思わず動きを止める楯無。
僅かに生まれた空白。その瞬間を、オータムは見逃さなかった。

「貰ったあああああ！！！」

全力で一夏目掛けて突撃するオータム。楯無がすぐに気付くが、間に合わない。

白式を捕らえようと、オータムの手が一夏に迫る。

そして、彼我の距離が限界まで縮まった瞬間

ゴガンツッ！！

一瞬の速さで一夏がオータムを殴り飛ばしていた。
殴られたオータムは呆然とした表情のまま吹っ飛ばされ、背中から壁にたたき付けられる。

「……………」

「一夏…くん？」

だが、なおも無言のままの一夏。
さすがに楯無も訝しむ。

そして気付いた。白経津の発動によってフルフェイスの装甲に覆われた一夏の顔、その目の異変に。

本来なら翡翠色に輝く双眸があるはずのそこは、アイセンサーのよ
うな一筋のラインが横に走り、血のように赤い真紅の輝きを放って
いた。

そのことに楯無が気付いた直後、翡翠の輝きを発さずにいた装甲の
隙間から、霧のような漆黒が吹き出した。

「なっ！」

目の前で起きた一夏の、白式の異変に思わず後ずさる楯無。

そして、純白の装甲を覆うような黒の霧を纏ったまま、一夏は上を
仰ぎ

「……………」

声無き、しかし心に直接響かせるような雄叫びを放った。

第六十四話（後書き）

ここ数回に比べると短いですが、割とキリの良い長さになったので投稿しました。

今回の話、カッコイイ楯無先輩をモットーに書いてみました。いかがでしょうか？

まあどつかで聞いたような言い回しもあるような気もしますが、そのあたりはどうか寛大なお心でご容赦頂ければと思います。

前回、一夏がオータムの動きを読んだアレ。

お気づきの方が大半と思いますが、流水制 圏です。

が、しかし。これに関しては非常に重要なことがあります。

あの技、三つの段階がありますが、一夏にできるのは第一段階の動きを読むまでです。

なぜなら、あの技は活人だからこそ真価を発揮するのであって、この作品の一夏は…まああんな感じなので、ええ。完全には使えないと。

そう言い訳みたいなのをしてみたり……

さて、次回こそ一夏大暴れです。

軽くばらすと、実は白経津の発展系みたいな感じなのです。

凄く物騒な発展ですが。

あと、外観に関してはモデルもあったり。

後ほど細かい解説もやりたいと思います。

では皆様、また次回に。

…なんか言い訳がましいような今回のあとがき…

第六十五話（前書き）

色々ぶっ飛んでる本作のICHIKAですが、とうとう今回やらかしてしまいました。

例えるなら、フロントルがダグザ。

分かる方は分かるかと。

つーかマジで今回は反応が怖い。

場合によっては一度取り下げて、ソフトに改訂したのを上げ直すかもです…

第六十五話

side 一夏

「来い」

俺は白式を呼ぶ。

いや、呼びかけるといっても、頼むといつのも語弊があるだろう。俺がしたのは命令。そう、拒否を絶対に許さない断固たる命令だ。

前に山田先生は言った。

ISと搭乗者はパートナーのようなものだ。けど、俺はそれに首を傾げた。

パートナーということは、いわば対等な関係。

即ち、搭乗者＝ISという図式になるのではないだろうか？

成るほど、確かに分からないでもない。

ISコアに意識があるなどと言われている以上、そうした見方もありだろう。別段否定しやしない。

ところがどっこい、しかしのかかしだ。

生憎俺はそんな見方をしてやれない。これがどうにも。

どこまで行こうが、俺にとって白式は常に使役する道具でしかないのだ、これが。

そりゃ、使つてれば愛着も湧くし、大事にしようと思う。まあ、ただの道具以上には思えてくるわな。

武器を使う者の心得の一つには『己と武器を一つにする』というものがあ、俺もそれに倣って例えそれが刀だろうがナイフだろうが

ISだろうが、常に自己の延長として使えるよう心がけてもいる。それでもだ。どれだけ大切に思っても、根本的な所で道具であるという認識は変わらない。

少なくとも俺にとつては、俺>ISというのが不変の認識である。どれだけ俺に近い存在となるうと決して対等になることはなく、常に俺の方が上位存在である。

それが俺の考えるISとの関係だ。

だから俺は命令をした。『戻れ』と。

ああ、さすがにいきなりISを引っぺがされた時は驚いたよ。

確か『剥離剤』^{リムバー}とかって言ってたか。下品に笑いながら使いやがって。

あんなもんを使って喜ぶか、キチガイめ。

だがまあいい。離れたなら、呼び戻すだけなのだ。

そのためのチャンスは会長が作った。これが普段ならば、会長の戦闘方法についてアレコレ考えるところだが、今はこっちに集中する。

呼びかけは命令として。白式には絶対の服従を俺は求める。

さあ、さっさと帰ってこい、白式。お前は俺だけの剣だ。他の誰の手にも渡らせやしない。でなけりやすぐさまスクラップにしてやる。

それが嫌ならば

「来い、白式いいいいいい！……！」

帰ってこい！！！！

蜘蛛女、オータムの手握られた白式のコアが輝く。

輝いたコアは数多の量子へと変換され、俺の下へと集まっていく。

おかえり、よく戻ってきた。

さて、帰還早々だけど、ドンパチと行くぞ。

完全展開された白式の装甲が開いていく。

第二形態移行の折に獲得した能力、『白経津』。

正直、詳しい仕組みとかは全っ然分かっていないが、大方展開装甲やらなにやらが関わってるのだろう。

だが、細かいことは気にしない。切り札として重宝しているのは確かなのだから。

白式の装甲が開き終わるまでの間、俺はオータムを睨みつける。

あの女だけは断じて許すわけにはいかない。会長がこの場に居るが、知ったことか。

やつは今、この場で引導をくれてやる。俺から剣白式を奪っただけでも腹立たしいが、そもそも俺を誘拐した奴らの仲間という時点で一万回首を撥ねても足りやしない。

あの時に感じた怒り、屈辱、憎しみは、例えあの時にその場に居た

人間を始末したからと言って消えることは無い。
或いは一生、俺の心に残り続ける。だから、俺は復讐をする。

そう。こいつは復讐だ。

正義のためにテロリストを倒すとかそんな綺麗なもんじゃない。ただ、私怨から来る悪行でしかない。構うもんか。重要なのはただ一つ。あの時の借りをキッチリ返すこと。

腹の奥から全身に殺意が広がっていくのを感じる。だが、感情を昂らせて激したりはしない。師匠の教えに従い、ひたすらに心を冷たく静める。

全身を満たしていく殺意は徹底的に研ぎ上げ、どこまでも鋭利な刃と変える。

そして前を改めてみる。

展開と白経津の発動を同時に行ったことで、目の前のモニターにはいくつかのデータが現れては消えを繰り返す。

展開を開始してからここまでコンマ数秒。随分と長く感じた。

さあ、準備は整った。いざ

(え?)

不意に、目の前に現れていた文字が全て消えた。

本来なら常にモニター端に表示されるはずの、外気温や高度などの周辺環境のデータすらも無い。

(なにが...)

まさか、強引に引きはがされたことで不調でも生じたか？

いや、違う。また別の文字列が現れた。

『戦闘経験値一定量到達

搭乗者感情数値クリア

最適ENバイパス設定完了

高度同調第二段階発動』

一気に目の前に現れていく文字列。

既視感のあるソレに俺は、初めて白経津を発動した時を思い出す。そして目の前に現れる『確認』の二文字。

何気なく思考伝達で押そうとした瞬間、俺は脊髄を電撃が走り抜けるような感覚に襲われた。

現れた文字から察するに、白経津の別バージョンのようなものだと
は思う。

だというのに、発動する前から何かが違うというのが分かった。

有り体に言えばヤバイ。

何と言うか、物語に出てくるような呪いの武器というのか？
無茶苦茶強いけど、かなりヤバイ代物という感じ。

ああ、思わず躊躇した。

だが、どうにも俺という人間はつくづくどこにかしてるらしい。
確かにヤバイと感じて、迂闊に手を出すのはマズイと思った。

このまま発動を拒否すれば、多分穩便に事は運ぶ。

けど、同時に物凄く使ってみたいという思いがあるのも確かだ。ぶっちゃけ、新技だとか新機能だとかで弱くなることなんざほとんど無い。

むしろその逆。だから興味深い。ヤバイと感じ取れるものを使えばどうなるのか。そこから俺が得られる強さはいかほどか。

…よし決めた。使っちゃまえ。どうなるうと知ったことか。

これで強くなれるって言うなら、万事オーケーだ。

明確な意志で以って俺は発動を認証する。

直後、俺は思考の内にあつた殺意が爆発的に膨れ上がるのを感じると同時に、目の前が赤く染まった。

s i d e o u t

「があっ…!」

殴り飛ばされたオータムはそのまま背後の壁へと叩きつけられる。

その直後、一夏は動き出していた。

踏み込みによる跳躍と、ショート・イグニッションによる短距離間の急加速によって一瞬でオータムへと接近。追撃となる拳を連続で打ち込む。

「クソがあっ!!」

だが、対するオータムもそのままやられるというわけではなく、独立P.I.Cで制御された装甲脚を同時に複数動かして防御と反撃を行った。

しかし

「んなあ!？」

オータムの目が驚愕に見開かれる。

一夏目掛けて振るわれた装甲脚、その全てを一夏はすり抜けるように回避していた。

それは先ほど、白式を取り返される前に一夏が行った回避だった。だが、今回は勝手が違う。I.Sを纏っている以上、攻撃の当たる面積は増えている。だというのに、先ほどと変わらない精密な紙一重の回避を一夏はやってのけた。

(ど、どうなってやがる!?なんで私の攻撃がすり抜ける!!)

いや、そもそも! I.Sの遠隔起動だ!? しかもなんだ今のコイツはよおおお!!(!!)

理解の範疇を超えた事態の連続に、オータムは思考が乱れる。

それに呼応してか、装甲脚の制御にも粗が見えてくる。

それを隙と見たかのように、一夏の顔を覆う装甲、その眼の部分に

現行最強クラスの攻撃力を持ったブレードの、さらに攻撃力を引き上げた斬撃。

防御特化で作られているような、防御用装備でも無ければただ切り裂かれるだけの凶刃に、楯無の攻撃で少なくとも損傷を負ったアラクネの装甲脚が抗う術は無かった。

まるでバターのようになり裂かれる六本の装甲脚。

自身のISの主武装が完全に失われる様を、オータムは信じられな
いと言った様子で見ている。

蒼炎を振り抜いた一夏はそのまま蒼炎を格納。

そして、ギリりと音がするほどに強く握りこまれた拳を、再度オー
タム目掛けて放った。

「これは…！」

突然の状況に困惑する。それは楯無も同じであった。

突然、開いた装甲から漆黒の霧とも見える燐光を噴きだした白式。

否、輝きを持たないそれは燐光とは呼べない。ただの黒と呼ぶべき
だろう。

そして、直接声を上げたわけでもないが、まるで雄叫びをあげるよ
うに上を仰いだ一夏は、凄まじいスピードでオータムに襲いかかっ
ていた。

まるで激流のような猛攻。その姿に、楯無は見覚えがあった。

以前データとして閲覧した一夏の試合記録。その一番目、クラス代表決定戦におけるセシリアとの試合。

あの時、白式が一次移行を終えた直後、一夏は我を忘れたかのような勢いでセシリア目掛けて襲いかかっていた。

その時に、今の一夏はとても酷似していた。

（けど、あれは何か違う）

オータムへと攻撃を加える一夏の姿に、楯無は違和感を抱く。動きがあまりにも洗練されているのだ。セシリアとの試合では、まるで野獣のような、激しさを持ちながらも多くの粗があった。

だが、今の一夏は違う。

明らかに我を失っているようでありながら、その動きは一流の武術家のように洗練された、楯無ですら唸りたくなるほどの見事な動きだった。

そして何より、放つ気迫が違っていた。

自分に向けられているわけでもないのに、はつきりと感じる程の強い殺気。

だが、その殺気に淀みは感じられず、どこか清澄さすら感じられるほどの純粹な色を感じた。

（それにあの動き、紛れもなく一夏くんのソレに何かが混じっている。

それも異物としてではなく、一夏君の動きの助けになるような、そんなもの…）

うつすらと覚えのある感覚を、楯無は何とかして記憶から引きずり

だそうとする。

そして、その答えは意外なほど早くに見つかった。

（そうよ！あれは宗一郎さんの動き！いいえ！一夏くんの色に染まった宗一郎さんの技！

…そういうこと。今の一夏君は確実に正気を失った状態。けどそれは、力任せに暴れるというものではなくて、徹底的に磨き上げた技で反射的に戦っているようなもの。

多分、今この時の一夏くんの動きは、宗一郎さんが鍛え上げた一夏くんの真価が発揮された動き！）

ようやく合点が行った楯無は納得するように頷く。

正気を失うほどに純粹に研ぎあげられた闘志は、その殺気は、不要な思考という不純物を一夏から取り除き、その身に叩きこまれた技を十全に発揮させている。

つまり、今の一夏はまさしくその全てを開放した状態にあるということだ。

（けど、一夏君。ちゃんと戻ってきてね）

一夏の戦いを見つめる楯無。未だ万全の状態で無い彼女は、ただ見ているだけでしかない自分に歯噛みしつつも、そう一人思った。

連続で打ち込まれる拳。それを防ぐと同時に装甲脚で攻撃をしかけるオータムだったが、その攻撃の全てを、一夏はすり抜けるように回避していた。

（あれは…！）

すり抜けるような紙一重の回避、それは楯無も覚えがあった。

もう何年も前、更識の当主としての訓練の一環で、世界最高峰の武術家であり警察幹部を父に持ったため暗部にも名が知られていた宗一郎、今の一夏の師の下で格闘を学んでいた時。

組み手の中で宗一郎が行った動きと全く一緒であった。

どれだけ攻撃をしようとも、すりぬけるように回避され、そして逆に自分が一方的に攻撃を受ける。

一体いかなる技法なのかと幾度となく尋ねたが、聞くたびに口の端を吊り上げるようなニヤリとした笑いで流されたのを覚えている。

（まさか、一夏君は習っていた？）

いえ、でもそれだったら今までの内に使っているはず。まさか、この戦いの中で習得した！？）

思いついた可能性に、知らず背に僅かな震えが走る楯無。

その視線の先では、まるで流れるかのような動きでアラクネから全ての装甲脚を奪い去った一夏の姿があった。

「！！！！」

雄叫びが室内に響く。

今、オータムはその総身を一夏の放つ打撃の前に晒されていた。

乱れ打つような拳による乱打。その中に時折膝蹴りや肘打ちを織り

交ぜてくる。

肘打ちは打ち込みと同時に一夏の体をオータムの懐へと侵入させ、さらに至近距離からオータムの顎目掛けて、下方からの回転肘打ちへと繋げる。

そしてのけぞったオータムの胴の中心に、ひと際強力な、床に日々を走らせる程の震脚と共に正拳突きが打ち込まれる。

「ガツハツ！あああああ！！ナメンなああああ！！！」

肺の中の空気を吐き出し、後方へ吹き飛ばされながらもオータムはワイヤーネットを一夏目掛けて投げる。

すぐさま回避行動を取ろうとする一夏だったが、正拳突きは放った直後に僅かな硬直を生じる。

それにより一瞬回避が遅れ、一夏は左腕をネットに絡めとられ、背後のロッカーに左腕をネットによって張り付けられた。

一夏の動きを止めたことにオータムの顔に笑いが浮かぶ。だが、それも一瞬だった。

破砕音が響く。

一夏の拳が腕ごとロッカーに縫い止められた直後、音を立ててロッカーの一夏の拳が接している部分が爆散する。

オータムは何事が理解しえなかったが、楯無は何が起きたかを一目で見抜いた。

寸勁により、拳を密着させたまま全力の一撃を木製ロッカーにたたき付けたのだ。

一夏自身の寸勁の練度は決して高くはない。

せいぜいが見えるようになって、それなりに技と言えるようになって

た程度の仕上がりである。

仮に生身で同様のことをしていたら、おそらくはロッカーを砕くの
に数発は要しただろう。

だが、ISによって著しいほどに増幅された威力は、その練度の低
さを補って余りあるほどであった。

あっさりとは拘束が解除されたことに、オータムが呆然とした表情を
浮かべる。

そしてそれは、今の一夏を前にしては決定的な隙と呼べた。

再び発動するショート・イグニッション。

オータムの懐に入った一夏は、一気に連続攻撃を浴びせる。

胸部に水平に打ち込む肘打ち。さらに繋げるようにして、下方から
オータムの顎へ肘の打ち上げを放ち、そのまま首へ回転肘打ちを放
つ。

回転の際に踏み込んだ足を基点に跳躍。今度は上から肘をたたき付
けるように振り下ろす。

鉄槌のごとき一撃を頭にモロに受けたオータムは、前面に大きく姿
勢を崩す。

着地した一夏は、正拳突きをオータムの胸に叩き込むと、そのまま
回し蹴りを食らわせる。

そして回し蹴りの勢いを利用して、今度は逆の足で縦に蹴り落とし
を放った。

「があっ……！」

度重なる殴打の嵐に、さしものオータムも荒い息を吐いて体をふら

つかせる。

ISのシールドが体への直接の損傷を防いでいるとは言え、一撃一撃ごとに体に襲い掛かる金属バットでたたき付けられるような衝撃は、確実にその体力と精神を削っていた。

ふと、打撃が止んだ。

(今だ…！)

それを好機と見る。

オータムの胸中では怒り、屈辱、憎悪、おおよそ負の感情のありとあらゆるが嵐のごとく猛っていたが、だからと言って事の趨勢や機を見誤る程、愚かでもなかった。

心底腹立たしいが、攻撃が止んだ今こそが離脱の好機。

そう思って下に下がっていた視線を上げた直後、その質量ゆえに強大な威圧を放つ白式の膝部装甲が、オータムの視界に飛び込んだ。

そして、体を横倒しにすると同時に、回転で勢いをつけた必殺の膝蹴りが、オータムの胸部にたたき付けられた。

古式ムエタイの一手として伝えられる、さながら地上最重量を誇る象が全力で踏み抜くかのような一撃。

生身同士でも直撃すれば、一撃で心の臓を止めかねない必殺の一撃。ISにより馬鹿げたレベルに威力を引き上げられたソレを受けてなお命があるのは、さすがはISの搭乗者保護機能と言つべきだろう。

だが、オータムの体はアラクネごと勢いよく吹き飛ばされ、壁に穴を空けると同時に、その向こうの廊下へと転がっていく。

シールドは未だ残っているが、実質的に今のアラクネに戦う術も、あるにしても勝機自体が存在していなかった。

「一夏くん！捕縛を！」

反射的に楯無が声を張り上げる。

今の一夏に声が届くかは楯無にも確証が持てなかった。

だが、それでも声を上げずにはいられなかった。

そして一夏が動くよりも早く、オータムの声が聞こえた。

「次はっ……必ず殺すっ……」

バシユッ

空気が抜けるような音がする。

アラクネの装甲を完全にパージしたオータムが全力で廊下の出口の方向へと駆けていた。

すぐさま追いかけてよとする一夏。だが、そこへ楯無が待ったをかけた。

「っ！ダメ一夏くん！離れてっ！」

一夏とオータムを結ぶ線上、放置されたアラクネの装甲が強い発光をしていた。

廊下へと吹き飛ばされたオータムは、迷うことなく行動を実行に移していた。
戦闘の続行が不可能と判断し、速やかな退却が必要とされている最中、一夏らと距離が離れ、なおかつ出口に繋がる廊下に出れたのは僥倖。

すぐさまアラクネの装甲を捨て去ると同時に、残された全エネルギーを装甲へ過剰供給するように設定。

臨界へ達したエネルギーの爆発で以って目くらましとすることにした。

そしてその策が上手く行ったことを確信する。

背後から一夏が追い掛けてくるが、それよりも早く爆発が起きることは確かだった。

（ケケツ！そのまま爆発に巻き込まれやがれ！）

今の一夏が我を失った状態なのは明らか。

ゆえに、容易く爆発に巻き込まれることを想像して、オータムは邪悪な笑いを顔に浮かべた。

そして装甲の輝きが臨界に達し、爆発する直前に一夏と装甲の距離が縮まった瞬間、始めから何も無かったかのようにアラクネの装甲から光が消えた。

（なっ！？）

オータムの目が驚愕に見開かれる。
視線の先には、手にしたブレード、蒼炎を装甲に振り下ろし終えた
一夏の姿があった。

楯無はこの成り行きを全て見ていた。

高密度のエネルギーがアラクネの装甲に集束、爆発しようとした瞬間のことだ。

止まるどころか、更にスピードを上げて突き進んだ一夏は、その右手に蒼炎を展開。

蒼炎の刃が純白の光に包まれると同時に、蒼炎を装甲に向けて振るった。

そして、純白に輝く蒼炎の刃が装甲に触れた瞬間、アラクネの装甲に集束していたエネルギーの全てが消失していた。

(あれは…零落白夜?)

一夏の、白式の最大の特徴と言える単一仕様能力『零落白夜』。
あらゆるエネルギーを無効化するソレならば、先ほどの現象も納得
が

(いいえ違う！確かに零落白夜ならあのエネルギー体を切り裂くことはできる！)

でも、まとめてエネルギーを消滅させるなんてことは…)

楯無は確信する。一夏が振るった一撃、あれは零落白夜に間違いない。だが、何かが違う。

そう、あの白式全体が漆黒の霧に包まれていながらもなお、燦然と輝いていた白刃を見た瞬間、背筋を駆け抜けた言い知れぬ恐怖が何よりの証拠。

一撃でISのシールドを大きく削る装備は意外と多い。零落白夜を代表に、グレー・スケールや高出力レーザーなどがある。だが、先ほどの一撃はそれらが霞むほどの次元違いの印象を受けたというのが楯無の本音である。

楯無は知らない。先の一撃、それは臨海学校において一夏が福音への止めに放った一撃。

一夏自身ですら気付いていない、知る者は千冬と束しか居ない零落白夜の究極系であることに。

蒼炎を振り下ろした姿勢のまま一夏がオータムに視線を向ける。赤く染まったアイセンサーに睨みつけられたオータムは、脳内で最大級の警鐘が鳴らされるのを感じていた。

「くそっ！」

脱兎のごとくその場から駆けだす。とにかく逃げなければならない。その確信があった。だが、一夏は追撃を掛ける。その姿から感じられるのは、純然たる殺意だけだった。

「一夏くん！」

一夏が何を為そうとしているのか、それを悟った楯無は一夏を制しようとする。

だが、彼女が言い終えるよりも早く、事態を変える要因が別の方向からやってきた。

パンツッ！！

乾いた銃声が鳴り響いた。

「オータム様！逃げてください！！」

丁度一夏の後方20m程。そこにハンドガンを構えた黒のスーツに身を包んだ女性の姿があった。

（伏兵っ！？）

予想外の存在に楯無の行動が止まる。

だが、すぐに納得する。別段他の作業員が紛れ込んでいる可能性はあっても不思議じゃない。

そして現れた伏兵の服装はSPなどが着るような黒のスーツ。

常にガードを控えさせているような来賓も多いこの学園祭では決して珍しくは無い。

増援の女はハンドガンを一夏に向けて連射する。個人で携行できる火器など、ISのシールドの前では無力。

傷一つつけることも叶わない。だが、確実な足止めにはなっていた。一夏が視線を伏兵の方へ向けており、その隙にオータムは離脱をしていた。

ダンッ！

スラスターを吹かす音と共に一夏が伏兵へ向けて疾駆した。

その右手に蒼炎は既に無く、代わりにプラズマブレードの発生器が握られている。

溶接用のアセチレンバーナーのような音を立ててプラズマブレード

が展開される。

だが、その規模は通常の比では無かった。徹底し高出力で展開されたプラズマは、既にブレードという形をとどめておらず、超高温の火柱とも言うべきものになっていた。

一夏の右手が振りかざされる。その先を予測できた楯無は、今度こそ血相を変えて叫んだ。

「一夏くん！駄目えええ！！！」

だが、一夏の右手は無情に振るわれた。

楯無はその特殊な出自ゆえに人死にもそれなりに見てきた。

だが、今日の前で起きたことは、楯無の人生でも初めての光景だった。

それは既に死にあらず。消滅だった。超高温の火柱に呑み込まれた人影が、一瞬で消え去った。

骨の欠片一つ、毛先一つまみも残さずに、この世にその肉体が存在したと言う痕跡を一切残さずに消え去った。

「……………」

プラズマブレードの火が消える。そして再度、その右手に蒼炎が握られた。

一夏の目は、楯無に向いていた。

「っ！」

反射的にランスを構える。未だ武装の要たる水は完全には戻ってお

らず、レイディは不完全な状態ではあったが、そうしなければなら
ないという確信があった。

それは一瞬の出来事だった。

文字通り一瞬で一夏は楯無に迫り、蒼炎を振りかぶっていた。そし
て、そのまま固まった。

白式の装甲から溢れていた黒の霧が消える。そして装甲が閉じると
共に、白式は解除された。

エネルギー切れ。楯無が来るまでの戦闘と、先の一連の戦いの中で、
白式はそのエネルギーを完全に使い果たしていた。

ISが解除され、展開前の元の衣装姿に戻った一夏が倒れこむ。

その眼は閉じられ、意識を失っているのは明らかだった。

倒れた一夏を受け止めた楯無は、自身もISを解除すると、その場
にゆっくりと座り、その膝に一夏の頭を乗せた。

「…はあ」

そのまま楯無は大きく息を吐く。その額には、大粒の汗の玉が幾つ
も浮かんでいた。

一夏が行ったことは確かに衝撃だった。だが、なんとか平静を保つ
て受け入れ、すぐに事後の処理について思考を巡らせることができ
た。

だが、つい先ほどの一瞬、一夏が斬りかかってきた瞬間は別だった。

その兆候を見て取ったためにランスを構えた。だが、一夏が斬りか
かってきた瞬間、楯無の心に浮かんだのはある種の諦めだった。

あの瞬間、楯無は自分が斬られると思った。いかに抗おうとも、一
太刀の元に斬り伏せられる。

そう感じさせるだけ一太刀だった。

それは技が優れているとか、気迫に満ちているとかいうものではない。

そうした要素を超えた、別の次元に存在するような一太刀だった。

「さて、どうしたものかしらね…」

オータムの相手をした時の余裕を持った態度とは違い、どこか疲れ
たような声で呟く楯無。

襲撃事件の報告に加えて、先の一夏の 殺傷。

自身に舞い込むだろう仕事を考え、楯無は思わず額を押さえた。

(ひとまず、さっきの一夏くんのごことは黙っておくべきかしら…)

それは決して褒められることではない。報告すべき事柄を敢えて報
告しないというのは問題行動だからだ。

だが、だからと言って安易に報告できるほど軽い問題でもない。
いかに相手がテロリストの仲間で、学園に襲撃を掛けた実行犯の一
人とは言え、殺害という手法を取ったことは軽々しく報告はできな
い。

世界唯一の男性操縦者がテロリストを殺害。

広まるうものならば、確実に大きな騒ぎになる。そして彼自身の身
も危うくなる。

それは楯無にとって歓迎できない事態だ。

彼女はIS学園生徒会長。その最も重要な責務は、学園で暮らす生
徒全ての安寧を守ること。

それは今、楯無の膝の上で目を閉じている少年も例外ではない。

「まずは、起きるのを待ちましょう」

起きるのを待ってから、先程の戦闘などについて尋ねる。

彼自身へのアフターケアなども考えて、楯無は慎重な行動がベストだと判断した。

「それにしても、参ったわね。

対策は取ったつもりだけど、結果はこの様か……」

一夏の取った手段を全面的に肯定するつもりはない。

だが、だからといって彼を一方的に非難することもできない。

一夏の想定外の行動を御しきれなかったことや、伏兵の介入を許したことに關しては、こちらにも多少の非はある。

だが、考えてから楯無は首を横に振る。

このような責任転嫁じみた考えは今はずべきではない。

迅速な事態の收拾が第一。

そう考えてから楯無は、未だ目を閉じたままの一夏の額に手を当てたのだった。

(クソツ…クソツタレが…！)

離脱に成功し歩くオータム。

既に変装のためのスーツに身を包み、顔には怪しまれないように笑顔を貼付けていたが、その胸中ではハリケーンもかくやと言わんばかりの怒りが、激情となって吹き荒れていた。

(ちくしょう、あのガキめ！)

戦闘領域より離脱したオータムは、素早くモノレールに乗ることで学園島より退去。

駅の近くにある臨海公園に来ていた。

公園内を歩きながら、オータムは怒りの矛先を、自身に仕事のプランを提示した少女に向けていた。

上司より指示された仕事に、横から注文を付けてきた少女。

年は学園の生徒とさほど変わらない身でありながら、組織において確固とした地位を持っている少女。

常に全てを見下すような目は、同じ組織の仲間でありながら、オータムの神経を逆撫でるには十分だった。

(あのクソガキ！何が剥離剤だ！^{リムーバー})

とんだ欠陥品を押し付けやがって！)

オータムが一夏から白式を奪い取るのに使用した装置、リムーバー。どこぞの機関やらで研究開発されたとか言うその装置の使用を、少女は求めてきた。

結果はどうだ。ISは装置に対して耐性を付けたばかりか、ISの遠隔起動までも可能とした。そのまま奪えたならまだしも、ISを取り返されては敵に塩を送ったも同然の話だ。

(チクシヨウが！)

どいつもこいつも私の邪魔をしゃがって！殺す！全員皆殺しにしてやる！)

思考を物騒な色に染め上げるオータム。

その視界に、公園の水呑場が目に入った。

無言で近づいたオータムは、その水道を力一杯蹴り飛ばす。

オータムの蹴りはコンクリート製の台座を鈍く揺らす、ただそれだけに終わったことが、ますますオータムを苛立たせる。

(はぁっ)

水呑場を見たことと、先程までの緊張から急速な喉の渴きをオータムは感じる。

一先ず、帰還の前に一度喉を潤そうとしてオータムは水道の蛇口を捻る。

金属が擦れる甲高い音と共に、水道から水が勢いよく溢れる。それを飲もうと唇を近付けて、オータムは違和感に気付く。水がまるで来ない。

不信に思っただけオータムは水道を見る。

水は確かに出ていた。だが、その流れが途中で遮られていた。まるで、見えない壁に阻まれるかのように。

そして、見えない壁に止められた水は零れることなく、そのまま宙空に留まっていた。

（こいつは…！）

オータムは目の前の不可解な現象に僅かに目を見開くと、すぐさまそのからくりに思い至る。

その名は、A I C。

「動くな」

やや幼さを感じる少女の、しかし氷のように冷たい声がオータムの耳に入る。

目だけを動かして、オータムは少女を見る。否、見るまでもなく誰なのかを理解していた。

A I C、ドイツ第三世代兵装。

それを装備しているI Sは今の日本国内においてただ一つ。

シュヴァルツエア・レーゲン。

そして、その搭乗者の名は

「ドイツのラウラ・ボーデヴィツヒか…！」

「いかにも。」

初めましてだな、亡国機業。貴様らには是非会いたかった」

現れた人物にオータムは顔を強張らせる。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツ代表候補生でありながら、本国ではI S運用特殊部隊の隊長を勤める若き猛者。

その実力は、一年では最強クラス、学園全体でも十指に入ると言われる、要注意人物の一人だった。

「動くな。既に狙撃手が貴様に狙いをつけている」

「そういうこと。」

それに、少しでも動いたら、木っ端みじんだよ？」

そう、ラウラの後にオータムの背後から声を掛けたのはシャルロット。

その左手には、福音戦において初披露目となった改良型パイルバンカーがあり、オータムの背に突き付けられている。

正式に付けられた名は「クリザンテム」。

フランス語で「菊」を意味するその名は、クリーンヒット次第では一撃で相手を戦闘不能にすることも可能な装備に相応しい、まさに手向けを意味する名である。

「さて、このまま大人しく捕まって貰おうか。」

貴様らには色々聞きたいことがある。ああ、黙秘ができると思うな？
それでも尋問の心得はあるし、場合によってはそれ以上も私は辞さない」

「僕としては、一夏を襲ったって時点で、グチャグチャの挽き肉に変えてやりたいくらいだけどね」

冷徹さと怒りを隠さないままに言うラウラとシャルロットに、オータムは万事休すかと思う。

敵はIS二体。対してこちらは丸腰。

状況は絶望的である。

だが、そこで状況を変える介入があった。

『離れて！一機来ますわ！』

通信で狙撃手、セシリアからの警告が飛ぶ。

その直後、オータムを外しながらも正確にラウラとシャルロットを狙ってエネルギー弾が放たれ、すぐさま二人が回避行動を取った直後、猛スピードで青いISが割り込みを掛けてきた。

青を基調としたカラーリング。手には大型のレーザーライフル。

だが何より特徴的なのは、ISの周囲を飛ぶ六機のBT兵器のビツト。

そのISの名は

『サイレント・ゼフィルス！？』

そんな、どうして！？』

通信越しにセシリアの驚愕する声が聞こえる。

サイレント・ゼフィルス。英国製第三世代IS。

セシリアのブルー・ティアーズのデータを元に作られた、BT二号機。

本国で試験運用段階にあるはずの機体が、何故敵の手にあるのか。

疑問がセシリアの脳裏に浮かぶが、すぐさま思考を切り替える。

考えるまでもない。敵はISを強奪して使用していると言っ。

ゼフィルスもまたそうなのだろう。

ならば話は簡単だ。今この場で取り返すだけである。

「撤退だ、オータム」

「てめえ！私に指図を　　チツ、まあいい」

ゼフィルスのパイロットの言葉にオータムは激昂しかけるが、すぐに冷静に戻り、ゼフィルスと共に離脱をしようとする。

「逃がさん！」

ラウラがワイヤーを六本まとめて伸ばし、シャルロットはアサルトライフルをゼフィルスへ撃ち込む。

だが、ゼフィルスはライフルを巧みな機動でかわすと同時に、ビットからのエネルギー弾によって、全てのワイヤーをたたき落とす。

「この程度か？ドイツの遺伝子強化素体^{アドヴァンスト}」

「貴様、なぜそれを…！」

機密故に外部の者なら普通は知り得ないラウラの出自。

それをあっさり口にしたゼフィルスのパイロットに、ラウラが唸るように問い掛けるが、ゼフィルスは興味を失ったかのように離脱をする。

「逃がしませんわ！！」

だが、狙撃手であるセシリアが追撃をかける。

スターライトによる射撃と、ビットによる射撃。双方を織り交ぜて連撃を仕掛けるが、ゼフィルスは軽々とそれをかわし、時にゼフィルスのビットからの射撃で相殺する。

「くっ…！」

ゼフィルスのパイロットの高度な技量に齒噛みするセシリア。ならばとばかりに、ミサイルを計四発発射。それぞれを別方向から迫らせる。

「ふん」

だが、ゼフィルスはなんてこともないようにビットから射撃。そして、放たれたレーザーが空中で偏向し、全てのミサイルを打ち落とした。

「そんなっ…！」

その光景に、セシリアは今度こそ動きが止まる。

代表候補生の中でも最大のBT適正值を持つ自分さえも、未だできないレーザーの偏向操作。

それを敵が軽々と為したことに、思考がフリーズをする。

そして、それは隙としては決定的だった。

ゼフィルスのライフルからレーザーがセシリアに襲い掛かる。

敵レーザーのクリーンヒットを受けたセシリアは、ISのシールドにより直接的な損傷こそ無いものの、大きく弾き飛ばされる。

その間に、ゼフィルスはオータムを担いだまま場から離脱をしていた。

「くっ…！」

為す術なく、敵にあしらわれたセシリアは悔しさに強く唇を噛む。
そしてそれは、地上にいるラウラとシャルロットも同様だった。

三人が見上げる空。

そこに既に敵の姿は無く、ただただ快晴の青空だけが広がっていた。

第六十五話（後書き）

……………（土下座中）……………

なんかもう色々と本当にすみませんでした。
遂にやらかしました。悪いのは一重に作者の馬鹿さ加減です。
もう俺は社長砲に木っ端みじんになれるしか無い！！

このままだと延々無駄口を叩きそうなので、少々解説を。

今回の一夏、正確には白式の新モードですが、元々存在した白経津の同調度合いを更に高めたようなものです。
ですから、厳密には新モードと言えるのか微妙な線です。

イメージはアレです。
ユニコーンガンダムのデストロイモードの、なんか暴走してるっぽいアレ。

あれと同じで、今回みたいな状態の一夏は、ただ徹底的に高めた殺意という感情を吐き出すだけみたいな状態です。

狂化というより、白式に増幅された殺意が強すぎて、他が目に入らないという感じですか。

ただ、動き自体は一夏自身の動きなので、白式に乗っ取られているかと言えば、それもまた微妙なところ。

ちなみに発動条件は、一夏が「コイツまじ殺す！」と本気で思うこ

と。それによって、使うかどうかのスイッチが出ます。

そして使うと、射撃兵装とか一部機能を封印して、格闘戦オンリーになります。作中みたく凄くなります。

もう剣術や拳法がマジカル剣術やマジカル拳法になります。

そして一夏の体力と、白式のエネルギーを大量に持っていきます。

ビジュアルは、敢えて黒を使うことで、通常状態との差別化を図りました。

ぶっちゃけモデルは運命零の狂。

後は作者の脳裏に閃いたこのワード。

(、鍋、) あったほうがっこいいじゃん！

すみません…本当にすみません。

さて、次回あたりで五巻は終わるかもです。

ご意見ご感想ご質問は常時受け付けております。

お気軽にどうぞ。

シャルの新型パイルバンカーの名前、あまり気にしないで下さい。
決して、狙ったわけではありません。

多分…

第六十六話（前書き）

色々アレだった前回ですが、とりあえずこのままで通そうと思います。

で、なんやかんやで原作五巻は今回含めて後二回でお送りします。どうにも最近分割が多いです。いや、書いてたら何故かそうになってしまうのですが…

第六十六話

「うっ……」

「一夏くん？」

怒涛のように過ぎた事態が終わってから数分。
楯無の膝に頭を乗せられたまま意識を失っていた一夏に反応があった。

眉を潜めながら小さく呻く一夏に、楯無が声をかける。
そして、ゆっくりと一夏の目が開かれた。

「……会長……」

呟きながら、一夏はゆっくりと上半身を起こす。

邪魔にならないように、楯無は一夏の動きに合わせて身を引く。

そして、未だ床に座ったままではあるが、上半身を起こした一夏は楯無の方を向く。

「俺は……敵は……」

一夏の言葉に、楯無の顔が一瞬曇った。

その脳裏には、先刻の衝撃的な光景が思い出されていたが、すぐさま顔に出していた影を引っ込めると、落ち着いた口調で話し出す。

「敵は退却したわ。」

白式もちゃんと君の下にある。

逃げられてしまったのは悔しいけど、今は無事なだけ良しとしまし
よう」

一年の専用機持ちを追撃に向かわせたが、敵の増援の介入を受けて
結果として逃げられたことを言う。

「そつすか…」

それだけ言つて、一夏は軽く顔をしかめながら額を押さえる。

その姿に、ある疑問が浮かんだ楯無は、素直にその疑問をぶつける
ことにした。

「一夏くん。さっきの戦闘のこと、覚えてる？」

楯無の問いに、一夏は思い出そうとするかのように、答えるまでに
間を空ける。

そして、首を横に振りながら答えた。

「白式を呼んだところまでは。

後はどうにも…」

「そつ…」

その答えに、楯無はどうすべきかを考える。

何をというのと言つまでもない。

一夏が敵工作員の一人を殺害したことだ。

現状、このことを知っている人間は楯無一人しかいない。

悩む。

確かに殺害という手段に問題があることは事実だが、正当性云々の観点で言えば、実のところそこまで話を拗らせる必要は無い。

そもそも、テロリストという時点で同情の余地は無く、また、一夏の言葉や記憶の状態から推察するに、ISによる暴走の状態と判断。冷徹な物言いにはなるが、多少は致し方無しで済まされる面がある。

だが、ここで問題となるのはむしろ、行った一夏の心への影響だ。

殺害という重大な行為を、例え暴走という半ば無意識に近い状態とは言え、行ったことを知ればどうなるか。

そのことに対する、精神的負担を鑑みれば、どうにも伝えるのが憚れるというのが楯無の本音だった。

(今は、まだ時じゃないということかしら)

いずれは知らせる必要があるだろう。

いかに無意識に行ったこととは言え、やってしまった以上はそのことを自覚させる必要がある。

だが、それは今ではないと判断する。

もう少し経って、ある程度落ち着いてからでも遅くは無いと判断した。

「とりあえず、無事で良かったわ。立てる?」

一先ずは話を切り上げて、二人揃って文化祭の方へ戻ろうとする楯

無。

だが、立てるかという楯無の問いに、一夏は苦い顔で答えた。

「いやそれが、何故か体の疲労がやばくって。

ちと、手を貸してくれれば……」

「ああ、そのくらい別に平気よ。はい」

そうやって楯無は一夏に右手を差し出す。

そのついでに、一夏のすぐ側に転がっていた王冠を左手で取った。

そのことに気付いていない一夏は、楯無の手を借りながらゆっくりと立ち上がる。

そして、何かに気付いたのか、急に表情を慌てたものに変えた。

「ヤベエ！クラスの仕事！」

自身がクラス喫茶の要であることを思い出した一夏は、楯無の手を離すと、慌てたように動き出す。

だが、疲労が未だに響いているのか、その姿は体を必死で引きずるようなものだった。

「一夏くん！」

「今忙しい！」

背中に呼び掛ける楯無だが、一夏は相手をしてられないと言つように先を急ごうとする。

故に、楯無はそのまま言葉を続けた。

「そろそろ学園祭も終わる時間だから、行く必要ないと思うわ」

「へ？」

その言葉に一夏は立ち止まって楯無の方に顔を向ける。

その表情には、どこか間抜けさがあった。

「そもそもあの劇自体、学園祭の終わり近くに合わせて終わるようにセッティングしたんだもの。だから別に大丈夫よ」

「な…な…」

楯無の言葉に一夏は言葉を詰まらせる。

そして不意に、一夏の体がバランスを崩した。

足に来ていた疲労が悪いタイミングで作用したらしく、一夏の体はそのまま崩れ落ち、床に倒れる結果になった。

「ぼわぐちよ！」

そして倒れた一夏は、ダメージこそ少ないものの、まるで耐久型の癖にアタッカーもやれるナメクジの鳴き声のようなうめき声を上げた。

「あーそれと、一夏くん。

これ、何か分かるかしら？」

そう言っつて楯無は左手に持っていた王冠を一夏に見せる。

倒れたまま一夏は王冠をまじまじと見つめ、それがなんなのか気付いた瞬間、顔を青くした。

「ちよっ、待った。まさかそれ…」

「いやゝ悪いけど、王冠戦争は楯無のおねーさんの勝ちって結果だわ」

その言葉に一夏の表情が、まるで絶望を突き付けられたかのような悲壮感を漂わせた。

王冠を楯無が手にしている。

それ即ち、王冠奪取の景品である一夏との同室権を彼女が手にしたことに他ならない。

「と言うわけで、またしばらくよろしくね？」

チロリと舌を出しウインクをしながら言う楯無に、一夏は倒れたままま首をがっくりと落とした。

そして、裏で様々な騒動こそあったものの、IS学園学園祭はつづがなく終わりを迎えた。

そして全ての来場者が学園を去った後、生徒たちには学園祭の第二幕、通称『後片付け』が待っていた。

とは言え、さすがに一日で膨大なセットを片付けるのは無理があるので、当日の片づけは小道具などがメインとなり、セットなどの大掛かりなものは翌日の内、半日を使って片付けることになっている。そして、例の部活対抗出し物の投票結果発表も、翌日の最後に全校集会で知らされることになっていた。

夕刻、ひとしきりの片づけを終えた生徒たちは皆、寮の各々の部屋へと戻っていた。

丸一日がかりでの大騒ぎとその片付けにより、さすがの10代女子の溢れんばかりのバイタリティもこの時ばかりは尽きていたのだ。

「で、一夏はどこなのだ？」

「わたくしは知りませんが……」

「僕も……」

「私も……くぁ……知らないな」

場所は寮の談話スペース。ややムスツとした表情の幕の言葉に同調するように、セシリア、シャルロット、ラウラが続けて言う。

学園祭のあれこれによる疲れからか、四人の顔には明らかな疲労が浮かんでおり、ラウラは欠伸を噛み殺すような顔をしている。

ちなみに、鈴は二組の方で未だ仕事が残っているというので、この場にはいない。

「んむう……。あのようなことがあったばかりだというのに……兄様は

…」

あのようなこととは言うまでも無く、亡国機業による襲撃事件のことである。

大半の生徒には知らされていないが、専用機持ちの者だけには事件の概要が知らされていた。

特にその中でも衝撃的だったのは、「剥離剤^{リムバー}」というISを強制的に搭乗者から引きはがす装置。

祖国の新型機である第三世代機を、或いはISの開発者から直接渡された超最新鋭機を携える身として、決して聞き逃せない内容であった。

特に代表候補である四人は、本国へのリムバーも含めた亡国機業に関する報告のまとめなどもあり、溜まった疲労は他の生徒の比ではなかった。

そして、つい先刻襲撃があったばかりだと言うのに一人で別行動を取っている一夏に対し、ラウラはどこかむくれ気味になりながら言った。

「ですが、寮の門限も近いことですし、そのうち戻ってくると思いますわ。」

さすがに、敵も今すぐ襲撃を掛けなোসということもないでしょうし」

宥めるように微笑を浮かべながら言うセシリア。だが、その微笑にはどこか固さがある。

それも無理は無い。襲撃に使用されたISは、祖国が開発していた新型なのだ。

それがいつのまにか強奪され、テロリストの手に渡って犯罪に利用

される。

祖国に並々ならない愛着と誇りを持っている彼女には、到底許容できないことだった。

「まあ、セシリアの言う通りだな。

うむ、心配せずとも一夏も時間通りには寮に戻るだろう。私たちはそれを待つだけだ」

「そうだね…。僕も…。今日は疲れちゃった。みんなもでしょ？」

篝の言葉にシャルロットが同意するように言う。

彼女の言葉通り、この場に居る四人は四人とも相応に疲弊をしており、ラウラに至っては何時寝てもおかしくない状態だった。

まだこの後には夕食の時間があるが、それまで各自自室で休息を取ることになった。

「あの、鳳さん。本当に織斑君は居るんですか？」

「居ますよ。あたしの勘なら間違いなく」

同時刻、学園敷地内の渡り廊下の一角、二組クラス代表鳳鈴音と、一組副担任の山田真耶は並んで歩いていた。

門限近くになつても中々寮へと戻らない一夏に、昼間に起きた事件が事件だけに心配した真耶が一夏の行方を捜していたのだ。そしてたまたま鈴と出くわした真耶は鈴に事情を話した所、一夏の居場所に心当たりがあるという彼女の言葉に従い、二人連れだつて歩いていた。

「まあ、あたしも事情は知ってますけどね。さすがについさっきの今でまた襲撃かけてくるほど、敵も馬鹿じゃないと思いますよ」

「それはそうかもしれないんですけど…
やっぱり心配なものは心配ですからね」

割り切つたようにあつさりした態度の鈴の言葉に、真耶はやや苦笑気味に答える。

純粹に生徒を心配する真耶の姿に、自然と鈴の顔がほころんだ。

「大丈夫ですよ、先生。あいつの居場所は分かりきってます」

そう安心させるように言う鈴。

二人の足は、寮の比較的近くにある訓練棟の一角に向かつていた。

「多分、今のあいつに一番近い昔からのあいつを知ってるのはあただけだから。

だから、一夏のやつが居る場所に目星をつけられたのもあたしただけだと思っんです」

そう言つて鈴は、訓練棟の一室を指さす。

その先では、本来なら点いているはずのない明かりが点いているのが窓から見る事ができた。

「あいつ、何かでかいことがあったりするよ、決まって一人で何かしらのトレーニングをやってるんですよ。」
で、多分今回もそのパターンじゃないかなって思ったら、案の定ド
ンピシャだったみたいですね」

「へえ〜」

鈴の言葉に、感心したように真耶が声を上げる。

そして二人は訓練棟に着く。
入口にある使用中パネルは、一つのみが使用中のランプを燈してい
た。

既に殆どの生徒は寮である。

ならば、必然的にこんな所に居る生徒は限られる。

即ち、一夏くらいなものだ。

複数ある訓練室の内、使用中となっているのは、主に刃物などの使
用を練習する部屋である。

パネルにあった部屋の前に着いた二人は、一度顔を見合わせると、
真耶が扉の横にある開閉スイッチを押す。

そして、空気の抜けるような音と共に扉が開く。

二人の視界に、照明によってやたら無機質に感じる白に染まった部
屋が入り込む。

そして、部屋の状態を見た瞬間、二人は同時に息を飲んだ。

そこはさながら、台風に引っ掻き回されたかのように、散らかりつ
くしていた。

散らかりの原因、床に転がっている物体を手取る真耶。それは、刃物訓練での的に使われる、特殊繊維製の人型の残骸だった。

「一夏！」

鈴が慌てた声を上げて駆け出す。

その声に真耶も視線を上げて、鈴の駆けつけた方を見る。

その視線の、鈴の駆け寄り寄った先には、肩を大きく上下させ息を荒げながら、壁に背を預けて床に座り込む一夏の姿があった。その服は制服であったが、上だけは脱いであり、その鍛えられた半身が晒されている状態になっていた。

そして、その片手には一夏の愛刀、陽炎が握られている。

「一夏！あんだどうしたのよ！？」

「織斑君！？大丈夫ですか！？」

鈴と真耶の二人が同時に一夏に声を掛ける。

その声でようやく二人の存在に気付いたのか、俯いていた頭をゆっくりと上げて、その口元に薄い笑みを浮かべながら口を開いた。

「ああ…鈴…に、山田先生…」

その身に溜まった疲労ゆえか、やや掠れ気味の声で二人の名を呟く一夏。

そんな一夏に鈴は声をやや荒くしながら尋ねる。

「まったく！一体あなたは何をやってんのよ！
見るからにクタクタじゃない！」

「そうですよ！」

部屋がこんなになるなんて！何をどれだけやったらこうなるんですか！」

鈴だけでなく、真耶まで声を荒げる。

至近距離から大声を浴びせられた一夏は、僅かに顔をしかめる。普段の一夏なら、どこか鬱陶しそうにしながらも、やんわりと黙るように頼むが、今はそんな体力も残されていないのか、顔をしかめるだけに留まっている。

一夏の表情に二人は声の大きさに気付いたのか、やや気恥ずかしそうに顔を赤らめると、今度は落ち着いた調子で一夏に尋ね直す。

「で、一夏。何やってたのよ？」

そう聞いてくる鈴に、一夏は軽く息を吐くと答える。

「いや、ちょっと剣の練習をな……」

良い感じの……太刀の感覚が体に……残っててな。

それを再現したくて……つい……」

「その結果がコレ……ですか」

部屋に大量に転がる残骸を見て、苦笑いを浮かべながら真耶が言う。

部屋の一角には処分するためにまとめられた残骸が小さく山を作っており、どれだけの数の的を一夏が斬っていたのかを如実に示して

いた。

「いやあ…あまりにも凄い感覚で…
どうしても再現したかったんですよ…」

言いながら一夏は自らの体に残っている感覚に思いを馳せる。
言葉ではとても形容しがたい、ただ想像を絶する鮮烈さを伴う感覚
だった。

自身と剣が完全に、そして森羅万象と合一するような感覚。
斬れぬ物など無しをまさに地で行くかのような至高と呼べる一太刀
の感覚だった。

それを何とかして伝えようとする一夏だったが、全身を走る疲労が
語ることを億劫にさせる。

学園祭での戦闘の疲労が完全に抜けきっていない状態で、延々と修
練を行ったのだ。
体力など、とつくに限界を超えていた。

「あーもう！

よくわかんないけど、さっさと戻るわよ！ほら立って！」

「そうですよ。

もう寮の門限も近いんですから。他のみんなも心配しちやいますよ」

何はともあれ、まずは一夏を寮に戻すことが先決と判断した二人は
一夏に諭すように言う。

そして鈴は言いながら一夏の腕を引っ張る。

二人の言葉に、一夏もさすがに戻った方がいいと判断したのか、あゝと呻きながらも立ち上がり、陽炎を鞘に納めて制服を着直す。

「あゝ片付け」

今一覇気を感じない言葉と共に、散らかった部屋を片付けようと一夏がノロノロと歩き出す。

だが、その腕を真耶が引き止める。

「えっと、片付けは施錠確認のついでに私がやりますから。

織斑君は鳳さんと寮に戻っててください」

「え、いやでも…」

真耶の言葉に、一夏はやや躊躇うような素振りを見せる。

好意はありがたいのだが、自分のやった修練の後片付けを人にやってもらおうということに、さすがの一夏も申し訳なさを感じている。

だが、そんな一夏に真耶は安心させるように微笑みながら言った。

「大丈夫ですよ。」

見たところ、処分するものは一通り纏まっているみたいですし。すぐに済んじゃいますから」

言いながら、真耶は一夏と鈴の背中を押しして部屋から出す。

真耶の言葉に、一夏と鈴はしばし顔を見合わせるが、揃って頷くと彼女の好意に甘えさせてもらうことにする。

そして、改めて真耶にお礼の言葉と共に一礼すると、二人は連れ立って寮へと戻って行った。

「ふう…さて、お片付けといきましょう」

そう行つてから真耶は部屋の片隅にある、大きめのサイズのモップを手に取る。

この訓練棟は、各部屋ごとにダストシユートが取り付けられており、床に散らばつたゴミはモップなどを使って直接ダストシユートに放り込む形になっている。

幸い、予め纏められていたゴミはダストシユート近くにあつたので、片付けにはおそらく10分と掛からないだろうというのが、真耶の見立てだった。

ふと、真耶は転がっていた人型の残骸の一つを手取る。

おそらくは一つの人型を幾度も斬つたのだろう。

残骸は、その本来の大きさに比べてだいぶ小さくなつていた。

そして、切断された断面は思わず撫でてしまふほどに滑らかなものだった。

「凄い、ですね…」

自然とそう声が漏れる。

IS操縦者として、極めて優秀な実力を持つ真耶ではあるが、あいく射撃戦を主としているため、そこまで剣の理というものに通じているわけではない。

だが、そこまで剣に詳しく無い身で見たとしても、一夏が斬った残骸の斬り口は見事と呼べるものだった。

そして、その残骸を大量に生み出している。

一体どれだけ刀を振ればこれ程までになるのか。

一夏は「良い感じの一太刀を再現したかった」と言っていた。

それ即ち、ただの一太刀のためにこれだけのことを為したに他ならない。

「フフッ」

自然と、真耶の口から笑いが零れる。

自身の納得の行くまでひたすらに繰り返す。ただひたすらの努力をする生徒の姿勢に、真耶は教師としての嬉しさを禁じ得なかった。

部屋の片付けをしながら真耶は思う。

一夏に限った話ではない。

この学園では、多くの生徒が自らの目標に向けて努力をしている。それはとても純粋な思いであり、尊いものでもある。

だが今日、それを脅かす存在が現れた。

そのような存在を、真耶は学園の教師として決して許すつもりは無かった。

（私達が、頑張らなきゃですね）

確かに有事となれば生徒の手を借りることもある。それができる生徒が居ることもまた事実だからだ。

だがそれでも、事が起きたとしたらまず真っ先に、自分達教師が動き学園を守らねばならない。

それが彼女達大人の、教師の勤めだからだ。

(頑張らなきゃ、ですね)

そう心のうちで決意を新たにする真耶であった。

ガシッ!

「てめえ、ありゃ一体どういうことだ!!」

その日の夜、場所は都内にある高級ホテルの最上階スイートルーム。壁の代わりに一面に取り付けられたガラスにより、眼下にある都市の夜景を一望できる最高級の部屋で、一人の女性が声を荒げながら一人の少女の胸倉を掴んでいた。

女性はオータム。そう、ISアラクネを用いてIS学園に襲撃をか

けた亡国機業のエージェントである。

そして今、オータムに胸倉を掴まれている少女。組織においては「エム」のコードネームで呼ばれている彼女は、窮地に立たされたオータムを回収したIS、強奪された英国第三世代機サイレント・ゼフィルスのパイロットだった。

そして、オータムが白式の強奪のミッションに赴くにあたり、リムバーの使用を提示してきたのも彼女であった。

オータムは今にもエムの首を締め上げようとするかのような剣幕で迫っている。

だが、それを間近に見ながらも、エムは眉一つ動かさずにいた。

「てめえの渡したリムバー！」

なんだあの欠陥品はよお！おかげで強奪は失敗するわ、アラクネは当面使えなくなるわ！

踏んだり蹴ったりだ！」

声を荒げるオータム。

今回の白式強奪という任務、オータムにとっては散々な結果に終わったと言える。

当初は寮で一人のところを襲う計画だったが、急な同居人の存在によつて計画は変更。

目の前のエムに渡されたリムバーを携えて、学園祭に襲撃を仕掛けてみれば、奪ったはずの白式はリムバーへの耐性と遠隔起動という利点を引つ提げて取り返され、自身のアラクネはコアと装甲を切り離したことにより当面は使用不能。

その怒りを、任務のプランを提示したエムへとぶつけたオータムだった。

だが、オータムの剣幕を前にしてもエムはまるで動じない。そして、静かにその口を動かした。

「ミッションそのものに問題は無い。現に途中までは順調だっただろう。問題はお前だ、オータム。」

私は確かに言った。リムーバーは試作開発の代物だから、何があるか分からないと。

そして、目標を奪った時点でさっさと退けばいいものを、無駄に時間をかけたおかげで敵の増援を許し、あまつさえ奪ったISを取り返されたのは、他でもないお前自身のミスだ。

おかげで、私も完全に調整のできていないゼフィルスで出て、その存在を向こうに露見する羽目になった。

尻拭いなど、あまり得意ではないのだがな」

その言葉に、淡々としながらもどこか嘲笑を含む言葉に、オータムは頭にカツと血が上るのを感じる。

そして気がつけば、エムの顔を殴り飛ばそうと右腕を振りかぶっていた。

「止めなさい、オータム」

だが、その背にかけられた声にオータムの動きが止まる。

涼やかでありながら、どこか艶を感じさせる大人な女性の声に、オータムは振りかざした右腕を下ろすと、エムの胸倉を掴んでいた手を離してゆっくりと後ろを振り向く。

「スコール…」

呟くその声は、オータムとしては実に珍しいことに、殊勝さを感じ

させるものだった。

オータムの視線の先、そこには一人の女性がバスローブ姿で立っていた。

その女性を形容するならば、「絶世の美女」と呼ぶべきだろう。

ゆつくりと靡く豊かな金髪、女性ならば誰もが羨むだろう抜群のプロポーション。

それ程の美女がバスローブ姿で、ホテルの高級スイートに佇む姿は、もはや絵画めいた美しさを醸し出していた。

だが、同時に彼女にはある一つの側面がある。

それは、オータムとエムの直属の上司にあたる亡国機業の幹部の一人であるということだ。

「いらっしやい」

スコールはオータムを手招きで近付かせると、ゆつくりとその体を抱きしめた。

「スコールウ…」

自らが情を交わす女性の抱擁に、オータムは激していた感情が急速に静まっていくのを感じた。

自身の腕の中で大人しくなるオータムに、スコールは子供をあやすかのように優しい声音で語る。

「大丈夫よ、オータム。私はあなたを責めたりしないわ」

その言葉に、オータムの体が僅かに震えた。

「失敗を気に病む必要は無いのよ？
ただそれを認めて、次に活かせばいいの。
それが、私達大人の特権なのよ？」

諭すように語りかけるスコールに、オータムはゆっくりと頷く。
その姿にスコールは微笑を浮かべると、シャワーを浴びてくるように告げる。

素直にバスルームへと向かうオータムを見送ったスコールは、今度はエムへと視線を向ける。

「あなたもお疲れ様、エム」

「ふん…」

スコールの労いの言葉に、エムはつまらなそうに鼻を鳴らす。
そんな姿に苦笑を浮かべたスコールは、今度はエムに指示を出す。

「とりあえず、整備班に準備をさせたわ。
ゼフィルスの調整をして貰いなさいな」

その言葉にエムは無言で頷くと、そのまま黙って部屋を後にする。
その姿にスコールは苦笑を浮かべると、すぐ脇にあるベッドの端に座る。

そしてゆっくりと足を組みかえる。
バスローブの裾から覗く脚線美が、見る者全てを魅入らせるような色香を放っているが、この場にはスコール一人しかない。

「さて、オータムにはああ言ったけど、今回は少々痛かったわね」

誰に語るでもなくスコールは呟く。

奪取したISにリムーバーへの耐性などをつけた状態で取り返されたこともあるが、もう一つ軽視できないことがある。

それは、オータムの補助として同様に潜入させていた作員の喪失だ。

そう、一夏の手によってその身を跡型も無く焼き尽くされた作員のことである。

その死を、スコールは作員の体内に仕込んだナノマシンの反応の消失によって知っていた。

これがただの作員ならばいくらでも替えが効いただろう。

だが、今回失った作員はISの乗り手でこそないが、それを除けば作員としては十分に優秀な者だった。

だからこそ補助に回したのだが、やはり主戦闘がISによって行われる学園への派遣は無理があったかと思う。

機械ならばすぐに交換ができる。だが、優秀な人材というものはそうはいかない。

補充に回す人員のことや、それを含めた上への諸々の報告を考え、スコールは浮かべていた微笑に影を浮かべた。

だが、不意にその影が笑みの一部へと変わった。

「織斑、一夏……」

作員を殺害したのは十中八九例の少年だろう。

状況的にそれが可能なのは彼と、その場に居た更識楯無くらいだが、

彼女がそれをするとは思えない。
なにより、彼には前例がある。

(第二回モンド・グロツソの時、そして今回……)

亡国機業は、組織全体から見れば無いに等しい微々たる数だが、同じ少年によって構成員を失わされている。

そのことを考え、スコールの顔にまるで面白がるような微笑が広がった。

だが、どこか影を含んだその微笑はまるで、美しさの中に毒を隠し持った花のようであった。

第六十六話（後書き）

次回こそ原作五巻が完結すると思います。

…なんだかんだでここまで来ました。

皆さま、平素より本作をこ愛顧頂きありがとうございます。

では、また次回もよろしくお願いします。

ニコニコでアマドライバーが配信とのこと。

よし！k t k r！！あのアニメ、結構好きだったんです。

第六十七話（前書き）

さて、何故か。な！ぜ！か！

またもや起きてしまった分割事件。

つまり、五巻終了は次回へ持ち越し…

本当にもう色々すみません…

そのうち予定延期に定評のある作者なんて呼ばれたりしないか、ちと心配…

第六十七話

華やかに彩られた裏に波乱を含んだ学園祭。

その翌日、半日がかりの後片付けを終え、残りの通常授業が終わった後のIS学園。

その講堂には今、学園の全生徒が集められていた。

集まった理由はただ一つ。学園祭における生徒達の注目イベントである、「部活対抗織斑一夏争奪戦」の結果発表があるからである。

そして集まった生徒の列の一つ、一年一組の列の中には当事者である一夏の姿もある。

「はあ~~~~~……」

深い深いため息を吐く一夏。

その姿は、なぜだか仕事に疲れた中年のような空気を漂わせていた。

その理由は一重に、前日に溜まった疲労が原因である。

一夏自身は、寮に戻ってから楯無と同室であることから、更なる苦勞を彼女にかけられるものと思っていたが、意外なことにそうはならなかった。

理由は単純である。

訓練棟から寮へ戻る。

そのまま夕食へ。

部屋に戻る。

シャワーを三分で一気に浴びる。

ジャージに着替えてベッド。爆睡、そのまま朝に。

ちなみにこの日の一夏の起床時間は午前六時半。

前日の就寝が八時であったため、正味十時間半という結構な長さの爆睡であった。

この爆睡により何とか体力を回復させた一夏は、どうにかして半日の片付けやその後の授業を乗り切ったのだ。

ただ、その間に未だ僅かに残る疲れを体から出すかのように、先程のようなやけに年寄り臭いため息を幾度も吐いていたのだが。

ちなみに、幾つか補足事項を加えると、楯無とまたしばらく同室になることや、鈴と共に寮へ戻ったことに残りの専用機持ち四人が問い詰めようとしたが、寮に戻った一夏の余りに消耗した姿に問い詰めるのを止め、結局翌日である今日に話を聞いたり、楯無と一夏の同室の件にただならぬ気配を醸し出したシャルロットを一夏が必死で宥めすかしたり、部屋に戻って爆睡した一夏に遅れて部屋に戻った楯無があれこれとちよつかいをかけたものの、まるで反応せず爆睡を続ける一夏に楯無が膝を抱えたりしたりしたが、それは別の話である。

(あゝ、やっと調子戻ってきた)

集会が始まるのを待つ間、一夏は全身を精査して体の調子確かめる。

未だ万全とは言えないが、万全ではないだけで調子としては十分。今すぐ生身、IS問わずに試合をしろと言われても問題は無いくらいだ。

朝からずっと出ている親父臭いため息は…ある種の癖のようなものだ。

(こつという時、師匠には感謝だよなあ…)

自身の体力が生半可なものでないことは一夏も承知している。否、武術が自身の体を自在にコントロールし、連綿と受け継がれた業を発するものである以上、自身の体の把握は基本と呼べる。

本来、前日に寮へ戻った時点で一夏の体に溜まっていた疲労は、常人ならば三日はダウンするレベルのものに相違無いと目測をつけていた。

現役軍人のラウラや軍での訓練経験のある残る三人の代表候補、一夏ほどのレベルには達してははずとも、剣術に秀でる筈。

おそらくはこの五人でも一夏のように一晩で回復とはいくかは分からないだろう。

学年どころか学内でも、楯無と並んでぶち抜いたレベルの体力は一夏の自慢の一つであり、自身をそこまで鍛えてくれた師に、一夏は改めて感謝の念を抱く。

もつとも、そこまで鍛え上げられるまでにかなりの地獄を見たが、それはあまり思い出さないようにする。

具体的には、師の邸宅が山中であることを利用した、大量の重りをぶら下げたの山中ランニング(かなりガチ)とかである。しかも冬

季の修業ともなると、当たり前前に雪中全力マラソンが待ち構えているのだ。

オリンピックのマラソン選手もここまではやらないだろう。というか、色々とぶっ飛んでいる。

限界を当たり前前に無視した、もはや鍛えることを一種の信仰のレベルに高めた基礎訓練は、一夏の心に明らかに色々となにかを残していた。

（まあ、それで強くなれるなら万事オツケー、プライスレスってかな）

首を動かし、肩を軽く回しつつ骨を鳴らしながら一夏は思う。

強くなれる。

その事実さえ分かっているならば十分。鍛える甲斐があるというものだ。

ただ貪欲なまでの実力向上への渴望。人によつては眉を潜めかねない考えと理解もしているが、一夏はそのくらいでなければならぬとも思っている。

でなければ、師の領域に追い付きはしない。超えるなど、夢のまた夢だ。

我ながら中々一般とズレた思考だと思いつつ、一夏は欠伸を一つ噛み殺すと目の前の壇上に意識を向ける。

講堂のステージの下、講堂端に控える虚の姿が目に入ったからだ。

もう間もなくに全校集会が始まり、一夏の所属先が決まる。

できれば適当に自身の修練に時間を割くことに寛容な、というか堂々と幽霊部員やっても問題ない部活であってくれと願いつつ、一夏はステージを見る。

一夏以外にも、虚が出てきたことにより集会の開始を悟った生徒がいるのだろう。
列のあちこちが反応を見せる。

ある者は黙り、逆に別のある者は近くの者と小声で話し出す。
沈黙とざわめきがまばらに起こるが、それも虚がマイクで講堂に響かせた集会の開始を告げる言葉によって、一気に全体の沈黙へと変わった。

「それでは、生徒会長より投票結果の発表をいただきます」

虚がそう言つと、ステージ袖から楯無が悠然と歩いてステージ中央へやってくる。

ステージにはマイクの置かれた演壇などは無く、学園祭前に企画を発表した時と同様に、衿元に仕込んだピンマイクを使うのだろうと当たりをつける。

その奔放な行動と、その顔に貼付けている余裕の態度を表す表情に、改めて食えない人間だと、一夏は軽く口元をニヒルに歪めながら思う。

「IS学園の生徒諸君、更識楯無よ。

昨日はみんな学園祭お疲れ様。みんなの精力的な協力のおかげで学園祭は大成功に終わったわ」

開口一番に楯無は極々ありふれた挨拶を述べる。

そこで楯無はチラリと一瞬、一夏に視線を向ける。

視線が合った一夏と楯無の二人は、学園祭の裏で起きていた出来事を同時に思い浮かべたのか、揃ってニヒルな笑みを口元に一瞬浮かべる。

そして一夏からすぐに視線を外した楯無は、壇上から集まった生徒全員を見回すと、今回の集会の本題へと入った。

「さて、ありふれた挨拶はこのくらいにしましょうか。

では、みなお待ちかねの部活展示の結果発表を行うわ」

そう楯無が言った瞬間、講堂全体の空気が張り詰める。

これより楯無が告げる部活展示の結果発表。それは生徒から最も票を集めた部活展示の発表であると同時に、一夏の所属する部活が判明することに他ならない。

ゴクリッ…

誰かが唾を飲み込んだ。

本来なら聞こえることのない小さな音。

だが、静まり返った講堂内では何故かよく響いたような気がする。

「では、発表します。

IS学園学園祭部活展示、最多得票を獲得したのは

緊張が最高潮に高まる。

全校生徒が一齐に発する緊張に、楯無はまるで楽しむかのような薄い笑いを口元に浮かべると、言葉の続きを言った。

「生徒会主催、観客参加型演劇『王冠戦争』!!というわけで、織斑一夏君には生徒会に入ってもらいます!!」

「は？」

楯無の口から言われた結果。

その内容に一夏が目を丸くする。

それは他の生徒も例外ではなく、皆一様に目を丸くし、呆然として
いる。

そして

「「「「「ええええええええええええ!!?!」「」」」」」

生徒全員が一斉に発した驚愕の声が、講堂を揺らした。

生徒全員の驚愕が続く中、楯無は言葉を続けた。

「ありがとう、みんな。これもひとえにみんなの協力のおかげよ。
是が非でも劇を盛り上げたい私の『生徒会に投票して、劇に参加し
てよ』というお願いに、快く協力して劇に出てくれたみんなに、私
は心から感謝するわ！」

まるで悪徳セールスのような誘い文句で以て上手いこと生徒会への
票を獲得した楯無は、いけしゃあしゃあとさも生徒が自発的に生徒
会に投票したかのような言葉を言い、それはもう輝くような笑顔を
浮かべながら感謝の言葉を述べる。

楯無の手口を理解した一夏は、自分どころか生徒全員を見事に巻き

込んだ楯無のやり口に、絶句して啞然とした表情を浮かべている。

そして、物の見事に楯無に騙されて生徒会に投票をしてしまった生徒達と言えば、各々が異なる反応をしていたが、そのどれもが慟哭と呼べるものだった。

「こんなやつてないよー!!」

ただただ理不尽を嘆く者。

「結局私たちが生徒会に投票するなら、部活対抗なんて意味がないじゃない!!」

あまりのショックに自暴自棄になりそうなもの。ISを展開しているものなら、ライフルで味方を撃ちそうな勢いである。

「分かつちゃった…」

自分の部活への得票を望んだだけ、他の部活の負けを祈らずにはいられない。

自分達を祈っただけ、他の誰かを呪わずにはいられない。

私たち部活対抗に参加してる生徒って、そういう仕組みだったんだね…

あたしって、ほんとバカ…」

絶望に心が飲み込まれ、色々と墮ちそうになってる者。多分こいつが一番危うい。

「裏切ったのよ!会長は私の気持ちを裏切ったのよ!!」

理不尽ゆえに湧きあがる怒りを楯無へぶつける者。

瞬間間に喧騒が講堂を満たしていく。そして列の一角、そこでは一夏がどこか悟ったような表情をしていた。

(うわー、やりやがったよあの会長。生徒全員騙すとか、ここまで来るといつそ見事に思えてくらあ)

とはいえ、これはこれでアリだと思う。

生徒会ということは楯無と同じ所屬ということになり、彼女であれば訓練に時間を割くことくらいは軽く認めてくれるだろう。

そんな目測があった。

だが、ここで事態はさらに一夏の予想外の方向へ向かう。

「えー、静粛にー。もちろん、学園生徒会長として私は、皆にもちやんとプラスになる案を用意してあるわ。

それは『織斑一夏貸出キャンペーン』。生徒会より、希望する部活へ織斑君を派遣することになっているから、その辺は安心して頂戴ね?」

「へ?」

予想していなかった楯無の言葉に一夏が再度目を丸くする。

そしていつの間にか講堂の喧騒収まり、あちこちから「それならまあ…」と納得するような声が上がった。

「な…な…ええ?」

結果として自分が振り回されることになった状況に、一夏はただただ顔を引き攣らせるだけであった。

そして、この結果発表を以て今年度のIS学園学園祭は本当の終わりを迎えたのであった。

完全放課となった学園、その廊下の一角を楯無は歩いている。向かう先は一つの部屋。そして、目的の部屋の前に辿り着いた楯無は意匠の凝らされた重厚感を持つ木の扉をノックする。

部屋の向こうから聞こえる入室を許可する声。それに従って楯無は扉を開けて室内に入る。

「失礼します」

「ああ、更識君。よく来てくれましたね」

楯無を迎えたのは、部屋の最奥にあるデスクで書類と向かい合う壮年の男性。

彼の名は「轡木 十蔵」。

学園の用務員であり、その柔和な態度から学園の良心として学園の全員に親しまれている男性だが、その真の姿は表向きこの学園の学

園長をとらっている彼の妻に代わり、学園に関する実務の一切を取り仕切っている本当の学園長である。

「とりあえずはそこに座ってください」

学園の誰もが知る穏やかな表情で十蔵は部屋の中央にある応接用の椅子に座るように楯無に促す。

その言葉に素直に従い椅子に座った楯無の目の前の机に十蔵が日本茶と菓子を置く。

「さあ、更識君。是非食べてみてください。良いお茶とお菓子を見つけてきてね」

「あら、いつもありがとうございます。轡木さんのチョイスって外れが無いんですよ」

出されたお茶と菓みに素直に表情を明るくする楯無。

そして向かいに座る十蔵と共にしばしお茶と菓子を堪能する。

茶と菓子を平らげた二人は、少しの間他愛ない世間話をする。

そして、歓談に一区切りついたところで楯無が表情を真面目なものに変えた。

これから話すことこそがここへ来た本題だからだ。

「では更識君。報告を」

「はい。その、織斑一夏君に関しては最後までいいでしょうか？彼については、少し話が長くなりそうです」

報告をする前に前置きする楯無。それを十蔵は笑顔で了承し、話の

続きを楯無に促した。

「ではまず、私のISですがどうか完成にこぎつけました。やはり実戦などを介した実働データは大きかったですね」

「ああ、確かロシアの機体でしたか。私も君が一人で組み立てると聞いた時はどうなるかと思いましたが、上手くいったようでなによりです」

楯無のISであるミスティアス・レイディ。大本となる機体、いや、機体の七割は開発元であるロシアで組み上がっていたのだが、その仕上げを楯無は一人で行っていた。

それは決して軽いことではない。例え残りの三割言えども、新型機の開発に国家、あるいは企業を上げて開発を行うのがISである以上、その三割は決して完成させるのが安いものではない。

個人で成し遂げることとしては破格のソレを行った楯無に、十蔵は心よりの賛辞を贈る。

その称賛に、楯無はやや照れるような表情を浮かべた。

「いえ、私だけではないですよ。そもそもそれなりに形ができていたのを、手を加えただけです」。

私一人じゃ絶対に無理でした」

言いながら、不意に楯無の顔に僅かな影が差した。彼女の脳裏には、愛する実妹である簪のことが浮かんでいた。

日本の代表候補であり、専用機の所持資格を持っている簪だが、諸事情により専用機の開発が途中でストップしていた。

それゆえ、彼女は機体を引き取って独力で組み立てているのだが、

それが楯無に対抗してでのことであることは楯無自身が理解していた。

だが、簪の機体の開発は難航しているのが現状であった。楯無としては妹のために手伝いたいと思っているのだが、簪自身が頑なにそれを拒んでいた。

直接面と向かって拒否を言われたわけではない。だが、纏う雰囲気

が雄弁に物語っていた。

いつの間にかできてしまっていた姉妹の溝。

それを思い、楯無は思わず気分が暗くなる。だが、すぐに報告の途中であったことを思い出して、気持ちを切り替えることにした。

「すみません。途中でしたね」

「いえ、構いませんよ。私は大丈夫です」

謝る楯無に、十蔵は穏やかな表情のまま問題無いと言う。それは、楯無の思考を走った苦悩を察してのことだった。

人の心情の機微を的確に読み取り、相手に不快な思いをさせずに上手く対応を取る。

単に技能だけに留まらない経験と、何より相手を気遣う気持ちから為せる十蔵の対応に、楯無は頭が下がるような思いだった。

「では、続けます。次に亡国機業についてですが、現状ではISを二機所持していることが確認されています。

米国製第二世代『アラクネ』、英国製第三世代『サイレント・ゼフィルス』。どちらも強奪された機体であることは確かです。

ですが、アラクネの方はコアと外装が切り離されているので、当面の使用は無理でしょうね」

ISとは世界最高の性能を持つ兵器であるが、同時に世界で最もデリケートな兵器でもあると言われる。

その最たるのがコアと機体の相性である。一夏の白式が碌に追加装備を受け付けないのを見れば、そのことは一目瞭然である。

そして、一度外装と切り離れたコアはしばらくの間ISとしての使用ができなくなる。

新たな外装と波長を合わせるのに時間がかかるからであり、電池を変えて再使用というほど簡単なものではないからだ。

「一年のオルコット候補生の報告では、ゼフィルスの操縦者はBT兵器を最高稼働させた際に可能となる、発射後のレーザーの偏向射撃を可能にしたようです。」

また、専用機を持った代表候補生三人を相手取り、さらに味方の回収も成功させたことから、ゼフィルスの操縦者の操縦技術は非常に高いものと推測されます。

恐らくは 国家代表にも引けをとらないかと」

最後の言葉はやや間を開けて言った楯無。

自分で言った言葉だが、同時にそれがあまり認めたくないことであることが、言葉から感じ取れた。

国家代表。

その言葉が示す意味は字面の通りである。

その国における最高のISの使い手であり、世界大会においては代表として出場する。

同時に、文字通りの国家の個人最高戦力。

国家代表に選ばれるような操縦者というのは、その全員が一流の実

力を持っている。

故に、敵の側にそれだけの実力者が最新鋭機を携えた状態で存在しているというのは、到底歓迎したくない事態なのだ。

「今回の事件で確認された敵戦力はこれだけですが、未だ影に隠れているだけで、更に戦力を保有している可能性は高いです。

向こうがISを手に入れる手段は、強奪という手しかないのです、こちらの線でも前々から調査はしていますが、結果は芳しくありません」

「そうですね」

やや苦みを含んだ表情で話す楯無に、十蔵も笑みを引つ込めて表情に影を落とす。

だが楯無の言う調査、すなわちISの強奪の有無を調べることが上手くないかということのも無理は無い。

ISは心臓であるコアの数が限られているため、必然的に各国家が保有するコアも数が限られる。

それを強奪されるということは、直接的な国防の低下に繋がると同時に、国家としての面子にも関わってくる。

舐められたらそれまでの外交戦略において、そのような一大事が露見するのを避けるのは、国家としては当然の判断だ。

故に、仮にコアの強奪などが起きても、政府はそれを全力で隠蔽にあたる。

調査が難航するのも無理はない。

「亡国機業…、第二次世界大戦終決後に生まれた秘密結社と聞いて

いますか…」

「存在こそ噂されていたものの、ほとんど動きらしい動きを見せませんでしたから。実体の無い幽霊のような存在だと言われているたね。」

ですが、ここ数年に動きが活発化している。そのきっかけはおそらく……」

十蔵の言葉に続く形で楯無が語り、十蔵と目を合わせる。

亡国機業。今まで存在が仄めかされるだけで、目立った活動をしていなかった秘密結社が、近年急速に動き出した理由。

それを楯無と十蔵は、口にするまでもなく理解していた。すなわち、ISに他ならない。

「とにかく、敵の実態も目的も掴めない以上、当面は万が一の事態に備えるしかないかと」

そう言った楯無に十蔵はゆっくりと頷く。

可能ならばこちらから攻勢に出て、テロリストの鎮圧を行いたい。だが敵について碌に情報が掴めていない以上、動きようがない。

ただ後手に回るしかできないことに、楯無は小さく唇を噛んだ。

「ひとまず、亡国機業についてはこれまでにしましょう。情報が少ない以上、これ以上は憶測の域を出ません」

「…そうですね」

十蔵の言葉に、楯無は亡国機業についてはここまですることにし

た。

そして最後の案件へと話を移すことにする。

「では最後に、織斑一夏君についてです」

「噂の彼ですね。聞けば、中々勇名を轟かせているみたいですが」
先程までの影を消し、再び穏やかな微笑を浮かべながら言う十蔵に、
楯無もまた顔に微笑を戻す。

「ええ、まあ。少しばかりはしゃぎすぎな気も、しなくもないです
けどね」

学園祭の劇での大立ち回りや、話に聞く武道系部活間の腕試し会での
暴れぶりを思いだしながら答える楯無。
だが、それも十蔵にとっては悠然と受け止められることらしい。

「良いことです。」

やはり若者は少し活気に溢れ過ぎてくるくらいが丁度良い。
私も元気な生徒を見ていると、体に力が漲る気分になりますからね」

そう笑みを湛えたまま言う十蔵に、自然と楯無も顔が綻ぶ。
そして報告を続ける。

「彼の訓練に関しても順調です。」

…正直、驚かされてばかりですね。教えた動きも数回の反復でコツ
を掴みますし、特に近接での斬り合いは目を見張るものがあります。

こと、近接での斬り合いならその辺の代表候補生よりも上でしょう

ね。正直、私もあまり相手をしたくないですよ」

「成る程、さすがは織斑先生の弟ということですかね？」

楯無の言葉に十蔵は、どこか試すような顔で楯無に同意を求める。千冬の弟、それもあるだろう。だが、一夏の実力の根幹を成しているのは

思い浮かべた楯無はそれを言おうか迷う。

だが、彼女が決めるよりも早く話は進むことになった。

「千冬の弟？そんなことは理由としちゃ小さ過ぎるな。

ひとえに、俺が鍛えたからに他ならん」

椅子に座る楯無。その背後から不意に聞こえた、聞き覚えのある声に、楯無は慌てて後ろを振り向く。だが、振り向いた先には誰もいなかった。

「なに明後日の方を見ている」

呆れるような、だが同時にからかいを含んだ声が横から聞こえる。楯無の座る応接用ソファの端、楯無の隣には黒のビジネススーツに服の上からでも分かる鍛えられた身を包み、硬質な黒の長髪を纏めた一人の男が座っていた。

その男を楯無はよく知っている。

なぜならば彼は、かつて彼女が手ほどきを受け、今彼女がコーチをしている少年の師、海堂宗一郎なのだから。

「そ、宗一郎さん…？」

「久しいな、楯無。話すのは夏の電話以来だが、直に会うのは何年ぶりか」

あるいは平素の楯無以上に余裕と威風を纏う表情で、宗一郎は楯無に挨拶をする。

楯無もやや呆気に取られたまま挨拶を返すと、すぐさま十蔵に向き直った。

「く、轡木さん！

どうして宗一郎さんがここに！？」

驚きのあまり慌てふためく楯無。

そんな彼女を十蔵はどこかからかうような目で見ながらも、穏やかに答える。

「私が呼んだからですよ。

海堂君のお父上とは少々縁故がありましてね。海堂君自身ともそれなりは。

ああ、更識君は知りませんでしたか、このことは。話しておくべきでしたね。

さて、それですね。彼を呼んだのは例の織斑君のことですよ。彼が海堂君の弟子というのは私も聞いていましたからね。

彼について報告を受けるなら、是非師である海堂君の意見も聞きたいと思っただのですよ」

「そ、そうなんですか」

自分が知らなかった事情に楯無は納得しつつ落ち着きを取り戻す。

そして改めて横の宗一郎に顔を向けると、気になっていたことを尋ねる。

「ところで宗一郎さん。
いつからいたんですか？急に後ろから話し掛けられるからびっくりしましたよ」

「あ？お前がこの部屋来た時にはもう居たぞ」

「へ？」

素っ頓狂な顔になる楯無。

そんな彼女の变化をどこか面白がるような色を声に乗せながら十蔵が言った。

「その通りですよ、更識君。

海堂君は君より早くここに来ていたのですけどね。君が来るということから、海堂君が少々君を試したいと言いましたからね。

私も少し協力させてもらいました」

「そういうことだ。とりあえず気配を消して部屋の隅っこに立って
たが、楯無。お前というやつは全然気付きやしない」

どこか呆れるように言う宗一郎に楯無は思わず小さくなる。
そして気付かなかった自分に心の内でペケを出しながらも、少しばかりの反論を試してみる。

「そんなこと言ったって…」

宗一郎さんが本気で気配消したら、私じゃ気づけませんよ」

ややむくれ気味になって言う楯無。

それを見て宗一郎はカラカラと笑う。

「何を言う。お前の修業不足だたわけ。まあ、確かに今から更に修業を積んだとして、本気の俺の一端に届くかは分らんがな」

暗に自分と楯無の間にはとてつもない開きがあると言いながら笑う宗一郎。

かつて自分に教えを授けてくれた人物の変わらない姿、不遜でありながらそれに見合う圧倒的実力を持った姿に、楯無は軽く頬を膨らませる。

そこで楯無は、自分と宗一郎のやり取りを微笑ましそうに見ている十蔵に気付くと、今が報告の最中であることを思い出す。

一度咳ばらい。

宗一郎に崩された調子をなんとか取り戻すと、表情を真面目なものに変えて報告を続けることにした。

「と、とにかく。報告を続けます」

「はい、お願いします」

楯無の言葉に十蔵は頷く。

そして宗一郎はと言えば、既に腕を組みながら表情を引き締めて話を聞く体勢に入っていた。

「元々の素地もそれなりにできていましたから、単純な実力という点では十分ですね。」

もちろん、操縦技術を始めとして戦闘の駆け引きや、そもそのIS戦の経験自体など、まだ足りない点がありますが、それを差し引いても問題はないかと。

少なくとも、昨日のような事態に再び見舞われたとして、例えば増援が来るまでの時間稼ぎや、安全確保のための撤退は十分可能です」

「それは良かった。」

やはり専用機持ちとなれば、万が一の事態も自力でくぐり抜ける力量が必要とされますからね。

とは言え、それでも彼らが生徒である以上、本来は我々が守るべきなのですが、ふがない話です」

そう言つて十蔵は僅かに目を伏せる。

例え専用機を与えられた国家代表候補生いえども、学園に在籍する間は学園の生徒であり、学園という組織はその生徒を全力で守るべし。

そう十蔵は考えている。

故に、致し方ないこととは言え、守るべき生徒を矢面に立たせることを彼は決して良いこととは思っていなかった。

「そうですね。私も、今回の一件で至らなさを痛感しましたよ」

楯無もまた十蔵の言葉に同意するように頷く。

学園を守る責務。その意識は、彼女の中にも強く存在しているからだ。

「ですが、更識君。」

君もまた、私や教員の皆さんにとっては守るべき生徒であるのは間違いないのですよ？

決して、無理はしないようにして下さい」

そう心からの氣遣いから楯無に忠告をする十蔵。

その言葉に、楯無は素直に頷く。

僅かに沈む空氣。だが、そのようなもの、知ったことかと言わんばかりに宗一郎は鼻を鳴らすと言った。

「まあ、二人の意志は崇高なものだと理解はしているがな。

少なくとも、我が弟子にはそこまでの氣遣いは無用だ」

「ほう。と言つと？」

宗一郎の言葉に十蔵は興味深そうに尋ねる。

それは宗一郎の言葉が不快だったからというものではなく、弟子の安否に関わることであるというのに余裕の態度を崩さない宗一郎の姿が氣になつたからである。

十蔵の問い掛けに、宗一郎は口の端をニヤリと吊り上げながら言った。

「なにせ俺が鍛え上げた弟子だからな。

そうそうやられはせん。むしろ、向こうが手を出して来るならば千倍にして叩き返して、手を出したことを後悔させると教えたからな。

そう心配はいらん。少なくとも、死にやせんだろう」

まるで我が事のように自信と余裕に満ち溢れた言葉。

それを聞いた楯無と十蔵は揃って目を丸くする。そして、十蔵が心底愉快と言つように笑い出した。

「はっはっは！なるほどなるほど。海棠君のお墨付きとは。いや確かに、君がそこまで言つならば、私も納得せざるを得ない」

しきりに頷きながらに言う十蔵。
そして宗一郎の隣では、宗一郎の言葉に驚いた楯無が未だに言葉を無くしていた。

「しかし、海堂君も変わりましたな。

昔の君はこうではなかった。他者にろくに興味を示さず、ただひたすらに己を鍛えるしか考えていなかった。
その君がそこまで言うとは。これも彼の^{一夏}影響ですかな？」

「まあ、かもしれませんな。

ええ、俺もあの馬鹿弟子を育てて、どうにも色々変わったらしい」

十蔵の言葉に、宗一郎は自分自身でも意外だったと言うように答える。

だが、その答えが十蔵には好ましいものだったのか、彼は浮かべていた微笑を深めた。

互いに笑みを交わす大人二人。だが、楯無だけはその笑いに混ざることがなかった。

「どうかしましたか、更識君？」

顎に手を当てて何かを考え込む姿の楯無に、十蔵が問いかける。

「いえ、ちょっと…」

返答に詰まる楯無。何かを言うべきか否か。そう悩んでいるように見て取った宗一郎と十蔵は、浮かべていた笑いを引っこめて、表情を固いものに変えて楯無を見る。

「なにか、気がかりがあるようですね」

十蔵の言葉に、楯無はやはり見抜かれていたかと思う。

いや、これだけあからさまに考え込んでいては、彼でなくても分かっただろうと思う。

楯無は顔を上げて、十蔵と宗一郎の二人を見る。

真剣な眼差しを自分に向けてくる二人の大人を見て、楯無は一つの決断をする。

それは、敢えて報告せずにいたことを含めて自身が胸の内に秘していた一夏に関する話を話す事。

正直なところ、話した所で何かが変わるといってもないかもしれないし、あまり話せるような内容でも無い。

だが、今日の前に居る二人は別。少なくとも、楯無にとっては信用のおける人物である。

「その織斑君ですが、少々この場だけの話としたいことがありますね」

その言葉に、十蔵と宗一郎の眼差しが鋭いもの変わった。

そして楯無は話す。

一夏の白式の解除されていた武装のリミッターと、対照的に低下していた搭乗者保護機能のリミッター。

そこから予想される、白式の攻撃力の凶悪性。

そして 学園祭での一夏のテロリスト殺害。

「なるほど……。確かにこれは、軽々しく報告書には載せられないですね……」

報告を受けた十蔵は静かに言う。宗一郎もまた、腕を組みながら鋭い視線を楯無に向けている。

そして楯無は今、部分展開したミステリアス・レイディの腕部装甲から空間モニターを展開し、学園祭での一夏の戦闘映像、奪われた白式を取り返した後のソレを映していた。

激しい戦闘の末、敵の一人が骨一つ残さずに焼かれるという凄惨な映像を前にして、十蔵と宗一郎は視線を険しくしこそすれど、動じる様子は見せずに落ち着いた姿で映像を見る。

そして映像は黒の霧を纏う一夏が楯無に斬りかかり、エネルギー切れで白式が解除された所で終わる。

映像を終え、展開していた装甲を解除する楯無。

映像の最後の方、一夏が楯無に斬りかかった所で宗一郎が僅かに眉を動かしたのが気になったが、今は報告を優先させることにした。

「なるほど、分かりました。

ありがとうございます、更識君。君もこれを我々に打ち明けるのに気苦労があったでしょう」

「いえ、そのようなことは…」

楯無に礼を述べる十蔵に、楯無は首を横に振る。

「それで轡木さん。この件に関しては」

「そうですね。更識君が判断したように、これは公式報告に載せるべきではないでしょう。

確かに彼の行った行動が全面的に正しいとは言えません。無論、正

当然が全く無いと言うわけでもありませんが、そうですね。肯定、批判、どちらか一方に絞ることができないと言うべきでしょうか。

映像を見るに機体の暴走、とも取れますね。確かこの後、気を失った織斑君は意識を取り戻した時に記憶の混濁があったとか。とすれば、やはり一概に彼を批判はできない」

「もしこの件が委員会の方へと流れれば、向こうは恐らく好都合とばかりに彼の引き渡し要求を強めると思います。私としては、それは現状好ましくないかと」

「それについては私も同感ですよ。」

このIS学園に所属する以上、生徒は皆外部の干渉より守られなければならぬ。

それは彼も例外ではありません」

そうして学園の長である男と、生徒会長の少女は行動の方向性を決めた。

そして楯無は、今度は宗一郎の方へと向き直った。

「あの、宗一郎さん。今回のことは」

「別段、俺はどうとも思わん」

「え？」

素っ気なく放たれた言葉に、楯無は僅かに目を丸くする。

映像を見終えて、腕を組んだまま鋭い瞳のまま窓の外を見ていた宗一郎は、楯無に向き直ると再び口を開いた。

「別段、俺はどうとも思わんということだ。

確かに俺はあいつの師で、あいつに剣を教えた。いいか楯無。武門の師なんて言ってもな、実のところ弟子にしてやれることなんざ意外に限られている。

せいぜいが技を授けるといふ種を蒔くこと。それをいかに育て、使うかは弟子のあいつの領分だ。これがあいつの選択だというなら、それはそれで構わんさ。後は、あいつの後ろで俺がどっしり構えているくらいか。

そこまで深く、師は弟子に干渉はしてやれん」

「でも！宗一郎さん！あなただって分かってるはずですよ！アレは決して軽いことじゃない！

そのことが一夏君にどう影響するか

「楯無」

宗一郎のまるで動じない態度に、あるいは放任とも取れる態度に声を大にする楯無。

だが、それを宗一郎はただの一睨みで黙らせる。

狼狽を明らかにする楯無が口を閉じたのを見た宗一郎は、楯無に向けていた射殺するような視線を僅かに　しかし依然厳しさは保ったままに　緩めると、どこか諭すように言った。

「いいか、楯無。俺はあいつの師だ。こと、武の関わるあいつに関するアレコレは、俺は他の誰より詳しいつもりだ。　千冬よりもな。

俺が問題無いと言っているのだ。ならば問題はない。少なくとも、この一件があいつの心に云々などという心配は微塵たりともない」

「でも」

一夏を案じてか、なおも食い下がろうとする楯無。それを見て宗一郎は、眼差しを緩めないままに胸の内ですれ。自らの弟子の罪つくりぶりに。

普段ならばここで楯無にからかいの言葉の一つでもかけていただろうが、流石の宗一郎もそれは今は控える。空気とは的確に読まなければならないものなのだ。

「ふむ…」

自身に強い視線を向ける楯無、ただ平静を保って二人を見守る十蔵。双方に視線を向けた宗一郎は、一つの決定をした。

「あのな、楯無。

別段、今回が初めてというわけでもないぞ」

「え？」

何気なさと共に出た宗一郎の言葉に楯無が反応する。見れば、十蔵も僅かに目を細めて宗一郎に視線を向けていた。

「さっきの話同様、こいつは他言無用にしてもらいたいが、一夏のやつが人を殺したのは、今回が初めてじゃないということだ」

その言葉に楯無が言葉を失い、十蔵は更に目を細め眼光を鋭くする。

「そうか。さすがの更識も全ては掴めていなかったか…」

簡潔に言えば、第二回モンド・グロツソ決勝戦当日。その日に一夏

は人を殺した。

時はあいつの誘拐事件の最中。殺したのは、誘拐犯の一味だ」

「それ、本当ですか？」

「嘘をつく理由は無いな。

そうだな、話してみるのも一興だろう。何故、俺があいつを弟子に取ったか。

あいつ自身の気質も含めて」

楯無や十蔵の反応なぞお構いなしに語り出す宗一郎。

だがそれでも二人は宗一郎の話に耳を傾けることにした。

この状況下で話す以上、関連性のある話であることは確実。

少なくとも、このような状況下で無駄話をするような人間では無いというのが二人の宗一郎への認識だった。

「元々は篠ノ之の親父殿、例の篠ノ之束とやらの親父殿に紹介されたのが始まりだ。

修業中だった学生時代に、篠ノ之の親父殿には色々世話になってな。その縁故なんだが。

最初は何事かと思った。だが、俺以外に相応しい師が居ないと言われてな。あの親父殿がそこまで言うならと、一度会ってみようと思つて呼び付けたわけだが。

ああ、一目見て理解した。『こいつは俺と同類だ』とな」

「同類？」

首を傾げる楯無に、宗一郎は頷く。

「実際にあいつに才があるのは分かったのは稽古を付けてからだか、

会って目を見てそれ意外の、心の資質というやつか。それは分かった。

あいつはな、その時まだ十そこらのガキの癖に、ろくに世間を知らないガキの目をしてやがるのに、その奥に俺と同じ色がありやがった。

そうさな、言うなればかつての当たり前で現代の異端。刀を手に戦場で人を斬ることを生業にしていた人間の目をな」

楯無も十歳も何も言わない。

ただ、黙って宗一郎の話に耳を傾けている。

「俺が山に籠ってるのは、まあ性分だとか鍛練に集中したいとか、実家とのあれやこれだとかそもそもそこまで世間に興味が無いとか、まあ色々あるがな。

やはり一番の理由は俺自身、俺が異端だと分かっているからだ。技がどうかじゃない。心がな。

学生身分から感じてた。周りとの隔たり、ズレをな。なんとか上手くごまかしてやっちゃいたが、大学を出る頃にはもう無理だと悟ったよ。

だから俺は山に籠った。死んだ師匠から免許皆伝も貰ってたからな。後はひたすら己を鍛えるだけ。

世間との付き合いなんざ、山の周りの町内連中がせいぜいだ。まあ、それでも電話だメールだの薄い付き合いでなんだかねで昔の連中とも縁は繋がってるから奇妙な話だが…

ふむ、話がズレたな。ともかく、かい摘まんで言えば会ったばかりの一夏に俺とそっくりの気質を見出したから、弟子にしたというわけだ。

この現代にありながら、命を懸ける死合いに躊躇無く挑み、その果てを是とできる気質をな」

六年前、初めて一夏と会った時の驚きはよく覚えている。
なまじ自分の異質さをよく理解しているが故に、まさか同類に出会うことになるとは思ってもいなかった。

「そうだ、俺は興味があつたんだよ。俺と同じ気質を持ったガキに、俺の剣を、現代に生き残った数少ない純然たる殺法の剣を教えたらどうなるかをな。

ククツ、言っちゃいないが、あのブラコンが聞いたら怒りそうな理由だ」

どこか自嘲を含むような笑いを漏らす宗一郎。

そして僅かに間を開けると、どこか遠くを見つめるような眼差しで続きを語り出した。

「それで、あいつもいよいよ俺の弟子らしくなった時に起きたのが、例の誘拐事件ってわけさ」

織斑一夏誘拐事件。それについては楯無も十蔵も知っている。

何せあのブリュンヒルデが現役引退のきっかけになった事件だ。

何があつたのか、裏付けは容易かった。もつとも、そこで一夏が為したことは初耳だったが。

「楯無、それに轡木翁。

あいつは、一夏は、あるいは俺以上に人斬りの気質があるやもしれん。

あいつが俺に人を殺したと報告した時、確かにあいつは震えていた。だがな、それは自らの行動の結果、いらん迷惑を千冬にかけたのだ。なんやら無意識で殺したのが嫌だったので、殺したことそのものへの後悔だの、あいつは持って居なかった。

あいつはな、そういうやつなんだよ」

そう言つて、宗一郎は話を締め括る。
そして手荷物である鞆を持つと、座っていた椅子から立ち上がる。

「俺からはもう話すことは無い。聞く必要のあることもないだろう。
失礼させてもらつ」

「…分かりました。
海堂君、今日はわざわざご足労頂いてありがとうございます。君からの話を聞
けて良かった」

「轡木翁。最後に一つ、頼まれてやくれませんか？」

立ち上がった宗一郎は、振り向いて部屋を辞そうとする前に、十蔵
の顔を見据えて言った。

「なんですかな？」

「弟子を、一夏を頼みたい。
あの気質だ。色々と厄介をかけるやもしれないが、そこを押しして頼
みたい。」

直接的な力に訴えるやり口は、どうにかできるように仕込んだ。
だが、それが効かない権謀。この学園でそれらから守ることを頼め
るのはあなたしか居ない」

それは宗一郎の本心からの頼みだった。
確かに彼は、ほとんど表に出さないが、非情の殺法を是とする一夏
同様の気質の持ち主だが、それでも情はあった。
手塩にかけた弟子を案じる心。それゆえの、頼みだった。

そしてそれを受けた十蔵は、見る者に安堵を抱かせる穏やかな笑みを浮かべて確約した。

「もちろんです。」

織斑一夏君もこの学園の、私の生徒です。全力で、守りましょう。他の全ての生徒と同じように。それが、私の責務です」

「かたじけない」

深々と頭を下げる宗一郎。

そして彼は学園長室を辞した。

「更識君。君もご苦労様でした。」

報告はもう結構です。このまま、海棠君を見送って下さい。後は戻って構いません」

「分かりました」

十蔵の指示に、楯無も椅子から立ち上がると一礼してから部屋を辞す。

そして部屋に一人残った十蔵はしばし瞑目すると、部屋の最奥の自身のデスクに戻り、積み重ねた書類の処理を再開した。

「宗一郎さん！」

既に夕日が窓から差し込む学園の廊下。

十蔵より宗一郎の見送りを頼まれた楯無は既に先を歩いていた宗一郎に駆け足で追い付く。

「どうした、楯無」

「いえ、轡木さんに見送りを頼まれて」

「別段不要だがな」

「そう言わないで下さいよ。」

曲がりなりにも今の宗一郎さんは、学園長が直接呼んだお客様の立場なんですから。

最低限、帰る時の見送りくらいは必要です」

「…勝手にしろ」

それだけ言うと、宗一郎は再び歩き出す。その隣を楯無が歩く。

ただ無言で歩く二人。夕方という時間帯ゆえに校舎に残る人は少ないのか、誰かとすれ違ふということとはまるで無い。

「楯無、何を言いたい」

「え？」

不意にかけられた言葉。

思わず聞き返す楯無に、宗一郎は足を止めると、真正面から楯無を見据えて言った。

「なにぶん俺くらいに極めた天才ともなるとな、この程度のこと、手に取るように察することができんだよ」

「…凄い自信ですよ、相変わらず。」

いや、確かにちよつと話があるのは事実なんですけど」

憚ることなく得意顔で自らを称賛する宗一郎に、楯無は苦笑いを浮かべながらも宗一郎の指摘が当たりだと言う。

そして、少し前から気になっていたことを尋ねることにした。

「二つほど、聞きたいことがありました」

「ほう？言つとくが、一夏の事情に関してはこれ以上は話さんぞ。いかに師いえども、あまり弟子のプライベートを吹聴はできん」

「いえ、確かに一夏君に関わりはありますけど、そういうことじゃ

…
彼の使う技について、二つ」

「…言ってみる」

僅かに表情を引き締めて質問を受け付けた宗一郎に、楯無は素直に尋ねる。

「一つは動きです。」

昔、宗一郎さんが私に手ほどきをしてくれた時に、組み手で宗一郎さんが使ったのと同じ動きを一夏君は使っていました。

まるで、攻撃が全てすり抜けるような…

それにもう一つ。あの映像の最後、一夏君が私に斬り掛かった時です。

あの一太刀、私は心底恐ろしかった。かわせる気がしなくて、なんというか、速いとか上手いとか正確とか、そういうのじゃないもつと根本的な何かが違っているような一太刀。

宗一郎さんなら知ってると思って」

「…ああ、知っている」

首を縦に振り、肯定で返す宗一郎。

その目を、楯無は強い視線でまっすぐに見つめる。言葉にするまでもなく、話してくれと言う意志が目で伝わる。

その視線を宗一郎は真っ向から受け止める。

そのまま数秒、二人は視線をかわす。

不意に、宗一郎が小さく笑いを漏らした。

「フツ、俺のところで鍛えてた時は未熟極まりないガキだったのが、随分と良い目をするようになったじゃないか」

「人は成長するものですよ。しなきゃならない」

「確かにそうだ。」

良いだろう。昔は不要と思ひ話さなかった。が、今は話そう」

そう言って宗一郎は腕を組むと、廊下の壁に背を預けて語り出す。

「だが、教えるにあたって一つ、言うておかねばならないことがある」

「なんです?」

「お前が俺に聞いた二つの技。実はだな」

そこで宗一郎は楯無に視線を向け、からかつよつに口の端を吊り上げて言った。

「明確な『名』というものを持っていないんだよ」

第六十七話（後書き）

ネタにまみれた前半、シリアス臭漂う後半でお送りしました。

久しぶりに登場した宗一郎氏。

実はこの人、一夏に負けず劣らず、下手したら一夏以上に物騒な御仁という設定です。

本人もそれを理解しているからこそ、山にこもってるというわけですが。

…アレ？おかしいな。

本当ならもつと後書きに書きたいことがあったはずなのに、いざ書き始めたら色々頭から抜けてる…

もしや若年性痴呆とか…いやいやさすがにそれはないだろう…

次回こそ、次回こそは五巻が終了すると思います。どうかお付き合いの程、よろしく願います。

…しかしな…次回の一夏も一夏で、イイ感じにイカれるからなあ…
今から反応が怖い。

第六十八話（前書き）

ついに五巻終了。

話数にして20近く。リアルタイムで三ヶ月くらいかかりました。どうしてこうなった。

私事ですが、風邪を引きました。

模試の自己採点は悪い。風邪は引く。愛用のイヤホンが壊れる。踏んだり蹴ったりとつかれたりですが、それでもなんとか書こうと思いました。

で、気分上げにFate/Zeroを読んで、ケンイチ読んで。そして風邪でふわふわ時間な頭で書いた結果、今回の話は…

香ばしく香る厨二なかほり。

そんな感じですが、とりあえずどうぞ。

第六十八話

「名前が…無い？」

「そつだ」

分からないと言いたげな楯無を見て、宗一郎は緩めていた口を固く結び直す。

「さて…どう話そうか。」

そつだな。少し、昔のことも含めて話すか」

そして宗一郎は廊下の壁に背を預けたまま、窓の外の空に目を向ける。

夕焼けに彩られた橙色の空を見ながら宗一郎は、己の過去に目を向けるかのように遠くを見つめる目をする。

「もう十年以上前、俺がまだ修行時代だった時、死んだ俺の師が生きてた頃だ。」

さつきも言ったが、俺という人間はすこぶる才覚に溢れていてな。

ちょうど今の一夏やお前より少し上の歳だったが、武人としては一夏はおるか、お前よりも遙か上にいた」

「また、話の頭から随分と自信満々な自己評価ですな…」

最初から自分を才覚溢れると臆面も無く言う宗一郎に楯無は苦笑いを浮かべる。

だが、宗一郎は楯無にちらりとだけ視線を向けると、すぐに窓の外に視線を向け直す。

「俺の師はまあとにかく昔気質の気難し屋なジジイでな。俺に技を教えるにしても、簡単な形だけ教えて、後は自分でものにしろってスタンスだった。」

そのジジイが俺に最後に教えたのが、例の二つというわけだ」

そこで宗一郎は一度目を閉じる。

或いは、これから自分が伝えることを頭の中で整理するかのように。

「ここからが本題だ。」

さっきも言ったが、名前が無いというのは、実は俺自身が未だに決めかねている節があるからだ。

師匠が俺に教え、そして一夏が使ったあれはな、そもそも技と呼べる代物かどうかすら怪しい」

「それは…?」

「そうさな。言つなれば技ではなく、むしろ『境地』と呼ぶべきか。」

俺は師匠から、二つの心構えを教わった。それに従った結果が、お前が見た二つというわけだ」

「じゃあ、宗一郎さんは一夏君にその心構えを伝えたと?」

尋ねる楯無に、宗一郎は首を横に振る。

「いいや、俺が教えた心構えは片方、動きの方だけだ。」

面倒だ。せつかくだから纏めて説明してやる。耳の穴かっぽじってよく聞け」

その言葉に、楯無は僅かに居住まいを正した。

「先に動きの方だな。」

俺は師匠から教えられた心構えをそのまま一夏に伝えたわけだが、それは『敵の目を見て、その奥の心を見る』というものだ。この心を見るといのはな、目から相手の考えや行動を先読みすることだ。

中国拳法には、筋肉の微細な動きから次の手を読む、『聴勁』という技法があるが、それを目でやるようなもんだな。では、実際にそれをやってみるとする。するとだ、見えるんだよ。まるで一枚の絵のように相手の行動イメージがな」

「……」

楯無は何も言わずに宗一郎の話に耳を傾ける。

だが、その顔には明らかな緊張があり、宗一郎の言葉を一言たりとも聞き逃すまいという思いが見てとれた。

「記録にあつた一夏の動きはまさにそれだ。」

相手の目から行動パターンを読み取る。そして、己の制空圏をギリギリまで絞ることにより、紙一重の完全回避を可能とする」

「それが…境地の一つですか？」

「いや、残念だがこれではまだ足りん。」

おそらく、その先が真髓だ」

ふと、楯無は宗一郎の言葉に気になる点を見出だした。

「おそろくって、どういう意味ですか？それじゃまるで」

自身がそこまで達していないかのようではないか。

そう言おうとして、楯無は宗一郎の目がどこか自嘲の色を帯びていることに気付いた。

「そうだな。そうだ。」

この 面倒だ、技法と呼ぶとしてだ 技法の極意、真髓はな。

確かに俺は理解した。ある時不意に、頭の中で電球が点いたように悟った。だが、同時に俺には至れないとも理解した。そして、一夏にもだ」

「どういう…:…:ことですか？」

「簡潔に説明するとだ。」

目を見て考え読むなんてのは、まだ初歩の段階に過ぎんだ。その極意はな、相手の思考を読んで、自身の思考とシンクロさせることにより、流れを相手と同一のものにする。

そして、そのまま一気に一体化した流れを自分の制御下において、相手の動きを完全にコントロールすることにある」

「それ…:反則じゃないですか？」

楯無にはそれしか言えなかった。

武に限った話ではなく、勝負事には何事にも流れが存在する。

それを自分ごと相手に巻き込まれるのだ。巻き込まれる側からすれば、完全に動きを握られているようなものだから堪ったものではない。

「いやでも、待って下さい。」

どうして、その極意に至れないって言えるんですか？

「夏君は…まだ修行中ということを考えれば分かります。でも、貴方が至れないなんて」

「それはな、楯無。」

もう修行云々ではどうにもできない、相性の問題だからだ」

「相性？」

「そうだ。」

いいか、楯無。さつきも言った極意、要約すれば己と相手を一体化させるということだ。

そして、俺も一夏も見事なまでに殺法の使い手。するとどうなる？
殺法の使い手が自己と相手を一体化させる。それは、自分で自分を殺すようなものだぞ？」

「つつ！！」

まるで冷水を頭から浴びせられたかのように、楯無がハツとした表情を浮かべる。

「俺の師がどうやってこの技法を知ったかは知らん。」

だが、おそらくこの技法は活人を旨としてこそ真価を発揮するものだ。

少なくとも、俺も一夏も真髄には至れんな。相性が最悪すぎる」

いかに言葉を返すべきか、楯無は閉口する。

自分の話を聞きながら表情を二転三転させる楯無を見て、宗一郎は愉快そうに軽い笑いを浮かべた。

「まあ、初歩段階の動きの先読みでも十分強いわな。おそろく、一夏もそれを重点的に鍛えるだろうよ。」

「それが、あのすり抜ける動き…境地の一つつてことですか？」

「そうだ。」

とは言え、俺も目を見ろというヒントだけで、できるようになるとは思わなかったがな。」

これで一つ目の講義は終わりだと言う宗一郎。

だが、楯無はそこで姿勢を緩めたりはしない。むしろその次こそが本番。

危つく自身を斬りかけた一太刀の話を目前に、楯無は唾を飲む。

「では次だ。」

最後の一夏の一太刀だな。実はな、こいつの方がよっぽど境地という言葉が相応しいんだよ。そして、その仕組みも至ってシンプル。まあ、会得は至難だがな。」

「と、言いますと？」

「あの一太刀。あれはな、それこそ技と呼ぶに程遠い、境地が明確な形を持ったものだ。」

ほらアレだ。なんか超能力とか不可視の不思議パワーが視覚化されたようなやつだ。」

そのように宗一郎が言うと同時に、二人の脳裏にはドドドドドド…なアレやゴゴゴゴゴゴゴ…なコレやらが色々浮かぶが、すぐに思考の外に追いやる。

話がズレたことをごまかすように一つ咳ばらいをする宗一郎。そして、再び真面目な顔で語り出す。

「楯無。武において最も重要なのは、心技体の合致というのは知っているな？」

宗一郎の問いに楯無は頷く。

心技体。心と技、体を完全に一体にしてコントロールすること。それは古今東西あらゆる武術において、基本にして深い境地と言われる。

「例の一太刀。アレはな、その心技体に更にもう一つ、剣を加えたものだ。

即ち、心技体剣。四つを合致させる、更に上位に位置するものだ。まさに、技と言う枠を超えた境地と呼ぶに相応しいとは思わないか？」

「それは、確かに…」

言われてみれば納得のいく話である。

心技体の合致、それ自体がもはや境地なのだ。ならば、それなもう一つアクセントを加えた心技体剣ともなれば、境地以外にいかにか形容しよう。

「というわけで解説終わり。

オラ、さっさと行くぞ」

語ることを語った宗一郎は、もはや話すことは無いと言っようように歩き出す。

その背を、楯無は少し遅れる形で追った。

そして学園正門前。後はすぐ近くにある本土と学園島を結ぶモノレールのある駅まで一直線であるため、楯無の見送りはここままでと相成った。

「いいんですか？一夏君に会わなくて？」

尋ねる楯無だが、宗一郎は首を横に振る。

「不要だ。わざわざ会う必要もあるまい。

…ああそつだ。これがあつたか…」

そう言つて、宗一郎は手にした鞆から一つの冊子を取り出して楯無に手渡した。

上質紙を束ね、丁寧に装丁がされた冊子ではあるが、市販の書籍という風にも見えない。

そして、冊子は麻の紐で封がされていた。

「そいつを一夏に渡しておいてくれ。そうさな、あいつ当ての荷物が間違つてお前に届いたという口実でいいだろう」

冊子を手に首を傾げる楯無に、宗一郎は半ば一方的に告げる。

「あの、宗一郎さん。これは？」

「ん？ああ、それが。

夏の折に感じたのだがな、どうにもこれからは、今までみたいにあいつに纏まった稽古を付けてやるのが難しくなりそうだからな。

「一先ず、俺がこれからあいつに伝えたい技法を纏めてみた。まあ、有り体に言えば俺の秘伝書と言うべきか。無論、さっき話した二つも納めてある」

「え？」

手にした冊子を見ながら、楯無は目を丸くする。

宗一郎の言葉通りなら、今楯無が手にしている冊子には、世界最強クラスの武人のエッセンスが詰まっていることになる。

そのことを理解すると同時に、楯無は冊子を開いて見てみたい衝動に駆られる。

だが、封がされている以上、それはできない。

そして、その封が宗一郎の意思を明確に告げていた。

「これ、一夏君以外に見せるつもりはないんですね…」

「当然だ。俺の秘伝を教わるのは、俺の弟子以外にいない」

きつぱりと告げる宗一郎に、楯無は言い知れぬ感情を抱く。

それは一夏への嫉妬だったのかもしれない。自らが尊敬する人物の弟子となり、その技を受け継げることへの。

だからだろう。いつの間にかこんなことを口走っていた。

「でも、IS操縦者にはこれは…」

言ってから楯無はしまったと思う。

今の言葉、少なくとも宗一郎には看過できないものだろう。不用意なことを口走った自分を内心で嗜めつつ、恐る恐る宗一郎に視線を

向ける。

「まあ、お前の言うことも尤もだな。

ISを動かすなら、そこまで重要なものでもないさ、ソレは」

だが、予想に反して宗一郎の言葉は、その目は穏やかだった。

言いながら楯無を見る宗一郎の目は、まるでむくれる子供を見て笑う大人のソレだった。

「だがな、お前には悪いがこいつは俺と一夏の、師弟の話だからな。すまんが、IS云々はまた別なんだよ」

「そうですか…」

叱責が無いことに安堵しつつ、楯無は一抹の寂しさを拭えない。同じ人物の教えを受けながら、一夏と楯無の間にある決定的な差。それを感じずにはいらなかった。

「…楯無。つかぬ事を聞くが、IS操縦者としてのあいつをどう思う」

「え？IS操縦者としての、一夏君ですか？」

不意に尋ねられた問いを不思議に思うも、問われた以上は真面目に答えようとする。

だが、楯無が答えるよりも早く、宗一郎が次の言葉を紡ぐ。

「そうさな、操縦者としては異端と言ったところだろう。」

男だからというのではない。その技法の根幹が」

「…ええ」

宗一郎の指摘に楯無は頷く。
おおよその操縦者はISの操縦が上手くなることを強さと成している。

だが、一夏は生身のままの戦技という力を直接ISでの強さへと変換している。

どちらかが優れているという話ではない。

ただ、圧倒的大多数と超極小数の違いだけだ。

そこで楯無は宗一郎の言葉の意図を理解した。

つまり宗一郎は、一夏に新たな技法を授けることで、ISも引くくくめて一夏の実力の向上を目的としている。

「分かったか。まあ、つまりはそういうことだ。

…俺はISのことなぞ門外漢だ。元より興味も無い。だが、弟子が強くなるための糧を俺に求めるのであれば、俺は師としてそれを与える。

ただ、それだけだ」

「そうですか…」

そう呟くように答えることしか楯無にはできなかった。

一夏と宗一郎の間にある確かな繋がり。その固さに、自分が入る余地の無いことを改めて痛感させられる。

ふと、楯無は手にした冊子に目を落とす。

これを元に修練を修めれば、一夏の実力は更に向上するかもしれない。それ自体は楯無としても歓迎すべきことだ。

だが、宗一郎の秘伝ということとは間違いなく殺法、あるいはソレに類するものであることは確実。

別段、殺法それ自体を否定することはしない。それもまた一つの側面ゆえにだ。

だが、この冊子に納められた殺法の数々を一夏が習得したらどうなるのか。

目の当たりにし、宗一郎から聞かされた一夏の気質を考えて、楯無は僅かな不安がよぎった。

「宗一郎さん。確かに、これがあれば一夏君はもっと強くなるかもしれない。でも、それで一夏君が…もし…堕ちたならば…」

数多の殺法を納めた修羅と化すかもしれない。その事を考え、楯無は言葉が重くなる。

「…夏にな、久しぶりにあいつと会った時、あいつは目が変わっていた。自分がどんな道を進むのか、それをただ流されるのではなく、自らの意思で決められる目になっていた。

あいつが自分の信念に基づいてその道を行くというのであれば、俺は否定はできない。

なあ楯無。人に情を注ぐというのは、想像以上に難しいことだぞ。何せただ構うだけでは甘やかすと何ら変わらん。そいつの成長を妨げる。

確かに俺が直接手を出せば、あいつがそのような道を選ぶこともなかるう。だが、それが本当にあいつのためになるのか。仮にそれがあいつの成長を妨げる要因になるのならば、俺は不用意に手出しはできない」

そう言う宗一郎の言葉には、どこか歯痒さを感じているかのような苦さが含まれていた。

それを聞いて楯無は、何より宗一郎が一番に一夏を案じていることを悟る。

だが、案じていても安易に手をさせない。

不用意に手を出すことで弟子の成長の妨げになるならば、或いは師への依存となったのならば。それらへの憂慮が宗一郎の言葉から感じ取れた。

例えそれが険しい道であろうと、弟子が確固たる意思で選んだ道ならば、師は迂闊に口を挟めない。想うが故の苦悩が滲んでいた。

「でも、宗一郎さん。」

例え、例え宗一郎さんが一夏君を肯定したとしてもですよ。それが万人の選択とは限らない。

いえ、宗一郎さんだって分かっているはずですよ。肯定した選択が、決して正しいとは限らない。

仮に一夏君が堕ちたとしたら、それは「

「止める必要もあるだろうな。だが、あいにく俺は出ない。出るならば、他に止める者が居なくなつた最後の最後だ」

「何故、ですか？」

宗一郎は僅かに押し黙る。

そして、どこか自嘲するように薄い笑いを口元に浮かべる。

「そつさな。」

あいつが修羅の道を選んだとしてだ。おそらく俺は、人の道理としてそれを止めるべしという考え、そして、武人としてひたすらに強さと戦いを求める姿を肯定する考え、両方の板挟みになるだろうか
らだ。

こいつは明らかな迷いだ。ならば、断固たる意思で道をゆくあいつを止められん。迷いを持ったままではな

「そうですか…」

ただそれだけ言う楯無。今、彼女はあることを思っていた。それは、なんて面倒臭い師弟だと。

「ふむ、いや待てよ。こいつならいけるか？」

そこで宗一郎は顎に手を当てて呟く。

すると一気に楯無に向き直り、その手にあった彼の秘伝書をいつの間にか楯無から取り上げていた。

「ちよっ…」

何事かと尋ねようとする楯無だが、言い終わるより早く宗一郎は指で麻紐の封を容易く断ち切る。

そして、封が解かれた秘伝書を再び楯無に手渡す。

「あの、宗一郎さん？」

「楯無。少々予定変更だ。お前にもこいつを使うことを許す。というか一夏とお前、二人でこいつを物にしる」

「はい？」

いきなりの言葉に楯無はその意図を飲み込めずにいた。そして宗一郎の言葉の意味を冷静に解釈する。弾き出された結果は、宗一郎は楯無に一夏と共に彼の秘伝を学べと言ったこと。

「あの、いいんですか？」

つい先程、宗一郎は一夏以外に教えるつもりは無いと言った。故にその意図が掴めずにいた。

「ああ、構わん。おそらくはその必要があるやもしれん。

良いことを教えてやる、楯無。物事の状態は常に変化を続けている。それに適応できるように上手く立ち回るのが、世の中をやっていく秘訣だ」

「それにしても急すぎますよ。

いやでも、どうして私に？」

そこで宗一郎は再び表情を引き締める。

そして、どこか敵かさを含む声音で言った。

「俺は自分の技、その威力に相応の自負がある。おそらく、それを会得すれば、一夏の実力は生身、IS共に更なる飛躍を望めるだろう。

まあ、本来はISなんざ考慮してない技ばかりだが、あいつなら上手く応用を効かせるだろう。

さて、何故俺がお前にも会得を許したかだな。簡単な話だ。万が一の時はお前が止める、あいつを」

その言葉に楯無は自分の顔が強張るのを感じた。同時に、自分の手にある秘伝書が、その重みを増したかのような錯覚を覚える。

「仮に、仮にだ。」

誰かがあいつを力づくでも止めねばならない時、この学園でそれができるのはお前くらいしか居ないだろうからな。ならば、学んでおいて不足はあるまい」

「ま、待つてください宗一郎さん。そんな、いきなり話が飛びすぎですよ。」

いくらなんでも、そんな事態」

「無いとは言い切れまい。」

何せ、あの我が弟子だからな」

「それは…まあ…」

何故か納得してしまう楯無。

ふと、脳裏に浮かぶ一つのビジョン。

死屍累々と倒れ伏す挑戦者の山。その頂点でとても特徴的なポージングを取りながら、石でできた面を被りそうな勢いの高笑いをする一夏。

挑む挑戦者を、無駄無駄無駄と言いながらちぎっては投げっていく一夏。

非常に鮮明に想像できてしまったことに、楯無は思わず頭を抱えたくなった。

「な？」

「な？じゃないですよ。」

いやでも、確かに割とあっさり想像できちゃって…

というか、なんで宗一郎さんは出るつもりがないんですか。迷いがあるなんて言っても、実際その気になればあっさり振り捨てるでしょう、あなた」

「あゝ、まあ確かにそうかもしれんな。だがまあ、それでも俺が出るなら最後だ。」

やはり師とは弟子にとって最後の壁たるべきだからな。中ボスでは終われん」

「世の中にはラスボスより鬼畜な中ボスもいますよ。例えばバル

」

「そこから先は黙れ、言うな。そも、仮に俺と一夏が本当に敵同士になって戦ってみろ。」

どちらかが死ぬぞ？さすがに俺も弟子を手にかけてくはない」

そう思ってるならやらなきゃいいじゃんと思う楯無だが、敢えて口に出したりはしない。

「それで私ですか」

「そうだ。言うておくが、千冬は当てにするなよ？」

「な、なんでですか？」

或いは自分以上に一夏を止めるのに適任かもしれない存在。

それを当てにするなと言われて、楯無は疑問に思う。

「なんでも何も、あの重度のブラコンのことだ。確実にここぞという時に迷うぞ。」

その隙を突かれてやられましたじゃ、笑い話にもならん」

(うわー、言い切っちゃったわ、この人)

真顔で臆面も無く言い切る宗一郎に、楯無は思わず苦笑いを浮かべる。

だが、同時にどこか否定しきれないことに、楯無は更に苦笑いが深まる。

つい先刻まで二人の間にあった重い空気は、いつの間にか払拭されていた。

「この学園に居る間のあいつは、俺では面倒を見れんからな。頼むぞ」

そのまま立ち去ろうとする宗一郎だが、ふと足を止めると楯無に背を向けたまま最後の言葉を言う。

「楯無。お前が見せた一夏の映像。お前や轡木翁はあれを暴走と見たがな。俺にはそんな生温いものには見えなかったぞ」

「え、それって」

「いや、気にするな。じゃあな」

それだけ言って宗一郎は去っていく。最後の言葉が気になったが、ひとまずは保留とすることにした。

遠ざかる背が駅の中へと消えてから、楯無は手にした秘伝書を見る。

そして、そのページをめくっていく。ページの二つ二つに数多の技が載っている。

そのどれもが高度かつ強力な技であり、同時に懇切丁寧な解説が付けられている。

宗一郎が弟子である一夏に託そうとした全て、それが収められていることを改めて楯無は実感した。

そしてページの最後。そこには先ほど宗一郎が話してくれた二つが載っていた。そして、その二つに名前は付けられていなかった。

「あら？」

そこで楯無はあることに気付く。ページの端、そこに手書きの文字が小さく書かれていた。

他の文字は全て印刷されたものであるがゆえに、その違いは歴然だった。

「……………フフッ」

書かれていた文字を見て、楯無は小さく笑いを零す。書かれていた文字は『名を付けたければ、自分で考えて付ける』。そうあった。

宗一郎の秘伝書をゆっくりと閉じる。そして楯無は校舎へと足を向ける。向かう先は生徒会室。

今頃、新たな生徒会役員を迎えるために、虚が一夏をお茶にと誘っている頃合。その時に手渡そうと思う楯無だった。

その夜、楯無は寮の階段を上っていた。
部屋に中々戻つて来ない一夏。既に門限は過ぎているため、寮内のどこかに居るだろうと当たりをつけていた彼女は、その足が自然と屋上へと向いていた。

或いはホテルのようでもある造りの学生寮であるが、屋上付近ともなると、その造りはやや無機質な殺風景となる。

屋上へと繋がる鉄の扉。そのノブを掴み回す。

金属同士が擦れる音が鳴り、ドアが開かれる。

秋の涼しさがそろそろ目立つ夜、そこに一夏の姿はあった。

何をするでもなく、ただ佇む。高所、さらに海上にある学園島という立地上、屋上には緩やかな風が吹いており、それが一夏の身を包む制服をはためかせる。

「居た居た。探したわ、一夏君」

「ああ、会長」

声を掛ける楯無と、それに応える一夏。楯無はゆっくりと一夏に歩み寄り、二人の間がメートル程になったところで足を止める。

「もう、こんな時間にこんな場所で。何をしてるの？」

「いや、ちよつと考え事を。短期間に色々あったから……」

楯無は納得するように頷く。

確かに、この二日間は一夏にとっては大慌ての二日間だっただろう。

学園祭、襲撃事件、生徒会への参加。

そこで楯無は、襲撃の際の出来事。そして夕方に生徒会室で行った、一夏の生徒会福会長就任を祝しての簡単なお茶会での、宗一郎の秘伝書を受けとった時に子供のようにはしゃぐ一夏の姿。

両方を思い出し、僅かに表情を、本当に僅かに暗くする。

「……まあ、今回は助かりましたよ、会長。少なくとも、あなたが居なきゃ俺は死んでた。

そのことは、素直にお礼を言います」

不意に一夏がそう言った。

それを聞いた楯無は、予想だにしていなかった一夏の言葉に、少し目を丸くしたが、すぐにややからかいを込めて言葉を返す。

「こんな時に殊勝だなんて、らしくないわね、一夏君？」

二学期に入った直後から今日まで、一夏はとにかく楯無に対して反骨精神溢れる態度で接していた。

そして今までがそうであり、同時に楯無自身がそれを楽しんでいた側面がある故に、唐突な一夏の殊勝な態度に、若干驚いていたというのが実の所である。

だが、楯無のからかうような言葉にも、一夏は軽く嘆息するだけで答える。

「そりゃ、命の恩人ってやつはさすがに無下にはできないから。借りがデカすぎるから。」

まあ、俺も少しは対応を改めようと思うくらいはしますよ」

そこで楯無は、いつの間にか一夏が自身に敬語も使っていることに気付く。

今まで一夏はまるで楯無に敬語を使わなかったために、やはり今回の一件は一夏にも色々影響を与えたと理解すると同時に、それでも急な一夏の態度の変化に楯無はやや戸惑い気味になる。

「別に、そんなお礼を言われるようなことじゃないわ。私は私の義務から、私自身の感情から君を助けようとした。私にとってそれは当然のこと。だから、君がそこまで深く気にすることでもないわ」

気にするな。そう言う楯無に、一夏は向けていた背を回し、楯無を真正面から見据えると、やや不機嫌そうな顔で言った。

「そうは言っても、こっちが気にするんですよ。これは、俺個人の問題です」

そのまま二人の間に無言が続く。

そして、二人揃ってため息を一つ吐いた。

「なんか、言い合ってたらキリが無いような気がしてきた」

「奇遇ね。私もよ」

そこで一夏は話題を変えることにすることにする。
それは、宗一郎の秘伝書のことだった。

「しかし、いきなりだったから俺も驚きましたよ」

「あら？その割には凄く嬉しそうにはしゃいでいたじゃない」

師からの突然の贈り物。しかも秘伝書という希少極まる品。それを受け取った一夏は、確かに驚いたのだ。
だが

「まあ、驚きと興奮がごっちゃになったということだ。

で、あの時は聞きそびれたけど、なんで会長が師匠の秘伝書を持ってたんです？」

「ああ、そのことね。

なんだか知らないけど、君宛てに届くはずだったのが、間違っただけの方に回ったみたい。

私もいきなりで驚いたから、すぐに宗一郎さんに電話して、君への物だって分かったのよ」

「へえ。それで、その時に師匠から会長も一緒に学べと？」

「そう。宗一郎さんいわく、相手が居る方が習得も捗るし、私ならまあ教えても問題無いだろうって」

宗一郎が学園に来ていたこと。その宗一郎から直接秘伝書を手渡されたことは伝えず、上手い具合に作り上げたシナリオで答える楯無。

話の内容に疑いを持たないからか、一夏は納得するように頷くと、僅かに表情に影を落とした。

「あら、なんだか浮かなそうね？」

君のことだから、狂喜乱舞すると思ったのだけれど」

「人を何だと思って…」

いや、確かに嬉しいし、まあ会長が手伝ってくれるというのも、ありがたいつちやありがたいですがね。それって、これからも会長のコーチは続くということでしょう？」

「まあ、そうなるわね。それがどうかしたの？」

「いや、わざわざ時間作って俺と練習しようって誘ってくる、篝やシャル達に悪いなと」

どこか照れ臭そうな笑いを浮かべて答える一夏に、楯無も微笑を浮かべて頷く。

一夏の友人達への気遣い。それを純粹に微笑ましく思ったのだ。

「それはまあ、ISの方は一緒にやれるけど、宗一郎さんの方はどうにもできないいわねえ。」

うん、一緒に謝って納得して貰うしか無いわ」

「やっぱりか」

そして同時に肩を竦める二人。

そこで、一夏が何かを思い出したかのように、また別の問いを楯無に投げ掛けた。

「そうそう会長。聞きたいことがあったんですよ」

「あら、何かしら？」

一歩、楯無に近付く一夏。

「いやなに。あなたは何者だ。そして、何をどこまで知ってる」

そう、抜き身の刃のような冷たさと鋭さを孕んだ声で尋ねた。

「っ……」

スイッチが切り替わったかのように豹変した一夏の空気に、楯無は思わず言葉に詰まる。

だが、すぐに常の冷静を取り戻す。

なぜなら、その問いがいずれは問われるものだとして予期していたから。

故に、楯無はいずれ話すつもりとして、整理していた内容を一夏に話すことにした。

「『暗部』って、分かるかしら？」

その名は、普通に暮らしていればまず聞くことがないだろう、社会の裏側。

政の表沙汰にはできない、己が祖国の利権、繁栄のために国と国とが組織を、人員を持って暗闇の中で鎬を削り合う世界。

一夏自身まるで縁が無かった世界。

だが、それでもその中身を推測するように顎に手を当てて考え込む。

そして答える。

「それって、いわゆるアメリカのCIAとか、イギリスのMI6みたいなやつで？」

一夏が口にしたのは、ニュースなどでも時たまその名が出る、アメリカとイギリスの組織。

一夏の答えに、楯無は満足そうに頷いて言葉を続ける。

「ええ。概ねその認識で合ってるわ。後は、この国の公安警察とかね。私の実家、更識家はね。代々この国の暗部で荒事の対処を得意としている家柄なの。」

言うなれば、対暗部用暗部組織と言った所かしら」

「…なんかややこしいですね」

ツッコミを入れるような一夏言葉に、楯無は苦笑いで返す。

「で、その更識家の17代目当主、受け継がれてきた『楯無』の名を受け継いだのがこの私というわけ」

「え？楯無って名前、もしかして偽名？」

「いいえ、違うわ。」

まあ感覚としては、歌舞伎とかの何代目何たらと同じ感じだけど、この楯無という名前は紛れも無く私の本当の名前でもあるわ」

「さいでつか」

「続けるわ。そして、私は更識の当主として、この学園である一つの仕事を受けたの。」

それは、世界でただ一人の男性IS操縦者である君の護衛。案の定、君を狙う組織も現れたしね」

「亡国機業、とか名乗ってた奴ら…」

楯無は表情を引き締めると、頷く。

「会長。一体奴らは何者なので？」

尋ねる一夏。だが、楯無は僅かに苦い表情を浮かべると、申し訳なさそうに答える。

「私自身、不甲斐無い話だとは理解しているけど、実の所あの組織については分かっていることが少ないのよ。」

第二次世界大戦後に組織された、秘密結社気取りのテロリスト集団で、ここ数年になって活動が活発化している。

あちこちで、今回みたいにISの強奪なんかをしている。

そのくらい。一部じゃ、秘密裏に繋がっている軍需カルテルなんて噂もあるけど、推測でしか無いわ」

「そして、俺の敵という認識でも構わないわけですよね」

「…ええ」

「そっか。それだけ分かりや十分です」

そう、至極あっさりとした口調で一夏は言った。
その声の軽さに、楯無はえ？と声を漏らす。

一夏は再び楯無に背を向ける。
そして、右手を胸の前まで掲げ

「奴らが俺の敵で、俺の剣を、俺の命を取りに来る。
なら、話は早い。ただ迎え撃って、たたっ斬るだけだ」

右手を強く握りしめながら、獰猛に犬歯を剥き出しにした。

「っ…！」

その思考のうちで、或いは取り逃がしたアラクネと、その搭乗者であるオータムを仕留めることを想像したのか、一夏の顔には愉悦とも見れる獰猛な笑いが浮かんでいた。

その顔を見た楯無は、昨日の光景を思い出した。
僅かに逡巡する。そして、夕方の宗一郎との会話を思い出す。
小さく唇を噛む。そして楯無は意を決する。即ち、学園祭での出来事、あの事を話すことを。

「一夏君。その、学園祭での襲撃の時なんだけど、君は」

「覚えていますよ」

「え？」

予想だにしていなかった一夏の言葉に楯無は言葉を失う。

「覚えているってことですよ。あの時、俺が何をしたのかというこ
とを。」

まあ、あの時はなんか記憶が曖昧だったけど、後になって全部思い
出した。

いや、何時言いだそうか迷ってたんですけど、どうも機会の方がや
ってきたらしい」

「…そう」

それしか楯無には答えられなかった。そのまま沈黙が二人の間に流
れる。

「会長。会長は、俺の事情についてどのくらい知っているの？」

尋ねる一夏。楯無は言おうかどうか迷うが、事が事である。

包み隠さず、宗一郎から伝え聞いた事実を答える。

「あなたが、第二回モンド・グロツソの決勝当日に誘拐されたこと。
下手人は亡国機業で、その時にあなたが、……その場に居た犯人グ
ループを殺害したこと」

「一体どうやって知ったのか気になるところですけど、言うのは無
しにしときましよう」

軽く鼻を鳴らす一夏。そのまま、言葉を続ける。

「まあ、そういうことです。これでも経験済みなもんでして。ハッ、
今更どうこう慌てたりはしませんよ」

人を一人殺害したという事実を突き付けられながらも、一夏はまる

で動揺を見せない。

その姿に、余裕を感じさせる笑いを浮かべる姿に、楯無は背に悪寒に似た感覚が走るのを感じた。

(ああ、宗一郎さんの言う通りだわ)

確かに目の前の少年は、この現代において彼の師同様の人斬りの資質がある。

(なら、私も少し腹を括りましょうか)

少しばかり、心持ちを変えることにする。

もはや、目の前の少年をただの後輩とは、少しばかり戦いの才を持つだけの少年とは見ない。自身同様、修羅の巷に身を浸しうる人間として接する。

「なるほどね。なら、君のメンタルケアは不要ということかしら？」

「当たり前じゃないですか」

予想していた答えに、楯無は特に何を言うまでも無く、次の質問をすることにする。

「なら一夏君。聞かせて欲しいのだけど、あの戦いの時の白式の変化。それがどういうものなのか、説明してもらえるかしら？」

「話す義理があるとは思えないのですがね」

「なら、学園の安全を守る生徒会長として、副会長への命令としま

しょうか？悪いけど、物が物だから、全くの未把握というのは私も困るの」

「確かに俺はあなたに借りがある。だから、相応の態度で接することも吝かじゃあない。」

だが、まだあなたを信用しきれてはいない。まさか、大事な機体データをあつさり喋るかもしれない人間に教えたりはしないでしょ」

「なら約束するわ。ここで見聞きしたことは、全て私の胸の内に留める。例え織斑先生、あなたのお姉さんに聞かれても喋らないし、いえ、死んでも喋らないと誓いましょう」

「死んでも、か。また随分と大きく出たもんだ」

そのまま無言で二人は、一夏の背中越しに視線を交わす。

いつの間にか二人の間には、張り詰めるような緊張が漂っていた。

「…俺自身、全部を把握したわけじゃない。それでもいいなら」

「構わないわ」

そして一夏は軽く息を吐くと首を上げ、頭上で明かりを降らせる月を見ながら語り出す。

「記憶云々との関わりも含めて。そう、覚えていて当然なんですよ。だって、あの時に敵を殺したのは、白式の暴走とかじゃなくて、紛れも無い俺自身の殺意なんだから」

淡々と語る一夏の言葉に、楯無は黙って耳を傾ける。

「あの形態、名前は分からないから白経津二号とでも仮称しましょうか。」

多分、白経津とメカニズムは殆ど同じなんですよ。ただ、その度合いが違う。白経津は白式の方が俺にアプローチをかけてシンクロの度合いを跳ね上げている。だから通常以上に動ける。ただそれだけ。

でも、二号は似ていて多分別物。そもそも、発動自体が任意ってわけじゃない」

思い出されるのは、発動直前に表示された文字列の一節。

搭乗者たる一夏の感情が一定の度合いに達したと言うような内容。

「多分あれは俺の感情、殺意があるレベルまで高まって発動するかどうか白式が聞いてくるもの。随分と面倒な仕様だとは思うけど、多分ストッパーか何かなんでしょう。フツ、さすがに物騒なシステムだから。」

さて、そこで殺意満々になった俺が発動を承認したらどうなるか。これがまた凄いもんで。持ってた殺意が一気に膨れ上がって、でも同時にえらく頭が冴えるんですよ。そして、体の方も変わる。何て言うか、俺だけじゃなくて、白式も一緒になって動かしてる感じですかね。だから、自分でも驚くくらいにキレた動きができる。

まあ、ざっとこんなもんですかね。何分、覚えてるとは言っても、そこまで細かく覚えてるわけじゃない」

「いいえ、構わないわ。それで十分」

一夏の言葉。その内容から楯無は、白式の新システムについてある程度の予想が立てられていた。

系統としては、例の高稼動同調形態「白経津」と同一。おそらくは、

かのシステムの延長にあるものと推測。
例えるならば、エンジンのギアの入り具合の差と言うべきか。

そして、そのシステムを一言で言うならば、「搭乗者の潜在戦闘能力の開放」。

その基幹になるのは、おそらく搭乗者の強い感情。この場合は殺意。それを機体側から強いアプローチをかけて増幅させ、ある種の脳のリミッターを解除した状態とする。

本来、感情の高ぶりによるリミッターの解除は、一夏には合わない物である。

それは「動」に属する者の技法であり、「静」である一夏とは相性が悪い。

楯無も宗一郎から聞いた覚えがある。

二つの状態の同時開放。そこから推測される危険な負担を。だがこの場合に限っては、白式が制御の一部を請け負うことで負担を軽減し、結果として搭乗者である一夏には、使用後のあの疲労のみが残るものと推測した。

そして、感情の増幅により純化された戦闘能力を、機体が引き出し搭乗者と共に行使用する。

その結果が、あの見事なまでに研ぎ澄まされた動き。

そう楯無は結論付けた。

「さて、わざわざ話して貰ったところで申し訳ないとは思っけど。できればあの形態の使用は控えて貰っても構わないかしら？」

「ああ、そりゃ構いませんよ。さすがに試合で使うには物騒すぎる」

「クスッ、素直でよろしい」

「けど、あくまで控えるだけだ」

自身の要請を快諾した一夏に、楯無は笑みを浮かべるが、その後の言葉にピクリと眉が動いた。

「どついう意味かしら？」

「試合なら使わない。これは確約しますよ。けど、昨日みたいな実戦なら、構わないでしょう？」

「それ、遠回しに取りに行くと言っているようなものだ、分かっているのかしら？」

「もちろん。いや、昨日の亡国機業だったか。奴ら相手なら、尚更だ」

最後は低く唸るように紡がれた言葉。それが気になった楯無は尋ねてみることにする。

「なぜ、そこまで亡国機業を憎むの？」

相手がテロリストだからか？否、そう考えてからすぐに楯無は自分で否定する。

そんな正義感からの理由なはずがない。

「決まっている。雪辱、それだけですよ。あの時の恨み、忘れたわけじゃあない。」

ああ、確かにあの時に俺は不覚を取りましたよ。それは否定しないけど、それとこれとは話が別だ。

ええ、俺は連中に復讐をしてやりたいんですよ」

臆面も無く言い切った一夏に、楯無は思わず頭を抱えなくなった。だが、そうしてばかりもいられない。できるかは分からない。だが、今この場で何とか制止を試みる。

「気持ちは分からなくないわ。けど、難しいわよ」

「と言うと？」

「亡国機業は実態があまり掴めていない。だから、こちらから仕掛けるのは難しい。そして、多分組織の規模はかなりの物よ。ISを強奪できるというのものもあるけど、強奪したISを運用可能にしたり。確実に、強大なバックが控えているわ。それに単騎で挑むの？」

咎めるように、やや声音を厳しくして言う。

この際なりふりは構わない。目の前の少年が挑もうとする相手、挑んで確実に選ぶだろう手法を考え、何とかして抑えようとする。

「…それでもっ、俺は果たしたいんですよ、雪辱をっ…！」

指摘された敵の厄介さに、歯を強く噛みながらも一夏は心中を吐露する。

その姿に、楯無は少し声音を緩めて尋ねた。

「そして、殺すの？」

静かに問い掛ける。

「ねえ、一夏君。あのね、本当のことを言つと、私もそついう経験が無いわけじゃないの。」

立場が立場だし、実戦も経験してる。だからこそ言えるわ。

君も分かっているはずよ。どんな名目を並べても、殺害という行為は紛れも無い悪行。全てを否定するつもりはないけど、だからと言って肯定もされない」

「そんなこと、俺だつてとつくに分かつてますよ。」

初めてやった後、師匠に打ち明けた時に言われたことだ」

諭すような楯無の言葉に、一夏は僅かに声から力を無くしながらも、吐き捨てるように言う。

「俺だつて分かつてる。でも、俺の中の、俺の心が、やつらを許せそつにない」

「それは、君の矜持から？」

「当たり前ですよ。でなきゃ、誰が殺しなんざ引つ提げるもんか」

「中々、難儀な気質ね。君も」

何となくだが、楯無は一夏の気質を把握できた気がする。

確かに彼は宗一郎が語つたように人斬りの資質があるのだろう。おそらく、敵を斬つたとしても、それが自分で納得した上でのことなら後悔も何もしない。

だが同時に、その行為自体の悪辣さも理解している。

このそれなりに平和と呼べる社会の中で育ったゆえか。

宗一郎ですら、育て方に悩むのも頷ける話である。

この少年は、とにかく色々手間がかかる。

「会長。俺はね、とつくに決めてるんですよ。俺は俺の決定に従って行動する。俺がそうすると決めたら、俺はきつと、次に亡国機業らが俺の前に出た時も、本気で取りに行く」

「…それは、君の覚悟？」

それでも尚、例えそれが称賛される行動でないと分かっているとしても成そうとする心。

それを楯無は覚悟かと問う。

だが、一夏は自嘲するように口の端を歪めると、首を横に振りながら言った。

「そんな大したもの、持ち合わせたことはないですよ。その時が来たら、俺は多分当たり前のようにその選択を取る。

当たり前前にできることに、大層な覚悟を決める人間なんか居ない。

ハハツ、とんだろくでなしだ、俺は」

「でも、仮に君がその選択を取るとして、それをどこまで続けるの？」

「そりゃ勿論、連中を根こそぎ仕留めるまでですよ。雑草は根っこを抜かなきゃ意味が無い。だから、連中を潰すことができるなら、裏に誰がいようがぶった斬る。総理大臣だろうが大統領だろうがお構い無しだ」

「その意思の強さは大したものと思うわ。けど一夏君、権力というものは、下手をしたらISなんかよりもよっぽど手強いわ。或いは、世界が君の敵に回るかもしれないのよ？」

何とかして一夏を諫めようとする楯無。だが、それでも一夏は言葉を続ける。

「世界、ねえ。そうならそうならただ。世界だろうが何だろうが。会長、忘れちゃいませんか？ほんの何年前に、世界に喧嘩を吹っかけて、勝った人間がいることを」

「…篠ノ之、博士…」

「同じ人間にできたことだ。俺にできないって話はないでしょう。それに、俺に負ける程度の世界なら、所詮はそれまでだ」

「っ、君は！」

引き下がろうとしない一夏に、楯無は声を大にする。

そして、彼女自身あつては欲しくない仮定を一夏にたたき付ける。

「それで！自分の復讐のために敵を斬り続けて、何もかも敵に回して！それでもし！この学園の、友達まで敵になってしまったらどうするの！」

改めて言うわ！亡国機業は、確実にどこかの企業や国家が複数でバックについている！組織機構の全部がというわけじゃないだろうけど、確実に一部が！

もしも、そうした奴らが君を脅威と見做して排除しようとして！もしかしたら、代表候補生の君の友達が、君の敵になるかもしれない

のよ！

そうしたら…君は…孤独になるだけじゃない…！」

IS学園に通う国家代表候補生。

基本的に外部からの干渉から守られる生徒の中でも、彼女らは少々立場が違う。

代表候補生として、国家への帰属が明確になっている以上、国家から命令を受ければそうそう拒否はできない。

仮に、その国家が一夏の打倒を決めたとなれば、代表候補生たる彼女らは、友人である一夏の敵として、彼の前に立ち塞がる可能性もあるのだ。

否、彼女たちだけじゃない。或いは、誰も彼もが一夏の敵となるかもしれない。そうなれば後はただ孤独となるだけ。

そのことを、容赦無く突き付ける楯無。

だが、一夏は僅かに寂しそうに顔を曇らせると、静かに言った。

「それでも、俺が止まることはないでしょうね。セシリア、鈴、シヤル、ラウラ。誰が俺の前に立つても、きっと俺は刀を振る。

元々俺が目指していたのは最強の二文字です。その過程で、きっとみんなとは戦うことになる。ただその時が少し早まって、別の形でやってきたというだけの話だ」

その言葉を聞いた瞬間、楯無は何かを堪えるように顔を歪ませる。そして、ゆっくりと次の言葉を紡いだ。

「なら、例えば私や織斑先生が相手になったとしても？」

その問いに一夏は

「それは、むしろ望む所だと言つときますよ」

そう、穏やかに笑つて答えた。

「そう。止まるつもりは、ないわけね」

「気遣いはありがたいですけど、多分」

半ば観念したような楯無に、一夏はやや申し訳なさそうに答える。そして二人の間に再び沈黙が流れる。俯く楯無。その姿を、一夏はただ静かに、だが僅かに痛ましさを孕んだ目で見つめる。

ふと、楯無がゆっくりと俯いていた頭を上げる。そしてその目を見た瞬間、一夏はピクリと眉を動かした。

楯無の目には、何かを決したような光が宿っていた。

そして、楯無が静かに告げた。

「なら、私はここではつきりと言っておくわ。もしもその時が来るのなら、私は君を全力で止める」

「っ…!？」

真剣な面持ちで告げる楯無に、一夏は軽く目を見開く。

「君の雪辱を果たしたい気持ちは分かる。君とは理由が違うけど、奴らを許せないのは私も同じ。でも、私はそう安々と死なせたりはしない。敵も、味方も。」

私は、私の学園生徒会長の責務に則つて君を含めて、この学園の皆

を守る。更識の当主の責務に則つて、国を守る。

同時に、君にこれ以上人を斬らせない。例え君が後悔も何もしないにしても、私は君がそうしようとした時に止める。君自身のために」

「…本気マジですか？」

「ええ。本気マジ、よ」

真顔で言い切る楯無に、今度は一夏が言葉を無くす。

そして、クツクツと堪えるような笑いを小さく漏らした。

「やべえどうしょ。会長、なんだかあなたに惚れそうですよ。クソ真面目な顔でそんだけ言い切るとか、下手な男よか男らしい」

そう、笑いを零しながら言う一夏。その目には、まるで野獣のような輝きが湛えられている。

一夏の言葉に、楯無は茶化すように返す。

「あら、こんな可憐な乙女を捕まえて男だなんて酷いわ。あいにく私はただ私らしく振る舞うだけなの」

「それが、敵も味方も死なせない。味方は守つて、敵はふん縛つて御用、ついでに俺を止めるですか」

言つて一夏は楯無に向き直ると、ゆっくりと彼女に歩み寄る。

そして、二人の距離は数センチという超至近距離まで縮まる。

楯無よりも高い身長を持つ一夏は、間近から彼女の顔を見下ろして、心底愉快そうな笑いを口に浮かべる。

「本気で俺を止めるつもりで？その時になったら」

「私はIS学園生徒会長更識楯無。
ならば、そのように振る舞うだけよ」

楯無もまた、一夏の顔を見上げて笑いで以って返す。

或いはそのまま口づけができそうな程に顔を近付けて笑い合う二人。
だが、そこにあるのは鋭利な殺気と、重厚な闘志がぶつかり合うこととで生じる緊張だけだった。

笑みを、しかし友好的なものではなく、むしろ獣が獲物を捕捉したような凄絶とも呼べるソレを浮かべたまま、二人は視線を交え続ける。

そして、やれやれと言いたげに首を竦めると、一夏がゆっくりと楯無から離れる。

「まあ、じゃあそついうことにしましょうか」

それだけ言って一夏は屋上の入口へと歩いていく。

「先に戻ります。また、明日からよろしくお願いしますよ、会長」

歩き去る一夏の背。それを、楯無は扉の向こうにその姿が消え、扉が閉じられるまで見続けていた。

「ISは確かに現行最強の兵器。だが、人が生み出し人が動かさねば真価を発揮できない。ならば、真に最強の兵器足りうる存在とは、人そのものとも取れる」

月明かりに照らされる某県山中。そこに構えられる一件の家の屋根の上に、一人の男が座っている。

傍らには酒瓶が一つ。そして、男の手には一つの杯がある。酒を片手に月を見上げる彼は、一夏の師である海堂宗一郎。

「なればこそ、人としての道を極めてこそ、ISに乗ろうともその中で強者足りうる」

瞼を閉じて思い浮かべるのは愛弟子の実姉。彼同様、武に極めて優秀な力を持つ彼女は、まさに戦女神に、まあフリュンヒルデ相応しいと思う。

「誰も彼も、あいつを世界最強だなどと称賛してるが、そもそも力の在り様からして違つのだ。そうそう敵う輩がいるわけも無い」

自身が武を極めた達人故に、ただISという兵器の性能におんぶに抱っこで戦うだけで千冬を称賛する者達への、嘲笑とも取れる笑いを口の端に浮かべながら宗一郎は呟く。

誰に語って聞かせるでもない。ただ、独り言として呟く。

「まあ、それなりに分かっているやつも居ないわけじゃあないが、やはり足りんな」

少なくとも、テレビで放映される世界大会に出るような面々は、多少は戦技のなんたるかをそれなりに分かっている者もいる。

最も、そこそこできるだけであり、宗一郎から見ればIS無しでは歯牙にもかけることがないだろう程度ではあるが。

「さて、一夏よ。我が弟子よ。お前は俺の業を会得し、どこまで上る？見せてみる、この俺に。お前の成長を」

ふと、一夏同様に自らの秘伝の会得を許した少女を思い出す。

万が一の時のための、弟子のストッパーにと考えてのことだったが、それ以外にも丁度良い競い相手になってくれるかもしれないと思う。

「ふっ、やはり俺も弟子のことを言えんな。人道も、修羅道も、どちらも是としてしまっあたり」

自らを皮肉るかのように口の端を吊り上げるが、すぐにそれは本来の意味での笑みに変わる。

「一夏、俺はお前が強さを望むのであれば、師として最大限の助力をしよう。

故に行け。自分の決めた道を、好きなように。そして、いずれは俺や千冬の領域へと至れ」

成長した弟子の姿を思い浮かべて、宗一郎は穏やかな気分になる。
愛弟子が極みへと至る。その暁には

「交わそうじやないか。杯を、或いは剣を。いや、どちらもと
いうのも悪くはない」

そう言って宗一郎は杯を月へと掲げる。

まるで、今同じ月を見ているだろう弟子に語りかけるように。

澄んだ夜空では月がただ静かに、その下で動く世界に何一つ関わら
ずに輝いていた。

一 オマケにして蛇足《そのシリウスをぶち壊す》

歩き去る一夏の背。それを、楯無は扉の向こうにその姿が消え、扉が閉じられるまで見続けていた。

カシャン

「え？」

扉が閉じられた後に鳴った音に、楯無はピクリと反応をする。金属同士が擦れるような音。そう、ちょうど正面の扉に付いている鍵を回せばそんな音が

「つてえ！まさかつ！」

慌てて扉に駆け寄る楯無。すぐさまノブを掴み、回そうとする。だが、無情なノブは微動だにしなかった。

まあつまり、一夏が内側から鍵を閉めたことにより、楯無は屋上に締め出されたのだ。

「ちよっ！一夏くーん！開けて開けて！」

ドアを叩きながらその向こうの一夏に呼び掛ける楯無。
しばらくの無言の後、反応があった。

『イママデノウラミ、ハラサデオクベキカア』

何故か低くしわがれた声だった。

だが、楯無にそんなことを気にしている余裕は無かった。

「恨みって何！？いやそれより、お願いだから開けてー！」

『ハッ、イイ様だ。会長、俺はあなたに出会ってから今まで、散々振り回されてきた！良い機会だから、しばらくそこで反省して頭冷やしてて下さい！』

扉の向こうから聞こえる一夏の声は無情。そして、そのまま立ち去っていく足音が聞こえる。

いよいよ持つて窮地に立たされた楯無。
ぶつちやけた話、ISを展開すれば事は実にあっさり片付くのだが、その代償はおそらく寮監、すなわち千冬による直々の叱責に他ならない。

できればそれは避けたい。だが、他に方法は無い。

二つの選択肢に板挟みになった楯無は、そのまま悶々と頭を抱える羽目になった。

それから30分後。

そろそろ頃合いと見た一夏が鍵を開けて屋上にやって来た時に見たのは、膝を抱えてうずくまりながら、ううう唸っている楯無の姿だった。

それを見た瞬間に思わず爆笑してしまったのは仕方ないと、後に一夏は述懐している。

そして、一夏が戻ったことに気付いた楯無は、目の端に小さく輝く物を浮かべながら一夏につきかみ掛かろうとし、それをかわした一夏と追いかけてこをすることになるのだが、それは敢えて割愛する。

一つ言えるのは、これによって一夏の諸々の溜飲が少しばかり下がったと言っことだ。

第六十八話（後書き）

難しい…

宗一郎の一夏への思い入れやら、一夏のイイ具合な壊れ具合やらを書きたかったのですが、上手くできてるかどうか。

やっぱり風邪でふわふわ時間な頭でノリと勢いに任せて書いたのがまずかったか…

軽く解説を。

技について。

名無しの理由は、そもそも技という区分に当てはまらないという感じ。付けようと思えば付けられるのですが…

動きの方は某流水。剣の方は、某心刀合練です。

一夏は、楯無が曲がりなりにも命の恩人ということで、最低限敬語は使うようになりました。けど、根本的な接し方はあまり変わらなかつたり。むしろ敬語なだけ質が悪い。

それでも、多少は一夏も楯無を受け入れています。

そして二人の間柄は、よく分からない油断ならない関係という感じでしょうか。

最後の蛇足は、シリアスに耐え切れなくなった作者の完全な悪乗りです。

それ以上でも以下でもないです。

こんなところでしょうか。

ううむ、今一思考がパツとしない。

これも全ては風邪の仕業か…

質問等は感想にてどうぞ。

随時受け付けております。

しかし、今回も反応が怖い。

第六十九話（原作六巻開始）（前書き）

なんとか風邪が収まってきました。

いやあ、毎日パブロン飲みまくった甲斐があつた…

今回は原作六巻の導入部です。

第六十九話（原作六巻開始）

北アメリカ大陸北西部。合衆国第16戦略防衛拠点。通称「地図^イに無い基地^イ」と呼ばれる場所。

その名称からも分かる通り、高い機密性を持っているその基地は軍内部でも一部関係者以外はその存在を知る者は少なく、軌道上の衛星からの目視を避けるために、巧妙にカモフラージュされた上で基地施設の一切を地下に設けている。

基地内部の一角。データベースに記録された映像を視聴するための部屋には、一人の人物が居た。

照明を点けず、映像を映すモニターのみが光源となるその部屋で、軍服に身を包んだその人物がモニターの前の椅子に腰掛けながら、腕を組みつつ映像を見続ける。

その人物は女性であることが軍服の上からの体のラインで分かる。そして、その胸元には中佐の階級を示す階級章が付けられている。

それはIS同士の戦闘映像だった。軍部全体でもセキュリティレベルの高い映像であり、本来であれば一介の中佐では閲覧ができないものである。

だが、彼女がその映像を見ることができるのは、階級章の隣に付けられている、もう一つの識別章が示していた。

翼を纏う人型を元に造形されたようなその識別章は、国家所属のIS操縦者の証である。

ショートカットの金髪に、若干大陸系の血筋の面影を持つ顔立ち。彼女の名はイーリス・コーリング。

その名は、合衆国において知らぬ者は居ない名だった。何故ならば彼女こそが、米国IS戦略の要、米国国家代表という米国全てのIS操縦者の頂点に立つ存在だからだ。

「ふんむ…」

イリスは足を組み替えながら映像を見続ける。映像の中では、海上で交戦する二機のISが移っている。

背中から生やす光の翼から光弾による弾幕を張る銀のIS。

暴走事故を起こし、コアをこの基地において封印処理されることになった、IS「シルバリオ・ゴスベル銀の福音」である。

第二形態移行を果たした福音に挑むは、日本刀を象ったIS用近接格闘ブレードを振る、騎士を彷彿とさせる白いIS。

名を「白式・雪御雷」。日本国最大のISシェアを持つ倉持技研第三世代型IS。

だが、その実態はかの篠ノ之束が手掛けたと言われる準第四世代型とも言われる機体であり、日本において存在を確認された世界最初の男性IS操縦者の専用機である。

映像は終盤に差し掛かっていた。

太平洋上の無人島。その浜辺で向かい合う二機のIS。破壊され尽くした周囲の惨状が戦闘の激しさを示すと共に、どこか神話の決闘然とした空気を作り出していた。

瞬時加速での一瞬の交差。

シールドエネルギーを喪失して倒れたのは福音。勝者となった白式のブレードは、輝く白刃となっていた。

既に報告として知らされていたが、イリスはわざわざ報告を受け

ずとも、福音を斬った白刃の正体を知っていた。
否、ISに携わる者で、ましてや操縦者でそれを知らない者は居ない。

ISのシールドを切り裂き、そのエネルギーを一気に奪い取る力。
ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力「零落白夜」。現役を引退してなお、名実共に最強の
IS操縦者と言われる織斑千冬フリユンヒルデの切り札。

— IS操縦者として、彼女に対抗心を燃やすと共に、憧れも抱いていたイーリスは白式の、その操縦者である織斑一夏の切り札が、かの能力であると一目で見抜いた。

「ふう……」

そして映像は途切れる。

軍の衛星で撮影された映像を見終えたイーリスは、モニターの取り付けられていたデスク端末の電源を切ると、軽く背を伸ばしてから目をマツサージするように揉む。

そして、戦闘者のソレであることを表すかのような颯爽とした動きで立ち上がると、部屋を辞した。

モニタールームを出たイーリスは基地内の休憩所に向けて歩く。

その道中、すれ違った軍人達が彼女に敬礼、或いは軽い会釈で挨拶をしてくる。

中佐という上位の階級、国家代表というイーリスの立場を鑑みれば至極当然と思えることだが、彼女に挨拶をした軍人達は皆一様に彼女に親しみを持っているような笑顔を浮かべており、そこに軍特有の固い空気はやや希薄だった。

例えるならば、住民から慕われる町の顔役が「よう、大将」と親し

みと敬意の両方を込めた挨拶を受けるようなものだろうか。

IS操縦者ということを鼻にかけず、誰に対しても相応の態度で臨む姿勢。同時に彼女自身が堅苦しいものをあまり好まず、竹を割ったようなサバサバとした気質。

これらから来る親しみやすさと、その人柄への敬意の表れとも取れる。

軽やかな足取りによって床と接触する軍靴が廊下に音を響かせる。そして基地のある場所へとイーリスは辿り着く。周囲をガラスで仕切ったそこは、基地の休憩スペースだった。

コーヒーマシーナや自動販売機、休憩用の椅子などが置かれたスペースは清潔感があり、訪れる者に確かな休息を与える空間になっている。

外から室内を覗いたイーリスは、既に先客が居ることに気付いた。だが、その先客はイーリスにとって喜ばしいものだったらしく、彼女の顔に笑顔が浮かんだ。

「よお、ナタル」

スペースに入るためのドアを開けながら、イーリスは先客に向けて声を掛ける。

ナタルというイーリスのみが使っている愛称で呼ばれた人物は、振り向いてイーリスの姿を見ると同時に、彼女同様に穏やかな微笑みをその顔に浮かべる。

イーリス同様に軍服に身を包み、豊かな金髪を靡かせる女性。その胸には大尉の階級章と、イーリス同様に米国所属の国家IS操縦者の識別章が付けられている。

彼女の名はナターシャ・ファイルス。この夏、IS学園臨海学校の折に暴走事故を引き起こし、当時その場に居合わせたIS学園一年の専用機持ちグループにより鎮圧された「銀の福音」の専属操縦者そして、米国においてはイーリスと並び立つ屈指の操縦者という才媛である。

「あら、イーリ。奇遇ね」

ナターシャもまた、彼女のみが使うイーリスの愛称で以てイーリスに言葉を返す。

そして、何も言わずにごく自然な動作でコーヒーサーバーから紙のカップに入ったコーヒーを取りだすとイーリスに手渡す。

「サンキュッ」

ナターシャの気遣いにイーリスは顔を綻ばせながらコーヒーを受け取る。

ナターシャもまた、自分の分のコーヒーを取りだすと、イーリスと共にスペース内の長椅子に並んで座る。

「それにしても、バッテリーこんな所で会うなんてね」

意外だと言うように、だが同時に嬉しさを隠さずにナターシャが口を開く。

二人の間には階級差や、比較的上位の存在とはいえ、一介のIS操縦者と国家代表という明確な立場の差があつたが、公的な場を除いて二人は対等な立場の親友として接していた。

「ん、ああ。ちよいと暇ができちゃったからな。モニタールームで福音の映像を、ちよっと」

最後の部分だけ、まるで親に隠れて行った悪戯を友人に打ち明ける子供みたいな茶っ気を含んだ調子で言ったイーリス。
そんな彼女の言葉に、ナターシャは苦笑を浮かべながら、イーリスとは対照的に近所の悪ガキを微笑ましく見る少し年上のお姉さんのような調子で言う。

「また見てたの？もう、いくら見る権限を持つてると言っただって、一応機密扱いの映像よ？」

「いやワリイワリイ。だつてさ、下手な映画なんかよりもよっぽど暇つぶしに向いてるんだぜ？そりゃあ見たくなくても仕方ないって」

「はあ、暇つぶしの映画の代わりに機密映像を見るなんて、あなたくらいなものよ」

どこか呆れた調子で、だが常に自らの姿勢を貫いて行動する親友への親しみを込めた声でナターシャは言う。

だが、不意にその表情に僅かな影が射す。それを確かに見て取ったイーリスは、少々話題が軽率だったかと後悔する。

先に話題が上がった福音。かの機体の専属搭乗者であったナターシャは、福音に対して並々ならぬ思い入れを持っていた。

IS専用機搭乗者はすべからず己の機体に愛着を持っている。

イーリスも国家代表として専用機を持つ立場であり、自身の愛機には愛着を持っているが、少なくとも目の前のナターシャ以上に自分の機体に愛着、否、もはや肉親への愛情とも呼べるレベルの思い入れを持っている人間を、イーリスは他に知らなかった。

夏の暴走事件の後、福音のコアは即座に凍結が決定された。

決定を下した政府、そして軍部の考えはイーリスも理解している。一機でも戦略規模の戦力を誇るIS。だが、暴走事故を起こしたとなれば、その機体に関しては「もしやまた…」という疑念が湧き、予防策を取りたくなるというのも納得がいく話である。

だが、この決定を最後までナターシャは不服とした。

曰く「あの暴走は福音も望まないものだった」「福音は常に自分を守っていた」

そうした主張を以て、頑なに上を説得しようとした。だが、決定は覆らなかった。

イーリス自身は、親友の主張を大真面目に信用している。だが、上層部はそうではなかった。上には上の事情などがあり、時にそれらは国家代表の自分ですらどうにもならない高度に政治的内容を持つものであることはイーリスも理解している。

だが、やはりイーリスもナターシャ同様にコアの封印については好ましく思っていないかった。

いや、実のところ凍結という決定自体がコアへの措置としてはある程度便宜が図られたものなのだ。

イーリスやナターシャの直属の上司、軍部においてIS運用部隊の指揮権を持つ將軍、彼が方々に手をまわしていなければ、福音のコアは凍結では済まなかったかもしれないのだ。

或いは、コアの解析のために研究所に送られ、そして

そうした裏事情があるからこそ、イーリスもナターシャも、コアの凍結決定に従うより他無かった。

僅かに二人の間の空気が沈む。

だが、すぐさま軽い咳ばらいをしたナターシャが声を明るくしながら

ら言った。

「ま、凍結にしても無期限ってだけで永久じゃないし、いつかきつと来るわ。福音あの子が空を飛べる日が。また、いつか。それに、やっと査問も一通り終わったんだもの。私が沈んでちゃ、あの子に会わせる顔が無いわ」

自分は希望を失っていない。言外にそれを伝えることで、ナターシヤはイーリスに余計な気遣いをさせないように計らう。

イーリスもまた、ナターシヤの意思を汲み取って、いつも通りの竹を割った快活さを感じさせる声で同調する。

「だよなそうだよな。気にすんなって、ナタル！上のじい様連中も、そのうち福音が必要だーって言って使えるようにしてくれるって！」
バシバシとナターシヤの肩を叩きながら言うイーリスに、ナターシヤはコーヒーが零れないように気をつけながら、息を吹き掛けて熱を冷ました。

「そっぴやよ、ナタル。福音で思い出したんだけどさ、会ったんだろ？例のイチカ オリムラに」

思い出したようにイーリスはナターシヤに尋ねる。
その問いにナターシヤは首肯で返した。

「ええ。学園の生徒たちが帰る時にちよつとね」

「へえ。で、どうだったよ。噂の男の操縦者ってのは？」

探るように、いかにも興味があるという意思が伝わる目で尋ねてくるイーリスに、ナターシャは意外そうな顔をした。

「あら、イーリッたら興味があるの？意外だわ。男の気配が全然無いと思ったら、まさか年下狙いだなんて」

からかうように言葉を返すナターシャに、イーリスは僅かに口を尖らせて反論する。

「ちげーっての。これでも国家代表だからな。そっち方面からの興味だよ。だいたい、男の影が無いのはナタルだって一緒じゃねえか」

「あらやだ、失礼しちゃうわ。これでも女磨きは欠かして無いつもりよ。その気になれば良い人だって見つかるはずよ。…きつとそうよ」

「そりゃあたしも同じだよ。…うん、多分」

先程の福音とはまた別の形で、二人の間の空気が重くなる。

思えば、二人揃って軍務に邁進してきたせいで、互いに色気づいた話は全然に無かった。

選び、歩んできたこの道に後悔は無く、むしろ誇りさえ持っているが、どちらも20代前半の華の女盛り。立場の問題もあるとは言え、浮いた話が皆無というのはさすがにマズイのではないだろうか。

思わず顔を見合わせる二人。奇しくも、この時二人は全く同じことを想像していた。

何年、何十年先、周りの女性仲間が次々と結婚していく中、仕事一徹のせいで婚期を完全に逃した自分達。待つのはお局様な未来。想像するのも恐ろしい。

今度は二人揃って咳ばらい。

そしてどうにかして会話を軌道修正する。

「で、例の彼ね。

そうね、イーリはどう思う？」

自分の見解を述べる前にイーリスの意見を聞いてみようと思うナターシャ。

親友の求めに、イーリスは素直に応じて、一夏についての自身の見解を述べる。

「まあ、あれでIS触って数ヶ月の素人って言われても、あまり信じられないよな。

この際だから男女は抜きにしてだ。まああたしから見れば動きはまだまだ甘い部分があるし、経験不足つてのがよく分かる。

それでも、あたしでも成功率が半分行つてないリポルバー・イグニッション・ブースト「個別連続瞬時加速」を使ったこととか、数ヶ月での動きとかは驚きだ。

確か同期の他のトコの代表候補にも引けを取つてないんだろ？」

「らしいわね。報告だと」

実のところ、各国家がIS学園に生徒を送るのは、未来の操縦者により良い教育環境をとという考え以上に、情報収集の側面が強い。

留学で学園にやってきた各国の生徒は、定期的に祖国に報告を送る。

その報告には、他の国の代表候補や新型機についてなど、詳細とま

では行かずとも、普段の生活の中で収集できるだけされた物もある。

そして、当然のように一夏についての報告もなされていた。

その中には、定期的に一夏が行っている練習試合の戦績も含まれる。

数値の上では突出しているわけではない。だが、搭乗者となって数ヶ月ということを鑑みれば、各国の代表候補と肩を並べている一夏の戦績は破格のものと呼べた。

「福音との戦闘映像を見ても思ったけどさ。格闘がやたら上手いんだよ。ありや絶対何かやってたぜ。ただ、どうにも普通のとは感じが違うイメージなんだけどなあ」

脳裏に先程まで見ていた映像のワンシーン、福音のエネルギー翼と猛烈な攻撃を交わす一夏の剣腕を思い出しながらイーリスは言う。

最低でも国家代表候補クラス。それがイーリスの見立てだった。

「なるほどねえ。噂じゃ機体はあのドクターシノノノが直接手掛けたって言うし」

「機体の性能だけじゃ勝負は決まらねえよ。腕もなきやな。けど、あのイチカ オリムラは結構な腕っ節がある。全く、上が欲しがるわけだ」

イーリスの言葉にナターシャが同意するように頷く。

現在、一夏はその帰属先を巡り国際IS委員会で連日議論が繰り広げられている。

これが、適性発覚直後ならばまだ良かった。だが、現在では状況が違っていた。

篠ノ之束謹製のISを所持し、尚且つ本人の実力も即戦力足りうる。

これを逃さない手は無い。何せ一夏を獲得すれば、唯一の男性操縦者、最新鋭機、即戦力と、鴨が葱とついでに鍋とコンロを背負って転がり込んで来るようなものだ。

いや、一夏の白式に関しては所属が日本の倉持技研となっているが、その辺は政治的駆け引きでどうとでもなる。

ちなみに、筈に関しても一夏同様の議論が連日なされているのだが、やはり一夏同様に結論はまるで出ていない。

これには至極単純な理由がある。

つまるところ、どこか一国が「ヘイ、ハマー……カマーン！」と言えば、それ以外の国全てが「ざけんなコラ。ナメテンのか、お？」と一斉に反論する。他の全ての国々の反発を受けては、いかな大國であっても引かざるを得ない。

これが繰り返されることにより、泥沼の議論が延々と続いているのだ。その結果は一夏の所属の未決定。

ちなみに、このことに関して一夏は「さっさとしろよ、くたばりかけのジジイども」と、影で言えるのを良いことに散々にボロクソに言っているのだが、この場では関係がない。

とは言え、それはあくまで政治の話。あくまでも兵士である二人からしてみれば、自分達がどうこう言っただけで何か変化があるわけでも無いので、そのことについてはあまり言及しない。

「しかし、本当にあの腕はどうやって付けたんだ？そりゃ、ブリュンヒルデの弟つくくらいだから、センスはあるかもしれないけどさ。報告じゃ、学園に入る前はスタンダードな学生だったって言うぜ」

頭を傾げるイーリスに、ナターシャも同意するように頷く。

既に一夏の身辺や来歴については軍の諜報部が調べ上げている。同様のことを他の国々も行っているわけだが、報告の限りでは、一夏はIS学園入学まではどこからどう見ても、普通の少年と呼べる生活しかしていない。

体力面に関しては優秀な成績を収めていたらしいが、それだけだ。

改めて首を捻る二人だが、二人が考えつかないのも無理はない。

一夏には、諜報部が掴んでいない、あまりに目立たない故に掴みよ
うが無い来歴がある。

まさしく世界最強クラスの武人である海堂宗一郎の下で教えを受けていたこと。

一夏自身、誰かに話したりしたことがまるで無く、同時に一夏についての公式な記録、学校の成績やら戸籍やらに載っているわけでも無い故に、諜報部はこのことを見落としていた。

そしてもう一つ。一夏自身の資質。調べようが無いソレもまたしかりである。

「私たちがここでどう言っても、意味が無いわね」

「全くだ」

肩を竦めるナターシャに、イーリスが同意する。

「で、イーリ。あなたはどう思う？例の彼、上は欲しがってるみたいだけど、あなた個人の意見は？」

尋ねるナターシャに、イーリスは顎に手を当てて、考え込むようにしながら言葉を紡いでいく。

「そうだなあ。あたし個人はどっちでもって感じかな。

そりゃあ、米^{ウチ}国に来てくれるならそれはそれでありがたいし、あたしも楽しめそうだ。けど、別の国に行ったら行ったで、もしかしたら世界大会で戦えるかもしれないって考えたら、それはそれで面白そうだと思うよ」

「あなたらしいわね。何より自分が楽しいかどうかを持つてくるなんて」

クスリと笑いを零しながら言うナターシャに、イーリスは手をヒラヒラと振りながら応える。

「そりゃそうさ。せつかく^コ国家代表まで来たんだ。単に仕事だからってだけなんてつまんない。

で、ナタル。あんたはどう思ってるのさ」

逆に尋ねるイーリス。問われた瞬間、僅かにナターシャが表情を固くしたのを、イーリスは見逃さなかった。

「いまいち、乗り気って感じじゃないみたいだな」

「…ええ」

「そいつは、直接会ったからの判断？」

頷くナターシャに、イーリスは黙って続きを促した。

「夏に、ほんのちょっと彼と話した時なんだけどね。

私が福音を止めてくれたことにお礼を言った時、彼は私にこう言ったのよ。

『もし福音の凍結が解かれたら、自分と全力でシアイ』をしてくれ
って」

「ん？それがどうかしたのか？

そりゃあ、手続きは面倒かもしれないけど、やれなくはないだろ？
試合くらい」

「エキセントリック・メンチ試合ならいいんだけどね…」

「ん？」

どこか含みがあるようなナターシャの言葉にイーリスが首を傾げる。

「あのね、イーリ。その申し込みをされた時ね、私。背筋が震えたのよ。

信じられる？15歳の男の子が、私の背筋を震わせるような殺気をぶつけてきたのよ。

なんていうか、丸腰の時に目の前に拳銃突きつけられる気分、いいえ違うわね。喉元に刃物押しつけられるような感覚だったわ」

「んなつ…」

ナターシャの言葉にイーリスは絶句する。

年若い、ナターシャもイーリスも一流の軍人である。ましてや国家所属のIS操縦者という立場上、直接的な戦闘に身を置くことも多いため、そこで鍛え上げられた胆力は生半可なものではない。二人はそのことについて、自惚れではない明確な自負を持っており、同時に親友がそれだけの人物だと互いに認め合っている。

故に、ナターシャの背筋を震わせたという言葉は、イーリスにとっては聞き逃せないものだった。

「マジかよおい」

「正直私も驚いているのよ。どうしたらあんな子供が私の背を震わせられるのかって」

「てゆーかよ、たかが試合頼むのに殺気ぶつけてくるのかよ」

どこか呆れた風に空笑いを浮かべるイーリスだったが、ナターシャは首を横に振った。

「多分、イーリスの思っている試合じゃあないわ」

「は？どういうことだよ？」

「ねえイーリ。ジャパニーズ日本語イングリッシュって英語みたいに、発音が同じだけど意味が違うって言葉があるでしょ？」

「あ、ああそうだったな。確か『カワ』って発音でも『川』と『皮』riverと『skin』って別れてるとかってやつだよな」

ISが世界中に広まると同時に、日本語も急速に世界へと広まって

いった。

開発者である束が日本人であるため、各国がIS研究のために日本語を必要とした結果である。

ちよつど、今でこそ英語も多用されているが、医療においてかつて先進を誇っていたドイツのドイツ語が多く使用されるのと同じような感覚である。

これにより、ISに携わる者は必然的に日本語を学ぶことになり、国家所属の操縦者である二人も当然のように日本語を学んでいた。そして、ナターシャが引き合いに出したのは所謂「同音異義語」というものである。

ちなみに、発音が同じで意味が異なるというものは英語にも存在する。

例としては『write』と『right』である。

「ちよつとね、私も気になって調べてみたのよ。そしたら、『シアイ』って言葉には『エキシビジョン・マッチ試合』以外に、もう一つ意味があるみたいなのよ」

「とうとうと?」

そこでナターシャは一度言葉を切る。そして、僅かに表情を固くしてから続けた。

「今じゃ全然使われていない、ほとんど消えかけの言葉みたいだけだね。『デスマッチ死合い』って意味よ」

「なっ…!」

今度こそイーリスは完全に表情を強張らせ、言葉を失う。

「正直ね、私も調べて、この意味が出てきた時は驚いたわ。

だって、ISでそんなものを挑むなんて、正直正気の沙汰とは思えない。けど、あの時の彼が私に向けた殺気。あれは間違いなく本物だったわ。

彼は、織斑一夏は、私に戦いを申し込んだとき、命を賭けるような戦いを想定していた」

あまりに飛躍した話の内容に、軽く頬を引き攣らせながらもイーリスは答える。

「中々ぶつとんだ話だけど、ナタルの言葉だから一応信じるとしてだ。

それが、その坊主を引き入れるのに乗り気にならない理由ってやつかい？」

「まあ、それもあるんだけどね。なんていうか、得体が知れないって言うか、引き入れて万事オツケーって保障が効かないような気がするのよ。

私も時々ISの教官役であっちこっちの娘達に教えてるけどね。時々いるのよ。こう、国家防衛の義務とかじゃなくて、ISに乗って戦いたいから乗ってるっていうような娘が。

彼も、そんな娘達と同じような目をして、いいえ、それ以上のものだったわ。

あくまで想像でしかないけど、彼は自分が望む戦いができるなら誰彼構わず戦うわ。それが、例えば自分の所属する組織、或いは国家に剣を向ける結果になっても」

「あゝ、そりゃ確かに考えものだな……」

イリスにはそれしか言えなかった。

世間では世界初の男性IS操縦者として注目を浴びている織斑一夏。IS技術の更なる発展の可能性だとか、男が日の目を浴びるための救世主だとか、世間では色々と言われているが、仮に親友の言葉が本当だとすれば、実際はこの上なく厄介な存在かもしれないイリスは思う。

「なんていうか、世の中ままならないよなあ……」

これまでの会話で感じたこと。その全てを一言に乗せるイリス。ナターシャもまた、彼女の言葉に同意するように「ええ……」と頷く。

「そっぴやよ、ナタル。そのイチカ オリムラに關係してだけどさ。なんでも、そいつの居るIS学園が襲撃を受けたみたいだな」

先ほどまでとはまた別の、軍人としての鋭さを秘めた真面目な顔でイリスは言う。

その言葉に、ナターシャも同様に表情に鋭さを浮かべながら頷いた。

「それは私も聞いてるわ。確か日本に居る諜報員の報告だったかしら。」

下手人は『ファントム・タスク亡国機業』だったかしら。例のテロ組織」

「ああ。なんでも強奪したISを使ってるらしい。聞いた限りじゃイギリスの新型と……ウチアメリカの機体らしい」

自国のISが強奪され、テロに悪用されているという事実には、イリスは心底忌々しいと言うような顔になる。

「とてもじゃないけど、笑える話じゃないわね」

「当り前だよ。あたしらも気は抜けないな。分かっただろう、ナタル？」

「当然じゃない。なにより、ここにはあの子が居る…」

基地の深奥に封印されている存在。いつかまた、空を飛ぶことを願っている銀の翼を持つ、我が子にも等しい存在に思いを馳せながらナターシャは呟く。

決意に満ちた親友の横顔をイーリスは静かに見つめる。

直後、証明が赤に染まると同時に、基地内放送でたたましい警報が鳴り響き、基地司令部から基地への侵入者の存在が伝えられる。

「イーリ！！」

「ああ。確か日本のことわざじゃ、『噂をすればなんとやら』って言うんだっけ。おいでなすったらしい」

すぐさま立ち上がると、二人は何も言わずに別々の方向へと駆けだす。

交わす言葉は無用。互いに為すべきことを為すために、思考を戦士のソレへと切り替えて動いていた。

この日、米国軍の秘匿記録に一つの報告が加わる。

亡国機業工作員による地図イラストに無い基地シルバリオ・ユスベルへの襲撃。

目的は同基地に封印されている『銀の福音』のコアと断定。

基地に滞在する当該IS専属操縦者ナターシャ・ファイルス大尉、並びに国家代表イーリス・コーリング中佐と専用機『フアング・クエイク』の応戦で撃退。

人的被害はファイルス大尉を含む負傷者のみ、死亡者0。

襲撃に用いられたのは、先日IS学園への襲撃を行った英国製第三世代型『サイレント・ゼファイルス』と断定。

以後、基地警備の見直しを行う。なお、当該基地関係者への処分などは必要性を認められず、警備要綱や体勢の見直しなどの勧告に留めるものとする。

第六十九話（原作六巻開始）（後書き）

原作六巻はゼフィルスの米軍襲撃で始りましたが、本作ではあえてそれをカットしました。

代わりにその直前のナターシャとイーリスの会話を妄想で捏造してみましたww

いや、海千山千の各国政府のことですから、絶対に色々な手管を使ってデータとか集めてると思うのですよ。

福音戦なんか、その気になれば衛星とかで撮影できるでしょうし、そうでなくても福音のコアに記録くらいは残ってそうなものです。

結局は作者の妄想の産物ですがww

ちなみにナターシャとイーリスの階級についても割と適当です。

代表候補のラウラが部隊の隊長やっけるとは言え少佐なのですから、国家代表ならもちっと上でいいかな〜と。

ナターシャの階級も「だいたいこんなもんだろ」って感じで決めました。

さて、次回の更新ですが、実は今回の更新の時点で八割くらいは書きあがっているので、明日あたりに更新することが可能です。

それだけですww

第七十話（前書き）

受験も色々佳境なこの頃。

そろそろ執筆がきつく感じてきました。

今後はかなり更新遅くなるかも……

偏差値上がれええええええええええ……！

第七十話

「ええ！？一夏の誕生日って今月だったの！？」

学園祭から数日後のとある朝。

SHRを控えた一組の教室にシャルロットの驚く声が響く。そこから少し離れた場所では、既に自分の席に座り、予鈴が鳴るのを待っているラウラが視線を興味深そうにシャルロット、そして彼女が話している一夏へと向けている。

「ん、まあな。

9月27日。それが俺の誕生日だよ」

左手で予習のために教科書のページをペラペラとめくりながら、一夏は視線を教科書に向けたまま応える。

そして右手には、スプリングのついたグリップが握られている。握力のトレーニングに使われるあの器具である。

ちなみに、必要握力は85キロという代物である。

それを見た一部の生徒は盛大に顔を引き攣らせているのだが、それを一夏が感知することは無かった。というより、一夏としてはまだまだ足りないと思っっているくらいである。

「もう、どうして言ってくれなかったの！」

軽く頬を膨らませながら言うシャルロットに、一夏は変わらず平坦な口調で返す。

「いや、色々あってすっかりど忘れしてた」

ごまかすでも何でもなく、本当に忘れていたと言つ風に答える一夏。そもその発端は、朝教室にやってきた一夏が何気なくカレンダーを見て、「そついやもうすぐ誕生日だっけ…」と呟いたのを、すかさずシャルロットが聞き取ったのが始まりである。

そしてシャルロットは、今度はラウラに話を向けた。

「ラウラ。ラウラは知ってた？」

何をかは言うまでもない。一夏の誕生日についてだ。だが、ラウラは首を横に振る。

「いや、私も知らなかった。

だが、合点はいったぞ。教官がドイツに居た時のことだが、数日だけ帰国をしていた時期があつてな。ちょうど今頃だったのだが。

そつか、兄様の誕生日だったからか。なるほど、今になってようやく分かった」

「あれは俺も驚いたよ。

ドイツに居るはずの千冬姉がいきなり帰って来るんだもん。理由を聞けば俺の誕生日だからつて。

全く、たかがそのくらいでつて思ったね」

ラウラの言葉に続けるように一夏が言う。

言葉の字面こそ千冬に呆れているようだが、その声には確かに嬉しさという感情があつた。

「それにしても、一夏さん。

誕生日が近いなら近いと、もっと早くおっしゃって欲しいですわ。わたくし、いいえ、わたくしだけじゃありません。みんな、友人の誕生日はお祝いをしたいと思うものですよ」

今度はセシリア。

少しだけ咎めるような口調に、一夏も軽く口元を緩めた。

「いや、悪かったよ」

だが、それだけ言うと一夏はまた黙々と教科書の読み込みと、握力トレーニングを開始する。

その姿にセシリア、そしてシャルロットは何かを感じ取ったような顔をした。

「しかしだ。

箒、それに鈴もだ。兄様の旧知であるお前達ならば、兄様の誕生日を知っているはずだろう？」

それを黙っていたことについて、何か弁明はあるか？」

教室の隅。我関せずを貫いていた箒と、何故か一組にやって来ている鈴にラウラはジトーツとした視線を向ける。

探りを入れるようなラウラの視線に、二人は揃って顔を逸らす。

つまるところ、二人は一夏の誕生日を自分だけが知っているという点で、優位に立っておきたかったのだ。

何においての優位かは、わざわざ語るまでもない。

もっとも、その目論みも当の一夏本人によって脆くも崩れたわけだが。

「とにかくくっ！9月27日だよ？一夏、僕はちゃんとお祝いをするからね」

「わたくしもですわ。一年に一度きりの誕生日ですもの。喜んで、お祝いをさせていただきますわ」

シャルロットとセシリアの言葉を端にして、教室のあちこちから自分もという声上がる。

それを聞いた一夏は、教科書に目を落しながらも、確かに穏やかな微笑を浮かべていた。

「しかし9月27日か。」

確かその日はキャノンボール・ファストの日ではなかったか？

「そういえばそうでしたわね。」

となると、装備の調整も済ませる必要がありますわね」

ラウラの言葉にセシリアが思い出したように同調する。

キャノンボール・ファスト。

それはちょうど一夏の誕生日と同じ9月27日に行われる学園行事の一つである。

その内容はいたってシンプル。

高機動装備を施したISによるレースである。

ISを用いた競技大会である以上、キャノンボール・ファストも本来は国際大会として行われる行事であるのだが、IS学園のあるこ

の地では少々勝手が違う。

本土の市内にある巨大なIS用アリーナ。その施設を用いて学園の生徒が学園行事の一環として件のレースを行うのだ。

レースは専用機持ち部門と一般生徒部門に分かれて行われている。

そしてこの大会は学園内での対抗戦とは異なり、一般客も観客として来場ができる。

当然ながらチケットの入手には熾烈な争いが繰り広げられるのだが、世界大会などで活躍するISを間近で見られるとして、近隣住民を始めとして、周囲からの評価は例年好評である。

もつとも、このキャノンボール・ファストにしても、世界大会モンド・グロツソ同様に、『兵器では無いスポーツとしてのIS』を前面に押し出すための、各国政府のプロパガンダ的な意味合いを含んでいるのだが、現状そのことに関しての指摘は無い。

権力側の思惑は概ね軌道に乗っているというものである。

話を戻す。

そしてこの競技における要、それは全てのISがレース用高機動パツケージを装備するということである。

ちよつと、読んでいた教科書を閉じて一夏がそのことについて言及をした。

真つ先に答えたのセシリアである。

「その通りですわ。」

例えばわたくしのブルー・ティアーズの場合、専用の高機動パツケージに『ストライク・ガンナー』があります」

「確かそれって、臨海学校の時に使ったやつだっけ」

「ええ。ただ、装備などの細かい仕様は若干の変更があったりしますけど」

セシリアの言葉に納得するように頷く一夏。ちなみに、教科書を閉じた彼は、今度は両手で握力トレーニングを行っている。

「てことは、鈴、シャル、ラウラもパッケージがあるのか？」

話を向けられた三人は揃って頷く。

「ちょうどこの時期に合わせて、前々から甲龍用にパッケージを開発していたからね。」

多分、もうそろそろ本国から届くはずよ」

こう答えたのは鈴である。

彼女の場合は、パッケージを新造という形で用意するらしい。

「僕のラファールはあちこちで使われてる分、パッケージも色々あるからね。」

高機動用も幾つかあるから、その中から選んで送って貰うって形かな」

続いてシャルロット。

彼女が使うラファールは、元々様々な国で使用されている分、追加装備も多く開発されており、その中から選ぶという形である。

「私の場合は本国にあるレーゲンの姉妹機、『シュヴァルツェア・ツヴァイク』用に開発された物を流用する形だな。」

姉妹機故に互換性もある」

そしてラウラ。彼女の場合は、本国にある姉妹機用の装備を使用するらしい。

各々異なる装備の調達の方に一夏は、へえ…と面白いことを聞いたと言うように声を漏らす。

一夏同様、専用機持ちではあるが代表候補ではない筈もまた、参考になったと言うような表情をしている。

そして一夏がぽつりと一言。

「まあ、俺には縁がなさそうだけどね、追加装備とか…」

どこか自嘲するようにぼやいた言葉に、一同揃って苦笑い。

一夏と筈。この二人は例外的に追加装備を使用しない。

一夏の白式は開発元の倉持技研が追加装備の開発ができておらず、唯一の追加装備であった束謹製の『白嵐』に関しては、二次移行時に白式本体と一体化している。

筈の紅椿に関しては、そもそも追加装備を不要とするコンセプトで作られている。

故に二人に関してはスラスタ出力の調整などでレースに臨むことになる。

ただ、それだけで高機動パッケージを装備した機体に追い付け、或いは抜き去ることができるといえるのは驚嘆に値することではあるが。

特に一夏の白式はそれが顕著である。

素の機動力でさえ、他の専用機を軒並み抜き去っているという状態だ。

もったも、その反動と言うべきか、基本的な防御力に難があるのもまた事実である。

「しかし、ラウラのレーゲンに姉妹機があるってのは初耳だな」

レーゲンの姉妹機、その存在が初耳だった一夏は意外そうな声でラウラに言う。

「そついえば学園でこのことを話すのも初めてだったな。

うむ、まあそついうことなのだ。本国では『レーゲン雨』と対を為す形で『ツヴァイク枝』を製作しているのだ。

さすがに、詳細は機密にあたるから兄様いえども話せはしないが「
「いいよ、別に。けど、やっぱり気になるな。レーゲンの姉妹機ってことは、やっぱり良い機体なんだろうな」

まだ自分が知らない機体に思いを馳せるように言う一夏に、ラウラは得意げに胸を張って言った。

「ふふ、言っておくが兄様。優秀なのは機体だけではないぞ？

ツヴァイクの専属パイロットはクラリツサ、シュヴァルツェ・ハーゼ黒ウサギ部隊の副隊長で、私にとっても頼りになる部下だ。

機体性能だけに目を向けていると、痛い目をみることになるぞ？」

「カカツ。なおさら面白いじゃあないか。

だがラウラ。忘れちゃいけないか？俺の白式は、一度斬ればそれで事足りるんだぜ？」

「うむ。その心意気こそ我が兄様だ」

そのままカラカラと笑いあう一夏とラウラ。そんな二人をセシリアは微笑ましそくに、箒と鈴はやや面白くなさそうに見ている。そしてシャルロットは

「はいはい。二人ともその辺ね。そろそろSHR始まっちゃおうよ？」

その言葉に一夏もラウラも席に座り居住まいを正す。

それだけでなく、箒、セシリア、そしてシャルロットも自分の席に座り、鈴は慌てたように二組へと戻っていく。

それから程なくして予鈴が鳴り、IS学園の一日が始まった。

時は流れて放課後。

終業のHRを終えた教室では一夏が荷物をまとめていた。その表情はやや固く、眉間には僅かに皺が走っている。

「一夏、これからなんだが。良かったら一緒に練習を」

「すまん、箒。ISは明日だ。今日は、格闘の方をやる」

「……そうか」

学園祭の後、一夏は自身の修練に関しての方針を明確に提示していた。

ISと格闘訓練、双方を一日おきで行う。そして、格闘訓練に関しては箒達は極力関わらせない。

このことを聞いた時、当然ながら箒は、箒以外の面々もいぶかしんだ。何故格闘訓練は駄目なのかと。

その問いに一夏は一言、流派の秘門に関わるからとだけ言った。

その言葉で箒は凡その事情を理解した。彼女もまた、篠ノ之流という一つの流派を学ぶ身。

一夏同様、武門に身を置く者として一夏の言わんとすることを察した。

流派の秘門ともなれば、それはその流派に属する者にとってはとても大きな意味を持つ。

いかに親しい友人いえど、そう安々と見せるわけにはいかない。

そうした一夏の心情を察した箒は、他の面々に事情を彼女なりに説明する。

幸いにして一夏の言い分を理解はしてくれたが、箒も含めて一つ。どうしても気になることがあった。

それは、IS訓練のみならず、格闘訓練にまで楯無付いているということ。

確かに楯無の指導能力は高い。それは一夏も箒も、代表候補の四人も全員が認めている。

だが、自分たちが関われない訓練に楯無のみが関わることができるとのこと。それがどうにも気になってしかたが無かった。

そしてそのことについて一夏に聞いたすと、一夏の師が楯無についても許可を出したと返された。

話によれば、一夏の師はかつて楯無にも手ほどきをしていたと言つ。その関係かららしい。

理屈の上では納得ができる。だが、気になることはどうしても気になる。

しかし、一夏は頑として譲ろうとしなかった。五人の中ではシャルロットが一番粘っていたが、一夏は申し訳なさそうに謝り、そして決して首を縦に振らなかつた。

「では、わたくしも少々…」

そう言つてセシリアも集まりから離れて、一人で訓練のためにアリアナへと向かう。

「やはり、この間のことか尾を引いているか…」

どこか肩筋を張るようにして歩いていくセシリアの背を見ながらラウラが言う。

先立つての亡国機業による襲撃事件の全貌は、専用機持ち全員に伝えられている。

万が一の事態に率先して防衛活動に当たる必要がある彼女らは、一夏も含めて事件の概要を必要最低限の共有情報として知らされていた。

その情報の中には、襲撃者の一人が駆るISがセシリアのブルー・

ティアーズと同じ、イギリス製B T兵器搭載ISのサイレント・ゼフィルスであり、敵がセシリア以上のB T兵器の操作を行ったということもある。

無論、ゼフィルスについては国家機密にあたるため詳細スペックなどが伝えられることは無かったが、セシリアの心情を慮るのにそのようなものは不要だった。

「さすがにね、自分とこの機体が悪用された拳句、その使いつぶりが上って来てちゃあね…」

鈴の言葉にラウラが頷く。

「うむ。彼奴らがISの強奪をしているということは耳にしている。だが、私もいざ祖国の機体が奪われ悪用されていると知ったら、正直心中穏やかでいられる自信は無い」

「それはあたしも同じよ。それに、セシリアはその辺の思い入れが人一倍強いでしょ？多分あたし達が思ってる以上に気負ってるわよ」
苦悩する友人を思っ てラウラと鈴は気遣わしげな顔になる。

「だが、私が気になるのは一夏もだ。どうにもあの一件以来、一夏の様子も少し変わっている気がする」

篝の言葉にシャルロットが頷いた。

「うん。なんだか時々思いつめてるような感じなんだよね」

「そつなの？あんま変わって無い気がするけど」

首を傾げる鈴だったが、シャルロットは首を横に振ると鈴の言葉をキツパリと否定する。

「ううん。間違いないよ。時々一夏、凄い思いつめた顔になってる。毎日一夏の顔をきつちりしつかりたつぷり見てる僕が言っんだから間違いないよ」

むしろ自信満々に言いきったシャルロットに三人は何とも言えない顔になる。

そして、何とか空気を戻そうと咳払いをした筈が続ける。

「私が気付いたのは一夏の剣筋だ。あれから剣道とISの両方で何度か剣を交えたのだが、どうにも以前に増して剣に込める殺気が増している気がする。」

前々から一夏の剣筋には威圧を感じていたが、どうにもソレとは気色が違うのだ」

腕を組みながら言う筈。筈とシャルロット、二人の言葉を引き継ぐような形でラウラが続けた。

「やはり、兄様もこの間の一件で思うところがあるのだろう。敵は兄様を明確な目標として狙ったと聞く。」

あの兄様だ。自分が狙われたと知って、そのままで居る気性ではないだろう」

揃ってため息を吐く四人。どうにも色々と考えなければならぬことが多いらしい。

「うむ、ここでクヨクヨ悩んでいても仕方が無い。どうだろう、丁度四人居るのだ。タッグで模擬戦闘をやらないか？」

気持ちを切り替えるように提案をする筈。そのアイデアが気に入ったのか、三人は揃って表情に明るさを取り戻し、その瞳に闘志を宿す。

「面白いわね。乗ったわ」

「うむ。明日からは皆、機体の調整なども行わねばならない。そうになると模擬戦もそうそうできんだろうからな。良い提案だ」

「そうだね。僕達もしっかり鍛えなきゃ。一夏やセシリアに苦勞ばかりさせちゃいられないからね」

鈴、ラウラ、シャルロットが一気に乗り気になる。

「よし。では早速アリーナでの模擬戦許可を取りに行こう」

そして筈を戦闘として四人は許可を取るために職員室へと歩き出す。連れだって歩いていくその姿を、物影から扇子を片手に伺う影があったが、その存在を四人は知る由も無かった。

学園訓練棟。

ISに依らない各種戦技を鍛えるために設けられ、一夏も幾度となく利用している施設の一角。

その一室では二人の人影があつた。

トレーニング用のジャージに着替えた一夏と楯無である。

部屋の端、荷物を置くための棚には二人の荷物の他にもう一つ。手製の冊子が開かれた状態で置かれている。

一夏の師、楯無がかつて教えを受けた人物、海堂宗一郎の秘伝書である。

「ねえ一夏くん」

「なんです」

話し掛ける楯無。一夏の応答の声はやや固い。

一夏は今、柔道などでも投げ技の練習に用いられている人型を相手

に、秘伝書に記載された技の一つ、その型を延々と繰り返していた。新品を引つ張り出したはずの人は、一夏の度重なる殺法練習の練習台にされることにより、あつという間に長い間使い込まれたような傷付けられぶりを見せていく。

「一夏くん。最近、ちょっと肩肘張ってない？」

楯無の言葉に一夏はピクリと眉を動かすと、型稽古を止めて楯無に向き直る。

「そうですかね」

「うん。というか今もそう」

楯無の指摘に、一夏は自分自身を確かめるように顔をいじくりまわす。些か滑稽に見えるが、どうも素直に笑えないというのが楯無の感想だった。

「ここに来る前に箒ちゃんとかが話してるのを聞いたんだけどね。どうもここ数日の君は、その前に比べて少しばかり怖くなってるみたいよ」

「そう…ですかね？」

俺は俺なりに考えて、それで普通にやってるつもりですけど」

「多分、その考えたのが原因だと思うわ。」

まあ、この間にあんな話をして、君自身も君なりに腹を括ったみた

いけど、その余波って言うのかしら。どうもそついうオーラを無
自覚に出してるんじゃないかしら？」

「はあ……」

それしか一夏には言えなかった。

そして顎に手を当てる。或いは、楯無の言う通りに知らず知らずの
内に殺気を放っていたりするのかもしれない。

それは決して好ましいとは言えない。周りの人間に余計な心配をさ
せる。ちょうど今回のように。

それだけではなく、気配隠密の技能にも支障をきたす。

「ん〜」

顎に手を当てたまま思索する一夏。

正直な話、亡国機業の襲撃のことなども考えれば、心中穏やかでは
居られないというのも本音である。

だが、やはり張り詰めた気を発し続けるのは些か問題だ。

「まあ、少し気をつけますよ」

「ええ。そうしてもらえると助かるわ」

柔らかい笑顔で言う楯無。

だが、直後に楯無の表情が固いものになる。

「どうかしたんすか？」

固くなった楯無の表情を見て、一夏が眉間に皺を作りながら尋ねる。

楯無とはせいぜい一ヶ月程度の付き合いだが、その人となりはそれなりに把握している。

端的に言えば愉快犯。常に人をからかうような態度を取っており、纏う空気はどこか曖昧で掴み所がない。

それゆえに、そんな彼女が真面目な顔をする時は、たいてい悪くないことがない。

つまり一夏がこの時思ったことを一言で表すと、「まさかまた厄介事がコンニャロウ」である。

「いやね。さつきあんな話をしたばかりでこういう話をするのはちよつとアレかな〜って思うんだけどね。」

君も知っておいた方が良いことがあってね。ちよつと真面目なお話なのよ」

「なんです?」

「非公式の情報なんだけどね。」

先だって、アメリカのIS保有基地が亡国機業の襲撃を受けたわ。目的は、その基地に保管されている『銀の福音』シルバリオ・ユスベルのコア。襲撃犯はサイレント・ゼフィルス。結果は、基地に居た向こうの国家代表の応戦で防衛に成功したみたいだけだ」

楯無の言葉に一夏の眉がピクリと動く。

そして、軽いため息を吐くとどこか呆れる口調で言った。

「俺は政治はド素人ですけど、それが超機密情報ってくらいは分かりますよ。」

「一体どうやって入手してるんですか？」

「フフン、私、というより更識には更識なりのそういうコネクションがあると思ってる良いわ」

やや得意げな顔で鼻を鳴らしながら言う楯無に、一夏は再度ため息を吐いた。

「それにしても、意外に冷静ね」

「いやいや、これでも少しは力チンって来てますよ。」

福音は一度俺が獲物って見定めましたからね。それを横から掻っ攫おうとは、中々に舐めたマネをしてくれる」

苛立ちを抑えるように口の端を吊り上げ、犬歯を剥き出しにしながら言う一夏。

その姿に苦笑をしつつも、楯無は忠告を込めて言葉を続ける。

「まあ落ち着いて落ち着いて。」

とにかく、君も気をつけてね。さっきはああ言ったけど、君を狙う輩は居るわけだから、用心に越したことは無いわ」

「そりゃまあそうですけど、会長。一つ、質問良いですか？」

「あら、いいわよ」

ちょっと意外だという表情をするが、楯無は一夏の質問を快諾する。

「端的に言って、ぶっちゃけ亡国機業以外に俺を狙う輩って居るん

ですかね？」

至極何とも無い、まるで気を聞いてくるような自然な調子で、非常に重要なことを聞いてきた。

あまりに自然な様子だったために、楯無も反応が僅かに遅れる。

だが、すぐさま真面目な返答を返す。

「ええ。多分君も分かっているかもしれないけど、そりゃもう色々よ」

「やっぱりか」

仕方ないと言った様子で肩を竦める一夏。

そして楯無は予備知識として続ける。

「ただ、一口に君狙いと言っても色々よ。

まず第一に上がるのが、うまく君に取り入って自国に引き入れようとする各国のエージェント。

まあ、これについてはそこまで脅威じゃないわ。君を利用して美味い汁を吸おうとするような連中だけど、基本的に君を害することは無いし、そもそも各国のエージェント同士で牽制合戦をやってて、君に手出しができない状態だから。

ただ、問題なのがこのあと。

例えば、いわゆる非合法研究をしているような連中。さっきのエージェント云々との繋がりも無きにしてもあらずだけど、まず確実に君にとっては良い相手じゃないわね。

それからもう一つ厄介なのが、君を疎ましく思う存在。

はつきり言って、君という存在はある種の爆弾に違いないわ。ISによって確立された今の体制を打ち壊す可能性という、ね。そうし

た輩にとって君という存在は邪魔でしか無いのよ。現在の体制で利権を得ている連中や、或いは、ISの登場で盲目的に女性優位を唱えてるおバカさんの集まり、とかね」

最後の部分だけ、まるで吐き捨てるように言った楯無。

ISという存在の本分、ただ立場を享受するだけで何もしていない、それらを弁えずに、楯無からしてみればつまらないことこの上ないことを声高に唱える人間への、彼女にしては珍しい侮蔑を込めた言葉だった。

だが楯無の言葉を聞いて、改めて自分を付け狙う存在の多さを確認した一夏が浮かべていたのは、むしろ余裕すら感じる笑みだった。

「へえ、それはそれは。まずはいぶんご大層なことで」

ふと、一夏は室内の壁にかかる時計に目を遣る。

使用時間のリミットが近いことを確認した一夏は、黙って片付けを始める。

楯無もまた、一夏に倣って片付けをする。

「まあ、どうせそんなことだろうと思いましたがよ。

ねえ会長。さつき会長が挙げた連中と、例の亡国機業を引っくるめてですよ。仮に俺に手を出すとしたら、ISを持ち出してくる可能性があるのはどいつですか？」

重ねて一夏は尋ねる。

今一質問の意図が読み取れない楯無だったが、聞かれた以上は内容が内容である以上、素直に答える。

「多分、亡国機業は確定でしょうね。」

仮に、まあどこかの国が仕掛ける場合は、ISを持ち出すのは少しリスクだわ。

使用が厳しく制限されている以上、君も向こうも迂闊にISは出せない。ちなみに、一番有り得るのは直接拳銃なんかを使った闇討ちかしら。確かにISを使えば応戦は容易いけど、敵側と違って君はISの使用に縛りがあるわけだし」

「まあ、向こうがIS無しなら俺も素のまままで抵抗はできそうですけど。でもISが来る可能性もあるんですよ？」

「まあね。ただ、その場合は秘密裏にISで構成した特殊部隊を送り込むとかかしら。」

ああそうだ。仮に、万が一にだけど。そうした事態になったら、すぐに増援を呼びなさい。カットビングで駆け付けてあげるから」

「それは、確実性のためですか？」

「それもあるけど、君一人だと何をしでかすか分からないもの。例えば、敵は全員首から上だけの帰国とか」

「…チツ」

「やるつもりだったんだ」

楯無の指摘に舌打ちする一夏。

何となくだった懸念が当たり、楯無は思わず額に手を当ててため息を吐いた。

「とにかく、もうこの際ぶっちゃけちゃうけどね。」

少なくとも、亡国機業以外の心配はそこまで深刻にしなくても問題

ないわ。

いずれにせよ、君に手を出したことがバレた時のリスクが大きすぎるもの。せいぜいが静観か、引き込みくらいよ」

「あー、じゃあ最後にいいですか？」

一通り片付けを終え、互いにその手に荷物を持ちながら、一夏は改めて問う。

「まあ、仮にですよ。

俺がそうした襲撃を受けたとする。その場合、ことの隠し具合ってのはどれくらいですかね？

ほら、スパイ映画とかだと、『君達の素性がバレても、当局は一切関知しない』とかってあるじゃないですか」

「ああ。そういうことね。うん」

問われた楯無は顎に手を当てると、しばし考えてから答えた。

「少なくとも、結構な大事になる可能性はあるから、基本的に情報の統制はあるわね。

仮にエージェントが捕まったり、何らかの被害を受けたとしても、向こうが関知しないわけだから、君に被害が及ぶってことはないわ。むしろ君が被害者なわけだし。そもそも、君に手を出したってばれた時点で、相手側が多大なリスクを負うの自明の理。うん、多少荒事になっても、君の不利になる方向に情勢が転がるということはないわ」

「そうですね。そりゃ良かった」

自分の安全がそれなりに保障されていることを確認してか、やや上機嫌になりながら一夏は部屋の出口に歩いていく。

そこで、一夏は一言ポツリと漏らした。

「それだったら、むしろ襲撃力モーンってのもアリかな？」

むしろ邪悪とも取れる笑いを口元に浮かべながらの一言。

その顔を見て、その言葉を聞いて、そしてさっきまでの一夏の行動や、一夏の手にある秘伝書を見た瞬間、楯無は猛烈に嫌な予感があった。

「一夏くん、まさかとは思うけど、自分の立場の安全が保障されて、相手が多少の被害を受けても問題にならないのを盾に、もし襲われたら応戦ついでに敵を技の実験台にしようなんて考えたりしてないわよね？」

瞬間、脱兎のごとき速さで一夏は部屋から去っていた。
凶星だったらしい。

「あ、コラ一夏くん！」

案の定だった一夏の思考に、楯無は思わず頭を抱えなくなった。

ひとまず部屋に戻ったらその辺を言い含めるべきか。

自分の側に引き込んだ、守護対象である少年のあまりの厄介さ、敵ですら自分の技の実験台と見做せるような気質に、楯無は再び疲れたようなため息を吐く。

「なんていうか、一夏くん以上に一夏くんにコナかけてくる連中の

安全が心配になってきたわ…」

そうばやく楯無の声には、「もうどつにでもなっちまえ」と言っような投げ遣り感すら感じられるものだった。

今日のヤンデレ
おまけ

キユツ

やや高めの音と共に、寮の洗面所の水道、その取っ手が捻られる。

時刻は11時。一年生寮の一室で、シャルロットは就寝前の歯磨きと洗面を行っていた。

同室のラウラは既に眠っている。

ここ数日、ラウラは寝る前にシャルロットの手によって髪を梳いて貰うのが日課になっていた。

元々そうした身嗜みにより頼着をしない気質のラウラだが、それをシャルロットが良しとはしなかった。

同性から見ても抜群に整っている容姿をしているのに、それを整え

ないというのは、シャルロットの感性が許せなかったのだ。

そうした感情から、ラウラへのあれこれの一つなのだが、シャルロットの予想以上にラウラは気に入ららしい。

髪を梳かれることがリラックス効果を齎しているのか、その途中にラウラは段々と眠たそうになる。

夏休みに二人で出かけた際に買った、黒猫を模した着ぐるみのようなパジャマや、ラウラ自身の同年代に比べて若干幼く見える容姿も相まって、とにかくシャルロットの心を色々とくすぐるのだ。

ちなみに、シャルロットもラウラ同様に猫パジャマ着用である。色は白だ。

閑話休題。

そののこんなでラウラを寝かしつけた後、シャルロットは自分の就寝準備を行う。

とは言え、それほど大仰なものではない。

ちようど今のように、洗面を済ませたり、少し髪を整えたりする程度だ。

「ふう…」

歯磨きと洗面を済ませ、濡れた顔をタオルで拭いたシャルロットは一息つく。

思い出すのは今日の放課後に行った模擬戦。

ラウラ・鈴コンビ対シャルロット・篝コンビでの試合。

結果としてはラウラ・鈴コンビが僅差で競り勝つという形になった

が、勝敗はさておいて非常に有意義な一時だったと思う。

シャルロットを含め四人は全員士気高く、同時に機体能力、本人の技量共に十分。充実した試合だった。

代表候補のラウラと鈴は言うまでもなく、箒もまた目を見張る成長をしている。

確かに経験面での差は大きいですが、一夏同様に元々修めていた技術を上手く活かしている。

紅椿にしても、絢爛舞踏が発動できない現状では高性能の代償にやたらエネルギーを食う機体でしかないが、それならそれと割り切ったようにエネルギーを考えた立ち回りをしている。

他人を評することが出来るほど偉くなっただつもりはないが、それでも箒には及第点をあげるべきだろう。

四人がそれほどまでに士気高い理由。

それは他ならぬ友のため。

確かに存在の発覚したテロリストへの対処云々もあるし、それが何よりも重要と理解している。

だが、同時に苦悩する友人の力になりたいという思いもまた事実。

敵に強奪されていた祖国のISや、その敵の技量に苦悩するセシリア。

そして、テロリストの直接的にされた一夏。

二人の力になりたい。その思いがあった。

「一夏…」

シャルロットは一夏の、想い人の名を呟く。

何よりも、シャルロットにとっては今の世界を生きる全ての人間の中で最も大切な人。

シャルロットにとっては全てと言える、自分の全てを捧げられる大事な想い人。

彼のことを考えて、シャルロットは胸に熱いものが沸き上がるのを感じる。

「一夏あ……」

思い出すのは、学園祭が終わってからここ数日の一夏の姿。

自身がテロリストの標的になっていくと知ったからか、どこか思い詰めて張り詰めた空気を纏うことが多くなった。

「一夏あ……」

まるで自分自身が一夏であるかのように、シャルロットは己の体を自らの腕で強く抱く。

張り詰めるような姿。

それすらも、どうしようもなく愛おしいと思うと同時に、少し悲しく感じる。

一人で背負おうとする姿が、シャルロットには悲しさを感じさせる。

力になりたい。側に、隣に居たい。

物寂しさと共に、そんな感情が沸いて来る。

だからこそ、シャルロットは自らもまた鍛練を怠らないようにする。

一夏の力になれるように、一夏だけに背負わせないように、一夏とシャルロット、二人で、二人だけで想いを分かち合えるように。

ゆっくりと、体を抱きしめていた腕を解く。

そして、シャルロットは目の前の鏡を見る。だが、彼女の目には鏡に映る自身は見えていなかった。
見るのはいつだって一夏のみ。

「僕が…守るよ…」

亡国機業。一夏を狙うテロリスト。シャルロットはその存在を断じて許さない。

正義感、国家代表候補故の責務、それらも確かにある。
だが、何よりも一夏を狙ったということが、彼女には許しがたかった。

学園祭当日、結局逃してしまっただが、追い詰めた敵にクリザンテムを突き付けたあの時も、シャルロットは一夏を狙ったことへの怒りで震えていたのだから。

「はあ…あつ…一夏あ…」

守る。絶対に守る。助けになる。絶対に、テロリストの好きにやさせはしない。

一夏への自身のありったけの想いと確かな決意を込め、ゆっくりと自らの両の頬に手を添えながら、シャルロットは言葉を紡ぐ。

「大丈夫だよ。一夏は……ああ、んっ……僕が守るから……ねえ、一夏………」

恍惚と陶酔に顔を淡い朱に染めながら、シャルロットは静かに呟いた。

吐く息には、蠱惑的な色が籠っていた。

そして、明日からの一夏との学園の日々に思いを馳せながら、シャルロットもまた自らのベッドに潜り、眠りの内に沈んでいった。

第七十話（後書き）

後半、ICHIIKAはICHIIKAでした。

なんていうか、一夏の身柄に関するゴタゴタっていうのは絶対に表沙汰にはならないと思うのですよ。

そうした事実も何もかもが秘匿されて。だから多少一夏がヤンチャしちゃっても意外に問題にならないはずだと思ったりしました。

いやだって、訴えれば自分たちが一夏に手を出したってことを認めるようなものですから。

それを逆手に取って、襲ってきたやつがいるなら、そいつを技の実験台にしようと考えてるICHIIKA。いい感じで悪ですww

敵対者の命なんざ知ったことがICHIIKAのモットー。

そしておまけ。

うん、正直言って最後のアレをやりたいがためなんだ。
分かる人はすぐに分かっちゃいますよね。

ユッキー…っ！かむしろ由乃ですけどww

偏差値上げええええええええええ！（切実）

勉強すればいいだけですハイ。

いつかのネタの続き（前書き）

以前にやったケンイチネタの第二回です。

少タリフレツシュを兼ねて書いてみたのですが、これはこれで難しいですね。

ネタは熱い内に書けを標語に一気に書き上げたのですが、その分作りはだいぶ粗いです。

そのあたりをご容赦下さい。

そろそろケンイチ本編の方は一影の顔出しくらいして下さい。気になる。

いつかのネタの続き

夕暮れの川岸で一人の少年が佇んでいる。

「えいつ！」

落ちていた石を拾った少年は、目一杯の力で石を川に投げる。少年の名は織斑一夏。年は今年で10を数える。

「はあ……」

軽い音と共に川に沈む石を見ながら、一夏は軽くため息を吐く。

今、世界は激変の時を迎えていた。

「IS インフィニット・ストラトス」という存在がある。

宇宙空間活動用マルチパワードスーツとして開発されたソレは数年前に発表をされたが、当時は学会で一笑のもとに伏された。

だがある時、一つの事件が起きる。

「白騎士事件」

複数国家の軍事コンピュータが同時ハッキングを受け、日本に向けて多数のミサイルが発射された一大事件。誰しもが絶望をする中、唐突に現れたIS「白騎士」が全てのミサイルを迎撃。

事件を解決すると同時に、条約を無視して各国が派遣した軍、戦闘機を主体に構成されたソレを纏めて無力化。そして姿を消す。

この事件により、世界は実質的にISに敗北を喫すると同時に、その存在を受け入れざるを得なくなった。

そして世界に普及したISだが、かの存在には一つの致命的な欠陥があった。

女性にしか起動できない。

この一言で言える欠陥により、世界はその在り様を激変させる。

各国は国防の要にISを用い、それまでの兵器はISの前に無力とされ、その存在価値を大きく減らす。

結果、各国の軍では大規模な人員削減と同時に、要所に女性が据えられることになった。

更に、同時に各国政府は女性優遇政策を敢行。これにより、世界には一気に女尊男卑の風潮が広まることになる。

しかし、特に父権主義の強いイスラム圏などでの摩擦、職を失った軍人の保障、過剰とも呼べる女性優遇政策による女性による男性蔑視など、様々な問題を世界は抱えることになる。

だが、そのようなことは一夏には関係無かった。

一夏にとって何よりも問題だったこと。それはそれまで学んでいた剣道が、ISの普及と共に学べなくなったことだ。

彼が剣道を学んでいたのは「篠ノ之道場」。

そして、ISの開発者の名は篠ノ之束。道場主の実子にして、彼の幼なじみの姉である。

「はあ…参ったなあ…」

川を眺めながら一夏はぼやく。

ISが普及すると、各国政府は行方をくらました束を重要人物として国際手配。

同時に、日本政府は束の家族を重要人物保護プログラムの名の下に、転居を求めたのだ。

わずか10歳でしかない一夏はそうした事情を知らない。

ただ彼が思ったのは、剣道を学べなくなつて困つたということだ。

「困つた〜」

再びぼやく。彼の実姉は両親に捨てられた彼と自身のため、常に忙しい。

ため息を吐いた一夏は、その場に膝を抱えて座り込む。

「何を黄昏れているのだね、少年？」

不意にその背に声がかけられた。

明らかに大人の男性のものとは分かる声に、一夏は座つたまま振り向く。

一夏の後ろには、一人の男が立っていた。

白で構成された服はゆつたりとしていながらも、その内に包む男の体が鍛え上げられたものであることを示している。

そして、服同様に白のコートに付けられたフードからは、特徴的と

呼べる白い長髪と、男の顔が覗いている。

「えっと…」

「やあ、突然にすまなかつたね。」

ただ、君のような少年がこんな所で黄昏れているのが気になってね。少々声を掛けてみたのだよ」

「あの、あなたは…？」

立ち上がり、首を傾げながら尋ねる一夏に、軽く笑いながら答えた。

「ああ、すまなかつたね。」

私は緒方一神斎。しがな旅の武術家だよ」

その言葉に一夏は素直に納得する。

目の前の男の鍛えられた体つきは、剣道の師だった幼なじみの父に通じるものがある。

「緒方さん…ですか」

「ああ。さつきも言ったが、君の様子が少々気になったのでね。声を掛けてみたのだが、どうかしたのかね？」

一神斎の尋ねに一夏は素直に答える。

このあたりは、彼がまだ10を数える齡の幼さ故だろうか。

そして一夏は語る。

それまで剣道を学んでいたこと。その師匠が居なくなってしまうた

こと。ISが関係していること。

「成る程。剣道の先生が居なくなってしまうたか。それは大変だったね。君の話聞いていても、君が真摯に剣道に打ち込んでいることは分かる。それが学べなくなったのは、さぞ辛かるう」

したり顔で頷く一神斎。だが、一夏の言葉には続きがあった。

「でも、本当は剣道以上に好きだったことがあるんです」

「ほう？」

一夏の言葉に一神斎は興味深げな顔をする。

「先生からは剣道と一緒にコブジュツって言うのを習ってたんですけど、俺は剣道よりそっちの方が好きだったんです。それが教えてもらえなくなるのが…」

「成る程…」

一夏の言葉に一神斎は納得するように唸る。

そして、しばし間をおいてから一神斎はどこか諭すように言った。

「少年、実に簡単な話だ。

君は、剣道よりも無手の武術が向いているのだ」

「え？」

まるで今まで分からなかった問題の答えを目の前に突き付けられたように、どこか呆けたような顔に一夏はなる。

「少年、簡単な話だ。
武術をやりなさい！」

一夏の両肩に手を置きながら、一神斎は力強く言った。

「そうとも。君には何より、武器な頼らない武術こそが向いているのだ」

真っ直ぐに一夏を見据える瞳。

「武術…？」

「そうだ」

そして一神斎は一夏から手を離すと、ゆっくりと川に歩みよる。

「見ていたまえ」

そう言うと、一神斎は静かに構える。

ゆっくりとした、全身に力を巡らせるような深呼吸。

それは一瞬だった。

「ぬえああっ！…！！」

裂帛の気合いと共に、一神斎の拳が下段から振り抜かれる。

一夏の目に、かるうじて映ったその拳は、信じられない結果を引き起こした。

流れる川を、真横から二つに割っていた。

その拳は水面に触れてはいなかった。拳が振るわれたことで生じた拳圧。常識の埒外まで鍛え上げられたソレにより、川はその流れを絶たれていた。

「あ…あ…」

呆然とした表情で、一夏はその光景を見つめる。

一夏に向き直った一神斎。その顔を一夏は真っ直ぐに見ながら言った。

「すごい…ちよっとしか見えなかった…」

その言葉に一神斎はわずかに眉を動かす。

だが、すぐに穏やかな表情を浮かべると言った。

「少年。これが、極めた業の一端だ。

改めて言おう。武術を学ぶが良い、少年。そして、至りたまえ。我々の、達人の世界へ」

そして一神斎は歩き去ろうとする。

その背に、一夏は思わず声をかけた。

「緒方さん！

俺、織斑一夏って言います！あの、また、また会えますか!？」

隠しきれない興奮に彩られた言葉。

一神斎は一夏の方を向くと、穏やかな、しかし力強さを感じさせる声で言った。

「君が、たゆまぬ鍛練を続ければ、いずれまた会えるかもしれない。

その時まで壮健でいたまえ、一夏君」

そして一神斎は去っていく。

その姿が見えなくなるまで見続ける一夏。

そして、再び一人になった一夏の幼い顔には、新たな目標を得た興奮と熱意が宿っていた。

これが織斑一夏と、闇の一影九拳の一人、緒方一神斎の最初の出会いだった。

そしてこの日を境に、一夏はまるで何かに取り憑かれたかのように一心不乱に武術の修練に打ち込む。

空手、柔道を始めとして、テコンドーや中国拳法など、暮らしの中で学べる範囲の格闘技を貪るように学びつつける。

彼の実姉である千冬、世界最強のIS操縦者として名を馳せていた彼女は、剣道を止めて格闘技に打ち込むようになった弟に、最初こそ首を傾げたものの、ひたむきに修練に励む姿勢への好ましさや、忙しさのあまり中々一夏と接することができないことへの彼への負い目、そして格闘技が一夏に寂しい思いをさせないならという考えから、特に何を言うでもなく弟を黙認していた。

だが彼女は知らない。

弟が格闘技を、否、武術を志した起源。それが世界の裏側、その深奥の一端であることを。

そして一夏と一神齋が出会ってから数年の後、一つの事件が起きた。

場所は港に隣接された倉庫街の一角。使う者の少ない古びた倉庫の一つで、人と人が殴り合う音と、幾つもの怒号が響いていた。

「うりゃっ!」

掛け声と共に少年が男を殴り飛ばす。

殴られた男は黒服に黒のサングラスといういかにもな出で立ちであり、同様の格好の男が少年の周囲に幾人もいる。

カタギの人間ではないのは一目瞭然であった。

「オラアツ! くそっ、最初は不覚を打ちまっただけど、どうだ! 俺を舐めんな!」

拳を構える学生服の少年。彼こそが織斑一夏である。

何故彼がこのような場所で、このような大立ち回りを繰り広げているのか。

実の所、一夏自身よく分かってはいなかった。

だが、何と無くの予想はついていた。

この日、世界が注目する一つのイベントがあった。

第二回モンド・グロツソ。

数年前、世界に急速に広まったISではあるが、その圧倒的軍事性に、或いは再び戦火が広がるのではと懸念する声が各地で上がった。

これを良しとしなかった各国政府は、すぐさまISの運用に関しての取り決めを行う国際機関を設立。

同時に、ISの軍事性を一般に伏せるためにISをスポーツ化、世界大会としての競技会の開催を決定。

これがモンド・グロツソである。

第二回大会決勝となるこの日、世界は一人の代表に注目をしていた。

日本国家代表、織斑千冬。

一夏の実姉にして、第一回大会の優勝者。そして、ブリュンヒルデの称号を持つ世界最強の操縦者である。

同時に彼女は表側唯一の、達人級の武術家であり操縦者だった。

そんな存在が実姉ゆえに、一夏は何と無くだが自身が狙われる理由を推察していた。

国際大会の優勝という事実は大きい。そして、千冬は二連覇確実と言われているが、それを快く思わない人間がいるのも事実。

大方、そうした輩が彼女の実弟にして唯一の身内である自分を誘拐
することで千冬を脅迫でもしようとしたのだらう。

尤も、気付いたのはその誘拐をされた後という皮肉に、一夏は黙っ
て口の端を吊り上げる。

道を歩いていたら、いきなり首に衝撃と痛み。
目覚めたら縛られて倉庫。どうせスタンガンか何かだろうと当たり
をつける。

(不甲斐ない)

内心で一夏は吐き捨てた。

未熟もいいところだ。とにかく気に入らない。これではおめおめと
誘拐された自分が馬鹿みたいではないか。

何より姉に、そして、かつて出会ったあの人に合わせる顔がない。

そう思った一夏は、空手の道場の先輩が趣味で編み出したという縄
抜けを敢行。そして、目一杯の抵抗を試みた。

なんてことはない。

とにかく殴り倒す。それだけだ。当然ながら黒服達も抵抗をする。
だが、人質である自分を傷付けるわけにはいかないのか、持ってい
るだろう銃を抜く気配はない。それが一夏には幸いだった。

「だりゃっ!」

背後から迫った黒服を視線も向けずに促すと、その鳩尾に正拳突き
を放つ。

一夏自身はソレがなんであるかを理解していない。だが驚嘆すべきことに彼は、誰に習うでもなく、独自で制空圏の習得、中国武術で言う緊奏へと至っていた。

そして今、一夏は持てる力を総動員して戦っていた。

目の前の黒服に連続で正拳突きを打ち込む。倒れた黒服からすぐに意識を外すと、背後から一夏を取り押さえようと手を伸ばした黒服の腕をつかむ。

そのまま一本背負いの要領で投げ飛ばし、確実に倒すために頭から叩き落とす。

さらに別の黒服に接近すると、一気に身を屈めて懐に潜り込むと同時に、その顎目掛けてアッパーカットを叩きこむ。そうして倒れた黒服に、追撃で頭に踵落としを落とし顔をコンクリートの床に叩きつける。

(足りない…！)

自身の身命の安全が懸かる戦いの最中、一夏の心はある種の渴きを感じていた。

いや、この時だけではない。かつて一神齋に会ってから今日まで、ひたすらに格闘技に打ち込んできた中で、その渴きは常に一夏と共にあった。

どれだけ鍛えようとも足りないと感じる。

空手や柔道、学んだ格闘技の全ての道場で一夏は一番を勝ち取った。そこには確かに膨大な鍛練の裏付けがあったのだが、これが鍛えれば鍛えるほどに、強くなればなる程に渴きは強まっていった。

原因は分かりきっている。
かつて見たあの光景。川を拳一つで断ち切った一神斎の一撃。まさに極みと呼べるソレに他ならない。

あのひと時の光景を目標に一夏は鍛えてきた。だが、鍛える程に目標の高みを実感し、その実感が渴きとなって一夏に襲い掛かる。

言うなれば、今の一夏は強さという水を求めて喘ぎ続けているようなものだ。

「ぜえっ…はあっ…」

いつの間にか黒服は全て倒れ伏していた。
だが、それを前にしてもなお、一夏の心は潤わない。ただ、胸を焼くような衝動に歯を噛むしかなかった。

ドガンッ！

「ああ？なんだこりゃ？」

唐突に大きな音が響いたと思ったら、続いて荒くれたような女の声が聞こえた。

音の発生源、倉庫の入口であるシャッターの方に視線を向けた一夏は、今度は忌ま忌ましそうな目をする。

視線の先には引き裂かれたシャッターと、蜘蛛のように背中から八本の足を伸ばすISを纏う女が居た。

IS。その存在について一夏は、自分でも是とするか否とするか凶

りかねていた。

ISが発表されて以後、急速に女尊男卑に移り変わった世の中を、一夏は決して快くは思っていない。

IS操縦者が優遇されるのはまだいい。だが、そうでない女までが過剰な優遇を受け、あまつさえISがさも自分の力であるかのように振る舞っているのが一夏には気に食わなかった。

なにより、IS操縦者と自分を同一視して「女は男より強い」と思い込む輩が居て、なおかつそれが一夏の学んだ格闘技の世界にすら居るのが腹立たしかった。

だから一夏は、そうした輩との試合の際に、徹底的に痛め付けることにしていた。

無論、入院などの騒ぎにならないよう、その心を折るように巧妙に徹底的にだ。

そしてそうしたことをする度に道場を止めざるをえなくなり、千冬はどこか呆れたように顔を小突きながら注意をするのだが、一夏にはどうでもよかった。

本音を言えば、敵を痛め付ける時に、一夏は明らかかな愉悦を感じていたのだ。その蜜を覚えたからこそ、一夏はこれからもこうしたことが続くのだろうなとも思っていた。

「おいガキ。こりゃテメエがやったのか？」

IS使いは倒れ伏している男を顎で指しながら一夏に尋ねる。

一夏は黙って頷く。

「けっ！役立たずどもが。これだから男は要らねえんだ」

吐き捨てるような女の言葉には、明確な男への蔑視があった。それに眉を動かす一夏だが、彼とて物の道理が分からない程愚かではない。

「おいガキ。こっちも仕事なんぞな。ちょいとネンネしてもらっせ」
まるですぐにこなせる詰まらない仕事を割り当てられたように、めんどくさいと言う空気を発しながら女が言う。
いや、事実そうなのだろう。

男女の力云々はさておき、生身とISでは絶望的。

おそらく一夏は、この誘拐犯の一味とおぼしき女に為す術なく打ち伏される。

その自覚があった。

だが、その予想を一夏は大きく裏切られることになる。

「おやおや、何やら懐かしい気と面白そうな気配を感じて来て見れば。
これはこれは…」

唐突に倉庫に第三者、男の音が響く。

その声を聞いた瞬間、一夏はハツとするような顔をして、すぐに声の方に視線を向ける。

ちょうど倉庫入口。ISから5メートルほどの所に一人の男が立っていた。

その姿、一夏には見間違えようが無かった。なぜならその姿は、初

めて会ったその時から一夏の心を渴かしていたのだから。

「緒方さん！」

緒方一神斎がそこに居た。

「あぁん？誰だテメエ？」

女がめんどくさそうに緒方に尋ねる。

問われた緒方は、気付いたように答える。

「あぁ、名乗りがまだだったか。申し訳ない。私は緒方一神斎。しがない、旅の武術家だよ」

そう、かつて一夏に名乗ったように緒方は言った。だが、女は緒方の名乗りに興味なさそうに言う。

「武術家、ねえ…。まあいい。面倒だから失せる。今なら見逃すぜ」

「ふむ。聞くにISは国防の要と言うが、それが彼みたい民間人の少年に武器を向けていいのかね？」

「やかましい。いいから失せる。」

「テメエなんかの相手をしてる暇はねえんだよ」

シッシと追い払いように女な手を振る。そこには、緒方を何の脅威とも見做していないのが見て取れる。

だが、それは悪手だった。

「そういうわけにもいかない。
彼のような若い才を、つまらないISごときに潰されるのは私も癪
でね」

「あぁん？何だ」

その瞬間の光景は、かつて緒方が川を割った時以上に一夏の心を振
るわせた。

それは一夏の目にかろうじて映る動きだった。

目にも留まらぬ早さで、緒方は女に接近。そして、女の全身の関節
を破壊し、首をへし折ることで女を絶命させていた。

事切れ、倒れた女の表情は自分の死を理解していないように呆然と
していた。

同時に、一夏もまた呆然としていた。生身でISを倒す。否、その
先にある殺害を為した緒方。その姿に、一夏は心が震えていた。

「さて、久しぶりだな。壮健なようで何よりだ、一夏君」

「緒方さん……」

ISに乗っていたとは言え、人を一人殺害してもなお、穏やかな表
情を浮かべる緒方。

その顔を一夏は静かに見る。だが、そこに嫌悪などの負の感情は無
かった。

「緒方さん、どうして……」

「なに、先程も言ったがね。何やら面白そうな気配を感じて来てみ

れば、懐かしい君の気配がしたのでね。

少々様子を見させて貰ったが、よく鍛えているようだ。感心したよ」「

そう、純粹に一夏を褒めたたえる緒方に一夏は嬉しさを感じる。

そして、一夏は事切れた女に視線を向ける。

「緒方さん。緒方さんは今ISを、生身で」

「いかにも。この身この拳一つで殺した」

「できるんですか？」

殺したことへの忌避感などない純然たる興味と、総身を震わせるような興奮に彩られた声で尋ねる一夏。

緒方は鷹揚に頷いた。

「できるとも。それが、我々達人の業だ。そして、君の可能性だ」

その言葉に一夏は表情が明るくなる。

目指し、再び垣間見た極み。そこへ至る可能性があると言われたことへの興奮が表情に浮かんでいた。

いつの間にか、一夏は次の言葉を紡いでいた。

考えることは無かった。本能が、衝動が、言葉となって発せられていた。

「緒方さん！俺を、あなたの弟子にしてください！

俺を、あなたの領域へ連れて行って下さい！そして、俺の中の渴きを癒させて下さい！」

必死の懇願のように、縋るような一夏の申し出。

その言葉に、緒方はかつて一夏に見せた力強い笑みと頷きで応えた。

そして緒方は一度その場を去ることにした。一夏に自分を尋ねるための導を与えて。

それから少しの後、モンド・グロツソ決勝を放棄して愛機「暮桜」と共に千冬が駆けつける。

千冬は弟の無事に安堵すると共に、事切れたIS操縦者の姿に驚愕し何事かを一夏に尋ねたが、一夏は意識を失っていたからと知らぬ存ぜぬを貫いた。

事件から数日。事件解決にあたって千冬に情報提供をしたドイツへの借りを返すために、千冬はドイツへと出向。

同時に、一夏は改めて緒方の元を、一夏を待つ緒方が滞在していた闇の施設の一つを尋ねた。

そして一夏は緒方に正式に弟子入り。闇の施設で修行を開始すると同時に、根回しを行う。

全寮制のスポーツ名門校からのスカウトを受けたという形で中学を転校。家族、友人たちとの距離を取ってから、一夏は緒方の下で殺法を学ぶ。

そしてこの瞬間こそが、闇の弟子集団YOMIの幹部の一人、「流」の称号を持つ男の誕生の瞬間だった。

「人越拳ねじり抜き手!!」

目の前のIS「ブルー・ティアーズ」を纏う少女、セシリア・オルコットに自身が尊敬する達人の一人、一影九拳の空手使いである人越拳神本郷晶の技を放ちながら、一夏は懐かしい気分になる。

どうして急に師、一影九拳が一人、拳聖緒方一神斎との出会いを思い出したのか。一夏は首を傾げる。

だが、すぐに自分を叱咤する。今は戦いの最中。いかに相手の武装を、遠隔操作型射撃武器「ブルー・ティアーズ」並びに大型レーザーライフル「スターライトmk.？」を破壊し、相手の攻撃手段の悉くを奪ったとは言え、油断は禁物である。

生身同士で使えば人体の貫通も容易い攻撃。それを受けて尚、その身に損傷が無いことに、一夏は改めてISの防御力の高さを知ると共に、それすら無意味とする最強クラスの達人達の凄さを思い知る。

「あ、あなたは…!」

傷こそないものの、全身に襲いかかった衝撃から来る痛み、苦悶の表情を浮かべながらセシリアは口を開く。

彼女は信じられなかった。いかに世界唯一の男性IS操縦者言えども、所詮は素人。代表候補である自分が負けるはずがない。その自信があった。

だが、現実には自分は全ての武装を失わされ、今こうして相手の容赦ない攻撃に晒されている。

さらに信じられないことに、目の前の相手は剣も銃も用いず、拳一つ蹴り一つでそれを為しているのだ。

「あなたは…今までISとの関わりなど…!」

「ああ、なんだ。色々あつたんだよ」

そう言つて一夏は、自身のIS適正発覚直後の騒動を思い出す。表の報道などの騒ぎでは無い。むしろ裏だ。

YOMIの幹部である自分の処遇を巡つて、一影九拳全員による会議が開かれたり、上手いこと自分を利用して「闇」を都合よく使おうとした馬鹿な政治家どもの始末。

一影九拳全員が動いたという事実には戦々恐々したり、一夏自身もまた闇の諜報部を利用して馬鹿政治家の始末を行つたりと、とにかくてんでこ舞いだつた。

そして一夏の処遇の決定。

一夏をIS学園に向かわせる。そして、今表側の中心ともいえるIS界において殺法の有用性を証明し、後々の闇の活動に役立たせること。

並びに、世間の注目を一点に向けてことで、闇の活動の隠れ蓑とする。

闇無手組の長、一影直々の一夏への勅命だつた。

これを受諾した一夏は、即日九拳の一人でありISを一部扱う闇の武器組に顔の効く櫛灘美雲の計らいで武器組へ出向。

武器組のIS使いの下で、一か月の間みっちりしごかれたのだ。この結果、一夏のISでの実力は平均的な代表候補生を上回るものになっていた。

セシリアを見つめながら一夏は思う。

自身が纏っているIS「白式」。それがやたらと凄いものだ。一次移行後は徒手空拳の格闘をコンセプトにしたものに変化。自身のスタイルに合致すると共に、その単一仕様能力「零落白夜」を発動。

まさに、拳で以ての殺法を旨とする一夏のための機体と言えた。

(素晴らしい…)

内心で自身の愛機となったISに感嘆しつつ、確実にこれに手を加えているだろう旧知の女性に思いを馳せる。

何かと気に食わない人間ではあったが、どうにもIS絡みでは役に立ちそうだ。

「さて、セシリア・オルコット。そろそろ終わりにしよう」

その言葉にセシリアは眼を見開くが、一夏は取り合うつもりは無かった。

近接格闘技能の瞬時加速を使用。一瞬でセシリアに接近した一夏は、さらなる猛攻を加える。

古式ムエタイ「ガンラバー・ラームマーン・クワン・カン」。
メキシカンプロレス、ルチャブリレの一手「ディエゴティカ・クロ
スギロチン」

八極拳八大招式「立地通天砲」

師である緒方の特別の計らいにより、親友であるYOMIのリーダー叶翔と共に九拳から学んだ技を放つ。

少々話を反らす、YOMIの面々は各々他の者とは異なる特徴的な長所を持っている。

例えば「空」の称号を持つリーダー翔の場合は、完璧とも呼ばれる圧倒的才覚を。

「炎」の称号を持つ古式ムエタイ使いの少年は、何があるうとも決して揺らぐことが無い鋼のような胆力を。

「水」の称号を持つ柔術家の少女は、天才と呼ばれる頭脳を。

「氷」の称号を持つコマンドサンボ使いの少年は、絶対的な師への忠誠心から来る不屈の心を。

では、「流」の称号を持つ一夏の持つ長所とは何か？

それは弟子級としては異質と呼べる、達人の技すら見て理解、可能な限りでの模倣を可能とする「視る」力である。

この一夏の長所に早期から気付いた緒方は早々に一夏の修業方針を決定。

自身の計らいで多くの達人の技を見て覚えさせ、そして基礎身体能力に重きをおいた特化修練でソレを物とさせること。

その結果が、一夏を弟子級でも上位の実力者へと押し上げていた。

一撃一撃が生身であれば常人を即死させる攻撃を一夏は無数に加える。

本来であれば、零落白夜を発動した状態で放てばもっと早く終わっている。だが、それをしなかったのは一重にISでどれだけの威力が出るのかという一夏の興味からだった。

「これで終わりだ!!」

満身創痍となったセシリアに止めを放つ。今度は零落白夜を発動して、確実に仕留めることとする。

左手で四本貫手を放つ。続いて右手で三本貫手、さらに左手で二本貫手。最後に、必殺と呼べる一撃である一本貫手を右手で。

これぞ緒方一神斎の奥義が一、「数え貫手」。一夏は与り知らぬことだが、活人拳において無敵を謳われるある老達人の秘義の一つである。

轟音と共にブルー・ティアーズのシールドが、その先の絶対防御が、零落白夜を纏った必殺の一突きで破られる。

堅牢な盾を破って尚、勢いを止めない刺突はセシリアの肩を貫き、鮮血を宙に舞い散らせる。

「あああああああ!!!」

少女の絶叫が響く。だが、それを一夏は冷めた目で見続ける。

指を引き抜くと同時に、セシリアの体がISと共に地面へと落下する。そして大量の砂埃を巻き上げながら倒れ伏すと、全てのエネルギーを失ったブルー・ティアーズが解除される。

その目の前に、一夏がゆっくりと降り立った。

『しょ、勝者 織斑一夏!』

アリーナの放送が一夏の勝利を告げる。だが、歓声は湧きあがらない。

観客の少女達は、管制室の教師は、想像を絶した結果に言葉を失っていた。

「ぐう…」

肩を押さえながら呻くセシリアに、白式を解除した一夏が一夏にゆつくりと歩み寄る。

『織斑君！？何を！』

管制室の教師、一夏の属するクラスの副担任である山田真耶の声がスピーカーから聞こえる。

一夏は待機状態になった白式の、通信機能だけを起動して言った。

「先生、生憎まだ終わってはいらないのですよ。試合は終わった。でも、俺と彼女の決闘はまだ終わってはいない」

断固とした意思を秘めた言葉で一夏は言う。

「彼女は俺に決闘を申し込んだ。そして決闘とは、命を賭けた戦いのこと。ならば、最終的な勝敗は、生か死かが分ける」

『織斑君！…！』

一夏は倒れるセシリアの頭を左手で鷲掴みにすると、そのまま片手で軽々と持ち上げる。そして、空いた右手がゆつくりと貫手の形を取る。

『織斑君！駄目です！もう試合は終わりました！…！』

「くどい！…それはあなた方の認識だ！…俺は終わったと思っ
てはいない！…！」

『ですがオルコットさんは!!』

「彼女は俺に、武人である俺に決闘を申し込んだ!ならば、命を賭けて相對するのが道理!!」

それを弁えていないというなら、それはこいつの浅慮に他ならない!!!!」

決して引かぬという意志で以て一夏は制止を聞かない。本来であれば国家代表候補の殺害などすれば、決してただではすまない。だが、一夏には強大なバックがあった。世界各国政府にシンパを多数抱える「闇」という巨大組織が。

その力を以てすれば、たかだか替えの効く代表候補一人の死を騒ぎにしないことくらい、児戯のように容易い。

管制室の真耶は必死だった。このままでは、一夏は本気でセシリアを殺してしまう。

それが一夏にはできてしまうという確信が、彼女にはあった。アリナ一の観客席も事態の急変にざわつき、これから一夏が為そうとしていることを察したのか、戦慄するような空気が流れている。

「あ…ああ…」

完全に為す術を無くしているセシリアは、ただ怯えていた。目の前の一夏が発する気配に。自身に突きつけられた明確な死に。

(クソが。この期に及んで怯えるとは。少しでもこいつの気骨を見込んだ俺のうかつか)

吐き捨てるように内心で呟くと、一夏は冷徹に、今までも闇のミッ

シヨンでそうしてきたように宣告する。

「さらばだ、セシリア・オルコット。せめてもの情けだ。一思いに終わらせる。迷わず成仏、いや、英国の貴様ならば天に召される」

そして一夏は貫手^死を放ち、アリーナの地面に鮮血が飛び散った。

「どづいづつもりで？」

不満を露わにした一夏の声。一夏の放った貫手は、セシリアを仕留めるに至らなかった。

その直前に、二人の間に割って入った影があったのだ。

「それは…こちらのセリフだ」

教師としての厳格さを出そうと努め、しかし動揺を隠せない声で一夏の担任、彼の実姉である千冬は言った。

その右腕には気を失ったセシリアを抱え、左腕は一夏の貫手を防いでいる。

だが咄嗟だったためか、一夏の貫手は千冬の腕に突き刺さり、そこから血を流していた。

「くっ」

直ぐさま一夏は拳を引いて高速で距離を取る。

そして、実の姉をまるで敵を見るかのように険しい視線で見据えた。

「なぜ邪魔をするのです、織斑先生」

固い口調で一夏は問う。その声音は、まるで千冬を赤の他人と見做しているかのようにだった。

「私は教師だ。これ以上は認められん」

それだけを千冬は言う。だが、その言葉はどこか精彩に欠ける。彼女自身、長らく会わず、学園で再開してからも殆ど言葉をかわせず、にいた弟の、記憶にある姿と掛け離れた今のソレに動揺を隠せずにいたのだ。

「これは俺と彼女の決闘だ。いかに教師いえど、いや、教師だからこそだ。口を挟まれる道理はない。

師は教え子の戦いに干渉しない。この原則すら忘れたのですか。だとしたら、あなたはそれを恥じるべきだ」

「それは武術の世界の理屈だ。

仮にお前がその理論で動いたとして、ここはIS学園。そしてISがスポーツである以上、その理屈はまかり通らない。

何より、教師は何が何でも生徒を守るのが職責であり義務だ。それを全うするなら、恥じの一つや二つは軽い」

「恥を是とするなんて、現役を引退して脳みそまでかびたか……。いや、そもそもが詭弁だ。ISがスポーツなど、ただの建前でしょう。ISは兵器だ。ならば闘争が、試合なんて生温い遊びじゃない戦こそが本分でしょうに」

「何度も言わせるな。それはお前の理屈だ。お前が命を賭けるのは勝手だ。だが、それを他の者に強要するな」

「この生徒は自分で望んで、ISで戦うことを学びに来た。なら、そのくらいの覚悟はあって当然でしょう。」

それができないなんて、戦場に迷い込んだ素人でしかない。見ていて不愉快だ」

「くどいぞ。」

あくまでISはスポーツ。それは同時に秩序を保つために必要なことだ。それが無ければ、世には要らない争いが蔓延る」

「その原因の片棒担いだあなたが言えるのか、白騎士」

その一夏の言葉に、努めて冷静を保って言葉を返していた千冬は今度こそそろたえる。

「忘れるなよ。あの時世界を壊して、混乱させて、歪ませたのは間違いないあなただ。」

そういう意味じゃ、あなたは俺以上の悪党だろう。あなたが、あの女が世界を歪ませたおかげで、我らまで厄介を被った」

それだけ言つて一夏は背を向ける。

「ふん。あなたに憧れていた昔の俺が馬鹿みたいだ。

活人なんて腑抜けた心根で武を学んで、あまつさえ現役を引退すれば武の何たるかを忘れ、拳げ句には弟子級でしかない俺の一撃で、達人級でありながら手傷を負うこの様か。

我が師達に比べれば、無様この上ない。いつそのまま家族の縁を切つてやりたいくらいだ」

吐き捨てるような言葉に、千冬は表情を失う。

そのままピットへと戻る一夏。

その背に、千冬は何とか声を掛けようとする。だが、冷たい拒絶を気配で伝える背が、言葉を紡がせなかった。

そして、千冬も一夏の後に続いてピットに戻る。

ピットでは、どうしたら良いか分からずに表情を歪ませる真耶と篤が居た。

二人に一瞥をくれると、一夏は黙って更衣室へ向かおうとする。だが、その足が不意に止まった。

一夏の視線がゆっくりと動く。その先、ピットの隅には、扇子を片手に持ちながら腕を組む、二年生を示すりボンを付けた生徒がいた。

「更識の十七代目か…」

「生徒会長つて肩書きよりも先にそつちが出るんだ。やっぱりね」

一夏の呟きに生徒、学園生徒会長の更識楯無は納得するように頷いた。

そして、言った。

「初めましてかしら。」

闇の一影九拳の一人、拳聖緒方一神斎の一番弟子、織斑一夏くん。

それともこう呼びましょうか？『皆殺しの一夏』と」

その言葉に、真耶と篤は分からないと言いたげに眉を潜め、千冬は愕然とした表情をする。

そして一夏は、ゆっくりと口の端を吊り上げた。

いつかのネタの続き（後書き）

この一夏は本編に輪をかけて物騒です。
というか、もろに悪党路線を突っ走ってます。

今回の分では描いていませんが、YOMIの仲間とは結構仲良くやっていますし、それなりに動物愛護精神があったり、例えば道で困っている老人や子供が居れば助けたりするくらいの真っ当さもあります。が、しかし。それと同じくらい悪党な一面も。というか師匠の緒方にクリソツという設定です。

緒方への弟子入りを決意したきっかけは原作の朝宮とほぼ同じです。圧倒的な実力に魅せられたという感じですよ。

で、わりと根本的な話。

達人でISを云々ですが…まあぶっちゃけそういうもんだと言うことが都合主義ということよ。

いや、自分はあまりご都合主義という言葉は好きじゃないのですが、こればかりはどうにもしがたいと言いますか。

そんなもんと、読者の皆様にご理解を求める次第です。

とりあえずこのケインイチネタにおいては、一夏は結構な悪党路線を走り、千冬や篤、鈴などの一夏に関わりのある女性陣は苦惱しっぱなしという感じになります。

せっかくの更新がこんなのですみませんでした。

そして、そんな更新にお付き合い頂いたこと、深く感謝申し上げます。

今回は普通に本編の更新です。

実は自分、ケンイチではむしろ九拳が結構好きだったり。というか本郷やアーガードのかつこよさパネエ。ただしフルーツ。テメエはダメだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1665s/>

或いはこんな織斑一夏。つまりは性格改变モノ

2011年11月22日02時00分発行